

嵐を呼ぶ魔法科高校生

ゆうと00

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて「嵐を呼ぶ幼稚園児」と称され、仲間と共に様々な出来事（漫画・テレビ・映画のアレコレ）を乗り越えてきた史上最強の5歳児、野原しんのすけ。

そんな彼も15歳となり、魔法の才能が認められたことで国立魔法大学付属第一高校に入学。そこで彼が出会ったのは、様々な秘密を抱える2人の兄妹と、個性豊かなクラスメイトや上級生。

やがて彼は、普通とはかけ離れた学校生活を送りながら、陰謀渦巻く波乱の日々へと巻き込まれていく。

【注意】

5歳児の野原しんのすけが成長し『魔法科高校の劣等生』の世界に介入するという、実に地雷臭満載の内容となっております。しんちゃんその他にも『クレヨンしんちゃん』のキャラが登場予定ですが、いずれも原作より10歳ほど年齢を重ねています。原作の作品やキャラのイメージを損なう恐れがありますので、閲覧際にはご注意ください。

目次

入学編

第1話 「魔法科高校に入学するゾ」	1
第2話 「5歳児もなかなか大変だったゾ」	12
第3話 「高校生活は波乱の予感……だゾ」	22
第4話 「魔法ありのケンカが勃発？ だゾ」	34
第5話 「生徒会長にお呼ばれたゾ」	45
第6話 「模擬戦でいざ勝負！ だゾ」	56
第7話 「新入生勧誘期間は大騒ぎだゾ その1」	71
第8話 「新入生勧誘期間は大騒ぎだゾ その2」	82
第9話 「美少女剣士現る！ だゾ」	95
第10話 「何やら不穏な気配……だゾ」	109
第11話 「学校に迫る黒い影……だゾ」	121
第12話 「一高防衛隊ファイヤー！ だゾ その1」	137
第13話 「一高防衛隊ファイヤー！ だゾ その2」	151
第14話 「学校に平和が戻ったゾ」	167
九校戦編	
第15話 「夏が近づくとワクワクするゾ」	183
第16話 「代表に選ばれるのは大変だゾ」	196
第17話 「空を自由に飛びたいゾ」	212
第18話 「大会を目指して練習するゾ」	225
第19話 「九校戦に向けて出発だゾ」	241
第20話 「色々悩みの多いお年頃だゾ」	255
第21話 「懇親会に参加するゾ その1」	267
第22話 「懇親会に参加するゾ その2」	279

第23話	「九校戦開幕！ みんなで応援するゾ」	293
第24話	「勝っても負けても、それが青春だゾ」	310
第25話	「犯人は誰？ 大波乱の九校戦だゾ」	326
第26話	「„みんな”が観てる九校戦だゾ」	342
第27話	「快進撃の光と影だゾ」	359
第28話	「みんなには内緒のお話だゾ」	375
第29話	「オラも参戦！ クラウド・ボールだゾ」	390
第30話	「モテすぎるのも考え物だゾ」	406
第31話	「大波乱のモノリス・コードだゾ」	424
第32話	「それぞれの覚悟と意気込みだゾ」	438
第33話	「モノリス・コードを勝ち抜くゾ その1」	455
第34話	「モノリス・コードを勝ち抜くゾ その2」	471
第35話	「„嵐”の前の静けさ、だゾ」	484
第36話	「モノリス・コード決勝戦だゾ」	497
第37話	「ミラージ・バットとジェネレーターだゾ」	515
第38話	「みんながオラに夢中だゾ」	530
第39話	「みんなで一緒に鬼ごっこだゾ」	544
第40話	「九校戦が終わったゾ」	562
夏休み＋1編		
第41話	「南の島でバカンスだゾ」	584
第42話	「アリス・イン・ヘンダーランドだゾ」	601
第43話	「森崎くんと課外授業だゾ その1」	617
第44話	「森崎くんと課外授業だゾ その2」	629
第45話	「夏休みの思い出を作るゾ」	642
第46話	「生徒会長選挙をするゾ その1」	660

第47話 「生徒会長選挙をするゾ その2」 | 677

横浜騒乱編

第48話 「怪しい人達と論文コンペだゾ」 | 688

第49話 「怪しいタマタマと危ないタマタマだゾ」 | 701

第50話 「懐かしい人達がいっぱいいるゾ」 | 714

第51話 「達也くんのタマタマが狙われてるゾ」 | 726

第52話 「怪しい人達がいっぱいだゾ」 | 740

第53話 「人の心は儘ならないゾ」 | 757

第54話 「強くなるために修行するゾ」 | 774

第55話 「迫り来る魔の手……だゾ」 | 789

第56話 「天才剣士と魔法師の戦いだゾ」 | 805

第57話 「超能力者のお出ましたゾ」 | 822

第58話 「世界は不思議な縁でいっぱいだゾ」 | 836

第59話 「いざ横浜、だゾ」 | 851

第60話 「横浜に続々と集合だゾ」 | 865

第61話 「始まったゾ」 | 879

第62話 「会場から避難するゾ」 | 893

第63話 「あいちゃんの思惑と達也くんの出陣だゾ」 | 907

第64話 「みんなで出来ることをするゾ その1」 | 921

第65話 「みんなで出来ることをするゾ その2」 | 938

第66話 「困ってる人のために戦うゾ」 | 953

第67話 「みんなで横浜から脱出するゾ」 | 968

第68話 「決戦の地、横浜スタジアムだゾ」 | 982

第69話 「最後の戦いが始まったゾ」 | 1000

第70話 「横浜事変が終わったゾ」 | 1018

来訪者編

- 第71話 「家族会議と悪巧みだゾ」
- 第72話 「クリスマスの送別会だゾ」
- 第73話 「リーナちゃんがやって来たゾ」
- 第74話 「オラ達だけの秘密だゾ」
- 第75話 「平和な日常と事件の匂いだゾ」
- 第76話 「吸血鬼事件で大騒ぎだゾ」
- 第77話 「レオくんが襲われたゾ」
- 第78話 「レオくんをお見舞いするゾ」
- 第79話 「吸血鬼ってナニモノ？ だゾ」
- 第80話 「思い出は追憶の彼方へ、だゾ」
- 第81話 「黒い穴がどーのこーの、だゾ」
- 第82話 「吸血鬼がやって来たゾ」
- 第83話 「吸血鬼とお話するゾ」
- 第84話 「吸血鬼？ と戦うゾ」
- 第85話 「みんなが色々と企んでるゾ」
- 第86話 「バレンタイン・パーティーだゾ」
- 第87話 「〃彼女〃が目を覚ましたゾ」
- 第88話 「みんなで夜のお出掛けだゾ」
- 第89話 「クールなアイツがやって来たゾ」
- 第90話 「クールなアイツと戦うゾ」
- 第91話 「ヘンダーランドに乗り込むゾ」
- 第92話 「ヘンダーランドで戦うゾ その1」
- 第93話 「ヘンダーランドで戦うゾ その2」
- 第94話 「ヘンダーランドで戦うゾ その3」

第95話「ヘンダーランドで戦うゾ その4」	1380
第96話「ヘンダー城の決戦だゾ」	1406
第97話「ヘンダー城の決戦、決着だゾ」	1420
第98話「終わりと始まりと振り返りだゾ」	1439

追憶編

第1105話「みんなで沖繩にやって来たゾ」	1454
第1104話「達也くんと最初の出会いだゾ」	1467
第1103話「絶世の美少女と出会ったゾ」	1479
第1102話「南の島の陰謀だゾ」	1492
第1101話「沖繩でも大騒ぎだゾ」	1507
第1100話「沖繩の脱出劇だゾ」	1523
第1099話『今明かされる衝撃の事実だゾ』	1537

ダブルセブン編

第99話「それぞれの新生活だゾ」	1550
第100話「雫ちゃんのパーティーに参加するゾ」	1564
第101話「新学期が始まったゾ」	1580
第102話「入学式と役員勧誘だゾ」	1592
第103話「センパイというのはめんどくさいゾ」	1608
第104話「博士に会いに行くゾ」	1623
第105話「実験の準備をするゾ」	1638
第106話「実験のお披露目をするゾ」	1651
第107話「実験したら色々あったゾ」	1663

入学編

第1話 「魔法科高校に入学するゾ」

魔法。

それまでは単なる伝説やおとぎ話の産物だったそれは、20世紀の終わり頃に超能力の存在が公式に確認されたことで現実のものとなった。最初は突然変異で現れる「特別なもの」という見方が強かったが、世界各国の開発競争もあつてここ100年の間にすっかり「技術」として確立されるようになった。

その開発競争を大きく後押ししたのは、大規模な寒冷化による資源不足から端を発した「第三次世界大戦」だった。他人事だった国家が1つとして存在しない凄惨極まるものだったが、意外にもこの戦争で核兵器は一度も使われていない。それもひとえに魔法師達が放射汚染兵器の使用阻止を目的に「国際魔法協会」を設立したからであり、その功績が認められて大戦後の世界でも国際的な平和機関として名誉ある地位を与えられている。

そのような経緯もあり、魔法という新たな技術を手に入れた世界はこれまでと大きく様変わりした。魔法師の育成がそのまま軍事力に繋がるようになり、有力各国はこぞつて魔法師育成に力を入れるようになる。

そしてそれは、人の心にも大きく影響していった。

魔法を使える者は自分が選ばれた存在であると思ひ込むようになり、魔法を使えない者を下に見るようになった。また魔法を使えない者は、魔法を使える者を嫉妬の対象として見るようになり、胸の内に歪んだ想いを育てていくこととなった。そして一部の人間は、その感情を「反魔法活動」として発散するようになる。

魔法による光と影を内包しながらも、世界は22世紀の到来を迎えようとしている。

「おおっ！ キレイなお姉さんがいっぱい！ やっぱり東京は違いますなあ」

かつて『嵐を呼ぶ幼稚園児』と称されていた、1人の少年と共に。

*

*

*

2095年4月3日。

この日、東京都八王子に建てられた国立魔法大学付属第一高校では、日本武道館のような形をした講堂にて入学式を執り行おうとしていた。これから始まる高校生活に対する期待と不安を胸に秘めた新入生が、若干緊張の面持ちを携えて続々と講堂に集まっている。

そんな中、他の生徒よりも表情の変化に乏しい1人の男子生徒がいた。

「さてと、早いところ席を確保しておかなくてはな……」

彼の名は、司波達也。目を惹くほどではないが精悍な顔立ちをしており、襟が立ち後裾の長い燕尾服のようなデザインをした白と緑の制服に隠されたその体は、見る人が見ればなかなか鍛えられたものであることが分かる。

しかし彼はここに来るまでの間、幾人もの生徒から侮蔑の目を向けられていた。

その原因は、制服の左胸と肩の辺りにあしらわれた『空白』にあった。

すべての魔法科高校で採用されているわけではないが、第一高校では入学試験の結果により『一科生』と『二科生』に分けられる。

そもそも魔法科高校には一年間で輩出する魔法師の数にノルマが課されているのだが、いくら魔法の技術が確立されたからといって入学者全員に教師による授業を行えるだけの余裕は無い。かといってノルマギリギリの人数に抑えてしまうと、万一事故が起こって再起不能になってしまうときに都合が悪い。

そこで第一高校が採用したのがこの制度である。普段教師による授業を受けられるのは一科生のみ。そして万一一科生から再起不能者が現れたときは、二科生の生徒を穴埋めとして補充するのである。

そして一科生と二科生を区別するために、前者の制服には八枚花弁のエンブレムが制服に刺繍され、二科生の制服にはそれが無かった。

それによつて生徒達の間では、一科生のことを「花冠^{ブルーム}」、二科生のことを「雑草^{ワイド}」と呼んで蔑む風潮が密かに生まれていた。

とはいえ、達也自身に差別思想に対する不満は特に無かった。思うところが無いといえれば嘘になるが、それを承知で入学したのは自分である。むしろ彼は、一科生に遠慮して後ろの席に固まっている二科生達に対して呆れてすらいた。

しかしながら彼としても、それに反発して一科生に混ざつて席に着くような目立つ真似はしたくなかった。なので彼も他の二科生に倣つて後ろの席へと歩みを進め、ちょうど4人ほど空いていた席の一番端へと腰を下ろした。

一息吐き、式が始まるまで静かに待とうと思ったそのとき、

「あのう、隣、空いてますか?」

聞き慣れない少女の声に達也が目を向けると、肩に掛かるほどの黒髪に眼鏡を掛けた、どこかおっとりとした印象を受ける少女がそこにいた。達也が「どうぞ」と手振りで伝えようと、少女は安心したように「ありがとうございます」と控えめに頭を下げた。

「やったー! 一緒に座れるね美月!」

「ひゃあ!」

そして後ろからいきなり抱きついてきた少女に、美月と呼ばれた眼鏡の少女は驚きのあまり変な声をあげていた。

その少女は美月と対照的にとても活発で、明るい栗色の髪とスレンダーな体つきが目に残る、まさに「美少女」と呼んで差し支えない外見だった。どこか日本人離れた容姿に見えることから、ひよつとしたら彼女に外国の血が混ざっているのかもしれない。

「ええと、そちらの方は?」

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は柴田美月つていいいます、よろしくお願いします」

「あたしは千葉エリカ! よろしくね!」

「司波達也だ。よろしく」

互いに自己紹介を終え、エリカが「何だかアタシ達つて似た苗字だよねえ」などと言っているのを横目に、達也は一人考え込んでいた。

——弱視なんて簡単に完治できるこの時代に眼鏡を掛けているということは、彼女の眼に何か秘密がありそうだな……。それにもう1人の彼女は「千葉」か……。確か「数字付き」^{ナンバーズ}の1つにそんな家系があったはずだが、エリカなんて娘がいると聞いた憶えは無いな……？

日本において魔法に優れた血を持つ家は、慣例的に数字を含む苗字を持っている。数値の大小が実力に直結する訳ではないが、苗字に数字が入っている場合、魔法師の血筋が濃いことを表し、魔法師の力量を推測する一つの目安となる。

「個人的な諸事情」を多く抱える達也にとって、2人は警戒を持つに値する相手だった。しかし彼はそれを表に出すこともなく、新たな友人に対するコミュニケーションと何ら変わらない会話を2人と交わす。

そうして時間は進み、入学式の始まる時間がすぐそこまで迫ってきた。達也の3つ隣、つまりエリカの隣の席は、未だに空席のままである。

このまま空席の状態で入学式を迎えることになるかと達也が思った、そのとき、

「おおっ！ 危ないところだったゾ！ ねえねえ、まだ始まってないよね！」

ほとんど歩く者のいなくなった通路を全力疾走し、その空席に滑り込むようにしてやって来たその少年は、額から汗を流して大きく息を荒げながら、たまたま隣にいたエリカへと人懐っこい笑みで話し掛けた。

「大丈夫よ、ギリギリセーフ」

「おおっ、良かったあ！ んもう、アクション仮面の目覚まし時計が壊れたせいで、駅からここまでずっと走りっぱなしだったゾ！」

生徒達の雑談で騒がしい講堂の中でも一際騒がしい少年の声に、達也は何の気なしに少年の方へと視線を向けた。

その少年は達也と同じくらいの身長で、短く切り揃えられた黒髪がスポーツ少年のように爽やかだった。太い眉毛がとても凛々しいも

の、少年の浮かべる気の抜けた笑顔のせいかな全体的な印象は柔らかい。

そして彼の制服には、八枚花卉のエンブレムが燦然と輝いていた。「ねえねえ、〃シャツトリーブリアンも胡椒が変〃ってことで自己紹介しない?」

「……もしかして〃袖振り合うも他生の縁〃って言いたいの?」

「おおっ! そうとも言うー」

「そうとしか言わないって……。アタシは千葉エリカ。隣にいる子が柴田美月で、その隣にいる彼が司波達也」

「よろしくお願いしますね」

「よろしく」

エリカの紹介に合わせて頭を下げる2人に、その少年は「ご丁寧にどうもどうも」と同じく頭を下げた。

そして彼は、自分の名前を口にした。

「オラ、野原しんのすけ。〃しんちゃん〃って呼んでね」

「!」

「!」

その瞬間、エリカと達也の目が大きく見開かれた。

「えっ! 野原しんのすけって……。もしかしてあなた、去年の中等部剣道大会の全国チャンピオンのっ!」

「おおっ! もしかしてオラのファン? いやあ、照れますなあ」

「いや、別にファンって訳じゃないけど……。へえ、まさか剣道のチャンピオンが第一高校に、しかも一科生として入学するなんてねえ……」

「おおっ? そんなに珍しい?」

「魔法が使える人って、大体は〃剣術〃に流れてっちゃうからねえ。そういうアタシも剣術だし」

「おおっ! エリカちゃんも剣道やってるんだ!」

「いや、だからアタシは剣術で——」

共通の話題で盛り上がるエリカに反して、達也のしんのすけを見つめる表情は実に緊迫したものだった。

——成程、コイツが“あの人”の言っていた野原しんのすけか……。

『静粛に！ 只今より、国立魔法大学付属第一高校入学式を始めます』
と、そのとき、会場にアナウンスが鳴り響いた。達也を始めとした4人は揃って前を向き、それが合図だったかのように入学式は始まった。

いくら時代が変わったとはいえ、入学式のような儀礼的なものは100年前とさほど変化は無い。第一高校の校長が壇上に上がって長々と挨拶し、一般の生徒にとっては初めて聞くことの多い来賓者紹介（場合によっては挨拶も含む）が続く。それは非常に退屈なものであり、現にしんのすけ辺りは大きな欠伸をして今にも寝てしまいそうである。

そして、来賓者紹介が終わった頃、

『続きまして、新入生答辞。——新入生代表、司波深雪』

アナウンスと共に壇上に現れた少女の姿に、会場のあちこちから溜息のような声が漏れた。

その少女は、一言で表せば“非常に美人”だった。背中に届くほどに長く艶のある黒髪、透き通るような白い肌が見る人の心に強く焼き付き、男女の区別無く魅了する可憐で神秘的な容姿をしている。それはまさに、オーバーテクノロジーによって青少年の願望が具現化した立体映像だと言われても信じられるほどだった。

そんな彼女は、苗字が同じことから何となく察しがつくだろうが、達也の妹だった。

「うわあ、あの子美人だなあ」

何の嫌味も無しにそんな感想をぽつりと呟くエリカに対し、美月はちらりと達也の方を見遣って再び壇上へと視線を戻した。

そして多くの羨望と陶酔の眼差しに晒されたその少女は、それでも表情一つ変えることなく答辞を読み上げ始めた。

『このハレの日に、歓迎のお言葉を頂きまして、誠に感謝致します。私は新入生を代表し、第一高校の一員としての誇りを持ち、皆等しく勉学に励み、魔法以外でも共に学び、この学び舎で成長することを誓い

ます——』

「一見すると何の変哲も無い答辞のように思えるが、それを聞いた達也は一瞬体が凍りつくような反応を見せた。」

「皆等しく」 「魔法以外でも」という言葉は、試験の結果で一科生と二科生に分け、魔法師を育て上げることを第一の目標にしていることにおいては、決して相容れるような言葉ではなかったからである。下手をすれば、選民意識の強い生徒達の神経を刺激することにもなりかねない。

しかしそれを聞いている生徒達は、ほぼ全員が彼女自身の姿に夢中になっており、答辞の内容について思いを巡らせることは無かった。それを知った達也は安心したようにホッと胸を撫で下ろし、彼女の答辞を聞くことに集中する。

そして、しんのすけはというと、

「うーん、式が終わったら起こして……」

そう言い残して、1人夢の世界へと旅立っていった。

*

*

*

入学式も終わり、生徒達が続々と講堂を後にする。

「あたしE組なんだけど、みんなは？」

「私입니다」

「俺もだな」

「ええっ、オラだけA組？ 今からでも二科生になろつかなあ？」

「何言ってるの。せっかく一科生になれたんだから、素直にそっちに行きなさい。別に教室が別ってだけで、授業以外でも別々に行動しなきゃいけないわけじゃないんだから」

エリカの言葉に、しんのすけは「ほーい」と渋々ながら了承した。エリカ達3人は苦笑するものの、自分達と一緒にのクラスになりたいという言葉に悪い気はしていないようだ。

「そういえば、この後のホームルームはどうします？ 自由参加みた

いですけど」

「あつ！ だったらさ、この後みんな喫茶店でも行かない？ アイネブリーゼっていう、何だか雰囲気の良いさそうな店を近くで見つけたんだよね」

「ほーほー、それは良いですなあ」

エリカの提案にしんのすけが乗り気になっていると、達也が申し訳なきような表情で軽く右手を挙げた。

「あ、悪い。俺は妹と待ち合わせしてるんだ」

「妹って、ひよつとして司波深雪さんですか？」

「えっ？ それって、さつき新入生代表で答辞をしてた子よね？ っ
てことは双子？」

「いや、俺は4月で、深雪は3月の早生まれだから同じ学年なんだ。――それにしても柴田さん、よく俺と深雪が兄妹だって分かったね。全然似てないのに」

「いえ、それは……、お二人とも苗字が一緒でしたし。それに何より……、〃オーラ〃が似ていましたから……」

「……柴田さんは、随分と〃眼が良い〃んだね」

美月の言葉で、達也は確信した。

魔法などの超心理現象が起こるときに観測される粒子として、〃^{ブシオン}霊子〃というものが存在する。その粒子が活動するときには魔法師にしか見えない光が生じるのだが、その光を必要以上に感じ取ってしまう〃霊子放射光過敏症〃という症状を抱えた人間が存在する。

しかも美月の場合、常に特殊なレンズで遮断しなければいけないほどに症状が重い。つまりそれは、それだけ彼女の目が〃特別〃であることを意味している。

――これ以上彼女に見られるのは、危険かもしれないな……。

達也がそんなことを考えていた、そのとき、

「お兄様！ お待たせ致しました！」

聞き慣れたその声に、名前を呼ばれた達也、そして美月とエリカとしんのすけが顔を向けた。

先程壇上で〃神々しい〃とまで表現できる姿で答辞を読み上げて

いた彼女が、晴れやかな笑みを浮かべてこちらへと駆け寄ってくるのが見えた。そんな彼女の姿に、美月もエリカも驚きで目を丸くしている。

そしてそんな彼女の後ろをついていく、ウエーブの掛かった長い黒髪を少々大きなリボンで纏めた小柄な少女がいるのに気が付いた。童顔ながらも見る者のほとんどが美人と称する整った顔立ちをした彼女は、達也たちに対してもその微笑みを崩すことなく凜としている。彼女の隣に付き従う、こちらに対して不審の表情を隠さない少年よりも遥かに頼もしく見えた。

ちなみに達也は講堂に行く前に1回顔を合わせていたために、彼女がこの学校の現生徒会長である七草真由美（さつき）であることを知っていた。

「みゆ——」

「お兄様？」

そんな彼女となぜ一緒にいるのか尋ねようとした達也だったが、それは深雪によって遮られた。

彼女の視線は、達也の後ろにいる美月とエリカに注がれている。

「その方達は？」

「ああ、同じクラスの柴田美月さんと、千葉エリカさんだ」

「そうですか……。——早速クラスメイトと、デートですか？」

それを聞いた達也は、美月でもないのに、彼女の背後で吹雪が巻き起こっているかのようなオーラが見えたような気がした。エリカと美月も同じような印象を受けたようで、2人共顔を引き攣らせて固まっている。

「おおつ、達也くん！ モテモテですなあ！」

「……からかわないでくれ、しんのすけ。——深雪も、そんなことを言っではいけないよ」

子供を叱るような口調で窘める達也に、深雪はシユンと顔を俯かせた。

「……申し訳ございません、柴田さん、千葉さん。司波深雪です、お兄様同様、よろしくお願い致します」

「こちらこそ、よろしくお願い致します」

「よろしくね! ——ねえねえ、あたしはエリカで良いから、深雪って呼んで良い?」

「ええ、お兄様と区別がつかないものね」

「あはは! 深雪って実は案外気さく?」

樂しげに話す深雪達を横目に、達也は真由美の方をチラリと見た。彼女はニコニコと笑みを携えて彼女達を眺めるのみで、特に口を挟もうとはしない。

「深雪。生徒会の方々の用があるんじゃないのか?」

達也が気を利かせてそう言ったが、真由美は手を横に振って、

「大丈夫ですよ、今日は挨拶だけですから。先にご予定があるんですもの、また日を改めますわ」

「会長! それでは、こちらの予定が——」

真由美の言葉に、彼女の隣にいた少年が口を挟む。しかし真由美は特に意に介した様子も無く、チラリと彼に視線を遣っただけで黙らせた。一応は引き下がったその少年だが、それでも納得していないのか達也のことをギロリと睨みつけた。

真由美は彼の行動には気づいているようだが、殊更取り上げるつもりも無いらしい。彼女はそのまま「それでは、またいずれゆつくりと」と言って、その場を後にしようと——

「——あら」

ふいに彼女はそう呟いて立ち止まると、ゆつくりとした動きで向き直った。

しんのすけに対して。

「そちらにいるのは、野原しんのすけくんかしら?」

「おっ? オラのこと知ってるの?」

いきなり声を掛けられたしんのすけだけでなく、美月やエリカ、さらには真由美の隣にいる少年さえも不思議そうな表情を浮かべていた。それはそうだ。生徒会長という生徒自治のトップにいる人間が、一科生とはいえ新入生総代でもない一生徒のことを事前に知っており、さらにはわざわざ立ち止まって声を掛けたのだから。

「私はこの学校の生徒会長をやっている、七草真由美といいます。こ

れからよろしくね、野原しんのすけくん」

おそらく誰もが同じことを思っているであろうしんのすけの質問には答えず、真由美は自己紹介をして優雅に頭を下げた。

「オラのごことは気軽に『しんちゃん』って呼んで良いぞ、真由美ちゃん」

「——お、おまえ！ 会長に向かって馴れ馴れしく——」

「ええ、よろしくね、しんちゃん。——それじゃ、今日はここで失礼するわね。深雪さんも、また今度ゆっくりお話しましょう」

真由美はそう言い残して、その場を去っていった。一瞬反応の遅れた少年も慌てて彼女を追い掛け、この場にはしんのすけ達1年生だけが残される結果となった。

「しんちゃん。会長とは知り合いだったの？」

「ううん、全然」

「じゃあ、なんで会長はしんちゃんに声を掛けたんでしようね？」

首をかしながら会話を交わす3人の後ろで、深雪が緊張の面持ちで達也に近づいてきた。

「お兄様、もしかして彼が——」

「ああ。昨日『叔母上』が言っていた、あの『野原しんのすけ』だ」

達也はしんのすけを見つめながら、自分の学生生活に嵐が吹き荒れることを確信した。

第2話 「5歳児もなかなか大変だったゾ」

プルルルルル——。

達也と深雪の自宅にその電話が掛かってきたのは、入学式前日の夜、そろそろ明日に備えてベッドに入ろうかと2人が思っていたときのことだった。

「——！」

「——！」

その瞬間、2人の表情が一気に警戒の色に染まった。

現代社会では電話の機能も持った携帯端末がほぼ100パーセントの割合で普及し、ほとんどの人はそれを使って電話をするので、自宅の電話に掛けないどころか自宅に電話が無いことも珍しくない。達也も深雪も中学時代の友人がいらないわけではないが、携帯端末に直接掛かるため自宅の電話が鳴ることは無い。

しかも今回の電話は、通常の回線とは別物の「秘匿回線」を用いて掛けられたものだった。通常のそれとはセキュリティが段違いであるそれを使うということは、盗聴の類を仕掛けられると非常に困るような内容を伝えようとしていることを意味する。

『夜分遅くにごめんなさい、達也さん、深雪さん』

果たしてテレビ画面に映ったのは、ほとんど黒に近い色合いのロングドレスを身に纏い、異性を妖しく惹きつけずにおかない妖艶な魅力と、思春期の少女を連想させるような可愛らしさという相反した印象を同居させた女性だった。

「——どのような用件でしょうか、叔母様」

そんな彼女に対し、深雪は緊張感を内に秘めながら問い掛けた。

その隣に寄り添う達也も、彼女ほど表には出さないものの、画面に映る女性をまっすぐ見据えている。

その女性の名は、四葉真夜。

名字に「四」が含まれている四葉家の現当主であるが、四葉家は単なる「数字付き」の一員というだけではない「特殊な事情」がある。

一口に「数字付き」と言っても、その全てが平等の立場というわけ

ではない。〝二十八家〟という頭一つ抜きん出た存在である家系が28存在し、さらにその中から4年に一度行われる会議で選ばれた10の家系を〝十師族〟と呼ぶ。日本の魔法師達が所属するコミュニティの頂点に君臨する十師族であるが、四葉家は七草家と並んで一度も十師族選定から落ちたことが無く、いわば〝日本最強の一族〟と表現しても差し支えない。

そんな一族の当主との会話は、たとえ親族である達也たちでさえ緊張するものだ。もっとも彼らの場合、別の事情も関わってくるのだが、それは今ここで書くことではないので割愛する。

『2人共、いよいよ明日が第一高校の入学式ですね。魔法師として非常に大事な3年間となると思いますが、2人にはそのことを頭から離して、純粹に学生生活を楽しんでくれたら嬉しいです』

「……お気遣い、感謝致します」

深雪がそう言うって頭を下げるのに合わせて、達也も真夜の映像に向けて頭を下げた。しかし2人共、彼女がそのような世間話で電話をしてくる性格でないことは重々承知であり、どのような〝本題〟をぶつけてくるのか気になって仕方がなかった。

『さてと、私がどんな内容で電話してきたのか気になって仕方がないって顔をしてるから、手短かに話そうかしら。——あなた達と同じく明日入学する新入生の中に、1人気になる子がいてね』

「……気になる子?」

真夜の言葉に、達也も深雪も訝しげな表情を浮かべた。日本だけでなく世界でもその名を恐れられている〝四葉家〟の当主であり、本人も〝世界最強の魔法師〟の一角に顔を並べている彼女の気になる存在となれば、余程の人物だということになるからだ。

『別に四葉家に対して不利益な存在というわけではないのよ。むしろ逆と言っても良いわ。もしもその子の身に何か困ったことが起きたとき、できるだけあなた達も力になってほしいと思って、こうして電話を掛けたのよ』

「……力に?」

『そう。まあ、あの子のことだから、わざわざこうして伝えなくても自

然にあなた達を巻き込むことになるでしょうけど。何てったってあの子は「嵐を呼ぶ」存在だもの』

真夜の話聞いていて、達也はますます訳が分からなくなつた。彼女の言葉の端々から、その人物に対して好印象を持つていることが明らかに伝わってくる。普段は自分の感情を表に出すことのない彼女からしたら、それは非常に珍しいどころの騒ぎではない。

『そんな訳で、あの子とはできるだけ仲良くしてちょうだいね』

「……かしこまりました。で、その人物の名前は？」

達也の質問に、真夜は口元の笑みをますます深めながら、ゆっくりと口を開いた。

『——「野原しんのすけ」くんよ』

*

*

*

入学式を終えた次の日、4月4日の早朝。

司波兄妹の2人の姿は、自宅から少し離れた所にある鬱蒼と生い茂る森の中、そこに隠れるようにしてひっそりとある寺の境内にあつた。長い石階段を昇った先に広がるのは、伝統的な建築技術で建てられた建物に、四方を森に囲まれた開放的でありながらどこか閉鎖的な雰囲気漂う、まさに「寺」と聞いて浮かぶイメージそのままの場所だ。

しかし2人は、特に信心深い性格というわけではない。表向きは天台宗総本山である比叡山の末寺を標榜しているこの寺だが、とうとうか実際にそうなのだが、その寺の住職である九重八雲は「忍術使い」として名高い古式魔法師であり、達也は数年前から彼に体術を指南してもらっているのである。

この日も日課である体術の稽古を終えた彼らだが、今日の達也たちはそれ以外に重要な用事があつた。

「へえ、まさか入学初日で彼と顔見知りになるとは、さすがは達也くんといったところかな？ いや、今回の場合はむしろ彼の方を褒めるべきか」

「その口振りからすると、師匠は野原しんのすけを知っているのですね」

「むしろ君達が何も知らないことの方が驚きだけどね」

出家した世捨て人で俗世には関わらないことを戒めとしていながらも俗世についてよく把握している八雲に対し、駄目元で野原しんのすけに関する話を話した達也は、むしろ知っているのが当然と言わんばかりの彼の反応に意外感を隠せずにはいた。

さて何から話せば良いか、と八雲は考える素振りをして口を開く。

「野原しんのすけ。旧埼玉県春日部市出身、1985年5月5日生まれの15歳」

今は西暦2095年。普通に考えれば15歳どころか110歳という超高齢、そもそも生きているかどうかも怪しい年齢のはずだ。しかし八雲はそんなつまらない嘘や勘違いをするような人間ではなく、そうなるとそのプロフィールも事実ということになる。

「これだけで、おおよその察しが付くんじゃないかな?」

「……成程、そういうことですか」

八雲の言葉通り、達也は首肯し、隣で聞いていた深雪は驚いたように目を見開いた。

春日部市。旧埼玉県（現在は都道府県制が廃止され、広域行政区制にシフトしている）の市町村の1つであり、国道4号・新4号国道と国道16号、東武伊勢崎線と東武野田線が交差する交通の要衝だ。20世紀後半の高度経済成長時に東京のベッドタウンとして開発されたことで人口が増加、その後の少子化や第三次世界大戦を経て減少に転じたこともあるが、現在でも約20万人ほどがその地に居を構えている。

住民達には申し訳ないが、普通ならば単なる地方都市の1つとして特に取り沙汰されることのない街のはずだ。

春日部市で発生していた、例の『不可思議な現象』さえ無ければ。

その現象の存在に気づいたのは、今から10年ほど前。当時は世界的なニュースにもなったし、様々なメディアで連日連夜放送されるほどの大混乱を巻き起こした。

その内容とは、『春日部市を始めとしたごく一部の地域、あるいは一部の人々が、局所的・限定的な時間のループに囚われていた』というものだった。

その現象に囚われた人々は、時間の経過という概念自体は認識しているが一切歳を取ることが無く、何十年も同じ姿で生活を続けていた。寿命を迎えることも無く、学生は学生のまま進級せず、社会人も階級や部署すら変わらずに働き続けていた、ということだ。それはまるで何十年も続く日本の長寿アニメのような世界であり、それもあって一部の界限ではこの現象を「サザエさん時空」と称している。

それだけでも驚きだというのに、この現象のさらに大きな特徴が、このような不自然極まることで起きているにも拘わらず、誰一人としてそれを变だと認識しなかったことである。本人も、周りにいる友人達も、彼らの所属する学校や会社も、果ては国や世界さえも、一切歳を取らずに生き続ける彼らを当然のように受け入れていたのである。

しかし10年ほど前、突如として世界中の人間が一斉にこの現象の存在を認識した。何の前触れも無く、彼らが歳を取らないことをおかしいと思い、そして本人達も自分が歳を取らずに生き続けていることをおかしいと自覚した。そしてそれを自覚した途端、その現象は嘘だったかのように消え失せ、人々が再び歳を取り始めたのである。

当然ながら世界中の様々な機関が、この不可思議な現象の調査に名乗りを挙げて我先にと原因究明に乗り出した。その結果、少なくとも100年近くその現象が続いていたことは分かったのだが、なぜそんなことになっていたのか、そしてなぜそれが解消されたのかは未だに不明のままだ。

「彼が普通の人とは違う身の上であることは分かりました。しかしそれは、何も彼に限ったことではありません。叔母が俺達に彼との協力関係を構築するよう命じる根拠にはなりません」

「確かにその通りだ。しかし彼がごく一部の有力者の間で名前が売れているのは、その現象が発覚するよりもかなり前からのことなんだよ」

「つまり彼はその現象に囚われていた100年の間に、世界各国の有

力者の目に留まるような出来事を起こしたということですか？」

「その通り。しかも一度だけじゃない、それこそ何十回もだ」

八雲はそう前置きして、春日部市に関する話を話し始めた。先程の時間ループ現象については世間一般で既に認知されていることだが、ここから先はごく一部の人間しか知らない事実である。

この100年の間に人類は魔法という力を手に入れ、第三次世界大戦という悲劇を乗り越え、そして魔法を中心とした世界を構築しつつある。

しかしそれ以外にも、世界では様々な「事件」が巻き起こった。そしてその中には、「魔人」と呼ばれる存在を利用して世界征服を企む悪の組織、理想の世界を作るために開発した匂いによる集団洗脳、果ては巨大ロボットの侵攻など、フィクションの世界でしか有り得ないような出来事も多くあった。春日部市においても20世紀の終わり頃に、先に述べた巨大ロボットによって街が壊滅の危機に陥ったことがある。

しかしそれらの事件は、取り返しのつかない事態になるよりも前に解決へと導かれた。巨大ロボットの例を挙げれば、自衛隊でもまったく歯が立たなかったロボットを一組の家族が生身で空を駆けながら破壊した、という眉唾物の報告がなされている。しかし当時の記録や関係者の証言、そしてそれに関わった人々に集団幻覚の痕跡が見られなかったことから、現在では「事実と認めざるを得ない」という結論に達しているという。

そのような事件を次々と解決したとなれば、有力者達はその「英雄」に興味を持つのも自然の道理である。

「まさか、その人物というのが――」

「そう。その人物こそが、野原しんのすけだ。もちろん彼一人で全て成し遂げたわけではなく、彼の家族や友人、そして当時彼と行動を共にした協力者達がいたからこそとはいえ、中心として動いていたのは間違いなく彼だ。――もつとも、彼本人にその自覚があるかは疑問だけれどね。彼はいつだって自発的に事件に関わったわけではなく、あくまで巻き込まれただけに過ぎないのだから」

だが、と八雲は話を続ける。

「彼の活躍によつて救われた者達が大勢いることも、揺るぎない事実だ。彼が解決した事件の中には、そのまま放置していれば世界的にも甚大な被害が及ぶことが想定されたものも数多くあることから、彼を英雄視している者もけつして少なくない。だからこそ君の叔母が彼の手伝いをするように言いつけたとしても、さほど不思議は無いんじゃないかな」

真意を読ませない能面のような笑みを浮かべる八雲の言葉は、確かに傍目には筋が通つているようにも思える。

しかし四葉家のことをよく知る達也からしたら、どうにも納得し難いものがあった。彼女は、というより四葉家というのは『世界がどうなるうと知つたことではない』というスタンスであり、たとえそのような「英雄」が自分と同じ学校に入学するにしても、わざわざ自分達に電話を掛けてまで彼への助力を命じるとは思えない。

「まあ、確かに気になることが多いのも事実だ。だけど残念ながら、今まで彼が関わつてきた場所では、必ずと言って良いほど何かしら「騒動」が起こる。だから君達が望む望まないに拘わらず、君達はその騒動に巻き込まれることになるだろうね。だったらその英雄と対立するよりは、素直に協力体制を築いた方が楽だと思うよ」

「……師匠、ひよつとして楽しんでませんか？」

「あ、分かるかい？ だったら頼んじやうけど、いつか都合を作って彼をここに連れてきてもらえないかな？ 稀代の英雄の姿を、ぜひともこの目で拝んでみたいものでね」

八雲のミーハーな一面に、達也は今日一番で大きな溜息を吐いた。「お兄様……」

そしてそんな兄の姿を、深雪は実に心配そうな表情で見つめていた。

*

*

*

「おおつ、深雪ちゃん！ こんばんはー！」

「……今は朝だから『おはよう』ではないかしら?」

「おおつ、そうとも言うー」

第一高校の昇降口にてしんのすけとバツタリ顔を合わせた深雪は、ほんの一瞬だけ表情を強張らせるも、すぐさま立ち直って慣れないツツコミを口にした。そしてそのときになってようやく、自分が彼と同じクラスであることを思い出したのである。

「いやあ、深雪ちゃんがいて助かったゾ。風間くん達は違う学校に行っちゃって誰も知ってる人がいなかったから、不安で不安で仕方がなかったんだゾ」

「そ、そうなの。それなら良かったわ」

昨日1日付き合った感じでは不安な様子は一切読み取れなかった深雪だが、それを口に出すことはしなかった。下手なことを言って、関係が険悪なものになったらまずい。別に彼女は真夜の忠実な僕というわけではないが、それによって兄が不利益を被るのは彼女の望むところではない。

何か話題は無いか、と深雪は視線をあちこちにさ迷わせて、ふいにしんのすけの持つ鞆に付いているキーホルダーが目にとまった。

「あらっ? ひよっとしてそれって『アクション仮面』じゃないかしら?」

「おおつ! 深雪ちゃんもアクション仮面のファンだったり?」

「いえ、特に好きというわけではないけど、色々と話題になっているから知ってるの」

アクション仮面とは、20世紀末からシリーズが続いている特撮作品の名前、並びにその主人公の名前である。同一俳優が主演を務める作品物としては世界最長ということでギネスにも登録されている人気シリーズだが、例の現象が発覚し、主役を務めている俳優の郷剛太郎(ちなみに劇中の役名も一緒だ)も歳を取っていなかったと判明してから再注目を集めている。

「しんちゃんは、アクション仮面が好きなの?」

「そりゃあもう! テレビの放送は毎回観てるし、豪華客船での新作映画上映イベントも行くくらいだゾ! それに自慢じゃないけど、才

ラ、アクション仮面とはマブダチなんだゾ！」

「マブダチ？ 個人的な付き合いがあるってこと？」

深雪の問いに、しんのすけは「そーそー」と首を縦に振った。そのときの表情は所謂「ドヤ顔」であり、どうも鼻屑目に見ても自慢していることは明らかだ。

しかし深雪はそんなことよりも、もっと別のことが気になっていた。

——その俳優は確か、春日部市の出身ではなかったはず……。春日部市の住民以外にも例の現象に囚われていた人がいたけど、何か共通点があるのかしら……？

「良かったら深雪ちゃん、アクション仮面のDVD貸そっか？ すっごく面白いから、深雪ちゃんも観れば絶対にハマると思うゾ！ どんなに強い敵が出てきても、アクション仮面の必殺技「アクションビーム」でビビビーツとやっつけちゃって——」

興奮した様子で劇中のヒーローが取るポーズを真似してみせる彼は、高校生にしては不釣り合いなくらいに子供っぽく見えた。元々そういう性格だという見方もあるだろうが、100年近くもの間5歳児のままだったせいで、肉体的に成長してもなかなか精神が追いつかないのかもしれない。今まで深雪の近くにはいなかったタイプなので、彼女にはそれがとても新鮮に思えた。

それにもう一つ、自分に対して自然体に接してくるのも、彼女にとって非常に新鮮に感じた部分だった。彼女は自分の容姿が普通の人と違うことを自覚しており（もつともその程度の認識ではまだ甘いことを彼女自身はまだ知らない）、男子のほぼ全員が彼女に対して壁を作ったり自分を良く見せようと装ったりするのだが、彼にはそれが一切見受けられなかった。

真夜の命令によって彼と交流を持たなければいけないことについては未だに憂鬱な気分になるが、彼自身の性格が深雪にとって好ましいものであることはせめてもの救いだった。

「おっ、着いたゾ深雪ちゃん。ここが1年A組だつて」

「……ええ、そうね」

おそらくこのドアを潜った先には、幾重にも困難が待ち受けているのかもしれない。普通の人とは違う人生を歩んできた深雪ですら手に負えない出来事が、自分達の身に降り掛かってくるのかもしれない。

しかし深雪は、心の中で拳を強く握りしめて決意した。どんな困難が降り掛かろうとも、最愛の兄と一緒にならきつと乗り越えられるに違いない、と。

「そんじゃ、失礼しまーすつと」

呑気な声でドアを開けたしんのすけに続いて、深雪は凛々しい表情で教室へと足を踏み入れた。

第3話 「高校生活は波乱の予感……だゾ」

入学式の日は式の終了後に帰る生徒も多かったため、授業初日である今日が実質的な初顔合わせとも言える。新たな学校生活への期待と不安に浮き足立つ新入生、というのはいま魔法科高校でも変わらず、1年A組の生徒達も隣同士のクラスメイトに話し掛けるなど積極的な交流が教室のあちこちで図られている。

そんな中、他の生徒に比べて一際気合いの入った女子生徒が1人いた。

「……ほのか、まだ司波さん来てないんだから、少しはリラックスしたら？」

「分かってはいるんだけど……、もうすぐ司波さんが来るって思うと緊張しちゃって……」

体を縮こまらせて不安で顔を歪めるのは、光井ほのか。そしてそんな彼女を感情の乏しい表情で見つめる幼馴染、北山雫。2人共可愛らしい顔立ちをした可憐な少女であるが、それぞれ入試での実技の成績が全体で3位と4位という一科生の中でも特に優等生である。

そんな2人が、というよりほのかが待ち構えているのが、今日から同じクラスで共に魔法を学ぶことになった、入試の成績で堂々の1位に君臨する女子生徒・司波深雪だ。

彼女と初めて会ったのは、入試での実技試験。同じグループだった彼女の圧倒的な魔法力もさることながら、見る者を惹きつけて止まないその美貌、そしてその美貌に対してもまったく見劣りしない洗練された所作に、ほのかは完全に心奪われてしまった。入学式の日と同じクラスであることを知ったときには、幼馴染みである北山雫ですら戸惑ってしまうほどに狂喜乱舞したくらいだ。

そんな彼女と、少しでも仲良くなりたい。そんな想いを抱いたほのかは、どのように自己紹介をしようか昨日の夜からずっと考え続けていた。おかげですっかり寝不足だが、脳内で興奮作用のある物質でも生成されているのかまるで疲れを感じない。

そうやって待ち構えていると、教室近くの廊下がにわかに騒がしく

なってきた。互いに自己紹介をして親睦を深めようとする会話は先程から聞こえていたのだが、今は「なんて美しい人なんだ」とか「あんな美人初めて見た」とか「隣の奴は何者だ」なんて声ばかりとなっている。

もしかして、とほのかが入口に目を向けていると、まさしくお目当ての女子生徒・司波深雪が教室内へとやって来た。そして教室中の生徒が彼女の姿を見た瞬間、あまりの美貌に会話を止めて息を呑むという冗談のような光景が繰り広げられた。

「ほのか、司波さんが来たよ。話し掛けないの？」
「ま、待って雫！ 心の準備が——って、あれ？」

しかしその直後、彼女とほとんど肩を並べて教室に入ってきた男子生徒・野原しんのすけの姿に、ほのかは意外そうな表情で首を傾げた。その男子生徒は、ほのかもよく憶えていた。実技の成績で自分よりも上の2位だから、というのもあるが、彼の場合はその言動がとにかく印象的だった。まるで小さな子供がそのまま大きくなったかのような純粹で自由奔放な振る舞いは、エリート思考の強い生徒からしたら目障りかもしれないが、少なくともほのかには好ましいものに見えた。

だからこそほのかは、入試で印象的だった2人があたかも知り合いかのように肩を並べて歩く光景に違和感を覚えた。ほとんど対照的な性格であり、試験のときには互いに会話を交わすことも無かったはずなのに。

と、ほのかがそんな風に2人と見つめていると、その2人が会話を交わしながらこちらに近づいてくるのに気づいた。

「し、雫！ なんて司波さん達、こっちに来るの！」

「……ああ、司波さんの席、私の後ろかも」

「ええっ！ 早く言ってよ！」

「今思い出した。それよりほのか、もう少しで来るよ」

ほのかの幼馴染である北山雫の言葉に、ほのかは顔を引き攣らせた。昨日の夜に何度もシミュレーションをしたはずなのに、それらが一切出てこないくらいにはパニックになっていた。

——な、何か気の利いた挨拶をしないと！ 『綺麗な黒髪ですね』とか……って、それじゃただのナンパだよ！ それとも『あなたのファンです』とか……いやいや、それこそ意味不明だし！

それでも2人はどんどんこちらに近づき、とうとう『目の前』と表現して差し支えない位置にまでやって来た。

——ええいつ！ こうなったら、女は度胸よ！

ほのかは心の中でそう決心すると、2人に向かって大きく1歩足を踏み出した。

ずべっ。

そしてその勢いのまま足をもつれさせ、思いつきり転んだ。

あまりに大きな音だったので、教室内のあちこちから視線が突き刺さってくるのが肌で感じ取れた。それと同時にクスクスと笑い声が漏れ、中には「あんな鈍臭い奴も一科生なのかよ」といった声まで聞こえてくる。

あまりの情けなさに、ほのかは転んだ姿勢のまま泣きたくなった。

しかし、運命の女神は彼女を見捨てなかった。

もつともこの場合、見捨てなかったのは『女神のような美少女』なのだが。

「大丈夫ですか？」

ほのかが顔の痛みを堪えながら顔を上げると、心配そうに眉を寄せてこちらに手を差し伸べる深雪と目が合った。その後ろからしんのすけが物珍しそうに覗き込んでいるが、今のほのかには彼女しか視界に入っていないかった。

「あ、ありがとうございます。え、えっと、新入生総代の、司波さん、ですよ……？」

「はい、そうですよ。お怪我はありませんか？ えっと……」

「み、光井ほのかです！」

「光井さんですね？ 司波深雪です、仲良くしてくださいね」

「は、はい！」

結果オーライ、というより深雪に助けてもらった親友の姿に、雫はほとんど動かない口元をほんの少しだけ上げて笑みを浮かべ

た。そうしてほのかから紹介される形で雫も深雪と挨拶を交わし、想定どいぶ違う形ではあるが無事に親交を築くことができた。

と、ほのかがしんのすけへと視線を向けた。

「あの、あなたは確か、野原しんのすけくんですよね？」

「おっ？ オラを知ってるの？ 会ったことあったっけ？」

「うん、実技のときに同じグループだったんだけど……、憶えてないよね」

「おおゴメン、全然憶えてないや。よろしくね、ほのかちゃん。オラのこととは、しんちゃん”って呼んでね」

「うん！ よろしくね、しんちゃん！」

「私は北山雫、よろしくね」

「おおっ！ 雫ちゃんもよろしく！」

そうやって互いに自己紹介が終わったタイミングでチャイムの音が鳴り、深雪と会話する3人を羨ましそうな表情で遠巻きに眺めていた生徒達が慌てて自分の席へと駆けていった。

そして最後の生徒が席に着くかどうかというタイミングで、前のドアから1人の男性教師が入ってきた。おそらく、このクラスの担任だろう。

「皆さん、入学おめでとう。1年A組指導教官の百舌谷もすずやです」

挨拶もそこそこに、百舌谷と名乗った男性教師はさつそく説明に入った。

ここA組は、難関である一高の中でも特に優秀な成績で試験をパスした生徒によって構成されているようで、主席の深雪だけでなく全員が優等生であり、期待を背負っていることを忘れないでほしいと告げられた。

また魔法科高校の生徒になったことで、図書館や情報端末に貯蔵されている学外秘の貴重な資料を閲覧することができることも教えられた。これ自体は二科生にも与えられた権利であるが、実際に魔法師として活躍する教師の講義を受けられるのは一科生ならではの権利と言えるだろう。

これらの説明を、生徒達はどこか誇らしげな表情で胸を張って聞い

ていた。それはほのかや雫の2人も例外ではなかったが、深雪はあくまで自然体な態度で、そしてしんのすけに至っては既に興味なさげに窓の外をボーッと眺めている。

ちなみにこの後の予定としては、教師の解説付きでの専門授業の見学が組まれている。他に見学したい授業があれば自主的に動いて構わないそうだが、せっかく一科生になったのだから解説付きの方が良いだろう、というのがほとんどの生徒の考えである。

「二科の補欠は可哀想だよなあ。最初から放置なんだから」

「ここに入れただけで喜んでるだろうし、良いんじゃないかね?」

「まあ、大した実力も無いのに魔法師になろうなんて図々しいよな。一般人らしく大人しくしてろっての」

教室のあちこちから漏れ聞こえてくるそんな会話に、ほのかは眉を寄せて深雪の方をチラリと見遣った。

——深雪さん、何だか表情が険しいかも……。そりゃ二科生の人達の悪口なんて、聞いてて気分の良いものじゃないよね……。

とはいえ、確かに同じ授業見学なら解説付きの方が有難いのも事実。ほのかは『自分が染まらなきゃ良いよね』と心の中で結論づけると、雫と深雪を誘おうと席から立ち上がった。

と、そのとき、

「あらっ? しんちゃん、そっちは集合場所と逆方向よ」

クラスメイトと交友を深めるための誘いの言葉が飛び交う教室で、しんのすけが真っ先に教室を出ていき、席が隣ということもあり深雪が呼び止めた。

「別と一緒に行かなくていいじゃないわじゃないんでしょ?」

「でも、解説付きで見学した方が為になるんじゃないかしら?」

「解説するのって、さっきのモズクさんでしょ? オラは綺麗なお姉さんが教えてる授業を探しに行くから。じゃ、そゆことで」

ヒラヒラと手を振って教室を後にしようとする彼に、深雪やほのかだけでなく、たまたま近くでそれを聞いていた生徒達も信じられないといった表情をしていた。どうしても見たい授業があるならともかく、そのような理由で一科生の特権である教師の解説を投げ捨てるな

んで。

何となく感じてたけどかなりのマイペースだなあ、とほのかは彼の背中を見送り、そういうえば深雪を誘おうとしてたんだと思い出して再び彼女の方を――

「待って、しんちゃん！ 私も一緒に行くわ！」

「ええっ！」

深雪の意外すぎる行動に、教室中の全員から一斉に叫び声があがった。見事なユニゾンだった。

「えっ、ちよつと司波さん！ 何考えてるの！ どう考えたって、先生の解説を聞きながら見学した方が――」

「しんちゃん！ 私も一緒について行って良いかしら？」

「おっ？ 別に良いゾ」

「ご丁寧に深雪に忠告をしようとするクラスメイトを無視して、彼女はしんのすけと一緒に見学する約束を取りつけてしまった。

これに焦ったのが、ほのかを始めとした他のクラスメイトだ。如何にして彼女を誘おうか腐心してたときに、あろう事か彼女の方からしんのすけと一緒に行動すると宣言されてしまったのだから無理もない。

「ま、待って深雪さん！ 私も一緒に行く！ ねえ、雫もそれで良いよね！」

「……まあ、私は別に良いけど」

「ぼ、僕も一緒に行くぞ！ 司波さんをあんな奴と一緒にさせられるか！」

「お、俺も！ 司波さんがいないんなら、教師の解説とか意味ねえし！」

「わ、私だって！」

こうしてあれよあれよと言う間にクラスメイト全員が、しんのすけの背中を追い掛ける深雪の背中を追い掛けて教室を出ていった。

「………どういうことだ？ 集合の時間はとっくに過ぎてるんだが」

指定した集合場所では百舌谷が1人、いつまで経っても現れる気配の無い生徒達に首を傾げ、独り言を漏らしていた。

*

*

*

国が総力を挙げて育成に力を入れている魔法師の教育機関だからか、第一高校の食堂は他の学校と比べても広い類に入る。しかし新入生が一度は学食のメニューなどを確認しにやって来るためか、この時期の学食はかなり混雑することが多く席が空いていないことも珍しくない。

しかし達也たちの場合は、二科生ということの基本放置されていることを逆手に取り、授業の見学を早めに切り上げて食堂にやって来たため、簡単に6人掛けのテーブル席を確保することができた。現在はほぼ満席の状態であるため、正しい判断だったといえるだろう。

「工房見学、楽しかったですね」

「ああ、実に有意義だった」

「俺にあんな細かい作業ができるかな……?」

「あなたには無理よ、決まってんでしょ」

「何だと、エリカ!」

そしてそのテーブルに着いているメンバーだが、昨日知り合った達也・エリカ・美月の3人に加え、エリカと口論を繰り広げている少年が1人加わっていた。

彼の名は、西城レオンハルト。父親が HALF、母親がクォーターということでこのような名前であり、平均的な日本人よりも顔立ちのハッキリした外見をしている。鍛え上げられた体をしていることから分かる通り、頭を働かせるよりも体を動かす方が得意なタイプであり、将来は機動隊か山岳救助隊を希望しているとのことだ。

そんな4人が雑談をしながら昼食を食べ進め、残り半分くらいにまでなった頃、

「おおつ、皆さんお揃いで土偶ですなあ」

しんのすけが達也たち4人のテーブルにやって来て、ソファ席に

座るエリカの隣へと流れるような動きで腰を下ろした。

「しんちゃん、土偶じゃなくて奇遇でしょ」

「おおっ、そうとも言うー。——おおっ、初めて見る顔だゾ。達也くんたちのクラスメイト？」

「ああ、そうだぜ。西城レオンハルトっていうんだ、長いからレオで良いぜ」

「ほいほーい。オラは野原しんのすけ、よろしくレオくん」

そんな短い遣り取りを交わしたのを見届けてから、達也が問い掛ける。

「しんのすけのクラスも、授業の見学だったのか？」

「そーそー。いやあ、さすが魔法科高校ですなあ。男の人よりも数は少ないけど、美人な教師が何人もいて大満足だったゾ！特に保健室の遙ちゃんなんて、オラの好みにドストライクの超美人さんだったし！」

「いやいやしんちゃん、見学するのそこじゃないでしょ。しかも後半のそれって、もはや授業の見学を抜け出してるじゃない」

「何言ってるの、エリカちゃん！オラにとつては重要なんだゾ！

優秀な魔法師は美人が多いって聞いたから、わざわざ魔法科高校に入ったんだから！」

「そんな理由でこの学校に入学したの!？」

漫才のような遣り取りを繰り返すしんのすけとエリカに、他の3人も思わず笑みを浮かべていた。笑みといっても、どちらかといえば苦笑に近いものだったが。

と、そのとき、

「お、お兄様……！ハア……ハア……、こ、こちらに、いらっしやっただの、ですね……！」

随分と息を荒らげた様子で、しかし達也に対してしつかりと満面の笑みを浮かべた深雪が、駆け足気味で皆の集まるテーブルに駆け寄ってきた。ちなみに彼女の後ろから同じクラスと思われる生徒達がゾロゾロとついて来ているが、全員が汗をびっしりと掻いて疲れ果ている。

「……大丈夫か、深雪？」

「だ、大丈夫ですわ、お兄様……。ちよつとしんちゃんの動きが素早くて、後をつけていくのに精一杯だっただけです……。」

彼女の説明を聞きながら、達也は内心驚いていた。一見深窓の令嬢のような彼女であるが、達也と共に九重八雲の教えを受けているため、その華奢な体格から想像がつかないほど運動能力が高いのである。そんな彼女を振り回してここまで疲れさせ、しかし自分は疲れた様子が一切無いしんのすけに、達也は彼に対する評価を上方修正した。

とりあえず彼女を休ませよう、と達也が空いていた隣の椅子に手を掛けた、そのときだった。

「わ、悪いが君達……。こ、ここを空けてもらえるかな……。？ 今から、司波さんと僕達が、こ、ここの席を、使うんだ……」

深雪の取り巻き（本人非公認）の1人である少年が、呼吸が大きく乱れているために途切れ途切れになりながらもそう言った。

「確かに、すぐにでも座って休んだ方が良いな。ちよつと待つてくれ、すぐに椅子を持つてくるから——」

「だ、大丈夫だ、その必要は無い……。君達が今すぐ、ここから立ち去れば良いんだから……。」

疲れ果てた何とも情けない声ではあるが、その言葉に込められた「悪意」を敏感に感じ取ったエリカとレオの眉がピクリと動いた。

「あの、森崎さん……。私達はこれからお兄様達と一緒に——」

「司波さん、あなたは新入生総代、いわば我々一科生の見本となる存在なんですよ？ 見たところ、彼らはただの「二科生」ではないですか？ あんな奴らに「一科生」が連んでいるなんて、示しつかないではありませんか」

「何だと、おい！」

どうやら徐々に体力が回復してきたらしい森崎という名の少年の言い分に、レオは思わず声を荒らげて立ち上がった。彼の主張はあまりにも身勝手で、深雪本人の想いすらも軽視したものであるため、レオがそのような反応をするのも当然だ。

「そうだ！ 身の程を弁えろよ、ウィード！」

「俺達の邪魔をするな！」

しかし他の一科生はそれを窘めるどころか、むしろ彼の主張に同調するように口々にそんなことを叫んでいた。まさかの光景に、レオ・エリカ・美月の3人が目を丸くしている。

とはいえ、取り巻きの連中全員が同じ行動をしているわけではない。

「な、なんでこんなことに……？」

「一科生になったという誇りが、間違った方向に増長してる」

ほのかは周りの豹変振りにただ狼狽え、雫は普段よりも目つきを鋭くして周りを見渡していた。

その間にも、森崎の主張は続いていた。

「良いかい、君達？ ウィードは所詮、僕らブルームの“スペア”ではないんだ。授業でも食堂でも、一科生が使いたいといえれば譲るのが常識だろう？ 本当ならば実力で黙らせてやっても良いんだが、あいにくCADの使用が禁じられているからな。分かってくれるかい？」

「……森崎さん、あなた——」

とうとう我慢の限界に達した深雪が森崎に向き直ろうとしたそのとき、わざと大きな音をたてて達也が席から立ち上がった。その場に
いる全員が、彼に注目する。

「俺はもう終わったから、そろそろ行くよ」

「あ、おい、達也！」

「ははは、良い心掛けだ。他の3人にも見習ってほしいものだ」

どうやら達也は、この場を穩便に済ませるつもりらしい。彼はまだ少し料理の残っているお盆を持ってその場を立ち去ろうと——

「あれ？ みんな、もう行っちゃうの？」

そんな喧騒の中に割って入ったのは、いつの間にか自分の昼食を購入入していたしんのすけだった。彼の両手はトレーで塞がっており、そこにはホカホカと湯気の立ったグリーンカレーが載っている。

「何か今“カレーフェア”なんだって。このカレーが一番辛いらしいぞ」

「おい、野原！ おまえ何勝手に行動してるんだ！ 今僕はコイツらに一科生として正しい行動を弁えろと——」

「んもう森脇くん、人がご飯食べようってときにうるさいゾ」

「僕の名前は森崎だ！ 大体おまえはきつっきの見学のときだって、深雪さんを散々走らせて困らせやがって——」

「きつとお腹が空いてるからイライラしてるんだね。オラのカレー食べる？」

「何を言ってるんだおまえは——んぐつ！」

森崎が大きく口を開けたところに、しんのすけが一口分のグリーンカレーを掬ったスプーンを突っ込んだ。突然の行動に、森崎は思わず口を閉ざしてしまう。

そして、

「——かつら！」

昔のアニメみたいに口から炎を吐き出す勢いで、森崎は体を小刻みに震わせながら真っ赤な顔で給水器へと駆けていった。先程まで彼と一緒に叫んでいた他の一科生は、そんな彼の情けない姿に興を削がれたのか白けた表情を浮かべている。

「おおつ、あんなに辛いのか。じゃあオラは別のにしよーつと。——深雪ちゃんも一緒に行く？」

「へっ？ あつ、うん、そうね。——それではお兄様、また後で」

その隙を突いて（といっても本人にその自覚は無いが）しんのすけがちやっかり深雪を誘い、2人はそのままカウンターへと去っていった。

そんな彼の後ろ姿を、ほのかと雫の2人が眺めていた。

「何というか……、しんちゃんって凄いな……」

「うん、そうだね……。何というか、他の一科生の人達と全然違う……」

と、そんな風にヒソヒソと話していると、しんのすけがふいにこちらへと視線を向けて大きく手を振った。

「あれっ？ ほのかちゃん、雫ちゃん！ 一緒にご飯食べないの？」

「光井さん、北山さん。一緒に食べましょう」

「えっ！ えっと、私は……」

しんのすけと深雪に呼び掛けられ、ほのかは戸惑うように他のクラスメイトへと視線を向けた。矢面に立っていた森崎がこの場から消え、達也たちもその場を動く気配が無いということで、所在を無くしたように彼らは複雑な表情で突っ立っていた。

それを見たほのかは、今度は達也たちの方へと視線を向けた。会話どころか顔を合わせるのも初めてな間柄ではあるが、深雪としんのすけが仲の良い様子を見せているからか、全員が好意的な表情で小さく頷いてくれているのが分かった。

「……行こうか、ほのか」

「……そうだね、雫」

2人は顔を見合わせてそう呟くと、足早に深雪達の下へと向かっていった。

第4話 「魔法ありのケンカが勃発？ だぞ」

その日の放課後、生徒会長室にて。

「おいおい、他の皆が忙しくしているときに、生徒会長様は呑気にネットサーフィンか？」

他の委員に割り当てられたものより大きなテーブルに陣取り、楽しそうな表情でパソコンの画面を眺めていた真由美に呆れたように声を掛けたのは、ショートボブの黒髪にスレンダーな体型をした、まさに「男装の麗人」といった表現がよく似合う女子生徒・渡辺摩利だった。

彼女が長を務める「風紀委員」の本部はこの部屋の真下にあり、入口とは別のドアから続く階段で直接繋がっているという珍しい構造をしている。そんなこともあり、放課後や昼休みなど時間があればこうして生徒会室にお邪魔しているというわけである。

「あら、リンちゃん達ならまだしも、あくまで部外者の摩利にとやかく言われる筋合いは無いわ」

「ご心配には及びません！ この書類はまだ会長に精査していただく段階ではありませんので、それまではご自由にお過ごしください！」

真由美に助け船を出す形でそう叫んだのは、昨日真由美が深雪と顔を合わせたときに付き従っていた男子生徒だった。パソコンのキーボードを叩きながら四苦八苦している彼の様子に、摩利は他人事ながら同情するような表情となった。

「それで真由美は、何をそんなに熱心に見てたんだ？」

そうやってパソコンへ身を乗り出す摩利に、真由美は体をずらしてその画面を見せた。

それはとあるネットニュースのサイトで、去年の夏に行われた剣道の中学生大会についての記事が書かれていた。それに掲載されている写真には、大会の優勝者と準優勝者である2人の少年がトロフィーを手に肩を並べる様子が写されている。

こういった場合、負けた方は悔しがったり泣いたりするのが普通だが、ここに写る少年は一切それが無く、むしろ晴れやかな笑みを浮か

べているのが印象的だ。

「ああ、これか。アタシもこの試合はネット中継で観ていたよ。シニアの世界大会でも見られないようなハイレベルの応酬の末、当時まったくの無名だった選手が優勝候補筆頭の“代々木コージロー”を打ち倒した瞬間は、思わず大声をあげてしまったほどだ」

「やっぱりこの2人は、摩利の目から見ても相当な実力者なのね？」
「それはそうだ。そもそもアタシは道場の中でも“目録”、免許も与えられていなければ勝手に人を指導することもできない立場だ。単純な剣技で言えば、この2人とは比べるまでもない」

摩利は若干自嘲気味にそう言いながら、優勝者である少年へと視線を移した。

こういった場合、勝った方は喜んだり感動で泣いたりするのが普通だが、ここに写る少年は一切それが無く飄々としているのがある意味印象的だ。

「優勝者は、野原しんのすけという名前だったな。確か今年の新入生で、実技の成績が2位だったはずだ。アタシとしてはぜひとも風紀委員に欲しい人材なんだが、ちょうど生徒会枠が2つ空いていることだし、真由美の方から彼にアプローチしてくれないか？」

「摩利なら、そう言うと思っただわ。——それに私自身としても、彼とは交流を深めておきたいし」

真由美の台詞の後半は、すぐ隣にいる摩利にも聞き取れないほどに小さな声だった。

「んっ？ 真由美、何か言ったか？」

「いいえ、何も。——さてと、まだしんちゃんは校内にいるかしら？」
真由美はそう言いながら、パソコンのキーボードを叩いた。少しして表示されたパスワードの入力画面も難なく突破して彼女がアクセスしたのは、校内の風景を映し出す映像が何十にも分割されて表示された画面である。

「防犯カメラの映像を盗み見るとか、相変わらずだなおまえは……」
「使える権力は使わなきゃ損よ。さてと、しんちゃんは——つて！」

嬉々とした表情で映像に目を凝らしていた真由美だが、ある映像を

視界に入れた途端に血相を変えて立ち上がった。

「どうした、真由美？」

「校門前で、新入生達が言い争いをしているわ。しかも全員が新入生。もしかしたら、魔法を使った喧嘩に発展するかも」

「——先に行くぞ、真由美！」

それを聞くや否や、摩利が勇ましい表情で生徒会室を飛び出した。その右手には、『風紀委員』と書かれた腕章が力強く握りしめられていた。

*

*

*

「いい加減にしてください！ 深雪さんはお兄さんと帰るって言うてるでしょう！ 別にあなた達を邪魔者扱いしてるんじゃないんですから、一緒に帰りたいかったらついてくれば良いんですよ！」

先程から続く口論に業を煮やして啖呵を切ったのは、この中では一番大人しい性格と誰もが思っていた美月だった。

ここに至るまでの経緯は、実に想像の付きやすい単純なものだ。深雪としんのすけ、そしてほのかと雫が校門にやって来るのを待っていた達也たち二科生に対し、4人の後ろをゾロゾロとついてきた一科生の面々が難癖をつけてきた、というものだ。ちなみにその一科生の矢面に立っているのは先程も食堂で真っ先に口を出してきた森崎だというのも、これまた想像しやすいことであろう。

最初は思わぬ人物からの反撃にたじろぐ森崎だったが、落ち着きを取り戻したのか、あるいははますますヒートアップしたのか、これ見よがしに大きく溜息を吐いてから反論を始めた。

「良いかい、君達？ ここ第一高校は、完全なる実力主義だ。そして君達二科生は試験によって、僕ら一科生よりも実力が劣ると判断された。それはつまり、君達の存在自体が僕らより劣るということに他ならない。少しは身の程を弁えたらどうだい？」

「俺達は司波さんと、二科生には理解できないレベルの話がしたいんだ！」

「そうよ！ 少し時間を貸していただくだけなんだから、二科生は大
人しくすつこんでなさい！」

内容の是非はともかくとして、どうやら他の一科生達も森崎の話す
内容に異論は無いようだ。自分達の優位性をまったく疑っていない
らしく、このままの勢いで押し切ろうという作戦らしい。

しかし残念ながら、ここにいるのはそんなゴリ押しで通用するよう
な者達ではない。

「ハッ！ そういうのは、自治活動自活中にやれよ！ ちゃんと時間取っ
てあるだろうが！」

『時間を貸していただく』ですって？ そういうのは、あらかじめ本
人の同意を得てからやるもんでしょうが！ 一科生の皆さんは、一般
的な社会のルールも知らないのかしら？」

それを示すようにレオが彼らの主張を威勢良く笑い飛ばし、エリカ
も皮肉をたっぷり込めた言葉で返した。食堂では言い争いをしてい
たというのに、こういうときには息がピッタリだ。

しかしそれでも尚、森崎は自分達の非を認めようとはしなかった。
「まったく、どうして君達『ウィード』はそう楯突くんだ？ 所詮は
単なる『スピア』で実力も何もかも劣っているというのに、僕達『ブ
ルーム』に刃向かってどうするんだい？」

そんな森崎の言葉に真っ先にキレたのは、またしても美月だった。

「——何ですか、さっきから『実力』って！ 私達は同じ新生生です

！ 今の時点で、あなた達のどこが優れてるって言うんですか！」

「……おっと、今のはマズイな」

彼女の言葉に、今まで彼らの口論を無言で眺めていた達也が僅かに
表情を歪めた。

確かに一科生のほとんどは、素質はあるものの実戦経験などまるで
無いズブの素人だ。しかし中には既に魔法に慣れ親しみ、独自に技術
を磨いてきた者も存在する。

例えばすっかり一科生の代表のような立ち位置に収まった森崎は、
ボディーガード派遣の警備会社を経営している一族の出身であり、そ
こでは魔法そのものの技術よりもCADの操作技術を研鑽し、魔法の

発動スピードを上げることを行条としてきた。そして達也の見立てでは彼自身も実家の家業を幾らか手伝っており、実戦経験の豊富さという面ではこの中でも上位に入ると睨んでいる。

「そんなに見たいんなら、見せてやるよ……！　これが一科生と二科生の実力の差、すなわち『才能』の差だ！」

森崎がそう叫びながら取り出したのは、術式補助演算機（通称CAD）と呼ばれるもので、魔法師にとって所謂『杖』の役割を果たす機械である。拳銃のような形をしたそれをホルスターから抜く彼の動作は、さながら早撃ち勝負をするガンマンのようだ。

そして森崎はあつという間に、二科生のグループの1人にその銃口を向けた。

レオだった。

「うおっ！　しま——」

「食らえ——」

「あつ、真由美ちゃんだ」

「えっ——」

横から突然聞こえたしんのすけの声に、森崎の顔から一瞬にして血の気が引き、彼の指差す方向を咄嗟に見遣った。

そこには、生徒会長らしき女子生徒の姿はどこにも無かった。がきんっ！

そして次の瞬間、彼のCADは何かがぶつかる音と共にその手を離れ、綺麗な放物線を描いて遠く離れた地面に落下していた。

彼の目の前にはいつの間にかエリカの姿があり、不敵な笑みを浮かべて左手に持つ警棒のようなものを彼に見せつけている。

「——野原！　どういうつもりだっ！」

その警棒で自分のCADを弾き飛ばされたことを悟った森崎は、顔を真っ赤にしてしんのすけを怒鳴りつけた。

「知らないの、森末くん？　CADを人に向けちゃいけないんだゾ」

「僕の名前は森崎だ！　いい加減に憶えろ！　——もういい、我慢の

限界だ！」

森崎はそう言うのと目の前にいるエリカから完全に視線を逸らし、しんのすけへと向き直った。

「今日1日中、おまえの行動はあまりにも目に余る！ 授業の見学のときも散々フラフラして司波さんや僕らを振り回したり、今もこうしてウィードの肩を持ったり！ おまえには第一高校の一科生として入学したという自覚があるのかっ！」

「一科生とか二科生とか、そんなのどうでもいいじゃない。変な森久保くん」

「僕は森崎だ！ おまえ、もうわざとだろ！ ——それに、どうでもいい」とはどういうことだ！ 第一高校の一科生というのは、優秀な魔法師になる素質を秘めていると認められた存在だ！ いわば僕達は、国家の期待を背負っていると言っても過言ではない！ そこにいる落ちこぼれとは次元が違うんだよ！」

「森田くん、さっきエリカちゃんにやられてたじゃん」

「それはおまえが邪魔したからだろう！ それに僕は森崎だ！」

苛立ちを紛らわせるように頭をガシガシと掻いた森崎は、先程エリカに飛ばされて地面に落ちたCADを、怒りを表すように大股で歩いて取りに行った。

そしてそれを拾い上げると、その銃口を今度はしんのすけへと向けた。

そのときの表情は、一周回って冷静なものに見えた。

「二科生への教育は後回しだ。今はおまえの、そのふざけた言動を改めることから始めよう」

「――！」

森崎の言葉に、司波兄妹を始めしんのすけに味方する者達に緊張感が走った。先程彼のCADを弾き飛ばしたエリカも再び警棒を構え、他の者達もいつでも動けるように身構える。

しかし銃口を向けられている当の本人であるしんのすけだけは、気の抜けた表情のまま慌てる様子が無い。

「どうした、野原？ 今更怖じ気づいて声も出ないか？ 今この場で

謝るんだつたら、今までの言動は許してやっても良いぞ」

「ねえ森崎くん、後ろに真由美ちゃんがいるゾ」

「はっ！ さつき上手くいったからって、同じ手が二度も通用するはずが——」

「1年A組、森崎駿くんね」

自分のすぐ背後から聞こえてきた、思わず体を強張らせずにはいられない威圧的な声に、森崎はまるで油の差してないブリキのおもちやのような不自然にゆっくりとした動きで振り返った。

そこにいたのは、ウェーブの掛かった長い黒髪を少々大きなリボンで纏めた小柄な少女だった。彼女は対外的にも有名人であり顔が売れているので、彼女が現生徒会長の七草真由美であることはすぐに分かった。

そしてそんな彼女に付き従うように立つ女子生徒についても、森崎はよく見知っていた。ショートボブの黒髪にスレンダーな体型をした、まさに「男装の麗人」といった表現がよく似合う女子生徒・渡辺摩利の右腕には、太陽の光に照らされた「風紀委員」の腕章が燦然と輝いている。

遠巻きに騒動を眺めていた野次馬の1人が、「やべえなああの1年、風紀委員長に目つけられたぞ」と呟いた。

「風紀委員長の渡辺摩利だ。森崎駿、自衛目的以外での魔法による攻撃は、校則以前に犯罪行為だということは分かっているのか？」

「え、えっと……」

「森崎駿、本部に來い。詳しく話を聞かせてもらおうか。場合によっては懲罰委員会への出頭も覚悟しておけ」

「そ、そんな……」

森崎はそれを聞いて絶望を顕わにして、その場に膝から崩れ落ちた。ある意味被害者である達也たち二科生や彼らの味方である深雪達はそれに対して、むしろ当然の措置だろうな、と同情的な意見を持つものは1人もいなかった。

しかしそんな中、それを見ていた1人の生徒が彼女の前に躍り出た。

「まあまあ、そんな怖い顔しないで。若者の失敗は温かい目で見守るということ、森崎くんを許してあげてほしいゾ」

その生徒——しんのすけの言葉に、達也たちは驚きの表情で彼を見遣った。森崎を連行しようとしていた摩利も、怪訝とも不審とも取れる表情を彼へと向ける。

「どういうことだ？ 君はこいつにCADを向けられたんだらう？」

1歩間違えれば大怪我を負っていたかもしれない。そんな目に遭わされたというのに、君はこいつに恐怖も怒りも感じていないというのか？」

「別にオラ達が怪我したわけじゃないし、若いときについカツとなつて失敗しちゃうなんてよくあることだゾ。ここはオラの顔に免じて、森崎くんを許してあげてよ」

摩利はチラリと森崎へ視線を向けた。彼は地面に崩れ落ちた姿勢のまま、信じられないといった表情でしんのすけを見つめている。

「……たとえ君がこいつを許したとしても、こちらとしては『はいそうですか』と無罪放免というわけにはいかない。学校も組織の1つだ、重大な規則違反に対して何らかのペナルティを与えなければ、組織の規律を守ることはできない」

「んもう、摩利ちゃんは真面目さんですなあ」

「ま、摩利ちゃん？」

年下からの思わぬ「ちゃん付け」に摩利が戸惑いの声をあげ、真由美は思わずプツと吹き出してしまった。

「大丈夫だって。森崎くんだって反省しているんだし、もう人に向かって魔法を使ったりしないって。——そうでしょ、森崎くん？」

「——あ、ああ、もちろんだ。さつきは僕も頭に血が上っていた。さすがにやり過ぎたと、今は反省しているよ」

しんのすけからの助け船に、森崎は何度も小刻みに首を縦に振って応えた。それを横で見ていた摩利の目には未だに疑惑の色が残っているが、真由美へと視線を移したときに彼女がニツコリと笑って頷いたのを見て、小さく溜息を吐いて森崎へと視線を戻した。

「分かった、今回は不問に処すことにしよう。——しかし、二度目は無

いことを憶えておけ」

「は、はい！　ありがとうございます！」

摩利の言葉に、森崎は急いで立ち上がった。深々と頭を下げた。そしてしんのすけへと視線を向けて何やらモゴモゴと口を動かすも、何も言うことなくすごすごとその場を立ち去っていった。すっかり居心地が悪くなってしまった一科生の面々（深雪・ほのか・雫は除く）も、彼の後へと続いていく。

そうしてしんのすけと達也たちを除いて残ったのは、真由美と摩利の2人だけとなった。

「また会ったわね、しんちゃん。入学早々こんな騒動に巻き込まれるなんて、しんちゃんもツイてないわね」

「よっ、真由美ちゃん。ホントもう、やんなつちやうわよねっ」

体をくねらせて女口調で話すしんのすけに、真由美は口元に手を当てて優雅な笑みを浮かべた。

そんな彼に、達也たちは大なり小なり驚きの表情を浮かべていた。上級生、しかも十師族「七草家」の令嬢に対してあんなに馴れ馴れしく接するなんて、魔法師で構成されたコミュニティに属する彼らにはできないことである。もつとも第一高校に入学した以上、しんのすけもそのコミュニティに属するはずなのだが。

「ところでしんちゃん、明日のお昼って空いてるかしら？」

「明日のお昼？　なんで？」

「せっかくこうして二度も顔を合わせたんだし、新入生との親睦を深めるのも良いかと思って。生徒会室にも自動配膳機ダイニングサーバーがあるから、食事の心配はしなくても大丈夫よ。どうかしら？」

「うーん、オラにも色々と予定がありますからなあ……」

「そう、残念ね。せっかくチョコビを用意しようかと思っただけだぞ」

「チョコビっ！　時間空いてるから大丈夫だぞ、真由美ちゃん！」

何とも現金なしんのすけの態度だが、真由美は気分を害するどころか実に嬉しそうに笑って「それなら良かったわ」と言った。

そして真由美は、そのまま達也たちの方へと向き直り、

「他の皆さんも、一緒にどうかしら？ 特に深雪さんとは、生徒会について一度ゆつくりと説明したかったことだし。生徒会室だったら、一緒に食事をして何とも言われないわよ」

「えっと——」

「せっかくですが、アタシ達は遠慮させていただきます」

あくまで真由美の誘いは社交辞令的なものだったが、エリカがキツパリとそれを断った。遠慮というよりは拒絶とも受け取れるその態度に、レオ達は意外そうな表情を浮かべ、摩利はどこか気まずそうに視線を逸らし、真由美は特に顔色を変えずに「そうですか」と言った。「それでは、達也くんはどうかしら？」

「……自分、ですか？」

先程のエリカが言った「アタシ達」の中にはてつきり自分も含まれていると思っていた達也は、完全に不意を突かれた形となった。

とはいえ、すぐさま気を取り直した達也は、少しだけ考える素振りを見せてすぐに答えた。

「分かりました。お言葉に甘えて、お邪魔させていただきます」

「ありがとう。それじゃみんな、また明日ね」

真由美はにこやかな笑顔でそう言い残して、軽やかな足取りでその場を立ち去っていった。摩利も一瞬だけしんのすけへと視線を向け、彼女の後をついていくようにその場を離れていく。

そして2人の姿がかなり遠くなった頃、気まずそうな表情を浮かべるエリカが達也へと近づいてきた。

「……あーっと、ごめんね達也くん。アタシが変な断り方したせいで、断れなかったんでしょ？」

「大丈夫だ、どの道誘いに乗るつもりではあったからな」

達也のその言葉に、自分を気遣ってそう言ったのだと受け取ったエリカは「ん、ありがとう」とホツとしたような笑顔を浮かべた。

しかし達也は別に彼女を気遣ったのではなく、本当に彼女の誘いに乗るつもりだった。

だがそれは『美人の先輩に食事に誘われたから』などという理由ではない。

——会長がしんのすけを誘うときに餌にした“チョコビ”っていうのは、おそらく菓子か何かだろう。問題はその菓子がしんのすけの好物だということと、どうして会長が知っていたのかということだが……。

あの人当たりの良い笑顔の裏で何を考えているのか、達也にはそれを確かめる必要があった。

場合によっては彼女と対立することも視野に入れなければいけない、と達也は考え、人知れず大きな溜息を吐いた。

第5話 「生徒会長にお呼ばれしたゾ」

次の日、昼休み。

生徒会室のドアの前に、司波兄妹としんのすけの3人の姿があった。

「1―Aの司波深雪と野原しんのすけ、1―Eの司波達也です」
『どうぞ』

3人を代表して深雪が生徒会室入口に設置されたインターホンに呼び掛けると、機械のフィルターが掛かった少女の声が返ってきた。生徒会は機密情報を取り扱うこともあるため、他の部屋よりもセキユリティが数段厳しく設定されている。見た目には分からないが、入口には様々な仕掛けが施されていることだろう。

部屋に入ってきた3人を待ち受けていたのは、昨日顔を合わせた七草真由美と渡辺摩利に加え、長い黒髪と切れ長の目が特徴の女子生徒と、ふわふわの髪を持ち気弱な小動物のような印象を受ける女子生徒の姿もあった。

「ようこそ、生徒会室へ。遠慮せずどうぞ」

「——はい、失礼します」

ニコニコと手招きする真由美に対し、深雪は手を揃え、目を伏せ、無駄の一切無い所作で深々と頭を下げた。どれほど格式高いパーティで披露してもまったく恥ずかしくない完璧な立ち振る舞いに、部屋にいた先輩方はすっかりその雰囲気呑まれてたじろいでしまった。

「まあまあ、狭苦しい所ですがどうぞどうぞ」

「……あのう、それって私達が言うことだと思っんですけど」

そんな空気の中で、しんのすけだけが深雪の脇を擦り抜けてズカズカと部屋の奥へ進んでいった。小動物のような女子生徒にやんわりとツッコまれた彼が向かう先には、壁際に据え付けられた和箆筒ほどの大きさの機械があった。

「おおっ！ これが『タイ人の鯖』ですかあ！ オラ初めて見たぞ！」

「それを言うなら ダイニングサーバー 自動配膳機だ。しんのすけは今まで見たことが無かったのか？」

「おおつ、初めてだゾ！ ねえねえ、本当にここからお料理が出てくるの？」

「ええ、そうよ。お肉とお魚と精進から選べるから、好きな物を食べる
と良いわ」

あらかじめ設定されたメニューを自動的に配膳するその機械は、空
港の無人食堂や長距離列車の食堂車両にも置かれている代物であり、
普通は学校の生徒会室に置くような代物ではない。しかもメニュー
が複数あるという凝りように、達也が秘かに呆れていた。おそらくこ
こで食事を摂らなければいけないほど、生徒会の仕事が忙しくなる
きがあるのだろう。

初めての機械に興味津々のしんのすけが肉料理、そして慣れた手つ
きの司波兄妹が精進料理を持ってそれぞれ席に着いたことで、昼食会
は始まった。ちなみに席順としては、一番奥が会長である真由美、そ
こから向かって右側が達也たち、向かって左側が摩利達となってい
る。

「それじゃ、改めて自己紹介するわね。私が今期の生徒会長、七草真由
美。そして長い髪の女の子が会計の市原鈴音、通称リンちゃん。小
さな女の子が書記の中条あずさ、通称あーちゃん。それから今はない
けど、副会長の服部くんを入れた4人が、今期の生徒会のメンバーで
す。それからこちらは生徒会メンバーではないけれど、風紀委員長の
渡辺摩利」

「会長、私をリンちゃんなんて呼ぶのは会長だけです」

「そ、そうですよお！ 私のことをあーちゃんって呼ぶのはやめてく
ださい！ 下級生の前なんですからあー！」

紹介された鈴音とあずさがそんな不平を漏らしていたが、本人は
「まあ、今日は鯖なのね！」と聞く耳を持っていなかった。

「よろしくね、リンちゃん、あーちゃん！」

そして目敏く反応したしんのすけが、さっそくその呼び方を実践す
る。

「良かったわね、リンちゃん。私以外にもリンちゃんって呼んでくれる人ができて」

「……まったく嬉しくありません」

「あ、あの、野原くん……？ 年上に対してちゃん付けというのは、えーつと——」

「さてと、ご飯を食べながらで良いから聞いてちょうだいね」

あずさの言葉が無慈悲に遮った真由美が、第一高校における生徒会について説明を始めた。

第一高校では生徒の自治を重視しており、生徒会は他の普通科の高校と比べて大きな権利が与えられている。生徒会は全体的に生徒会長に権限が集中しており、生徒会長自体は選挙で選ばれるものの、役員だけでなく各委員会の委員長も一部を除いて会長によって任命されている。

しかしながら、摩利が長を務める風紀委員はその例外の1つだ。風紀委員の場合は、生徒会、部活連、教職員連がそれぞれ3名ずつを風紀委員として選抜、その9人による選挙によって風紀委員長が決定する。いわば摩利は、ある意味では真由美と同等の権限を持っているといえる。

「説明した通り、生徒会長は期間中自由に役員を任免することができます。——深雪さん、私はあなた達の生徒会入りを希望します」

「……私が、ですか」

深雪はチラリと達也へ目を遣った。それに気づいた彼は、『おまえの好きにすると良い』という意味合いで小さく頷いた。

それを受けて深雪は真由美へと向き直り、口を開いた。

「会長は、兄の入試成績を……存知ですか？」

「——！」

突然の質問、しかも自分の話題が飛び出してきたことに、達也は驚きの表情を深雪に向けた。彼女は至って真剣な表情で、真由美をまっすぐ見据えている。

一方真由美は突然の質問に多少驚いた様子だったが、すぐに気を取り直して深雪の質問に答えてあげる。

「7教科平均で96点、筆記試験はダントツの1位。凄いわよね」
「おっ？ そうなの、達也くん？」

「そう。しかも、魔法理論と魔法工学の科目では合格者の平均点が70点未満に対して、どちらも小論文を含めて文句無しの満点。前代未聞の高得点だって、先生達の間でも持ちきりだったわ」

しんのすけが疑問の声をあげると、苦い顔をする達也の代わりに真由美が補足した。

そして真由美の言葉が、深雪にとって後押しとなった。

「優秀な人材を生徒会に迎えたいと仰るのですしたら、私よりも兄の方が相応しいと思います！」

「おい、深雪——」

「デスクワークに魔法は関係無いと思います。むしろ重要なのは、知識や判断力ではないでしょうか？ 私を生徒会に迎えてくださるという話は大変光栄に思っております。喜んでお引き受けしたいと思っております。しかし——」

「深雪、これ以上は——」

「兄も一緒に、生徒会に入るわけにはいかないでしょうか！」

凜とした表情で言い放ったその言葉に、達也は頭を抱えたい気分だった。

——まさかここまで悪影響を与えていたとは……。過ぎる身臍肩は不快にしか思われぬぞ？ それが分からないおまえじゃないだろう？

「残念ながら、それはできません」

しかし深雪の願いは、鈴音によってバツサリと切り捨てられた。

理由は明白だった。二科生は生徒会の役員になることができないと、明確に規則で定められているのである。これは生徒会長の任免権に課せられる唯一の制限であり、これを覆すには全校生徒参加の総会で3分の2以上の賛同を得る必要がある。一科と二科が半数ずつの現状では、ほぼ無理と言って良いだろう。

「……差し出がましい真似をして、申し訳ございませんでした」

規則ならば仕方ないと諦めたのか、それでも明らかに落ち込んだ様

子で深雪は頭を下げた。とりあえず事態が沈静化したことで、達也もホッと胸を撫で下ろした。

「えつと……。それじゃ深雪さんには書記として、今期の生徒会に加わっていただくという事で宜しいでしょうか？」

「はい、精一杯務めさせていただきます」

控えめに頭を下げた深雪に、真由美は満足そうに頷いた。

そして真由美はその満足そうな表情のままチラリと摩利に視線を向け、そしてしんのすけの方へと向き直った。

「――さて、野原しんのすけくん」

「おつ？ 何？」

メイン料理のハンバーグを口いっぱい頬張っていたしんのすけは、モグモグとそれを咀嚼しながら真由美へと視線を向ける。仮にも上級生に対する態度ではないのだが、彼女にそれを気にする様子は無い。

「私はあなたを、生徒会枠にて風紀委員に推薦したいと思っています」

「風紀委員？ オラが？」

「私が真由美に頼んだんだ。君ならば、風紀委員の仕事を見事に全うしてくれると思うてね」

ハンバーグを飲み込みながら首を傾げるしんのすけに、今まで静観を貫いていた摩利が口を開いた。そしてそのまま、風紀委員会の説明に移っていった。

風紀委員の主な仕事は、魔法使用に関する校則違反者の摘発と、魔法を使用した騒乱行為の取り締まり。摩利が務める風紀委員長の場合、違反者に対する罰則の決定にあたり、生徒側の代表として懲罰委員会に出席して意見を述べる役目もある。いわば警察と検察を兼ねた、非常に強大な権力を有する組織となる。

早い話、実力と公平な視点が無ければ務まらない仕事だ。

「その点で言えば、君の実力は既に証明されていると言っても良い。実技の成績は2位、そしてそれを抜きにしても剣道の中学大会で優勝したという輝かしい経歴がある。もちろん試合と実戦は違うだろうが、それについてはアタシ達もフォローしていくつもりだ。どうだ、

興味は無いか？」

「おおっ！ 何だか格好良さそうぞ！」

「ふふっ、やっぱりしんちゃんも『健全な男の子』だったということね。乗り気になってくれたようだし、生徒会長としてあなたを新しい風紀委員に推薦するわ。頑張つてね」

「ほっほーい」

特に何か問題も無くしんのすけの風紀委員入りが決まったことに、真由美と摩利は実に満足そうな笑みを浮かべて頷いた。

と、そんな真由美の表情が僅かに崩れた。

「さてと、しんちゃんのおかげで生徒会枠が1つ埋まったのは良いとして、あと1人はどうしようかしらねえ」

「アタシとしては、新入生勧誘期間までに見つけてくれると有難いのだが」

「分かってるわよ、摩利。そっちでも相応しい人材を探してちょうだいね？」

「おおっ？ どうしたの、2人共？」

2人の遣り取りにしんのすけが尋ねると、真由美が「ああ、ごめんね」と前置きして、

「風紀委員の説明をしたとき、生徒会が3人の推薦枠を持ってると言ったのは憶えてる？ 実はしんちゃんとは別にもう1つ枠が空いていて、早いところもう1人見つけなきゃいけないのよ」

「ただ実力があるってだけでは駄目だ。生徒を取り締まるという大きな権力を持つ以上、それを無闇に乱用しない自制心と責任感を持つ人物が望ましい」

「ふーん。——あっ」

しんのすけが何かを思いついたように声をあげ、そして隣の達也へと顔を向けた。

「せっかくだから、達也くんが風紀委員やれば？」

「は？」

あまりにも突然の提案に、達也は一瞬だけ反応が遅れた。

そして、何を言ってるんだおまえは、と達也がそれを否定しようと

して、

「成程……。確かに一科生の縛りがあるのは『生徒会役員』のみの話だ、風紀委員には二科生への任命に対する制限は存在しない」

「つまり達也くんがその気になれば、生徒会わたくしの選任枠を使って風紀委員に推薦することもできるってことね。というわけで達也くん、どうかしら？」

真由美が乗り気になってきたことで、達也は明らかに焦りの表情を浮かべた。

「待つてください。しんのすけはともかく、自分は二科生です。違反者を実力で捻じ伏せる必要がある以上、自分に務まるような仕事ではありません」

「とはいえ、筆記試験で学校創設以来の高得点を叩き出した君をそのままにしておく、というのも勿体ない話だ。それに風紀委員だからといって、全員が矢面に立って取り締まる必要は無い。むしろ参謀的な人間が1人いた方が、取り締まりも捗るってものだ」

「ご心配には及びません、渡辺先輩！ お兄様はその知識量だけでなく、実戦においても誰にも負けないと私は確信しております！」

「ほほう、新入生総代にそこまで言わしめるとは、なかなか興味があるな。ぜひとも風紀委員として、その力を十全に発揮してもらいたいものだな」

「おおっ！ 良いじゃん、達也くん！ YOU、風紀委員になっちゃいなよ！」

本人を置いてけぼりにしてどんどん話が進んでいき、そして皆が期待の視線を向けてくるのを、達也は何もできずにただ呆然と他人事のように眺めていることしかできなかった。

やがて達也は、ギギギ、とまるで壊れかけの人形みたいにぎこちない動作で首を動かしてしんのすけへと顔を向けた。

——成程、これが『嵐を呼ぶ』と呼ばれる所にか……。

達也は頭の中で独りごちると、それはそれは大きな溜息を吐いた。

これですらまだ『序章』に過ぎない、と知る由もなく。

*

*

*

そして放課後、再び生徒会室にやってきた司波兄妹としんのすけの3人は、入口のインターホンに声を掛けて部屋の中へと入っていた。

3人を出迎えたのは、パソコンの前で何やら作業をしている真由美ら昼間の面々に加え、じつと窓の外を眺める1人の男子生徒だった。その人物は、入学初日に真由美が深雪と一緒に達也の所へやって来たときに、彼女の隣に付き従っていた男子生徒だった。

そして、達也は悟った。おそらくこの人物が、昼間に不在だったもう1人の生徒会メンバーである服部副会長なのだ。

「妹の深雪の生徒会入りと、自分と野原しんのすけの風紀委員入りの件で伺いました」

「……………」

達也の言葉に、服部は何も答えずにツカツカとこちらに歩み寄っていく。

そして達也の脇を通り過ぎると、その後ろにいる深雪へと話し掛けた。

「ようこそ、司波深雪さん。副会長の服部刑部ふせうべです」

その露骨な態度に、深雪は眉を僅かに寄せた。服部はそれに構うことなく、隣にいるしんのすけへと話し掛け——ようとして、彼の姿が見えなくなっていることに気づいた。

「ねえねえ摩利ちゃん、あそこのドアってどこに繋がってるの?」

「ああ、あれか。風紀委員本部はちようどこの部屋の真下でな、あのドアの向こうにある専用階段で互いの部屋が繋がってるんだ。変わった造りだろ?」

「おい、おまえ! 先輩に対してその口の利き方は何だ!」

顔を真っ赤にしてしんのすけに詰め寄る服部だが、自分が無視されたことよりも摩利に対する態度で怒ってる辺り、性格はかなり生真面目なようだ。

しんのすけにとってそんな彼の姿は、100年以上もの付き合いに

なる幼馴染を思い起こさせるものだった。主に「弄り甲斐のある人物」という意味で。

「んもう、そんなに怒っちゃ駄目だぞ、服部刑部少丞範蔵くん」

「ちよ……、フルネームは止める！　というか、なんで私のフルネームを知っている！」

「えっ？　摩利ちゃんが教えてくれたぞ」

「——渡辺先輩！　私の名前は服部刑部です！」

「それはおまえの家の官職名だろ？」

「今は官職なんてありません！」

「じゃあ、服部範蔵くん」

「歴史上の人物と一緒にされたくありません！」

摩利の言葉にいちいち大真面目に反論する彼は、おそろく普段からこうしてからかわれているのだろう。あれだけ大きな反応を見せてくれるのだから、そうなってしまいうのも自業自得、というのはさすがに言い過ぎだろうか。

と、その遣り取りを聞いていた真由美が苦笑しながら声を掛ける。

「まあまあ、摩利。はんぞーくんにもいろいろ譲れないことがあるんでしょ？」

「はん……まあ、はい」

「おつ、ハンゾーくん、真由美ちゃんには何も言わないの？」

「余計なことを——って、その呼び方だけは絶対に止める！」

ニヤニヤと笑うしんのすけに服部は一喝すると、摩利に詰め寄る勢いで声をあげた。

「渡辺先輩！　私はコイツの風紀委員入りに反対です！　こんな軟派な奴に、校内の風紀を取り締まるなんてできるはずが無い！　——ついでに言わせてもらおうと、その二科生ウイードの風紀委員入りにも反対です！」

——俺のことは、あくまで「ついで」なのか……。

あれだけ露骨な態度を取ってたはずなんだが、と達也が些かズレた感想を抱いていると、さすがの摩利も今の発言は許容できなかったのかスツと目つきを鋭くした。

「それは禁止用語だぞ、服部」

「今更取り繕っても、仕方のないことでしょう。過去に一度もウィードが風紀委員入りしていないのは、それだけブルームとウィードの差が明白だからです。実力で劣るウィードがブルームを取り締まるなど、不可能に決まっています」

「しかし、一科生のみで構成されている風紀委員が二科生も取り締まるのは、それぞれの溝を深める一因となっている。私が指揮する風紀委員には、差別の助長があってはならない」

「兄の実力不足を心配していらっしゃるのでしたら、それは必要ありません。実技の成績が芳しくないのは採点基準が兄と合っていないだけであり、実戦ならば誰にも負けることはありません」

摩利の言葉に付け加えるように深雪が力説するが、それを聞いた服部はフツと笑みを浮かべて深雪へと向き直る。

「深雪さん、僕達はいずれ魔法師になるんだ、いつも冷静を心掛けなさい。身崩肩に目を曇らせてはいけませんよ」

「な——！」

その瞬間、深雪が目の色を変えた。先程までは何があっても表面上は取り繕っていたが、今はそれすらもせず大きく目を見開いて憤りを露わにし、拳を握りしめて小さく震わせている。

そして彼女のすぐ傍にいる達也は、彼女の体内の魔力がにわかに活性化しているのを感じた。

——まずいな……。

深雪は主に感情が高ぶったときに、魔法を暴走させる癖がある。元々CADを使わずに高精度の魔法を行使することのできる彼女ではあるが、その体に宿す魔力が莫大すぎてそれを制御することが少し不得手なのである。実は魔力の制御が苦手な理由はもう一つあるのだが、ここではその説明を割愛させてもらおう。

とにかく、このままでは生徒会室で魔法の暴走が起こってしまう。

何とかそれを止めようと、達也が口を開き——

「だったら、試してみれば良いんじゃない?」

突然のその言葉に、この部屋にいた全員が声のした方へ顔を向け

た。

そこにいたのは、しんのすけだった。

「達也くんが強かったら、服部くんだって納得するでしょ？ だって実際に戦ってみて、強いかどうか確かめたら良いんじゃない？」

「ナイスアイデアよ、しんちゃん！ 採用！」

しんのすけの提案に即座に反応したのは、やはりというべきか真由美だった。一方しんのすけも、そんな彼女に対して「いやあ、それほどこでも」と照れたような反応を見せる。

「あの、ちよつと待って——」

「良いだろう！ 身の程知らずの二科生に、魔法師の厳しさを教えてやろうじゃないか！ その一科生も、軟弱者では風紀委員は務まらないことを示してやる！」

「分かりました。では生徒会権限により、模擬戦の実施を正式に許可します。時間はこれより30分後、双方共にCADの使用を許可します」

「おおっ！ 頑張つてね、達也くん！」

「しんちゃん、あなたも頑張るのよ」

「おおっ、そうだった。ちゃっかりしてたゾ」

「それを言うなら、うっかりだ」

達也本人の意見を完全に無視しながらトントン拍子で模擬戦の準備が整えられていくのを眺めながら、彼はいますぐここから逃げ出したい衝動に駆られた。

「お兄様……、私はお兄様を信じております」

とはいえ、全幅の信頼を携えた深雪の視線を向けられた彼に、既に退路など残されていなかったのだが。

第6話 「模擬戦でいざ勝負！ だゾ」

「校門前での乱闘未遂に、風紀委員入りを賭けた模擬戦か……。今年の新入生は、随分と面白い人達が集まっているみたいね」

艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そしてそれを囲む赤縁の眼鏡という出で立ちの少女が、学校内にある建物の屋上でクスリと漏らした笑みと共にそう呟いた。第一高校の制服を身に纏う彼女だが、その左胸と両肩にエンブレムが存在しないことから二科生であることが分かる。

そしてそんな彼女の右手首には、赤青白のリストバンドが巻かれていた。トリコロール

彼女は誰もいない屋上にて柵の傍まで歩み寄り、背中に背負っていた学生用鞆を足元に置いた。そして中から掌サイズの双眼鏡のような物を取り出すと、柵の向こうを覗き込みながら手元のメモリやボタンを何やら弄くり始める。

「よし、調節オツケー。ピントも完璧、集音にも問題無し。——とはいつても、あの部屋を包む結界魔法のせいで映像も音も碌に期待できないのよねえ。それでも『リーダー』の命令だから仕方ないんだけど」

少女はおどけたようにそう呟きながら、双眼鏡を左目にだけ当てた。右目をそのままにしているのは、観察に夢中になる余り周りの変化に気づかない、というのを防ぐためである。

普通の双眼鏡ならば、覗き込んだところで隣の建物の外壁しか見えない。しかし彼女の双眼鏡ならば、三次元解析も可能な超高性能サーモグラフィーによって、たとえ建物の中にいる人間だろうとその動きを細かく知ることができる。しかも壁の微妙な振動を解析することで、中にいる人物の会話も傍受できるといふ優れ物だ。

もちろん、魔法科高校とはいえ一介の高校生が所持するものではない。

「さてと、何か面白いものは見られるかなあ……っ？」

*

*

*

模擬戦の場として選ばれた第3演習室は、四方を壁に囲まれた広い部屋だった。見るからに分かる分厚いその壁には、見ただけでは分からない結界魔法で耐久性を補強されている。確かにここならば、ちよつとやそつとの魔法じゃビクともしないだろう。

試合の準備を着々と進める達也に、含みのある笑みを浮かべた摩利が近づいてきた。

「ところで、達也くんには勝算があるのか？ 服部は第一高校でも5本の指に入る実力者、試合に関しては入学以来1年間負け知らずだ」それを聞いて、達也は服部へと目を向けた。彼はこちらなど気にする様子も無く、左手首に装着しているCADの調整に余念がない。

すると達也も、持っていたスーツケースのような鞆を床に置き、その蓋を開けた。拳銃の形をしたCADが2丁、弾倉のような形をしたストレージが6つ収められている。

「いつも複数のストレージを持ち歩いているのか？」

「ええ、自分の能力ではそうしないと魔法の使い分けができないので」達也はそう言いながら、ストレージをCADに装着した。それが準備完了の合図だったかのように、模擬戦を行う2人以外の面々が壁際へと移動する。

「それではルールを説明する。相手を死に至らしめる、あるいは回復不能の怪我を負わせることは禁止。直接攻撃は、相手に捻挫以上の負傷を与えない範囲で行うこと。武器の使用は禁止、素手による攻撃は許可する。勝敗は相手が負けを認めるか、審判が続行不能と判断した場合に決する。——なお、ルール違反はアタシが力づくで止めるから覚悟しておけ。以上だ」

摩利がルールを説明している間、服部は試合運びをシミュレーションしていた。

魔法師同士の勝負では、先に魔法を当てた方が勝つ。そして一科生と二科生とでは、CADによる魔法発動速度において一科生に完全に分がある。

まず試合開始直後に、スピード重視の単純な起動式で相手より早く展開を完了させる。魔法は基礎単一系の移動魔法であり、これで相手を10メートル後ろへ吹き飛ばし、壁に激突した衝撃で意識を消失させる。たったこれだけで、服部の勝利は確定する。

——というのがセオリーだが、はたして達也くんはどう出るかな……。

摩利は頭の中でそんなことを考えながら、大きく息を吸い込んだ。

「——それじゃ、始め！」

摩利の合図と共に、服部は起動式の展開を——

「——！」

その瞬間、達也が一瞬の内に服部との距離を詰めた。一瞬驚きの表情を見せる服部だったが、すぐさま後ろに飛び退いて魔法の座標を修正、達也を捉えようと前を見据え——

「え——」

そこには、達也の姿が無かった。

そして次の瞬間、後ろから押されるような衝撃と共に、刃物で金属を擦るような甲高い音が頭の中に直接鳴り響き、強烈な吐き気に襲われて立つことすらままならなくなる。やがて耐えきれなくなった服部は床に倒れ伏し、そのまま意識を失ってしまった。

達也は服部の「後ろ」から、じつとそれを眺めていた。

「しよ、勝者！ 司波達也！」

ほとんど一瞬で起きた一連の出来事に、やがて我に返った摩利が、思い出したように模擬戦終了の宣言をした。

「おおっ！ 凄いゾ、達也くん！」

しかし拍手をしながら大きな声で称賛の言葉を掛けたのはしんのすけだけで、真由美ら他のギャラリーは啞然とした表情で床に倒れる服部を見つめるのみだった。ちなみに深雪はまるで恋する乙女か何かのようにうっとりとした表情で、愛しき兄の勇姿をその目に焼き付けていた。

「……達也くん、今の高速移動は魔法か？ 自己加速術式のように見えたが……」

「いいえ、魔法ではありません。そんなことをしたら、試合前にCADを発動させたことになってルール違反じゃないですか。あれは純粹な身体的技術です」

「純粹な……？　にわかには信じられん……。しかし古流魔法の1つの“忍術”は、確かそのような技術があると聞いたな……」

「じゃあ、あの攻撃魔法も忍術なの？　私の目には、“^{サイオン}想子”の波動そのものを放ったように見えただけど」

真由美の口から飛び出したサイオンというのは、今まで何回か出てきた“魔力”とほぼ同義のものだ。現代魔法はこのサイオンをCADに送り込み、あらかじめインストールしておいた“起動式”を出力し、それを使用者の肉体に吸収して自身の脳内に有する精神機構“魔法演算領域”へ送り込み、それを“魔法式”に変換することでようやく発動される。

そしてそんな真由美の質問に、達也は小さく頷いた。

「その通り、サイオンの波動です。振動の基礎単一系統で作ったサイオンの波動で、服部副会長を“酔わせた”んです」

「酔わせた？」

魔法師はサイオンによる光や音を、一般のそれと同じように知覚する。それは魔法師になるのに必須の技術なのだが、予期せぬサイオン波に晒された魔法師は、揺さぶられたように錯覚し船酔いに似た症状を引き起こすことがある。

「でも、私達は普段からサイオン波には慣れてるわ。そんな私達が倒れるほど強力なサイオン波なんて……」

そのとき、今まで無言だった鈴音がふいに口を開いた。

「波の合成、ですね？」

鈴音の見解はこうだ。振動数の異なるサイオン波を3連続で撃ち出し、その波がちょうど服部のいる位置で合成するように調整、三角波のような強い振動を生み出したというのである。

しかしそうになると、ここで1つの疑問が生まれる。あの短時間で3回の振動魔法を発動できるというのは、かなりの処理速度だ。それだけの技術を有しているとなると、試験での評価が低いのは納得がい

ない。

しかしそれは、思わぬところから解決の糸口が発見される。

「あ、あの！ 達也くんの持つてるCADって、シルバー・ホーンじゃありませんか！ しかも銃身が長い限定モデル！」

今にも達也に飛び掛かりそうな勢いで彼に駆け寄ってきたのは、大人しそうな小動物のような印象のあずさだった。彼女は鼻息を荒くしながら、達也の持つCADを目を輝かせて見つめている。

「あーっと、あずさ、その『シルバー・ホーン』っていうのはどういうものなんだ？」

「渡辺先輩、ご存じないのですか！ 『ループ・キャスト・システム』を完成させた、本名・姿・年齢がすべて非公開の奇跡のCADエンジニアであるトラス・シルバーが、『ループ・キャスト』向けに最適化したフルカスタマイズCADがこの『シルバー・ホーン』なんですよ！ あ、ちなみに『ループ・キャスト・システム』というのは、一度の展開で同じ魔法を何度も連続して発動できる起動式のことです——」

「あーちゃん、分かったからちよつと落ち着きなさい……」

「あのう、もっと近くで見せてもらえませんか！」

「いや、中条先輩、もうしまうんですけど……」

一気に騒がしくなった演習場内で、鈴音が一人考え込んでいた。

「ですが、それだとおかしいですね。そのシステムは『まったく同じ魔法を連続発動する』ためのもの。それでは波の合成に必要な『振動数の異なる複数の波動』は作れないはず。振動数を変数化しておけば可能ですが、座標・強度・魔法の持続時間に加えて4つも変数化しておくのは——」

そこまで言ったところで、鈴音はハツとして達也へ顔を向けた。

まさか、そのすべてをあの短時間で行っていたというのだろうか。

「……多数変化は、学校では評価されない項目ですからね」

どこか自嘲的な笑みを浮かべてそう言った達也に、誰も言葉を返すことができなかった。

確かに達也の言う通り、学校での魔法の評価項目は『魔法発動速度

“と『魔法式の規模』と『対象物の情報を書き換える強度』の3つだけである。達也の場合、幾つもの変数を処理する能力は優れているが、先の3つに関してはせいぜい凡人の域を出ない程度のものだ。”

深雪が生徒会室で服部に言った『採点基準が兄と合っていない』というの、このことだったのである。

「……ぐ、成程、そういうことか……」

と、そのとき、今まで気を失っていた服部が目を覚ました。まだ気分が悪いのか、その顔色は優れない。

「大丈夫、はんぞーくん？」

「だ、大丈夫です！ ご心配なく！」

思わず大声となってしまい顔を紅くした服部だったが、すぐに気を取り直すと深雪のもとへと歩み寄る。

「司波さん、目が曇っていたのは私の方でした。どうか、許してほしい」

「いいえ、私の方こそ生意気を申しました。お許しください」

2人が互いに頭を下げ、謝罪の言葉を口にした。

つまりそれは、達也が風紀委員入りを正式に認められたことを意味している。

そしてその間、先程からやけに口数の少ないしんのすけはというと、

「いやあ、みんなの言ってることがサッパリ分からないゾ……」

部屋の端っこで、真剣な表情で頭を抱えていた。

*

*

*

「さて、次はしんちゃん番なんだが……。服部、出られそうか？」

「……申し訳ありません、渡辺先輩。まだ体調が戻らず……」

申し訳ないというよりも悔しそうにそう言った服部だが、未だに顔色の優れない彼がそのような返事をするのは分かり切っていたことなので、摩利もそれを咎めるつもりは無かった。

だからなのか、彼女の決断も早かった。

「よし。しんちゃんの模擬戦は、アタシが相手をしよう」

「えっ——！」

それに対して驚きを露わにしたのは、深雪とあずさだった。達也も表面上は無表情であるが、内心ではそれなりに大きな驚きに襲われている。

「ちよつと摩利、いくら何でもハードル高すぎじゃない？」

「大丈夫だ、真由美。何もアタシに勝たなければ風紀委員入りを認めないわけじゃない。彼の実力が分かれば、それこそ最後までする必要は無いんだからな。——そうだろう、服部？」

「はい、もちろんです」

この模擬戦が行われる遠因でもある服部がそれを認めたことで、真由美もそれ以上は何も言わなかった。

しかしその遣り取りを眺めていたしんのすけが、何やら表情を曇らせる。

「ええっ、摩利ちゃんが相手？」

「どうした、しんちゃん。あまり乗り気じゃないようだな」

『女性を傷つける奴は最低の屑野郎だ』って、父ちゃんが言ってたゾ」
「……ふふふっ、随分と紳士的なお父上のようなだな。別に魔法師に性差などほとんど無いのだから、特に気にしなくて良いんだが……」

そんなことを言いながら、摩利は上機嫌に口元を緩ませていた。何だかんだ、〃女性〃として見てもらっていることが嬉しいのかもしれない。

「しかしアタシが相手では、しんちゃんもあまり乗り気でないようだ。服部はこの調子だし、誰か良い奴はいないだろうか……」

摩利はそう言いながら、チラチラと達也の方を見遣っていた。〃目は口程に物を言う〃とはいうが、ここまであからさまな態度では目も口もないだろう。

達也は最近癖になりつつある溜息を吐いて、1歩前に躍り出た。

「良いでしょう。俺が相手になります」

「さつき戦ったばかりでしょう？ 大丈夫？」

「体力も魔力もあまり消耗していませんので、特に問題はありません」

達也の回答に服部が若干悔しそうに奥歯を噛んでいたが、皆は敢えてそれに触れることなく、2人の試合を進める運びとなった。

先程の試合と同じようにデバイスの調子確かめる達也に対し、しんのすけは一足先に定位置に着き、退屈そうに大きなあくびをしていた。

「しんちゃん、CADの準備をしなくて良いの？」

「おっ？ ダイジヨブダイジヨブ、全然ヘーキだゾ」

両手をプラプラさせてそう答えるしんのすけに、達也は若干の意外感を覚えた。去年の中等部剣道大会の全国チャンピオンと聞いていたので、得物の1つくらいは使うと思っていたのだが。あるいは急な模擬戦だったせいで、用意が間に合わなかったのか。

やがて用意を終えた達也が、先程と同じスタート位置に立ってしんのすけを見据えた。

——さてと、しんのすけがどれほどの実力なのか、この目で確かめさせてもらおうか。

「ルールは先程と同じだから省略する。——2人共、準備は良いか？」

摩利の問い掛けに達也は黙って頷き、しんのすけは「ほっほーい」と手を振った。

そしてしんのすけはその手を胸の前に持ってくる、おもむろに制服の上着のボタンを外し始めた。突然の行動に、正面に立つ達也だけでなく、試合開始の合図を出そうとしていた摩利もその動きを止めて彼に注目する。

そうしてボタンが全部外されたことで、今まで上着で隠れていた部分が見えなくなった。その下に着ているシャツやネクタイ、そして彼の腰辺りにきつちりと巻き付かれたズボンのベルトが見て取れる。

と、達也の視線がそのベルトに向いた、その瞬間、

「——！」

驚愕の表情で目を見開き、ピクリと体を震わせて息を呑んだ。傍目にはごくごく小さな動きであり、しかもほとんどの視線がしんのすけに向いていたため、それに気づいたのは彼を常に(熱い視線で)見守っている深雪だけだった。

特にあずさなんて達也の方など見向きもせず、しんのすけのベルトを前のめりで見つめながら興奮気味に口を開いた。

「し、しんちゃん！ そのベルトのバックル部分、もしかしてCADですか！」

「おおっ！ さすがあずさちゃん、よく気づいたゾー！」

あずさの質問に釣られて、真由美や摩利も同じようにベルトを注視する。確かに彼のベルトのバックル部分は通常のそれとは違い、名刺入れほどの大きさをした金属の箱が取り付けられたような見た目になっている。

しかし通常のCADで見られるようなセンサーなどが露出していないため、見ただけでCADだと見破ることはなかなか難しい。達也のデバイスに対する先程の反応からも見るに、やはり彼女は相当なデバイスオタクと言えるだろう。

「ほう、かなり珍しいタイプだな。普通は携帯端末型とかブレスレット型、あるいは拳銃型が一般的なんだが……」

「摩利、そんなに興味があるのなら、実際に使うところを見せてもらいましょう」

真由美のその言葉は、言外に『さっさと試合開始の合図を出せ』とアピールするものだった。それを悟った摩利は、コホンと小さく咳払いをして気を取り直すと大きく息を吸って、

「――それでは、始め！」

摩利の合図と共に、達也は気を引き締めてしんのすけを見据えた。今回の試合は先程とは違ってしんのすけがどこまで戦えるのか見極めるものなので、先程のように開始直後に仕掛けるような真似はしない。

そうして達也だけでなく部屋にいるギャラリ―全員が見守る中、しんのすけは右腕をピンと伸ばして斜めに挙げ、左手は胸の前で固く握り締めるポーズを取った。まさしくそれは特撮ヒーローが決めのシーンでやるようなポーズだったのだが、残念ながらしんのすけ以外の面々は特撮物に疎いようで不思議そうに首を傾げるだけだった。

だがしんのすけはそれを気にする様子も無く、高らかにこう叫ん

だ。

「――『変身』!」

その瞬間、しんのすけの声に反応してベルトのCADが一瞬だけ青白い光を放ち、そしてすぐに消え去った。その光は魔法師にしか見えないサイオンのそれであるため、普通の人の目にはただ単に彼がポーズを取って叫んだようにしか見えなかっただろう。

音声認識で操作するというレア仕様にあずさが「ふおお」と興奮で変な声を出したものの、『変身』という単語に反して彼の見た目にはまったく変化が表れなかった。ギャラリー達はますます不思議そうに、しかし興味津々な顔つきで彼の動向を見守っている。明らかな警戒の色を浮かべているのは、正面で対峙している達也だけだった。

そして次の瞬間、そんな達也の眼前にしんのすけの姿が現れた。

「――!」

けっして油断していたわけではない、むしろ注意深く観察していたにも拘わらず、達也が気づいたときには、しんのすけは右腕を大きく振りかぶり、今まさに固く握りしめた拳を彼へと叩き付けようとしていた。

しかし達也は持ち前の反射神経と運動神経で後ろに跳び退いてそれを避けると、床に足を付けた途端に勢いよく前へと飛び出して反転攻勢に出た。審判の摩利が「ほう」と感嘆の声を漏らす中、達也は未だに拳を突き出した前傾姿勢のままにいるしんのすけの左頬へと殴り掛かる。

「おっと」と

しかし、しんのすけは言葉ほど焦った様子も無く、上半身を大きく仰け反らせてそれを避けた。無理な姿勢で体重を支えている下半身めがけて達也が足払いを繰り返すも、しんのすけはその場で最小限のジャンプをすることでそれも難なく避けた。

そこからはばらくは、達也の猛攻をしんのすけが避けまくる展開が続いた。しんのすけの体はまるでコンニャクか何かのようにグネグネと不規則な動きをしており、ギャラリーの女性陣はその不気味な動きに思わず表情を引き攣らせていた。しかし体術の訓練を受けてい

る達也ですらまったく読めないその動きのせいで、達也は有効打どころか掠らせることすらできないでいる。

一旦仕切り直すつもりで、達也が後ろに飛び退いてしんのすけとの距離を取る。

と、そのタイミングで、避け一辺倒だったしんのすけが突如床を蹴って前へと飛び出してきた。一瞬その姿を見失いそうになるほどの素早さで、せつかく達也が空けた距離を即座に詰めて懐へと潜り込んだ。

そうして繰り出してきたしんのすけの拳を、達也は両脇を締めた防御の構えで迎え撃つ。達也へと駆け寄る勢いに乗せたその一撃は通常よりも威力が上乘せされていると思われるが、最初の一撃を参考に防御可能だと判断した故の行動である。

「アクション——」

「——！」

と、突然しんのすけが口を開き、その瞬間、薄いベールのように青白い光が彼の体を一瞬だけ包み込み、そしてすぐに消えた。

嫌な予感が達也の脳裏を駆け巡ったが、既に手遅れだった。

「——パンチ——！」

ずどおんっ！ と、まるで爆発でも起こったかのような大きな音に、そしてそれと同時に達也の体が勢いよく後ろに吹っ飛んだことに、ギャラリィ達が肩を跳ね上げて驚愕の反応を見せた。

数メートルほど吹っ飛ばされた達也は、それでも空中で姿勢を崩すことなく両足でしっかりと着地した。しかしその表情は苦悶で歪み、攻撃を受け止めた両腕も鈍い痺れが走るせいで先程よりも力を込めることができない。最初の攻撃よりも明らかに増大しているその威力は、直前に発動した魔法が原因と見て間違いない。

だからこそ、達也は内心で舌打ちしたい衝動に駆られていた。

「アクション・キック——！」

しかし、達也のそんな心情を余所に、空中で右脚を突き出したしんのすけがミサイルのような勢いで迫ってくる。しかし先程のパンチに比べれば動きも大きく事前の情報もあるため、達也は落ち着いて、

しかし素早い動きで横に飛び退いて射線上から外れた。

そして入れ替わるようにしんのすけがその場所に着地した瞬間を狙って、達也はホルスターからCADを抜いてサイオン波を連続で3発撃ち出した。先程の服部戦でも見せた、振動数の異なるサイオン波の合成で彼を酔わせる作戦である。

しかし一瞬だけ達也に目を遣ってそれを感じ取ったしんのすけは、即座にその場を離脱して距離を取った。サイオンの合成波が空振りに終わったのを知るや、達也は即座に追撃を行うべく彼に向かって走り出そうと脚に力を込める。

「終了！ そこまで！」

しかしそれを止めたのは、審判役の摩利による一言だった。まさにこれから、というタイミングでの中断に、達也は無意識の内に不満の色を込めた視線を彼女へと向けた。

そして摩利は、彼のそんな視線に小さく笑みを漏らした。

「今の遣り取りで、彼が風紀委員として充分やっていけることは分かった。さつきも言っただろう、彼の実力が分かれば良いんだから、何も決着を付けるまでやる必要は無いんだ。——それに、彼もそれほど乗り気じゃないようだからな」

摩利の言葉に達也がしんのすけへと目を向けると、彼はすっかりいつものおちやらけた雰囲気に戻っており、ギャラリーの集う壁際へと歩いていく最中だった。

既に対戦相手が模擬戦の決着に執着していない状況で駄々をこねるのも恥ずかしいと思い、達也も小さな溜息と共に、手に構えていたCADをホルスターへと収めた。そして彼も同じようにギャラリーの下へと歩いていくと、若干早足で駆け寄る深雪が真っ先に彼を出迎えた。

「お疲れ様でした、お兄様。——あ、あの、両腕の具合は……」

「ああ、大した怪我じゃないさ。今日の夜にも自然に治っているだろう」

達也の返事にホッと胸を撫で下ろした深雪だが、その表情からは不安の色は消えていなかった。

「あの、お兄様……。模擬戦が始まる前、しんちゃんのCADをご覧になった途端、とても驚いた表情を浮かべたように見受けられましたか……」

「——ああ、あれか」

達也はそこで一旦言葉を区切ると、ギャラリーの方へと目を向けた。

皆がしんのすけに注目してアレコレ質問をしているのを確認すると、それでも達也は心持ち声を小さくして深雪の質問に答える。

「しんのすけが使っていたCADは……。俺の記憶違いでなければ、まさしく俺が特注で設計したものだ」

「——！」

深雪は驚きのあまり大声を出しそうになり、咄嗟に両手で口を塞いでそれを止めた。それでも大きく見開かれた彼女の両目が、その衝撃の大きさを物語っている。

周りをチラチラと見渡して、他の者が自分のリアクションに気づいていないことを確認すると、深雪はほんの僅かに達也へと身を乗り出して小声で尋ねた。

「……特注ということとは、お兄様が過去にしんちゃんから直接依頼を受けて作った、ということですか？」

「いや、違う。依頼したのは別の人間で、そのときにもしんのすけの名前は一切出なかった。依頼者は『トールラス・シルバー』を指名しただけで、俺とは一度も顔を合わせていない」

「成程、そうだったのですね……。しかしそう考えれば、先程の光景にも納得がいきます」

「うん？ どういうことだ？」

達也が首を傾げてそう尋ねると、深雪はほんの少しだけ胸を張ってその質問に答え始めた。

それはまるで、尊敬する教師に褒められたくて勉強の成果を披露する生徒のようだった。

「試合が始まってすぐにしんちゃんが『変身』と口にしてから、しんちゃんの動きが普段と比べて明らかに速くなりました。おそらくそ

の発言が、自己加速術式を発動させるトリガーだったと思われれます」
「ああ、その通りだ。しかしその魔法は、俺の予想よりかなり速度が上に設定されていた。並の術者ならばそのスピードに翻弄されてまともに動けないはずだが、しんのすけは見事に使いこなしているように見えた。おそらく、元々の運動神経や動体視力がとても優れているんだろう」

達也の言葉に、深雪も頷いた。自身の魔法による加速についていけず壁や障害物に激突するというのは、未熟な魔法師がやらかす失敗の中では割とポピュラーなものである。

しかし、注目すべきはそこではない。

しんのすけが達也に襲い掛かり、達也がそれに防御の構えを取った瞬間、しんのすけが何やら技の名前のようなものを叫んだ。直後に彼の攻撃力が格段に跳ね上がったのを見るに、おそらくそういう効果をもたらす魔法を発動させるためのものだったのだろうが、驚くべきはそれを発動させるまでの速さだ。

1つのCADで複数の魔法を同時に使うことが不可能な以上、別の魔法を使うためにはそれまで使っていた魔法を一度終了させる必要がある。元々あの瞬間に自己加速術式の魔法が終了する設定になっていたのなら話は別だが、達也の動きを見てから行動に移したところを見るにあの場で魔法を終了させたと思われる。

しかしその魔法の切り替えが、あまりにもスムーズだった。観戦していた深雪はもちろん、達也でさえ魔法が切り替わっていることに気づくのが遅れ、結果腕に鈍い痛みを残すこととなってしまったほどだ。

「もちろん、しんちゃんの魔法技術が優れていることもありますが、あれだけのスピードを実現させるにはCAD自体の性能が高くなければいけません。——しかしお兄様がお作りになったというのであれば、その性能の高さにも納得がいきます」

「……あのパフォーマンスは、ハード部分の性能によるところが大きいがいいけどな。俺が担当したのはあくまで、言葉1つであらかじめ登録した魔法を発動させるソフト部分だ。魔法式だってしんのすけ自身が、

あるいは別の人間が担当しただろうしな」

達也は苦笑いしながら、未だに騒がしいしんのすけ周辺へと視線を向けた。どうやらCADの性能の高さに気づいたのは2人だけではないようで、あずさが齧りつきそうな勢いでしんのすけのベルトへと迫っていた。かなり危ない光景だったためか、真由美と摩利の2人掛かりで取り押さえられている。

そんな喧騒を眺めながら、達也はスツと目を細めた。

考えるのは、そのCADを達也が作る原因ともなった依頼を持ってきた人物だ。色々と特殊な案件だったために、その人物の名は今でもよく憶えている。

「なぜライバル会社に特注でCADを作らせたのか不思議だったが、まさかしんのすけにプレゼントするためだったとはな。——酔乙女あい」

第7話 「新入生勧誘期間は大騒ぎだゾ その1」

昼休みに生徒会室に呼び出されて風紀委員入りを打診され、放課後に異議を唱えた先輩を相手に模擬戦を繰り広げるといふ、達也やしんのすけにとつてまさに「激動」と表現して差し支えない日から一夜が明けた。

この日から1週間、第一高校は春の風物詩である「新入部員勧誘期間」に突入する。

第一高校も一般的な普通科高校と同じように様々な部活やサークルが存在しており、新入生という新たな人材を確保するため勧誘に躍りになっている。それ自体は別におかしなことではないのだが、魔法科高校の場合は普通科の高校と少々事情が異なってくる。

主な原因は魔法科高校独自のクラブが存在することと、「九校戦」こと「全国魔法科高校親善魔法競技大会」だろう。簡単に言えば、全国に9つある魔法科高校が魔法を用いた競技で戦うというものなのだが、この結果が学校そのものの評価に繋がるのはもちろんのこと、活躍した生徒とクラブは学校から優遇されるのである。

そういうわけで、優秀な新入生の獲得は最重要課題であり、ゆえに各クラブ間でのトラブルが多発する。さらにこの期間中はデモンストレーションとしてCADの携帯が許可されていることも、トラブルを大きくする原因と言えるだろう。学校側も九校戦のことがあって多少のルール破りは黙認状態であり、まさに学内は無法地帯と呼んで差し支えない。

「うわあ、噂には聞いてたけど、ウチの学校って本当に凄いなあ……」

A組の教室の窓から外を見下ろしていたほのかが、恐怖を伴った感嘆と共にそんな言葉を漏らしていた。簡易テントを通路の両端にズラリと並べ、道行く新入生に片っ端から声を掛けたり、ド派手なパフォーマンスで人目を惹こうとしている上級生達の姿が見て取れ、さながらそこは何かのお祭りかと思紛うほどに盛り上がっている。

「ところで深雪は、クラブには入らないの？ 生徒会だけ？」

「そうね、他に手が回りそうにないもの。勧誘期間だけでも、追加予算の見積もりとか、壊れた備品の修理の手配とか、勧誘とかでの苦情の受付とか、やることが色々あるみたいで……」

「ああ、それじゃクラブを見る余裕なんて無いなあ……」

同情するようなほのかの言葉に、深雪はフルフルと小さく首を横に振った。

「私なんて別に大したことないわ。本当に大変なのは、風紀委員のお兄様やしんちゃんだもの」

「そっか。何かあったとき、生徒達を取り締まるのが風紀委員の役目だもんね」

納得したように手を叩くほのかに、深雪が首肯した。

ある程度黙認されているとはいえ、魔法を使った暴力行為など、さすがに度を過ぎて騒ぎが大きくなった場合は風紀委員が介入する。それだけではなく、生徒を逮捕して懲罰委員会に掛ける必要が生じたときは風紀委員自身の発言も立派な証言となるなど、かなり大きな責任を伴う役目を担っている。

勧誘期間は、今日から1週間。つまりその間、風紀委員は校内中を駆けずり回ることになるに違いない。

そして今日はそんな1週間の大事な初日であり、風紀委員の本部で上級生達との顔合わせや簡単なミーティングが行われるのだが、

「……どう、雫？ しんちゃん、起きそう？」

「全然ダメ、ビクともしない」

先程から自分の机に突っ伏して惰眠を貪っているしんのすけを起こそうとアレコレ試していた雫が、ほのかの問い掛けにそう返事をした。普段はほとんど無表情で感情の起伏も分かりにくい彼女だが、今の彼女は肩を上下させるほどに息を荒らげて疲れ切った表情を見せている。

いつでもどこでもマイペースを貫くしんのすけの姿に、深雪もほのかも自然と苦笑いを浮かべていた。このままでは彼が遅刻するだけでなく、上級生達にも迷惑を掛けてしまうだろう。

なので2人も雫に加勢すべく、自分の席から立ち上がり――

「やっぱり、まだ教室を出てなかったか」

「お兄様！」

教室のドアから達也の呆れ顔が飛び出したその瞬間、深雪は即座にしんのすけから愛しの兄へと進路を変え、満面の笑みで彼へと駆け寄っていった。

そんな目立つ行動をするものだから、教室に残っているクラスメイト（ほのか・雫除く）が一斉に不快感を顕わにした視線を向けてきた。散々見下している二科生が自分達の領域に侵入してきたから、というのもあるが、単純に深雪の好意を一身に受けている達也へのやつかみというのが最も大きい。

「何となく嫌な予感がしたんでな、立ち寄らせてもらった。——ほら行くぞ、しんのすけ」

達也が未だに俯せになって眠りこけているしんのすけの肩を掴み、大きく数回揺らした。するとしんのすけはおもむろに上体を起こし、大きくアクビをしながら両腕を挙げて背中を伸ばす。パキパキ、と小気味良い音が聞こえた。

そしてしんのすけは辺りを見渡し、呆れ果てた表情をこちらに向ける達也と目が合うと、

「おおっ。達也くん、おはよー」

「もう放課後だけだな。ほら行くぞ、ミーティングだ」

「ほっほーい」

達也に腕を引っ張られるようにしてしんのすけが立ち上がり、2人はそのまま教室を出ていった。「頑張ってください！」という深雪やほのかの激励を背中に受けながら、2人は風紀委員本部へ向かって廊下を歩いて行く。

と、その道中、達也がふと口を開いた。

「そういえばしんのすけ、見回りをするときエリカも一緒に連れてって良いか？ 美月もレオもどのクラブに入るか決めたいみたいだな、1人で見学するのが寂しいんだそうだな」

「エリカちゃんが？ 別に大丈夫だよ」

「よし。それじゃ30分後に教室前で待ち合わせだそうだから、早い

ところ本部でのミーティングを片づけることにしよう。時間に遅れでもしたら、エリカに何を言われるか分からないからな」

達也はそう言つて、本部へ向かう足を心持ち速くした。

呑気な表情で「ほーい」と返事をしたしんのすけが、その後が続く。

*

*

*

風紀委員の本部へと辿り着いた2人は、学生証であるICカードを入口脇のパネルに当てた。2人の情報は既に登録されており、ガチャンとロックが解除される音を確認した達也がドアを開け、2人は部屋の中へと足を踏み入れた。

どうやら自分達は最後に来たようで、部屋には既に何人もの生徒が待っていた。ドアが開く音に合わせて、全員がこちらへと注目する。すると、その中に一際大きな反応を見せる者がいた。

「な——！・野原しんのすけ、なんでおまえがここにいる！」

それは入学2日目でしんのすけに散々酷い目に遭わされた、1年A組の一科生・森崎俊だった。

「おっ？・そういう森園くんこそ、なんでここにいるの？」

「僕の名前は森崎だ！ 僕は教職員推薦枠で、今日からこの風紀委員に配属が決まったんだ！——つて、隣にいるのはウィードの司波達也じゃないか！ まさかおまえも風紀委員になったなんて悪い冗談を言うつもりじゃないだろうな！」

「残念ながらその通りだ。とりあえず早いところ席に着け。他の先輩がいるのに騒ぐのは、さすがに非常識だぞ」

「非常識なのはおまえの方だ、司波！ 風紀委員がどういう仕事か、どうやら分かっているようだな——」

「やかましいぞ、新入り！」

突然背後から怒号が聞こえてきたと思つたら頭に思いっきり拳骨を叩き込まれた森崎は、呻き声をあげながら両手で頭を抱えてその場に蹲ってしまった。

そんな彼を、拳骨を叩き込んだ張本人である摩利が眉尻を吊り上げ

て見下ろしていた。

「……だから『早いところ席に着け』と言ったのに」

「母ちゃんに勝るとも劣らない拳骨……。うーん、さすが摩利ちゃんだゾ」

そんな2人の遣り取りを見ていた達也としんのすけが、無意識にそんな言葉を零していた。

「おはようございますー!」

「おはようございます、姐さん!」

そして次の瞬間、席に着いていた先輩達が一斉に立ち上がり、風紀委員長である摩利に対して深々と頭を下げた。まるで軍隊のような統率ぶりに、達也は内心、森崎はあからさまに面食らっている。ちなみにしんのすけは、素直に感心している様子だった。

「鋼太郎、姐さんは止めろ! —— 森崎、おまえが例の騒ぎを起こしておきながら風紀委員入りを取り消されていないのは、あくまでその件に対しておまえが充分反省しているという前提があつてのことだ。もしも反省が見られないようならば今からでも取り消すことはできる、ということをお肝に銘じておけ」

「……はい、了解です」

森崎の返事に、摩利は全員を席に着かせると一番奥の席に移動した。

そしてバンツ! と机に両手を叩きつけて、話を切り出した。

「さて、今年もあの馬鹿騒ぎの一週間が始まった。——クラブ活動の新入部員勧誘期間だ。いや、〃新入生獲得合戦〃というべきかな?

この無法地帯を鎮められるのは、我々風紀委員だけだ! 今日から一週間フル稼働してもらおう! 幸い今年は、新人の補充も間に合ったかな」

摩利はそう言うと、達也たち3人をちらりと見た。

自分達を紹介するのだと読み取った達也と森崎が素早い動きで立ち上がり、キョトンとしていたしんのすけは隣の達也に引っ張り上げられていた。

「I—Aの野原しんのすけ、I—Aの森崎俊、——そしてI—Eの司波

達也だ」

案の定、達也が紹介されたところで部屋の中がざわついた。「二科生が取り締まるのか?」といった声が、あちらこちらから聞こえてくる。

「委員長、この二科生は戦力になるんですか?」

「腕前は確認済みだ。——私の目が不安だというなら、自分で確かめてみるか?」

「い、いえ、結構です……」

摩利の睨みが効いたのか、口を挟んできたその生徒はさすがと引き下がった。

「他に質問は無いか? ——無いなら、ただちに出勤!」

その言葉と共に、部屋にいた先輩の風紀委員が一斉に立ち上がり、そのまま駆け抜けるように部屋を出ていった。

「司波、森崎、野原。おまえ達には、これを渡しておく」

摩利がそう言って差し出したのは、掌サイズのビデオレコーダーと「風紀委員」の文字が書かれた腕章だった。

「巡回のときには、常にその腕章を身につけておけ。レコーダーは胸ポケットにしまい、何か起こったらすぐにスイッチを入れる。また風紀委員は常にCADを携帯する許可が与えられているが、不正使用は厳罰対象だから注意するように」

「質問があります」

摩利の説明が終わるタイミングを見計らって、達也が手を挙げた。

摩利の「許可する」という返事を待ってから、部屋にある机の上は無造作に置かれているCADを指差す。

「CADは委員会の備品を使用しても良いのでしょうか?」

「構わないが、理由は?」

「あれは旧式ですが、エキスパート仕様の高級品ですよ」

達也の言葉に、摩利は「そうなのか!」と驚きの声をあげた。昨日の模擬戦でもあずさにCADについて尋ねたりしていることから、どうやら摩利はその手の知識には疎いようである。

摩利からの許可も得たことで、達也は幾つもあるCADの中から2

機選び、それぞれの手首に装着した。

「それでは、こちらをお借りします」

「2機だと……？　ふふ、本当に面白いな、君は……」

「しんのすけはどうする？　借りてくか？」

「ええっ？　オラは別にいいや」

不敵な笑みを浮かべて感心する摩利の後ろで、森崎が不機嫌そうに顔を歪めていた。

「おい、どうやらおまえはハツタリが得意なようだな」

摩利と別れ廊下を歩いているとき、ふいに森崎が達也に話し掛けてきた。

「2機も装着して注目を集めようとしてるんだろが、両手にCADを装着してもサイオン波が干渉して使えなくなるのがオチだぞ？」

「……アドバイスしているのか？　余裕だな」

「うるさい！　一昨日は不意を突かれてしまったが、今度はもう油断しない。おまえ達に格の違いってやつを見せてやる」

森崎はそう言うのと、達也たちに背を向けてズンズンと足早に歩いていく。

「あれっ？　森島くんは一緒に行かないのー？」

「僕は森崎だ！　僕はおまえ達と違って優秀だからな、1人でも充分だー！」

森崎はそう言い残して、廊下の角を曲がって姿を消した。

「んじや、オラ達も行きますか」

「その前に、エリカと合流しないと。——しまった、10分ほど遅れている。急ぐぞ」

「んもう。駄目だなあ、達也くんは」

「おまえが居眠りせずに早く本部に行けば、結果は違っていたかもな」
いくら急ぐといっても、さすがに緊急でもないのに廊下を走ることは許されない。2人は早歩きで1—Eの教室まで行くと、入口から中を覗き込んだ。

しかし中にいたのはダラダラとお喋りに興じている生徒が数人だけで、あの人目を惹く鮮やかな赤みがかつた髪は見当たらない。

「おっ？ エリカちゃん、いないみたいだゾ？」

「待ちくたびれて、先に行ってしまったのかもしれないな。——仕方ない、巡回ついでに探しに行くか」

達也の言葉にしんのすけも頷き、2人はそのまま外へと出た。

校舎の外は、まさに熱狂の渦が巻き起こっていた。

それぞれのクラブが指定された場所にテントを建て、そこでCADを使ったデモンストレーションを行ったり、体験コーナーを設けていたりしていた。呼び込みの声もあちこちで入り乱れており、勧誘も相手の腕を引つ張ったりとかなり強引に行われている。特に一科生ともなると、やはり成績が優秀ということもあって様々なクラブから文字通り引つ張りだことなっていた。

「いやあ、盛り上がっていますなあ」

腕を組んで感心したように頷くしんのすけの横で、達也が視界の端に人目を惹く鮮やかな赤みがかつた髪がちらついたのに気がついた。

「彼女に先に声を掛けたのは、我々テニス部だぞ！」

「いい加減に手を離しなさい！ 私達バレー部が先よ！」

「あ、あの、もう離して……」

そこに目を遣ると、様々なコスチュームに身を包んだ複数の生徒が、エリカを取り囲んで言い争いをしていた。会話の内容からして、見目麗しい彼女に目を付けた上級生が自分達のクラブに勧誘しようとして一斉に集まってきたのだろう。力任せに色んな方向から腕を引つ張られ、さすがのエリカも少々参っているようだ。

「しんのすけ、エリカが見つかった。あの人混みの中心にいる」

「おおっ！ エリカちゃん、モテモテですなあ」

「まあ、あの見た目だからな」

一科生ならともかく、二科生ならば本来そこまでの争奪戦にはなりづらい。しかし彼女は深雪とは違うタイプでの“かなりの美少女”であり、おそらく部のマスコミ的な役割を彼女にやらせたい魂胆なのだろう。

と、2人がそんな風に観察していると、

「あの、他に行く所があるので——ちよ、どこ触つて、きやつ！」

「まずい、ヒートアップしてきたな。——しんのすけ、止めるぞ」

「ほっほーい」

達也がエリカに向かって走り出した一瞬後、気の抜けた返事で答えたしんのすけが彼の後に続いた。それでも達也のスピードに余裕でついて来られる辺り、やはり彼の身体能力は相当なレベルだと言えるだろう。

チラリと後ろを見遣つて改めてそれを感じた達也は、ある程度集団に近づいたところで急ブレーキを掛けてその場に踏み留まった。そのすぐ横をしんのすけが追い抜いていくのを見送つて、彼は自身の手首に装着しているブレスレット型のCADに手を遣る。

達也の足元に、青白い光で魔法式が展開される。

——何も攻撃する必要は無いんだ。人垣を崩すだけで良い……！

達也はエリカが囲まれている人垣を見据えながら、ほんの少しだけ右脚を上げた。

「しんのすけ、跳べ！」

「ほいっ！」

その呼び掛けに即座に反応したしんのすけが走り幅跳びの要領で跳び上がるのを確認すると、達也が上げていた足を地面に叩きつけた。魔法式によって増幅されたその衝撃が地面を走り、エリカを取り囲む生徒の足をふらつかせ、そして倒れ込んだ。

当然エリカもその揺れによってバランスを崩し、そのまま地面に倒れ——

「よっ！ エリカちゃん！」

「しんちゃん！」

突然現れたしんのすけがエリカの手首を掴み、彼女だけは地面に倒れずに済んだ。そして彼にそのまま体を引っ張られて一瞬焦りの表情を浮かべる彼女だったが、すぐさま意図を理解したのかすぐに自分の足で駆けて彼の後に続く。当然それを止めようとする生徒達だったが、2人の殿しんがりを務める達也が牽制することで防がれた。

やがて3人は人通りの無い建物裏まで逃げ込み、そこでようやく足を止めた。肩を上下させて呼吸を乱すエリカに対し、達也としんのすけは何とも余裕の表情で平然としている。

「いやあ、2人共ありがとう。助かったわ」

「構わないさ。ああいうトラブルを解決するのが、俺達風紀委員の仕事だ」

「へえ……。おお、風紀委員の腕章だ、似合ってるじゃないの」

「いやー、それほどでもー」

照れたようにニヤニヤとだらしない笑みを浮かべるしんのすけの反応に、つい先程まで辟易していたエリカに笑顔が戻った。

「それにしても、2人がもう少し早く来れば、あんなことにはならなかったのになあ」

「それは悪かったな、エリカ」

「あれ、謝っちゃうんだ？」

「遅れたのは事実だからな。まあ、勝手に待ち合わせ場所からいなくなるのは、また別問題だが」

「うぐっ！……達也くんってさ、性格悪いって言われたい？」

「特に言われたことは無いな。人が悪いって言われたことはあるが」

「同じじゃん！ てか、もつと悪いよ！」

「おおつ、ナイスツツコミ。エリカちゃん、師匠みたいにお笑い芸人目指せるんじゃない？」

「目指すつもりは無いわよー！」

本人は否定しているが、まさにしんのすけの期待通りにツツコミを入れるエリカに、達也は思わずフツと笑みを漏らした。

そんな彼に目敏く気づいたエリカがギロリと睨みつけてきたので、彼はコホンと咳払いして気を取り直す。

「まあ、お詫びと言っては何だが、エリカの好きな所に行くとするか」「え、良いの？ そうだなあ……」

エリカは少しの間何かを考える素振りを見せ、そしてしんのすけの方をチラリと一瞥してから、恋に不慣れな男子生徒辺りなら見惚れてもおかしくない素敵な笑顔でこう言った。

「せっかくだから、
“闘技場”を見ていききたいかな！」

第8話 「新入生勧誘期間は大騒ぎだゾ その2」

屋内で活動するクラブがデモンストレーションを行う場合は、限りあるスペースを平等に使えるように、一定時間ごとに使用できるクラブを変えるというスタイルを取っている。

第2小体育館——通称「闘技場」もそれは変わらず、エリカ達がやってきたときはちょうど剣道部の順番だった。お馴染みの防具をつけて向かい合いながら竹刀を振り下ろすその光景は、何百年経っても変わることの無い、まさに「伝統」と呼ぶにふさわしいものだった。

「ふーん、魔法科高校なのに剣道部があるのね」

「剣道部って、どこの学校にもあるんじゃないのか？」

「魔法に携わる人は、ほとんど「剣術」に流れちゃうの。「剣術」は魔法を併用した剣技だからね。——つと、そういうばここに剣道のチャンピオンがいるじゃない！」

そう言っつてしんのすけへと向き直るエリカに、当の彼は「おっ？」と首を傾げた。

そして達也はエリカのそんな仕草に、どことなく芝居臭さのようなものを感じていた。

「しんちゃんって、どうして中学になっても剣道が続けてたの？ 小学校くらいまでなら剣技の基本を身に付けるために剣道をやる子は多いけど、将来魔法師になろうって子は中学になると大抵剣術に転向するものなんだけど」

確かに、それは傍で聞いていた達也も気になるところだ。二科生レベルならば剣道が続けていても違和感はないが、一科生、しかも実技の成績がトップクラスのしんのすけが、魔法を使わない純粋な剣技を競う剣道が続けるのはかなり珍しい。あるいは中学時代は、魔法の腕はそれほどでもなかったのだろうか。

そんなことを考えながらしんのすけの答えを待っていると、彼はキョトンとしたような表情で口を開いた。

「オラ、別に剣道が続けてたわけじゃないゾ？」

「——えっ？ そうなの？」

「うん。5歳のときにちよつとだけやったことあるけど、すぐに辞めちゃって。そしたら中学2年の秋くらいに“よよぎくん”から電話があつて、中学最後の大会でオラと戦いたいから剣道をまたやってくれって頼まれたからもう1回始めたの」

「よよぎくん？ ……つて、まさかそれつて、代々木コージロー!? 嘘つ、2人つて知り合いだったの！」

5歳のとき（具体的に西暦何年のことか疑問が残るが）を除けば実質1年ほどで全国制覇を成し遂げたことに達也は驚きを隠せず目を丸くしていたが、彼よりも既知の情報が多いエリカはむしろその話の中で出てきた人物の方にひどく反応していた。

「エリカ、その“代々木コージロー”つていうのは、そんなに有名な選手だったのか？」

「有名も何も、昨年の中等部剣道大会でしんちゃんに負けて準優勝だった選手よ！ この選手がとにかく強くて、しんちゃんがいなかったら彼が中等部剣道大会で3連覇だったんだから！」

かなり熱の籠もった様子で捲し立てるエリカに、達也だけでなくしんのすけですら圧倒されていた。やはり自身が剣術をやっているせいか、それ関連になると熱くなってしまうのかもしれない。

とはいえここは闘技場であり、そして現在は新入生勧誘のためのデモンストレーションの真つ最中だ。けつして少なくとも視線を集めていることに気づいたエリカが途端に声のボリュームを抑え、3人は逃げるようにして入口の2階席から1階の広いフロアへと下りていった。

部活動を行っているのは中央のスペースであり、見学者は邪魔にならないよう壁際でそれを眺めている。

達也たち3人も、彼らと同じように壁際へ行こうと——

「きやあつー！」

したそのとき、女子生徒の悲鳴と共に、剣道の防具をつけた1人の男子生徒が思いつきり吹っ飛んで尻餅をついた。単なる練習にしては穏やかではない雰囲気、達也とエリカの顔つきも自然と真剣なも

のとなる。

「おいおい、防具の上から面を打っただけだろ？ 仮にも剣道部のレギュラーが泡吹いてんじゃねえよ」

おそらく彼を吹っ飛ばした張本人であろう短い髪を立てた男子生徒が、にやにやと嫌味な笑みを浮かべてわざと周りに聞こえるようにそう言った。そんな彼の後ろには、おそらく彼の仲間であろう数人の男子生徒が同じような笑みを浮かべている。

「何をしてるの、桐原くん！ 剣術部の時間まで、まだ1時間以上はあ
るわよ！ どうして待てないの！」

そのとき1人の女子生徒が、吹っ飛ばされた男子生徒を庇うように飛び出した。長い黒髪を後ろで縛った凛々しい顔つきの彼女は、防具を身につけていない剣道着の姿だった。

「心外だな、壬生。俺はただ、演舞に協力してやっただけだぜ？」

闘技場の空気がピリピリと張り詰めていき、見学者達は興味半分恐怖半分といった感じでその様子を見守っている。

そんな中、人垣を掻き分けて最前列でそれを眺めようとする女子生徒がいた。

「ごめん達也くん、しんちゃん。ちょっと面白くなってきた！」

エリカだった。彼女に引つ張られる達也としんのすけは迷惑そうな顔をしていたが、風紀委員としてトラブルになりそうな場面を見過ごすわけにもいかないので、されるがままとなっている。

「こりや、なかなかの好カードね」

「2人を知ってるのか、エリカ？」

「面識は無いけどね。——あの女の子は、壬生紗耶香。一昨年の中等部剣道大会の全国2位。あっちの男の子が、桐原武明。一昨年の関東剣術大会のチャンピオン」

「随分と詳しいな、エリカ」

「そう？ ちょっと剣道とかに興味ある人だったら、普通に知ってる人達よ？ しんちゃんだって2人のことは知ってるでしょ？」

「えっ？ いや、知らないゾ」

「……まあ、しんちゃんはそういう性格よね」

エリカが何とも言い難い表情でそう独りごちている間にも状況は進行しており、桐原が竹刀を上段に構えて壬生に相對した。

「心配するなよ、壬生。魔法は使わないでいてやるからよ」

「剣技だけで、あたしに敵うと思ってるの？」

「言うねえ、壬生。だが、その強がりがいままで続くか——な！」

その瞬間、桐原は紗耶香との距離を一気に詰め、怒濤の攻撃を彼女に浴びせた。しかし紗耶香は見事な竹刀捌きで、力の差があるであろう桐原の攻撃をいなしていた。

バシバシと闘技場に響き渡る竹刀を打ち合う音に、ギャラリィは息を呑んで見守っていた。

「ほう、女子の剣道って、かなりレベルが高いんだな」

「違う、中学時代に見た彼女とはまるで別人。この2年で、あんなにレベルを上げるなんて……」

エリカは困惑の言葉を口に出しているものの、目の前の強者を前にも跳び掛かりそんな好戦的な目をしていた。

達也はそれを見て、武道を嗜む者は強者と戦いたい欲求が根底にあるのだろうか、と考えた。先程の会話に出てきた代々木という選手も、自身の3連覇が掛かっている状況でしんのすけとの対決を望んでいたようであるし。

「ねえねえ達也くん、どっちが勝つと思う？」

「壬生先輩が有利だろう。桐原先輩は防具無しの手相に面を打つのを躊躇っている。初手の上段は、おそらくブラフだろう」

「そうね。技を制限して勝てるほど、2人の実力差は無いみたいだし」
エリカと達也がそう話している間にも、桐原の顔はどんどん険しくなっていく。対する紗耶香は、未だに平然とした表情でしつかりと桐原を見据えている。

やがて痺れを切らしたのか、桐原が大振りに竹刀を振り上げ、紗耶香へと全速力で迫っていった。しかし彼女は、それでも表情を崩さずに彼を迎え撃つ。

一際大きな音が響き渡り、2人の動きが同時に止まった。

紗耶香の竹刀は、完全に桐原の右肩を捉えていた。対する桐原の竹

刀も彼女の腕に触れていたが、その角度は浅い。

「壬生先輩の勝ちね」

「ああ。完全に相打ちのタイミングだったが、桐原先輩は途中で剣先を変えた。やはり最初から面を打つ気は無かったようだ。非情になりきれなかったのが敗因だな」

二科生の多い剣道部が、一科生の多い剣術部に勝った。この事實は、周りでこの試合を見ていた一科生を不機嫌にさせるのには充分だった。

「桐原くん、素直に負けを認めなさい。真剣だったら、その右腕はもう使い物にならないわよ」

「……はは、真剣なら」だど？」

それまで俯いていた桐原が、紗耶香の言葉を皮切りに不気味な声で笑い出した。

「俺の体は斬れてないぜえ？　なんだ壬生、真剣勝負がお望みかあ……」

だったら、と桐原は小手の形をしたCADに触れると、起動式を展開した。

その瞬間、魔法特有のサイオンの光が彼の持つ竹刀を覆い、それと同時にガラスを引っ掻いたような甲高い音が辺りに鳴り響いた。あまりの不快感に、ギャラリー達は一斉に耳を塞いで蹲ってしまふ。

「だったらお望み通り、真剣で勝負してやるよ！」

そう叫んで迫ってくる桐原を、紗耶香は先程と同じように竹刀を構えて迎え撃とうとした。しかし直前で何かを察したのか、大きく後ろへ跳んで彼の竹刀を回避した。

と、思ったのだが、

「――！」

着地した瞬間、彼女の着ていた胴衣が胸の辺りで横一文字に切れ、はらりと下に垂れた。あと少し回避するのが遅れていたら、と思い彼女の顔が青くなる。

――竹刀なのにあの切れ味、そしてこの音……。振動系・接近戦闘用魔法の「高周波ブレード」か！

達也が桐原の使う魔法を見極めている間にも、彼は不敵な笑みを浮かべて紗耶香へと迫る。

「どうだ、壬生。これが『真剣』だ。そしてこれが、剣道と剣術の差だ！」

桐原の言う通り、もはや真剣と変わらないその竹刀を彼は大振りに振り上げ、今まさに紗耶香へ振り下ろそうとしていた。闘技場の緊張感が一気に高まり、女子生徒が思わず悲鳴をあげる。

しかし次の瞬間、紗耶香を背中に庇うようにして桐原の前に躍り出る1人の男子生徒がいた。

「な——！」

桐原が怯んでいる隙に、その男子生徒——しんのすけは、いつの間にかその手に持つ竹刀を桐原のそれに小刻みに何回も叩きつけた。ダダダダ、と細かい音が連続して1つの音に聞こえるほどに密度の濃い連続攻撃に、桐原の竹刀を持つ手が崩され、その結果彼の竹刀は大きく上空へと吹っ飛ばされた。

何が起こったのか咄嗟には理解できず、桐原はしばらく呆然と何も持っていない自分の手を見つめていた。そして魔法の支配下から逃れて切れ味を失った彼の竹刀が、彼のすぐ後ろで大きな音をたてて床に落ちた。

その音で桐原はハッと我に返り、そこで初めて目の前にいるしんのすけの存在に気づいたように彼へと視線を向けた。

「今の、まさか……」

しんのすけの背後で佇む紗耶香の眩きが消えることなく広がるくらいに、今の闘技場は静寂に包まれていた。いつの間にか桐原の竹刀が弾き飛ばされていく光景に、ギャラリ―達はただただ啞然とするしかなかった。

「……まさか今の、『刃崩し』?」

「刃崩し? 今のはそういう技なのか?」

そんな中、いち早く混乱から復活したエリカの眩きに、彼女のすぐ隣にいた達也が反応した。ちなみに彼も紗耶香を守ろうと飛び出そうとしていたのだが、1歩早くしんのすけが飛び出したためその場に

踏み留まった、という経緯がある。

「ええ。さつきも言った代々木コージローって選手がよく使っていた技で、上下左右小刻みに素早く相手の竹刀を叩きつけて、その衝撃で相手の手をむりやり崩して竹刀を弾き飛ばすの。かなりの手首の力がないとできない技なんだけど……、まさかしんちゃんもそれを使えたなんて……」

エリカが呆気に取られるのも無理はない、と達也は思った。剣道の試合で相手の竹刀を意図的に弾き飛ばすなんて芸当は普通できないし、ましてやそれを一切魔法を使わずに成し遂げるなんてまず有り得ない。しかもそんな技が中学生の大会で使われたというのだから驚きの一言に尽きる。もつとも、代々木は小学生になるよりも前に既に体得していたのだが。

と、達也がそんなことを頭の中で巡らせている間に、しんのすけは自分の持つ竹刀を近くの剣道部員に差し出していた。どうやら彼が使ったその竹刀は、その生徒から借りた物のようだ。

そして竹刀が元の持ち主に戻ったタイミングで、しんのすけが困ったような顔を達也に向けた。

「ねえ達也くん、あの人、どうしよっか?」

「ん? ああ、そうだな……。——桐原先輩、魔法の不正使用により同行を願います」

達也が桐原へそう呼び掛けると、彼は未だに先程の光景が信じられないのか、呆然とした表情で「お、おう……」と言葉少なくて承の返事をした。

むしろ彼の後ろにいた剣道部員の生徒達の方が、達也に対する反応が大きかった。

「あの腕章、もしかして風紀委員か!」

「いや、それよりもあいつのエンブレムを見てみるよ! まさか……二科生の風紀委員だど!」

「なんで桐原だけ同行なんだよ! 剣道部の壬生だつて同罪だろ!」

部員の1人の言葉に、達也は桐原へと向けていたその顔を彼らへ移し、

『魔法の不正使用により』……と、申し上げましたが」

「……何だあ、その言い方は！」

結果的に彼らの神経を逆撫でしてしまった達也の返事に、「悪気は無いんだろうけどなあ……」とエリカが呆れたように呟いた。

「ふざけんじゃねえぞ、補欠の分際で！」

すると周りにいた剣術部の部員達が、一齐に達也へと襲い掛かってきた。実際に桐原の邪魔をしたのはしんのすけなのだが、誰一人として彼に挑もうとはせず、怒号にも似た叫び声をあげながら二科生である達也に向かっていく。

その数は、10人といったところか。

「危ない、たつ——」

さすがの達也も10人相手では分が悪いと思い、エリカが助太刀に駆けつけようとするが、結果から言えばその必要はまったく無かった。

いくら武道を嗜んでいるとはいえ、あくまでそれは剣と魔法を用いたものであり、徒手格闘は彼らの専門ではない。しかも逆上しているせいもあって動きが雑であり、力任せに腕を大きく振り下ろすだけの単純なものだ。

よって達也は彼らの動きをよく読み、まるで闘牛士のようにヒラリと彼らの拳を避け続けた。軽やかなステップで距離を取り、クルリと体を回転させて相手との位置取りを変化させ、逆に不意に相手との距離を詰めることで怯ませる。

そんな彼の姿に剣術部員はますます頭に血を上らせ、形振り構わず達也に突っ込んでいった。そしてそれを達也に避けられ、それでも勢いが止まらない彼らは、互いに体を衝突させてその場に崩れ落ちていく。

そして気がついたときには、10人ほどいた剣術部員全員が、床に倒れ伏したまま息も絶え絶えになっていた。そしてそれを見下ろす達也は、息が上がるどころか汗1つ掻いていなかった。

「おおっ！ 凄いゾ、達也くん！」

そんな光景を目の当たりにして再び啞然とするギャラリーの中で、

しんのすけだけが見事なショーでも観たかのように大きな拍手で達也を褒め称えていた。

もつとも達也はそれで嬉しがるどころか、ほんの少しだけ迷惑そうに目を細めていたのだが。

「ほう。面白いな、あの1年達……」

闘技場の入口で先程の騒動を眺めていた1人の男子生徒が、眼鏡を指で上げながら不敵な笑みを浮かべていた。

*

*

*

「――以上が、剣道部の新歓演舞中に剣術部が乱入した事件の顛末です」

闘技場での捕り物騒ぎから2時間ほど後。達也としんのすけの姿は、部活連の本部として使われている広い部屋にあった。数十人は座れるようにテーブルや椅子が用意されているが、2人が立つ部屋の中央は椅子もテーブルも取り払われており、妙にだだっ広く感じるのが正直な印象だった。

そんな2人の報告を聞くのは、3人の生徒。

生徒会長である七草真由美、風紀委員長である渡辺摩利。

そして、部活連会頭である十文字克人だった。分厚い胸板に広い肩幅、制服越しでも分かる隆起した筋肉は、肉体だけでなく彼を構成するすべての要素が桁外れに濃い存在感を放つ、まるで巖のような人物である。

つまり現在この部屋は、生徒自治の象徴である生徒会・風紀委員・部活連の長が揃い踏みとなっている。ちなみにこの3人は、第一高校で最も有名な生徒であると同時に校内随一の実力者ということ、他の生徒達から“三巨頭”と呼ばれている。

「2人共、10人を相手によく無事だったわね。特にしんちゃんなんて、高周波ブレードを相手に特に魔法で強化したわけではない竹刀で

立ち向かったんでしょ？ 本当に怪我してない？」

「へーキへーキ、そんなに心配いらないうぜ、真由美ちゃん」

世話焼きな一面を発揮する真由美に対してしんのすけは、仮にもこの学院で最も有名であろう最上級生3人を目の前にしているとは思えない、極めて自然体な振る舞いでそう答えた。

むしろ真由美のことを「ちゃん付け」で呼んだ辺りで、当の真由美本人が若干気まずそうに克人へチラリと視線を遣っていた。しかし克人はジツとしんのすけを見据えて話を聞いているだけで、特にこれといったリアクションを見せる様子は無い。それを確認し、真由美はホツと胸を撫で下ろしていた。

「さすがといったところだな。ところで2人共、当初の経緯は見えないんだな？」

摩利の質問に、達也が「はい」と答え、しんのすけが「ほい」と答えた。

「最初に手を出さなかったのは、そのせいなのか？」

「〃魔法を使った不正行為〃を取り締まるのが、風紀委員の仕事ですので」

「確かに。それで、桐原は？」

「当人が非を認めており、報復の意思も感じられなかったので、それ以上の追及は必要無いと判断しました」

「ふむ。他の剣術部の部員についてはどうだ？ 桐原を連行するとき、司波に襲い掛かろうとしたそうだが？」

「魔法は使っていませんし、特に被害も無いので問題無いと判断しております」

摩利の質問に、達也が淀みなくつらつらと答えていく。先程の説明もほとんど達也1人で済ませたし、彼女も彼女で達也の方だけを見て問い掛けている。そしてその間、特に何もすることの無いしんのすけはとても暇そうに突っ立っているだけである。

「そうか、分かった。——聞いての通り、風紀委員は懲罰委員会に持ち込むつもりはないが……、どうだ？」

摩利はそう言つて、隣にいる克人に話を振った。

そして克人はゆっくりとした動きで彼女へ顔を向け、口を開いた。「寛大な決定に感謝する。殺傷ランクBの魔法をあんな所で使ったのだ、本来ならば停学処分もやむを得ないところだった。後はこちらで引き取らせてもらおう」

「分かった。ご苦勞だったな、司波、野原」

「はい」

「おっ、終わった？　じゃ、そゆことでー」

摩利の労いに達也は小さく頭を下げ、しんのすけはへらへらと笑いながら手を振って答えた。達也が一瞬だけしんのすけを睨みつけるが、諦めたように小さく溜息を吐いた。

そうして2人は部屋を出ていき、残ったのは最上級生3人だけとなった。

「野原の七草に対する呼称は、七草がそうするように言ったのか？」

「そ、そんなわけないじゃない！　私だけじゃなくて、摩利とかに対してもちゃん付けよ！　……やっぱり十文字くんは、下級生が上級生をそういう風に呼ぶのは許容できないかしら？」

「いや、双方がそれで良いというのなら、俺が口を挟むようなことではない。——それで互いの距離が縮まるというのなら、な」

克人のその言葉には、真由美にのみ伝わる含みがあった。

その証拠に、真由美は何やら決意を秘めたような表情で小さく頷き、摩利は特に取り上げることもなく「ところで」と自身の疑問を口にする。

「今回の件、具体的にはどうするつもりなんだ？」

「部活連会頭として剣術部に“指導”を行い、再発防止策を検討する。しかしそれよりもまずは、桐原本人と剣術部部长、そして剣道部部长と壬生を同席させて謝罪の場を作ることだな」

「大丈夫なのか？　今の剣道部と言えば——」

「今回の件に関しては、全面的にこちら側に非がある。その件とは切り離して考えるべきだ」

「……確かに、その通りだな」

納得したように何度も頷く摩利だが、唐突に「それにしても」と話

題を切り替えた。

「昨年の中南部剣道大会全国覇者だとは知っていたが、まさか高周波ブレードを発動している竹刀をただの竹刀で弾き飛ばすほどの腕前だとはな……」

「そりやそうよ。だってあの子は、あの代々木コージローを退けた選手なのよ。——春日部市を中心とした局所的・限定的な時間のループによって、実に100年以上にわたって剣道の腕を磨き続けてきた彼を、ね」

例の時間ループは同じ時間を繰り返しているのではなく、時間が経過しているにも拘わらず人々が歳を取らないというものだ。その間に経験したことは人々の記憶に残るし、習得した技術は血肉となって蓄積されていく。

つまり代々木コージローは、他の人間ではけっして積み重ねることのできない練習量をこなしていることになる。肉体的な成長が無いという欠点こそあるものの、元々才能のあった彼にとってそれは些細なことであり、肉体的な成長が技術に追いついてきた現在では、たとえ大人が相手であってもまるで問題にしない、まさに「剣豪」と呼んで差し支えない領域にまで至っている。

「それにしても、そんな選手が他の子に紛れて全国大会に出るってのも変な話よねえ。何というか、他の人から見たら卑怯だって思われてもおかしくないじゃない？」

「だからといって参加資格を認めないわけにはいかないだろう。少なくとも本人の意思でループに巻き込まれたのではないし、同じようにループに巻き込まれた人間が必ずしも才能を発揮しているわけでもない。そもそもそれだけの時間、努力を続けられる人間の方が稀だ。結局は本人次第であることは、他の選手と何ら変わりない」

「そんな選手を相手に、野原は全国制覇を成し遂げたというわけか……。彼はこの100年もの間、どのような人生を歩んできたんだらうな」

2人に言っているような、それでいて独り言のような摩利の言葉に、

「——本当、彼は何者なのかしら？」
真由美は、克人にのみ伝わる含みを込めた言葉を零した。

第9話 「美少女剣士現る！ だゾ」

闘技場での一件により、達也の存在が学校中に知れ渡ることとなった。一科生を10人近く相手にしながら一切怪我を負うことなく無力化したその実力が、公に認められた証拠と言えるだろう。

しかしそれは達也にとって、新たな受難の始まりでもあった。

プライドの高い一科生の中から、達也のことをやっかんで悪質な嫌がらせをする者が現れたのである。例えば生徒同士の乱闘騒ぎが起こつたと聞きつけてやって来た達也の死角から魔法が飛んできたり、例えば現場に駆けつけている最中に木陰から魔法で彼の足元に穴を空けようとしたり、が挙げられる。

大怪我にも繋がるため「嫌がらせ」の一言では片づけられないのだが、達也自身はそれら全てを冷静に対処していたために怪我一つ無かった。そしてそんな彼の態度に腹を立て、ますます反感を買うという悪循環に陥っている。

「あれ、達也？ 今日風紀委員の仕事は？」

「ああ、今日は非番だ。新入生の勧誘期間も終わったし、久し振りにゆっくりできそうだよ」

しかしそれも、昨日までのことだ。新入生勧誘期間も終わり、狂乱とも呼べた熱気も収まってようやく普段の日常に戻ってきた。ここ1週間は授業が終わるやすすぐさま教室を飛び出していた達也も、今日は授業が終わった後も教室に留まり、落ち着いた動きで帰り支度の準備をしている。

「達也くん、大活躍だったもんね！ 魔法を使わず、並み居る生徒を連破した謎の1年生って感じで、学校中で持ちきりだよ？」

「二説によると、達也は魔法否定派に送り込まれた刺客みたいだぜ？」
ニヤニヤと面白そうに軽口を叩くエリカとそれに悪ノリするレオに、達也はうんざりしたように溜息をついた。

「2人共、他人事だと思つて……。俺はこの1週間、誤爆のふりをした魔法攻撃が何度もあつたんだぞ？」

「ええっ！ 大丈夫だったんですか！」

美月の心配する声に、達也は大丈夫だと言うように頷いた。

そんな彼女の隣で、レオが自分に注目させるためにパンツ！と大きく手を叩いた。

「よしっ！ それじゃ今日は、そんな達也の慰労会ということで、みんなでアイネブリーゼにでも行こうじゃねえか！」

「あらっ、レオもたまには良いこと言うじゃないの」

「たまには」は余計だ、エリカ！」

「でも達也さん、これから用事があるんじゃないですか？」

「いや、俺は特に大丈夫だ」

本当は深雪の仕事が終わるまで図書室で調べ物をしようとしていた達也だったが、特に急を要するようなことでもないため、レオ達の誘いに素直に乗ることにした。

「——とはいえ、その前にちよつとだけ時間を貰っても良いか？ 深雪を生徒会に送っていく用事があるんだ」

「あははっ、達也くんは相変わらずだね」

「よしっ。それじゃせつかくだし、俺達も一緒についていくぜ。都合がつけば、しんのすけ達も誘っていききたいしな」

というわけで、達也たち4人は深雪のいるA組まで一緒に向かうことにした。

二科生のクラスであるE組からH組までと、一科生のクラスであるA組からD組までは、渡り廊下で繋がっているものの建物が別で、入口まで完全に分かれているという徹底ぶりである。なので達也たち4人のグループは一科生の目によく留まり、好奇と侮蔑の入り混じった視線に晒されたのだが、達也・エリカ・レオはそんな視線など最初から気にしておらず、残る美月もそんな3人に囲まれているおかげでそれほど気に病むことはなかった。

そんなこんなでA組のクラスが見えてきた、そのとき、

「——あれっ？」

真っ先に気づいたエリカが声を漏らし、続いて残る3人もそれぞれ疑問の表情を浮かべた。

A組の教室から出てきたのは、自分達もよく知っているしんのすけ

だった。

しかし彼の隣にいる女子生徒は、深雪でもほのかでも雫でもなく、長い黒髪を後ろで縛った凛々しい顔つきの少女だった。

そして彼女は、達也やエリカにとって非常に記憶に新しい人物でもあった。

「あれって、壬生先輩？ どうしてしんちゃんと一緒に？」

「しんのすけは剣道で中学生チャンピオンになったんだ、部から勧誘があったとしても不思議ではない」

「でもそれなら、なんでもつと早く勧誘しなかつたんでしようか？」

勧誘期間は、もう終わっちゃいましたよ？」

「いや、だからこそじゃねえか？ 風紀委員の仕事をしている最中に勧誘とか、よっぽど押しの強い奴じゃないと厳しいだろうし」

4人がそんなことを話している間にも、並び立って廊下を歩くしんのすけと紗耶香の後ろ姿がどんどん小さくなっていく。

と、エリカとレオの口元が、ほぼ同時にニヤリと口角を上げた。

「ねえねえ、ちよつと気にならない？」

「奇遇だなエリカ、俺も同じことを考えていたところだ」

「ちよ、ちよつと2人共駄目だよ、そんなことしたら」

「……とりあえず俺は、深雪を生徒会室に送ってくるよ」

そんな遣り取りを交わして、レオとエリカはしんのすけの後を追いつ、達也はA組のクラスへ入っていった。

そして美月は数秒の逡巡の末、レオ達の後を小走りについていった。

*

*

*

部活連本部。

先日の騒ぎで達也としんのすけが三巨頭に呼ばれたこの部屋には現在、この部屋の主とも言える部活連会頭・十文字克人が自席に座り、その騒ぎの主犯である桐原武明が彼の正面にて背筋を伸ばして立っていた。その態度からは自分が呼び出されたことへの不満や怒りは

微塵も無く、むしろ自分の行いを後悔し反省している様子がありありと見て取れる。

今日桐原をここに呼び出したのは、先日の騒ぎについて詳しく聞き出すためだ。生徒会や風紀委員の温情、そして何より剣道部部长と被害者の紗耶香が彼の謝罪を最終的には受け入れたことによつて大事には至らなかつたものの、克人には部活連会頭として再発防止に努める義務がある。

だからこそ、克人はこの騒動を耳にしてから疑問に思っていたことを、直接本人にぶつけることにした。

「桐原、なぜあんなことをした。おまえは粗暴なところのある男だが、同時に力に伴う責任を弁えている男だ。理由も無く殺傷性の高い魔法を使う真似はしないはずだ」

克人の問い掛けに、桐原は苦々しい表情で口を噤んだ。それは何を言おうか迷っているというよりは、言おうかどうか自体を迷っているように克人は感じられた。

しかし克人はけつして急かしたりせず、ただ桐原が口を開くのを待った。

1分ほど時間が経った頃、桐原が口を開いて話し始めた。

*

*

*

魔法科高校は厚生施設が充実しており、生徒や学生が食事を摂るための食堂の他に、軽食やデザート、多様な飲み物が売りのカフェも造られていた。現在は放課後ということもあり、部活や委員会に参加していない大勢の生徒で賑わっている。

「しんちゃんは何か飲む？ アタシから誘つたんだし、良かったら奢るわよ」

「おっ、本当？ 紗耶香ちゃん、太股ふとももー！」

「……ひよつとして『太っ腹』って言いたいのかしら？」

「おおっ、そうとも言う」

「そうとしか言わないと思うけど……」

カウンターの前でそんな遣り取りをした末にそれぞれ飲み物を選んだ2人は、外からの光で明るく照らされている窓際の席へと腰を下ろした。

そしてそれと同じタイミングで、観葉植物が生えている花壇と一体化した仕切りを挟んだ隣のテーブルに3人組が腰を下ろしたのだが、2人共それに気づいた様子は無かった。

「あのときはありがとう、しんちゃん。アタシを助けてくれて」

「全然気にしなくて良いゾ、紗耶香ちゃん。怪我とかしなかった？」

「大丈夫よ、ちよつと道着が切れただけだから。——それにしても、」
しんのすけを安心させるために明るい笑顔だった紗耶香に、ふと影が差した。

「桐原くんが、まさかあんなことをするなんて……。確かに昔から少し乱暴なところはあったけど、人を傷つけるようなことはしなかったの……」

「おっ？ 紗耶香ちゃんは、桐原くんのことを知ってるの？」

「うん、小さい頃から一緒に剣を学んでた幼馴染だったから。桐原くんは魔法が上手だったから、剣術の方に行っちゃったけどね……」

「魔法が上手だったから」という言葉を口にしたタイミングで、紗耶香は苦虫を噛み潰したように表情をしかめた。

しかししんのすけの前だというのを思い出したのか、すぐさまフルフルと小さく首を横に振ってニコリと笑い、

「それにしても、まさかこんな所でしんちゃんに会うなんて思いもしなかったわ」

「おっ？ オラってそんなに有名人？」

「そりゃそうよ。何てったって、3連覇が確定だって言われてた代々木コージローを倒して日本一になった選手なんだもの！ アタシも全国大会に出たときに彼を見たことがあるけど、何て言えば良いのかしら、オーラみたいなのが全然違って思わず圧倒されちゃったもの。あんな凄い選手を倒すなんて、しんちゃんって本当に強いよね」「いやあ、照れますなあ」

もはや「ベタ褒め」と言っても差し支えないほどに褒めちぎる紗

耶香に、しんのすけは頭の後ろに手を遣りながらニヤニヤ笑いながらそう言った。笑い方こそ独特ではあるがそれ自体に嫌味などは無く、包み隠さず素直に表現する彼の姿に紗耶香の笑顔も自然なものになっていた。

「ところで風の噂で聞いたんだけど、しんちゃんって入学試験での実技科目が2位だったんでしよう？ 普通それだけの腕があつたら剣術に転向するものだけど、それでも剣道が続けているのって何かこだわりがあるの？」

「おおつ。その質問、エリカちゃんにも訊かれたゾ。——別にオラ、こだわりなんて無いゾ。大会に出たのだから、よよぎくんが出る出ろってうるさいから仕方なく出ただけだし」

「ええつ、そうなのっ？ っていうか、代々木コージローと知り合いだったの？」

「うん。5歳のときにちょっとだけ剣道を習ってたことがあって、そのときに戦ったことがあるんだゾ」

へえ、そうなんだ、と紗耶香は納得しかけて、彼の言葉に聞き捨てならない単語が含まれていることに気がついた。

「……えっ？ ちょっとだけ？ そのときからずっと剣道を習ってたわけじゃないの？」

「違うゾ。よよぎくんに勝って満足したから、すぐに剣道は辞めちゃったんだゾ。大会に出ることになって、さすがにちょっとは練習したけど」

「……………」

しんのすけの言っていることがにわかには信じられない紗耶香だったが、彼の態度からは嘘を吐いているようには感じられなかった。

「そ、そうだ！ アタシを守ってくれたとき、桐原くんの竹刀を弾き飛ばしたあの技って、代々木コージローが得意にしていた『刃崩し』によく似てるって思ったんだけど、あれってどうやってできるようになったの？」

「あれ？ 大会に出ることになって一緒に道場で練習してたとき、気

分転換によよぎくんからやり方を教えてもらったんだゾ」

「へえ、そうなんだ。さすがに習得するまでに時間が掛かったんじゃない？」

「ホントホント！ 普通の練習そっちのけで特訓したのに、できるようになるまで1週間も掛かっちゃったんだゾ！ さすがよよぎくんだゾ」

「……そ、そう、1週間ね」

戸惑うように返事をしながら、紗耶香は悟った。

紛れもなく、目の前にいる彼は剣道の“天才”であると。

「……しんちゃん、全国大会が終わってから竹刀を触った？」

「ううん、全然」

「高校に入って、剣道をやろうって気持ちはある？」

「ううん、全然」

あまりにもキツパリと言い切られてしまった紗耶香だったが、不思議なまでにしんのすけの言葉が彼女の胸にストンと収まったような気がした。

おそらく彼には、剣道そのものに対する想いといったものは微塵も無い。彼はただ代々木コージローと竹刀を構えることが楽しかっただけで、それ以外の選手はおろか、大会の優勝だとか名誉だとかいうのにもまるで興味が無いのだろう。あるいはこういった性格だからこそ、彼はこれほどの才能に恵まれたのかもしれない。

「——そっか。だったら仕方ないわね」

剣道部員としては、ここで何としてでも彼を部に勧誘すべきなのかもしれない。もし彼を部員として引き入れることができれば剣道部が飛躍することは間違いないし、彼女の“目的”を達成する大きな原動力となるだろう。

しかしそれでも、彼女はこれ以上彼を勧誘しようとは思わなかった。自分を含めた今の剣道部に代々木コージローに代わる魅力を彼に提供できるとは思えないし、彼の意思に反してむりやり入部させるのは彼の剣を穢すような気がしたからだ。

よって彼女は、しんのすけを剣道部に勧誘することを諦めた。

「——ところでしんちゃんは、この学校の制度をどう思う？」

そして唐突に、話題を切り替えた。

「セード？ 豚の脂がどうしたの？」

「……それはラード。アタシが言っているのは、この学校での一科生・二科生制度のことよ。魔法科高校では、魔法の成績が最優先。確かにそれに納得して入学したのはアタシだけど、それだけで全部決めつけられるのはおかしいと思わない？ 授業で差別されるのは仕方ないかもしれないけど、クラブ活動まで魔法の腕が優先なんて間違っているわ」

「ふーん」

「新入生勧誘期間のときの騒ぎが起こったのも、元を糺せば一科生に対する二科生への差別意識に行き着くわ。それ自体については、十文字会頭の取り計らいで桐原くんと剣道部部长が揃って謝罪してきたから今回は様子見ということにしたけど……、差別意識が解決しない限りまた同じことが繰り返されることになるわ」

「へー」

「……桐原くんは、この学校に入学して変わっちゃったわ。この学校には二科生を差別する空気が蔓延してるから、きつとその空気に染められちゃったのね。そのせいで、桐原くんとも何だか疎遠になっちゃったし……」

「ほーほー」

「……………」

一応相槌は打っているが、何とも気の抜けたその声は本当に話を聞いているのか疑わしい。

紗耶香は眉尻がピクピクと痙攣するのを自覚するが、すぐに気を取り直して大きく深呼吸をすると、まっすぐ彼を見据えて再び口を開いた。

「……アタシ達は非魔法競技系クラブで部活連とは違う組織を作って、二科生の待遇を改善するよう学校に訴えていくつもり。魔法が上手く使えないからといって、アタシのすべてを否定させはしないわ」
「そっか、頑張ってるね」

「ねえしんちゃん、一緒に手伝ってくれない？　あなたは一科生でありながら魔法以外の腕も磨いているし、二科生とも分け隔て無く接している。あなただったら、他の一科生達に『模範的な姿』を示すことができるんじゃないかしら？」

「えっ？　なんでオラが？」

しんのすけの疑問ももつともだ、と紗耶香は質問に答えるべく小さく息を吸った。

「……あなたのお友達の中に、二科生出身ながら風紀委員になった男の子がいるでしょ？」

「達也くんのこと？」

「そう、その子。二科生なのに風紀委員に選ばれるなんて初めてだから、今この学校は彼の話題で持ちきりよ。——残念ながら、悪い方向にだけど」

「おっ、そうなの？」

しんのすけの疑問の声に、紗耶香は力強く頷いた。

そして彼女は、ここ一週間で起こった達也への嫌がらせを1つ1つ丁寧に説明していった。しんのすけはそれを、時折飲み物を口にしなから頬杖を突いて聞いていた。

「今まで一科生しか入れなかった風紀委員に二科生が入ったのは大きな進歩だけど、結局はこうして一科生による嫌がらせが起こっているわ。それもこれも、一科生が二科生を蔑む学校の風潮が諸悪の根源よ。——ねえお願い、しんちゃん！　私達と協力して、一緒にこの学校から差別思想を撤廃しましょう！　そうすればあなたのお友達も、取り締まりの最中に誰かに狙われるなんてことは無くなるわ！」

テーブルに両手を突いて身を乗り出しながら、紗耶香は力の籠った声でしんのすけに語り掛けるようにそう言った。剣道部に誘うときの彼女は実にあっさりしたものだだったが、今の彼女はむしろ鬼気迫るといった感じですらある。

とはいえ、メディアにも取り上げられるほどに整った容姿をしている彼女に迫られたとあれば、普通の男子高校生ならば思わず舞い上がってしまうだろう。そんな彼女にここまで頼りにされれば、もしか

したらその場の勢いで彼女の誘いを了承してしまうことだって有り得ることだ。

もつとも、それがしんのすけでなければ、の話だが。

「うーん、結局紗耶香ちゃんはさ、何をしてほしいの？」

「——えっ？」

しんのすけの質問に、紗耶香は冷や水を浴びせられたような心地になった。

「紗耶香ちゃんが何となく不満そうなのは分かるけどさ、結局何をすれば紗耶香ちゃんが満足するのか全然分かんないんだよね」

「そ、それは……。もつとアタシ達を、一科生と同じように評価してほしいっていうか——」

「ええっ？　成績が良かったから一科生で、そうじゃなかったから二科生なんじゃないの？」

「そういう授業でのことじゃなくて、それ以外のことですよ！　例えば魔法競技クラブは、アタシ達みたいな非魔法競技クラブよりも予算が多いのよ！　これっておかしいとは思わない？」

「単純に、お金が掛かるからじゃないの？　母ちゃん、オラのCADを買おうとしたときも『なんで一番安いのも数万円するんだ』って愚痴ってたもん」

「……あ、あなたのお友達だって、一科生から嫌がらせを受けてるのよ。いつかひどい怪我をしちゃうかもしれない。しんちゃんはそれでも良いって言うの？」

「ダイジョーブだって。『ちよつとくらい喧嘩した方が仲良くなれる』って父ちゃんも言ってたし、達也くんもその内みんなと仲良くなれるって。それに——」

そのタイミングで、しんのすけが紗耶香へフツと視線を向けた。

たったそれだけのことで、なぜか紗耶香は肩を跳ね上がらせた。

「タイグーのカイゼン？　ってのをやって、それで達也くんの嫌がらせが無くなるの？」

「——もう良いわ！」

紗耶香はその整った顔を真っ赤に染めて、椅子を大きく鳴らしなが

ら勢いよく立ち上がった。

突然の大声と音に、周りの生徒が何事かと彼女を見遣る。

「もしかしてしんちゃんなら、って思ったアタシが間違いだったわ！

結局しんちゃんも、他の風紀委員と同じように点数稼ぎで摘発を乱用しているような人だったってことね！」

「えっ？ 風紀委員って、ポイント貰えるの？ 貯めたら何と交換できてる？」

「——さあね！ 渡辺先輩にでも聞けばっ！」

紗耶香はそう言い残すと、大股でカフェを出ていった。周りの生徒達から一斉に視線を浴びているが、彼女はそれに気づいていないのか、一切目をくれることなく出口まで突き進んでいった。

そして彼女の背中を見送るしんのすけは、最後まで疑問の表情を崩すことは無かった。

「何というか、結構意外だったね。しんちゃんって綺麗な女の人に目が無い印象だったから、壬生先輩の誘いも快く引き受けると思ってたよ」

「そうかしら？ 確かに大人の女性に対してはそうだけど、学校の生徒に対しては全然靡かないじゃない。そもそも同じクラスの深雪と普通に話してる時点で、ねえ」

「それにしても、随分とバツサリだったな。多分、本人は無意識だろうけど」

そして会話の一部始終を、観葉植物が生えている花壇と一体化した仕切りを挟んだ隣のテーブルから聞いていたエリカ達3人は、しんのすけにバレないようにコソコソと小声でそんなことを話していた。

「それにしても、壬生先輩怒ってたね……。大丈夫かな……。？」

「そっちは別に大したことじゃないでしょ」

「ああ、確かに。——『あいつ』に比べたらな」

「えっ？ どの、どうしたの2人共？」

唐突に剣呑な雰囲気醸し出してきたエリカとレオに、美月が戸惑

いの声をあげた。しかし2人はそんな彼女をよそに、それぞれ別の方向へと視線を向けて警戒心を露わにする。

レオの視線の先にいたのは、痩せ型ながら注視すればよく鍛え上げられていることがよく分かる体つきをした、眼鏡を掛けた男子生徒。おそらく上級生である彼は、紗耶香がカフエを出ていったのと同じタイミングで席を立っていた。

そしてエリカの視線の先にいたのは、艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そしてそれを囲む赤縁の眼鏡という出で立ちの少女だった。つい先程まで窓際の席でジュースを飲んでいたので、エリカがこの場を去る紗耶香を見ていたほんの数秒の間に忽然と姿を消している。

「どうにもキナ臭い視線だったのよねえ、あいつら」

「男の方は確かにそうだが、エリカの言う女の方は何も感じなかったんだよなあ。エリカの気のせいってことは無いよな？」

「確かに彼女の方が何枚も上手だったけど、アタシの目は誤魔化せないわ。——彼女、確実にしんちゃん達のことを探ってる感じだった。たまたま聞こえたのを興味本位に盗み聞きしたんじゃないやなく、最初からそれが目的でここにやって来たような感じのね」

2人の会話にはついていけない美月だったが、これだけは理解できた。

おそらく近い内に、とても面倒臭いことになる、と。

*

*

*

「……気に食わなかったんです」

「気に食わない？ 何をだ？」

意を決して、といった感じで口を開いた桐原の言葉に、克人は問い掛けで続きを促した。

「……久し振りにアイツの剣を見たとき、妙に荒くなっていたのが無性に気に障ったんです。雑だという意味ではありません。変に殺伐とした……、まるで“人を斬るための剣”になつたと言いますか

……」

「それではいけないのか？」

「俺達みたいに『道』を捨てて『術』を選んだ人間ならそれで構いません。ですが壬生は『剣道』の剣士です。アイツの剣は人斬りの技であつてはならないんです」

桐原ほど剣技に詳しくない克人ではあるが、彼の言っていることは何となく理解できた。つまり彼は、紗耶香の剣技が間違つた方向に『変質』していると感じ取つたのだろう。

「きつと剣道部に、アイツの剣を汚した奴がいる。そう思つたら黙つていられなくなつて、気がついたら剣道部を挑発していました。——別に壬生の過ちを気づかせてやろうとか正してやろうとか、そんなことを考えたわけではありません。ただ頭に来て喧嘩を売つただけで、自分が短気なだけだつたと分かつています」

桐原はそう締め括ると、再び「申し訳ありませんでした」と頭を下げた。

それに対し、克人は小さく何度も頷いた。

「成程、よく分かつた。——ところで、桐原」

その一言で話題が切り替わつたことを悟つた桐原は、素早く頭を上げて「はい」と返事をした。

「あのときおまえは、風紀委員である野原しんのすけと対峙したな。

——何か感じ取るものがあつたか、教えてもらえるか？」

そのときのことを思い出そうと、桐原はフツと顔を俯かせて軽く目を閉じた。

紗耶香の前に突然現れ、まっすぐこちらを見据える目。

高周波ブレードと化したこちらの竹刀に、目で追うことすらままならないほどに素早く攻撃を叩き込む剣技。

そしてこちらの竹刀を弾き飛ばすという目的を達成した瞬間、こちらに対する戦意をフツと掻き消して自然体に戻つたときの姿。

「これこそが、『剣道』のあるべき姿だ。そう、感じました」

「——分かつた。今日のところは下がつて良し」

克人の一言に、桐原は「失礼します！」と頭を下げ、キビキビとし

た動きで部屋を後にした。

1人となつてからしばらくの間、克人は腕を組んで目を閉じ、何かを考え込んでいた。

第10話 「何やら不穏な気配……だぞ」

しんのすけと紗耶香がカフェで話してから数日後、放課後の風紀委員本部に達也としんのすけの姿があった。しんのすけは備品のソファーに寝転んで携帯端末でビデオ鑑賞、そして達也はパソコンに向き合って高速タイピングで文章を書き連ねていた。

いくら2人が風紀委員だからといって、別に毎日日本部に寄らなければいけないわけではない。本来ならばオフのはずだった達也は、図書館にて魔法科高校でしか閲覧できない非公開資料を読む予定だったのだが、途中で摩利に捕まり「新入生勧誘期間の報告書を仕上げたいのだが、どうしても外せない用事ができたから代わりに作ってくれ」と頼み込まれてしまったのである。

仕方なく本部に来てみれば、既にしんのすけが部屋にいて現在のようソファーに横になっていた。おそらく達也と同じように摩利に頼まれたから来たものの、まったくやる気が起こらずにサボっていたのだろう。最初は彼も手伝わせようと思っていた達也だったが、彼が報告書を纏める能力に関しては壊滅的だと知ると1人でやった方が早いと結論付けて現在に至る、というわけだ。

「そういえば、しんのすけ」

「んー？」

そろそろ報告書作りも仕上げに入ってきた頃、ふいに達也が画面から目を離さずにしんのすけに呼び掛けた。そしてしんのすけも同じように、携帯端末から目を離さずに返事をした。

「先日、カフェで壬生先輩から勧誘を受けたそうだな」

「みぶ先輩？ ……ああ、紗耶香ちゃんのことか。それがどうしたの？」

「そのときの会話をたまたまエリ力達が聞いてたみたいでな、単なる剣道部の勧誘かと思っていたら、変な方向に話が広がっていったと聞いたもんでな」

達也の言葉を受けてそのときのことを思い出したのか、しんのすけが「あー……」と何とも要領を得ない声を漏らした。

「何か差別がどうのとか言ってたゾ……。何を言ってるのかよく分からなかったから、ほとんど憶えてないけど」

「レオ達から大体の内容は聞いた。——そこで、しんのすけの耳に入れておきたいことがある」

達也はタイピングしていた手を止めると、椅子を回転させてしんのすけへと向き直った。

「反魔法国際政治団体『ブランシユ』——という名前に聞き覚えがあるか？」

「全然」

実に簡潔なしんのすけの返事に、達也は予想の範囲内とばかりに頷き、説明を始めた。

ブランシユとは、魔法師が政治的に優遇されている行政システムに反対し、魔法能力による社会差別を根絶することを目的に活動する反魔法国際政治団体である。スローガンとして『社会的差別の撤回』を掲げ、魔法師の所得水準が一般より高いことを非難し、市民活動と称して様々な反魔法活動を行っている。

とはいえ、実際には『魔法師が政治的に優遇されている』という事実は無い。確かに魔法師を輩出する家系の中には強大な権力を有している場合もあるが、それは権力と引き換えに様々な『義務』を請け負っているからである。そしてそういった後ろ盾の無い魔法師はまるで道具のように使い潰されることが多く、むしろそれに対して非人道的だと非難の声があがっているくらいだ。

いや、ブランシユの正当性についてはこの場では横に置いておこう。問題はこのブランシユが警察省公安庁にも嚴重にマークされているほどに危険な団体であり、そして幾つかの下部組織が存在しているということである。

「下部組織の1つに『エガリテ』というものがある。政治色を嫌う若年層を中心に構成された組織だ。——そして俺は先日、そのエガリテに所属していると思われる生徒を目撃した」

「……………」

しんのすけからの返事は無かったが、達也は気にせず話を進める。

「新入生勧誘期間中、俺は一科生と思われる生徒達から何度も嫌がらせ紛いの攻撃を受けてきた。大半は取るに足らないやつかみたいなものだったが、その生徒の中に、白い帯に赤と青のラインを縁取ったりリストバンドを付けている者がいた。——エガリテがシンボルマークとして掲げているデザインと一致する」

「……………」

「もちろん、それだけでエガリテの存在を立証することはできない。しかしこの前、しんのすけが壬生先輩に勧誘されたときのことをエリカ達から聞いて疑惑が深まってな、昼休み中に七草会長達から事情を聞いてみたんだ。——したら会長達も既に、校内にエガリテらしき組織の工作員が紛れ込んでいることを知っていたようだ。色々な事情があつて、情報規制されているようだがな」

「……………」

「実はこの前のカフェでの会話を盗み聞きしている奴がいたらしくてな、エリカ達が学校のホームページとかを風潰しに探していたら、どうやらその内の1人が剣道部主将の司つかさぎのえ甲あだったらしい。後輩が新入生を勧誘しているのを見守っていた、と取ることもできるが、もしかしたら剣道部は奴らの巣窟かもしれない」

「……………」

「しんのすけ?」

いくら何でも返事が無さすぎることを訝しんだ達也が背を伸ばし、しんのすけの顔を覗き込む。

「くかー」

「……………」

間抜け面で眠りこけていたしんのすけに、達也は口を引き結んで立ち上がり、つかつかと彼の眠るソファアへと歩み寄った。

そして彼の眠るソファアを、思いつき蹴飛ばした。その衝撃で彼の体が一瞬だけ宙に浮き、すぐにボスンとソファアに沈み込んで彼の目を覚まさせた。

「うおおっ、何だ何だ! 地震? 雷? 火事? オヤジ?」

「心配するな、地震でも雷でも火事でもオヤジでもない」

慌てふためいて辺りを見渡すしんのすけに、普段よりも低い声で達也が答えた。

すぐに達也が何かしたことを悟った彼は、唇を尖らせて不機嫌をアピールしながら、

「んもう、達也くんは話が長すぎるゾ。つまり何が言いたいのか？」

「……壬生先輩の勧誘を断ったくらいで、そいつらがおまえを諦めるとは考えにくい。もしかしたら強硬手段に出るかもしれないから、しんのすけもそれとなく注意していてくれ。特に剣道部に関わっている奴らは念入りにな」

「ほいほい、分かったゾ」

どうにも投げやりな返事に一抹の不安を覚える達也だったが、特に身の危険を感じたわけでもない現状ではしんのすけの反応も止む無し、と達也も考えている。叔母である四葉真夜からしんのすけの力になってほしいと頼まれた（もとい命令された）のでなければ、わざわざ忠告することも無かつただろう。

なので達也はそれ以上何も言わず、報告書を仕上げるためにパソコンへと戻っていった。

と、そのとき、携帯端末の震える音が微かに聞こえ、達也は再びしんのすけへと目を向けた。

しんのすけは端末を取り出して画面をジッと見ていたかと思うと、恐ろしいスピードで立ち上がって部屋を出ていこうとする。

「どうした、しんのすけ？ 急ぎの用か？」

「まあね！ じゃ、そーいうことで！」

普段マイペースな彼らしくない機敏な行動に、達也は無表情ながら首を傾げた。

*

*

*

「ごめんね、しんちゃん。放課後なのに急に呼びつけちゃって」

「全然気にしてないゾ！ 遙ちゃんのためなら、火の中だって水の中だって駆けつけるゾ！」

達也からブランシユの話聞いていたときよりもあからさまにテンションの上がつているしんのすけの返事に、保健室の主であるカウンセラーの女性・小野遥はニツコリと柔らかい笑みを浮かべた。それなりに美人であり、そしてそれ以上に愛嬌のある顔立ちは、男子生徒の中で秘かにファンがいるほどだ。

そして何より現在の彼女は、スーツのボタンが胸元まで開けられて意外にも豊満な胸の谷間がよく見え、しかもスカートは膝上までのかなり短いものなのでストッキングに覆われたスラリと長い脚が惜しげも無く披露されている。さらに彼女は長い脚を組み、少し屈めばスカートの中が覗けるのでは、と思わず妄想を掻き立てられる姿勢で椅子に腰掛けている。

間違いなくそのせいだろうが、しんのすけはそれはもうデレデレになつていた。それこそ、それを狙ってやっていた遥が若干引き気味になるくらいに。

「ねえねえ遙ちゃん！ もう今日は仕事が無いんでしよう？ オラと一緒に、オシャレなレストランでディナーでも食べようよ！」

「うふふ、それも魅力的だけど、今日はカウンセリングとしてあなたを呼んだのよ」

「カウンセリング？」

首を傾げるしんのすけに、遥は頷いて一旦脚を組み替えた。

当然ながら、その脚の行方をしんのすけはバツチリ目で追っていた。しかし彼自身はそれを全然隠そうとしていないので、一周回って嫌らしさをあまり感じない、と思われる。

「生徒のみんなの精神的傾向は、毎年変化しているわ。例えば3年前の佐渡侵攻事件での勝利以降、一人称に“自分”を使う生徒が増えたようにね。そうやって社会情勢の変化が生徒のメンタリティにも影響を及ぼすから、毎年度新入生の生徒の中から1割くらい無作為に選んで、カウンセリングを受けてもらってるの」

「ええっ？ つまりオラは、色んな生徒の中の1人に過ぎないってこと？ そんなあ！ せっかく遙ちゃんの特別になれたと思つたのにいー！」

「ごめんね、しんちゃん。ある程度の数を診ないと、ちゃんとした結果が出ないから」

困ったように両手を合わせて頭を下げる遙に、しんのすけは「んもう、仕方ありませんなあ」と残念そうに言った。

そんな遣り取りを交わした後、カウンセリングが始まった。当たり障りの無い質問から少し踏み込んだ質問まで、答えようか迷う素振り込みで観察しようとする遙だが、しんのすけは彼女からの質問に一切躊躇無く、しかも正直に答えてみせた。

「はい、それじゃ質問は以上です。こんな時間まで付き合ってくれて、ありがとうございます」

「お安いご用だゾ、遙ちゃん！ またいつでも呼んでね！ もちろん、カウンセリングじゃなくしてお食事のお誘いでも全然オツケーだゾ！」
「ありがとう。——とところでしんちゃん、これはカウンセリングとは関係無いんだけど……」

「おっ、どうしたの？」

口元に手を当てて内緒話をするように身を乗り出す遙に、しんのすけも自然と身を乗り出して彼女に顔を近づける。

「2年生の壬生さんとカフェで痴話喧嘩したって噂があるんだけど、本当なの？」

「チワワ喧嘩？」

「痴話喧嘩。恋人同士でやる喧嘩ってこと。んで、どうなの？」

「恋人お？ 全然違うゾ。オラ、子供には興味ありません」

「子供って、あなたよりも年上——あぁつと、それじゃ、壬生さんとはどんな会話をしたの？」

遙の質問に、しんのすけは「どんなって言われても……」と前置きして、

「オラが剣道やってたときの話とか、この前紗耶香ちゃんを助けたときの話とか……。ああ、後は、一緒に差別がどうのこうのって……」

「差別？ それってもしかして、一科生と二科生の確執のこと？」

「うん、そんな感じだったゾ。——んもう、遙ちゃんも達也くんも、なんでそんなことをそんなに気にしてるの？」

しんのすけの口から飛び出した「達也」という単語に、遥の肩がピクリと跳ねた。

「達也くん？ それって二科生で風紀委員になった、司波達也くんのことかしら？」

「うん、そうそう。ついさつき達也くんとその話になって、達也くんから『剣道部の人達に気をつける』って言われたんだゾ」

「……へえ、どうして？」

「何だっけ？ えっと、ブラジャー？ 江頭？ 確かそんな名前だった気がするゾ……」

「ひよつとして、『ブランシユ』と『エガリテ』？」

「おおっ！ そんな感じの名前だった気がするゾ！」

パンツ！ と手を叩いて「それだ！」とばかりに指を差すしんのすけに、遥は口角を上げてニツコリと笑みを浮かべた。しかし口元に反して、その目は何か獲物を狙っているかのように鋭さを残している。

もつとも、遥の魅力にデレデレのしんのすけがそれに気づくはずもないのだが。

「うん！ ありがとう、しんちゃん！ とつても助かったわ！ また何かあったら呼ばせてもらおうわね」

「おおっ！ 寂しくなったら、いつでも呼んで良いからね！ 待つてるゾ、遥ちゃん！」

しんのすけは大きく手を振ってはしゃぐように飛び跳ねながら、上機嫌で保健室を後にしていった。その仕草はまさに、そのまま体を小さくすれば幼稚園児そのものに見えることだろう。そんな彼が部屋からいなくなったことで、先程までの喧騒が嘘だったかのようにシンと静まり返った。

そして彼がいたときは常時ニコニコと笑っていた遥が、今は真剣な表情で口元に指を添えて何やら考え込んでいる。

「司波達也くん、か……。まさかエガリテの存在に自力で辿り着く高校生がいるなんて……。これはちよつと注意が必要かしら……。？」

そんなことを呟いた後、遥は机の上に置いていた携帯端末へと手を伸ばし、

こんこん。

それを掴みかけたそのとき、保健室のドアを軽くノックする音が聞こえた。

「小野先生、まだいますか？」

「ええ、まだいるわよ。入ってきて」

ドア越しに掛けられた遠慮がちな女子生徒の声に、遙は即座に先程までの柔らかい笑顔に戻って返事をした。

それを受けて、ドアを開けて1人の女子生徒が「失礼します」と言っ
て中へと入ってきた。艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そ
してそれを囲む赤縁の眼鏡、そして制服にはエンブレムが無いことか
ら二科生と思われる彼女に、遙は内心「こんな生徒いたかしら？」と
訝しむ。

しかし彼女はそれをおくびにも出さず、目の前の椅子を指し示し
「どうぞ、座って」と声を掛けた。女子生徒は小さく頭を下げ、その
椅子へと静かに腰を下ろす。

「それで、今日はどうしたの？ 何か悩み事があるのなら、遠慮無く私
に言って」

「はい、分かりました。——さっきここで先生が話してた男子生徒の
ことなんです」

「野原しんのすけくんのこと？ 彼がどうかした？」

先程までは彼のことを「しんちゃん」と呼んでいた遙だが、他の生
徒の手前、今はフルネーム呼びである。

しかし彼女は、クスリと笑い声を漏らし、

「小野先生、さっきまで「しんちゃん」って呼んでたじゃないですか。
今更誤魔化さなくても大丈夫ですよ」

その瞬間、遙の両目がスツと細められた。

「……あら、盗み聞きしていたのかしら？ おかしいわね、ここは他の
部屋よりも特に防音対策をしっかりしているはずなのに。カウンセ
リングでは他人のプライベートに深く関わることもあるんだから、あ
まり盗み聞きしたらその人が可哀想よ」

「ごめんなさい、これが私の「仕事」なんで」

「……仕事？ どういう意味かしら？」

「別に、そのままの意味ですよ。あなたも同じでしょう、小野遥先生？
いや——

——“ミズ・フロントム”

「——！」

その瞬間、遥は勢いよく椅子から立ち上がって彼女から距離を取り、警戒心を顕わにして構えの姿勢を取った。その表情はつい先程までの“カウンセラー・小野遥”とはかけ離れた、まるで様々な修羅場を乗り越えてきた歴戦の兵士のような雰囲気醸し出している。

そしてそんな彼女の変わり身の早さに、女子生徒はショーでも観るかのようにパチパチと拍手を贈っていた。

「さすがですね、小野先生。その身のこなしも、公安の人に教えてもらったものですか？」

「……あなた、どうやって私のことを調べたの？」

「さあ、どうやってでしょうか？ まあ、そんなことは置いといて、今日はあなたの方に“お願い”をしに来たんですよ」

「……お願い？」

オウム返しに問い掛ける遥に、少女はにっこり笑って「はい」と頷き、

「さっき話してた野原しんのすけくんは、あんまりちよつかいを掛けないであげてほしいんです。彼、綺麗なお姉さんを見るとすぐにナンパするくせに純粋で初心うぶだから、あなたみたいな人にすぐコロツと騙されちゃうんですよ」

「あら、別に私は彼を騙すつもりなんて無いし、あなたには関係の無いことでしょう？」

「たとえ関係無かったとしても、あなたみたいな人に体よく利用される彼を想像すると不憫でならないんです。というわけで、私のお願いを聞いてくれませんか？」

「へえ、わざわざそんなことを頼みにやって来るなんて、もしかしてあ

あなたは彼のことが好きなのかしら?」

「ええ、彼のことはとても好きですよ。もちろん、あなたの言う意味ではなくてね」

この程度の揺さぶりは無意味か、と考えながら、遥は女子生徒の右手首辺りに目を遣った。

そこには、赤青白トリコロールのリストバンドが巻かれていた。

「それで? そのお願いを拒否したら、どうするつもりかしら?」

「うーん、そうですねえ……。具体的な措置については、”上”に指示を仰ぐとして、例えばあなたの過去に犯した”悪戯”の数々を暴露する、とかどうですかね?」

「へえ、私のことを脅すの? こうして私の前に姿を現した以上、こっちもあなたのことを調べ上げることだってできるのよ?」

「どうぞ自由にならね。——それじゃ先生、また明日」
女子生徒は丁寧な所作でお辞儀をすると椅子から立ち上がり、ゆつくりと保健室を出ていった。彼女がいなくなったことで、保健室が再び静寂に包まれる。

しかしその静寂は、先程しんのすけが出ていったときのそれとはまるで違っていた。

少なくとも、遥はそう感じていた。

「まったく、今年は厄介な生徒が多いわね……」

吐き捨てるように呟かれた遥の言葉は、紛れもなく本心からのものだった。

*

*

*

それから数日後。

その放送は、授業を終えた生徒が帰り支度をしたり部活に向かおうとしている最中に行われた。

『全校生徒の皆さん! 僕達は、学内の差別撤廃を目指す有志同盟です!』

校内中のスピーカーから聞こえてきたその声に、生徒だけでなく教

師までもが何事かと動きを止めてスピーカーを見上げた。普段このような呼び掛けが放送されるようなことは無く、どう考えても校内放送の不正使用と思われる。

『僕達は生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します！ この要求が受け入れられるまで、僕達は放送室から出るつもりはありません！』

「わわっ、何々？」

1年A組の教室に備えつけられたスピーカーもそれは同じで、声をあげて困惑を示すほのかと同じように、深雪や雫も同じような表情を浮かべている。

そしてそんな中でも、しんのすけは相変わらず自分のテーブルに突っ伏して惰眠を貪っていた。

『魔法教育は実力主義、それを否定するつもりは僕達にもありません！ しかし校内の差別は、魔法実習以外にも及んでいます！ 僕達は魔法師を目指して魔法を学ぶ者ですが、それと同時に高校生でもあります！ 魔法だけが僕達の全てではありません！』

「どこの馬鹿だ、こんなことしてるのは！」

「どうせウィードの奴らだろ！ 嘗めた真似しやがって！」

A組の生徒がスピーカーに向かって口々に叫ぶ中、深雪の携帯端末が震えてメールの着信を知らせた。

メールの差出人は達也だった。エガリテと思われる集団が放送室を不法占拠しており、風紀委員・生徒会双方で方針を話し合うために集合を呼び掛ける、という内容だった。そのメールには、不法占拠のメンバーと目される生徒の名前も記されている。

そしてその中に、壬生紗耶香の名も書かれていた。

「深雪、呼び出しのメール？」

「そうみたい。ちよっつと行ってくるわね」

深雪はそう言って教室を出ていこうとして、風紀委員が集まるのだからしんのすけも連れて行った方が良くと踵を返した。

「しんちゃん。私と一緒に——」

しんのすけを起こそうと彼の席に視線を向けた深雪は、彼が既に目

を覚まして自分の携帯端末を見つめているという光景に、本人には失礼だと分かっているながら若干の驚きを覚えた。

そしてそれ以上に、深雪が驚きだったのが、

——しんちゃんのおんなに真剣な表情、初めて見たわ……。

「おっ？ どうしたの、深雪ちゃん？」

携帯端末から視線を外して深雪を見上げるしんのすけの表情は、いつも通り気の抜けた彼らしいものに戻っていた。

それこそ、先程までの表情が見間違いだったかのように。

「しんちゃんも呼び出しがあったでしょう？ 一緒に行きましょう」

「ほいほーい」

独特の返事をして席から立ち上がったしんのすけは、深雪の脇を通り過ぎて教室を出ていった。

何やら胸に引っ掛かる心地を覚えながら、深雪も彼の後に続いて教室を出た。

第11話 「学校に迫る黒い影……だゾ」

結論から書くと、「有志同盟」と名乗る一部生徒による放送室占拠事件は、さほど時間も掛からずに終結した。立て籠もりメンバーの1人である壬生紗耶香と連絡先を交換していたしんのすけが橋渡しとなり、彼らを穏便に部屋から出すことに成功したからである。

むしろ騒動の本番は、ここからだった。

確かに説得の際に彼らの要求する「交渉」には応じると言ったが、彼らが起こした今回の騒ぎを容認することはできない。これを許してしまつては、自分達の主張を通すためにルールを無視した強引な手段を取ることが横行してしまう。よつて風紀委員は彼らを取り押さえようとしたのだが、あろう事か生徒会長である真由美がそれを止めてしまったのである。

どうやら彼女は学校側と話し合い、今回の騒動に対する措置を生徒会に委ねることを了承してもらつたらしい。結局彼らは見逃され、真由美との交渉に息巻く姿を風紀委員達が見送ることでその場はお開きとなった。

そして、それから数時間後。

有志同盟との交渉を終えた真由美が生徒会室に集めたのは、風紀委員長の渡辺摩利と、部活連会頭の十文字克人。ここまでは生徒自治のトップということで理解できるが、なぜかここに1年生でしかないはずの司波達也と司波深雪、そしてどこか上の空な野原しんのすけも含まれているとなると、どうにも真由美自身の私情が含まれている気がしてならない。

しかし達也のそんな疑惑は、真由美の口から飛び出した言葉によつて掻き消された。

「——公開討論会？」

オウム返しに尋ねた達也に、真由美はニコリと笑つて頷いた。

「さつき話したあの子達、一科生と二科生の平等な待遇を要求するのは良いけど、具体的に何をどうしろつていうのはよく考えてなかつたみたいだね。むしろ生徒会の方で考えろつてスタンスだったのよ。」

それで結局押し問答みたいになっちゃってね、最終的に明後日の放課後に講堂で公開討論会をすることで手を打ったの」

「明後日の放課後とは、これまた随分と急ですね……」

達也は驚きを口にしたが、それは討論会の日時に対してであって、討論会そのものについてはそれほどでもなかった。相手を引つ張り出して分かりやすく正面对決に持ち込むことが、一番手っ取り早く事態を終息へと導く方法であることには同意であるからだ。

しかしそれでも、明後日の放課後というのはかなり急だ。ゲリラ活動をやる相手に時間的余裕を与えないという考えは理解できるが、その分こちらでも対策を練る時間が取れないはずだ。

「それについては心配無いわ。こちらから討論会に参加するのは、私1人だけだから。打合せ不足で小さな食い違いを起こして、そこから印象操作で感情論に持ち込まれる方が厄介なものね」

「……つまり会長は、ロジカルな論争なら負けるつもりは無いと?」
「それも無くはないけど、もしあの子達が私を言い負かすだけのしつかりした根拠を持っているのなら、これからの学校運営にそれを取り入れればいいだけの話だしね」

むしろ真由美は自分が論破されることを望んでいるのでは、と彼女の話を聞いていた達也は思ったのだが、それはあまりにも穿ちすぎだろうか。

と、それまで穏やかな雰囲気だった真由美が、ふと表情を引き締め、雰囲気鋭くした。

「ちなみにこの公開討論会は、基本的に生徒達には“全員参加”を呼び掛けるつもりよ。1ヶ所に集めておいた方が、万が一のことがあったときに対処がしやすいでしょう?」

そして彼女のその言葉を聞いた途端、達也も深雪も摩利も克人も、彼女と同じように何かを覚悟するような緊迫した雰囲気へと変貌を遂げた。

そんな彼らの雰囲気の変化について行けていないのは、1人だけ。

「えっ? 万が一のとぎつて?」

戸惑う様子で全員を見渡しながら尋ねるしんのすけに、真由美は一瞬だけクスリと苦笑いを浮かべ、そしてすぐさま再び表情を引き締め、その質問に答える。

「今までは水面下で工作員を増やすだけだった有志同盟が、放送室を占拠するという強引な手段を取ってまで自分達の存在を主張し、私達との交渉の場を求めてきた。つまりここに来て、有志同盟——つまりその背後に潜む組織の中で方針が転換したということよ。多分今後は、より過激な手段で攻めてくるでしょうね」

「そんなタイミングで公開討論会が開催されるとなれば、奴らだって黙っていないだろう。おそらくこの討論会を狙って何か仕掛けてくるに違いない、と考えておくべきだろうな。今回の討論会を2日後に設定したのは、討論そのものに対する準備だけでなく、そういった武力行使に対する準備期間を与えない、という意味も含まれている。——ということだな、真由美？」

真由美の言葉を引き継いで説明をした摩利が確認の意を込めて彼女に視線を向けると、彼女は満足そうに笑みを浮かべて深く頷いた。するとそれを聞いていたしんのすけの表情に、明らかな恐怖の色が浮かび上がった。高周波ブレードを目の前にしたときも一切動揺を見せなかった彼が見せたそれは、ここにいる誰もが初めて見たものであり、現に達也は驚きと共にほんの少しだけ目を見開いた。

「そ、それって、もしかしたら怖い人達がこの学校を襲ってくるかもしれないってこと？」

「もちろん実際に相手がどんな手段で来るかは分からないし、そもそも本当にその日を狙って来るかも分からない。だが可能性がある以上、警戒しておくに越したことはない」

腕を組んでどっしりと構えながらそう口にする克人に、それでもしんのすけの恐怖が和らぐことは無かった。

「でも、もし怖い人達が来たらその人達と戦うってことでしょ？ そんなの危ないゾ！」

「確かに、もし学校内で戦闘行為が発生すれば、まったくの無傷というわけにもいかないでしょうね。でもこの学校に勤めている先生方は、

日本でも屈指の優秀な魔法師ばかりなの。もちろん研究職しかやってこなかった先生中にはいるけど、実戦経験豊富な現場で鍛えられた先生も数多くいるわ」

「さらに付け加えるならば、このような有事の際におけるシミュレーションは複数パターン想定され、定期的な訓練も行われている。政治的にも重要な役割を果たす魔法師を育成する教育機関というだけあって、普段からそのような事態に対して備えは欠かしていない」

「それに自慢じゃないが、我々だってそれなりに経験は積んでいる。そこら辺の奴らにはそうそう遅れを取らないということを見せてやろう」

摩利の発言は、けっして世間知らずの子供が増長しているのではない。ここに揃っている『三巨頭』は既に国際A級ライセンスに相当するほどの実力だと目されており、それ以外の生徒も風紀委員のメンバーを筆頭にプロの魔法師にも引けを取らない実戦経験を持つ生徒が数多く在籍している。それこそテレビのコメンテーターや専門家から、下手な小国の軍隊よりも大きな軍事力を備えていると評されることもあるほどだ。

「でもでも、ケガしちゃうかもしれないでしょ！ 学校だって壊れちゃうかもしれないし！ 警察の人とかに任せることはできないの？」

「……今回は厳しいものがあるな。おそらく『ブランシュ』が裏で糸を引いていることは推測できるが、断定ではないし、現時点では奴らのアジトも判明していない。襲撃が行われるであろう明後日までに調査を終え、奴らを摘発するのはおそらく無理だろう」

「……それってつまり、そいつらのアジトを見つけて、しかもオラ達の学校を襲おうとしているってのが分かればオツケーってこと？」

「……まあ、そうなるが」

克人の返事は字面こそ肯定的ではあるが、その声に含まれているのはどこまでも否定的なニュアンスだった。それができれば苦労はしない、という意思がありありと見て取れる。真由美も摩利も実に残念そうな表情を浮かべている辺り、彼と同意見だろう。

普段とはまるで違う反応を見せ続けるしんのすけに、摩利が気遣うような声色で話し掛ける。

「……大丈夫か、しんちゃん？ 何だったら、しんちゃんは今回の作戦から離れてもらっても構わないぞ？ いくら風紀委員とはいえ、実戦経験の不足でいざというときに動けなくなってしまうては——」

「摩利ちゃん。ちよつと電話しても良い？」

「へっ？ えっと、まあ別に構わないが、できれば今話している内容は口外してくれるなよ？」

突然の頼みに戸惑いながらも了承した摩利に、しんのすけはお礼の言葉もそこそこにさっそく携帯端末を取り出した。

そうしてどこかへと電話を掛ける彼を、全員が怪訝半分、興味半分で眺めている。

5人の視線を浴びながら、その電話が繋がった。

「おっ、もしもし、『お色気』のお姉さん？」

「……………？」

その人物を形容しているのか、あるいは何かの暗号なのか、そんな判断に困る単語がしんのすけの口から飛び出したその瞬間、驚愕と困惑とで反応が真つ二つに分かれた。

ちなみに前者が達也・真由美・克人で、後者は深雪・摩利である。

「お姉さんとさっき話してたことなだけでさ、そのとき『できれば誰にもこのことは話さないで』って言ったでしょ？ ——そうそう、ちよつと事情が変わっちゃってさ、他の皆にもそれを話した方が良かったって思っ。——大丈夫、そんなに多くないゾ。5人だけだから」

「……………」

相手の声が聞こえないので、2人が具体的にどんな会話を交わしているのかは分からない。しかしこのタイミングでの通話、そしてしんのすけが何か情報を握っており、それを自分達に話しても良いか情報の提供元に許可を貰おうとしていることだけは理解できた。

しんのすけ以外の5人が無言で顔を見合わせ、部屋の空気が徐々に

緊張感で包まれていく中、しんのすけと電話の相手との会話が続く。「皆オラの友達だから、内緒の話をしてもらおうと思うゾ。——おつ、今？ うん、一緒にいるゾ。一緒に話したい？」

一緒に話、の辺りで真由美の肩がピクンと跳ねた。

しかしそれに気づかないしんのすけは、「ちよつと待ってて」と言ってから一旦電話を中断し、画面を何回かタップしてからそれをテーブルに置いた。おそらく全員に電話の音が聞こえるようにしたのでろうと勘づいた達也たちは、無意識の内にそれぞれの席で身を乗り出して相手の第一声を待つ。

そうして聞こえてきたのは、

『しんちゃんのお友達の皆さん、聞こえるかしら？ 私は“SML”の一員で、コードネーム“お色気”という者よ』

「……………」

声色からして成人女性と思われるゲストの登場に、達也、真由美、克人の3人が改めて口を引き結んだ。

しかし彼女が名乗った組織に聞き覚えの無い深雪、摩利は相変わらぬの困惑顔を浮かべている。

「あの、申し訳ございません……。その“SML”というのは……………」
「ああ、深雪さんが知らなくても無理はないわ。“SML”というのは国連直属の秘密組織で、国際的な犯罪組織に対する諜報活動と取締りを主な任務内容にしているの。国籍も人種も、さらには魔法師と非魔法師の区別無く様々な諜報員が在籍しているらしいけど、国連の組織の中でもかなり独立性の強い組織だからか、ほとんど噂が出回らないのよね」

余談だが“SML”というのは“正義の味方LOVE”の頭文字を取ったものであり、けっして服のサイズを指しているのではない。なお、しんのすけの両親が最初にその由来を聞いたとき「なんで日本語と英語がごっちゃになってんだ」とツツコミを入れていた。ごもつともである。

ちなみに真由美の説明を黙って聞いている達也も、この組織の存在を知ったのはごく最近のことだ。しんのすけのことを真夜から聞いて以来、自身の持つ様々なコネを駆使して色々と調べた結果、その組織の存在に辿り着いたのである。

——その組織のメンバーの中に、例の時間のループに囚われていた者がいたらしいことまでは突き止めた。まさかその人物が彼女だというのか……？　そしてそんな彼女と自由に連絡を取れるほどの関わりを持つしんのすけ……。まだまだ調査が必要だな。

内心そんなことを考えている達也をよそに、事態は進んでいく。

『突然で申し訳ないんだけど、みんなそれぞれ簡単に自己紹介してもらえるかしら？』

「国立魔法大学付属第一高校3年、部活連会頭の十文字克人です」

「——！　同じく3年、生徒会長の七草真由美です」

「……つと、同じく3年、風紀委員長の渡辺摩利です」

「国立魔法大学付属第一高校1年、風紀委員の司波達也です」
「同じく1年、生徒会書記の司波深雪です」

真つ先に驚愕から回復した克人を筆頭に全員が自己紹介を終えると、お色気と名乗る女性は電話の向こう側で『ふむふむ、成程ねえ』と意味ありげな呟きをした。おそらくだが、こちらにも聞こえるようにわざと声を大きくしていると思われる。

『入学してまだ1ヶ月も経っていないのに、既に十師族が2人も接触してきたというわけね。本当にしんちゃんって、嵐を呼ぶ幼稚園児』
“——あつと、今はもう高校生だったわね”

「……………」

克人も真由美も何も言わず、お色気の手言葉をただ黙って聞いている。それを見ていた達也は、特に真由美の方から、まるで裁判を受ける被告人が裁判長からの判決を待ち構えているかのような印象を受けた。

『まあ、しんちゃんがあなた達を“友達”と言ったってことは、それなりに信頼関係があると見て構わないってことよね。しんちゃん、相変わらず綺麗なお姉さんには弱いけど、それが絡まなかつたら本能的に

人を見分ける目には長けてるわけだし』

そしてお色気のこの言葉で、その緊張感が少しだけ和らいだ、気がした。

『結論から言うと、ブランシユの日本支部については私達もかなり前からマークしてたわ。念入りに情報を仕入れて奴らの実態を暴いてから、一気に摘発するつもりだったの』

まあ色々と予定は狂っちゃったけど、とお色気はそう呟いてから、これまで自分達が調べ上げた情報の“一部”を話し始めた。

一高内にて作業員を増やしつつある“エガリテ”のリーダーは、剣道部部長の司甲。彼の旧姓は“鴨野”といい、陰陽師の大家である“賀茂家”の傍系である鴨野家の出身だ。彼の近親者には魔法的な因子は発見されておらず、彼の“眼”は先祖返りと考えられる。

そして彼の母親の再婚相手の連れ子、つまり義理の兄に司つかさ一はじめという人物がいるのだが、彼がエガリテの親組織である“ブランシユ”の日本支部リーダーを務めている。“SML”の調査により、表向きだけでなく裏の仕事も取り仕切ってる真正正銘のリーダーであることは判明済みだ。

ちなみに、その一が使用する魔法についても既に色々調べている。詳しい系統や仕組みについては不明だが、どうやら彼はマインドコントロールに似た効果をもたらす魔法を会得しているようであり、甲を始めたメンバーの何割かは彼による洗脳を受けているらしい。

「洗脳ですって！ そんなやり方で生徒達をむりやり仲間に仕立て上げるなんて……！」

『洗脳とはいっても、初めから存在しない感情をゼロから作り出すのは至難の業よ。おそらく元々学校や自分の境遇に対して持っていた不満を増幅させた、と考えるのが自然でしょうね。でもまあ、それについては後で議論するとして、問題は今の奴らの動きよ』

「今の奴らの動き、とは？」

克人の疑問に、お色気はどこかうんざりしたような声でこう答えた。

『この数時間の間で、エガリテ、そしてブランシユの奴らが一気に慌た

だしくなった。あなた達、明後日の放課後に討論会をする予定でしょ？ あなた達の睨んだ通り、奴らはその討論会を狙って武装襲撃をしますつもりらしいわよ』

「――！」

想定していたとはいえ、こうして実際にその動きがあることを伝えられたことで、部屋の空気が一気に緊張感を増した。

『奴らの目的は、学外には持出禁止となっている最先端の魔法研究資料よ。おそらく襲撃の混乱に乗じて、どこかの情報端末からその資料を抜き取ろうって寸法ね。魔法による差別の撤廃を謳っている組織がなんで最先端の魔法研究資料を必要としているのか、なんて疑問はこの際置いておきましょう』

「横から失礼します。質問をしても宜しいでしょうか？」

『その声は確か、司波達也くんね。どうぞ』

「そこまでリアルタイムで奴らの動向を把握できるということは、もしかして奴らのアジトは既に割れているということですか？」

『ええ、その通りよ』

何の気概も無くあっさりと言ってのけるお色気に、質問をした達也だけでなく、しんのすけを除く全員が大なり小なり目を見開いて驚きを顕わにした。

そしてその隙に乗じて、というわけではないだろうが、しんのすけがお色気と呼び掛ける。

「ねえ、お色気のお姉さん！ そのブラジャーが学校に来る前に捕まえることってできない？」

『ブランシユね。もちろんその予定よ。子供達がたくさんいる学校で戦闘紛いを起こさせるわけにはいかないわ。向こうが急に慌ただしくなったから、こっちも急ピッチで準備してるところ。ちなみに私、その摘発作戦のリーダーを任せられたわ』

「おおっ、良かった！ それじゃ、オラ達が学校で戦わなくても大丈夫だねー！」

『ええ、安心してちょうだい。あなた達も、くれぐれも危ない橋は渡らないでちょうだいね』

確かに現時点で魔法科高校の襲撃計画が判明し、しかもアジトの位置も割れている以上、真由美ら魔法科高校の出る幕は無い。〃SML〃はこの手の摘発に関してはプロ中のプロであり、このまま任せれば間違いなくブランシユ日本支部は摘発されて消滅することだろう。そうなれば、キナ臭い雰囲気漂っていた学校にも再び平和が訪れる。

「失礼します、その……お色気さん」

それを充分知ったうえで、真由美はお色気に呼び掛けた。

「そのブランシユの摘発作戦ですが、明後日の我々の討論会が終わるまで待つてはもらえないでしょうか？」

「何——！」

思わず驚きの声をあげた摩利、声こそあげないものの息を呑んだ深雪に対し、達也と克人は予想していたのか随分と落ち着いていた。

『……さっきの話を聞いていたかしら？ 子供達を巻き込みたくないから、学校襲撃前に片を付けようと準備しているところなんだけど』
小さな子供に言い聞かせるようにゆっくりと話すお色気の声には、若干の怒気が含まれていた。

しかしそれでも、真由美が怯むことは無かった。

「その心遣いは重々承知しています。しかし我々はただの高校生ではなく、未熟ながらも魔法師のコミュニティに身を置き、常日頃から授業などで魔法の腕を磨いています。そしてそれは、戦闘行為や災害などが発生したときに少しでも動けるようにするためです」

『だからたとえテロリストが学校を襲撃しても、それに対抗するための術は身に付けている、と。確かにそうかもしれないけど、避けられるリスクをわざわざ背負ってまでテロリストを呼び込む必要はあるのかしら？ それにこちらとしては、その提案を受け入れるメリットがあるとは思えないのだけど』

「私達の学校を襲撃するには、エガリテに所属している学生だけでは戦力不足です。おそらく、ブランシユからも戦力の一部を寄越すことになるでしょう。つまり、相手の戦力が分散される形となります。しかも襲撃作戦の実行中は、こちらの動向にある程度注意が向けられる

と考えられます。そちらの摘発作戦にも、少なからず有利に働くと考えます」

『一応の理屈は通る、か。——で？ それだけが理由じゃないんでしょう？』

お色気の問い掛けに、真由美は力強く頷いてから口を開いた。

「確かにSMLの皆さんに任せれば、我々が出る幕も無く今回の事件は解決するでしょう。——しかしそれは、本当の意味での解決にはならないと考えます」

『……どういう意味かしら？』

「ブランシュが摘発されれば、その下部組織であるエガリテも機能しなくなる。しかしそれでは、明後日に予定している討論会も行われなくなってしまう。先程お色気さんも仰っていたように、奴らが我々に目を付けたのは、自分達の学校や境遇に対する不満や学校制度に起因する差別意識があったからでしょう。それを少しでも取り除かない限り、また似たような奴らが我々を狙ってくると考えられます」

『そのためにも討論会が必要、ということかしら？』

「はい。不幸中の幸いとも言えます。今回の騒動によって生徒達の間で学校に蔓延る差別意識への関心が高まっています。このタイミングで生徒会長である私が差別撤廃に関する明確な方針を打ち出すことができれば、完全に解決とまではいかななくても改善の切っ掛けにすることが出来ます」

『成程ねえ……。あなた、随分と可愛らしい見た目をしてるけど、なかなか良い性格をしているじゃない』

お色気のからかいを多分に含んだその言葉に、真由美はニッコリと笑みを浮かべて応えた。テレビ電話ではないので彼女にその笑顔は見えないが、おそらく伝わってはいるだろう。

『確かにあなたの考えは分かるけど、それでもこちらとしては子供達が大勢いる学校にテロリストが襲撃するって分かってて見過ごすことはできないわ。——しんちゃん、あなたはどう思う？』

お色気が話を振り、それに合わせて全員がしんのすけへと顔を向け

る。

名前を呼ばれた本人は、太い眉を眉間に深い皺が刻まれるほどに寄せ、髪を短く切り揃えた頭を抱えて悩ましげに唸り声をあげていた。「うーん、正直オラにはよく分からないゾ……。そんなに討論会って必要？」

「今回の一件は、元を糺せばこの学校に蔓延していた差別意識につけ込まれて起こったことだ。つまりその差別意識が、我々にとっての『隙』だったと言える。今後と同じようにその隙を突かれ、そしてその結果何かしらのダメージを負った場合、それまで通りに学校を運営していくことは難しくなるだろう」

「そしてそんな事態になれば、日本にある他の8つの魔法科高校にも横槍が入るわ。そうなれば日本での魔法師の育成が滞ってしまい、もしものときに魔法師が動くことができなくなってしまふ。最悪、魔法で対抗できない日本はどこかの外国に侵略されてしまふ可能性だけであるわ」

「まあ、さすがに今回の件からそこまで発展する事態にはなかなかならないと思うが、それでも我々に害意を持つ輩に付け入られる隙がある以上、それを排除するに越したことは無いな」

克人、真由美、摩利による説明を聞いて尚、しんのすけの眉間の皺は取れない。

「……ねえ、達也くんはどう思う？」

「討論会のことを抜きにして考えても、相手の戦力を分散したうえで同時に叩くというのは戦略的にも有効なのは確かだな」

「……でもさ、いくら真由美ちゃんや摩利ちゃん達が強かったとしても、絶対に怪我しないなんて言い切れないでしょ？ それに向こうだって、中にはこの学校の人も混じってるんでしょ？ その人達は悪い人に操られてるだけなのに、同じ学校の友達同士で戦わなきゃいけないなんて嫌だゾ」

「……成程、優しいのね、しんちゃん」

微笑みを携えて真由美が口にしたその言葉は、皮肉の無い純粹なものだった。

摩利も同じように口元に笑みを浮かべ、それでもしんのすけを説得する。

「もちろん、洗脳されている生徒に対しては極力怪我を負わせないようにするさ。今回の襲撃に関しては我々が誘い出した側面もあるからな、指導やメンタルケアを義務付けることはあっても、罰則を与えるつもりは無いよ」

「……摩利ちゃんは、自分が怪我するかもしれないことが怖くないの？」

「怖くないわけではないさ。しかしアタシは風紀委員長であり、そして1人の魔法師だ。様々な権利を与えられる代わりに、有事の際に動く『義務』がある。——それにしんちゃんだって新入生勧誘期間のときに、壬生紗耶香を守るために戦ったじゃないか。それと同じだよ」

「オラは別に、そんな難しいことなんて考えてなかったゾ。紗耶香ちゃんが危ないって思っただけで、何とかしなきゃって感じで……」

「それで良い。今回はその『守る対象』が広く想像しづらくなっていただけだ、根本的な部分はそれと変わらん」

腕を組みながらどっしりと構えてそう言う克人に、しんのすけは「うーん」と唸りながら考え込む。幼稚園児の頃ならば、風船のように頬が膨らんでいたことだろう。

他の5人は口を挟むことなく、その様子をただ見守っている。

やがて、しんのすけが口を開いた。

「……正直、オラにはよく分からないゾ。でも真由美ちゃん達が必要だって言うんなら、本当に必要なんだって思う。——皆ができるだけ怪我しないように注意するんだよね？」

「ああ、もちろんだ」

『私の方からも、できるだけサポートはするつもりよ』

お色気からの言葉もあり、しんのすけの決意は固まった。

「よーし、オラ決めた！ オラも一緒に戦うゾ！」

「よく言った、しんちゃん！」

「オラも皆と一緒に、この学校を守るんだゾ！ 一高防衛隊、ファイ

「ヤー！」

「ファ、ファイヤー？」

『あら、随分と懐かしいわね』

しんのすけの掛け声に摩利が困惑の声をあげ、お色気が笑い交じりでそう言った。

「強い敵に立ち向かっていくとき、オラ達はいつもこうやって叫んでたんだゾ！」

「ふむ、戦意高揚のために声を合わせて叫ぶというのは理に適っているな」

「克人くんもそう思う？ それじゃ皆で、せーの——」

「えっ？ わ、私達もやるの？」

「ほら、やるぞ真由美。どうやら十文字はなかなか乗り気のようにだからな」

「如何しますか、お兄様？」

「……まあ、別に拒否するほどのものじゃないしな」

気乗りしていない者も何人か見受けられるが、そんなことは無視してしんのすけが力強く拳を握り締めて、大きく息を吸い込んだ。

「一高防衛隊、ファイヤー！」

『ファイヤー！』

「ファイヤー！」

「ファ、ファイヤー！」

「ファイヤー」

「ファイヤー」

「ファイヤー」

おおよそ高校の生徒会室に似つかわしくない掛け声と共に、6人が一斉に拳を突き上げた。

*

*

*

魔法科高校のすぐ近くにあるその建物は、かつてはバイオ燃料を生産する工場だった。しかしその企業が環境テロリストの隠れ蓑で

あつたことが発覚すると、夜逃げ同然で放置されてしまったのである。しかしそういつた奴らのアジトただただあつてそこらの建物より強固な守りをしており、しかも廃墟ということもあつて極端に人の目が行き届きにくい。

その工場の一室である、おそらく元は生産ラインの中核として様々な機械を置いていたであろうだだっ広い部屋に、白衣に長いマフラーに眼鏡という出で立ちの男が立っていた。そして彼の周りには、銃火器で武装した幾人もの男達が彼を守るように一定の距離を空けて取り囲んでいる。

その男こそ、第一高校で起こった一連の騒動を裏で操る首謀者であり、ブランシユ日本支部のリーダーである司一だった。

「諸君、国立魔法大学付属第一高校への工作活動を開始して2年になるが、いよいよ明後日に我々の活動が1つの転換点を迎える。これもひとえに、私の志に賛同し協力してくれた君達の力あつてこそだと断言しよう」

演説めいた一の言葉に、周りの人間は一切返事をしなかった。しかし、一が気分を害した様子は無い。そもそも、返事を期待して発せられたものではなかった。

「当日の君達の役割は、先程話した通りだ。皆が各々の役目を理解し、それを果たしてくれれば、必ずこの作戦は成功する。自分達が優秀であると思いがっている魔法師の連中に、我々が現実を突き付けてやろう」

彼の「独り言」は少々声が大きく、そして大分芝居掛かっていた。多大な時間とコストを掛けた今回の作戦がもう少して成就すること気分が良くなっている、という見方もできるが、おそらく彼の元々の性格から来ているところが大きいだろう。

そんな彼の言葉を聞くのは、武装している男達だけではなかった。彼らから少し距離を空けて高校生と思われる少年少女も見受けられ、そしてその全員が一樣にぼんやりとした表情で俯き加減に耳を傾けている。

そしてその中に、艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そし

てそれを囲む赤縁の眼鏡という出で立ちの女子生徒もいた。彼女の右手首には、赤青白トリコロールのリストバンドが巻かれている。

「……………」

彼女も他の少年少女と同じように、俯き加減に一の言葉を黙って聞いていた。

第12話 「一高防衛隊ファイヤー!」 だゾ その1」

生徒会での話し合いから2日後の放課後、あつという間に公開討論会の時間がやって来た。

会場である講堂は、事前に全生徒の参加を呼び掛けただけあって非常に賑わっていた。前半分が一科生、後ろ半分が二科生といういつもの光景だが、いつも以上に両者の間でピリピリした空気が漂っているように思える。

壇上には、向かって右側に有志同盟のメンバーが4人、ガチガチに緊張した様子でパイプ椅子に座っていた。左側には会長である真由美が悠然と座り、その傍で副会長の服部が付き従うように姿勢良く立っている。そして舞台袖には、鈴音やあずさといった生徒会役員、さらには森崎などの風紀委員も数人控えている。

「……同盟側の生徒が何人かいませんね。おそらくその者達が、別に控えている実力行使の部隊ということなのでしょう」

客席を鋭い目つきで観察していた鈴音が、独り言のように、しかしその実周りの生徒に聞かせるように呟いた。それを聞いたあずさが緊張したように口を引き結び、風紀委員が今にも飛び出しそうに若干前のめりになる。

と、そうこうしている内に、討論会の始まる時間となった。

『只今より、学内の差別撤廃を目指す有志同盟と生徒会の公開討論会を始めます。同盟側と生徒会は、交互に主張を述べてください』

講堂中に響き渡るアナウンスの声に、同盟側の生徒達の表情が一層引き締まった。

そしてそれは、真由美も同じである。我が儘を通して開催させてもらったこの討論会を、何としてでも実のあるものにしなければならぬ。彼女の感じているプレッシャーは、聴衆の想像しているものとはまったく別のところにあった。

「魔法競技系のクラブは、非魔法競技系のクラブよりも明らかに予算が多い! 一科生優遇が、課外活動にも表れている証です! 不平等な予算はすぐに是正するべきだ!」

「予算の割り振りにばらつきがあるのは、過去の実績を反映している部分が多いからです。その証拠に、実績をあげている非魔法競技系のクラブには、実際に魔法競技系のクラブと遜色ない予算が与えられています」

「二科生はあらゆる面で、一科生よりも劣る扱いを受けている！生徒会はその事実を誤魔化そうとしているだけだ！」

「あらゆる面でというご指摘がありました。一科生と二科生は同じ施設で授業を行い、またその内容も同様のものです。あくまで両者との違いは必要最低限のものであり、ほとんどはまったく条件が同じであることは、両者を丹念に比べてみれば自ずと分かることです」

第一高校では生徒を指導する魔法師が慢性的に不足している（もつともこれは全ての魔法科高校で言えることだが）ため、授業における生徒への指導は一科生のみ限定されているのは事実だ。しかしそれはあくまで授業中だけの話であり、放課後など授業以外の時間帯ならば、教師の手さえ空いていれば二科生でも指導を受けることは可能なのである。教師だって熱心な生徒の方が教え甲斐もあるため、二科生だからとそれを無碍に断る者もまずいない。

部活動においても、生徒会と部活連によつて可能な限り施設の利用時間が平等になるように割り振っている。しかしそれは「1つの部活ごとに何時間」といった方法ではなく、1人当たりの機会の均等を図るため所属する生徒の数に比例して長くなっている。魔法競技系クラブの方が人気も高く所属人数も多いため、そちらの方が優遇されているように見えてしまうのだろう。

討論自体は、生徒会の圧倒的有利で進んでいた。具体的な数字やデータを持ち出して反論する真由美に対し、「植えつけられた」感情だけで乗り切ろうとする同盟側では分が悪すぎる。

しかし真由美の目的は、同盟側を言い負かすというものではなかった。

「ブルームとウィード。残念ながら、多くの生徒がこの言葉を使用しています。生徒の間に、同盟側が指摘したような差別意識があることは否定しません。——しかし、それだけが問題なのではありません。」

二科生の中にも自らを蔑み諦めと共に受け入れる、そんな悲しむべき風潮が確かに存在しています。その「意識の壁」こそが問題なのです！」

仮にここで一科生を逆差別するような解決策を採ったとしても、それは根本的な解決とは言えないだろう。確かに学校の制度として明確に区別が存在している以上、「一科生」や「二科生」の垣根を越えて仲良く過ごしていこうというのは難しいかもしれない。しかしどちらでも1人1人が第一高校の生徒であり、生徒達にとって唯一無二の3年間であることに変わりはない。

それが真由美にとって、第一高校生徒会の会長である彼女にとって、嘘偽らざる本音であった。

とはいえ、それでは現状の制度には何の問題も無いかというと、そうは考えていない。

なぜなら今の生徒会には、一科生と二科生を明確に差別する制度が1つだけあるからだ。

「その制度とは、生徒会長以外の役員の指名に関するものです。現在生徒会役員は一科生のみから選ばれており、これは生徒会長改選時の生徒総会においてのみ改定可能です。——よって私は、この規定を退任時の総会で撤廃することで、生徒会長としての最後の仕事にするつもりです」

その言葉に、一科生だけでなく二科生も驚きの声をあげた。それは会場中へと伝播し、やがて大きなどよめきへと変わっていく。

「私の任期はまだ半分ありますので、少々気の早い公約となってしまうでしょう。人の心を力ずくで変えられないし変えてはいけません」上、それ以外のことのできる限りの改善に取り組んでいく所存です」

その瞬間、会場が拍手の音で溢れかえった。堂々とした真由美の演説に、一科生や二科生に関係無く心からの拍手を彼女に贈っている。

一方壇上や客席の同盟メンバーは、ほとんど負けを認めたかのように悔しそうな表情を浮かべていた。元々討論は生徒会有利でこのまま押し通すこともできた中で、或る意味生徒会長が「自分達の要求を汲む」ような公約を掲げてみせたのだ。こちらとしては、これ以上の

解決を望むことはできないだろう。

こうして討論会は、特に混乱が起こることもなく幕を閉じ――

「みんな、窓から離れて！」

――

穏やかな笑みを浮かべていた真由美が途端に目つきを鋭くし、講堂の天井付近に設置された窓を指差した。

そして壇上にいた生徒会や風紀委員のメンバーが臨戦態勢に入り、そちらへと顔を向けた次の瞬間、窓ガラスを破る音と共に講堂へと飛び込んできた。それは、ごとりと床に落ちて自身を回転させながら白い煙を猛烈に噴き出した。

「ガス弾か！」

誰かがそう叫んだそのとき、最初に動き出したのは服部だった。

彼がガス弾に向けて腕を伸ばすと、撒き散らされていた煙は魔法によってガス弾の周りに集まっていき、やがてガス弾は白い塊のようになった。服部は慎重に操作しながら、それを割れた窓ガラスから放り出した。

気体という実体を掴みにくいものに対して、瞬時に収束系と移動系の魔法を用いて会場から隔離するという芸当は、相当の実力者でないと難しい。達也にはその驕りから負けてしまったものの、やはり生徒会副会長の名は伊達ではないということだ。

突然の出来事にパニックになりかけ、席を立って講堂を出ていこうとする生徒も見られる中、

「生徒の皆さん、どうか落ち着いてその場に待機してください！　ここは我々、生徒会と風紀委員が守ります！」

真由美の力強い言葉と毅然とした態度に、生徒達も徐々に落ち着きを取り戻してきた。舞台袖に控えていた生徒会役員や風紀委員が次々と姿を現し生徒達の座る観覧席の通路へと配備されていくことも、生徒達に安心感を与えている要因であるのは間違いない。

そんな中で未だにステージに立つ真由美は、一見すると何もせず彼らを見守っているだけのように見えるが実はそうではない。彼女には「マルチスコープ」という、離れた場所を様々な視点から同時に知

覚することのできる知覚系魔法を先天的に有しており、それを使って講堂周辺の様子を多元リーダーのように見張っているのである。先程ガス弾が飛んでくるのを真っ先に探知できたのも、この魔法によるものだ。

——頑張ってね、みんな……！

次の攻撃に備えながら、真由美は心の中でここにはいない。『仲間』にエールを贈った。

*

*

*

講堂にガス弾が飛び込んできたのとほぼ同時、ガスマスクを装着しマシンガンを持った武装集団が一斉に建物の陰から飛び出し、講堂の扉目掛けて一斉に走り出した。いくらこの学校の教師が国内トップレベルの魔法師ばかりであり、小国の軍隊程度ならば単独で退けるほどの実力を持っているとはいえ、生徒を人質に取られた状態では下手に抵抗することもできないだろう。

扉まであと数メートルにまで迫り、彼らがガスマスクの下で作戦成功を確信してニヤリと笑みを浮かべた、まさにそのとき、

「悪いが、おまえ達にはここで眠ってもらおうか」

「——！」

少女にしては少し低めで凛々しい声が聞こえるや、彼らは襟首を押しさえつけて一斉に苦しみ出し、手に持っていた武器を落としながらその場に崩れ落ちていった。

そんな彼らを冷たい目で見下ろしながら姿を現したのは、講堂の中にはいなかった摩利だった。

彼女が用いた魔法は、『MIDフィールド』という気体分子の分布に干渉する魔法だ。ガスマスク内の狭い空間における酸素濃度を操作し、彼らの顔付近の酸素を極端に少なくすることで急激な酸素欠乏症を生み出し、筋力低下や意識混濁を引き起こしたのである。

そうして武装集団の全員が地面に倒れたのを確認した摩利が小さく息を吐いたタイミングで、彼女の後ろから数人の風紀委員がそれぞれ

れやって来た。

「何だ姐さん、全部倒しちやっただんですね。俺達の出る幕が無いですよ」

「油断するな鋼太郎、1人もここに賊を侵入させるなよ」

「もちろん、油断なんてしちゃいませんよ」

摩利の言葉に風紀委員達は改めて表情を引き締め、蟻1匹見逃さないとはばかりに辺りを睨みつけ始めた。

*

*

*

武装集団が現れたのは講堂だけでなく、現場作業員か何かに変装した連中が学校内の幾つかの施設を一斉に襲撃し始めた。完全に不意を突いた形で先制攻撃を仕掛けたとなれば、いくら荒事を想定していたとしても相当な混乱を生むに違いない。

と、彼らはそう考えていたに違いない。

「装甲！」
パンツァー

実技棟の入口前にて、肘まで覆うグローブ型のCADを左手に装着したレオが、それを振りかぶりながら大声で叫んだ。その瞬間、彼のCADが起動して魔法式を展開、そのまま彼は眼前の敵を思いっきり殴り抜けた。

すると別の角度から、金属の棒を振りかぶった敵が襲い掛かってきた。しかしレオは慌てることなくCADでそれを受け止めると、空いている右の拳を相手の鳩尾に叩き込んだ。相手は苦しそうに呻き声をあげながら、その場に崩れ落ちていく。

——プロテクターを兼ねたCADか……。確かにレオの能力にぴったりだ。

相手の攻撃を防御する以上、可動部分やセンサーが露出している通常のCADでは何かと都合が悪い。なので分厚い装甲の下でそれを隠し、直接触れなくても操作できる音声認識を採用しているのだらう。

しかしいくらCADがプロテクターを兼ねているとはいえ、魔法で

飛ばしてきた瓦礫を殴り壊すような使い方をすれば、普通ならすぐに壊れてしまうだろう。そこでレオは、CAD自体に硬化魔法を掛けることで強度を上げているのである。

ちなみに、硬化魔法が掛けられているのはCADだけではない。レオの着ている服にも魔法が掛けられており、これによつて後ろからナイフで刺されたとしても刃が服を通らないのである。さながら今のレオは、全身プレートアーマーで覆われているようなものだ。

「何だおまえら、全然張り合いねえな！ もつとがんがん来いよ！
パンツァー！」

「だああ、もう！ さつきからうっさい！ なんでそう何回も叫んでんのよ！」

「仕方ねえだろ、エリカ！ 途中で叫ばないと魔法切れるんだからよ！」

「だったらもつと離れて戦いなさいよ！ さつきから耳がキンキンして仕方ないんだから！」

「ああ？ それって、自分の声でキンキン鳴ってんじやねえのか？」
「何だって！」

レオとエリカがいつものように口喧嘩を始めているが、2人はその間にも片手間で周りの敵を倒していた。

エリカの戦い方は実にシンプルで、自己加速術式で相手が反応するよりも早く懐に潜り込み、警棒型のCADで一撃を与えてすぐさま離脱するという戦法を採っていた。武道を嗜んでいるだけあって、相手の攻撃は防御するか破壊するかというレオとは対照的に、彼女は相手の攻撃を見切つてひたすら“避け”に徹している。

「ああああ、あの2人ったら、戦闘のときくらい戦闘に集中した方が良いのでは？」

深雪は呆れた様子でそう言いながら、ほとんど相手に視線を向けることなく一瞬で魔法式を展開した。

彼女の戦い方は、実に多彩だ。加重魔法で数人を一度に拘束してそのまま地面に叩きつけることもあれば、襲い掛かってくる相手の武器を冷却魔法で破壊したりと、その場その場に合わせて臨機応変に戦略

を変えていく。卓越した魔法技術と頭の回転の早さによって実現可能な、まさに新入生総代に相応しい戦いと言える。

「いくら実力的に余裕があるとはいえ、戦闘には集中してほしいものだがな。——下手に怪我でもして、しんのすけに何か言われても知らないからな」

達也は呆れたようにそう吐き捨てながら、相手の後頭部に手刀を叩き込んだ。彼の戦い方はエリカと同じく一撃離脱の白兵戦だが、魔法を使わない独力だけの移動に武器を使わない素手での戦闘という違いがあり、その光景は魔法科高校の生徒とは思えないものだった。

ちなみに達也の言葉を耳にした深雪が、彼をチラリと見遣ってクスリと微笑んでいた。2人の立場を考慮しなければ、それはまるで我が子を見守る母親のようだった。

「それにしても、こんだけ仲間がいながらまともに反撃もできないとは……。こいつら、魔法師としては三流もいところだな」

レオが目目の前の敵を殴り飛ばしながら一撃も加えられない相手側が情けないのは事実だが、そもそも多人数を相手に立ち回れるレオやエリカの方が珍しい。学校の基準に照らせば二科生ではあるものの、実戦的な実力に関してはその枠に収まらないレベルであるようだ。

——やはり、この2人を協力者にして正解だったな。

2人がこうして達也たちと襲撃者を撃退しているのは、もちろん偶然出くわしたからなどではない。エガリテが第一高校を襲撃する計画を事前に知ることができたとはいえ、さすがにあのとき生徒会室に集まっていた6人だけではとても手が回らない。なので荒事に長けた教師達に（SMLなどについては伏せたうえで）事情を説明して協力してもらおうのももちろん、各々で信用に足る人物に協力を要請することにしたのである。

そうして達也が選んだのが、レオとエリカの2人だった。美月は残念ながら戦闘向きではなく、深雪のクラスメイトであるほのかや雫も成績こそ優秀だが実戦経験については未知数ということで候補から外した。お色気から襲撃者の人数や使用する武器など詳しく聞いて

いたため、これだけの人数でも充分対処できると判断したというのもあった。

と、襲撃者が全員その場に倒れ伏したことで戦闘が終了した。立ち上がることもすらできずに苦痛で顔を歪める彼らだが、せいぜい骨にヒビが入った程度で深刻なダメージを負った者は1人もいない。現在の治療魔法を用いた医療技術ならば、入院する必要すら無いだろう。そして多数の襲撃者を迎え撃った達也たち4人は、掠り傷1つ無い完全勝利だった。

もつとも、エリカの顔にはありありと不満の感情が浮かんでいたが。

「まったく、問答無用でぶっ飛ばせばもつと早く片付いたのに」
「そう言うな、エリカ。相手は生徒、それに洗脳されてる可能性もあるんだからな」

「分かってるって、しんちゃん頼みだものね。——さてと、こちら辺は粗方片付いたようだし、どっか別の場所に加勢してこようかしら？」

「この様子だと、あまりその必要も無さそうだがな。どうせこの騒ぎも、所詮はただの『陽動』に過ぎん」

達也たちが守っていた実技棟は、せいぜい型遅れのCADが置かれているくらいで、たとえ建物を破壊したところで少しの間授業ができない程度のダメージしかない。おそらく少しでも『本命』である図書館から意識を逸らすための時間稼ぎであり、他の施設を襲撃している部隊も同じ役割なのだろう。

しかしそれは、こちらとて同じことだ。こうして襲撃者を迎え撃つために敷地内の至る所に戦力を配置しているが、奴らにとつての本命である図書館の周辺は敢えて手薄にしておいた。おそらく今頃は、この騒ぎに乗じて数人ほど図書館に忍び込んでいることだろう。

自分達が、わざと誘い込まれているとも気づかずに。

——さてと、上手いこといってくれれば良いが……。

未だに遠くで誰かの叫び声が聞こえる中、達也は空を見上げて心の中でそう呟いた。

*

*

*

外で侵入者と魔法師との戦闘が繰り広げられている中、第一高校の図書館内はそんな喧騒とは無縁の静かな空間となっていた。外では魔法の撃ち合いで様々な音が鳴り響いているのだろうが、この部屋の中では特別閲覧室へと向かう侵入者の足音と話し声しか聞こえない。「いよいよ、この国の最先端資料にアクセスできるときが来たな!」「ああ! これを盗み出すことができれば、我々の「悲願」に大きく近づくことができる……!」

武装したその男達は、今回の襲撃の目的である魔法研究に関する機密文献へと近づく喜びで興奮していた。彼らは第一高校の生徒ではなく、エガリテの実質的な上部組織であるブランシュから派遣されたメンバーだ。まさに今回の作戦の要である役目を任されただけあって、気合十分な様子である。

「……………」

一方、そんな彼らを案内する役目を仰せつかった紗耶香は、1人悩んでいた。

彼女はただ、二科生に対する差別を撤廃したかっただけだ。しかしエガリテの代表であり剣道部主将でもある司甲に彼の義兄・司一を紹介され、その一から様々なアドバイスを受けるようになってから、自身の思惑と実際の行動に大きなズレが生じるようになった。学校外にまで活動を広げるつもりは無かったし、ましてや法に触れるようなことをするつもりは無かったはずなのに、図書館の鍵を無断で持ち出して、ハッキングの片棒を担ぐような真似までしてしまっている。

そもそも、魔法による差別撤廃を目指す自分達が、なぜ最先端の魔法研究資料を必要とするのだろうか。一は魔法研究の成果を一般公開することが差別撤廃に繋がると言っていたが、そもそも魔法を使うことができない人々がそれを知ったところで何の役に立つのだろうか。

——いいえ、きっとこれは大きな意味があるのよ……。きっと魔法

を使えない人達にも応用できる技術が、あの中に隠されているのよ……。

そして紗耶香はそのような疑問を抱く度に、こうして自分に言い聞かせるように自分を納得させていた。それはまるで、今の自分の行動に対して疑問を抱かないよう誰かに誘導されているかのようなだったが、彼女自身がそれに気がつくことは無い。

と、紗耶香達一行が1つの扉の前へと辿り着いた。対戦車ロケットの直撃にも耐えられる造りとなっていてその扉こそ、図書館に貯蔵された資料の中でも一際機密性の高い情報にアクセスできる特別な端末が存在する『特別閲覧室』の入口である。

「ようし、この部屋だな！ おまえら、記録用キューブは用意してあるな！」

リーダーと思われる男の呼び掛けに、他のメンバーも喜色満面の笑みで頷いた。その笑顔は、例えば慈善事業に熱中しているときのような晴れやかな達成感に満ちたそれではなく、自身にもたらされる様々な利益を皮算用しているときのような、ハッキリ分かりやすく言えば『欲』に充ち満ちた笑顔だった。

その笑顔を視界から外したくて、紗耶香はそこから目を背けた。しかし彼女の耳は、特別閲覧室の扉が彼らの手によって開かれる音をけっして聞き逃してくれなかった。

そうして侵入者達が特別閲覧室へと足を踏み入れて、
「発射！」

プシュツという小さな射出音と共に撃ち出されたそのネットは、突然のことに思わず足を止めた彼らの眼前で蜘蛛の巣のように大きく広がり、そして彼らを纏めて包み込んで体中に絡みついていった。誰かが足を取られたのか大きくバランスを崩し、他の侵入者を巻き込んで床に倒れ込む。

「な、何だ！」

「ネットランチャーだど！ 魔法師のくせに小癩な真似を！」

侵入者達は慌ててそのネットを引き千切ろうとするが、パラシュートの糸にも使われているそれは鉄の10倍以上の強度を誇るためび

くともしない。それどころか下手に暴れるほどますます糸が体に絡みつき、彼らはみるみる無理な姿勢の状態に固定されていく。

「ほいっとー！」

そして駄目押しとばかりに、もがく侵入者達に向けてボールのようなものが投げつけられた。それは片手で持てるほどの大ききで、彼らの顔付近に差し掛かった辺りで突然破裂し、中からピンクに着色された煙が撒き散らされた。

「ぐっ！・何だ——」

警戒心を顕わにする侵入者達だが、両腕はネットが絡まって動かせないため煙をモロに吸い込んでしまった。

すると次の瞬間、まるでパソコンを強制シャットダウンしたかのように突然彼らが動かなくなり、体を重ね合わせて床に倒れ伏した。しかしよく耳を澄ませてみれば規則的な呼吸音が聞こえてくるので、単純に眠っていると思われる。

ちなみにピンク色の煙は1メートルほど広がったところで急激にその色が薄れ、数秒もすると影も形も無くなっていった。

「な、何があったの！」

その頃になつてようやく、事態の異変に気づいた紗耶香が部屋の中へとやって来た。そしてネットで捕獲されたうえ眠りこけている男達の姿に目を見開き、キツと目つきを鋭くして犯人がいるであろう前方を睨みつける。

すると、そこにいたのは、

「おおっ！ さすが『貫庭玉球』ぬばたまたま！ お色気のお姉さんの言う通り、効き目バツチリだゾ！」

「うわ、マジかよ。ここまで見事に嵌ると、却って憐れみすら覚えてくるな」

その2人は紗耶香にとつて、非常に見覚えのある者達だった。

1人は、一度は自分の所属する部活や活動に勧誘し、そしてすげなく断られてしまった新入生・野原しんのすけ。

そしてもう1人は、剣道と剣術という別の道に分かれてしまったものの、かつては共に剣技を磨いてきた幼馴染みの少年・桐原武明だっ

た。

「桐原、くん……？」

「よう壬生、剣術部の部長と一緒に謝罪したとき以来だな」

彼女の呟きは囁くように小さなものだったが、桐原はそれを聞き取り、そして口元に不敵な笑みを浮かべてそう答えた。

しかしそれに反して、彼女に向けるその目つきは力の籠もった、まさに真剣なものだった。

*

*

*

第一高校の敷地内にある建物の中で最も高い、教室や職員室などがある「本棟」。その建物には入口に鍵が掛けられているものの屋上が存在し、敷地のほぼ中心に位置しているためにそこから校内をほぼ一望することができる。

つまり、校内のあちこちでテロリストが制圧されている様子も、ここからならば一目で見ることが出来る。

「ふーむ、予想以上に捕まるのが早いな……」

そんな光景を見下ろしながらそう呟くのは、艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そしてそれを囲む赤縁の眼鏡という出で立ちの女子生徒だった。双眼鏡を左目だけに当てながらあちこちにレンズを向ける彼女の手首には、エガリテの証である赤青白のリストバンドトリコロールが巻かれている。

そんな中、レンズを向ける彼女の手がふと止まった。

その視線の先にいるのは、先程まで実技棟前で乱闘を繰り広げていた生徒の1人。目を惹くほどではないが精悍な顔立ちをしており、制服に隠されたその体は見る人が見ればなかなか鍛えられたものであることが分かる。

「あの子が、司波達也か……」

少女がその生徒の名を呟いたそのとき、後ろからキイツと金属の鳴る音が聞こえ、少女はそちらへと振り返った。

屋上唯一の出入口であるドアを開けてやって来たのは、十文字克人

だった。分厚い胸板に広い肩幅、制服越しでも分かる隆起した筋肉、肉体だけでなく彼を構成する全ての要素が桁外れに濃い存在感を放つその姿は、未だに未成年であることが信じられないほどの威圧感を放っている。

そしてその威圧感は現在、先客である少女一人のみに注がれている。

「――成程、おまえがこの武装集団の纏め役ということか」

「これは十文字会頭、意外に遅いお着きでしたね」

克人の視線を真正面から受け止めながら、少女は不敵な笑みを浮かべて彼を出迎えた。

第13話 「一高防衛隊ファイヤー! だゾ その2」

「野原、あいつらから武器を奪っとけ。次起きたとき抵抗できないようにな」

「ほーい」

桐原のアドバイスを受け、使用済みのネットランチャーをそこら辺に捨てたしんのすけが、四肢をネットの網に絡め取られながら眠りこける男達へと近づき、無造作に手をつ突っ込んで次々と武器を後ろに投げ捨てていった。サバイバルナイフや伸縮警棒など様々な武器が出てくるが、拳銃などの火器類は持っていないようだった。

ポイポイと武器を投げ捨てていくしんのすけに、それを後ろから覗き込むように眺める桐原。

そんな2人を前に、紗耶香は襲い掛かるでもなくジッとそれを見つめていた。

「2人共、ずっとここで待ち伏せしていたの……?」

「まあな。おまえらが最初からここが目当てだったのは知ってたからな。——それにしても意外だな、銃の1つくらいは持ってると思ってたが」

「……アタシ達は、役目が終わったらすぐに離脱するよう言われてたから」

「成程な、だから重装備は却って逃走の邪魔になると」

周りの騒動に気を取られてここにやって来る者などいないと踏んでいたのか、それとも学生程度ならば銃など無くても蹴散らせると高を括っていたのか、あるいはそれ以外の思惑があったのか。どちらにせよこちらとしては好都合か、と桐原はここに来る直前にしんのすけから渡され、そして現在制服の中に着ているインナーに手を遣りながらそう思った。

そのインナーは見た目こそ普通のそれと同じだが、マシンガン程度の銃弾ならば防げる防弾性能を持つ優れ物だ。頭を狙われたら意味無いのでは、とそれを手にした桐原は一瞬思ったが、戦闘中では外す可能性の高い頭部よりも、少し外れても体のどこかに当たりやすい胴

体を咄嗟に狙うことが多いらしい。もちろん、撃たれないで済めばそれが一番なのだが。

と、桐原がそんなことを考えている間、紗耶香の視線が彼の隣にいるしんのすけへと移った。普段通りの飄々とした表情で突っ立っている彼の右腕には、「風紀委員」とプリントされた腕章が部屋の照明に照らされて僅かに光を反射していた。

彼女にはそれが、まるでその存在を声高に主張しているように見えた。

「……そう。そうやって桐原くんも、アタシ達の邪魔をするつもりなのね」

敵意を多分に含んだ紗耶香の発言に、桐原が眉を吊り上げて口を開く——直前、

「もう紗耶香ちゃん、そういうこと言っちゃ駄目でしょ！ 桐原くんは紗耶香ちゃんのこと心配で、オラと一緒にここで紗耶香ちゃんを待ってたんだから！」

「へっ？ 桐原くんが？」

「あつ、おい野原——」

紗耶香が虚を突かれたように目を丸くし、桐原が焦った様子で詰め寄ろうとするも、しんのすけの口は止まらない。

「桐原くんね、克人くんは紗耶香ちゃん達がここに来るって聞かされたとき、克人くんは必死に頼み込んだんだって。紗耶香ちゃんと一度しっかりお話したいから、紗耶香ちゃんのこと自分任せてくれなにかつて」

「おい野原、そういうのは——」

「そうなの、桐原くん？」

しんのすけの口を塞ごうとしたのか腕を伸ばしかける桐原だったが、紗耶香がそう問い掛けるとその勢いもみるみる萎んでいき、やがて自棄になったように頭をガシガシと掻いて、

「……ああ、そうだよ。だっておまえ、この学校の剣道部に入ってから随分と変わっちゃまったじゃねえか。あんなにまつすぐだった剣も妙に荒々しくなるし、自分の周りはみんな敵だって感じの目をするしよ

……」

「……そりやそうよ。実際、アタシの周りには敵しかいなかったもの」
おそらくそれに反論しようとして口を開きかけた桐原を視線で制し、紗
耶香は話を続ける。

「確かにアタシは一科生の奴らよりも魔法の腕では劣る、だから二科
生であること自体に文句は無いわ。でもアイツらは、ただ魔法が使える
というだけで、アタシ達二科生より何もかも優れていると思ってい
るの！ どれだけ剣の腕を磨こうが、アイツらは『どうせ魔法が使え
ないんだから』とか『所詮は自分達の予備でしかないのに』ってアタ
シの存在ごと否定して嘲笑ってくるのよ！」

「一科生全員が、二科生を馬鹿にしていたわけじゃねえだろ」

「ええ、確かに面と向かって馬鹿にしてくる人達ばかりじゃなかった
わね。でもどうせせいつらだって、内心ではアタシ達のことを馬鹿に
しているに決まってるわ。——何てったって、普段から一科生と二
科生を平等に扱うべきだと嘯く渡辺先輩ですらそうだったんだから
！」

紗耶香のその言葉に、怒りを滲ませていた桐原の表情に疑問と困惑
が浮かんだ。隣でそれを聞いていたしんのすけも、その特徴的な太い
眉を八の字にして首を傾げている。

その反応が気に食わなかったのか、彼女はますます目を吊り上げて
怒りで顔を真っ赤に染めた。

「信じられないみたいだから教えてあげるわ！ 私が一年生のとき、
風紀委員だった渡辺先輩に手合わせを申し込んだら、『おまえではア
タシの相手にならないから無理だ、もつとおまえに相応しい相手を選
べ』なんて言っただ断ったのよ！ 結局あの人も口先だけで、アタシ達
二科生のことを蔑んでるのよ！」

「渡辺委員長が？ おまえの勘違いじゃないのか？」

「勘違いなはずが——」

「二科生の人達は？ 味方じゃなかったの？」

水掛け論になりかけた2人の横から、しんのすけが素朴な疑問を挟
んできた。

紗耶香は一瞬口を閉ざして彼を一瞥すると、それに答えるべく口を開いた。

「二科生のクラスメイトも、アタシと同じことで悩んでたわ。アタシみたいに一科生から理不尽に嗤われては、裏でみんなが集まってそいつらの悪口を言い合ってるのを何度も見てきたもの。——でもあいつらは文句を言うばかりで、けっしてそれを改善しようとは動くことは無かったわ。口先だけで文句を言って、現状を仕方なく受け入れているだけの彼らが、アタシは一科生の奴らと同じくらい嫌いだった」

「だから、エガリテに参加したっていいのか？」

「ええ、そうよ。まだ部長になる前だった司先輩から他の剣道部員も何人が参加してるって聞いたから、アタシもそれを手伝うことにしたの。今の学校をアタシ達の手で変えて、よりアタシ達がアタシ達らしくいられるように」

どことなく胸を張ったような姿勢で、紗耶香はそう言い放った。しかし先程から2人を警戒するようにチラチラと見遣っているからか、どうにも虚勢を張っているような印象を捨て切れない。

と、彼女の説明に桐原の雰囲気は剣呑なものとなる。

「——やっぱ、剣道部の奴らが壬生を誑かしたんだな」

「誑かす？ どういう意味かしら？」

「そのままの意味だよ。剣道部の奴らがおまえをだまくらかして、自分達に都合の良い駒に仕立て上げたってことさ」

おそらくそれに反論しようと口を開きかけた紗耶香を、桐原は視線だけで制した。

先程とはまるで逆の構図だった。

「アタシらしくいられるように、だあ？ 俺の知ってるおまえは、その程度のことと挫けるようなタマじゃねえだろ。——壬生紗耶香っていうのは、たとえどれだけ周りに馬鹿にされようとも、それでどんなに悔しい思いをしようとも、それでも必死に歯を食い縛って剣を振り続けるような奴だったはずだ」

「……アタシのことを、勝手に決めつけないでよ」

「おまえ、憶えてるか？ 俺達が小さい頃、道場の男子達に女だからっ

て馬鹿にされたことがあったろ。あのときもおまえは悔しくて物陰で泣きまくって、それでも剣道を辞めることなく剣を振り続けた。そうしてたらいつの間にかそいつらがおまえにまったく歯が立たなくなつて、おまえに対してそんなことを言う奴は一人もいなくなつた」

「……そんな昔のこと、もう憶えてないわ」

「おまえはいつだって、そうやって周りのくだらない言葉を自分の力でねじ伏せていったんだ。その度に俺は、おまえのことを凄^{すげ}えって思つてたんだぜ」

桐原はそう言つて、紗耶香に向けるその目を眩しそうに細めた。口元には嘲りなど一切無い、純粹な笑みが浮かんでいる。

そんな彼から逃げるように、彼女は目を逸らして顔を伏せた。

「……この学校の差別問題は、そんな単純な話じゃないの。学校の制度や体質のレベルで差別が蔓延しているこの状況を打開するには、多少強引でも改革を推し進めていかなきゃいけないのよ！」

「多少強引、だと？ 武装して学校に襲撃かますこの状況が “多少” で済むと思つてんのか？ 自分達のやつてることがおかしいことくらい、おまえならすぐに分かるはずだろうが！」

「——！」

桐原の叫びにビクリと肩を跳ねて1歩後退る紗耶香だったが、それでもギロリと彼を睨みつけて再び1歩前へと踏み出した。

「桐原くんはどうせ一科生だもの！ アタシがどれだけ馬鹿にされて理不尽な思いをしたかなんて分かりっこ無いわ！ それどころか、桐原くんも他の一科生みたいに剣道部の邪魔をしてきたじゃない！ 新入生勧誘のときとか！」

「あ、あれは！ …こいつらのせいで壬生がおかしくなつたんだって思つたら、無性に腹が立って我慢ができなくなつたっていうか——」
「だからって、アタシに負けたからって魔法まで使ってくることはないじゃない！ 普通に停学レベルの暴挙だし、1歩間違えればそのまま退学よ！ 何考えてんのよ！」

「そりゃあ、俺もさすがに馬鹿なことと思つてるけどよ！ おま

えがあのととき『真剣だったたらその右腕はもう使い物にならない』なんて言いやがるから！」

「はあっ!? アタシのせいだって言いたいわけ！ 桐原くんって、本当に昔からそういうところあるわよね！ なんでそれで桐原くんが魔法でアタシに襲い掛かることになんのよ！」

「だっておまえ、昔はそんな『真剣』だの『実戦』だの余計なことを考えずに、ただひたすら剣道だけを貫いてきてたじゃねえかよ！ 俺はおまえの、そういう剣に対して真っ直ぐなところが好きで憧れだったのに、そんなところまでエガリテなんかのせいで穢されたと思ったら——」

「す、好きって……って！ だったらなんで桐原くんは剣道を辞めて剣術に行っちゃったのよ！ 自分だけ魔法の才能があるって分かった途端に道場を離れて！ 中学生になるときに『代々木コージローを倒して日本一になるんだ』ってアタシに誓ったのは嘘だったの!？」

「えっ、よよよぎくんを？ 桐原くん、そうだったの?」

桐原と紗耶香のまるで付け入る隙の無い言葉の応酬にすっかり置いてけぼりを食らっていたしんのすけだったが、自分の知ってる名前に反応してようやく話に割り込むことができた。

もつともそれは、今まで矢継ぎ早に叫んでいた桐原が、息を呑む表情で固まったまま黙り込んでしまったからなのだが。

そんな彼の目が、一瞬だけしんのすけへと向けられた。

そして直後に、紗耶香の方へと戻される。

「壬生、俺が実際に代々木コージローと戦ったときのこと、憶えてるか?」

「……ええ、憶えてるわ。中学1年生のとき、関東大会のときでしょ?」

「おっ? 桐原くん、よよよぎくんと戦ったことあるんだ。それで、結果はどうだったの?」

桐原に対して多少前のめりになりながらそう尋ねるしんのすけに、桐原はフツと自嘲的な笑みを漏らした。

そんなの考えるまでもないだろ、と言わんばかりに。

「……負けたよ。2本先取でストレート負け、トータルでも10秒掛かってねえよ。2回共『刃崩し』で竹刀をぶっ飛ばされて、思いつきり面を叩き込まれて終わりだよ」

「まあ、それがよよぎくんの得意技ですからなあ」

「いや、負けたこと自体は良いんだ。それ以上に俺がシヨクだったのは、試合直前に顔を合わせて竹刀を向けられた瞬間、まったく体が動かなくなっちゃったことだ。あいつは俺と目を合わせただけで、俺との格の違いを見せつけてきやがったんだ。——試合を始める前から、俺はあいつに負けていたんだ」

「……もしかして桐原くん、剣術に転向したのって……」

「ああ、その直後に俺は剣道を辞めて剣術に転向した。魔法の才能だなんて、俺にはどうでもいいことだった。ただ俺は、代々木コージローと戦わなくて済むなら何でも良かった。——まさかこんなタイミングで、それを思い出させられるとは思っちゃいなかったがな」

桐原はそう言ってしんのすけへと視線を向け、むりやり口角を上げて笑顔を作った。

そんな彼の姿は、紗耶香が常に思い描いていた一科生のイメージとはかけ離れたものだった。それはむしろ、二科生が常日頃から背負わされている『劣等生』のイメージそのものだった。しんのすけがキョトンとした表情で「おっ？」と首を傾げているのが、さらにそれを際立たせている。

「意外か？俺がこんなことを考えてるなんて」

「……正直、桐原くんはそういう劣等感みたいなものとは無縁だと思ってた」

「俺だけじゃねえよ。二科生に対してウィードだ何だの言ってるような連中だって、心の中じゃそういう劣等感みたいなものを抱えてる。俺だってこれでも入試の成績は良い方だったが、それでも上には上がいる。それに今は3年生に『三巨頭』なんて分かりやすい天才がいるんだ、むしろその人達と同じ一科生の方がそういう感情を強く感じてると思うぜ」

桐原の言葉に紗耶香は口を引き結び、それでも小さく首を横に振つ

て、

「……だからって、アタシはあいつらから馬鹿にされるのを、黙って受け入れることなんてできないわ」

「ああ、そりやそうだ。誰かに馬鹿にされたらカチンと来るのは当然だ。だからよ——」

桐原はそこで言葉を区切り、紗耶香に向けてその腕を伸ばした。「俺とおまえで、そいつらに『理想の一高生』ってヤツを見せてやろうぜ。剣道部に喧嘩を売るでもない、放送室に立て籠もるでもない、ましてや学校に襲撃かますでもない、もつと他の奴らにも受け入れられるような方法だよ」

「……今更、そんなことができると思っているの？」

「そりやまあ、それで何か変えられたとしても微々たるもんだと思うし、俺達が卒業するまでに結果が出るかどうかも分かんねえ。だが少なくとも、ここの非公開資料を盗み出すよりは効果的だと思うぜ」

「そうじゃなくて、アタシ達はこんなことを仕出かしたのよ。タダじゃ済まないわ」

「そんなの、おまえに対して魔法を使った俺だって同じだろ。——まあいざとなったら、2人仲良く退学処分にもなってみるか？」

そう言っただ歯を見せて笑う桐原の目は、まだまだ空元気の印象は拭いきれないものの、代々木コージローの話をしていきよりは多少覇気が戻っているように見えた。

「……何よそれ、そんなことになったら何の意味も無いじゃない」

呆れ果てるような紗耶香の言葉だが、それを口にしたときの彼女の表情は、この部屋に入ってから初めて見せる自然な笑顔だった。

そんな彼女に釣られてか、桐原も今度は自然と口角が上がっていった。ついでに言うと、その頬は若干赤らんでいた。

「うんうん、どうやら仲直りできたようですな」

そしてそんな2人から少し離れた壁際で、腕を組んだしんのすけが頷きながらそう呟いていた。

まさにそんな、これにて一件落着という空気が流れかけた、そのときだった。

「……成程、そういうことだったのか」

「——部長——」

「おっ?」

突然聞こえてきたその声にしんのすけ達が顔を向けると、剣道部主将にしてブランシユの下部組織エガリテのリーダーである司つかさぎのえ甲が、苦悶の表情を浮かべながら扉に手を遣って部屋の入口に立ち塞がっていた。

そんな彼の登場に、紗耶香は自然と彼から距離を取るように数歩後退り、そしてそんな彼女を守るように桐原が彼女の前へと躍り出た。そのこめかみには青筋が走り、敵意を一切隠そうとしない鋭い目つきで彼を睨みつけている。

「……よう、部長さん。こんな所に何しに来たんだ?」

「剣術部の桐原くんは、風紀委員の野原くんか。君達がここにいるということ、やはり僕達の情報は漏れていたということになるな」

甲は忌々しそうにそう吐き捨てながら、右手の携帯端末を無造作に制服のポケットに突っ込んだ。ひよっとしたらここに来るまでの間、仲間に連絡を取ろうとしていたのかもしれない。

「確かに教師や風紀委員達に比べたら実力不足は否めないが、それでも不意打ちさえ決まっていればここまで一方的にやられるほどではなかったはずだ。いくら有事に対するマニュアルがあるとはいえ、あまりに向こうの手際が良すぎるとは思っていたが……」

「それで? 今この状況なわけだが、素直に投降する気はあるか?」

「投降、か……」

甲はそう呟いて、部屋の様子をぎつと見渡した。

桐原は自前の武装一体型CADを握り締め、いつでも飛び出せるように半身の構えを取っている。剣術で鍛えられた自己加速術式を織り交ぜた戦闘技術は校内でも屈指の実力であり、下級生だからと油断して良い相手ではない。

彼の後ろにいる紗耶香は、自分に対してどう接すれば良いのか迷う

ような表情でこちらの様子を窺っている。一応伸縮警棒は持っているものの、特に構えているわけではないので咄嗟に動けるかは疑問が残る。

——やはりこの中で一番危険なのは……、

2人とは少し離れた所に立ち、おそらくブランシユのメンバーから奪ったであろう伸縮警棒を手に持つ、この中で唯一の1年生であるしんのすけ。新入生総代である司波深雪に次ぐ入試総合成績2位の実力者であると同時に、中学時代にあの代々木コージローを倒して全国制覇を成し遂げた剣道の天才だ。

ならば、と甲は自身の左手に右手をそつと添えた。

その指には、真鍮色の指輪が嵌められていた。

「桐原くん！ あの指輪——」

「遅いっ！」

甲がその指輪にサイオンを注入すると、その指輪から魔法師にしか感知できないサイオンノイズが発振された。

すると、

「ぐっ——！」

「桐原くん、しつかりしてー！」

「おっ？ おっ？」

桐原が途端に苦悶の表情を浮かべて、その場に崩れ落ちて膝を突いて片手を床に置いた。何とか立ち上がろうとするも四肢に力が入らないようで、青く染めたその顔に困惑と焦りの色が浮かぶ。

そしてしんのすけも戸惑うような表情を浮かべて、一瞬だけ体をよろめかせた。しかし彼は桐原と違い崩れ落ちることは無く、咄嗟に壁に手を突いて体重を支えることで踏み留まった。

その指輪は、"アンテナナイト"と呼ばれる特殊な金属で作られていた。単一元素ではないが合金でもない、現行のテクノロジーでは再現不能なオーパーツであるその金属は、高山型古代文明の栄えた地のみ産出される希少なものだが、一般的に流通していないのはその希少性からなる値段の高騰のみが理由ではない。

この金属の最大の特徴が、サイオンを注入することでキャスト・

の場に崩れ落ちていった。

そうして意識が薄れていく中、彼は思った。

魔法とかそれ以前に、自分はまだまだ修行が足りなかったんだな、と。

*

*

*

魔法科高校のすぐ近くにある、ブランシユが拠点とする元バイオ燃料生産工場。

元は生産ラインの中核として様々な機械を置いていたであろうだった広い部屋に、白衣に長いマフラーに眼鏡という出で立ちの男・司一が立っていた。彼は携帯端末で誰かと短い会話を交わし、そしてそれを切ると上着のポケットにそれを入れる。

その口元には、隠し切れない笑みが浮かんでいた。

「今、向こうの『連絡係』から電話があった。作戦は実に順調、機密情報盗み出すのも時間の問題だそうだ」

ポツリと呟かれたその言葉に、周りの人間は一切口を開くことはなかった。しかし一が気分を害した様子は無い。そもそも、返事を期待して発せられたものではなかった。

「魔法科高校の機密情報を手でできれば、我々の悲願成就への大きな足掛かりとなる……。それにしても、『魔法師』なんて大層な肩書きを持っているが、所詮はただの学生か。僕の『力』を持ってすれば、たとえどれほど優秀な魔法師だろうと簡単に僕の部下になってくれる」

彼の『独り言』は少々声が大きく、そして大分芝居掛かっていた。多大な時間とコストを掛けた今回の作戦がもう少して成就すること気分が良くなっている、という見方もできるが、おそらく彼の元々の性格から来ているところが大きいだろう。

「さてと、この作戦が終われば我々がここに居る理由は無い。君達も早いところ荷物を纏めておきたまえ」

一の言葉に、周りの部下が一齐に「はいっ！」と返事をした。キビ

キビと統率の取れた動きでそれぞれが準備を始めるその光景は、彼らが集団行動というものをそれなりに訓練してきたことの表れだった。そう。あくまで「それなり」なのである。

特に、「プロ」の目で見た場合は。

「——な、何だ！」

部下の1人である男の叫び声に、一を含めた全員がそちらへと顔を向けた。

市販のスプレー缶のようなものが見えたのはほんの一瞬で、直後に猛烈な勢いで噴き出された白い煙によってその姿が掻き消されていった。それでも煙の勢いは弱まるどころかどんどん強くなり、結構な広さであるはずのその空間があつという間に煙で満たされていく。

「侵入者か！ おまえら、周りを警戒し——」

「ぐっ！」

「ぶべっ！」

「があっ！」

視界を白に塗り潰されながらも一が声を張り上げて指示を出そうとした次の瞬間、白い煙の向こう側から苦悶の声をあげる部下の音が次々と聞こえてきた。それと同時に何かを打ち付けるような音も彼の耳に届き、白い煙に囲まれて孤立している状況と相まって彼の不安感を煽っていく。

だからなのか、風を起こして煙を吹き飛ばそう、という至極単純なアイデアを思いつくのにも数秒の時間を要した。

そしてその数秒こそが、命取りだった。

「——ぐっ！」

突然背中を殴りつけられたかのような衝撃が走り、一は一瞬息が詰まって体を強張らせた。その隙に何者かが彼の後ろから押し掛かって強引に床に叩き付けると、おそらく膝か何かで彼の腕を押さえつけながら彼の両目を布で覆い隠してしまった。

両目を覆われてしまったら、ご自慢のマインドコントロールも使えない。とはいえ、この煙ではどのみち満足に使うこともできなかっただろう。義弟やその後輩を毒牙に掛けたその魔法の正体は、催眠効果

を持つ光信号を相手の網膜に投射する光波振動系魔法であるため、光波が相手の目に届かなければ効果は発揮されないのだから。

「司一、並びに彼の部下全員を拘束しました」

「了解。作戦通り、例のポイントまでターゲットを搬送する。ターゲットの救出を目的とした襲撃の可能性もあるため、各自警戒するよ
うに」

「はっー！」

両目を覆う布のせいで何も見えないが、一を拘束した者に指示を出しているその声は女性だった。凜々しく艶やかな声で紡がれる彼女の命令に、部下と思われる男達が寸分違わないタイミングで一斉に返事をする。

と、女性の声が聞こえてきた方向から、コツコツと足音が近づいてきた。それは彼のすぐ傍で止まり、耳元に口を近づけてくるのが気配で分かった。

やがてその予想通り、凜々しく艶やかな女性の声が、こんな言葉を
呟いた。

「『革命ごっこ』は終わりよ、——坊や」

「——！」

瞬間的に頭に血が上り、呪詛の1つでもぶつけようと口を開いた一だったが、声を出す直前に体をむりやり引っ張られたためにそれは中断されてしまった。

こうして、何年にも渡って第一高校を内側から蝕んでいたブランシュ日本支部は、あまりにも手際よく鎮圧され、消滅した。

*

*

*

第一高校の敷地内にある建物の中で最も高い、教室や職員室などがある「本棟」。その建物には入口に鍵が掛けられているものの屋上が存在し、敷地のほぼ中心に位置しているためにそこから校内をほぼ一望することができる。

つまり、校内のあちこちでテロリストが拘束されている様子も、こ

ここからならば一目で見ることができると。

「さてと、どうやら終わったようですね」

「……ああ、そうだな」

そして現在その屋上には、2人の生徒がいた。

1人は、艶のある黒いおかつぱ頭に同色の大きな瞳、そしてそれを囲む赤縁の眼鏡という出で立ちの女子生徒。

そしてもう1人は、高校生とは思えない筋肉の鎧を身に纏う巖のような存在感の男子生徒・十文字克人だった。

「向こうも片付いたみたいですし、私もそろそろ上がらせてもらいますね」

「……ああ」

つい先程まで頻繁に使用していた携帯端末をポケットにしまう彼女に、克人は最低限の言葉で了承の返事をした。その際、克人の視線が彼女の手首にある赤青白のリストバンドトリコロールへと向けられ、そしてそれを見計らったかのようなタイミングで彼女がそれを乱暴に引き千切った。

おそらく、という言葉をつけるまでもなく、彼女にはもはや必要の無いものだった。

彼女が「潜入」していたその組織は、今まさに目の前で制圧されて消滅したのだから。

「……君も、SMLの一員なのか？」

「いいえ、SMLとは今回の任務限定で契約を結んだだけで、私自身はフリーでやってます」

「フリー？ スパイにもフリーとかあるのか？」

「割といるみたいですよ？ 私はこれ一本ですけど、本業が別にあってアルバイト感覚でスパイやってる人とかいますし」

「そうか。……魔法科高校に通っていたのは、エガリテに潜入するためか？」

「まあ、そうですね。——さてと、私のことを探ろうとするのは構いませんけど、ちゃんと情報操作をお願いしますよ。そっちが面倒な雑事を請け負うことを条件に、こっちは襲撃犯の細かい情報とかその防弾

インナーとか提供してあげたんですから」

「……ああ、分かっている」

克人の答えに彼女は満足げに頷き、軽く手を振りながら「じゃ、そゆことで」と言い残してその場を後にした。

彼女の後ろ姿を見送りながら、克人はポツリと呟いた。

「――スノモン・レモン酔乃物檸檬か。明らかに偽名だな」

第14話 「学校に平和が戻ったゾ」

エガリテのメンバーによる第一高校襲撃事件が終息し、さらにブランシユも一斉摘発されたことで、第一高校の平和は無事に取り戻された。

ブランシユ日本支部壊滅のニュースは翌日の朝には一部のメディアで取り上げられていたが、そこでは摘発を取り仕切ったのは警察の公安ということになっていた。数年掛けた地道な調査によって内部事情が明らかとなったことで一斉摘発に踏み切り、見事グループの壊滅に成功した——というのが「表向きの事情」だ。

しかし今回の件に関しては、十文字家の代表代理でもある十文字克人が裏で糸を引いていた。いくら洗脳で操られていたとはいえ、第一高校に対する工作に生徒も関与していたという事実は外聞が悪い。よって彼を含む魔法師達によってグループに対する粛正が行われ、魔法師のコミュニテイの頂点に君臨する「十師族」からの指示を受けた十文字家がそれを隠蔽した——というのが「表向きの裏の事情」だ。

国連直属の秘密組織であるSMLがこの事件に深く関わっている、という事実はこの二重の情報操作の裏に隠されることとなった。もし熱心なマスコミやジャーナリストがこの件を調査したとしても、『十師族が裏で動いていた』という情報を掴んだ時点で満足するだろう。こうしてSMLは、今回も自身の秘匿性を守ってみせたというわけだ。

さて、そんなブランシユの下部組織エガリテで工作活動をしていた生徒達についてだが、司一からの洗脳魔法の影響下にあったということもあり、罪に問われることこそ無かったが経過観察と称した長期の入院を余儀無くされた。具体的な期間も生徒によってまちまちで、例えば壬生紗耶香は1ヶ月ほどで退院の目処が立ったのに対し、エガリテのリーダーだった司甲は洗脳の影響が深刻なこともあり最終的に自主退学という形が取られた。

ちなみに図書館で紗耶香が言っていた、二科生だからと摩利に手合

わせを拒絶された件については、しんのすけの言う通り勘違いであったことが後に判明した。摩利はあのととき「自分の腕では到底おまえの相手は務まらないから、もつとおまえの腕に見合う相手と稽古してくれ」と言ったらしく、つまり摩利は紗耶香の実力を二科生という色眼鏡抜きで認めていたことになる。

しかし言われた直後ならいざ知らず、普通ならば時間の経過と共に頭も冷静になっていくことを考えれば、その勘違いを1年以上も続けていたのは不自然だ。事実、マインドコントロールによってその勘違いを意図的に持続させられ、同時に一科生やクラスメイトに対する敵愾心も増幅されていたことが病院での診療によって判明している。

「花束なんて、わざわざ持参しなくても良かったんじゃないか？ デリバリーで届けた方が楽だったろう」

「いいえ、お兄様。こういう物は、自分の手で持つていくことに意味があるのです！」

「そーそー。達也くんったら、風情が無いなあ」

そして今日は、そんな紗耶香が退院する日。達也と深雪、そしてしんのすけの3人は、退院祝いの花束を携えて彼女のいる病院へと見舞いに向かっていた。ちなみにその花束は現在深雪が持つているのだが、ただでさえ人目を惹く容姿をしている彼女がそんな物を持つているとなればそれだけで著名な画家が描いた絵画のような光景となり、道行く人々が性別関係無く惚けた顔で振り返っていた。

と、やがて3人は病院の中へと足を踏み入れた。入口正面のロビーには既に紗耶香の姿があり、入院着から普段着に着替えた彼女は多くの看護師や家族に囲まれてはにかんでいた。

そして、そんな彼女のすぐ隣には、

「あれっ？ あそこにいるのは、桐原先輩ではありませんか？」

「知らなかった？ 桐原くん、毎日紗耶香ちゃんのお見舞いに行つてたんだゾ」

しんのすけの口からもたらされた事実司波兄妹が意外そうな顔をしていると、3人の存在に気づいた紗耶香と桐原が3人の所へと歩いてきた。

「3人共、来てくれたのね」

「はい。壬生先輩、退院おめでとうございます」

「ありがとう、司波さん」

大きな花束を抱えて嬉しそうに笑う紗耶香の姿に、隣でそれを見ていた桐原の頬が仄かに紅く染まる。

当然、それを見逃すしんのすけではない。

「いやあ、桐原くんデレデレですなあ」

「う、うっせえぞ野原！」

「まーまー、別に良いじゃないの。せつかくこうしてお付き合いできるようになったんだしさ」

「付き合——えっ！　なんでおまえがそれを知ってるんだよ！　告白したの、昨日なんだけど！」

「あつ、本当に告白してたんだ。テキストに言ったただけなんだけど」
「——てめえ！」

顔を真っ赤にした桐原がしんのすけに手を伸ばすも、彼は持ち前の運動神経と反射神経を駆使してあっさりとそれを避けた。ムキになった桐原が追撃しようと駆け出そうとするも、ここが病院であることに気づいたのか、すぐさま足を止めて彼を睨みつけるに留めた。

そしてそのタイミングを見計らってか、第三の人物がしんのすけに声を掛ける。

「君が、野原しんのすけくんかね？　私は壬生勇三、紗耶香の父親だ」

「おおつ、それはどーもご丁寧に」

スーツをキツチリと着こなす壮年の男性に、しんのすけは頭を下げて定型文を口にした。

一方達也はその名前を聞いて、即座に記憶の中の情報と結びつけた。元々は軍人であり退役してからは内閣府情報管理局に勤め、現在は外事課長で外国犯罪組織を担当しているのだったか。

「少し君と話がしたいんだが、良いかね？」

「おお？　良いゾ」

短い会話を交わして2人はその場を離れ、あまり人のいないロビーの隅へと移動した。

改めてしんのすけへと向き直った勇三の顔は、子供を慮る親のそれだった。

「娘から聞いたよ。娘が自分の行動に疑念を持つようになったきっかけは、カフェで君に『それで差別意識が無くなるのか』と問われたことなのだそう。娘を立ち直らせてくれたこと、本当に感謝している」

「おっ？ 別にオラ、そんな大したことしてないゾ。毎日病院にお見舞いに行つて励ましてたのは桐原くんだし、ブラジャーの人達をやつつけたのも達也くん達だし」

「……情けないことだが、私はそれすらもできなかったんだ。娘が怪しい奴らと付き合うようになってもそれを止められず、娘が抱えていたものに気づくこともできなかった。内閣府で働く者として、そして1人の父親として、私は自分が情けなくて仕方がない」

「まあ、過ぎちやつたことは仕方がないゾ。またやり直せば良いじゃない」

「——はははっ、やはり君は噂通りの人物なのだな」

「噂？ オラのこと知ってるの？」

「ああ、私だけに限らずね。君自身が思っている以上に、君は大物なのだよ」

「ほーほー、それは嬉しいですなあ」

口ではそう言つて照れるような仕草をするも、その口振りはとても軽く、まだどこか他人事である印象が拭えない。

勇三はそれも仕方ないと割り切り、しかしどこか歯がゆさも覚えながら、目つきを鋭くして「野原くん」と呼び掛けた。

その顔は、内閣府情報管理局外事課長として外国犯罪組織対策に取り組む者のそれだった。

「世界はこれから、第三次世界大戦にも匹敵するような激動の時代を迎えようとしている。そしてその激動の中心にいるのは、おそらく君だろう」

「えっ、オラ？ なんで？」

「申し訳ないが、君に詳しい情報を伝えることはできない。様々なシ

ミュレーションを行った結果、君に対しての過度な干渉は却って事態を悪化させるという結論になっているのでね。しかし目には見えなくとも、我々は万一のときにすぐさま君に協力できるような体制を整えている。もしも何か困ったことがあれば、遠慮無く私達を頼ってくれ」

勇三はそう言って、メモの切れ端にペンでサラサラと何かを書いて、それをしんのすけに手渡した。おそらく彼の連絡先と思われる、十数桁の数字の羅列だ。

そしてしんのすけはそれを一瞬だけ見ると、無造作にポケットに突っ込んだ。

「ほーほー、よく分からないけど分かったゾ」

「もちろん、君の友人達も何かあれば君の助けになるだろう。——特に、司波達也くんはね」

紗耶香と深雪が仲睦まじく喋っている横でチラチラとこちらの様子を窺っている達也を遠めに見遣りながら、勇三は意味ありげな笑みを浮かべた。

達也のことを知っているのか、と疑問を口にしようとしたしんのすけだが、どうせ答えてくれないだろうと思ってそれを止めた。

「私が言いたいことは以上だ。時間を取らせて悪かったね」

勇三がそう言って歩き出したので、しんのすけもそれについて行く。

2人の視線の先では、近づく2人に気づいた達也たちが会話を止めてこちらを見つめていた。ほとんどは口元に笑みを浮かべて出迎えるが、達也だけは勇三に向けるその目に若干の警戒心を覗かせている。

「しんのすけ、そろそろ出るぞ」

「ほいほい」

達也の言葉に、しんのすけはお馴染みの返事をして応えた。

*

*

*

「それにしても良かったです。壬生先輩がこうして退院して、また学校に通えるようになって」

仕事があるからと病院前で勇三と別れた達也たちが数百メートルほど歩いた頃、唐突に深雪がホツとしたような口調でそう言った。

それに対し紗耶香は若干ぎこちない笑みを浮かべ、隣の桐原は力強く頷いて応えた。

「確かにな。例の剣道部部长だけじゃなくて、他にも何人か辞めちまったみたいだしな」

表向きは解決したかに見える今回の事件だが、その影響は今もなお続いている。

前述の通り、洗脳の影響下にあった元エガリテメンバーである生徒にはメンタルケアが義務付けられ、紗耶香と同じように入院して治療を受けている。しかしいくら洗脳されていたとはいえ、学校を標的とした組織に加担していたという事実が消えることは無く、自責の念に耐えきれずに数人ほどが学校を去っていった。

さらに付け加えると、魔法というのは本人の精神状態に大きく影響する。何かしらのトラウマによって今まで普通に使えていた魔法が使えなくなるというのも珍しくなく、洗脳されていた生徒の何人かに上手く魔法を行使できなくなる症状が見られている。学校のカウンセラーである小野遥もあの事件以来、毎日のようにそんな生徒の対応に追われているらしい。

「そういや壬生が入院している間、壬生のクラスでもエガリテの元メンバーで学校を辞めた奴がいたっけな。確か名前は……、ええつと、何ていったっけなあ……？」

「ひよつとして、スノモノ・レモン 酢乃物檸檬という女子生徒ではないですか？」

「そう、確かそんな名前だったな。というかよく知ってるな、達也」

喉の小骨が取れたかのようにスツキリとした表情の桐原に対し、その名前を出した達也は心持ち目つきを鋭くして、事件解決後に克人から聞いたその女子生徒について考え始めた。

2年E組、スノモノ・レモン 酢乃物檸檬。

名前こそ特徴的だが、成績は二科生の中でも実に平凡。クラスでも

目立った言動は無く親しい友人もいなかったため、クラスメイトでさえ彼女の存在を即座に思い出せないほどに影が薄い。それこそ彼女が退学になったときでさえ、そんな生徒ウチの教室にいたっけ、と首を傾げるほどだったという。

しかしエガリテ、さらにはブランシユの中での彼女の評価は、それとはまったく異なっていた。

目立つようなスタンドプレーこそ無かったものの、エガリテの一員として工作活動に勤しむ彼女の仕事振りは堅実で、その甲斐あって上部組織であるブランシユへと引き抜かれた。そしてそこでも一定の評価を得た彼女は、次第にリーダーである司一からも大きな信頼を寄せられるようになった。今回の一高襲撃で実質的にグループを指揮する立場に抜擢されたのも、その信頼の大きさを物語っているとさえ言う。

しかし結果的に組織は壊滅、元々学校に馴染めていなかった彼女はそのまま消えるように学校を去っていった——というのが表向きの筋書きだ。

そんな彼女が実はSMLと協力関係にあったスパイであり、最初からブランシユに潜入するのが目的で第一高校に入学していたなんて情報は、もちろん公にはされていない。

今回の一件において、彼女が担っていた役割はとても大きかった。

武装集団を迎え撃った生徒や教師にこれといった怪我が無かったのも、武装集団の人数から襲撃する施設とその侵入経路、そいつらの所持している武器、魔法師ならばどんな魔法を得意としているか、などといった事細かな情報を事前に彼女から得ていたからだ。それは真由美を介して教師を交えた会議で提出されたのだが、あまりにも詳細なその情報に、教師の一人が「これはテロリストが学校を襲撃するという設定の訓練ですか？」と尋ねたほどだった。

そして実際に武装集団が襲撃してきたときも、彼女はブランシユに作戦が順調であると嘘の情報を流すことによつて一を油断させた。それが結果的にブランシユ摘発に一役買ったという事実も、その場に居合わせた克人を含め数人しか知りえないことだ。

——俺と同じくらいの年齢にして国際的な組織の潜入捜査を任されるスパイ、しかもどこかに所属しているわけではないフリー、か……。

この100年の間で世界はずっと狭くなった、とよく評されるようになった。

その言葉には、2つの意味がある。非魔法師にとっては、単純に交通技術の発達によって気軽に海外旅行ができるようになったため。そして魔法師にとっては、人材・技術の流出を防ぐために海外への渡航を著しく制限されているため。

しかし達也は、ここ最近特に強く思うようになった。

どうやらこの世界は、自分が感じているよりもずっと広いのだと。

そしてふと、達也は思った。

国連直属の秘密組織・SMLと個人的な繋がりを持つ野原しんのすけの“世界”とは、はたしてどれほどの大きさを持つものなのかを。達也の目は、自然とグループの先頭を歩くしんのすけへと向けられた。

普段なら率先して喋り出す彼には珍しく、黙って前を向いて歩いていた。

まるで、下手に口を開いていけないことを喋らないようにしているかのように。

*

*

*

しんのすけ達のいる場所から数百メートルほど離れたビルの地下1階。

普通の人間ならばそもそも地下が存在していることすら認識できないそこにあるのは、何の変哲も無い居酒屋だった。提供される料理も酒も普通のそれと変わらず、さらに言うと特別美味いわけでもない。普通の居酒屋と違うところを強いて挙げるならば、それはSMLが所属している者のために造った“保養所”の1つであり、特殊な手段で予約しなければ利用できないことくらいだろう。

そんな居酒屋は現在、3人組のグループのためだけに営業されていた。

1人は、お色気。私服姿の彼女ではあるが、線の細いジーンズにスカジャン、そしてデザインよりも機能性重視のスニーカーという、男性が着けていても違和感の無いファッションをしている。

1人は、スノモノ・レモン。つい先日まで第一高校の生徒であり、そのときは黒髪黒目をしていたはずだが、今の彼女は名前を体現するかなのような瑞々しい果実のごとき明るい金色のボブカットと、宝石のように鮮やかな碧い目をしていた。とはいえ本来の姿がこちらであり、黒髪黒目の方がカツラとカラコンで偽造したものである。ちなみにレモンというのも偽名であり、お色気ですらその本名は知らない。

そしてお色気の隣に座るのは、2メートル近い大柄な体とボディビルダーのように鍛え上げられた筋肉が迫力満点な金髪角刈りの男性だ。その見た目から「筋肉」という直球すぎるコードネームを持つ、SMLの一員である。

ちなみにお色気と筋肉は過去に結婚して子供を授かり、一度離婚してから紆余曲折を経て再婚したという経緯がある。ちなみに一度離婚した原因は、筋肉の浮気である。「正義の味方が浮気って……」とか思っではいけない。

そんな3人がこのような場所で顔を合わせて何が目的なのか、と思われるかもしれないが、何てことはない。

このような場所で行われることなど、だいたい相場が決まっている。

「それじゃブランシユ日本支部壊滅を祝して、かんぱーい！」

「かんぱーいー！」

「……乾杯」

お色気の音頭に合わせて筋肉が声をあげ、2人はビールをなみなみ注いだ大ジョッキを互いにぶつけ合った。そして少しだけ遅れて、レモンがその後が続く。

景気づけとばかりに半分ほど一気に呑んだ筋肉が、「ぶはー！」とジョッキを叩きつけるようにテーブルに置いた。そして同じテーブ

ルに乗った、濃いめに甘辛く味付けされた鶏の手羽先へと手を伸ばす。

「ほれ嬢ちゃん、俺達の奢りなんだから遠慮しないで食え」

「……お2人とは何回か仕事したことがありますけど、こうして仕事終わりの打ち上げとか未だに違和感があるんですね。私達、一応スパイですよね？」

「そうか？ 俺達、結構な頻度でやってるけどな。この前だって一頻り呑んだ後、カラオケで朝まで歌いまくってたし」

「SMLは大学のサークルか何かですか？」

レモンは呆れるように言ったものの、手羽先を1つ摘んで囓ると飲み物で流し込んだ。ちなみに飲み物はレモンスカッシュだが、お色気から「自分の名前で選んだの？」という質問には強く否定の返事をしていった。

「それにしても、今回はレモンちゃんがエガリテに潜入してくれて本当に助かったわ。レモンちゃんくらいの年齢でスパイを生業にしているのってほとんどいないし、仕事ぶりもSMLウチの奴らと比べても優秀だし。——ねえ、やっぱしウチに来ない？」

「せっかくですけど、しばらくはフリーでやらせてもらいます。こっちの方が性に合ってるので」

「『しばらく』って、もう何十年もそれじゃないの。フリーで専業スパイって大変じゃない？ それとも、どこか1つの組織に所属するごとに抵抗があるとか？」

「……………」

お色気の質問にレモンは答えず、レモンスカッシュを一気に飲み干した。備え付けのタッチパネルで追加の飲み物を注文すると、今度は別の皿に盛られたフライドポテトに手を伸ばす。

若干雰囲気为重くなりかけた中、ジョッキのビールを空にしてから筋肉が彼女に問い掛けた。

「そういや、嬢ちゃんは1年以上あの学校に通ってたわけだろう？」

「どうだった？ 日本でも有数のエリート校なんだろう？」

「そうですね……………」

レモンは考える素振りをしながら空のジョッキをテーブルの端に寄せ、そして口を開いた。

「二科生には教師がつかないことを差し引いても、魔法を学ぶことに関して不自由はしないでしょうね。学校の掲げる理念は生徒の間にも広まっていますし、生徒達も自分の与えられた役割をしっかりと認識しながら勉学に励んでいます。そしてこの間の襲撃事件から、実戦においても一定の成果を挙げられることが分かります」

「確かに俺の目から見ても、アイツらの動きはあの歳にしちやかなり統率が取れてるよう感じた。いざとなったら助けに行く手筈だった俺達が、結局出番無しだったくらいにはな。どこに行つたとしても、アイツらならまず即戦力になるのは間違いないだろうな」

手羽先に食らいつきながら、筋肉がウンウン頷きながらそれに賛同した。

そのような評価の後に、レモンはこう続けた。

「なので正直、私はしんちゃんにあの学校に通ってほしくありません」「……それはまた、なんで？」

お色気の疑問はもつともだ。レモンの先程の評価は、まさに魔法を学ぼうとしているしんのすけにとって最高の環境であることを示すもののはずだ。そしてそれは彼女の隣で、手羽先の肉と骨を分ける作業の手を止めてレモンを見つめる筋肉も同じだった。

2人の視線を一身に受けながら、レモンが口を開いた。

「第一高校を卒業した生徒達の進路、ご存じですか？」

「ええつと、確か……。国立魔法大学が大半で、防衛大学校もそれなり、後は一般大学に進学したり公務員に就職するのが多いんだっけ」「ええ。しかし実際は国立魔法大学に進学した生徒の大半は軍関係に就職しますし、公務員と言ってもその内容は警察の機動隊や消防、あるいは山岳警備隊などです。要するに“命の危険を伴う職業”が大多数ということですよ。さらに言うところには“一科と二科を合わせた比率”ですので、優秀な成績を残した者に限定するとこれらの職業に就職先がほぼ限定されているのが実情ですよ」

「つまり嬢ちゃんは、あの小僧が将来そういう職業に就くのが心配

だつて言いたいのか？ 仮にそうだとしても本人が決めたことなら周りがとやかく言うことじゃないし、それが嫌なら最初から本人が拒否すりや良いつてだけの話だろ？」

「ええ、確かにその通りです。——本当に拒否ができるなら、の話ですが」

最後に付け加えられた、というより強調するために倒置されたその言葉に、お色気と筋肉が揃って目つきを鋭くした。

「——それってどういう意味？ しんちゃんを洗脳してでもそういう職業に就かせようって奴らが出てくる、とでも言いたいのかしら？」
「しんちゃんに対してかどうかは別にして、そのようなことは既にこの社会で行われてるじゃないですか。『魔法師は国家から様々な恩恵を受ける代わりに、国益のために奉仕する義務がある』という謳い文句でね」

ナンバーズ
数字付き、二十八家、そして十師族。

優秀な魔法師を多く輩出する家系であるほど、国家から様々な特権を与えられている。それこそ十師族ともなると、日本を裏から牛耳る”と称されるくらいにだ。そうでなくとも魔法に関する国立機関や研究所は国家から様々な便宜を図られているため、魔法師達はそれを通して利益を享受していると解釈することもできる。

しかしそれは、魔法技術によつて国益を創出したり、有事の際に魔法師が矢面に立つことを前提としたものだ。そしてそういった仕組みは日本に限らず、魔法という概念が発見されてから世界中の国家で見られるようになったものである。

「スポーツや芸術の才能があると分かった子供に、親がプロにさせようと練習を強要させる。伝統芸能の家元に生まれた子供を後継者にするべく、物心付く前から厳しい稽古を付けさせる。——あの学校に通う子供達を見ていると、どうにもそれを連想してしまふんですよ。……本人達が何の疑問も無くそれを受け入れている、ということも含めてね」

「嬢ちゃんから見たらそうかもしれないが、実際には本人も納得したうえでその道を選んでるかもしれないぞ？ それに魔法師の場合、色々

な試行錯誤のうえでそういった仕組みが作られたっていう歴史的な背景もある。あんまり決めつけるもんじゃねえと思うけどな」

筋肉のその声色は、まるで自分の子供に言い聞かせるようなものだった。実際、この2人は親子ほどの年齢差があるため自然とそうなるのかもしれない。そう考えると、黙ってそれを見守っているお色気はレモンの母親のようにも感じられる。

一方レモンも、実の親に叱られたような居心地の悪さを覚えながら、テーブルに置いたレモンスカッシュに視線を落とした。何とも言えない表情をした自身の目が、レモンスカッシュに反射してこちらを見つめ返している。

「……すみません、この話は忘れてください。私自身が昔そうだったこともあって、こういうことに対して過剰反応していることは自覚しています」

「いや、別に責めてるつもりは無かったんだが……。それじゃこの話はこれで打ち切りにするとして、最後に1つだけ訊いて良いか？」

レモンが顔を上げて筋肉をまつすぐ見据えるのに合わせて、彼はその疑問を口にした。

「それじゃ嬢ちゃんは、なんでこの仕事を続けてるんだ？」

その疑問に対し、レモンは考える素振りをしてから、自身に言い聞かせるようにこう言った。

「私の仕事によって確実に救われている人がいる、と思えるからです」

*

*

*

セイロン島スリランカから南東でおよそ500キロ、ほぼ赤道上に浮かぶ四国ほどの面積の島にあるのが、立憲君主国家の「ブリブリ王国」である。建設当時のまま（一部水没した箇所もあるが）綺麗に残っている古代遺跡は学術的にも価値が高く、その歴史を肌で感じようと毎年多くの観光客が訪れている。

さらに政治的な面、特に軍事に關してもよく注目されている。

CADの機能を無力化するサイオンノイズを作り出すアンティナ

イトは高山型古代文明の栄えた地で産出されるのだが、それほど高い山が無いはずのブリブリ王国でもなぜか採れ、しかも質も量も他より一段優れた一級品だ。アンティナイトはかなりの高値が付くので莫大な利益を得ることも可能だが、それを海外に輸出することによる混乱を考慮した国王が産業化を禁じたのである。

しかし手段を選ばない国家や犯罪組織の中には、ブリブリ王国のアンティナイトを狙って攻撃を仕掛けることもしばしばだった。しかし王国直属の軍隊は世界最高峰の練度を誇っており、特別魔法師の数が多いわけではないにも拘わらず、それらの悉くを返り討ちこたごとにしている。それが宣伝効果を生んだのか知らないが、今やブリブリ王国に安易に喧嘩を売る者はまずいない。

「以上のルートで日本に入国した後は、日本政府が派遣した大使の案内で富士演習場まで向かいます。大会期間中は演習場内にあるホテルに滞在することになります」

「向こうが派遣する大使については、何か聞いてる？」

「おそらくは九島將軍になるだろう、と聞いております」

「九島將軍か……。『生ける伝説』をこの目で見られるなんて、楽しみがまた一つ増えたね。——うん、分かった。報告ありがとう、ルル」

王都のほぼ中央に位置する王宮には、王子専用の執務室が存在する。彼の父である国王は存命でバリバリ働いているのでしばらくは王位継承も無いだろうが、聡明で勉強家として知られる王子も既に政治に関わっており、主に外交関係で海外を飛び回りながら国王の手助けをしている。

そして現在その執務室では、1人の少年と1人の女性が先程の会話を交わしていた。1人の少年はその部屋の主であるスンノケシ王子であり、1人の女性はかつて王室親衛隊に所属した軍人で、現在は彼の秘書として働くルルという名の美女だ。

と、先程まで手帳を片手に真剣な表情で報告していたルルが、ふいにその表情を和らげて優しい笑みを浮かべた。それは彼女の上司に對して向けるには相応しくなく、それこそ昔からその成長を見守ってきた親愛なる子供に對するそれだった。

「いよいよですね、王子」

「うん、本当に楽しみで仕方がないよ」

ルルの言葉にスンノケシは口元に笑みを携えながら同意し、その視線を机へと落とした。

そこにあるのは、情報媒体と言えば電子機器が当たり前となった現代ではかなり珍しい、紙に印刷されたパンフレットだった。表紙には『全国魔法科高校親善魔法競技大会』という日本語がでかどか書かれ、ページを捲ると開催日時や競技に関する詳しい説明が記されている。

そのパンフレットは、よく読み込まれていることが分かるくらいヨレヨレにくたびれていた。

「ごめんねルル、僕の我が儘のせいで色々と迷惑を掛けて」

「王子はお気になさらないでください、私も彼らとの再会を心から楽しみにしているのですから」

「公務が無ければ海外に出るのも一苦勞となると、どうしても『王子』という肩書きを煩わしく感じてしまうよ」

「ご容赦ください、王子。今回の『旅行』が明るみに出れば、我が国と日本との軍事的な繋がりを邪推される恐れがあります」

「もちろんそれは分かっているよ、僕だって無用なトラブルは避けたい。——ただ時々、どこまでも自由な『彼』のことを風の噂で聞く度に、ほんの少しだけそれを羨ましく思ってしまうだけさ」

「……『彼』に会えるのが、とても楽しみですね」

穏やかな笑みの裏に本当の感情を隠すスンノケシに対し、ルルは心の中に浮かんだ言葉ではなく、それだけを口にした。

しかしその甲斐あってか、スンノケシは笑みを深くして弾んだ声でこう言った。

「うん、本当に楽しみだよ。それに彼には、報告しなければいけないことがあるしね。——彼はどんな反応をするかな？ 普段は驚かされてばかりの僕だけど、もしかしたら彼を驚かすことができるかもしれないね」

「……………」

若干悪戯っぽく笑いながらそう言う王子に、ルルは何も答えなかつた。

その代わり、心の中でこんなことを思った。

そうやって悪戯っぽく笑うと、ますます「彼」そっくりだと気づかされる、と。

九校戦編

第15話 「夏が近づくとワクワクするゾ」

あれだけ慌ただしかった4月が嘘だったかのようになり、第一高校は実に穏やかな日常を経て7月を迎えた。穏やかな気候の春を越え、雨と湿気で気分が重くなりがちな梅雨を越え、今は朝晩ですら汗ばむことも珍しくないほどに気温も上がってきた。

それはすぐそこまで迫っている夏を予感させるものであり、それに伴ってやって来る「夏休み」を期待させるものだった。普段から彼らを悩ませる勉強から（一時的とはいえ）解放される夢のような期間を前にして、学校全体がどこか浮ついた雰囲気にも包まれている——かと思えば、実際はそうでもなかった。

なぜなら、幸福と不幸が表裏一体であることを証明するように「奴」がやって来るからだ。

普段から生徒を悩ませる勉強、言うなればそいつの「親玉」と呼んでも過言ではない存在。そいつのせいで、普段から勉強を疎かにしている生徒も、いや、そんな生徒ほど必死になってそのツケを取り戻すべく、慣れない徹夜に励んで机に向き合っているのである。

そんな、人間1人の生活サイクルさえも変えてしまう恐るべき存在。その正体とは、そう——期末テストだった。

「失礼しました」

そして今日は、その期末テストの結果が戻ってくる日。

学校のあちこちで歓喜と悲嘆が緋い交ぜになって渦巻く中、教師に呼び出された達也は一礼と共に挨拶をして指導室を後にした。

そんな彼を入口で待ち構えていたのは、レオ・エリカ・美月の二科生3人組と、ほのか・雫の一科生2人組だった。皆が皆それぞれのベクトルで美形なのに加え、二科生初の風紀委員として有名な達也と親友ということで、彼女達はすっかり学校の有名人であり、こうして並んでいる光景はとても目立っていた。

「みんな……、どうしたんだ、こんな所に集まって」

『『どうした』はこっちの台詞だぜ、達也。指導室に呼び出されるなんて、いったい何をしでかしたんだ?』

驚きの表情を浮かべた達也の質問に答えた（というより問い返した）のは、その集団の中の紅一点ならぬ黒一点のレオだった。

すると達也は、呆れるような苦笑いのような微妙な表情になって、「期末試験のことで、ちよつと尋問を受けていたんだ。実技で手を抜いたんじゃないかって疑われたようだ」

「手を抜くつて……、そんなことして何の得になるつていうの?」

「でも、先生がそんな気になるのも分かる」

「そうですよ! それだけ達也さんの成績が凄かったつてことなんですから!」

美月が拳を握りしめて力説していたが、彼女が興奮するのも無理はなかった。

先日期末試験が行われたのだが、その結果に校内は騒然となった。総合点で見ると、1位は深雪、2位はしんのすけ、3位はほのかと、トップ3は入試と同じ顔触れとなった。実技試験だけで見ても、1位は深雪、2位はしんのすけ、3位は雫と、これまたお馴染みのメンツである。ちなみに実技の4位はあの森崎だったが、今は特に取り上げることでもないだろう。とにかく、総合成績も実技単独の成績でも、氏名が公表される上位20人は全員一科生だった。

しかしこれが、筆記単独になると様子が変わってくる。

1位が達也、2位が深雪、3位が吉田幹比古という二科生と、トップ3に二科生が2人もいるという前代未聞の事態となった。特に1位の達也は2位の深雪に平均点で10点以上もの差を付けるといって圧倒的な成績である。

ちなみに他に顔馴染みを挙げると、5位がほのか、10位が雫、17位に美月、19位にしんのすけ、20位にエリカと、トップ20人に広げても二科生が4人いるという異常事態だった。ちなみにレオと森崎はランク外なのだが、今は特に取り上げることでもないだろう。

「あらー、レオったらアタシよりも下なのー？ おほほほほ」

「だああ！ わざわざ蒸し返すんじゃないやねえよ、エリカ！」

わざとらしく口に手を当てて嘲笑うエリカにレオが怒鳴り声をあげるのは、高校入学後からすっかりお馴染みとなった光景だ。

ちなみにこの試験結果を見た達也が最も意外に思ったのは、しんのすけが筆記試験で20位以内に入ったことだった。本人には失礼だが、普段の言動からとてもそんなタイプには見えない。あれで実は普段からきちんと予習復習しているのか、それとも一夜漬けの効率がもの凄く良いのか。

「それで達也さん、誤解は解けたの？」

雫の問い掛けに達也は逸れかけていた思考を引き戻し、そして先程までの遣り取りを思い出したのか若干疲れた様子で首を縦に振った。

「まあ、一応な」

「一応？」

「第四高校に転入を勧められたよ。あそこなら魔法工学に力を入れているからってな」

「そうなの？」

達也の言葉に、エリカが即座に雫に話を振った。彼女の従兄が四高に通っている、という話を聞いたことがあるからだ。

すると彼女は、静かに首を横に振った。

「確かに力を入れてるけど、それはあくまで『他の高校よりは』という程度。実技が優先されることには変わらない」

「まあ、赤点ギリギリとはいえ、何とか合格ラインには届いているんだ。俺が了承しない限り、余所に転校されるといふことはないだろう」

「まあ、達也くんみたいなタイプの生徒なんて初めてだろうし、先生も先生で扱いに困ってるのかもねえ」

エリカが苦笑混じりで口にした考えは、達也も同意するところだった。特に達也は二科生ということもあり、普段から教師とのコミュニケーションが不足していることも原因の一つだろう。別の学校に籍を移すかどうかは別にしても、確かに学校のカリキュラム自体に何か

しらの変化を加えないと対応できないのかもしれない。

などと他人事のように分析をしていた達也がふと周りに目を遣ると、こちらに注目している生徒が存外多いことに気がついた。

「みんな、そろそろ移動しよう。ここじゃさすがに邪魔になる」

達也の言葉に全員が頷き、彼らは移動を開始した。今日は達也も風紀委員としての仕事は無いため、いつものようにカフェでのんびりお喋りして過ごすことになるだろう。

入学前は図書館に籠もって放課後を過ごすことになるはずだったのにな、と達也は表情に出すことなく心の中で笑みを零した。その笑みに自嘲のニュアンスが含まれていなかったのは、彼としても喜ばしいものではあるのだが。

「それにしてもお兄様の一大事だったのに、深雪はどこに行ってるの？ しんちゃんも来なかつたみたいだし」

道中、ふいにエリカがそう言った。言葉上はこの場にはいないことを責めるものだったが、ニヤニヤと笑みを浮かべて弾んだような声で言っているため、単なるからかいの域を出ないものだろう。

「深雪は九校戦の準備で大忙しだ。おそらくしんのすけも、代表選手を集めてのミーティングに駆り出されてるんだろう」

達也の言葉に、その場にいた全員が思い出したように頷いた。

全国魔法科高校親善魔法競技大会、通称「九校戦」は、全国に9つある魔法科高校の生徒達がスポーツ系魔法競技で競い合う全国大会である。例年夏休み中に国防軍所有の富士演習場南東エリアで10日間にわたって開催され、観客は10日間で述べ10万人ほど、映像媒体による中継も合わせると100万人は下らない一大イベントだ。軍としても優秀な実戦魔法師を確保するためか、競技会場と共に軍の所有するホテルを宿舎として生徒と学校関係者に貸切で提供するなど全面的に協力している。

夏休みが近いのに生徒達が浮ついていないのも、期末テスト以外にこれが関わっているからだ。特に今年は第一高校にとって、大会始まって以来の3連覇が掛かっている。生徒会長・七草真由美、部活連会頭・十文字克人、風紀委員長・渡辺摩利という国際ライセンスA級

相当の3人を筆頭とした第一高校現3年生は「最強世代」と評されており、今回の大会がまさにその最強世代による集大成と言っても過言ではない。

「そういうえば、ほのかと雫も、九校戦には選手として出場するんだよね？」

エリカの問い掛けに、ほのかと雫が揃って頷いた。九校戦は全学年が参加可能な「本戦」と1年生のみが参加できる「新人戦」の2つに分かれており、一科生の中でもトップクラスの成績を誇る2人が選手に選ばれるのはむしろ必然であった。

そして当然ながら、紛う事なきトップの成績である深雪、そしてそんな彼女の次点に付けてるしんのすけも代表に選ばれている。

「まー、この4人が選手として出るんなら、新人戦は一高の優勝で決まったようなものでしょー！」

エリカの言葉に、雫は真剣な表情で首を横に振った。

「そんなことはない。今年は三高に、一条の御曹司が入ったから」

「一条って、十師族の一条か？ そりゃ確かに強敵っぽいな」

「随分と詳しいね。ひよつとして、雫って九校戦フリーク？」

「雫は毎年、大会を観に行ってるんだよ。特にモノリス・コードがお気に入りなんだよね」

「今年は観る側じゃなくて競う側ですね」

「うん、頑張る」

無表情ながら拳を握り締めて力強く決意を露わにする雫に、自然と周りの面々も笑顔になる。

と、そのとき、

「あつ、おまえらー！ しんのすけを見なかったかー！」

「桐原先輩？」

達也たちの集団に慌てた様子で駆け寄ってきたのは、2年生の桐原だった。例の事件以来すっかり顔見知りとなった先輩であり、特に自分と同じく剣を嗜んでいるエリカとしんのすけとよく一緒にいるところを目撃されている。

「しんちゃん、ですか？ 放課後に教室で別れてからは見てませんけ

ど」

「マジか……。あの野郎、まさか逃げやがったな……！」

「逃げた？ ミーティングから逃げたってことですか？」

「ああ、そうだ！ 時間になっても来ないから俺がわざわざ迎えに行っただんだが、途中でトイレに寄るとか言っただけでそのままいなくなっちゃったんだよ！」

「ええっ！」

驚きの声をあげるレオやエリカ達を尻目に、桐原は「もしアイツを見掛けたら、真っ先に俺に連絡をくれ！」と言い残すと、苛立ちを全面に押し出しながらその場を走り去っていった。

達也たちは彼の背中を、同情を交えた視線で見送ることしかできなかった。

*

*

*

一方、件のしんのすけはというと、学校の敷地内にあるちよつとした草原に仰向けに寝そべって空を見上げていた。夏空を象徴するような入道雲がゆっくりと視界を横切るのを、彼は何の感情も見出せないぼんやりとした顔で眺めている。

しかし彼は、ただ雲を眺めているだけではなかった。

彼の右手には携帯端末が握られ、通話状態で彼の右耳に当てられている。

『——で、今日もミーティングをサボっているって？』

「サボってるだなんて失礼だゾ、レモンちゃん。ちよつと気分が乗らないから、トイレの窓から抜け出したただけだゾ」

『いや、それ充分にサボってるでしょ……』

しんのすけが口にした通り、通話の相手はつい2ヶ月ほど前までの学校の生徒だった少女、スノモノ・レモンであった。フリーのスパイである彼女が第一高校を去った後どうしているのかは不明だが、こうして彼との会話に付き合える程度の余裕はあろうようだ。

と、端末から聞こえるレモンの声色が、しんのすけを心配するもの

へと変化した。

『桐原さん、今頃必死に探してると思うわよ？ 他の代表選手だって待ってると思うし、十文字会頭は怒らせたら怖いんじゃない？』

『ダイジヨブダイジヨブ。オラがいなくても、みんな上手くやってるって』

『……念の為に確認だけど、嫌なことをむりやりさせられてるってことは無いよね？』

『嫌なこと？ 例えば？』

『……いや、別にそうでなければ良いんだけど』

『ふーん、変なレモンちゃん。——でもまあ、確かに他のみんなも待ってるかもしれないし、顔だけでも出しますか』

しんのすけはそう言うと、変な掛け声を呟きながら上体を起こした。

『よっこいしょういち、っと』

『しんちゃん、随分古いギャグを知ってるね』

『おつ？ やっぱレモンちゃんは分かってくれる？ いやあ、こないだ達也くんたちの前でやったとき、全然ピンと来なかったみたいでさあ』

『そりや今の時代の子供は、太平洋戦争のときに海外に取り残された日本兵のことなんて知らないもの。というか、それを抜きにしてもしんちゃんの世代からしたら古くない？ すぐに分かった私が言うのも何だけど』

レモンの言葉に、しんのすけは「うーん」と煮え切らない返事をしてポリポリと頭を掻いた。

それはここ数ヶ月ですっかり風紀委員のムードメーカーとして定着した彼らしからぬ、どうにも覇気の無い腑抜けた声だった。

『どうしたの、しんちゃん？ 何だか元気が無いじゃないの』

『うーん、幼稚園の頃は毎日楽しかったのに、今は何だかなあ……、って思ってる』

『高校生活、楽しくない？』

『そんなことないゾ。でも時々、オラの話が通じないときがあるんだ』

よねえ……。幼稚園の頃はオラがボケればすぐツッコんでくれたけど、達也くんたちだとオラの求めているツッコミをしてくれないときが多いんだゾ」

それは何も、先程のようなジエネレーションギャップの大きいネタに限った話ではなかった。最新の流行りネタを織り交ぜたボケをしたときにも達也たちは同じようにキョトンとした表情を見せ、挙げ句の果てにはそのボケの説明を求められたのである。ウケなかったボケの解説ほど虚しいものは無く、さすがのしんのすけもそれには相当落ち込んだ。

魔法科高校というのは、たとえ二科生であつても世間一般から見れば充分エリートだ。そんな学校に通う生徒というのは、一部例外こそあるものの基本的には優等生タイプが多い。そんな彼らはテレビもあまり観ないし、エンタメ業界などの流行りネタにも疎いのである。

ちなみにしんのすけは、テレビも芸能ニュースも大好きだ。普段からマイペースで人を振り回すきらいのある彼ではあるが、世間一般の人々並にミーハーな一面も持ち合わせているといえる。アニメも特撮もドラマも娯楽映画もよく観ているため、そういった知識においてはむしろ達也たちよりも詳しいだろう。だからこそ、ネタがほとんど通じないのだが。

そのときのことを思い出してか、しんのすけはつまらなそうに溜息を吐いて唇を尖らせた。

そしてそれを電話越しに感じ取ったレモンから、クスリと笑みが漏れるのが聞こえた。

もつとも、その笑みにはからかいの色が多分に含まれていたが。

『成程。つまりしんちゃんは、春日部のみんなが恋しくなっちゃったと』

「ちよつ——！ な、何を言ってるの、レモンちゃん！ そんなわけないでしょう！ まったくもう、ジョーダンきついゾー！」

『そうなの？ 初めての1人暮らしで、てっきりホームシックにでも罹ったのかと思ってたけど』

「まっさかー！ むしろ清々してるゾー！ 1人暮らしは良いゾー！」

どんなにお寝坊してもガミガミ怒ってくる母ちゃんはいないし、お菓子ばかり食べるなってグチグチ言う父ちゃんはいないし、テレビのリモコンを奪ってくるひまもないし!」

『そっかそっか、つまりしんちゃんは何の体調不良も無いってことだね。——だったら、ちゃんとミーティングには参加しないと』

「おいつ、野原! こんな所にいやがったのか!」

まるで示し合わせたかのようなタイミングで、桐原がズンズンと大股でこちらへと駆け寄ってくるのが見えた。散々校内を駆けずり回ったのか、肩を大きく上下させるほどに息を荒らげている。心無しか、先程よりも顔がやつれたように見える。

彼の声が電話の向こうにも届いたのか、レモンが『それじゃしんちゃん、ちゃんと参加しなさいね』と言い残して電話を切った。

「さっさと行くぞ、野原! 十文字会頭だけじゃなくて、他の先輩達もずーっと待ってんだよ!」

「んもう、桐原くんもしつこいなあ。オラが逃げる度に追い掛けてくるなんて、そんなにオラのが好きなのお?」

「俺だってやりたかねえよ! でも最近でめえを追い掛けてばかりいるせいで、他の奴らからも俺がおまえのお目付け役みたいに思われてんだよ! 今日なんて十文字会頭から『桐原、頼む』なんて指名されちまったんだぞ!」

鬱憤を撒き散らす勢いで捲し立てながら桐原はズンズンとしんのすけに近づいていき、彼の首根っこを掴んでそのまま引っ張っていった。そのときに彼の口から「いやあん!」なんて気持ち悪い声が出たが、すっかり慣れてしまったのか桐原は一切反応せず力も緩めようとしない。

そんな桐原に観念したかのように、しんのすけはされるがまま引っ張られていった。

*

*

*

ここ100年の間に「魔法」という新たな力を手に入れたことで

劇的な変化を遂げた日本だが、それとは関係の無い分野においても様々な変化がもたらされた。

その中でも特に変化が大きいと言えるのが、“交通”の分野である。

例えば鉄道の場合、以前は数百人規模の大型車両を既定のスケジュール通りに動かしていたのだが、今や長距離移動用の路線を除けば2人から4人乗りのキャビネットが一般的だ。駅のプラットホームにキャビネットがズラリと並び、個々人が好きなときに好きな場所まで自由に行けるようになっていく。『満員電車』なんて言葉は、現代の若者で知ってるのはほぼ皆無だろう。

また現代では『カー・シェアリング』の考え方に則った近距離公共交通システムが構築され、コンピューターと呼ばれる無人運転の共用車両が全国的に普及している。自家用車を所有する者もまだまだいるが、運転免許を持ってない子供から自分で運転するのは危険なお年寄りまで自由に使えるコンピューターの出現は、21世紀中盤までは社会問題化していた『買い物難民』という言葉が死語に追いやった。

10年ほど前まで局所的・限定的な時間のループに囚われていた春日部市だが、そういった社会情勢の変化は周りと同じタイミングで訪れていた。これらについても同様で、最初は新しいシステムに戸惑う住民も多かったが、すぐにその利便性に気が付き、加速度的にその利用者数を増やしていった。

しかしながら、キャビネットはともかく、コンピューターについては未成年の利用率はまだまだ低い。市内の学校でも徒歩での通学を推奨している所はまだ多く、幼稚園や遠方の学生など従来ならばバスを利用していたであろう者に限定されている。それが習慣として染み付いているのか、休日に出出するときにもコンピューターを使わずに徒歩で待ち合わせ場所まで向かう、というのも少なくなっていくようだ。

「あれっ、風間くんからメールだ。今日も来れないって」
「高校に入っても忙しそうだね、風間くん。ずっと勉強してる感じじゃない？」

「もう1ヶ月くらい、風間くんと会ってない」

現在「馬の尻公園」に集まってそんな会話を交わしているこの3人も、コミューターではなく徒歩でここまでやって来たクチだ。

ブランコに座って足をプラプラさせているのは、明るい茶色の長髪をツインテールにしている少女・桜田ネネ。

彼女の正面の柵に寄り掛かるのは、どこか気弱な印象を受ける短髪の少年・佐藤マサオ。

2人とちようど等間隔の場所に立ってゆつくりとした口調で話すのは、高校生の平均身長よりかなり高い体つきをした少年・ボー。もちろん本名ではないのだが、渾名ばかりが独り歩きしており本名を知る者はほとんどいない。

「しんちゃんも東京に行っちゃったし、こうやってどんどん顔を合わせる機会も減っていくのかしらね」

「昔はちよつとしたことですがすぐに集まって遊べたのにね。まあ、今にして思えば、よく100年もそれが続けられたなって感じもするけど」

「でも、楽しかった」

ボーの言葉に、他の2人も同時に溜息を吐いて言葉無く同意した。

そう。この3人も他の春日部市民と同様、時間のループによって100年以上にも渡って歳を取らずに過ごしてきたのである。そのときの彼らは5歳児であり、しかも一部の有力者から特別視されていた野原しんのすけの幼馴染でもあった。

当然ながら春日部市を襲った様々な危機に直面したことも両手の指では足りず、その度に3人としんのすけ、そして現在ここにはいないもう1人の幼馴染・風間トオルの5人は力を合わせて立ち向かっていった。いうなれば彼らもしんのすけと同様、日本を様々な危機から救った陰の功労者である。

しかし時間のループから抜け出して高校生となった現在の彼らは、そのときに比べるとどうにも覇気が無くなっているように思えた。

現代の日本では高校のときから専門性の高い学校に通うのが一般的であり、それに沿うようにネネはデザイナーを夢見て服飾系に、マサオは漫画家を夢見て美術系の高校に通っている。しんのすけの通

う魔法科高校も、専門性の高い高校の1つと言えよう。

しかし従来の高校も完全に無くなつたわけではなく、ボーと風間は偏差値の高い進学校（ボーは理系、風間は文系である）に通い、日夜勉強に明け暮れているのだという。そのせいで地元を離れたしんのすけだけでなく、2人ともなかなか時間の都合が合わなくなつてしまった。

ネネの言つたように、このまま自然消滅的に関係が希薄になつていくのだろうか、と3人を取り巻く雰囲気はやや重くなつてきた頃、「あら、随分と懐かしい顔が揃つていますわね」

公園の入口から呼び掛ける少女の声に3人は振り向き、そして若干目を見開いた。

入口に停まる、いかにも高級車といった感じがする黒塗りのリムジンの窓から顔を出すのは、前髪を切り揃えた長い黒髪が気品漂う少女だった。黒スーツに黒サングラス姿の運転手が素早く回り込んでドアを開けると、これまた高級そうな臙脂色えんじの服を身に纏う姿を見せながら颯爽と車から降り立つた。

「あいちゃん！ 久し振り！」

一番大きな反応を見せたのはマサオで、嬉しそうに（そして若干頬を紅くして）彼女の名前を呼んだ。ボーも彼ほどではないがゆっくりと手を振つて彼女に応え、そしてネネは若干面白くなさそうに口を尖らせた。

そんな彼らの出迎えを受けながら、その少女・酢乙女あいはにこやかな笑みと共に彼らの傍までやつて来た。

「久し振りですわね。皆さん元気そうで何よりですわ」

「あんたも相変わらずね。わざわざ学校から帰るのに、あんな高そうな車を乗り回しちゃつて」

「学校帰りなのは事実ですけど、今日はこれから東京に行くんですの。おうちのお仕事の手伝いも兼ねてね。だからしばらく学校はお休みですわ」

「あーら、お金持ちは大変ね、学校にも満足に通えないなんて。ちゃんと勉強についていけるのかしら？」

「大丈夫ですわ。高校レベルの内容は、幼稚園の頃には既に済ませていますので。高校に通っているのも、将来のための人脈作りが主な目的ですしね」

ネネの皮肉交じりの問い掛けにも涼しい顔で答えるあいには、ネネは「あつそうー」と苛立たしげにそつぽを向いた。幼稚園の頃からあまり変わっていない2人の遣り取りに、マサオとボーは苦笑いを浮かべて互いに顔を見合わせる。

「名残惜しいですけど、時間が無いのでこの辺で。——ああ、そうそう」

この場を後にしようと1歩足を踏み出しかけたあいだったが、何かを思い出したようにすぐに3人へと向き直った。

「皆さん、夏休みの予定はまだ空いているかしら？ 8月3日から12日、できればその前後1日も取れば良いんですけど」

「はあつ？ 突然何よ？ ……まあ、多分大丈夫だとは思うけど」

「うん、僕も大丈夫だと思うよ」
「僕も」

戸惑いながらも頷く3人。ボーの場合は進学校特有の夏期講習とありそうなものだが、断言しているからには本当に大丈夫なのだろう。

3人の答えに満足したように、あいには笑顔で小さく何度も頷いた。

「それだったら、みんなで一緒に行きましょう。風間くんとしん様のご家族には、わたくし私から連絡をしますのでご心配無く」

「いや、だからどこに行くっていうのよ？」

「あらネネちゃん、この時期にみんなで行くといったら1つしかないでしょう？」

あいはその前置きしてから、こう答えた。

「九校戦が行われる富士演習場に行つて、みんなでしん様の雄姿をこの目に焼き付けるのよー」

第16話 「代表に選ばれるのは大変だゾ」

達也たちが生徒会や風紀委員に入ってから、司波兄妹としんのすけの3人は生徒会室で昼食を摂ることが習慣となっていた。深雪は生徒会の仕事をするため、達也はそんな彼女の付き添いで、そしてしんのすけは生徒会室の自動配膳機ダイニングサーバーを利用すれば昼食を用意する手間が省けるため、とそれぞれ思惑は異なるが、真由美や摩利などの上級生を交えながらの談笑は退屈しないため、今のところはその習慣を変え
る予定は無い。

しかしその日の昼食会は、いつもなら率先して話題を振って雰囲気
を良くしてくれる真由美が時折箸を止めては深刻そうに溜息を吐
いているため、あまり会話も弾んでいなかった。

「随分と悩んでいるようだな、真由美」

「ええ、九校戦のことだね。選手の方は十文字さんの協力もあって何
とか決まったけど、問題はエンジニアの方なのよねえ……」

「まだ決まっていないのか？」

驚いたような口調で摩利が尋ねると、真由美は力無く頷いた。

「元々ウチって魔法師の志望ばかりで魔法工学の人材が少ないから、
代表エンジニアの選出は毎年悩みの種なのよ。今年はあるーちゃんや
五十里いそりくんがいるからまだマシだけど、それでも頭数が全然足りない
状況なの。私や十文字くんがカバーするとしても限度があるし……」

「おいおい、おまえ達は一高でも主力選手だろ？ 他の選手にかまけ

て自分が疎かになったら元も子もないぞ？」

「本当よねー。せめて摩利が自分でCADの調整ができれば良いんだ
ろうけど……」

「……いやあ、本当に深刻な問題だな、うむ」

真由美の責めるような視線に、さすがの摩利も気まずそうに顔を逸
らした。達也も深雪もチラリと互いに顔を見合わせるのみで、何と声
を掛ければ良いやら計りかねているようだ。

と、ハンバーグを大きな口で頬張り咀嚼しながらそれを聞いていた
しんのすけが、ゴクリとそれを呑み込んでからふいに口を開いた。

「だったら、達也くんにやってもらえば？」

「――！」

その言葉に、その場にいた全員が目を丸くした。

そして次の瞬間、深雪は自分の兄が活躍する場面を想像して恍惚とした笑みに、真由美や摩利やあずさはその手があったとばかりに輝かんばかりの笑みに、鈴音はほとんど無表情のままだが口元に僅かに笑みを浮かべていた。

そして当の本人である達也は、いかにも迷惑そうな表情でしんのすけを睨んでいた。

「おい、しんのすけ。何を急に――」

「確か達也くん、深雪さんのCADも調整してるんですよ！前に一度見せてもらいましたけど、一流メーカーにも劣らない仕上がりでしたよ！」

「そういうえば、風紀委員にあったCADも達也くんが診てたんだっとな！自分では使ったことが無いから気づかなかったよ！」

「さすがよ、しんちゃん！盲点だったわ！採用！」

そして当の本人を置いてけぼりに事態がみるみる進んでいく光景に、さすがの達也も焦りを隠し切れない様子で口を挟む。

「ちよつと待ってください！1年生のエンジニアは前代未聞では？」

「何事も、最初は初めてよ！」

「その通り！前例は覆すためにあるんだ！」

おそらく予測してたのだろう、真由美と摩利が即座に息の合ったコンビネーションでそれを否定した。

しかしそれでも、達也はまだ折れる気は無かった。

「CADの調整はユーザー、つまり選手との信頼関係が必要不可欠です。全員が一科生である選手から反感を買うような人選は如何かと思うのですが」

「ええっ、そうかなあ？オラは別に反対しないゾ」

「そりやおまえはそうだろうが、皆がそうだとは限らないだろ」

「ダイジョーブだって。風紀委員のお仕事も、何だかんだ言ってちや

んとやってるでしょ。それに昔から言うでしょ。『やらないで後悔するより、やって後悔する方が良い』って！」

その言葉は相手を説得するには少々不適切では、と達也は思わなくもなかったが、風紀委員という前例を持ち出されると彼としてもなかなか反論しづらい。未だに達也が風紀委員であることへの不満は聞こえるものの、当初と比べればその勢いはほとんど無いようなものだ。強いて挙げるとするならば、未だに同級生の森崎が何かと食って掛かる程度だろう。

さらには、

「私はお兄様にCADを調整していただきたいのですが……、駄目でしょうか？」

深雪からこうして「お願い」されてしまったとあつては、達也としても折れざるを得ない。

「……分かりました。エンジニアの件については、謹んでお受け致します」

「はい、了解です！ 放課後に九校戦準備会議があるから、サボらないで来てね？」

「……………」

ウインクしながらそう言った真由美に、達也はもはや何も言えなかった。今更何を言ったところで、達也に退路は残されていないのだから。

せめて達也にできるのは、自分が大会に参加する原因を作ったしんのすけを睨みつけることぐらいだった。

「というわけでしんちゃん、彼を推薦した者として今日の会議は絶対にサボっちゃ駄目よ。達也くん、しんちゃんがサボらないように見張っててちょうだい」

「ええっ！ 真由美ちゃん、そんなあ！」

もともと、そんな彼も思わぬ形で自分の首を絞める結果にはなっていたのだが。

*

*

*

九校戦の準備会議は、主に部活連の本部にて行われる。企業の会議室のような場所に長いテーブルが口の字に組まれ、そこに今回参加する選手やエンジニア、さらには作戦スタッフまでもが一堂に会する。深雪やしんのすけはこの会議に何度も参加しているが、達也は昼間に出場が決まったばかりなので今回が初めてだ。

なので達也がその部屋に入ったとき、中にいた生徒達はそれぞれ違った反応を見せた。

当然ながらそこにいる生徒は全員一科生であり、九校戦に選ばれた代表しか入れないこの部屋に二科生である達也が入ってきたことで状況を察したのか、そのほとんどが険しい表情を浮かべた。しかし4月のときと違って風紀委員の活動を通して彼の実力が知られるようになったためか、一科生の中にも彼に対して好意的な目を向ける生徒が増えてきていた。

単純に、4月とは違って顔見知りが増えたというのものもあるが。

「お、達也。——ここに来たということは、おまえも九校戦に選ばれたってことだな」

「どうも、桐原先輩。まあ、そんなところです」

面白そうに笑みを浮かべて話し掛ける桐原に、達也は相変わらずの無表情で答える。

「それで、達也は何の競技に出るんだ？」

「いえ、俺は選手ではありません。エンジニアとして呼ばれました」

「ああ、成程な。確かに九校戦は魔法を重視した競技で争うからな、さすがの達也も一科生の奴らを押し退けて出場することはできなかったか」

「俺としては、エンジニアとして出るのもどうかと思いますが」

「ははっ、違うない」

こうして2人で話している光景は、一科生と二科生との確執など微塵も感じさせなかった。それを遠くから見ていた真由美は、胸から湧き上がる感慨深い想いに自然と笑みを零していた。

「……いや、しかし本当に助かるぜ。おまえが代表に入ってくれば、

今まで野原の世話役として扱き使われてきた俺の負担が少しでも減るかもしれないねえ」

「……そんなにひどかったんですか？」

「ああ。まともに練習にも参加しないし、今日みたいなミーティングなんて話が長いとかって途中で寝やがることもしょつちゆうだ。あいつと同じクラスの奴も何人かいるが、おまえの妹は忙しいから手を借りられないことが多いし、他の奴らじゃあいつのストツパーにはならないし……！」

「桐原先輩……！」

今までのことを思い出して今にも泣き崩れそうになっている桐原に、心底同情するような表情で彼の肩に手を置く達也。これだって一科生と二科生との確執など微塵も感じさせない光景であるはずなのだが、それを遠くから見ていた真由美は素直に喜ぶことができなかった。

と、そのとき、そんな光景をぶち壊す奴がやって来た。

「おい、司波達也！　なんでおまえが、こんな所にいるんだ！　ここは九校戦に選ばれた生徒しか入ることを許されていないんだぞ！」

会話を邪魔された達也と桐原は、不機嫌な表情を隠すことなくそちらへと目を向けた。

そこにいたのは、森崎だった。

「森崎、おまえ全然変わってないな。風紀委員のときにも、同じようなことを言わなかったか？」

「うるさい！　どうしておまえがここにいて、と訊いている！」

「うるせーぞ、森崎。ここにいてるってことは、代表に選ばれたってことだろ」

「し、しかし桐原先輩！　奴は二科生で——」

「うっせえぞ、森崎！　そんなに自分の腕に自信があるんなら、逃げ出した野原を1回でも良いから捕まえてみるよ！　耳に息を吹き掛けられて動けなくなってたのはどこの誰だあ！」

「あ、あれは……！　あのときは不覚を取られただけであって、次からはちやんと——」

声を張り上げる桐原に、痛いところを突かれた森崎はモゴモゴと言
い訳を並べるしかなかった。他の生徒も桐原を止めずに同情的な視
線を向けるだけに留まっていることから、よっぽど彼が苦勞していた
であろうことが窺える。

「まあまあ、桐原くん。大森くんも反省していることですし、その辺で
許してあげようよ」

「僕の名前は森崎だ、野原！ 誰のせいでもうして怒られてると——」
「はいはい！ みんな揃ったことだし、早くミーティングを始めま
す！」

手を叩きながら真由美がそう呼び掛けると、桐原も森崎も小さく頭
を下げながら自分の席へと戻っていった。やはりこういうところを
見ると、彼女が生徒会長としてしっかり働いていることがよく分か
る。

とはいえ、達也のエンジニアとしての腕を疑問視する者は他にもい
るようで、ミーティングが始まってからも他の代表選手から達也の代
表入りを反対する声が続もあがった。

それを聞いていた、この会議の議長であり部活連の会頭である克人
は、威風堂々と腕を組んだまま何かを思案する表情を浮かべて、
「つまり司波のエンジニアとしての腕が分からないから、皆がそこま
で反対しているのだろうか？ だったら実際に調整をやらせてみたら
良い。何なら俺が実験台になるが」

「か、会頭が実験台だなんて危険です！ CADに対して魔法師は無
防備なんですよ！ もし調整に失敗したら、ダメージは魔法師が被る
んですよ！」

「彼を推薦したのは私です！ 実験台だったら私がやります！」
「おおっ！ だったら、達也くんのお友達のオラだつて！」

克人が真つ先に名乗りを上げ、真由美としんのすけが負けじと立候
補する。

そんな中、1人の生徒がふいに立ち上がったことで、その場にいた
全員の意識がその生徒へと向いた。

その生徒とは、桐原だった。

「その実験台、俺にやらせてもらえますか」

「どうぞどうぞ」

「あつさりしすぎだろ、野原！ いや、別に良いけどよ！」

まさに掌返して桐原にその役目を譲ったしんのすけに桐原が思わずツツコミを入れるが、しんのすけはなぜか不満そうな顔を真由美と克人に向けていた。

「んもう、真由美ちゃんも克人くんも駄目だゾ！ あの流れはどう考えても、桐原くんが出てきたタイミングで『どうぞどうぞ』ってみんなで合わせるところでしょ！」

「……えっと、しんちゃん、何の話？」

「何だ？ 今はそういうのが流行ってるのか？」

「……ああ、今の人達は分からないのかあ」

しんのすけが若干寂しそうにそう呟くのを尻目に、他の一科生は「大丈夫なのか桐原、あいつは二科生だぞ！」と桐原に詰め寄っていた。

しかし桐原は、不敵な笑みを浮かべて達也を見遣ると、

「二科生だから何だっっていうんだ？ 会長が気紛れで二科生を推薦したわけがないだろ？ ——それに、俺はこいつを信用している」

桐原の言葉に、達也の口に自然と笑みが浮かんだ。

こうして急遽、彼の代表入りを賭けた「試験」が幕を開けた。

*

*

*

「会長、準備が整いました」

実際に本番で使用する車載型の調整機を部屋の中央に設置し、片方に達也が、向かい側に桐原が座った。とはいえ、中央にはモニターが取りつけられているので、互いの顔は見えないようになっていた。

「それでは今から、課題に取り組んでもらいます。その調整機を使って桐原くんのCADを競技用のものにコピーし、即時使用可能な状態にしてください」

真由美の言葉に、達也は首を縦に——振らなかった。

「スペックの違うCADにコピーするというのは、あまりお勧めできませんね……」

「えっ?」

達也の言葉に、真由美だけでなく他の生徒も疑問の表情を浮かべた。普段からやっているようなことであり今更苦言を呈するほどのことではない、と思っっているからである。

しかし彼の言葉を聞いた他のエンジニアは、ニタリと意味ありげな笑みを浮かべて彼を見つめていた。

「仕方ありません、安全第一でいきましょう。——桐原先輩、CADを」

「おう、頼むぜ」

その言葉が“自分のCAD”に対するものなのか、あるいは“自分の期待”に対するものなのかは分からなかったが、どちらにしる達也のやる気が変わりはない。

「では、始めます」

その言葉を合図に、作業を開始した。桐原のCADからデータを抜き出した達也だったが、普通なら競技用CADにコピーするところを調整機にそのまま保存した。

次に桐原のサイオンを測定する。通常の調整なら自動設定に従うだけでも充分だが、ここからマニュアル操作でいかに精密な調整を行うかがエンジニアの腕の見せ所である。

しかし測定を終了した辺りで、達也の手がピタリと止まった。まさか行程を間違えたのか、とあずさが好奇心を抑えきれずに彼の後ろから画面を覗き込んだ。

「え——」

彼女は、絶句した。

その画面には本来映し出されるべきグラフなどはどこにも無く、数字の羅列しか映し出されていない。しかもその数字が流れていくスピードはとても速く、とてもあずさの目で追いきれるようなものではなかった。

——まさか達也くん、“原データ”から反映させていくつもり……

？

あずさが驚愕しているそのとき、突然達也の手が動き出した。本人曰く「慣れれば一番早い」というキーボードオンリーの入力で、自動設定されていたデータを恐ろしい早さで書き換えていく。

「終わりました」

達也のその言葉が、作業が終わったことを知らせる合図となった。

すぐさまCADが桐原に返され、テストが行われる。起動式が展開され、彼の代名詞である高周波ブレードが形成されていた。

「どうだ、桐原？」

「問題ありません。まったく違和感が無いですね」

桐原の言葉に、部屋中からどよめきの声があがる。

しかし、すぐさま反論があがった。

「一応の技術はあるようですが、当校の代表レベルとは言えないのでは？ 仕上がりにまでの時間も平凡ですし」

「そ、そんなことはありません！ 私は司波くんの代表入りを強く希望します！」

興奮したように声を荒らげたのは、あずさだった。普段滅多に見ることのない彼女のそんな姿に、部屋中から別の意味でのどよめきの声があがる。

「司波くんは桐原くんのサイオン波を原データから読み取り、それを最大限反映させるためにすべての行程をマニュアル操作で調整していました！ これは高校生のレベルを超えた技術です！」

「しかし仕上がりが平凡ならば、意味が無いのでは？」

「中身は違います！ 先程『仕上がりの時間が平凡』と言っていました。あれだけ安全マージンを取りながら通常と同様の時間で終わらせたことが凄いです！」

「でもその分を効率アップに向けた方が良いのでは？」

「そ、それは……、司波くんもいきなりのことだったから……」

最初は勢いの良かったあずさだったが、元来の性格が災いして徐々に勢いが弱まっていった。

しかしそんな彼女に助け船を出したのは、意外な人物だった。

「私も、司波達也の代表入りに賛成です」

「は、服部くん……！」

その人物とは、4月に達也が風紀委員に入ることとを誰よりも反対していた、生徒会副会長の服部だった。

「桐原のCADは競技用よりもハイスペックでした。しかしそれにも拘わらず、使用者に違和感を感じさせなかった。この事実が、司波達也のエンジニアとしての実力を裏付けていると考えます。我が校は人選にも悩むほどのエンジニア不足ですし、一年生だの二科生だのに拘ることなく能力的にベストなメンバーで臨むべきかと」

服部の言葉に、今まで反論していた生徒達の口が閉じた。

そして達也を支持する者は、彼だけではなかった。

「俺も、服部の意見と同様だ。司波は我が校の代表になるに相応しい技量を見せた。俺も、司波の代表入りを支持する」

しっかりと技術も見せつけられ、会場である克人の言葉もあるのだ、これを押し退けてまで反論できる生徒などいるはずもない。

こうして、達也の代表入りが決定した。

「よくやった、司波達也よ。この調子で九校戦も励むが良い」

「……しんのすけ、それはいったい何のキャラだ？」

しかし当の本人はその喜びを微塵も見せることなく、しんのすけに戸惑うようなツツコミを入れていた。

*

*

*

達也と深雪が現在住んでいるのは、閑静な住宅地に居を構える地上3階・地下2階の一戸建てという、世間一般からしたらかなり大きな建築物だ。しかもその地下1階には中央官庁や国立の研究機関レベルの最新機材を取り揃えた作業室を備えており、達也はそこで自分や深雪のCADを調整したり、新たな魔法式の開発に勤しんだりしている。

しかし深雪お手製の夕飯を食べ終えた達也が作業室に持ち込んだそのCADは、どちらの物でもなかった。

「まさかその日の内に、CADをそっくりそのまま押しつけられるとはな……」

そう言って達也がテーブルの上に置いたのは、バックル部分に名刺入れほどの大きさをした金属の箱が取り付けられたズボンのベルト。

つまり、しんのすけが普段使っているCADだった。

達也がエンジニアとして代表入りすることが正式に決定したとき、真っ先にしんのすけが相談したのが九校戦で使用するCADについてだった。

九校戦では試合に使用できるデバイスの性能について明確な規定があり、トーラス・シルバー自ら手掛けたベルト型CADはハイスベックすぎて使えない。しかしベルト型CADなんて代物が市販されているはずも無く、他形態のCADを使用することも検討されているのだが、しんのすけ自身でそれでは嫌だと駄々を捏ねていた状態だったのである。

それを聞いた達也は、彼の試合用ベルト型CADを作成することを引き受けた。『トーラス・シルバー』としてそのCAD作成に関わった彼なら、確かにイチから作るよりは難しくないだろう。それに深雪やほのかなど達也をよく知る者ともかく、他の選手は達也に自分のデバイスを預けることに未だ抵抗があるようで、しばらくは大した仕事も無いだろうと踏んだためでもある。

そんなわけで、達也はしんのすけからCADを借り受けた。おそらくそのCADを製作したときのデータは会社の方に残っているだろうが、そんなことを言えるはずも無い達也が実物も見ずに作業をするのは無理がある。

せっかく貸してくれたのだから早速作業を開始しよう、と達也がそのCADを調整機に接続していた、そのとき、

プルルルル——。

着信音と同時に、スクリーンには『非通知』の3文字がでかかど表示された。通常ならば警戒して取るのを躊躇うのだろうか、生憎と司波家では珍しいことでもないので達也は躊躇うことなくそれを取った。

そうして画面に映し出されたのは、日焼けや火薬焼けによってなめし皮のような顔をした中年の男性だった。画面に映る上半身だけ見てもその体はよく鍛えられ、しかもそれは見る者が見ればスポーツの類で身に付いた筋肉でないことが分かるものだった。

「お久し振りです。狙って掛けたのですか？」

『言ってる意味がよく分からないが……。リアルタイムで話すのは2ヶ月ぶりかな？——特尉』

「……その呼び方をするということは、秘匿回線ですか？——風間少佐」

イチマルイチ

陸軍101旅団・独立魔装大隊隊長である風間玄信はるのぶの声に、達也の声も自然と低くなる。

『簡単では無かったがな。特に特尉の家のセキュリティは、一般家庭のわりには嚴重過ぎる』

「サーバーの深くまでアクセスしようとしなければ、クラッキングシステムは作動しないはずなんですがね」

『ははは、うちの若い奴にも良い薬になっただろう。——それじゃ、事務連絡だ』

軽い挨拶（と呼ぶにはどうにも薄ら寒いものを感じるが）もそこそこに、風間はさっそく本題に入った。

『本日“サード・アイ”のオーバーホールを行い、部品を幾つか新型に更新した。それに合わせて、ソフトウェアのアップデートと性能テストを行ってほしい』

「分かりました。明朝出頭します」

『別に差し迫った用事でもないのだが？』

『今度の休みには“研究所”に行く予定ですので』

『……私がこう言うのも何だが、高校に入ってますます学生らしくない生活のようだな。——それでは、明朝にいつもの場所へ。本官は立ち会えないが、真田に話を通してある』

「了解しました」

用件が終わったと思い、達也が電話を切ろうと口を開きかけたそのとき、

『聞くところによると、今夏の九校戦には特尉も参加するそうだな』

——代表入りが決まってまだ数時間しか経っていないんだが……、
いったいどこから……？

「ええまあ、成り行きで」

『そうか。——気をつけるよ、
“達也”』

自分に対する呼び方が変わったことに、達也の目が僅かに細められた。それは上官ではなく旧知の者としての警告を意味し、それは軍の情報を一介の高校生に与えることを意味している。

『九校戦会場である富士演習エリアに不審な動きがある。国際犯罪シンジケートの構成員らしき東アジア人の目撃情報も出た。时期的に見ても、奴らの狙いは九校戦で間違いないだろう』

九校戦ともなれば、将来有望な魔法師が一堂に会することになるだろう。もしそこでテロ事件でも起きれば、人材的な被害は相当なものになるに違いない。

『壬生の報告によると、香港の犯罪シンジケートである
“NO HEAD DRAGON無頭竜”
の下部構成員ではないかということだ』

壬生という名字に、達也は表には出さずに反応した。

その人物はおそらく、壬生紗耶香が退院するとき顔を合わせた彼女の父・壬生勇三のことだろう。内閣府情報管理局の外事課長として国際犯罪組織を担当している彼ならば、そのような情報を手に入れたとしてもおかしくない。

そしてそれを風間に話すということは、2人は個人的な繋がりがあ
るということを意味している。それも、機密情報を遣り取りできるく
らいに深い繋がりが。

『それと、こちらも極秘事項だが……。ブリブリ王国のスノケシ王
子が極秘に来日し、九校戦を観戦するそうだ。おそらく、王子と何ら
かの交友があると思われる
“彼”に会うためだろう』

『ブリブリ王国、ですか。それはまた、何とも……』

風間の口から出た
“彼”
というのは、当然ながら野原しんのすけのことだ。

『知つての通り、ブリブリ王国はアンティナイトの一大産地だ。現国

王が産業化を望んでいないため輸出こそされていがないが、今でもそれを狙っている奴らはごまんという。もしかしたら「無頭竜」の目的はそこにあるかもしれない。「彼」にもそれとなく注意するよう伝えなさい。もちろん我々も、最大限の努力はする」

「つまり九校戦の間は、少佐達が出るということでしょうか？」

『「無頭竜」の件が無くとも、「彼」の件で元々出る予定ではあった。本人には申し訳ないが、まるで示し合わせるかのようには「彼」の行く先々で事件が起こるからな。いざというときに対処できるように、「彼」が2日以上自宅を離れる際は必ず現地に数名ほど派遣するようにしている』

「そうだったのですか。それは何とも……お疲れ様です」

自分にはそんな話は一度も来ていなかったが、有事はともかく「かもしれない」の段階で非正規の士官である自分を出動させるわけにはいかなかったのだろう、と達也が一人で納得していると、

『おっと、長話が過ぎたようだ。部下が焦っているから、そろそろ切らせてもらう。九重師匠にもよろしく伝えてくれ。それでは』

至って冷静に、しかし慌ただしい口調で風間がそう言い残し、電話が切られた。もしかしたら、ネットワーク警察にでも回線割り込みの尻尾を掴まれたのかもしれない。

それにしても、軍事的な意味で注目を集める国の王子が過去にしんのすけと繋がりがあり、彼の出場する九校戦を観戦しに来日するタイミングで犯罪シンジケートの構成員が目撃されるとは。真夜の言っていた「嵐を呼ぶ」という異名は伊達ではないらしい。

何とも憂鬱な気分になりながら、達也は改めてしんのすけのCADを調整機に繋いだ。何回かキーボードを叩くと、ディスプレイに原データを表す数字の羅列が表示される。普通の人間ならばただの数字にしか見えないその画面から、達也は登録されている魔法式の「設計図」を読み取っていく。

しばらくそれを確認していた達也の目に、驚愕の色が浮かんだ。

「凄いな、この魔法式は……。まさしく、このCADに最適化されている」

例えば自己加速術式の場合、達也はただ単にポピュラーな魔法式を出力高めにアレンジしているものだと思っていたが、実際にはほとんど新しい魔法式と言って差し支えないレベルにまで作り替えられていた。しかもそちらの方が遙かに効率良くスピードの調整が可能で、しかもCADを占める容量も少なくて済む。その発想力に、達也も思わず舌を巻いた。

そしてそれは他の魔法式にも当て嵌まることであり、その仕事ぶりにはまさしく「一流」と呼べるものだった。それこそ、達也がこの魔法式を作り上げた人物に関心を持つくらいには。

——酔乙女あいと繋がりのある人物であることは間違いない。普通に考えれば、彼女の家が経営する魔法工学メーカーの社員だと思いが……。

それに気になることがもう一つ、と達也は数字の羅列が並ぶディスプレイへと顔を向けた。

数々の魔法式に関するデータが並ぶ中、それらに当て嵌まらない、端的に言ってしまうえば無駄なデータが散見される。通常ならば古い魔法式を完全に消去できなかったことによる残骸などと解釈することもできるが、これだけの仕事をするエンジニアがそんなミスをするとは思えない。

「ひよつとして、何らかの魔法式がバラバラに配置されているのか……？ 例えば何かしらのキーワードを口にするだけで、それらのデータが1つの魔法式に組み上げられるよう設定されている、とか……」

だとすると、それらのデータの中にはダミーとして本当に意味の無いものが含まれている可能性もある。そうなると考えられる組み合わせは天文学的な数に及び、とても原データを覗くだけでは推測することなどできない。

あるいはシステム領域にアクセスし、プログラムの方を解析して組み合わせられる魔法式を推測するという手も考えられる。これだけの偽装を施しているのだ、それほど隠したい魔法式がこのCADの中に登録されているのだろう。

「……いや、止めておくか」

しかしそこまで考えを巡らせたところで、達也はむりやりその思考を打ち切った。

正直に言ってしまったえば、興味はかなりある。思春期男子とは思えない落ち着いた性分をしている彼だが、好奇心においてはむしろ人一倍強く、それを抑え込むのに度々苦勞しているほどだ。

だがこのCADが今ここにあるのは、しんのすけが達也を信頼してそれを預けたからだ。魔法師にとって自分のCADを別の誰かに調整してもらうというのは、或る意味自分の中身をその人物に晒してしまうようなものだ。ましてやそれを完全にその人物に預け、自分の目が届かない場所で弄くり回すことを許すというのは、余程その人物を信頼していないとできることではない。

もちろん、しんのすけはそこまで考えていない、と推測することもできる。むしろ、そちらの方が可能性としては高いだろう。

しかし、それでも、

——1人のエンジニアとして、その信頼には応えなければならぬ。

達也は心の中でそう結論づけ、本来の作業へと移っていった。

作業室の照明が消えたのは、深夜の12時を大分過ぎた頃だった。

第17話 「空を自由に飛びたいゾ」

日本に幾つか存在するCADメーカーの1つ、フォア・リーブス・テクノロジー。英名は“Four Leaves Technology”（通称FLT）であるが、会社登記および商標表記は故意に“フォア・リーブス”となっている。

元々は魔法工学部品メーカーとして知る人ぞ知るといった立ち位置の会社だったのだが、謎の天才開発者“トーラス・シルバー”の開発したCADシリーズ“シルバー・モデル”の大ヒットにより、完成品のCADメーカーとして大きく存在感を放つ企業へと飛躍した。その成長は留まるところを知らず、今や日本だけでなく世界の有力メーカーがその動向に注目するほどだ。

実はこの企業、四葉家からの出資で設立されたものである。しかし金の流れは巧妙に秘匿されており、大国の情報機関が調べ上げてもその尻尾すら掴ませていない。ちなみに名前に“四葉”が使われているが、日本には四葉家とは繋がりが無いにも関わらず虎の威を借る目的で“四葉”を意味する名称を採用する企業が多く存在しており、FLTもそんな企業の1つと見なされている。

やたら上機嫌な雰囲気、深雪を引き連れた達也が、貴重な休日に通機関を乗り継いで2時間を掛けてやって来たのは、そんなFLTの開発センターの1つが収められたビルだった。

ここを拠点とするのが達也もエンジニアとして秘密裏に所属する“CAD開発第三課”であるが、こんな辺鄙な場所に拠点が置かれていることから察せられるように、元々は技術部のはみ出し者や権威に逆らった人間を集めて作られた“厄介払いの部署”だった。しかし“シルバー・モデル”を世に出したことで一気に会社内部で高い発言力を有するようになり、本社の技術者からは『キャプテン・シルバーとその一味』という蔑みだかやっかみだか分からない通称で呼ばれていたりする。

企業スパイ対策による機械や人の目による厳重な警備を抜け、LEDライトで照らされた窓の無い廊下を悠然と歩く2人がやがて辿り

着いたのは、10人以上の研究員が忙しなく走り回っている、CADのテストを見守る観測室だった。

「あつ、御曹司じゃないですか!」

達也たちが部屋に入ってきた途端、あれだけ忙しそうにしていた研究員が全員手を止めて集まってきた。その視線には媚びるような卑しい感情も、内心見下すような蔑みの感情も無く、ただ相手への尊敬や親しみが込められていた。

そしてそんな視線を一身に受けるのは、深雪ではなく達也だった。学校ではその類稀なる容姿と実力で称賛の視線を浴びる彼女が、ここではあくまで「自分達が尊敬する司波達也の妹」という扱いを受ける。

もつとも、深雪がそれを不満に思うことはない。それどころか、尊敬の念を集める達也に恍惚の表情を浮かべてすらいる。

「お邪魔します。牛山主任はどちらに?」

「御曹司」という呼び名がこそばゆいのか、達也は苦笑いをしながら一番近くの研究員に尋ねた。

すると、研究員の人垣を掻き分けて、癖の強い髪を持つ男がやって来た。

「お呼びですかい、ミスター?」

「すみません牛山主任、お忙しい中」

牛山と呼ばれたその男は、頭を下げる達也にチツチツと指を横に振ってみせる。

「おっと、いけませんなミスター。ここにいるのはアンタの手下ですぜ、下手に遜りすぎちゃ示しがつきませんよ」

「しかし皆さんは親父に雇われているだけあって、俺の部下というわけでは——」

「何を仰いますやら、天下のミスター・シルバーが。俺たちや全員、アンタの下で働けるのを光栄に思っているんですぜ?」

「それを言うのなら、名実共にこのヘッドはあなたでしよう? ミスター・トールラス」

そう。2人の言葉からも分かる通り、FLT躍進の原動力ともいえ

る「シルバー・シリーズ」の開発者である「トーラス・シルバー」とは単独の開発者ではなく、達也と牛山の2人から成る共同開発としての通名である。

達也がアイデアとソフト部分を、牛山がハード部分を担当し、数々の革命的なCADを世に送り出してきた。その功績は目覚ましく、ループ・キャストを世界で初めて実現し、特化型CADの起動式展開速度を20%向上させ、非接触型スイッチの誤認識率を3%から1%未満へ低下させるなど、魔法技術を10年は加速させたと称されるほどだ。

「よしてくだせえ、俺はただの技術屋ですぜ？ アンタのアイデアにあぐらを掻いているだけなのに共同開発者なんて、本当は今でも恐れ多いと思ってるんですから。アンタが頑なに単独の開発者になるのを拒んでいるから、仕方なく連名ということになっていますが」

「主任のハードに対する知識と技術力が無ければ、「ループ・キャスト・システム」も机上の空論で終わってましたよ。どんな理論や技術も、製品化されて初めて意味を持つものでしょう？」

「あーもう、やめやめ。御曹司に口で敵うはずがねえ。それよりも、仕事の話をしてしましうや」

「そうですね。それでは、これを」

そうやって達也が取り出したのは、片手で覆えるほどに小さなCADだった。卵型のそれには上下の2つしかスイッチが付いておらず、何かの家電を操作するリモコンのようにも見える。

CADと呼ぶには簡素なそれを受け取り、牛山は様々な角度からそれを観察した。

しかしふいに何かに気づくと、途端に表情を引き攣らせ、CADを持つ手もプルプルと震わせる。

「このデバイス……まさか、「飛行術式」ですかい？」

「ええ」

「テストは？」

「いつも通りに。こちらでは成功していますが、俺も深雪も一般的な魔法師とは言い難いので」

ゴクリと唾を呑み込んだ牛山が、近くで同じようにCADを見つめている研究員へと顔を向けた。

「テツ、T-7型の手持ちは幾つだ？」

「……じ、10機です」

「馬鹿野郎！　なんで補充しとかねえんだよ！　いいから全部持つてきて、今すぐこのシステムをコピーしろ！　ヒロ、テスターを全員呼べ！　休みなんか関係あるか、首に縄つけて引きずってこい！　残り全員今の作業を中断して精密計測の準備だ！　良いかおまえら、分かってんのか！　——魔法の「歴史」が変わるんだぞ！」

牛山の声に、観測室中にいる研究員が先程以上に忙しく走り回った。機械に齧り付いて起動を確かめたり、相手に怒鳴りつけるような勢いで電話をしたり、とにかく観測室は混乱の極みに達していた。

そんな中、深雪だけが誰の邪魔にもならないように部屋の端っこだ達也を眺めてはニコニコと楽しそうに笑みを浮かべていた。

現代魔法の誕生に繋がる超能力者の発見から100年ほど経ち、世界中の機関で日夜研究が行われているが、まだまだ魔法には未知の領域が多く、その全貌は一向に解明される気配が無い。

有名などころでは、「加重系魔法の三大難問」の1つである「汎用的飛行魔法」が真つ先に挙げられるだろう。

加速・加重系統を得意とする魔法師ならば、1回の魔法で数十メートルもジャンプすることが可能だ。一時的ではあるが、その場に浮遊する魔法も確立されている。それなのになぜ、空を自由に飛び回れる飛行魔法は（正確には「誰にでも扱える定式化された飛行魔法」は）実現されていないのだろうか。

一度魔法が作用した物体の状態を変化させようとすると、作用中の魔法よりも強い事象干渉力が必要となる。魔法による飛行中に速度や方向を変えるにはその都度魔法を重ね掛けしなければならず、その分だけ必要な干渉力が跳ね上がっていく。1人の魔法師では、せいぜい10段階が限度だろう。

ならば重ね掛けではなく、魔法そのものをキャンセルすれば良いという発想になるのが自然だ。実際に一昨年にイギリスで、その方針を元に大規模な実験が行われている。しかし、結果は失敗。要求される干渉力が、普通に連鎖発動するよりも急激に高くなってしまったらしい。つまり逆効果に終わってしまったということだ。

失敗の原因は、実験の企画者が魔法の無力化について錯覚していたためだ。終了条件が充足されていない魔法は消滅せず、対象のエイドス（物体に付随する情報体）に留まったままになる。よって1回の飛行状態変化のためにキャンセル分の魔法式が余分に上書きされることになり、余分な上書きが累積されるために事象干渉力の限界点に到達するのも早くなってしまったのである。

そこで、達也は考えた。

1つの魔法式だけで自由に飛び回れるようにするのではなく、一度発動させた魔法を途中でキャンセルするのでもなく、発動時間が非常に短い魔法をタイムラグ無しで連続発動させたら良いのではないかと。

魔法を連続発動させるシステムについては、達也のCADにも使われる「ループ・キャスト・システム」で確立されている。これは一度読み込んだ起動式をコピーして連続発動するものだが、今回は魔法の起動時点を記録して変数のみを書き換えて起動式を連続処理するシステムを採用する。飛行するスピードや方向だけを変えられるようにしておき、魔法の切れ目のときにそれを調整できるようにすることを目指したというわけだ。

そうして出来上がったのが、先程牛山に渡した卵型のCADだった。

強化ガラス1枚隔てた向こう側で自由に空中を飛び回るテストターの姿に、達也は人知れず自身の拳を力強く握り締めた。

一般の魔法師であるテストターが使っても問題無く起動し、フワリと自分の体が宙に浮き上がった瞬間、彼は細部をチェックするのも忘れ

て興奮した様子で空中を飛び回り始めた。それを見ていた他のテストターも我先にとCADを装着して飛び始め、終いには予定には無かった空中鬼ごっこまで開催される始末であった。

当然、常時サイオンを吸引し続ける魔法を長時間使えるはずもなく、程なくして全員の魔法力が枯渇して床にへたり込んでしまっている。幸いにも後遺症が残るほどではなかったが、牛山は呆れ果てた表情で彼らを見下ろしていた。

「おまえらアホか！ 体内のサイオンを自動吸引するつつつたのに、へばるまで飛び回りやがって！ 超勤手当さねーからな！」

「ええっ！ そりゃ無いツスよ、主任！」

テストターから一斉に巻き起こるブーイングを余所に、牛山はテスト結果を真剣な表情で見つめている達也と話し合いを進めた。当面の課題として、起動式の連続処理による負担軽減のためにサイオンの自動吸引をハード面からより効率化する。後は他の企業に先を越されない内に飛行術式のノウハウを発表し、9月を目処に製品化することで双方の意見は一致した。

とりあえずそれについては牛山達に任せるとして、達也はここに来た「もう2つ」の理由についての話題に切り替えることにした。

「主任、こんなときに何ですが、少し相談したいことが……」

「何ですかいミスター、そんな改まって」

「はい。実は今度行われる九校戦で、エンジニア代表に選ばれました——」

「おおっ、それはめでたい！ つつても、天下のミスター・シルバーにとつちや役不足も良いところではありますかね。それで、その件で俺達の手を借りたいと？」

牛山の問い掛けに、達也は小さく頷いた。

「俺達がオーダーメイドで作ったベルト型CAD、憶えていますか？」

「ああ、酢乙女家のお嬢ちゃんがやたら注文を付けてきたヤツですかね？ 何だか特撮ヒーローの変身ベルトを作ってるような気分になって、俺も久々に趣味全開で楽しかった案件ですよ」

「はい、それです。先程言った九校戦に向けて、そのベルト型CADを

作ろうと思ひまして——」

「ああ成程。確か九校戦つて、CADの性能に規定がありましたよね。それをクリアするために、敢えて性能を落とした物が欲しいと。以前に作ったヤツのデータはここに残ってますんで、そんなに時間は掛からないと思ひますよ」

「ありがとうございます。俺としては、今回は汎用型ではなく特化型にした方が良いと考へているのですが」

「パフォーマンスをできるだけ維持したいのであれば、それが無難でしょうな。——まあ、細かい話は追々詰めていくとして、他には何かありますかい？」

やはり牛山との話し合いはテンポ良く進んで気持ちが良い。

達也は僅かに口角を上げながら、2つ目の相談について口を開く。

「武装一体型CADについて1つアイデアがありまして、主任にはそのハード部分を作ってもらえれば、と」

「おおっ！ ミスター・シルバーの新アイデアとは、胸が躍りますなあ！」

「そんな大した物ではありませんよ、ちよつとした思ひつき程度です。一応、簡単な設計図は書いてみたのですが——」

達也はそう言うのと、ジャケットの裏ポケットから数枚の紙を取り出して牛山に渡した。

牛山はそれをざつと読み込み、ニヤリと笑みを浮かべた。

「何だミスター、もうほとんど出来てるじゃないですか。これなら設計図のデータを入れれば、ほとんど機械で自動的に出来ませう。明日の朝にでもミスターの家に届けておきますよ」

「いえいえ、そこまで無理をさせるわけには——」

「遠慮しないでくださいよ、俺とアンタの仲じゃないですかい」

「……ありがとうございます、主任」

頭を下げる達也に、牛山は気にするなとばかりに笑つてみせた。

そんな2人の遣り取りを、深雪は誰の邪魔にもならないように部屋の端っこでニコニコと楽しそうに眺めていた。

*

*

*

本日の用事をすべて終えた達也、そしてそんな彼に付き従う深雪が、来たとき以上に研究員が忙しなく走り回る観測室を後にしようとした。しかしそんな中でも牛山は部屋の外まで見送ると言い出し、せっかくの好意を無駄にするのもアレだと考えた達也は素直にそれを受け入れた。

と、そんな牛山がふいに申し訳なきような表情を浮かべてこう言った。

「すみません、ミスター……。本部長も今日はこちらにいるはずなので連絡したんですが、結局お見えになりませんで……」

それに対して、達也は気にしていないという感じで首を横に振った。しかし彼の後ろにいる深雪は、隠しきれていない不機嫌が表情に浮かび上がっていた。

牛山と別れた2人は、来たときと同じように窓の無い通路を歩いていく。観測室にあつた珍しい機械や製品化される前のCAD、そして飛行術式のテストに夢中になるマスターの様子を楽しそうに話しながら、入口まであと1区画という所まで差し掛かる。

と、そのとき、

「これは深雪お嬢様、ご無沙汰致しております」

入口真正面に備え付けられたソファアの傍に立つ男性2人組とバツタリ顔を合わせ、そして片方の男が深雪に気づいて恭しい態度で頭を下げてそう声を掛けてきた。彼の視線は彼女のみ固定されており、その隣にいる達也へと移る気配は微塵も無い。

その人物とは、四葉家の執事である青木だった。財産管理の一端を任せられているほどの人物であり、世間一般でいう執事とは格が違う。だからこそ、達也と深雪の実父でありFLTの本部長でもある司波龍郎のお付きも任されているのだろう。

一方、彼の隣に立つ龍郎は、その視線を深雪と達也の間で行ったり来たりさせながら、所在悪そうに口を開きかけては閉じるを繰り返していた。

「お久しぶりです、青木さん。しかしここにいるのは、私だけではありませんが。——お父様もお元気そうで。先日の入学祝いのお電話、ありがとうございました。ですが実の息子には何も無かったそうですね？」

冷えきつた声でそう言う深雪に、龍郎は気まずそうに目を逸らし、青木は一切動じなかった。

「お言葉ですがお嬢様、私は序列4位の執事でございます。家内にも『秩序』というものがございますので、一介のボディガードに礼を示せと仰られましたも些か困ります」

「私の兄ですよ？」

「畏れながら、深雪お嬢様は次期当主の座を家中の皆より望まれているお方。その者とは立場が違います」

「おや、青木さん。随分と穏やかではないことを仰いますね」

自分を軽んじる発言にも眉一つ動かさなかった達也が突然口を挟んだことに、青木はあからさまに気分を害した様子で達也を睨みつける。

しかし達也は、それを無視して話を続ける。

「今の発言は、他の候補者の方々に対してあまりにも不穏当ではありませんか？ 叔母上はまだ次期当主をご指名なさっていないかつたと記憶しておりましたが、それともご本人から内定でもお聞きになりましたか？」

「——！」

達也の指摘に、青木は自分の失言に気づいてハッと顔を引き攣らせた。秩序を乱す行為を咎める発言をしておきながら、自分は家督相続に関する自身の思い込みを、あろう事か次期当主候補に吹き込むなどという、如何にも秩序を乱すような行動を取ってしまったことになるのだから。

青木は悔しさに顔を真っ赤に染めながら、達也を睨みつけるその目をさらに細めた。達也の顔はいつも通りの無表情であるが、彼には内心自分を馬鹿にしているという被害妄想染みた思いに駆られていた。

「……御当主様は、確かに何も仰ってはいない。しかし共に暮らして

いれば、互いの心は通じるものなのだ。貴様のような心を持たぬエセ魔法師ごときが——」

「青木さん、それ以上は」

ヒートアップしていく青木の発言を止めたのは、彼の隣で気まずそうに成り行きを窺っていた龍郎だった。どちらに味方するのか明確にしないどっち付かずの態度を見せていた彼のハッキリした物言いに、青木だけでなく達也と深雪の2人も驚きの表情を見せた。

しかしそんな彼の視線は、達也たちではなく彼らの背後へと向けられていた。そして青木はそれに気づくと、即座に納得したように頭を下げて（それでも最後に達也を一睨みするのは忘れずに）口を噤んだ。そんな彼らの背後、つまり会社の出入口の方から声が聞こえてきたのは、その直後だった。

「お待たせしてしまい、申し訳ございませんでした、司波様」

特に声を張り上げたわけでもないのによく聞こえる凛とした声と共に、その少女は廊下の角から姿を現した。

前髪を切り揃えた長い黒髪が艶やかな、気品あるオーラを嫌味無く漂わせる少女だった。如何にも高級そうな生地を使った臙脂色えんじの服もよく目立つが、何よりも彼女の目を惹くのは、老若男女の区別無く引き込まれてしまいそうになるほどの美貌だった。ちなみに彼女の隣には、黒い髪に黒いサングラスに黒いスーツという全身黒づくめの男が付き従っている。

「——！」

そんな彼女の登場に、達也は思わず息を呑んだ。

彼女の美貌に惹かれて、ではない。彼は美人の異性に心奪われるといった、世間一般の男子高校生のような感情など持ち合わせてはいない。もつとも、深雪に対しては例外であるが。

彼がその少女に対してそのような反応を見せたのは、彼女のことを知っていたからである。

酔乙女ホールディングス。

それは世界中のあらゆる国で事業展開を行う、日本発の企業グループの名である。世界トップクラスの関連会社数・社員数を誇り、『どこ

かテキストな場所に立ち、テキストな方向に目を向ければ、その会社
が関わる何かしらの商品が目に入る』とまで言われるほどに多種多様
な産業を網羅している。グループ全体の総売上はまさに天文学的数
字であり、一部の小国においては政府よりも力を持っているとまで噂
されるほどだ。

そしてそんなグループ企業の次期後継者の最有力候補として知ら
れているのが、目の前にいる少女・酔乙女あいである。その美貌から
メディアでも度々紹介されている彼女は、高校生になったばかりの年
齢だというのに既に会社の経営に関わっており、そして少なからぬ成
果を挙げているのだという。

しかし達也にとつて最も重要なのは、彼女が例の現象に巻き込まれ
たために100年ほど5歳児のままだったこと、そして同じ幼稚園に
通っていた野原しんのすけと未だに個人的な付き合いがある、とい
う点だ。

それもただの友人ではなく、“トラス・シルバー”謹製のCAD
をプレゼントするほどに入れ込んでいる。となると、彼と現在近い
関係にある自分達も或る程度知られていると考えた方が良い。

「大変失礼致しました、司波様。到着して早々、会社から電話が掛かっ
てくるなんて」

「いえいえ、お気になさらず。お忙しい身であることは重々存じてま
すので」

そんな彼女が、自ら出張ってまで達也の父親と接触を凶ってきた。

いったい何が狙いなのか、と達也の警戒心が自然と湧き上がって
く中、あいは達也と深雪の2人に目を向けると、初めて気づいたとば
かりに首を傾げた。

「そちらにいらっしやるお2人と、何かお話をされていたのですか？
それでしたら私のことはお気になさらず、どうぞお続けになっ
てくださいな」

「お気遣いいただき、大変感謝致します。ですがお忙しいご様子です
ので、今日のところはこのまま失礼させていただきます」

スラスラと淀み無くそう言う達也に、あいはニツコリと優雅な笑み

で返す。

「ご心配には及びませんわ。今日はじっくりと話し合うつもりでしたので、この後のスケジュールには余裕がありますの。せっかくの親子水入らずですもの、積もる話もお有りのことでしょうか？」

——やはり、さっきの話は聞いていたか。

達也は心の中で、彼女に対する警戒心をさらに募らせた。先程の会話では、四葉家を連想する単語は誰も口にしていない。たとえ盗み聞きされたとしても、複雑な御家事情を抱えている程度しか分からないだろう。

「いえいえ、こちらの都合でご迷惑をお掛けするわけにはいきません。それにまあ、自分達もこの後に用事がありますので……」

今すぐにごこを離れたい、とばかりに達也は彼女から目を逸らして言い淀んでみせた。先程の会話を聞いていたのなら、複雑な事情で親子関係が上手くいっていないと推測できる。そんな父と顔を合わせたくないという名目ならば、この場を離れたがっていても不思議ではない。

そんな達也に対し、他の3人は口を閉ざしたまま成り行きを見守っていた。この場を穏便に済ませたいのは全員同じだ、下手なことを言って場を拗らせたくはない。

そしてあいは、ほんの短い時間だけ彼の頭から爪先まで視線を1往復させると、

「ところで本日は、どのようなご用事でこちらにいらつしやったのですか？」

「こちらの会社を見学させてもらっていたんです。自分は魔工技師という職業に興味がありまして、実際に一度職場を覗いてみたかったもので」

「まあ、とても勉強熱心な方なのでですね」

あいは晴れやかな笑みでそう言うと、その笑顔を龍郎へと向けた。急に自分の方を向いたからか、彼はピクンツと肩を跳ね上げた。

「素晴らしいですね、司波様！ 自身の『私情』に囚われることなく、ご子息の願いを叶えて差し上げるだなんて！」

「えっ？ ええ、まあ……。息子はとても優秀ですので……」

とても戸惑った様子でそう答える龍郎に、達也も深雪もほんの少しだけその目を細めた。

と、あいが再び達也へと向き直った。

「ところで勝手なお願いで申し訳ないんですけれども、今日私がこちらに伺っていたことは他言無用でお願いできますか？」

「はい、もちろんです」

「私からも、お約束致します」

「まあ、頼もしいですわね。そうですね、こちらのように絶対外部に漏らせない開発中の技術や新商品が数多くあるような施設の見学を許されるほどのものですもの、そういった事情に関してもよくご存知でしょうね」

彼女が満足そうに頷いたこのタイミングを見計らって、達也は「それでは失礼します」と頭を下げながら建物の出入口へと歩いていった。深雪も丁寧な所作でお辞儀をして兄に続く。

達也が一瞬だけ振り返ったとき、龍郎が何か言いたげに口を引き結んでいたが、生憎と彼にはそれへの興味は微塵も無かった。

それよりも彼は、未だにニコニコと笑みを浮かべてこちらをじっと見つめるあいが気掛かりで仕方がなかった。

第18話 「大会を目指して練習するゾ」

達也が酔乙女あいと思わぬ邂逅を果たした次の日。

第一高校の運動場では現在、1年E組による体育の授業が行われていた。魔法の授業に関しては教師をつけてもらえない二科生だが、こういった魔法に関係無い授業のときには魔法師でない一般の教師がつけられる。

男子が現在行っているのは、近年誕生した“レッグボール”と呼ばれる競技だ。大まかなルールはフットサルとほぼ同じだが、コートが透明な壁や天井で囲み、高反発のボールをそこにぶつけて反射させながらパス回しを行うという点で大きな違いがある。目まぐるしく攻守が入れ替わるダイナミックな試合展開が多くのファンを生み出している人気のスポーツだ。

幾つもの裏の顔を使い分ける達也も、このときばかりは1人の男子高校生として授業に取り組んでいた。

「おらおら、そこをどきやがれ！」

怪我防止のために頭部にサポーターをつけたレオが、ディフェンスの間を縫うように強烈なパスを出した。ボールは誰にも止められることなく、待ち構えていた達也へと迫る。

達也は一度そのボールを垂直に蹴り上げると、天井を跳ね返って戻ってきたボールを地面に踏みつけて止めた。ボール自体が高反発なので下手に脚で止めようとすると明後日の方へ飛んでいってしまうため、ボールを止めるにはわざわざこうして手間を掛ける必要があるのだ。

達也は一瞬で周りの状況を把握すると、壁に向かってボールを蹴り飛ばした。ボールが壁に反射して軌道を変え、突然のことで反応できなかつたディフェンスの間を縫い、味方の中で唯一フリーとなつている男子生徒へと迫る。

その少年は全体的にスラリと細い体をしており、右目の辺りにほくろがあるのが特徴だ。彼は走りながら自分に向かって飛んでくるボールをチラリと見遣ると、即座に立ち止まって絶妙な足捌きでそれ

を受け止め、そのままゴールに向かってボールを蹴り飛ばした。キーパーが反応して動こうとするが、1歩目を踏み出す頃には既にボールはゴールネットに吸い込まれていた。

「おおー、やるな、あいつー!」

レオが感心したように声をあげ、達也は無言でそれに同意した。

彼の名は、吉田幹比古。

直近の筆記試験において二科生ながら司波兄妹に次ぐ3位の成績を叩き出した彼は、現代魔法が誕生するよりも前から受け継がれてきた古式魔法、その中でも“精霊魔法”と呼ばれる秘術を伝承する吉田家の直系だ。兄をも凌ぐ才能を持った麒麟児として将来を期待されていた彼がなぜ補欠扱いの二科生となっているのか謎だが、先程の動きを見ても体術においてはその名に恥じぬ技術を備えているようだ。

——爪を隠した鷹か……。思わぬ所に潜んでいたな。

幹比古のゴールでフィールドが喧騒に包まれる中、達也の目つきが自然と鋭くなっていた。

「お疲れ、吉田」

「ナイスプレーだったぜ、吉田。意外とやるじゃねーか」

達也たちの試合が終わり、現在は別のグループが試合を行っている最中である。達也とレオは、集団から少し離れた所で腰を下ろす幹比古の姿を見つけ、労いの意味も込めて声を掛けた。

しかし幹比古は、若干困ったような笑みを浮かべて、

「……ありがと。でも悪い、名字で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「分かった。それじゃ、これからは“幹比古”と呼ぶぜ。俺のことも“レオ”で良いからな」

「俺のことも“達也”と呼んでくれ」

「ああ、分かったよ、レオ、達也。——達也、君とは前から話をしてみたかったんだ」

「……奇遇だな、俺もだ」

傍目には筆記試験で優秀な成績を修めた2人が互いを意識してい

ると受け取れるが、本人達の思惑はそれとは少し別のところにあつた。

「それに、レオとも話をしてみたかったさ。あのエリカとまともに張り合っているんだからね」

「……何かそれは釈然としねえな」

「幹比古は、エリカと知り合いだったのか？」

達也の問いに、幹比古は口を開きかけて、

「いわゆる幼馴染ってやつよ。最近は何か避けられてるみたいだけど」

その質問に答えたのは、いつの間にか達也たちの近くに来て来たエリカだった。その後ろには、美月の姿もある。

3人が一斉に彼女の方へ顔を向ける——と、レオと幹比古が驚きで目を丸くした。特に幹比古など、顔を真っ赤に染め上げている。

「エ、エリカ！ 何て格好をしてるんだ！」

彼が声を荒らげるのも無理はない。数十年前の大規模な寒冷化の名残で肌を露出したファッションをあまり好まない現代において、彼女は股下ギリギリまで裾をカットした運動着——いわゆるブルマーを着用していたからだ。武道によって引き締まった彼女の脚が惜しげもなく顕わになっており、思春期真っ只中の彼らにとっては目に毒だろう。

なので、かどうかは分からないが、3人の男子の中で唯一冷静なままの達也が尋ねる。

「エリカ、それはどうしたんだ？」

「ああ、動きやすくなつて思つて履いてみたんだけど、あんまり効果は無い感じなんだよね。脚をほとんど露出してるから怪我しやすいし、失敗だったかも」

「エリカちゃん……、やっぱり普通のスパッツに戻した方が良いよ」

「うん、美月の言う通りかも。ミキも変な目で見てるし……」

突然話を振られたミキこと幹比古が、真っ赤だった顔をさらに紅くして叫ぶ。

「そんな目で見ていない！ それに“ミキ”って呼ぶな！ 僕の名前

は幹比古だ！」

「ええっ？　だつてミキヒコつて噛みそうなんだもん。だつたら『ヒコ』にする？」

「なんでそうなる！　普通に呼べば良いじゃないか！」

「だつてあんた、名字で呼ばれるの嫌いじゃん」

エリカがそう言ったその瞬間、幹比古は目を見開いて黙り込むと、何も言わずにその場を離れて行ってしまった。

「あつ！　幹比古く——」

「2人共、そろそろ戻った方が良いんじゃないか？　先生が怖い目でこっちを見てるぞ」

「えっ、マジ！　美月、急いで戻ろ！」

「あ、待ってよエリカちゃん！」

女子2人を先生の所へ送り出し、達也とレオの2人は幹比古の後を追った。

彼はどこかへ消えた訳ではなく、すぐそこで俯き加減に突っ立っていた。その表情には、苛立ちやら後悔やらが混ざった複雑な感情が浮かんでいる。

「……悪いな、2人共。気を遣わせてしまつて」

「まあ、エリカは無神経だからな、イラツとすることもあんだろ。気にすんな」

——名門の次男が名字で呼ばれるのを嫌うとは、随分と深い理由がありそうだな……。

あつげらんとした態度で慰めようとするレオの後ろで、達也は幹比古をじつと見つめていた。

どこの魔法師の家系もそういった複雑な事情からは逃れられないのか、という諦観にも似た想いを抱きながら。

*

*

*

放課後。

魔法科高校も他の高校の例に漏れず、放課後にはグラウンドや体育

館、それ以外にも校内の様々な施設で部活に励む生徒の声で賑やかとなる。或る者は目標とする大会で優秀な成績を残すため、或る者はひたすらに己の技術を高めるため、或る者は仲の良い友人達と同じ時間を過ごすため、とその目的は様々であるが、限られた青春時代を謳歌する若者というのはいつの時代も輝いて見えるものだ。

しかしこの時期になると、そんなお馴染みの光景に少々変化が生まれる。それぞれの場所で部活動が行われるのは同じなのだが、その顔触れの中に普段は見掛けない者が数名紛れていたりする。

その理由は、九校戦の代表選手に選ばれた生徒が部活動の練習に参加しているためだ。

例えば九校戦の競技の1つである「バトル・ボード」は水上を走るレース競技だが、スケートボードなどで移動しながら設置された的を魔法で撃ち抜きつつ林間コースを走破する競技である。「SSボード・バイアスロン部」に通じる部分があるため、その競技の代表選手が部員に混じって練習するのが慣例となっている。同じく競技の1つである「スピード・シューティング」は、そのものズバリ「スピード・シューティング部」という部活があるため、部員でない代表選手はこの練習に参加することとなる。

当然ながら同じ施設を使用する人数が増えるため、元々の部員からしたら練習時間が少なくなってしまう。しかし九校戦は学校が一丸となって取り組む大会であるという意識があるからか、それに対して文句を言う部員はおらず、むしろ代表選手に対してアドバイスするなど積極的に協力している光景もよく見られる。

第一高校の敷地内にある閉所^ク戦闘^ク訓練場を活動拠点とするコンバット・シューティング部も、現在代表選手を招き入れて一緒に練習している部活の1つである。

その訓練場の室内は基本的に広い空間となっているが、不規則に配置された太い角柱と意図的に落とされた照明、そして床に散らばる廃材オブジェクトによって擬似的な迷路になっている。それらはコンピュータによって位置を変えることができ、それらの隙間を擦り抜けて如何に早くゴールに辿り着くかを競うことになる。

しかも障害物はそれだけではない。所々に自動銃座が設置されており、そこから発射されるゴム質のペイント弾に当たると失格となってしまう。自動銃座の場所を読んでそこを避けるか、あるいは読んだうえで反撃するか、あるいは発射されたペイント弾を避けるか、そういった一瞬一瞬の判断を養うのには最適な施設と言えるだろう。

ブ——！

リタイアを告げるブザーの音に、訓練場横のモニター室で様子を見守っていた生徒達から落胆の声が漏れた。途端に訓練場の照明が回復し、見え難くなっていた障害物などがその姿を顕わにしていく。

そんな障害物に囲まれたその場所で、自分の脇腹辺りを睨みつけるように見下ろす森崎の姿があった。そこには自動銃座から発射されたであろう赤いペイント弾がべったりと貼りついており、既に乾燥しているのでそのまま手で剥がすこともできるが、より綺麗に落とすなら専用のリムーバーを使う必要がある。

コンバット・シューティング部の部員である森崎にとって、その作業はここ数ヶ月で何十回も繰り返し返してきたことだ。不機嫌を隠そうともせず大股で訓練場を後にすると、リムーバーが置かれているモニター室へと足早に戻っていく。

「お疲れ森崎、もうちよつとだったんだけどな」

「……失格で終わったんだ、もうちよつとも何も無いだろ」

真つ先に声を掛けたのは、森崎と同じクラスの男子生徒だった。彼もコンバット・シューティング部に所属する部員の1人だが、今は九校戦の代表選手の1人としてここにいた。

「ゴールに近づいて気が急いだのは分かるが、もうちよつと状況確認に気を配るべきだったな。あんな分かりやすい罠に気を取られて死角の自動銃座に気づかないようじゃまだまだだぞ」

「……はい、気をつけます」

森崎にアドバイスを送るのは、コンバット・シューティング部の部長である3年生の男子生徒だ。障害物の配置を設定しているのも彼であり、『部長が設定したコースは他のものよりも数段いやらしい』と部員の間でもっぱらの評判である。

「ほい、森内くん」

「……僕の名前は森崎だ。——つたく、なんでこんな奴がノーミスなんだ……」

そして気の抜けた声と共にリムバーを渡してきたのは、しんのすけだった。すっかりお馴染みとなったツツコミと共にそれを受け取る森崎だったが、その声にも表情にも力は無い。

しんのすけと森崎、そして先程の1年生男子生徒の3人が、今回の新人戦「モノリス・コード」の代表選手だ。

モノリス・コードは九校戦唯一の団体競技であり、敵陣営のモノリスを指定の魔法で割って隠されたコードを送信するか、相手チームを戦闘不能にした方の勝利となる。相手選手への魔法以外での攻撃行為は禁止されているため、とにかくにも魔法の実力が物を言う競技と言える。

なので第一高校では、新人戦においては期末テストの実技の成績を基に代表が決定される。男子1位はしんのすけ、男子2位は森崎なのでこの2人は順当に決まったのだが、男子3位である十三束とみつかという生徒はその魔法特性が競技に不向きであると判断されたため、男子4位の生徒が選定されている。

よって現在この3人は、実戦的な動きを養うためにこの訓練場に向いているのだが、

「それにしても野原くん、3回やって3回共クリアするとは思わなかったよ。特に3回目なんて結構気合いを入れて障害物を設置したのに、魔法すら使わずにクリアだもんなあ。九校戦が終わったら、正式にウチの部員にならない？」

「ええっ？ めんどくさいオナラ臭い」

「……………」

部長としんのすけの遣り取りを聞いていた森崎ともう1人の男子生徒、すなわち本来の部員である2人はその表情に陰を落としていた。

3人で一緒の練習メニューをこなすモノリス代表メンバーだが、既にしんのすけと他の2人で如実に差が表れ始めていた。

実技では男子1位がしんのすけで、2位が森崎。確かにこれだけ見れば2人の差は順位1つのみなのだが、具体的な点数で見ると2人の間にはランク以上に大きな隔たりがあった。いくら筆記より実技の方に多く点数が割り振られているとはいえ、普通ならば筆記19位の生徒が実技の順位をそのままに総合2位を獲得できるはずが無い。つまりそれだけ、実技で稼いだ点数が圧倒的だったことを表している。もつとも、そんなしんのすけですら抜くことを許さず1位に君臨する深雪もかなり異常なのだが。

とはいえ、それはあくまでテストでの成績。実戦方式の訓練ではそこまで差が開くことは無いだろう、というのが上級生を含めた大方の予想だったのだが、残念ながらその予想は大きく外れてしまった。

本日しんのすけは3回の訓練に挑んだのだが、そのいずれにおいてもあっさりとゴールまで辿り着いてみせた。野性的な勘で自動銃座の場所を見抜き、コースの都合上避けることのできない物に対しては抜群の運動神経で避けてみせ、柱を利用して射線を潰す芸当までやってのけた。しかも3回目に至っては、先程の部長の言葉通り、魔法を1回も使わず持ち前の運動能力のみで切り抜けてしまったほどだ。

「……すみません部長、もう1回お願いします」

「部長、自分もその後」

「オツケー。今コースの設定するから少し待ってろ」

森崎ともう1人の男子生徒が部長に詰め寄るようにそう言うと、部長は待つてましたとばかりに即座に頷いてコンピューターへと向かった。それと同時にモニターに映る訓練場の照明が落とされ、若干楽しそうな様子で部長が障害物の配置を設定する。

コンコン、とモニター室のドアがノックされたのは、そのときだった。

「失礼します、エンジニア代表の司波といいますが——」

「なっ——！ 何しにここに来た、司波達也！」

「……随分とご挨拶だな、森崎」

真っ先に反応して噛みついてきた森崎に呆れの視線を送る達也だ

が、すぐに表情を切り替えて部長へと向き直る。

「野原しんのすけに用事があるのですが、大丈夫でしょうか？」

「ああ、さつき終わったところだから大丈夫だぞ。というか、野原くんにはここの訓練は必要無いかもな。次のステップに進んだ方が良い」「了解です。——しんのすけ、渡したい物があるから来てくれるか?」「おっ、良いゾ」

約1名の恨めしそうな視線をひしひしと感じながら、達也としんのすけはその部屋を後にした。

もつとしんのすけはそんな視線など気づきもせず、達也が持つ細長いシヨルダーバッグに釘付けとなっていたが。

*

*

*

達也がしんのすけを引き連れてやって来たのは、風紀委員入りのときに模擬戦でも使ったことのある演習場だった。物理的に分厚い壁や結界魔法で補強されているこの部屋ならば魔法の練習にも耐えられるし、備え付けの観測機器を使えばデータ収集も容易に行える。

「んで達也くん、渡したい物って何? そのバッグの中身?」

しんのすけの質問に達也は首肯し、そのバッグを開けて中身を取り出した。

それは全長70センチ、刃渡り50センチ程度のナックルガード付きの模擬刀のような形状をした、おそらく武装一体型CADと思われる代物だった。「模擬刀のような」と形容したのは刃の部分が意図的に潰されているためで、斬るというよりも叩き潰すことを目的としていると思われる。

「おおっ、大きな剣」

「確かに竹刀と比べると短いけど、その分幅が広いからな。使い心地を確かめてほしい」

「ほいほい」

しんのすけはそれを受け取ると、具合を確かめるように片手で何回か振ってみる。最初の2回はただ単にブンブンと物を振り回すだけ

だったのが、3回目、4回目となるにつれて空を切る音が鋭くなり、振り下ろしからの切り返しなど一連の動きに淀みが無くなっていく。

もう少し慣れに時間が掛かるかと思っていた達也は、その光景にほんの僅かに目を見開いた。しかしその驚きを口に出すことは無く、代わりにそのCADの「機能」についての説明に移行する。

「しんのすけ、柄の部分にスイッチがあるのが分かるか？」

「おっ、これのこと？——ポチツとな」

「そしたら剣先を上に向けた状態で、サイオンを流し込んでくれ。魔法は1つしか登録していないから、すぐに魔法式が発動する」

「ほーい」

しんのすけは言われた通りに剣を上に向け、魔法師にとっては当たり前のように毎日行うサイオンの注入をする。登録された起動式が彼の肉体に吸収されて脳内の精神機構「魔法演算領域」へ送り込まれ、それが「魔法式」に変換されて物理的な変化となって表れる。

今回の変化は、刃の中間付近が分離して剣先部分がフワリと宙に浮き上がる、だった。

「おおっ！ 何これ、先っぽが浮いたゾ！」

「モノリス・コードでも使えるように作った、武装一体型CAD「小通連」だ。使用する魔法の名前も同じで、硬化魔法に分類される」

「硬化魔法？ それってレオくんが得意なヤツだよ。物を硬くする魔法じゃなかったっけ？」

「確かにそうイメージされることも多いが、そもその定義は「パーツの相対位置を固定する魔法」だ。物質の形を保持するという効果を得られるため結果的に物質が硬くなったように見え、だから「硬化魔法」という名前が付けられているんだ」

「小通連」の場合、分離した刃の剣先部分と根元部分の相対位置を硬化魔法で固定することで、疑似的に刃渡りを伸ばす仕組みになっている。その距離は術者で調整可能であり、2つの間に遮蔽物があっても問題無く魔法は機能する。

しんのすけが出場する「モノリス・コード」では、魔法を使わない直接攻撃が禁止されている。それは武器による打撃なども含まれて

おり、せっかく中学チャンピオンにまで上り詰めた彼の剣技を活かすことができない、と作戦スタッフやエンジニアも悩んでいた。

しかしそのルールは、魔法で飛ばした質量体を相手にぶつける行為は認められている。よって達也の開発した小通連ならば、刃を分離しない状態で直接叩かなければモノリス・コードでも使用することができるのである。

と、達也がそのような説明をしている間も、しんのすけは小通連の刃先を飛ばしたり戻したりしているのに夢中になっていた。説明を聞いているのかも怪しいその姿は、新しい武器の性能を確かめるといふよりは、むしろ小さな子供がおもちゃで遊んでいるような印象だった。

しかし達也としては、それでも構わなかった。どれほど高性能だったとしても、しんのすけが興味を示さなければ使われることは無い。以前エリカが千葉家謹製のCADを勧めたときも一切興味を示さなかったことから、単なる高性能な武器では彼の興味は惹けないと踏んでいた。

とりあえず第一関門は突破だな、と達也は心の中で安堵の溜息を吐いた。

その安堵感が無意識に働いたのか、達也は自身が抱く疑問を口にしていた。

「それにしても、少し意外だな。しんのすけが、モノリス・コードの代表になるなんて」

「おっ？ そうなの？」

「実力という意味でなら確かに適任だが、実戦形式で相手と魔法で戦ったりするようなことは、精神的な面から苦手かと思っていたからな」

「ああ、そういうこと？ 別に絶対戦わなきゃダメってわけじゃないんでしょ？」

「そりゃ、もちろんそうだが……」

モノリス・コードの勝利条件は、敵陣営のモノリスを指定の魔法で割って隠されたコードを送信するか、相手チームを戦闘不能にする

か、だ。戦闘不能と言っても絶対に気絶させる必要は無く、規定のヘルメットを取られた場合も失格扱いとなり、以降の競技行動を禁止される。

なのでしんのすけの言う通り、これらを狙うのであれば戦わずに勝利を収めるということもできなくは無いのだが、

「障害物の多い『森林ステージ』や『市街ステージ』辺りなら戦闘を避けることもできるが、そうではない『草原ステージ』とかだと厳しいんじゃないか？」

「うーん、そっかあ……」

「少なくとも、向かってくる相手を足止めする程度のことは練習しておく必要はあると思うが。——おっと」

達也のポケットで携帯端末が震え、彼はそれを取って耳に当てた。

「ああ、来たか。入口は開いてるから、入ってきてくれ」

「おっ？・誰か来るの？」

「ああ、おまえの練習相手がな」

達也が電話を切ってからきっかり10秒後、電話の相手が演習場に姿を現した。

やって来たのは、レオ・エリカ・美月という達也としんのすけ共通の友人である3人に加え、しんのすけにとって見覚えの無い、右目の辺りにほくろがある細身の男子生徒・幹比古の姿もあつた。立ち位置としてはレオとエリカが先頭、美月と幹比古がその後が続いている。

そんな4人に対し、この場に呼んだ張本人であるはずの達也が首を傾げた。

「……俺が呼んだのは、確かレオだけだったはずだが」

「レオから聞いたのよ。しんちゃんとの練習相手、しかも新しい武装一体型CADのテストだなんて、なんでそんな面白そうなことをアタシに教えてくれないのよ！」

「そうか。……で、後ろの2人は？」

「この2人は付き添いよ。練習に参加するのはアタシとレオの2人だけ」

「付き添いって……。エリカがむりやり連れて来たんじゃないか

……」

「もう、エリカちゃん、強引なんだから……」

そんな達也たちの遣り取りに、しんのすけはこれから行うことが何となく理解できた。

だからこそ、彼のトレードマークでもある太い眉が八の字になる。

「ええっと、レオちゃんとエリカちゃんを相手に練習しろってこと？」

「そういうことよ、しんちゃん。大丈夫、コイツは頑丈だからいくら痛めつけても問題無いわ」

「大有りだわ！ いや、硬化魔法とかあるから少しは打たれ強いのは確かだけだよ……」

「そうそう。それにアタシだって、少しは剣の腕に覚えはあるつもりだから」

エリカの説明にも、しんのすけの表情は芳しくない。

しかしそれは、彼女の實力に不満があるというわけではなく、

「そういえばしんのすけの父君は『女性に対して紳士であれ』という教えだったな。だからエリカに対してCADを向けることに対して抵抗があるんだろう」

「——成程、そういうことね」

達也の言葉に、エリカはフツと口元に笑みを零した。

しかしそれは、自分に対する扱いを素直に喜んでるわけではなかった。喜んでるにしているのは、彼女のしんのすけを見遣る目つきが鋭すぎる。

「しんちゃん、気持ちは嬉しいけどさ、アタシに対しては女性だからどうのこうのっていう気遣いはいらなから。レオと同じようにガンガン来てくれて構わないわよ」

「うーん、そう言われましてもなあ……」

「……そう簡単に切り替えられないか。——だったら、」

エリカはそう呟いて、制服に仕込んでいた伸縮警棒型CADに手を掛けた。

そして次の瞬間、彼女の姿はしんのすけの前方50センチほどの位置に移動していた。警棒を振り上げ、彼の左肩辺りめがけて鋭く振り

下ろす。

レオと幹比古が息を呑み、美月が異変にようやく気付きかけ、達也が視線だけで彼女を追う中、

「――」
バックステップ1歩だけで、しんのすけはエリカの攻撃を易々と避けた。それは意識的に1歩後退ったというよりは、例えばタンポポの綿帽子が振り下ろす警棒の気流に乗って移動したような錯覚すら生まれるほどに自然な動作だった。

しかしエリカも、自分の攻撃が避けられた驚愕で動きを止めることはしない。ほとんど反射的に警棒を振り上げ、もう1歩踏み込んで即座に2撃目を繰り出した。だがしんのすけはそれも回避、今度は先程よりも大きく後ろに跳んだため、3撃目を振り下ろすには数歩分時間が掛かる。

ところがエリカはその数歩分の距離を、自己加速術式によってむりやり1歩分に短縮した。しんのすけが右手に持つ小通連を警戒して、彼女から見て左下から右上へと警棒を振り上げる。加速の勢いも乗せた一撃は少女の筋力であつても相当な威力であり、たとえ小通連で受け止めたとしても衝撃はかなりのものだろう。

「……………」
だが実際は、エリカの警棒は最後まで振り切られることは無かった。

しんのすけの小通連が行く手を阻んだからではなく、ましてや警棒が彼の体を捕らえたからでもない。

エリカ自身が、途中で警棒の動きを止めたからだ。

自分の右脇腹に添えられた、しんのすけの小通連によって。

――見落とした？ 真正面での切り返しを？

右手に剣を持った状態で真正面から来る相手の右側、つまり自分から見て左側に剣を当てる場合、まずは剣を左に振ってから右に切り返す必要がある。つまり攻撃に2つの動作が必要となり、秘伝の奥義を修めたと認められた証である「印可」を得るまでに鍛錬を積んできたエリカの目を誤魔化せるものではない――はずだった。

エリカは長く息を吐いて警棒を引つ込めると、しんのすけに対して腰が直角になるほどに頭を下げた。

「ゴメンしんちゃん、いきなりこんなことして」

「別に良いゾ、エリカちゃん。本気でオラを倒そうとしたんじやないんでしょ?」

「……これでも8割5分くらいは本気だったんだけどね。それで、どう? しんちゃんから見て、アタシの実力ってどれくらい?」

「凄かったゾ、エリカちゃん。よよぎくんの次くらいに強いかも」

「本当? あの代々木コージローの次って言われたら、悪い気はしないかも——」

「まあ、よよぎくん以外、全然憶えてないんだけど」

「実質ビリ!?!」

すっかり普段通りの遣り取りに戻った2人に、固唾を呑んで見守っていたレオ達がホツと胸を撫で下ろす。

そんな2人に平然と割って入るのは、達也だった。

「さすがだな、しんのすけ——と言いたいところだが、もしこれがモノリス・コードの本番だったら、今のは直接攻撃と見做されて失格処分となつてただらうな」

「ええっ! 厳しいゾ、達也くん! そんなこと言ったら、エリカちゃんだつて——」

「確かにエリカは白兵戦が得意だから直接攻撃に出たが、もしあの距離から例えば空気の塊を放ったとしたら有効となる。〃直接攻撃は禁止〃というルールを利用して、敢えて相手の懐に潜り込む戦法を相手が採る可能性だつてあるんだからな」

しんのすけは「むう〜」と分かりやすく頬を膨らませて睨みつけるが、達也はまったく気にする様子も無く言葉が続ける。

「しんのすけが最終的にどんな作戦で行くかは自由だが、相手に攻め込まれた場合の対処法を磨くための練習は必要だ。レオ……とエリカの2人には、その練習相手として付き合ってほしい。頼めるか?」

「良いぜ達也、俺としても良い訓練になりそうだしな」

「アタシは大丈夫だけど、しんちゃんはどうか?」

「……分かったゾ。よろしくね、レオくん、エリカちゃん」

渋々といった感じではあるが首を縦に振ったしんのすけに、レオとエリカは揃って笑顔でそれに応えた。あまりにも揃っていたため、2人が気まずそうに互いを睨み合ったくらいだった。

と、達也が再びしんのすけに話し掛ける。

「ところでしんのすけ、できるだけ戦闘を避けたいんだったら、森崎に教えを請うと良い」

「おっ、森崎くん？　なんで？」

「森崎の家はボディガードの会社を営んでいて、アイツも家業を手伝っていると聞いている。ボディガードというのはクライアントの安全を第一に考えて動く必要があるから、できるだけ無駄な戦闘を避けるためにどう動くべきかを学んでいるはずだ」

「ほーほー、そういうことですかあ。後で聞いてみよーつと」

納得したように頻りに頷くしんのすけに、達也は思った。

本人がいない所では普通に名字を呼ぶんだな、と。

*

*

*

こうして様々な者達が様々な事情と思惑を抱えながらも、それぞれの九校戦が幕を開ける。

第19話 「九校戦に向けて出発だゾ」

8月1日。いよいよ九校戦の会場である富士演習場へ向けて出発する日がやって来た。遠方の学校は早めに現地入りするのだが、会場に一番近い第一高校は例年このくらいの時期に現地へと向かうことになっている。

選手もエンジニアも機材もバスに乗り、第一高校代表組は意気揚々と現地へ向けて出発——していなかった。

「……遅いな」
「ですな」

真夏の炎天下にて、予定の時間から1時間半近く経っても現れない1人の生徒を待つ摩利と達也が、疲れを紛らわすようにポツリと呟いた。摩利は額に滲む汗を懸命に拭っているが、達也は1滴の汗も掻かずに平然と佇んでいるように見える。

と、そのとき、

「遅れてごめんなさいー!」

サンダルのヒールをカツカツと鳴らしながらやって来たのは、真っ白なサマードレスと幅広のつばを持つ帽子を身につけた真由美だった。達也はその姿を見て、手に持っていた端末に表示されていたリストにある真由美の欄にチェックを入れた。これで全員の欄にチェックが入れたことになり、ようやくバスは出発できることになる。「ごめんなさい、達也くん、摩利。私のせいでこんなに待たせちゃって」

「いえ、事前に事情は聞いていましたから大丈夫です。それにこうして会長を待っていたのは、皆さんの総意でしたので」

「ふふ、ありがとう。——ところで達也くん、これ、どうかな?」

“これ”というのは、自分が今着ている服のことだろう。

達也はほんの一瞬だけ逡巡してから、口を開いた。

「とてもお似合いです」

「ありがとう。でももうちょつと照れながら褒めてくれると、言うこと無かったんだけどな」

指を絡めた両腕を腰へと伸ばしたせいで、平均より小柄ながら平均並みの大きさをした彼女の胸がくつきりと谷間を刻んでいた。口を尖らせながら上目遣いで擦り寄る彼女の姿は、思春期真っ只中の男子ならばドキドキせずにはいられない魅力を放っているに違いない。

だが、達也はその「思春期真っ只中の男子」の範疇外だった。

「大変だったんですね、会長。心中お察しします。バスの中でも、少しは休めると思いますよ」

「え？ ちよつと、達也くん？ 何か勘違いしてない？」

「ほら、真由美。みんな待たせてるんだ、いい加減に乗るぞ」

何か言いたげだった真由美を引っ張って、摩利はバスの中に入っていくた。

それを見送った達也は、小さく溜息を吐いてから先程2人が乗ったバスとは違う作業車へと歩いていく。第一高校では選手が乗るバスとは別にCADの調整などに使う機材を運ぶための大型車を用意し、技術スタッフはそちらに乗るのが慣例となっている。

「お疲れ様です、達也くん」

「お疲れ様、司波くん」

作業車に乗り込んだ達也に劳いの声を掛けたのは、彼と同じ技術スタッフの中条あずさと、彼女と同じく2年生の五十里啓^{いそり}だった。身長は達也より少し低く華奢な体格をしており、スカートを履けばそのまま「背の高い美少女」で通りそうな容姿をした中性的な美少年だ。

「んもう、遅いゾ達也くん。オラ待ちくたびれちゃったゾ」

そしてそんな五十里の隣でボリボリとチョコビを貪っているのは、選手として登録されている、つまり真由美達の乗っているバスで会場に向かうはずのしんのすけだった。

「……なんでしんのすけがこっちにいるんだ？ おまえは向こうのバスだろう？」

「まあまあ、どっちに乗っても目的地は同じなんだから。——ほい、どろぞ」

「あつ、ありがとう、野原くん」

「ありがとう、しんちゃん」

達也の問い掛けにしんのすけはモグモグと口を動かしながら、五十里とあずさにそれぞれ1つずつチョコビを手渡した。礼を言いながらそれを受け取る2人の手つきは慣れた様子であり、おそらく達也を待つ間に何回か繰り返していたのだろう。

それを口に含みながら、五十里が苦笑い混じりでしんのすけのフオローに回る。

「良いじゃない司波くん、野原くんもここにいさせてあげようよ。何か野原くん、向こうから避難してきたみたいだし」

「……避難？」

五十里の口から出てきた思わぬ単語に、達也は首を傾げてオウム返しをした。

*

*

*

「もう、達也くんは私を何だと思ってるのかしら？ 隣に誘おうと思っただのに、さっさと行っちゃおうし！」

バスが発射してしばらくしてから、ほぼ最前列の席に座る真由美がプンプンと不機嫌をアピールするようにそう言った。

そしてそんな彼女の隣に座る鈴音が、冷ややかな目を向けていた。いや、彼女はいつも無表情を貫いているので、ひよっとしたら彼女なりに温かい視線を向けているのかもしれない。

「的確な判断だと思われます。会長の美貌の“魔力”に耐えられる男子生徒など、ほとんどいないのですから。もつとも司波くんは相手の魔法を無効化する技能に長けていますので、通用しないのかもしれないが」

「もう、リンちゃんまで……」

鈴音の言葉に真由美は悲しそうな声を出して、彼女に背を向けて体を丸めてしまった。彼女の大袈裟な言動は普段からやっている彼女なりのコミュニケーションなので、鈴音は特に心配する素振りも見せずにじっと彼女を見つめている。

しかし中には、そのような冗談の通じない真面目な生徒もいるようだ。

「会長、大丈夫ですか？ やはりご気分が悪いのでは……？」

例えば、真面目に自分の職務を全うする生徒会副会長とか。

「あ、ええと……。別にそういう訳じゃないのよ。ごめんね、心配掛けて」

「そんな気遣いは無用です！ 我々を心配させまいと無理をなさって体調を崩されてしまつては、元も子ありません！ 何かあれば、遠慮無く私に！」

胸に手を当てて力説する服部だったが、その視線が少し下を向いたとき頬を紅く染めた。おそらく彼女がだらしなく座っているせいで、サマードレスの裾から太股が覗いているのをバッチリ見てしまったからだろう。

「副会長、どこを見ているのですか？」

「市原先輩！ わ、私は別に何も！ ただ会長にブランケットでもと思ひまして……！」

「副会長が、会長にブランケットを掛けて差し上げるのですか？ それでは、どうぞ」

「いや、あの！ 私は——！」

わざわざ席から立ち上がって促す鈴音に、上目遣いで恥ずかしそうに胸元を隠す真由美。

2人の先輩の悪ふざけに、真面目な後輩である服部はすっかり体を固くしてしまった。

——まったく、あいつらは何をしているんだ？

そんな3人の遣り取りを、摩利は呆れ顔で眺めていた。注意してやろうかとも考えたのだが、それで真由美の気分が晴れるのならと、あえて無視を決め込むことにした。

その代わり、先程から自分の隣で溜息ばかり吐いている女子生徒へ視線を向けた。

「花音……、2時間ぐらい待つことはできないのか？」

摩利のその言葉に、ボーイッシュなショートヘアを持つ凜々しい顔

つきの少女——千代田花音は、彼女の言葉がスイッチとなったのか、途端に不満を爆発させる。

「私だって、2時間や3時間ぐらいは待てますよ！でも今回は啓も技術スタッフとして選ばれて、すっごい楽しみにしてたんですよ！今日もずっとバスの中では一緒だと思ってたのに！——なのになんで、技術スタッフは作業車なんですか！」

彼女の言う「啓」とは、現在しんのすけ達と一緒にの作業車に乗っている五十里啓のことだ。実はこの2人は許嫁同士であり、そのラブラブっぷりは校内でも割と有名だったりする。

「バスの席だってまだ充分にあるし、足りなければ2階建てでも3階建てでも持つてくれば良いんですよ！どうせ移動中は作業なんてできないんですから！ああもう、納得いかーん！」

「毎度のことながら、おまえは五十里のこととなると人が変わるな……」

すぐ隣でわんわん騒ぐ花音に、摩利は頭痛を抑えるようにこめかみに指を当てていた。

しかしながら、技術スタッフが別移動であることに納得していないのは、何も彼女だけではなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

後ろから2番目の窓際に座る深雪は、花音と違って騒ぐこともせず無言を貫いていた。しかしその顔に感情は一切見られず、非常に整った顔立ちも相まって精巧な人形のような不気味さを感じさせる。しかも何かの魔法でも発動しているのかと思わせるほどの剣呑なプレッシャーが撒き散らされ、バスの後ろ半分に座る生徒は彼女の逆鱗に触れないよう息を殺して縮こまることしかできずにいた。

少し離れただけでそうなのだから、彼女の隣に座るほのか、そして通路を挟んで同じ列に座る雫の感じている恐怖は如何ばかりだろうか。

「ええと……、深雪？お茶でも飲む？」

恐る恐るといった様子で水筒を差し出すほのかに、深雪は初めてニコリと微笑みを浮かべた。

「ありがとう、ほのか。でもごめんなさい、私そんなに喉が渴いてないの。——だって私はお兄様と違って、この炎天下にわざわざ外で立たされてたわけじゃないんだもの」

本当に何の魔法も発動していないのだろうか、ほのかは自分の体が凍りつくような気がした。

「何してるの、ほのか。お兄さんを思い出させたら意味無いでしょ」

「今のは不可抗力だよ……」

「誰が遅れて来るのか分かってるのだから、わざわざ外で待つ必要なんて無いというのに……。なんでお兄様がそのような辛いお役目を……。しかも機材で狭くなつた作業車で移動だなんて……。せめて移動の間くらいは、ゆつくりとお休みしていただきたかったというのに——」

「うう……。ずるいよしんちゃん、1人だけ逃げるなんて……」

窓を向きながらブツブツと呪詛のように呟く深雪を横目に、ほのかは思わずこの場にはいないクラスメイトに対する恨み節を口にした。

しんのすけがバスを出ていったのは、達也が外で真由美を待ち始めてから30分ほど経つた頃だった。その頃はまだ深雪の機嫌も表向きには変化が無かったので、ほのかは飲み物でも買いに行つたのだらうと特に気にしなかった。しかし今にして思えば、こうなることを敏感に察知して作業車に避難していたのだろう。

「誰もやりたくない仕事を率先して引き受けるのが、達也さんの良いところだと思う」

と、そのとき、今まで無言を貫いていた雫がふいに口を開いた。

そしてその言葉に、深雪がチラリと彼女へ視線を向けた。誰に向けるでもない不満や怒りで溢れていた彼女の目に、自分の兄が褒められたことへの嬉しさがほんの少しだけ見え隠れする。

「ここがチャンスだ、と雫が曇り掛ける。

「バスの中で待っていても文句を言う人はいなかったと思うけど、達

也さんは「選手の乗車を確認する」という仕事を立派にやり遂げたんだよ。どんな仕事でも手を抜かずに、しかもそれを当たり前のようにこなすなんて、なかなかできることじゃないよ」

「そうだよ！ 達也さんって、本当に素敵な人だよね！」

雫の言葉に乗っかる形で、ほのかも加勢に入った。その甲斐あつてか、深雪の表情は明らかに上機嫌なものとなり、「お兄様は変なところでお人好しだから……」と照れ臭そうに呟くその姿からは、つい先程まで無自覚に振りまいていた威圧感は一切に消え去っていた。

ほのかと雫は、ほっと溜息を胸を撫で下ろした。

こうして一高のバスに平和が訪れたのは、バスが高速道路に差し掛かったときだった。

もつとも、その平和もそう長くは続かなかつたのだが。

*

*

*

『怪人スネカジリー！ 未来ある若者をこれ以上二トにするのは止めろんだ！』

『ウケケケケツ！ こいつらは自分で二トになることを選んだのさ！ オレはそれを手伝ってやっただけに過ぎない！』

「おおつ！ 待ってたゾ、アクション仮面！」

「へえ、子供向けの特撮ってあまり観たこと無いけど、案外大人向けの風刺とか入ってるんだね」

「この時代のCGも、結構迫力があるんですねえ」

バスが高速道路に入ってしばらく経った頃、その後ろをピッタリとついていく作業車の中では、ちよつとした動画鑑賞会が行われていた。

しんのすけの携帯端末に映し出されているのは、やはりというべきかアクション仮面だった。百年以上続く超長寿シリーズだけあってその話数も膨大だが、有料の動画配信サービスによってその全てが視聴可能となっている。アクション仮面に限らず、第三次世界大戦以前のアニメや特撮は現代でも未だに根強い人気を誇っているのである。

しかし魔法科高校に通うエリートにとって百年近く前の特撮は新鮮で、しんのすけと体を寄せ合って画面を観る五十里とあずさの2人も結構夢中になっている。純粹に作品が面白いのはもちろん、百年近く前の映像技術や映像の端々に見える当時の流行や生活風景など、彼らの後ろから覗き見る達也も割と興味を惹かれ始めている。

と、熱心に画面を見つめていた五十里が、ふいに胸の辺りを押さえて表情を歪めた。

「おっ、どうしたの五十里くん？」

「揺れる車の中で観てたせいかな、ちよつと気分が……」

「大丈夫、五十里くん？ 酔い止めの薬、貸してあげよつか？」

「大丈夫だよ、中条さん。ちよつと遠くの景色を眺めてたら治ると思うから……」

「おっ、だったらアツチの方向に——」

「アツチ？ 何か綺麗な景色でもあるの？」

「いや、猫の死体が転がってたから見ない方が良いよつて教えようかと——」

「ちよつ！ しっかりして、五十里くんっ！」

ちよつとした紆余曲折はあったものの、五十里は窓際に移動して外の景色をぼんやりと眺め始めた。他の者は先程と同様に動画鑑賞会を再開し、手元の携帯端末に視線を向けている。

なので、その作業車にいる面々の中では“それ”に気付いたのは五十里が最も早かった。

「何だ、あの車……。様子が変だぞ……！」

「みんな！ あの車、様子が変だよ！」

一方、一高生を乗せたバスでは、何の偶然か花音が最も早く“それに気付いた”。

反対車線を走るそのオフロード車は、高速道路なので通常よりも速く走る他の車と比べても明らかにスピードを出していた。すると突然ブレーキを掛けながらバランスを崩したように蛇行を始め、路面に

火花を散らしながら中央分離帯のガード壁に激突、尚も勢いが止まらないその車はフワリと宙に浮き上がり、宙返りをしながらこちらの車線に飛び込んできたのである。

そうしてその車は、狙い澄ましたようにバスの真ん前に落ちた。

そして次の瞬間、その車から火の手が上がる。

「きゃああああああ！」

バスが咄嗟にブレーキを掛け、シートベルトをしていなかった生徒から悲鳴があがった。

しかしスピードの乗っていたバスが急に止まれるはずもなく、このままでは燃え盛る大型車に激突してしまう。

「吹っ飛べ！」

「消えろ！」

「止まって！」

だからだろう。バスにいた何人かの生徒が、自分の魔法で事態をどうにかしようとそれぞれ動き出し、そして一斉に車へ向けて魔法が掛けられた。

「馬鹿、止めろ！」

しかしこの行動が、事態をより悪化させた。同じ物に対して無秩序に魔法を重ね掛けしてしまうと、それぞれのサイオン波が干渉を起こして魔法による事象改変力が弱まってしまふという、いわばキャスト・ジャミングと同じことが起きてしまふのである。

この状況を打破するには、今あるすべての魔法を圧倒できるだけの事象改変力を持った魔法が必要だ。即座にそう判断した摩利が後ろの席に座る克人へと視線を向けると、彼も同じことを考えていたのか既にCADを構えて起動式を展開している。しかしキャスト・ジャミングにも似た状況下で炎と衝撃の両方に対処するというのは、さすがの克人でもかなり厳しいものに思える。

「私が火を消します！」

しかしそのとき、深雪が座席から立ち上がってCADを構えた。そのときには既に魔法の発動準備を終えていて、それを見た克人は即座に防壁の起動式を構築する。

「無茶だ、司波！　いくらおまえでも、こんなサイオンの嵐の中——」
摩利が止めようと声をあげた次の瞬間、彼女は自分の目の前で起きた出来事を信じられず、思わず絶句してしまった。

無秩序に発動していた魔法式の残骸が、何の前触れも無く綺麗に消失したのである。

そしてその直後、深雪の魔法が発動した。冷却魔法によって燃え盛る車が一瞬で常温へと戻り、鎮火した。

克人による防壁魔法がバスを包み込んだのは、更にその直後だった。バスと車は正面衝突し、車はバスが突っ込んだ勢いでみるみる潰れていくが、魔法に守られたバスには傷どころか衝撃すら伝わってこなかった。

「みんな、大丈夫？」

やがてバスが完全に停止した頃、真由美がバスにいる生徒全員に呼び掛けた。急ブレーキの衝撃で軽い怪我を負った生徒はいたが、幸いにも大会に影響するほどの重傷を負った者はいなかった。

「ありがとう、十文字くん！　深雪さんも、あの緊急時に適正かつ適度な魔法を構築するなんて、私達3年生でも難しいことよ」

「光栄です、会長。ですが上手く対処できたのは、市原先輩がバスに減速魔法を掛けてくださったおかげです。市原先輩、ありがとうございますました」

深雪が頭を下げると、鈴音も口元に笑みを浮かべて軽く頭を下げた。あくまで作戦スタッフである彼女の「縁の下の力持ち」とも呼べる仕事振りに、競技に出場する選手からも「全然気づかなかつた……」と感嘆の呟きが漏れる。

「それに比べて、千代田！　おまえは何だ！　真っ先に場を引つ掻き回してー！」

「でも、私が1番早かつたんですよ！」

「早ければ良いってもんじゃないだろ！　あのときは周りに声を掛けて、魔法の相克が起こらないように注意すべきだ！　そうでなくても、相克が起こった時点で魔法の発動をキャンセルする必要がある！

おまえは2年生なんだから、そういう判断をするべきだろ！」

「うう……、すみませんでした……」

すっかり落ち込んでしまった花音を、摩利はそれ以上責めることはしなかった。

そんなことよりも、彼女には気になることがあったからである。

——あれだけの魔法式を消したのは、いったい誰だ……？

摩利はその人物が真由美ではないかとも考えたが、すぐさまそれは否定された。彼女も魔法式をキャンセルする魔法を使えるが、彼女の場合は魔法式を撃ち抜く形式である。けっして今回のように、何の前触れも無く魔法式が霧散する方式ではない。アンテナナイトならば可能だろうが、軍事物質であるそれがこんな場所に存在するはずがない。

そんな疑問を頭に巡らせながら、摩利は窓の外へと目を遣った。あの車の傍に技術スタッフの乗った作業車が隣接され、生徒達が救助活動として車のドアを切り取っていた。とはいえ、あれだけの横転事故の末の炎上なのだから、ドライバーの生存は絶望的だろうが。

そしてそんな救助活動の後方で、現場記録のためにビデオカメラを回す達也の姿が目に入った。

——まさか、な。

ふと頭を過ぎった考えを、摩利は鼻で笑って否定した。

そして何と無しに現場を一通り見渡して、彼女は気づいた。

普段は騒がしく動き回るしんのすけが、作業車から降りずに遠くから生徒達の救助活動を眺めているだけであることに。

*

*

*

九校戦の会場となる富士演習場には、視察にきた文官や会議のために来日した高級士官などが宿泊するためのホテルがあり、代表選手や関係者はそこに寝泊まりすることになっている。民間の高級なホテルと変わらない外見をしているが一応軍の施設であり、さらに高校生の大会ということもあり、ドアマンや専従のポーターなどといった者はよほどVIPな来賓者でもない限り存在しない。

よって現在ホテルの入口前では、遠路はるばるやって来た選手や関係者達が自分達で車から大荷物を降ろし、そして自分達でそれを運ぶ光景が見られている。

「ほら、みんな！ 早く来ないと置いてくよ！」

そんな大勢の人で溢れかえる入口前を指して意気揚々と大股で歩くのは、タンクトップにホットパンツという健康的な肢体を惜しげもなく晒すファッションに身を包む少女・千葉エリカ。何も持たない身軽な腕をブンブンと大きく振り回し、後ろからついてくる面々を鼓舞するように呼び掛ける。

「おい、エリカ！ 自分の荷物くらい自分で持ちやがれ！」

そんな彼女のすぐ後ろを歩くのは、どう見ても彼の所持品ではない女物のバッグを含んだ大量の荷物を抱える少年・西城レオンハルト。両肩と両腕にのし掛かる重さに悪態を吐いているが、さすが鍛えているのか体がよろめくことは無くしっかりと大地を踏み締めて突き進んでいく。

「大丈夫、幹比古くん……？ 私も少しくらいは持てるよ？」

そんないつも騒がしい2人組から少し離れて歩くのは、キャミソールのアウターに随分と短いスカートと、露出こそエリカより少ないものの豊満な胸のせいで却って扇情的に見える格好をした少女・柴田美月。ちなみに彼女にその自覚は無く、エリカに「堅苦しいのは駄目だ」と唆された結果である。そして彼女の両手にも、持ってきたはずの自分の荷物は無い。

「平気だよ、柴田さん。これでも鍛えてるからね、これくらいの荷物は大丈夫さ」

そしてそんな彼女の隣で2人分の荷物を持つのは、つい最近E組の面々と連むようになった二科生・吉田幹比古。彼の言葉通り荷物を運ぶこと自体に苦は無さそうで、体をよろめかせるといった様子も見られない。

そんな彼に美月はお言葉に甘えることを決めたのかそれ以上は何も言わず、その代わり先頭を突き進むエリカへと呼び掛ける。

「それにしても、よくホテルの部屋が取れたね。ここって関係者以外

は泊まれないんでしょ？」

「そりゃアタシは関係者だもん。何てつたつて、〝千葉家〟だからね」
エリカが生まれた千葉家は、十師族を含む28の家柄に次ぐ位を持つ〝百家本流〟の1つに属する数字ナンバース付きだ。しかも千葉家は自己加速・加重魔法を用いた白兵戦技の名門であり、警察や陸軍の歩兵部隊に属する魔法師の大半が彼らの指導を受けている。

つまり実戦部門に関するコネという点では、ある意味十師族以上の権勢を有しているのである。

「それにしても、何か意外だな。エリカって、そういう実家の後ろ盾とか嫌なのかと思ってたぜ」

「アタシが嫌いなのは、〝千葉家の娘って色眼鏡で見られる〟ことだからね、コネは利用するためにあるんだから使わなきゃ損でしょ？」

レオの素直な疑問に、チツチツチツ、と指を横に振ってエリカは答えた。

と、そんな会話を交わしている内に、ホテルの入口を潜り抜けてロビーへと足を踏み入れた。夏の炎天下から程良くクーラーの効いた室内に移ったことで、4人の口から自然と溜息が漏れる。

ロビーを見渡してみると、既に到着した宿泊客によって休憩スペースや隣接するカフェはほとんど埋まっていた。国防軍の演習場だけあって交通の便が悪く、ここまで来るのにそれなりに苦労したこともあってか、チエックインする前に一息吐きたいという欲求が強いのだろう。実際それを目論んでいたエリカ達は、その混雑振りに秘かに溜息を吐いた。

仕方ない、先にチエックインを済ませておくか、とホテルのスタッフが並ぶカウンターへと歩き出そうとしたエリカ達の耳に、ホテルのスタッフらしき男性のこんな声が届いた。

「それでは野原様、私がお部屋までご案内させていただきます」

「……野原？」

このホテルでスタッフが荷物を運んだり部屋まで案内するということは、相手は相当のVIP。それだけでも興味を惹かれるが、その中で飛び出した名前がエリカにとって非常に聞き馴染みのあるもの

であれば、彼女が足を止めてそちらへ顔を向けるのも不思議ではなかった。

「いやあ、軍のホテルって聞いて構えてたけど、何かスゲエ豪華だな」「本当ねえ。噂には聞いてたけど結構大きな大会なのね、九校戦って」「そんな大会に出られるお兄ちゃんって、実は結構凄かったりして?」

そこにいるのは、髭が濃い代わりに若干頭部が寂しい四十代中頃の男性、ボリユームのあるブラウンの髪をした若干ふくよか気味な三代後半の女性、そして毛先がカールした明るいブラウンの髪をした十歳前後の少女。女性と少女の顔つきが似ていることから、3人は親子と思われる。

「いろんな色の制服を着た学生がいるね。全員、魔法科高校の人達かな?」

「そうだろうね。しかもこの大会に出るくらいだから、その中でも優秀な成績の人達ばかりだよ」

「つまり、エリート」

「そんな人達と戦うなんて、しんちゃん大丈夫なの?」

そしてその3人組に寄り添うのは、いずれもエリカ達と同じくらいの年齢らしき4人の子供。

どこか弱々しい印象の短髪の少年の疑問に、髪をきつちりセットしている聡明そうな少年が答え、高校生の平均身長よりもかなり高い体つきをした少年が非常にゆっくりな口調で補足をし、明るい茶色の長髪をツインテールにしている少女がここにはいない友人を心配している。

そしてその中で出てきた「しんちゃん」という単語で、エリカは確信した。

「あのっ!もしかして、野原しんのすけくんのご家族の皆さんですか?」

「——えっ?」

突然自分達に話し掛けてきた少女に、その場にいた7人が一斉に振り向いた。

第20話 「色々悩みの多いお年頃だゾ」

途中で「ハプニング」こそあったものの、第一高校生を乗せたバスと作業車は昼過ぎにホテルへと到着した。

他の宿泊客同様、ドアマンやポーターといったスタッフは用意されない。作業車に詰め込んだ大型機器はそのまま使用するため荷下ろしは無いが、小型の機器や工具などは部屋でもCADの微調整ができるよう運搬する必要がある。

その役目を買って出た達也が、手早くそれらを台車に載せて部屋まで押していく。そして兄が何かするとなれば妹の深雪がそれを手伝うのは半ば暗黙の了解なので、2人は自然に他の生徒達から離れることに成功した。

もつとも、そうやって2人きりになった彼らが繰り広げる会話は、けっして恋人のように甘いものではないのだが。

「やはり先程のあれは、単なる事故ではなかったのですね」

「ああ。あの自動車の跳び方は不自然だったからな、調べてみたら案の定、魔法の痕跡があった」

達也の言葉に、深雪の表情も自然と引き締まった。たとえ事故を最初から見ていた自分が魔法を知覚しなかったとしても、敬愛して止まない、そして何より彼の「異能」を知る彼女にとって、彼の言うことは絶対にも等しい。

「魔法が使われたのは3回。タイヤがパンクしたとき、車体がスピンのしたとき、そして車体が壁を越えて飛び上がったときだ。それらは全て、車内から行使されていた」

「……つまり魔法を使ったのは、その運転手自身だと?」

「そうだ。小規模な魔法を最小出力で瞬間的に発動したから、魔法式の残留サイオンすら検出されない。俺だって、あのときには気づかなかったほどだ。専門の訓練を積んだことで非常に高度な技術を身に付けたんだろう、「使い捨て」にするには惜しい腕前だった」

「卑劣な……!」

肩を微かに震わせて、深雪は憤りを顕わにした。それは犯人に対す

るズレた同情ではなく、犯人にそれを命じた首謀者の遣り口への怒りだった。

しかし彼女の優秀な頭脳は、数秒後にはその怒りを静めて首謀者の狙いを探る作業へとシフトしていた。優秀な工員を使い捨ててまで、なぜそいつらは自分達の乗ったバスに攻撃を仕掛けたのか。ターゲットは「バスに乗っていた誰か」なのか、あるいは「第一高校そのもの」なのか。今回の九校戦と何か関係はあるのか――

兄の意見を仰ごうと深雪は顔を隣へ向け、

「……………」

達也が視線を正面と台車の中間辺りでさ迷わせ、何やら考え込んでいることに気づいた。

「どうかなさいましたか、お兄様？」

「ん？ ああ、少し気になることがあってな……………」

「襲撃犯のことでしょうか？」

「いや、そちらも気になるんだが、しんのすけのことで少しな……………」

「しんちゃんに、何かあったんですか？」

深雪が尋ねると、達也は数秒だけ逡巡した後、口を開いた。

「バスが襲撃されてから、何だか元気が無いようだな。バスが出発したときは明らかにしゃいでいた様子だったんだが、それが起こってからはほとんど口数も無く外ばかり眺めるようになってしまったんだ」

「それは…………、せっかく楽しみにしていた友人同士でのバス移動に水を差されたから、ということでしょうか？」

「いや、そうではない。――もしかしたら、あの襲撃事件がショックだったのかもしれないな」

達也の推測に、彼の言うことが絶対であるはずの深雪は要領を得ないとはばかりに首を傾げた。

「ですが、九重先生が以前仰っていたように、しんちゃんは時間のループに囚われている間、それこそ国家存亡をも左右するほどの重大事件に数多く関わっていたはずですよ。この程度の事件には、ある程度の耐性があるのでは？」

「事件自体に対する耐性は、確かにあるかもしれない。——だがしのすけはおそらく、目の前で人が死ぬことに対する耐性はほとんど無いと思われる」

それは八雲からしのすけに関する情報を聞いた後、達也が個人的に調べていく過程で知ったことだった。

当時しのすけが関わったと見られる事件は一般的に公にされていない事件も数多くあったが、八雲から直接聞いたり、国防軍の伝手を使うことである程度の情報収集には成功した。もちろん全ての事件を把握することなど不可能ではあるが、その一端を知る度に、様々な事情があるとはいえ当時5歳児のしのすけがこれほどまでの大事件を次々と解決していったという事実には、達也は驚嘆を覚えるほか無かった。

そうして調べていく内に、達也は気づいた。

“魔人”と呼ばれる存在を利用して世界征服を企む悪の組織、理想の世界を作るために開発した匂いによる集団洗脳、果ては巨大ロボットの侵攻など様々な事件が起こってはいるが、それらによる死者が驚くほどに少ないことに。

「時には全てを覚悟して自殺を図った首謀者を説得し、思い留まらせたこともあるほどだ。おそらく今まで自分の目の前で誰かが死ぬという経験が、少なくとも耐性が付くほどには無かったんだろう。——俄には、とても信じられない話だがな」

最後にそう呟いたときの達也の声は、やけに実感が込められているように思えた。

しかし深雪はそれを指摘することはなく、代わりに別の言葉を口にする。

「しかしそうだとすると、しんちゃんのメンタルが少し心配ですね……」

「こういうときは、誰かがしのすけを精神的に支えてやれば良いんだが……」

おそらく自分では、その役割を果たすことは難しいだろう。

少なくとも、死人を目の前にしても動揺の1つも無いどころか、そ

の背後に潜む首謀者に考えを巡らせているような自分では。達也が言外に述べたそれに、深雪は気づかないフリをした。

* * *

第一高校を乗せたバスが会場に向かう最中に「交通事故」に巻き込まれたというニュースは、発生から30分もしない頃には大会関係者の耳に入っていた。まさか開催前に怪我人が、と関係者は顔を青くしたらしいが、生徒達の迅速な対応によつて彼らの中には怪我人おらず、ちよつとした事情聴取の後にバスは再び出発したという続報を聞き安堵の溜息を漏らしたという。

とはいえ、それはあくまで彼らと直接的な面識の無い人々の感想だ。第一高校に親しい間柄の者がいる人間にとつては、たとえ無事だと分かっているても心配せずにはいられない。

「ああお劳しや、しん様！ あいが今行きますわ！」

「お待ちください、お嬢様！ これから今夜の懇親会に向けての打ち合わせが——！」

先程から大声をあげてホテルの中を走り回っているのは、如何にも高級そうな臙脂色の服を身に纏う黒髪の少女・酔乙女あい。そして彼女を後ろから追い掛けるのは、黒い髪・黒いスーツ・黒いサングラスと全身黒の男。口振りからも分かる通り彼は彼女の従者であり、名前も「黒磯」とこれまた黒かった。

移動中の車内で事故のことを知った彼女は、VIP専用の入口からホテルに入るや否や、この目でしんのすけの無事を確かめるべく走り出していた。第一高校生は既に到着しているようだがその中に彼の姿は無く、なかなか想い人に会えない自分の境遇を演劇のヒロインか何かに重ね合わせて舞い上がっていることは否めない。

当然ながら、そんな彼女は他の宿泊客や従業員にとつて注目の的だった。大きな声に顔をしかめて彼女の方を向き、彼女の思わぬ美貌に心をときめかせ、そして知識のある者は彼女が酔乙女ホールディングスの令嬢であることに気づき驚愕する、といった光景が自分の周り

で何十回と繰り返されていることに、当の本人はまったく気づいていない。

そんなこんなで走り回っている内に2人はやがて建物を飛び出し、裏手にある草木が鬱蒼と生い茂る場所にまでやって来ていた。もはやスタッフさえ通るかどうかという場所なのだが、他にしんのすけがいるとすればもはやこういった場所しかない、という考えもあつての行動だ。

「お嬢様！ あちらに！」

と、後ろを走る黒磯の呼び掛けに、あいがほぼ反射的にそちらへ顔を向けた。

その瞬間、木々の僅かな隙間を縫って現れたその姿に、あいは元々大きな両目をさらに大きく開いた。

「——しん様っ！」

それはまさしく、あいが探し求めていた人物そのものだった。生まれたときからのトレードマークである太くて凛々しい眉毛は健在だが、優しげに目を細める穏やかな笑みのおかげか暑苦しくはなく、むしろ爽やかですらある。服装も第一高校規定の制服だが、今の彼女にはどんな華美な礼装よりも素晴らしく見えた。

しかし気になるのは、彼の傍に寄り添うようにして歩く、光の加減で青く見えるショートヘアに女性用スーツをキツチリと着こなす凛とした美女である。爽やかな笑みを惜しげも無く振りまいて喋る彼の様子から、その女性のことを甚く気に入っていることが分かる。確かにしんのすけは昔から年上の美女が好きだったので不思議ではないのだが、その女性も気を許した雰囲気ですれに応えているためナンパで知り合った程度の仲ではないだろう。

とはいえ、愛しの人物にようやく出会えた喜びでそれどころではなかったあいは、満面の笑みで彼の下へと駆け寄っていった。それに気づいたスーツ姿の美女が険しい表情で1歩足を踏み出そうとして、隣にいる彼に肩を軽く叩かれて止められるという一幕があったが、彼女の足は止まることなく2人の目の前にまで躍り出た。

「しん様っ、ご無事で何よりですわっ！ 交通事故に巻き込まれたと

聞いて、あい、とても心配したんですのよ！」

そうしてあいは彼の手を取って包み込むように自分の両手を重ねると、頬を紅く染めて瞳を潤ませながら喜びを爆発させた。

誰もが認める文句無し的美少女からそんなことを言われれば、思春期真っ只中の少年ならば動揺の1つはしてもおかしくないだろう。しかし彼がそういった動揺を見せることは無く、むしろその太い眉を困ったように八の字にして僅かに首を傾げていた。そしてそんな彼の隣では、スーツ姿の美女があいの一挙手一投足を見逃すまいとほとんど睨みつけるように見つめている。

おかしい。普段のしんのすけならば迷惑だと手を振り払う程度はしそうなものだし、そもそも彼はこんなに爽やかな笑顔はしない。

そんなあいの困惑を感じ取ったのか、目の前にいるその少年は爽やかな笑みを保ったまま口を開いてこう言った。

「ひよつとして、しんちゃんのお知り合いの方でしょうか？」

その問い掛けで確信したのか、あれだけ興奮していたのが嘘だったかのように冷静な表情に戻ったあいは、パツと彼から手を離して数歩後退ると、深々と腰が直角に折れ曲がるほど深いお辞儀をした。

「大変申し訳ございません。私が探していた人とあまりにも似ていたので、早とちりをしてしまいました」

「大丈夫ですよ、僕は気にしていませんので。——えっと、酔乙女ホルディングスの酔乙女あいさんですよね？」

「まあ！ 私のことをご存知だなんてとても光栄ですわ、スノケシ王子！」

「おや、こんな美しい女性に名前を憶えてもらえるなんて、こちらこそ光栄ですよ」

爽やかな笑みを浮かべて歯の浮くような台詞を言うスノケシに對し、彼がしんのすけではないことを知ったあいは照れを微塵も見せずにニッコリと笑みを浮かべるのみだった。

「ところで先程、しんちゃんを探していたようですが」

「はい。第一高校のバスがここに向かう途中で事故に遭ったことはご存知でしょうか？」

「ええ、こちらの彼女から聞きました」

スンノケシはそう言つて、隣の美女——ルルへと顔を向けた。上流階級に属する者同士で会話をしているとき従者はいないものとするのが通例であるため、いきなり話を振られたルルは一瞬だけ驚きで目を見開き、しかしすぐに平静な表情へと戻つて軽く頭を下げる。

「成程、それで居ても立つても居られなかったというわけですね。そこまで心配してもらえらるなんて、しんちゃんは素晴らしいご友人をお持ちのようですね」

「……いいえ、私としん様は『ご友人』ではなく、将来を約束し合った『婚約者』でございます！」

「何と！ それは実にめでたい！ ——こうして今回こちらにいらつしやつたのも、彼の雄姿をその目で見届けるためですか？」

「ええ、もちろん！ 王子も、でしょうか？」

「はい。彼とは小さい頃に色々あつて仲良くなりました、今回こうしてやつて来た次第です。もっとも、下手な勘繰りを避けるために情報はできるだけ規制して、大会中も自由に歩くこともできないのが」

「それはそれは……、心中お察し致します。——ん？ それでは今は、どうしてこちらに？」

スンノケシの言葉とは裏腹に、今の彼はたった一人しか護衛を付けず自由に外を出歩いているように見える。もしかしたらあいが気づいていないだけで他にも護衛がいるのかもしれないが、それにしても一国の王子にしては警備が手薄に過ぎる。

と、あいの指摘に、彼は悪戯がバレたかのように笑みを漏らして肩を竦めた。

「いえ、丁度良いところに、僕の体にピッタリの服を着た人がやつて来たものですから……。久し振りに再会したということもあつて、どうにも悪戯心が擽られたというか……」

スンノケシはそう言いながら、あいに見せるように自分の着ている服を軽く引つ張つてみせた。

それを数秒眺めていた彼女は、唐突に目を見開いて彼の顔へとその

視線を向ける。

「それって、つまり——」

「はい、お察しの通りです」

頷いて答えるスンノケシに、あいは安心したように大きな溜息を吐いた。

*

*

*

大型空港や高級百貨店、また高級なホテルの場合、一般客が使うような待合エリアとは別に特別仕様のラウンジが用意されていることがある。

一般のそれと比べて豪華なインテリアが並び、通信機器や様々な新聞雑誌が取り揃えられ、ソフトドリンクやアルコール、さらにはスイーツやカレーなどの軽食が用意されているその部屋は、上級クラスの顧客や運営会社の上級会員などが主な利用者となっている。また公にはされていないが、国会議員や取引先大手企業の経営幹部といった要人のためのラウンジが別に設置されている場合もある。

達也たちが現在いるこのホテルにも、そんな国内外VIP向けのラウンジが極秘に存在している。食事時以外に軽食や酒を口にしたいとき、あるいは自室に客を招くことを好まないVIPが会合に使用することを主な目的としたその部屋は、当然ながら案内板に場所が記載されているはずもなく、最初からその場所を知ったうえで目指さなければまず辿り着けない構造になっている。

そんなラウンジには現在、2人の利用客がいる。

1人は、かなりの歳に見えるのに背中中はピンとまっすぐ立っており、スリーピース・スーツを隙無く着こなした老人・九島烈。白髪を綺麗に撫でつけているため見た目より若々しい印象を受ける彼は、この国に十師族という序列を確立し、20年ほど前までは世界最強の魔法師の1人と目されていたほどの魔法師だ。そろそろ90歳に差し掛かる彼だが、元国防陸軍の軍人として現在も国防軍魔法顧問という役職に就く彼の、魔法師のコミュニケーションに与える影響は計り知れない。

い。

そしてもう1人は、彼とは対照的に10代半ばの少年だ。かなり太くて凛々しい眉を持つ彼の服装は、ヘッドスカーフに首から足元まで覆う薄手のトーブと、まるで東南アジア系の民族衣装のようである。そんな彼は現在、ラウンジに用意された軽食やドリンクを、まるで何日も絶食していたかのように猛烈な勢いで口の中に放り込んでいく。VIP専用のラウンジを利用できるほどの上流階級が見ればまず間違いない眉を顰める光景だが、それを目の当たりにしている烈は興味深そうに口元に笑みを携えて彼を観察していた。

やがて彼の食事が一段落したのを見計らって、烈が口を開いた。

「君はこういう場所を利用するのは初めてかね、野原しんのすけくん？」

「おおつ、初めてだゾ！ タダで食べ放題だなんて太腿だゾ！」

「……ひよつとして、太っ腹と言いたいのかね？」

「おおつ、そうとも言うー」

その少年・しんのすけがタメ口で話す度に、ラウンジのスタッフがハラハラした面持ちで烈の様子を窺っている。しかし烈はもちろん気分を害してなどおらず、むしろそんなスタッフの反応を半分楽しんでる節がある。

「それにしても、ホテルの中を自由気儘に歩いて偶然この部屋に辿り着き、旧友である一国の王子と再会するとは……。やはり君は、そういうった星の下に生まれた存在なのかもしれないな」

「おおつ？ 九島爺ちゃん、オラのこと知ってるの？」

「ああ、とてもよく知っていると。私が政府の研究機関で魔法師となるための実験を受けていた頃から、君達の名前はよく聞いていたからね。正直なところ、こうして実際に会うことができ嬉しく思っているよ」

「ほうほう、オラってそんなに有名人なのかあ」

「ああ、そうだとも。もつとも、一般的にはほとんど知られてないがね」

烈の注釈に、しんのすけは「なーんだ」とガツカリした様子だった。

一般的ではない人々に名前が知られていることによる影響力については、おそらく気づいていない。

「それにしても、今の君は第一高校の選手としてここに来たんだろう？ 準備とかはしなくても大丈夫なのかね？」

「うーん、どうなんだろ……？ まあ大丈夫でしょ、多分。——そんなことより、オラは今ユーウツな気分なんだゾ」

「ほう、君ほどの人間でもそういったことがあるのか……。良かったら、私に話してみると良い。それなりに人生経験は積んでいるはずだから、多少なりともアドバイスできるかもしれない」

確かに90歳近い老人の人生経験が豊富なのは否定しようのない事実だが、実際のところは時間のループに囚われていた見た目高校生のしんのすけの方が長生きだったりする。

しかしそういったことに無頓着なしんのすけは特にツツコミを入れることも無く、素直にそれを烈に話し始めた。

「九島爺ちゃんはさ、自分の目の前で誰かが死んじゃったことってある？」

「ああ。私は元々軍人として戦場に出たこともあるからね、敵味方問わずそんな光景は日常茶飯事だったよ。それにこんな歳だからね、天寿を全うした古くからの友人も少なくない」

「誰かが死ぬのって、慣れちゃった？」

「……どうだろうか、確かに昔に比べて心を乱さなくなったのは確かだが」

「ふーん……」

しんのすけの反応は自分から尋ねたわりには薄いものだったが、烈がそれを気にする様子は無かった。

「……君がそこまで気落ちしているのは、ここに来る途中に巻き込まれた事故についてかな？」

「おっ、よく分かったね。そうだゾ、運転してた人が死んじゃったんだゾ」

「そうか。——自分の目の前で誰かが死ぬのは、今回が初めてかな？」
「そんなことないゾ。でも、何回見ても全然慣れない。やっぱり、誰か

が死ぬのは嫌だゾ」

そう呟くしんのすけの視線は、豪華なシャンデリアがぶら下がる天井へと向けられていた。しかしその目つきはどこかぼんやりしたもので、天井や照明を眺めているというよりは、その向こう側に広がっているであろう透き通るように青い空を思い浮かべているように思える。

そんな彼を眺めながら、烈は「ふむ」と少しの間考える素振りをした。

「魔法科高校に入学したということは、将来は魔法師になりたいんだろう？　君はどうして魔法師になろうと思ったのかな？」

「魔法師って、綺麗なお姉さんがいっぱいいるでしょ？　だから同じ魔法師になれば、綺麗なお姉さんといっぱいお知り合いになれるって聞いたゾ！」

「な、成程……」

あまりにもあんな理由に、烈の笑みが僅かに引き攣った。確かに魔法力の高い魔法師ほど肉体が左右対称に近くなる、つまり見目麗しくなる傾向にあるため間違ではないが、だからといって魔法師界の重鎮に対して素直にそれを暴露する胆力はさすがの一言だ。

「具体的にどんな魔法師になりたいとか、明確なビジョンはないのかね？」

「どんな魔法師、かあ……。アクション仮面みたいなヒーローになりたいとは思ってるゾ」

「ほう、ヒーローか。実に素晴らしいと思う。——しかし誰かを助けるためには、綺麗事ばかりではいけないことも時にはあるだろう。今日みたいに目の前で人が死ぬこともあるだろうし、もしかしたら君自身が手を下すことになるかもしれない」

「……そんなの、オラはやりたくないゾ」

口を尖らせて吐き捨てるようにそう言うしんのすけは、小さい子供が駄々をこねているようにしか見えなかった。

しかし烈は、それを嗤うことも窘めることもしなかった。

「ならば考えるしかない。自分が何をしたいのか、そのためには何を

すれば良いのか」

「……………」

「まだまだ君の人生は長い、ゆっくり考えるのも良いだろう。——と
りあえず今は、旧友との再会を楽しむことに専念するのも良いのでは
ないかな」

烈がそう言ってニヤリと笑うのと同時、

「しん様あっ!」

入口のドアが勢いよく開かれて、少々髪の毛の乱れたあいが叫びながら
部屋に入ってきた。彼女の背後には、しんのすけの制服に身を包むス
ンノケシの苦笑いがある。

ズガズガと大股で近づいてくるあいを見たしんのすけは、

「……………うへえ」

心底うんざりしている、と顔を見ただけで分かるほどに引いてい
た。

そしてそれを見ていた烈は、クスクスと楽しそうに笑みを漏らして
いた。

第21話 「懇親会に参加するゾ その1」

数時間もあれば会場に行ける第一高校がわざわざ開会2日前に会場入りするのは、その日の夜に開かれる「懇親会」に参加するためである。

その名の通り『これから大会に参加する代表選手同士で軽い食事と共に親睦を深めましょう』という趣旨のものであるが、これから鎬を削る相手と呑気に親睦を深められるわけもなく、むしろ互いに牽制をかまし合う「前哨戦」のような雰囲気になるのだ、とは過去に参加経験のある真由美の弁だった。「だからあんまり参加したくないのよねえ」という彼女の呟きを、達也は黙殺して聞かなかったことにした。

ちなみにその達也は、第一高校に与えられた控え室にて憂鬱な表情を浮かべながらブレザーに袖を通していた。そのブレザーには八枚花弁のエンブレムが刺繍されており、彼のすぐ傍では深雪が恍惚とした表情でそれを眺めている。

「あの、渡辺先輩……。別に俺は、普段のブレザーでも良いのですが……」

「何を言ってるんだ。正面から校章が見えないと、一高生だと分かってもらえないぞ?」

「いや、校章よりも色で区別がつくと思うんですが……」

普段なら妬みの視線を一身に受けても堂々としている達也がそわそわと落ち着かなくしているのを見て、摩利は思わずプツと噴き出してしまった。

「予備のブレザーだったが、どうやらサイズは大丈夫なようだな。しかしせっかくの機会なんだから、新調すれば良かったんじゃないか?」

「2回しか着ないのに、そんなの勿体なさ過ぎますよ。ワッペンみたいに取り外せるならまだしも、これ刺繍ですからね……」

「いや、2回とは限らないぞ? 秋には論文コンペもあるし、君が一科に転籍しないとも限らないんだからな」

含みのある笑みと共にそう言った摩利に、達也は「そんなことはあ

り得ないと思えますけどね」と呟いた。

すると深雪が、エンブレムの刺繍が施された達也の左胸の辺りに手を差し伸べながら、

「すみません、お兄様。時間があれば、私がお直ししたのですが……」
「いや、大丈夫だ。すまないな、気を遣わせてしまった」

控え室には、当然他の一高代表メンバーの姿もある。そんな人目のつく場所で、達也と深雪はまるで恋人のように互いの顔を見つめ合っていた。

「あらあら、また兄妹で妙な雰囲気を作っているわよ、しんちゃん」
「あら本当ね奥さん、最近の子は人目も憚らずにイチヤイチャするから嫌だわあ」

そんな2人に、真由美としんのすけがニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべて近づいてきた。特にしんのすけは変に腰をクネクネさせて、ご近所の奥様方との井戸端会議ごっこに興じている。

「いや、2人共……。『雰囲気』って何ですか……」
「そんな、雰囲気だなんて……。私とお兄様は血の繋がった兄妹であって、決してそのようなことは——」

「深雪?。なんで照れてるんだ?」

「まあ、しんちゃん。あの人ったら、女の子にあそこまでさせておいてあの態度よ?」

「相手がベタ惚れだから、少しくらい冷たくしても大丈夫だと思ってるのかしら?。ああいうタイプほど、いざ相手が心変わりしたときに自分を棚上げて相手を責めるのよねえ」

「しんのすけ、変な言い掛かりはよせ」

達也が少しだけ凄んでそう言うと、しんのすけは「ほっほーい、逃げろー」と素早い動きで即座にその場を離れていった。彼も達也と同じく普段は着慣れなく運動性にも難のあるブレザーを着ているのだが、すたこらさつさと走るその動きに淀みは無い。

そんな彼の後ろ姿を達也は呆れて、女子3人は苦笑いで見送った。

と、真由美が形の整った眉を心配そうに寄せて、司波兄妹へと向き直る。

「しんちゃん、何となく本調子に戻ってきた感じかしら?」

「……やはり、会長も気づいていましたか」

「そりゃ、曲がりなりにも生徒会長ですもの。でも結局、しんちゃんはどこにいたの?」

「いつの間にか戻っていたので、俺達には分かりません。それとなく尋ねてみても、はぐらかされてばかりで」

達也の答えに、真由美は再び彼らから視線を外してしんのすけへと向けた。この場から逃げた彼はほのかと雫にターゲットを定めたように、何か言われたらしいほのかが頬を紅くして大声をあげ、彼がそれを見て楽しそうに笑い、雫は何を考えているのか読み取りづらい無表情で2人を眺める、という光景が繰り広げられていた。

「そうよね。目の前で誰かが死んだら、大なり小なりショックを受けるものよね。しんちゃんは普段が普段だから気づきにくいけど、本当はここにいる誰よりも『普通の子』なのかもね」

「目の前の出来事に動揺せず冷静に対処するというのは、魔法師になるために必要な要素です」

「ああ、確かにその通りだ。とはいえ、高校1年で実戦を意識した行動を取れる生徒の方が珍しいんだがな」

笑い声混じりの摩利の言葉は、皆がパニックになる中で即座に事態収束に動いた深雪を指すのか、はたまたその裏で何やら動いていたであろう達也を指すのか。

どちらにしても、達也の反応は視線を逸らしての無視だけだ。

と、ふいに真由美が真面目な表情に切り替えると、その場にいる全員の注目を集めるために大きく1回手を叩いた。

「さてと、そろそろ時間だから行きましょうか。懇親会といっても対戦相手の初顔合わせよ、くれぐれも誉められるようなことはしないようにね」

真由美の言葉に、その場にいたほぼ全員が表情を引き締めた。もちろん、例外はしんのすけただ1人である。

*

*

*

懇親会は全員出席が建前とはいえ、様々な理由をつけて欠席する者もいないわけではない。しかしそれでも参加者は選手だけでも300人以上という大規模なものになり、当然ながら会場もこのホテルで最も広い宴会場が使われる。

つまりそれだけ多くのスタッフが必要ということであり、さらに来賓者の対応など実際に会場で動く者以外のスタッフのことも考えると、ホテルの専従スタッフや基地からの応援だけではとても賄いきれない。よって明らかにアルバイトとも思える若者が会場内を歩き回っていたとしても、ある程度予想していた達也にとっては驚くべきことではない、はずだった。

「お飲み物は如何ですか、ご主人様？」

「……何をやっているんだ、エリカ？」

「……驚いたわ、エリカも来ていたのね」

言葉とは裏腹にニヤニヤと笑みを浮かべながら問い掛けるその少女に、達也は苦々しい表情を隠すこともせず、にそう問い返し、深雪はただ純粹に驚きの表情を見せていた。

会場に入っすぐに顔を合わせたのは、丈の短いヴィクトリア調ドレス風味の制服、つまりメイドを連想させる服装に身を包んだエリカだった。普段は年相応の澆刺とした印象の彼女だが、場所柄を考えてか随分と大人びたメイクをしており、これだけ近くにいるのにまるで20歳を過ぎた大人の女性に見える。

突然の知り合いの登場に少々面食らったものの、次の瞬間には彼の優秀な頭脳は彼女がここにいる理由を導き出していた。実家のコネを使ってホテルの部屋を確保するのはともかく、懇親会にスタッフとして潜り込むのはコネの使い方としてどうなのだろう、と些かの疑問は残るが。

「あっはっはっ、サプライズ成功ってところね。ねねね、どう、達也くん？」

エリカは満足そうに笑いながら、達也の前でクルリと一回転してみた。フリルで飾られたスカートが、風に乗ってフワリと浮かび上が

る。

服の感想を求めているのか、と達也が口を開きかけるも、深雪が横から口を挟んできた。

「駄目よ、エリカ。お兄様は相手の中身を見ているから、表面的なことに囚われたりしないわ」

「そっかー。達也くんはコスプレに興味無いか」

「コスプレ？ 誰かに言われたの？」

「ミキがね。すっかりお仕置きしてやったけど」

拳をグツと握り締めてそう言うエリカに、達也は心の中で幹比古に同情した。

しかし「ミキ」という単語を初めて聞く深雪は首を傾げ、それに気づいた達也が横から説明する。

「俺達と同じクラスの吉田幹比古だ。名前だけは聞き覚えがあるんじゃないか？」

「ああ、この前のテストで筆記3位だった方ですね」

と、そうしている内に、エリカの存在に気づいたらしいしんのすけが司波兄妹の背後から近づいてきた。

「おおっ、エリカちゃん。随分と化けたね。まさに「馬子にも衣装」って感じ」

「ミキよりも数段ひどい感想だね、しんちゃん！」

声をあげてツツコミを入れるエリカに、その反応が面白いのかへらへらと笑うしんのすけ。幹比古よりも数段ひどい感想とか言いながら彼に対してお仕置きをしないのは、幹比古が幼馴染みという遠慮のいらぬ関係だからか、それともしんのすけのキャラクターによるものか、はたまた別の要因か。

と、達也がそんな無意味な考察をしていると、しんのすけを見るエリカの口角がほんの微かに上がったことに気がついた。

「そうだ！ しんちゃんの分の飲み物、持ってきてあげるね。何が良い？」

「おおっ？ それじゃ「プスライト」お願い」

「はいはい。お2人はどうする？」

「俺は何でも構わないが」

「私も特には」

「オツケー。それじゃ待っててね」

エリカはそう言い残すと、飲み物が置かれたテーブルへと早足で歩いていった。大勢の人がそれぞれのタイミングで行き交う会場内は移動するのも一苦労なほどの盛況ぶりだが、何の苦も無くスルスルと人混みを擦り抜けていくその様子が彼女の運動能力の高さを物語っている。

そして1分も経たない内に、3人分のグラスを載せたトレーを片手にエリカが戻ってきた。ちなみにトレーにはグラスだけでなく、クラッカーにスライスしたカマンベールチーズとトマトを乗せてオリーブオイルを垂らした軽食も一緒に載せられている。

「おおっ！ テレビとかでよく見るけど、名前がよく分かんないヤツだ！」

「あははっ、カナツペね。ご自由にどうぞ」

「ほっほーい、いつてきまーす！」

「それを言うなら、いただきます」ね」

しんのすけは嬉々としてカナツペに手を伸ばし、美味しそうにそれを何個も一気に頬張った。そしてそれを、エリカが持ってきたレモンライム風味の炭酸飲料「プスライト」で一気に胃袋へと流し込む。

明らかに他の代表選手よりも勢いよく飲食するしんのすけを横目に、達也はエリカからグラスを受け取りながら別の疑問を口にする。

「エリカと幹比古がいるってことは、レオと美月もいるのか？」

「うん、そう。アタシとミキはこっち、2人は裏方でそれぞれ力仕事と皿洗い」

今の時代にもなると、倉庫からの出し入れから食器の洗浄まで大部が機械によって行われる。故に機械に強いことが裏方の条件なのだ、あの2人ならばそちらの心配は無いだろう。

と、カナツペを1人で全部食べ終えたしんのすけが横から会話に割り込んできた。

「ねえねえ、ここのバイトって時給良いの？」

「国にとって大事な九校戦のイベントだからね、時給は良いんじゃないかな。アタシ達はここの手伝いを条件に宿泊させてもらってるから給料無いけど」

「おおつ、良いなあ。オラもバイトしたいゾ」

「何か欲しい物でもあるの？」

「今度、アクション仮面の新しいフィギュアが出るんだゾ」

「アクション仮面かあ、アタシも名前くらいは聞いたことあるわ。でもアレって随分長く続いているけど、さすがにネタが尽きてくるんじゃないの？」

「そんなこと無いゾ！ 敵がどんどんパワーアップするからアクション仮面も新しい技をどんどん憶えるし、その時代によって時事ネタとか風刺とかもあるんだゾ！ それに『アクション仮面ムスメ』みたいな外伝もあるし、他にも北春日部博士とかミミ子ちゃんが主人公のスピントフが——」

ベラベラと饒舌に語りまくるしんのすけに、自分で話を振っておきながらエリカは若干顔を引き攣らせていた。

そんな彼女に達也は半分同情するような視線を向けながら、自身の背後で何人も的人物がコソコソと集まってきているのを気配で感じた。おそらく深雪もそれに気づいているようで、先程からチラチラと後ろを盗み見ているのが分かる。

そして最後の1人が動きを止めた、そのとき、

「さてと、しんちゃん。しんちゃんに会いたいわって人達がいるんだけど」

「えっ？ オラに？」

「そうそう。後ろを振り返ってみて」

そうして聞こえてきたエリカの声に、名指しされたしんのすけだけでなく、達也と深雪も一緒に振り返った。

そこにいたのは、全部で7人。

髭が濃い代わりに若干頭部が寂しい四十代中頃の男性・野原ひろし。

ボリュームのあるブラウンの髪をした若干ふくよか気味な三十代

後半の女性・野原みさえ。

毛先がカールした明るいブラウンの髪をした十歳前後の少女・野原ひまわり。

どこか弱々しい印象の短髪の少年・佐藤マサオ。

髪をきつちりセットしている聡明そうな少年・風間トオル。

高校生の平均身長よりかなり高い体つきをした少年・ボー。

明るい茶色の長髪をツインテールにしている少女・桜田ネネ。

いずれも給仕服に身を包んだ彼らの姿を見た途端、しんのすけが驚きの声をあげた。

「父ちゃん！ 母ちゃん！ ひま！ 風間くん！ ボーちゃん！ ネネちゃん！」

「ちよつとしんちゃん！ 僕が抜けてるんだけど！」

短髪の少年・マサオが真つ先にツツコミを入れ、それを皮切りに7人が一斉にしんのすけへと駆け寄っていった。

「久し振りだな、しんのすけ！ 随分と立派になっちまって！」

「あんだ、ちゃんどご飯食べてるんでしょうね？ 一人暮らしだからってお菓子ばかり食べてたら承知しないんだからね」

「ねえねえお兄ちゃん、彼女とかってもう作ったの？ 今度ひまにも紹介してよー！」

「凄いなあしんちゃん、本当に魔法使えるんだあ」

「そりやそうだよ、マサオくん。じゃなかったら今ここにはいないって」

「しんちゃん、九校戦出場おめでとう」

「でもまあ、その制服は何かしんちゃんに似合っていないけどねえ」

いくらここが懇親会で選手同士が談笑することが目的とはいえ、ここまで一斉に捲し立てるのはさすがに目立つ。しかもそれが選手ではなく給仕スタッフとなれば、白い目で彼らを睨みつける者もちらほらと見受けられる。

しかし彼らはそんなことを気にする素振りも無く、久し振りに顔を合わせたしんのすけにあれこれ話し掛けていた。

そして当のしんのすけも、

「んもう！ そんなにオラと喋りたいだなんて、オラってやつぱりモテだなあ！」

口角を吊り上げる独特の笑みを浮かべながら、実に満足そうにそれに応えていた。

幹比古は会場の隅っこで目立たないようにしながら、会場全体を見渡すように眺めていた。

豪華な料理に舌鼓を打っている者、仲の良い友人と楽しく語らっている者、ここぞとばかりに他校の気になる生徒に話し掛ける者――。それぞれ楽しみ方は違うが、皆が今この瞬間をめいっばい楽しんでいるように見える。

対して、自分はどうかだろうか。

魔法科高校に入学こそできたものの、実技の成績が不十分なために二科行き。九校戦の代表選手として選ばれることもなく、せいぜい裏方として懇親会の会場に潜り込むのが関の山。

――「行つてこい、幹比古。そして見てくるんだ、本来自分が立っていたはずの場所を」

ふいに彼の脳裏に、一昨日父親から言われた言葉を思い出した。ぎりつ、と食いしばった歯が音をたてる。

と、同じテーブルに自然と同じ学校の生徒達が集まる会場の中で、自分と同じく給仕服を身に纏ったスタッフが大勢1ヶ所に集まっているのに気づき、そちらへと目を凝らした。

ホテルのロビーで知り合った例の7人グループと、クラスメイトを通して最近顔見知りになった一科生の生徒が仲良く談笑している。傍目には（スタッフが仕事中に談笑することへの違和感はあるけど）何てことない普通の光景だが、それを見ていた幹比古は眩しそうに目を細めた。

ひろし達とは知り合つて間も無い幹比古だが、彼らの中にしんのすけのように魔法の資質を持った者は1人もいないことには既に気づいていた。この1世紀の間で魔法師の家系が確立される程度には魔

法の才能と血縁は深い関係にあるが、極稀に一般的な家系から突然変異的に魔法の才能に恵まれた者が現れることもある。もつともしんのすけほどの実力を持つことはまず無く、実戦的なレベルに達していない場合がほとんどだ。

しかしその程度でしかなかったとしても、一般的な人からしたら未知の力である魔法というのは恐怖の対象だ。魔法の才能に目覚めたばかりに他の家族との関係が悪くなり、疎遠になってしまったというエピソードは枚挙に暇が無い。

だがしんのすけとその家族・幼馴染の様子を見る限り、その心配はまったく無さそうだ。仲睦まじく談笑するその光景には、魔法師とそれ以外の人々との隔たりや壁などといったものは微塵も感じさせない。

「まったく、君が羨ましいよ——」

ぽつりと零れた幹比古の呟きは、紛れもなく本音だった。

一方、先程までしんのすけと会話していたエリカ達は、ひろし達が駆け寄ってくるのに合わせて身を引き、少し離れた所でその様子を見守っていた。

「あの人達が、しんのすけのご家族と幼馴染達なのか。いつの間にエリカ達と知り合ったんだ？」

「今日このホテルに着いたときに偶然ね。それでまあ『せっかくこうして知り合えたから、しんちゃんへのサプライズも兼ねて一緒に懇親会のスタッフやりませんか』って冗談半分で誘ったら、思ってた以上にノリノリで乗っかってきてね。それでこうなったの」

「サプライズなんてせずに普通に会えば良いだろう……」

「良いじゃないですか、お兄様。しんちゃん、何だか元気が戻ってきたみたいですよ」

確かに彼らと喋っているしんのすけの様子は、このホテルに向けて出発したときと同じ、いや、あるいはそれ以上の調子であるように見える。とりあえずはこれで、何の憂いも無く九校戦に挑めるだろう。

ところで、とエリカは達也たちにズイツと体を近づけて、

「あの人達、どうやらこのホテルのスイートルームに泊まるみたいなんだけど」

「えっ？ スイートルームって——」

「そう！ このスイートルームってさ、民間のホテルと違ってお金さえ積みば泊まれるようなものじゃないでしょ？ ねえ達也くん、そんな部屋に泊まれるあの人達って何者だと思う？」

あからさまに期待の籠もった目を向けてそう尋ねるエリカに、達也は「いや、そんなこと俺に訊かれても……」と口籠もりながら、当たり障りの無い一般的な予測を口にした。

「そういう部屋に泊まれるような人間とたまたま知り合いだった、とかじゃないか？」

*

*

*

今回の懇親会はあくまで主役は高校生達であるため、来賓者は挨拶の時間になるまで別室で待機となっており、それはどのような立場の人間であっても例外ではない。もっとも別室とはいえ料理も飲み物も同じものが用意され、スタッフが給仕に動き回っていることも変わらないため、いわばこちらも本会場の縮小版といった装いだ。

しかしながら、彼らが実際に給仕として働く頻度はこちらの方が圧倒的に少ないだろう。元々の人数の差もあるが、来賓者は料理や飲み物を口にするよりも、何の前情報も無く姿を現した世界を股に掛ける大企業の令嬢への挨拶に必死なのだから。

「はあ……。予想はしていたことだけど、こんな所に来てまで挨拶攻めに遭うなんて……」

名前だけは知ってる者から顔も名前も知らない者まで一通りの挨拶を済ませたあいは、別室の中でも一番奥にあるテーブルに戻って溜息混じりにそう呟いた。大会期間中はしんのすけの勇姿を見届けるのに集中するため一切の仕事を入れておらず、いわばこの期間は彼女にとって夏休みも兼ねるつもりだったのである。

相当疲れたらしく、傍に控える黒磯に飲み物を要求する態度もどこか投げやりだ。ちなみに黒磯はその命令を受けて近くのスタッフに頼んで高級炭酸水を持ってきてもらい、スタッフから受け取ったそれを彼女に手渡していた。何という二度手間である。

と、そんな彼女に近づく1人の男がいた。先程の挨拶攻めのときには顔を出さなかったその人物に、あいはチラリと視線を向ける。

「酢乙女あいくん。そろそろ来賓者挨拶の時間だが、ご気分は如何かな？」

現在この部屋にいる中では間違いなく一番の大物、そしてあいにとって唯一顔も名前を知っているその人物・九島烈に、あいはニッコリと余所行きの笑みを浮かべて立ち上がり、優雅な一礼を返した。先程の挨拶攻めでは一度も見せなかった彼女の反応に、他のゲストも思うところが無いわけではなかったが、その相手が相手なので特にそれを表に出すことは無い。

ちなみにそんな烈と同じくらいの大物であろうスンノケンだが、この部屋には姿を現しておらず、この後の来賓者挨拶に顔を出す予定も無い。そもそも彼の存在は大会中嚴重に秘匿される手筈であり、あいと烈を除くゲストにも彼の存在が知らされることは無いのである。

「お気遣いありがとうございます、九島様。私の我が儘を通してくださったお礼として、自分の責務はキツチリと果たすつもりですわ」

「いやいや、実に素晴らしい。とはいえ、君くらいの年代にはこういった挨拶はなかなか退屈だろう」

特に賛同を求めているわけでもない烈の言葉に、あいはほんの少しだけ首を傾げて疑問をアピールする。

そしてそれに応えるように、烈が言葉が続ける。

「酢乙女あいくん、私の『戯れ』に協力してもらえないだろうか？」

「……聞きましょう」

何か悪戯を企んでいる少年のような笑みを浮かべる烈に、あいはこの部屋に入って初めて『興味の色』を浮かべた。

少なくとも、傍で2人の遣り取りを眺めていた黒磯はそう感じた。

第22話 「懇親会に参加するゾ その2」

『皆様は将来魔法師として、この国を支える素晴らしい仕事に就くことになると思われれます。最近では魔法師や彼らを支える人々に対して謂れなき非難を浴びせる人達もおりますが、皆様はそのような声に負けることなく——』

懇親会も中盤に差し掛かった頃、来賓者の紹介と共にそれぞれが挨拶をする時間が始まった。顔も名前も知らないような人が次から次へと壇上に現れ、中央に置かれたスタンドマイク越しに、それなりの時間を掛けて考えたであろう文章を読み上げている。

やはり魔法科高校生というエリート候補だけあって、たとえ顔も知らないような大人の挨拶だとしてもちゃんと耳を傾けている。あるいは、傾けているフリをしている。

「こういう来賓挨拶って、なんでいつの時代も長いんだろうね」

「半端な挨拶をしたら、主催している相手に申し訳が立たないからね。こういうイベントのときに集まる人って、普段からそういう人達と付き合いがあるだろうし」

「そんな大人の付き合いに巻き込まれちゃ堪んないわよねえ」

「世知辛い」

「ねえ風間くん、プスライト取ってきて」

「おまえなあ、少しは聞いているフリをする努力をしろよ」

しんのすけと久し振りの再会を果たした春日部防衛隊の面々も、周りと同じように傍目には真面目に聞いているフリをしながら、ヒソヒソと周りに聞こえないように会話を交わっていた。給仕としての仕事も時折こなしているが、基本的にはしんのすけの傍に固まっている。

一方、しんのすけの家族3人かというと、司波兄妹やエリカと親睦を深めていた。

「あのう、ウチの息子、学校ではどんな感じですかね？」

「二科生と二科生の区別無く誰にも明るく接する、学校のムードメーカーですよ。しんちゃんがいると、一緒にいる私達の雰囲気も明るく

なりますし」

「そうですか！ いやあ、良かった！ 全然連絡してこないから、もしかして上手くやってないのかって心配してたんですよ！ あっはっはっ！」

「まったくこの人ったら、美人だからって女子高生相手にデレデレしちゃって……」

「ちよっ！ そうじゃねえよ、みさえ！ おまえがいつも心配してるから、こうやって——」

「ねえねえ！ 達也さんって、お兄ちゃんと一緒に風紀委員つてのやってるんでしょ？ お兄ちゃん、ちゃんと仕事してる？」

「もちろん。何か揉め事があったときは、真っ先に駆けつけるからな。……報告書を書くのは、もっぱら俺の役目だが」

「ひまわりちゃんのお兄さん、かなり強いのよー。剣術部の先輩なんか、お兄さんに手も足も出なかったんだから」

「へー、全然想像つかないなあ。家ではいつもママに怒られてゲンコツされてるから」

「プッ！ ゲ、ゲンコツって……！」

『それでは続きまして、かつて世界最強と目され、20年前に第一線を退いた今も九校戦をぐ支援くださっております九島烈閣下より、お言葉を頂戴します』

と、会場にこのアナウンスが流れた途端、今まで話を聞くフリをしていた生徒ですら一斉に表情を引き締めて壇上に注目した。今や伝説の存在といっても過言ではない人物を生で見られるチャンスということで、その注目度は他の来賓者に比べて群を抜いている。

そしてそういった雰囲気は魔法師についてあまり知らないひろし達にも伝わっていき、彼らも緊張した面持ちで周りの生徒達に倣って壇上へと向き直る。

そうして会場中の視線を集める壇上に姿を現したのは、

「おっ、あいちゃんだ」

色合いとしては第三高校の制服に近い臙脂色の服を身に纏う少女——酔乙女あいの登壇に、会場のあちこちから疑問の声が上がる。メ

ディア露出が多いために知名度も高い大企業の令嬢が現れたこと自体の衝撃も大きく、生徒達の間で様々な憶測が囁かれている。

「何だ何だ、九島って人の挨拶じゃなかったのか？」

「どうしたのかしら……？　何かトラブルがあつて、急に来られなくなつたとか？」

「あいさんが挨拶する順番を間違えただけだつたりして！」

野原家の3人も、困惑した様子で会場の喧騒に加勢している状態だ。

しかし彼らの傍で同じ光景を観察していた達也だけは、目の前で繰り広げられている「魔法」の正体を見抜いていた。

九島烈という老人は、既に彼女の背後に悠然と立っている。

ただこの場にいるほとんどの人間が、彼女にばかり目を奪われているせいで気づかないだけなのである。

——精神干渉魔法か……。

おそらく現在、会場すべてを覆うほどの大規模な魔法が展開されている。

その効果は「目立つものを置いて注意を逸らす」という非常に些細なものだ。事象改変と呼ぶまでもない、状況によっては自然に発生する「現象」に近いものだが、それを会場中の全員に同時に引き起こすその魔法は気づくことが非常に困難なほどに微弱である。

これこそまさに、かつて「最高」にして「最巧」と謳われた「トリックスター」九島烈の真骨頂。

その技巧をその目に焼き付けようと達也がスッと目を細めたタイミングで、彼女の後ろに立つ烈の口角がニヤリと上がった。

まるで、達也がこの魔法に気づくのを待っていたかのように。

「——！」

「うっそ、マジかよ！　いきなり現れたぞ！」

烈が魔法を解除したその瞬間、まるで彼がいきなりステージに現れたかのように見えたであろう者達から、一斉に驚きで息を呑む音が聞こえた。ひろしに至っては、周りの迷惑を考慮せず反射的に叫んでしまったくらいだ。

『まずは、私の悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する』

会場のどよめきが未だ収まらない中、90歳近い老人とは思えないほどに若々しい声で烈が挨拶を始めた。

マイクを通して会場全体に響き渡るその声に騒がしかった会場が一気に静まり返るのも、見方によつては1つの魔法のようだった。

『今のはちよつとした余興だ。魔法というよりも手品の類と言つて良いだろう。だが、私の魔法に気づいた選手は、私の見たところ5人だけだった。——つまり、もし私がテロリストだったとして、私を阻むべく行動を起こせたのは5人だけだということだ』

烈の言葉に、会場の静寂が別種のそれへと変化した。

『諸君。私が用いたのは低ランクの魔法だが、君達はそれに惑わされ、私を認識できなかった。明後日からの九校戦は、まさに魔法の使い方を競う場なのだよ。——諸君の“工夫”を、楽しみにしている』

挨拶が終わると、一斉にはいかなかったものの、会場中から拍手が巻き起こった。

魔法ランク至上主義である現在の魔法師社会において、その社会の頂点に君臨する人物がそのことに異議を唱える。魔法はあくまで“道具”であると言つてのけ、そして実際に分かりやすく実践してみせる。しかも、誰にも真似のできないレベルで。

——これが“老師”か……。

他の生徒と同じように拍手をしながら、達也は他の生徒の誰よりも心の中で感嘆していた。

「あの酔乙女あいつて子、すげえ可愛くねえか！」

「確かに凄い可愛いけど、世界有数の財閥の令嬢だろ？ あんな高嶺の花、おまえなんかには無理無理」

「んなこたあ分かつてるよ！ でもよ、さつき見掛けた一高の1年生といい、今年の子供生徒はめっちゃうレベルが高いな！ やつべえ、ワクワクしてきた！」

「おまえ、この大会に何しに来たの？」

改めて壇上に登ったあいが令嬢らしい外向けの笑顔で挨拶をしているとき、しんのすけ達とは離れた場所に集まる代表選手が何やらコソコソと内緒話をしていた。

紅蓮色のブレザーに黒のズボン、胸に八芒星のエンブレムが刺繍されている彼らは、戦鬪系の魔法実技を特に重視する第三高校の生徒である。九校戦では第一高校と優勝を争うほどの実力校であり、今回も優勝候補筆頭の第一高校への対抗馬として期待が寄せられている。

そんな彼らも、今は見目麗しい令嬢をこの目で見られて完全に舞い上がっていた。いくら魔法師としての実力があつたとしても、やはり彼らも青春真っ盛りな学生である。

「そりゃ俺は無理かもしれないけどさ、一条ならいけるかもしれないぜ？ なんせあいつは顔良し腕良し頭良し、そのうえ十師族の跡取りなんておまけ付きなんだからよ」

その生徒はそう言って、ふと壇上から視線を逸らして別の方へと向けた。

甘いマスクというよりも古風な美男子という形容が当て嵌まるような凛々しい顔つき、広い肩幅に引き締まった体を持つ、いかにも女性が好きそうな外見をした男子生徒がそこにいた。

そんな男子生徒・一条将輝は、友人達の会話が聞こえる位置にも拘わらず、それに反応することなくボーツと壇上のあいを見つめていた。

そんな彼に気づいた、モンゴロイドの見た目をした小柄な少年・吉祥寺真紅郎が声を掛ける。

「どうしたの、将輝？ 将輝が女の子に興味を持つなんて、随分と珍しいじゃない」

「……あの女性は確か、酔乙女ホールディングス代表の一人娘だったか？」

「そうだよ。名前は酔乙女あい、僕らと同じ歳だけど既に経営に参加していて、大きな成果を幾つも挙げています。彼女が特に力を入れているのは、軍事的な利用に留まっていた魔法技術をそれ以外の分野に応用することだ。僕ら魔法師にとって、彼女は大事なお得意様というこ

とだね」

「魔法技術の応用？」

「そう。例えば今はほとんど一般的になっている、映画やドラマでCGやVFXを使わず魔法で爆発や火災などのシーンを安全に撮影するというアイデアは、元々彼女が発案したとされている」

「へえ！ それは凄いな！」

吉祥寺の言葉に、将輝は素直に目を見開いて驚いた。エンタメ業界での魔法師の派遣事業は、今まで軍事的にはプロになれなかった人材にも魔法師としての未来が切り開かれただけでなく、軍事色が強いために魔法への拒否感の強かった人々に魔法を身近な存在に感じさせる態度を軟化させる効果をもたらした、魔法師にとって非常に重要なターニングポイントとなったものだからだ。

しかし一頻り感心した将輝は、ふと疑問の表情を浮かべる。

「あれっ？　だがジョージ、この前『これが初めて魔法師が参加した映画だよ』って観せてくれたヤツは、確か30年以上前に作られたものじゃなかったか？」

「うん、そうだよ。でも矛盾はしていないよ。だって彼女、例の春日部で起こった時間のループに巻き込まれて100年以上歳を取らなかつた人々の1人だからね」

「なっ——！」

その事實は将輝に先程以上の驚きをもたらし、彼は思わず壇上の彼女へと再び顔を向けた。本来の彼女は九島烈以上の年寄りののはずだった、とは俄には信じられない。

そして彼の驚きがここまで大きくなった原因は、もう1つあった。「ジョージ。確か第一高校の選手の中に、その時間のループに巻き込まれていた奴が出場するはずだったな？」

「そうだよ。あそこにいる、野原しんのすけのことだね。中学時代には剣道の全国大会で、あの代々木コージローを倒して優勝している。出場競技は『クラウド・ボール』と『モノリス・コード』。——つまり後者の競技では、僕らと直接戦う可能性があるってことだ」

「……成程な」

しんのすけを見つめる将輝の目に、力強い炎の揺らめきが見えた。

「――成程、彼が司波達也くんか」

自身の挨拶が終わった烈は、ステージ脇に立ってあいの挨拶に耳を傾けながら、会場の奥にいるしんのすけの近くに立つ1人の第一高校生へと視線を向けていた。

スポーツではない実戦的な訓練によって鍛えられた肉体、スツと伸びた背筋は自然な佇まいでありながら突発的な出来事にも即座に対応できるほどに隙が無く、壇上のあいを見つめる視線には思春期特有の欲望が微塵も見受けられない。おそらくほとんどの人間が彼のすぐ隣にいる妹に気を取られるため気づかないが、大概彼も同年代の少年と比べて纏う雰囲気がまるで違う。

それこそ、先程から熱の籠った視線で壇上を見つめている一条家の御息の方が、よっぽど普通の男子高校生であるほどに。

「やはり『四葉家』は、既に彼と繋がっていたか……。真夜め、何を企んでいる……？」

その独り言はどこか楽しげで、そしてどこか忌々しげだった。

*

*

*

そんな懇親会が終わった次の日の夜。

達也は技術スタッフの一員として、一高の作業車にてCADに登録する起動式のアレンジを行っていた。

「司波くん、そろそろ切り上げた方が良くないかな？」

一緒に作業していた五十里に声を掛けられた達也が、時計へと目を向ける。作業を開始してからすでに数時間が経過しており、周りに目を向けると五十里と自分以外にすでにエンジニアの姿は無かった。どうやら、作業に集中していたせいで時間の経過に気づけなかったらしい。

「司波くんの担当は4日目以降でしょ？　あまり最初から根を詰めす

ぎない方がよいよ」

「……確かに、そうですね」

達也が担当するのは、1年女子のスピード・シューティング、ピラーズ・ブレイク、ミラージュ・バットの3種目。これは深雪達の希望であるのと同時に、森崎を始めとする1年男子による反発が強かったからという経緯がある。唯一の例外はしんのすけだが、CADの提供や作戦立案の協力はあっても実際の担当は別の生徒が担っている。

ちなみに達也の身近な1年女子の出場種目は、深雪はピラーズ・ブレイクにミラージュ・バット、ほのかがバトル・ボードとミラージュ・バット、雫はスピード・シューティングにピラーズ・ブレイクとなっている。つまりライバル関係となる競技も存在する形だが、達也はどちらにも肩入れせず対等にCADの調整をするつもりだ。

とはいえ、達也が担当するのは大会の後半部分だ。確かに五十里の言う通り、今は英気を養う時期なのかもしれない。

「それでは五十里先輩、お先に失礼します」

「うん。僕は明日出場する担当選手がいるから、もう少し残ってるよ」
五十里に見送られ、達也は作業車を後にした。

真夏ということもあって、夜が更けても気温はあまり下がらない。Tシャツ1枚で外を出歩いて困らないということもあり、達也はすぐに部屋には戻らずホテルの周辺をブラブラと散歩することにした。すると、

「しんのすけ、こんな時間にどうした?」

「おつ、達也くん。オラは寝る前のお散歩。達也くんは?」

「俺はさっきまでCADの調整をしていたんだ」

偶然出会ったしんのすけと達也は、そのままホテルの敷地内を散歩をすることにした。

「明日から本番だが、調子はどうだ?」

「うーん、どうだろう? まあ、なるようになるでしょ」

何とも要領を得ない返事に、達也はチラリとしんのすけへ視線を向けた。

両手を首の後ろに回して歩く彼の姿は、少なくとも達也の見た限り

では平時とまったく変わらない、つまり例の事故に遭遇するよりも前に戻っているように感じた。エリカ達は意図していなかっただろうが、懇親会にしんのすけの家族や友人を紛れ込ませるドッキリは結果的にフラインプレーだったようだ。

ならば大丈夫だろう、と達也はしんのすけに自分の疑問をぶつけることにした。

「しんのすけは、今日の懇親会で挨拶していた酔乙女あいとは親しい間柄なのか？」

「あいちゃんど？ うん、そうだゾ。幼稚園が同じだったからね」
「今でも交流は続いているのか？」

「小学校が別々になっちゃったから風間くん達ほどじゃないけど、ときどき会って一緒に遊んだりしてたゾ。オラが東京で1人暮らしを始めてからは全然だけど」

しんのすけの答えに達也は「そうか」と呟いてから、あたかも今考え付いたような仕草で彼のズボンのベルトを指差して問い掛ける。

「そういえばしんのすけが普段使っているそのCAD、もしかしてその酔乙女あいから貰った物だったりしないか？」

「えっ！ 達也くん、なんで分かったの？」

「一般的な物と比べてもかなりハイスペックだからな、もしかしたらと思っただ」

「やっぱりそうなのかあ……。あいちゃん、そんなこと全然言わなかったからなあ……」

「どういった経緯で貰ったんだ？」

あくまで散歩がてらの暇潰しであることを装うため、できるだけ感情を表に出さないよう注意しながら達也が尋ねる。もっともしんのすけに達也を窺う素振りは無いため無用の心配かもしれないが、念のためだ。

「魔法科高校に行くのを決めたとき、だったらちゃんとしたCADを買おうってことになったの。それで母ちゃん達と一緒に色んなお店に行ったんだけど、何かコレって感じの物が無くて……。それをあいちゃんにポロつと言ったら『だったらあいがしん様にピッタリのCA

Dをご用意致しますわ!』って言ってきて、1ヶ月くらい後にこれを持ってきたの」

つまりその1ヶ月間が、CAD開発の依頼を受けて自分と牛山が製作に取り掛かっていた時期か、と達也は考えを巡らす。

「んで、タダでくれるっていうからさすがに母ちゃんも遠慮してただけど、あいちゃんが『新商品のモニターも兼ねているからお気になさらず』っていうから貰ったんだ。しかも中身の魔法とかメンテナンスもあいちゃんの会社がやってくれて、オラ本当に大助かりだゾ!」
「そのCADを実際に作った技術者については、何か聞いてるか?」

『日本を代表する凄腕だ』って、あいちゃんが言ってたゾ」

「……登録されている起動式についても?」

「うん、何も聞いてないゾ」

「……そうか」

少なくともしんのすけには大した情報は伝わっていないか、と考えた達也が次の質問をしようとしたそのとき、

「――」

「おつ? どうしたの、達也くん?」

達也は声を発する直前で動作を中断し、周辺をグルリと見渡した。夜だけあって薄暗く見通しも悪いが、彼は迷う素振りも無く或る一方向に目を向けたところで動きを止める。

しんのすけが疑問の声をあげると、そこから目を逸らすことなく達也が口を開いた。

「どうやらこのホテルに、賊が侵入しようとしているらしい」

「ええっ! 大丈夫なの?」

「生け垣に偽装したフェンス間に3人、それぞれ拳銃と小型爆弾を所持している。武装して軍の管理地内のセキュリティを突破したとなると、事態は一刻を争うな……」

達也はそう言うや、すぐさまその方向へと走り出した。照明が疎らで星明かりも木々に阻まれて満足に届かないような森の中だが、一般人の走る速度を優に超えたスピードですいすいと走り抜けていく。もつとも達也自身は、ワントンポ遅れて走り出したしんのすけが遅れ

ること無く追走しているのを気配で感じ、秘かに舌を巻いていたが。

やがて2人は、賊を視認できる場所まで辿り着いた。頭の前から爪先まで黒い布で覆い隠した彼ら（がっしりした体つきであることから、おそらく全員男で間違いないだろう）は、何やら3人で話し合っている最中だった。

「達也くん、あそこに誰かいるゾ」

「あれは……」

しかし現在2人の関心を惹いているのは、3人の賊ではなくその近くに潜む1人の少年だった。

その少年——吉田幹比古は、幾何学模様の描かれたカードを取り出し、それに力を込めるような仕草をした。すると彼の手元が微かに輝き、賊の真上に電子が集まってパチパチと火花を散らし始める。

——成程、あれが古式魔法の呪符か。だが……。

その瞬間、賊が幹比古の存在に気づき、拳銃を彼に向けてきた。彼はそれに気づき対処しようとするが、その表情は苦々しい。

間に合わないと判断した達也は、右手をその拳銃に向けてかざした。

すると次の瞬間、賊の持っていた拳銃がまるでネジが外れたようにバラバラに解体された。

「な、何だ！」

突然のことに慌てる賊だったがそれも一瞬、拳銃が使い物にならないと知るや1人がすぐさま腰元に手を伸ばした。

まさか小型爆弾を使うつもりか、と達也が再び右手を伸ばそうとして、

「お巡りさん！ここに変な人達がいるゾー！」

「なっ——！」

突然しんのすけが明後日の方を向いて大声をあげたことで、3人の賊が一斉に反応してそちらへと顔を向けた。『お巡りさん』という言葉に、3人は無意識に緊張で体を強張らせる。

時間にして、1秒にも満たない僅かな隙。

しかし幹比古の魔法を完成させるには、それだけで充分だった。空

中に生じた雷が3人の賊を頭上から貫き、その衝撃で意識を刈り取られた3人がそのまま地面に崩れ落ちて動かなくなった。

「ありがとう、達也にしんのすけくん。おかげで助かったよ」

「……ねえ、その人達もしかして——」

「大丈夫、気絶させただけだよ」

幹比古の返事にしんのすけはホッと胸を撫で下ろし、達也は感心したように頷いた。

「見事な腕だな。死角から複数の標的に対して正確な遠隔攻撃を行い、あくまで捕獲を目的とした攻撃で相手を一撃で無力化するとは」

達也の言葉に、しかし幹比古は逆に表情を曇らせた。

「でも僕の魔法は、本来ならば間に合っていないなかった……。2人の援護が無ければ、僕は確実に撃たれて——」

「そうだな」

幹比古の自嘲的な言葉をハッキリと肯定する達也に、幹比古は面食らうような表情を浮かべた。

そしてしんのすけは、2人の遣り取りを口出しせずに見守っている。

「確かにあのとき俺達の援護が無かったら、おまえは確実に撃たれていた。しかし実際には撃たれていないし、それ以外については完璧な結果を出した。だったら次に向けて改善することができるし、改善すべきポイントはハッキリしている」

「改善すべき、ポイント……」

自分に言い聞かせるようにゆっくりと呟く幹比古を横目に、達也は頷いて口を開いた。

「幹比古。自分でも気づいていると思うが、改善すべきポイントは魔法の発動スピードだ」

「……確かに、それは分かっている。だけど『今の僕』には、それを改善することなんて——」

「いや、できるかもしれない」

「——！」

達也のその言葉に、幹比古は目を丸くする。

「ぎつき使ったあの術式には、無駄が多すぎる。問題は自分の能力ではなく、術式そのものだ。そのせいで、自分の思っている通りに魔法が発動しないんだ」

「……ま、待て！　なんでそんなことが分かるんだ！　この術式は吉田家が長い年月を掛けて、古式魔法の伝統に現代魔法の成果を積極的に取り入れて、何度も何度も改良を重ねてきたものだ！　それなのに、なんで君は一目見ただけでそんなことが言えるんだ！」

「分かるからだ」

一切遠回しな表現を使わず言い放つ達也に、幹比古は息を呑んだ。「俺は『視る』だけで魔法の構造が分かる。起動式の記述内容を読み取り、魔法式を解析することができる。――別に、信じてもらう必要は無いがな」

達也の突き放すような言い方に、幹比古は戸惑うように視線をさ迷わせる。

しんのすけが口を挟んだのは、このタイミングだった。

「ねえ、この人達はどうするの？　誰か呼んできた方が良くないじゃない？」

「あ、それじゃ、僕が呼んでこようか」

「……しんのすけ、幹比古についていつてくれるか」

「ほっほーい」

そうして幹比古としんのすけがその場を離れたことで、達也と気絶した3人の賊だけがその場に残された。

それを見計らったようなタイミングで、1人の男性が姿を現した。日焼けや火薬焼けによってなめし皮のようになった顔を持つ彼に対し、達也は特に驚くような反応も無く口を開く。

「やはり近くにいましたか、風間少佐」

「基本的に他人に無関心な特尉にしては随分と珍しいじゃないか、特尉」

「無関心は、言い過ぎだと思いますが」

「それとも、身につまされる思いでもしたかな？　特尉と同じような悩みを抱えているようだが」

からかい混じりの表情で尋ねる風間に、達也はそれには答えず、地面に転がった3人の賊へと視線を向けた。

「少佐、この者をお願いしても宜しいですか？」

「分かった。基地司令部には、俺の方から話を通しておこう」

「ありがとうございます。——彼らはなぜ、ここに侵入したんでしようか？ なかなかの技量のようですが」

「分かんが、予想以上に積極的だ。とぼっちりを食らわないように、くれぐれも注意しておいてくれ」

風間はそう言うと、しんのすけ達が去っていった方向をチラリと見遣った。

「さてと、彼らが帰ってくる前に立ち去るとしよう。せっかく特尉が彼に配慮してこの場から遠ざけたのが無駄になってしまう」

「……分かっているのなら、早くしてください」

「ははは、そっちの方が年相応で好ましいぞ、達也。彼に感謝だな」

風間はそう言い残し、再び暗闇の奥へと消えていった。

その後ろ姿を見送った達也は、大きな溜息を吐いた。

*

*

*

様々な思惑を孕みながら、九校戦が幕を開ける。

第23話 「九校戦開幕！ みんなで応援するゾ」

九校戦の会場は、まさに熱狂に包まれていた。富士の麓という交通の便の悪い場所で行われるにも拘わらず、直接観覧するギャラリーは1日平均1万人、有線放送での中継の視聴者はその100倍を優に超える。その盛り上がりはその辺のプロスポーツにも引けを取らず、このときばかりは富士演習場全体が異様な雰囲気にも包まれている。

「1日目は本戦のスピード・シューティングとバトル・ボードか。七草会長と渡辺先輩とは、いきなり真打ち登場だな」

「そうですね！ 新人戦では私達が出る競技だし、見逃せません！」
達也の言葉に、ほのかがグツと拳を握りしめた。

華やかさよりも厳粛さを印象づける開会式は早々に終わり、現在は選手や観客がそれぞれ目当ての会場へと移動している最中だ。司波兄妹にエリカ達二科生4人、そしてほのかと雫といういつもの8人も、スピード・シューティングの会場へと向かっている最中である。

しかし彼らと共に行くのは、それだけではなかった。

「ええっと、風間くん。『スピード・シューティング』って何だっけ？」

「いわゆる、魔法を使ったクレイ射撃だね。ランダムに撃ち出されるクレイをより多く撃ち落とした選手の勝利で、最初は1人ずつフィールドに立つ形式、準々決勝からは相手選手と一緒に立って指定された色のクレイのみを狙う対戦形式に変わるのが特徴だよ」

「さすが風間くん。必死になってパンフレットを暗記した甲斐があったじゃない」

「な、何のことかなあネネちゃん！」

しんのすけの幼馴染である4人も、彼らと一緒にスピード・シューティングの会場へと向かっていた。彼の出場する競技以外は特に観戦予定の無かった彼らに対し、せっかく仲良くなったのだから一緒に観戦しようと（主にエリカとレオが熱心に）誘った結果である。

しかしながら、そんな彼らの共通の友人であるしんのすけ、そして彼の家族の姿はそこには無かった。

「それにしても、しんちゃんと家族の人達とも一緒に観られると思つたのに、まさか断られるとはなあ」

「まあ、『久し振りに再会した知り合いと一緒に観戦する』って言われちゃ仕方ねえだろ。それに今日のところはって感じらしいしな」

「うーん……。ねえねえ、しんちゃんが会う“知り合い”について何か知ってる？」

悪戯っぽくニンマリと笑みを深くしながら、エリカが風間達に問い掛けた。外国の遺伝子も感じさせる彼女のハッキリとした顔立ちは美形が多い魔法科高校の中でも抜きん出ており、一部の男子の間では『一年の中では深雪に次いでナンバー2』という（非常に大きなお世話な）評価も拳がっている彼女を目の当たりにしてか、風間とマサオの2人が顔を紅くして狼狽える。

そんな2人にネネが「へっ！」と軽蔑の眼差しを送り、その横でボーが彼女の質問に答える。

「僕達も、詳しいことは聞いてない」

「そつかー、そりゃ残念。懇親会で挨拶してた酔乙女あいつて子なら皆も呼ばれてるだろうし、だったら誰なのかしらねえ？」

「しんちゃん、ネネ達の知らない知り合いも多いから、多分その辺なんじゃない？——つていうか、その2人はいつまでデレデレしてんのよ？ なっさけないわね」

「ち、違うよネネちゃん！ 何言ってるの！」

「あつはつはつ！ 良かったじゃねえか、エリカ！ おまえの性格を知らない奴には案外モテるみたいで——いつてえ！」

「今のは、レオさんの自業自得」

「あはは……。ボーちゃんだっけ？ 君もなかなか言うね……」

ネネの言葉を風間が必死になつて否定し、レオがエリカをからかったせいで彼女から手痛い鉄拳を食らい、それを見ていたボーの辛辣な一言に幹比古が苦笑いを浮かべる。

最もうるさいしんのすけがいなければ少しは静かになるかと思つたが、どうやらそう単純なものではないらしい。彼らから少し離れて歩いてきた達也は、騒がしい会場内でも聞き分けられるほどに騒がし

い遣り取りを眺めながらそんなことを思っていた。

と、そんな彼に近づくと人物が1人。

「お兄様、何だか楽しそうですね」

「……そう見えたか、深雪？」

「はい。顔には出ていませんが、雰囲気で分かります」

あなたの妹なので、と無言の注釈が付きそうな自信ありげな笑みでそう言つてのける深雪に、達也は意識的に口を引き結んで彼女から視線を逸らした。もつとも、たとえ直接見なくとも、彼女がニコニコと自分を見つめているであろうことは雰囲気で分かってしまうのだが。

なので達也は半ば現実逃避気味に、頭の中で別のことを考えることにした。

——今頃しんのすけは、あの「王子」と顔を合わせているところだろうか。

野原親子と一緒に観戦する「知り合い」というのは、十中八九例のスノケシ王子のことだろう。彼はこの大会に来ているどころか来日すら秘匿されており、しんのすけと話をするにはある程度隠密性の確保された場所でなければならぬ。そういう意味では、スタジアムに用意された「特別観覧室」は打って付けだ。

懸念があるとすれば、毎年この大会でその部屋を利用している人物

——九島烈。

そして先程エリカの口からも出てきた経済界のVIP、かつ魔法師にとつてもお得意様である存在——酔乙女あいだ。特に彼女とは、FLTで一度直に顔を合わせてしまっている。さすがに達也の正体までは辿り着いていないだろうが、何かしらの「匂い」を感じ取ったのは確実だ。

——しんのすけに、いらぬことを吹き込まなければ良いが……。

*

*

*

スピード・シューティングの会場は観覧席が数千もある大きなスタジアムだが、現在はそれらのほとんどが埋まっており、通路のフェン

スに寄り掛かって観戦している人も多く見受けられた。特に観客席の最前列は今にもフェンスから乗り出しそうな勢いで詰めかけている観客が大勢いて、その誰もが熱心にカメラを構えてシャッターチャンスを狙っている。ちなみに大多数が男性だが、女性の姿もけつして少なくない。

まさしくプロスポーツの試合にも劣らない歓声が観客席から湧き上がっているが、その観客席よりもさらに上に位置する場所にあるこの部屋には、遮音性能の高い防弾ガラスのおかげでその喧噪も届かない。

「特別観覧室」と呼ばれるその部屋は、文字通り特別な人間しか立ち入りを許されていない観覧スペースだ。防弾ガラスからスタジアムの様子を一望できるだけでなく、専用のモニターによって常に試合のベストショットを楽しむことができる。床には最高級のカーペットが敷かれ、革張りのソファが観戦者の体を優しく包み込み、1つ数百万円はする高価なインテリアが目を楽しませる。さらには専属のスタッフ（ここでは基地の兵士がその役割を担っている）が常駐しており、ホテルの厨房で作られる豪華な料理や飲み物も持ってきてくれるという何とも至れり尽くせりなサービスも付いている。

まさしく金持ちが贅沢三昧するために用意されたように思われるが、この部屋に入れるような立場の人物にとつては必要な措置でもある。なぜなら九校戦中は様々な人間が出入りしており、いっどんな奴に命を狙われるか分からず、そして実際に命を狙われたとあつては大問題に発展しかねない。よつてこうした安全な場所に閉じ込めてしまった方が、双方にとつても都合が良いのである。

「いやあ、懐かしいなあ！　こんなになつちやつてえ！」

「本当よねえ！　ウチの息子ソツクリなのに、全然貫禄が違うわ！」

「お久し振りです、ひろしさん、みさえさん。お元気そうで何よりです」

「うわあ、本当にお兄ちゃんソツクリ！　服が同じだったら全然見分け付かないや！」

だからこそスノケシは何物にも邪魔されることなく、久々に再会

するひろしとみさえ、そして初めて顔を合わせるひまわりとの会話を
楽しむことができる。

そしてそれは、同じくこの部屋を利用している九島烈と酔乙女あい
も同じことだ。

「ああ、しん様！ 第一高校の制服姿のしん様も、何て凛々しく素敵な
んでしょう！」

「あー、はいはい……。分かったから、耳元でそんなに騒がないでほし
いゾ……」

「申し訳ございません、しん様！ ちゃんと言葉を交わしたのがラウ
ンジ以来だったもので！ ああ、少し人前で仲良くしただけで色々
と邪推されてしまう今の立場が恨めしいですわ……！」

「はっはっはっ。良いじゃないか、しんのすけくん。こんな可愛らし
い婚約者がいるなんて、君は本当に幸せ者だよ？」

「えっ、婚約者？ 何言ってるの九島爺ちゃん、オラに婚約者なんてい
ないゾ」

「ん？ しかし王子から聞いたよ？ 君はあいちゃんと婚約しているん
だろう？」

「婚約？ スンちゃんが？ ——ちよつとあいちゃん！ 何か変なこ
と吹き込んで——」

しんのすけがあいに詰め寄ろうとしたまさにその瞬間、会場の様子
を中継しているモニターから一際大きな歓声が流れ、部屋の全員がそ
ちらへと顔を向けた。

フィールドではまさに、1人の女子選手が入場するところだった。
長い髪の上からつけたヘッドセット、透明なゴーグル、ストレッツパ
ンツの上から着る、ミニワンピースと見紛うほどにウエストを絞った
襟付きジャケットと、可愛らしさと凛々しさが絶妙に合わさった近未
来映画のヒロインのような雰囲気を持っている。

「おおっ！ 真由美ちゃん、やっと出てきたゾ！」

「ということとは、彼女がしん様の通う学校の生徒会長なのですね」

「成程、会場の人達はほとんどが彼女目当てだったというわけか。確
かにあの容姿なら、これほどの人気も頷けるね」

しんのすけとあいの会話に、ひろし達との挨拶を終えたスノケシが加わった。この中では同じ年齢同士（100年近く5歳児だったことも含めて）だからか、特に示し合わせたわけでもないのに自然とグループを形成していった。

そして彼と入れ替わる形で、烈が野原親子へと近づいてくる。

「どうですか、皆さん？ 初めての九校戦は楽しんでますかな？」

「ああ、九島さん。すみません、俺達までこんな凄い部屋に入れてもらっちゃって」

「とんでもない。こちらこそ、『稀代の英雄達』と一緒に観戦できて光栄ですよ」

「いやいや、英雄だなんてそんな！」

「そうですよ！ 私達なんて、ただのサラリーマンと主婦と小学生なんですから！」

烈の賛辞に対しても、ひろしとみさえは謙遜にしてはあまりに必死な様子でそれを否定するのみだ。確かに今まで様々な騒動に巻き込まれ、そしてそれを解決に導いてきたが、それはあくまで自分達の日常を取り戻すために必死だっただけであり、それによって世界の平和がどうこうなんて考えたことも無かった。いきなり英雄だの何だの言われても、ただただ困惑するだけなのだろう。

とはいえ、本人達のそんな事情は他人にとっては関係無い。彼らの活躍を知る者達にとってはまさしく英雄であり、そしてそれと同時に

『間もなく競技を開始します。会場の皆様、お静かにお願ひ致します』と、会場にそんなアナウンスが流れ、彼らは改めてモニターへと注目した。

スピード・シューティングは、選手の立つ場所から30メートル前方にある、1辺15メートルの立方体に定められた有効エリア内に入ったクレールを破壊する競技だ。クレールは5分間にランダムに射出されるため、素早さと正確さが求められる。

観客が、そして特別観覧室の全員が見守る中、複数の赤のシグナルがカウンントを刻み、緑のシグナルが点いた途端にクレールが2つ射出さ

れた。

クレーは綺麗な放物線を描いて、有効エリアへと迫っていく。

そして有効エリアにクレーが完全に入った、その瞬間、

「はっや」

ひまわりが思わず感嘆の声を漏らすほどに一瞬で、2つのクレーが同時に破壊された。

真由美の目の前で小さな白い粒が寄り集まって塊が形成され、クレーが有効エリアに入った途端にそれが射出される。白い塊は寸分違わずクレーのど真ん中を射抜き、ランダムに射出されるクレーをただの1つも取りこぼすことはない。

気持ち良いくらいにクレーが撃ち抜かれる光景に感嘆の声をあげる烈・スンノケシ・あいに対し、魔法競技を初めて観戦するひろし・みさえ・ひまわりの3人は何が起こっているのかも分からず目を丸くするばかりだ。

よって、ひろしが魔法に精通しているであろう烈に尋ねても何ら不思議ではない。

「えっと、すみません。あの子はどんな魔法を使ってるんでしょうか？」

「彼女の魔法については、私もよく知っていますよ。あれはドライアイスを生成して、それを亜音速で射出しているんです」

「ドライアイス……って、アイスを買ったとき一緒についてくるヤツですよ？ アレを自分で作るってだけでも凄いのに、しかもそれでクレーを撃ち抜くって……」

「しかも早いし、全部ど真ん中だよ！ まるでゴ●ゴだね！」

漫画の登場人物に例えたひまわりの賛辞に、烈は小さく笑みを零しながら説明を続ける。

「あれだけの精度を実現させているのは、遠隔視系の知覚魔法“マルチスコープ”を使っているからでしょう。実体物をマルチアングルで知覚する、いわば視覚的な多元レーダーのようなものです」

「ええっ！ それってつまりあの子は、ドライアイスを作って撃つ魔法を使いながら、別の魔法を使っているってことですか？ そんなこ

とをして、よく頭が混乱しないわね……」

「複数の魔法を同時に扱う技術は、ある程度以上の魔法師には必須です。ですがあそこまで正確に情報を処理できるのは、さすがに稀ですよ。よほどの修練を積んだのか天性のものか、どちらにしる素晴らし腕ですよ」

「へえ、そんなすげえのか……」

烈の説明に、ひろしとみさえは素直な賞賛の声をあげて頻りに感心していた。

と、それを聞いていたひまわりが烈に見えるようにピンと腕を伸ばして手を挙げた。さながら、先生に質問をする生徒のように。

「ねえねえ。こんな真夏にドライアイスを作って、しかもそれを銃みたいバンバン撃つなんて、そんなことをして疲れちゃったりしないの?」

「確かに魔法というのは事象を大きく改変するほどに難易度も高くなり、術者に大きな負担が掛かる。しかし『エネルギー保存の法則』の埒外である魔法も、逆にそれを利用して少ない負担で行使することができるとだよ」

「ええつと……、お兄ちゃん、その何とかの法則って何?」

「おつ? ええつと……、何だっけ?」

「おいおいしんのすけ、そんなんで高校の授業は大丈夫なのか?」

「そんなこと言うんなら、父ちゃんは分かるの?」

「俺はその……、アレだよ、大人だから良いんだよ」

謎の理屈で開き直るひろしに、しんのすけとひまわりが白い目を向ける。

そんな家族の遣り取りにクスリと笑みを漏らしたスンノケシが、助け船とばかりに口を開いた。

「『エネルギー保存の法則』っていうのは『運動・熱・化学・光・電気などのエネルギーは形態が変化しても総和が変わることは無い』っていう、物理法則の最も基本的なもの1つだよ」

「もうスンちゃん、もっと分かりやすく説明してよお」

「例えばしん様が運動をしたとき、体が熱くなるでしょ? これは運

動に使われたエネルギーがその分だけ熱に変わったからですわ。つまり運動に使われたエネルギーは消滅しないで、必ず何かしらの形として残っているということですよ」

「ほーほー、そういうことですかあ」

「それで九島お爺ちゃん、その法則とあの魔法に何の関係があるの？」

ひまわりの疑問の声に、烈はスンノケシとあいから説明の役割を引き継いだ。

「ドライアイスを作ってそれを加速させる魔法の場合、奪い取った熱エネルギーを運動エネルギーに変換することによって術者の負担を軽くしているんだ。本来の自然界ではこれを「エントロピーの逆転」といって、熱エネルギーの全てを他のエネルギーに変換することは絶対に不可能なんだが、熱力学的には辻褃が合う」

「魔法って、そんなに都合の良いことができるんですか？」

「自分にとって都合良く世界を作り替える技術、それこそが魔法ですからな」

「……うーん、何だか上手く騙されてる気分」

「確かに。そういう意味では、魔法師というのは「世界を相手取った詐欺師」とも言えますな」

「そういえば九島お爺ちゃんも、懇親会でみんなを騙して隠れてたね！」

「はっはっはっ、確かにその通りだ」

と、そんなことを話している内に、競技終了を意味するブザーが会場中に響き渡った。

真由美の結果は、ずばり100点。つまり彼女はただの1つもクレーを撃ち漏らすことなく、パーフェクトで予選を通過した。

そしてそれを見届けたしんのすけが、勢いよくソファアから立ち上がった。

「さてと、真由美ちゃんの出番も終わったし、次は摩利ちゃんの所に行くこうつと」

「この部屋の中でも、他の会場での試合は観られるよ？」

「んもうスンちゃん、分かかってないなあ。こういうのは、実際にその場

で見た方が臨場感があつて面白いんだゾ」

「しん様の仰る通りですわ！ 私もお供致します！」

「それじゃ、私もお供するとしよう」

「すみません九島さん、付き合わせちゃつて」

「構いませんよ、ひろしさん。私が好きでやつているので」

「それじゃ僕も一緒に行くか。——ルル、移動するよ」

「黒磯、あなたも準備なさい」

「畏まりました」「承知しました」

スノケシとあいが部屋の前で待機していたルルと黒磯に呼び掛けるのを皮切りに、その場の全員が移動を開始した。

ちなみにその裏では、彼らの移動に合わせて大勢のスタッフが右へ左への大騒ぎで対応しているのだが、他の3人はともかく、野原一家がそれを知ることには無い。

*

*

*

一方、観客席にて真由美の勇姿を見届けた達也たち一行も、バトルボードの会場へと移動していた。本戦では摩利が、新人戦ではほのかが出場する競技だ。

バトルボードは、長さ165センチ、幅51センチの紡錘形ボードに乗って、全長3キロの人工水路を3周するタイムを競うレース競技である。水面への魔法行使は認められているが、他者の体やボードへの直接攻撃は禁止されている。予選は1レース4人、準決勝は1レース3人、3位決定戦は4人、決勝戦は2人のタイムマン勝負となっている。

こちら会場は超満員となっており、前の方に観客が詰め掛けている。しかしこちらは先程とは違って、女性の方が多いように見受けられる。

それもそうだろう。スタートの準備をしている摩利の姿は、他の選手がボードに膝をついて構えているのに対し、彼女だけはボードの上に乗っすぐに立っており、見ようによっては他の選手をかしずかせて

いる「女王様」のように見えなくもない。また彼女の着ているウエットスーツが、彼女のスレンダーで魅力的な肢体を浮かび上げさせ、少年少女向けの騎士道物語をも彷彿とさせる格好良さが際立って見えていた。

「どうやらウチの先輩方には、妙に熱心なファンが多いようだな」「分かる気がします。渡辺先輩は格好良いですからね」

そう答える深雪の口調は完全に傍観者のそれだったが、近い将来に真由美以上の男性ファンと摩利以上の女性ファンを獲得するであろう彼女の境遇を慮おもんばかった達也の表情は若干苦々しかった。

そしてその横で会場を眺めていた幹比古が、達也とは違う理由で苦々しい表情を浮かべて口を開いた。

「それにしても、生身の体で時速60キロにもなるボードの上に乗って空気抵抗に耐えるというのは、なかなか体力が消耗されそうだね……」

「そんな競技にほのかちゃんが出場するなんて、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、ネネちゃん。選手になることが決まってるから、達也さんのアドバイスで体力トレーニングをしっかりとやってきたから」

「ほほう、達也さんのアドバイス、ねえ……」

「ちよつ……！　ネネちゃん、変な勘ぐりはやめてよ……！」

『間も無くレースがスタートします。皆様、お静かにお願い致します』

「ほ、ほらっ！　レースが始まるよ！　観なきや！」

「ほーん……」

会場のアナウンスを利用して逃げを試みるほのかを、ネネは意味ありげな視線を向けながら終始ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

『用意』

そんな2人を余所に、スピーカーから流れる声に選手が一斉に構え、空砲と共にレースがスタートした。

そしてその直後、四高の選手が後方の水面を爆破した。おそらく大きな波を作り、自身の推進力にすると同時に他選手の妨害も兼ねようとしたのだろう。

もつとも、

「……自分もそれに巻き込まれてたら、意味無いよな」

レオの言葉に、その場にいた全員が頷いた。

ちなみにその大波は他の選手も巻き込むことには成功したが、優勝候補筆頭の摩利は一瞬だけ足を取られたようにバランスを崩しかけただけで、すぐさま体勢を持ち直して水面を滑らかに進み始めていった。早くも独走態勢に入った彼女は、直線でもカーブでも滝のような段差でも、一切バランスを崩すことなくコースを走破していく。

「風除けも何も無い不安定なボードの上で、よくあんなにバランスが保てるなあ」

何気なく呟いた風間の疑問に、耳聴くそれを聞き取った達也が解説を入れる。

「あれは、硬化魔法の応用と移動魔法を同時にやっているんだ」

「移動魔法は何となく分かるけど、硬化魔法って何？」

「物を硬くして耐久力を上げる魔法のことだぜ。——それで達也、どこに魔法を使ってるんだ？」

自身も同じく硬化魔法を得意とするレオが魔法の解説をすると同時に、皆を代表して疑問を達也にぶつけた。

そしてそれを聞いていた達也は、フツと思わず笑みを漏らした。つい先日、同じような遣り取りをしんのすけとしたのを思い出したからだろうか。

「確かに物を硬くする効果もあるが、硬化魔法は、パーツの相対位置を固定する”ものだ。今回はボードと術者の相対位置を固定するのに使っている。そうして自分とボードを1つの”もの”と定義したうえで、移動魔法を掛けているんだ。しかもコースの変化に合わせて、持続時間を細かく設定している。面白い使い方だ」

「成程、つまりさっきのレオの説明は正確には間違っていたってことね」

「余計なこと言うな、エリカ!」

恥ずかしそうに声をあげるレオに、その場にいる全員がアハハッと笑い声をあげた。

場が和んだところで、達也がさらに気づいたことを口にする。

「いや、魔法はそれだけじゃないな。上り坂では加速魔法も使われているし、波の抵抗を弱くするために振動魔法も併用されている。一度に3種類や4種類のマルチキャストを展開しているのか」

「そんなにたくさん魔法を使って、よく頭がついていくね」

感心した様子でそう言うマサオに、達也も心の中で同意した。真由美は芸術的なまでに磨き上げられた魔法で他を圧倒し、摩利は臨機応変に多種多様な魔法をコントロールして最大限の力を発揮する。たった1試合観ただけだが、それでも他の選手との差は歴然であることが容易に分かる。

——いや、これは既に高校生のレベルを超えているな……。

余裕のトップでゴールインした摩利に拍手を贈りながら、達也はそんなことを思っていた。

*

*

*

バトル・ボードは体力の消耗が激しいため何日にも分けて行われるが、スピード・シユーティングはそうでないため1日で全ての試合を執り行う。準々決勝からは午後に行われるため、観客達は一旦会場の外に出て敷地内のレストランか屋台で昼食を摂り、再び会場に戻ってくることになる。

一方、特別観覧室にいるしんのすけ達の場合、部屋の中まで料理を持ってきてくれるのでその必要は無い。しかも高級レストランで出されるようなコース料理も取り揃えられており、ひろしやみさえはその豪華さに目を丸くしながらも舌鼓を打っている。

そんな中、一足早くコース料理を食べ終えたしんのすけが両手に何も持っているのは、サイコロ状に切った牛肉を豪快に焼き上げタレを塗った串焼きだった。

「うーん、この肉汁が堪りませんなあ」

「お兄ちゃん、それ一口ちよーだい」

「ほいほい」

口を開けて待つひまわりに串焼きを近づけるしんのすけを眺めな

がら、スンノケシが口を開く。

「しんちゃん、それって表の屋台で売ってたやつ？」

「そーそー。さっき移動してる途中で見つけてき、凄く気になってたんだゾ。トイレに行くついでにひとつ走りして買ってきちゃった」

「しん様。そういう物も、スタツフに言えばここまで持ってきてくれるんですよ？」

「ええっ、そうなの？ 知らなかったゾ」

「見てたら僕も食べたくなってきたな……。2本ほど持ってきてもらうか」

「あら、さすが食べ盛りの男の子ですわね」

あいの軽口にスンノケシは微笑みで返し、部屋に待機していたスタツフに牛串を買ってくるよう呼び掛けた。高圧的でなく、かといって遜るわけでもないその姿は、普段から人を使うことに慣れた者であることが感じられるほど堂に入っている。

そうしてスタツフが牛串を買いに部屋を出るのを見送ったスンノケシは、身を乗り出してスタジアムの様子を上から見下ろした。まだ準々決勝なのでちらほらと空席が目立つ——かと思いきや、続々と人が集まり席が埋まっていくのが見て取れる。

「準々決勝なのに凄い人気だね。例の生徒会長の出番だからかな？」

「分かりやすいよねえ、男って」

「ひまわりちゃん、手厳しいねえ……。ただどこまで熱気が凄いと、対戦相手にとっては大きなプレッシャーだろうな……」

準々決勝からは対戦形式となるので、真由美以外にも別の選手がフィールドに上がっている。真由美は観客の声援など気にしていない様子で準備に取り掛かっているが、対戦相手の方は明らかに彼女のことを意識しており、その動きもどこかぎこちない。

やがて2人の準備が終わったところでアナウンスが流れ、騒がしかった観客も途端に静かになっていく。

予選と同じように赤のシグナルが点滅していき、やがて緑のシグナルに変わった。

それと同時に、赤と白のクレーが射出される。

そして有効エリアに入った途端、赤のクレールが破壊された。真由美である。

「おおっ！ さすがだなー！」

予選と同じく寸分違わぬ精度を見せる真由美に、ひろしはすっかりテレビを観ているようなテンションで歓声をあげた。真由美はその後も有効エリアに入ったクレールを次々と破壊していき、その度に客席からどよめきが起こる。

と、それを観ていたみさえが疑問の声をあげた。

「それにしても、あんなに早くクレールを破壊しちゃったら、逆に相手にとって有利にならないかしら？ 向こうは相手のクレールを破壊しないように気を遣う必要が無いんだから」

この競技は指定された色のクレールを破壊した数を競うものなのだが、もしも相手のクレールを破壊した場合、それは相手の得点になってしまう。なので通常は相手のクレールを破壊しないよう気を配りながらプレイするもののだが、真由美が次々と自分のクレールを破壊していくので、相手は自殺点を気にすることなく自分のプレイに専念できている。現に相手は、1回の攻撃で白のクレールを破壊、その破片でもう1つのクレールも破壊する、なんて芸当すら見せている。

そんなみさえの問い掛けに答えたのは、烈だった。

「つまりそれだけ、自分の魔法に自信があるということでしょうな。それに——」

烈が話している間に、赤と白のクレールが同時に射出された。ちょうど白のクレールが赤のクレールと真由美の間を塞ぐように飛んでおり、そのまま撃つてしまうと白のクレールも破壊してしまう。相手もそれを分かっているのか、わざとそのクレールを残したままにいる。

しかし次の瞬間、赤のクレールのみが破壊された。

「——！」

対戦相手のみならず、観客の誰もがその光景に息を呑んだ。

モニター越しにそれを観ていた野原一家、そしてスノケシとあいも、その光景に目を見開いて驚きの表情を見せる。

平静なままだったのは、ただ1人烈のみである。

「うむ、さすがは『魔弾の射手』だ」

「えっと、今のはそういう名前の魔法なんですか？」

「ええ。『マルチスコープ』で狙いを定めて、離れた場所に『銃座』を作り出す。これが彼女の得意とする魔法です。この魔法を使えば、彼女に『死角』という概念は存在しません」

「えっと……、つまり、どういうことですか？」

「簡単に言えば、好きな場所から好きな方向に弾丸を撃てるというものですよ」

「な、何だそれ！ そんなん有りかよ！」

「あつはつはつ、まさにこの競技のためにあるような魔法ですな」

思わず素で叫んでしまったひろしに、烈は愉快そうに笑いながらそう言った。

そして、自身の頭に浮かんだことをそれ以上口にすることは無かった。

今の烈の言葉は、あくまでこの魔法をスポーツ競技の枠に押し込んだ場合の話だ。

しかしこれが、たとえば『戦場』で使われたとしたらどうだろうか。

仮に自分が狙撃兵で、戦場にいる真由美を狙っているとする。彼女と自分の間には遮蔽物があり、けつして向こうからこちらを窺うことはできない。狙撃兵は彼女に弾丸を撃ち込むべく、スコープで狙いを定めている真つ最中だ。

そんな中、『マルチスコープ』によって狙撃兵の存在を確認した彼女が、殺傷力を最大にした『魔弾の射手』を使ったらどうなるか。

ほぼ確実に、自分の知らない間に死角である背後から痛恨の一撃が襲い掛かってくるだろう。しかもその発射地点は、数メートルも離れていない。万が一にも急所を外すなんて有り得ないし、他の仲間を誘い出すために手足を撃ち抜いたまま放置、なんてことも彼女には自由自在だ。

閉鎖的な空間内における制圧性能という点で、『魔弾の射手』は現代魔法の中でも随一と評されている。

たった1人で、戦争を勝利に導く切り札となる。

それこそが“十師族”たる所以であり、一般人はおろか他の魔法師からも恐れられている理由である。

「……………」

しかし烈は、けっしてそんなことをひろし達に言うつもりは無い。純粋なスポーツとして魔法を楽しんで観ている彼らに、そんな“現実”を教えて冷めさせる趣味は持ち合わせていない。

ふと横に目を遣ると、夢中になってモニターを見つめるしんのすけを挟んで座るスンノケシとあいが、視線だけをこちらに向けているのに気づいた。その口元には微かな笑みが浮かんでいるが、その目には笑いの感情は無く、まるで本当の感情を隠すための仮面のように烈には見えた。

「……………」

そんな彼に対し、烈も同様の笑顔で返した。

*

*

*

結局真由美はそのまま試合を勝ち上がり、そして特に番狂わせが起こることも無く、全試合パーフェクトという文句無しの内容で優勝した。

第24話 「勝つても負けても、それが青春だゾ」

それは摩利のバトル・ボード予選が終了してから真由美のスピード・シューティングが始まるまでの、昼食休憩が終わった直後辺りの頃。

一旦皆と別れた達也が向かったのは、ホテルにある高級士官用の客室だった。一般客が利用するエリアとの出入口で警備していた兵士が彼の存在に気づくと、それを止めるどころか中へと促し、幾つかある中でも広い部類に入る部屋の前まで案内する。

「来たか達也、まあ掛ける」

達也を出迎えたのは、数日前にテレビ電話で会話を交わした風間玄信少佐だった。本来この部屋は大佐以上でなければ使えないのだが、彼が率いる「独立魔装大隊」の特殊性、そして過去の職歴が評価され、軍内では階級以上の待遇を受けている。

部屋の中央には円卓が置かれ、そこに風間以外に4人の男女が座っている。彼らの大隊では円卓の精神をモットーとしており、このテーブルもわざわざ余所から持ってきた物だ。ここまで分かりやすく形にこだわるのも、達也を非正規の士官としてではなく一友人として呼んだという意思を表すためである。

なので最初の内は躊躇う素振りを見せた達也だったが、最終的には他の幹部達に促される形で席に着いた。

「お久し振りです。ティーカップでは様になりませんが、乾杯といきましょうか」

達也たちを出迎えた5人の中でも紅一点、レディーススーツを着こなし、まるで大企業の若手秘書の雰囲気漂わせる女性——藤林少尉の言葉に賛同したのは、一級の治癒魔法師でもある山中軍医少佐だった。

「うむ、そうだな。再会の祝杯はぜひとも必要だ」

「山中先生の場合、カップにブランデーを注ぎ足す口実が欲しいのは？」

「めでたい席に酒精はつきもの」

「……まったく、『医者の不養生』という言葉はもつと別の意味合いだったと思うんだが」

そんな遣り取りの後、6人はそれぞれティーカップを軽く掲げて乾杯した。

久し振りとはいっても、長くて半年、短くて1ヶ月ほどなので、特に積もる話があったわけでもない。互いに近況を世間話レベルで語り合った後は、自然と話題は九校戦を狙う謎の組織へと移っていく。

「やはり昨日の賊は、『ノー・ヘッド・ドラゴン無頭竜』の一味でしたか」

「ああ。だが、詳しい目的はまだ調査中だ」

「それにしても達也くん、昨夜はあんな遅くまで警戒していたの？」

「いえ、自分はCADの調節をしていました。『彼』とも、散歩をしていたところに偶然出会っただけです」

「それであるコンビンーションか……。達也くん、『彼』との信頼関係をしっかりと築けているみたいね」

「信頼関係、かどうかは分かりませんが、戦闘において馬が合うのは確かでしょうね」

この部屋に盗聴器の類が仕掛けられている可能性は限りなくゼロに近いが、このような場所においてもしんのすけの名前を出すことは極力避けている。特に規定があるわけではないので名前を出しても構わないのだが、『彼』だけでも充分通用するので達也もそれに従っていた。

「それにしても、天下の『シルバー殿』が高校生の大会でエンジニアかあ。レベルが違いすぎてイカサマのような気もするな」

「もう、真田少尉。彼だって、れっきとした高校生なんですからね？」
真田を窘める藤林だったが、そんな彼女も苦笑いを抑えることができなかつた。

そしてそれをごまかすように、彼女が達也へと視線を向ける。

「ところで、達也くんは選手として出場はしないの？ 結構良い線行くと思うんだけど」

「藤林。たかが高校生の競技会だ、『戦略級魔法師』の出る幕じゃないだろ」

「私だって、そこまで大規模な魔法の出番があるとは思ってませんよ。でも去年だって、十師族の十文字家や七草家がAランク魔法を使用した例があるじゃないですか」

「それとこれとは事情が違う。彼の魔法は『軍事機密指定』だ、衆人環視の競技会で使うべきではない。——達也、分かっていると思うが、もし選手として出場するようなことがあれば——」

「分かっていますよ。そのような魔法を使わなければならない状況に追い込まれば、潔く負け犬に甘んじます。——もつとも、自分が選手として出場する事態になるとは思えません」

達也の言い分はもつともだ。そもそもエンジンニアとして出場していること自体、達也にとっては想定外なのである。既に出場選手が確定しているこの状況で、自分が選手となるなんてまず有り得ない。

しかし達也のそんな考えを、真田が（ニヤニヤと嫌らしい笑みと共に）否定する。

「いや、そうとは限らないぞ？ 何てったって今の君の傍には、あの『嵐を呼ぶ』と名高い『彼』がいるんだからな」
「……………」

そんな軽口に対し、達也は真田を一睨みするに留めた。

否定の言葉を添えようとしたのだが、残念ながら彼には的確な言葉が思いつかなかった。

*

*

*

大会2日目。

さつそく、達也にとって想定外の事態が発生した。

昨日、摩利と平行して男子のバトル・ボードも行われたのだが、その結果が思っていたよりも芳しくなかった。試合自体は勝ち進んだものの摩利のような圧勝劇ではなく、特に出場選手の1人である服部は本調子でないのかギリギリの内容だった。これを重く見た作戦スタッフの鈴音は、担当エンジンニアと付きつきりで調整させることにした。

しかしそうになると、そのエンジニアが担当するはずだった女子クラウド・ボールの代役を立てなければならぬ。クラウド・ボールは1日の試合数が多く副担当がいないと厳しいが、かといって男子のサブを女子にも回すというのは負担が大きすぎる。

明日と明後日の両方ともオフであり、突然の事態にも対応できる優秀な人物。

そんなわけで、達也に白羽の矢が立ったのである。

技術スタッフ用の校章入りブルゾンに袖を通し、昨日の夜に急遽渡された出場選手のサイオン特性データ内蔵の記録デバイスを持った達也が、エリア内に設けられた第一高校用の天幕へと足を踏み入れた。特設のテントだけあって簡易的な造りだが、CADを調整する機材は一通り揃えられているし、試合の様子をここからモニターで確認することもできる。

そんな天幕にやって来た達也を真っ先に出迎えたのは、彼をここに呼んだ張本人である生徒会長——ではなかった。

「おつ、達也くん！　こんばんわー」

「……それを言うなら『おはよう』だろ。というか、なんでしんのすけがここに?」

「深雪ちゃんと雫ちゃんが新人戦で出るからって『氷倒し』の方に行って、他のみんなもそれに乗ったからオラー人だけなの。んで、どうせ1人だったら客席で観るのもなあって思ってここに来たんだけだゾ」

「しんのすけのご家族も向こうに行っただけ?」

「『氷倒し』の方が派手で面白そうだからって。本当はオラもそっちに行きたかったんだけど、父ちゃんから『おまえはこっちで少しでも自分の試合の参考にしろ』って言われちゃって」

「あらあら。それじゃせつかく来てくれた可愛い後輩のためにも、試合の参考になる面白い試合にしなくちゃね」

おどけた声色でそう言いながらその場に姿を表した真由美は、熱電効果による冷却機能の付いたクーラージャンパーに身を纏っていた。

そして彼女の右手には、おそらく試合で使用するであろうCADが

握られている。銃身の短い拳銃型のそれは、1系統の魔法しか使えない代わりに発動までの時間を高速化した特化型だ。

「会長は確か、普段は汎用型でしたよね？」

「まあね。この試合では1種類しか使わないし」

「移動か、それとも逆加速ですか？」

「正解。『ダブル・バウンド』よ」

「運動ベクトルの倍速反転、ですか。低反発性のボールでは、相手コートまで戻らないことがあるのでは？」

「去年は他の加速系魔法も入れてただけど、結局は使わなかったのよね」

真由美から受け取ったCADを軽く眺めながら、達也は彼女の言葉に内心舌を巻いた。本人は事も無げに言っているが、相当の力量差が無ければできないことだ。

と、真由美がテーブルに置かれたデジタル時計を一瞥する。

「さてと、そろそろ時間ね。達也くん、一緒に行きましようか。——それじゃしんちゃんも、ちゃんと試合を観ていてね」

「はいほーい。頑張つてね、真由美ちゃん！」

しんのすけの激励を背中に受けながら天幕を出ていく真由美に、達也は黙ってその後に続いた。試合直後にCADを調整する場面も無いわけではないが、別にわざわざコート脇までついていく必要は無い。とはいえ頑なに拒否するほどのことでもないのです、それを指摘する真似はしなかった。

しかしコート脇に到着した真由美が羽織っていたクーラーパンツを脱ぎ、ジャンパーの下に隠されていた姿が露わになったとき、達也は目をギョツと見開いて思わず尋ねた。

「……もしかして、そのウェアで試合をするんですか？」

「え、そうだけど……。もしかして、似合わない？」

「……いえ、とてもお似合いです」

彼女が着ていたのは、テニスウェアとしか形容できないポロシャツにスコート姿、しかも競技用ではなくファッション用だった。ちよつと体を傾けただけでアンダースコートが見えてしまうであろうその

格好は、ボールを追い掛けてコート中を走り回るクラウド・ボールにはどう考えても相応しくない。

しかしまあ、彼女なら何でもありだろう、と達也はこれ以上考えないようにした。

そんな彼を余所に真由美はコートにぺたりと座り込み、大きく脚を広げた。「ちよつと手を貸してもらえるかしら」という彼女の言葉に、達也は了承して彼女の背中を斜めに押してやる。ほとんど抵抗も無く彼女の胸は脚につき、左右4回ずつそれを繰り返したところで「もういいわ」と声が掛かったためその手を離れた。

と、両脚を揃えた真由美が悪戯っぽい目つきと共に彼へと手を差し出した。達也は最初彼女の意図が分からず首を傾げていたが、彼女が少し不満げに頬を膨らませるのを見て察したのか、彼女の正面に回り込んでその手を握って軽く引つ張り上げた。膝を揃えたまま器用に立ち上がった彼女の顔は満足げだ。

「もし私に弟がいたとしたら、達也くんみたいな感じなのかしらねえ」「そんなに慣れ慣れしくしているつもりはありませんが……」

「そういう意味じゃなくって、達也くんは変に構えたりオドオドしないじゃない？ 敬語は使うけど遠慮はしないし、冷たいのかと思ったらこうして我が儘を聞いてくれたりするし」

「オドオドしないという意味でなら、しんのすけもそれに該当すると思うのですが」

「しんちゃんはねえ……。一緒にいて確かに楽しいけど、あそこまでマイペースだと振り回されそうで大変じゃない？ その点、達也くんなら安心ね」

振り回されそうで大変、というのは真由美のような姉を持ったこちらも同じことだと思ふのだが、と達也は考えたがさすがに口にはできなかつた。

と、しんのすけが話題に挙がったからか、真由美はふと彼のいる天幕の方へと視線を向けた。

「達也くんは、しんちゃんとプライベートな話をするこつてあるの？」

「プライベートな話、というと？」

「うーん、そうねえ……。たとえば好きな女の子とか？」

「しんのすけの場合、高校生は恋愛の対象外でしょう。子供には興味無い、ですからね」

「確かにそんなこと言ってたわね。……。それってやつぱり、歳を取らなかつたとはいえ100年近く生きてきた影響かしら？」

「どうでしょうか？ 案外、彼の元々の性格から来ているようにも思えますが」

そう話す達也の視線も自然と、真由美と同じく天幕へと向けられていた。

春日部を中心に発生していた局所的タイムループによって、100年近く歳を取らずに5歳児のままだった少年・野原しんのすけ。その間、一般的な常識では計れない様々な騒動に巻き込まれ、その度に多くの仲間と共にそれを解決に導いてきたことで、彼を「英雄」と称している者もけつして少なくない。

だとしたら、日本の魔法界に君臨する「十師族」は、彼をどう見ているのだろうか。

ふと湧いた彼の疑問は、真由美の試合の時間がやって来たことで一旦保留となった。

クラウド・ボールはテニスに似た競技だが、サーブという制度は無い。圧縮空気によって低反発ボールがコート内に射出され、それを相手コートに打ち込んで1回バウンドするごとに1ポイント、転がったり止まっているボールに対しては0.5秒ごとに1ポイント加算される。コート全体は透明な壁に覆われており、20秒ごとにボールが追加射出、最終的には9個のボールを1セット3分間休み無く追い掛け続けることとなる。インターバルを3分ずつ挟んで、合計3セット（男子は5セット）行われる。

そう。普通ならば、ボールを追い掛け続けるはずなのである。

——さすが会長、もはや勝負にすらなっていない。

達也の目の前で繰り広げられているのは、試合などではなく一方的な「蹂躪」だった。

相手も代表に選ばれるだけあって、かなりの手練れだ。移動魔法を使ってボールが飛び込んでくる場所に先回りし、両手で持つ拳銃型のCADをボールに向けて打ち返していく。

しかしボールがネットを超えた瞬間、それが倍のスピードになって返ってくるのである。相手はそれを打ち返すために、再び移動魔法でそのボールを追い掛けていく羽目になる。

一方真由美は、ただ立っているだけだった。祈るように小銃型のCADを握りしめているだけで、ネットよりもこちら側に来たボールが自動的に返されていく。一步も動いていないのだから、達也が試合前に心配していた短いスコートが微塵も揺れることはない。

真由美の魔法はただ来たボールを跳ね返しているだけなので、ボールが1個の内は相手も頑張って返していた。しかしそれが2個、3個と増えていくごとに相手のミスが比例して増えていき、最終的に9個になったときにはもはや手の施しようが無くなっていった。

第1セット終了のブザーが鳴る頃には、相手選手は膝から崩れ落ちるほどに疲労していた。

結果は85対0。どちらが0かは、書くまでもないだろう。

小さく息を吐いてコート脇に戻ってくる真由美を、達也はタオルを彼女に手渡しして出迎えた。もともと、1滴も汗を掻いていないので無意味かもしれないが。

「お疲れ様でした、会長」

「もう達也くん、まだ第1セットが終わったばかりよ。気を抜いちや駄目」

「いえ、おそらく相手は棄権しますよ。ペース配分を誤ったせいで、サイオンが枯渇してるので」

なぜそれが分かるのか真由美が聞き返そうとした次の瞬間、審判団による相手選手の棄権が告げられた。戸惑う彼女を尻目に「次の試合に備えてCADの調整をしましょう」と言い残して天幕へと戻っていく達也に、彼女は慌ててその後を追い掛けていった。

クラウド・ボールは予選から決勝まで半日で終わらせる、かなりスピーディな競技だ。当然CADの調整に当てられる時間も少なく、エンジンニアとしては少しでも時間を無駄にはできない。なので天幕へと戻った達也はすぐに真由美からCADを借りて調整機に繋げると、画面に映し出される文字列に注目しながらキーボードに指を走らせ始めた。

そしてその作業を、右から試合中のウェアのままの真由美が、左からしんのすけが興味深そうに眺めていた。ちなみに彼女がクローラージャンパーを着ていないのは、下手に体を冷やさないように達也が使用を止めたからである。彼に他意が無いのは、肩が触れそうなほどに近い彼女の剥き出しの太腿にまるで見向きもしないことから分かる。

「しんちゃん、さっきの試合はどうだったかしら？」

「凄かったゾ、真由美ちゃん。でもオラの試合の参考にはならないと思う」

「あらら、それは残念。——それで達也くん、どうかしら？」

真由美の質問は何とも要領を得ないものだが、達也はそれを正しく解釈して答える。

「ご自分で上手に調整されているようですね。特にソフトを弄る必要は無いでしょう」

「ふふ、お世辞を言わない相手から褒められるのは良いものね」

「つてことは、決勝まであの魔法で行く感じ？」

「まあ、そうなるな。——ただまあ、一応『ゴミ取り』はしておくが『ゴミ取り?』」

達也の言葉に、真由美としんのすけが同時に首を傾げた。テーブルを見渡しても、CADを分解する器具もクリーナーも見当たらない。「ハードではなくて、ソフトの方ですよ。CADのシステム領域に、アップデート前のファイルの残骸があるようです。不要なデータを削除しておけば、僅かですが魔法の効率が上がりますよ」

「へえ、そうなの。さすが達也くんね、私は気づかなかったわ」

「ほーほー、さすが達也くん。これで真由美ちゃんの優勝は間違いないですね！」

「ふふっ。駄目よしんちゃん、油断大敵よ」

まるで自分のことのように胸を張って優勝宣言をするしんのすけに、真由美は口では窘めていても笑みを漏らさずにはいられなかった。達也はそれを聞きながらほんの僅かに口角を上げ、ゴミ取りの作業を淀みないタイプピングで進めていく。

しかし、

「そういえば達也くん、あいちゃんと会ったことがあるって聞いたけど本当？」

「――！」

しんのすけが何気なく尋ねたその質問に、達也は驚愕と不審の意を咄嗟に呑み込み、口を微かに引き結んだ。

一方真由美は、その話題に素直な関心を抱いたようで、

「あいちゃんって、もしかしてこの大会にも来ている酔乙女あいさんのこと？」

「おっ、そうだゾ。よく分かったね」

「彼女がしんちゃんと同じ春日部出身なのは有名だから、もしかしてって思っただけ。それで、彼女は達也くんと会ったことがあるの？」

「あいちゃんが仕事でCADを作る会社に行ったとき、達也くんと深雪ちゃんに会ったんだって。『将来を見据えて自分の父親の会社の工房を見学するなんて素晴らしい』って褒めてたゾ」

「……ええ、父親がCADメーカーに勤めてまして、工房を時々見学させてもらってるんです。そのときに彼女と偶然顔を合わせたことがありまして。とはいえ、多少世間話をしただけですけどね」

変に誤魔化そうとすると逆効果になると悟った達也は、素直に真実を話すことにした。傍目には普通の世間話にしか聞こえない内容だったので、彼の言っていることは別に嘘ではない。真由美もそれを素直に信じたようで「私も一度彼女と話をしてみたいわ」と達也を羨ましがっていた。

ちらり、と達也はしんのすけへと視線を向けた。彼はそれ以上会話に参加する様子も無く、調整機のディスプレイに表示された文字列を目で追うのに夢中なようだ。

——少なくとも、しんのすけに何か吹き込んだ様子は無さそうだな。

大きな溜息を吐きそうになるのを、すんでのところで食い止めた。

*

*

*

元々の天性の才能に加え、達也のエンジニアとしてのサポートも受ける真由美に付け入る隙があるはずもなく、真由美はその後も1つの失点すら許さないパーフェクトゲームで優勝を飾った。第一高校の生徒会長として、まさにこれ以上ない最高の成績を収めたといったところだろう。

アイス・ピラーズ・ブレイクに出場する花音も順調に勝ち進み、前人未到の3連覇に向けて上々といったところ——と普通ならばそう考えるだろう。

しかし2日目の競技結果を確認した鈴音ら作戦スタッフと、選手を纏める立場である克人の表情は、それほど芳しいものではなかった。

「……これは、ポイント計算をやり直す必要がありますね」

鈴音の声がやけに冷たく聞こえたのは、こちらがショックを受けているからか、それとも彼女が感情を意識的に抑えているからか。いずれにしろ、それを聞いた克人は無言の肯定を返した。

彼女達の計算が狂ったのは、この日の午後に行われた男子クラウド・ボール。桐原を含む3人が出場したのだが、いずれも1回戦敗退、2回戦敗退、3回戦敗退という結果に終わってしまった。確かに男子クラウド・ボールは他の競技に比べても力不足の印象はあったが、その代わり大本命もいなかっただけに充分優勝を狙える位置にいたはずだった。

「新人戦のポイント予測が困難ですが、現時点でのリードを考えれば、女子バトル・ボード、男子ピラーズ・ブレイク、それにミラージ・バツ

トとモノリス・コードで優勝すれば安全圏だと思われれます」

作戦スタッフである2年生がそう言うが、それは些かハードルが高すぎるように思える。克人や摩利が出場する競技だからその予測なのだろうが、何事にも「絶対」などというものは存在しない。そのような見通しは、万が一のことが起こったときに不安があると思うのだが。

——いや、それよりも……。

克人の脳裏に過ぎったのは、無鉄砲な性格の反面、責任感の強い桐原のことだった。

*

*

*

選手達関係者が泊まるホテルのロビーにはカフェが併設されており、飲食をするためのソファやテーブルなども置かれている。今は夕食時なので平時よりも客の数は少ないが、遅めに夕食を摂る予定の人、または既に夕食を終えた人がちらほらとソファに座り、本日の試合についてあれこれ語る光景が見られる。

そんな中で一際騒がしい、5人組のグループがあった。

「こういうのを観るのって初めてだったけど、やっぱり生で見るとも
の凄い迫力だなあ！」

「特に千代田花音って人が一気に氷の柱を壊したときなんて、氷の破片がキラキラしてすっごく綺麗だったもの！ ネネと1つしか歳が
違わない女の子なのに、すっごくカッコ良かったわあ！」

「千代田家の『地雷原』は、魔法師の世界ではかなり有名。生で観ら
れて良かった」

「へえ、そうなんだ。さすがボーちゃん、よく調べてるね」

「ほーほー、そんなに面白かったのかあ。後で真由美ちゃんに頼んで
見せてもらおうと」

興奮したようにそう話す風間、ネネ、ボー、マサオの4人に、キラ
ラメルマキアートを飲みながらそれに相槌を打つしんのすけ。幼稚
園からの幼馴染であり、『春日部防衛隊』なる組織を結成して一緒に

遊んでいたほどの仲であるこの5人の関係は、高校生になって顔を合わせる機会が減ってしまった程度で揺らぐほど柔なものではないよ
うだ。

「それにしても、こんな大きな大会にしんちゃんが出るなんて未だに
信じられないわ」

「本当だよ。しんちゃんに魔法の才能があったことも驚きだけど、
まさか第一高校なんて凄いエリート学校に入学できるとは思わな
かったし、しかもそこで代表選手に選ばれるなんてねえ」

「まあ！ オラって天才ですから！」

「あんまり調子に乗るなよ、しんのすけ。上には上がいるもんだし、そ
れにしんのすけの出る『モノリス・コード』なんて特に危険な競技な
んだからな。せいぜい大怪我しないように気をつけるんだな」

「あらあ？ トオルちゃんったら、オラを心配してくれてるのお？」

「なっ——！ そんなんじゃない！ ボクはただ——」

「風間くん、しんちゃんがちゃんと一人暮らしてできるのか、学校で上手
くやれてるかずっと心配してた」

「ちよっ、ボーちゃん！ 何を言ってるのかな！ ボクはそんなこと
一度も——」

「いやあん！ トオルちゃんったらあー！」

しんのすけが風間に抱き着き、風間が顔を真っ赤にして引き剥がそ
うとするという懐かしい光景に、他の3人は特にそれを止めようと
せず楽しそうに笑っていた。

と、ふいにマサオが何かに気づいた。

「あれっ？ しんちゃん、あそこにいるのってしんちゃんの学校の人
じゃない？」

「どれどれ？ ——おっ、桐原くんだ」

しんのすけ達のいるカフェスペースから離れた所にある壁際のソ
ファーにて、項垂れたように力無く座る桐原の姿があった。人1人分
ほど空けた隣には彼の恋人でもある紗耶香も座っているが、話し掛け
ようと口を開きかけては諦めたように視線を逸らす、というのを何度
も繰り返している。

「ちよつと行ってくるね」

「あ、おい、しんのすけ——」

明らかに話し掛けづらい雰囲気にも関わらず、しんのすけはまったく躊躇することも無く立ち上がって彼らへと向かっていった。

しんのすけの足元から伸びる影が桐原に差し掛かり、桐原が顔を上げて彼の存在に気づく。

「……よう、野原か」

「どうしたの、桐原くん？ そんなに落ち込んだじゃって」

しんのすけの直球すぎる訊き方に隣の紗耶香が表情を強張らせるも、桐原はそれを気にする余裕も無いのかフツと自嘲的な笑みを浮かべた。

「おまえだって観てただろ。あつさり2回戦で負けちまったから、こうして落ち込んでんのさ」

「まあまあ。来年もあるんだから、それまで頑張れば良いじゃない」

「俺はおまえほどそこまでポジティブにはなれねえんだよ……。まあ、何つーか、自分が情けなくなつてなあ……」

しんのすけが首を傾げたまま黙っているのを、桐原は続きを促しているとは解釈して口を開いた。

「ここにきてから、服部が何だか調子悪いだろ？ それでまあ、具体的な内容はアイツのこともあるから言わねえけど、それに対してアドバイスみたいなことを言ったわけよ。そうやって人の心配なんかして俺が特に調子が悪いつてわけでもないのに2回戦止まり、一方アイツは本調子じゃなくてもしつかり準決勝まで行つてんだからよ……。俺のせいでみんなにも迷惑掛けたし、合わせる顔がねえつーか——」

「いやあ、そんなこと無いでしょ」

そう言い放つしんのすけに、桐原は顔を上げてしんのすけを見遣つた。

こちらを見下ろす彼の表情は、普段と同じあっけらかんとしたものだった。

「桐原くんの試合、もの凄く盛り上がったゾ。一緒に観てた真由美

ちやんもずっと声をあげて応援してたし、達也くんも最後まで興味津々って感じだったし」

「……………」

「真由美ちゃんから聞いたけど、相手って優勝候補だった三高のエアス？ だったんでしょ？ 真由美ちゃん、『そんな選手を相手にフルセットまで粘るなんて凄い』って褒めてたゾ。しかも桐原くんと戦ったその人、すつごく疲れてたから次の試合ボロ負けだったし。あれはほとんど引き分けみたいなモンでしょ」

「……本当か？」

「本当だって。——そうでしょ、紗耶香ちゃん？」

突然話を振られて驚く紗耶香だったが、即座に首をブンブンと力強く縦に振って同意した。

「そ、そうよ桐原くん！ 桐原くんを情けないなんて思う人は誰もいないし、私も……その、凄く格好良かったって思ってる！」

「壬生……」

顔を真っ赤にして力強く断言する紗耶香に、桐原はフツと笑みを漏らした。

その笑みは、先程のように自嘲的なそれではなかった。

「まあ、おまえは気を遣って嘘を吐くようなタイプじゃねえし、本当にそうだったんだろうな」

桐原はそう言って、ソファァーから勢いよく立ち上がった。

「そうさ。三高のエアスと互角に戦ったんだ、俺も捨てたもんじゃねえよな。——わりいな壬生、気まずい思いさせちまって」

「う、ううん！ そんなこと無いわ！」

「サンキュな、野原」

桐原はそう言い残し、ズンズンと力強い足取りでその場を離れていった。それを見ていた紗耶香が慌てて立ち上がり、しんのすけに一言札を言って早足で彼の後を追いつけていった。

「うむ、どンドン壁にぶつかっていくのだ、若人よ」

そんな2人の背中を見送りながら、しんのすけは腕を組んでウンウン頷いて謎のキャラを演じ、

「……へえ、しんちゃんが誰かを励ますなんてねえ」

「人って成長するものねえ」

そんな彼の後ろで、幼馴染4人が先程の光景に目を丸くしていた。

第25話 「犯人は誰? 大波乱の九校戦だゾ」

大会3日目。

女子バトル・ボード準決勝の会場は、優勝候補の大本命である摩利の出番がもうすぐ始まるということではほとんど満席になっていた。現在はスタート直前の最終調整を行っているところであり、相手の三高と七高の選手が緊張で顔を強張らせているのに対し、摩利は不敵な笑みを浮かべてボードの前で仁王立ちをしている。そんな彼女の堂々とした振る舞いに、ますます観客の女性陣が熱狂的な歓声をあげていた。

そんな彼女達を横目に、達也がスタートラインを見下ろしながら口を開いた。

「それにしても、去年の決勝カードがここで見られるとはな」

「渡辺先輩が本命ならば、あの七高の選手は対抗」

達也の独り言にも似た呟きに、この中では一番の九校戦フリークである雫が答えた。先程彼が言った「去年の決勝カード」という情報も、彼が元々知っていたのではなく雫からの情報である。

そしてそんな彼女の言葉に反応したのは、短い期間ながらすっかり一緒に行動することが当たり前となった春日部組の1人・野原みさえだ。

「何? あの選手って、そんなに凄いの?」

「七高は瀬戸内海に近い場所に設立されていて、海上で有用となる魔法を通常のカリキュラムとは別に教えているんです。なので別名“海の七高”とも呼ばれているんですよ」

「へー。ということとは、そう簡単に勝たせてくれないってことね」

そう言う彼女の声色は、若干の期待感が込められたものだった。しんのすけが身を置く一高を応援しているのは事実だが、スポーツというのは誰が勝つか分からない接戦こそが最も面白いというのもまた事実だ。同年代の中ではトップクラスの實力を誇る者同士による熱戦の予感に、最前列の女性陣とはまた違った意味でボルテージが高まっていく。

しかしそんな観客達の中でエリカは、日差しが強い中で一切日焼けしていない細い脚と腕を組んでむくれるという、如何にも機嫌が悪いとアピールするようなポーズを取っていた。スタートを待つ摩利や熱狂する観客席を映し出すモニターに目を遣っては、イライラを吐き出すように大きな溜息を吐いている。

そしてそんな彼女の隣に座るネネも、同じようにイライラした様子で鼻を鳴らした。

「まったくさあ、いくら格好良いからって試合とは関係無いところで歓声をあげるのとはどうかと思うわよねえ」

「へっ？ あっ、そ、そうね！ ネネの言う通り、ちゃんと試合を観ないとー！」

エリカに同意したはずなのになぜかどもる彼女の反応に、ネネは若干不思議そうに首を傾げた。

しかし彼女のそんな疑問は、1人の少年の登場によって掻き消された。

「ほっほーい。みんな、おまたー」

「もう、しんちゃん！ 遅かったじゃない！ もう少して始まるころだったわよ！」

「んもう、ネネちゃんったら怖いんだからあ。したかないでしょ、なかなかウンチが出なかったんだからあ」

「ちよ——ハッキリ言うんじゃないわよ！」

目を吊り上げて怒号をあげるネネに、しかし彼は一切悪びれること無くおどけた様子で体をくねらせ、マサオとボーの間にあつた空席へと滑り込んだ。もちろん偶然空いていたのではなく、わざわざ彼のために空けていたものだ。

と、それを待っていたかのようなタイミングで、会場中にブザーが鳴り響いた。まもなくレースが始まる合図であるそれに、摩利を始めとする選手達は一斉に構えの姿勢に入った。先程の女性客達も含めて観客達が静まり返り、スタートの瞬間を見逃さないように固唾を呑んで見守っている。

そしてその数秒後、スタートの合図であるブザーの音が鳴り響い

た。

3人の選手が一齐にスタートするが、先頭に躍り出たのは摩利だった。しかしさすが準決勝、そのまま一方的な試合展開にはならず、七高の選手がピツタリと彼女の後ろにつけている。2人の間にある水面は、互いに魔法を撃ち合っていることで大きく波立っている。普通ならば前を走る摩利が引き波の相乗効果で優位に立つのだが、七高の選手は巧みなボード捌きでそれを補っていた。

観客席前の長い蛇行ゾーンを通り過ぎても、2人の差はほとんど変わらない。ここを過ぎると、最初の難関である鋭角カーブに差し掛かる。ここからは観客席からコースが見えなくなるので、観客は一齐にモニターへと顔を向けた。

達也も他の観客と同じように、大きなモニターに映し出された鋭角カーブの映像に目を向ける。他の観客が選手の様子に目を奪われている中、達也はコーナーの出口辺りに何と無しに目を遣り、

「——むっ?」

おそらく彼でなければ分からないほどに小さな「違和感」に、目を奪われた。

なので彼は、不覚にもその瞬間を見逃した。

「あっ!」

観客の1人があげたその悲鳴に、達也が即座に選手へと視線を戻す。

今からカーブに差し掛かるというのに、七高のボードは猛スピードで水面を走っていた。それに乗っている選手は、大きく体勢を崩している。

「おいおい、何かあの選手、様子がおかしくないか?」

「……明らかにオーバースピードだ」

ひろしが若干焦った声をあげ、達也が抑揚を抑えた声で呟いた。七高の選手は、モニター越しでも分かるほどに動揺している。まさか、制御ができないのだろうか。

もはやスピードの出しすぎで水面も碌に掴めていないそのボードは、その勢いのままフェンスに激突しようとしていた。

前を走る摩利を、巻き込もうとしながら。

「——！」
ちょうどフェンスの方へ体を向けていた摩利だったが、異常に気づいたのか後ろを振り返った。猛スピードでこちらに突っ込んでくる七高の選手の姿を見るや、フェンスからの反射波も利用して素早くボードを反転させると、七高のボードを移動系魔法で吹き飛ばし、残った選手を待ち構えるようにその場に踏み留まった。

「おい、まさか選手を受け止める気か！」

「そんなことしたら、渡辺先輩もフェンスに激突しちゃう！」

レオと美月が顔を青ざめて叫ぶが、達也が冷静な表情のまま2人に話し掛ける。

「問題無い。加重系の慣性中和魔法を自分の体に掛けている。あれならば選手が激突してきても、渡辺先輩の体は1ミリたりとも動かない」

「そ、そうか……。なら安心だ——」

レオがほつと息を吐こうとした、そのとき、

摩利の足元の水面が、大きく沈み込んだ。

「——！」

発動しかけていた慣性中和魔法は、ふいに浮力を失ったボードに体を崩されたことで不発、そしてそのまま七高の選手と激突した彼女は、その衝撃に大きく吹き飛ばされ、そのままもつれ合うように後方にあるフェンスに激突した。どう見ても受け身が取れたようには見え、摩利が起き上がる様子は無い。

会場中にブザーが鳴り響き、レース中断を知らせる旗がバサバサと振られる。

「——摩利ちゃん！」

「待て、しんのすけ！——深雪達はここに！」

「了解しました、お兄様！」

真っ先に飛び出していくしんのすけに、達也は素早く深雪に指示を

出して即座にその後を追った。突然の事態に周りの観客がパニック状態になつている中、2人はそんな彼らの間をスルスルと擦り抜けてあつという間に姿を消した。

「皆さん！ 今は落ち着いて、ここから動かないで！」

「わ、分かった！ ——おい、みんな！ とりあえず一旦座るぞ！」

深雪の呼び掛けにひろしが即座に答え、彼の言葉で今にも駆け出そうとしていた春日部組の面々がストーンとその場に腰を下ろした。この中では最年長であるひろしが真っ先に指示を出せたことが功を奏したようだ。

とはいえ、完全に落ち着きを取り戻したとは言い難く、特に摩利とさほど歳の離れていない子供を持つみさえなど、モニターに映る摩利の倒れ伏す姿に顔を真っ青にしている。

「ね、ねえ！ あの子、大丈夫なの!？」

「問題ありません！ 今の医療技術ならば、事故直後に適切な応急処置を行えばそうそう大事には至りません！」

実際は怪我の程度を診なければ断言できないのだが、深雪は敢えてそう言い切った。そのおかげかみさえは強張っていた顔を若干和らげ、他の皆のようにその場に座って気を落ち着かせるように深呼吸をする。そしてそれを、隣に座るひろしが彼女の背中を擦ってやることでサポートする。

当面は問題無いと判断した深雪は、摩利や七高の選手を映すモニターへと目を向ける。

その表情は摩利の身を案じるものであり、そして彼女をこんな状態に追いやった「原因」に対する怒りを滲ませるものだった。

*

*

*

たとえば会場がどれほどの喧騒に包まれようとも、遮音性能の高い防弾ガラスで仕切られている特別観覧室には直接届くことは無い。会場の音声自体は部屋の中にあるスピーカーから伝わってくるが、一定以上の音量は自動的に抑制されるので実際の会場ほど騒がしくなく、

せいぜいファミレスの話し声程度だ。

そんな部屋の中では現在、3人の男女がそれぞれ1つずつソファ―に座って会場の様子を見守っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

酔乙女あいは、その大きな黒い両目を鋭く細めて身を乗り出して。

スノケシは、背もたれに寄り掛かりながらも表情固く口を引き結んで。

九島烈は、背筋を伸ばして真意を読み取らせない無表情で。

姿勢や表情に若干の違いはあるものの、全員が口を開かず、摩利と七高選手の救助光景を中継しているモニターをじつと見つめている。2人の周りでは大会の医療スタッフが忙しなく動き回っているが、その中に観客席から駆けつけたと思われる達也としんのすけの姿もあつた。

やがてその場での応急処置が終わり、本格的な治療のために彼女達を運ぶ準備が始まった辺りで、スノケシが烈へ視線を向けて口を開いた。

「こういった事故というのは、この大会では珍しくないのでしょうか？」

「いくら殺傷性の高い魔法を制限しており、選手の安全には最大限の注意を払っているとはいえ、怪我の可能性を完全に排除するなんてことはできませんよ。——とにかく今は、彼女達の無事を祈るばかりですな」

「……確かに、そうですね」

スノケシはそう呟き、ふと先程から黙り込んだままのあいへと視線を向けた。

モニターを見つめる彼女は目を見開いて口元に手を遣り、若干青ざめたように顔色を悪くしていた。確かに自分とほぼ同年代の同性が大怪我を負うというのは、かなりショッキングな光景に見えることだろう。世界を股に掛ける大企業の令嬢とはいえ、やはり彼女も年頃の

少女ということ——

「あの渡辺摩利とかいう女……、あろう事かしん様に介抱されるなんて……。私もそんなことしてもらったこと無いというのに……」
「……………」

彼女の眩きは聞こえなかったことにしたスンノケシだった。

* * *

「——(ハッ)はっ。」

摩利が目を覚ましたとき、最初に目に映ったのは見覚えの無い天井だった。体に重くのし掛かる倦怠感からか、頭に靄が掛かったように現状を上手く把握できない。

「摩利、私に分かる？」

と、聞き覚えのあるその声に、彼女はそれに継るように顔をそちらへと動かした。

心配そうな表情を浮かべる真由美と目が合った。

「真由美……、ここは病院か」

「ええ、裾野基地の病院よ。——あ、まだ動いちや駄目。肋骨が折れてたから魔法で繋いでるけど、まだ定着してないわ」

現代魔法の発達は、医療技術にも多大な恩恵を与えた。つい100年ほど前とは比べ物にならないほどに技術は進歩し、昔なら全治に何ヶ月も掛かるような大怪我すら簡単に治してしまう。

とはいえ、あくまで魔法治療は応急処置であり、完全に骨が定着するには1週間ほどの時間を要する。

「1週間って……！ それじゃ——」

「ええ、ミラージ・バットも棄権ね。仕方ないわ」

「……レースはどうなった？」

「七高は危険走行で失格、一高は二高と3位決定戦よ」

「……他の選手は？」

「はんどーくんが決勝進出。ピラーズ・ブレイクは、十文字くんと花音ちゃんがそれぞれ決勝リーグに進出したわ」

「……成程、私だけが『計算違い』というわけか」

右手で目元を隠しながら、摩利は悔しそうに歯噛みした。

「でも摩利のおかげで、七高の子は大した怪我も無かったわ。もしあのままフェンスに激突していたら、魔法師生命を絶たれるほどの大怪我だったでしょうね」

「……それで自分が大怪我をしてたら世話無いがな」

悪態を吐いてみせる摩利の偽悪的な態度に、真由美はクスリと笑みを漏らした。

「でも摩利がそれくらいに怪我で済んだのは、あどときにきちんと応急処置がされたおかげなのよ？ 後で達也くんとしんちゃんにお礼を言わないとね」

「何？ まさかその2人が、アタシの怪我の応急処置をしたというのか？」

「メインでやったのは達也くんだけど、しんちゃんだって色々手伝ってくれたわ。大会の医療スタッフよりもあの2の方が駆けつけるのが早かったし、達也くんが作業してる間にしんちゃんが担架を持ってきたりとか息ピッタリだったんだから」

「……そうか。風紀委員の活動が活きたようで何よりだな」

徐々に普段の調子を取り戻していく摩利に真由美もニツコリと笑みを浮かべ、しかしふと真面目な表情になると摩利に向き直った。

「——摩利、あどとき、第三者による妨害を受けなかった？」

「……どういふことだ、真由美？ 確かにボードが沈み込んだとき、足元から不自然な揺らぎを感じたが……」

「そう。私もモニターで見えていたとき、魔法特有の不連続性があったように感じた。けどあなたも七高の選手も、そんな魔法は使っていない。残る可能性があるとするれば、第三者による魔法での妨害しか有り得ない」

ハッキリと言い切った真由美に、摩利の顔にも自然と緊張が走る。

「今、達也くんたちが大会委員会から事故の映像を借りて解析してるところよ。もし本当に第三者による妨害があったとしたら、もうこれは一高の順位だけの問題じゃない。——九校戦全体、ひいては魔法科

高校全体に関わる問題なんだから」

*

*

*

一方その頃、達也は卓上用の小型ディスプレイ（小型といっても20インチほどはある）の画面を2分割して、原因の究明に当たっていた。1つは事故の瞬間をそのまま記録した映像が、もう一方はそれをワイヤーフレームに変換したシミュレーション映像が映し出されている。

彼が現在いるのは、達也としんのすけが寝泊まりしている部屋。2人の部屋は機材置き場も兼用するため通常のツインよりも広い部屋を取っており、少々の来客ならば迎え入れられるだけの余裕がある。

よって現在ここには部屋の主である2人だけでなく、達也の妹である深雪、達也と一緒に解析作業をしていた五十里、彼のフィアンセということについて来た花音、そして達也が協力を要請した幹比古の姿もあつた。

「ねえ司波くん。同じ技術スタッフの啓は分かるけど、なんで吉田くんもここに呼んだの？」

「それは順を追って説明します。まずはこちらを見てください」

達也が画面の前からどき、それに合わせて4人が身を乗り出して画面に注目する。

1人足りない気がするが、それは気のせいではない。なぜならしんのすけは最初から画面を見る素振りも見せず、自分の使っているベッドに腰掛けて遠巻きに眺めるだけだからだ。

達也はそれに対して追及するつもりは無く、さっさと本題に入ることにした。

「結論から言うと、第三者の介入があつたとみて間違いないでしょう。誤差では片づけられない力が、“水中”から掛けられているのが分かります」

「——水中？」

その言葉の不可解な点に真っ先に疑問の（と同時に不審の）声をあ

げたのは、花音だった。

「ええ。俺も最初は、外部から高圧の空気塊を水面に叩きつけたのだと思っていました。まあ、そんなことをして渡辺先輩が気づかないはずがないので、あくまで低い可能性でしかなかったんですが。——しかしこの映像を見ている限り、水面を陥没させた力は水中に生じています」

「司波くんの解析が間違っている可能性は？」

花音の遠慮の無い物言いに深雪がムツと顔をしかめるも、彼女が口を開く前に五十里が首を横に振った。

「いや、司波くんの解析は完璧だ。少なくとも僕じゃここまでの解析はできないし、できたとしてもっと時間が掛かる」

「そっか。啓がそう言うんなら、そうなんだろうね。ごめんね、司波くん」

啓の言葉というだけであっさり丸め込まれ達也に謝罪する花音に、達也は内心その変わり身の早さに驚きながらも「いえ、気にしないでください」と口にした。

ちなみに不機嫌になりかけていた深雪もあっさりその感情を引っ込め、まるで自分のことのように嬉しそうにしていたことについてはスルーすることにした。

「でも司波くんの解析が正しいとしても、外部から水面に向かって魔法を掛けたら間違いなく監視装置に引っ掛かるよね？」

「あらかじめコースに魔法を仕掛けておく、というのも考えづらいね。魔法式の情報自体はコース上に存在しているから、コースを点検しているスタッフが気付かないはずが無いし……」

「そうなると水中に何者かが潜んでいて、タイミングを狙って魔法を発動させたことになりましたが、そんな荒唐無稽な話があるのでしようか？」

「しかしそれが、“人間”以外だったらどうだろうか？」

達也の唐突にも思えるその仮定に、議論をしていた花音・五十里・深雪が首を傾げ、傍でそれを眺めていた幹比古がピンと来たように僅かに身構えた。

そして一瞬後、五十里も同じようにピンと来たようで、

「つまり司波くんは、精霊魔法の可能性を考えているのかい？」

「ええ。吉田は精霊魔法を専門にしていますので、専門家としての意見を聞こうかと」

本当は霊子光に対して特に鋭敏な目を持つ美月にも来てもらおうと考えていたのだが、普段眼鏡によってその症状を抑えている彼女では心霊的な存在を見つけるのは難しいだろう、と協力を取り止めたという経緯がある。現に幹比古に協力を仰ぐときに美月にもそれとなく尋ねてみたが、特におかしい点は見られなかったという返答だった。

「そういうわけだ、幹比古。改めて尋ねるが、数時間単位で特定の条件に従って水面を陥没させる遅延発動魔法は、精霊魔法によって可能か？」

「可能だよ」

「――！」

即答で返す幹比古に、質問者の達也、遠巻きに会話を聞いているしんのすけ以外の全員が驚きの表情を浮かべた。

「今の条件ならば、渡辺先輩のレースの開始時間を第1の条件、水面上を誰かが接近することを第2の条件にすれば、後は術者が任意のタイミングで精霊に命令すれば魔法は発動できる。式神でも可能だろう」「幹比古でも、か？」

「準備期間によるかな。今すぐには無理だけど、半月くらい掛けて会場に何度か忍び込むことができれば可能だ」

それを聞いて真つ先に達也が思い浮かべたのは、大会の前日にここに侵入した例の賊だった。今頃奴らがどうなっているかは知る由も無いが、何かしらの情報は引き出せているかもしれない。

と、幹比古が何やら悩ましげに顎に手を当てて考え込んでいるのに気づいた。

「どうした、幹比古？」

「いや、自分で言い出しといて何なんだけど……、そんな術の掛け方は、ほとんど意味のある威力は出せないんだよ。精霊は術者の思念の

強さに応じて力を出してくれるものだから、そんなに時間を掛けてたらせいぜい水面の選手を驚かせる程度の猫騙しレベルにしかならないと思う」

「おそろく、そのレベルで充分だったんだろう」

達也の言葉に、幹比古が眉を寄せる。それを聞いていた他の者達も、同じような表情ばかりだ。

「確かに単体で見ると、猫騙しレベルでしかないだろう。だが猫騙しというのは、使うタイミングさえ考えれば想像以上の効果を得られるものだ。——例えば、予期せぬアクシデントで焦っているときとか」

「——！」

全員が、一斉に目を丸くした。どうやら彼の言葉の「真意」を、皆しつかりと理解したらしい。

事故の直前に起きた七高のオーバースピードも仕組まれたものだから、という真意を。

「これを見てください」

達也がそう言って指し示したのは、先程まで解析に使っていた小型ディスプレイだった。今はちょうど、七高の選手がカーブに差し掛かる場面が映し出されている。

その映像をコマ送りで再生しながら、達也が横から説明を入れる。「本来ならこのタイミングでスピードを落とさなければいけないのですが、この選手はあろう事か更に加速をしています」

「本当だ。カーブの直前に加速するなんて、『海の七高』って言われているほどの高校の選手がこんな初歩的なミスをするとは思えない」

「ということは、この選手のCADに細工がされていたってこと？」

花音の問い掛けに、達也は力強く頷いた。

「減速の起動式と加速の起動式を入れ替えれば、間違いなくこのコーナーで事故を起こします。去年のこの選手と渡辺先輩の記録を考えれば、最初のカーブまではほとんど差がつかないことも充分予想できます。優勝候補2人がもつれ合っている状況を狙えば一気に脱落させられる、と考えても不思議じゃない」

「とはいっても、CADの細工なんてそう簡単にできないよ？ 競技用のCADは、各校が嚴重に管理してるんだから。考えられるとすれば、七高の技術スタッフに裏切り者がいる場合だけど……」

五十里の仮説は、言っている本人すら信じられないといった声色だった。

「俺個人としては、むしろ大会委員に作業員がいる可能性の方が高いと思っっています」

しかし達也の口から語られた仮説は、それ以上に信じられないものだった。五十里も花音も幹比古も、口をあめぐりと開けて絶句している。

そんな中で冷静だったのは、彼の言葉を疑うという選択肢が存在しない深雪だけだ。

「しかしお兄様、大会委員に作業員がいるとして、いつどのようにしてCADに細工を？」

「確かに競技用のCADは各校が嚴重に管理しているが、必ず一度、規定内のものか検査するために大会委員に引き渡される」

「あっ——！」

反応できたのは、またしても深雪だけだった。五十里達は続々と提示される仮説に、まだ理解が追いつかないのか絶句したままである。

「だが、その手口が分からない。そこが厄介だな……」

万が一にも、警戒を怠ることはできない。

これから試合を控える深雪、そしてそのCADを調整する達也は、そのことを深く心に刻んだ。

*

*

*

「おっ、いつてらっしやい、達也くん」

「……今帰ってきたんだから『おかえり』なんじゃないか？」

「そうとも言うー」

『所用』で部屋を出ていた達也が戻ってきたとき、しんのすけはベッドで仰向けに寝っ転がり、顔の正面に携帯端末を掲げて画面を操

作しながらお馴染みの挨拶で迎えた。その表情はどこかぼんやりとした無表情で、普段から感情に合わせてコロコロと忙しく表情を変える彼にしては珍しい。

しかし達也はそれを追及することなく、自身に宛がわれたベッドに腰を下ろして一息吐く。

そのタイミングで、しんのすけが尋ねてきた。

「んで、真由美ちゃんは何て言ってたの？」

「怪我をした渡辺先輩の代わりに、深雪がミラージュ・バット本戦に出場することになった」

「おおっ」

達也の返答に、しんのすけが感嘆の声をあげた。

今回は事情が事情であるためエントリ―変更が認められた形であるが、そこで1種目しか出場しない先輩ではなく1年生の深雪が選ばれたのはまさに“大抜擢”と言えるだろう。

理由は幾つかある。対抗馬である第三高校とのポイント差が想定よりも小さいため、ミラージュ・バット本戦の結果次第では逆転の可能性がある。よって鈴音を始めたとした作戦スタッフは、新人戦を多少犠牲にしたとしてもそちらを優先することに決定したのである。

また、補欠を用意していなかったことも影響している。たった数日で付け焼き刃的な練習をして本番を迎えるよりは、新人戦とはいえ練習を重ねてきた深雪の方が適性だと結論づけたのだろう。

そしてこれが一番の大きな理由だが、深雪ならば本戦でも充分結果を残せると判断したためだ。事実この提案を真由美から聞かされた達也は「自分がエンジニアを担当すれば優勝も可能だ」と断言してみた。ここまで大見得を切ったのは、少なからず不安を覚えていた深雪を安心させるというのもあるだろう。

「そっかあ、頑張つてね達也くん」

携帯端末に視線を固定させたまま、若干投げ遣りにも聞こえる口調でしんのすけはそう言った。

そこで初めて、達也は彼へと振り向いた。

「しんのすけ、何か気になることがあるのか？」

「……達也くん。摩利ちゃん達に怪我をさせた犯人は、なんであんなことしたのかな？」

その質問に、達也は改めて思考を巡らせる。

仮に幹比古の言った通りの下準備が行われたとしたら、犯人はかなりの手間を掛けて今回の事故を引き起こしたことになる。しかし会場に何度も忍び込むというリスクを犯したにしては、得られた結果は（試合を棄権した本人の無念はともかく）選手2人に怪我を負わせた程度でしかない。

あるいは選手に大怪我を負わせて、魔法師生命を絶たせることが狙いだったのか。だとしても、なぜそのターゲットが摩利だったのか。確かに彼女は優秀な魔法師だが、狙うとしたら同じ高校生でも十師族として影響力の大きい真由美や克人、あるいは三高の一条将輝の方が得られる結果が大きいと思える。

「こういった場合、それによって誰が得をするかで考えるのがセオリーだ。今回の事故だと、三高の選手が真っ先に挙げられるな。あの選手だけスタートが遅れてビリだったが、結局前の2人があんなことになったために繰り上がりで決勝進出だ」

「でもさ、さっきの話じゃすっごく前から色々と準備してたんでしょ？ そんなことするくらいなら、自分の力で2人に勝ってやるって練習する方が良くない？」

「まあ、その通りだな。しかしそれは、あくまで選手本人の話だ。もしかしたら第三者の人間が、三高を勝たせようとしているのかもしれない」

「何のために？」

しんのすけの端的な質問に、達也が返したのは、

「正直、まったく分からん。そもそも犯人の動機がそれと決まったわけでもないし、むしろ情報が少ない今の段階で犯人を絞り込むのは逆に危険だ。どんな事態にも対処できるよう、警戒を怠らないようにしなくてはいけないだろうな。——しんのすけも、自分でできるだけ注意をしてくれ」

「ほーい」

「……………」

本当に分かったのか不安になる気の抜けた返事に、達也は何か言いたげに口を開きかけ、そしてそれを呑み込むように口を引き結んだ。そんな彼を横目に、しんのすけは携帯端末の画面をタップした。

第26話 「みんな」が観てる九校戦だゾ」

大会4日目、時刻は朝の7時を少し回った頃。

観戦目的の一般客ならばまだ寝ていてもおかしくないが、大会に出場する代表選手や彼らをサポートする技術スタッフなどは準備のため既に起床している場合が多い。本来ならばその日に出番のある者だけが早起きすれば構わないのだが、チームが一丸となって応援するという名目上、特別な事情が無い限りは他の生徒達も同じ時間帯に行動することになっている。

このホテルでの一般向けの朝食は、ホテル内で一番大きなレストランでビュッフェ形式で提供される。なので現在このレストランの利用客は、既に制服に着替えている代表選手や技術スタッフがほとんどだ。夕食のときは各学校ごとに時間が決められているため顔を合わせることは無いが、朝食は特にそういった取り決めが無いため、各校のイメージカラーを強調した色取り取りの制服があちこちを歩き交う光景が見られる。

「さてと、今日からいよいよ新人戦ね！ 雫もほのかも、どんな活躍を見せるのか楽しみだわ！」

「エ、エリカちゃん！ 緊張してるんだから、あんまりプレッシャー掛けないで……！」

「大丈夫だって。2人共、この日のために一生懸命練習したんだろ？」

「だってらたとえ失敗したとしても、それは必ず2人の人生にとって大きな糧となるはずさ」

「し、失敗……」

「ちよつとあなた、フォローしてるつもりで追い込んでどうするのよ」「あ、あれっ?」

そういった光景の中にて、Tシャツにチノパンなどといった完全にラフな格好で食事を摂るエリカ達二科生グループやひろし達春日部組といった面々は、逆に大きく目立つ形となっている。さらに代表選手であるほのか達制服組も混じっているとなれば、その関係性を気にする周りの視線を集めるのも無理はない。

しかし彼らは元々周りの視線を気にする質ではなく、そして美月やほのかといった気弱な者もそんな面々に囲まれているためか普段ほど物怖じしていない。なので彼らは食事もそこそこに、取り留めの無い会話を楽しんでいた。

「そういえば雫さんの出場するスピード・シューティングは、達也くんがエンジニアを担当してるんですよね？ 調子は如何ですか？」

「バッチリ。達也さんに調整してもらったCADも違和感なし、むしろ普段のよりも快適。ウチの専属として来てもらいたいくらい」

「あらあら、あんなこと言ってますよ深雪さん。どうお考えですか？」

「ちよつとエリカ、何を勘違いしてるのか知らないけど、別に私とお兄様はそんな関係じゃ——」

「深雪、お兄さんを私にください」

「ちよつと雫！ あなたまで何を悪ノリしてるの！」

珍しい深雪のツツコミに、他の面々も笑い声をあげた。ただ一人笑っていないのは、大真面目な表情で首を傾げる雫のみである。

と、一頻り笑ったほのかが苦笑気味に雫へと話し掛ける。

「もう雫ったら、せつかく雫の家には凄く優秀な魔工師がいるんだから、そんなこと言っちゃその人が可哀想だよ」

「魔工師って、魔法を発動させる道具を手入れる人ですよ？ 北山さんの家では、その人を専属で雇っているんですか？」

ほのかの言葉を耳聴く聞き取った風間が尋ね、雫が「うん」と言葉少なく頷いて答えた。

「へえ、さすが大富豪と名高い北山家。当たり前のように魔工師を雇ってるのか」

「雫の家族にも魔工師っているの？」

「母が有名な魔工師だったみたいだけど、父の家系に魔工師は1人もいない。弟は魔工師志望だけど、彼自身は魔法を使えない」

「だから雫のお父さん、雫を立派な魔工師に育てるんだって張り切ってるみたいなの。さっき言った魔工師の人も、その道ではかなり有名だった人を結構な報酬で引き抜いたみたいで」

「成程、昔から九校戦を観に行ってたのも、そういった教育の一環だっ

たつてわけね」

「まあ、魔法師の家系じゃなかったところにいきなり雫みたいな優秀な人材が生まれたら、そんな風に熱を入れるのも分からなくはないけどな」

「へえ、やっぱりそういうものなのねえ」

いかにも他人事といった感じでそう言ったのは、魔法師の家系じゃなかったところにいきなりしんのすけみたいな優秀な人材が生まれた経験があるはずの、みさえだった。

こういうときに真っ先に声をあげるのは、もはや色々な意味で斬り込み隊長となつているエリカだった。

「しんちゃんに魔法の才能があるって分かったとき、驚かれなかったんですか?」

「確かにビックリはしたけど、まあそんなこともあるかあ、って感じねえ」

「今まで色々と驚かされてきたからな、今更魔法の1つや2つ増えたつて変わりやしないさ」

あつげらかんとそう言い放つ野原夫妻に、魔法科高校の面々は驚きを隠せなかった。特に魔法的な才能の無い実姉から恐れられているレオにとつて、魔法を使えるようになった息子に変わらぬ態度で接する2人がとても眩しく見えた。

そしてそれは2人だけでなく、しんのすけの妹であるひまわり、そして彼の幼馴染である風間達4人も同じようで、2人の言葉にウンウンと頻りに何度も頷いていた。そもそも代表選手の家族が応援に駆けつけていること自体が稀な中で、家族だけでなく昔の友人も揃つてやって来ているという事実が、如何にしんのすけが周りに愛されているかを表していると言えるだろう。

と、そんな中で、マサオが何か思い出したようにフツと笑い声を漏らして、

「それにさ、巨大なロボットとかタイムスリップとか映画の世界に吸い込まれるとか、そんなのに比べたら魔法が使えることなんて別にしたことじゃないしね!」

「……ん？ どういう意味だ、マサオ？ 何かの漫画の話か？」

「——あつ、ごめんごめん！ 何でも無いから忘れて！」

まさしくキョトンとした表情のレオラ魔法科高校の面々に、マサオは慌てた様子でバタバタと手を振ってそう答えた。

そしてそんな彼に、幼馴染である他の3人が耳打ちする。

「駄目だよ、マサオくん。どうせ信じてもらえないんだから、〃そういうこと〃はあまり外では言わないようにしようって、みんなで決めたんじゃないか」

「どうすんのおよ、マサオくん。エリカちゃん達、変な目でこっち見てるわよ」

「マサオくん、迂闊」

「ごめん、つい口が滑っちゃって……」

「それにしてもさあ！ 達也くんもしんちゃんも、今まで朝は一緒だったのに今日は別に摂りたいだなんて、いったいどうしたのかしらね？ まさか達也くんともあろう人が寝坊なんて有り得ないだろうし」

会話の内容こそ聞こえていないものの、周りから一斉に責められている光景を不憫に思ったのか、エリカが多少強引ながら話題を変えてきた。そんな彼女の気遣いにマサオが目をキラキラさせて彼女を見遣り、そしてそんな彼にネネ達が呆れの視線を向けている。

「ねえ、深雪は何か聞いてないの？」

「私もお兄様から詳しいことは聞いてないわ。野原さん達は、しんちゃんから何かお聞きになつていますか？」

「いんや、俺達もメールで連絡が来ただけだよ。でもまあ、たまにはそんな日もあるんじゃないか？ 達也くんなんて今日がまさに本番だからな、集中したいときもあるだろ」

「……そうだと、良いのですけど」

そう言つて話題を締め括つた深雪だが、その表情はどうにも煮え切らないものだった。

*

*

*

基地内にあるホテルの最上階には、スイートルームと称される最上級の部屋が3つ存在する。普通ならば数十は部屋が並ぶフロアを3部屋だけで占領しているためその広さは圧倒的で、専用のエレベーターを降りた先にはホテルの部屋にも拘わらず玄関が備え付けられ、絨毯敷きの廊下を抜けた先には如何にも豪華なソファやラテーブルやらが並んだ、そこだけでも普通の部屋が幾つも入るほどに大きなリビングが待ち受ける。正面には巨大な窓が取りつけられているが、軍用施設だけあって防弾仕様となっており、自分で開けることができなくなっている。

もちろん部屋はそれだけではなく、大理石で作られたジャグジー付きの豪華な風呂や、キングサイズのベッドが置かれた寝室も用意されている。しかも寝室は数部屋あるため、要人の家族や身辺警護を務めるSPなどを泊まらせることも可能だ。

軍用施設にあるホテルのスイートルームというのは、民間のホテルのように金を積み泊まれるような代物ではない。一国の大統領やそれに準ずる立場の人間など、いわば外交上「絶対に嘗められてはいけない相手」を泊めるのに使われる部屋である。この国の人間ならばそれこそ総理大臣であったり、あるいは十師族レベルの人間しか足を踏み入れることが許されない。

だからこそ3つのスイートルームが同時に埋まるというのは稀であり、さらにはそこに泊まる者同士が顔を合わせるとするのはほぼ有り得ない。それぞれのスイートルームは専用のエレベーターも玄関も別々に作られており、互いの事情を詮索しないというのが暗黙の了解だからだ。

「……………」

だからこそ、そんな有り得ない状況に身を置くことになった達也は、溢れんばかりの警戒心を裏に隠しながら努めて冷静な表情で目の前の光景を観察していた。

自身の眼下には、如何にも高級な素材を使ったと思われるフルコース料理。「トールラス・シルバー」の片割れとして高校生にしては破格

の給料を貰う彼ではあるが、彼自身は食に必要以上の金を掛けない性格であるため、普段の生活でこのような食事を口にする機会はほとんど無い。ましてやそれを朝食にするなど、達也からしたら考えられないことだろう。

「如何ですか、しん様？ このホテル自慢のスイートルーム専用の朝食のお味は？」

「うーん、朝からこんな美味しいフルコースが食べられるなんて贅沢ですなあ。でもオラとしては、もうちよっと味が薄い方が好みだなあ」

「さすがしん様、超一流の舌も持っているなんて！ このホテルのシェフには、後で私の方から言っておきますわ！」

そこから少し目線を上げて右にずらすと、大きく口を開けて料理を頬張るしんのすけと、そんな彼に飲み物を注いだりと甲斐甲斐しく世話をする酔乙女あいの姿があった。ちなみに現在彼がグビグビ飲んでいるオレンジジュースも、店で出せばコップ一杯で確実に千円以上はする超高級品だ。

そして、右にずれた視線を正面に戻すと、

「突然お誘いしてしまって、申し訳ありません。楽しんで頂けていますでしょうか？」

「……ええ、とても美味しいですよ」

ヘッドスカーフに首から足元まで覆う薄手のトープという東南アジア系の民族衣装に身を包む、爽やかな笑顔が嫌味無く似合う好青年・スンノケシの問い掛けに、達也は口元に薄く笑みを貼りつけてそう答えた。

——それにしても、本当にしんのすけと瓜二つだな……。ここまで近づいているのに、服装が同じだったら一瞬では見分けが付かないほどだ……。

いや、それよりも気になるのは、どうして自分の前にこの王子が姿を表しているのか、ということだ。

そもそも達也が彼らと朝食を共にしているのは、酔乙女あいと一緒に朝食を摂るから一緒にどうかとしんのすけから誘われたからだ。

なぜ自分を誘うのか訊いてみると、例のレース妨害事件についてのしんのすけがあいに相談したところ、事件の原因を突き止めた達也も交えて話がしたいと向こうから申し出があったかららしい。

しんのすけが自分のことをあいに話したことについて思うところはあるが、特に口止めしていなかっただけのため責める理由はない。先日のことでもあつて多少の不安はあるが、充分想定できる範囲内ではあつた。

しかし、その朝食の場にスンノケンがいることは想定外だった。達也は彼がこのホテルに滞在していることを風間少佐を通して知つてはいたが、あくまで表向きは来日していることすら極秘だったはずだ。この事件について知りたいのなら後でしんのすけなりあいなりに尋ねれば良く、今ここで達也に顔を晒す理由が思い浮かばない。

「さてと、食事も一段落したことですし、そろそろ『例の事件』について話し合ひましょう」

あいがそう言ったのを皮切りに、今まで壁際に控えていた黒スーツに黒サングラスの男性と、レディースーツに身を包む女性がテーブルの食器をテキパキと片付け始めた。普通こういった仕事はホテルのスタッフが行うものだが、現在この部屋は彼ら以外の者が遠ざけられている。

「司波達也さん、例の事件に関するあなたの見解は、昨夜しん様を通して聞かせて頂きました。魔法の痕跡やその場での状況を正確に、そして迅速に分析するあなたの手腕には目を見張るものがありますわ。さすが第一高校を筆記1位で入学する秀才、といったところでしょうか」

「……ありがとうございます」

何やら色々と含みのありそうなあいの言葉だが、達也はとりあえず礼を言うだけに留めた。

「そんな達也さんにお尋ねしますが、犯人に心当たりはありませんか？」

「犯人、ですか……。すみません、自分には見当も……」

「そうですね。九校戦開会の前日、しん様と一緒に侵入者を捕らえた

と聞きましたが、その者達との関連はあるのでしょうか？」

——やはりその一件も既に知っているか。おそらく、しんのすけからだな。

「分かりません。自分達はあくまで、たまたま侵入者の存在に気づいただけですので……。犯人についても、後からやって来た警備の人達に任せっきりでして……」

「そうですか。その犯人については私も軍の人間に尋ねてみましたが、向こうは『自分は何も知らない』の一点張りでしたわ。まあ、何か隠していることは明白でしたが」

紙ナプキンで口元を拭う仕草をしながらそう言ったあいは、その大きな黒い瞳を達也へと向けた。その目つきは彼の表面的なものだけでなく、その裏側にあるものを見通そうとするかのように鋭いものだった、と彼は感じた。

しかしあいはすぐにその瞳をスツと逸らし、

「なので我々の方でも『家の者』を何人が動かして独自に調べてみます。——そしたら、九校戦に関する面白い『噂』を耳にしまして」

「噂？」

明らかに自分に向けての誘い水であることを理解したうえで、達也は敢えてそれに乗った。

あいはほんの僅かに笑みを浮かべて、続きを話し始める。

「今行われているこの九校戦を、どうやら『賭け事』に利用している輩がいるみたいですよ」

「賭け事？ 試合結果を予想して、金銭の遣り取りをしているということですか？」

「まあ、そうですね。もともと私が聞いた噂では、各試合の結果ではなく最終的な優勝校を予想するという大雑把なものらしいですが、それなりに大きな額のお金が動いているみたいですよ」

「成程。しかしそういった非公営の賭博は、現行法律では禁止されています。——ということはいま」

「その通り。元締めも参加者も、どちらも『そういった類の人間達』

ということですよ」

互いの考えが一致したことで、達也とあいとはほぼ同時に溜息を吐いた。無言を貫いているスンノケシも、若干眉を寄せて困り顔になっている。

唯一この場で首を傾げているのは、しんのすけだった。

「おつ？　で、なんでそれで摩利ちゃんが襲われたの？」

「例えばしん様が九校戦の優勝校を予想するとして、公平に見た場合一番可能性の高い学校はどこですか？　ちなみに今まで9回行われていて、第一高校は5回、第二高校は1回、第三高校は2回、第九高校は1回優勝、第一高校が連覇していて今年3連覇が懸かっています」

「おおつ！　だつたら一高が今年も勝ちそうだゾ！」

「おそらく賭け事の参加者も、しん様と同じことを考えたのでしよう。大体の参加者が第一高校にベットしているらしいですよ。このまま予想通りに第一高校が優勝すれば、元締めとしては堪ったものではないでしょうね」

「——まさか、その賭け事による損失を防ぐために、渡辺先輩……いや、第一高校の妨害を？」

達也の問い掛けに、あいはコクリと頷いた。

「第一高校の選手を乗せたバスが、この会場に来る途中で事故に遭ったでしょう？　私からしてみれば、あれも単なる交通事故だとは思えませんわ。選手が怪我をして出場自体が中止になれば、そりゃあ優勝の可能性は無くなりますものね」

「確かにそうですが……、しかし、何というか……」

達也は言い淀んでそれ以上何も言わなかったが、何となくあいにもその真意が伝わった。

例のレース妨害事件は、達也の見解が正しければかなりの手間を掛けて行われたものだ。何度も会場に忍び込んでレース場に細工を施し、出場する第七高校の選手のCADにも細工を施し、選手の過去の戦歴から当日の試合状況を予想して見事なタイミングである事故を引き起こした。そこまで入念な下準備をして行われたものなのだか

ら、そこまでするだけの大きな理由があると達也は考えていた。

しかし蓋を開けてみると、賭け事での損失を防ぐためという、こう言つては何だが随分と「みみっちい」理由だというのが達也の正直な感想だった。いや、別に国家の存亡を左右するような重大事件が起こつてほしいなんて思つてはいなかったが、だからといってこれは――

「――許せないゾ」

と、しんのすけの呟きに、達也は思考を中断してそちらへと視線を向けた。あいもスンノケシも、同じように彼へと向き直る。

普段は飄々としていて、たとえ森崎に銃口を向けられても怒ることなく許してみせるほどの度量を見せるしんのすけが、明確に怒りを露わにしていた。初めて見る彼の表情に、さすがの達也も一瞬たじろいだほどだ。そしてそれは、あいやスンノケシも同じようだった。

「その悪い人達がお金儲けを企んでいたせいで、あの車を運転していた人は死んじやって、摩利ちゃんが大怪我したつてことですよ！ そんなの許せないゾ！」

「しん様の仰る通りですわ。知らない所で勝手に賭けの対象にするのはどうでもいいことですが、それによつて人を死に至らしめ、1歩間違えれば魔法師生命を絶たれるほどの大怪我を負わせたとなれば、もはや看過できないほどの大罪であることは明白。――そして何より、しん様がその毒牙にかかる可能性があるというだけで、私にとつては許し難いことですわ！」

――もしかしなくても、それがメインの理由では？

今にもテーブルを叩きそうな勢いで力説するあいには、達也はそう思わずにはいられなかった。

と、ここで初めてスンノケシが口を開いた。

「もつとも、あいさんの言うことは有力ではありませんが可能性の1つでしかありません。もしかしたら他にも九校戦を狙う勢力が存在するかもしれませんが、今までのことも真の狙いを隠すためのブラフである可能性も拭えません。しかし第一高校をターゲットにした動きがある以上、達也さんの方でも注意をして頂きたいのです。――もつ

とも、釈迦に説法でしようけどね」

「いいえ、とても有力な情報、ありがとうございます。技術スタッフとして、CADに細工が施されていないか今まで以上に警戒することになります」

「そうそう。達也さんの見解では、大会スタッフに犯人が紛れ込んでいる可能性があるんでしたわね。大会の運営に伝えて、徹底的に怪しい人物を洗い出してもらいましょう」

あいはそう言って、チラリと自身の側近である黒スーツの男を見遣った。

男は自身の腕時計を確認し、小さく頷いた。

「さてと、そろそろ良い時間ですし、そろそろお開きにしましょう。――達也さんは確か、女子スピード・シューティングの担当でしたわね？ あなたの活躍、拝見させて頂きますわ」

「活躍するのは選手であって、自分はいくまで補佐でしかないのですが……」

「そんな謙遜なさらずに。楽しみにしていますわね」

にこやかに手を振るその姿は、まさしく「箱入り娘」という表現がお似合いなほどに可憐なものだった。もしも同年代の少年がその姿を間近で見ようものなら、頬を紅く染めることを抑えずにはいられなかつただろう。

そんな笑顔を目の当たりにした達也は、もちろんそんな動揺など微塵も見せず、あいとスノケシに頭を下げて部屋を出ていこうとする。

「んじや、オラもそゆことでー」

「お気をつけて、しん様！ 明日の試合、とても楽しみにしていますわー！」

「またね、しんちゃん。久し振りの食事、楽しかったよ」

一方しんのすけは達也と部屋を出るその瞬間まで、2人に向かって大きく手を振っていた。

そして2人も、しんのすけが部屋を出るまで手を振り続けた。

「如何ですか、王子？　実際にその目で司波達也をご覧になった感想は」

しんのすけと達也が部屋を去り、あいとスノケシ、そして黒磯とルルの4人だけになったリビングにて、ふいにあいが彼へと問い掛けた。

「頭が切れるのは例の事件に対する分析で分かっていました。自分の感情をコントロールするのみなかなか上手いですね。一国の王子や世界的大企業の令嬢を前にしても動揺せず、平然とした顔の裏で相手が何を企んでいるのか常に読んでいます。少なくとも、そういった精神面に対して一定の信頼は置けるでしょう」

「もつとも、アレでは却って不自然ですけどね。目立つことを良しとしないのであれば、人並みに動揺してみせて凡夫を装うくらいのことはいなければいけませんわ。テストの筆記で断トツの成績を残したことといい、どうにも詰めが甘いと言わざるを得ませんわね」

「それについては、彼を取り巻く『環境』が影響しているとも考えられますけどね。彼もまた、様々な思惑との板挟みで苦労しているようですし」

「……まあ、私にはどうでもいいことですわ。しん様にとって『有益』か『有害』か、判断材料などそれだけで充分でしょう？」

つまらなそうに言い放つあいには、スノケシは微笑みを携えながら尋ねる。

「しんちゃんにとって有害で、それでもしんちゃん自身が彼に好意を持っていたらどうします？」

「そんなの、決まっておりますわ」

あいはニツコリと優雅に微笑んで、こう続けた。

「徹底的に『排除』しますわ。——たとえば、しん様に嫌われようとも」

*

*

*

新人戦と一口に言っても、その人気は本戦と何ら変わりない。むしろ

る現地に足を運ぶほどの九校戦ファンの中には、既に知られたスターよりも未来のスター候補を誰よりも早く見つけることに躍起になる者もいるくらいだ。

よって女子スピード・シューティングが行われるこの会場も、観客席はほとんど満員となっている。新人戦で獲得したポイントの半分が本戦に反映されることもあつて、各学校の先輩選手達も可愛い後輩の応援に自然と熱が入るといふものだ。

「摩利、本当に寝てなくて大丈夫なの？」

「病気じゃないんだ、暴れなければ問題は無いさ」

とはいえ、重傷を負った体を押してまで観戦に赴く者はなかなかいないだろう。それだけ後輩想いというのものもあるかもしれないが、彼女の場合は自分の好奇心を優先した結果とも言える。

「そう言う真由美こそ、テントに詰めてなくて良いのか？」

「ここから何キロも離れてるわけじゃないんだし、何かあれば連絡くらい来るわよ。それよりリンちゃん、あなたは選手についてなくて良いの？ 女子スピード・シューティングの作戦スタッフでしょう？」

「私は強制オフのようなものです。私の役目は、司波くんに取り戻してしまいましたので」

「……市原、おまえの冗談は分かりにくいぞ」

元々鈴音も了承したうえで達也はエンジニアに加わっているのだから、彼女がそのことで不満を覚えるわけがない。摩利が苦言を呈すると、鈴音は無表情のまま軽く頭を下げた。

「それにしても、あいつのエンジニアとしての腕を実戦で見るのは初めてだな」

「そうね。私のときは、本当にお手伝い程度だったもの。彼が一から調整したCADが、どんな性能を見せてくれるのか楽しみだわ」

「北山さんだけでなく、女子の選手からは好評のようですよ。最初は1年女子の選手団も彼が代表入りすることに抵抗があったようですが、彼の腕を見てそんな抵抗は吹っ飛んだのでしよう、今日も自分のCADを持ち込む選手がいましたよ」

「おいおい、競技に差し支えるようなことは止めてくれよ？」

「それは大丈夫です。司波くんはその辺りを弁えていますので、ちゃんと試合後に見ることにしているそうです」

「自分の都合を優先させながら、女子へのフォローも忘れない。達也くんもすつかり『女誑し』ね」

本人が聞いたら苦い顔で否定するであろう言葉を、真由美は冗談交じりで口にした。

と、そうこうしている内に、北山雫の出番がやって来た。遠視機能のあるゴーグルを掛け、銃身の長いライフルのような形をしたCADを構えている。

「どうやら、あの子のCADには細工はされてないようね」

昨日の事故を分析した結果は、既に真由美達の耳にも届いている。こうして予定の時間通りにフィールドに出てこられたということとは、細工された形跡が無いと達也が判断した結果だろう。真由美の言葉に、摩利も鈴音も無言で頷いて応えた。

やがて雫の前に設置されたランプがすべて灯り、クレーが射出された。

そして有効エリアに入った途端、そのクレーは粉々に砕け散った。矢継ぎ早に、次のクレーが射出される。今度は有効エリアの中心辺りで破壊された。2つ同時に射出された次のクレーは、それぞれエリアの両端で破壊された。

雫の視線はまっすぐ前を向き、クレーが射出されてもそれがぶれることはない。有効エリア全体を見渡しているようであり、クレーそのものには目を向けていないようにも見える。

「うわ、豪快」

真由美が漏らしたその言葉は、雫の魔法を見た率直な感想だった。

「ひよつとして、有効エリア全域が魔法領域なのか？」

摩利の質問は、達也から事前にCADの性能について聞いているであろう鈴音に向けられた。

「はい。彼女は有効エリアに幾つか『震源』を設置して、固形物に振動波を与える仮想的な波動を発生させています。震源から球形に広がった波動に標的が侵入すると、その振動波が標的の内部で現実のもの

となつて標的を崩壊させるという仕組みです」

「達也から聞いていた魔法の効果を、鈴音はメモなどを一切見ずに口にする。」

「有効エリアは一辺15メートルの立方体です。司波くんはこのエリア内部に一辺10メートルの立方体を想定し、その各頂点と中心に震源を設定しています。各ポイントは番号で管理されており、展開された起動式にその番号を変数として入力すると、半径6メートルの仮想波動が広がるようになっていきます」

「随分と余計な力を使っているな。ピンポイントで発動させた方が、魔法力を温存できるんじゃないか？」

「『震源を番号で管理してる』って点に、何かポイントが隠されていそうね」

真由美の言葉に、鈴音が頷いた。

スピード・シューティングの有効エリアは、試合開始から終了まで一度も動くことはない。つまり細かい座標を変数として毎回入力する必要は無いということであり、よつてあらかじめ大まかなポイントを選択式で設定しておいて、発動時にその番号を入力するだけで事足りる。

さらにこの魔法は、威力や持続時間を考える必要が無い。制御面での操作が必要無いので、魔法の発動そのものに演算領域をフル活用できる。連続発動もマルチキャストも思いのままだ。

鈴音の説明が終わったタイミングで、試合終了のブザーが鳴った。

撃ち漏らしはゼロ。文句なしのパーフェクトだ。

「魔法の固有名称は^{アクティブ・エア・マイン}能動空中機雷^{アクト}。司波くんのオリジナルらしいですよ。色々詰め込んでいるために大きな起動式ですから、北山さんのように優秀な処理能力を持っていないと使えません」

「……私の魔法とは、まるで発想が逆ね。よくこんな術式を考えつくものだわ」

真由美が感心しながら頷いていると、その横で摩利が興味津々な様子で雫を——正確には彼女が先程まで使っていた魔法を見つめていた。

「しかし面白いな……。自分を中心とした円を想定してその円周上に震源を設置すれば、有効なアクティブ・シールドとして使えそうだな。そうなると問題は持続時間だな。短すぎるとタイミングが難しいし、長すぎると自滅しかねない。いや、それこそ術者の腕次第だな。——よし！ さっそく今晚にでもあいつを捕まえて、私のCADにインストールしてもらおう！」

「……試合の邪魔にならないようにね」

試合前に1年女子に対して苦言を呈していたのは誰だっけ、と真由美は思いながら、呆れの表情を浮かべてそう言った。

*

*

*

「凄いな、第一高校は。決勝トーナメントに3人全員が進出か」

スピード・シューティングの会場にあるVIPルームにて、モニター越しに観戦していたスノケシが感嘆の意を込めた声色でそう呟いた。彼のすぐ隣に座るあいも、その言葉に無言の肯定を返している。

ちなみに、現在その部屋にいるのはその2人だけだ。黒磯とルルは部屋の前でいつものように護衛の任務に就いており、いままで一緒に観戦していたはずの烈は姿が見えない。

「スピード・シューティングの予選に出場する選手は24人、その内決勝トーナメントに進めるのは上位8人。その8人の中に同じ高校の選手が3人共入るといのは、どうやらあまり例に無いようです」

「しかも予選で見せたあの魔法、私の記憶には無いものですわ。もしかしたら既存魔法の亜種ではない、まったくの新規の魔法である可能性もありますね」

「今年の一年女子が例年以上にレベルが高い……とは言いつれませんがね。バトル・ボードの方は女子が既に2人出場して1人予選落ちしているようですし、予選を通過したその1人も特別速いタイムだったわけでもなさそうです」

「……そう考えると、やはりこの快進撃の立役者はエンジニアの方、と

いうことでしょうか」

「おそろく」

スノケシが頷いて同意すると、なぜかあい是不機嫌そうに大きく溜息を吐いた。

「どうです、あいさん？ あなたのお眼鏡には適いましたか？」

「いいえ、まだ結論を出すのは早いですわ。次の試合からは2人同時に行う対戦形式、あの魔法は適切ではありません。そちらの結果を見てから判断することにします」

「そうですか。今から試合が楽しみですね」

「……ええ、そうですね」

スノケシの言葉に賛同してはいるが、その表情は楽しみにしているとは程遠い、剣呑な雰囲気を漂わせる鋭い目つきをしていた。

まるで、そのエンジニアを品定めしているかのように。

第27話 「快進撃の光と影だゾ」

「いやあ、ありがとうございます達也さん！ 何か魔法の腕が急に上がった気がしますよ！」

「俺がしたのは、あくまで明智さんの手助けだよ。準決勝に進めたのは、間違いなく明智さんの実力だ」

声も体も弾ませて全身で嬉しさをアピールする1年女子・明智英美と、至つて平静のまま、しかし微笑みを携えた達也が、選手控え室である第一高校の天幕の中へと入ってきた。

それを出迎えたのは、浮き足立っているように見えるもう1人の出場選手・滝川和美と、こんな状況でも無表情を貫く雫だ。

「待たせて悪い、雫。すぐさま調整に入ろう」

達也は天幕に着くや否や、すぐさま雫が次の試合で使うCADの調整に入った。準々決勝までは同じ高校の選手が重ならないように時間が調整されるとはいえ、試合数が少ない分だけ予選よりも試合間隔が短くなる。しかも一高は3人共予選を突破しているのです、エンジンアである達也の負担はどうしても大きくなってしまふ。

「大丈夫、達也さん？」

「心配するな、大丈夫だ」

達也はそれだけ答えると、調整機のモニターを注視する。画面には様々な計測結果が高速でスクロールされており、普通の人間ならばそれを目で追うことすら困難だろう。

やがて達也は小さく頷くと、そのCADを雫に手渡した。

小銃形態のそれは、ストラップが付いている以外は他の選手が使用する物と大差ないように見える。しかし実弾銃の機関部にあたる箇所が、他の選手のものに比べて随分と厚みを帯びていた。

「分かっているとは思いますが、予選で使った機種とはまったくの別物だ。時間は無いが、少しでも違和感があったら遠慮無く言ってくれ。可能な限り調整する」

「違和感なんて無いよ。むしろしつくり来すぎて怖いくらい」

CADを構えたりトリガーに指を掛けたり離したりしながらそう

答える雫に、達也の表情がほんの微かだが和らいだように見えた。

ふと、雫はCADから視線を外し、横にいるチームメイトへと向ける。

「2人共、勝ったんだよね」

その言葉に、英美と滝川の2人がニコリと笑って頷く。

「大丈夫。いつも通りやれば、雫も勝てる」

「もちろん。——優勝するためのお膳立ては、すべて達也さんがしてくれた。後は、優勝するだけだよ」

雫はそう言つて、天幕を後にした。達也はそれを、笑顔で見送る。

「……あれ？ ひよつとして今のつて、私達に対する宣戦布告？」

「いやあ、本当の敵は一番身近な所にいたんだなあ」

「そうだな。2人共、準決勝に進んだからといって、油断するんじゃないぞ。ここまで来たからには、優勝を狙っていけ」

「ええっ！ 達也さん、目標が厳しすぎるっすよー」

「そうだそうだー！」

笑みを多分に含んでいるためにまったく説得力の無い2人の抗議を、達也は笑って受け流した。

第一高校の天幕内は、今まさに競技が行われている最中だとは思えないほどに和やかな空気に包まれていた。

*

*

*

第一高校の選手が立て続けに準決勝進出となれば、当然次に出てくる3人目にも期待が掛かる。しかもその選手が現在パーフェクトで勝ち進んでいるとなれば、会場がざわめき立ち、じわじわと熱量が上がっていくのも致し方ないだろう。

そんな会場の観客席の一幕、すっかりグループ行動が板に付いた、深雪やエリカから魔法科高校の面々とひろしやみさえなど春日部組の面々が集まって座っていた。しかしその中に、しんのすけの姿は無かった。

「い、いよいよ雫さんの出番ですね」

「ごらごら、美月ちゃんが緊張してどうすんのよ」

「だつてネネちゃん、もし雫さんが勝ったら準決勝に一高生が3人も行くことになるんだよ?」

「はいはい、とにかく深呼吸ねー」

ネネに言われるがままに深呼吸をする美月に、傍でそれを見ていた女性陣は何だか癒されるような心地になった。

「さてと、達也くんは今度はどんな工夫を見せてくれるのかな?」

「そうだよな。今度は何が飛び出してくるのか、まったく予想がつかないぜ」

「本当、彼の頭脳はまるでビックリ箱だよ」

「ははは、言えてる」

傍目には普通に聞こえる幹比古とレオの会話だが、幹比古のことをよく知っているエリカにはとても不思議なものだった。魔法に対してこれほど前向きな姿勢を見せる幹比古を見るのが、随分と久し振りのことだったからである。

と、雫が会場に姿を現した瞬間、その幹比古が疑問の声をあげた。

「えっ? あれって……」

「どうした、幹比古?」

「雫さんが持っているのは……、ひよつとして汎用型か?」

「え、マジかよ。でもあれって——」

「小銃形態の汎用型ホウキなんて聞いたことないよ? というか、あのCADに取りつけられてるのって照準補助装置よね? 汎用型と照準装置の組み合わせなんて技術的に可能なの?」

「な、なあ。盛り上がってるどころ悪いんだけど、何が凄いか俺達にも説明してくれないか?」

何だか話が盛り上がっていく魔法科高校の生徒組に、魔法に関してハマったくの素人であるひろしが申し訳なさそうに話し掛けてきた。そんな彼の隣から覗き込むような姿勢で、専門的な話題についていけない春日部組のポカンとした顔が並んでいる。

すみません、と軽く謝罪して説明を始めたのは美月だった。

「照準補助装置というのは、特化型のアーキテクチャに合わせて作ら

れたものなんです。汎用型CADと特化型CADはハードもOSもアーキテクチャからしてまるで違うから、照準補助装置と汎用型CADを繋ぐなんて技術的に不可能だと思われてたんです」

「え、えっと、そもそも『特化型』とか『汎用型』とかが分からないんだけど……」

ひろしよりもさらに申し訳なさそうに眉を八の字にするマサオに、今度は深雪が嫌な顔1つせずの説明する。

「現代魔法が様々な系統に分かれているのはご存じですか？ その中から特定の系統だけを使うために作られたのが『特化型』で、複数の系統を1つのCADで使えるように作られたのが『汎用型』です。1つの系統魔法を最大限活かすなら特化型、様々な魔法を使い分けるなら汎用型、といった感じでしょうか」

「それで、その2つは似ているようで全然違う仕組みをしてるので、普通ならそれを組み合わせることは不可能なはずだ、ってアタシ達は驚いてたんですよ」

深雪から引き継いで説明を加えるエリカに、ひろし達はようやく理解が及んだようで納得したように頷いていた。

「でもさ、雫ちゃんが使うヤツがまさにそれなんだから、実際にはできたってことなんですよ？」

「……まあ、そうなんだろうけど」

ネネの素朴な指摘に、先程まで説明する側だった面々も黙るしかなかった。いくら自分達の常識では有り得ない代物だったとしても、実際こうして自分達の前に現れている以上、それを無視してまで不可能だと主張することはできない。

と、ここで意外なところからフォローが入れられた。

「技術自体は、既に発表されている」

全員が一斉に、バツと音が付きそうな勢いで顔を向けた。

その声の主は、ボーだった。

「汎用型CADと照準補助装置を一体化する技術が、去年の夏にドイツのデュッセルドルフで発表されている」

「へえ、よく知ってるねボーちゃん」

「何だ、じゃあやっぱり可能だったってことじゃない」

「でもそのときの試作品は、とても実用的じゃなかった。動作も鈍いし精度も低い、本当に『ただ繋げただけ』でしかないものだった」
「ってことは達也さんは、まだまだ実用性の低い最新技術を採用したってこと？」

「ちよつと、それって大丈夫なの？」

ネネが否定的なニュアンスの疑問を彼の妹である深雪にぶつけるが、彼女は意にも介していないどころかむしろ楽しそうに笑みを浮かべて、

「もちろんよ。あのCADは、お兄様がその実験結果を基に『改良』を加えた物だもの」

「成程、自分の目で確かめてみるってことね。良いじゃない、達也くんの企みを見届けてやりましょう」

エリカがそう結論づけたのとほぼ同時、フィールドのシグナルが点灯し始めた。

雫と対戦相手が同時にCADを構え、クレーが飛び出す有効エリアを見つめる。

やがて試合開始のブザーが鳴り、赤と白のクレーが射出された。2つのクレーが、有効エリア内に侵入する。

そして、赤のクレーのみ中央部に吸い寄せられるように軌道を変え、破壊された。

「移動系、もしくは収束系か？」

幹比古が頭に思い浮かべた言葉をそのまま口にしての間にも、2色のクレーは次々と射出されていく。

それを眺めている内に、観客全員があることに気づいた。

赤のクレーは中央部に吸い寄せられ、それとは逆に白のクレーが外縁部へと追いやられている。そのせいなのか、赤のクレーが1つの取り零しも無く破壊されているのに対し、白のクレーは幾つも撃ち漏らしている。

その光景に夢中になっているレオ達の横で、深雪が楽しそうに説明を加える。

「雫が使っているのは、収束系の魔法よ。有効エリア内を飛び交うクレーをマクロ的に認識して、中央に行くほど赤のクレーの密度が高くなるように設定しているの。白のクレーが外縁部に追いやられているのは、その魔法による副産物ね」

「この競技って、相手の妨害はOKだったっけ？」

「相手の選手を直接攻撃しない限り有効よ。だけど通常は相手を妨害しながら自分のクレーを狙うのが難しいから、そういった妨害が実行されるケースは少ないわね。でもこの方法なら妨害と狙撃の両方ができるから、過去の大会でも実例こそ少ないけど採用されているのよ」

「でもよ、なんで最後の振動系魔法が発動したりしなかったりするんだ？ 何か見てる感じだと、吸い寄せられたクレーが1つするときだけ振動系の魔法が発動してるみたいだけど」

吸い寄せられたクレーが複数あるときは互いに衝突させて破壊、1つだけのときは振動系魔法を使って破壊している。1つの魔法として構成されているのなら、最後の行程である振動系魔法が発動したりしなかったりするのはおかしい。

「標的が複数のときは、振動系魔法が発動する前に衝突するようにスケジュール設定されているということでしょうか？」

「いやいや、そんな時間差を設定するメリットなんて無いでしょ？」
美月の言葉を、エリカが即座に否定した。本人も確信があるわけでもなかったようで、彼女に否定されても特に反論する様子は見せない。

そんな彼女達を楽しそうに眺めながら、深雪が口を開いた。

「——みんな、これは収束系魔法と振動系魔法の『連続発動』よ？」

その瞬間、その意味をいち早く理解した幹比古が目を丸くした。

「そうか……！ 特化型CADだと系統の組み合わせが同じ起動式しか格納できないが、汎用型なら複数の系統の起動式を格納することができる……！ 2つの系統魔法は、まったく別の起動式で発動されていたということか！」

幹比古の言葉に、深雪は深く頷いた。

「雫は元々、細かい制御よりも大規模な魔法で圧倒することを得意としていた。だから彼女は今まででも、ある程度スピードを犠牲にしても確実に魔法を制御できるようにCADを調整していた。——でもお兄様は、彼女の長所を最大限活かすことをコンセプトになさったの。雫の高速な連続発動を可能にする処理能力と、大規模な魔法式を構築するキャパシティを発揮するために、細かい制御を必要とする行程を極力排除する方針を打ち立てた」

「その方法が、汎用型CADと特化型用の照準補助装置を繋いでしまふというものか……。いったい彼の頭はどうなっているんだ……」

深雪の説明に幹比古は舌を巻き、美月は感心したように頻りに頷いていた。

「な、なあ。いったい何がどう凄いのか、分かる奴はいるか？」

「風間くん、私立の進学校に通ってるんでしょ？ 説明してよ」

「無茶言わないでよ、ネネちゃん。そういう専門的なことは、その分野の学校じゃないと勉強しないんだから」

「ボーちゃんは、何か分かる？」

「……………」

そんな魔法科高校生達の横で、春日部組の面々が顔を突き合わせてコソコソとそんな会話を交わっていた。

試合終了を知らせるブザーが鳴った。

「パーフェクト」

満足そうな笑みを浮かべて、雫がぽつりと呟いた。

*

*

*

「凄いいじゃない、達也くん！ これは快挙よ！」

第一高校の作戦本部として使用しているホテルの会議室にて、興奮した様子の真由美が達也の背中をバシバシと叩いていた。小柄な体格なので力も弱く痛くはないのだが、あまりにしつこいので達也は視

線だけで鈴音に助けを求める。

それを正確に読み取った鈴音が、真由美に近づいてその腕にスツと手を添えた。

「会長、そろそろ落ち着いてください」

「あ、そうね、ごめんなさい。でも本当に凄いことなのよ！ トップ3を独占だなんて！」

「凄いのは俺じゃなく、実際に戦った選手の方ですよ」

「いやいや、司波くんが私達のCADを調整してくれたからだよ！」

「そうだよ！ 今でも信じられないんだから！」

興奮したように話すのは、それぞれ2位と3位を取った明智と滝川だった。

「みんな、達也さんのおかげで入賞できたと思ってるよ。私だって、達也さんが担当していなかったら優勝できたかどうか分からない」

いつものように淡々と、しかしいつもより饒舌に話すのは、見事優勝に輝いた雫だった。彼女の言葉に他の2人の選手だけでなく、真由美や摩利もうんうんと頷いていた。

反応に困っている様子の達也に、鈴音が「そういえば」と声を掛ける。

「ところで司波くん、北山さんが予選で使用した魔法について、大学の方から『インデックス』に正式採用するかもしれないという打診が来ていますが」

「そうですね。では、開発者を聞かれましたら北山さんの名前を答えておいてください」

「——だ、駄目！」

あまりにも自然だったのでそのまま流しかけたが、雫はすんでのところまでそれを食い止めた。

鈴音の言った『インデックス』とは『国立魔法大学編纂・魔法大全・固有名称インデックス』の略であり、国立魔法大学が作成する魔法の百科事典に記された魔法の固有名称の一覧表である。ここに採用されるということは、大学が正式に認めた「新種魔法」として独立した見出しがつけられることを意味している。魔法開発に従事する研究

者ならば、誰しもが1つの目標として掲げるほどに名誉なことだ。

「これは達也さんのオリジナルなのに！」

「開発者の名前に最初の使用者が登録されるのは、割とよくあることだぞ」

「達也くん、謙遜も過ぎると嫌味だぞ？」

摩利の呆れたような言葉に、達也は首を横に振った。

「謙遜ではありませんよ。自分の名前が登録された魔法を、当の本人が使えないだなんて恥でしかないでしょう？」

確かに新種の魔法の開発者として名前が知られると、実演を求められることが多い。それなのに本人が使えないとなったら、最悪他人の手柄を横取りしたと思われかねないだろう。

「自分が使えない魔法を、どうやって試したんだ？」

「別に発動できないわけではありませんよ。ですが、俺だと時間が掛かり過ぎるんです。実戦レベルで使えなかったら“使える”とは言わないでしょう？」

「まあまあ、本人がこう言ってるんだから良いじゃないの！ 達也くん、この調子でどんどん頼むわよー！」

満面の笑みと共にそう言った真由美に、達也は軽く頭を下げて応えた。

雫も摩利も納得し難い表情だったが、それ以上何も言わなかった。

*

*

*

第一高校の選手3人が表彰台独占という、実に華々しい結果に終わった女子スピード・シューティング。

昼休憩を挟んで午後からは、同じ会場にて男子スピード・シューティングが行われることになっている。試合の余韻がまだ残っているのか会場内は独特の緊張感と高揚感に包まれており、男子の方も女子に負けないほどの素晴らしい試合を見せてほしい、そして第一高校男子にも女子に負けず劣らずの活躍を見せてほしい、という観客達の無言の期待に充ち満ちていた。

しかしその期待が、当の第一高校男子選手に相当な重圧として押し掛かっていた。控え室である第一高校の天幕では、選手もエンジニアも皆一様に重苦しい雰囲気を放ち、それぞれが一言も発せず、体を縮こまらせるように項垂れている。まだ試合すら始まっていないのに、選手全員が予選落ちでもしたかのような空気だ。

午前中に行われた女子の結果は、第一高校にとって素晴らしいの一言に尽きた。1位が50ポイント、2位が30ポイント、3位が20ポイントなので、第一高校はこの競技で一気に100ポイントも手に入れた計算となる。しかも本戦の方にもこれの半分である50ポイントが加算され、2位の第三高校に大きく差をつけ、独走態勢の足掛かりとなる成績だ。

もちろん、女子の活躍は彼らにとっても喜ばしいことだった。彼女達の成績はまさしく「偉業」と称して良いものだし、同じ一高選手として誇らしい気分にもなる。

しかし、だからこそ、彼らはプレッシャーを感じていた。

彼女達3人が一生懸命練習を重ねたうえで掴み取った勝利であることは、彼らも十分に分かり切っている。しかしそれと同じくらいに、彼女達の活躍の影には例の二科生から選ばれたエンジニアの姿があるということも分かり切っていた。いくら感情面でそれを否定したくても、彼らの一科生としての優秀な頭脳がそれを許してくれなかった。

普段からあれだけ馬鹿にしてきた二科生が、こんな偉業を成し遂げたんだ。

まさかおまえ達が、それよりも悪い成績を残すなんてあり得ないよな？

彼らの頭の中には、先程からこのような言葉がグルグルと巡っているのである。

——駄目だ、一旦外に出て気持ちを切り替えよう。

そんな選手の1人である森崎は、ブンブンと首を横に振って立ち上がり、天幕を抜け出した。壁に囲まれた天幕から外に出たことで、真夏にしては涼しげな風が優しく彼の肌を撫で、じんわりと滲み出てい

た彼の汗を冷やしていく。

しかしそれでも、森崎の気分が晴れることは無かった。

「……くそっ、なんであいつが……」

無意識の内に、彼の口からそんな言葉が漏れた。周りに誰もいないので、その言葉に答える者はいない。もし返事をされたとしても、彼がそれに答える余裕は無かっただろう。

「あいつって、誰のこと？」

「うわあああつー！」

と思っていたら、背後から突然耳元で囁かれ、森崎は思わず大きな悲鳴と共にその場から飛び退いた。

恨みを存分に込めた目で後ろを振り返ると、そこには「やつほー、森廣くん」と何とも気の抜けた表情で手を振るしんのすけの姿があった。

囁かれた耳を手で覆い隠しながら、森崎は大きく溜息を吐いた。

「何の用だ、野原。女子のバトル・ボードの予選が始まる時間だろ」

「そつちは後で真由美ちゃんに見せてもらおうつもり。せつかく同じチームになった仲なんだし、森本くんを応援しようかなって思って」
「そんな気遣いは無用だ。いつも連^つんでる例の二科生達と仲良くやってれば良いじゃないか」

「まあまあ、そう遠慮しないで」

「……………」

まるで聞く耳を持たないしんのすけに、森崎は突っぱねるのも面倒臭いと思ったのかそれ以上反論しなかった。それでも、最後の抵抗とばかりに恨みがましい視線を向けてはいるが。

「テントの方に行っても森泉くんがいなかったから探してたんだけど、こんな所で何してるの？ 立ちション？」

「近くにトイレがあるのに、わざわざ外でする必要無いだろうが。僕はアレだ、本番前に気分転換でもしようと思ってな。だから野原、おまえがいると気が散るんだ、さっさとどっかに行け」

「ほーほー。——で、さっき言ったあいつって誰？」

「おまえ、このタイミングで普通蒸し返すか!？」

森崎が目を吊り上げて怒鳴り声をあげるが、しんのすけはどこ吹く風で飄々とした表情を浮かべている。森崎本人としては怒りの抗議のつもりだったが、彼からしたらツッコミくらいにしか思っていないのだろう。

しばらくの間、森崎は頭をガシガシ掻きながら黙り込んでいたが、しんのすけが話題を切り替える気が無いことを感じ取るや、観念したようにポツポツと話し始めた。

「……野原は、一科生と二科生の制度についてどう思う?」

「あれっ? あいつの話は?」

「ちゃんとそこに繋がるから、今はその質問に答えろ!」

「ほいほい。——うーん、それって成績で教室を分けるってことでしょ? 他の学校でもやってることだから、別に普通なんじゃない?」

オラの友達に風間くんっているんだけど、風間くんが今通ってる高校も成績順でクラスが分かれてるんだって。風間くん、一番上のクラスになって喜んでたから憶えてるゾ」

しんのすけの言う通り、成績順に応じて教室を分けて勉強を教えるというのは、それなりに生徒数の多い進学校ならば普通に行われていることだ。魔法科高校に限っても、第一高校だけじゃなく第二高校と第三高校でも同様の制度を採用している。

二科生の授業には教師が付かないという課題こそあるが、教師の都合が付けば個人的に指導を頼むことはできるし、外部に持ち出せない資料の閲覧は二科生でも可能であることから、勉学の環境は整っているとと言える。

「僕が生まれたのは百家支流の家系だから、魔法的な才能は本流や十師族には及ばないし、僕自身も最初はごく平凡な技術しか持ち合わせていなかった。だから僕は必死になって努力して、そんな奴らにも負けないだけの実力を身に付けてきたつもりだった。だから第一高校に一科生として、しかも成績上位者だけが入れるA組に編入できたこと知って、自分の実力が認められたと思ってとても嬉しかったんだ。——なのに、」

そう話を区切る森崎の表情は、忌々しい、と表現するには悲哀の色

が強いように見えた。

もつとも、しんのすけがそれに気づいているかどうかは不明だが。

「……だがあいつは、司波達也は、学校の成績で言えば二科生の中でも下から数えた方が圧倒的に早いほどの『劣等生』なのに、いざこうして『実戦』の場になるとその評価が一変する。まるであいつの方が『優等生』で、僕達一科生の方が魔法師として劣っていると言わんばかりだ。——だとしたら、僕達が日頃積み重ねている『努力』だけの『実力』だのってというのは、いったい何の意味があるっていうんだ……？」

絞り出すように口から漏れ出した森崎のその疑問は、達也の風紀委員としての活躍を目の当たりにし、そして彼が九校戦の代表に入ってから特に強く感じるようになっていた。実戦魔法師としても魔工技師としても魔法研究者としても一流と呼べる達也の活躍に、森崎は心の奥底に追いやっていた劣等感が刺激されていくのを感じていた。

そしてそれは、森崎よりも近くで達也を見ていたしんのすけこそ、強く感じていたはずだ。

森崎はそんな思いを抱きながら、しんのすけへと向き直った。

「うーん、別にそんなに悩むことは無いんじゃない？」

森崎の話に、しんのすけはあっけらかんとした表情でそう言い放った。

「だって森崎くんは森崎くんで、達也くんは達也くんでしょ？ 人それぞれ得意なことが違うんだから、アレができないコレができないって悩んでても仕方くない？」

「何……？ おまえは司波達也に負けてても全然気にしないっていうのか？」

「別に勝負してるわけじゃないし、達也くんの方が上手くできるんなら達也くんにも任せれば良いやって思うゾ。授業で分からないところはいつも達也くんにも聞いてるし、オラのCADも達也くんにも診てもらってるし、風紀委員のときも達也くんにも報告書とか書いてもらってるからすつごく助かってるゾ！」

「……おまえ、少しは自分で何とかしろよ」

つい先程まで敵視していたはずの達也に対して、森崎はむしろ同情にも似た感情を抱いた。思い返してみれば、風紀委員の活動を終えて本部に帰ってくるときの彼は、元気が有り余っているしんのすけに對して随分と疲れを露わにしているように見える。

「……それじゃおまえは、無駄な努力は止めてあいつに全部任せれば良いって言いたいのか?」

「オラは達也くん任せちゃうっただけで、森崎くんは森崎くんのやりたいようにやれば良いんじゃない?」

「……たえそれが、無駄な努力だと嗤われてもか?」

「別に森崎くん、今までだって無駄な努力をしてたわけじゃないんでしょ?」

しんのすけの問い掛けに、森崎は即座に返事をする事ができなかった。

だがしんのすけには、それを気にする素振りは無かった。

「だって森崎くん、オラに色々教えてくれたじゃない。敵が待ち伏せしていそうな場所とか、だから相手の裏を搔いてこういう動きをした方が良いとか。オラそういうの全然分かんないから、森崎くんがいてくれて助かったゾ」

「……そんなもん、他に幾らでも教えられる奴がいるだろ。それこそ、あいつだって——」

「でも実際に教えてくれたのは森崎くんでしょ? それに森崎くんに教えてもらえってアドバイスしたの、達也くんだし」

「……どうせ自分で教えるのが面倒臭くなつて、それらしいことを言つて僕に押しつけたっただけだろ」

「んもう、すぐそうやって悪い方に考えるんだからあ」

やれやれ、とでも言わんばかりに、しんのすけは肩を竦めて両方の掌を上に向けるジェスチャーをした。そんな彼に森崎は一瞬顔をしかめるも、自分でもそう思ったのか不満をそのまま口にする事は無かった。

「それにさっきの試合だって、頑張ったのは達也くんだけじゃないでしょ? 雫ちゃんもエイミィちゃんも和美ちゃんも一生懸命練習し

たから、あんなに凄い結果を出せたんだと思うゾ」

「……そんなこと、頭では分かっているんだ。だがそれと同時に、あいつの力が無ければここまでの結果は出せなかった、ということばかり考えてしまうんだ」

「そこまで達也くんのことばかり気にするって、何だか達也くんに恋してるみたいだゾ」

「なっ……！ 何を気持ち悪いことを——」

「でもまあ、オラもよよぎくんに勝ちたいって思いながら剣道やってたから、森崎くんがそうやって達也くんのことばかり考えるのも分からなくはないゾ。でもそれで自分を追い詰めるのはちよつと違うんじゃない？ ってオラは思うんだけど」

「……………」

しんのすけの言葉に、森崎は返事をすることも無く俯き、黙りこくっていた。

と、ふいに遠くからアナウンスの声が聞こえてきた。男子スピード・シューティングの試合開始時刻と会場を告げるそれに、しんのすけが「おっ」と反応する。

「そろそろ時間かな？ それじゃオラはご飯食べながら客席で応援してるから、森ヶ丘くんも頑張つてね」

「……おまえ、さつきまで普通に僕の名前を言ってたじゃないか。僕は森崎だ」

「そーそー、そうやってツツコんでくれないとつまないゾ。じゃあねー」

しんのすけはクルリと踵を返すと、大きく手を振りながらその場を去っていった。その姿はまさに「無邪気」という言葉が相応しく、そのまま体を小さくすれば幼稚園児でも通じるだろう。

「……まったく、言うだけ言つてさつきと行きやがって……」

正直に言つてしまえば、状況はまったく変わっていない。自身の内に燃える劣等感については何も解決されていないし、これから行われる試合に対するプレッシャーなど考えたくもない。

「……とりあえず、天幕に戻るか」

それでも、先程と比べればほんの少しだけ楽になったのは確かだった。

しんのすけのおかげ、とは素直に思いたくなかったが。

第28話 「みんなには内緒のお話だゾ」

昼休憩を挟んで、午後のプログラムが始まった。敷地内のホテルや点在する屋台で昼食を終えた観客達が、目当ての競技、あるいは目当ての試合が行われるスタジアムに続々と集まっている。ほのかが出場する女子バトル・ボードの会場もほぼ満員であり、かなりの大所帯であるエリカ達が1ヶ所に集まって座るには、まだまだ空席が目立っていた昼食の時間帯から席を確保する必要があつたくらいだ。

バトル・ボードの試合時間は、平均して15分。しかしボードの上げ下ろしや水路の点検、損傷した箇所補修などが試合の合間に行われるため、競技スケジュールは1時間ごとによりレースとなつている。つまり後のレースになるほど選手は長く待たされることとなり、テンションの調整が上手くいかずに不本意な結果に終わる選手が毎年1人か2人はいるらしい。

しかしこの日の最終レースにてようやく出番がやって来たほのかは、少なくともモニターからはそのような不調は感じられなかった。彼女は本戦で摩利がしていたようにボードの上で仁王立ちをしているが、彼女の見た目からか摩利のような女王様然とした印象は受けず、気丈に振る舞う様がむしろ微笑ましくすら思える。

「さてと達也くん、いったい何を企んでるのかそろそろ話してもらおうかなあ?」

と、モニターを眺めていたエリカがふいに達也へと視線を向け、ニヤニヤと意味ありげな笑みでそんなことを尋ねてきた。

そんな彼女に、達也はうんざりといった表情を浮かべて、

「……何を言っているんだ、エリカ? 人聞きの悪い」

「いやいや、明らかに何か企んでるだろう?」

「あんなの、ほのかちゃんの趣味じゃないでしょうしね」

「もはや何も企んでいないって方がおかしいよね!」

他の面々はどうかやらエリカの味方なようで、レオが真っ先に達也の言葉を否定すると、ネネとひまわりがそれに乗っかって追撃を加える。幹比古・美月・風間といった控えめな性格の者も、口にこそ出し

ていないがウンウンと小さく頷いてそれに同意していた。

そうして先に発言した3人が揃って指差した先、モニターに大きく映し出されたほのかは現在、サングラスにも見えるほどに濃い色をしたゴーグルが掛けられていた。そしてそれは確かに、彼女の趣味にしては少々無骨なデザインをしている。

時間の経過によって日が大分傾き、直接向き合うと邪魔になる程度には眩しくなっているが、ガラス面に付着した水飛沫が視界を遮るのを嫌い、ゴーグルの類を使用する選手はあまりいない。現にほのか以外の選手はゴーグルを着用しておらず、彼女を時折不思議そうにチラチラ見遣るほどである。

では、なぜそれが達也の仕業かと皆が考えているかというところ、数時間ほど前に達也と深雪、そして雫の3人ではほのかの控室にお邪魔していたからである。

前述した通り、この競技ではテンションの維持も勝利の大事な要素となってくる。しかしほのかの担当エンジニアはあずさであり、元来気の弱い2人は控室で共にプレッシャーに押し潰されてはいないかと心配になったのである。案の定3人がやって来たときは、ほのかもあずさもホツとしたような表情で3人を快く出迎えてくれた。

そしてその場で達也が何かしらのアドバイスをして、その結果がほのかの掛けているゴーグルなのだろう、と全員が考えたのである。達也の隣で深雪がニコニコと機嫌良さそうに彼の様子を窺っているというのも、その考えを補強する要因となっていた。

そうして面白半分期待半分の目を一身に受けた達也は、やがて観念したように両手を軽く挙げて口を開いた。

「別に大したことじゃない。ちよつと考えれば、すぐに分かることさ」「…………いや、そう言われてもよ、もうちよつとヒントをくれよ」

レオの言葉に、他の面々も無言で頷いていた。

「それじゃ……、バトル・ボードで禁止されていることは？」

「えっと、他の選手を魔法で直接妨害すること、ですか？」

真つ先に答えた風間に、達也が「その通り」と頷く。

「直接」ってというのが、このルールにおけるポイントだ。つまり直

接でない場合、例えば水面に魔法を掛けることは許されている。だから水面に魔法を掛けて結果的に他の選手を妨害した場合は、ルール違反にはならない」

「うん、それは分かっているよ。だから他のレースでも、大きな波を立ててライバルを妨害したりしてるんだから」

「幹比古達が首を傾げて答えを考えている中、

「あつ、分かったかも」

「単純、だからこそ有効」

「ほぼ同時に声をあげたのは、みさえとボーだった。

「えっ！ 分かったのか、みさえ！」

「言わないで、ママ！ 今考えてるから！」

「ボーちゃんもだよ！」

他の皆がより一層必死になつて考えている横で、心配そうな表情を浮かべたみさえが達也へと尋ねる。

「ねえ、達也くん。確かに効果がありそうだけど、他の子達は大丈夫なのかしら？」

「心配いりませんよ。ちゃんと加減していますので」

「そ、そう？ なら良いんだけど……」

と、丁度そのとき、静かにするようにとのアナウンスが会場中に響いた。スタートが近づいている緊張感に、観客が途端に静まり返る。

やがてブザーが鳴り、本日最終レースの火蓋が切つて落とされた。

その直後、スタート地点の水面で強力な光が炸裂した。選手達は反射的に目を覆うが、その中の1人が光をモロに見てしまった影響でバランスを崩し、落水していた。

突然のアクシデントで他の選手がスタートにもたつく中、ただ1人悠然とスタートダッシュを決めたのは、ほのかだった。

その瞬間、会場の誰もが気づいた。犯人は彼女だと。

「よし」

「いや、よしじゃねーよ！ 何だよ今は！ いくら何でも狡すぎんだろ！」

「何を言ってるんだ。イエローフラッグは振られていない。つまり審

判はさつき魔法を認めたということだ」

「確かにルールには反してないけどさ……」

スタートの遅れ、そして強烈な光を受けたことによる視界不良と精神的動揺、もちろんほのか自身の運転技術も相まって、みるみる後続グループとの距離が開いていく。

「水面に干渉するとなると、波を立てたり渦を作ったりとか。水面の挙動」にばかり意識を向けがちだが、許可されているのはあくまでも「水面に魔法で干渉して他の選手の妨害をする」ことだ。さすがに水面を沸騰させたり凍結させるのはまずいが、目眩まし程度のこととは逆に今まで行われてこなかったことの方が不思議だな」

「へえ……、”工夫”って本当に大事なんですねえ……」

「いや、確かにこれも”工夫”だけども……。何か納得できないわあ……」

美月が素直に感心し、レオやエリカ達が悩ましげに頭を抱えている中、なお平然とした表情のままの雫が達也に話し掛ける。

「でも達也さん、大丈夫なの？ 予選の段階で手の内を見せて。多分これ、1回しか通用しない戦法でしょ？」

「もちろん、その辺りも考えている。この目眩ましは予選を勝ち抜くためのものだけでなく、次の試合の布石でもあるんだからな」

意地の悪い笑みを浮かべる達也に、雫は感心したように頻りに頷いていた。

「おいおい、まだ何か企んでいるのかよ……」

「何だか私、達也さんがラスボスか何かに見えてきたよ」

そしてそんな達也に、ひろしとひまわりが顔を寄せ合ってそんな会話をしていた。

レースの結果は、もちろんほのかがぶっちぎりで1位となった。

*

*

*

こうして大会4日目、新人戦初日の全日程が終了した。

その日の夜、第一高校のミーティングルームにて、三巨頭である真

由美・克人・摩利、そして作戦スタッフである鈴音がこの日の結果を纏めていた。

女子のスピード・シューティングは3人が揃って表彰台を独占するという最高の結果に終わり、女子バトル・ボードもほのかを含む2人が見事に予選を突破した。そのレース内容も彼らの納得の行くものであり、明日以降のレースも大いに期待できるだろう。

この結果に、4人は満面の笑みを浮かべて——いなかった。それどころかむしろ揃って表情を曇らせており、どうしたものかと頭を悩ませているのが見て取れる。

「森崎くんが準優勝したけど、他の2人は予選落ちか……」

彼女達が見ていたのは、午後に行われた男子スピード・シューティングの順位表だった。

先程真由美が呟いたように、森崎が見事に準優勝を果たしたが、他の2選手は予選落ちという不甲斐ない結果に終わってしまった。現在総合成績2位の第三高校の選手が1位と4位を獲得したため、せっかく女子の方で稼いだポイント差を縮められてしまっている。

「だけど森崎くんは、本当によく頑張ったと思うわ。自分があまり得意ではないスピード・シューティングで、ここまでの成績を残すことができたんだから。もし決勝の相手があつたら『カーディナル・ジョージ』じゃなかったら、優勝できたかもしれないわね」

真由美の言葉に、他の3人が無言で肯定する。

だからこそ、歯がゆかった。

「男子の不振は『早撃ち』だけじゃない。『波乗り』でも女子は2人が予選突破したのに対し、男子は僅かに1人だ。このままズルズルと不振が続くようでは、今年は良くても来年以降に差し障りが出るかもしれない」

「それはつまり、負け癖がつくということか?」

「その恐れは、充分にあるだろう」

克人の言葉が、他の3人に重くのし掛かる。自分達の所属する第一高校は、ただの魔法科高校ではない。九校戦で過去9回中5回も優勝している『強豪』だ。一高のリーダーを自認している彼らからする

と、『今年が良かったから』などという安逸に甘んじることはできないのである。

「男子の方は、テコ入れが必要かもしれない」

「テコ入れと言っても、いったいどうするんだ？ もう九校戦は始まってしまっている、今更選手もスタツフも変えることはできないぞ」

摩利のその言葉に、克人は何も答えなかった。

答えられなかった、なのか、答えはあるが黙っている、なのかは本人のみぞ知ることだが。

*

*

*

明日行われる競技は、男女クラウド・ボールの予選から決勝、そして男女ピラーズ・ブレイクの予選となっている。前者はしんのすけが、後者は深雪と雫が出場する競技であり、達也は後者のエンジニア担当となっている。しんのすけのエンジニア担当は五十里であるが、CAD自体は達也が用意したもので実質的にはそちらも兼任していると言っても良い。

風間少佐から警告された例の犯罪組織は、摩利の事故以来目立った動きを見せていない。しかし達也は、決して気を抜くことはしなかった。彼の読みではCADに細工を仕掛けるのは競技の直前ではあるが、夜の内に妨害工作を受ける可能性もゼロではない以上、用心するに越したことはない。

なので達也は作業車でCADの最終調整を終えると、システムで厳重にロックを掛けた後に保管庫のドアを三重に施錠した。作業車を出た後も周りに常に意識を向け、人間の気配もそうでない気配も感じないことを確認してからホテルの中へと入っていった。

もう夜も遅いし、明日も朝一からエンジニアとしての仕事が待っている。睡眠不足は集中力を低下させ、思わぬミスに繋がりがかねない。なので達也は、さっさと自分の部屋に戻って寝ようと思っていたのだが、

「夜遅くまでお疲れ様ですわ、司波達也さん」

「……………」

フロントにすらスタッフがいないため完全に無人となっていたはずの玄関ロビーにて、トレードマークである臙脂色の服ではなく、暗闇に溶け込むような真つ黒な軽装に身を包んだ酔乙女あいと鉢合わせた。ちなみに彼女の傍に寄り添うようにして立つ黒スーツの男は、今回はどこにも見当たらない。

「こんな所にお一人とは、少々危ないのでは？」

「彼は些か目立つので、少し離れてもらいました。それにせつかくあなたと話をするというのに、彼が傍にいたらできる話もできなくなるでしょう？」

「…………自分と話、ですか」

「はい。——とりあえず、座りましょうか」

あいに促されるまま、達也はロビー脇の休憩所にあるソファアへと腰を下ろした。ちなみにその近くには水の流れるオブジェが鎮座しており、普段なら誰もいないこの時間でも変わらず稼働している。そこまで激しい流れではないので2人の会話を妨げることは無く、しかし外から2人の会話を盗み聞こうとする者への防波堤になってくれる。

そしてあいは達也と同じソファアに、体1つ分ほどの距離を空けて座った。

「さてと、まずは女子スピード・シューティングでのトップ3独占、真におめでとうございます」

「選手の努力の賜物です。自分は何も」

「あらあら、随分とご謙遜なさるのですね。見る者が見れば、その活躍の裏に優秀なエンジニアがいることは分かるのですけど」

「謙遜ではないのですけどね」

軽く肩を竦めてそう答える達也に、あいはニコリと笑みを浮かべた。

「それで、どのようなご用件で？」

「……………そうですね、夜も遅いですし、あまり長引かせて明日に支障が

出ては困りますわ」

あいは上半身を達也へと向け、まっすぐ彼を見据えて話を切り出した。

「あなた、私の会社に来ませんか？」

「……これはまた、随分と直球ですね」

「嫌いじゃないでしょう？」

「なぜ自分なのでしょう？ もし今日の試合を観てそう思ったのであれば、その判断は些か早急なのは？ あなたの期待に応えられるような技術が自分にあるとは思えないのですが」

達也の疑問に、あいは口に手を当ててクスクスと含み笑いをした。蝶よ花よと大事に育てられたお嬢様然とした優雅な所作であるが、その目の奥には獲物をどう追い詰めようか企む鋭い光が宿っている。

「……何か、おかしなことでも言いましたか？」

「いえ、気にしないでください。何というか、随分と堂に入った『演技』だなど思っただけですわ」

「……どういう、意味でしょうか？」

「だって、あなた以上の技術を持つ高校生なんてまずいないもの。いえ、世界中の現役魔工師と比べてもトップレベルと断言して良いでしょう。」

——あなた自身はそう思わない？ 『ミスター・シルバー』——

「——！」

その瞬間、達也の血の気が一気に引いた。反応を表に出さずに済んだのは、普段から無意識のように感情を抑えている習慣によるものだった。

しかし目の前にいる彼女には、自分の動揺がどこまで気づかれたか分からない。ちよっとした気配の変化だけで精神的な動揺を察知する程度のことではやってのけそうさだ。

「いきなり何を言い出すのでしょうか？ 何の話だか、自分にはさっぱり——」

「ああ、そういうのは結構です。正直に言ってしまったえば、あなたのことは実際こうして顔を合わせて会話をする前から知っていたので」

達也の言葉を途中で遮って突っ撥ねる彼女の表情、そして仕草は、彼の観察力をもってしても嘘やハツタリとはとても思えなかった。達也を「トールス・シルバー」ではなく敢えて「ミスター・シルバー」と呼んだことから、それが達也一人ではなく牛山との共同ネームであることも突き止めており、そしてそれを確信できるだけの確固たる情報を掴んでいることが分かる。

「……いつから、ですか？」

「あなたにしん様のCAD製作を依頼したときから、ですわ。まさか当時中学生のあなたが世界にその名を轟かせる「トールス・シルバー」の片割れだとは信じられませんでしたが、出来上がった物を見る限りその名に偽りは無かったと認めざるを得ませんわ」

「……FLTの開発センターで顔を合わせたのは、ひよっとしてわざとですか？」

「いいえ、あの場で出会ったのは本当に偶然でしたの。本来ならば、こうして話を持ち掛けるのももう少し後の予定だったんですわ」

「……いったいどこから、自分の情報を？」

「あら、それを素直に教えるとお思いで？」

FLT所属の天才技師「トールス・シルバー」の正体は、同じ開発室のメンバーとごく一部の経営陣しか知らない超極秘事項だ。業界第2位であるドイツの魔法工学機器メーカー「ローゼン・マギクラフト」など専門の調査部署を立ち上げてまで突き止めようとしているが、それでも尻尾を掴ませていないほどに情報統制がしっかりしている。

どこから情報が漏れたのか非常に気になるところだが、今は目の前の少女への対応に集中することにした。

「それで「トールス・シルバー」である俺を、自分の会社に引き抜きたいと？」

「まあ、そうね。どうかしら？ 今の給料の5倍は出すし、当然働きによつては臨時ボーナスも付けるわ」

「俺が金で釣れるような人間だと?」

「もちろん、あそこの開発室にいる全員を丸ごと引き抜いても良いわ。私の会社でもまったく同じメンバーで開発できるし、何を開発するかについてもあなた方の自由。あなたの興味の赴くまま好きなだけ好きなことを研究して構わないし、そのための費用にも糸目はつけないわ」

「ほう。俺を引き抜くために、随分と必死ですね」

「もちろんですわ。あなたにはそれだけの価値があるもの」

一人称が変わり、挑発的な言葉が見られるようになって、あいの達也を見つめる目と口元に浮かぶ微笑は微塵も揺らがない。

しかし揺らがないのは、達也も同じだった。

「せつかくの申し出ですが、お断りさせていただきます」

「あらまあ、もしかして今の会社に対して引け目を感じるのか? 100年前の日本ならまだしも、今は自身のキャリアアップのために転職を重ねるなんて珍しくないでしょう?」

「別に俺はキャリアアップなどに興味は無いですし、今の環境も悪くないと思っっているんですよ」

「そうかしら? 今のあなたの会社が、あなたの働きを正當に評価できるとは到底思えないのだけれども。あなたのご両親に手柄を横取りされないか注意しながらコソコソ開発するなんて面白くないでしょう?」

「随分とお調べになっているようですが、特に両親に対して思うところは何も無いので」

あいの言葉をバツサリと否定する達也だが、人を見る目に長けた彼女から見ても嘘を言っているように感じられなかった。本当に彼は現状に満足しているのか、それとも――

「そうですか、よく分かりました」

自分の話にも一切靡かない達也の姿に、あいはそう言って達也へと乗り出していた体をスツと引いた。

「どうやら諦めてくれたようだ、と達也は内心胸を撫で下ろし――

「それじゃ、あなたの会社を買収しちゃいましょう」

「はいっ?」

何てことないかのように言つてのけるあいには、達也は滅多に出さないような間抜け声をあげてしまった。

隣へと顔を向けると、彼女はしてやったりと言わんばかりの所謂ドヤ顔で彼を見遣る。

「ウチの魔法工学メーカーに吸収させるか、それともFLTの名前を残したまま子会社化するか、具体的な部分については追々詰めていくことになるでしょうけど、そう遠くない未来にあなたの職場が私達のグループ会社になるからそのつもりで」

「あの——」

「さっきあなたに言つた給料5倍臨時ボーナス付きも、ちゃんと実現させてあげるから安心なさい。もちろん人員はそっくりそのまま続投するから、あなたの開発部署は今まで通り研究を続けられるわ。まあ、上層部の顔触れは少し変わるかもしれないけど、少なくともあなたの悪いようにはしないから——」

「いや、ちよつと待つてください」

どんだん話を進めるあいには、達也は腕を伸ばすジェスチャーを付けてむりやり遮った。

「買収すると簡単に言ってますけど、そんなことができると——」

「思っていますよ。FLTが発行している株式を買い取れば良いのですから。経営権を獲得するには過半数超えで充分ですが、大事を取って100%取るのが理想ですね」

「それは……確かに、そうかもしれないませんが……」

確かに普通の会社ならば、あいの理屈その通りだ。

しかし達也は、FLTが普通の会社とは事情が違うことを知っている。

FLT(Four Leaves Technology)は、日本を裏で牛耳る十師族の中でも最も恐れられている四葉家の出資で設立された会社だ。トーラス・シルバーの開発した様々な製品の売上、さらには開発した新技術を他の会社が利用するときに発生する使用料もかなりの額になり、けつして表に名前を出さないように、大企

業の親会社の親会社の〳〵」という形で支配する四葉家にとっても大きな資金源となっている。

だからこそ四葉家は、万が一にもどこぞのファンドや企業からのM&Aを受けないよう、株主の全てを四葉家の息の掛かった者に限定している。筆頭株主に至っては達也の父親で同社の開発本部長を勤める司波龍郎であり、そして彼はその性格上、まかり間違っても四葉家の意にそぐわぬ行動をするような、いや、できるような人間ではない。「なぜそこまでして、俺のことを引き入れようとするのですか？ さんのすけのCADを診させてもらいましたが、あなたの会社にも優秀な人材はいるでしょう？」

「あら？ あなたほどの技術力ならば、何とんでも自分の会社に迎えたいと思うのは当然ではなくて？ だからこそ他の会社も、あなたの正体を血眼になって探しているのですから」

「……自分で言うのも何ですが、確かにそうなのかもしれません。しかしあなたからは、それ以外にも狙いがあるように思えてならないのですが」

「あらまあ、それはどういった根拠で？」

「根拠はありません。強いて言うならば、俺自身の勘によるものです」「あなたらしくもない非論理的な理屈ですね。——まあ、嫌いではないですけど」

あいはそう言って含みのある笑みを浮かべ、そして1拍置いてから再び口を開いた。

「まず初めに言っておきますが、私はあなたに対して何ら特別な感情は抱いておりません。むしろ個人的には、あなたのことは気に入らないくらいです」

「なぜそこまで嫌われているのかは知りませんが、前半については理解しました」

「ですがそれを踏まえたうえで私はあなたの『実力』を見て、ぜひともあなたを『味方』に引き入れたいと考えました」

「味方？ あなたなの、ですか？」

「いいえ。——しん様の、です」

あいの答えは、達也にとっては予想の範疇内ではあった。わざわざ自分を指名してしんのすけのCADを特注するほどに入れ揚げていくくらいだし、過去に何があったか知らないがよほど彼に心酔しているのだろう。

しかし、「味方」という表現には少々違和感を覚えた。しんのすけのCADを作らせるだけなら、FLTを買収しようがしまいが自分に依頼するだけで事足りる。そのようなビジネスライクな関係に「味方」という表現は少々似つかわしくない。

「あなたのことだから或る程度はお調べでしょうけど、しん様は本来これだけ自由に動き回れるような身分ではありませんわ。今は学校に通うために単身者用のマンションで一人暮らしをしておりますが、本来ならば広大な敷地を与えられ、国を挙げて保護されるべき立場のお方ですわ」

「……………」

「ですがそれをしないのは、しん様が現在進行形で世界を無自覚に救っているからですわ。そのためにも、しん様には自由に動いてもらう必要がある。——しかしそれは同時に、世界を巻き込む事態に発展する可能性のあるトラブルに巻き込まれる危険も孕んでいる」

「……………つまり「味方」になれというのは、そういった危険の露払いをしろ、ということですか？」

「もちろん、お一人ではありませんわ。4月のときみたいに優秀なお仲間は大勢いますもの」

成程。つまりSMLやレモンのように、いざというときにしんのすけの味方となる者が他にも大勢いるのだろう。そして達也にも、そんな者達の1人になってほしいということか。

「それを聞いた後だと、あなたのスカウトを受けるのは憚られるのですが」

「確かにその通りですわね、なので返事はまたの機会まで保留としますわ。——とはいえ、しん様と縁浅からぬ関係となった以上、あなたがトラブルに巻き込まれるのはほぼ決まったようなものですが」

なんて傍迷惑な、と達也は思わず口から漏れかけ、すんでのところ

でそれを呑み込んだ。

しかしほんの僅かにしかめられた表情を目敏く読み取ったのか、あいはそんな彼に向かってフツと笑みを浮かべた。

「そんな顔をしないでくださいな。私の個人的な感情を抜きにして、あなたとはこれから〃末永いお付き合い〃をする必要があるのですから」

「……それはまた、何とも——」

「2人共、こんな所で何してるの？」

「——！」
「——！」

突然聞こえてきた第三者の声、しかも非常に聞き馴染みのあるそれに、達也とあいが同時に反応して瞬時にそちらへと振り向いた。

そこにいたのは、パジャマとして利用しているジャージ姿のしんのすけだった。

「しんのすけ、どうしてここに？」

「ジューズを買うついでに散歩でもしようかなって思ってたから、2人がここにいるのが見えたんだゾ。んで、2人はなんでここに？」

「……偶然顔を合わせてな、せっかくだから少し話をしていたんだ」

何とも苦しい誤魔化しであることを自覚しながら達也がそう言うと、案の定しんのすけは不思議そうな表情で達也を見つめた。

そして彼の視線が、隣に座るあいへと移る。

それから再び達也へ。そして再びあいへ。

それを数回繰り返したしんのすけは、ふいに「ああ」と声を漏らした。

「ほーほー、2人はそういう関係だったのですなあ」

「あ、あの、しん様？」

今までの余裕たつぷりな言動から一転、あいが引き曇った表情と声を出した。

「なーんだ、それじゃオラ邪魔しちゃったね。ゴメンゴメン」

「ちよつとお待ちになって、しん様！ それは誤解です！」

「えっ？　だつてさつきあいちゃん、達也くんに『これからも末永いお付き合いを』みたいなこと言つてなかつた？」

「よりよつて、その部分を!?　お待ちくださいしん様、あれは言葉の綾というか気取つた言い回しというか——」

「ダイジョーブ！　オラは空気の読める大人の男だから！　2人のことは他の皆には黙つておくから安心して良いゾ！」

「違ふんです、しん様！　本当に誤解なんです！」

「それじゃ、お邪魔なオラは部屋に戻つてるから！　そゆことで！」

「しん様！　しん様あ！」

しんのすけは優れた運動神経を活かした全速力でその場を立ち去り、あつという間に姿を消してしまつた。彼女の悲鳴にも似た呼び掛けが、2人以外誰もいないロビーに虚しく響き渡る。

しかしそれでめげるようでは、世界最大規模の大企業の後継者は務まらない。

「こうしちやいられませんわ、今すぐしん様の誤解を解かなければ……」
色々なものをかなぐり捨ててる勢いで、彼女はしんのすけが去つていった方へと走つていった。

水の流れるオブジェがザバザバと音を立てるのみのロビーに、呆然とした表情の達也が1人取り残された。

「……成程、トラブルとは例えばこういうことを指すのか」

ぽつりと呟いた達也の独り言が、水の音に掻き消されて霧散した。

第29話 「オラも参戦！ クラウド・ボールだゾ」

連日熱い戦いが繰り広げられている富士演習場とは打って変わって、ここ旧埼玉県春日部市は実にのどかで平和なものだった。

第三次世界大戦によつて一時期は人口の減少が著しかった日本も、戦後の復興により生活が安定してきたことで現在は回復傾向にある。なので年齢別で見ると若年層の割合が大きくなっており、それは公園や商業施設、さらにはレジャー・スポーツに集まる多くの子供や若者の姿からも窺い知ることができる。しかも現在は夏休みなこともあり、その賑やかさは普段の数割増しだ。

それでは普段子供達が通う学校などはさぞかし暇を持て余しているだろう、と思われがちだがそんなことは無い。中学校や高校は夏休み中も部活動や夏期講習などが執り行われるし、小学校や幼稚園などは生徒のいないこの時期に備品や施設の整備をするため教員は出勤することが多く、また地域のイベントの見回りに駆り出されることもあるため案外忙しいのである。

そんな春日部の教育施設の1つ、ふたば幼稚園。

普通の人々にとっては数多くある幼稚園の1つに過ぎないが、その裏では世界中の有力者がこの場所に注目し、その動向を見守っていた非常に重要な場所だった。

なぜならこの幼稚園こそが、現在もその一挙手一投足に注目が集まる人物・野原しんのすけが100年近く通い続けてきた場所だからだ。当然ながら彼の幼馴染である春日部防衛隊4人、そして経済界を飛び越えて大きな存在感を放つ令嬢・酢乙女あい、さらにはその雰囲気は無意識に感じ取っていたのか何かと優秀な子供が集まる傾向にあった。一説にはその注目度は、それこそ先進国の首脳官邸にも匹敵、あるいは凌駕するレベルだったという。

しかしそれも、現在ではほとんど下火となっている。他ならぬ中心人物であったしんのすけが成長し、卒園を迎えたからである。それと同時に何かと騒がしかった幼稚園にも平穏が訪れ、今ではすっかり他の幼稚園と同じ日常が流れるようになった。

「かぁー、あつちい！ 昔は夏でも長袖だったのが嘘みたいだぜ！」

園内のグラウンドに転がる細かい石を箒で掃いていた1人の女性が、煌々と照りつける太陽の日差しに我慢ならないといった感じで吐き捨てた。その口調は乱暴にも聞こえるが、子供達が怪我をしないように石を掃くその手つきはとても丁寧だ。

彼女の名は、桶川竜子。かつては親友2人と共に当時でもレトロなスケバントリオ「埼玉紅さそり隊」を結成し、一部の界限から恐れられたりからかわれたり変な人扱いされたりしていたが、根っこは普通に善良な女子高生だったため、「サザエさん時空」を抜け出して高校を卒業した後は大学に進み、卒業後はかつて職業体験で好印象だったふたば幼稚園の先生となった。子供目線に立って一緒に遊んでくれる先生として、子供達だけでなく親御さんからも評判は上々だ。

「おーい、リーダー！ いつまで掃除やってんすか！」
「早くしないと、試合始まっちゃいますよー！」

そしてそんな彼女に建物の中から大声で呼び掛けるのは、彼女と同じ歳、そして職場の同僚でもある女性2人だった。

この2人は前述した「埼玉紅さそり隊」のメンバーであり、竜子はその名残で今でも「お銀」や「マリー」と呼んでいる。昔はコンプレックスだった可愛らしい唇をマスクで隠さなくなったお銀と、子供達と一緒に走り回っているためか一回り痩せたマリーとは今でも変わらず親友で、竜子はよく「心の中では「埼玉紅さそり隊」は今なお続いている」と豪語しているが、2人からの反応は正直微妙なものだった。

そんなことはさておき、2人に呼ばれた竜子は「もうそんな時間か」と手にしていた箒を一旦その場に置き、建物の中にある事務所へと入っていった。部屋の奥には来客用の応接セットと共にテレビが置かれ、現在はそれを取り囲むように他の同僚、さらにはふたば幼稚園の園長並びに園長婦人がそれに注目していた。

「もう試合始まっちゃいました？」

「大丈夫よ、今まさに入場してきたところだから」

「しかしまあ、生意気なガキンチョだったあの子があんなに立派に

なっちやつて」

「こ、こんな大きな大会に出られるなんて、し、しんちゃんは凄いですね」

「子供達が立派に育っていくのを見ると、この仕事をやって良かったと改めて思いますね」

「本当に、色々ありましたからねえ」

竜子の質問に答える、まさに保母さんといった優しい雰囲気的女性・石坂みどり。

その隣で長い脚を組み、切れ長の目をテレビに向けて感想を漏らす女性・松坂梅。

遠慮がちに、しかし楽しそうに前のめりでテレビを見つめる眼鏡の女性・上尾ますみ。

まるでヤから始まる自由業の人物かと思紛う強面ながら、テレビに映る人物を見て感慨深げに頷く園長・高倉文太と、彼の隣に寄り添ってにこやかに笑う園長婦人・高倉志麻。

この5人は「サザエさん時空」が起こっていた時代から幼稚園で勤め、しんのすけ達が在園していた100年近くを共に乗り越えてきた面々だ。しんのすけ達が巻き起こすトラブルだけでなく、時には世界の有力者達が注目するような重大事件に巻き込まれることもしばしばだった彼女達だが、だからこそ100年という長さを抜きにしても彼らとの思い出は強く、また深かった。

「頑張つて、しんちゃん。私達が見守っているからね」

両手を握り締めて祈るような仕草で、当時彼の担任だったみどりが呟いた。

*

*

*

九校戦5日目、新人戦2日目。

男子クラウド・ボールを執り行うスタジアムの観客席は、ほぼ満席だった。

「フレーー！ フレーー！ しんのすけ！」

「頑張れー！ しんちゃんー！」

「お兄ちゃん、ファイトー！」

そんな観客席の最前列に座って一際大声をあげて応援に精を入れるのは、野原ひろし・みさえ・ひまわりの野原一家に、風間トオル・桜田ネネ・佐藤マサオ・ボーの春日部防衛隊。試合が始まる数時間前、それこそ開場と同時に最前列の席を確保した彼らの目当ては当然、今まさに入場してきたしんのすけの雄姿をその目で見届げるためだ。

ちなみに現在この場には、昨日まで一緒に行動していた魔法科高校の面々はいない。同時刻に行われ、深雪と雫が選手として、そして達也がエンジニアとして出場する女子ピラース・ブレイクがあるためだ。どちらも互いの試合を生で観られないのを残念がり、そして互いの健闘を祈ってホテルを後にした。

さて、そんな感じで見える所と見えない所から様々な人達の期待を一身に受けるしんのすけは、数千人にもなる観客の歓声も相まってさぞ緊張している——と思いきや、

「ねえねえお姉さん、オラが優勝したらあの夕日の見えるホテルのレストランで一緒にお食事しな〜い？」

試合直前という大事なときに、あろう事か観客の女性をフェンス越しにナンパしていた。

「おいコラ、しんのすけ！ おまえ、こんなときぐらい緊張感持てよー！」

「んもう、トオルちゃんったらそんなに嫉妬しちやつてえ」

「だ、誰が嫉妬するかあー！」

「第一高校の君！ 早くコートに着きなさい！」

「ほら、審判が呼んでるぞ！ さっさと行け！」

「ほいほい」

前代未聞の理由で失格処分が下されるところだったしんのすけだが、足早にコートへと駆けつけたことでそれは免れた。ネットの向こう側では、対戦相手である選手が非常にイライラした様子で彼を睨みつけている。もしこれが相手の冷静さを欠く精神的攻撃ならば作戦通りと言えるが、十中八九しんのすけにそんな意図は無い。

この段階に来てようやく真面目にやる気になったのか、しんのすけの表情が若干真剣なものとなり、自身の腰に巻かれたベルト型CADの具合を確かめるようにグイッと引つ張り上げた。普段彼が使っているのと同じように見えるが、大会のレギュレーションに合わせて達也がわざわざ試合のために新調した物だ。普段と違って1つの系統魔法しか登録できない特化型だが、普段と同じく音声認識で動かすことができる。

クラウド・ボールの場合、作戦は大きく分けて2つ。機動力を魔法で上げてラケットで打ち返すか、なるべくその場を動かずに魔法でボールを打ち返すか、だ。なので選手が入場した時点でどちらの作戦で来るかある程度予想でき、相手選手はCAD以外何も持っていないので後者、しんのすけは市販されているラケットを片手に持っているので前者だと分かる。

「――それでは、試合開始!」

審判の合図と共に試合開始のブザーが鳴り、その瞬間、しんのすけのコート目掛けて低反発のボールが山なりに飛んできた。

しんのすけは魔法を使わず早足でボールへと駆け寄り、

「ほいっと」

ばすんっ――!

気の抜けた声からは想像もつかない鋭いスイングで、レーザーのように強烈な軌道を描いてボールが相手コートに叩き込まれた。相手選手が顔色を変えて魔法でボールを打ち返したときには、しんのすけのスコアに1の数字がでかかと刻まれていた。

鋭い角度でしんのすけのコートに迫るボールだが、しんのすけが「変身」と呟いて駆け出した次の瞬間にはもうボールに追いついていた。そして駆け寄り勢いもラケットに乗せて振り抜き、ほぼ同じスピードで相手コートへと打ち返す。しかし今度は相手も不意を突かれることなく、冷静に魔法をボールの軌道に合わせて発動して打ち返した。

しばらくラリーが続いた頃、新たにボールが追加された。今度は相手コートへと飛んで行ったそれを、相手選手は自分へと向かって来て

いたボールも同時に照準を合わせ、ほとんど同時に、しかしまったく別方向へと飛ばした。コートのはぼ真ん中にいたしんのすけの正面で、2つのボールがそれぞれ左右のラインぎりぎりに向かっていく。貰った、と相手選手がニヤリと笑った、

次の瞬間、

スパパパンツ——！

「なっ——！」

その瞬間、しんのすけが2人に増えた。

2人のしんのすけがそれぞれボールがバウンドするであろう場所に先回りし、ほとんど間を空けずに2つのボールが打ち返された。相手選手は咄嗟に動くことができず2つのボールが自分のコートでバウンドするのをただ見届けるしかない、という数秒前まで自分が彼相手に想像していたことをそっくりそのままやり返された。

もちろん、実際にしんのすけが増えたわけではない。

彼はただ単純に、ボールに向かって走り打ち返す、という行動を2回繰り返したただけだ。しかし彼の場合、スタート時に魔法で一気にトップスピードまで持つていき、ボールに追いついた瞬間にタイムラグ無しで魔法を終了させている。そして次の瞬間に再び魔法を発動、即座にトップスピードに乗って次のボールに迫り着く。これを相手の網膜に残像が生まれるほどに短い時間でやってのけたために、あたかも彼が分身したように見えたのである。

しんのすけの動きに、何年も九校戦で様々な選手を見てきた観客達からもどよめきが起こった。徹底的に無駄を排除した達也のエンジニアとしての技術と、魔法のオンオフ切替が抜群に上手いしんのすけのセンスが合わさって実現したその動きは、目の肥えた観客をも唸らせるものだった。

相手選手も彼の想像以上の実力に顔をしかめるが、すぐさま気を取り直してボールにベクトル変換魔法を掛けた。しかし先程も見せたスピードで対処するしんのすけに、相手選手もなかなか攻めあぐねている様子だ。

と、ここで3つ目のボールが追加された。相手選手は思わず舌打ち

するが、しかしそれは同時にしんのすけに対しても脅威となるはずだ。相手選手は山なりに落ちてくるボールに銃口を向け、魔法を掛けてしんのすけのコートへと打ち込んだ。

しかし彼のスピードは、ボールが3つになっても揺るがない。相手選手は彼の動きが崩れるのを待ちながら、時折左右に打ち分けたりと揺さぶりを掛けていく。

そうしている内に、4つ目のボールが追加。

5つ目、6つ目、7つ目、8つ目――。

そしてとうとう、最大数である9個のボールが両方のコートで縦横無尽に飛び交うようになった。相手選手はサイオンの消費で顔を悪くしながらも、力を振り絞って9個のボールに次々と銃口を向けていく。ここまで来るともはやコースの打ち分けなんて言ってられる状況ではなく、透明な壁や天井のおかげでアウトの心配も無いので、とにかくボールを打ち返すことだけに集中した。

向こうの様子はどうかだろうか、と相手選手はフツと顔を上げて、

「嘘、だろ――！」

ネットの向こう側で、しんのすけがさらに増えていた。

常に3人は彼の姿が見えているような勢いでコートの中を走り回り、ときには空中に跳び上がってラケットを振り下ろそうとする彼の姿が、まるで機材の調子が悪いホログラム映像のように現れたり消えたりを繰り返している。ほんの一瞬だけ彼の姿が見えた場所でボールが打ち返され、相手選手のコートに叩き込まれていく。

一方それとは対照的にその場を動かずにいた相手選手が、ここに来てフラフラと動き回るようになった。CADの魔法で打ち返すのは変わらないが、少しでも早く返したいという感情が1歩2歩ボールに近づくという動きで表れているのかもしれない。

ビ――

試合終了のブザーが鳴り響いた。その瞬間に相手選手はその場で足を止め、両膝に手を突いて大きく息を荒らげるほどに疲労困憊だった。9個のボールに常に気を配りながら魔法で打ち返し続けるというのは、それだけ気力と体力（この場合は魔力か）を消耗することな

のである。

しかし現実是非情であり、これでもまだ1セット目が終わったただけだ。たった3分だけのインターバルを挟んで次のセットが始まり、男子の場合5セット行われてようやく試合が終了する。

相手選手は、スコアボードに目を遣った。

67対4。しんのすけの圧倒的リードだ。

次に相手選手は、ネットの向こう側へと目を遣った。

「ねえねえお姉さん、オラと一緒にこれからの魔法ギョーカイについて語り合わな〜い？」

「おい、しんのすけ！ まだ試合終わってないぞ、まだ油断するな！」
自分よりも圧倒的に動き回っていたはずの彼は、頭をタオルでガシガシと力強く拭いながら客席の女性を口説いていた。それはまさに3分前の試合直前に見た光景とほぼ同じであり、そして彼の様子もあれだけの運動を挟んだとは思えないほどほぼ同じだった。

「……………」

第2セットを終え、通算で148対6。

次のセットが始まる前に相手選手が棄権を申し出たことで、しんのすけの勝利が決定した。

*

*

*

「お疲れ様、野原くん」

「どもども」

試合終了後、第一高校の天幕に戻ってきたしんのすけを出迎えたのは、この種目でのエンジニア担当である五十里だった。彼はしんのすけからベルト型のCADを受け取ると、即座にCAD調整機にそれを繋げてコンディションを確認する。

ときどき画面を確認しながらキーボードに指を走らせていた五十里は、ふとしんのすけへ視線を向けて問い掛ける。

「野原くん、疲れたりしてないかい？ 試合まで休んでて良いんだよ」「全然疲れてないから大丈夫だゾ」

「……さすがだね、野原くん。いや、この場合は司波くんも、か」

五十里は半ば呆れるような声色でそう呟きながら、達也が作ったベルト型CADを改めてしげしげと眺めた。この種目での担当エンジニアという立場にいる彼ではあるが、しんのすけの場合は達也が提供したこのCADがハード・ソフト共にしつかりと作り上げられているため、特にこの場で彼が行うことは何も無い。しいて挙げるならば、何か不調を起こしていないかチェックするくらいだ。

いくらCADが優秀でサイオンの消費が抑えられているとはいえ、あれだけ魔法をフル使用したしんのすけのサイオン消費量は相当なものはずだ。しかしこうして彼を見ても疲れている様子は無く、そして疲労をむりやり隠している様子も無い。常に前を突っ走っている婚約者を長年見てきた彼の目は、そう簡単に誤魔化せるものではない。

「総合成績2位は伊達じゃない、と言うべきかな」

五十里はそんなことを独りごち、CADを調整機から外した。

不調は、一切見られなかった。

*

*

*

2 回戦。

「凄いわね、しんちゃん。今回も相手が最終セットまで保たなかったわ」

「魔力量が尋常じゃないな、あれはもはや化け物レベルだ」

第一高校の作戦本部にて、しんのすけの試合を観戦していた真由美と摩利がそんな感想を口にした。なぜ会場ではないのかというと、深雪達の出場するピラーズ・ブレイクの動向も非常に気になることから、どちらの試合もモニターで確認できるここにやって来たというわけである。

「それにしても、あれだけスタミナがあるんなら、真由美みたいに逆加速魔法を壁にすることもできたんじゃないか？ そっちの方が確実だろう」

摩利がそう尋ねたのは、真由美を挟んだすぐ傍で同じく観戦していた鈴音だった。彼女は作戦スタッフの1人として、しんのすけの練習に何回か付き合っている。

「私もそう思い何回かやらせてみましたが、残念ながらできませんでした。魔法の構築は問題無いのですが、3分間それを持続させるだけの集中力が保たなかったようです」

「ああ、しんちゃん、その場で何もしないでじっとするとか苦手そうなものね」

「だからといって、その代案が『自己加速術式を残像が見えるレベルで使いまくる』というのが凄まじいな。力づくにも程があるだろう」

まるで疲れた様子を見せずコートを後にするしんのすけの映像を観ながら、3人は思わず苦笑いを浮かべていた。

*

*

*

3回戦、準々決勝。

「今回は最終セットまで行ったけど、結局点差が開いていくだけだったわね」

「野原のスタミナ切れを狙ったのかもしれないねえが、あいつにそんな小細工は通用しねえよ」

会場の観客席にて試合の様子を見守っていた紗耶香が緊張で強張らせていた肩の力を抜き、落胆する相手選手を見遣る桐原がニヤリと不敵な笑みを浮かべてそう言った。

そんな彼の様子に、紗耶香は内心ホッと胸を撫で下ろした。クラウド・ボールでのショックから立ち直った彼ではあるが、こうしてしんのすけの試合を観てそれがぶり返さないか秘かに心配していたのである。

そんな中、紗耶香とは桐原を挟んで反対側に座る服部の表情は固いままだった。

「しかし、いつまでもあんな戦い方が通用するとは限らない。今は疲れていないように見えても、知らない内に疲労は蓄積されている。ど

ここのタイミングで一気にそれが襲ってくる可能性だつて無くはない」

「おいおい、そんなネガティブになるなよ服部。五十里がついてるんだから、いざつてときには何か対策するだろ。今はただ、あいつの快進撃を素直に喜んでやろうぜ」

「桐原……」

随分と楽観的な、と服部は思わなくもなかったが、彼はすぐに思い直した。

この会場に到着してから、服部はどうも調子を崩していた。会場に向かう途中の交通事故で自分は何もできず、1年生である深雪が見事に事態を鎮静化してみせたことを気にしていたのである。

しかしそれを聞いたとき、桐原は軽く笑い飛ばした。『人によつて得手不得手があるのだし、そもそもあの場面では下手に魔法を使わない方が得策だった』と。それでも『魔法師としての資質』が自分に足りないのではと落ち込む服部に対し、彼は『だったらこの学校でそれを身に付ければ良い』と言つてのけた。

そのアドバイスのおかげで少しでも気分が紛れたのは、間違いなく事実だ。

だからこそ、

「……いや、やはり念の為に様子を窺うことにしよう。ちよつと行つてくる」

「かぁー！…どこまで心配性なんだかー！」

桐原の呆れ果てた声をよそに、服部は席を立った。

第一高校生徒会副会長として、そして何より1人の先輩として。

*

*

*

準決勝。

「棄権を申し出たか。三高ウチの次期エースですら、最終セットまで保たないとは……」

「負けた方も、この後に3位決定戦が控えてるからね。下手に食い下

がって無駄に体力を消耗するより、確実に3位を取ることを選んだんだろう」

「戦略としてはそっちが良いのかもしれないが、俺としては消極的で気に入らないな」

第三高校の特色である紅蓮色の制服は重厚感があり、様々な服装で溢れるカラフルな観客席の中でも特に人目を惹く。そんな第三高校の生徒達が集中するこの一画は、まるでそこだけ穴が空いたかのよう

に遠くからでもすぐに見分けがつくほどだ。

そしてそんな一画のほぼ中央に座るのは、今年の1年生の中で名実共に中心人物となっ

てい

る一条将輝と吉祥寺真紅郎の2人だった。

先程までしんのすけと試合を行っていた同級生を応援する名目でここに来ているが、その試合内容に将輝は不満を露わにしていた。

「つまりそれだけ、彼のスタミナが驚異的だっ

てことだよ。普通ならば試合を重ねるごとに疲労が蓄積されて動きが鈍るものだけど、彼の場合は変わらないどころかリズムを掴んだのか洗練されているとすら感じる。この様子じゃ、決勝戦の見所は相手が最終セットまで保つかどうかだけだね」

「……そんな奴が、モノリス・コードに出てくるか。ジョージ、どう見る？」

「彼は中学に剣道で全国チャンピオンになっ

てるけど、モノリス・コードでは相手への直接戦闘は禁じられている。それは得物で相手を攻撃することも含まれてるから、そこだけは彼にとって不利と考えられるかな。でも代表選手に選ばれてるからには魔法による攻撃も侮れないってことだし、そうなるとあのスタミナはかなりの脅威だ」

「……成程、やはり一筋縄ではいかない相手ということか」

将輝はそう結論づけると、フィールドを後にするしんのすけへと鋭い視線を向けた。

敵意や悪意などといった負の感情が一切含まれていない、如何にも楽しみで仕方ないといった好戦的なそれに、真紅郎はやれやれと言わんばかりの苦笑いを浮かべた。

*

*

*

『たった今、情報が入りました！ 相手選手がこれ以上の競技続行が困難であるとし、棄権を申し出たとのことです！ これにより、第一高校の野原しんのすけ選手の優勝が決定致しました！』

『凄いですね、彼は。第一試合の勢いのまま、決勝戦まで戦い抜いてしまいましたからね』

『まさに破竹の勢いといった感じでしたね。誰も彼を止めることができませんでした——』

「——ん？」

突如街中で聞こえてきたスピーカー越しの会話に、その少年は足を止めてそちらに目を遣った。

家電量販店のウィンドウディスプレイに並んだテレビの画面には、現在開催中の九校戦の中継映像が映し出されていた。ちょうど男子クラウド・ボールの優勝者決定の瞬間であり、優勝したというのにこれといった反応も無く、むしろ観客やチームメイトの喜び様に困惑すらしているしんのすけの様子が映し出されている。

そんな彼の姿に、少年はクスリと笑みを漏らした。

「おいおい、俺様を誰だと思ってるんだ!？」

しかし彼のその笑みは、テレビの音声以上にやかましい叫び声によって消え失せた。

少年がそちらに目を遣ると、周りの通行人よりも頭一つ背が高く、体格も一回り大きく、ついでに顔もゴリラみたいに厳つい男が目の前のカップルに怒りを露わにしていた。その手には竹刀を握り締め、見せびらかすようにその先端をカップルの男性の眼前へと向けている。

「俺は剣術で有名な百家本流 “九十九里浜家” の道場の一番弟子なんだから？ 怪我したくなかったら、俺様の前でイチャつくなんてふざけた真似をするんじゃないぞ！」

ゴリラみたいな顔を真っ赤にしながら怒号を飛ばす彼の威圧感に圧倒され、カップルの男性は顔を真っ青にしてビクビクと震えている。それでも自分の後ろにいる女性を自分の体で庇おうとする姿に、

男はますます怒りを募らせる。

そしてとうとう、男はその手に持つ竹刀を思いつき振り上げた。カップルの男性が思わず目を瞑り、女性が悲鳴をあげ、遠巻きに眺めていた群衆も後の惨劇を想像して息を呑む。

「——あん？」

しかし男が腕を振り下ろしたその瞬間、男の手に竹刀は無かった。そしてその竹刀は、いつの間にか男の目の前に現れた少年の手に握られていた。

「てめえ、俺様の邪魔をすんじや——」

何が起こったのかよく分からなかった男だが、おそらく目の前の少年が何かしたのだらうと当たりを付けて、男は丸太のように太い腕を少年の頭目掛けて振り下ろし、

「——あれっ？」

なぜかいきなり、男は膝から崩れ落ちて地面に倒れ込んだ。

周りの群衆も突然の出来事にざわめくが、それよりも近くでそれを見ていたカップル2人も、ましてや男自身も何が起きたのかまるで分からなかった。両膝がジンジンと痛むのでおそらくそこをやられたのかもしれないが、自分から奪った竹刀を使ったのか、あるいは単純に足で蹴ったのか、それすらも分からなかった。

困惑で頭がいっぱいになっている男の目の前で、少年が膝を折って男の顔を覗き込む。

その表情は、貼りつけたような笑顔だった。

「あなた、九十九里浜家の道場の一番弟子と言っていましたね？」

「あ？ 何だ、今更怖じ気づいたのか——」

「あなたのような人間に育てた道場に興味があります。場所を教えてください」

「ああ？ 何だてめえ、そんなこと知ってどうするつもりだ？ 道場破りでもするつもりか？ 止めとけ、てめえみたいなガキなんか5秒でのされて——」

「分かりました。自分で調べます」

つらつらと話す男の言葉を無視して、少年は立ち上がって携帯端末

を取り出した。おそらく九十九里浜家の道場を検索するつもりなのだろう。百家本流とはいえ、道場のように一般的に解放されている施設などを運営している場合、普通にインターネットにその情報が載っている。

何となくその場を立ち去る機会を見失ったカップルが、その少年が背負う竹刀袋に目を遣った。

その袋はよく使い込まれた古い物で、「代々木コージロー」と書かれていた。

*

*

*

しんのすけが華々しい優勝を飾ったその日の夜、場所は横浜の中華街。

そこに軒を連ねる店の一つにて、満漢全席とまではいかないが一般の食卓ではまず見られないであろう中華料理が並ぶフルコースが円卓上に敷き詰められ、それらを囲む男達の姿があつた。目の前の料理を前にさぞ心を躍らせているだろうと思いきや、その全員が陰鬱で苛立たしげな表情を浮かべていた。赤と金の色彩豊かな内装と相まって、彼らの顔色の悪さが際立っている。

「……どういふことだ？ 新人戦は、第三高校が有利ではなかったのか？」

彼らの内の1人が口にしたのは、英語だった。とはいえ、それはネイティブのものではなく、どことなく東アジア系のイントネーションが混じっている。

「女子の『早撃ち』では一高の選手が1位から3位までを独占、男子の『クラウド』もご覧の有様だ。あれだけ動き回ったらその内バテるから平気だ、と言ったのはどこのどいつだ？」

「せっかく本戦の『波乗り』で一高の選手を棄権に追い込んだというのに、このままでは結局第一高校が優勝してしまうぞ」

「それはまずい。本命が優勝してしまっては、我々胴元の大損だ」

「今回の客は大口ばかりだ、配当額は相当なものになる。間違いない、

今期のビジネスに大きな穴を空けることになる」

「そうなれば、我々全員が肅正対象となるぞ。損失額によっては、ボスが直々に手を下すこともあり得る」

男の1人が、空中でうねり渦を巻く竜が金糸で刺繍された掛け軸を見上げた。まるで今にも動き出しそうな迫力のそれであるが、その竜は胴体だけで首から先が綺麗に切り取られている。

その竜の姿に自分達の未来を暗示されたようで、彼はブルリと体を震わせた。

「——死ぬだけなら、まだ良いが」

ポツリと呟かれたその声は、震えていた。しばらくの間、彼らのいる部屋を沈黙が包み込む。

やがて彼らの内の1人が、意を決したように口を開いた。

「……こうなったら、仕方がない。明日、もう一度仕掛けよう」

「『波乗り』か？ 『氷倒し』か？」

重々しい声色で問い掛ける男に、彼は答えた。

「——『波乗り』だ」

第30話 「モテすぎるのも考え物だゾ」

九校戦6日目。新人戦3日目。

本で行われる競技は、男女バトル・ボードの準決勝と決勝、そして男女ピラース・ブレイクの予選と決勝リーグ。しんのすけは昨日クラウド・ボールに出場し、明日もモノリス・コードを控えていることもあって今日は完全にオフとなっている。達也からも、体調を万全にするためにも今日は無理して応援に向かう必要は無いと言われている。しかしもうすぐ9時を回ろうかという現在、バトル・ボードの会場に彼の姿があった。

「おっ！ みんなここにいたのかあ、探し回っちゃったゾ」

「あれっ、しんちゃん？ 今日オフだから休んでるんじゃないか？」

ほのかの試合を観るために観客席に座っていたエリカ・レオ・美月・幹比古の4人は、突然やって来たしんのすけに大小様々だが驚きの反応を見せていた。

「1人で部屋にいてもつまんないから来ちゃったゾ。んで、ほのかちゃんは？」

「今から第1レースが始まるうかつところ。ほのかの出番はまだ1時間以上はあるわよ」

「なーんだ。それじゃせっかくだし、ほのかちゃんの所に行つてこよーつと」

「ええっ、本番前だし迷惑じゃねーか？」

「駄目だったらそのまま帰れば良いでしょ。良かったらみんなも一緒に来る？」

「えっ？ うーん……」

しんのすけの提案に、4人は迷う素振りを見せた。スタッフでもない自分達が入っても良いか疑問だが、しんのすけの言う通り駄目ならそのまま帰れば良いので行くだけ行ってみようか、という思いが芽生えている。

そして誰からともなく、辺りを見渡して観客席の混み具合を確認し

た。席を外している間に空席が無くなっている可能性を考えたが、今日はまだ全体の半分ほどが空いておりまだまだ余裕があるように見える。昨日のピラース・ブレイクでの深雪の試合がかなり話題となつたらしく、おそらくそちらに客を取られているのだろう。

「……せつかくだし、行つてみましょうか？」

そうして遠慮がちな美月の言葉がとどめとなり、4人は一斉にその場から立ち上がった。

*

*

*

「こちらになります」

「はい、確かに。それではチェックをしますので、今しばらくお待ちください」

ほのかの試合で実際に使用するCADを持って大会委員のテントに入ったあずさが、カウンターの前で待機している係員にそれを手渡した。係員は人当たりの良い笑顔を浮かべて検査機にそれをセットし、コンソールを操作し始める。

大会で使用するCADには、性能面において幾つかの規定が存在する。そしてそれが実際に守られているか、こうして試合直前にレギュレーションチェックをする必要がある。試合の度に行うので少々面倒臭いと思わなくもないが、何回もやってきたあずさにとってはすっかり慣れたもので、今も係員が検査機を時折操作しているのを静かに見守っていた。

と、そのとき、

「おっ、あずさちゃん。やつほー」

「あれっ、しんちゃん？ それに達也くんのクラスメイトの皆さんも」
大会委員のテントに片手を挙げて堂々と入ってきたしんのすけ、そしてその後ろから遠慮気味に体を縮こまらせている幹比古と美月、さらにその後ろでテントの中を物珍しそうに見渡すレオとエリカの姿に、あずさは驚きと疑問を表情に浮かべて首を傾げた。

「どうかしたんですか？ こんな所にまで来て」

「さつきほのかちゃんの所に行ってきた、あずさちゃんもC A Dの検査をしてるって聞いたんだゾ。んで、そういえば検査って見たこと無いなー、って思ってたこつちに来たんだゾ」

「申し訳ありません、中条先輩。やっぱり、僕らみたいな部外者は立入禁止でしたかね？」

「いえいえ、部外者といっても魔法科高校の生徒ですし、見学する分には全然構いませんよ」

幹比古の質問に答えたのは実際に問い掛けられたあずさではなく、先程からコンソールを操作して検査を続けている係員の方だった。

その答えに真つ先に反応したしんのすけが「じゃあ遠慮なく」とカウンターに身を乗り出して検査の様子を覗き込んだ。他の4人も彼ほど露骨ではないものの、普段あまり見ないそれを遠巻きながら見学している。特に魔工技術に興味のある美月が、その中でも最も興味深そうな様子だった。

「ほーほー、その機械で検査するのか」

「はい。大会のレギュレーションに反してないか、ここでチェックをしています」

「達也くんもそんなこと言ってた気がするゾ。それって機械の部分だけなんだっけ？」

「ソフト部分に規定はありませんが、登録されている魔法式は種目によってチェックを入れています。『氷倒し』や『早撃ち』は大丈夫ですが、それ以外には殺傷ランクの制限がありますからね」

「サツシヨーランク？ 何それ？」

「ええと、しんちゃん？ さすがに係員の方の迷惑になるから……ね？」

質問攻めをするしんのすけの横から遠慮がちに話し掛けるあずさに、彼は「ほーい」とあっさり引き下がった。係員は特に何も言わずニコリと笑うだけだがどこかホツとした様子で、心なしか先程より若干早い手つきでコンソールの操作を続ける。

あずさもそれに合わせるように、係員の作業に再び意識を向けた。後ろの方でしんのすけが友人達と何やら話しているが、先輩が出張る

よりは同級生と話していた方が良いだろうとそれに加わることは無かった。

そして、それは突然起こった。

「——ひゃっ！」

「ど、どうしたの美月！」

いきなり悲鳴をあげて両手で口を覆うような仕草をした美月に、傍にいたエリカだけでなくテントの中にいる全員が思わず手を止めて彼女へと目を遣った。ほのかのCADを検査していた係員も、ビクツと体を跳ねさせて彼女を見遣る。

美月は両手を眼鏡に当てて、ギョツと力強く両目を瞑っていた。その手には薄手のハンカチが握られており、ハンカチで眼鏡のレンズを拭いていたときに何かが起こって咄嗟に眼鏡を掛けたのだろう、と推測することができる。

「ご、ごめんなさい。ほのかさんのCADを見てたら、急に古い電化製品が火花を散らしたみたいになバチツて弾けたからビクツリしちゃって」

「火花？　ずっと見てたけど、そんなの無かったわよ？」

エリカの言う通り、他の者達も美月の言う「火花」は確認できなかった。改めてCADを見ても火花が散ったような跡はどこにも無く、どこにも壊れた様子は無い。

つまり美月が嘘を吐いた、あるいは何かと見間違えた、と何の事情も知らない者ならばそういった結論に至るのが自然だ。

しかしエリカを始めとした彼女の友人らは、そう思わなかった。

「……柴田さん、それってもしかして、フシオン霊子が弾けたんじゃないかな？」

「霊子？」

「柴田さんの眼は『霊子放射光過敏症』——普通の魔法師よりも霊子の光を過剰に感じ取る眼をしている。そうだとしたら、柴田さんだけが覚えて僕らには見えなかった説明が付く」

「でもそれって、ホウキの検査中に霊子が弾けるようなことが起こったってことよね？　——係員さん、いったいどういうことなのかしら

「？」

「えっ——」

エリカの剣呑とした眼差しが係員に向けられ、彼は戸惑うような声をあげた。その表情は強張り、引き攣っている。

「えっ？　えっ？」

そして本来のエンジニアであるあずさは、あまりの怒涛の展開についていけず困惑の声をあげるだけだった。

そんな彼女の代わりかどうかは知らないが、不敵な笑みを浮かべたレオがカウンターに両肘を突いて係員の顔を覗き込む、というよりも睨みつける。

「なあ係員さんよ、今すぐそのCADを調べてくんねえか？　何か仕込まれてるかもしれないねえぞ？」

「……な、何を言っているんだ。そこのお嬢ちゃんが変なことを言っているだけで、そんなことあるはずが——」

「良いじゃねえか、調べるだけなんだからよ。それとも調べられちゃ困る事情でもあんのか？」

「そ、そんなことは——」

「いったい何の騒ぎだね？」

「——！」

けっして大声ではないがその場にいる全員にしつかりと聞こえる呼び掛けに全員が一斉にそちらを向き、そしてごく一部の人間を除き全員が一斉に驚きの反応を見せた。

なぜならそこにいるのは、この国に十師族という序列を確立し、20年ほど前までは世界最強の魔法師の1人と目され、現在も国防軍魔法顧問という役職に就くなど魔法師のコミュニティに多大な影響を与え続ける偉大な魔法師・九島烈だからだ。ちなみに彼の後ろには恰幅の良いスーツ姿の男もおり、彼に付き従って動き回っているからか額から流れる汗を拭っている。

皆が思わぬ大物の登場に反応できずにいる中で最初に声をあげた

のは、彼の登場に驚かなかった。『ごく一部の人間』であるしんのすけだった。

「おおつ、九島爺ちゃん」

「九島爺ちゃん!？」

どこからか驚きの声があがったが、そう呼ばれた当の本人は気にする様子も無く、

「いったい何があったんだね、野原しんのすけくん」

「何か美月ちゃんが『ほのかちゃんのCADから火花が出た』って言ったら、レオくんとエリカちゃんが係員の人を怖い顔で見えるようになって——」

「ほう、CADから火花か……」

烈はそう呟くと綺麗な姿勢のままカウンターまでつかつかと歩き、検査機にセットされていたCADを手に取った。係員が慌てて手を伸ばしかけるも、チラリと一瞥する烈の無言の圧力に屈したのかピタリと動きを止める。

そうして烈がCADをじっと見つめ、やがて口を開いた。

「成程、『電子金蚕』か」

「——!」

その一言に、係員が驚愕で目を見開いた。

「おおつ？ 何それ、何かの魔法?」

「私が現役の時、東シナ海諸島部戦域で広東軍が使用していた魔法だ。プログラムそのものではなく、出力される電気信号を改竄する能力を持つ。OSの種類やアンチウイルスプログラムの有無に関わらず電子機器の動作を狂わせる、その吉田家のご子息が使うのと同じSB魔法だよ」

自分を話題に出された幹比古の肩が、ピクリと跳ねた。

しかし烈はそれを横目に、係員の方へと顔を向ける。彼は既に体を小刻みに震わせ、『顔面蒼白』という言葉を体現するように顔を真っ青にしている。

「これをCADに仕込んだのは、君だね」

「え、えつと——」

「女子『波乗り』本戦で七高の選手が初歩的なミスをしたように見え
たのも、この魔法によってCADが改竄されていたとすれば説明が
つく。しかし一高の選手がバランスを崩した水面の操作はこの魔法で
は不可能だ」

「……………」

「いずれにしても、君からはじっくりと事情を聞く必要があるようだ。
——それと、」

烈はそこで一旦言葉を区切り、後ろに控えていたスーツ姿の男へと
向き直った。

ビクンツ！ と男の肩が跳ねる。

「確か君からの報告では『スタッフの中には怪しい人物はいなかった』
と聞いていたはずなんだがね、大会運営委員長？」

「そ、それは……………」

「どうやら君とも、じっくり話し合う必要があるそうだな」

「は、はい……………」

スーツ姿の男——大会運営委員長が、絞り出すような声で答えて
ガツクリと項垂れた。まるで時代劇で権力者が悪代官を懲らしめて
いるかのようなシーンに、すっかり聴衆と化した他のスタッフやエリ
カ達は口を挟むこともできず見守っている。

と、テントの入口から次々と黒服にサングラスを掛けた男達がテン
トに入ってきた。黒服の男達は『電子金蚕』を仕掛けた係員を乱暴
な手つきで引っ張り、そのまま外へと連れ出していった。

先程よりも1人減ったテントの中で、烈は今度はエリカ達へと顔を
向けた。警戒心を露わにする彼女達の中で彼が目をつけたのは、1人
だけ眼鏡を掛けた少女・美月だった。

「君がCADの異変に気づいたのかね？」

「へっ!? え、えっと、はい、そうです……………」

「君達は彼が犯人だと気づいてここへ？」

「い、いえ！ えっと、その……………しんちゃん、じゃなくて野原くんに連
れられて偶然ここに来ただけで……………」

しんのすけの名前を出すときに躊躇ったのは、おそらく選手でもス

タツフでもない人間を連れて来た彼が責められるかもしれないと考えたのだろう。

しかし実際にはそんなことは無く、むしろ烈はどこか楽しそうに微笑を浮かべてしんのすけを見遣った。

「成程、さすがといったところかな……」

もともと、その表情を向けられたしんのすけは不思議そうに首を傾げるのみだったが。

しかしそんな反応すら愉快そうに笑った烈は、脳の許容量を超えたのかすっかり黙り込んでしまっているあずさへと視線を向けた。

「君が一高のエンジニアかね？　そういうわけだから、CADは予備の物を使いなさい」

「は、はい！　了解しました！　ありがとうございます！」

「それでは本番、楽しみにしているよ」

烈はそう言い残し、大会運営委員長を引き連れてテントを後にした。

すっかり静まり返ったテントの中で、誰一人動き出すことができなかった。

しんのすけが「あずさちゃん、準備しなくて良いの？」と声を掛けなければずつとそうしていたのでは、と思えるほどに。

*

*

*

本番1時間前になって急遽別のCADを用意しなければならなくなったほのかだが、結果的にはそれによる影響も無く、見事に女子バトル・ボードを優勝で飾ることができた。

予選で見せた強烈な光による目潰しを警戒してか、準決勝の対戦相手は全員がサングラスを掛けていた。しかしそれを予想していた達也アドバイスによる入れ知恵を受け、光波振動系の魔法でコースに明暗を作つて実際よりも道幅を狭く見せる錯覚を生み出した。頭ではこんなに狭くないと分かっている人間は目からの情報になかなか逆らえず、よってコース中央をゆっくりカーブする対戦相手を尻目にインコー

スギリギリを攻めたほのかの圧勝だった。

決勝は、水に関する魔法を得意とする古式魔法師との一騎打ちとなった。様々な手段を駆使してほのかを苦しめる対戦相手に、ほのかも自身の持てる技術の全てを使って対抗、そのレース展開はもはや新人戦の枠を超えた激戦として話題となった。

一方、深雪と雫が出場した女子ピラース・ブレイクも、新人戦とは思えない迫力の熱戦が繰り広げられた。

そもそも観客の大半がそちらの会場に駆けつけたのは、深雪が予選で“氷炎地獄”^{インフェルノ}という高難度魔法を披露したからだ。魔法師ライセンス試験でA級受験者用の課題として出題されるほどの魔法が高校の新人戦で披露された衝撃は大きく、翌日の試合には噂を聞きつけた一般客だけでなく、魔法大学や企業の関係者も駆けつける事態となった。

そんな深雪はもちろん、同じ第一高校の雫と明智も揃って決勝リーグに進出、同一校で決勝リーグを独占するという前代未聞の快挙を成し遂げた。しかし前戦にて死力を尽くしたことで限界が来ていた明智はその場で棄権、深雪と雫による決勝戦が決定した。

その決勝戦も、非常に見応えのあるものだった。“氷炎地獄”によって攻めと守りを同時に行う深雪に対し、雫は達也から伝授されたCADの複数同時操作を駆使し、自陣を守りつつ熱線化した超音波を射撃する“フォノン・メーザー”という魔法によって、これまで無傷だった深雪の氷柱に初めて穴を空けた。しかし深雪がすかさず“ニブルヘイム”というこれまた高難度な大規模冷却魔法で対抗、液体化した窒素が雫の氷柱にびっしりと付着したタイミングで再び“氷炎地獄”を発動、窒素が急激に気化したことによる膨張で雫の氷柱を根こそぎ破壊し、一気に決着となった。

新人戦が始まって今日で3日、毎日何かしらの競技で優勝者を輩出、どこか一部の競技では表彰台をも独占する第一高校は、総合優勝に向けて独走態勢の足掛かりをほぼ完成しつつあった。当然ながら他の学校の生徒にとっては面白いはずも無く、第一高校の制服を着た生徒を恨みがましい目で睨みつける光景があちこちで見られてい

る。

「さつてと、今日の夕食は何だろな〜つと」

男子クラウド・ボールの優勝者ということ人で人一倍そんな視線を受けるしんのすけであったが、今の彼はこれから振る舞われる夕食のことで頭がいっぱいだった。朝食のようなバイキング形式ではないものの、食べ盛りな学生を満足させるだけの量が充分に用意されているそれは、100年遅れで成長期がやって来たしんのすけにとっても毎日の楽しみにするほどの物だった。それが食べられるだけでも九校戦の代表になつて良かった、と思える程度には。

夕食はホテル内にある3つの食堂で、各学校ごとに3交代制で賄われることになっている。作戦などの情報が漏洩するのを防ぐための策であり、なので意図的に会おうとしなければ他校の生徒と顔を合わせる事が無いようになっている。

しかし他校の夕食の時間自体を知ることとはそれほど難しいことではなく、その時間に確実にその学校の生徒がその食堂に来るとなれば、他校の生徒とコンタクトを取るには最も適した機会であるとも考えられる。

おそらくその2人も、同じことを考えたのだろう。

「少し、良いか」

廊下の端のソファアールから立ち上がつて呼び掛けるその声は、台詞こそ疑問形であったが断ることを許さないと言外に読み取れるだけの迫力があつた。夕食で頭をいっぱいにしていたしんのすけだったが、その声にはぼ反射的に足を止めてそちらを見遣る。

彼に声を掛けた2人の少年は、紅蓮色のブレザーに黒のスボン、胸に八芒星のエンブレムが刺繍された第三高校の制服を身に纏っていた。1人は甘いマスクというよりも古風な美男子という形容が当て嵌まるような凛々しい顔つき、広い肩幅に引き締まった体を持つ、いかにも女性が好みそうな外見をした男子生徒。もう1人は彼と比べると小柄で童顔だが、鍛えているためかひ弱な印象は感じないモンゴロイドの見た目をした男子生徒。

「第三高校、一条将輝だ」

「同じく第三高校、吉祥寺真紅郎です」

背の高い少年・将輝の口調は初対面とは思えない横柄な口調だったが、リーダーとして振る舞うことが相応しいと思わせる風格を備えているからか不思議と不快感は無かった。一方の小柄な少年・真紅郎の方は口調こそ丁寧だが、しんのすけをまつすぐ見据えるその視線はむしろ将輝以上に挑発的かもしれない。

吉祥寺真紅郎。仮説上の存在だった、作用を直接定義する魔法式^{カーディナル}「基本コード」の1つである。加重系統プラスコード^{カーディナル}を弱冠13歳で発見した、真正正銘の天才だ。これは世界的にも意義のある快挙であり、魔法師の世界では「カーディナル・ジョージ」という異名で呼ばれている。

もう一方の一条将輝は、もつと有名だ。日本魔法師界の頂点である十師族の1つ「一条家」の長男で次期当主であるのと同時に、3年前の「佐渡侵攻事件」の際には父親と共に義勇兵として戦列に加わり、数多くの敵を屠った経験を持つ本物の実力者だ。その際に敵と味方の血に塗れながらも勇敢に戦い抜いたことへの敬称として「クリムゾン・プリンス」の異名が付けられている。

さて、そんな同世代の超有名な人に声を掛けられたとなれば、その反応は幾つかのパターンに分けられるだろう。憧れの対象として喜びを露わにするか、あるいは同じ魔法科高校生のプライドで虚勢を張ってみせるか、少し意地の悪い者ならば敢えて知らないフリを決め込むなんてこともあるかもしれない。

そんな中、しんのすけが見せた反応は、
「えっ！もしかして、あの「クリムゾン・プリンス」!? おおっ、凄い！ オラ大ファンなんだゾ、握手して良いっ!?!」
「へっ? ま、まあ、握手くらいなら……」

興奮した様子で両手を差し出すしんのすけに、将輝は戸惑いながらそれに応えた。ここまでポジティブな反応は想定外だったのだろう。真紅郎もそれは同じで、力強く両腕をブンブンと上下される将輝を呆然と見つめていた。

「いやあ、まさかこんな場所で「クリムゾン・プリンス」に会えるとは

思わなかったゾ！」

「クラウド・ボールを破竹の勢いで優勝した実力者と、一度話をしてみたかったからな」

「いやあ、照れますなあ。このホテルにいるってことは、近い内に試合があつたりするの?」

「……ん? 対戦相手のことは把握していないのか? 俺達も明日のモノリス・コードに出場するんだが」

「えっ、そうなの? ッグリムゾン・プリンス」が魔法も使えるなんて初耳だゾ」

「……何を言ってるんだ? 魔法を使うなんて当たり前だろう、曲がりなりにも ッ十師族」の一員なんだからな」

「ジュツシゾク? ッグリムゾン・プリンス」が所属してるチームってそんな名前だっけ?」

「チーム? 何を言ってるんだ、十師族というのは——」

「それにしても、テレビで観るのと全然印象が違うゾ。まるで別人みたい」

「……テレビ? そんなものに出た憶えは無いが——」

「ちよつと待って! 何か話が噛み合ってなくない?」

さすがに不審に思った真紅郎が、2人の間に割って入った。

「野原くん、ひよつとして別の誰かと勘違いしてないかな?」

「おつ? いやいや、そんなことないゾ。 ッグリムゾン・プリンス」なんて珍しい名前が2人もいるはずないでしょ?」

「……うん、そうだよな。確かにその通りなんだけど」

「そうそう。ケチャップで味を変えて一気に食べまくる大食い選手なんて ッグリムゾン・プリンス」くらいしか——」

「やっぱり違う人だよな! ってか、大食い選手!」

真紅郎のツツコミが廊下に響き渡り、若干気になりながらもその場を通り過ぎようとしていた一高の生徒達がビクツと驚いた。

一方しんのすけは、そんな彼の反応に「ええっ?」と別の意味で驚き、

「ッグリムゾン・プリンス」を知らないの? USNAの大食いプロ

リーグで日本人初の年間チャンピオンになった、向こうで今一番人気の大食い選手なんだゾ！ 試合中盤にケチャップで味を変えて一気に追い上げるスタイルが凄くて、女性人気も高いから向こうでは「ケチャップの王子様」って呼ばれてて——」

「ちよつと待てえ！ 誰だソイツは！ 俺は大食い選手じゃない！」
「えっ、違うの？ だってきつき、「一城正樹」って自己紹介してたじゃない」

「まさかの同姓同名だ?!? そんな偶然あるのか!?!」
「どうやら本当みたいだね。ほら」

真紅郎がそう言って差し出した携帯端末の画面には、大食い選手・一城正樹の写真が映し出されていた。将輝よりも痩せ型で甘いマスクをした青年であり、満面の笑みで何かの大会のトロフィーと、おそらく優勝賞金であろう「100,000US\$」と書かれたプラカードを掲げている。

「うっわ、本当にいるじゃないか！ ——とにかく！ 俺はプロの大食い選手じゃなくて、第三高校1年でモノリス・コードの代表選手を務めている一条将輝という者だ！」

「同じく、吉祥寺真紅郎といいます。同じ競技に出場するライバルとして、失礼を承知で声を掛けさせていただきました」

「ご丁寧にドーモドーモ。オラ、野原しんのすけ16歳、どうぞよろしく」

気を取り直して改めて自己紹介をする将輝と真紅郎に、しんのすけも呑気な表情で頭を下げて挨拶を返す。

すると将輝が、これ見よがしに大きな溜息を吐いて、
「まったく……。司波達也のときは何も問題無く終わったのに、なんで自己紹介だけでこんなに疲れなきゃならないんだ……」

「おっ？ 達也くんにも挨拶してきたの？」
「挨拶というか……。まあ、そんなとこだ。おそらく大会始まって以来の天才エンジニアである奴の力は、間違いなく俺達にとっても脅威だからな」

「ちなみに野原くん、彼はモノリス・コードの方は担当しないんだって

？」

「うん。でもオラの武器を作ってくれたのは達也くんだゾ」

「成程、君の武器には要注意だね。参考にさせてもらおうよ」

真紅郎はそう言つて、満足そうにニツコリと笑つてみせた。もしここに森崎辺りがいたら、易々と情報を与えてしまったしんのすけにお叱りの1つでも飛ばしていたに違いない。

「予選では一高と三高は戦わないから、俺達がぶつかるとしたら準決勝か決勝だろう。そのときが来るのを、楽しみに待っている。——もつとも、勝つのは俺達の方だな」

「ほーほー」

「……時間を取らせたな、話は以上だ」

将輝はそう締め括り、真紅郎と共にしんのすけのすぐ脇を通り過ぎてその場を去つていった。どうやら第三高校の夕食はこの時間帯ではないらしく、2人は食堂とは反対の方向へと歩いていく。

一方しんのすけは、そんな2人には目もくれずに食堂へと歩いていった。話し掛けられる前と変わらず上機嫌で鼻歌を口ずさむ彼の姿は、もはや2人のことが頭に残っているのかどうかも定かでない。

「……何かもう、色々と疲れたな」

「大丈夫かい、将輝？ 明日の競技には影響しないことを祈るよ」

そんな彼の後ろ姿をこつそりと見ていた2人が、ぽつりと吐き捨てるように呟いた。

*

*

*

ホテルにある高級士官用の客室にて、風間玄信少佐は1人の来客を迎えていた。

その人物とは、九島烈。まだ十師族は表立つて高位高官にならないという原則が確立されていなかった頃、国防陸軍で少将の地位まで上り詰めた男であり、つまり風間にとっては退役後だとしても公的な秩序に則つて礼儀を見せるべき人物であった。

しかし彼にとって烈という人物は、あくまでそれだけの存在だっ

た。風間はB級ライセンスを持つ魔法師であり十師族を頂点とする
コミュニケーションのメンバーの一員ではあるが、彼自身は九重八雲の弟子
として「忍術使い」に分類される古式魔法の魔法師であり、現代魔法
が象徴とする十師族に対しては冷ややかな感情を抱いている。もち
ろん、部下に対するものとは区別されるが。

さて、そんな人物と顔を合わせて何を話すのかというと、

「昼間に捕らえられた作業員についてですが、残念ながら詳しいこと
は何も分からないのが現状です。おそらく「無頭竜」の一員なので
しようが、奴は組織の中でも下つ端であり、他の仲間については何も
聞かされてないようです。おそらく個別に命令をされていたので
しよう。上層部の人間には会ったことも無いようなので、奴から組織
の上層部を探ろうとするのは無理でしょう」

風間からの報告を聞きながら、それでも烈の反応はとても薄いもの
だった。おそらく想定範囲内だったのだろう。

だからなのか、烈が口にしたのはそれとはまったく別のことだっ
た。

「久し振りに顔を合わせたが、十師族嫌いは相変わらずのようだな」

「それは誤解だと申し上げたはずですが」

「隠す必要は無いと、以前にも言ったはずだが。元々「兵器」として
開発された我々と違い、君達は先人の教えを受け継いだだけの「ニン
ゲン」だ。我々の在り方に嫌悪感を抱くのも無理はない」

「……自らを武器と成す、という考え方は現代も古式も変わりません。
私が嫌悪感を抱くとするならば、「自分は人間ではない」という認識
を子供や若者に強要するやり口です」

「ふむ、だから「彼」を引き取ったのかね？」

辛辣にも聞こえる風間の言葉に、烈は余裕な態度を崩すことなく切
り返す。

「……彼、とは？」

「司波達也くんだよ。3年前、君が四葉から引き抜いた深夜の息子だ」
「……………」

風間の沈黙は言葉に詰まったというよりも、「ムツとした」と表現

する方が適切だろう。

「私が知っていても何の不思議も無かろう？ 私は3年前に師族会議議長の席にあり、今なお国防軍魔法顧問の地位にあり、一時期とはいえ四葉深夜と四葉真夜は私の教え子だったのだから」

「……ならばご存知でしょう。四葉は今も、彼の『保有権』を放棄などしていません。あいつは今も四葉の『ガーディアン』であり、ガーディアンとしての務めに支障が無い限り司波達也は軍務に服すること、ガーディアンとして以外で四葉が司波達也に対して優先権を主張しないこと、それが我々と四葉の間で交わした約定です」

淀みなく言葉を紡ぐ風間に、烈は意味ありげに身を乗り出して尋ねる。

「成程、つまり『部隊の一員としての軍務』と『四葉の人間としての務め』に因果関係は無いと」

「……利害が一致することはあるかもしれませんが、少なくとも四葉からの指示で我々が動くことは一切ありません」

「利害の一致、か。——例えば、野原しんのすけのこととかかね？」
ピクリ、と風間の目の端が痙攣するように動いた。

「君達が所属する『独立魔装大隊』は、新開発された装備のテスト運用を担う部隊だと聞いている。そのため、取り扱われる軍事機密の度合いが通常のそれより段違いに跳ね上がっている、ともね」

「……それが、何か？」

「しかし実際にはその任務に加え、その機密性の高さを活かして、野原しんのすけに対する軍事的サポートを行う際に中心的な役割を担っているそうだな」

「……………」

「そんな部隊の一員であり、なおかつガーディアンとはいえ四葉の一員でもある司波達也が、クラスメイトとして彼に接触し、親しい間柄を築いている。私の目には四葉が司波達也を送り込んで彼と強い繋がりを持つようとしており、君達もそれに一枚噛んでいるように見えてしまうのだが」

そう話す烈の表情は口元に薄い笑みを浮かべたものだが、却ってそ

れが彼の感情を読み取れなくしていた。それはまさに能面のようにあり、彼の人間味を希薄なものにしている。

しかし風間は、その程度のことでは怯むような人物ではない。

「確かに司波達也は我々の仲間ですが、野原しんのすけに関する任務に彼を就かせたことは一度も無く、我々がそのような任務を担っていることをつい最近まで彼に話したこともありません。さらに言うと、四葉からそのような任務に就かせるよう示唆されたこともありませんか」

まつすぐこちらを見据えてそう言い切る風間に、烈はその薄い笑みを崩すことなく迎え撃つ。

数秒の沈黙の末、先に口を開いたのは烈の方だった。

「……まあ良い。野原しんのすけを数年ほどでも見守ってきた君達ならば、彼の『真の恐ろしさ』を充分理解しているはずだろう」

烈はそう言って、その場から立ち上がった。それが退室の合図だと即座に悟った風間は、スツと立ち上がって自ら見送るためにドアへと歩いていく。忠僕であることをアピールするためではなく、単純に部下を部屋の外へ下がらせているため他に役目を担う者がいなかったからだ。

と、ふいに烈が歩みを止め、風間へと向き直った。

「君達にわざわざ忠告するまでもないだろうが、一応言っておこう。例の犯罪シンジケートについてだが、なるべく早急に解決することを勧めるよ。——でないよ、とても『ややこしいこと』になってしまうだろうからね」

「……………充分、理解しているつもりです」

「なら結構。失礼するよ」

風間が開けたドアを擦り抜けて、烈はその部屋を後にした。

*

*

*

こうして、大会6日目は更けていった。

明日の競技は、新人戦の中でも特に人気の高い『ミラージュ・バット

“、そして”モノリス・コード”である。

第31話 「大波乱のモノリス・コードだゾ」

九校戦7日目。新人戦4日目。

この日ほど観客がどちらの競技を観るか悩む日も無いだろう。なぜなら、男子は魔法による迫力満点の戦闘を観られることで九校戦随一の人気を誇る。『モノリス・コード』の予選リーグ、そして女子は妖精を彷彿とさせる華やかな衣装で宙を舞う光景が特に男性の心を鷲掴みにする。『ミラージ・バット』の予選から決勝まで行われるのだから。

達也がミラージ・バットで担当するのは、第2試合に出場するほかと、第3試合に出場する里見スバルという中性的な見た目と声をした女子だ。第1試合の開始時間が午前8時ということもあり、3人は朝早くからホテルを出発し、会場内の選手控え室にやって来た。ちなみに最愛の兄と常に一緒に行動しているイメージの強い深雪は、モノリス・コードのフリークである雫達と一緒にしんのすけの応援へと向かっている。

控え室へと足を踏み入れた達也を出迎えたのは、既に部屋に入っていた他の学校の選手やエンジニアからの視線だった。さすがに達也が顔を向ければ気まずそうに顔を背けるが、隙あらばチラチラとこちらを盗み見ていることなんて達也には丸分かりだった。

女子専用の競技なので当然選手は女子ばかりだし、担当エンジニアも達也以外は全員女子だ。高校生のような思春期のときは(五十里と花音のような場合は例外として)魔法師とエンジニアを同性にするのが一般的であり、達也が女子選手の担当エンジニアに決まったときもそういった観点で選手から一定の反発があったものだ。もつとも今となつては、反発どころか男子が譲ってくれてラッキーとまで思っているようだが。

「ふふふ、随分と注目されてるね、司波くん」

「やはり男子のエンジニアが女子を担当するのは珍しいんだろうな」

「違うと思うよ、達也さん。多分みんな、達也さんをエンジニアとして注目してるんだと思う」

「……エンジニアとして?」

ほのかの言葉に首を傾げる達也の姿に、里見はクスクスと面白そうに笑みを漏らした。

「自分のことになると鈍いというのは、どうやら本当のようだね。――だって、当然だろう? 君が担当した2つの競技では、いずれも第一高校が上位を独占。見る人が見れば、エンジニアの技術がそれに大きく貢献したと分かるし、ちよつと調べれば誰が担当したのかすぐに知ることができる。他の高校にとって、司波くんは警戒すべき逸材なんだよ」

「うん、私もそう思うよ! 達也さんがCADを調整してくれたおかげで、私、何だか負ける気しないもん!」

ほのかの言葉に、部屋にいる他の生徒の雰囲気ガザワリとなった。彼女の言葉は他の選手からしたら明らかに宣戦布告と取れるものだったが、当の本人だけはそのことに気づいていないようだ。

一方、2人の言葉を聞いた達也は、何とも複雑な表情だった。『司波達也』が表舞台で注目されるのはまだ時期尚早であり、せめて高校を卒業してからでないと準備が整わないと考えていた。

とはいえ、今の彼には手を抜くなんてことは許されなかった。誰からも期待されていなかった幼い頃ならいざ知らず、今の彼には自分を代表選手として推薦し、迎え入れ、そして応援してくれる存在がいる。そんな彼ら彼女らのためにも、達也は負けるわけにはいかなかった。

「……まあ良い。早いところ、2人の調整を済ませてしまおう」

むりやり会話を打ち切るような真似をすれば、自分が照れ臭く感じているのを2人に教えるようなものだ。現に2人は意味ありげな笑みを浮かべるも、特に指摘するようなことも無く素直に自分のCADを彼へと差し出す。

それらを受け取りながら、達也は今頃試合をしているであろうしんのすけへと思いを馳せた。

*

*

*

モノリス・コードには、戦いの舞台となる専用のフィールドが全部で5つある。遮蔽物の多いフィールドに高低差の大きいフィールド、そして逆に遮蔽物も高低差も一切無いフィールドなど、どれが選ばれるかで戦略にも大きく影響が出るほどに多種多様だ。

第一高校 vs 第六高校の対戦で選ばれたのは、岩場のフィールド。所々に大きな岩が幾つも設置されているが高低差は少なく、どちらかというときと直接ぶつかり合う試合展開になりやすい。

「ぐう……、このっ！ さっきからちよこまかと動きやがって……！」
自陣のモノリスを背に立つ守備担当の六高選手が、デインフェンス 圧縮した空気を銃弾のように幾つも飛ばしながら苛立ちげに声を荒らげていた。

彼から10メートルほど離れた所にいるのは、第一高校の攻撃担当であるしんのすけ。彼は六高選手と一定の距離を保ちながら六高選手の攻撃を小刻みなステップで避け続けていた。まるで踊っているかのような華麗な動きが、六高選手にとっては自分をおちよくっているように思えてますます苛立ちを募らせる。しんのすけが魔法を使わず素の運動能力で避けている、というのも彼の苛立ちに拍車を掛ける要因だろう。

しかし彼は苛立ちこそ覚えているが、自分の役目を見失ったわけではない。モノリスを割るには専用の無系統魔法である「鍵」を撃ち込む必要があるのだが、その射程距離は10メートル。つまりそのままで相手選手を近寄せなければ、自陣のモノリスが割られることは無い。故に先程から何回かしんのすけが前進を試みる度に、六高選手は彼の足元に空気砲を放って足止めしていた。

「それにしても、あの『武器』は何だ……？」
六高選手がそう呟いて視線を向けるのは、しんのすけが右手に持っている物だった。

全長70センチ、刃渡り50センチ程度のナックルガード付きの模擬刀のような形状をした、おそらく武装一体型CAD。『模擬刀のよくな』と形容したのは刃の部分が意図的に潰されているため、斬るというよりも叩き潰すことを目的としていると思われる。

だからこそ、六高選手は相手の思惑が分からなかった。この競技で

は相手への直接攻撃は禁じられており、それは打撃武器で相手を叩くことも含まれる。だからこそこの競技に使われるCADは、拳銃型あるいはブレスレット型が一般的だ。

と、その武器に注目していたまさにそのとき、華麗なステップで空気を避けるしんのすけがその武器を横に構えた。そのまま横に薙ぎ払ったとしても、刃渡り50センチでは10メートル先の自分には到底届かない。

とはいえ、魔法を使った戦闘では何が起こつても不思議ではない。六高選手はしんのすけの動きを観察すべく、ただでさえ鋭い目つきをさらに鋭くして待ち構える。

彼の見守る中、武器を持つしんのすけの右腕が微かにぶれ、一瞬だけその輪郭を曖昧にした。

そうして刃先が六高選手へと向いたとき、その武器の刃渡りは半分ほどに短くなっていた。

「——！」
「ぐがっ——！」

突然背中に強い衝撃が走り、短い悲鳴と共に六高選手は思いつきり地面に倒れ込んだ。肺の空気をむりやり全部吐き出させられ、瞬間的な酸欠状態に彼の視界が薄くぼやける。

酸素を求めて大きく咳き込みながら、六高選手は何とか顔を上げた。

しんのすけがちらに駆け寄りながらその腕を伸ばす姿が六高選手の視界に飛び込み、彼は咄嗟にCADに手を掛けて反撃の魔法の準備を始めた。しかしその直後に彼の顔面に向かって何か猛スピードで飛んでくるのが見え、それが何かを確認する間もなく彼は本能的に目を瞑ってしまう。

しかし覚悟していた衝撃は来ず、代わりに頭を首ごとむりやり引つ張られる感覚に襲われた。そして何をされているのか気づいた頃には、着用を義務付けられている競技専用のヘルメットが彼の頭からすっぽ抜けていた。

『ヘルメットが外れたことにより、第六高校の向井選手がリタイア。チーム全員がリタイアしたため、第一高校の勝利が決定しました』
そして次の瞬間ブザーが鳴り、このようなアナウンスがフィールドに響いた。それと被せるように、遠い客席から大きな歓声があがるのが聞こえてくる。

がつくりと項垂れ大きな溜息を吐いた六高選手が、ふと思い出したようにしんのすけへと顔を向けた。

しんのすけは先程模擬刀のような武器を振った場所から1歩も動かず、刃渡りが半分になったそれを上へと向けていた。

その延長線上、10メートルほど離れた空中に、残りの半分がフワフワと浮いていた。

「……成程、そういうことか」

どこか気の抜けた声と表情で、六高選手が呟いた。

達也が開発したしんのすけの武器“小通連”のお披露目でもある先程の試合は、彼の剣技も相まって観客に大きな衝撃を与えていた。

先程しんのすけは、小通連を振るのに合わせて刃先を分離させて六高選手の背後にまで飛ばし、柄を六高選手に向けたまま相対距離を縮めることで後ろから彼の背中に刃先をぶつけた。そうして倒れた彼に駆け寄りながら、今度は再び相対距離を伸ばす要領で刃先を発射して目眩ましを行い、相手が怯んでいる隙に彼のヘルメットを奪い取って失格に追い込んだのである。

しかしこれを相手の真正面にいながら成功させたのは、“小通連”の性能が知られていなかったというのものもあるが、ひとえにしんのすけの卓越した剣技によるものだ。もし剣を振るスピード、刃先を飛ばすスピードが少しでも遅ければ、刃先が背後へと回り込んでいることに気づかれてしまっていただろう。

そんなことをおくびにも出さず、というより自分でも気づいていないしんのすけは、飄々とした表情でフィールドを後にした。大勢の観客の歓声と拍手を背に控え室へと戻ると、同じチームメイトである森

崎ともう1人の代表選手、そして3人の担当エンジニアである五十里が彼を迎えた。

勝利を決めたしんのすけに対して森崎は——怒っていた。

「おい、野原！ 何を勝手に先走ってるんだ！ おまえが前を突っ走ってた隙に、向こうの選手が1人こっちに来てたんだぞ！」

「おおつ、ごめんごめん。でも結果的には勝ってたんだから良いじゃない」

「良くない！ あれはおまえの武器の性能を相手が知らなかったから、たまたま上手くいっただけのことだ！ 次からは対策を立てられるぞ！」

「おおつ、そつかあ。んじゃあ森崎くん、対策考えといて」

「なっ——おまえなあ！」

「まあまあ森崎、野原が2人倒してくれて助かったのは事実だろ」

「でも野原くん、森崎くんの言ってることも正しいよ。けっして前に出るばかりじゃなくて、常に全体を視野に入れて動かなきゃ」

「分かったゾ、五十里くん」

「……ったく、次からは気をつけろよ」

何かと騒がしい第一高校控え室に、次の対戦に関する知らせが届いた。

次の第四高校との対戦フィールドが、「市街地ステージ」に決定したとのことだった。

*

*

*

「やっぱり女子トイレは混むなあ、すっかり遅くなっちゃったわ」

もうすぐしんのすけの第2試合が始まるうかという頃、万全の体調で試合を観戦するためにトイレへと向かっていたエリカが、そんな独り言を呟きながら観客席へと続く通路を早足で歩いていた。本当は全速力で向かいたかったが、それなりに人通りが多いため致し方ない。

と、そんな人混みの中でエリカは見知った顔を見掛け、元々パツチ

りと大きな目をさらに大きくした。

「次兄上！ なぜここに！」

「——エリカ、偶然……でもないか」

エリカの声に反応したのは、『美男子』という形容が似合う細身の男性・千葉修次なかつぐ。防衛大特殊戦技研究科所属の大学生でありながら、千刃流ちば剣術免許皆伝の剣士で、『千葉の麒麟児』の異名で知られた有名な人であり、3メートル以内の間合いなら世界で十指に入る達人とも言われている。

「次兄上はタイへ剣術指南のために出張中のはず……。まさか、大切な任務を抜け出して帰国したというのですか！」

「大切な任務って……、あれは大学のサークル交流みたいなものだし、それにちやんと許可は取ったよ」

「許可を取れば良いと言う問題ではありません！ 次兄上がタイ王国から正式に拝命した任務を投げ出したのは事実じゃないですか！」

「はい、仰る通りです！」

エリカの剣幕に、修次は思わず背筋を伸ばして敬語になっていた。その姿に『千葉家の麒麟児』の面影は微塵も無い。

「でも帰国したのは、仕方がない事情があったんだ」

「仕方ない事情って……まさかとは思いますが、あの女のために帰国したなんて——」

「『親父』から頼まれてね」

「——！」

修次の口から飛び出した『親父』という単語に、エリカが息を呑んだ。

先程までの剣幕は鳴りを潜めたが、その代わり困惑と警戒が混じり合った表情へと変化する。

「エリカと同じ学校に通う、野原しんのすけくんは知ってるかな？」

「……ええ。それが何か？」

エリカの感情が、警戒に大きく傾いていく。

「クラウド・ボールに出場した彼を観た親父が甚く興味を持ったみたいでね、彼の戦い振りを直接見ておけって言われたよ」

「……………はあ？」

修次の前では普段と違って敬語を貫いていたエリカだが、怒気を孕んだその反応は完全に素に戻っていた。しかし妹のその姿に修次がクスリと笑みを漏らすと、それに気づいたエリカは羞恥で頬を紅く染めた。

「エリカは彼の試合を観たか？」

「そのときは別の競技を観戦していたので、夜に動画で観させてもらいました」

「そうか。なら分かると思うが、彼の動きは僕らの目から見ても『異常』の一言に尽きる。千葉家の門下生でも、あれほどの動きができる者はまずいないだろう。さらにはそれだけの動きをしながら最後までスタミナ切れを起さなかった脅威の持久力、そして剣道の中学チャンピオンとくれば、親父が彼に興味を持ってもそうおかしくはない」

ここでいう『千葉家の門下生』というのは、ただ単に道場で剣術を学んでいる者だけを指す言葉ではない。警察及び陸軍の歩兵部隊に所属する魔法師の大半を教えている千葉家にとつての『門下生』とは、現役バリバリで活躍する彼らも含まれている。そんな彼らと比べたうえで、修次はしんのすけの動きを『異常』と表現したのである。

だからこそエリカの父親——つまり千葉家現当主は、そんなしんのすけに興味を持った。そこまでならば、確かにエリカにも納得できることだ。だが、海外で任務中だった修次をわざわざ呼び戻してまでしんのすけの下に向かわせたその意図が、エリカには見当が付かなかった。

もしこれがスポーツとして剣道や剣術を指南している道場ならば彼をスカウトしようとしているのだと説明できるが、千葉家の道場はそれとは毛色が異なり、故に今までスカウトというものをやってこなかった過去を考えると、理由としては些か疑問が残る。

あるいは、しんのすけの技量は千葉家が重い腰を上げざるを得ないほどのものだった、ということだろうか。しかしそれでも、エリカの胸に何か引つ掛かる心地は晴れない。

『まもなく、試合を開始します』

「時間か。せっかくだし、彼の試合を観戦しようかな。エリカも一緒にどうだい？」

「……私は、友人達と一緒に来ておりますので」

「そうなのか。せっかくだから、エリカの友達にも挨拶したいな。案内してくれるかい？」

「……はい、分かりました」

エリカが答えに少しだけ逡巡したのは、しんのすけに近づこうとする修次を警戒しているから、というのではなく、単純に学校の友人に身内を紹介する特有の気恥ずかしさによるものだ。普段の学校でのキャラと修次の前にいるときの態度が大きく違うことも要因だろう。

通路を歩いている間も天井付近のスピーカーから試合開始のカウントダウンが聞こえてくるが、2人は特に急ぐ様子も無く歩いている。今回のフィールドである市街地ステージは、試合開始から数分はスタート地点のビルから出て相手陣地である建物を搜索するのが主であり、直接的な戦闘はまず行われないからだ。

そのはず、だった。

「キャアツ——！」

「——！」

「——！」

甲高い女性の悲鳴を筆頭に、観客席から次々と声があがった。それは試合に興奮した歓声などではなく、困惑や恐怖、そしてよく耳を澄ませてみると怒号も聞こえてくる。エリカと修次は顔を見合わせることもなく同時に走り出し、通路から観客席へと飛び出した。

市街地ステージはその名前の通り、まるで本物の街のような構造をしているステージである。もちろん本物ほど広いわけでもなく、箱庭”と表現できるほどのものだが、大小様々なバラエティに富んだ建物（普通のビルから公共施設、果ては学校まで備えている）に、電気や水道などのインフラまで備えている徹底ぶりだ。そのような入り組んだフィールドであるため、観客はフィールドのあちこちに設置されたカメラの映像をモニターで観ながら応援することになる。

そんな観客席のモニターには、崩れ落ちていく1棟のビルが映し出されていた。

「何だ、これは——」

「みんな！ 何があったの！」

モニターに釘付けになる修次に対し、エリカは声をあげながら観客席の通路を走り出した。即座にその後を追い掛けた彼の目に映るのは、おそらく彼女の友人であろう第一高校の制服を着た少女2人と同世代で私服姿の少年少女達、そしてその傍に座る夫婦らしき男女とその子供らしき幼い少女だった。

エリカの声に反応した彼らがそちらに目を向け、その後ろから追い掛けてくる修次の姿に気づいたとき、その反応は真つ二つだった。魔法科高校に通う者は突然現れた有名人に驚き、そうでない者はエリカの知人らしき見知らぬ青年に困惑していた。

しかしそれも一瞬のこと。真つ先に彼女の質問に答えたのは、普段からは想像もつかないほど怒りの感情を表す雫だった。

「四高が、故意にルール違反を犯した」

「雫、確証が無い内に断言するのはよくないわ」

「でも、そうとしか考えられない！ 試合が始まる前に、一高のスタート地点だったビルが崩壊を始めたんだよ！ 一高がいることが分かかって攻撃を仕掛けたんだから、故意にフライングをしたってことでしょー！」

「——使用された魔法は何か分かるか？」

激昂する雫を意図的に無視して、修次が魔法科高校の面々に尋ねた。なぜここにいるのかも知らない状況で突然尋ねられた彼らは一様に驚くが、すぐに回復した幹比古がそれに答える。

「断言はできませんが、天井が突然ヒビ割れて崩壊が始まったところを見るに、おそらく『破城槌』ではないかと……」

「……屋内に人がいる状況で使う『破城槌』は、殺傷ランクAに格上げされる。もしそれが事実ならば、確かに過剰攻撃オーバーアタックと言わざるを得ないな」

単に建物を破壊するだけなら、移動系魔法でハンマーでも飛ばした

方が簡単に済む。建物の壁一面、あるいは天井一面に干渉するだけの強い魔法力が必要となる。『破城槌』は、それに特化した魔法師でもない限り間違いで発動できるような代物ではない。雫が『四高の明確なルール違反』と断言するのも無理はない。

と、そのとき、

「おい！ ビルから何か飛び出したぞ！」

モニターにずっと注目していたひろしの一言に、その場にいる全員が会話を中断して即座にそちらへと顔を向けた。その言葉に答えるかのようにモニターの映像はその『飛び出してきた何か』をクロージアアップしていき、その詳細が明らかになっていく。

その『何か』とは、軍用の防プロテクション・スーツ護服に身を纏うしんのすけだった。

「しんちゃんっ！」

誰が叫んだのか分からないくらいに、皆がその映像に釘付けとなった。

ビルの窓部分からほぼ水平に飛び出したしんのすけの体は、地面に背を向けた仰向けの状態でその高度を落としていた。自分の意思で窓から逃げたのなら俯せの姿勢になるはずなので、彼はビルの中から何かに吹っ飛ばされて外に飛び出したことを意味する。

「ちよつと！ このままじゃしんのすけが地面に——！」

悲痛な叫び声をあげるみさえに応えるようなタイミングで、しんのすけが空中で体を捻って反転し、そしてその勢いでこの状況でも離さずに持っていた小通連を横に薙いだ。その瞬間、小通連の刃が2つに割れて先端が発射され、ミサイルのような勢いで背の低い建物の屋上にヒビを刻んで突き刺さった。

そしてしんのすけは、両手で柄を握り締めてサイオンを思いっきり注入した。普通の人間には彼が地面の衝突に怯えているように見えるかもしれないが、魔法師の目には彼のサイオンが活性化し体が青白く光っているように見えている。

「どうしよう！ このままじゃしんちゃんが——」

「大丈夫、しんちゃんは助かる」

「えっ！ どういう意味よ、ボーちゃん！」

最悪の事態を想像して顔を真っ青にするマサオとは対照的に、しんのすけの姿をジッと見つめていたボーちゃんが普段通りのゆっくりと落ち着いた口調でそう言い切った。なぜそう言えるのか当然気になるネネを筆頭に、他の多くの面々も困惑の表情でボーちゃんを見遣っている。

そんな中、何かに気づいた修次がエリカに問い掛ける。

「エリカ。彼が持っている武器について、何か聞いてるか？」

「えっと……、剣の先端が分離して硬化魔法で相対位置を固定することで、擬似的に刃渡りを伸ばすことができるって——」

「成程。つまり彼は、剣の刃が相対位置を固定しようとする力を利用して落下速度を殺してることか」

「ええっ！ でもそれで無事に着地できるんですか!？」

「別に完全に速度を殺す必要は無い。ああやって少しでも時間を稼ぐことができれば——」

修次が説明をしているまさにそのとき、しんのすけの体が何かに引っ張られるように大きくふらつき、そして急激にその落下速度を落としていった。やがてフワフワと漂うまでに減速し、しんのすけは危なげなくその屋上へと両足を付けて着地した。

全ての競技には万が一に備えて魔法師のスタツフが会場に控えているが、モノリス・コードの場合は魔法戦闘を前提とした競技の性質上、他の競技よりもより多くのスタツフを揃えている。今は崩壊しているビルや中にいる選手への対処に集中していたためしんのすけへの対応が遅れてしまったが、どうやら無事間に合ったようだ。

「ふうー！ ヒヤヒヤさせやがって、しんのすけの奴！」

「でも、まだ他の子達が中にいるわ！ 早く助けてあげないと——！」
額に滲む汗を袖で拭うひろしに、祈るように両手を握り締めてモニターを見つめるみさえ。特に彼女は自分の息子と同学年のチームメイトが危険な目に遭っている状況に我慢ならない様子だ。

深雪ら他の面々も無事を確認したしんのすけから目を離し、最初の頃よりも崩壊の速度が目に見えて遅くなっているビルに注目していた。

そんな中、修次だけはしんのすけの姿を映し続けるモニターを見つめていた。

大会スタッフらしき大人に促されながらもその場に留まりビルを見つめているしんのすけの表情は、ちょうどカメラの死角になっていたために見えなかった。

* * *

いくら軍用の防護服が高性能とはいえ、コンクリートの瓦礫に下敷きにされたのでは気休めにしかならない。しかし大会スタッフが咄嗟に加重軽減魔法を発動したおかげで最悪の事態は回避され、しんのすけ以外の一高選手は救出されて基地内の病院に搬送された。しかし2人共が魔法治療でも全治2週間、3日間はベッドの上で絶対安静という診断が下され、これ以上の試合続行は絶望的となった。

他の競技が1つの高校につき2人、3人出場できるのに対し、モノリス・コードは3人編成の1チームのみ。故に他の競技よりも得点が多く、たとえ半分しか反映されない新人戦だったとしてもその結果が総合成績に与える影響は大きい。

だからこそ、モノリス・コードで現在総合成績1位の第一高校が棄権になるかもしれないという知らせは、彼らが1位になることを良しとしない連中にとっては吉報となる。しかも原因が原因なので、その後試合を控える他の一高選手も『次は自分が同じ目に遭うのでは——』という不安から調子を崩すことも有り得る。そうなるも現在総合成績2位の第三高校の追い上げ次第では、第一高校の牙城が崩される可能性も出てくる。

だからこそ、横浜中華街にある某ホテルの最上階に存在する、赤と金を基調とした派手な部屋で円卓を取り囲む男達の表情は晴れやかなものに——なっていないかった。

「どういうことだ！　これは誰が指示したことなんだ！　それとも現場の人間が独断でやったことなのか！」

それどころか、男達の表情は不安と恐怖に彩られ、今にもパニック

になりそうなほどに体を震わせていた。

「モノリス・コードは確かに重要な競技だ！ 総合成績にも大きく影響するだろう！ しかし野原しんのすけの出場が決まった時点で妨害の対象から外すことは決定していたはずだぞ！」

「そんなことは分かっている！ 何のために第一高校のバスを交通事故に見せかけて襲撃し、回りくどい真似をして他の一高選手の妨害をしたと思っている！ 我々が野原しんのすけに危害を加えようとしてたことがバレれば、我々だって無傷ではいられないんだぞ！」

「そもそも『電子金蚕』を使った九校戦への妨害工作は、肝心の術者が捕まってしまった時点で破綻している！ 今更モノリス・コードに介入することすらできない状態だったはずだ！ ——なのになぜ、第一高校のCADに細工がされているんだ！」

「そんなの決まっているだろう。——我々以外に、第一高校の優勝を望まない奴がいるということだ。それも、野原しんのすけのことを知らない奴がな」

1人の男の言葉に、部屋中が重苦しい沈黙の空気に包まれた。派手な内装に似合わない沈痛な面持ちの男達を、首から先の無い金色の竜の掛け軸が見下ろしている。

と、男の1人が呻くようにこう言った。

「……とはいえ、現状が我々にとって都合なのは事実。このまま第一高校が棄権してくれれば、総合優勝の行方にも大きく影響するだろう」

「問題があるとすれば、件の野原しんのすけが無事であることだが……」

単なる気休めのつもりで口にしたその言葉は、別の男が付け加えた言葉のせいで気休めにもならなかった。

第32話 「それぞれの覚悟と意気込みだゾ」

現代魔法の1つに『治療魔法』というのがある。

まさに読んで字の如しな効果を持つ魔法なのだが、ファンタジーであるような『杖を振って体全体に掛ければ自動的に怪我が治る』といったシンプルなものではない。当然ながら漠然と魔法を掛けるよりも怪我の箇所を的確に把握して掛ける方がより効果的で効率的なので、魔法を用いた治療風景というのは外科的手術のそれとさほど変わらない。

しかも治療魔法は一度掛ければそれで良い、というわけではない。この魔法はいわば『怪我が既に完治している』という偽の情報を植えつけるものであり、時間が経つと情報の修正力が働いて怪我が元の状態に戻ってしまう。よって魔法を定期的に掛け続け、『怪我が既に完治している』状態が本物であるとされる状態にまで持つて行く必要がある。森崎達に下された『全治2週間、3日間は絶対安静』という診断は、それに達するまでにそれだけ日数が必要ということだ。
「……………」

基地内にある病院の一室にて、術式を終えた森崎ともう1人の代表選手が並んで眠っている。頭部や腕や脚など目に見える部分に幾重にも包帯を巻かれている姿はとても痛々しいものだが、これでもビルから救出された直後と比べればまだマシな方で、駆けつけた真由美がそれを見たときは思わず目を背けてしまうほどだった。

しかしそんな中でしんのすけは、2人が救出された直後も、こうして眠っている今も、2人から一切目を背けずジツと見つめ続けている。2人が目を覚ますまでそうするつもりなのでは、とさえ思える彼の気迫は、病室を訪れた真由美にはむしろ2人以上に痛々しいものに見える。

「こんなときにこんな話をするのも何だけど……、新人戦の『モノリス・コード』の予選は一高と四高を除く形で続行されることになったわ。最悪の場合、一高は四高と揃って競技を棄権することになるでしょうね」

「……………」

「今、十文字くんが大会本部に掛け合っているところよ。場合によっては、代役を立てる形で残りの予選に挑んでもらうことになると思う。仮にそうなれば、大きな怪我も無いしんちゃんにも競技を続行してもらおうことになるんだけど……、引き受けてもらえるかしら？」

「……ねえ真由美ちゃん、ビルが崩れそうになったあのとき、真由美ちゃん達からは中の様子って見えてた？」

自分の質問とは関係の無い話と切り捨てること無く、真由美は首を横に振って答える。

「いいえ、ビルの中のカメラは崩壊の衝撃で早々に壊れてしまったから、モニターからはビルが崩壊する様子を外から見ることしかできなかったわ」

「そっか……。——オラね、2人を助けようとしたんだゾ」

しんのすけの言葉に、真由美は何も言わなかった。

それでも、しんのすけの独白は続く。

「だから2人の所に天井が落ちそうになって、オラ急いで走っていいこうとしたの。でも森崎くんがオラにCADを向けてきて、気がついたらオラはビルの外にいて、2人は天井の下敷きになっちゃって……」

「そう……。きつと森崎くんは、しんちゃんのことを助けようとしたのね」

そう言いながら真由美の脳裏を過ぎったのは、入学早々に校門前で森崎が起こした例の喧嘩騒ぎだった。あのときも森崎がしんのすけにCADを向ける形となったが、前回と今回とではその経緯も結果もまるで正反対だ。

「森崎くん、『モノリス』に凄い一生懸命だったんだゾ。『早撃ち』では準優勝だったから、こっちでは優勝したいって言ってたゾ。それなのに怪我をして試合に出られなくなっちゃって、だからって代わりの人を用意して、それで優勝できたとしても2人は喜んでくれるかな？」

「それ、は……」

それ以上言葉が続かず苦しげに表情を歪ませる真由美だったが、軽

く目を瞑って数回深呼吸をしてから再び目を開いたときには、その目つきはまっすぐしんのすけへと向けられていた。

「たとえば2人の意思がどうであろうと、代役を立てての出場が認められたとなれば、しんちゃんにはモノリス・コードに出場してもらおうことになるわ。それが第一高校1年生200人の代表に選ばれたしんちゃんの『責務』だから」

それを聞いたしんのすけが、真由美がこの部屋に入ってから初めて彼女へと顔を向けた。大きな黒い瞳がまっすぐ彼女を見据え、まるで何もかも見透かそうとするかのようなそれに彼女は思わず息を呑むも、けっして目を背けることなくジッと彼を見つめ返す。

そうすること数秒、しんのすけの口元がニタリと弧を描いた。

「んもう、真由美ちゃんったら。そんなに泣きそうな顔しなくても良いでしょ」

「な、泣きそうだななんて……！ 私はそんなこと——」

真由美がカツと顔を真っ赤に染めて反論しようとした、そのとき、

「ぐっ——」

「——↓——」

ベッドから微かに聞こえた呻き声に、しんのすけも真由美も即座にそちらへと顔を向けた。

崩落するビルから救出されて今までずっと意識不明だった森崎が、ほんの僅かだが目を開いていた。最初彼は天井をジッと見つめ、そして横へと視線を向けて2人の存在に気づくと若干その目を大きくした。

「おおっ！ 目を覚ましたんだね、良かったぞ森吉くん！」

「……僕の名前は森崎だ」

普段より勢いの無いものだったが、すっかりお馴染みとなった遣り取りにしんのすけはすっかり笑顔となった。そしてそれは、彼の後ろからその遣り取りを眺めていた真由美も同じだった。

と、森崎が彼女へと視線を向けて申し訳なさそうに目を伏せる。

「申し訳ありません、七草会長。こんな姿勢のままです」

「そんなの気にすることないですよ、森崎くん。あなたの怪我からし

たら、こんなに早く意識を取り戻したこと自体凄いことなんですか
ら」

「……モノリス・コードは、どうなりましたか？」

真由美の賞賛も意に介さず尋ねる森崎に、彼女は若干目を伏せて口
を開いた。

「今、十文字会頭が大会本部に掛け合っているところです。それで
……我々としては、怪我で出場できない森崎くん達の代役を立てての
出場を目指しています」

「……そう、ですか」

「森崎くん達の頑張りのおかげで、現時点で第一高校の新人戦準優勝
以上は確定しています。現在行われているミラージュ・バットの結果に
も依りますが、たとえ第一高校がモノリス・コードを棄権したとして
も、第三高校がモノリス・コードで優勝しない限り、第一高校の新人
戦優勝は揺るがないでしょう。しかし——」

「分かっています、会長。ここまで来たら確実に優勝を狙うのは当然
ですし、クリムゾン・プリンスを擁する第三高校が優勝を取り零すと
は思えません。……それに自分自身も、優勝するつもりで臨んでまし
たから」

森崎の言葉に、真由美はその表情を崩しかけ、しかし何とか堪えた。
ここで自分が動揺すれば、彼の“努力”が水の泡となる。それはチー
ムを率いるリーダーとして、そして何より年長者として許せないこと
だった。

「野原」

短く呼び掛ける森崎に、しんのすけは即座に「はい」と返事をした。
「第1試合のときみたい、何も考えず先走るような真似はするな。
常に相手が何を狙っているかを考えて、そのうえで相手の裏を搔くよ
う心掛ける。チャンスだと思っても安易に突っ込むことはせず、相手
の罠である可能性を視野に入れて行動しろ」

「はい、分かったゾ」

「……本当に分かっているのか不安なんだよ。——やるからには1位
を目指せよ、野原」

一切体を動かさせない状態である森崎だが、しんのすけへと向けるその目は力強いものだった。

そんな彼の視線を真正面から受け、しんのすけが口を開く。

「分かったゾ、森沢くん」

「……おまえ、ここは正しい名前前で呼ぶ場面だろ」

森崎のツツコミに、張り詰めていた部屋の空気が弛緩したような気がした。しんのすけの後ろで、人知れず真由美がホツと胸を撫で下ろす。

と、ふいに思い出したように「そうだ、野原」と森崎が呼び掛ける。

「僕らの代わりに出場する代役のことだが――」

*

*

*

森崎達が怪我をしたという情報は、ミラージ・バットの会場にいた達也やほのか達の耳にも入った。それによる精神的影響も懸念されたが、普段通りに冷静な所作でCADの調整を進める達也の姿を見てか落ち着きを取り戻したようだった。

そして結果としては、ほのかが1位、里美が2位というこれ以上無い素晴らしい成績を修めることができた。最後は気力勝負なんて根性論ではなく冷静なペース配分を心掛け、幻影魔法でダミーを作るなんて小細工もさせなかったことが大きい。これで達也は自身が担当した選手が事実上無敗という前人未踏の記録を打ち立て、第一高校総合優勝3連覇に大きく貢献したことになる。

しかしそんな喜びに浸る暇も無く、達也は第一高校のミーティングルームとして宛がわれた会議室に呼び出された。もともと、呼び出さなかつたとしても達也が喜びに浸ることは無かつただろうが。

部屋の中で達也を出迎えたのは、真由美・摩利・克人・鈴音といった3年生幹部だけでなく、あずさ・服部・桐原・五十里といった2年生の主要選手、そして1年生の中では唯一であるしんのすけの姿もあった。他の生徒はそれぞれ席に着いているが、しんのすけと真由美は部屋の中央に立ち、達也を待ち構えている。

しんのすけは相変わらず飄々とした顔だが、他の上級生は重傷者が
出て大っぴらには喜べないことを差し引いても表情が固すぎるよう
に思える。

「今日は、苦労様、期待以上の成果を上げてくれて感謝しています」
そんな上級生を代表して、真由美が口火を切った。それは格式張つ
たというよりも、形式張ったものだった。

「……選手が頑張ってくれた、それだけのことです」
「だとしても、この功績に達也くんの力が大きく関わっていることは
揺るぎない事実よ。担当した競技で事実上の無敗、現段階で新人戦
トップのポイントを獲得できたのは、間違いなく達也くんの力による
ものよ」

「……ありがとうございます」

このような言葉は、わざわざミーティングルームに呼び出さなくて
も言えることだ。ここまでの会話が単なる「前振り」であるのは、勘
の良い達也でなくとも分かることである。

「達也くんの活躍もあって、我が校はこのままでも十分なほどにポイ
ントを獲得できました。新人戦における現在2位の第三高校との点
差は80ポイント、仮に我が校が棄権しても、第三高校がモノリス・
コードを優勝しない限りは第一高校の新人戦優勝が決定します」

それについては、達也も充分理解している。理解していることを改
めて言われてること、しかもそれが単なる前振りであることに達也も
いい加減焦れつたくなってきた。

それを感じ取ったのか、真由美は若干早口で話を続ける。

「当初は新人戦で第三高校にポイントを引き離されないことを目標と
していました。しかしここまで来た以上、新人戦でも優勝を目指すこ
とにしました」

「ということとは、モノリス・コードに出場するということですか？ 怪
我をした選手が出られない以上、それは代役を立てるということにな
りますか？」

「ええ。本来は怪我をしても選手交代は認められないのだけど、特別
な事情ということで認めてもらえました。幸いにも怪我をせずに済

んだ野原くんにも、引き続き試合に出場してもらおうことになりました」

それを聞いた達也は、ちらりと克人の方へ視線を向けた。克人は達也の視線に気づきながら、それに反応する様子を見せない。

なので達也は仕方なく、自分の方から話を振ることにした。

「自分がこうして呼ばれたということは、つまり……」

「ええ。——野原くんは、あなたを第2のメンバーとして指名しました」

そこで自分の役割は終わったとばかりに、真由美はスツと1歩後ろに退いた。

なので達也は彼女ではなく、その隣に立つしんのすけへと尋ねることにした。

「しんのすけ、どうして俺を選んだ？ 代役を立てるなら、1つの競技しか出場していない選手に頼むのが普通だが」

「予選と決勝の試合、明日にやるでしょ？ 今からだと、初めてチームを組むよりも普段風紀委員と一緒に活動してる達也くんの方が良いんだって」

「しかし俺は選手ではなく、『技術スタッフ』だ。新人戦には『新入生の育成』という側面もある、仮に今年は良くても来年以降に精神的なしこりを残すことになると思うが」

「そこは大丈夫でしょ。スタッフだって選手だって、一高の代表なのは同じなんだから。それにみんなに相談したら、達也くんが代表で構わないってみんな賛成してくれたよ。そうだよね？」

事の成り行きを見守っている上級生達をグルリと見渡しながら、しんのすけは呼び掛けた。桐原のように不敵な笑みと共に即座に頷く者、服部のように迷いを見せながら小さく頷く者と違いはあるものの、反対の意思を表明する者は1人もいなかった。

しかしそれでも、達也の表情から躊躇いは消えなかった。エンジンアとしての技術力だけでなく戦闘力においても注目されることになれば、ますます彼にとって色々都合が悪くなる。

やはり断ろう、と達也が口を開き——

「それに森崎くんも、達也くんが良いって言ってたし」

「——何？」

しんのすけの言葉に、達也は口にしようとしていた言葉も忘れて戸惑いの声をあげた。

「ここがチャンスだ、とばかりに真由美が横から口を挟む。」

「達也くんを代役に立てることを最初に提案したのは、森崎くんなのよ。さつきしんちゃんとお見舞いに行ったときに目を覚まして、自分から達也くんを代役にすべきだって提案してきたの。理由はさつき、しんちゃんが言った通りね」

「……森崎が、ですか？」

「そう。提案してる途中で照れ臭くなったのかしら、森崎くんったら『アイツなら〃一定の働き〃はできるだろう』ってぶつきらぼうに言ってたわ」

「……そう、ですか」

それは達也にとって、かなりの意外性を持つ言葉だった。森崎が自分に対して過剰とも呼べるほどの敵愾心を抱いていたという意味でもそうだし、彼がこの大会に並々ならぬ想いで挑んでいたという意味でもそうだ。

おそらく森崎も、心の中では多くの葛藤があったことだろう。しかしチームのため何を選択するのが最善かを考えた結果、自分の想いを押し殺してでも達也を代役に立てるべきだという結論に至ったのだろう。

達也は改めて、しんのすけへと視線を向けた。

部屋に入ったときは普段と変わらぬ飄々とした佇まいだと思っていたが、こうしてちゃんと観察してみると、その裏でほんの少しの緊張と共にこちらの様子を窺っていることが、先程から目を逸らさずジツと見つめてくる彼の目から感じ取れた。

森崎はこの大会を通して、精神的に一皮剥けた。

ここまででされてしまえば、もはや達也に断る術すべなどありはしない。

「——分かりました、勤めを果たします」

背筋を伸ばして両手を後ろに組んでそう答える達也の姿は、高校生

にしては堂に入ったものだった。軍隊の新兵と比べても、なかなか様になっていくのではないだろうか。

一方その言葉を聞いた克人は僅かばかり口角を上げ、真由美はホツと胸を撫で下ろし、しんのすけは「おおっ！」と嬉しそうに声をあげた。

「ところで、3人目のメンバーは決まっていますか？」

「それについては、こちらで指名するよりもしんちゃんが決めた方がやりやすいだろうってことで任せてるけど。しんちゃん、誰か思っていた？」

「いやあ、それが全然思いつかないんだよねえ。達也くん、良い人いない？」

メンバーの人事権を達也に即丸投げしたしんのすけに、達也は呆れるように溜息を吐いた。

とはいえ彼の優秀な頭脳は、既に候補者をピックアップしていた。

「一応候補はいるが、相手が了承するかどうかな——」

「説得するのなら、我々もそれに立ち会おう」

克人の言葉に、真由美と摩利も同時に頷いて答えた。三巨頭が揃って出てくるということは、拒否はさせないということだ。女子2人とはともかく、克人もなかなか強引な性格をしていることを達也は初めて知った。

「ちなみに、誰でも良いんでしょうか？ 代表以外から選んでも？」

「えっ！ それはちよつと——」

「構わん。非常事態だという名目で、ある程度の無茶は利く」

堂々とした克人の回答に言い出した達也本人が「おいおい」と思ったが、優秀な生徒なら最初から代表選手になっているはずだ、と大会運営が高を括って許可を出す可能性は確かにありそうだ。

「で、達也くん。それって誰？」

おそらくその場にいる全員が気になっているであろうことを尋ねるしんのすけに、達也は特に勿体ぶることも無く答える。

「俺と同じクラスの、吉田幹比古だよ」

*

*

*

「……なあ、達也。本気なのか？」

「会長はともかく、会頭がこんな冗談を言うと思っているのか？」

「いや、その『会長はともかく』ってのも僕には分からないんだけど……」

自分の泊まっている部屋に突然やって来た達也と深雪としんのすけ、そして真由美・摩利・克人の三巨頭の姿に目を丸くしていた幹比古だったが、彼らの口から伝えられた“決定事項”に更に目を丸くし、三巨頭が部屋を出ていった後も部屋をうろろうるとき迷いながら視線を泳がせていた。

そしてそんな彼の様子を、同じ部屋に泊まるレオ、そして隣の部屋から騒ぎを聞きつけてやって来たエリカと美月が見守っている。

「ミキ、とりあえず1回座ったら？」

「僕の名前は幹比古だ」

力の入らない声でお馴染みのツツコミを入れ、幹比古はエリカに言われた通り近くの椅子へと腰を下ろした。普段と同じ会話を交わし、物理的に足の動きを落ち着かせたのが精神にも影響したのか、彼の表情も若干和らいだように見える。

しかし自分の目の前にいる達也へと向けるその目には、未だに不安の色が濃く残っている。

「……試合は明日なんだろう？ CADどころか、着る物すら準備できているよ？」

「大丈夫だ。CADは俺と五十里先輩とでバッチリ仕上げし、着る物も中条先輩達が用意してくれる。幹比古は何も心配する必要はない」

「さすが達也、急遽指名されたのは自分も同じなのに余裕じゃねえか」
ニヤリと不敵に笑ってそう言うレオに、しかし達也は苦々しく首を横に振った。

「残念ながらそうでもない。作戦らしい作戦を立てる時間も無ければ、練習もできないからぶっつけ本番で試すしかない。こんなのほと

んど力づくだ、本当に不本意だよ」

「悪知恵が達也くんの持ち味ですからな」

「ひどい言い様だな、しんのすけ」

台詞はしんのすけを責めるものだが、その表情は柔らかい。

その遣り取りを眺めていた幹比古が、大きく息を吐いた。

「……まあ、決まったことだからやるしかないだろうけど、具体的には何をすれば良いの?」

「幹比古には『遊撃』を頼みたい」

「遊撃?」

そう尋ねる幹比古の姿勢が、本人でも無意識の内に前のめりになっていく。

「ディフェンス オフェンス守備と攻撃、両方を側面支援する役目だ。幹比古の得意とする古式魔法の知覚外からの奇襲力と隠密性に期待しての役割だが……、人前で魔法を使うのはマズイか?」

「秘密にしているのは魔法そのものの原理じゃなくて発動過程だから、CADで使えば問題無いよ。——でも、大丈夫なのかい? 前に達也は言ってたじゃないか、僕の……吉田家の術式には無駄が大きいって」

「ああ」

あまりにもハッキリとした物言いに、レオと美月は驚きで目を丸くし、彼の『過去』を知るエリカはあからさまに体を硬直させた。

平然とした表情を保っていたのは、深雪としんのすけくらいだ。もつともしんのすけの場合は、会話の内容を理解していない、というより理解しようとしていないからという至極単純な理由によるものだが。

「つまり達也は、もつと効率的な術式を教えてくれるのかな?」

「いいや、アレンジするんだ。無駄を削ぎ落とし、より少ない演算量で同じ効果を得られる魔法式を構築できる起動式を組み直す」

幹比古の使う古式魔法には、長い呪文を必要としていた頃の名残で術式固有の弱点を突かれないう偽装が施されている。しかしCADによって高速化された現代魔法では、術式固有の弱点につけ込むと

いう対抗手段は起動式の段階で魔法の種類を判別できない限り意味が無い。達也の言う「無駄」とは、そのことを指していた言葉だったのである。

だからといって、古式魔法が現代魔法に劣っているということではない。達也が先程言った通り、奇襲力と隠密性においては古式魔法に軍配が上がる。だからこそ達也は、メンバーに幹比古を選んだのだから。

「分かった。僕の使う術式は呪符だけじゃなくてCADにもプログラムしてるから、達也が思う通りにアレンジしてみよ」

「ありがとう。信用してくれたついでに、もう1つ聞きたいことがあるんだが」

「良いよ。僕がここに来たのは父がそう命じたからだ、そのせいで秘密が多少漏れても文句は言えないはずさ」

いや、それはどうだろうか、と達也は思ったが、ここで話の腰を折る利点は無いため黙殺する。

「手短に訊く。「視覚同調」は使えるか？」

「……そんなことまで知ってるのか、さすがだね。「五感同調」はまだ無理だけど、一度に2つまでなら使えるよ」

「よし。これで少しは作戦に幅が生まれる」

幹比古との話は一段落ついたタイミングで、レオがずっと気になっていたことを尋ねる。

「ところで達也、遊撃は幹比古だとして、攻撃と守備は誰がやるんだ？」

「……問題はそこだ。結論から言うと、試合の相手とフィールドによって立ち位置を変えることにする。遮蔽物が多くて捌め手が通用するなら俺が、突破力が何より物を言うのならばしんのすけが前に出る。しかし場合によっては俺としんのすけが前に出て、幹比古に自陣を守備してもらおう可能性も充分に有り得るだろう」

「つまり臨機応変にスタイルを変えろということですね！」

「つまりノープランの出たとこ勝負ということですね！」

美月に続ける形で放たれたしんのすけの言葉に、達也は「余計なこ

とを言うな」とでも言いたげに彼を一睨みし、しかし反論できないのか小さく溜息を吐くに留めた。

そして達也はしんのすけと幹比古にそれぞれ目を遣り、こう告げた。

「ここから数時間、どれだけ準備できるかが勝負の分かれ目だ」

* * *

ホテルの最上階に位置する、3つのスイートルーム。

その中でも現在最も人口密度の高い部屋である、野原一家と春日部防衛隊のメンバーが宿泊する部屋のリビングでは、全員がテーブルに着いて顔を突き合わせていた。そのほとんどが不安に表情を曇らせており、特にみさえなどかなり憔悴しているようだった。

「ルール違反を犯した第四高校は失格処分、第一高校は怪我をした選手の代役を立てて競技を続行、か……」

「つまりそれって、怪我をしていないしんちゃんはそのまま出場するってことだよな？ もし次にあんなことが起こったら——」

「縁起でも無いこと言うんじゃないわよ、馬鹿オニギリ。でもこういう事故が起こったときって、普通は競技そのものを中止するんじゃないの？ いくら事故が起こったフィールドは使用しないって言うてもさ」

「他の試合を観ていても選手が魔法のダメージで気絶することがよくあるみたいだし、或る程度の危険は想定内ってことだろうね……」

「モノリス・コードに限らず、全てのスポーツに怪我は付き物」

「でもさ、ポーちゃん！ レースに出てた渡辺って先輩も、1歩間違ったら凄く危なかったんでしょ！ もしお兄ちゃんに何かあったら、って私凄く怖かったんだから！」

風間ら年少組がそんな会話を交わす中、みさえが我慢の限界といった様子で口を開いた。

「ねえあなた、今からでもしんのすけの高校を変えることってできないのかしら……？」

「……みさえは、このままアイツが魔法を学ぶのに反対ってことか？」
「だってそうでしょ!?! こんなに魔法が危険だなんて知ってたら、あの子が魔法科高校に進学したいって言ったときにもっと反対したわよ! あなたはあの子が心配じゃないの!?!」

「心配してるに決まってるだろ! でもアイツはそれを承知で魔法科高校に進学したんだ。口では『綺麗なお姉さんとお知り合いになりた』いから』なんて言ってるが、アイツが本気でそれだけを理由に高校を選んだわけじゃないってみさえにも分かるだろ?」

「それでも、こうも立て続けに事故が起こると心配にもなるわよ……」

みさえはそう言うと、テーブルに突っ伏す勢いで体を投げ出し大きく息を吐いた。豪華絢爛なスイートルームのリビングが、重苦しい空気で満たされていく。

そんな中で口を開いたのは、最年長のひろしだった。

「それでも、しんのすけは競技に出ることを決めたんだ。——おまえ達だって、病室での会話を聞いてたろ?」

そう。実はしんのすけと真由美が病室で森崎と話をしていたとき、ドアを挟んだ向こう側でひろし達もその会話を聞いていたのである。

しんのすけのことが心配だったひろし達は彼がいるという基地内の病院に駆けつけたのだが、患者の家族や学校関係者でない者を入れることはできないと建物の入口で立ち往生を食らっていた。しかし同じく彼と話をするためやって来た真由美によって中へと招き入れられ、まずは自分と話をさせてほしいという彼女の頼みに従って病室前で3人の話を聞いていたということだ。

「きつとしんのすけとあの子達は、この日のために一生懸命練習したんだ。それに生徒会長だっていうあの子も、怪我をした選手の無念だとかそういうのも全部分かったうえで、それでも自分のすべきことを全うしようと動いている。——本人達がそうして色々決断している以上、俺らがいくら心配だからってむりやりそれを止めるわけにやいかねえだろ」

ちなみに真由美は一足先に病室を出ていったのだが、結局ひろし達はしんのすけと顔を合わせることもなくその場を後にした。ひろしが

そう提案して真つ先に動き出したからであり、他の面々は名残惜しうにしながらも彼の後に続く形となった。

「そりゃ今回の事故は問題だし、二度とこんなことが起こらないために対策する必要がある。でもそれについては、九島さんが大会運営にも掛け合ってくれるって約束してくれたんだから、今はそれを信じようじゃねえか」

「九島お爺ちゃん、『運営に顔が利くから任せてくれ』って言ったもんね」

実際は顔が利くどころの話ではないのだが、烈の堂々とした立ち振る舞いから溢れる大物感と安心感に目を奪われてか、この中で彼自身の経歴などについて気にする者はほとんどいなかった。

「分かったわよ、もう少しだけ様子を見ることにするわ。……そうよね。今まで色々なことがあったけど、あの子はその度に乗り越えていったんだもの。今回だって、あの子なりに考えて乗り越えてくれるに決まってるわよね」

「そうそう。アイツだけじゃどうしようもなくなったときだけ、俺達が手を貸してやりや良いだけの話さ」

みさえの表情には未だに不安が残ったままであるものの、ひろしの言葉も手伝って先程よりは随分と和らいだものになっていた。

「確かにアイツ、悪運だけは強いからな」

「何があったって、しれーつと平気な顔してる気がするわね」

「しんちゃんにハラハラさせられるのなんて、今に始まったことじゃないしね」

「それに、しんちゃんは1人じゃない」

「そっか、パーティーで会ったあのイケメンがお兄ちゃんのチームメイトになるんだっけ。じゃあ大丈夫だね！」

そしてそれに釣られてか、風間達も徐々に笑顔となっていく。

多少の空元気は否めないものの、概ね普段通りの雰囲気に戻っていった。

*

*

*

「……奴らのアジトは、まだ見つかっていないのね？」

『申し訳（ご）いません！ 横浜中華街のどこかにいることまでは突き止めたのですが、そこから先がどうにも絞り込めず……！ この度の失態、何とお詫び申し上げたら良いか——』

「謝罪の言葉は後でいくらでも聞きますから、今は一刻も早くアジトの所在を明らかにしなさい」

『はっ！』

それと同時に、別のスイートルームのリビングのソファアに腰掛けるあいが、携帯端末にて何者かとそんな会話を交わしていた。相手の声が焦燥に震えている一方、窓の外に視線を投げながら口を開く彼女の声はどこまでも平坦で、その顔にも感情らしきものが一切読み取れない。

そうして会話を終えたあいが電話を切ったことで、部屋は耳が痛くなるほどの静寂に包まれた。壁際に控える黒服黒髪黒サングラスのボディガード・黒磯も、サングラスの奥に隠された目を彼女の後頭部に向けるのみで口を開こうとしない。

「ねえ、黒磯」

「はい」

しかしあいが呼び掛けると、一切の間も置かずに即座に返事をした。

「今の報告を聞いて、あなたは率直にどう思ったかしら？」

「……彼ら〃が優秀であることは、疑いようの無い事実です。そんな〃彼ら〃の搜索を掻い潜っているということは、つまりそれだけ手強い相手なのだと私は感じましたが」

「確かに相手は、NO HEAD DRAGON無頭竜〃、国際的な犯罪シンジケートなのだからそこら辺の犯罪組織よりも手強いのは確かよ。——でもね黒磯、〃彼ら〃の優秀さは国際的な犯罪シンジケートごときが太刀打ちできるようなものじゃないはずなのよ。本来ならば、とっくにアジトの場所を割り出してもおかしくないわ」

「……まさかお嬢様は、〃彼ら〃が虚偽の報告をしているとお考えで

「？」

「何ならそつちの方が、事態はもつと単純に済んだのでしようけど」

あいは吐き捨てるようにそう言うと、ソファーから立ち上がって黒磯へと振り返った。

彼女の表情から察するに、事態はもつと深刻そうだ。

「——おそらく、彼ら」は、アジトの捜索を妨害されているわ」

「——！　しかし先程の報告には、そのような内容は一切——」

「彼ら」も自分達が妨害されているなんて感覚は無いのでしょうかね。私も特に根拠があるわけじゃなく、単なる予測でしかありませんもの」

「しかしそれが事実なら、その犯人はよほどの手練れということになります。何か対策を講じた方が宜しいのでは？」

「犯人……、対策……。確かに、そうでしょうね……」

ビジネスにおいては即断即決で最善の道へと辿り着くあいが、黒磯の提案に対し歯切れの悪い返事をするばかりで具体策を口にしようとしなない。

そんな主人の姿に、黒磯は言い様の無い不安を覚えた。

第33話 「モノリス・コードを勝ち抜くゾ その1」

九校戦8日目。新人戦5日目（最終日）。

モノリス・コードの会場は、困惑の空気に包まれていた。一高が第2試合で相手選手の悪質な反則行為によって怪我をし、本来ならば残り2試合を不戦敗になるところを、急遽代理の選手を立てて予選を続行することが認められたからである。

予選は各校がそれぞれ4試合行い、勝利数の多い上位4校が決勝トーナメントに進出する。勝利数が同じ場合は、試合時間の少ない方が上位となる。そしてここままで一高は四高戦での反則勝ちも含めて2勝しているが、今日戦う二高と八高に負けてしまうと決勝トーナメントの進出は叶わなくなる。

二高と八高に勝つと、決勝トーナメント進出は一高・三高・八高・九高。

二高に勝って八高に負けた場合も同じ。

二高に負けて八高に勝つと、決勝トーナメント進出は一高・二高・三高・八高。

つまり二高にとっては、本来ならば決勝トーナメントに進出できたにも拘わらず、一高に負けると予選敗退となってしまうのである。かといって八高に勝った後に手を抜くと、九高から八百長だと騒がれるだろう。

「というわけで、八方丸く収めるためには、一高が2敗して予選敗退が望ましいんだろうな」

「ほーほー。で、そうするの?」

「まさか。やるからには勝ちに行く、というか負けては特例で試合に出させてもらう意味が無い」

しんのすけの問い掛けに即座にそう答える達也であるが、彼の脳裏には大会1日目での風間少佐との会話が思い起こされていた。

あのときは自分が選手として出場する事態になるとは思えず軽く考えていたが、こうしてモノリス・コードの代表選手となってしまう可能性以上、軍事機密指定となっている魔法を人前で使ってしまう可能性

が出てしまった。もつとも達也は生死が掛かったわけでもない状況でそのような魔法を思わず使ってしまうような脆弱な精神をしておらず、そのときは潔く負け犬に甘んじることすら辞さない所存だ。

だがしかし、と達也は隣のしんのすけへと視線を向ける。

「おっ？・ どうしたの、達也くん？」

「ん？ いや、『森林ステージ』とは随分と相手に有利なフィールドが選ばれたな、と思ってるな」

達也が口にしたのは考えていたこととはまったく違うことだったが、もちろんしんのすけはそんなことに気づくこと無く、彼の言葉に首を傾げて疑問符を浮かべる。

「おっ？・ そうなの？」

「相手の八高は魔法科高校の中でも特に野外実習に力を入れているからね、森林ステージは彼らにとってホームステージみたいなものなんだよ。乱数発生プログラムによってステージが選ばれているとなってるけど、本来なら決勝トーナメントに上がるはずだったチームに有利なステージが選ばれた、という作為の介入を疑いたくなる選定だね……」

「考えすぎじゃないの、ミキくん？」

「幹比古、ね」

試合前で緊張しているのか、いつものツツコミにも切れが無い。

しかしそんな彼を無視して、無情にも試合の時間が迫っていく。

「そろそろフィールドに行く時間だな。しんのすけ、幹比古、行くぞ」

「ほいほい。——あつ！ ちよつと待って！」

椅子から立ち上がって控え室の出口へと向かおうとしていた2人を呼び止めるしんのすけに、2人は不思議そうな表情で彼へと振り返った。

そしてしんのすけの、掌を下に向けた右手を前に差し出すジェスチャーに、達也は得心のいった表情に、幹比古はますます訝しげに首を捻る。

「幹比古、どうやらしんのすけは試合前の掛け声をやりたいらしいぞ」

「そういうことか。うん、構わないよ」

2人が乗ってくれたことに、しんのすけはやけに喜んでる様子だった。それを尋ねると、どうやら森崎達るときはいくら頼んでもやってくれなかったらしい。確かに森崎はそういうキャラじゃないだろうな、と達也は内心納得していた。

「オラ達のチーム名、どうする?」

「普通に〃一高モノリスチーム〃とかで良いんじゃないか?」

「分かったゾ。——それじゃ、一高モノリスチーム、ファイヤー!」

「ファイヤー!」

「ファ、ファイヤー!」

若干幹比古が遅れ気味だったようにも聞こえるが、しんのすけにとっては及第点だったようで、彼はスキップ混じりの駆け足で控え室を後にしていった。

そんな彼の後に続く達也の背中を眺めながら、幹比古は秘かにこう思った。

——達也って、意外とこういうとき声を張るタイプなんだな……。

*

*

*

モノリス・コードの会場の1つ、森林ステージの客席に、第三高校の一条将輝と吉祥寺真紅郎の姿があった。

「第一高校の選手が怪我をしたって聞いたときは凄く驚いたけど……、その代役としてまさか例のエンジニアが選手として出てくるのはね」

「ああ、そうだな」

「しかもこの試合では彼が攻撃オフENSEみたいだよ。2丁の拳銃型に加えてブレスレット型のCAD……、彼のことだからハツタリなんてことはないんだろうけど、はたして同時に3つのデバイスなんて使いこなせるのかな?」

「ああ、そうだな」

「異なる系統の魔法を使いたいんなら、普通は汎用型を選ぶところだけど……。わざわざ複数のデバイスを持つその意味、見せてもらうと

「しょうか」

「ああ、そうだな」

「……将輝、僕の話全然聞いてないだろ」

「へっ!? いや、いや、そんなことないぞ! ちゃんと聞いてる聞いてる!」

慌てた様子で否定する将輝だが、その態度がむしろ全力で肯定している事実に気づいていないのだろうか。真紅郎は普段とはまるで違う彼の姿に、呆れを多分に含んだ溜息を吐いた。

「将輝、いったい野原しんのすけの何がそんなに気になるんだい? 確かに彼の出自は他の選手と比べたらかなり特殊だし、*“クラウド”*で見せた彼の魔法も警戒するに値するものだったけど、それにしただって大きさに過ぎるんじゃないか?」

真紅郎のもっともな疑問に、それでも将輝の表情は固いままだ。そしてその表情のまま、周りの視線を気にするようにチラチラと周囲の様子を窺い、そして真紅郎へと顔を近づける。

それに釣られて表情を固くする真紅郎が同じく顔を近づけたところで、将輝が口を開いた。

「実は九校戦よりもずっと前から、俺は野原しんのすけのことを知っていた。いや、俺だけじゃない。十師族や師補十八家の間では、野原しんのすけに関する情報は1つの*“常識”*となっている」

「……それは、どういう意味で? 彼は何者なんだい?」

「一言で表すなら、彼は*“英雄”*だ。具体的な内容については言及を避けるが、野原しんのすけは一般人の知らないところで世界の危機を何度も救っている。日本の、じゃなくて世界のだから、世界中の有力者に彼の名が知れ渡っているし、ファンを公言している者も少なくない」

あまりにも突然で荒唐無稽に過ぎるその内容は、普通ならば信じられないと一蹴してもおかしくない。しかし将輝と浅からぬ関係である真紅郎は、彼がそんなつまらない冗談を言う性格でないことを知っている。

「……彼に対して、十師族や師補十八家はどのようなスタンス?」

「まちまちだな。有事の際には協力すると公言する家系もあれば、中立の立場で不干渉を貫く家系もある。——もちろん、否定的な家系もな」

「一条家は、そのどれに属するんだい？」

「協力と中立の間、といったところだな。一条家が守護している北陸から東北で事件が起これば協力するのも吝かではないが、わざわざ他地方にまで出張って協力するようなことはしない」

「それじゃ……、将輝個人としては？」

真紅郎の質問に、将輝はそれほど間を空けずに答える。

「俺にとつて野原しんのすけは……、もしかしたら『憧れの存在』かもしれないな」

「憧れ？」

「小さい頃、親父から野原しんのすけの話を聞いたとき、それこそ昔の英雄譚を聞いたときのように興奮したのを憶えてる。そんな奴が俺の目の前にいて、しかも競技とはいえ直接戦えるかもしれないんだ。

——もしそのときが来たら頼むぞ、ジョージ」

「……良いよ、将輝。参謀として、できるだけ彼を分析してみせるよ」

2人は互いに不敵な笑みを浮かべ、そして正面のフィールドへと視線を戻した。

*

*

*

「八高相手に森林ステージ、か……」

「普通に考えるならこちらが不利、なんでしようけど……」

「それについては、向こうも計算外だったでしょうね」

幹比古の言った『第八高校にとって森林ステージはホームグラウンド』というのは、第一高校の天幕でモニターを見つめている真由美・摩利・鈴音の3人も同じ意見だった。しかしそれでは今回は第一高校が不利なのかというと、その点について3人はさほど心配していなかった。

3人は今回の試合での作戦を、事前に達也から聞いていた。本来な

らば中心選手であるしんのすけが説明すべきなのかもしれないが、正直彼が報告だの説明だのといったことが壊滅的に苦手なのは既に知っているため特に追及しなかった。

そしてその際、達也が忍術使いである九重八雲の教えを受けていることを知らされた。そのときは意外なビッグネームに驚きを顕わにした3人だったが、4月の模擬戦のときに魔法を使わず服部の後ろに回り込んだ動きを思い出して納得した。それと同時に、森林ステージのように遮蔽物の多い環境こそ「忍術」の真価が発揮されることに思い至った。

さらにもう1人の代理選手である吉田幹比古は、古式魔法の使い手だ。自身の身を隠しながら魔法を行使できる森の中は、彼にとっても有利に働くだろう。よって達也を攻撃、オフエンス幹比古を達也のサポート役としたことに関しては、3人から反対意見は出なかった。

問題は、しんのすけを自陣でモノリスを守る守ディフェンス備としたことだ。「消去法でしんちゃんをディフェンダーにせざるを得ないというのは理解できるが、はたしてどこまでやれるか、だな……」

「ええ。さすがにこの状況でモノリスを無視して前に出るような暴挙はしないと思うけど……」

相手チームの選手が自陣に攻めてきたときに備え、スタート地点から動かずじつとしてている。

確かに、しんのすけの苦手としていそうなことだ。クラウド・ボールのときにあれだけ動き回る戦法を採ったのも、結局は真由美のように3分間動かずに逆加速魔法を掛け続けることに耐え切れなかったからだ。

しかし彼女達が心配しているのは、彼の性格的な側面だけではなかった。

「しんちゃんが使ってる武器、確か『小通連』と言ったな」

「はい。直接攻撃を禁じられたこの競技でも野原くんの剣技を活かせるよう、司波くんがオリジナルで開発した武装一体型CADです。最初にそれを見たときは使用者の肉体的条件に随分と依存していると感じましたが、野原くんは問題無く使いこなせているようです」

「そつちについては大丈夫だろうけど、問題は今回の舞台が『森林ステージ』ってことよね……」

真由美の言葉に鈴音は頷き、そしてこう続ける。

「おそらく今回のステージでは、『小通連』はほとんど使えないでしょう」

*

*

*

互いのモノリスは、直線距離にして約800メートルほど離れている。CADを携えて、生い茂る木々の間を縫い、いつ来るか分からない敵に警戒しながら進むことを考えると、途中戦闘が無かったとしても最低で10分は掛かる距離だと見るのが普通だ。

しかし試合開始から5分も経たない内に始まった戦闘は、八高のモノリス付近で行われていた。

加重系の魔法で目の前のディフェンダーに片膝をつかせた達也は、魔法を使わずに持ち前の脚力で八高のモノリスへと疾走する。それを止めようとディフェンダーがCADを達也の背中へと向けるが、起動式が展開されたその瞬間、まるでサイオンが爆発するかのようにそれが掻き消されてしまった。

ディフェンダーが驚いて立ち尽くしている間に、達也はモノリスの鍵を開く専用の魔法を放った。八高のモノリスが開き、勝利の鍵である512文字のコードが外界に晒された。このコードを審判席に送信すれば、一高の勝利となる。

しかし達也はコードが現れたことを確認すると、すぐさま森の中へと逃げていった。さすがの彼も、敵の妨害に晒されながらコードを打ち込むのは至難の業だった。

ディフェンダーは他の一高選手の影を気にしながら、彼を追い掛けて森の中へと入っていった。

いくらここが富士演習場とはいえ、実際に富士の樹海を使って競技

をしているわけではない。演習場の一部に人工の丘陵を作り、そこに木々を移植した訓練用のステージである。すでに移植から半世紀は経って自生化しているが、たかだか800メートルの道を迷うような密林ではない。

しかし八高のメンバーであるその選手は、完全に自分の現在位置を見失っていた。

「くそっ！　くそくそ隠れてないで出てこい！」

苛立ちのあまり声を荒らげる彼だが、当然ながらそんなことで姿を現す相手ではない。彼は舌打ちをすると、先程から鬱陶しくて仕方のない耳鳴りを打ち消す魔法を発動した。そのときに使ったCADをホルスターにしまい、代わりに携帯端末型のCADを取り出し、断続的に襲い掛かる耳鳴りに対抗しながら一高のモノリスへと進んでいく――

と、彼自身は思い込んでいるのだろう。

本人は高周波音ばかりに気を取られて気づいていないが、彼は低周波音によつて三半規管を狂わされていた。ヘルメットによつて視界が制限されている中、右に左に方向転換をさせられてしまったことで、自分が今どちらを向いているのか分からなくなってしまっている。そして迷うはずのない人工的な環境という思い込みが、自分が迷っていることに気づけなくなっているのである。

これこそ、幹比古による精霊魔法「木霊迷路」である。

仮に彼が魔法によつて方向感覚を狂わされていることに気づけたとしても、術者がどこにいるのか判別するのは非常に難しいだろう。なぜなら幹比古は精霊という独立情報体を用いて、離れた場所から彼に魔法を仕掛けているからである。

この奇襲力が、現代魔法には無い大きな利点だ。モノリスに近づいていると思いい込みながらどんどん後戻りしていく彼を尾行しながら、幹比古はどうやって彼を行動不能にしようか考えていた。

「――あった、モノリスだ」

3人目の八高選手は、2つのモノリスを結ぶ直線経路から大きく迂回して細心の注意を払いながら森の中を突き進み、一高のモノリスまであと50メートルほどまでやって来ていた。乱立している木々の隙間からモノリスが見えたとき、彼は無意識に安堵の溜息を吐いていた。

しかし、本番はここからだ。モノリスを開ける「鍵」を発動させるには、半径10メートル以内にまで近づかなければならない。10メートルというのは、物陰に隠れていない限り確実に発見される距離だ。相手のデイフェンダーに発見されれば、激しい戦闘になることは容易に想像できる。

問題は、そのデイフェンダーが誰かということだ。

この試合から代理出場している2人の選手については、情報がほとんど無いため何の魔法が得意なのか分からない。しかしどちらも二科生という補欠扱いの生徒らしいので、ほとんど注意する必要は無いだろう。

注意すべきは、唯一最初の試合から続投している一科生の選手・野原しんのすけ。

第1試合の戦い振りから見ると、この選手は典型的な前衛タイプ。卓越した運動能力によるスピードを活かして立ち回り、刃の先端が分かれる独特な打撃武器を用いた近接戦闘を得意としている。真正面からやり合えば苦戦は必至だろう。

しかし彼は、しんのすけの使う武器の「弱点」に早くも気づいていた。

直接攻撃がルールで禁止されている以上、分離させた刃の先端で相手を攻撃するしかない。しかし刃の先端は自在に飛び回っているのではなく、刃渡りを擬似的に伸ばして振り回すことで動かしている。そうすることで、遠心力を攻撃力にプラスさせて威力を上げているのである。

よって現在彼が潜んでいる森の中のように障害物の多い場所では、刃の先端を勢い良く飛ばすことができず、それだけ攻撃力も落ちてしまうのである。モノリス付近はある程度木々も少なく開けているの

で一応使うことができるが、それでも第1試合のときよりその距離は短くなってしまうだろう。

——だったらその隙を突いて森の中からモノリスを開け、森に紛れながらコードを打ち込めばこちらの勝利だ！

八高選手は頭の中で作戦を整理すると、1回深呼吸をし、作戦を実行するために1歩足を踏み出した。

その瞬間、

「ほいっと」

気の抜けた声が頭上から聞こえてきたと気づいたときには、八高選手へのヘルメットがスポンと抜き取られていた。ヘルメットを脱がされたため、彼はここでリタイアとなる。

「——えっ？」

あまりに突然の出来事に八高選手は呆然とし、そしてその顔を声のした頭上へと向ける。

片手で武器の柄を握り締め、もう片方の手で八高選手のヘルメットを驚掴みにしているしんのすけが、彼の頭上で、つまり空中で静止していた。しんのすけの体にはワイヤーらしき物は取り付けられておらず、まるで魔法か何かでフワフワとその場に漂っているように見える。

しかし、しんのすけの持つ柄から伸びる刃が途中で切れていることに気づいた八高選手は、そこから更に上へと顔を向けた。地上10メートルほどの高さにある木の枝の上に、例の刃の先端が上向きに乗っかっている、というより引つ掛かっているのが見えた。

「……はあ成程、そういう使い方もあるのかあ」

むしろ感心した様子で、八高選手は呟いた。

「デیفエンダーをモノリスから引き離すことに成功した達也は、『迎撃』と『連携』のどちらを選択するか迫られていた。それはすなわち、コードを打ち込むのに必要な時間デیفエンダーを行動不能にするか、彼を引きつけて幹比古にコードを送信させるか、である。」

数瞬の後、彼は「迎撃」を選択した。

地面にCADを向けて、引き金を引いた。加重軽減の魔法により、軽く地面を蹴っただけで彼の体は数メートル上にある木の枝の上へと舞い上がった。

魔法の行使には、エイドスから不可避の反動が生じる。今この瞬間、この場所で魔法が使われたことは八高のディフェンダーに伝わっているはずだ。もし相手が鋭敏な感覚の持ち主なら、加重軽減の魔法が使われたことすらも分かるだろう。

そのことは、達也も充分に理解している。というか、それを狙っていた。

木の枝に着地した達也は、すぐさま隣の木へと魔法を使わずに飛び移った。

そして少しして、達也が魔法を行使した場所にディフェンダーが現れた。どうやら加重軽減の魔法が使われたことも分かっているようで、彼は警戒するように目の前の木を見上げていた。

そんな彼の背中に向けて、達也はCADの引き金を引いた。模擬戦のときにも見せた、無系統魔法のサイオンの合成波がディフェンダーに襲い掛かり、彼はその場に倒れ伏した。しかし模擬戦のときとは違い、意識を刈り取るには至らなかったらしい。

しかしすぐさま反撃できるほどの体力は無いらしく、ディフェンダーはその場に蹲ったまま動けずにいる。達也はそれを確認するとすぐさま木の枝から離脱、モノリスへ到達するや滑らかなタイプピングでコードを打ち込んでいく。

八高応援団の悲鳴と共に、試合終了のブザーが鳴り響いた。

*

*

*

「……さて、ジョージ。おまえは今の試合をどう見る?」

「それは試合の統括としてかい? それとも「彼ら」のこと?」

第一高校の勝利で幕を閉じた先程の試合を観て、将輝と真紅郎が真剣な表情でそんな会話を交わっていた。

「そうだな……。まずは司波達也の方を頼む」

「彼は凄く戦い慣れてるね。身のこなし、先読み、ポジション取り——魔法の技能よりも、戦闘技術の方を警戒すべきだね」

「魔法技能については？」

「そうだね……。途中で八高の選手の起動式が破壊されたのは、おそらく術式解体グラム・デモリッションだろうね。確かにあれには驚かされた。——だが

試合の最後に使った『共鳴』は、完全に相手の背後を狙い撃つたにも拘わらず気絶には至らなかった……。もしかしたら彼は、それほど強い魔法は使えないんじゃないかな？ あるいは普段極めて高性能なデバイスを使用しているせいで、スペックの低い競技用デバイスでは力を発揮できないのかもしれない」

「確かに、あれだけのアレンジスキルがあるんだったら、普段からハードの方も高度にチューンナップされた物を使っているだろうな。急な代役だった影響が出ているということか」

「そう。だから彼の魔法自体に関しては『術式解体』以外の魔法はあまり警戒する必要は無いと思うよ。むしろ彼の駆け引きに嵌ってしまふことを警戒するべきだ」

「真正面からの撃ち合いなら恐れるに足りない、か。——だったら、野原しんのすけはどうだ？」

将輝の質問に、真紅郎は達也のときよりも考え込む素振りを見せ、口を開く。

「戦闘が無かったからハッキリとは分からないけど、正直あの武器をあんな風に使ったのは盲点だったよ。第1試合で典型的な前衛タイプと思ってたけど、かなり柔軟な発想の持ち主だ。……それと同時に、素の身体能力がかなり高いね」

「ああ。スルスルと木に登って枝を跳んでいく姿は、かなり口は悪いが『猿』みたいだったな」

「いや、まさにその印象で合ってるよ。考えてもみてよ。八高選手のヘルメットを奪ったとき、彼は自分の体重を片手で剣の柄を握り締め、支えてぶら下がってたんだよ。それにもう片方の手でヘルメットを簡単に掴み取ってたけど、あれも掌が大きくて握力が無いと地味に

難しいからね」

真紅郎の分析に、将輝は自分の掌を開いたり閉じたりしながら「成程な……」と納得したように呟いた。

「ということは、野原しんのすけに関しても遠距離から魔法を撃ち込むのが無難ってところか？」

「まあ、今のところはそうだね。何か隠し球を持つてる可能性は充分あるから油断はできないけど、少なくとも近接戦闘よりは勝機があるのは間違いないね」

「そうか……ようし……」

モニターに映るしんのすけを睨みつける将輝の目に、メラメラと闘志の炎が燃え上がっていた。

そしてそんな彼を、仕方ないなあ、と言いたげな目で見つめる真紅郎。

幹比古についての意見は、とうとう2人の口から出てくることは無かった。

*

*

*

次の一高vs二高の試合は30分後に指定された。インターバルが少々短すぎる気もするが、そもそも一高の試合自体が急遽組まれたものであり、今日1日で決勝まで終わらせることを考えると致し方ないだろう。

そのインターバルの時間、場所は第一高校の選手控室。他の生徒も出入りするためリフレッシュには少々騒がしいが、達也もしんのすけもその程度で心が揺らぐような性格ではないため気にする様子はない。

しかし幹比古だけはその2人から少々距離を取り、控室の壁際にあるソファーにひっそりと隠れるように座っていた。

「どうした、幹比古？ もっと近くに座れば良いじゃないか」

「いや……、僕はここで構わないから」

「あら、吉田くんは意外と人見知りなんですネ」

そう言つてクスクス笑つたのは、深雪だった。

なぜ彼女がここにいるのかというと、試合を終えたばかりの達也をケアするためである。彼女は現在、椅子の背もたれに寄り掛かつてリラックスしている彼の後ろで、その白魚のような綺麗な指で彼の肩を優しく、それでいて凝りがしつかり解れる絶妙な力加減で揉んでいた。ニコニコと幸せそうに微笑むその姿は、まるで愛する夫に甲斐甲斐しく奉仕する新妻のようである。

ちなみにそんな2人のすぐ傍にいるしんのすけは、携帯端末の画面で繰り広げられているアクシオン仮面と怪人との戦闘に夢中だから我関せずといった具合だ。

「幹比古の方が普通だと思うぞ、深雪。少年とはシャイな生物なんだよ」

「まあ！ シャイなお兄様なんて、深雪は一度も見せていただいたこととはありませんよ？」

——いや、僕は確かに人見知りだけど、それ以上に2人を見ているのが恥ずかしいんですよ！

もちろん幹比古にそんな胸の内を公言できる勇気があるはずもなく、ただひたすらに兄妹の遣り取りを眺めているしかなかった。

と、そんな光景が繰り広げられている控室に、真由美とあずさの2人が入ってきた。

そうして司波兄妹の姿を認めるや、あずさの顔はみるみる真っ赤に茹で上がり、真由美は逆に目つきをみるみる冷たいものにした。た。

「何だか蔑まれているような気がしますが」

「気のせいよ。——次のステージが決まったわ」

「わざわざ会長が伝えに来たということは、何か問題でもありましたか？」

達也の言葉に、幹比古と深雪の目つきが自然と鋭くなる。

そんな彼らに対し、真由美は慌てた様子でわたわたと手を振った。

「ああ、そうじゃないのよ。次のフィールドは『草原ステージ』に決まったわ。『市街地ステージ』は昨日の件もあったから、今大会では

選ばれないんじゃないかしら?」

「そうですね。あのフィールドは身を隠す場所も多くて戦いやすいと思ってたので、その辺りは残念ですね」

軽く肩を竦めてそう言つてのける達也の言葉は、強がりではなく本心からのものだった。忍術使いの教えを受けた達也と古式魔法師の幹比古を擁するこのチームならば、確かに試合を有利に進められたことだろう。

ではなぜ会長がわざわざここに、という疑問を雰囲気を感じ取った真由美は、その目に心配の色を浮かべて達也を見遣った。

「達也くん。……もしかして、あんまり本調子じゃないのかしら?」

「……なぜ、そう思つたんですか?」

「だつてさっきの試合、相手選手の背後から放つた魔法つて、4月の模擬戦ではんぞーくんに使つた“共鳴”よね? でも4月のときは気絶にまで至つたのに、さっきの試合じゃそこまでの結果にはならなかったから」

「さすがですね、会長。確かに本調子ではないですが、体調面の問題ではなくデバイスの性能が原因ですよ。普段使っているCADよりもスペックが低い分、魔法の威力に表れているようです。言い訳がましいですけどね」

「そ、それつて大丈夫なんですか?! 次の試合は、おそらく相手チームと直接ぶつかり合う展開になりますよね!」

あずさが思わずといった感じで会話に割り込んでそう尋ねた。その声が殊の外大きかったからか、室内にいる生徒達が何事かと彼女に視線を向ける。

そんな周りの反応に気づいて顔を紅くするあずさに、達也はフツと笑みを漏らした。

「大丈夫ですよ。致命的というほどではないですし、やりようはあります。それに——」

達也はそこで言葉を区切り、視線を別の方へと移した。

その先にいたのは、未だにアクション仮面に夢中なしんのすけだった。

「たとえば『草原ステージ』だろうと、正面からまともやり合うつもりはありません」

「……………」

達也の言葉に、真由美もあずさも首を傾げるだけだった。

そして彼の背後でそれを聞いていた深雪は、楽しそうに微笑むだけだった。

第34話 「モノリス・コードを勝ち抜くゾ その2」

モノリス・コード予選、一高vs二高が行われる。『草原ステージ』の観客席。

そこに、1人は見た目からも知性を漂わせる中年男性、もう1人は若手の秘書を思わせるような妙齡の女性、という少し不思議な組み合わせの2人組がいた。どちらも目立たない夏服姿なので周りの観客も特に気に留めていないが、2人の会話に耳を傾けてみるとその内容も更に不思議なものであることが分かる。

「結局彼がさっきの試合で使ったのは、『術式解体』に『共鳴』に加重系魔法くらいか……。『分解』を使わないのは良いとして、フラッシュ・キャストも『精霊の眼』^{エレメンタル・サイト}も使わないというのは手抜きが過ぎないか？」

「彼がそれらを秘密にする『事情』くらい、先生もご存知でしょう？」
「しかし藤林、フラッシュ・キャストはともかく、『精霊の眼』は使ったところで傍目には分からないだろう？」

「見えないはずのものが見えている、というのは見る人によっては非常に奇妙に映ります。『精霊の眼』は知覚魔法というよりも異能の類ですからね、下手すると『分解』以上に耳目を集めますよ。——少なくとも、『特別観覧室』の方々は何か感じ取りますよ」

その2人組の正体は、独立魔装大隊の山中軍医少佐と藤林少尉。かなり突っ込んだその内容は知識のある者が聞けば目を丸くするものだったが、観客席は周りの喧騒によって普通の会話程度は掻き消されるし、たとえ聞かれたとしても研究者レベルの知識を有する観客はそうしない。

2人がここにいるのは、半分趣味で半分仕事だった。純粋に達也たちの試合が気になるというのもあるが、彼らにとって超重要な人物が出場する競技で、万が一機密指定の魔法が衆人環視の下で使われてしまったときに迅速な対応を取るためにここにいるのである。

とはいえ達也は、人目に触れてはならない技術を苦し紛れに披露するほど脆弱な精神をしていない。なので2人は達也に関しては何

心配はしていなかった。

2人が注意しているのは、むしろ、

「一方の『彼』はというと、今のところは第1試合から通して主に達也くんお手製の武装一体型CADを使っていますね。他の魔法は補助的なものを含めても一切使った様子はありません」

「しかし次の試合は、おそらく両チームが直接的にぶつかり合う展開が予想される。第1試合のときは何とかなったが、相手はこの試合に負けると予選敗退が決まる第二高校だ。おそらく死に物狂いで来るだろう」

「今の『彼』は仲間が重傷を負ったことで、精神的に不安定になっていられると思います。そんな状態で追い詰められる状況になったとき、はたして例の魔法を使わずにいられるか……」

しんのすけの場合は達也と違って、自分が彼ら独立魔装大隊にその動向を見守られていることすら知らない。なのでもし彼に「機密指定の魔法」なるものが使えた場合、達也よりもそれを使われる可能性が高くなる。

「それに達也くんも、フラッシュ・キャストに関しては使うのもおそらく時間の問題だと思われませんか？ 普段よりも低スペックのCADでは、さすがに『プリンス』と『カーディナル』の相手は難しいでしょうから」

「……面倒なことにならないければ良いが」

山中の言葉に、藤林は無言の同意を返した。

それが叶う可能性については、どちらも敢えて無視した。

*

*

*

一高vs二高の対戦フィールドとして選ばれた『草原ステージ』は、全部で5つあるフィールドの中でも最もシンプルなものだ。高低差も障害物も存在しない、ただ足首ほどの高さしかない草が生い茂るそのフィールドは、両チームが正面からぶつかり合う試合展開を生み出すために造られたと言っても良い。

相手チームのモノリスとは、600メートルほどの間隔がある。実弾銃に照らし合わせれば狙撃銃の領域になるが、“森林ステージ”や“溪谷ステージ”と比べれば短い距離であり、視界を遮る物は無いためスタート時点で相手の姿が見えている。

そんな相手チームの姿を視界に捉えながら、“一高モノリスチーム”である達也・しんのすけ・幹比古の3人は、自陣のモノリスを背に軽い準備運動を行っていた。幹比古は相変わらず緊張した面持ちだが、残りの2人は実にリラックスしたもので気負いがまったく見られない。

そんな2人に対して、安心と不安を半々でブレンドした表情を浮かべながら、幹比古が小さな溜息を吐いた。

本人としては聞かれないように注意を払ったつもりだったが、達也の優秀な耳がそれを拾い上げたようで、

「どうした、幹比古？ 本番直前になって、急に不安にでもなったか？」

「えっ？ ……いや、ごめん。今回の作戦、って言って良いのか分からないけど、上手くいくかどうか不安になっちゃって……。本番前にモチベーションを下げるべきじゃないのは分かってるんだけど、どうにもね……」

「正直なところ、試す時間が無かったから何とも言えないな。どうせ決勝トーナメント進出は確定しているんだ、別にこの試合は落としても構わない程度の心構えでいた方が案外上手くいくかもしれない。——というわけだ、しんのすけ。あまり気負わず行こう」

「ほっほーい」

しんのすけが返事をしたまさにそのタイミングで、会場中にまもなく試合開始であることを伝えるアナウンスが流れた。観客の声が自然と小さなものになり、ヒリヒリと肌を刺すような緊張感が漂い始める。

そして試合開始のブザーが鳴った、その瞬間、

「——『変身』！」

右腕をピンと伸ばして斜めに挙げ、左手は胸の前で固く握り締める

という、まさしく特撮ヒーローが決めのシーンでやるようなポーズと共にしんのすけが高らかに叫んだ。そして彼の声に反応して、ベルト型のCADが魔法師のみに見える青白い光を一瞬だけ放ち、そしてすぐに消え去った。

そんな目立つ行動をしているから当然なのだが、観客達が一様に興味津々といった視線をしんのすけに向けている。

そうして数千の視線を一斉に受けていたしんのすけの姿が、何の前触れも無く掻き消えた。まさにそれは一瞬の出来事であり、彼を狙っていたカメラが動揺でブレるほどだった。

次にそのカメラがしんのすけを捉えたとき、彼は既にスタート地点から150メートル以上は離れた場所におり、猛スピードで相手チームのモノリスへと駆けていくところだった。たとえ短距離走の世界記録保持者であつても相手にならないそのスピードは、人間の目ではとても追いつかず彼の輪郭が曖昧になる錯覚を生み出すほどだ。

そんなスピードで向かってくるのを相手チームが気づいたときには、既にその距離はスタート時点の半分を切っていた。試合前に立てた作戦通りに移動を始めていた2人が魔法で迎撃を始め、自陣のモノリス付近で待機していた1人が慌てて駆けつけてそれに加わる。

選択した魔法は、圧縮した空気を撃ち出す単純なものだった。発動までの早さを重視したためであり、空気であるため目に見えないという利点を考慮したためでもある。

しかし発動のイメージをより強固にするために、3人共が拳銃型のCADをしんのすけに向けていた。まさに本物の拳銃のように向けられた銃口の角度を目で追えば、目に見えない空気の砲弾の通り道を推測することは可能だ。

猛スピードで走りながらしつかりそれを確認していたしんのすけは、そのスピードを一切落とすことなく何度もジグザグに動いてそれを避けた。並の魔法師ならば制御不可能なスピードも彼の身体能力なら自由に動き回ることができるし、足元に向けて撃たれたマシンガンの弾も避け切ったことのある彼ならば、拳銃より低い連射能力で銃弾より圧倒的に遅い空気砲3人分を避けることなど容易い。

「とにかく撃ち続けろ！ 1発でも当たればどうにでもなる！」

しかし相手との距離が近くなるということは、それだけ魔法の発動からこちらに到達するまでの猶予も短くなることを意味する。相手チームが味方に呼び掛ける声が微かに聞こえてくる頃になると、さすがのしんのすけもその表情に若干の焦りが表れるようになった。もつとも、それは「おっとっと」程度の軽いものではあるが。

と、ここでしんのすけが、猛スピードで駆けながらその手に持つ小通連を構え直した。とうとう反撃に出るか、と相手チームが一斉に表情を強張らせてその動きに注視する。

そうしてしんのすけが発射した小通連の先端は、彼の前方10メートルほどの地面に突き刺さってその動きを止めた。

まさかここで失敗か、と相手チームが無意識でほんの僅かに気を緩めたそのとき、

「ほいっ」と

猛スピードで駆ける勢いそのままに、しんのすけが地面を蹴って跳び上がった。

そして彼の体が宙に浮いたのと同様、刃の先端と根元部分の相対距離を伸ばしていった。

先端部分は地面に阻まれて動けないため、必然的に根元部分、つまり柄を握り締める彼の体が上空へと飛び上がっていく形となる。それはさながら棒高跳びをより素早くダイナミックにしたかのようにあり、地面を走っていたときのスピードのままステージ上空を飛んでいった。

最初はそれを呆然とした表情で見上げていた相手チームも、ハッと我に返って再び空気砲を撃ち始めた。しかしその間にもしんのすけは彼らの頭上を超え、地面に突き刺していた小通連の先端部分を手元に引き戻し、そして再びそれを発射して地面へと突き刺した。

そこは重力に引っ張られて落下を始めたしんのすけが降り立つであろう地点であり、第2試合で崩壊するビルから飛び出したときにも見せたやり方で落下速度を緩めていく。今回は事故ではないので運営委員からの手助けは無かったが、それでも地面に足を付ける頃には

大分緩やかになり、さらには着地の瞬間に前方に3回転することで完全にその衝撃を受け流すことに成功した。その様子を見守っていた観客から、安堵の溜息と歓喜の声^が漏れた。

そしてしんのすけは起き上がったその瞬間に再び自己加速術式を発動し、再び相手のモノリスへと走っていく。

3人全員が完全に後ろを取られた形となった相手チームが、一斉に顔を青ざめさせた。彼らも即座に自己加速術式で彼を追い掛けるが、そのスピードの差は歴然でみるみる距離を離されていく。

そうしてしんのすけとモノリスの距離が10メートルを切ったとき、彼は鍵となる無系統魔法をモノリスに向けて放った。モノリスが音を立てて開き、512文字のコードがその姿を表した。

観客達による歓声をBGMに、しんのすけは物凄い早さでコードを打ち込んでいく。彼は普段の言動によるイメージに反してパソコンなど機械の操作に滅法強く、パソコンが一般家庭に普及し始めた1990年代後半にパソコン2台を連動させたアニメーションを即席で作成していたほどだ。試合が決着する雰囲気^に、観客達のボルテージも高まっていく。

と、そんなしんのすけに対し、ようやく空気砲の有効射程圏内に入った相手チームが一斉に彼へと狙いをつけた。しかし彼はそれをチラリと一瞥しただけで、タイピングも止めないし攻撃を避ける気配も無い。

そうして相手チームが空気砲を発射する、直前、

「――！」

魔法式が破壊されたことで、強制的に魔法の発動が中止された。3人が一斉に目を見開いて驚愕し、すぐにハツとした顔で後ろを振り返った。

拳銃型のCADをこちらに向けた達也の姿に、3人はしんのすけ以外の選手への警戒を怠っていたことへの後悔と共に、前の試合でも見せた^{グラム・デモリッション}「術式解体」^をを仕掛けられたことに思い至った。すぐさま選手^の1人が達也への攻撃態勢に移るが、達也が即座にサイオンの合成波をお見舞いして返り討ちにする。

それに驚く隙を突いて2人目を倒し、3人目が達也に攻撃を仕掛けようとしては“術式解体”で未遂に終わるのを何回か繰り返している内に、しんのすけが全てのコードを入力し終えて運営委員に送信したことで試合が終了した。

「どういたしまして、達也くん」

「……それは俺の台詞だ、しんのすけ」

一時は棄権も視野に入っていた第一高校が、見事全勝で決勝トーナメントに進出した。

*

*

*

第一高校は全勝こそしたものの、同じく全勝の第三高校の方が試合時間が短かったため2位通過となった。3位は第八高校、4位は第九高校であるため、準決勝は本来ならば一高vs八高と三高vs九高となるのだが、一高と八高は予選でも戦ったカードであるため特例措置として八高と九高が入れ替わる形となった。何かと異例続きの今大会だが、これに関しては過去にも前例があるため珍しいことではない。

深雪ら第一高校1年グループとひろしら春日部グループ、そしてエリカの兄である修次を加えた面々は、おそらく決勝で戦うことになる三高について少しでも情報を得るために、少々早い昼食を終えて“岩場ステージ”の会場に来ていた。一高だって九高に勝たなければ決勝には進めないはずなのだが、この中の誰もが彼らの決勝進出を信じて疑っていない。

そんな彼らが注目していたのは、高低差が少なく全体的に視界が広い“岩場ステージ”を悠然と進む、1人の選手だった。

その選手・三高の一条将輝は、その姿をまったく隠すことなく“進軍”していた。当然八高の選手がそれを黙って見ているはずもなく、三高の陣地へと進んでいたオフェンスの選手までも加わって、彼に魔法の集中砲火を浴びせている。

しかしそれでも、将輝の足は止まらなかった。移動魔法によって将

輝へと迫る岩の破片はそれ以上に強力な移動魔法で撃ち落とされ、彼に直接仕掛けられた加重魔法や振動魔法は彼の周囲1メートルに張り巡らされた領域干渉によって無効化される。

「『干渉装甲』か……。移動型領域干渉は、十文字家のお家芸だったはずだが」

そう呟いたのは、この中では魔法の知識が最も豊富な修次だった。自然と解説役を担うことになった彼の言葉に、他の面々もそちらへと視線を向ける。

「あれだけ継続的に魔法を使いながら、息切れしている様子が無い。単に演算領域の容量が大きいただけでなく、よほど『息継ぎ』が上手いんだろう。もはやセンスとしか言い様が無いな」

「息継ぎが上手い、ってどういう意味ですか？」

「今使っている魔法から次の魔法へと移行するとき、どれだけ素早く、どれだけ無駄を無くせるかというのも実戦魔法師にとって大事な要素の1つなんだ。そして彼はそれがとても上手い。新人のレベルを超えているよ」

修次がここまで手放しで褒めるといふことは、つまりそれだけ決勝での戦いが厳しいものになることを意味している。話を聞いていた面々は一様に表情を固くし、再びフィールドの将輝を観察する作業に戻る。

と、ちょうどそのとき、途絶えることのない防御に痺れを切らした八高のオフエンス選手が、攻撃を止めて三高陣地へと走り出した。

だが、それは迂闊だった。がら空きになった背中を将輝が見逃すはずもなく、至近距離で生じた爆風によって彼は前のめりに吹き飛ばされた。

「今のは『偏倚解放』か？ 単純に圧縮解放を使えば良いのに、結構派手好きだな」

「えっと、すみません。その『偏倚解放』というのは、どんな魔法なんですか？」

レオの問い掛けに、修次は少し間を置いて脳内で説明文を作り上げてから答える。

「手間の割に効果の少ない、マイナーな魔法だよ。円筒の一方から空気を詰め込んで蓋をして、もう一方を目標に向けて蓋を外す、というイメージかな？ 普通に圧縮空気を破裂させるよりも威力が出せるのと、爆発に指向性を持たせられるメリットはあるけど、威力を高めるだけなら圧縮空気の量を増やせば良いし、指向性を持たせただけなら直接ぶつければ良いんだからね」

と、修次が自分で説明しながら納得する素振りを見せた。

「ああ、そういうことか。殺傷性ランクを下げるために、敢えてどっちつかずの魔法を使ってるのか。実力がありすぎるというのも考え物だな」

修次がそんな感想を漏らしている間にも、八高のディフェンス2人が将輝へと襲い掛かった。岩が砕かれてその破片が彼を襲い、彼の足元では放出系魔法による鉱物の電子強制放出の影響で火花が散っている。どちらも規模や情報改変難度の点で“上級”と言って差し支えない魔法だ。一高との試合ではあっさり負けてしまった感のある八高だが、もし真正面からやり合えば一高はもつと苦労しただろう。

だが将輝は、その魔法を本当に真正面から無効化した。空気塊の槌が2人に襲い掛かり、破裂と同時に2人の戦闘力と意識が消失した。

八高選手全員が戦闘不能になったことで、試合が終了した。三高のモノリスの前に立っていた真紅郎ともう1人の選手は、この試合結局1歩も動くことがなかった。

「やべえな、あの選手。圧倒的じゃねえか……」

「あんなのと戦わなきゃいけないなんて、本当に大丈夫なのかしら……」

ひろしとみさえの眩きは、第三高校に対する歓声と拍手に紛れて消えていった。

一方、同じ観客席の別の場所では、“一高モノリスチーム”であるしんのすけ・達也・幹比古の3人が先程の試合を観戦していた。

そして将輝の圧勝劇もとい独壇場を観て、幹比古は表情を引き攣ら

せて大きな溜息を吐いた。

「予想以上だな、三高の『プリンス』は……」

「ああ、そうだな。……それにしても、今の試合は俺達に対する『挑発
『だな』
「えっ?。」

達也の言葉に、幹比古は疑問の声をあげて彼を見遣る。

「一条家の戦闘スタイルは、中距離からの先制飽和攻撃だ。現に予選でも、遠方からの先制攻撃でディフェンスを無力化してる。——おそらくさっきの俺達の試合を観て、自分達にはあんな小細工は通用しないと主張しているんだろう」

「……それは、さすがに穿ちすぎじゃないかい?」

「もちろん断言はできないが、わざとらしく十文字会頭を想起させる戦法を採ってることから可能性は高い」

——それにおそらくだが、奴らはあのことに気づいている……。

達也が言葉にはせずに1つの仮説を頭に思い浮かべているその横で、幹比古が苦々しい表情で口を開く。

「あの防御力を考えると、遠距離からの攻撃は効果が薄い。そうなる
と危険を承知で真つ向勝負を挑まざるを得ないか……。そうになると、
他の選手の手の内が分からないのは痛いな……」

「おっ、どうしたのミキくん? どこか痛いのか?」

「いや、そういう意味じゃなくてね? それに僕の名前は幹比古だから」

しんのすけのボケに軽くツツコむ幹比古に、達也が小さく溜息を吐いて話を元に戻す。

「もう1人の方は分からないが、吉祥寺真紅郎についてはだいたい予想できる。おそらくだが、作用点に直接加重を掛けられる『
インビジブル・ブリット
不可視の弾丸』だろう」

「作用点に直接? 対象物の個体情報を改変するのではなく?」

「奴が発見した『カーディナル基本コード』である加重システムのプラス・コードを用いて、加重という『作用力そのもの』を発生させているんだ」

魔法式の研究分野には、『基本コード仮説』と呼ばれる理論があ

る。

加速・加重、移動・振動、収束・発散、吸収・放出。これら4系統8種にそれぞれ対応したプラスとマイナス、計16種類となる基本の魔法式が存在しており、組み合わせることですべての系統魔法を構築することができるという理論であり、その基本となる魔法式が“基本コード”と呼ばれている。

結論から言うと、基本コードを組み合わせただけでは完成しない魔法が存在することから仮説そのものは間違っているが、基本コードと呼ばれるものは存在する。

基本コードは作用力を定義するものなので、作用力そのものを直接発生させることができる。しかも、一般的な魔法に不可欠な事象改変結果を定義する必要が無い。よって情報を書き換える必要が無いために魔法式はずっと小さなもので済むし、情報改変を妨げる“情報強化”では防御することができない。

「欠点があるとすれば、“不可視の弾丸”は作用点を認識しなければいけないというところか。エイドスではなく作用点に直接作用させることにより生まれた欠点だな。“不可視の弾丸”による攻撃は遮蔽物や領域干渉でも防御可能だが、情報強化では防げないから注意しろよ」

「わ、分かった……。それにしても、吉祥寺真紅郎という名前に聞き覚えがあると思ったら、まさかあの“カーディナル・ジョージ”だったとはな……」

「ねえ達也くん、前からずっと気になってたんだけど……」

いつになく真剣な表情でそう話を切り出したしんのすけに、それを横で見ている幹比古もそれに釣られて自然と表情を強張らせた。

「さっきミキくんが言った、その……“甘美なる情事”だったけ？」

「“カーディナル・ジョージ”な」

「そうそう。そういう渾名あだなみたいなものって、誰が考えてるの？」

「……何を気にしてるのかと思えば」

しんのすけの疑問に達也は呆れ、幹比古は苦笑いを浮かべた。

「“カーディナル・ジョージ”については、当時13歳の吉祥寺真紅郎

が基本コードを発見し、世界中の魔法研究者にその名が轟いたとき、日本文化に詳しいアメリカの学者が『キチジョウウジはジョージと略すんだ』と語ったのがきっかけらしい。あくまで噂だがな」

「そういう感じで、何か偉業を成し遂げた魔法師に対して、その偉業を称える形で異名が付けられることがあるんだよ。それ以外にも、例えば重大事件を起こした正体不明の魔法師に対して便宜上付けられる場合もあるね」

「ほーほー。てっきり自分で名乗ってるのかと思ってたゾ」

「いやあ、さすがにそんな勇氣は無いんじゃないかな……?」

特に「グリムゾン・プリンス」なんて、もしも自分から名乗ったのであれば割と恥ずかしい部類ではないだろうか、と達也と幹比古は秘かにそう思った。

と、達也が携帯端末で時間を確認する。そろそろ控室に向かった方が良い頃合いだ。

「とにかく、まずは決勝戦に進まなくちゃな。——幹比古、頼んだぞ」「ああ、任せてくれ」

幹比古はそう言って、彼にしては珍しい不敵な笑みを浮かべた。

*

*

*

一高vs九校の試合は、特筆するようなことは何も無かった。なぜなら、1回も戦闘が起ころなかったからである。

試合が行われた「溪谷ステージ」は、全体が「く」の字形に湾曲した人工の谷間であり、底には水深50センチ前後の湖がある。

この環境で幹比古が使用したのは、飽和水蒸気量に関係無く空気中の水蒸気を凝結させる古式魔法「結界」である。特定の空間に濃い霧を発生させるこの魔法に、九高の選手は四苦八苦していた。

風を起こして霧を吹き飛ばそうとしても、「閉鎖」の概念が含まれる魔法の影響でステージ内の空気が循環するだけである。また気温を上げて飽和点を引き上げようとしても、湖からの蒸発を促して余計に霧が濃くなるだけだ。

元々現代魔法は、霧のように実体の掴みにくいものへの対処が苦手という欠点がある。本来ならば幹比古の設定した「結界」ごと認識する必要があるのだが、古式魔法に対してそれほど知識があるわけでもない九高の生徒がそれを思いつけるはずもなかった。

よって、意図的に周りの霧が薄くなっている達也は、誰にも邪魔されることなく九高のモノリスに辿り着き、専用の魔法でモノリスの鍵を開けた。蓋が落ちる際に大きな音がして九高選手がそれを頼りにやって来るが、すでに達也はそこから離脱していた。

今回コードを入力するのは、幹比古である。彼は精霊と感覚を同調させて、離れた場所から九高のモノリスに刻まれたコードを読み取っていた。

ほどなくして、審判席にコードが送信された。

こうして、決勝のカードが出揃った。

一高 vs 三高は、午後3時半から行われる。

第35話 「嵐」の前の静けさ、だゾ」

九校戦で賑わっている富士演習場の駐車場に、2人乗りの軽自動車
が1台入ってきた。カー・シェアリングの浸透によって自家用車を持
つ人がすっかり減ったとはいえ、このような交通の便の悪い場所なら
ば自分で運転して向かおうと考えるのも分からなくはない。

しかし20代前半の若い女性が1人で運転してきた、というのは珍
しいのではないだろうか。

「まったく、みんな揃って人使いが荒いんだから……。私はカウンセ
ラーであって、使い走りじゃないっての……」

運転席から降り立ったその女性・小野遥は、小さくそう独りごちな
がら後ろに回り込み、座席後方の荷物置場から大きめのスーツケース
を取り出した。これから小旅行にでも出掛けるかのような出で立ち
だが、彼女の呟きの通り、この荷物を目的の人物に届けるためにここ
までやって来たのである。

彼女がなぜここにいるのか。それは達也が自分の師匠である九重
八雲に「或る物」を注文し、八雲が彼女にそれを運ぶよう頼んだから
だ。

ではなぜ八雲は、彼女にそれを頼んだのか。そもそも、2人はどう
いう関係なのか。

小野遥は、九重八雲の門下生である。入門の時期は達也よりも遅
かったため彼の妹弟子ということになるが、寺で直接顔を合わせたこ
とは無かったので達也がそれを知ったのはつい最近のことだった。

そして彼女は、先天性特異能力者でもあった。BS (Born S
pecialized) 魔法師とも呼ばれるそれは、魔法としての技
術化が困難な超能力を持って生まれた魔法師を指す。代償として通
常の魔法を使えなくなるが、その能力の高さは目を見張るものがあ
り、職務と能力が合致すれば相当な脅威となる。

彼女の先天性スキルである「隠形」は、見えているのに見えない状
態を作り出す認識障害の精神干渉魔法と同等のレベルにあり、その気
になれば税関をフリーパスで通り抜けることもできる。そんな能力

と若気の至りも相まって色々「悪戯」をやっていたときに警察省公安庁の捜査官に見つかり、それを見逃す代わりとして秘密捜査官の立場で諜報活動を行うようになった。

ただしカウンセラーの資格は偽装ではなく、第一高校にも元々その仕事で入っていた。公安がその立場を利用して遙にブランシユに関する情報収集を命じていたのだが、解決後もカウンセラーの仕事を辞めることなく、ブランシユに利用されていた生徒達のアフターケアに尽力している。

さて、そんな彼女がスーツケースを転がして駐車場を後にすると、演習場までの道のりの途中で達也の姿が目に入った。遙が気づいたのと同時に達也もこちらへと視線を向け、軽く頭を下げるのと同時に歩み寄ってくる。

「お疲れ様です、小野先生」

「ほんと疲れたわよ、司波くん。年上の女性を使い走りにするなんて」「運搬を頼んだのは師匠じゃないですか、文句はそちらにお願いします。それとも、報酬をお支払いした方が宜しいでしょうか？」

「えっ？ いやいや、そんなのいいわよ。さすがに生徒からお金をせびろうだなんて——」

「それでしたら、第一高校のカウンセラーとしてではなく、税務申告が必要無い臨時収入でも如何ですか？」

「——！」
達也の言葉の意味を正確に理解した遙の目が、スツと鋭く細められた。

「……何をさせる気？」

「香港系国際犯罪シンジケート NO HEAD DRAGON “無頭竜”、そのアジトの所在を調べてください」

「——なんであなたがそれを知ってるの!？」

思わず、といった感じで遙が叫んだ。その際に達也の服を掴んで自分の顔に引き寄せるといふ、事情を知らない者が見れば色々勘違いを起こしそうな格好になるが、生憎と本人はそれに気づいておらず、達也がそれを指摘したことでようやく顔を紅くして彼から離れた。

「あなたが手出しする必要は無いでしょう。何を企んでいるの?」

「今のところは何も。ただ、いざ反撃するとなったときに敵の所在を掴めないのは不安ですので、単なる『保険』みたいなものですよ」

「達也くん、その報酬が払えるの? 調べさせといて『払えませんでした』じゃ困るんだけど」

「何なら、前金をお支払いしましょうか?」

「……分かったわ、とりあえず1日ちょうだい」

遙の表情に疑念の色は残っているものの、それ以上は何も言わずその場を後にした。

達也も彼女から渡されたスーツケースを手に踵を返し、演習場の敷地内へと足を進める。

その途中、達也がふいに足を止めた。

通路脇に生えた木の陰から、臙脂色の服に身を包んだ黒髪の美少女・酔乙女あいが姿を表した。

「今の女性、使えるんですの?」

「能力的には問題無いと判断しています。擦れたプロより駆け出しのセミプロの方が守秘義務を忠実に守ってくれるので、『内職』を頼むときも安心です」

「成程。そうやって私に対しても本性を隠さなくなったのは、私を信用するようになったからだと思って良いのかしら?」

「信用はしていませんが、しんのすけへの対応を間違えなければ一定の配慮はするだろうという思惑はあります」

「……あなた、随分と言うわね」

言葉に反して特に咎めることは言わない辺り、達也から見ると酔乙女あいはそれほど間違っていないようだ。

「ところで先程の依頼だけど、良ければ私の方で報酬を立て替えてあげましょうか? その代わり、手に入れた情報を私にも提供してもらうということで」

「それは別に構いませんが、目的は何ですか?」

「あら、あなたがそれを訊くのかしら?」

「……分かりました。結果が出たらお知らせしますので、連絡先を教

えていただけですか？」

達也の頼みにあいは快く頷き、自身の携帯端末を彼のそれにかざしてアドレスを送信した。随分と不用心に感じるかもしれないが、現代では普段使いのアドレスとは別に回数上限を超えると自動的に破棄される「使い捨てアドレス」を使う者も多く、彼女が渡したのはそちらの方と思われる。

目的を果たしたためさっさとその場を後にしようとするあいだったが、ふいに「そうそう」と独り言のように口にして達也へと振り返った。

「仮に彼女の成果が芳しくなかったとしても、あまり責めないであげてちょうだい。もし上手くないかなかったときは、きつとそういう「運勢」だったと思うことですわ」

「……運勢、ですか。富裕層の間ではオカルトを信じる者が意外と多いと聞きますが、あなたもその類なのですか？」

「いいえ、私のは「経験」に基づくものですわ。——それじゃ、試合を楽しみにしていますわね」

あいはニツコリと笑って、今度こそその場から立ち去っていった。

色々と疑問を隠せない達也であったが、どうせ返ってこない答えに執着する暇も無いため、すぐさまその場を後にして一高の控室へと向かっていった。

*

*

*

「決勝前に間に合って良かった」

「お兄様、そのスツケースには何が入っているのですか？」

試合開始まで、後1時間ほど。

選手本人よりも周りの生徒達が浮足立っていく第一高校の天幕内にて、達也が持ってきたそのスツケースは大きな注目の的となっていた。代表して彼に尋ねた深雪だけでなく、チームメイトである幹比古やしんのすけ、真由美や桐原など上級生達もその中身に興味津々だ。

そうして取り出されたのは、ハリウッド映画にでも登場しそうなデザインをした、その身をすっぽりと覆い隠すローブとマントだった。「何を用意しているのかと思ったら、まさか試合用の衣装だったとはな」

「単なる衣装ではありません。これには着用した者の魔法が掛かりやすくなる補助効果を持つ魔法陣が織り込まれています。もちろん後でデバイスチエックは受けますが、ルール上禁止になっていないのでまず持ち込めるでしょう」

「ほーほー、これはなかなか良いですねあ」

「でも、どうしてそんな物を？」

しんのすけがいそいそと着込むそれらを眺めながら、真由美が達也に問い掛けた。ちなみに彼女のすぐ傍では、刻印魔法の権威として知られる家系としての性^{さが}か、五十里が食い入るようにそれらを見つめている。

「1つは、幹比古の精霊魔法を補助する役割があります。——どうだ、幹比古？」

「……確かに、普段よりも精霊が多く集まっている」

「良かった。わざわざ決勝のために霊峰富士の息吹を浴びてくれたんだ、こっちでもできるだけのお膳立てはしなくちゃな」

「……何だ、気づいていたのか」

特に隠すようなことでもないが何となく気恥ずかしさを覚えたのか、幹比古は頬を紅く染めて苦笑いを浮かべた。

「それでもう1つは、吉祥寺真紅郎の^{インビジブル・ブリット}不可視の弾丸”対策です。——しんのすけ、そのマントを大きく広げて硬化魔法を掛けてみてくれ」

「このマントは？ ほーい」

しんのすけが言われたようにやってみると、普通ならば空気抵抗や風によってバサバサとはためくマントが、鉄板のように皺1つ無くピンと広がった状態で固まり即席の防壁を作り出した。

その光景に、その場にいた達也以外の全員から感嘆の声が漏れる。「“不可視の弾丸”の弱点は、直接目で見た部分にしか作用されない

ことです。こうしてマントの陰に隠れてしまえば、その裏側にいる選手に魔法は届きません」

「そのマントもローブも、昨日の夜に考えて用意したものでしょう？まさかその段階で、『カーディナル・ジョージ』の対策まで考えていたなんて……」

「つまりその時点で、自分達が決勝まで進む自信があつたってことか？」

からかい交じりの口調でそう問い掛ける桐原に、達也はフツと笑みを浮かべるだけで言及しなかった。

と、真由美がふいに心配そうな表情を浮かべて達也へと口を開く。

「……昨日の夜にあんなことを言った私が言えたことじゃないけど、けっして無理はしないでね。決勝に進んだ時点で、新人戦の優勝は決まったんだから」

「もちろんです。いざというときには——」

「ダメだゾ！ 達也くん我真由美ちゃん！」

突如大声を出して会話に割り込んできたしんのすけに、真由美はあからさまに、達也は内心こっそりと驚いて彼へと振り向いた。

しんのすけは両手を力強く握り締め、いつになく真剣な表情で2人を見据えていた。普段は気の抜けた顔をすることの多い彼のそんな姿は、短く切り揃えられた髪と太い眉も相まって熱血スポーツマンを彷彿とさせる。

「森崎くん達が怪我で出られないからこそ、オラと達也くんとミキくんが2人の分まで頑張つて優勝を目指すんだゾ！ やる前から諦めちやダメだゾ！」

「だがしんのすけ、相手はかなりの実力者だ。一条将輝の才能と実力は既に高校生の枠を超えているし、さらには独自の魔法を使う参謀として吉祥寺真紅郎が奴の脇を固めている。第三高校に勝つのは至難の業だし、下手したら大怪我を負う可能性だつてある」

「大怪我……は正直怖いけど、『男として危険だと分かっても引けないときがある』って父ちゃんも言つてたことがあるゾ！ オラ、この試合に勝つて優勝したい！ 達也くんは、優勝したくないの!?!」

物理的に、そして何より精神的にまっすぐなしんのすけの目が、達也をじつと捉えて離さない。

そんな彼に対して、達也は平常と同じ冷静な目を向けている。達也は普段の言動から分かる通り冷静沈着に物事を計算して判断する性格であり、熱血漢がよく口にする根性論をいうものをまったく信用していない。勝負の結果を分けるのは綿密な準備と緻密な作戦、そして確かな実力であり、精神だけではどうにもならない場面はいくらでもあることをよく知っている。

しかし、それでも、

「――達也、どうするんだい？」

「どうするも何も……、やれることをやる、ただそれだけだ」

達也の言葉の裏に隠された確かな熱を感じ取ったからか、それを聞いた真由美と摩利の口が自然と弧を描いていた。

と、真由美の携帯端末が震え、彼女は少々の驚きと共にそれを手に取った。

「十文字くんから連絡。決勝戦のフィールドが決まったそうよ」

「どこですか？」

達也の端的で明瞭な問い掛けに、真由美は表情を固くしてこう答えた。

「――『草原ステージ』よ」

*

*

*

「ひとまずは、こちらの思惑通りということだな」
「ついてるね、将輝」

その知らせを聞いたとき、三高の天幕はすでに勝利が決まったような騒ぎとなっていた。砲撃戦を得意（しかも高校生のレベルではなく）とするチームが何も阻む物が無いステージで戦うのだから、その反応も当然といえば当然だろう。

「後は相手がこちらの誘いに乗ってくれるかどうか、だが……」

「司波達也に関しては、ほぼ間違いなくこちらの作戦に乗ってくると

思うよ。遮蔽物が無い以上、彼が得意とする攪乱は通用しない。そして“術式解体”という確実な対抗手段がある以上、わざわざそれを無視して奇策に走るような真似はできない——はずだ」

最後の最後で不安を覗かせる台詞を吐く真紅郎を、しかし将輝が責めることは無かった。

「問題は野原しんのすけが、どう出てくるかだな……」

「自己加速術式を用いた突破力は、正直言ってかなりの脅威だ。おそらく司波達也が将輝を相手にしている隙に、彼がこちらに攻め込む作戦で来ると思う」

「……止められるか、ジョージ？」

「正直、分からない。彼の使う武器は遮蔽物の無い『草原ステージ』の相性が抜群に良いから、正面からまともにやり合ったら苦戦は免れないだろうね。——でも僕は今までの彼の戦いを見て、1つの仮説を立てている」

「仮説？」

オウム返しに尋ねる将輝に、真紅郎は力強く頷いて口を開く。

「彼はこれまでの試合、直接対峙した相手のヘルメットを奪ってリタイアに追い込むことで戦闘に勝利している。もしかしたら彼は、相手を気絶させるほどの強力な攻撃に対して忌避感を持っているんじゃないかな」

「付け入る隙があるとすればそこか。……しかし、それは——」

「将輝の言いたいことは分かる。でもこれは、学校の威信を賭けた勝負だ。たとえ新人戦優勝を一高に取られてしまったとしても、モノリス・コードの優勝まで取られるわけにはいかない」

「……ああ、分かっているよ」

真紅郎の言葉に将輝は覚悟を決めるかのように、小さく数回深呼吸をした。

そうしてチームメイトの応援を受けながら、もう1人の代表選手と共に2人は三高の天幕を後にした。

*

*

*

決勝の舞台である「草原ステージ」の観客席は、裏で行われる試合が存在しないこともあって多くの観客が押し寄せて超満員となっていた。座席は1つ残らず埋め尽くされていて、腰を下ろせない者達も通路の柵や壁に寄り掛かるなどして来る試合に備えている。

徐々に高まっていくボルテージを肌で感じながら、ひろし達のグループは不安を隠せない表情でフィールドを映すモニターを見上げていた。

「遮蔽物の無い『草原ステージ』か……。厳しい戦いになったわね、達也くん」

エリカの呟きはとても小さく、隣に座る者でもギリギリ聞き取れるかといった具合だった。しかしたとえ同意の声が無くとも、その呟きがこの場にいる全員の意見を代弁していることは明白だ。

しかし彼女の呟きに、彼女の隣に座る修次なかつぐが異を唱える。

「いや、むしろ助かったとも取れるぞ」

「助かった？ どういうことですか、次兄上？」つくあにうえ

当然ながら訳を問うエリカに、修次が丁寧な説明を始める。

「一条家の得意な『爆裂』は、液体を気体に置き換えることによる膨張力を爆発力に利用する魔法だ。そんな一条家にとつて『渓谷』や『市街地』のような水の豊富なフィールドは、いわば大量の爆薬がステージ全域にばら撒かれているようなものだ。その反面、『草原』にはそのような液体は無い。さすがの一条将輝も、地下水を汲み上げて爆薬に利用するなんて芸当はできないだろうしな」

「とはいえ、砲撃戦の得意な魔法師を遮蔽物の無いステージで迎え撃たなければいけないことに代わりはありません。それに関しては、相応な不利を強いられると思うのですが」

「しかしそれは、こちらと同じことだ。特に野原くんの使う武器は、遮蔽物の無い環境でこそ真価を發揮する。もちろん予選でやったようなことが三高に通用するはずも無いが、それを抜きにしてもあの突破力は相手にしてみたら恐ろしいと思うよ」

自身の考えを滔々と語る修次に、エリカは意外そうに目を丸くして

いた。

「……次兄上、何だか楽しそうですね」

「そう見えるかい？ やはり僕も、千葉の血には逆らえないということかな」

「だから、お受けしたのですか？ 『野原しんのすけの戦い振りを直接見ろ』という父の命を」

「……………」

モニターに注目していた修次の視線が、エリカへと向いた。

不審を露わにする彼女の鋭い目と、真正面からぶつかり合う。

とはいえ修次の目つきは彼女を迎え撃つ鋭いものではなく、彼女の成長を慈しむような優しいそれであったが。

「——魔法師のコミュニケーションの間では今、或る『噂』で持ち切りだ。富士演習場は陸の孤島というほどではないにしろ一般社会からは隔離された場所だから、エリカ達がまだ知らなくても無理はないけどね」

「……噂、ですか？」

自身の質問には答えず話題をすり替えたことには気づいていたが、エリカはそれを追及せず敢えてその話に乗った。

そんなエリカに対し、修次は特大の爆弾を落とすとした。

「百家の1つで剣術を指南する九十九里浜家の道場が、代々木コージローによって潰された」

「——はっ？」

それはエリカにとって、あまりにも突拍子の無いことだった。修次の口から紡がれた文章の意味を一瞬理解できず、字面上は理解しても頭がそれを受け入れず、そして数秒掛けて受け入れた後もまるで納得できなかつた。

「潰された……というのは、つまり『道場破り』に遭ったということですか？」

「いや、『潰された』という表現は正確ではないな。代々木コージ

ローが道場の看板を奪った事実は無いし、彼らに対して道場を畳むよう訴えたわけでもないし、ましてや自分でその功績を喧伝しているわけでもない」

「しかし、それでは——」

「だが、代々木コージローが九十九里浜家の道場に乗り込んで、その場にいた当主を含めた門下生全員をたった1人で叩き伏せたのはほぼ確実と見られている。双方ともその事実をひた隠しにしようとしているけど、人の口に戸は立てられないからね」

そこまで聞いて、エリカは修次がなぜ「潰された」という表現をしたのか理解した。

魔法を併用した剣技を指南する百家の当主及び門下生が、魔法も使えない1人の少年によつて（しかも真正面からの勝負で）全滅の憂き目に遭う。これは魔法師のコミュニティにおいて、致命的なまでの恥としてついて回ることになる。さすがにこのご時世に数字を剥奪されるようなことは無いだろうが、九十九里浜家の権威は地に落ちたと言つても過言ではない。

しかしそれでも尚、エリカは納得ができなかった。

「代々木コージローは、なぜそのような真似を？ 彼は今まで一度たりとも、道場破りのようなことはしたことが無かつたはずですが」
「それについては、まだ分かつていない。しかしあそこの門下生は、以前から素行の悪さが問題となっていた。もしかしたら、その辺りが彼の逆鱗に触れたのかもしれない」

エリカにとっては最も重要である疑問に対し、修次は憶測を言うに留めた。

その代わり、彼はこう続ける。

「魔法は誰もが使えるわけじゃない特別な力ではあるけれど、だからといって絶対的なものでもない。エリカにとっては、今更言われるまでもないことだとは思うけどね」

「はい、理解しているつもりです」

「とはいえ、魔法を使えない者が圧倒的に多いこの世界で生きていると、どうしてもそのことを忘れがちになってしまう。1世紀を掛けて

作り上げてきた魔法師の家系の集合体であるコミュニティは、堅牢であるが故に閉鎖的で、だからその風潮を助長してしまう傾向にあるのも事実だ」

エリカは口を挟むこと無く、修次の言葉に聞き入っている。

「しかし野原くんは、何の変哲も無い一般的な家系から突然変異的に生まれた魔法師だ。今でこそ魔法科高校の生徒ではあるが、春日部を取り巻いていた例の事象も手伝って、普通の人々と同じ生活をしていた時期の方が圧倒的に長い」

それを聞きながら、エリカは自身の周囲を視線だけで見渡した。

彼の両親であるひろしとみさえ、妹のひまわり、そして彼の幼馴染である風間・ネネ・マサオ・ボーの4人。彼らの中に、魔法師は1人もいない。しかしながら、強力な魔法師であるほど一般的な人々とは距離を置かれる傾向が根強い現代において、彼らはしんのすけを忌避するどころかこうして彼の応援に駆けつけた。

「つまり精神的には、彼はまだ魔法師のコミュニティの一員ではないと言えるだろう。そんな彼が、仲間の助力もあつたとはいえ、もし公衆の面前で十師族の次期当主と彼の右腕である天才研究者を打ち負かしたとしたら、どうなると思う?」

「——！・まさか——」

『お待たせ致しました。選手入場です』

エリカが疑問を投げ掛けようとしたその瞬間、ナレーションの一声に周りの観客が一斉に沸いた。たとえ隣同士であつても会話するのが困難なほどの大音量に、エリカは修次との会話を一旦中断してモニターへと注目する。

大勢の視線を一身に浴びてフィールドに足を踏み入れたしんのすけと幹比古は、大会規定の防護服とヘルメットの上からローブとマントを羽織っていた。しんのすけは胸を張って堂々と歩くが、幹比古は恥ずかしいのかフードを深く被り直して顔を隠そうとしている。そんな彼らの奇妙な姿に観客は戸惑いでざわめくが、嘲笑や冷笑といった反応はほとんど無く、いったいそれを何に使うのかという好奇心を示す者が大多数だった。

もしエリカが平常の精神状態でそれを見ていたら、特に幹比古の反応がおかしくて大笑いしていたことだろう。しかし今は直前の修次の言葉のせいでもれどころではなく、むしろこれから始まる試合に不安すら覚えていた。

そんな彼女に追い打ちを掛けるように、修次の言葉が彼女の耳に届く。

「この試合、もしかしたら僕らの想像以上に大きな波乱を呼ぶかもしれない。——それこそ『嵐』のように大きな波乱が、ね」

試合開始の合図がスタジアムに鳴り響いたのは、その直後だった。

第36話 「モノリス・コード決勝戦だゾ」

試合開始の合図と共に、両陣営の間で挨拶代わりの砲撃が交わされた。魔法による遠距離攻撃の応酬という如何にも「魔法師同士の勝負」と呼べる光景に、観客は興奮の歓声と共にそれを迎えた。

両陣地の距離は、およそ600メートル。実弾銃ならば狙撃銃の領域になる距離にて、三高からは将輝が、一高からは達也が、外見上は自動拳銃そのもののCADを互いに突きつけて撃ち合いながら、お互いに歩み寄っていた。

達也は予選と同じ（あまり披露する機会は無かったが）2丁拳銃スタイル、対して将輝は準決勝に使っていた汎用型を特化型に切り替えている。つまりそれは、準決勝のときに披露していた絶対防御をあえて捨てたということを意味している。

その結果、元々大きな差のあった攻撃力がさらに広がっていた。将輝の攻撃は1発1発が決定的な打撃力を秘めているのに対し、右手のCADで将輝の攻撃を撃ち落とし左手のCADで攻撃を仕掛ける達也の射撃は、牽制以上のものにはなっていないかった。単に相手に届いているだけで、魔法師が無意識に展開している情報強化の防壁で防がれてしまう程度の振動魔法であり、手数も圧倒的に劣っている。

しかし、達也のことを「二科生の新入生」という限られた情報で見か見ていなかった一高の上級生などは、通常の意味で総合的な魔法力が劣っている彼が、相手の攻撃に晒されながら肉眼で見えることも難しい距離を的確に狙えることに驚いていた。その胆力は、間違いなく新人離れしていると言えよう。

しかしながら、彼をよく知る一高生徒達の顔は優れない。達也と将輝が1歩1歩近づくごとに、達也は防御に力を回すことを強いられ、その分攻撃の手数が減っていることに気がついていたからである。

ジリジリと、しかし確実に達也が追い込まれていく状況に、彼らを応援している一高スタッフや関係者達はやきもきしながらその様子を見守っていた。

だからこそ、疑問だった。

「……しんちゃんは、何をやってるの?」

そんな攻防を繰り返す達也のすぐ隣にピッタリと寄り添って歩く、しんのすけのことが。

強力な魔法を的確に放ち続ける将輝と、それをグラム・デモリッション「術式解体」で撃ち落とし続ける達也。観客の視線はほぼこの2人に釘付けとなっていたが、とりわけ達也の方にその注目が集まっていた。

「術式解体」は規格外のサイオン保有量を要求されるため、専門的な研究者ですらそれを目にする機会は少ない。なので観客は具体的にどうやって魔法を撃ち落とししているのか知らないのがほとんどだが、サイオンの可視化処理が施されたデイスプレイ越しに見る光景は、激しく輝くサイオンの砲弾が空気圧縮の魔法式を撃ち抜き消し飛ばし、それによってサイオンの嵐が吹き荒れるという、何とも幻想的かつスペクタクルで観客の興奮を誘うものだった。

「おおつ、なかなかの大迫力ですなあ」

特に達也の傍でそれを眺めていたしんのすけの場合、直接その目でサイオンの動きを把握できる。なので観客の誰よりもその光景を間近で見ることができ、現在試合中、しかもその当事者である自覚があるのか疑うほどにそれに夢中になっていた。

そんな彼に対し、実際に将輝の魔法を無効化し続けている達也から声が飛ぶ。

「しんのすけ、景色に見惚れてる場合じゃないだろ」

「んもう、分かっているゾ達也くん。大丈夫、そろそろ行けるゾ」

「……さすがだな、もう少し時間が掛かると思ってたが」

「まあまあ、オラに任せなさい。——「変身」」

しんのすけが最後に口にしたワードによって、ベルト型のCADがサイオンを一瞬だけ放ち、そしてすぐに消え去った。それは彼のすぐ傍で荒れ狂うサイオンの嵐からしたら微々たるもので、おそらく気づいた者はほほえないだろう。

ちなみにそのときの彼は、今までのように特撮ヒーローの変身ポ

ズなど取らず普通の姿勢のままだった。そもそも彼の使うCADは音声認識なので、魔法を発動させるのにポーズを取る必要は一切無い。いわば今までののは単なる本人の気分によるものであり、そして今回は達也によってポーズを取らないようきつく言い渡されていた。

「んじや、行ってらっしゃい」

「それを言うなら『行ってきます』だ、しんのすけ」

「そうともゆゝ、熱海の湯」

そんな気の抜けたギャグを残して、しんのすけは予備動作無しで地面を蹴った。

その瞬間、彼の姿がその場から掻き消えた。

「来たよ！ 自己加速術式だ！」

三高の陣地内で2人が戦う光景を見つめていた真紅郎が、しんのすけが猛スピードでこちらに駆け出したのに気づき、チームメイトに聞かせるようにそう叫んだ。

しかし、駆け出した直後、とはいかなかった。達也と将輝がぶつかり合う隙にしんのすけがこちらに突っ込んでくると予想を立て、だからそれを迎え撃つためにこうして2人がディフェンダーとして陣地に残って警戒していたのだが、それでも魔法の兆候や予備動作の無さに不意を突かれた形となってしまうていた。

さすがに一筋縄ではいかないか、と真紅郎が歯噛みしたそのとき、ドオンッ！

しんのすけの真横付近で、まるで爆発のような勢いで空気が膨張した。サイオンが見えない者にとっては何が起こったのかすら分からない状況だろうが、真紅郎はそれが将輝の仕業だと即座に理解した。おそらく達也の隣にいたしんのすけが駆けてくるのを見て、そちらに狙いをシフトしたのだろう。

しかしその空気の爆発は、しんのすけに当たらなかつた。魔法が発動する直前、まるでそれを予想していたかのように、大きく横に飛んでその場から離れたためである。それを見ていた真紅郎とチームメ

イトが、揃って舌打ちをした。

その直後に同じことが立て続けに2回起き、そして通算4回目の爆発。

その爆発は、しんのすけのすぐ背後で起こった。死角ならば反応できないだろう、と将輝が考えたのかもしれない。

「――何っ！」

しかしそれも、しんのすけにダメージを与えることは無かった。いや、それどころか逆に利用された。

爆発が起こる直前、しんのすけは身につけていたマントを外して何やら魔法を掛けた。すると、普通ならば空気抵抗や風によってバサバサとはためくマントが鉄板のように皺1つ無くピンと広がった状態で固まり、彼のすぐ背後に即席の防壁を作り出した。

爆発が起こったのはその直後であり、マントの壁はそれによって吹き飛ばされ、すぐ目の前にいたしんのすけを押し上げた。そして彼は敢えてそれに逆らわず地面から足を離し、空気が膨張するスピードそのままにマントの壁に押されながらその距離を稼いでいった。

ほぼ水平に押されていたとはいえ、スピードが緩やかになる頃には彼の体は数メートルほど上空にあった。しかしその絶好の攻撃の機会に将輝からの攻撃は無く、彼はそのまま地面に下り立ち、予選でも見せたように前方に3回転して衝撃を受け流しながら立ち上がった。

そして再び、三高陣地に向けて駆け出していく。

将輝と大きく距離を取り、彼のいるラインを通り越した。

「打合せ通り、僕が行くよ」

「オツケー。ここは俺に任せとけ」

チームメイトの頼もしい言葉に真紅郎は頷き、しんのすけを迎え撃つべく陣地を離れた。

一方しんのすけが進撃を開始した直後、達也も将輝に対して仕掛けていた。

今までは慎重な歩みだったその足を疾走へと切り替え、まるで自己

加速術式でも使ったかのようなスピードで将輝へとその距離を縮めていく。だが将輝は慌てることなく、圧縮空気弾の魔法を彼へと放ってきている。

ジグザグに走りながら魔法を避ける、なんてことはしない。予選の二高選手とは違い、拳銃型CADを実際に手で向けて照準を付けているわけではないからだ。達也は走りながら空気中に生じる事象改変の気配に神経を張り巡らせ、“術式解体”であるサイオンの砲弾をそこにぶつけて将輝の魔法が頭在化する前に潰すということを繰り返しながら、300メートルの距離を一気に駆け抜けようとする。

と、ここで将輝がしんのすけに対しても攻撃を仕掛けてきた。実際にそちらに目を向けなくても、将輝の反応でその成果が芳しくないことは分かった。しんのすけも自分と同じように空気中に生じる事象改変の気配でその兆候を感じ取っているのだろうが、あるとき隣で攻防を眺めているだけでよくそれが分かるようになったな、と達也は内心で秘かに驚嘆を覚えた。

しかし、しんのすけに攻撃の手を割いていることで、こちらへの攻撃が若干緩んだ。当然その隙を突いて、達也は一気にフィールドを駆け抜けて将輝との距離を大きく縮めた。それに気づいた将輝が初めて焦燥の表情を浮かべながら、しんのすけへの攻撃を諦めてこちらの対処に集中する。

しかしそれによって、残り50メートルを切った段階で達也はとうとう将輝の攻撃を捌ききれなくなった。撃ち落とし損ねた圧縮空気弾が達也を襲い、彼はそれを五感すべてで察知しながら本能レベルで染みついた体術で躲し、なおも将輝へと進もうとする。

数十メートルの距離が、達也にとって何よりも厚い壁となっていた。

30メートル強の距離を空けてしんのすけを迎え撃つ真紅郎が、得意魔法の“不可視の弾丸”インビジブル・ブリットを放とうとする。

しかしその直前、しんのすけがマントを翻し、そのまま自身の正面

で大きく広がったまま固まった。即席の防壁によって彼の姿が隠され、真紅郎は悔しそうに舌打ちをする。やはりあのマントは視認しなければ照準を付けられない自身の魔法対策か、と確信しながら。

しかし、いつまでも悔しがつてはいられない。横手から自身を目掛けて、しんのすけが使う武装デバイスの空飛ぶ刃が飛んでくるのを感じた（「見えた」ではない）からだ。真紅郎は一瞬で移動魔法を発動し、大きく後ろへとジャンプすることでそれを避けた。

ところが空飛ぶ刃は真紅郎が直前にいた箇所でピタリと静止すると、ミサイルのような勢いで前方へと、つまり真紅郎のいる場所へと突っ込んでいった。

「ぐっ——！」

刃が真紅郎の鳩尾辺りに激突し、彼は肺から空気を絞り出すような苦痛の声をあげて片膝をついた。いくら防護服を着ているとはいえ、急所に伝わる衝撃とそのダメージはかなりのものだ。

真紅郎が苦悶の表情で正面へと顔を向けると、マントに掛けた魔法を解いて姿を表すしんのすけと目が合った。

つまり真紅郎に刃をぶつけたとき、まだマントの魔法は解かれていなかった。

——僕が後ろに飛んで避けることを、読んでいたのか……。

普段から将輝のブレーンを自認し、実際に今回の九校戦でも作戦スタッフの役割もこなしていた自分が、まんまと相手の読みに嵌って攻撃を食らう。

ただ単に攻撃を受けた以上のショックが真紅郎に襲い掛かるが、それでも彼の思考が止まることは無かった。マントの壁から姿を表したしんのすけに向けて、今度こそ「不可視の弾丸」を放つために魔法の予備動作に入る。

そしてそれを見たしんのすけが、武装デバイスを振りかざしながらこちらへと駆けてくる。

それでもこちらの方が早い、と真紅郎が構わず魔法を発動する、まさにその直前、
がこんっ。

突然背後から聞こえてきたその音に、真紅郎は顔を引き攣らせてバツと後ろを振り返る。

三高のモノリスが開き、勝利条件である512文字のコードが晒されていった。

「なんで——」

真紅郎は思わず疑問を口にするが、モノリスが開くなど鍵となる専用の無系統魔法を10メートル以内の場所から放つ以外に有り得ない。そして達也が将輝と魔法を撃ち合い、しんのすけが今まさに自分と戦っていたのだから、その犯人は残る1人の一高選手以外に有り得ない。

現にモノリスから10メートルほど離れた場所に、その一高選手・幹比古がいた。そしてディフェンス役を請け負ったチームメイトが、今まさに彼に気づいたような反応で戦闘を仕掛けているのが見えた。

その瞬間、真紅郎はようやく気づいた。

将輝を引き付けている達也も、自分と対峙しているしんのすけも、全ては幹比古をモノリスに接近させるための囿でしかなかったのだ、と。

ド派手な魔法の撃ち合いや自己加速術式での移動を繰り返す2人の選手に目を奪われて、おそらくこの場にいるほとんどが一高のモノリス付近にいると思いついていたディフェンダーのことなど気にも留めていなかった。目の前の選手に集中していた将輝も自分も、いつの間にか彼の存在が頭から抜け落ちていた。

いや、しかしディフェンダーのチームメイトまでそちらに目を奪われていた、というのは少々おかしい。それに将輝や自分だって、目の前の戦闘に集中しすぎて第三の選手を見逃すなんて初歩的なミスをするだろうか。いや、実際してしまったのだから言い訳しようが無いのだが。

だが、もし認識阻害の魔法を掛けられていたのだとしたら。

それこそ懇親会で九島烈が見せたような魔法を、幹比古が使っていたのだとしたら——

ズドオンツ！

突然の爆発音に、真紅郎は我に返った。

そしてその音が聞こえた方へと顔を向ける——前に、自分が今まさに戦っている最中であることを今更ながらに思い出した。

普段なら有り得ない失態に苛立ちを覚えながら、真紅郎は正面へと向き直る。

先程まで対峙していたはずのしんのすけが、その場からいなくなっていた。

「モノリスが開かれたと——！」

三高のモノリスが開かれたという事実は、達也を追い詰めていた将輝にも大きな衝撃を伴って伝わった。なぜそんなことになったのか真紅郎ほど細かな分析ができたわけではなかったが、それでも自分達が相手の策にまんまと嵌ってしまったことは理解でき、将輝はギリツと奥歯が鳴るほど強く食い縛って悔しさを露わにする。

そうして驚きのあまり攻撃の手が止まった将輝を、達也が見逃すはずもない。彼は鍛え抜かれた体術を駆使して、50メートル弱はあったその距離を一気に5メートルほどまでに縮めた。

達也ほどにもなれば、1回の呼吸で詰めることのできる間合いである。

詰めるまでに、1回の呼吸を必要とする間合いである。

将輝の顔に、明らかかな動揺が走った。それは実戦を経験したことのある魔法師だからこそ抱いた、自分を脅かすかもしれない存在に対する恐怖である。

そして実戦を経験している戦士は、そういった恐怖に対して、思考を挟まない脊髄反射で対抗するようにできている。

その結果将輝は、明らかにレギュレーションを超えた威力の圧縮空気弾を16発、達也に向けて放っていた。

そして達也はそれを見て、「術式解体」では明らかに間に合わない

ことを瞬時に悟った。

それでも尚、情報構造体を分解するグラム・デイスパージョン「術式解散」を選択することは無かった。追い詰められた状況でも人前で軍事機密指定された魔法を使わない、という達也の矜持は揺るがなかった。

その代わり、傍目には使用したと分からない「フラッシュ・キャスト」をフル活用する。

通常はCADから起動式を読み込み魔法演算領域で魔法式に変換するところを、洗脳技術の応用で記憶領域にイメージ記憶していた魔法式を直接読み込むことで発動スピードを極限まで短縮する秘術。今までとは比べ物にならないスピードで次々と「術式解体」が放たれ、将輝の魔法を無効化していく。

しかしそれも、14発まで。

最後の2発が、達也の体に直撃した。

「――！」
地面に倒れ込む達也の姿が、将輝には映像をスロー再生するようにゆっくりに見えた。

明らかなルール違反を犯し、それが原因で相手に深刻なダメージを負わせてしまった。いくら衝動的な危機感に襲われて咄嗟にしてしまったこととはいえ、そして魔法による戦闘を行う以上怪我を負うのも覚悟の上とはいえ、元々正義感の強い彼がそれに対して罪悪感を覚えないはずがない。

さらに、

「達也くんっ――！」

背後から彼に呼び掛けるその声に、将輝は後ろを振り返った。

真紅郎と戦っていたはずのしんのすけが、必死の形相でこちらへと駆け寄るのが見えた。

戦闘中にすべき行動ではない、と将輝はそれを責める気にはなれなかった。後遺症が残るかもしれない怪我をチームメイトが負ったとなれば、このような反応になるのが普通だ。それに彼は予選で、本来のチームメイトが目の前で重傷を負ったところを目の当たりにしている。そういつたことに対して敏感になっただけでもおかしくない。

と、こちらへ駆けてくるしんのすけと、目が合った。
瞬間、

将輝の体が、まるで金縛りに遭ったかのように一切動かなくなつた。その癖意識はハッキリしており、ピクリとも動かさない自分の体をまるで他人事のように認識しているのが、ますます金縛りを髣髴とさせた。

左頬の辺りに、まるでカミソリで切ったかのような鋭い痛みが走つた。それは左頬だけでなく、防護服で完全に隠れているはずの体のあちこちから感じ取れた。左頬から流れる血液の感触が、その痛みが気のせいでないことを証明する。

しんのすけがこちらへと駆けながら、武装デバイスを振りかざしているのが分かる。それが横薙ぎに振られ、その瞬間に刃先が分離して自分へと迫ってくるのも分かる。

しかしそれでも、将輝は逃げることはできなかつた。自分の体が動かないのもあるが、たとえ動けたとしても、そもそも「逃げる」という発想が思いつかないほど頭の働किが鈍っていた。

このまま自分は彼の攻撃を受けるのか、と最後まで他人事感覚が抜けることの無いまま、将輝は刃先が自身に到達するのを見つめて――
そして将輝の体に衝突する直前、何の前触れも無くその刃先がバラバラに分解された。

意識内では驚愕を覚える将輝だったが、表情はピクリとも動かなかつた。

棒立ちのまま攻撃を受け入れていた彼の体を、細かな部品ごとにバラバラになった金属片が横殴りに降り掛かつた。スピードはそのままだが質量が大きく減少したそれぞれの部品に、防護服を貫通して大きなダメージを与えるほどの威力は無い。

それらの部品が全て通り過ぎた頃になってようやく、将輝は自分が無事であることを理解した。

もつともそれは、後ろから彼の耳元にヌツと差し出された手によって否定されるのだが。

「えっ?」

か細い声と共に視線を向けると、そこには先程自分の過剰攻撃で深刻なダメージを負っていたはずの達也が平然と立ち、こちらに腕を伸ばしていた。その手は親指と人差し指の先端をくっつけ、今にも弾かれようと力を溜め込んでいる状態だった。

将輝が反射的に足を引いたその瞬間、音響手榴弾に匹敵する破裂音が達也の指から放たれた。

鼓膜の破裂と三半規管のダメージによって将輝は意識を刈り取られ、彼はその場に崩れ落ちた。

「将輝が……、負けた……?」

真紅郎にとって、それは信じられない光景だった。たとえチームが負けることはあっても、将輝が負ける可能性など考えたことすらなかった。将輝がやたらと警戒していたしんのすけならあるいは、と思ったかもしれないが、相手はエンジニアとしては天才であっても魔法師としての腕はけっして脅威とは言えない達也である。

「ぐあっ!」

「!」

そんな彼の耳に、チームメイトの悲鳴が届いた。ハツと我に返って後ろを振り返ると、三高モノリスを開いた張本人である幹比古の正面で、チームメイトが地面に倒れ伏したまま動かなくなっている光景が飛び込んできた。

とうとう自分一人だけになってしまった、と真紅郎が理解すると、幹比古がこちらに目を向けるのが同時だった。

そして次の瞬間には幹比古の手がCADに伸び、15回キーを操作するとその両手を地面に叩きつけた。

するとその手元を起点として、地響きを伴って地面が揺れた。

如何にも魔法使い然としたマントとローブを身に纏った人物によ

るアクションも相まって、真紅郎は「掌で叩いたから地面が揺れた」という錯覚を引き起こした。いくら頭では単なる振動魔法であるという理解していても、心の奥底での感情がそれを否定する。

すると今度は、幹比古の手元から真紅郎の足元へ向けて地割れが走った。加重軽減と移動魔法を複合して空に逃れようとするが、まるで動物のように動く草が彼の足に絡みついていて、せいで地面から離れなかった。

その間にも地割れが足元に到達し、深い地中へと引きずり込まれるような感覚を味わった。それから逃れるために、真紅郎は魔法力の大半を使って草を引き千切りながらむりやり高く跳び上がった。全ては状況が引き起こした錯覚で、本来大した力も必要とせずに逃れられる程度のものでしかないとも知らずに。

そうして不可思議な魔法から脱出できたことで、真紅郎は安堵感に満たされた。

だからだろう、上空から活性化した独立情報体が自分を狙っていることに、彼は最後まで気づかなかった。

「地鳴り」、「地割れ」、「乱れ髪」、「蟻地獄」、そして「雷童子」。

5つの魔法を連続発動することによる幹比古の連撃に、真紅郎は地面へと撃ち落とされた。

「……勝ったの？」

「……勝った、と思う」

目の前で起こっている出来事であり、実際にこの目で見ているにも拘わらず、ほのかの呟きは疑問形だった。そしてそれに対する雫の答えも、とてもあやふやなものだった。

それが合図だった。誰かが歓声をあげたのを皮切りに、まるで水面に石を放り込んで出来た波紋のように、一高生の間でみるみる歓声が広がっていき、やがてスタンドを揺るがすほどの叫び声となって歓声が爆発した。それはあまりにも無邪気で純粹に自分の気持ちを表す

ものであり、同時に敗者である三高生を打ちのめす残酷なお祭り騒ぎであった。

だがその騒ぎも、1人の生徒によって唐突に終わりを告げる。

応援席の最前列に座り、両手で口を押さえながら無言で嬉し涙をぼろぼろと流す深雪の姿に、周りの生徒達は叫ぶのを止めて彼女を祝うように拍手をした。

その拍手はやがて一高の応援席を超え、敵味方の区別無く、激闘を終えた選手を讃える拍手となって会場中に鳴り響いていった。

決勝戦に相応しい白熱した試合に、観客が熱の籠もった感情と共にそれを振り返っていた。1人で来た者は頭の中で静かに、グループで来た者は仲間と興奮を共有しながら騒がしく。

そんなわけで選手がフィールドを去った後も興奮冷めやらぬ様子で騒がしい観客席の中で一際騒がしいのが、ひろし達春日部の面々を含めたグループだった。

「な、なあ！ さっきのは何だったんだ!? 達也くん、明らかにヤベー魔法を食らってたはずだよな！」

「達也くんが倒れたとき、さすがにまずいってかなり焦ったわよ！ それなのに普通に立ってるし、怪我した様子なんて全然無いし！」

その中で断トツで年上のひろしとみさえが一番騒がしいというのは如何かと思わなくもないが、自分と同じくらいの年齢の子供が瀕死の重傷を負ったと思っていた彼らの衝撃を考えれば致し方ないだろう。現にその他のメンバーも、あのときの光景には大なり小なり衝撃を覚えていたし、その疑問も皆が抱いているものだった。

その場にいる全員の視線が、おそらくこの中で最も魔法の知識に長けているであろう修次へと向けられた。予想していたとはいえ、彼は口元が苦笑で歪むのを抑えられなかった。

「確かに自分の目から見ても、彼が少なくとも2発は魔法の直撃を受けたと思っていました。しかし彼は現にああして立ち上がり、怪我人には不可能な動きで敵を倒しています。なので少なくとも、怪我に関

しては心配する必要は無いでしょう」

「そ、そうですか……」

「しかし実際の方法については、自分でも分かりませんね。妹から聞いた話では、彼は古流の武術にも長けていると聞いています。古流には肉体そのものを強化する技や、衝撃を体内で受け流す技もあると聞いたことがあります。あるいは『魔法が直撃した』ということ自体が、何かしらの幻術による錯覚だとも考えられます」

「世界は不思議なことで溢れてる、ってことだね！」

「……そうだね、ひまわりちゃん」

ひまわりが満面の笑みで話題を締め括ったことで、達也に関する話題は打ち切りとなった。

「それにしても、まさか本当に優勝するとは思いませんでした」

「いいや、俺はあの3人ならやつてくれるって思ってたね」

「とにかく、しんちゃん達が怪我も無く終わったのが何よりよね」

「そうだね。達也くんが怪我したように見えたとき、しんちゃんも凄く心配そうだったもんね」

「あんなに焦るしんちゃん、随分久し振りに見た」

「そりゃまあ、客席で見てた僕達ですら焦ったんだもんなあ」

そうして皆の話題は、一高がモノリスで優勝できたことに対する歓喜と、そして何より全員深刻な怪我も無く無事に終えられたことに対する安堵へと移り変わっていった。

修次は彼らを一瞥してから、隣に座る妹のエリカへと視線を向けた。

クラスメイトが華々しく優勝したというのに、未だに表情を強張らせる彼女と目が合った。

「しんちゃんが一条将輝に攻撃するときに見せた『アレ』って……」

「ああ。おそろく『剣気』だろうね」

それは言ってしまうえば、単なる『威圧』だ。しかし優れた剣士がそれを放つと、切られたと錯覚した相手の皮膚が実際に裂けることもあるのだという。修次も意識的に放つことは可能であるが、逆に言えばそれだけ剣を究めた者でなければ辿り着けない領域の代物だ。

しんのすけが剣気を放ったこと自体は、彼の剣の腕を考えれば有り得ることだ。しかし、いくら達也に過剰攻撃オーバーアタックをしたシヨックの隙を突いたとはいえ、実際に戦場で活躍したことのある一条将輝をして完全に動けなくするほどの威力は、修次でも出せるかどうかといったところだ。

もしそんな状態で「小通連」が振り払われていたのなら、たとえ刃を潰された模擬刀のようなものとはいえ、どうなっていたことだろうか。

「その点でいえば、「小通連」がああタイミングでバラバラになったのは幸いだったね。予選からあれだけ無茶な使い方をしていたんだ、それに耐えられずに自壊したとしても不思議じゃない。そうだろう？」

「……ええ、そうですね」

修次の言葉に、エリカはやや間を置いて肯定した。その視線は、既に誰もいなくなったフィールドへと向けられている。

それに釣られるように、修次もそちらへと視線を向けた。

2人共、その顔にはありありと『まるで納得していない』と書かれていた。

*

*

*

その日の夜。

横浜中華街にある、とあるビルの最上階。

首から先が切り取られた竜の掛け軸が飾られたその一室は、葬式か何かと思うほどに沈痛な雰囲気雰囲気に包まれていた。

「……第一高校が、モノリス・コードを優勝したようだ」

「どういうことだ！ 野原しんのすけ以外は急遽用意された代理の選手だったはずだろう！ まさかこうなることを見越して、本命の選手を温存してたわけではないだろうな！」

「代理の選手といっても、1人は第一高校が新人戦でここまで躍進する原動力となったエンジニア・司波達也だ。後の1人は選手登録すら

されていなかった無名の選手だが、私の記憶が正しければ日本の古式魔法を使う吉田家の人間だ」

「まずいぞ。モノリスのポイントは他の競技の2倍だ、もはや第一高校の優勝は決定的だぞ」

「そうなつてしまつては、我々の負け分は1億ドルを超える。ステイツドルで、だ」

「ここまでの損失だ、楽には死ねんぞ？ 良くて生殺しの『ジェネレーター』、適正が無ければ『ブースター』として死んでなお組織に搾り取られる末路を迎える」

テーブルに着く5人の男が口々に捲し立てるものの、その議論はもはや出口の見えない袋小路に陥つていくような状況だった。

男の1人が、チラリと視線を外した。

壁一面に作られた防弾ガラスの窓の前に2人、部屋唯一の出入口であるドアの前に2人、そして左右の壁にそれぞれ2人ずつ、がっしりとした体つきでサングラスを掛けた若い男達が身じろぎ1つせずに直立していた。彼らは単純にテーブルの男達の護衛であると同時に、この部屋全体を包み込むように掛けられた障壁魔法を維持する役割も持つている。

そんな彼らの姿に、男の表情が引き攣った。

「……もはや手段を選んでいる場合ではないと思うが、どうだ？」

「大会が中止になれば、払い戻しは当初の掛け金のみだ。損失ゼロとはいかないが、まだ許容範囲内だろう」

「よし。——実行は17号だけで大丈夫か？」

「多少腕が立つ程度なら、ジェネレーターの敵ではない。武器は持ち込めないが、素手でも100人や200人は呼吸をするように簡単に殺せるさ」

「異議は無いな？ ならば、ジェネレーターのリミッターを——」

リーダー格である男が命令を口にしようとしたまさにその瞬間、男のポケットに入っていた携帯端末が震えた。

発言を遮られた形の男は不機嫌そうに顔をしかめてそれを手に取るも、画面に表示された電話の相手を見て血相を変えると、即座に画

面をタップして耳に当てた。

「もしもし！何かございましたか、——ボス！」

男の発言によって電話の相手を知った残りの4人も、一斉に表情を固くしてその会話に耳を傾けた。ちなみに彼らを取り囲むスーツの男達は、そんな状況ですら表情一つ変えることは無かった。

しばらくは「ボス」の話を黙って聞くだけだった男だが、ふいに「どこでそんな情報を！」とか「しかしそんなことをすれば——」とか幾つか言葉を発し、やがて「……はい、承知しました」と心なしか覇気の無い声で返事をしてから電話を切った。

「ボスは何と？」

「……我々への『依頼』だ。もしこの依頼に成功すれば、我々の今回の失態を帳消しにしてやる、との仰せだ」

「おおっ！それは願ってもないことだ！このまま粛清されるのを待つよりもずっと良い！」

「それで、その内容とは？」

まさしく渡りに船とばかりに内容も聞かずに乗り気な4人を前に、男は恐る恐る口を開いた。

「……ボスの掴んだ情報によると、現在、九校戦の会場にブリブリ王国のスノケシ王子が来ているらしい」

「何だと、極秘に来日したというのか！しかしなぜ——」

「おそらく、かねてより親交のあった野原しんのすけに会うためだろう。……そしてボスの『依頼』というのが、そのスノケシ王子を誘拐しろ、というものだ」

4人の間で、稲妻のような衝撃と共に緊張感が走った。

ブリブリ王国は、CADの機能を無力化するアンテナイトの一大産出地だ。市場に売り出せば間違いなく莫大な利益を生むことになるであろうそれだが、現在は国王の一存によって産業化が禁止されている。

それを思い起こした4人は、即座に悟った。自分達のボスは王子と

引き換えにアンティナイトを手に入れようとしている、ということ
を。

「しかしスノケシ王子は、野原しんのすけと近しい人間だ！ 下手
に手を出して、万が一のことがあれば——」

「そんなことは百も承知だ！ ——しかし現状、我々が今回の失態を
挽回するためにはそれだけの危ない橋を渡らなければいけないこと
は、おまえ達だって充分に理解しているはずだ！」

男の言葉に、反論しようとして口を開いていた4人が、何も言わずに
そつと口を閉ざした。

先程自分達がやろうとした方法で大会を中止にしたところで、損失
が出ている以上は無事でいられる保証は無い。しかしこの依頼を達
成すれば失態を帳消しにできるといえるのは、他ならぬボスが明言して
いる。ボスは非常に恐ろしい人間だが、一度口にしたことを違える真
似は絶対にしない。

ならば、自分達はすることは1つだけだ。

「……全てのジエネレーターに命令する。明日の競技中、会場にいる
ブリブリ王国の王子・スノケシを、傷1つ付けること無くここに連
れて来い。——もちろん、邪魔する奴らがいたら容赦無く始末しろ」

第37話 「ミラージ・バットとジエネレーターだゾ」

九校戦9日目。新人戦が終了したことで、今まで中断していた本戦が再開する。

今日の空は昨日までの晴天から一転、今にも雨が降りそうな分厚い雲に覆われた曇天となった。今日行われるミラージ・バットにとって絶好の試合日和なのだ、観客にとってはやはり憂鬱な気分になってしまおうのか、空を見上げては残念そうに顔をしかめる仕草がよく見られている。

そんな曇り空の下、昨日のモノリス・コード優勝の余韻に浸ることも無く、エンジンアとして第一高校の天幕にやって来た達也は、中に足を踏み入れるタイミングでふと空を見上げてポツリと呟いた。

「……どうにも、波乱の予感がする」

それに真っ先に反応したのは、達也にピツタリと寄り添って歩く深雪だった。

「お兄様、何か気になることでもありますか?」

「……いや、深雪が心配することじゃない。何があるうとも、深雪は俺が守ってみせる。——強いて挙げるとするならば、このまま雨が降らずに曇りのままでいるかどうか心配だな」

「夕方から晴れると、天気予報で言っていましたよ」

「星明かりも結構邪魔になるんだが……。まあ、雨よりはマシか」

「あらあら?。まるで決勝進出が既に決まっているかのような口振りねえ。油断大敵よ」

後ろから突然話し掛けられた司波兄妹が振り返ると、ニコリと実年齢より幼く見える笑顔を浮かべる真由美がすぐそこにいた。

既に天幕の中にいた生徒達が一斉に挨拶するのを真由美は笑顔で返し、キョロキョロと中を一通り見渡して達也へと視線を戻す。

「しんちゃんは、ここにいないのかしら?」

「しんのすけですか?。おそらく家族達と一緒に観客席にいますと思いますが、用事があるなら呼びましようか?」

「ああ、わざわざ呼びつけるほどじゃないわ。今日の結果次第では総

合優勝が決まる可能性もあるし、せつかくだからみんなと一緒に観戦したかったってだけ」

現在2位の第三高校との点差は、155ポイント。真由美の言う通り、新人戦での快進撃もあつて最終日を待たずに第一高校の総合優勝が決まる可能性が出てきた。なので現在天幕内は、今日の時点で総合優勝を決めてやるという気概で充ち満ちていた。

特に深雪と共に出場する小早川という上級生の選手は、随分と気合が入っているように見えた。摩利曰く気分屋なところのある選手らしいが、これだけの重要な局面でそれを意識するなという方が難しい。そしてそれは、彼女のエンジニアを務める平河というスタッフも同じようだった。

——とはいえ、この程度なら心配はいらないだろう。

それより今は、深雪のために準備を進めておくべきだ。

達也はそう判断し、深雪を連れてCAD調整器の置かれたテーブルへと歩みを進めた。

*

*

*

深雪の出番は、第2試合となった。本当は休憩時間を多く取れる第1試合の方が良かったのだが、第3試合にならなかつただけ良かったとしよう、と達也は早々に考えを切り替える。

第1試合に出場した小早川は、特に危なげなく早々と決勝進出を決めた。チームの中には当然ながら、小早川に続いて深雪も、という雰囲気漂っている。

ミラージュ・バットのコスチュームを身に纏った深雪がフィールドに姿を現した途端、観客のボルテージがむりやり引き上げられた。体のラインが丸見えでありながら嫌らしさが微塵も感じられない神秘的な姿に、観客席の青少年は揃って動悸や息切れを起こし、選手にはなく観客に担架が用意されるという自体になりかねない。

それに釣られたわけではないだろうが、予定時間よりも数秒早く試合開始のブザーが鳴った。

光のホログラムが空中に現れた瞬間、選手達が一斉にそこへと向かって飛び立っていく。

その中でも観客の目を惹いたのは、やはり深雪だった。細く長い手足に緩やかな曲線を描く胸や腰、そして花のように咲き誇るその美貌に、観客はまるで本物の妖精を見ているような心地になった。たとえ彼女が誰にも劣らぬスピードでホログラムに向かって飛び立ったとしても、彼女だけは「ふわっ」という擬態語が似合うことだろう。

こうして深雪が観客の視線を独り占めにしながら、第1ピリオドが終了した。

もしこの競技が空中を飛び上がる美しさを競うなら深雪が間違いなく1位だろうが、残念ながら本戦はそこまで甘くはないらしい。

「まさか、深雪さんがリードされるなんてね……」

一高の天幕でモニター越しに試合を見守っていた真由美が、詰めていた空気を吐き出しながら呟いた。

「今のところ、トップは二高の選手か……。BS魔法師とまではいかないが、『跳躍』の魔法に特化した魔法性能を持っているみたいだな……」

「しかも飛び上がるコースを計算して、深雪さんを徹底的にブロックしています。ここまで来ると、ミラージュ・バットのスペシャリストと表現した方がしっくり来るでしょう」

摩利と鈴音の2人も、深刻な表情でそれぞれ正直な感想を口にしていった。

「元々あの選手も、摩利と並んで優勝候補と言われてた選手だものね」「そう簡単に、ぽつと出の選手に優勝をかつ攫われるわけにはいかなってことか」

そんなことを言う真由美と摩利だが、けっして深雪の勝利を諦めたわけではない。

あの2人がこのまま終わるなんて有り得ない、という絶対の信頼がそこには隠されていた。

次に行われた第2ピリオドで、深雪が逆転してトップに立った。しかし2位の二高選手とはほんの僅かしかポイント差がない。深雪もまだまだ余力は残しているが相手もそれは同じようで、第2ピリオドはペースを調整していた節も感じられる。

限定された状況下とはいえ、まさか深雪と張り合う魔法師が高校生に存在していたとは思っていなかった達也は、相手が他校の選手であることも忘れて素直に賞賛していた。無意識に二高のブースへと視線を向け、いったいどのような選手だろうと興味を向ける。

しかし彼のそのような行動は、クイクイと深雪に袖を引っ張られることで中断した。

「お兄様、『あれ』を使わせていただけませんか？」

その目に強い光を宿しながら、深雪は達也にそう問い掛けた。その表情からは相手選手に負けたくないという思いがありありと滲み出ており、可愛いだけの『お人形さん』ではないことを示すこの顔が達也はとりわけ好きだった。

「良いよ。すべてはおまえの望むがままに」

それは今後の作戦や打算などを一切度外視した、おおよそ達也らしくない、しかし極めて達也らしい行動だった。

「あれ？ 深雪さんのCADが変わってる……」

3人の中で最初にそれに気づいたのは、真由美だった。先程までいつもの携帯型CADを使っていた深雪が、今回はブレスレット型のCADを身につけている。左手にもCADを持っていることが、ますます彼女らに深雪の狙いを分からなくしていた。

いや、作戦スタッフとして達也からそのCADについて説明を受けていた鈴音だけは何かを悟り、そして普段よりも若干表情を固くしていた。

「どうやら達也くんは、『切り札』を使うことにしたようです」

「切り札だと？ 鈴音、何か知っているのか？」

「はい、練習のときに使っているのを見ましたから。——おそら

くお2人も「アレ」をご覧になれば、度肝を抜かれると思いますよ」
普段から物事を冷静に観察し、けっして過大評価することの無い彼女からそんな言葉を引き出すとは、いったいあのCADに何が隠されているというのか。今すぐにも聞き出したい衝動に駆られる真由美と摩利だったが、どうせ試合ですぐにも明かされるだろうということでは何か我慢することができた。

やがてブザーが鳴り、最終ピリオドが始まった。

ホログラムが空中に現れ、深雪がそこに向かって飛び立った。すぐさま二高の選手も向かい、絶妙なタイミングで深雪の行く手を遮った。このままでは、深雪の方から選手に激突することになってしまう。

深雪は自らのスピードを上げること、それを回避した。観客からどよめきがあがるのを聞きながら、深雪は体を反転させてその場に急停止、すぐさま次のターゲットへ向けて飛んでいった。

「……………」

と、その光景を眺めていた摩利が、違和感に気づいた。

それを耳聴く拾った真由美が、彼女に尋ねる。

「どうしたの、摩利？」

「いや…………、いつ足場に下りるのかと思ってな…………」

その答えに真由美は少し考え、そして彼女と同じく気づいた。

そして深雪が一向に足場へと下りていく様子も無く、そのまま次々と別のターゲットへと向かっていくその光景に、観客も徐々にそのことに気づき、歓声を絶句へと変えていく。

「まさか深雪さん、——飛んでるの？」

他の選手が10メートルほどの高さを何度も往復しているのに対し、深雪は高度10メートルを維持しながら自由自在に方向やスピードを変え、次々とホログラムを消して得点を重ねていく。そもそも移動しなければいけない距離が違うのだから、あの優勝候補の二高選手でさえ、今の深雪では相手にもなっていないかった。

「おい…………、まさか飛行魔法か…………？」

「まさかあのCAD、トールラス・シルバーの…………？」

「そんな……。あれは先月発表されたばかりだぞ……」
「でもあれは、間違いない……！ 飛行魔法だ……！」

呆然と深雪を見つめていた観客が、次々と囁き始める。その囁きが波紋となって広がり、それぞれの心に大きな衝撃となって降り注いでいく。

バランスや方向転換のために手足を振り出す深雪の姿が、まるで風と手を取り合って踊る天女のように見えた。空を飛ぶという、現代魔法で不可能と言われた技術が今まさに目の前で繰り広げられていること、そしてそれを実現している少女の美しさに、年齢を超えて、性別を超えて、そして敵味方すら超えて、文字通り空を舞う彼女の姿に見惚れていた。

そしてそれは、試合終了のブザーが鳴り、彼女が地面に足をつけるその瞬間まで途絶えることはなかった。

ミラージ・バット予選第2試合は、深雪の圧倒的勝利に終わった。

*

*

*

発表されたばかりの新技术が九校戦で突如お披露目されたこと、そしてそんな新技术を使いこなす深雪の人間離れした美しさに、観客達があたただだ目を奪われ、言葉を失っていた頃。

そんな観客達の中にいながら深雪には一切目を向ける様子も無く、それどころか試合をよそにヘッド・マウント・ディスプレイ（HMD）を装着してメッセージを眺める1人の男がいた。周りと違う行動をすれば普通は目立つものだが、存在感自体が希薄だからか、あるいはそれすらも気を配る余裕が無いからか、周りの誰も彼を気に留める様子は無い。

そんな彼が、おもむろにHMDを脱いだ。無表情というよりは、表情が欠落しているのではと思わせるほどに「無機質」なものだった。そして彼はゆっくりと立ち上がると、その場から離れて通路を歩いて観客席を後にした。

試合の真っ最中であるため人が疎らに行き交うのみの建物内を歩

いて男が向かうのは、VIP専用の観戦部屋である「特別観覧室」だった。その部屋の場所は会場にある案内板に記載されていないが、観客席から部屋自体は確認できるため推測できないことも無い。

しかし当然ながら、普通の観客席からそこへ向かうには『STAFF ONLY』と書かれたドアを通り抜ける必要がある。そしてそのドアの前には現在、黒スーツに黒サンングラス姿の男性とレディース姿の女性の2人が、おそらく警備員として立ちはだかっていた。

その2人が視界に入った瞬間から、男の視線はそこに固定されていた。まるで、肉食獣が獲物に狙いを定めているかのように。

そして男はふいに体をビクンツと跳ねさせて自己加速魔法を展開させると、彼らに向かって1歩大きく足を踏み出した。肉体が持つ限界を超えたスピードで女性の方へと迫り、人間の知覚では反応できないスピードで腕を振り下ろした。

そして次の瞬間、男の体が宙に浮いていた。

普通ならば何が起こったのか分からずパニックを起こすところだが、男はそのような「雑念」とは無縁の存在であるため、即座に慣性中和の魔法を発動して姿勢を整え、脚のバネ、腹筋や背筋や両腕を駆使して音も無くその場に着地した。

そして顔を上げると、おそらく男を宙に浮かせた実行犯である黒スーツに黒サンングラス姿の男性——酔乙女あいのボディガードである黒磯が、レディース姿の女性——スノケシ王子の秘書であるルルを背に男を見据えていた。

しかし男にとって、目の前の人物が誰だろうと関係無かった。スノケシを連れ去るよう命令された彼にとって、邪魔する者は等しく排除対象だからだ。

なので男は即座に黒磯へと襲い掛かり、そして黒磯はそんな男に向けて掌を向けるように右手を差し出した。

そしてその直後、まるでトラックにでも衝突されたかのような勢いで男が後ろへと吹っ飛び、数メートル離れた床に叩きつけられた。脳を揺さぶられたのか、男は立ち上がることもできずに体をビクビクと震わせている。

「黒磯さん、こちらは私が」

ルルの短い言葉に黒磯が右に視線を振ると、先程の男と同じようにほとんど表情が動かない男が今まさにこちらへと向かって来るところであり、そしてルルが右脚をスツと後ろに下げて半身の構えを取って男を待ち受けるところだった。

そうして男に向けて差し出した彼女の指には、真鍮色の指輪が嵌められていた。

男はルルの頭を目掛けて、手刀を繰り出した。そのスピードは尋常でなく、もしそれが当たれば頭蓋骨すら粉碎する威力が込められている。

もつとも、それはあくまで「もし」の話であり、ルルはその手刀をまったく慌てる様子も無く、頭を僅かに傾ける動作のみで避けた。

しかもそれと同時に、男の顔面に指輪を嵌めた方の手で掌底を叩き込んだ。男が怯んで後ろによろけた隙に、追撃として彼の両膝に鋭い蹴りを2発放つ。男の膝は嫌な音をあげて反対方向に曲がり、自重を支えることすら困難になった男はその場に倒れ込んだまま立ち上がれなくなった。

「終わりました。如何でしょうか？」

「……いやはや、さすがですね」

床に倒れた男から視線を固定したままルルが呼び掛けると、しなやかな筋肉を軽装に隠す痩せ形の男性が近くの柱の陰から姿を現した。

彼は、達也も所属する独立魔装大隊の幹部である柳連大尉やなぎむらじ。体術の中に魔法を発動する結印の動作を混ぜた古式魔法師であり、相手の運動ベクトルを先読みして体術と魔法を連動させる白兵戦技を得意としている。

そんな彼が畏敬の念を込めて見遣るのは、黒磯だった。

「先程見せた体術は、もしや「転」^{てん}でしょうか？」

「転……と呼ばれるものかは分かりません。お嬢様をお守りするために身に付けたものです」

「ほう……。いや、自分も同じような技を使うのですが、そちらはあくまで魔法を使った真似事ではないんですよ。魔法を使わないオリ

ジナルを実際に見たのは初めてです」

柳の言葉に、黒磯は「はあ……」と薄い反応を示すのみだった。

なので柳は次に、もう1人の襲撃者を倒したルルへと向き直る。

「ルルさんも、その指輪はアンティナイトですね。ブリブリ王国産ですか？」

「はい。我々が撃退すべき敵の中には魔法師も含まれていますので、産業化はせずとも利用できるものは利用します」

「成程。しかしアンティナイトで情報強化の防壁を無効化したとはいえ、魔法なしで『ジェネレーター』を正面から倒す実力とは……」

「ジェネレーター、とはこの男のことですか？」

床に倒れたまま尚ももがき続ける男に視線を遣りながら、ルルが尋ねる。

「はい。脳外科手術と呪術的に精製された薬品の投与によって意思と感情を奪い去り、思考活動を特定方向に統制して雑念が発生しないように調整された、魔法を『発生させる道具』という意味を持つ生命兵器です」

「人間を兵器に作り替えるなんて……。非道な……!」

柳の説明に、ルルはギリツと奥歯を鳴らして怒りを顕わにする。

そしてそんな彼女に代わり、黒磯が柳に話し掛ける。

「我々の実力は、今ので分かってもらえたと思います。なので柳さんは、他に不審者がいないか搜索をお願いします」

「……いえ、自分もここで襲撃に備えさせてもらいますよ。さつきはお2人の意向もあつて様子を見守っていましたが、本来はあなた方も我々にとっては守護対象なんですから。それに搜索については、自分の同僚達が請け負ってくれていますので」

「……了解しました。頼りにさせていただきます」

こうして、ドアを警備する者は2人から3人となった。

もつとも、この後にここを襲撃する者はいなかったのだが。

*

*

*

裏でジェネレーターと呼ばれる生命兵器の襲撃があることも露知らず、ミラージュ・バットの会場ではまもなく始まる決勝戦に観客達が今か今かと待ち構えていた。

「いやあ、まさか達也くんが飛行魔法を隠し球に持ってたとはねえー」
「さすがに飛行魔法を持ってこられちゃ、如何に優勝候補といえども敵わねえだろうな」

「それにしても、大丈夫かな……？ 大会委員が達也さんにCADの提出を求めてたって聞いたけど……」

「心配無いよ。CAD自体は大会の規定に収まったものだから、提出しても困る代物じゃないし」

エリカから魔法科高校生の面々とひろしら春日部組のグループも、当然ながら会場で深雪の登場を心待ちにしていた。この試合の結果次第では第一高校が総合優勝を決めるかもしれない重要な局面だけあって、エリカから一高の生徒だけでなく、ひろし達もその表情に緊張感を滲ませている。

と、そんな中、思わず口から漏れ出たといった感じでネネが呟いた。

「それにしても、なーんかズルくない？」

「ネネちゃん、ズルって何が？」

「いや、だって空を飛べるのって深雪ちゃんだけなんですよ？ そんなの、深雪ちゃんが優勝するに決まってるじゃない」

「うーん、それはそうかもしれないけど——」

「そうとも限らない」

やけにハッキリと言い切るボーに、他の全員が一斉にそちらへと振り向いた。

「どうして、ボーちゃん？」

「予選から今までの間で、他の選手も飛行魔法を使えるようになってるかもしれない」

「でも、たった数時間だよ？ それまでの時間で使えるようになるもんなの？」

「飛行魔法の術式自体は、トールラス・シルバーによって公表されている。それに『誰でも使える』ことを目的に開発されたものだから、技

術的な課題はそれほど高くない」

「よく分かんないけど、とにかく油断するなってことね！」

彼にしてはかなりの長台詞だったのだが、ネネからは「よく分かんない」の一言で切り捨てられてしまった。心なしか顔を俯かせる彼に、隣でマサオが「げ、元気だしなよ……」と励ましている。

と、そうこうしている内に、深雪を含めた全選手がフィールドに登場した。頭上には上弦の月、足元には星空を反射する湖面という幻想的な空間に、淡い色のコスチュームを身に纏った少女達が集う様子は、まさしく「妖精のような」という使い古された形容が似合う光景だ。先程までざわついていた観客達が、それを目の前にしてしんと静まり返る。

会場が静かになって少し経ち、試合開始のブザーが鳴った。

そしてその瞬間に6人の選手が一斉に空へと飛び上がり、一高の小早川を除く5人がそのまま足場に下りることなく宙に留まった。

「やっぱり、飛行魔法を使ってきたか……」

「あれ？ でもなんで小早川先輩は使わないんだろう？」

「使えるようにならなかったから、とか？」

「いや、小早川先輩も相当な実力者だ。他の選手が使えているのに、彼女だけ使えないということはないだろう。きっと何か理由があるはずだ」

「理由か……。何だろ……。？」

レオ達が考えている間にも、試合はどんどん進んでいく。空を舞う6人の少女の姿は、綺麗な星空と相まってまさしく「妖精のダンス」と評される美しさを秘めている。観客は1人の例外も無く、その試合に夢中となっていた。

だが幻想的な光景に興奮していた観客達は、徐々に或る事実気づいていった。

同じ飛行魔法を使用しているはずなのに、順調に得点を重ねるのは一高の選手だけである、と。

他の選手がおっかなびっくりで初めての飛行魔法を使っているのに対し、深雪の動きは素人目で見ても分かるほどに洗練されていた。

素早く優雅に滑らかに身を翻し宙を滑り上昇して下降する、という自由奔放な舞に誰一人ついていけなかった。

そして慣れない飛行魔法のせいで挙動に無駄が生じた他の選手は、飛行魔法すら使っていない一高の小早川にすら得点を許してしまっていた。彼女は予選で自分達が使っていた「足場から飛び上がり、綺麗な放物線を描きながら別の足場に着地する」という基本的な動きを忠実に反復し、飛行魔法を使う他の選手よりも早くホログラムへと辿り着いていた。

だが彼女達は、今更元の戦術に戻すことはできない。戻したところで空を自在に飛び回る深雪に敵うはずがない、と無意識に認めてしまっているからである。

と、選手の1人が空中でグラリと体勢を崩して僅かに高度を下げた。その表情は苦悶に満ち、疲れ切っているのがよく分かる。

まさかサイオンが枯渴したのか、と観客が悲鳴をあげるが、その選手はゆっくりとした動きで徐々に高度を下げ、そのままゆっくりと足場へと下り立った。会場のあちこちからホツと溜息が漏れるのが聞こえる。

「良かった……、無事に下りられたみたいで」

「でも何か、急に落ちるスピードがゆっくりになったよな。あれは何だ？」

「安全装置が作動したんです。良かった、変なアレンジとかしてなくて」

ひろしの質問に、同じ競技の代表選手として深雪と共に練習を重ねてきたほのかが答えた。

公表されている飛行魔法の術式には、術者からのサイオン供給効率が半減すると自動的に10分の1Gの軟着陸モードへと変更される「安全装置」が組み込まれている。新たな術式が開発されると真っ先に気になるのが安全性だが、奇しくも九校戦という実戦の場でそれが実証された形だ。

しかもこの九校戦は現地でも1万人、中継映像を含めると軽く100万人は超える人々が注目している。特に魔法関係者はほぼ全員が

観ていると言つて良く、そんな場面で新製品の安全装置が正確に作動した今の映像は、普通にCMをテレビで流す以上の宣伝効果を生むだろう。

現にフィールドの傍で試合を見守っていた達也は、今まさにグツタリとした様子でゆるゆると足場へと下り立つ別の選手に、心の中で腹黒い笑みを浮かべていた。

第1ピリオドでの脱落者は、この2人だった。そしてこの2人は、そのまま試合を棄権する。

第2ピリオドでも1人が脱落、そのまま棄権。

結局第3ピリオドは、深雪と小早川、そしてもう1人の選手との三つ巴となった。

とはいえ、結果はほぼ決まったようなものだろう。

深雪は圧倒的な点差でトップ、序盤から着実に点数を重ねてきた小早川が次点、そして今にも脱落しそうなほどに疲労困憊な他校の選手。おそらくこの順番でほぼ決まりだろう。

だが深雪はけっして、力を抜くことをしなかった。最後の最後まで、優雅に空を舞って点数を稼いでいく。

まるで、自分の兄が開発した飛行魔法を一番使えるのは自分だ、と主張するかのよう。

とはいえ、そんな印象を抱くのは、飛行魔法を開発したのが達也であることを知るごく一部の者だけだろう。他の大多数の観客は、彼女の姿が無邪気に遊ぶ妖精のように見え、まるで現実世界のものではないかのようにうっとり見つめている。

やがて最後のホログラムが彼女の手によって掻き消され、試合は終了した。

一高選手のワンツーフイニッシュという、一高関係者にとって最高の結果となった。

そしてその瞬間、一高の総合優勝が決定した。

飛行魔法で魔力を酷使した他校選手が足場に両膝を突いて崩れ落ち、基本に忠実だった小早川ですら荒く息を吐いている中、照明をスポットライトのように浴びながら、優雅な所作でフィールドの足場に

下り立った深雪。

そして彼女に対して、熱狂的ともいえる万雷の拍手を贈る観客達。そんな拍手に応えて深い一礼で返す彼女の姿は、美しい女優が主演舞台を見事に成功させ、カーテンコールで感謝の意を伝える光景そのものに見えた。

そしてそんな観客達に混じって、時折深雪の名前と賛辞を叫びながら拍手を贈る、エリカら魔法科高校生の面々とひろしら春日部組のグループ。

しかしそんな面々の1人であるエリカは、ポケットの中で突如震えだした携帯端末によってむりやりそれを中断させられた。不機嫌を露わにして画面に目を遣る彼女だったが、そこに表示された電話の主の目を丸くし、急いで着信ボタンをタップした。

「次兄上、どうしました?」

『エリカ、ミラージ・バットの会場にいるんだよね? そこに野原くんはいるかい?』

「しんちゃん、ですか? いえ、ここにはいませんけど。選手達と一緒に観戦しているのではないですか?」

『そうか……。モノリスも終わったことだし、せつかくだから話が出たかったんだが……。すまない、邪魔したね』

修次は早口でそう言うのと、エリカの返事も聞かずに電話を切った。

エリカは携帯端末の画面を見つめながら、不思議そうに首を傾げた。

*

*

*

フィールドから戻ってきた深雪と小早川、そして2人のエンジニアを務めた達也と平河を拍手と歓声で迎えた第一高校の天幕内は、まさしくお祭り騒ぎという表現がお似合いの大盛り上がりとなっていた。

明日は九校戦を締め括るモノリス・コードの決勝戦が行われるため、それに関わる選手やスタッフはまだまだ気の抜けない状況だ。なので祝賀パーティは明日以降に繰り延べられることになったが、真由

美と鈴音の仕切りでミーティングルームを借りた簡単な祝賀会を兼ねたお茶会を開催することになった。

「当然ながら、達也くんも参加するよな！」

「これだけ活躍しといて祝賀会に参加しないとか、有り得ないものね！」

満面の笑みで（相当なプレッシャーを携えて）詰め寄る摩利と真由美に、達也はすっかりたじたじとなっていた。自分以外の女性が兄に近づくと不機嫌になる深雪も、この光景ばかりは苦笑いを浮かべるに留めている。

と、達也のポケットで携帯端末が震えた。渡りに船とばかりに達也は2人から逃げ出し、騒がしい天幕を抜けて少し離れた所まで移動してから画面を見遣る。

そこには『小野遥』と表示されていた。

「もしもし」

『あつ、達也くん！ 緊急事態よ！』

電話に出るやひどく慌てた様子でそう切り出す遥に、達也の目つきも自然と鋭くなる。

「何がありましたか？」

『昨日達也くんから頼まれた件、私の方で調べてアジトの所在は突き止めたんだけど——』

まさか本当に1日で調べ上げるとは、と達也は素直に感心した。本人の意思はどうであれ、パートタイマーにしておくには惜しい実力を持っていることは確かだ。

と、そんなことを考える達也に、特大の爆弾が投下された。

『そのアジトがあるホテルに、しんちゃんが眠ったまま連れ込まれたのよー。』

「——はっ?」

第38話 「みんながオラに夢中だゾ」

「しんちゃんが無断外出!」

「はい。唐突に横浜の中華街に行きたくなって交通機関を乗り継いで向かったまでは良いものの、帰りの交通費が尽きたために帰れなくなったと電話がありました」

「何をやってんだよ、こんなときに!」

桐原の言葉はこの場にいたほぼ全員の想いを代弁したものであり、天幕のあちこちで頻りにウンウンと頷く生徒の姿が見られた。

「なので俺は、今からしんのすけを迎えに行つてきます」

「大丈夫か、達也くん? ここから横浜までつて、結構な距離があるだろう」

「問題ありませんよ。なので皆さんは、祝賀会を楽しんでください」

達也は普段の風紀委員での活動も含めて、しんのすけと一緒に行動する機会も多い。なので風紀委員の仲間や上級生などからも、自然と達也が彼の監視役と見做されている風潮がある。なので達也が彼を迎えに行くこと自体は、特に不思議なものとして受け取られることは無かった。

摩利は少しの間、何かを考える素振りを見せ、

「分かった。すまないが、達也くんに任せる。往復の交通費については、後で立て替えておくから領収書でも貰つておいてくれ。——それと彼を連れて戻ったら、アタシの所に連れて来るように。さすがに今回の件については看過できない」

「……承知しました。それでは、失礼します」

達也は頭を下げると、足早に天幕を後にした。

月と星が照らす夜の演習場を、達也は無表情で歩いていく。ほんの少しだけ剣呑な雰囲気醸し出されており、余計な迷惑を掛けられた友人に対する怒りと解釈すればおかしいことではない。

と、そんな彼に後ろから駆け寄る人物がいた。

「——お兄様!」

「——達也くん!」

深雪と真由美に呼び止められ、達也は歩みを止めて振り返った。どちらも別々のベクトルで美少女と表現して差し支えなく、そんな2人が息を切らしてこちらに走ってくるなど思春期の男子からしたら夢のシチュエーションだろうが、それを待つ達也に浮足立った様子は一切無い。

やがて2人が達也に追いつくと、軽く息を整えて真由美が開口一番尋ねてきた。

「今の話、本当なの？」

「……横浜にしんのすけがいるので迎えに行く、というのは本当です」

一瞬の思案の後、達也が含みを持たせた言い回しでこう答えた。

そして真由美は、その含みを正確に読み取った。

「……それは、達也くんが行かなければならないの？」

「俺でなければいけない必然性は薄いかもしれませんが、俺が行った方が色々都合が良いのは確かです」

「……私には、何かできることは無い？」

「そうですね。強いて挙げるとするならば、渡辺先輩にはしんのすけを責めないようそれとなく伝えてもらえませんか？」

「ふふっ、分かったわ」

真由美はそれを了承して引き下がると、今度は深雪が1歩前に出た。

何か迷うように目線を落としていた彼女だが、やがて顔を上げてこれだけ言葉にした。

「——お気をつけて」

「——ああ、征ってくる」

深雪と真由美に見送られ、達也はその場を後にした。

選手達が泊まるホテルへと入り、兵士が見張る基地関係者以外立入禁止のエリアとの境界を抜けた達也を出迎えたのは、藤林だった。彼女は一旦達也をとある部屋へと案内してそこで制服から着替えさせると、一緒にエレベーターに乗って何の迷いも無く屋上のボタンに手

を伸ばす。

「空から行くのですか？ 事は一刻を争うとはいえ、奴らに気づかれたら逃げられるのでは？」

「問題無いと判断したわ。——『協力者』のおかげでね」

「……協力者？」

達也が疑問符を浮かべる間にエレベーターが屋上へと到着し、2人はそのまま外へと出た。屋上はヘリポートになっており、そこには1機のヘリコプターが後部座席のドアが開かれた状態で待機している。

その後部座席には、先客がいた。

酔乙女あいだった。

「全然ご機嫌ではないけど、とりあえずご機嫌よう、達也さん」

「……なぜ、あなたがここに？」

「事情は移動しながら説明するので、早く乗ってくださいな」

あいの言葉に達也は跳び上がるように勢い良く座席に乗り込み、シートベルトを締めた。藤林が彼の隣に座るのを確認すると、あいは運転席に「出発してちょうだい」と呼び掛けた。運転手にいるのは黒磯だった。どうやらヘリの運転免許も持っているらしい。

自動的に後部座席のドアが閉められ、ヘリのプロペラが回り始める。やがて人の目には留まらぬほどの速さにまで回転し始めた頃にヘリがフワリと浮き上がり、そしてそのまま夜の闇に溶け込むように空へと飛び立っていった。

そして達也は心の中で、藤林は細く整った眉を上げて少しだけ驚いた。

ニコリ、とあいが文字通りの営業スマイルを浮かべる。

「如何ですか、我が社の新商品は？ とても静かでしょう？」

「はい。それに立ち上がりもかなり早いですし、本当にヘリに乗っているのかと思うほどに安定感もありますね。しかも周りが暗いので断定できませんが、スピードもかなりのものですね」

「そうでしょうとも。我が社が誇る世界最高峰の技術者達による最先端のヘリですからね。——それにせっかくですから、こちらも使ってみますか？」

あいがそう言って差し出したのは、ボタンが1つと上下に動かせる
摘みだけという実にシンプルな機械だった。達也と藤林が一瞬だけ
互いに顔を見合わせ、達也がそれを取った。

「サイオンを供給しながらボタンを押すだけで結構ですわ」
「分かりました。——それでは」

達也が言われた通りにすると、ボタンが仄かに光って機械が発動し
た。

すると、

「――！」
「――！」

達也と藤林が揃って驚愕の表情を浮かべ、あいがニタリと得意気に
口角を上げた。

へりの中から見た限りでは、特に何か変わった様子は無い。得意気
な様子のあいも、実のところその変化を感じ取っているわけではない。

しかし達也たち魔法師には、機械を中心に魔法防壁がへりをすつぽ
りと包み込んでいるのが分かった。

「どうやら上手く作動したようですわね。我が社が開発した新商品、
ボタン1つでステルス機能を持つ魔法障壁を展開するCADですわ。
効果範囲はその摘みで調整可能、起動式を極限まで効率化したおか
げでサイオン消費量もごく僅か、サイオンの供給さえできれば誰でも
容易に使用可能。——如何ですか、達也さん？」

「……遮音機能に光学迷彩機能、それに風に対する減速魔法の機能も
ありますね。更に暗視装置やサーモグラフィへの対策も施されてい
る。それにこれだけ多くの効果を有してありながら、展開されている
魔法式があまりにも小さい。これを開発した人物は、相当な技術力で
すね」

「本人に聞かせたら、とても喜ぶと思いますわ。『天下のトーラス・シ
ルバーからお褒めの言葉を頂戴した』と言えばね」

「……………」

「冗談ですわ、本気になさらないでくださいな」

呆れたように肩を竦めたあいだ、その視線を隣の藤林へと移す。

「お求めの際は、ぜひとも『酔乙女魔工製作所』へご一報を」

「……一度持ち帰らせていただき、上司ともよく検討致します」

日本のビジネススマンの常套句を口にする藤林を横目に、達也は窓の外の景色に目を遣った。

地平線の先に、横浜のネオンが光り輝いていた。

*

*

*

一方、『無頭竜』のアジトであるホテルの最上階。

その部屋の中で、未だに眠りこけたままのしんのすけがソファアールで横になっていた。運ぶ際に目立たないように一高の制服の上から大きな黒いコートを被せられ、ベルトに装着していたCADは取り上げられている。

そしてそんな彼を取り囲んで立つ幹部の面々が、彼をここまで連れてきた黒服の男（もちろん彼もジェネレーターだ）を怒鳴りつけていた。

「何をやってるんだ、おまえは！ 我々はスノケシ王子を連れて来いと命令したんだ！ なんて野原しんのすけを連れて来たんだ！」

「スノケシと思われる外見をしていたので、命令通りに連れて来ました」

「確かにそっくりだが！ そもそも、どうやって連れて来た!?!」

「会場の外れにある人気の無い草原で眠っていたので、そのまま連れて来ました」

「スノケシ王子ともあろうVIPが、そんな所で居眠りをするはずが無いだろ！ そんなことも分からないのか！」

「スノケシと思われる外見をしていたので、命令通りに連れて来ました」

「ああもう、融通が利かないな！ だからジェネレーターは嫌いなんだ！」

1世紀前のパソコンに不慣れな中年親父のような台詞を吐きなが

ら、男はジェネレーターとの会話を打ち切った。その近くでは別の幹部が「人攫いにジェネレーターを使ったのは失敗だったな」と完全に項垂れた様子で呟いていた。

一番騒いでいた男が黙り込んでしまったため、部屋の中を重苦しい沈黙が支配する。

そしてそれを取り払うように、幹部の1人が努めて明るい声でこう言った。

「しかしこの状況も、見方を変えればかなりチャンスと見ることができのではないか!? 何せ、あの稀代の英雄と名高い野原しんのすけが、こうして我々の手に落ちているのだからな!」

「確かにボスの命令であるスンノケシ王子の誘拐こそ叶わなかったが、その代わりに野原しんのすけを連れて来たとなれば、ブリブリ王国産のアンテナナイトと比較しても充分お釣りが来るレベルではないだろうか」

「少なくとも、今からもう一度スンノケシ王子の誘拐を実行するのは不可能に近いだろう。ならば我々は何としてでも、野原しんのすけを無事に本国まで連れて行かなければならない」

「……確かにその通りだ。——荷物は既に纏めてあるな? ならば、できるだけ早く出発しよう」

ジェネレーターに怒鳴り散らしていた幹部の問い掛けに、他の幹部が揃って頷いた。彼らはスンノケシ王子を誘拐したらそのまますぐにここを出払うつもりだったので、部屋の中は既に備え付けの家具以外は片付けられている。もちろん、ここまで彼らを見守ってきた、頭部が切り落とされた竜の掛け軸も姿を消していた。

男達が準備をするのに併せて、ジェネレーターである黒服の男が、ソファアールで眠るしんのすけへと手を伸ばす。

と、そのとき、

「ふあゝ、よく寝たゾ〜」

「——!」

見計らったかのようなタイミングでしんのすけが目を覚まし、呑気にあくびをしながら体を起こして大きく伸びをした。そしてその様

子を、幹部達が固唾を呑んで見守っている。

徐々に意識が覚醒してきたしんのすけは、周囲を見渡して首を傾げた。それはそうだろう。会場の草原で居眠りをしていたはずが、いつの間にかどこかのホテルの一室で、しかも中年と黒服に取り囲まれているのだから。しかも日はとつくに暮れて夜になっている。

「やあ、野原しんのすけくん。お目覚めかね?」

「……おじさん、誰?」

白い目を向けながらそう尋ねるしんのすけに、幹部の男は余裕の態度を崩さず笑みを零す。

「残念だが、それは教えられない。君には悪いが、九校戦の会場で眠りこけている間にここまで連れて来させてもらったよ」

「……どこどこ?」

「横浜にあるホテルだ。もつとも、すぐにここを出発することになるがね」

「ほーほー。——あれっ? ベルトはどこだ?」

「ああ、ベルト型のCADか。なかなか珍しい物みたいだが、君に反撃されると厄介なんでね、君が寝ている間に外させてもらったよ」

幹部の話聞きながら、しんのすけは頭の中で状況を整理する。

眠っている間にホテルに連れ込まれ、ズボンのベルトを外される。

それが意味するところとは——

「いやあああああ! けだものおとおお!」

「——はっ?」

「オラが寝ている間にオラの体を弄んだなんて、オラもうお嫁に行けないiiiiiiii!」

「ちよ、ちよつと待て! そんなことはしてないし、そういう目的で誘拐したんじゃない!」

「この前だつて、どっかの会社の偉い人が男の子にワイセツなことをして逮捕されたつてニュースがあったゾ! おじさんもその人と同じで、オラみたいな若くて格好良くてちよつと愛嬌もある男の子が好きなんでしょ!」

「自己評価凄く高いな! つて、そうじゃない! 断じてそんなこと

は無い！ 私は普通に女性が好きだ！ それも10代なんて子供じゃなく、どちらかというとな上の方が——」

「おい、何を話してる！ 今はそんな場合じゃないだろ！」

どんどん話が変な方向に逸れていくのを、別の幹部が一喝したことで食い止めた。何やら色々とかミングアウトしそうになっていた幹部はハツとした表情になり、そして最初の余裕の笑みに戻った。もはや手遅れのような気もするが。

一方しんのすけは、一頻り騒いで満足したのか落ち着きを取り戻し、先程まで自分が眠っていたソファで脚を組んでいた。まるで自分の家のような寛ぎっぷりである。

「んで、なんでおじさん達はオラを誘拐したの？ お金？」

「いいや、金ではない。我々の目的は、おまえ自身だ」

「いやああああ！ けだもの——」

「違う、そうじゃない！ 確かにそう聞こえたかもしれないけど！」

「もう良い。コイツに自分の末路など教えてやる義理は無い。さっさと本国に連れていくぞ」

会話をする度にペースを乱されることにいい加減嫌気が差したのか、別の幹部がそう言って会話を打ち切った。それに併せて、黒服の男が剣呑な雰囲気だしんのすけへと近づいてくる。

それを感じ取ったしんのすけが、若干眉を寄せてその場から立ち上がった。

「おっと、反撃するつもりかね？ CADも無いこの状況でか？」

「君が反撃するとなれば、我々としてもそれなりの対応をしなくてはいけなくなる。君が五体満足でいられる保障は無いと思いたまえ」

じりじりと黒服が近づいてくる中、しんのすけは——

*

*

*

「『主人公補正』？」

「ええ、私達の間では便宜上そう呼んでいますわ」

アジトへと向かうヘリの中で、達也は正面に座るあいから説明を受

けていた。

「元々は創作におけるスラングのようなもので、簡単に言えば『主人公が活躍するために物語が都合の良いように展開する』といったものですわ。どんなに成功する可能性が低い作戦も一発で成功させたり、主人公がピンチのときに能力が覚醒して敵を倒したり、探偵物で主人公の行く先々で事件が起こるというのもこれに当て嵌まりますわね」
「ええ、何となくですが想像はつきます。——で、それが今回の件とどう関係が？」

藤林にとつては既に知っているからか特に耳を傾ける様子は無く、黒磯はヘリの操縦という自分の役割に徹している。なのであいの講義を受けているのは、普段は誰かに知識を披露する機会の多い達也のみとなっていた。

「『無頭竜』のアジトについては、私達の方でも搜索はしておりまして。諜報に関しては一流と称しても良い腕前を持つ方々で、今回のアジトについても1日もあれば簡単に割り出せると思っていたのです」
やはり世界有数の企業グループともなれば諜報部門の1つや2つは持っているものか、と達也はそのことに触れることは無かった。

「ですが結論から言えばアジトを特定するには至らず、結局見つけられたのはしん様が誘拐された後となってしまいました。達也さんが雇った女性の方と、タイミング的にはほぼ一緒ですわね」

「つまりそれに、先程説明した『主人公補正』が関わっている？」

達也の質問に、あいは首肯して説明を続ける。

「本来の彼らの実力を考えれば、既にある程度エリアが絞れている段階でのアジト搜索にここまで時間が掛かるなど有り得ません。しん様自身、もしくはしん様に近い味方が活躍する場を作り出すために、『主人公補正』がその方々の搜索を妨害していた、というよりも本来の実力を発揮できない状況にしていた、ということでしょう」
「たまたま、ということはありませんか？」

「確かに今回の件のみを見ればたまたまである可能性も否めませんが、こういったことが『サザエさん時空』が発生していた時期から割と頻発していたんですよ。——そうですね、藤林さん？」

あいが達也の隣に座る藤林に話題を振ると、彼女は真剣な表情で頷いて達也へと向き直った。観察力に優れた彼の目には、その表情の裏に若干の疲れが滲み出ているのが分かる。

「彼の『主人公補正』のサインは多種多様で、我々でも完全に予想はできないの。敵が本来の実力を発揮できずにあつさりやられるならまだ良いけど、今回みたいに味方にその影響が出るときもあるから私達も任務に就くときは戦々恐々よ。——もしくは彼自身にその影響が出るときもあるわね。彼がクジ引きで旅行券を当てたときなんか最悪ね、ほぼ確実に何かあるもの」

「とはいえ、しん様が英雄と呼ばれる立場でありながらそれを邪魔に思う組織が排除に動こうとしないのは、この『主人公補正』のおかげでもあるんですの。様々な効果を発揮する『主人公補正』ですが、しん様と敵対する者や組織はほぼ確実に悲惨な目に遭いますから」

「逆に彼の立場を利用してしようと権力者などが動いたりしないのも、同じ理由によるものだけだね。下手に味方と認識されて事件に巻き込まれたり、1歩間違つて自分が彼の敵だと認識されたりするリスクを考えれば、ね」

2人の話を聞いて、達也は以前から秘かに抱いていた疑問が氷解するのを感じた。しんのすけが世界中の有力者から英雄と称されているながら、普通の人間と同じような生活を送れていることを常々不思議に感じていたのである。もともと、年に1回以上は必ず何かしらの事件に巻き込まれる生活を『普通』と表現できるかは定かではないが。

そしてそれと同時に、彼が関わった事件で驚くほど死者が少ない理由についても、おそらくこの『主人公補正』が関わっているのだろうと推測できた。何とも信じ難い話だが、信じなかったところで状況が変わらない以上そう考えるしかない、というのが達也の偽らざる感想だった。

しかしそうだとすると、新たな疑問が出てくる。

「ですが今回の『無頭竜』の動きは、しんのすけへの明らかな敵対行動です。奴らはしんのすけの『主人公補正』を知らなかったのでしょうか？」

「いいえ、さすがに『無頭竜』ともなれば知らないはずがないわ。『主人公補正』が働いたからこそその行動だったという見方が一番自然だけど、それを差し引いても彼を手元に置いておきたいと奴らが考えたとしても不思議じゃないわ」

「手元に置いておきたい、ですか」

「ええ、そうよ。何てったって彼は——」

「藤林さん、そこまでで」

途端に不機嫌な声色で藤林の言葉を遮ったあいには、藤林は特に気分を害した様子も無く軽く肩を竦めるに留めた。達也がその様子に訝しげな表情を浮かべるが、すぐに何かに思い至ったようにわざとらしく視線を外に遣る。

眼下には、夜の闇すら弾き飛ばすほどに煌々とした明かりを常に放つ街並みが広がっていた。富士演習場から横浜中華街までは直線距離で約80キロ、障害物も無い空路ならば如何に横浜といえど『長距離』の内に入らない。

「あと3分ほどで目標ポイントに到着するわ。そこでヘリから降りた後、すぐさま状況を開始するわね」

「分かりました。——それにしても、最初にヘリで現場に向かうと知ったときはどうかと思いましたが、確かにこれだけの物を用意できれば、発見されるリスクはかなり減らせそうですね」

世間話のような気軽さで達也がそう言うと、あいが何やら含みのある笑みを浮かべた。

「確かにそうですね。——もともと、今頃あちらさんはそれどころではないでしょうし、普通のヘリで近づいても気づくことすらできるか分かりませんが」

「……何か自分に隠していることがあるようですね」

「隠してるわけではありませんわ、ただ単に私自身も知らないだけでして」

「とはいえ、とあいはそう前置きしてこう続ける。」

「先程説明した『主人公補正』についてですが、藤林さんは『我々でも完全に予想はできない』と仰いました。つまり裏を返せば、ある程度

の予想を立てることは可能ということですよ」

そうしてあいはいは、正面の達也に向けてニツコリと優雅な笑みを浮かべた。

「そしてその種を蒔いたのは、他ならぬ達也さんです。——どうもありがとうございました」

「……………、あつ」

どうやらあいの言わんとしていることが分かったようで、達也は小さく声をあげた。

申し訳ないことをしたかもしれない、というほんの少しの罪悪感と共に。

*

*

*

“無頭竜”がアジトとしているホテルは高所得旅行者向けの豪華な内装をしているが、それに反してその造りはかなりシンプルだ。

正面玄関を入ると天井の高いロビーが客を出迎え、その中央には樹木をモチーフとしたガラス製のオブジェが鎮座している。そのオブジェの周りは最上階まで吹き抜けとなっていて、ガラスの枝が天井に向かって伸びている。その奥にエスカレーターやガラス張りのエレベーターがあり、宿泊客はそれで階層を移動することになる。

基本的にどの階層も回廊となっており、中層階は客室、最上階には数種類のレストランが軒を連ねている。中華街にあるホテルらしく中華を専門としたものが最も多いが、寿司や天ぷらなど和食料理を出す店もあるし、朝食バイキングの会場でもある店は洋食をメインとしている。

「うーん、さすがに表からじゃ階段とか分からないか…………」

しんのすけがこのホテルの裏口に連れ込まれるのを目撃した遙が、レストランが並ぶ回廊の手すりに寄り掛かりながらポツリと小さく呟いた。

ちなみに彼女は現在、先天性スキルである“隠形”によって姿を隠しているため、先程から彼女の前を通り過ぎる宿泊客は彼女の存在に

気づく素振りも無かった。いくら一般人も出入りしているホテルとはいえ犯罪シンジケートのアジトであり、よつてどこで誰が見ているのか分からないと警戒してのことである。

——だとしたら、やっぱり“中”を探る必要があるか……。

遙が目を向けるのは、廊下の行き止まりにある『STAFF ON LY』と書かれたドア。このホテルの隠された“本当の最上階”に辿り着くには、関係者しか入れないスペースに潜入する以外に方法は無さそうだ。

しかしそれは、奴らのテリトリーに入り込むことを意味する。過去に公安の人間として（不本意ながら）潜入捜査を数多く任され、いつの間にか“ミズ・フロントム”というコードネームで呼ばれるようになった彼女だが、何度やってもこの恐怖と緊張は慣れないものだ。

遙は小さく深呼吸して覚悟を決めると、カーペットによって足音が吸収される廊下を歩いてドアのすぐ近くまで進んでいった。姿を消すとはいえ障害物を通り抜けられるわけではないため普通にドアを開ける必要があるのだが、誰もいない状況でドアが開閉するなど怪しいことこの上ない。なので彼女は潜入するとき、誰かがそこを開けるのをひたすら待つことが多いのである。

長時間待つことも視野に入れていた遙だが、意外にもドアが開いたのはそれから1分も経たない頃だった。

もっとも彼女にとってそれ以上に意外だったのが、ドアを開けた人物だった。

「おおっ！ やつと外に出られたゾ！」

「しんちゃん!？」

「おおっ、遙ちゃん！ どっから出てきたの!？」

まさに救出しようとしていた人物がいきなり現れたことで“隠形”を解除して詰め寄る遙と、顔見知りのカウンセラーが何も無い場所からいきなり姿を表すのに遭遇したしんのすけ。2人の驚愕の音がホテルの廊下に響き渡り、宿泊客からの咎める視線の集中砲火を浴びる結果となった。

「そうだ、遙ちゃん！ 早くここを脱出するゾ！ ここ、悪い奴らのア

ジトなんだゾ！」

「ええ、大体の事情は分かつてるわ！ 近くに車を停めてるから、そこまで——」

がちやっ。

2人がそんな遣り取りをしていたまきにそのとき、しんのすけが今しがた出てきたドアが再び開かれ、中から屈強な体つきをした黒服の男達が数人ほど姿を現した。

彼らは目の前にいるしんのすけと、その隣にいる遙を交互に見遣り、襟元の無線に呼び掛ける。

「ターゲットを発見、仲間と思われる女諸共捕らえます」

「——逃げろおっ！」

「ひいっ——」

しんのすけが叫びながら遙の手を握ってその場から逃げ出し、彼女は口から漏れ出る引き攣った悲鳴を置き去りにしながら引っ張られていった。

当然ながら、そんな2人を追い掛ける黒服の男達。

そしてそれと同時に、同じ階層にある他の『STAFF ONLY』と書かれたドアが一斉に開かれ、そこからも同じような黒服の男達が数人ずつ廊下へと飛び出してきた。

「おおっ！ 何かいっぱい出てきたゾ！」

「嘘でしょ！ 私、戦闘力とか皆無なんだけど!？」

高級ホテルを舞台にした、盛大な鬼ごっこが幕を開けた。

第39話 「みんなと一緒に鬼ごっこだゾ」

その男は、とある芸能プロダクションの3代目社長だった。社長とは言っても先代社長である親からその地位を譲り受けただけに過ぎず、エンタメ業界の厳しさというものをその身で感じたことなど1度も無い。彼にとって社長の椅子というのは、刹那的な虚栄心を満足させるための手段でしかなかった。

そんな彼は現在、横浜中華街にある高級ホテルの最上階にある中華レストランにて、1人の女性と食事を共にしていた。少女を卒業したばかりの瑞々しさと薔薇の花束のような豪華な色艶を兼ね備えたその美女は、彼のプロダクションに所属する女優であり、デビューしてから5年で確固たる地位を築き上げた稼ぎ頭である。

彼にとつてタレント達とは、いわば“宝石”のようなものだった。磨き上げたりカットして付加価値を与えるのが自分の仕事だという意味でもあるし、たとえば他の職人が磨いたものでも金さえ積めば買収れる“商品”でしかないという意味でもある。

そういった意味では、その女性は彼が今一番お気に入り“アクセサリー”と言える。元々は顔が良いだけの大根役者だったのをここまで育てたのは自分だと思っており、その労力に対する正当な報酬として“良い想い”をするのは当然だと考えている。そして彼にはそんな女性が、それこそ数十人はいた。

「どうだい、このレストランの料理は？ なかなかの物だろう？」

「ええ、そうね。さすが人気のホテルならではのわね」

アルコール片手にそう評価する彼女に、男は得意気な笑みを浮かべている。自分が料理を作ったりプロデュースしたわけでもないのに、なぜか自分が褒められているかのような態度で胸を張っている。

チラリ、と周りに目を遣る。高級なだけあつて客層も身なりや言動に気を遣う富裕層が多いが、そんな彼らの間でも彼女の顔が知られているのか、露骨にならない程度にチラチラとこちらを窺っていることが分かる。自分のアクセサリーに皆が見惚れているのを肌で感じ、男はますます悦に入った様子だった。

一頻り下衆な欲求を満たしたところで、男は心の中で気持ちを切り替えた。こうしてわざわざ高級なレストランを予約して彼女を連れてきたのも、ひとえに「見返り」を求めてのことだ。もっと言ってしまえば、男としての「より直接的な欲求」を彼女で満たすためである。

彼女だつて馬鹿ではない。こうしてホテルのレストランでの食事を了承したということは、少なからずそういった展開になることは織り込み済みのはずだ。男は逸る気持ちを抑えつつ、コホンと咳払いをしてから口を開いた。

「なあ、ところで今夜は——」

「ねえ。何か騒がしくない？」

他ならぬ彼女に出鼻を挫かれたことに怒りの1つも湧いてくるが、それを懸命に抑えながら彼女の視線を目で追って店の入口を見遣つた。

すると、

「おおっ！ お邪魔しまあす！」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

高級レストランには似つかわしくない騒がしきで店へと駆け込んできたのは、十代後半の少年と二十代中頃の女性。少年が学校の制服らしき装いだからか、女性の方も学校の新人教師、もしくはそれに類する職業に見えてくる。

そんな男女が2人きり、しかも場所は高級ホテル内のレストラン。見る者によっては色々とその関係を邪推してしまいたくなる組み合わせだが、客達がそんなことを考えることは無かった。

というより、できなかつた。

ズドオンツ——！

「うわああああ！」

2人の直後に入ってきた黒服がその手に持っていた拳銃を発砲し、夜景を一望できる壁一面の大きなガラス窓にヒビが入った。客達が一斉に混乱と恐怖で悲鳴をあげ、次々と椅子から立ち上がり店の奥へと逃げていく。

当然その中には、芸能プロダクションの社長の姿もあった。何なら真っ先に逃げていた。連れの女性が何やら文句を言っているのも気にせず、初老の男性客をも押し退けて真っ先に逃げていた。人一倍悲鳴も大きかった。

完全に余談だが、後日2人は別れた。

「……………」

客が奥に移動したことで見晴らしが良くなったフロアに、拳銃を発砲した黒服と別の黒服2人が足を踏み入れた。幹部の部屋にいたジエネレーターと同じ格好をしているが、こちらは意識も感情も存在するごく普通の人間である。

先頭の黒服が、素早くフロアを見渡した。テーブルの上には所狭しと並べられた中華料理が湯気をたてており、先程の騒ぎのせいか幾つかひっくり返ってテーブルクロスや床を汚している。店の奥では体を震わせて壁際に貼りつく客達が、恐怖に満ちた顔でこちらの様子を窺っている。

その客達の中に、しんのすけと遙の姿は無かった。廊下に出られる唯一の出入口では別の仲間が3人ほど見張っているため、見つけたら反応があるはずだ。なので姿を隠しているとすれば、厨房などのバックヤードか、テーブルクロスが床ストレスまで垂れているテーブルの下くらいだろう。

先頭の黒服が他の仲間に目配せし、厨房の方へと1歩足を踏み出した。

と、視界の端でテーブルクロスが揺れた。

フロアにいる黒服3人が一斉に反応し、そちらへと顔を向ける。

「ほいっ」とー」

テーブルの下から飛び出したしんのすけが、腕を一振りして黒服達にそれぞれ何かを投げつけた。黒服達はそれに気づいて防御の反応を見せるが間に合わず、的確なコントロールでそれらは黒服達の口元へと跳んでいき、そして彼らの口の中へと入っていった。

まさか毒物か、とそれを咄嗟に吐き出そうとするが、思っていたより柔らかかったそれが口の中で破裂する。

そのの正体は——具材の旨味が溶け込んだ熱々のスープが特徴の「シヨールンボー小籠包」だった。

「——あつづー！」

一気に口の中を蹂躪する熱が与える刺すような鋭い痛みにも、黒服達の体が本人の意思とは無関係に強張り固まった。

その隙を突いて、しんのすけが入口に近い黒服2人組へと猛スピードで駆け寄った。現代の魔法師にとってCADはほぼ必須ツールとなっているが、魔法発動の高速化と効率化を補助する物であって、それが無ければ発動しないわけではない。おそらくテールブルの下に隠れていた間に仕掛けたのであろう自己加速術式は、何の問題も無く発動していた。

「アクシヨーン、キーツク！」

その勢いのまま床を蹴って跳び上がり、技名を叫びながら黒服にドロップキックをかました。しかし普段の「アクシヨンキック」と違って攻撃力強化などの補助魔法は掛かっておらず、つまりは自己加速術式の勢いでただ蹴りを入れただけのことだ。

しかし黒服達に対してはそれでも十分な威力で、蹴りを直に食らった黒服がもう1人の仲間を巻き込んで入口まで吹っ飛ばされていった。

そして、それを見たもう1人の黒服がしんのすけに反撃しようと拳銃を向け、

「うらあああつー！」

「——！」

先天性スキルの「隠形」で姿を隠していた遙が横からタックルをかまし、不意を突かれた黒服が横向きに倒された。

すぐさま反撃に出ようとする黒服だが、遙が即座にスキルで隠していたスタンガンで黒服の体に押しつけた。高圧の電流が黒服の体に流れ込み、そのショックで黒服の体は客達とは違う理由でビクビクと震え、そして動かなくなつた。市販のスタンガンには気絶に追いやる

ほどの威力は無いため、おそらく口に出すのは憚られる代物だろう。
「おおっ！ 凄いゾ、遙ちゃん！」

しかしそんな知識など無く、フィクションのイメージでそんなものだと思っているしんのすけは、それを気にすることなく不思議な能力を使う彼女を賞賛していた。

しかし賞賛された遙は、それに対して喜びを表すことなく険しい表情のままだった。

「とにかく！ 今はここから脱出しないと！」

フロアにいる3人の黒服は現在床に倒れ伏しているが、そう時間が経たない内に再び起き上がるだろう。それに表にはまだ3人の黒服が待ち構えており、そして仲間がやられたことで店内に入ろうとしていた。

いつそ厨房からスタッフ用の通路を通るか、と遙が入口から目を逸らした、そのときだった。

「ぐっ——」

「がはっ——」

「ぶっ——」

入口にいた3人の黒服が次々と苦悶の表情を浮かべ、短い悲鳴と共にその場に崩れ落ちた。

突然の展開にしんのすけと遙が目丸くする中、

「何してんだ！ 早くここから出る！」

倒れる黒服達のすぐ傍に立って呼び掛けるのは、全身や顔を黒いローブで覆い隠す如何にも怪しい人物だった。聞こえてくる声は成人男性のものだが、今のボイスチェンジャーはほとんど肉声と違和感が無いため参考にならない。それにその小柄な体軀は、成長期を迎える前の少年もしくは女性と見なすこともできる。

遙としては突然現れた怪しい人物の言葉を素直に信用できるはずも無かったが、しんのすけが「助かったゾ！」と即座に入口へと走っていったため慌ててその後を追いつけた。その人物とは入口の狭い箇所を擦れ違おうが、特に攻撃を仕掛ける様子も無く黙って2人を見送った。

廊下を走ってエスカレーターへと向かう2人の背中を眺めながら、その人物は呟いた。

「さすが『主人公補正』、とんでもねえな……」

「遙ちゃん、何かたくさんの敵をドツカーンってやつつけられる魔法は無いの?」

「カウンセラーにそんなの求めないで! 私の能力は自分と小物を隠すくらいで、他の人を一緒に隠すことすらできないんだから!」

「んもう、役に立ちませんなあ」

「役に立たないって……! あのね——」

「おおっ! また来たゾ!」

「ひっ——」

レストランを脱出してエスカレーターを数段飛ばしで下りていた2人だが、2階層ほど下りたところで下からエスカレーターを上ってくる黒服を見つけ、慌ててそこから離れて再び廊下を走り始めた。

エレベーターは一時的に密室状態となってしまうため、入口に先回りされてしまったらどうしようもない。非常用の階段を使うことも考えたが、そちらも狭いため黒服達と鉢合わせになったら相当不利だ。

——もし逃げるとするなら……。

遙がチラリと視線を向けたのは、廊下を走っているときにずっと視界の端に見え隠れしていた、脇下ほどの高さのある木製の柵。

そしてその向こう側にある、1階のロビーを見下ろせる吹き抜けだった。ガラス製の樹木をモチーフにしたオブジェがそれぞれ本物のように枝をうねらせ、現在遙達が走っている階層を突き抜けて上へと伸ばしている。

ガラス製とは言ってもロビーに飾るオブジェなので強度は高く、おそらく大人が跳び移った程度で壊れるような代物ではない。それにガラス製の枝も本物のように隙間無く張り巡らされているため、枝伝いに1階まで下りることもできるだろう。

迷っている暇は、無さそうだ。

「しんちゃん！ あそこのオブジェ、跳び移れる!？」

「おっ？ 多分ダイジョーブだゾ」

「オツケー！ 今の内に、枝の配置をできるだけ憶えておいて！」

遙はそう言うやポケットに手をつ突っ込み、そして出した。その手は何か握っているかのようにお椀状になっているが、傍目にはどうしても何かあるようには見えなかった。

しかし遙は、挟み撃ちするようにこちらへと向かってくる黒服の集団を一瞬だけ見遣ると、それぞれのグループに何も見えないそれを投げつける仕草をした。彼女の能力から逃れて一瞬だけ見せたその姿は、テニスボールよりも更に一回り小さいボールだった。

そしてそれらは黒服の目の前で破裂し、そこから吹き出した白い煙があつという間に彼らを包み込むように辺りに充満していった。その広がる速度はかなりのもので、1秒ほどで彼らだけではなく柵の上に両足を乗せるしんのすけと遙の辺りにも侵食して真っ白な世界を作り上げていく。

故に天井に煙が回るのも早く、それに反応した火災報知器が喧しく耳障りな音をホテル中に響かせた。階下の宿泊客や従業員がそれを聞いて咄嗟に頭上を見上げ、そして吹き抜けからもうもうと広がる白い煙に悲鳴をあげる。

しかし悲鳴があがったまさにその瞬間、勢力を伸ばしていた白い煙が突如大きく揺らめき、見えない巨人に押されるように吹き飛ばされていった。何もかも濃い白に塗り潰されていたその箇所が、みるみるその姿を取り戻していく。

煙が充満する前は柵の上に乗っかっていたしんのすけと遙が、今はロビー中央に鎮座するガラスの樹に跳び移り、木の枝を伝ってスルスルと下りていた。運動能力に優れたしんのすけはともかく、遙もカウンスラーとしての優しい雰囲気とは裏腹にその動きに淀みが無かった。九重八雲の門下生として、それなりに鍛えているということだろう。

しかし煙が晴れたことで2人を見つけた黒服達が、一斉に拳銃を抜

いてガラスの樹のオブジェへと銃口を向けた。しんのすけは既にそこから跳び下りて1階に着地しているが、遥は今まさに跳び下りようとしている最中であり、咄嗟に動作を切り替えられない絶妙のタイミングだった。

「――！」

BS 魔法師である彼女は、「隠形」以外の魔法を使うことができない。彼女が着ている服は防弾防刃仕様なのである程度はダメージを緩和できるが、それでもこれだけの人数から一斉に銃撃を受ければただでは済まない。

遥は覚悟を決めて奥歯を噛み締め、オブジェから跳び下りた。

そして彼女は無傷で、1階に着地した。頭上からの発砲音は、1回も鳴らなかつた。

さすがに変に思った彼女は、訝しげな表情で頭上を見遣る。

「――」

黒服達は1人残らず倒れ伏し、そしてその中心に全身や顔を黒いローブで覆い隠す如何にも怪しい人物が立っていた。ローブで隠れた顔をこちらに向けているが攻撃してくる様子は無く、むしろ「どうぞ逃げてください」とばかりに軽く一礼してみせる。

先程の人物と同一なのか、それとも別人なのか。そもそも、なぜ自分達に加担しているのか。

「遥ちゃん！ 早く逃げるゾ！」

「――ええ、そうね」

気になることは山ほどあるが、今はここから脱出することを優先し、遥はしんのすけと共にロビーを走っていった。

困惑した様子の宿泊客が、2人の背中を見送った。

*

*

*

階下でまさに大騒ぎの鬼ごっこが繰り広げられていたそのとき、一般的には知られていない「本当の最上階」に身を隠す「無頭竜」の幹部達は、そんな喧騒からも切り離されて優雅に戦果を待っている――

—わけではなかった。

「野原しんのすけめ！ とことん我々を虚仮にしてくれ！」

高級ブランドスーツで身を飾り、シルクのハンカチで頭から流れる血を拭いつつ、金銀宝石で煌びやかな指輪を嵌めた手で不器用に荷造りしている幹部の1人が、苛立ちを隠さずにこの場にはいない人物を大声で罵った。他の幹部達はそれに返事をしなかったが、皆の思いが1つなのは分かりきっていた。

その部屋は、まさしく「惨状」の一言に尽きる有様だった。家具はほとんどひっくり返っており、先程纏めたばかりの荷物が部屋のあちこちに散らばっていた。それはコンピューターシステムにも記録されていらない極秘帳簿の類なので、部下に荷造りを任せるわけにもいかず、よって幹部自ら汗を掻いて動くしかなかったのである。とはいえ部下は全員が階下の鬼ごっこに参加しているため、そもそも手伝うことなどできないのだが。

その光景はまさしく、嵐が通り過ぎたかのような慌ただしさだった。

いや、この表現は正確ではないだろう。

なぜならこの部屋では、本当の「嵐」が巻き起こっていたのだから。

「まさか奴が、CADも無しにあれほど強力な魔法を使えるとは……」

ジェネレーターがしんのすけを取り囲み、今まさに飛び掛かろうとしていたそのとき、彼を中心として発動したのは、台風と見紛うほどに荒れ狂う暴風だった。

スイートルームほどに広いとはいえ密室の部屋であるためハリケーンの逃げ道も無く、幹部やジェネレーターはその場で立つこともできずに座り込んで何かにしがみつき、それが叶わぬ者はテーブルなどの軽い家具と一緒に壁に叩きつけられ、そして極秘帳簿の詰まったスーツケースは洗濯機に放り込まれたように宙を舞いながら中身を撒き散らした。

しんのすけはとにかくこの場から逃げようと、CAD無しでできる最大出力を何も考えずに発動していた。CADが無いためとにかく

意識を集中する必要があり、なので普段なら高らかに叫ぶ「アクシヨン・ローリング・ハリケーン」という技名を口にする余裕も無かった。しかしその甲斐あつて幹部達を一時的に行動不能にでき、その隙にしんのすけはこの部屋から脱出できたのである。

「やはり一度ここに連れ帰らず、直接港に向かうべきだったんだ！もしくは抵抗できぬよう、四肢でも切り落とせば良かったんだ！」

「搬送中に目を覚まして反撃されたら目も当てられんし、直接的な危害を加えたらいよいよ我々の命は保障されなくなる！ 奴の「主人公補正」がどう働くか、完全に予想できないんだぞ！」

「そもそも奴を誘拐した時点で、「主人公補正」は我々に牙を剥いているんだ！ ボスの粛清から逃れるためにそれらを敵に回すと決めたのではないのか!?!」

「とにかく今は一刻も早く荷物を纏め、いつでもここを発^たてるようにするんだ！ 奴の捕獲が成功しようが失敗しようが、そこが変わることは無い！」

最後の言葉は幹部達の共通認識だったようで、そこで彼らの言い争いは幕を下ろした。その表情から怒りが消えることは無かったが、どんな愚痴を零したところで今の彼らにできるのは荷造りくらいだ。あるいはそれを認めたくないかののように、彼らは黙々と荷物を纏めていく。

しかし彼らの作業の手は、壁に寄り添っていたジェネレーターの間もつた悲鳴でピタリと止まった。

「な、何だ!?!」

幹部達はそちらに目を向け、そして絶句した。

南側の壁に、大きな穴が空いていた。突き破られたのではなく、切り裂かれたのでもなく、砕かれたのでもなく、鉄骨と鉄筋と鋼管を残してコンクリートが砂とセメント粉末になって崩れ落ちていた。ジェネレーターの苦痛は、その壁に掛けていた情報強化の魔法をむりやり破られた反動によるものだった。

しかしその苦痛も、一瞬後には綺麗さっぱり無くなっていた。

当の本人が立体映像のようなノイズを走らせ、着ている服ごとその

姿を掻き消したからである。一瞬だけ青と紫と橙の混じった炎がポツと光り、スプリングラーが作動する暇も無く消えた。もはや彼がそこにいたことを証明するのは、絨毯に落ちた僅かな灰だけだった。叫ぶことも喚くこともできず、呆然とそれを見つめていた幹部達の耳に、組織内でしか使われていない秘匿回線からの呼び出し音が鳴った。

たまたま近くにいた幹部の1人が、受話器を取る。

『Hello, No Head Dragon 東日本総支部の諸君』

不自然に陽気な口調でそう挨拶したのは、少年と呼べるほどに若い声だった。

「……何者だ?」

『富士では世話になったな。ついては、その返礼に来た』

その返事と共に、幹部を守っていた領域干渉のフィールドが突然消失し、それを維持していたジェネレーターが先程と同じように僅かな灰を残して文字通り姿を消した。

幹部達が恐怖で息を詰まらせる間にも、部屋にいた2人のジェネレーターがほぼ同時に同じ運命を辿った。立て続けに発生した熱源にさすがに反応したのか、スプリングラーが作動して高圧の霧が天井から降り注ぐ。

「ど、どこだ! どこから攻撃している!」

『さあな、自分で探してみたらどうだ? ——おっと、無駄な真似はお勧めしない。今その部屋から通信できるのは俺だけだ』

その忠告の通り、幹部の1人が飛びついた有線電話は断線のシグナルを返すのみで、携帯端末で無線電話を繋いでも返ってくるのは最初と同じ声のみだった。

「む、無線電話まで……。いったいどうやって……」

『電波を収束した。手段はおまえ達を知る必要は無い。——さて、本題に移ろう』

「待て、待ってくれ! 我々はこれ以上、九校戦に手出ししない!」

『九校戦は明日で終わりだ』

「九校戦だけではない! 我々はすぐにでもこの国から出ていく!

二度とこの国には戻ってこないし、他の連中にもこの国を手出しさせたりしない！ 西日本総支部も引き揚げさせる！」

『おまえにそんな権限があるのか、ダグラスウオン黄？』

名前が知られていることに底知れぬ恐怖を覚えながら、黄は必死で声を振り絞った。

「私はボスの側近だ！ しかも私にはボスの命を救った『貸し』がある！ 命の借りは、救われた数だけ望みを叶えることで返されるのが我々の掟だ！」

『今それを使つても良いのか？ 自分の命を買い戻すのに必要だろうか？』

その問い掛けに、他の幹部からの憎悪と殺意が黄に突き刺さった。今ここで仲間割れするのは得策ではない、と黄は慌てて言葉を取り繕う。

「違う！ そんなことをしなくても、ボスは私を切り捨てたりはしない！」

『おまえにそれだけの影響力があると』

「そ、その通りだ！ だから——」

『で、それをどうやって証明する？』

「しよ、証明……？」

戸惑いの声をあげる黄に助け船を出したのは、他ならぬその少年だった。

『そういえば、『無頭竜』とは元々おまえ達が名乗ったものではなく、敵対組織によって付けられたものらしいな。ボスが部下の前ですら姿を現さず、部下を直々に肅正するときも意識を奪ってから自分の部屋に連れてこさせる徹底ぶりだと聞く』

自分の名前だけならまだしも、電話の相手はあまりにも自分達のことを知りすぎている。

いったいこの少年は何者なのか、と黄は戦慄した。

『おまえがボスの側近だというなら、当然ボスの顔は見たことがあるな？』

「……私は拝謁を許されている」

『ボスの名前は？』

あまりに簡潔な問いに、黄は口を閉ざした。長年にわたって刷り込まれた恐怖心が、眼前の恐怖を僅かに上回る。

しかし、

『答えられないか。仕方ない、10秒ごとに1人消すとしよう。最初
は誰が良い？ その国際指名手配犯・ジエームズチユー朱なんてどう
だ？』

名指しされた朱がビクンと体を震わせ、そしてギロリと黄を睨みつける。少しでも首を縦に振ったら、その場で殺しに掛かるほどのプレッシャーを放っている。

「ま、待ってくれ……」

『自ら志願してくれても良いんだぞ、ダグラスス黄？』

『待ってくれ！ ——ボスの名前は、リチャードス孫だ』

『表の名前は？』

「……孫そんこうめい公明」

この後も黄は電話口の相手に言われるがままに、香港の高級住宅街にあるボスの住所やオフィスの名称、更には行きつけのクラブまで、ボスに関するあらゆる情報を訊かれるがままに喋った。他の幹部達もそれを見守るのみで、彼の口を止めようと動く者はいなかった。

「……私の知っている情報は、これで全てだ」

『こちらの質問も、とりあえずは終了だ。ご苦労だったな』

「では、信じてもらえるのか？」

『ああ、おまえは紛れもなく、無頭竜のボス・リチャードス孫の側近のようだ』

完全に打ちのめされ虚無感すら漂っていた黄の顔に、ほんの僅かだが喜色が浮かぶ。

『よっておまえ達を、我々の“客人”として招待しよう』

そして次の一言により、その喜色は即座に消え失せた。

「な、なぜ——」

『心配はいらない、最低限の衣食住は保障する。おまえ達のボスに肅清されるよりは遙かにマシな待遇を約束しよう』

「待て！　しかしそれは――」

『別に俺としては、このままここで殺してしまっても構わないんだが』
「……………」

『決まりだな。もうすぐ“迎え”がやって来る。大人しく待つが良
い』

黄が呼び掛ける暇も無く、電話が切れた。

そしてそれを待ち構えていたかのように、幹部達が次々と床に倒れ
ていった。悲鳴どころか呻き声をあげる暇も無く、プツリと糸が切れ
たように意識が消失していく。

「…………ターゲットの意識の消失を確認」

「それでは、これより移送任務に入ります」

それを見届けていたのは、黒いローブで全身を覆い隠す2人組だっ
た。

背の高い方は不快感を滲ませ、背の低い方は逆にどこか楽しそう
だった。

横浜市内にある高台――今世紀半ばまで“海に見える丘公園”と
呼ばれていたそこには現在、横浜港とその沖合を一望できるほどの超
高層ビル“横浜ベイヒルズタワー”が建てられている。ホテル・
ショッピングモール・民間オフィス・テレビ局などが居を構える複合
施設であり、京都に本部を置く魔法師の親睦団体“日本魔法協会”の
関東支部もここに置かれている。

しかしここが純粋な民間施設ではないという事実は公然の秘密と
いうものであり、ここには東京湾を出入りする船舶を監視する目的
で、国防海軍や海上警察が民間会社に偽装したオフィスを置いてい
る。魔法協会の支部がここに置かれているのも、有事に対する防衛手
段であるというのがもっぱらの噂であり、そして紛れもない事実であ
る。

そんなビルの屋上には、テレビ局の放映アンテナだけでなく、無線
通信の中継装置が置かれている。そしてそんな装置に何やら小型の

情報端末を押しつけ、もう片方の手でCADを操作する女性の姿があつた。

藤林だつた。

「彼〴〵は無事にホテルから脱出、そして〴〵無頭竜〴〵の幹部5人全員の捕獲を確認。——以上で作戦は終了よ、お疲れ様」

彼女からの労いの言葉に、達也は軽く頭を下げるだけで応えた。直線で約1200メートルにもなる距離からの対人狙撃魔法を成功させた彼だが、その顔に疲れはまったく見られない。超長距離精密攻撃が彼本来のスタイルであり、OTH(Over The Horizon)攻撃もこなす彼にとつて、この距離は苦労を要するようなものではない。もちろん、手を抜いているわけではないのだが。

むしろ達也が気疲れしているのは、わざわざ相手に電話を掛けて長々と嘯るような真似をしながら情報を聞き出したことに起因していた。あれは達也が自分の意思で行つたのではなく、独立魔装大隊の隊長である風間少佐からの指示によるものだ。

「達也くんのおかげで、〴〵無頭竜〴〵のボスについて重要な情報が色々と聞けたわ。ありがとうね」

「たかが犯罪シンジケートのボスの情報に、そこまで価値があるのですか？」

「あれはただの犯罪組織じゃないもの。——達也くんは、〴〵ソーサリー・ブースター〴〵って知ってる？」

突然の質問に、達也は特に疑問を挟まずそれに答える。

「名前くらいは。ここ数年で犯罪組織の間で急激に広まっている、画期的な魔法増幅装置だそうですね。正直、眉唾物だと思っていましたか……」

「ソーサリー・ブースターは実在するわ。そして或る意味では〴〵画期的な魔法増幅装置〴〵であることは間違いないの。魔法の設計図を提供するだけではなく、それを構築する過程も補助してくれるもの、と言つた方が分かりやすいかしら。術者本来のキャパシティを超える規模の魔法式形成を可能にする装置よ」

「それは……ブースター〴〵というよりも〴〵増設メモリ〴〵ですね」

達也のツツコミに、藤林は「まあ、俗称なんてそんなものよ」と苦笑いで返す。

そして再び、その表情を真剣なものに戻した。

「問題はこの装置の『原料』で、真つ当な企業ならまず手に入れることはできないし、国家でもバレたときのリスクがでかすぎる。だからこの装置は現在のところ、事実上『無頭竜』の独占供給状態なのよ」「つまり、その装置を買い付けたいがために、ボスの情報が必要だったということですか?」

「いいえ、我々はその装置の製造と供給を止めるために動いてるわ。私だったら絶対に使いたくないし、軍で使わせるわけにもいかない代物なの」

「つまりその原料は倫理に反したものである、と?」

達也の推測に、藤林は深く頷いた。

「ソーサリー・ブースター製造に必要なもの、それは——魔法師の脳よ」

「……そんなこと、できるのですか?」

達也が言葉を詰まらせたのは、その材料の非人道性によるものではなかった。

通常のCADの場合、その中枢部品である感応石（電子信号をサイオン波動に、サイオン波動を電子信号に変換する合成物）には人工的に作った神経細胞ニューロンが用いられる。その製造方法は、CAD開発の黎明期に倫理も良心も信仰も無視した動物実験や人体実験の末に確立されたものであり、その過程で動物や人間の脳細胞をそのまま使用しても上手くいかないことが結論づけられていたはずだ。

「通常の感応石とは仕様が違うけどね。1つのブースターでは1つの特定の魔法しか使えないし、その魔法も個々によって違う。だけど、ある程度のパターン化は可能なようね。製造時の残留思念によって魔法が変わるのならば、おそらく同じ種類の強い感情を与えれば、同じような魔法に設定することは可能みたいね」

「……脳を抽出する直前に大きな苦痛や恐怖を与える、と?」

「おそらくは」

「……蟲毒こどくの原理ですね」

達也の言葉に、藤林も同感だとばかりに頷いた。

「私達は魔法を武器とし、魔法師を軍事システムに組み込むことを目的とした実験部隊だけど、魔法師を文字通りの“部品”にすることを認めるわけにはいかないわ。その一線を踏み越えてしまったら、我々はもう“人間”ではいられなくなる」

「そういった感情を抜きにしても、魔法師の実力を拡張するとなれば軍事的にも脅威でしょうね」

「その通り。北米情報局N A I Aも同様の見解を持ってて、内情に協力を求めている。だから達也くん、今回は本当に助かったわ」

内情とは内閣府情報管理局のことであり、一高生徒である壬生紗耶香の父親・壬生勇三が所属する組織だ。USNAに貸しを作れたと喜ぶ藤林には悪いが、達也としてはそういった外交関連にまったく興味が無いのでどうでもよかった。

それよりも彼が気になるのは、

「お疲れ様でした、達也さん、藤林さん。しん様もあの女性の車に乗りましたし、それを見守りながら我々も戻りましょう」

ビルの屋上にあるヘリポートに直接ヘリが着けられ、その近くで待機していたあいが呼び掛ける。妙に落ち着き無くそわそわしているのは、おそらく遥と2人きりで車に乗るしんのすけが気になっているのだろう。

仕方がないので、2人はCADなどを素早く片付けてヘリに乗り込んだ。例の新作CADによるステルス魔法を発動させれば、もはやそこにヘリが存在していることなど眼下の通行人が気づくはずも無い。

そうして姿を隠した状態でヘリポートから飛び上がり、遥の運転する車の真上（といっても数百メートルは上空だが）にヘリを着けた状態になったところで、達也があいに向かって口を開いた。

「訊きたいことがあるのですが」

「はい、何でしょう？」

「ホテル内ではしのすけ達に協力し、“無頭竜”の幹部を無力化する者達がいきましたが、あれが先日仰っていた“家の者”ですか？」

「そうですね。あれで全員というわけではありませんけど」

「一企業が保有するには、随分と戦力が大きいように思えますが」

「備えあれば憂いなし、というヤツですわ。現にこうして、しん様を無事に救出することができましたしね。——世界征服なんて企んではいませんから、そんなに心配なさらないでくださいな」

「……………」

隣に座る藤林に視線を遣るが、彼女も正体を知らないようで小さく首を横に振っていた。

これ以上粘っても情報は得られないか、と達也は大人しく引き下がった。

それから基地に帰るまで、ヘリの中では一切会話は交わされなかった。

第40話 「九校戦が終わったゾ」

九校戦10日目。つまり、最終日。

この日行われる競技は、モノリス・コードの決勝トーナメントのみ。九校戦でもトツプクラスの人気を誇る競技であるだけに、会場は文句なしの満員御礼となっていた。残念ながら会場に入ることができなかった観客も、別の会場でライブ中継という形で試合を楽しめるようになっていた。

現在「岩場ステージ」で行われているのは、決勝トーナメントの第1試合。対戦カードは一高対九高であり、奇しくも新人戦と同じ組み合わせとなった。その雪辱を狙っているのか、九高の選手は皆闘志を漲らせて対戦相手を睨みつけている。

そんな彼らに対し、対戦相手である一高のメンバーは、いつも通りだった。

部活連会頭の十文字克人は悠然と構え、風紀委員の辰巳鋼太郎はどこか惚けた雰囲気を漂わせ、生徒会副会長の服部刑部少丞範蔵は生真面目に九高選手の挑発に鋭い視線で応戦している。

「やはり俺達とは安心感が違うな」

最終日だし今日こそは代表全員で応援しよう、と真由美が事前に呼び掛けたことで一高の応援席に座っていた達也が、フィールドに目を遣りながらそう呟いた。

「そんなことはありません！ 私はお兄様の勝利に不安を覚えたりなどしませんでした！」

「達也さんたちも立派でした！ とても堂々としていたと思います！」

すると彼の言葉を耳聴く拾い上げた深雪とほのかが、慰めだか激励だか分かりにくい返事をした。思わぬ行動に面食らった達也は、「口は災いの元」という言葉を胸に刻んで口を引き結んだ。

と、そんな達也の後ろから背もたれに体を乗り出してしんのすけが会話に乱入する。

「そうだゾ、達也くん。何てだったって、このオラがいましたからな！」

「いや、むしろおまえが一番見ていて不安だったんだが」

「そうだよ、しんちゃん。試合もそうだけど、昨日みたいなことはもうやらないでね」

「違うゾほのかちゃん、あれは悪い奴にむりやり——」

「はいはい。仲良くお喋りも良いけど、そろそろ試合が始まるからね」しんのすけの言葉を遮るように、真由美が苦笑い混じりで止めに入った。昨日の一件は彼女も詳しく知らないだろうが、達也の言動から何かあったのだろうと色々気を回しているようだ。達也はこっそりと、彼女に感謝の意を込めて頭を下げた。

試合開始のブザーが鳴ったのは、その直後だった。

と同時に、服部が真つ先に一高陣地から飛び出した。時々跳躍の魔法を交えながら、けっして脚力だけでは出せない速さで敵陣へと突っ込んでいく。

自分達こそが先手必勝を、と考えていた九高の選手達は完全に出鼻を挫かれた形となり、その動きを鈍らせてしまっている。突出したオフェンスを集中攻撃するか、最初の作戦通りに迎撃をディフェンスに任せて一高陣地へ突撃するか迷っている隙に、服部が最初の攻撃魔法を繰り出した。

上昇気流と共に九高選手の頭上に霧が生じ、自らの重さに耐えかねたように彼らの頭上にドライアイスの雹が降り注ぐ。

収束・発散・移動系の複合魔法である“ドライ・ブリザード”は、真由美の得意魔法である“魔弾の射手”の原型だ。真上から降り注ぐために岩陰に隠れてやり過ぎすこともできず、たとえ指で摘める程度の大きさだろうと何発も当たれば軽い脳震盪くらいは引き起こす。

九高選手の1人が、防御として落下速度をゼロにする仮想障壁を作り出した。ドライアイスの雹は一瞬だけピタリと止まると、重力に従って自然落下を行う。周りの水蒸気を凝結させながら地上へと落ちるドライアイスにより、彼らの周りだけ炭酸ガスを溶かし込んだ霧が発生する。

別の選手がその霧を追い払おうとするが、それよりも早く服部が第2の魔法を繰り出した。

土砂の粒子を細かく振動させることによって発生した摩擦電流を、土砂の電氣的性質を改変することによって増幅、それが一気に地表に放出されたために彼らの周りの地面が発光し、まるで無数に絡み合うヘビのように入り組んだ電光が明滅を繰り返した。

二酸化炭素が溶けて導電性が高まっている地面を伝って、同じように二酸化炭素が溶けている水蒸気で体を濡らしていた九高選手に襲い掛かった。

これこそが、複数の魔法が生み出す現象を組み合わせて個々の魔法の総和よりも大きな効果を生み出す「スリザリン・サンダーコンビネーション魔法」であり、その中でも服部が得意とする「スリザリン・サンダー這い寄る雷蛇」である。

1人は空中に飛び上がったために無事だったが、シルドを展開していた選手は電流をもらって食らって気絶、霧を吹き飛ばそうとしていた選手も咄嗟に霧の雫を振り払うことで威力を弱めたものの、片膝をつくほどの大ダメージを負った。

と、そのとき、空中に逃げた選手がぐもった悲鳴をあげて不自然な速さで地面に激突した。単一系統の術式において卓越した出力を誇る辰巳による加速魔法で、下方向へのGを掛けられたからである。

残り1人となった九高選手だが、倒れていく仲間に気を取られることなく服部へ向けて圧縮空気を撃ち出した。

しかしあと少しで服部に届くところで、リフレクター「圧縮空気は突如現れた“反射障壁”に阻まれた。それは服部の仕業ではなく、彼の400メートル後方にいる克人によるものだった。」

克人の魔法に守られながら、服部は一切の防御姿勢を取ることなく攻撃魔法を構築した。地面から舞い上がった砂が徐々に風を纏い、それらは加速度的に量と速さを増していき、やがて砂の濁流となって九高選手に襲い掛かった。彼は為す術も無くそれに巻き込まれ、意識を刈り取られた。

非常にレベルの高い魔法を見せつけて、一高が勝利を収めた。

*

*

*

「十文字くん、いる？」

選手控え室のインターホンを鳴らした真由美がドアに呼び掛けると、少しして上半身がタンクトップ、下半身がプロテクトスーツ姿の克人が姿を現した。

「すまないな、こんな格好で」

「気にしないで。別に裸ってわけじゃないんだから」

克人の言葉に、真由美はニツコリと笑ってそう返した。仄かに香る制汗剤特有のアルコールの匂いが、彼への印象を好ましくさせる。

「決戦のステージが決まったわ。ちよつと良いかしら」

「ああ」

それを伝えるだけならば、その場で言えば済む話だ。しかし真由美がわざわざ場所を移そうとしているということは、その話題が単なる隠れ蓑であることを意味している。克人はそれを即座に理解し、彼女の背中をついていった。

人気の無い場所まで移動したうえで遮音障壁を作り出した真由美が、ようやく口を開いた。

「父から暗号メールが来てたわ。師族会議の通達だって」

「ほう。俺のところには来ていないな」

克人の言葉に真由美は意外そうな表情を見せたが、暗号を解くには結構な時間1人になる必要があることを考え、チームメイトに怪しまれると十文字家が判断したのだろう。

「二昨日、一条くんが達也くんに倒されたでしょう？ それでまあ簡単に言うと『十師族の威厳を保つために、力を誇示するような派手な勝ち方をしろ』ってことらしいわ」

十師族はこの国の魔法師の頂点に立つ存在であり、常に最強の存在でなくてはならない。たとえ高校生の競技大会であろうとも、十師族の実力に疑いを残すような結果を放置しておくわけにはいかないのだろう。

「あの試合に関しては、一条将輝が負けても不思議ではないんだがな。何せ相手チームの選手に、あの野原しんのすけがいたのだから」

「まあ、それは普通の観客達は知らないことだしね。それに彼らとし

ては、しんちゃんに対しての“アピール”の意味合いもあるんでしょ」

「アピール？ どういった意味でだ？」

「それはもう、色々な意味だよ。それは家ごとに違うんじゃないかしら？ ——ごめんね、こんな馬鹿馬鹿しいことを頼んじゃって」

「いや、七草が謝ることではない」

そう言い残して、克人はその場を去っていった。

申し訳なさそうに眉を寄せる真由美を置いて。

溪谷ステージで行われているモノリス・コード決勝戦は、まさしく一方的な試合だった。

対戦カードは一高対三高。三高選手は先程から“1人”の一高選手に対し、氷の礫を飛ばしたり崖を崩して岩を落したり沸騰させたお湯をぶついたり、ありとあらゆる攻撃を集中して浴びせていた。

しかしその一高選手——克人は、まるで何も起こっていないかのようにならんとした表情で、悠々とステージを闊歩していた。彼の周囲に展開している障壁が、質量体の運動ベクトルを逆転させ、電磁波や音波を屈折させ、分子の振動数を一定に抑え込み、サイオンの侵入を阻害する。

十文字家の魔法師は、卓越した空間把握能力を磨き上げて数々の領域防御魔法を駆使することから“鉄壁”の異名を取っている。そしてその真骨頂とも言えるのが、現在克人が展開している多重移動防御魔法“フアランクス”である。

単に魔法防壁を維持するだけではなく、何種類もの防壁を絶えず更新し続けていることにより、あらゆる攻撃魔法を無効化しながら進軍する魔法である。その姿はまさに、何列もの兵士が一塊となつて行進することで、集団としての防御力を高めながら、先頭の兵士が倒れても即座に次の兵士が攻撃を始める重装歩兵密集陣営を彷彿とさせる。

まるで集団の兵士に迫られているプレッシャーを覚えた三高選手は、1歩1歩確実に近づいてくる克人に対して攻撃の手を休めること

ができなかった。少しでも手を休めた途端に襲い掛かってくるのではないか、という強迫観念が彼らに「逃走」も「無視」も選択させないでいた。

しかし、彼らは甘かった。

克人と彼らとの距離が10メートルほどにまで近づいた頃、克人は彼らから怒濤の攻撃を受けているにも拘わらず、地面を勢いよく蹴って彼らとの距離を詰めた。巖のような体が加速・移動魔法も相まって水平に宙を飛び、内部への侵入を許さない障壁を張ったまま彼らにシールド・タックルをぶちかました。

まるでトラックにでも撥ねられたかのような衝撃を受けて、三高選手は次々と吹っ飛ばされ、地面に勢いよく激突して意識を失っていく。

結局克人に1回たりとも有効なダメージが通らないまま、そして克人以外の一高選手を1歩も動かさないまま、一高チームが総合優勝に華を添える完全な勝利を収めた。

観客席からも惜しめない拍手が贈られた。「圧倒的」というよりも「凄まじい」と表現した方が適切な試合を目の当たりにしたせい、その拍手はどこか夢見心地で曖昧なものだった。

「凄いですね……、あれが十文字家の「フアランクス」……」

一高の応援席で試合を観ていた深雪も、拍手をしながら凡庸な感想を呟くしかなかった。

達也も同じように拍手をしながら、しかし深雪とは違う感想を抱く。

「いや、あれは本来の「フアランクス」ではない気がする」

「そうなのですか？」

「今までに見たことがないから憶測でしかないが、最後の攻撃は「フアランクス」本来の使い方ではないように思える。だとしたら、十文字先輩の力量は相当なものだと言わざるを得ないな」

達也の言葉に深雪が頷いたそのとき、観客の拍手に右腕を突き上げて応えていた克人がふいにこちらに視線を向けた。

一瞬自分に向けたのかと考えた達也だったが、すぐに自分の後ろが

定位置だったしんのすけに向けたものだと思に至った。

もつとも、当のしんのすけは、

「おっ？　もしかして試合終わっちゃった？」

「終わっちゃったよ。一高、というか十文字先輩の圧勝」

「もう、だからインターバル中にトイレ行つとけつて言ったのに……」
試合が始まる数分前に尿意を催し、そして今し方帰ってきたばかりだった。克人の独擅場だった試合も観ていないし、彼が秘かに送っているサインも気づいていない。

達也が再びフィールドに視線を向けたとき、克人は既にこちらから視線を外し観客の声援に応えていた。

心なしか、彼の表情が若干気落ちしているように見えた。

*

*

*

表彰式と閉会式は午後3時半から行われ、午後5時には終了した。これをもつて、競技場での九校戦は幕を下ろした。

なぜわざわざこんな回りくどい表現をしたかという点、正確には「九校戦」は終わっていないからである。とはいえ、互いの威信を賭けて競い合うようなものではなく、むしろ互いの健闘を称え合う場だといえるだろう。

午後7時から開始されるのは、「後夜祭」とも呼ばれる合同パーティーである。大会前に行われた懇親会とは違って純粋な親睦会であり、毎年少なからぬ遠距離恋愛カップルが誕生するほどだ。また参加者は高校生だけでなく、魔法師社会で有力者と称される魔法師関連企業の社長や魔法大学の関係者も含まれるため、将来魔法師として活躍することを目指している彼らにとっては自分を売り込むまたとないチャンスでもある。

そうでなくとも、選手達は長い期間緊張に晒され続けていたため、その反動からか多くの生徒達が過度にフレンドリーな精神状態となっている。だからだろうか、普段ならばその美貌によって近寄りたくない雰囲気醸し出す深雪の周りに二重三重と人垣が出来上がって

いた。

そして達也はそんな彼女を、壁に寄り掛かって眺めていた。

「よう、達也くん」

「九校戦、お疲れ様」

「格好良かったよ、達也さん！」

と、そんな彼にひろし・みさえ・ひまわりが声を掛けて近づいてきた。開会前の懇親会と同じように給仕服に身を纏い、ひろしが右手に持つトレーには飲み物が幾つも載せられている。

いくら数日間一緒に大会を観ていたとはいえ、達也にとってはそれなりに気を遣う相手だ。彼は壁から背中を離し、ひろしが差し出したトレーから飲み物を手に取り頭を下げる。

「それにしても、深雪ちゃんは随分と人気者だな」

「仕方ないよねえ。魔法が凄いいし、何てだったって綺麗だもん！」

ひまわりの言うように、深雪の周りに集まる人垣の中には他校の生徒、大会の主催者、基地の高官、大会を支援している企業の幹部といった魔法関係者だけでなく、芸能プロダクションや広告会社の人間といった本来魔法師とはほぼ無関係の人種も紛れていた。もっとも、鈴音が深雪の横で冷ややかな視線でガードしてくれているおかげで大事には至らないだろう。そうでなければ、達也が大人しく壁際で彼女を眺めているはずがない。

ちなみに、そんなお偉方の中でも最年少ながら最も立場が上である酔乙女あいはその人垣にはおらず、彼女達とは少し離れた料理の並びスペースでしんのすけの隣を陣取っていた。彼の周りには他の幼馴染の姿もあり、会話の内容は分からないがとにかく楽しそうである体なのが印象的だった。

「お陰様で。本当はもつとのんびりさせてやりたいところなんです
が」

「そう言う達也くんも、さっきまで色んな人に話し掛けられてたで
しよっ。」

「そうそう。さっき話してたのって、ローゼン何とかって会社の日本
支社長だろ？ 1年生が声を掛けられるのは前代未聞だって、さっき

真由美ちゃんと話してたんだよ」

ひろしが言っているのは、魔法工学業界で世界第2位の規模を誇る「ローゼン・マギクラフト」のことである。しんのすけが魔法科高校に進んだのをきっかけに、魔法関連のニュースをよく見るようになったひろしだから気づけたことだろう。

ちなみに達也はそれを聞いて、むしろ真由美が野原一家と交流を図ろうとしていることが気になっていた。十師族の彼らに対する態度は様々らしいが、少なくとも真由美は友好的と見ていいのか、それとも他に何か思惑があるのか。

「過去の例は、俺には分かりません。九校戦自体、初めてのことなので」

「あれ？ 達也さん、あんまり乗り気じゃない感じ？」

「そりゃあ、あんな風到大勢に取り囲まれるのは嫌なのも分かるけどな」

ひろしが苦笑いで視線を向けるのは、代わる代わる色んな大人に話し掛けられながらも笑顔を振りまき続ける深雪だった。

「でもよ、誰にも見向きされなくてのもそれはそれで辛いもんだぜ？ 達也くんからしたら注目されるのは嫌なのかもしれないけど、達也くんは頭も良いし、その内そういうのと上手く折り合いをつけられるようになるさ」

「あなたにも、そういうった経験がお有りですか？」

「俺はそんなんじゃないよ！ ——俺じゃなくて、アイツの方だな」

「……成程」

と、そんな会話をしている内に、深雪の周りにはいる者達を筆頭にお偉方が次々と退場し始めた。そしてそれに変わって、楽器を持った正装の大人達が会場の一角に集まり始める。そんな光景に、生徒達がますます気分を浮つかせていた。

「あなた、そろそろダンスパーティーの時間じゃない？」

「おっ、そうだな。んじゃ、俺達は仕事に戻るとするか。 ——じゃあな達也くん、せっかくだから楽しんできな」

「バイバイ達也さん！ 今度はウチにも遊びに来てね！」

そうしてひろし達が達也の前を去ってしばらくして、管弦の音が会場に流れ始めた。あくまでサブに徹するために控えめなそれに併せて、先程までの懸命な話術で見事親交を勝ち取った女子の手を取って、生徒達が続々とホールの中央へと集まっていくな。

深雪の方へ視線を向けると、彼女の周りには先程にも増して大勢の男子生徒の姿があつたが、未だ誰一人彼女の手を取れる者はいなかつた。直前まで来賓者に囲まれていたために親交を深める時間が無かつたのもあるし、彼女の近寄りがたいほどの容姿に気後れしているのもある。

しかしそんな彼らを尻目に、深雪に近づく一人の男子生徒がいた。達也もよく知るその少年に、達也は初めて人垣へと足を進めた。

「2日ぶりだな、一条将輝」

「むっ、司波達也か」

達也に声を掛けられ、将輝はぶつきらぼうに返した。どちらも相手を友人とは考えていながつたが、堅苦しい礼儀を必要とするほどのものでもない。

「耳の調子はどうだ？」

「心配はいらんし、心配をされる筋合いも無い」

「そりやそうか」

社交辞令とはいえ、将輝の返答はおよそ友好的とはいひ難かつた。自身の勝利をかつ攫つた張本人が相手だとすれば、その素っ気無さも当然と言えるかもしれない。

しかし当の達也は割り切れても、それを傍で見守る深雪の目は不快の色を隠せなかつた。そしてそれを向けられてるのに気づいた将輝は狼狽え、居心地悪そうに視線を逸らした。

と、逸らした視線の先には、あい付き纏われて迷惑そうにしているしんのすけの姿があつた。先程までは彼女しか傍にいなかったが、今はダンスパーティーで手が空いてるからか幼馴染達も彼の周りに集まっている。

それに気づいた将輝が、途端に表情を真面目なものへと変える。

「司波達也は、野原しんのすけといつ頃知り合つたんだ？」

「今年の春、一高に入学してからだ」

「それ以前に彼の名を聞いたことは？」

「一度も無い」

その遣り取りに将輝は少し考える素振りを見せ、そして再び達也に尋ねる。

「——司波達也、おまえは十師族の一員か？」

その問い掛けに、達也は思わず身構えそうになった。

比喩表現などではなく、戦闘態勢という意味で。

「……なぜそういう推論になったか知らんが、俺は十師族ではない」

「そうか。それでは、十師族と縁ゆかりのある家系か？」

「いや、俺は十師族と何の関わりも無い」

「——そうか」

達也の答えを吟味するように黙り込んでいた将輝だったが、やがて無表情のままポツリとそう呟いた。

そして、続ける。

「俺の見たところ、彼はおまえに対して一定の信頼を置いているように思える。なぜ彼がおまえを選んだのか少し気になったものでな」

「……おまえは、しんのすけのことを知っているのか？」

「それなり、程度だけだな」

「しんのすけは、相手の能力や出自で友人を選ぶタイプではないぞ」

「そういう意味で言ったんじゃない。——彼は意味があつて行動するんじゃない、行動することで意味が生まれるんだ。たとえば彼が何も知らずに選んだとしても、それには必ず何かしらの意味があるんだ」

「……話が見えないな。とにかく、俺も深雪も特に名家の出ではない」
達也が平然と嘘を吐き、隣に寄り添う深雪も顔色一つ変えず頷いた。

そんな2人に対し、将輝は——なぜかキョトンとしていた。

「はっ？　なんでそこで深雪さんが出てくるんだ？」

「……はっ？　なんでって、そりゃ俺が名家の出なら、必然的に深雪もそうなるだろ」

「いや、だからなんでそうなるんだ——あつ！　司波つて……！　も

しかしておまえ、彼女と兄妹なのか!？」

「今まで気づかなかったのか？ 本当に？」

脱力感に襲われながら問い掛ける達也に、将輝は絶句したまま立ち尽くしていた。

と、深雪は顔を背けて口元を押さえ、控えめな笑い声をあげた。

「一条さんは、私とお兄様が兄妹に見えなかったのですね」

「えっと、いえ、その……はい」

言い訳を断念して項垂れるように答える将輝に対し、深雪はニコニコと上機嫌だった。

よく分からないが、どうやら将輝は彼女の目に適ったらしい。

もちろん、そこに恋愛的感情は微塵も無いが。

「いつまでも固まっているのも周りの邪魔だし、せつかくだから一条と踊ってきたらどうだ？」

ガバツと顔を上げる将輝の目は、期待に充ち満ちていた。

深雪はそんな彼の反応もおかしく一頻り笑うと、将輝に向けて「どうしますか？」と言いたげに小首を傾げた。

「……ぜひ、1曲お相手願えませんか？」

「こちらこそ、よろしくお願い致します」

将輝は上ずりかけた声を必死に抑えながら恭しく作法通りに一礼し、深雪も作法通りの一礼を返して差し出された彼の手を取った。

感謝と感激の籠もった眼差しを達也に向けてポジジョンに付く将輝に、達也は「現金な奴だ」と秘かに思った。

と、そうやって他人のダンスを見ていられる立場だったら、達也にとってもどんなに楽だったのだろうか。

しかし現実には、そう甘くなかった。いや、むしろ他の男子生徒から見れば、そちらの方が格段に甘いと表現できるのかもしれないが。

最初のダンスの相手は、ほのかだった。達也の前でモジモジする彼女に達也も困り果てていたが、懇親会と同じく給仕として働いていたエリカの（茶々を存分に含む）アドバイスを受け、達也から彼女をダ

ンスに誘った形である。

しかし達也はダンスの練習など碌にしておらず、ステップを最低限憶えているだけで優雅さだの二の次だ。なので達也と踊れただけで満足だったのかは別として、次に踊った雫や英美からは「ダンスマシーンと踊ってるみたい」という褒めてるとも貶しているとも取れる言葉を頂いた。

そんな達也が一番苦勞したのが、真由美を相手にしたときだった。彼女の踊りは、達也の機械みたいなダンスとは対極だった。曲に対してまったくステップを合わせず、かといって音感が無いわけではない。彼女は「溜め」に対して独特の感性を持っていて、一音一音は微妙に外しながらも全体で見ると実に優雅なダンスとなっているのである。

おかげで達也は演奏と真由美それぞれのリズムと摺り合わせなければならず、ダンスが終わる頃にはすっかり精神的に疲労困憊となっていた。鼻歌でも口ずさみそんな雰囲気ですその場を去っていった真由美を見たところ、一応彼女を満足させることはできたようだが、その代わりに失ったものが大きい気がする。

そんな彼に近づく、1人の少年がいた。

「疲れているようだな。試合のようにはいかんか」

その声を掛けながら飲み物を差し出してきた克人に、達也は一瞬驚いたような表情を浮かべた後、慌てたようにそれを受け取った。もう片方の手に持っていたノンアルコールビールを一気に飲み干す克人に合わせて、達也もそれを一気に飲み干す。

「……ええまあ、このようなパーティーもダンスも、慣れていませんので。十文字会頭は、まったく苦にしていけないようですね」

「まあ、慣れているからな。——司波、少し付き合え」

克人はそう言うと、空いたグラスを通りすがりのウエイトレスに渡し、達也の答えも聞かない内に出口へ向かって歩き出した。達也に拒否権が無いことを言外に表しているのだろう。

「……………」

同じウエイトレスに空のグラスを渡し、達也は無言で彼の後をつい

ていった。

*

*

*

大会開幕直前の夜に賊を捕らえたその庭は、今は忍び寄る人影も気配も無く静まり返っていた。とはいえ完全な静寂ではなく、誰かが窓を開けたらしく微かにパーティーの音楽が聞こえてくる。しかしその音が、却ってこの静けさをより深いものにしていった。

一度もこちらを振り返ることなくずんずんと歩いていく克人の背中を眺めながら、達也は彼の真意について考えを巡らせていた。

ここに来るまでの道中、達也は一度だけ克人に話し掛けた。

現在行われているパーティーの後には、同じ会場を貸し切って第一高校優勝祝賀会が行われる。毎年九校戦優勝校に与えられる些細な特権であり、表でも裏でも中心として尽力してきた克人が出ないわけにはいかない。

しかし彼にそのことを指摘すると、彼はこちらを振り返ることなく「すぐに終わる」とだけ答えた。「大した用事ではないから」という意味にも取れるが、ならばわざわざ会場を抜け出す理由が説明できない。それよりも「すぐに決着がつくから」という意味合いで考えた方が自然だ。少なくとも、克人はそう考えているようだ。

やがて克人が足を止め、それに倣って達也も足を止めた。

そしてその頃には、達也は克人の誘いに応じたことを既に後悔し始めていた。

克人と2人きりで何か話すと思われていたその場所に、おそらくダンスパーティーの喧騒に紛れて会場を抜け出したのであろう酔乙女あいが、ボディガードである黒磯も連れずに2人の到着を待ち構えていたのだから。

「お楽しみのところ、お呼び立てしてしまい申し訳ありませんわ。十文字克人さんもごめんなさい、わざわざ小間使いの真似をさせてしまっ

「いや、俺は別に構わない」

「……なぜ、十文字先輩に？」

「十師族である十文字家の当主代理も交えた密談を盗み聞きしようなんて人、あの会場の中にはいないでしょう？」

世界最大級の企業グループの令嬢と、新人戦優勝の立役者ながら血筋としては無名の1年生。確かにこの2人が揃って会場を抜け出したとなれば、野次馬根性を働かせて盗み聞きに走る者もいるかもしれない。魔法師に対する「脅し」を掛けるという点では、確かに酔乙女家よりも十文字の方が適役だろう。

「さてと、こうして話の場を設けさせていただいたのは、今回の一連の事件に関する様々なことが臆気ながら見えてきたので、ここで一度情報を共有しておこうと考えたからですわ」

「それは良いのだが、この場に司波達也を同席させる意図をお聞かせ願いたい」

話を切り出したあいに対し、克人がそう問い掛けた。しかしそれは達也がここにいることに否定的というニュアンスではなく、ただ単純に気になったからという軽いもののように達也は感じた。

「彼はしん様と近い間柄、となればこれから巻き起こるであろう事件の当事者となることは必至ですわ。だったら何の情報も無いまま飛び込ませるより、或る程度は事前情報を与えた方が賢明というものでしょう？」

「しかし野原しんのすけに関する情報は——」

「あなた、達也さんを十師族に引き入れたいと考えているんでしょう？ だったらこれくらい、聞かせてあげなさいな」

「そうなんですか？」

聞き捨てならない情報に達也が思わず問い掛けると、克人は特に誤魔化す様子も無くあっさりと言った。

「九校戦でのおまえの活躍を見て、純粹に十師族として国の発展に尽力してほしいと思っただけのことだ。おまえほど優秀な人間だと、一般社会では様々な軋轢に遭うだろう。それならばいつそ十師族となって、そういった軋轢から解放された環境の方が、おまえの能力は遺憾なく発揮されると考えた」

「……そう簡単に、十師族になれるものではないでしょう」

「そんなことはない。十師族の人間と婚姻関係を結べば良い。——そうだな、七草はどうだ？」

「……それはつまり『結婚相手としてどうだ?』ということですか?」

「そうだ」

「……………」

「さて、その話は私がいけないときにでもしてもらおうとして、今はこちらの話に付き合っていたいただきますわ」

あいがむりやり話題を変えなければ、達也は何を答えれば良いのか考え込む羽目になっていただろう。その点だけは、彼女がここにいることに感謝だ。

「昨日の夜、第一高校の選手を狙って様々な工作活動を行っていた『無頭竜』の東日本総支部が軍の働きにより壊滅し、メンバー全員が捕らえられました。彼らは九校戦の優勝校を予想するトトカルチョの主宰であり、参加者のほとんどが賭けていた本命の第一高校を棄権に追い込むことで利益を得ようとしていました」

「そのために我々が乗ったバスを事故に見せかけて襲ったり、渡辺を大怪我に追いやったというわけか」

「その通り。しかしここで、奴らに誤算が生じます」

あいはそう言つて、人差し指を立てた。

「渡辺さんを棄権に追いやった七高選手の暴走は、『無頭竜』の工作員がCADに仕掛けた魔法によるものでした。しかしこの工作員は、新人戦の女子『波乗り』にてしん様によって捕えられました」

別にしんのすけ1人でやったことではないが、わざわざ口を挟んで時間を取る必要は無いため達也も克人もスルーした。

「しかしその後、新人戦男子『モノリス』にて四高選手による反則でフィールドのビルが崩壊する大事故が起きました。渡辺さんの一件もあったので、私達は『無頭竜』の工作員が他にもいて、そいつが四高選手のCADに何か仕掛けたのだらうと考えていました」

「確かに。そのときはなぜ一高が狙われているのか分からなかったが、渡辺のときと同じ奴らが動いているのだらうと考えていた」

「はい、私もそのときはそう考えていました。——ですが捕らえた“無頭竜”のメンバーに問い質したところ、高速道路での襲撃や渡辺さんの件については認めましたが、モノリスでの事故の関与は否定したのです」

あいの言葉に、達也も克人もその顔に驚きの感情が浮かんだ。

「つまりそれは、“無頭竜”とは別の奴らが絡んでいるということか？」

「そうなりますわね。——ところで、先程私が“無頭竜”の目的について話したとき、何か疑問に思うところはありませんでしたか？」

そう問い掛けるあいの視線は、達也に向けられていた。

半強制的に回答者となった彼は、小さく溜息を吐いてからそれに答える。

「一高が優勝すると予想したのは参加者のほとんどだそうですが、つまりそれは一高以外に賭けた者もいたということですね？」

「はい、その通りです。第一高校が成績を落として喜ぶのは、“無頭竜”だけでなくそいつらも同じだということです。とはいえ、そのままだとほとんどが逆張りで第一高校以外を選んだような感じですね。一応“家の者”を使って調べさせてはいますが、そちらに関してはまず問題無いでしょう」

あいの言葉を聞いて、達也も克人も胸を撫で下ろすようなことはしなかった。“ほとんど”のフィルターを2回も擦り抜けるような奴がまだ残っていることを示しているからだ。

「参加者の大多数は反社会的組織や非合法の兵器ブローカーといった方々ばかりですが、代理人を立てて参加していたその人物は、言ってしまうとかなり“普通”です。以前は“とある大企業”に勤めていたようですが、子供が独立したのもあって早期退職し、奥さんと2人で悠々自適な生活を送っているような人物です」

「それはまた、犯罪ブローカー主宰のトトカルチョには随分と似つかわしくないな」

「しかし賭けた金額は参加者の中でも5本の指に入るほどで、しかもほとんどの参加者が第一高校を選択するのには目もくれずに第三高

校を選択したそうですわ」

「つまりあなたは、その人物、もしくはその人物が所属する組織が、四高生徒のCADに何かしらの細工をしたと疑っているのですね」

「半分正解、半分外れといったところですね」

達也の推測に、あいはそう返した。

「確かにその人物がモノリスの事故に関わっているとは疑っています
が、四高生徒のCADに細工をしたとは考えていません。——
というか、そもそもCADに細工なんてされてなかったのですよ」

「ということは、つまり……」

「そう。あの事故は、四高選手自身が自分の意思でやったことなので
す。九島閣下が選手本人に尋問したところ、あっさり和白状しまし
たわ」

あいから齎もたらされた情報に、達也も克人も驚きを隠せなかった。バト
ル・ボードで七高選手のCADに細工がされていたこともあって、そ
ちらの事故もCADに細工がされているものだと思いついでしまっ
ていたのである。

「なぜそのような暴挙に出たのか、理由は分かっているのか？」

「はい、本人の口から。——『第一高校に裁きの鉄槌を下すため』だそ
うですわ」

「……裁きの鉄槌？」

達也が思わずオウム返しに尋ねてしまうほどに、その言葉は突拍子
が無かった。同じくそれを聞いた克人も、要領を得ないとばかりに首
を傾げている。

「第一高校は九校戦や論文コンペで活躍するために、全国の優秀な魔
法師候補を囲い込んで他の高校に進学しないよう圧力を掛けている
だけじゃなく、主催者や審査員や相手選手をも買収して自分達が優勝
するように工作しているんだそうです。その四高選手は、あたかも自
分達が最も優秀であるかのように振舞っている一高生徒に真実を突
きつけ、偽りの栄光を白日の下に晒すためにビルごと一高選手を潰し
てやったんだそうですわ」

「……その選手が、そう言ったのですか？」

「はい。九島閣下の話だと、それはもう嬉々とした様子だったそうです。——ちなみに訊きますけど、そのような事実がありますか？」
「まったくの出鱈目だ。囲い込みも買収も、一度だってしたことが無い」

第一高校は東京の八王子にあるが、関東近辺だけでなく全国から受験生が集まってくるのは確かに事実だ。しかしそれはけっして囲い込みなどではなく、充実したカリキュラムと長年掛けて積み重ねてきた実績を考慮した受験生が自分の意思で第一高校を選んだ結果である。

何を当たり前のことを、とでも言いたげに答える克人に対し、あいとは尚もこう言い放つ。

「ええ、そうでしょうね。九島閣下も『そんな話は私の耳にも入ったことが無いな』と仰っていましたけど、するとその四高選手は『あなたも第一高校の圧力に屈した人間の1人だったのですね』と本気で失望した様子だったそうです」

「それはまた、随分と激しい『思い込み』だな」

そして九島烈に対してそのような態度を取るとは随分と命知らずなようだ、と達也も克人も秘かに思っていたが口には出さなかった。
「とりあえずその四高選手は、今は基地内の病院にて洗脳が行われていないかメンタルチェックをしているところです。仮に洗脳だったとしたら相当強力なものなので術者と直接会っている可能性もありますが、彼の供述にそれを匂わせる内容は見当たらなかったですので望みは薄いでしょうね」

「記憶を消されている可能性もある、ということか……」

「第三高校に賭けた人物の方からは？」

達也のその問い掛けにも、あいの表情はどこか晴れない。

「その人物が賭けた金額は、いくら大企業に勤めていたとはいえ元サラリーマンがおいそれと出せるような金額ではありませんわ。なので誰かからの資金援助を受けている可能性も考慮して調査を進めているところですが……」

「結果は芳しくありませんか？」

「まだ始まって間も無いのでこれからではありますが、正直それを突き止めたところで事故に関与している決定的な証拠を掴めるかどうか、といったところですね。本当にその人物が事件に関係あるのか、というのもあやふやですし」

「だけどあなたは、その人物が関与していると疑っている」

「ええ、単なる勘ですけど」

それはあい自身が達也を勧誘した場面でも述べた『非論理的な理屈』だった。

しかしそれは同時に『嫌いではない』ものでもあった。

「とまあ、今のところ分かっているのはそんなところですね。申し訳ありません、呼びつけた割には大したことのない内容で」

「いや、そんなことはない。昨日『無頭竜』が捕まったばかりだというのに既にそこまで調べ上げているとは、よほど優秀な部下をお持ちのようだ」

身長差があるため見下ろす形となっている克人の眼差しに、あいは微塵も物怖じした様子も無くニコリと笑みを浮かべるのみだった。

そんな中、達也は先程からずっと気になっていたことを口にした。「最後に質問なのですが、その人物が以前に勤めていた『大企業』とこののを、参考までに教えてもらっても良いですか？」

「はい、もちろん構いませんよ」

あいは克人に向けていた笑みを達也へと移し、そしてその表情のままこう言った。

「その大企業というのは――」

「お兄様？」

あいも克人もその場を去り、夜の闇の中で何かを考え込んでいた達也を現実世界に引き戻したのは、背後からの妹の呼び掛けだった。

「どうかされたのですか？ 私近づいてくるのもお分かりにならないだなんて」

「いや、ちよつとな」

「……お兄様、十文字会頭とはどのようなお話を？」

「……それについては、家に帰ってからにでもしよう」

「かしこまりました」

達也の言葉に、深雪は考えを巡らせる間も無く答えた。

「そろそろ、パーティが終わりますよ」

「次は祝賀会だったか。パスというわけにはいかないだろうな」

「お部屋に戻られても、しんちゃんの襲撃を受けるだけかと思えますよ？ 先程、会長がしんちゃんに何やら耳打ちしているのを見ましたので。——ラストの曲が始まりましたね」

深雪の言葉に、達也は遠くで聞こえる楽団の音に耳を傾けた。確かに先程と違う曲だが、これが最後の曲かどうかは残念ながら知識に無い。

「お兄様、ラストダンスは私と踊っていただけませんか？」

月明かりと星明かりに照らされ、達也でも滅多に見ることのない透き通った笑みを浮かべて、深雪が優雅に一礼した。

「じゃあ、曲が終わらない内に戻ろうか」

「いいえ、お兄様。それでは時間が勿体ないです」

深雪はそう言って、スツと達也に近づいた。互いの吐息が感じられるほど、近くに。

「ここでも、曲は聞こえます」

達也は何も言わず、その腕を深雪の背中に回した。

深雪は体を預けるように、達也の肩に手を置いた。

2人の体が触れ、手を優しく包み込み、背中を深く抱きしめ、ステツプを踏み出す。

音楽に合わせて、2人の体がくるくる回る。くるくる回る視界の中で、達也の視線は常に深雪を捉え、深雪の視線は常に達也を捉えていた。

月明かりと星明かりに照らされたこの場所は、間違いなく2人だけの世界だった。

そんな最愛の妹とのダンスを楽しみながら、達也は頭の片隅で先程あいから聞いた“大企業”の名を思い起こしていた。

—— “金有電機”かねありでんきか。社長と一人娘がサザエさん時空の影響下に
あつたとも聞かし、念のため注意しておくか。

夏休み＋1編

第41話「南の島でバカンスだゾ」

事の発端は九校戦の後夜祭が終わり、その会場にて一高の祝勝会が行われていたときのこと。

代表選手として参加していた達也たち1年生グループと、給仕スタッフとして参加していたエリカ達が裏で働いていた幹比古達も引き連れて集まって談笑していると、唐突に雫がこう話を切り出したのである。

「ねえ、海に行かない？」

「海って、海水浴ってこと？」

「あつ、もしかして？」

エリカとほのかの問い掛けに、雫は律儀に2回首を縦に振った。しかしエリカのそれはともかく、色々と詳細を省きすぎているほのかの質問については、たかだか知り合つて数ヶ月程度のその他友人達には意図がまったく伝わらない。

それに気づいた雫とほのかが若干申し訳なさそうに眉を八の字にして、

「えつと、小笠原に雫の家の別荘があるの」

「えつ？ それって、もしかしてプライベートビーチ？」

「おおっ！ 雫ちゃんのおうち、お金持ちだゾ！」

深雪の問い掛けとしんのすけの無邪気な感想に、雫は控えめに、そして少し恥ずかしげな表情で頷いた。

近年資産家の間では小笠原の無人島に別荘を持つのが流行となっているが、それについてテレビなどの評論家が「自然破壊の成金趣味」と非難することがある。しかし資産家が別荘地として選ぶのは「元有人島」であり、管理されなくなったせいで荒れ果てているのが現状だ。そしてそこにゼロエミッション（太陽光エネルギーを利用して）いる点から、エネルギー面では完全なゼロエミッションではないが）を実現している別荘を建てて島全体を管理することは、国土の有効利

用という点でも環境保護という点でも非常に有意義である。

もちろん深雪もしんのすけも、そしてその他の友人もそれを責める意図は存在しない。知らず知らず刷り込まれていた罪悪感を緩和されたからか、どこか不安そうだった雫の表情がいくらか和らいだ。

「父さんが『お友達をご招待しなさい』って。どうやらみんなに会いたいみたい」

「ということは、今年は小父様と一緒になんだ……」

「大丈夫。仕事が山積みだから、会えるのは最初の数時間くらいだつて言ってた」

「どうしたの、ほのか？　もしかして嫌なの？」

「ううん、そんなこと無いよ！　私にも凄く優しくしてくれるし、とっても良い人だよ。だけどあの人が、会う度に結構な額のお小遣いを渡そうとしてくるから、それがちよつと心苦しくて……」

「……ああ、そういうことね」

その遣り取りを想像したからか、その場に緩やかな空気が流れた。

「それで、具体的にはいつにするの？」

「決めてない。できるだけみんなの都合に合わせてられるようにする」

「俺は別にいつでも構わねえぜ？　特に何か予定があるってわけじゃねえしな」

レオの言葉を皮切りに、エリカ・幹比古・美月も次々と参加を表明した。エリカや幹比古辺りは家の用事で何かありそうなものだが、わざわざそれを指摘する者は誰もいなかった。

「私は、お兄様の都合が良ければ……」

「俺は今度の木曜までなら大丈夫だ。それ以降になると少し厳しいけどな」

達也にとつて、夏休みは“休み”ではなかった。ただでさえ九校戦のせいで実質的な夏休みの期間が短くなっている中で、FLT開発第3課で行われる飛行デバイス商品化の打合せ、さらには独立魔装大隊の野外演習及びミーティングに参加することが決まっており、まともに休めるのは九校戦直後のこの時期か夏休み最終日くらいだろう。

「しんちゃん、都合の悪い日はある？」

「いやあ、オラもゴロゴロしたりダラダラしたりと忙しいですからなあ」

「つまり暇ってことね。だったら達也くんの都合もあるし、なるだけ早い方が良いんじゃない？」

「それじゃ、明日は移動日だから明後日中に準備をして、月火水の2泊3日で良いかな？」

雫の提案に、全員が同時に頷いた。

*

*

*

そして、月曜日。

指定された集場所は空港ではなく、葉山のマリーナだった。どうやら空路ではなく海路で別荘に向かうようだが、プロペラのVTOLが自家用機として今や珍しくなくなり、フレミング推進のクルーザーよりむしろ安いことを知る達也からしたら、そのこだわりは今一つ理解できなかった。

「あ！ ひよつとして、あのクルーザーがそうかな！」

「わあ……！ 素敵なクルーザーですね！」

しかし他の面々はそう思っていないようで、ホットパンツから白い脚を惜しみなく露出させたエリカを筆頭に、女性陣+しんのすけが我先にと太陽の光を反射して輝く真っ白なクルーザーへと駆けていった。

「エリカのお家ウチでも、クルーザーくらい持ってない？」

「船はあるけど、アレは“クルーザー”とは呼べない、というか呼びたくないわ。普段はスタビライザーをオフにしているから乗り心地最悪だし」

「……もしかして、訓練用？ 徹底してるね」

「まあまあ、アタシのことはどうでもいいとして！ しんちゃんは、クルーザーに乗ったことってあるの？ あの酔乙女家のお嬢様と仲良しだから、かなり凄いのに乗ってそうだけど」

「クルーザーもあるし、あいちゃんとは別だけど豪華客船にも乗った

ことあるゾ」

「やっぱり！」

「……ねえ、雫ちゃん？ これから行く島の近くに、お猿さんの王国みたいな所って無いよね？」

「えっ？ 別に、そんな話は聞いたこと無いけど……、なんで急に？」

しんのすけ達がそんな会話を繰り返す脇で、けっして走らずクルーザーの傍までやって来た達也が、メカニックの血が騒いだのか推進機関の部分をつぶさに観察していた。

「フレミング推進機関だが、エアダクトが見当たらないから電源はガスタービンではないな。光触媒の水素プラントに燃料電池をプラス、といったところか？」

「念のために、水素吸蔵タンクも積んでいるよ」

まさか単なる独り言に答えが返ってくると思っておらず、達也は若干の驚きと共に声のした方へと振り向いた。

そこにいたのは、「船長」だった。ギリシャ帽を目深に被り、飾りボタンのついたジャケットを着込み、ご丁寧パイプまで啜えている。もう少し横幅に恰幅があれば、完璧な「船長」となれるに違いない。

どう反応して良いか達也たちが困惑していると、向こうの方から手を差し出してきた。

「君が司波達也くんだね？ 私は北山潮、雫の父親だ」

「……初めまして、司波達也です。お名前はかねがね伺っております。本日は大勢で押し掛けてしまい申し訳ございませんが、何とぞよろしくお願い致します」

予想よりも随分気さくな人柄に戸惑ったものの、達也は巧妙にそれを隠して彼の手を握った。

達也の「お名前はかねがね」というのは、単なる社交辞令ではない。彼が総帥を務める「ホクザングループ」は、日本でも屈指の規模を誇る企業グループだ。さすがにグループ全体の規模でいえば「酢乙女ホールディングス」とは比べるべくも無いが、日本国内及び一部の諸外国では酢乙女家の対抗馬として名前が挙がるほどには、経済界

でも政界でも強い影響力を持っている。

その知名度は、最初に雫から父親のことを聞いた達也がかなり驚いたくらいだ。もつとも、現代は企業経営層がプライベート保護の観点から本名とは別のビジネスネームを使用するのが一般的なので、達也がそれに気づいたのはビジネスネームである「北方潮」の方を聞いてからなのだが。

と、達也の手を握る潮の手から力強い感触が伝わり、そして彼自身も達也をまっすぐ見つめてきた。値踏みするものでありながら不快感を感じさせないのは、人の上に立ち、そして同じように人の上に立つ者と渡り合う指導者たる所以だろうか。

「……成程、ただの秀才ではなさそうだ。とはいえ、小手先の技に優れただけの技術者でもない。実に頼り甲斐のある風貌をしている。——どうやら、雫の目は確かなようだ。我が娘がなかなかつかりしてるじゃないか」

潮はそう言って満足そうに笑っていた。晩婚だったせいですでに50歳を超えているはずなのだが、この気さくな雰囲気も手伝って40歳前後のような若々しさを覚える。

一通り挨拶を済ませた達也は、友人達とお喋りしていた深雪に呼び掛けた。彼女は兄の声に即座に反応し、上品さを損なわない程度の駆け足でやって来た。

「深雪、挨拶をすると良い」

「初めまして、司波深雪です。この度はお招きいただき、誠にありがとうございます」

「ご丁寧ありがとうございます、レディ。北山潮です。あなたのような美しいお嬢さんをお招きできるとは、この船にとっても当家のあばら屋にとっても望外の名誉となりました」

「あら、小父様。私のときには、そんなこと仰らなかつたと思います」

「お父さん、みつともないから鼻の下を伸ばさないで」

胸に手を当てて芝居掛かった一礼をした潮に対して、ほのかと雫が横からそんな言葉を投げ掛けてきた。ほのかはからかいの意味合い

が多分に含まれたものだが、雫の場合は割と本気のようにも聞こえる。

「いや、そんな鼻の下を伸ばしてなんて……。——ああつ！　もしやあそこにいるのが、雫の言ってた野原しんのすけくんかな？　彼とも一度話してみたかったんだ！」

敏腕実業家と思えない慌てぶりで潮はその場を逃げるように離脱し、しんのすけの下へと歩いていった。実の娘からの冷たい視線が背中に突き刺さるが、敢えて無視を決め込んだ。

ちなみにしんのすけは、クルーザーの操舵手であり宿泊先の別荘でも身の回りの世話も請け負うマルチなハウスキーパーである、見た目20代半ばほどの黒沢女史を目敏く見つけ、そして早速ナンパしていた。真夏の太陽が照りつけるマリナーでもきつちりとスーツを着こなすその姿に相応しくクールにあしらう彼女に、それでも彼はめげること無く熱心に話し掛け続けている。

「やあ、楽しく会話しているところ済まないね。君が野原しんのすけくんかな？」

「おつ？　そうだけど、おじさん誰？」

「私は北山潮、雫の父親だ。『北方潮』のビジネスネームで、ホクザングループを経営しているよ」

「ホクザングループ……おおつ、知ってるゾ！　『奥さん、ホクザンを知ってるかい？』ってCMのヤツだ！　あのときのCMソング、オラ今でも歌えるゾ！」

「何だつて！　大戦前に作ったかなり古いCMじゃないか！　よくそんな古いの知って——そうか、確か君は春日部出身だったね」

「ま、そういうこと」

その後2人は、しんのすけが言っていたCMソングと一緒に歌ったり、そこから歴代のCMやヒット商品について語り合った。その間に他の面々が自分の荷物をクルーザーに積み終え、黒沢がエンジンを掛けていつでも出発できる状態にした後も2人は盛り上がり続けた。

最終的にそれは、近くに停められた高級車から運転手が降りて潮に話し掛けるまで続いた。

「あの、そろそろ次の予定が……」

「何っ、もうそんな時間か。他のお友達も歓迎するよ、存分に楽しんでくれたまえ。私は残念ながらもう行かなければならないが、自分の家と思って寛いでくれたまえ」

潮は早口でそう言うのと、改めてしんのすけと挨拶を交わして車へと乗り込んでいった。すっかり彼と仲良くなったしんのすけが、大きく手を振ってそれを見送る。

ちなみにそれを眺めていた達也は、潮が車の中で脱いだギリシヤ帽を未練がましく見つめていたのがやけに印象的だった。「娘と船旅をした気分になりたかったんだろうな……」という達也の同情的な呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

*

*

*

「しんちゃん、父さんと随分仲良く話してたね」

「いやあ、何だか話が弾んじやいまして。思わず連絡先を交換しちゃったくらいだよ」

「プライベートの電話番号を教えたってことは、本当にしんちゃんのことを気に入ったんだね」

「……いや、オラが好きなのは綺麗なお姉さんだから、おじさんはちよつと——」

「大丈夫、そういう意味じゃないから」

しんのすけ達を乗せて、黒沢の運転するクルーザーが目的地へと進んでいく。クルーザーはとても広いだけでなく、スタビライザーと揺動吸収システムのおかげで船酔いの心配が無い。さらには空気抵抗や過剰な光線をカットするために、甲板全体が流線型の透明なドームで覆われているのでかなり快適である。

優秀な操舵手のおかげで特に事故も起こらず、さらにはどこかの島から乗り込んできた猿に舵を乗っ取られることも無く、目的地の無人島・媒島なことうじまに到着した。

そして一行は荷物を黒沢に任せると、早々にビーチへと繰り出し

た。

波打ち際では現在、女性陣が仲睦まじく遊んでいた。

真っ先に目を惹くのは、派手な原色のワンピースタイプを着たエリカだった。そのシンプルなデザインは、彼女のスレンダーなプロポーションをさらに引き立たせている。

その隣にいる深雪は、大きな花のデザインがプリントされたワンピースタイプ。女性らしさを増していくプロポーションを派手な絵柄で視覚的にぼかし、生々しさの無い妖精的な魅力を醸し出している。

意外なのが美月で、水玉模様のセパレートタイプはビキニほど露出は少ないものの、大胆に胸元がカットされているせいで豊かな胸が強調され、いつもの大人しいイメージからは想像できない艶めかしさがある。

そして彼女の隣にいるのは、同じくセパレートタイプながらワンショルダーにパレオでアシメトリーに決めている。体のメリハリという観点からしたら、彼女が一番に挙げられるかもしれない。

雫はそれとは対照的に、フリルを多用した少女らしいワンピースタイプだった。しかし表情に乏しい大人びた顔立ちの彼女がそれを着ると、やけに倒錯的な魅力が生まれるのはなぜだろうか。

そんな彼女達を、波打ち際から離れた場所に立てたパラソルの下に腰を下ろした達也がぼんやりと眺めていた。一応水着は着用しているものの上着として七分袖のヨットパーカーを羽織る彼は、どうにも気まずい気分になったのかフイと横に目を逸らす。

「で、誰の水着姿が一番好みなの、達也くん？」

手を伸ばせば普通に届くほどの距離に、いつの間にかしんのすけが座っていた。赤を基調としたド派手なトランクス型の水着（もちろんアクション仮面がプリントされている）を履く彼の体は、細身ながらも余分な脂肪の無い引き締まった体つきをしている。

「……しんのすけ、レオ達と一緒にじゃなかったのか？」

「レオくんもミキくんも沖まで泳ぎに行っちゃったから、オラはここに残ったんだゾ。というか、達也くんは泳がないの？ せっかく海に

来たのに、海に入らないなんて勿体ないゾ」

「そうですよ、達也さん。パラソルの下にいるだけなんて！」

ふいに聞こえたほのかの声に達也がそちらへ視線を向け、思わず声を出しそうになったのをすんでのところで止めた。

先程の5人が、体を屈めて達也の顔を覗き込んでいた。普段ならともかく、水着姿でこの姿勢は些かならず問題だ。敢えて例を挙げるなら、腰を深く折って両手を膝に置く雫を見て、思っていたほど子供体型ではなかったのだな、と分かってしまうような感じだった。

純粹な雫、無邪気に返事を待つ美月はともかく、その後ろでニヤニヤと笑みを浮かべるエリカとしんのすけをこのまま放置するのはまずい。明確な根拠は無いがそう感じた達也は、観念したように「そうだな、泳ぐか」と立ち上がった。

そうしてパーカーを脱いで砂の上に落とした瞬間、達也を取り巻く空気が変わった。

しまった、と達也が気づいたときには手遅れだった。

「達也くん、それって……」

エリカが緊張で微かに震えた声をあげ、美月・ほのか・雫が彼女の言う「それ」に釘付けとなる。

成人ほどのポリウムは無いが、達也の体は鍛え上げられて引き締まっていた。腹筋も胸筋もみつしりと重く固く、まるでルネサンス彫刻のようにはつきりと筋が刻まれている。

しかし、刻まれているのは筋だけではなかった。

彼の体には、幾つもの傷痕が刻まれていた。一番多いのが切り傷、それに匹敵するほどに多いのが刺し傷、そして所々に火傷の痕。骨折の痕は見当たらないが、それにしても尋常でない鍛えられ方をしなければこんな肉体にはならないだろう。それこそ、文字通り「血の滲むような」努力をしなければ。

いや、この傷から察するに「血の滲む」程度では済まないだろう。拷問のような鍛錬を乗り越えなければ、ここまでの体にはなり得ない。それを分かってしまったからこそ、エリカ達は思わず表情を強張らせてしまったのだろう。

「すまない、見せられて気持ちの良いものじゃないな」

達也はそう言つて、先程脱ぎ捨てたばかりのパーカーを拾い――

「おおっ、すごい」

上げようとしたそのとき、横から割り込んできたしんのすけが、達也の体に刻まれたその傷痕を触り始めた。切り傷を指で辿るようになぞり、刺し傷は指でツンツンと突つつき、火傷の跡はその感触を確かめるように掌を広げてペタペタと貼り付ける。

そんな彼の無遠慮な行動に、エリカが顔を引き攣らせ、ほのかなど顔を青くしている。当の達也は若干困惑していながらも特に大きな反応を見せず、達也の代わりにパーカーを拾った深雪も兄の出方を窺うように静観を貫いている。

「ちよつとしんちゃん、何してんの！」

「凄いゾ、達也くん。まるでアクション仮面みたい」

「アクション仮面？ その水着のキャラクターか？」

「そうそう。アクション仮面も色んな怪人と戦つて、その度にたくさん怪我してるんだゾ。正義の味方として戦つてきた、謂わば『勲章』なんだゾ」

「勲章、か……」

眩くようにしんのすけの言葉を繰り返す達也に、深雪がニコリと微笑んで口を開く。

「そうです、お兄様。この傷痕1つ1つが、お兄様が誰よりも強くあるうと努力された証であること、深雪は知っております。――そんな誇らしいお体を、どうか隠そうとなさらないでください」

「わ、私も気にしません！」

若干迪々しく、そして頬を紅く染めながらであるが、ほのかが力強く深雪の言葉に賛同した。ヒュウ、とエリカが純粹な賞賛の意思を込めた口笛を吹き、その横で美月と雫も無言ながら力強く頷いている。

ちなみにこの遣り取りの間、しんのすけはお構いなしに達也の体を触り続けていた。

「……しんのすけ、そろそろ触るのを止めてくれ」

「まあまあ、オラと達也くんの仲じゃなくない」

「いや、いくら親しいとはいえ普通こんなことしな——んぐっ」

「一瞬だけ言葉を詰まらせて体を跳ねさせた達也に、女性陣（特に深雪）が目を丸くして彼を見遣った。

しんのすけへと向ける彼の目には、明らかな怒気が含まれていた。「しんのすけ、そういえば4月の模擬戦の決着がまだ着いてなかったな」

「おおつ、達也くんが怒ったゾ！ 逃げろ〜！」

その瞬間にしんのすけがその場を逃げ出し、達也が猛然とそれを追い掛けていった。足を取られやすい砂場だというのに、2人共それを意に介すること無く走り去っていく。

それを見送った深雪ら女性陣に、達也の体を見たときは別の気まぜい空気が流れていた。

* * *

海でたっぷり体を動かして腹を空かした成長期の彼らに用意された夕食は、最高級の食材が取り揃えられたバーベキューだった。肉は綺麗にサシの入った霜降りだけでなく低温熟成された赤身も並べられ、野菜も有機栽培で育てられたこだわりの一品、さらには新鮮な海鮮類やパンなど細かいところも抜かりない完璧な布陣だ。

そしてこれらの食材を最高の味に仕上げていくのは、すっかり彼らの世話役としてお馴染みとなった黒沢だった。9人分の肉や野菜を手際よく焼き上げ、ついでにしんのすけのナンパを軽く聞き流すその手腕は見事なもので、達也と女性陣の間に流れていた若干の気まずさもすっかり消え失せていた。ちなみにその原因を作った張本人であるしんのすけは、まったく気にする様子も無くレオとフードバトルを繰り広げていた。

やがて腹も満たされ、まったりとした空気の中で9人は各々無人島でのバカンスを楽しんでいた。達也と幹比古は顔を突き合わせて将棋を指し、レオは「ちよつと散歩してくる」と言い残してフラツとい

なくなり、そして女性陣5人としんのすけはカードゲームに興じていた。

その空気が変わったのは、そのカードゲームが美月の敗北で終わったときのこと。

雫が立ち上がって、深雪の傍まで歩み寄る。

「深雪、少し外に出ない？」

「……良いわよ」

戸惑いを見せたのはほんの一瞬だけで、深雪はニコリと笑うと椅子から立ち上がった。それを見て美月が「散歩だったら私も——」と言いかけるが、エリカが即座に「美月は罰ゲームがあるから駄目よ」とそれを阻む。

そうして2人がいなくなってから、数分後。

達也が10手詰めで幹比古を下したのを見計らったかのように、ほかの達が達也の近くまで駆け寄った。

「あ、あの！ 達也さん、一緒にお散歩しませんか？」

「……ああ、良いよ」

こちらは特に困惑を見せず、感情を隠すための微笑を浮かべて了承した。そのまま2人が散歩に出掛けたため、黒沢を入れて10人いたのが半分にまで減ったことになる。

「うーん、これは第一の殺人事件でも起きそうな雰囲気ですなあ」

「もし殺されるとしたら、被害者は間違いなくレオね。それでこの場にはいない4人が容疑者として疑われる、と」

「いやいや、分からないゾ。実はここにいる4人もそれぞれ席を立った時間があつて、そのタイミングならレオくんを殺害することが可能だと判明するんだゾ」

「ちよつと2人共、そんな物騒なこと言わないでよ。実際に起こったらどうするの」

「柴田さん、その発言もなかなか物騒だと思うよ……」

4人の会話を遮らないように黒沢がデザートのフルーツを4人分テーブルに置き、そして静かにその場を立ち去った。

「それにしても、いくら無人島とはいえこんな夜遅くに散歩は危なく

ないかな？ それにこんな暗いと、せつかくの綺麗な景色が見られないよね？」

「何言ってるの、美月。レオはともかく、他の4人は本当に散歩が目的なわけではないでしょ」

「えっ、そうなの？」

「そうよ。大方、ほのかが達也くんに告白したいって雫に相談して、だから雫が深雪をどこかに連れ出して邪魔しないように見張ってるってところね」

したり顔で自身の推理を披露するエリカに、美月は若干頬を紅く染めて感心したように頷き、幹比古はどう反応したものが困ったように視線を逸らした。

そして、しんのすけはというと

「んもう、美月ちゃんはお子様ですなあ。オラくらいの大人になると、それくらいのは少し見ればすぐに分かるんだゾ」

「確かにしんちゃんはこの中の誰よりも長生きだけど、ほとんど5歳児だったんでしょ？ 恋愛経験とかあるの？」

「ほほう、オラという色男の恋愛遍歴を聞きたいと。まあ、生まれて100年以上、今まで声を掛けてきたお姉さんは数知れず——」

「言っておくけど、単なるナンパは恋愛に入らないからね」

「ほい」

エリカとしんのすけが会話する横で、美月と幹比古も彼の恋愛経験が気になる様子だった。深雪にすら靡かないほどに年上好きでマイペースな彼だから、というのものもあるが、単純に100年以上生きてきたという事実だけでも興味をそそるには充分だろう。

やがてエリカはテレビのリポーターを真似ているのか、右拳をマイクに見立ててしんのすけの口元へと近づけた。

「それじゃ、最初の質問！ しんちゃんの初恋はいつですか！」

「そう、あれはオラが5歳の頃——」

「5歳って、具体的にはいつ？」

「えーっと、多分21世紀に入る前だったと思うゾ」

それはまた随分と昔だな、と幹比古達が驚くのを尻目に、しんのす

けの話は続く。

「オラの近所に住んでるななこさんが、オラの初恋なんだゾ。最初に会ったときは女子大生で、保育士さんを目指してたの」

「5歳の男の子が女子大生に恋するとか、微笑ましいじゃないの。どんな人？」

「すつごく綺麗で、しかも優しくしてお淑やかなんだゾ。まさしく『大和撫子』って感じで、母ちゃんとは大違い。でも結構お茶目なところもあって、そこがまた可愛いんだゾ。ななこさんのお義父さん、いつもななこさんのことが心配で過保護になっちゃうんだゾ。まあ、あれだけ美人な娘さんだと仕方ないけどねえ」

もしななこの父親である大原四十郎がこれを聞いていたら「君にお義父さんと呼ばれる筋合いは無い！」と激怒していただろう。5歳のしんのすけに対して本気で警戒していたくらいだし、ここ最近是他が結婚できる年齢に近づいてきたせいか余計にガードが固くなっているように思える。

「その人とは、どうなつたんですか？」

「今でも『良好なお付き合い』を続けてるゾ。大学を卒業して、オラが通ってた幼稚園の先生をやってたんだけど、山梨の幼稚園にスカウトされて今はそっちに行ってるゾ」

「スカウト？ 幼稚園の先生にそんなのがあるの？」

「ななこさんの働きぶりを見て、ぜひウチに来てほしいって思ったんだって。その頃にお義父さんがギックリ腰をやっちゃって、ちょうどどこかの田舎で療養しながら仕事したいって思ってたみたいで、だったら丁度良かったことでスカウトを受けたんだって。うーん、お義父さん想いのななこさんも素敵だゾ」

「へえ、ということは今は『遠距離恋愛』になってるってことか」

「でも素敵ですね、初恋の相手を一途に想い続けているだなんて」

頬をほんのりと紅く染めて羨ましそうに言う美月に対し、

「おっ、えっと……」

なぜかしんのすけは気まずそうな表情を浮かべ、視線を明後日の方へと飛ばしている。

当然ながら、それを見逃すエリカではなかった。

「何々、その態度！ もしかして、ななこさん以外にも好きになっちゃった人がいるとか!？」

「そ、そんなことは……、いや、無いことはないし、もちろんあのときはオラも本気だったけど、あくまで非常事態だったからななこさんとはまた違うっていうか、もしかしたらストックホルム何とか的なアレかも——」

「ええい、もう！ 言い訳はいいから、早くアタシ達に話しなさい！」
テレビのリポーターからタブロイド誌の記者にジョブチェンジしたエリカが、マイクを横している右手をしんのすけに押しつける勢いで近づけてきた。幹比古も美月もそんな彼女を責める素振りも無く、むしろ興味津々に身を乗り出して彼の発言を待っていた。

やがて観念した様子で、しんのすけがポツポツと話し始める。

「——オラ、映画の世界に閉じ込められたことがあるんだけど」

「……………、はいっ?」

しかしその話の内容は、冒頭の一文からエリカ達の理解の範疇外だった。

「そこは西部劇みたいな世界で、つばきちゃんはそこで悪い奴の所で働かされてたんだゾ。可愛くて控えめで出会ったばかりのオラにも優しくしてくれて、だからオラはつばきちゃんを助けて春日部に一緒に帰ろうって思ったんだゾ」

「……………」

「でも映画の世界から戻ったとき、そこにつばきちゃんはいなかったんだゾ。多分、つばきちゃんはオラ達と違って映画のキャラだったから、映画の世界から出られなかったんだと思う。——今考えたら、つばきちゃん、それを知ってたんじゃないかなって思うんだゾ。だけどオラが春日部に戻れるように、わざと黙ってたんだと思う」

「……………」

「結局あのときからつばきちゃんには会えてないけど、今でもつばきちゃんはオラの中で大切な思い出なんだゾ」

「……………」

しんのすけの話が終わった後も、エリカ達は無言のまま互いに顔を見合わせていた。

そして3人を代表して、エリカが問い掛ける。

「……えっと、それって夢の話？」

「失礼な！　ちゃんと本当にあつた出来事だゾ！」

「いや、そう言われても、映画の世界とかアタシ達には突拍子も無いっていうか——」

「別にいいもくん。信じてもらわなくなつて、つばきちゃんとの思い出は本物だもくん」

頬を膨らませてすっかり拗ねてしまった様子のしんのすけに、エリカも幹比古もどう話し掛けて良いものか図りかねていた。

と、その2人よりも幾分か真剣な顔つきの美月が呼び掛ける。

「ねえ、しんちゃん。もしその子が映画のキャラだつて知つてたら、それでもしんちゃんは元の世界に帰りたいつて思った？」

もしそれが本当だと仮定したのだとしたら、美月の質問は随分と踏み込んだものだった。

何となく真面目な表情でエリカと幹比古がそれを見守る中、

「——さあ」

しんのすけの回答は、普段の彼らしくない曖昧で投げやりなものだった。

*

*

*

次の日は、早朝から30度を超える猛暑だった。

「達也さん！　ジュース飲みませんか！　私取つてきますね！」

「達也さん！　雫がジェットスキーを貸してくれるみたいですよ！　一緒に乗りませんか！」

「達也さん！　沖にダイビングスポットがあるらしいです！　一緒に行きましょう！」

刺すような日差しが照り返す白い砂浜で、達也の隣にピッタリと張りつくほのかの姿が見られた。ちなみに達也を挟んだ反対側には深

雪の姿もあり、燦々と輝く真夏の太陽にも負けない熱い戦いを繰り広げていた。

そんな3人の様子を、他の面々は若干の呆れを含む顔で遠巻きに眺めていた。美少女2人に囲まれる達也の姿に普通ならば嫉妬の1つでも沸き上がりそうなものだが、レオも幹比古もむしろ達也に同情する気持ちの方が強かった。

「おっ？ エリカちゃん、ほのかちゃんの告白って成功したの？」

「ううん。告白自体は駄目だったけど、達也くんが他の誰かを好きになるまでは自分も好きのままにいたってさ」

「ほーほー、それはなかなか健気ですなあ」

ウンウンと腕を組んでそう言うしんのすけに、エリカが躊躇いがちに声を掛ける。

「……しんちゃん、昨日の話だけどき」

「ん？ 昨日の話って何だっけ？」

「好きな人の話。——映画の世界とかは正直よく分からなかったけど、そういやしんちゃんって本当はアタシ達よりもずっと年上のはずだったんだ、ってのを改めて思ってたさ」

しんのすけが生まれたのは、1985年。魔法師にとつて「生ける伝説」とまで謳われる九島烈ですら21世紀生まれであることを考えると、そもそも今も生きていられるかどうかすら怪しいくらいの年代だ。

それにも拘わらず、「サザエさん現象」という不可思議な時間のループによつて長らく5歳児のままに現代魔法黎明期を過ごし、第三次世界大戦を乗り越え、こうして自分達と同級生として同じ学校に通っている。

「——アタシ、しんちゃんと出会えて、こうして一緒に旅行できて良かったと思ってる」

「オラも、エリカちゃん達とお知り合いになれて良かったと思ってるゾ」

しんのすけの言葉に、エリカは「ありがと」と端的に答えた。

騒がしい夏のビーチの片隅で交わされた、静かな遣り取りだった。

第42話 「アリス・イン・ヘンダーランドだゾ」

西暦2095年8月中旬。

ミリタリー調のジャケットにミニスカートを身に纏い、ルビーのように鮮やかな紅の長髪を風になびかせながら、国立魔法大学付属第一高校1年B組・明智英美（またの名をアメリカ・ゴールデイ）は、学校から程近い駅前のロータリーに立って友人の到着を待っていた。

現在の時刻は、午前6時ちよつと前。いくら同級生と遊びに行くにしてもかなり早い時間帯であり、現にロータリーは人影が疎らで静まり返っている。しかしこれから向かう目的地がかなり遠く、1日中遊び倒そうと考えるとこれだけ早く電車に乗らなければいけないのである。

さて、それだけ気合いを入れて早く起き、もうすぐ友人がやって来るということもあり、英美はさぞかし楽しみにしているだろう——と思いきや、彼女の表情はどうにも晴れやかなものではなかった。

単純に眠いから、ではない。確かに起床直後はかなり眠気があったが、家を出る直前に自宅に掛かってきた電話のせいでそんなものは吹き飛んでしまっていた。

——まさかお祖母様グラン・ママから、スイスへの留学を誘われるなんて……。

その電話の主は、イギリスに住む彼女の祖母。イングラントの現代魔法の名門・ゴールデイ家の現当主の叔母であり、その権威は当主に次いでNo.2と目される人物だ。そして彼女は英美との挨拶もそこそこに、スイスの魔法学校に留学しないか誘ってきたのである。

いや、誘うだなんて生易しいものではなかった。英美が論を尽くして情に訴えて保留の返事を勝ち取らなければ、むりやりにも留学させられてしまいそうなほどの勢いだった。

外国に住んでいる外孫ということもあり、彼女は今まで祖母からほとんど干渉を受けたことが無かった。遊びに行けば作法には厳しいながらも可愛がってくれるが、それ以外については放任を貫いていた。何か急に事情が変わったのか、と英美は頭を巡らせるが、結局心当たりも無く家を出る時間になってしまった。

「エイミー！」

遠くから呼び掛けられる声に英美はハッと我に返り、そちらへと振り向いた。

そこにいたのは、ゴスロリ風のワンピースを着た少女・桜小路紅葉あかはと、サマースーツに眼鏡姿の美少年風美少女・里美スバル。並んで歩く光景はまさに「初々しいカップル」そのものであり、満更でもない紅葉の様子に英美は思わず苦笑いを浮かべていた。

「おはよう、2人共。一緒に来たんだね」

「えへへえ」

「たまたまそこで一緒になっただけ」

そう答えてフツと笑みを浮かべるスバルは、友人関係になつて数ヶ月になる英美から見ても（女性から見ても）魅力的に思えた。ほんの少しだけ高鳴ってしまった胸の鼓動を隠すように、彼女は2人を駅の中へと促す。

「それにしても、遊園地なんて久し振りだね」

「遊園地じゃなくて、テーマパークだから」

「はははっ、サクラは随分とこだわりがあるようだね」

「何てったって、招待券が手に入るほどのリピーターなものね。でもまあ確かに、事前に貰ったパンフレットを見ると単なる遊園地じゃないってのは伝わるもんね」

英美の言葉に、紅葉はどこか誇らしげにフンと胸を張った。

そんな彼女に自然と笑みを漏らしながら、英美はバッグからそのパンフレットを取り出した。

「さてと、今日は1日うんと楽しませてもらおうじゃないの。——」
群馬ヘンダーランド“！”

*

*

*

「群馬ヘンダーランド」とは、今年で開園20周年を迎える総合アミューズメントパークである。群馬県桐生市の巨大な湖の上に存在しており、車ならば東北自動車道館林インターチェンジから30分、

電車ならば東武桐生線ヘンダーランド駅が最寄り駅となる。

雫の父親で実業家の北山潮が、世界大戦で暗い影を落としていた日本を元気づけたいと、かつて20世紀末頃に存在していたテーマパーク復活プロジェクトを立ち上げ、足掛け10年の計画の末にオープンさせた。すると開園当初から家族やカップルを中心に人気を博し、今でも平日休日問わずに多くの客が訪れる北関東屈指の人気スポットとなっている。

エリアは、大きく分けて3つ。橋を渡って入場すると最初に訪れるのは「おとぎの森」。その名の通り鬱蒼と草木が生い茂るエリアで、喋る樹木や可愛い小動物などが客を出迎える。そこを抜けると中世のヨーロッパを模した街並みが広がる「ヘンダータウン」となり、ヘンダーランドに住むヘンダーくんやヘンナちゃんなどの生活を垣間見ることが出来る。さらにそこを抜け、シンボルであるヘンダー城を横目に橋を渡ると、絶叫マシーンからメリーゴーラウンドまで揃う「プレイランド」となっている。

パーク内はかなり広大であるため、通常は猿が運転する汽車に乗って移動することとなる。もちろん本物の猿ではなく、最新技術を駆使して作られた精巧なロボットだ。美人な女性をナンパしていたという目撃情報が時折客から寄せられるが、ロボットがナンパなどするはずがないので気のせいだろう。

しかしながら、そんな不思議な出来事が起こってもおかしくないと思わせるほどに作り込まれたその雰囲気は、遊園地——もといテーマパークを久しく訪れていなかった英美でさえ夢中にさせるものだった。夏休み特有の開放感もあつて、到着と同時に様々なアトラクションを駆け巡ってはハイテンションでそれを楽しんでいた。

そして現在、

「ちよっ……！　本当に、ここどこなの!？」

明智英美、16歳。彼女はこの年齢になって、見事なまでに迷子となっていた。

きっかけは、ヘンダータウンのエリアにある海賊船のアトラクションを思いっきり楽しんだ後のこと。次の目的地は既に決まっていた

ので、英美は2人を先に行かせてトイレへと立ち寄った。少々入り組んだ場所にあったトイレで用を済ませたは良いものの、パンフレットを眺めながら目的地へと歩いたつもりが到着したのはまったく別の場所。そこからあちこち歩き回るも目的地に辿り着けず、終いには自分が今どこにいるのかさえ分からなくなってしまうたのである。

「LPS(Local Positioning System)はともかく、GPSまで使えないってどういうこと!?!」

『不思議の国に現代文明は無粋ってヤツじゃないかな?』

「遊園地に思いつきり現代文明使ってるの!?! 仮にそうだとしても、ビーコンまで障害するなんてやりすぎでしょ!」

『まあまあ、落ち着いて。近くに案内板も無いの?』

「さつきから探してるんだけど、ガイドの姿すら見えないのよ!」

この歳になって迷子になったことを友人に打ち明けなければいけない気恥ずかしさも相まって、彼女の苛立ちはどんどん募るばかりであった。それでもスバルは文句も言わず彼女を宥める辺り、実に女の子の扱いを心得ていると言えよう。

『いざとなったら花火でも打ち上げてくれれば、ボクの魔法で迎えに行つてあげるよ』

『駄目よ、スバル。そんなことしたら補導されちゃう』

スバルの提案は、電話口に割り込んできた紅葉によつて却下された。魔法の使用は法令で厳しく制限されており、迷子の友人を見つける程度の理由では確かに認められないだろう。

『仕方ない。エイミイ、そこからヘンダー城は見える?』

「……まあ、辛うじて」

『ヘンダー城の正面にプレイランドへと続く橋があるから、とりあえずそこで落ち合おう』

「うん、分かった」

電話が切れ、英美は大きく溜息を吐いた。

そして建物の屋根の向こう側に見えるヘンダー城に、ギロリと鋭い視線をぶつけた。

*

*

*

「エイミイったら、この歳で迷子になるなんてね」

「……うーん、どうにも気になるなあ」

呆れ果てた様子の紅葉に対し、スバルは携帯端末を見つめながら思案顔になる。

「何が気になるの？」

「エイミイって、こんな人工的な場所で迷うほど方向音痴ではないだろう？　彼女は狩猟部に所属してて、そこで1年生ながらかなりの実力者だって評価を貰っている。野山で鳥や動物を追い掛けるハンティングは、方向音痴には務まらないよ」

「……確かに、案内板もガイドも見つからないっていうのは少し変かも。子供も大勢遊びに来る場所で、迷子の対策を何も考えていないはずないもんね」

2人は深刻な表情で互いを見合いながら、これといった答えを出すことができなかった。

スバルの「とりあえず行こうか」という言葉をきっかけに、2人はそこから歩き出した。

*

*

*

着々と目的地に近づいていく2人とは裏腹に、英美はヘンダー城との距離を縮められずにいた。そちらへ向かおうとする度に行き止まりで回れ右、を何回も強いられる苛立ちで英美の頭が埋め尽くされていく。

先程のスバルによる『方向音痴ではない』という英美への評価は控えめなものであり、正確には『鋭い方向感覚を持っている』と評すべきほどだ。そんな彼女の感覚が、先程から同様な場所をグルグルと回っているだけだと本人に伝えている。見えていながら近づけず、分かっていながら抜け出せない状況に、彼女の苛立ちはみるみる限界点へと近づいていく。

そしてまたしても、何度目になるか数えるのも腹立たしい茨の壁に突き当たった。トゲの多い野バラの生け垣であり、小柄な女性であっても潜り抜けるのは困難なほどに密集している。

「こくなったら、跡形も残さず薙ぎ払ってやるわ……！」

ミニスカートのポケット（を模した穴）から太腿に巻いたホルスターに手を伸ばし、携帯端末形態のCADを取り出した。メインに使っているショットガン形態はさすがに持ち歩ける代物ではないため自宅に置いてきているが、固定の障害物を吹き飛ばす程度ならばサブのこれでも問題は無い。

そうして片手で使うこともあるCADを両手で素早く操作し、起動式を展開した、

まさにそのとき、

「お客様、困りますなあ」

「――！」

後ろから突如呼び掛けられ、英美はバケツで氷水を頭から被ったような心地になった。起動式の構築が中止され、効果を発動すること無く霧散する。

魔法の無断使用。正確には未遂だが、あの段階まで行けば何をしようとしていたか魔法師の目には明らかであり、紅葉が言った通り警察への補導案件である。

これから自分に待ち受けるアレコレを想像しながら、英美はギギギと音がしそうなほどにゆっくりと後ろを振り返った。

そこにいたのは、ライトグリーンの制服を身に纏って帽子を被り、地図記号の書かれたバイザーで目を隠す若い男性だった。それは英美がここに入場してからあちこちで見掛けているヘンダーランドのスタッフ特有の格好であり、温泉マークの描かれたバイザーの下に覗く口元はニヤニヤと笑みを浮かべていた。

そのスタッフの態度に英美の神経が逆撫でされるが、今の彼女は魔法の無断使用を咎められる立場である。下手に逆らうわけにもいかず、どうやってこの場を切り抜けるか幾つもの言い訳を頭の中で並べていると、

「——ん？」

目元を隠すそのスタッフの顔に視線を向けたとき、妙な既視感を覚えた。つい最近その顔を見たような、そんな感覚がふいに彼女の脳裏を過ぎったのである。

そうしてジッと観察すること数秒、英美は恐る恐る問い掛けた。

「……もしかして、しんちゃん？」

「おっ？ さすがエイミーちゃん、バレちゃったゾ」

目元を覆い隠していたバイザーを上げると、つい最近の九校戦での記憶も新しい、太く凛々しい眉がトレードマークの同級生・しんのすけの顔が表れた。悪戯が成功したかのようにニヤニヤと口元を緩ませる彼に反し、英美の細く形の良い眉が吊り上がっていく。

しかしまだ戸惑いの方が強いようで、英美は小さく深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、

「しんちゃん、その格好はどうしたの？」

「オラ、ここで夏休みの間だけ警備のアルバイトをしてるんだゾ」

「バイト？　なんでまた……」

「いやあ、新しく発売するアクション仮面のフィギュアがどうしても欲しくて——」

「いや、そっちじゃなくて、なんでわざわざ遊園地のスタッフなんて普通のバイトをしてるのかってこと。しんちゃんほどの成績なら魔法関係のバイトにいくらでも就けるだろうし、そっちの方が色々条件良いでしょ？」

「どうせバイトするなら、楽しい方が良いでしょう？　……ここのお仕事、結構楽しいゾ」

しんのすけはそう言って、制服を見せびらかすようにその場でクルクルと回転し始めた。まるでバレリーナのように爪先立ちで器用に回転する彼に、クラスが違うため耐性の無い英美はどう反応したのか苦笑いを浮かべている。

と、ふいに彼女は思い出したように目つきを鋭くして、しんのすけに詰め寄った。

「というか、しんちゃん！　これはいくら何でもやりすぎじゃないの

!？」

「やりすぎって、何が？」

英美の剣幕にも一切物怖じせず首を傾げるしんのすけに、英美がビシッ！と擬態語が付きそうな勢いで茨の生け垣を指差した。

「ヘンダーだかワンダーだか知らないけど、障害物を動かして通せんぼするのはひどいんじゃない?! おかげで私、さつきから同じ所をずっとグルグル回されてるんだけどー！」

「んもうエイミイちゃん、何言ってるの？ そんな仕掛け、作るわけないじゃない」

「でも、現にここにこうして——」

「というか、ここはまだ工事中で勝手に入っちゃいけないんだゾ。表に看板があつたはずだけど、どっから来たの？」

「どっからって……、あつち」

英美が指差した先には、今まさに吹き飛ばそうとしていた茨の生け垣がそびえていた。

「そつちは行き止まりだゾ」

「今はそうだけど、さつきまでこんな無かつたの！ 言つとくけど地理感覚には自信あるから、勘違いとかじゃないからね！」

「ええっ？ つまりあの蔓が自分で動いてここを塞いだってこと？」

「いくら何でもそんなの、魔法じゃあるまいし——！」

「それだ！」

突然嬉しそうにこちらを指差してそう叫んだ英美に、しんのすけは「へっ？」と不思議そうに首を傾げる。

「何かの魔法を使って、誰かが意図的に茨の壁を作って行き止まりを作ってるのー！」

「誰かって、誰が？」

「それは……分らないけど、それを証明するために今から魔法を使いたいんだけど、警備スタッフのしんちゃんに許可を取れば、非常事態ってことで構わないよね？」

「んもう、エイミイちゃんは我が儘ですなあ。周りの建物は壊さないでよ」

「もちろん！」

消極的ながらもしんのすけの許可を貰い、英美は実に嬉しそうに先程不発に終わった起動式を最後まで構築し、移動系魔法「エクスポーダー」を発動した。有効範囲内の物体が「着弾点」から等距離、つまり球状に高速移動する魔法であり、瓦礫など多数の物体が一塊になっっているものを吹き飛ばすのに役立つ。

今回は野バラの葉っぱ一枚一枚をオブジェクトと認識し有効範囲を広く設定することで、生け垣の真ん中で爆発を起こしたように葉っぱが蔓を巻き込むように引き千切られ、生け垣の中央に人が余裕で通れるほどの大穴が空いた。

しんのすけが「おおっ」と呑気に拍手をするが、英美は気を抜かず険しい表情でそれを見守っている。
すると、

「――！」

まるで蛇のように蔓が独りで蠢き出し、せつかく空いた大穴を埋め尽くしてしまった。

「おおっ！ 壁が直ったゾ！」

「しかもこの生け垣、根も無ければ格子柵も無かった。普通野バラは何か支えが無かったらここまで育たないの。つまりこの生け垣は、魔法的な力によって支えられているってこと」

「成程成程。……んで、なんでそんなことをするの？」

「そりゃ、私達……というか、私をここに閉じ込めるためでしょうね」「誰が？」

「……どうやら、お出ましましたいね」

英美が睨みつけるのは、しんのすけがこの場にやって来た方向、つまり彼の背後だった。

それに釣られて振り返ると、そこにいたのは黒服・黒眼鏡・黒帽子という装いの男数人だった。奴らが2人と適度に距離を空けて通路いっぱい広がることで、2人は奴らと茨の壁、そして周りの建物に囲まれてしまう。

「おおっ、あの映画みたいで懐かしいゾ」

「『メン・イン・ブラック』のこと？ 映画じゃなくて、都市伝説の方なら知ってるけど」

「そうなの？ 100年くらい前の映画だけど、面白いから観た方が
良いゾ。多分動画サイトだったら普通に配信されてると思うから――」

【ミス・ゴールデイ】

しんのすけの言葉をぶった切るように、黒服の1人が話し掛けてきた。

ちなみに英語だった。「――内の台詞は英語だと思え、というヤツである。」

「あなたに危害を加えるつもりはありません。ただ、お譲りいただきたいものがあるのです。対価として、あなたが今後必要とされるものをご用立て致しましょう」

【仰っている趣旨が分かりませんが】

黒服が英語で話し掛けてきたのに合わせて、英美も同じく英語で返した。アメリカとして話す英語は普段使う日本語よりも格式張っており、傍系とはいえ名門の一員に相応しい上品な言葉遣いに思える。

もつとも、傍でそれを聞いていたしんのすけにはちんぷんかんぷんだったが。

【これは失礼、では回りくどい言い方は止めに致しましょう。――ミス・ゴールデイ、我らに『魔弾タスラム』の術式をお教えいただきました。その対価として、我々が今後あなたに向けて放たれる刺客を退いて差し上げます】

【あの魔法はゴールデイ家の秘術です。本家の人間として認められた者のみに伝授される術式を、本家から遠く離れ日本人として暮らす私が教わっていると思うのですか？】

【思うのではありません、存じ上げているのです。ミセス・ゴールデイがあなたに『魔弾タスラム』の術式を伝授していることは、さる筋から承っております】

「んもう！ みんなして英語で喋るから、オラには全然分からないゾ！ エイミイちゃん、何て言ってるの？」

「要するに、ウチの本家のお家騒動に巻き込まれたって話よ」
やきもきするしんのすけに、英美は色々な要素を排除して実に簡潔に説明した。

そうして改めて、目の前の黒服を睨みつけた。自分に向けて放たれる刺客を退いてやると嘯く奴らだが、もし断れば自分達はその「刺客」になりそうな剣呑な雰囲気醸し出している。

「なぜそこまでして、あの魔法の術式を欲しがるのですか？ まあ、答えは分かっていますけど」

「……………」

「あの術式は、ゴールドエイ本家の証。元々は古式魔法を伝承する一族でありながら現代魔法の勃興と同時にそれを修め、イングランドにおける現代魔法の権威の一角を占める本家の、まさに切り札とも言える存在」

「……………」

「たとえ本家に生まれても、あの術式を使えなければ本家の一員とは認められない。——当然、相続権も得られない」

「……………」

その瞬間、黒服達から一瞬だけ殺気が漏れた。

あまりにも分かりやすい、と英美は悪態をついて臨戦態勢に入った。

「ミス・ゴールドエイを確保しろ。多少怪我をさせても構わん。ガキの方は始末しろ」

おそらくリーダー格であろう黒服の指図と共に、他の黒服達の袖口から一斉に細身のダガーナイフが飛び出し、その手に握られた。重心が先端に寄った投擲用の物であり、その一糸乱れぬ動きから黒服達はかなり訓練を積んでいることが分かる。

しかしナイフを投げる直前、突如その動きが崩れた。

「アクシジョン、キーツク！」

「……………」

両脚を突き出し、地面とほぼ水平となる姿勢で、しんのすけが黒服達の横っ腹に飛び込んできたからである。自己加速術式を用いてミ

サイルのような勢いで迫る彼に奴らはまったく反応できず、彼の最も近くにいた者が直接攻撃を受け、さらに2人の仲間を巻き込んで吹っ飛んでいった。

なぜ訓練を積んでいるはずの黒服達がまったく反応できなかったかという点、飛び込んでくるスピードもさることながら、一番の理由は攻撃の瞬間まで予備動作がまったく無かったことだった。しんのすけをチラチラと気に掛けていた英美ですら反応に一瞬遅れたくらいなのだから、英美にしか注目していなかった黒服達が反応できるはずも無い。

しかしいつまでも驚いたままではいられず、無事だった黒服達が投擲用ダガーを順手に構えて次々と襲い掛かってきた。その狙いは頭部や心臓といった避けられやすい急所ではなく、胴体の中心である鳩尾辺りだ。

しかし奴らの攻撃のただ一つとして、しんのすけの体に擦りもしなかった。彼は「ほいほい」と軽い掛け声と共にグネグネと上半身をうねらせて避けまくり、まるで酒に酔って千鳥足になっているかのような足捌きで相手に動きを読ませなかった。

ともすれば相手を馬鹿にしているようなその避け方に黒服達も徐々にヒートアップしてきたのか、リーダー格を含めた全員がしんのすけへと意識を集中させていた。

それは英美にとって、またとない好機だった。

ミリタリー調のジャケットの至る所にあるポケットを撫でると、携帯端末型のCADではなく、扇形に開かれたトランプが彼女の両手にあった。

そして彼女はそれを、無造作に左右に振った。

両手から放たれたトランプが、まるでそれ自体が意思を持ったかのように宙を舞い、或るトランプはまっすぐ、或るトランプは回転しながら弧を描いて、しんのすけに夢中な黒服達の体目掛けて飛んでいき

「アクション・ローリング・ハリケーン！」

必殺技らしき名前を叫んだ直後、しんのすけの周囲に突然竜巻のよ

うな突風が発生した。その竜巻は術者本人を守る盾であると同時にその周辺にいる敵を迎撃する矛にもなり、黒服達はその風に弾かれて一斉に吹っ飛んでいった。

「ちよっ」

そしてついでに、英美の投げたトランプもそれに乗ってどこかへと飛んでいった。

そのトランプの行き先を把握するために周辺を見渡す過程で黒服達の様子も窺うと、ほとんど全員が周辺の建物の壁に激突して気絶していた。中には自分達が仕掛けた茨の生け垣に突っ込んだせいで、トゲに引っ掛かった間抜けな姿勢のまま気絶する者もいた。

「いやあ、実に強敵だったゾ。エイミイちゃん、怪我とか無かった?」
「……うん、私は大丈夫。数少ない見せ場を取られたとか、そんなの全然気にしてないから」

なぜか不機嫌そうに唇を尖らせていた英美だったが、すぐに気を取り直してしんのすけに向き直ると、ルビーのように鮮やかな長髪をバサリとなびかせて深々と頭を下げた。

「ごめんなさい、しんちゃん。私のお家騒動に巻き込んだじゃって」

「別に良いゾ。それがオラの今の仕事だし」

「うん、助けてくれてありがとう。それに結果的にはしんちゃんのおかげで秘術を人前で使わずに済んだわけだし、その辺についてもしんちゃんに感謝ね」

「ああ、あの『マダガスカル』ってヤツね」

「『魔弾タスラム』ね。どこの島国よ」

苦笑い混じりに首を横に振る英美の視界に、気絶した黒服達の姿が飛び込んでくる。

英美の表情が曇り、大きな溜息が零れる。

「……しんちゃんの家族、九校戦の応援に来てくれたんだって?」

「うん、そうだよ」

「そっか……。羨ましいよ、仲が良くて」

肩を落とす英美に、しんのすけは首を傾げるのみだった。

* * *

「プレイランド」のメインストリートから少し外れた場所にある、黄色とピンクに塗られた2つの大きなテントが繋がった見た目の建物。

そのアトラクションは人形劇とサーカスが融合したショーが観られるとして、園内でも屈指の人気を誇っている。まるで本当に命があるかのように生き活きと動く人形の演技がとても可愛らしく、しかしどこか切なげで、また近未来をモチーフとした「プレイランド」の中でもどこか懐かしさを覚えるサーカスという演目に、子供だけでなく大人も夢中になること請け合いだ。今もその客席は小さな子供を中心に多くの観客で埋め尽くされ、まもなく始まるショーを今か今かと待ち構えている。

そんな喧騒の中で、ようやくスバル・紅葉と合流を果たした英美が、ゴタゴタのせいで食べそびれた昼食代わりのクレープを囓りながらその光景をぼんやりと見渡していた。

「へえ、サクラがやたら推してただけあって、凄い人気なんだね」

「もちろん。これを観ずにヘンダーランドを語る奴はモグリよ」

「そこまで言うか……。これは俄然、期待が高まってくるね」

と、開演の時間になったからか照明が徐々に暗くなっていき、それに反比例して観客の拍手で会場が包まれていく。当然、英美達もその拍手に加わっている。

するとステージの真ん中をスポットライトが照らし、少女の姿をした人形が現れた。

彼女こそが、このショーで特に高い人気を誇る人形である。

その名も、トツペマ・マペット。

深緑を基調とした道化師風の衣装を身に纏い、左頬に星形のメイクを施されている。ぜんまいのネジを髪飾りのようにあしらい、腰まで届くほどに長い緑色のツインテールをしている——ように見えるが実はこれは帽子であり、それを脱ぐと癖のあるショートヘアをしているのだ、とヘンダーランドフリークの紅葉が説明する。

スポットライト以外に照明が無いため全ての観客がトツペマに注目する中、どこからともなくオルゴール調の音楽が流れ出した。するとそれに合わせてトツペマが若干ぎこちない動きで踊り出し、少女にしては落ち着いた声で歌い出す。

その歌詞は子供でも歌える単純なものであるが、僕として生み出されながらも人形だから何の役にも立たない自分を、人形であるが故に感情の無い様子で淡々と口にするという何とも切ない内容だった。

ひたすら楽しいショーを想像していた初見の観客に対して強烈な印象を与えるこのオーピングによって、観客は一気にアトラクションの世界観に引き込まれることになる。その後が始まるサーカスも明るい音楽と演出でありながら、どことなく人形であるが故の悲哀を示唆するような内容となっている。子供達は純粋にサーカスを楽しんでいるようだが、子供と一緒に観に来た大人はどうやらそれを感じ取っているようで、その不思議な感覚に複雑そうな表情を浮かべていた。

「凄い……」

夢中になってショーを見つめる英美の口から、自然と言葉が漏れた。

魔法でむりやり迷子にさせられたり、お家騒動に巻き込まれるなどのトラブルがあった彼女だが、どうやらその嫌な思い出はこのアトラクションによって塗り潰されたようだった。

人形のサーカス団によるショーの音楽や歓声が、テント型の建物から微かに漏れ聞こえてくる。とはいえ、周りのアトラクションからの歓声の方が遙かに大きく、普通に前を歩いていてもそれが聞こえてくることはまず無いだろう。

「おっ？」

しかし、警備担当のバイトとして雇われたそのスタッフだけはそれに気づいたようで、ふいに足を止めてテントの方へ顔を向けた。

しばらくそれに耳を澄ませていた彼だったが、やがて自分の仕事を

思い出したように再び足を進めてその場を離れていった。

第43話 「森崎くんと課外授業だゾ その1」

夏休みも後半に差し掛かったこの日、第一高校の敷地内は閑散としていた。夏の一大イベント・九校戦が終了したことで、スポーツ系のクラブも充電期間に入っている。教師達も夏休みなので学校には顔を出さず、彼らの指導を目的に生徒が来校することも無い。

しかしまったくの無人というわけではなく、自主トレに来ている生徒の姿もちらほら見受けられた。特にそれは1年生に多く、普段は上級生に気を遣ってあまり施設を利用できない彼らが存分に練習に打ち込める良い機会とも言える。

その1年生の中に、森崎の姿もあった。コンバット・シューティング部の練習用ユニフォームに身を包み、額だけでなく全身から汗を滲ませながら閉所戦^Q・練習場^Bを後にする。

ゴム弾を発射する自動銃座の攻撃をかいくぐりながら、迷路のように入り組んだ暗がりの通路(所々に障害物あり)を走り抜けるという、九校戦の練習でも行っていたトレーニングに取り組んでいた森崎だったが、彼の右脇腹に貼りついたゴム質の赤いペイント弾を見るに、その成果は芳しくなかったようだ。

森崎は少々苛立った表情を浮かべながら、準備室の扉を荒々しく開けた。その衝撃に、中で操弾射撃用のランチャーを整備していた1年の滝川が目丸くして振り返る。

「……荒れてるね、森崎」

「滝川か。こんな所で何してるんだ?」

「随分とご挨拶ね。内蔵CADの部品を分けてもらいに来たのよ。そっちの部長さんにはちゃんと話は通してあるわ。——そっちは、またトレーニング? ここ最近ずっとじゃない、今日はもう上がった方がいいんじゃないの?」

「……心配してくれるのは有難いが、そういうわけにもいかない。とにかく今は、少しでも実力をつけないと——」

「だったら尚更今日は上がりなさい。がむしやらにやつてりや実力がつくわけじゃないでしょ? 勉強もトレーニングも、結局は『効率』」

の問題なんだから」

森崎は反論しようと口を開きかけたが、滝川の言うことももつともだと思っただのか何も言わずに口を閉じた。

その代わりに悔し紛れに彼女を一睨みすると、男子更衣室へと消えていった。

「焦る気持ちも分かるけど……ううん、アタシじゃ分かんないか。森崎は彼らと同じ男の子だもんね」

その背中を見送りながら、滝川は独り呟いた。

*

*

*

一度自宅に戻った森崎だったが、そこで寛ぐこともほとんどせず家を後にした。しかし別のトレーニングへ向かったのではなく、カジュアルな服に身を包むその姿は単純な気分転換を思わせる。滝川の言う通り、今日のトレーニングは止めることにしたのだろうか。

——やはり1週間のブランクは、そう簡単に無くなるものじゃないか。

だが、彼の心を巣くう「焦り」は未だに消えていなかった。九校戦で負った重傷（普通ならば最低1ヶ月は掛かるほどの怪我を、魔法治療によって1週間で完治させた）はとっくに消えているが、それによつてなまった体はまだまだ完全に元通りというわけにはいかなかった。少なくとも、森崎の感覚では。

——九校戦、か。

あの一大イベントは、間違いなく自分にとって大きな転換となった。それまでは達也に対して劣等感にも似た「焦り」を感じていた彼だったが、（彼からしたら実に不本意だが）しんのすけの言葉も手伝つてそれを克服し、あまり得意ではない「スピード・シューティング」で準優勝という結果を残すことができた。優勝できなかった悔しきこそあるものの、自分の実力からしたら充分納得できる結果と言えるだろう。

しかし、もう1つの出場競技である「モノリス・コード」によつて、

彼はまた別の「焦り」を感じるようになった。

対戦チームの反則行為による不慮の怪我によつて途中リタイアを余儀なくされた自分達に代わり、達也と幹比古という二科生が代役で出場することとなり、あの第三高校の「クリムゾン・プリンス」や「カーディナル・ジョージ」を破つて見事優勝してみせた。

達也が出場することは自分が提案したことであるため、それ自体に否などありはしない。しかしながら、まさか優勝候補大本命の第三高校を下して優勝するとは思っていなかった。もし自分があの事故も無く勝ち進んだところで、第三高校に勝てるかどうか考えると正直自信が無い。

さらに言うと、達也がしんのすけと見事なコンビネーションを見せていたのも、森崎の心に「焦り」を生む要因となっていた。もちろん普段から風紀委員として一緒に活動しているからこそだと頭では理解しているし、それを目論んで達也の代役を提案したのだが、実際にしんのすけと一緒に練習してその実力差を痛感した後だと、否が応にも達也との実力差を実感してしまうのである。

そんな焦りを少しでも解消したくて、森崎はここ最近練習場に詰める毎日を過ごしていた。もし滝川にアドバイスされなかったら、今日も1日それだけに時間を費やしていただろう。たとえそれが、実りも無く単なる時間の無駄だと気づいていたとしても。

他人の忠告が耳に入る内に気分転換に出掛けたのは正解だったな、と森崎は滝川に心の中で感謝した。おそらく本人に向けて口に出されることは無いであろうその言葉を呑み込んだ彼は、ふと自分の周りを歩く人々に目を遣った。

CADのホルスターを忍ばせるために前開きジャケットを羽織っている森崎に対し、周りの人間はタンクトップやミニスカートなどの必要最低限の布しか使われていないような服装をしていた。もちろん彼らがCADの類を所持しているはずも無く、つまりそれは森崎のような魔法師が世間一般では絶対的に「少数派」であることを意味している。

昔ならそれを誇りに思っていたであろう森崎だが、今はとてもそん

な気分に入る余裕は無かった。そもそも、自分を「特別」だなんて思えなくなっていた。

——喉が渴いたな、何か飲むとするか。

森崎はそう思って、真っ先に目に留まった喫茶店へと歩いていった。ログハウス風の外観、白木を使った椅子にテーブルと、店の主人の趣味を思わせるなかなかオシャレな店だった。外のテラス席も日除けの parasol を差しているだけで、屋外用の空調設備などは置かれていない。もつとも、今日みたいに日差しの強い日はそれが仇となり、テラス席の埋まり具合は疎らなものだったが。

彼はそのテラス席に腰を下ろすと、テーブルのタッチパネルを手に取りメニューを眺め始めた。アイスコーヒーやジュースなどのドリンク、色取り取りのフルーツが盛りられたケーキ、大きなグラスにフルーツやクリームなどが詰め込まれたパフェなど豊富なラインナップである。

「とりあえず、アイスコーヒーだけで良いか……」

「おっ？ デザートは食べなくて良いの？」

「僕は特別甘い物が好きじゃやないんだ」

「ほーほー。じゃあオラは、メロンクリームソーダとチョコバナナパフェにしよーっと」

「随分と重い組み合わせだな、どっちかだけで充分だろ——」

会話が成立することに今更ながら違和感を覚えた森崎がタッチパネルから顔を上げると、テーブルを挟んだ正面の席にしんのすけの姿があった。

「よっ、森崎くん」

「何が『よっ』だ、野原！ いつから僕をつけていた!?!」

『つけていた』だなんて人聞きの悪い。たまたまここに寄る森崎くんを見つけたから、森崎くんと一緒に座っただけだゾ」

いくら人混みの中だからとはいえ、自分と同じボックス席に座る人物の気配に気づかないなんて、と森崎が一人落ち込むのも気にせず、しんのすけはタッチパネルに手を伸ばしてさっさと自分の注文を済ませてしまった。

他の席に移動しようかと森崎が周りを見渡す仕草をするも、どうせしんのすけもついて来ると思い至ったのか、あるいは彼を気にして自分が移動するのを癪だと感じたのか、森崎は浮きかけた腰を再び下ろしてアイスコーヒーを注文した。

すぐに運ばれてきたアイスコーヒーとメロンクリームソーダに2人がそれぞれ口をつけ、一息吐いたところで改めて森崎が口を開く。

「……で、なんで野原はここにいる?」

「バイト代が貯まったから、ずっと欲しかったアクション仮面の新作フィギュアを買いに行こうかと思って」

「だったらさっさと買いに行けば良いだろ。売り切れても知らないからな」

「それは大丈夫、先にお店に電話して取り置きを頼んでるから」

「……おまえ、そういうところは抜け目ないよな」

吐き捨てるような森崎の言葉に、しんのすけは「いやあ、それほどでもお」と照れたようにニヤニヤと笑みを浮かべていた。

それを横目に眺めていた森崎が、ふと気づいた。

しんのすけの今の服装は、真っ赤なTシャツに黄色のハーフパンツ。その腰部分にはベルト型のCADが巻かれているが、上着を羽織っていないため剥き出しの状態になっている。

「……野原、CADを身に付けるときは、上着を羽織るとかして外から見えないようにしろ」

「おっ?。なんで?」

「周りの一般人にしてみたら、常に武器をちらつかされてるようなもんだろ。下手に威圧感を与えて怯えさせたり、逆に好戦的な奴らの目に付くのを防ぐためだよ」

「ほーほー。さすが森崎くん、そういうのに詳しいですな」

純粋に賞賛の言葉を口にするしんのすけだったが、森崎はむしろ苦々しく「別に大したことないだろ……」と彼から逃げるように目を逸らす反応を見せた。

首を傾げるしんのすけを無視して、森崎は店前を通り過ぎる通行人をぼんやりと眺め始めた。

夏休みということもあつて、2人と同じくらいの年頃が一番多いように見える。その中でも半分がカップル、もう半分の内9割ほどがグループ、そして残りの1割がソリスト（気分としてはワンマンアーミーの方が近いか）といったところだ。

そんな中で森崎の目に留まったのは、1人の少女だった。

ハイネックのノースリーブシャツに膝丈のプリーツスカート、素足にサンダルという普通の格好をしていながら、それを身につけているのは10人中9人が美形と称するほどの美少女だった。少々吊り上がった目としなやかな動きが、ネコ科の大型獣（とりわけ豹といったところか）を彷彿とさせる。

森崎はその少女に釘付けとなった。美少女であることもそうだが、彼女からは魔法師であるために気づけた「違和感」があつた。

そして何より、自分と同じように彼女を目で追っている気配があることに気がついた。彼女に見惚れているとかナンパを狙っているといった下心ではない、はつきりと表現するならば「害意」が伝わってくる。それは彼がときどき手伝っている「家業」故の直感だった。

「野原、あそこを歩く女性なんだが……」

「おっ？ 森崎くんって、意外とああいう気が強い感じがタイプ？」

「そうじゃない。おまえの目から見て、何か「違和感」を覚えないか？」

「違和感？ うーん、何だか日本人っぽくないゾ。外国の人かな？」

「……もういい、僕は行くからな」

卓上の端末で自分のアイスコーヒー分の代金を支払い、森崎は椅子を引いて席を立った。

「あつ、ちよつと待って。まだパフェ食べ終わってないから」

「知るか。じゃあな」

しんのすけの呼び止める声も無視して、森崎は先程の少女と同じ方向へと去っていった。

*

*

*

少女は公園地区から離れて、倉庫街の方へと歩いていく。彼女と距離を置いて後をつける森崎は、周りの通行人の数がだんだんと少なくなっていることに気がついた。いくら公園やアミューズメント施設と方向が違うとはいえ、偶然で片づけるには減り方が急すぎる。

森崎はそれを、不自然な力が働いていると結論づけた。少女が魔法を使った様子は無いので、おそらく別の何者かが犯人だ。

そうなるか気になるのは、人目を無くすその動機だ。誘拐か、強盗か、それとも強姦か。少なくとも、暗殺ではないだろう。暗殺が目的ならば、わざわざこんな回りくどいことをせずとも、離れた場所から魔法でも実弾でも狙撃すれば済むのだから。

しかしこれだけ広範囲に術を展開するとなると、相手は1人や2人ではないだろう。ならば力量も分からない内に正面からやり合うのは愚行だ。相手が行動に出た瞬間に側面から奇襲、一時的に無力化した際に彼女を連れて逃走するのが良いだろう、と森崎は頭の中で方針を立てていく。

と、倉庫エリアに入っていくと思われた少女が急な方向転換をし、2代目のレインボーブリッジ方面へと向かい始めた。いくら人目が無いとはいえ表通りには街路カメラがあるため、さすがに賊もここで襲撃を仕掛けるとは森崎も思っていなかった。

しかし、何事も予想通りにはいかないものである。

「あ、あなた達、何者なの!？」

人通りと車通りが完全に途絶えたその瞬間、今までずっと感じてきた視線が6人の男となって姿を現した。突然その男達に周りを取り囲まれた少女が、動揺しながらも彼らを睨みつけて叫び声をあげる。男性ですら得体の知れない恐怖に身を竦ませて声が出なくてもおかしくない状況で、彼女のその反応は気丈なものだった。

少女がパニック状態に陥っていないことを確認して、森崎は街路樹の陰に隠れた。CADを構えるその手は小刻みに震え、こめかみに冷たい汗が一筋流れる。

自然と荒くなっていた呼吸を整え、森崎は街路樹から一気に飛び出した。

そのままCADの引き金を引いて2発。相手が懐に手を伸ばしたのを見て、前方へ身を投げ出しながら空中で1発、転がり込みながら1発、体を起き上がらせながら1発。

森崎が使用したのは、後方と前方の加速を瞬時に切り替える2工程の加速魔法。余計なダメージを与えず一撃で相手を無力化するためのものであり、これを食らった者は脳と内臓を前後に揺さぶられて意識を刈り取られる。計5発の魔法は寸分違わず5人の男に作用し、奴らはその場に崩れ落ちていった。

そして6人目に狙いを定めようとして、森崎の心臓は大きく脈打った。

そいつの手に握られているのは、サブレッサー付きのオートマチック拳銃——実弾銃だった。魔法で反撃してくるものだと思っていた森崎は、実弾を防御する術を持ち合わせていない。今から魔法を構築していたのでは、実弾に間に合わない。

せめて射線から逸れようと森崎は脚に力を込め、

「アクション、キック！」

「——！」

突如横から弾丸のような勢いで飛んできたしんのすけ、そしてそんな彼の脚が横っ腹に突き刺さり「ぐ」の字になって吹っ飛んでいく男に、森崎は思考が空白になるほどの驚きを覚えた。少女も同じく相当驚いたようで、目を丸くして彼を見上げながら路上に座り込んでいた。

しかしいち早く我に返った森崎が、彼女の下へと駆け寄りその手を取った。

「立てますか？ とにかくここから離れましょう。こいつらも人目を憚るようですし」

最初は戸惑っていた少女だが、泣き出したりパニックになることもなく森崎の言葉に頷いて立ち上がった。

少女と手を繋いだまま、森崎は駅方面へと走り出した。高いヒールのサンダルで懸命に走る彼女の姿に、そして手から伝わってくる彼女の小さく柔らかい手の感触に、彼の中に眠る騎士道精神が掻き立てら

れる想いがした。

「いやーん、森崎くんだったら大胆なんだからあ」

「……………」

しかし、2人の横を並走するしんのすけのからかいに、森崎は気分がみるみる降下していく心地になった。

*

*

*

森崎が少女を連れて駅へと向ったのは、単純に人通りが多いために襲われる可能性が低いのと、いざとなれば公共の交通機関で遠くまで逃げられるからである。もちろん一旦バスや電車に乗ってしまうと行動が著しく制限されてしまうため、使いどころは見極めなくてはいけないが。

ところが、どこか遠くへ逃げるといふ提案は、他ならぬ少女自身によつて却下されてしまった。

「ちよつと待ち合わせをしてね、ここを離れるわけにはいかないのよ」

「だったら相手にメールでもすれば——」

「ちよつと訳ありだね。こつちからメールできないの」

上目遣いで困惑気味の笑みを浮かべる少女に、森崎は自身の頬が紅くなるのを自覚した。『訳あり』だなんて重要なワードが聞こえてきたが、既にこの少女に対して騎士めいた義務感を抱いていた森崎は、そんな些細なことには触れないで——

「訳ありってどんな？」

一切のオブラートにも包むことなく、しんのすけが少女にそう尋ねてきた。あまりにもハツキリと言うものだから、少女だけでなく森崎も一瞬表情を固まらせてしまう。

「おい、野原！　そういうのを普通に話せないから『訳あり』なんだろうー！」

「でもさ、そのせいで襲われたんじゃないの？　もしかしたらその子は悪い奴で、警察から逃げてる真つ最中かもしれないゾ？」

「たとえば彼女が誰だろうと、街中で平気で銃を撃とうとしていた連中が警察みたいなまともな人間のわけが無いだろ。——というか、そもそもなんで野原がここにいるんだ？ カフェで別れたばかりだろ」「んもう、せつかく助けてあげたのに。森崎くんが女の子の後をつけ始めるから、恋人がいない寂しさにストーカーするようになったのかって心配だったんだゾ」

「ス、ストーカーなんてするかあ！ 恋人がいないとか余計なお世話だ！」

どんだん脇道に逸れていく森崎としんのすけの会話に、少女が堪えきれずにフツツと笑い声を漏らした。2人はそこで少女の存在を思い出したように会話を中断し、森崎は恥ずかしさを紛らわすように咳払いをする。

「えっと、さっきは助けてくれてありがとうね。私はリン||リチャードソン、カリフォルニアの大学に通っていて、今は旅行中なの。リンって呼んでね」

「僕は森崎駿といいます。よろしくお願いします」

「オラは野原しんのすけ、しんちゃんって呼んでね」

少女・リンの自己紹介に併せて森崎としんのすけも互いの名を口にするが、リンが「えっ！」と声をあげてしんのすけに意外そうな目を向けた。

「おっ？ どうしたの、リンちゃん？ オラのこと知ってる？」

「えっと、ほ、ほら、あなた九校戦に出てたでしょ？ そのときの試合を観てたのよ」

「ほーほー、オラもすっかり有名人ですなあ。——同じく九校戦に出てた森崎くんには一切反応しなかったのに」

「余計なことを言うな、野原！」

流れるように始まる2人の漫才めいた遣り取りに、リンは「あはは……」と乾いた笑い声をあげるのみだった。

そんな彼女に、森崎が心持ち身を乗り出して申し出る。

「リンさんの事情については訊きません。その代わり、お迎えの方が来るまで僕に護衛を務めさせてもらえませんか？」

「……守る？　あなたが、私を？」

目を丸くして問い掛けるリンに、森崎は力強く頷いた。

「この国には『袖振り合うも多生の縁』という言葉があります。僕があなたの誘拐未遂に居合わせたのも、きっと何かの縁でしょう。あなたの知り合いが迎えに来るまでの間、僕にボディーガードを務めさせていただけませんか？」

「危険だっていうのは、さつき分かったでしょう？」

「ご心配なく。家業の手伝いで、2年のキャリアがあります」

「家業の手伝いって……ああ、あなた、あの『森崎』だったのね」

それまで話半分に聞き流している雰囲気だったリンが、納得したように何度も頷いた。それは目の前の少年と百家の『森崎』が繋がったからであるが、同時にそれは彼女がボディーガードというものに馴染みがある立場の人間であることを意味している。

「でも私、今手元に持ち合わせが無いし……」

「お金を取ろうなどと思っていません。僕はただ、知らぬ振りをしたくないだけです」

「ふふっ、紳士なのね」

クスリと笑みを零すリンに、森崎は気恥ずかしさで彼女から目を逸らした。

するとちやうど逸らした先で、しんのすけと目が合った。ジトーツというオノマトペでも付きそうな半眼でこちらを見つめる彼に、森崎は思わずムツと顔をしかめる。

「……何だよ」

「別に、オラは何も言っていないゾ」

「それじゃ、せっかくだからお願いしちゃうかしら？　——あ、でも

次から私のことは『リン』って呼んでね？　今度『リンさん』なんて呼んだら、その場でバイバイしちゃうんだから」

「はい、分かりました」

リンの申し出に森崎は頭を下げて了承すると、とりあえずこの場を離れることを提案した。何人に狙われているか分からないこの状況で、襲われた場所の周辺でずっと留まっているのは得策ではない。

そういうわけで、3人は人通りの多い場所を目的地として歩き出し

「……いや、なんで野原もついて来るんだよ」

「んもう、そんなにリンちゃんとかと2人きりになりたいのお？」

「なっ——！ そんなわけないだろうっ！」

「私は大歓迎よ。ボディガードは1人でも多い方が心強いものね」

他ならぬリンが嬉しそうに手を叩いてそう言うのだから、森崎としては反対する理由はない。

「……怪我しても知らないからな」

なので一言だけそう告げて、その場からの移動を始めた。

第44話 「森崎くんと課外授業だゾ その2」

待ち合わせているというリンの知り合いから連絡が来るまで、3人は人で賑わっているレストランに入ることにした。ここならば人目を気にしていると思われる襲撃者から襲われる心配は無いと考えてのことだが、ふとした瞬間に纏わり付く視線を感じることから相手はまだ彼女を諦めていないらしい。

しかし、常に気を張り詰めて精神的に疲弊するのも好ましくない。なので森崎はそれを気にする素振りを見せずに、努めてリンとの会話を楽しむことにした。ちなみにしんのすけは、最初からそんなことを気にせず普通に会話を楽しんでいた。

「ということは、リンは魔法師ではないんですか？」

「ええ。どうしてシュンがそう思ったのか分からないけど……」

リンはそう言っつて、少し困り顔で笑った。一時たりとも同じ表情を見せずにコロコロと変わる表情が、彼女の魅力を何割増しにも引き立てている。

と、彼女は何かを思い出したように「もしかしてこれかな？」と胸元からペンダントを引っ張り出してみせた。そのときにボタンを外したシャツから柔らかそうな膨らみがチラリと見え、うっかり見てしまった森崎は顔を紅くして視線を逸らした。

「リンちゃん、何それ？」

「マジックアイテム」

「ほーほー」

「身につけてると、人目を惹かなくなるんだって。色々な目的の人攫いが横行していたときに作られた、悪い人に目をつけられないようにするためのお守り……本物よ、シュン？」

元々現代魔法は古式魔法を研究して体系化したものであり、古来のマジックアイテム

“魔法具”と称する物の中には本当に魔法力があるのも少なくない。

とはいえ、偽物がその数十倍も多く出回っていることも事実であり、特に現代魔法一筋の若者ほど“マジックアイテム”というものに懐疑的なイメージを持っている。

おそらくそれが顔に出ていたのであろう森崎だったが、リンの言葉を疑うつもりは無かった。

もつとも、まったく疑問が無かったわけでもなかったが。

「魔法師じゃないのに、マジックアイテムは持つてるんですか？」

「えつと……、前に知り合いが『ストーカー除けに』ってくれた物なの」

「ストーカー？ 以前にもそんな被害が？」

「え、ええ、まあ」

「ねえリンちゃん、それ借りても良い？」

森崎の質問に多少ともりながら答えるリンだったが、しんのすけが手を伸ばしながら尋ねると即座に「ええ、良いわよ」とその手にアクセサリーを乗せた。そのときの彼女はホツと胸を撫で下ろすような表情だったが、森崎は魔法具が通用しなかった襲撃者に心が向いていたため気づかなかった。

色々な角度から覗き込んだり照明にかざしたりしているしんのすけを眺めながら、リンがぼんやりとした口調で疑問を口にする。

「シюн達にも通用しなかったみたいだし、やっぱり魔法師って特別なの？」

「……そんなこと、ないですよ」

苦しい声で紡がれた森崎の返答に、リンの視線が彼へと向いた。

「魔法というのは、人間の持つ“技能”です。リンの持っている魔法具も、人が魔法の力を使うようにするための物という点では魔法師の術式と同じです」

「……そうよね。魔法師も、私達と同じ人間よね」

発言した本人も気づいていないことだが、リンのその言葉は魔法師とそうでない者を別の種と認識したうえでのものであった。そして幸いなことに、森崎もそれに気づかなかった。

ちなみに魔法具のペンダントを観察していたしんのすけは特に反応を見せなかったが、彼がそれに気づいたかどうかは分からない。しかしどちらだったとしても、おそらく彼の無反応は変わらなかつただろう。人間ではない別種の存在“に対する耐性を持つ彼にとって、人間かどうかという基準はさして重要ではないからだ。

と、そのとき、リンの表情が強張った。森崎としんのすけが彼女を見遣る中、リンは携帯端末を取り出した。どうやら待ち合わせの相手からメールが届いたらしいが、それで安心するのではなく緊張するというのはどう解釈すれば良いのか、森崎には判断しかねていた。

「レインボーブリッジの真下。そこに船をつけるって」

「おおっ。船を持つてるなんて、待ち合わせの相手ってお金持ち？」

相手を詮索するしんのすけに森崎がギロリと睨みつけ、リンはニコリと薄い笑みを浮かべたまま答えなかった。

「……行きましようか」

森崎はリンを促しながら、支払いをするために卓上端末へと手を伸ばした。

しかし文字通りタッチの差で、リンが端末にカードをかざしていた。

「年上の女に奢ろうなんて、高校生のくせにナマイキよ」

余裕の笑みで森崎の額を人差し指で突きながらそう言うリンに、森崎はすっかり顔を紅く染め上げた。

そしてそんな彼の姿に、隣で見えていたしんのすけが「やれやれ」と呆れていた。

*

*

*

リンの言った「レインボーブリッジの真下」というのは、おそらく橋台の脇に作られた広場のことを指すと思われる。表通りから行つた方が短い距離で済むが、彼らはあえて遠回りとなる公園経由の道を選んだ。襲撃者が使う術式は、人々が行き交う大通りよりも人の動きが滞留する公園の方が効果は薄いと考えたからである。

よってリンのペンダントは、未だしんのすけの手の中だった。今のシチュエーションで、他人の注意を逸らす術式は逆効果だからである。

それがまさか、このようなトラブルに見舞われる結果になろうとは。

「……………」

自分達の目の前にいる彼らを、森崎達3人は呆れた表情で眺めていた。

サッカーのフリーキックでも止めそうな密集度で横に並んでいるのは、素肌に光沢のあるベストを羽織った、手首やら肘やらに金属のリングを嵌めている少年グループだった。そのベストは防弾・防刃性能のある防護服だが、通気性が極端に悪いためか前を開けて袖を切り落としている。もちろんそんな服に実用性など皆無であり、つまりそれは単なるファッションで着用しているだけであり、彼ら自身も単なるファッションの域を出ない不良だということだ。

ちなみに腕につけているリングは筋肉の収縮速度を高める微弱な電流が流れるものであり、お手軽にパンチを強化できることから中途半端な喧嘩屋の間で流行っている代物だ。

この見た目重視のチンピラ集団は確か「ウォリアーズ」と自称していたか、と森崎は記憶の奥底から彼らに関する情報を引っ張り出した。その間も少年達はニヤニヤと笑うだけで何も話し掛けてこない。

しかし森崎がリンの肩を取って道を引き返そうとすると、ヒューヒューと挑発するような口笛と共に、予想外に統率の取れた動きで2人の前に先回りした。

「急いでるんです。通してください」

「まあまあ、そんなこと言わないで俺達と遊んでよ」

「そうそう。その坊やより、もっと楽しいこと知ってるよ?」

リンの言葉に、少年達は気持ち悪い猫撫で声で彼女に近づいてくる。

「ちよつと、本当に止めて——」

「無駄です。こいつらは、最初から話を聞くつもりが無い」

リンを制止する森崎に、少年達が下品な笑い声をあげた。

「おーおー、言ってくれんねえ。まあ、最初からオハナシする気なんて無いのは確かだけだな」

「渋谷や池袋ならともかく、有明であなた方のような絶滅危惧種にお会いするとは思いませんでしたよ」

「……随分とオモシレーことを言う奴だな、おまえ」

「一通り見得を切つて、もう気は済んだでしよ？ 僕達は本当に急いでいるんです、通してもらえませんか」

「……どうやら痛い目をみてえらいいな」

森崎の目の前にいる少年が爪先に重心を移動したのを見て、森崎が軽く右肩を引いた。

前開きのベストが僅かに揺れ、その拍子に隠しホルスターから頭を出すCADがチラリと見えた。

「……てめえ、まさか魔法師か！」

「びびんじゃねえ！——おい魔法師、知ってんぜ？ てめえらのマホーは拳銃と同じで、素手相手の奴に使つたら牢屋にぶち込まれんだろ？ そんな見え見えのハツタリに引つ掛かるかよ」

「おう、そういうええそうだったな！ マホーを使えねえ魔法師なんか、ただの木偶の坊だ！」

森崎の正面にいる少年がどうやらリーダーらしく、彼の言葉によつて他の少年達も調子を取り戻して再び笑い声をあげた。

しかしそんな彼らに、森崎がフツと笑みを漏らした。それを嘲笑だと受け取った少年達はその目に怒りを宿して森崎を睨みつけ、そして森崎も口元に笑みを携えたまま平然とした様子でそれを迎え撃つ。そしてそんな彼の傍で、リンが心配そうにその様子を見守っている。

いつ途切れるかも分からない、膠着状態。

おそらくその中にいるほとんどが、森崎とリンと一緒に歩いていた少年の存在など忘れていたことだろう。

——パアアアアアアアンツ！

「——！」

爆竹でも炸裂したかのようなけたたましい破裂音に、少年達が一斉に驚いて咄嗟にそちらへと顔を向けた。

いつの間にか彼らの輪の中から外れていたしんのすけが、合掌するよう両手を合わせてこちらへと突き出していた。魔法の知識などほとんど無い彼らでは、しんのすけが拍手の音を魔法で増幅させたなんて思い至りもしないだろう。

ね。いつの間に話を合わせてたの?」

「いいえ、何も相談していません。アイツが何か企んでるみたいだったので、とりあえずこつちに注意を惹きつけておいただけです」

「そうなんだ、凄いわね。でもアイツらに狙われて、シンチャンは大丈夫かしら……?」

「アイツら程度に遅れを取ることは無いでしょう」

森崎がハッキリとそう言い切ったため、リンの顔から心配の色が消えた。

その代わり、森崎の顔にて不審の色が濃くなった。

「……リン、あのペンダントは使っていませんよね?」

「え? ええ、もちろんよ。というか、シンチャンがまだ持ってるし」
「そうですか。……ならば、おかしいと思いませんか? あれだけの騒ぎを起こしているにも拘わらず、周りの人達の反応が無さすぎでした」

「……もしかして?」

「――!」

その瞬間、森崎は周りを睨みつけるように見回すと、デイバッグから幅広のブレスレットを取り出して手首に嵌め、空のホルスターを右腰のポケットに引っ掛ける。それはまさに、彼の戦闘態勢だった。

そしてそれを待つていたかのように、黒の上下に黒のサングラスを掛けた、まるでメン・イン・ブラックの都市伝説を具現化したような奴らがどこからともなく現れて、森崎とリンを半包围に取り囲む。

むざむざ敵に取り囲まれてしまったことに森崎は悔しそうに歯を食い縛るが、彼らからリンを庇うように前へ躍り出た。

「我々は、情報管理局の者だ」

黒ずくめの男はそう言つて、黒い皮の手帳を取り出した。中を開いて、それを森崎に見せる。確かにそこには内閣府情報管理局のマークが、見る角度によって色と模様が変化する特殊印刷で刷り込まれていた。その変化のパターンに催眠効果があることを知っている森崎は、マークを確認すると早々にそれから目を逸らした。

「ミス・リチャードソンの護衛は我々が引き継ぐ。これより先は公務

につき、ご遠慮願いたい」

「……リン、彼らについて行きますか？」

森崎の後ろに隠れて彼のベストを掴んでいるリンに尋ねると、彼女は勢いよく首を横に振った。

「申し訳ありませんが、お断りします」

「……公務だと、言ったはずだが？」

「護衛ならば、本人の意思に反して強制することはできません。——それとも、逮捕状でもお持ちですか？ 内情に逮捕権は無いはずですが」

森崎の言葉に、黒ずくめは「仕方ないな」と言いたげな笑みを浮かべた。

その男達の袖口から、銃口が覗く。

その瞬間、森崎は左手でリンを抱きしめ、右手でブレスレット型のCADを操作しながら海面に向かってダイブした。突然のことで悲鳴をあげるリンによって、2人が直前までいた空間を引き裂く小さな針（麻酔薬つき）の音が掻き消される。

そして2人の体が海面にぶつかる寸前、2人の体に魔法が発動し、空中スレスレを移動して隣の栈橋へとジャンプした。そして着地の瞬間にリンをしゃがませ、自身も身を低くしながらブレスレットを待機状態にして、懐から拳銃形態のCADを取り出す。

——確認した限りだと、敵は8人か。

彼の頭の中には、すでにこの場から逃げ出すという選択肢も、敵の素性を探るといふ選択肢も存在していなかった。背後にいるリンを守る、ただそれだけである。

おそらく敵8人の内、魔法師は2人。まずはそれを無力化するべく、森崎は最初にリンを襲った襲撃者に対して使用した加速魔法を、魔法師に向かって2発続けざまに放った。1発は当たり、1発は防がれた。そして森崎の魔法を防いだ魔法師がCADに指を走らせているのが見え、他の黒服が麻酔銃をこちらに向けているのが見える。

それを確認するや否や、森崎は手品のような鮮やかな手捌きで拳銃形態のCADをしまい、ブレスレットを起動させる。自身の体に加速

魔法が発動しているのを無視して、移動系魔法の起動式を呼び出す。それによって自身に向かつていた麻酔針を空中に静止させ、その代償として彼の体に横殴りの加速が発動した。

森崎の体が地面を離れて吹っ飛び、海面に落下する。叫び声をあげるリン目掛けて、黒服の男達が殺到する。

と、そのとき、後方にいたもう1人の魔法師が突然地面に崩れ落ちた。

男達がそれに気づいて振り返ったのと同様、水面から森崎が姿を現した。しかもただ顔を出すのではなく、イルカ顔負けの大ジャンプで水飛沫を上げながら登場した森崎に、男達が慌てた様子で麻酔銃を彼へと向ける。

しかし、自由落下の最中に拳銃型のCADを取り出して6発の魔法を放つ森崎には敵わず、彼らは苦悶の表情を浮かべながら崩れ落ちていった。しかし森崎の方も自由落下を減速する魔法が間に合わず、着地の勢いを殺しきれずに舗装道路に転がる羽目となった。

「シューン！」

リンが心配そうな表情を浮かべて、森崎へと駆け寄っていく。彼は立ち上がりとうとするが、脚に激痛が走り苦悶の表情を浮かべ、再び地面に腰を下ろした。

「ごめんなさい、シュン。私のせいで、シュンが危ない目に……」

「大丈夫ですよ、リン。無事で何よりです。——それよりリン、待ち合わせの船はアレではないですか？」

「え？ 多分、そうだと思う……」

森崎が海に向かって指を差すので目で追うと、2人のいる栈橋に向かって喫水の浅い海河両用の高速クルーザーが近づいてきていた。やがてクルーザーが栈橋付近で止まり、中からスーツ姿の男性2人が降りてきてお辞儀をする。

「行ってください、リン」

「で、でも、シンチャンがまだ——」

「良いんです。早くしないと、仲間がやって来るかもしれません」

リンは迷うように森崎とスーツ姿の男性達を交互に見遣っていた

が、やがて森崎に深々とお辞儀をするとクルーザーへと駆けていった。お別れのキスは無かったが、しっかりと彼女を守れたという「現実」が損なわれなくて済むと強がりではなく考えていた。

船上から手を振るリンに、森崎は地面にあぐらを掻きながら手を振り返す。途中で疲労を隠せない様子でガツクリと項垂れて溜息を吐く場面もあつたが、すぐに持ち直してクルーザーの姿がハッキリと見えなくなるまで続けられた。

そうしてしっかりとリンを見送った後、森崎は周りに目を遣った。他者の関心を逸らす精神干渉魔法の効果は切れたためか、通行人が遠巻きにこちらを見ていた。その目には恐怖の色が滲み出ている、そしてその視線は彼の左腕に装着されたブレスレット型CADに集中している。

しかし森崎は、そんな視線など気にならないほどの充足感に満ちていた。最後の最後に締まらない結果となってしまったが、しかしその方がむしろ自分らしいのかもしれない、などと考えられるほどの余裕すら生まれている。

だからなのか、森崎はふと気になった。

「野原の奴、どこまで逃げてるんだ？ ……まさか、やられちゃったなんて無いよな？」

*

*

*

「メイリン様、ご無事で何よりです」

「ええ、あの2人が助けてくれましたから」

岸を離れたクルーザーの上で、リンは森崎達と接していたときとはまるで別人の冷たい表情で、スーツ姿の男性の1人が口にした言葉にそう答えた。

するとそこへ、髪がすべて銀色になった老紳士が姿を現した。

「メイリン様……、このような時期に1人でこの国に来られるなど、立場をお弁えください」

「私に指図する気？」

「そんな、滅相もございません」

リンの言葉に、老紳士は恭しく一礼した。物腰こそ非の打ち所が無いものの、どこか空々しい印象を与えるものだった。

その証拠に、老紳士はすぐさま顔を上げて、寧猛な本性を隠しきれない鋭い目線をリンに向けた。

「しかし、この国の政府は我々と徹底的に争うつもりのような。今回のメイリン様に対する非礼、相応の報復が必要だと存じますが」「許しません」

老紳士の言葉を、リンはバツサリと切り捨てた。

「成程、日本政府の今回のやり方は横暴にして非礼千万。ですが私は、それを補って余りある厚情を彼らから受けました。あなた方が魔法をまったく使えない私をリーダーとして祭り上げるといふなら、私はこの国に手を出すことを禁じます。それが不服なら、私をカリフォルニアへ帰してちょうだい」

「いえ、すべてはメイリン様のお心のままに」

リンの堂々とした立ち振る舞い、そしておおよそ若い女性が出せるとは思えない威圧感、老紳士に思わず頭を下げさせる力があつた。いくら養女とはいえ「無頭竜」の首領（今はあくまで「元」だが）であるリチャードⅡ孫と血が繋がっているだけのことはある、といったところだろうか。

そんな彼女を乗せたクルーザーは、誰にも邪魔されることなく海路で日本を後に――

「リンちゃん、忘れ物だゾ」

「――！」

突然聞こえたその声に、リンだけでなくその場にいた全員が驚愕の表情を浮かべ、声のした方へと即座に向き直った。

そこには、魔法具であるペンダントを持つしんのすけの姿があつた。

「貴様！・なぜ――」

「しんちゃん、どうして……!?!」

老紳士がしんのすけに詰め寄ろうとして、リンが自身の体を彼の前

に滑り込ませることで阻止した。そして努めて自然に見えるよう満面の笑みを浮かべて、しんのすけに当然の問いを向ける。

「ペンダントを返しに来たんだゾ。さっきの変な人達から逃げ切って戻ってきたら、リンちゃんが船に乗って海に出ようとしていたからビックリしたゾ」

「全然気づかなかった……そうか、そのペンダントのせいね」

普通船に乗り込んでくる人物がいたとしたら、これだけの人数がいて誰1人気づかないなんて有り得ない。おそらく彼が持つてるペンダントが自分達に作用したのだろう、とリンは改めて彼の持つ偶然性に舌を巻いていた。

と、リンがそんなことを考えていると、老紳士が何かに気づいたように目を見開いた。

「まさか、奴が野原しんのすけですかっ!？」

「おっ? なんでおじさん、オラのこと——」

「ほらあ! 彼も私と同じく、九校戦であなただのことは知ったのよ! 良かったわね、憧れの選手に会うことができて!」

「な、何を——!」

「ありがとうしんちゃん、ペンダントを返してくれて! 今すぐUターンして栈橋に向かうから、それまで大人しくしていてね!」

「ほーい、分かったゾ」

「お、お待ちください、メイリン様! 今戻っては先程の奴らがまた——」

何やら意見を述べようとしていた老紳士に、リンがギロリと睨みを利かせて彼に詰め寄った。

「良いから、私の言う通りにしなさい! それとも何、あなた達の『元上司』の二の舞にでもなりたいのかしらっ!？」

「——い、いえ! 大変失礼致しました! おい、今すぐ進路を戻せ!」

「は、はい!」

老紳士が運転手に指示を出し、クルーザーはグルリとUターンして先程出発したばかりの栈橋へと逆戻りを始めた。あまりに乱暴な運

転にリンがバランスを崩しかけるが、彼女はそれに怒ることなくしんのすけに対して引き攣った笑顔を向け続けていた。

　　棧橋付近で未だに座り込んでいた森崎と変に気まずい再会を果たすのは、それから数分後のことだった。

第45話 「夏休みの思い出を作るゾ」

西暦2095年8月31日。魔法科高校における夏休み最後の日。

たとえどれだけ時代が進もうと、長期休暇の学生にとって「宿題」というのはけつして切り離すことのできない「試練」と言えるだろう。達也たち魔法科高校の面々も、世間一般の学生の例に漏れず夏休みの課題をたんまりと課せられていた。「普段全然俺らのことを見ていないのに、こういうときだけ平等なのは如何なものか」というのは、単純に宿題に対して嫌悪感を表していたレオやエリカの言葉である。

しかも達也の場合、他の学生と比べてもスケジュールがかなり厳しくなっていた。夏休み前半は九校戦でほとんど潰れてしまった（たとえ代表選手だろうと宿題が免除になることは無い）うえ、FLT開発第3課の一員として飛行デバイスの商品化に向けての会議、そして独立魔装大隊の一員として野外演習及びミーティングにも参加していたため、宿題に充てる時間が他の学生よりも極端に限られていた。

とはいえ、それで音を上げるほど達也は柔ではない。九校戦のために自宅を離れる直前にはほとんど片付けてしまい、九校戦を終えて無人島でのバカンスを経て帰宅した次の日には残りの宿題をさっさと終わらせていた。そしてそれは、彼の妹である深雪もほぼ同じだった。

なので本日、2人は残った宿題に悪戦苦闘するなんてことも無く、都心のショッピングタワーへと足を運んでいた。

理由は、深雪のミラージ・バット優勝のご褒美を買ってあげるため。「プレゼント」ではなく「ご褒美」というところに些か不満の残る深雪ではあったが、愛しのお兄様から贈り物を貰うこと自体は嬉しいため、実の上機嫌で彼の隣を歩いている。腕を取るほどの露骨な行動はしていないものの、ピッタリと体を寄せ合う2人の距離感はほとんど腕を取っているのと大差無かった。

「それで深雪、欲しい物はもう決まっているのか？」

「ええと、それなのですが……。できれば、夏物のワンピースを……」

もしや九校戦会場へ向かうときに見た真由美のサマードレス姿に

刺激されたのか、と達也は思ったが、そんな考えを口にする事無く深雪の案内で目当てのブティックへと向かった。

到着したその店は、まさにそういったワンピースを重点的に展示していた。普段着ている物と比べると少々露出多めにも思えるが、サマードレスを着せられたマネキンを眺めながら『たまには冒険しても良いだろう』と達也は思った。

しかし深雪は、達也が見ていたサマードレスを、正確にはAR技術を用いた仮想タグを見て少し表情を怯ませていた。達也もアプリを使って値段を確認してみると、確かに10代の学生が手を出すには躊躇われる数字が記載されている。

しかし達也にとっては、充分予想の範囲内だった。そもそも深雪のお眼鏡に適った店が安物を置いてあるはずも無く、それに高いといっても所詮はヤングやティーン向けのプレタポルテのレベルであり、オートクチュールほどの法外な値段ではない。トーラス・シルバーの片割れたる彼にとって、まるで負担に感じない金額だ。

「遠慮はいらないよ、深雪。俺の収入は知つての通りだから」

「おおつ、さすが達也くん。太腿ですなあ」

「――！」

突然後ろから聞こえてきた耳慣れた声に、達也と深雪が揃って目を丸くして後ろを振り返った。

「よっ、達也くんに深雪ちゃん。おひさー」

片手を挙げて気の抜けた声で挨拶をするのは、案の定しんのすけだった。生地の薄い半袖のジャケットに黄色のハーフパンツという出で立ちは、ジャケット代わりのオーバーシャツと足首まで裾のある合織パンツという達也の装いと比べるとかなりの軽装だ。

「確かに無人島の旅行以来だな、しんのすけ。……偶然、だよな？」

「当たり前だゾ。お店の前を通つたら、たまたま2人を見つけたんだゾ。――んで、2人は何を買うの？」

「私が九校戦で優勝したからお兄様が『プレゼント』を買ってくださると仰るから、夏用のワンピースをと思って。しんちゃんも、何かお買い物？」

「ううん、オラは違うゾ」

しんのすけはそう言っ、ズボンのポケットから封筒を取り出した。表面には、このショッピングタワーの企業ロゴが印字されている。

「この前このオモチヤ屋さんでアクション仮面の新作フィギュアを買ったとき、クジ引きの券を貰ったんだゾ。それで試しに回してみたら、このレストランで使えるお食事券が当たって」

「凄いじゃないの、しんちゃん！」

「まーね。オラって、こういうの結構当たるんだゾ。——それに今日はこの屋上でアクション仮面のショーをやるから、それを観に行くついでにここのお寿司屋さんでご飯でも食べようかなって思って」

達也はあまり詳しくないのでピンと来ないが、深雪は今日買い物をするということの下調べしていたので素直に羨ましく思った。この最上階にある寿司屋は銀座にある星付きの店から正式に暖簾分けを許された板前が営む本格的なものであり、普通に食べただけで1万円は軽く超える高級店だからだ。

と、しんのすけは急に思いついたように「そうだ」と声をあげ、

「せっかくだから、2人も一緒に食べる？ 奢るゾ」

「いや、さすがにそれは悪い。せっかくしんのすけが当てたんだから——」

「まあまあ、遠慮しないで。1人で食べるより3人で食べた方が楽しいでしょ。お食事券もたくさんあるから、3人くらいなら大丈夫だゾ」

おそらく本心でそう言っているのは分かるが、さすがにそれで1人1万円以上はする食事代を、いくら食事券があるからといって素直に奢ってもらうのは気が引ける。達也と深雪は互いに目を合わせて無言で遣り取りするが、だからといって彼の誘いを無碍にするのもそれはそれで憚られた。

「……それじゃ、次に一緒に食事をする機会があれば、そのときは俺が奢ることにしよう。それでどうだ？」

「うーん、別に気にしなくて良いのに。じゃ、決まりだゾ」

ということ、ここからはしんのすけが加わってのショッピングとなった。

低価格の量販店から中堅レベルの服飾店まで3Dによる商品展示が主流となっている現代において、実物を展示して実際に試着できるという点だけでもここが高級店だと分かる。現にしんのすけは「物が置いてある服屋さんに入ったのはかなり久し振りだゾ」と実感の籠もった声で言った。

店の中を一通り見て回った深雪は、店員に声を掛けて3着のワンピースを指差して試着を依頼した。店員は満面の笑みでそれに応えたが、それが単なる営業スマイルではなく心からのそれであることに、達也は妙な気掛かりを覚えた。

「それではお兄様、しんちゃん、少々お待ちください」

試着の度に洗浄・滅菌されるサンプルを手に、深雪は試着室へと向かっていった。

と、それと入れ替わるように、店員が達也の顔色を窺うような目に向けて近づいてくる。

「お客様、ちよつとご相談が……」

「場所を変えますか？」

「いえ、お時間さえ頂ければ。もしよろしければなのですが、お連れ様にお買い上げいただきましたドレスを——」

「まだ買うと決めたわけではありませんが」

「もちろんでございます！もし当店の品をお買い上げくださいます場合の話でございます！」

「もちろん、妹が気に入れば買うつもりですが」

「ありがとうございます！」

「達也くん、店員さんを虐めちゃ駄目だゾ」

達也としては普通に受け答えしていただけなのだが、しんのすけに注意されたからか妙な居心地の悪さを覚えてしまった。

そのため達也は、話の腰を折った張本人にも拘わらず「それで何のご用ですか？」と何食わぬ顔で本題へと促した。

「もし当店の商品がお客様のお眼鏡に適いましたら、お買い上げいた

「だいたドレスをそのままお召しになつていただけじゃないでしょうか？」
「おつ、なんで？ そのまま持つて帰るんじゃないの？」

「宣伝代わりにその辺を歩き回ってほしい、ということだよ」

疑問符を浮かべるしんのすけに説明をする達也の傍で、店員が何とも気まずそうに頭を下げ、それでも笑顔は貼り付けたままでいた。

「如何でしょう？ その分、お値段はお勉強させていただきますので」

「本当にそれだけです？ 撮影はNGですよ」

「もちろんです、お客様のプライバシーを損なう真似は一切致しません」

「店頭に出ている商品以外も見せていただけますか？」

達也の質問を実質的なOKの返事と受け取った店員は、晴れやかな笑みを浮かべて「喜んで！」と即答した。そうして商品を見繕つてくると言い残し、やや早足気味にその場を離れて店の奥へと引つ込んでいった。

残されたしんのすけと達也が、小声でこんな会話を交わす。

「こういうの、結構あるの？」

「これでも良心的な方だ。謝礼を払うから広告のモデルにさせてほしい、と言われたこともある」

「ほーほー、それは大変ですなあ。まるで深雪ちゃんが芸能人で、達也くんがマネージャーみたいだぞ」

「……変な冗談は止めてくれ」

おまえが言うとな変なフラグが立ちそうだ、とはさすがに言わなかった。

*

*

*

店の奥から引つ張り出した服も合わせて合計21回にも及ぶ試着（という名目のファッションショー）が行われ、最終的に深雪が一番気に入った1着を達也が購入し、3人は店を後にした。

今の深雪の装いは、ノースリーブワンピースとも称される膝丈のサマードレスだった。肩紐はフリルレースで縁取られた幅広の帯で、胸

元や裾にもふんだんにレースが施されている。露出が多めの割にはエレガントな印象があり、細やかな虹色水玉模様が年相応の可愛らしさも演出している。

「ごめんなさい、しんちゃん。待たせちゃって」

「ゲームしてたから大丈夫だったゾ。それに深雪ちゃんがお着替えする度にお店に人がどんどん増えて、全然興味無いフリしながら深雪ちゃんの方をチラチラ見てるのも面白かったし」

服選びに時間を掛けたおかげか、ランチには丁度良い時間となった。しかしせっかくの高級寿司をランチタイムで済ませるのは如何なものかという話になり、アクション仮面のヒーローショーを挟みつつ夕方までブラブラし、夕食に寿司を食べに行くということで3人の意見は一致した。

ということ、3人は同じタワー内にあるパスタハウスへと入っていった。深雪と一緒に外食をする際、達也は彼女に集まる視線を気にして個室かテーブル間に仕切りのある店をよく選ぶ。しかし今回は女性向けの店が並ぶ場所であり、女性やカッパルが多いためそれほど酷いことにはならないだろう、とこの店を選んだのである。

しかし結論から言えば、その考えは甘かった。深雪が店に入ってきた途端に客の喧騒が一瞬で途切れ、ウェイターまでもが息を呑んで立ち竦んだほどである。しんのすけが呼び掛けることでようやく我に返ったウェイターは、大慌てで3人を席に案内した。

「いやあ、さすが深雪ちゃん、略して“さすみゆ”ですな」

「もうしんちゃんったら、あんまりからかわないで」

しんのすけが深雪と仲良く話している間も、達也は他の客からの視線を感じ取っていた。とはいえ兄妹にとっては慣れたもので、その視線に敵意や悪意が混じっていない限りは無視を貫くことにしている。

と、達也はふと、周りの者には自分達がどう見えているのだろうかとか気になった。年頃の男子2人と女子1人が一緒に行動するというのは、あまり一般的とはいえないだろう。もしかしたら男子2人が深雪を巡って互いに牽制しつつ猛アピールしている、あるいは深雪が男2人を手玉に取って侍らせているなんて勘違いをされているかもし

れない。

そんな心配を抱きながら、達也は深雪としんのすけに目を向けた。老若男女問わず魅了して止まない美貌を有する深雪と同じタツチパネルを眺めながら、それをまったく気にする素振りも無くスルーしてみせるしんのすけに、達也は他人事のように秘かに感心していた。

そして深雪も、そんな彼に釣られてか自然体に振る舞っているように見えた。学校が始まればまた騒がしい日常が待っている、今はそれを忘れて素直に休日を楽しんでほしい、というのが達也の正直な想いだ。

「……………」

だからこそ、彼女に対して不躰な視線を向ける男が気になって仕方がなかった。

その男は、とある芸能プロダクションの3代目社長だった。社長とは言っても先代社長である親からその地位を譲り受けただけに過ぎず、エンタメ業界の厳しさというものをその身で感じたことなど1度も無い。彼にとって社長の椅子というのは、刹那的な虚栄心を満足させるための手段でしかなかった。

そんな彼は現在、都内のショッピングタワーにあるパスタハウスにて、1人の女性と食事を共にしていた。他者に媚びることのない毅然とした美しさを見せつける彼女はデビュー15年を数える有名女優であり、本来ならこのようなカジュアルな店は似合わない。男が彼女をここに連れて来たのは、ひとえに彼女を庶民に見せびらかして羨む顔を見たいという下衆な欲求によるものだった。

しかし周りの客達が彼女を見たときの反応は、有名人がそこにいるという驚き以上のものではなかった。想定よりも落ち着いた反応に男は最初内心で憤慨するが、その「原因」と言える少女の存在に気づくや、即座にそれも仕方ないと掌を返した。

彼にとってタレント達とは、いわば「宝石」のようなものだった。磨き上げたりカットして付加価値を与えるのが自分の仕事だという

意味でもあるし、たとえば他の職人が磨いたものでも金さえ積めば買収される「商品」でしかないという意味でもある。

しかし、現在彼の脳内のほとんどを占めているその「少女」は、金を出せば買えるような代物ではないと直感で理解した。いわば「ザ・グレート・スター・オブ・アフリカ」の偉大なアフリカの星」のような値段のつけられない原石であり、だからこそ彼は少女を自分のコレクションに加えたいと強く熱望した。

とはいえ、今日の前に座っている女優の機嫌を損なうのは好ましくない。お気に入りだった別の女優と最近別れたばかりだということに、そのうえで目の前の女性との関係にヒビが入ってしまったっては、自分の優越感を満たしてくれる存在がいなくなってしまう。

さてどうするか、と男は女優へと視線を向け、

「そちらの綺麗なお姉さん、オラと一緒にパスタを食べながらイタリアの風を感じませんか？」

「ええつと……」

「ちよつと君、何をしてるんだ！」

高校生くらいの少年が自分の目の前で堂々と連れれの女優をナンパしているという光景に、男は堪らず身を乗り出して2人を引き剥がした。

するとその少年・しんのすけは、むしろ男に対して不満を露わにしてこれ見よがしに大きく溜息を吐いた。

「んもう、邪魔しないでよおじさん。今良いところなんだから」

「いやいや、僕の連れなんだけど!? それに僕は、まだ「おじさん」と呼ばれる年齢じゃない！」

「ご心配無く、お姉さん。たとえばあなたが過去にどんな男と付き合い合っていたようにも、オラにとって重要なのはあなたの「今」と「未来」なのです。オラは、あなたの未来の男になりたい」

「僕を無視してナンパを続行するな——つて、ああっ！ おまえ！

横浜のホテルにいた奴じゃないか！」

突然指を差してその声を荒らげる男に、しんのすけはその太い眉を寄せて首を傾げた。

「えっ？ おじさん、どつかで会ったことあったっけ？」

「横浜のホテルのレストランに、若い女性と一緒に来てただろう！しかも何か拳銃を持った変な奴も連れて来て！おまえのせいで、僕は彼女と別れることになったんだぞ！」

「よく分かんないけど、それってオラ関係無いよね？おじさんがフられたのは、おじさんの甲斐性が無かったからじゃないの？」

「何だと……！　　というか、君も君でなんで突っ撥ねないんだ!？」

男の怒りの矛先は、しんのすけのナンパを受けても拒絶の反応を見せない女性へと向けられた。

すると女性は、むしろ男に対して不満を露わにしてこれ見よがしに大きく溜息を吐いた。

「だってあなたみたいなお上辺だけの言葉じゃなくて、本心からそう言ってるのが伝わってくるもの。あなたの場合、心の中で私のことを見下してるのが丸分かりなのよ。あなたはバレてないと思っていたんでしょうけど」

「そ、そんなこと——」

男が否定の言葉を口にしようとするが、どうやら火が点いたらしい女性の発言は止まらない。

「この際だからハッキリ言っておくわ。あなたは『自分が一から女優を育ててる』と思ってるんでしょうけど、今の私の地位は生活習慣から徹底して見た目を磨き上げ、必死になって美しく見える立ち振る舞いと演技力を学んできた私の努力によるものよ。あなたが貢献したことなんて何一つ無いわ」

「な、何を言ってるんだ！　おまえの仕事を持ってきてるのは、誰だど——」

「ええ、充分理解してるわよ。先代の社長が築き上げたコネによるものでしょ？　もしくは事務所のマネージャーが必死に頭を下げて取ってくれたものね」

「ぼ、僕は社長だぞ！　そんなことを言っつて、タダで済むと——」

「そうね、だから今までは渋々あなたに付き合っつてあげたけれど、そろそろ良い頃合いかもしれないわ。あなたには黙っつてたけど、実は他の事務所から声が掛かっつてるのよ。条件も良さそうだし、マネージャー

と一緒にとつちに移籍するのも有りかしらね」

「な、何を言って——」

「あなたも今の地位を手放したくなければ、そろそろ身の振り方について考えた方が良いわよ。他の女の子と遊ぶのは勝手だけど、いつまでもそれが続くわけじゃないんだから」

女性はそう言つて、荷物を片手に立ち上がった。椅子の脚と床の擦れる音が小さく鳴った。

「それじゃ、私は帰るわね」

「待つて、お姉さん！ オラとのお食事は——」

「ごめんなさい、子供と付き合う趣味は無いの。それに、お連れのお嬢さんが可哀想でしょ？」

女性はニツコリと優雅な笑みを浮かべ、堂々とした美しい振る舞いで店を出ていった。まさしくドラマのワンシーンでも観ているかのようで、他の客も目の前の出来事をどこか非現実的に眺めていた。

そしてしんのすけはそんな彼女の背中を残念そうに見送り、男は椅子から立ち上がるどころか彼女に目を向けることもできずに呆然としていた。

そんな重苦しい雰囲気の中、しんのすけが男に声を掛けた。

「ドンマイ。きつと良いことあるゾ」

「やかましいわー！」

今にも泣きそうな男の心からの叫びが、店中に響き渡った。

その姿は、男の値踏みするような視線に不快感を覚えていた司波兄妹ですら同情の念を禁じ得ないほどだった。

*

*

*

周りの目を気にして逃げるように去つていったその男を見送った3人は、その後やって来た料理に舌鼓を打った。カジュアルな店構えに反してその味は達也も至極満足のいくものであり、店主の頑固でまっすぐな性格が窺える小細工無しの真っ向勝負な品々は、もつと高級な店でも充分勝負できるほどだ。

ちなみにしんのすけの食事代は、先程の約束通り達也が奢った。とはいえ夕食の寿司屋には到底及ばない値段なので、その差額分については「貸し」ということになった。ちなみにこれは単純に食事を奢るだけでなく、何かしらの「頼み事」をする際にも適用される。

「しかし屋上で着ぐるみショーとは、それこそ20世紀後半にタイムスリップしたかのようだな」

「私達は昔の映像とかでしか知らないけど、しんちゃんはりアルタイムで観てたのかしら？」

「もちろんだゾ。戦争が起きる前まで、ヒーローショーって結構やってたからね。それに最近だって、こういうショーをまたやるようになったんだゾ」

司波兄妹には馴染みの薄い分野なのであまり知らないが、例の「サザエさん時空」が消滅した影響でアクション仮面に改めて注目が集まったのをきっかけに、20世紀後半から第三次世界大戦までの娯楽文化が見直され、それらを現代に蘇らせるリバイバルブームが巻き起こっていた。

ヒーローショーなどはその最たるもので、技術が発展してより迫力ある演出に進化したものもあれば、当時の雰囲気や忠実に再現したものなど様々だ。主なターゲットである子供や家族連れ、そして一部の大人にはどちらも好評であり、連日どこかのテーマパークや商業施設で大いに賑わっている。

今回3人が観に行くのは当時の雰囲気や再現した後者の方で、芝生や幹の細い樹木が植えられた公園のような屋上の奥に特設ステージがあり、既に大勢の子供達とその親がステージ前に並べられた椅子に座り、どう見ても子供連れではない大人がその後ろにズラリと立っている。

「椅子は子供とその親が優先だから、オラ達は後ろの方で立ち見ね」

しんのすけの言葉に司波兄妹は納得して頷き、他の立ち見客から更に離れた場所でショーの開始を待つことにした。ヒーローを待ち構える子供達の無邪気な笑顔が目に入り、深雪の口元にも自然と笑みが零れる。

そんな彼女を眺めてフツと顔を綻ばせていた達也が、ふいにその表情を引き締めた。

「悪い2人共、ちょっとお手洗いに行ってくる」

「ほいほーい」

「……かしこまりました、お兄様」

しんのすけはステージから目を離さず、深雪は何やら意味ありげな視線を向けて返事をした。達也はそれを受けてその場を離れ、屋上と建物の中を繋ぐ入口へと歩いていった。ちなみに屋上にもトイレは設置され、距離もわざわざ中に入るよりずっと近い。

階下のフロアへと続く階段の踊り場に、そいつらはいた。

「さつきはよくも恥を掻かせてくれたな」

先程の芸能プロダクション社長が、歪んだ笑みを浮かべて達也にそんな台詞を投げつけた。店で一緒だった女性の姿は無く、その代わり人相が悪く体格の良い男性が4人、お供として彼の周りに貼りついている。

「何をしたいのか知らんが、お引き取り願おうか」

「はっ！ 土下座して詫びを入れるなら、今の内だぞ？」

「こんな所で騒ぎを起こすつもりか？」

「黙れ、人間もどきの魔法使いの分際で」

随分と紋切り型な台詞と態度に、達也はむしろ男の社会的な立場を心配してそう言ったつもりだったのだが、返ってきたのは達也の遠慮と躊躇いを消し去るに十分な暴言だった。

「どっかで見た覚えがあると思っただよ。九校何キャラだっけか。でっかい原石を見掛けたと思ったら、とんだイミテーションだったわけか」

魔法師を取り巻く都市伝説の中に『魔法師は遺伝子操作で作り出された人造人間だ』というものがある。一時期よりも減ったとはいえ、そういうことを頑なに信じ込んでいる人間がいることは知っていたため、達也に意外感は無かった。

「嘘だな」

なので達也は怒りを覚えることなく、男の言葉に見えた白々しさを

指摘する。

「大方、その取り巻きにでも教えてもらったんだろう。おまえみたいな性格の人間があの中継で深雪を観たのなら、こうして喧嘩を吹っ掛けようと思うはずが無い」

「何だと——」

「もう一度言う、お引き取り願おうか」

達也が男に向かって1歩足を踏み出すと、男の取り巻き達が緊張で力んだ。プロのボディガードほどの練度は感じないが、街の喧嘩屋レベルでの場数は踏んでいるのだろう。もしかしたら暴力団の類かもしれない。

そんな彼らに対し、男が声を荒らげる。

「おまえら、何をビビってんだ！　街中で魔法師は魔法を使えないようにできてんだ！」

魔法師を取り巻く都市伝説の中に『魔法師は精神操作や機械制御によって街中での魔法の使用を制限されている』というものがある。魔法の使用を制限しているのはあくまで法的な理由であり、必要とあれば普通に魔法が使用される。例えば、こうして襲われようとしているときなどは。

取り巻き連中は男ほどその話を信用しているわけではなく、腰に手を当てて達也の出方を窺っている。おそらくそこに折り畳み式のナイフを仕込んでるんだろう、と達也は当たりをつける。

そんな彼らに、達也は両手を肩の高さに掲げてヒラヒラと振ってみた。

まるで、おまえら相手に魔法など必要ない、とでも主張するように。

「貴様——！」

取り巻き達は一瞬で激昂し、折り畳み式ナイフを抜いて達也へと突っ込んでいった。

今更説明するまでもないが、達也が深雪達の傍を離れてそいつらの所に向かったのは、彼女に対して害意を向ける存在を排除するため

だ。

4人の取り巻きを1人1発の拳で的確に沈め、慌てて逃げようとする男の首根っこを掴んで私服警官に引き渡した。相手がナイフを取り出して襲い掛かったというところで、多少話を聞かされたくらいで署に連行される事態に発展することなく、達也は深雪達の所へと戻っていった。

そして、そんな達也の目に飛び込んできたのは、

「ケツケツケ〜！ アクシヨンビームを撃ってみろ、アクシヨン仮面！ その瞬間、こいつがどうなっても知らないけどなく〜！」

「くそっ、怪人ケータイ伯爵！ 人質を取るなんて卑怯だぞ！」

深雪がステージの上で頭が携帯端末のようなデザインをした紳士服姿の怪物に人質に取られ、アクシヨン仮面がその怪人と睨み合っている光景だった。怪人の背後に立つ深雪は両手を胸の前で握り締められているが、その表情に恐怖の色は微塵も無く、むしろ困惑と羞恥に彩られていた。

そしてそんな彼女を見遣る達也もまた、困惑していた。

「おっ、お帰り達也くん。長かったね。ウンコ？」

「……しんのすけ、これはどういう状況だ？」

「深雪ちゃんが怪人の人質になって、アクシヨン仮面が今から助けようとしているところ」

「……あの怪人は？」

「怪人ケータイ伯爵。子供達を携帯端末のゲームやネットに夢中にさせて、意識を奪い去っていく悪い怪人だゾ」

「怪人というより、妖怪の類だな」

達也の視線は、ステージ上の深雪に固定されていた。怪人とアクシヨン仮面の激闘が繰り広げられているが、自分が完全に蚊帳の外になっっている状況に居心地の悪さを感じているのか、頬を紅く染めて立ち尽くしていた。

——すまない深雪、俺が傍にいてやれなかったばかりに……。

そんな彼女を見守りながら、達也は心の中で彼女に謝罪した。

*

*

*

今回のヒーローショーは本編の劇だけでなく、その後にアクション仮面や怪人との撮影タイムが設けられていた。当然ながら子供達が最優先のイベントであるが、別に子供がいないグループの撮影が認められていないわけではない。

なのでしんのすけは子供達の撮影が終わった後に、やんわりと拒絶の意思を示していた司波兄妹をむりやり引っ張って、自身の携帯端末にその思い出をしつかりと刻み込んだ。すつかり疲れ果てた様子の2人を後ろに従え、ずんずんと大股で屋上を後にするしんのすけは実に満足そうだった。

そうして、時刻は午後5時半過ぎ。夕食には普段よりも早い時間帯であるが、3人は本日のメインイベントであるレストラン街の高級寿司店へとやって来た。

暖簾を潜って1歩足を踏み入れると、まさしくそこは銀座にでもありそうな高級寿司店の店構えそのものの風景が広がっていた。木の香りが漂ってきそうな一枚板のカウンターが目を惹き、ショーケースには諸々の仕込みを終えたネタが最高の状態で並んでいる。そしてその向こう側にはこの店の主である、白い割烹着を身に纏う如何にも頑固そうな見た目の男性が立っている。

しかしその見た目に反し、その店主は柔らかな笑顔で3人を出迎えた。そもそも彼がショッピングタワーに店を構えたのも、銀座の一等地にあるような高級店に対して敷居の高さを感じている人達に、少しでも最高級の寿司を味わう機会を与えたいという想いがあつてのことだ。柔らかな笑顔も接客の物腰の低さも、その一環ということだろう。

「なかなか雰囲気のある店だな」

「そうですね、お兄様。このような施設に、ここまで本格的なお店があるとは驚きです」

3人が店主の真正面に腰を下ろすと、しんのすけが早速懐から食事券を取り出した。

「予算はこれくらいなんだけど、これで3人分ダイジョーブ？」

「はい、大丈夫ですよ。何か苦手な物がありますか？」

「特に無いから、大将のお勧めちよーだい」

「かしこまりました」

壁には本日のメニューが掲げられているが、全てが時価であるため金額が記入されていない。そういった場所で何も考えずに注文すると食事代が思わぬ高額になりかねないが、こうして最初に予算を提示して内容を店主に任せれば初めて来た店でも迷うことは無くなる。

実家の実家なのでこういった店に来た経験のある司波兄妹は知っていることだったが、しんのすけが何の迷いも無くそれを実行してみせたことに（本人には失礼と思いつつも）驚きを隠せなかった。

「しんのすけ、こういつた場所にはよく来るのか？」

「まさかあ！ あいちちゃんから聞いたことがあるんだゾ」

そんな会話を交わしている内に、最初のネタが3人の前に置かれた。見た目は普通の店でもよく出されるイカだが、1週間熟成させたうえで飾り包丁を入れて昆布で締めている。全体的に小振りなので深雪でも食べやすく、口に入れた瞬間にホロリと解れるシヤリの絶妙な固さも相まって、舌の肥えた司波兄妹でさえ思わず唸る一品だ。

「——しんちゃん、今日はありがとうね。とても楽しかったわ」

「そうだな。ヒーローショー……は少し恥ずかしいこともあったが、それも含めて貴重な体験ではあったと思う。ありがとうな」

「良いって良いって、オラも楽しかったし。やっぱり1人よりみんながいた方が楽しいゾ」

恥ずかしがる素振りを一切見せずにそう言うしんのすけに、達也はどうにも所在悪さを覚えて視線をさ迷わせた。

その甲斐あって、と表現して良いか分からないが、店主とは別の店員が幾つもの寿司が並んだ寿司下駄を持ってカウンターを越え、店の奥へと歩いていくのに気がついた。

「奥に個室があるんですね」

「はい。店主と対面するのが苦手という方もいらつしやいますし、気兼ねなく会話ができますので。個室ではタッチパネルで注文するよ

うになっています」

「オラはカウンターの方が雰囲気あつて好きだゾ」

しんのすけはそう言つて、立方体にカットされた出汁巻き卵を口の中に放り込んだ。シンプルだからこそ職人の腕が如実に表れるその一品に、しんのすけはご満悦の様子だった。

それを見た司波兄妹も、その出汁巻き卵に箸を伸ばした。

個室にいる客のことは、すっかり3人の頭から消え去っていた。

その個室にいたのは、父と娘と息子の家族連れだった。テーブルの寿司はまだ少ししか手が付けられておらず、達也たちよりも少し前に食事を始めたばかりであることが分かる。

父は全身黒で統一された服装に切れ長の目が特徴の若々しい見た目、娘は髪を巻いてリボンを結び服にもフリルをふんだんにあしらった派手な見た目、息子は可憐な顔立ちと中性的な服装のせいで男装した少女とも受け取れる見た目、となかなか個性的な組み合わせをしていた。

そしてそんな3人は現在、非常に困惑した様子だった。

「た、達也兄様たちがどうしてここに……？」

「達也さんのお食事は深雪姉様がご用意なさつてしていると聞いていたから、てつきり外食はなさらないと思つておりましたが……」

「しかも我々と時間と場所が被るなど、そんな『偶然』があるのか……？」

父の名は、黒羽貢。娘の名は、黒羽亜夜子。息子の名は、黒羽文弥。彼らは達也と深雪の出身である四葉家の分家の1つ『黒羽家』の一員であり、四葉における諜報部門を統括している。魔法的な手段のみならず、通信傍受やハッキングなど情報を集める手段を豊富に有しており、裏仕事が多い四葉家の中でも更にその暗闇奥深くを担当している。

そんな彼らは普段、旧愛知県の豊橋に居を構えている。東京に来たのは『仕事』のためで、それを片付けた後に親子水入らずで夕食を

摂っていたところに達也たちがやって来たのである。

しかし3人がそれ以上に困惑していたのは、

「……達也兄様、あんな柔らかい表情もなさるんですね」

「達也さんの隣に座る『彼』の影響が大きいのでしょうかね」

「……とにかく、あの3人と顔を合わせるのとは好ましくない。このままやり過ぎすぞ」

貢の言葉に文弥と亜夜子が頷き、3人は食事を再開した。

第46話 「生徒会長選挙をするゾ その1」

夏休みも終わり、1学期の頃のように生徒会室でランチタイムに興じていた生徒会の面々（服部除く）と風紀委員である摩利・達也・しののすけが、夏休みの思い出話で盛り上がっていた。とはいっても、その内容は家族との旅行話といった心温まる話などではない。

その話題はもっぱら “一夏のアバンチュール” だった。 “性が解放された時代” から “結婚まで純潔を守り続ける時代” になって久しい今日、最後まで致してしまった体験談というものは無かったが、代わりに最後まで行く直前でブレーキを掛けるチキンレースが鈴音の口から語られていた。

「パーカーをむりやり脱がされて」とか「もうちよつとムードが欲しかったのですが」とか「白けたので眠ってもらいました」とか、18禁までは行かなくとも15禁レベルに該当するであろう内容がポンポンと飛び出しているが、それを語る当の本人は至って平然としていた。真由美や摩利と比べると真面目な印象のあった彼女だが、やはりあの2人と対等に渡り合える時点で普通なはずがなかった。

などと関係の無いことを考えながら所在の悪さを誤魔化していた達也の耳に、真由美の感慨深げな独り言が届いた。

「それにしても、私達も今月で引退かあ……」

「そういえば、会長選挙は今月でしたね」

「ええ。選挙は月末ですが、一応の体裁を整えるためにも、来週中には選挙公示をして諸々の準備に取り掛かなければいけません」
「体裁？」

鈴音の言葉に、達也が首を傾げた。

「立候補者が複数いれば選挙が行われますが、生徒会長になろうという生徒は限られていますので、結局は身内同士の争いとなるでしょうね」

「そうなんですか？」

「過去5年間、生徒会長は主席入学だった生徒が務めています。6年前は違いましたが、それでも生徒会役員でなかった生徒が会長になっ

た例はありませんので、今回もまた中条さんと服部くんの一騎打ちとなるでしょう。そういうときは事前協議をして、どちらか1人に絞ることとなります」

「私は生徒会長なんて無理です！ 立候補するつもりはありませんので！」

と、名指しされたあずさが拳を握り締めてそう力説した。まだ立候補すらしていない段階で目に涙を溜めていては確かに難しいだろうな、と達也は内心で納得する。

「そうすると、6年振りに主席入学以外の生徒会長となるな」

「おっ？ あずさちゃんか1位だったの？ てっきりはんぞーくんが1位だと思ってたゾ」

どうやらしんのすけにとっては、次の生徒会長が誰かよりもそちらの方が気になったようだ。彼の台詞はあずさに対して失礼にも聞こえるが、あずさ自身は気恥ずかしそうに俯くのみで気分を害した様子は無い。

「今でこそ服部の方がトップだが、2位の中条とはほとんど差は無いんだよな？」

「はい。理論は五十里くんが主席、中条さんが次席、服部くんが三席。実技は服部くんが主席、中条さんが僅差で次席となっています」

「あれっ？ でもあずさちゃんって、九校戦では選手じゃなかったよね？」

「確かに成績でいえば花音とかよりも優秀なんだが、中条は細やかな技術力が持ち味だからな、スポーツ競技には不向きなんだよ」

「それにしても、次の会長ははんぞーくんかあ……」

真由美のその言葉には、ありありと不満が滲み出ていた。確かに真由美と彼ではポリシーが違うので気持ちは分かるが、肝心のあずさ本人にやる気が無いのならば仕方ない。

と、そのとき、思わぬところから爆弾が放り込まれた。

「はんぞーくん、生徒会長には多分ならないゾ」

「えっ？」

しんのすけの言葉にあずさは絶望的な表情を、それ以外は驚きの表

情を浮かべた。

「そうなのか、しんちゃん？」

「そうだよ。はんどーくん、克人くんに誘われて部活連の方に行くつもりなんだって。昨日一緒に話したときにそう言ってたゾ」

「……しんちゃんと服部、そういうことを話す仲になってたんだな。そっちの方が驚きなんだが」

「でも確かに、そっちの方が適任かもね。部活連の会頭は腕っ節が強くないと務まらないからね」

「そ、そんな……！」

すっかり顔を真っ青にしてガタガタと震えるあずさは、溺れる者が何かに縋ろうとするようにあちこちに視線をさまわらせていた。

そして、藁どころか救命ボードを見つけた。

「み、深雪さん！ 生徒会長になりませんか！」

「へっ？」

「ちよつと、あーちゃん？」

思わぬ言葉を掛けられた深雪は素っ頓狂な声をあげ、真由美は戸惑いの声を投げつける。

しかし、あずさは止まらなかった。

「深雪さんなら生徒達からの人望も厚いし、成績も申し分ありません！ きつと立派に務められるでしょう！」

「あの、中条先輩……」

「そうですね、それが良いです！ 何も1年生が生徒会長になってはいけないって規則があるわけでもないですし、深雪さんはこの間の九校戦で本戦のミラージュ・バットを優勝するという快挙を果たしています！ 上級生にも強烈な印象を残していますし、間違いなく当選しますよー！」

「……いえ中条先輩、高校生の“実力”は魔法力だけでは計れないと思うのですが」

「問題ありません！ 頭脳ならば達也くんがいるんですから！ 生徒会長になれば、好きな生徒を役員に任命できますよ！」

「——お兄様、を？」

あずさの言葉に、深雪の気持ちが一瞬明らかに揺らいでいくのが分かった。

「そうです！ 会長が一科生縛りのルールを排除すると仰っていますし、達也くんを二科生出身の生徒会役員第1号にしませんか！」

「お兄様が、生徒会役員に……」

自分の補佐として働く達也の姿を想像したのか、深雪は頬に手を当てて顔を紅くしながら身悶えていた。

当然ながら、達也が黙っているはずがない。

「中条先輩、いくら何でも……」

「だったら！ 達也くんが生徒会長に立候補しますか！」

「おっ、それは面白そうだな」

あずさとしては自分に厄介事が降り掛かるのを回避できればそれで良いのだが、傍で聞いていた摩利が食いついてきた。

「深雪はともかく、俺が一定の票を集められるとは思えません……」

「でも達也くんは、九校戦優勝の立役者ですよ！」

「……百歩譲って貢献していたとしても、裏方の仕事なんて表から見ても分かりませんし、競技も1つしか出ていないんですから」

「そんなことないですよ！ 達也くんの頑張りや代表選手みんなにはしっかり伝わっていますし、あとは一般生徒に向けて宣伝すれば問題ありません！」

「いや、ですが——」

「深雪さんも！ 生徒会長になった達也くんを見たくありませんか！」

「見たいです！ お兄様が選挙に出られるなら、応援演説でもビラ配りでも何でもやります！」

「あんなに必死になってるあーちゃん、初めて見たわ……」

「深雪ちゃん、まんまと乗せられてるゾ」

形振り構わないあずさの姿、そして或る意味平常運転な深雪の姿に、真由美としんのすけは揃って困惑の表情を浮かべた。

*

*

*

「——なんて話があつてな」

「ははは、そりやまた災難だったな」

その日の放課後、風紀委員のパトロールを終えた達也としんのすけは、いつものように駅までの道中にある喫茶店「アイネブリーゼ」にて友人達とテーブルを囲んでいた。そしてコーヒーのお供として達也が生徒会室での一幕を話すと、レオが同情2割面白8割といった表情で笑い声をあげた。

「だけどき、魔法科高校の生徒会長なんて如何にもステータスになりそうな仕事じゃないかい？ 何てったって、全国に9つしか存在しない魔法科高校のトップなんだから」

幹比古の言う通り、1年間で9人しか就くことを許されない「魔法科高校の生徒会長」という役職は、魔法師の道を進む限りは生涯ついて回る肩書きだ。非公式ながら三等勲章にも匹敵する、とまで言われている。高校生の段階でこれだけの終身名誉を得られるとなれば、むしろ目の色を変えて快く引き受けるのが普通だろう。

もつともあずさの場合、だからこそその責任の重さに耐えきれず辞退を申し出てる、といったところだが。

「中条先輩としては、立候補の締切までに候補者が現れるのを祈るしかないって感じね」

「いや、実際の締切はもつと前らしい」

エリカの言葉に首を横に振って否定する達也に、しんのすけと深雪以外の全員が首を傾げる。

「できれば公示日までには、候補者の絞り込みをしたいそうさ。候補者が多すぎて收拾がつかなくなるのを防ぐためにな」

「候補者が多くいた方が、選挙としては健全なんじゃないですか？」

ほのかのもつともな質問に、達也は再び首を横に振った。

若干の苦々しい表情と共に。

「俺も最初はそう思ってたんだけど、生徒会長になろうという猛者達による魔法の撃ち合いを危惧してのことだそうさ」

「……いやいや、いくら何でもそんなことは——」

「4年前、『民主的で自由な選挙』を標榜した当時の生徒会選挙では、候補者とそのシンパ達による魔法の撃ち合いが頻繁に行われていたそう。そして重傷者が2桁に達した時点で、生徒会は『自由な選挙』の看板を下ろし、当時の副会長を次期会長に強く推薦したことでようやく事態が収拾したらしい」

「……どこが発展途上国だよ、魔法科高校は」

魔法という大きな力を持って完全な自制心を発揮できるほど高校生は大人ではない、ということだろうか。顔も見たことの無い先輩の愚行に対し、同じ魔法科高校生である彼らは情けない気持ちになつて大きな溜息を吐いた。

「それで、結局生徒会長はどうするの？ 深雪がなる？」

「いいえ、私は遠慮するわ。まだ私は人の上に立てるほどの人間ではないもの」

「昼間はあんなに乗り気だったのに？」

しんのすけのツツコミを、聞こえていないはずが無い深雪はニコリと笑うだけで無視した。時間が経って冷静になつたのか、あるいは達也に諭されたか。

「なーんだ、それじゃ妹が生徒会長で兄が風紀委員長つていう絶対王政は無くなつたのか」

「ちよつと待てエリカ、なんで俺が風紀委員長なんだ？」

「だって風紀委員長もそろそろ次を決めないといけないでしょ？」

達也くんだったら渡辺^あ摩利^{の女}のお気に入りだし、なつたとしてもおかしくないんじゃない？」

「エリカちゃん、オラは？」

「しんちゃんつて誰かに命令して自分は待機するよりは、むしろ誰かにフォロワーしてもらいなから自分から動き回るタイプでしょ。組織の長つて柄じゃないわよ」

「いやあ、照れますなあ」

「……今のは、褒めているのかな？」

照れるしんのすけに美月が疑問を覚えている中、達也が話題を元に戻した。

「風紀委員長については、もうほぼ決定しているよ。2年生の千代田先輩だ。今日付で風紀委員の一員になって、俺が指導係を押しつけられた」

「今日のパトロールのときも、花音ちゃんと一緒だったんだゾ。喧嘩を見つけて嬉しそうに突っ込んで、達也くんが割と真剣に怒られてたけど」

「千代田先輩って、九校戦でピラース・ブレイクに出てた方ですよね？」

「元々入っていたわけじゃないのに自分の後釜にするなんて、渡辺先輩も随分千代田先輩を可愛がってるんだね」

美月と幹比古の言葉に釣られて、全員が花音を可愛がる(意味深)摩利の姿を想像した。2人共宝塚の男役にいても違和感の無い外見をしているので、その手の趣味を持つ人々からしたら何とも絵になる光景だろう。本人達が知ったら「何を不埒なことを考えているんだ！」と今にも襲い掛かりそうなほどに失礼な妄想だが。

「でもさ、生徒会役員から会長が選ばれるっていう不文律が根付いてるんだとしたら、このままで候補者が現れないまま締切なんてことになるんじゃない？もしそうになったら、本当に深雪か達也くんが槍玉に挙げられると思うんだけど」

エリカの言葉を否定しようとした達也だが、残念ながらそれを否定するだけの根拠に乏しいことに気がついた。昼間にあずさが言った通り、1年生が生徒会長になれない決まりは無い。真由美と摩利の2人だったら「前例は作るものだ！」とか言っつてノリノリで推薦してくるかもしれない。

「お兄様……？」

「……手を打たなくてはいけないか」

まるで反魔法組織の手先や国際犯罪シンジケートと対峙するかのような真剣な表情で、達也がそう呟いた。

*

*

*

そうして決意を固めた達也は深雪を引き連れて、あずさを「説得」した。

説得といっても、別に如何わしいことは何も無い。ただ単に、あずさが立候補しなければ「4年前の悲劇」が再来すると脅しを掛けたうえで、再来週に発売するFLTの飛行デバイスのモニター品を生徒会長就任祝いとしてプレゼントする、という飴と鞭の基本戦術に則っただけである。

しかしあずさにとっては効果観面てきめんであり、最終的には（主に飛行デバイスに目が眩んで）生徒会長立候補を引き受けたのだった。

さて、そんなこんなで時間は巡り、9月も末に入った。まだまだ残暑の厳しい季節だが、肌寒く感じるときも増えていき、いよいよ秋の匂いを感じ始めてきた頃である。

「だからといって、校内の雰囲気も熱くならないというのは如何なものでしょうね……」

「達也くん、何の話？」

今日も今日とて生徒会室で昼食を摂っていた達也がふいに漏らしただ一言に、真由美が首を傾げて尋ねた。

「生徒会選挙のことですよ。いよいよ明日が生徒総会、そして生徒会選挙が控えているというのに、どうにも校内の盛り上がりには欠ける気がしまして。こういうときって、あちこちで論説やアピール合戦が行われるものと思っていたのですが……」

「そうか？ 高校の選挙なんて、こんなものだと思っていたが」

摩利の言葉も確かに納得できるが、それでも達也にとっては物足りないという感想が正直なものだった。特に彼の正面に座るしんのすけなど、初めて参加する選挙というものに割と興味を抱いていたのに、まったく盛り上がりがない光景を目の当たりにして見るからに退屈そうだった。

「まあ、今回は残念ながらあーちゃん1人になっちゃったからねえ……」

—— なっちゃった？ 仕向けた、の間違いではないのか？

のほほんとした笑顔を浮かべる真由美に、達也はそんな意地悪なこ

とを考えてしまったが、わざわざ口にすることはなかった。たとえ彼女が対立候補となりそうな生徒を1人1人「説得」して回つてたとしても、自分には関係無いことだった。

ちなみに唯一の候補者であるあずさは、このような状況でも気を抜くことなく、わざわざ紙媒体に印刷した原稿を熱心に読み込んでいた。やはり事前に渡した「プレゼント」が効いたのだろう。彼女のような性格の場合、プレゼントを先延ばしにするよりも先渡しでプレゼントを与える方がテンションを持続させやすいのである。

「でもまあ、明日は投票前の立会演説もあるし、それなりに盛り上がるんじゃないかしら？」

「問題があるとすれば、その前に行われる生徒総会の方でしょうね」

今まで無言だった鈴音の言葉に、その場にいた全員が納得した。

明日の生徒総会にて、真由美は春の臨時集会で宣言した「生徒会役員一科生限定廃止案」を議題にするつもりだった。春の時点では雰囲気吞まれて表立った反対者は見られなかったが、それでも心情的な反発を覚えている生徒は少なくない、とこの場にいる（しんのすけ以外の）全員が考えている。

「あれだけ大見得切ったんだからな、今更引つ込めることはできないぞ」

「あら摩利、今更引つ込めるつもりはないわよ？」

「もしかしたら暴走する方も出てくるかと懸念していましたが、杞憂だったようですね」

「はははっ。我が校の生徒に、この女に闇討ちしようなんて命知らずはいないさ」

「摩利、女の子相手にひどいんじゃない？　ねえ、深雪さんもそう思わない？」

「えっ？　あはは……」

「おおっ、絵に描いたような愛想笑い」

しんのすけの指摘に深雪が頬を僅かに紅く染めて彼を睨みつけ、部屋の中は暖かい笑い声に包まれる。

しかし、その空気を再び冷やしたのは達也だった。

「ですが、やはり用心に越したことはないですよ。一部の生徒が会長の提案を潰そうと画策し、しかしそれがほとんど功を奏していない、という噂は聞いているでしょう?」

「確かに、そういった話も聞かなくは無いが……」

「向こうとしても、残された期間は今日と明日だけですからね。念の為、今日はお一人にならない方が良いかと」

「もしかして、何か掴んでるのか?」

「それが分かっていたいれば、却って安心なのですが」

考えすぎだとは思いますがね、と言って達也は軽く笑ってこの話題を打ち切った。

それが単なるポーズでしかないことは、誰の目から見ても明白だった。

「3人共、今から話があるんだが、本部に来てくれないか?」

昼休みも残り僅かとなり教室に戻ろうとしていた達也たちを呼び止めたのは、摩利だった。

「俺は大丈夫です。深雪達は?」

「私達も、午後は一般科目なので多少は遅れても平気です」

「ええっ? セツかくのお昼寝タイムだったのに——」

「平気です」

しんのすけの言葉をむりやり断ち切った深雪に、摩利は「すまない、ついてきてくれ」と歩き出した。しんのすけもついて来る辺り、本気で不満には思っていないのだろう。そうして4人は、生徒会室を通れば近道なのにわざわざ廊下を歩いて階段を降りて本部へとやって来た。

半年前とは比べ物にならないほどに片づけられた本部にて、4人はこれまた半年前には無かった応接セットに座った。司波兄妹は並んで摩利と向かい合わせに、しんのすけは摩利の隣である。

「相談したいのは、真由美のことだ。実はアタシも、達也くんと同じ懸念を抱いている」

「委員長も、反対派が大人しすぎると?」

「ああ。あまりこういうことは考えたくないのだが、平和的な裏工作が上手くいかず暴力的な手段に出る奴が出てくるんじゃないか、というのは充分警戒すべきだと思う」

「ええつ? 考え過ぎじゃないの、摩利ちゃん?」

否定的な意見を口にするしんのすけに、摩利は暗い表情のまま「だったら良いんだが……」と言うのみだった。

「真由美は人が良いというかお嬢様育ちというか、他人の『悪意』に疎いところがあつてな。『窮鼠猫を噛む』という心情も、おそらくアイツには理解できないだろう。さっきの達也くんの話も、あまり真面目に受け取っていないようだしな」

「ですが渡辺先輩、会長には『マルチスコープ』があるのではないですか?」

「確かにそれで周囲を警戒していれば、アイツが闇討ちに遭うなんてことはないだろう。だがそのためには『周囲を警戒する』という行動が必要だ。『マルチスコープ』は常にスタンバイ状態の能力ではないからな」

埒のない話だな、と摩利は一旦話題を切り替えると、改めて3人に向き直った。

「君達3人に頼みたいのは、今日は真由美と一緒に帰ってくれないだろうか?」

「真由美ちゃんと一緒に家まで行けば良いの?」

「いや、別に家までは——いや、その方が良いでしょうな。学校にいた間は大丈夫だろう。常に取り巻きがあるし、生徒会室には私や市原も服部もいる。一番気になるのは下校時なんだ。あいつはなぜか、学校の外では取り巻きを近づけさせないんだ」

摩利にはその理由は思い至らなかつたが、達也には理解ができた。十師族の直系ともなれば政治的な目的で誘拐を企む者がいてもおかしくないし、単純にお金持ちのお嬢様というだけで誘拐する理由になる。もしそうなったとき、無関係の人間が巻き込まれるのを極力防いでいるのだろう。

「こういう時期でなければ服部に頼むところなんだが、アイツは部活連の方で忙しくしててな。それに達也くんグラム・デモリッションの術式解体術式解体があれば、どんな闇討ちにも対抗できるだろう?」

「お任せください、兄でしたら間違いありません」

扇動の意図を多分に含んだ摩利の問い掛けに、深雪がまんまと乗っかってしまった。そのせいで、達也は先程から胸に抱いていた疑問を口にすることができなかった。

と、思いきや、

「ところで、摩利ちゃんは一緒に帰らないの?」

しんのすけの何気ない一言に、摩利の表情が一瞬引き攣った。

「摩利ちゃん、真由美ちゃんが心配なんですよ? だったら一緒に帰れば良いゾ」

「い、いや、別に心配しているわけじゃないぞ? ただこの時期にアイツに怪我をされるとこっちが困るというか、そもそもアイツは自分が狙われているという自覚があるのどこか危なっかしいというか——」

「成程、ツンデレってヤツですな」

「し、しんちゃん? 別にアタシはそういう意味で言ったんじゃない——」

再び顔を紅くして弁明する摩利の姿に、達也と深雪は互いに顔を見合わせてフツと笑った。

そして、その放課後。

「真由美ちゃん。誰かに襲われないか摩利ちゃんが心配してたから、今日一緒に帰っても良い?」

「ちよっ、しんちゃん!?!」

摩利の思惑は、しんのすけの一言によつて色々つぶち壊された。

とはいえ、摩利の意思を慮って3人と一緒に下校することを真由美が了承したので、結果オーライといったところだろう。

生徒会室を後にするときの、ニヤニヤと人の悪い笑みを摩利に向けてる真由美と、顔を真っ赤にして口を引き結んでそれを無視する摩利の

光景が印象的だった。

*

*

*

レオやエリカ達と連れ立って下校するのが一番多いが、風紀委員の仕事が長引いたときには達也・深雪・しんのすけの3人で一緒に下校することも少なくない。

しかし、その3人に加えて上級生の真由美と一緒に帰るのは、今回が初めてだった。

「そういえば達也くん、最近地下に籠もってることが多いよね。何してるの?」

「地下の資料庫のことか? 『賢者の石』に関する古式魔法の文献を探しててな」

「賢者の石? ハ●ー・ポッターに出てくるヤツ? 誰か復活させるの?」

「……誰かを復活させるんじゃない、『個人的な研究』に役立てないか模索していてな」

「それはまた、随分とマニアックというか専門的な調べ物ね」

「才能の不足を道具で補えないか、と思ひまして」

「いや、『術式解体』を使える魔法師が何言ってるのよ。達也くん、あなたは普通の優等生なんて目じゃない実績を残してるんだから、あんまり自分を卑下してると一科生からも二科生からも嫉妬されちゃうわよ」

「自分では自虐してるつもりは無いんですが……」

初めての組み合わせではあったが、会話は意外なほどに弾んでいた。おそらくしんのすけが（無意識で）積極的に話題を提供しているおかげだろう。襲撃者に対しての警備という物騒な事情を抱えているものの、少なくとも4人の間ではそれを感じさせない軽い雰囲気にも包まれていた。

と、ふいに真由美が思い出したように3人へと顔を向けた。

「あつ、そうそう。3人共、家まで付き合わなくても駅までで大丈夫だ

「からね。駅にボディガードを待たせてるから」

「やはり、そういうった方々がいるのですね」

七草家は四葉家と並んで、十師族結成当時から一度も柙外に落ちたことの無い名門だ。むしろそういうった者を付けていない方が不自然だろう。

「なんで駅で待たせてるの？ 一緒に学校から帰れば良いじゃない」

「……通学路でボディガードを引き連れているのは、さすがに恥ずかしいじゃない？」

「そう？ あいちゃんなんて、幼稚園の頃から黒磯さんが運転する車で送り迎えてもらってたゾ。遊びに行くときも普通に黒磯さんが一緒だったし」

「うーん、私はそこまで開き直すことはできないわね……」

「ところで会長、なぜそれを教えてくださるんですか？」

深雪の疑問は、達也も気になるところだった。おそらく摩利も知らなかったであろうことを考えると、できれば隠し通しておきたかったことと思われる。

すると真由美は、少しだけ考える素振りを見せて、

「3人には、教えても良いかなって思えたの」

「それは、なぜ？」

「あなた達3人は、きつと私にとって『特別』な存在だから」

はにかんだ表情で答える真由美の姿に、達也は「失敗したかな……」と予感した。

主に、自分の感情を誤魔化すという点で。

「去年の秋に生徒会長になって、最初の半年もそれなりに充実してたけど、この半年は私にとって本当に充実した時間だったの。——そしてそれはきつと、3人のおかげだと思ふのよ」

「……過大評価だと思えますが」

「おおっ、達也くん照れてますな」

しんのすけの指摘に、達也はキツと彼を睨みつけた。頬を紅く染めるようなことは無かったが、それでも普段の彼からしたら内心がバレバレな態度に、真由美も思わずコロコロと笑い出した。

やがてそれが落ち着いた頃、真由美は晴々とした顔で3人に向き直る。

「あーちゃんもはんぞーくんもとっても良い子達だけど、あなた達3人はきつと、私の高校時代一番の思い出になる素敵な後輩だから」

「いやあ、照れますなあ」

真由美の言葉に返事ができたのは、しんのすけだけだった。

達也は絶句してしまっただし、深雪に至っては耳まで真っ赤に染まっている。

そんな彼らの反応に、真由美は実に満足げだった。

駅に到着した4人を出迎えたのは、50代半ばほどの老紳士・名倉なぐらだった。

ボディーガードというよりは執事、あるいは爺やにも見える彼だが、背筋はピンと伸びて細身ながら引き締まった体をしたその姿はまさしく“現役”であり、その身のこなしは礼儀正しさというオブラートに包まれてはいるが、軍務経験者、それも制服組としてそれなりの地位にあったことを窺わせるものだった。もともと、それに気づいたのは達也くらいであるが。

そんな名倉が達也たちと軽い自己紹介を交わしたのを見届けた真由美は3人と別れ、ロータリーに停めてあった高級車に乗り込んだ。名倉が運転手を務める高級車は自動運転のコミュニーターをどんどん追い抜いていくが、彼の卓越した運転技術によつて真由美にはほとんど揺れが伝わらない。

だからこそ彼女は、考え事に集中することができた。

名倉が自分の名字を口にしたとき、ほんの一瞬だけ、達也の目に動揺が走った。もし真由美が全注意力を3人に向けていなかったら、おそらく気づかなかつたであろうほどに微かな変化だった。

——おそらく達也くんは、名倉さんが“数字落ち”エクストラだと気づいてる。

エクストラ・ナンバーズ。略して“エクストラ”とも呼ばれるそれ

は、魔法師の一族の中でも“数字”を剥奪された者達を指す。

時に反逆の罪で、時に重大な任務失敗で、時に無能の烙印で。かつて魔法師が“兵器”であり“実験体”であった頃に、成功例として数字を与えられながら成功例に相応しい成果を出せなかったと見做された証である。

今では“数字落ち”という名称自体が公式に使用することが禁じられ、それを理由に差別的扱いをすることは魔法師のコミュニティにおいて重大な非違行為とされている。しかし“数字落ち”に対する差別は、依然として魔法師社会に居座り続けているのが現状だ。自分達が“数字落ち”であることをひた隠しにしているためにその子供がその事実気づいていない、ということも珍しくないほどに、彼らを“欠陥品”だの“失敗作”と見做す偏見が魔法師の無意識に刷り込まれている。

そんな名倉を七草家が雇い入れている理由を、真由美は知らない。何事に対しても体面を重んじる七草が長女の護衛という本家にごく近い役職に“数字落ち”を採用するとは考えづらいが、逆に体面を重んじるからこそ差別的処遇をしないという建前論を重視していると考えられることもできる。

しかし今の真由美にとって重要なのは、達也が七草や十文字と同じくらいに現代魔法の“闇”に通じていることだ。あの兄妹に出会うまで“司波”という名字は聞いたことも無かったが、ただの無名な魔法師がそこまで知識があるとは思えない。

——いや、それを言うなら、深雪さんの方だって普通じゃないわ。

真由美は今まで、あんな美少女を見たことが無かった。

腕も脚も不健康に見えないギリギリのバランスでスラリと細く長く、ウエストは細く締まり、それでいて胸と腰回りは女性らしい曲線を描いている。何より彼女の体は、驚くほどに左右対称だ。『魔法資質の高い人間ほど骨格が左右対称になる傾向がある』と言われているが、そうなる彼女の魔法資質は十師族を含めたとしても最高峰に位置すると考えられ、実際に学校での成績がそれを単なる妄想でないと裏付けている。

そんな普通じゃない兄妹を生み出した、司波家。

司波。シ波。四波。

もしかしたら、彼らもまた『数字落ち』なのではないだろうか。
「お嬢様」

真由美が思考に没頭できるほどに無言を貫いていた名倉が、ふいに彼女へと話し掛けた。

「どうしましたか、名倉さん？」

「先程お会いした、野原しんのすけ様のことではありますが」

名倉が口に出したのは、真由美が考えていた達也でも深雪でもない、第三の人物だった。

「お嬢様は普段から、彼と学校で親しくされているのでしょうか？」

「あら？ 名倉さんがそのようなことを尋ねるのは珍しいですね」

「不躰な質問であることは、重々承知しております。しかしお嬢様の交友関係については、弘一様も憂慮されていることでした」

「憂慮？ ハッキリ言ったらどうかしら？ —— 『野原しんのすけとは関わるな』って」

真由美の言葉に、名倉は黙り込んで返事をしなかった。つまり、否定の言葉は無かった。

「お父様が彼に対してどのような感情を抱いていても、それで私の行動が制限される謂れはありません。その代わり、私からもそれに関して特に何も申し上げることはありませんので」

「……かしこまりました」

名倉はそれだけ口にして、以降は再び無言を貫いた。

真由美もそれに合わせたため、車内で再び会話が交わされることは無かった。

第47話 「生徒会長選挙をするゾ その2」

その日の校内は、朝から地に足がついていないような空気に包まれていた。それもそのはず、今日は午後の授業を潰して、生徒総会・立会演説会・投票まで行われるからである。

クラス単位の集会さえほとんど無くなった現代では「集会」というだけで非日常イベントだというのに、今回の生徒総会では生徒自治制度に大きくメスを入れる提案がなされることもあって、生徒達の間では「何か嫌なことでも起こるのでは……」と緊張感に包まれている。現生徒会長・七草真由美の人気、建前上反対のしにくい提案、そして新人戦モノリス・コードでの二科生2人の活躍もあって、数の上では賛成派が圧倒している。それでも頑なに反対派であり続けるという点に、現在の状況を察している人間の目には危ういものに映るのだろう。

「全員揃ったな？ それでは、配置の最終確認を行う」

その「察している人間」の筆頭である風紀委員のメンバーは、委員会本部にて真剣な表情で風紀委員長・摩利の言葉に耳を傾けていた。基本的にバラバラで行動することの多い風紀委員が一堂に会する、数少ないイベントの1つが生徒総会である。

「我々の持ち回りは講堂内だ。外はシステム監視になっていて、そこらは自治委員会がサポートする。大扉に私と千代田、通用口に辰巳と森崎——」

摩利の言葉を聞きながら、達也は秘かに「気合いが入っているな」という感想を抱いていた。

「演壇の上手が野原、下手が司波。以上だ」

達也としんのすけが配置されたのは、舞台袖。もし壇上の役員に襲い掛かろうとする跳ね返りが現れた場合、ここが最終防衛線となる。普通ならば1年生に任せられるようなポジションではないように思えるが、この2人は普段の活動における検挙数のトップ2人（ついでに事件の遭遇数もトップ2人）であるため、咄嗟の動きが重要となることを任されることとなった。

とはいえ、今回はそのような事態になることは無いだろう。昨日真由美を護衛していた道中、実は3回ほど襲われかけたのだが、その矛先はむしろ彼女と一緒にいた達也やしんのすけの方だった。そうではなくとも常に自分達に対する嫉妬の視線を感じていた状況であり、そんな彼らの目を掻い潜って彼女に闇討ちを仕掛けるなんてとても不可能だ。おそらく真由美にCADを向けた時点で、彼らによって袋叩きに遭うだろう。

というわけで実際に配置に立った現在も、達也のやる気はほとんど上がらなかった。

そもそも今回の提案は生徒会入りに当たったの「選任資格」に関する問題であり、「生徒会長」ならいざ知らず「副会長」や「書記」にさして意味など無い。その証拠に副会長や書記の人数は会長の匙加減でどうとでもなり、副会長が2人いたとしても何ら不思議は無い。要は二科生を生徒会役員にしたところで、全体的にはほとんど影響など無いのである。

そんな「些細な問題」を理性的な話し合いで大真面目に説得しようとしている真由美と、それを自身のプライドというひどくちっぽけな理由で潰そうとしている連中との攻防を、達也はどこか非現実的な映画でも観ているような心地で眺めていた。

「——以上の理由を以て、生徒会役員の選任資格に関する制限の撤廃を提案します」

真由美の説明が終わった途端、一科生の1人が手を挙げた。九校戦には出場していない3年生の女子が質問席に立つ。現代の集音マイクは日常会話レベルの音を50メートルの距離から拾い上げるほどの性能なので、そもそも質問席を設けること自体が形式的な意味合いしか持たない。その事実が、ますます達也から現実感を奪っていく。「……建前としては、正論だと思えます。しかし現実問題として、制度を変更する必要があるのですか？　もしかして、二科生の中に役員に採用したい人物がいるのですか？」

随分と意図が見え見えの質問だったが、真由美は真正面からその質問に立ち向かう。

「私は今日で生徒会長の座を退きます。よって私が新たな役員を任命することはありませんし、そのようなことは考えてもいません」

「ですが、次の生徒会長に『意中の』二科生を任命するよう働きかけることはできるのでは?」

「私は院政を敷くつもりはありませんよ」

少しおどけたような真由美の口調に、会場のあちこちから笑い声が漏れた。

「次の生徒会長の任命は、次期生徒会長の専権事項です。一切介入するつもりはありません」

「ということとは、次期生徒会長に傍で困っておきたい二科生がいて、その意向を受けて今回の制度変更を言い出した、ということですね?」

「おいおい、と達也はさすがに呆れ果てた。他の生徒達もそう思ったのか、会場のあちこちでざわめきが起こる。

「その質問に対する答えは『いいえ』です。今回私がこの提案を行ったのは、対立の火種を後輩に残さないことが生徒会長の責務であると考えたからです」

「実際に役員へ任命すべき二科生がいなければ、そもそもその制度に意味が無いのでは?」

「候補者のいる・いないの問題ではありません。制度というのは、その組織の方針を表すものです。二科生は生徒会役員になれないということは、二科生には生徒会役員になる資格は無いという意味表明となります。そのような『選民思想』が、許されるはずがありません」

随分と思いついた表現に達也はヒヤツとしたが、会場は大きな拍手に包まれていた。それは必ずしも二科生だけから起こったものではなく、一科生の中からも一定数の支持者がいた。

「……そんなの、詭弁です!」

形勢が不利であることを自覚したのか、一科生の少女は見るからに焦っていた。そのせいか、口調もヒステリックなものとなる。

「会長は生徒会に入りたい二科生がいるから、資格制限を撤廃したいんでしよう! 本当の動機は依怙^{えこひ}臆^いなんじゃないですか!」

女子生徒の言葉に乗っかるように「そうだ!」と叫ぶ生徒もいたが、

その声はたちまちブーイングによって潰された。しかし彼らの引き起こした混乱は、着実に会場全体へと波及していく。

「七草会長！ あなたの本当の目的は、その1年生を生徒会に入れることじゃないの！」

女子生徒の指差した先には、達也の姿があった。

「私、知ってるんです！ その1年生は、会長の『お気に入り』なんですよ！ いつも昼休みに生徒会室に連れ込んでるのは分かってるんですよ！ 昨日だってソイツと駅まで一緒だったのも知ってるんですよ！」

女子生徒にとっては破れかぶれの発言だったのかもしれないが、ブーイングの嵐が一気に静まり返るほどには効果があった。

全校生徒の視線が、達也へと集中する。彼にとってはいい迷惑だが、注目の的となっているこの状況で不用意な言動はできない。

このまま女子生徒が勢いで押しきるか、と思われたそのとき、「仰りたいことは、それだけですか？」

真由美が発したその言葉は、台詞だけ見れば特におかしいところの無い普通のものだった。しかしそれを紡いだときの声色は、普段の彼女を知る者ほどそのギャップに戸惑うほどに低く平坦で、感情に乏しいものだった。

それと同時に、それを聞いた者に身の危険を本能的に感じさせるほどの威圧感があった。

達也に注目していた生徒達の視線が、真由美へと向けられる。

彼女は、今にも周りを炎で焼き尽くしそうなほどに怒りを顕わにしていた。

「確かに私は、この学校の生徒会長です。その立場を鑑みれば、私の言動1つ1つがあらぬ憶測を招いてしまうとしても仕方の無いことなのかもしれません。人の考えをむりやり止めることなどできない以上、私がそれに関してとやかく言うことは致しません」

しかし、と言葉を区切ってから、真由美の目はまっすぐ質問席の女子生徒に向けられた。

蛇に睨まれた蛙のごとく、彼女の体がビクンッ！ と硬直した。

「そういった客観的根拠の無い憶測を事実と決めつけて公の場で口にするのが、どれだけ相手のことを傷つけるのか理解できない年齢ではないはずです。それとも今の発言には、それを裏付けるような客観的事実がおりないのでしょうか？ もしあるとするならば、遠慮無くこの場で仰ってください」

「えっ……？ えっと、その……」

「ちなみに先の発言に対して私から付け加えるとするならば、昼休みに生徒会役員以外で食事を共にしているのは、風紀委員長の渡辺摩利、そして風紀委員の野原しんのすけくんも同様です。更に先程の発言ではあたかも駅まで2人きりで帰ったように聞こえますが、その場には彼の妹である司波深雪さん、そして野原しんのすけくんもいました。なぜ司波達也くんのみを名指しして非難したのか、その理由も併せてお話しください」

「……………」

自分の体が見えないナイフで貫かれる幻視すら覚えるほどの鋭い視線に、女子生徒は完全に押し黙ってしまった。社会経験が無く、権威や序列や階級といったものに疎い高校生ですら、「威厳」というものがどういったものに対して使われるのかを本能的に感じ取ってしまう光景だった。

そんな中、司会進行役の服部が慌てたようにマイクに口を近づける。

『これ以上発言が無いのであれば、打ち切らせていただきます。席にお戻りください』

女子生徒をつき離すような、しかしその実彼女に助け船を出したその言葉をきっかけに、女子生徒はギクシャクとした動きで戻っていった。

結局反対派の妨害は不発に終わり、気軽に野次も飛ばせない雰囲気にも包まれた会場中を覆い、なし崩し的に電子投票が行われ、真由美の提案は賛成多数で可決されることとなった。

生徒総会に続いて、あずさによる選挙演説の時間となった。立候補者が1人しかいないので実質所信表明みたいなものだが、形式上とはいえ投票が行われる。

やる気と緊張の入り混じった表情のあずさが演台へ上がり、ぴよこんと一礼したところで、会場中から大きな拍手が沸き起こった。真由美とは違うベクトルで、彼女もかなりの人気者らしい。

それもそのはず、実技・理論共にトップクラスの成績を打ち立てながら、それをまったく鼻に掛けず謙虚で人当たりの良い彼女は、小さく可愛らしい容姿も相まって「親しみやすいアイドル」としての地位を校内で築き上げているのである。

だからなのか、まるでアイドルのライブにでも参加しているかのような口笛と歓声が、拍手に紛れて聞こえてきていた。しかしそれも、あずさが演説を始めることでぴたりと止む。

意外と言っては失礼かもしれないが、あずさはスラスラと「政見」と「政策」を発表していた。基本は現生徒会のスタンスを継承したものであり、高校生らしく観念論に傾いているきらいがあるものの、概ね無難に進んでいた。時々「頑張れー」とか「しつかりー」などといった妙な応援が入るのは、まあご愛嬌ということ許されるだろう。

しかしその空気が一変したのは、次期生徒会役員に言及したときだった。

「——本日の決定を尊重し、次期生徒会役員には一科生・二科生の枠に囚われることなく、優秀な人材を登用していきたいと思えます」

「優秀な人材って、その二科生のことー?」

「あずさちゃん、ワイルドな年下が好みなのー?」

それは、実にレベルの低い野次だった。頭から抑えつけられて不完全燃焼のまま燻っていた反対派の不満が、最も低劣な形で噴出してしまった。おそらく彼らの頭には、真由美ならともかくあずさなら反論せずにスルーしてくれるだろうという期待があったのかもしれない。

確かに期待通り、あずさはその野次に対して何も言わなかった。

「誰だ、今のは!」

「中条さんにふざけた真似を！」

「言いたいことがあるなら、前に出て言いなさい！」

「卑怯者を吊し上げろ！」

会場のあちこちで声があがり、あつという間に大騒ぎへと発展してしまつたために、あずさが口を挟む暇すら無かつただけだが。

「お静かに願います！ ぐ着席ください！」

「静粛に！ 静粛に！」

「落ち着いてください、皆さん！」

深雪や服部や真由美が必死に声を張り上げるも、生徒達は大人しくなるどころかどんどん騒ぎを大きくしていく。野次は聞くに堪えないものとなり、あちこちで掴み合いの喧嘩まで起こっている。最初はあずさを想つて反対派を糾弾していた生徒達も、あずさ本人の言葉すらそつちのけで喧嘩に没頭している始末だった。

怪我をさせても構わないなら簡単だが、と事態収拾の困難さに頭痛を覚えながら、同じ風紀委員である沢木や辰巳とアイコンタクトを取り、そして自分と反対側に立つしんのすけへと視線を向けようとする。

達也とあずさの仲を邪推する、極めて下品で文章に起こすのも躊躇われる野次がどこから聞こえてきたのは、その直後だった。

「——静まりなさい！」

ハウリングが生じなかつたのが不思議なほどの大音声、というのは錯覚だ。怒鳴り合う生徒達の喧騒にも打ち消されないほどに彼女の声が強かった、とするのが正しい。

反射的に壇上を見上げた生徒達が目にしたのは、激しい怒りを露わにする深雪と、そんな彼女の激情を視覚化するかのよう荒れ狂う想子光サイオンの吹雪だった。

現代魔法は偽りの現象を表す情報体を組み上げ投射することで世界を改変するものであり、組織化されていない意思が魔法として発動することは有り得ないはずだ。しかし深雪の持つ桁違いの干渉力の強さがその定説を覆し、荒れ狂う感情のままに世界を混沌に引き摺り込もうとしている。

このままでは、講堂が氷漬けになってしまう。

真由美が、服部が、鈴音が、あずきが、〃氷の女王〃と化している深雪を制止しようと一斉にCADへと手を伸ばす。兄である達也だけは彼女に向かって駆け出すという行動に出たが、それも真由美達と同じように深雪を止めるためのものであることに変わりない。

そうして〃生徒会役員同士による魔法大戦〃という最悪の事態に発展しかけた、まさにそのとき、

「――ケツだけ星人、ブリブリ〜！」

しんのすけが高らかにそう叫んで、壇上の端から端まで猛スピードで往復しながら、前屈の要領で尻を天井に向けて突き出して腰を振りまくっていた。聞く人が聞けばそのフレーズだけで想像ができる踊りだか何だかよく分からない代物だが、5歳児のときとは違ってさすがにズボンが脱いでいなかった。尻を丸出しにして許されるのは幼稚園児までである。

突如壇上で繰り広げられた珍妙なダンスに、講堂の誰もが視線を（本人の意思とは無関係で）釘付けにされた。特に自分の目の前で尻が行ったり来たりしている深雪など、おそらく人生で初めてであろうショッキンクな光景に体を震わせ、その場に崩れ落ちるほどだった。当然ながら壇上に吹き荒れていたサイオンの吹雪は消え失せ、それと呼応するようにあれだけ騒がしかった生徒達もみるみる静かになっていった。気の弱い女子生徒などは、しんのすけの人間とは思えない奇怪な動きに気分を悪くし、口を手で押さえて椅子に座り込む始末である。

「――し、しんちゃん！ その変な動きを止めてくださいっ！」

誰もがしんのすけの動きにドン引きし、しかしそれに反して目を離せないで見つめるしかない状況の中、真つ先に我に返って壇上のマイクを使って呼び掛けたのは（本人には失礼だが）意外なことにあずきだった。

そしてその呼び掛けに彼は「おっ？」と即座に反応してピタリと止まり、静まり返る生徒達を一通り見渡してから、なぜか満足げに頷いて元の舞台袖まで戻っていった。

その後、まるで憑き物が落ちたように会場は完全な秩序を取り戻した。

野次を飛ばす者もコンサート気分の声援を送る者も現れず、演説会は粛々と予定を消化し、生徒達は飼い慣らされた羊のように列を作つて投票箱に票を投じた。

生徒会費で雇つた第三者の手によつて即日開票され、翌日の朝にその結果が発表される。

その結果――

*

*

*

「おめでとう、あーちゃん」

「おめでとう、中条」

「おめでとうございます、中条さん」

朝一番に生徒会室に飛び交つた真由美・摩利・鈴音による祝福の声と拍手に、あずさは頬を紅く染めて遠慮がちに頭を下げて応えた。

投票数、554票。

有効投票数、554票。

内、中条あずさの信任投票、554票。

つまりあずさは、全生徒の信任を得て生徒会長に選ばれたことになる。いくら候補者が1人しかおらず事実上彼女でほぼ決まっていたとはいえ、100%の信任率を得るとまでは誰も想定していなかった。おそらく、彼女自身が一番想定していなかっただろう。

しかし今となつては、誰もがその結果に納得であった。

「しんちゃんの、あの……何というか、その、『奇行』としか表現できないアレに対して、誰よりも早く中条が止めるよう呼び掛けられたのが、おそらく決め手だろうな」

「彼のあの動きは、もはや『精神干渉魔法』か何かかと思うほどでしたからね……。アレに対して行動を起こせるのですから、中条さんが生徒会長を務めるに相応しいと感じた生徒が多かつたのでしょう」

「あーちゃんには例の『固有魔法』があるものね、やっぱりそれのお

かげで精神干渉魔法に対する耐性があつたりするのかしら?」

「いや、皆さん、いくら何でもそれは……」

否定の言葉を口にするあずさだったが、最後まで紡がれることなく消えていった。先輩に意見するのを遠慮した彼女の気弱な性格によるもの、というだけではなさそうだった。

と、生徒会室に來客を知らせるインターホンが鳴った。それは普段ほとんど生徒会室に來ることのない克人によるもので、唯一の下級生としてあずさが動こうとするよりも早く鈴音がドアへと歩き、それを開けた。

「どうしたんだ、十文字? 随分と珍しいじゃないか」

「中条の新生徒会長就任を祝いに來た」

「あ、ありがとうございます! 十文字会頭!」

慌てた様子で頭を下げるあずさに対し、真由美と摩利がニンマリとからかうような笑みを克人に向けた。もつともそれで動揺する彼ではなく、堂々とした佇まいでそれを受け流したのだが。

そして克人は、唐突とも言えるタイミングで話題を転換した。

「それにしても、昨日の野原には驚かされたな」

「そ、そうね。いくらしんちゃんも普通の高校生とは違うと分かっているけど、まさかあんな奇妙な動きをするとは思わなかったわ……」

「まったく。というか、しんちゃんは何を考えてあんな行動を取ったんだ?」

「本人には訊かなかったのか?」

「正直、怖くて訊けなかったよ……」

風紀委員長として全生徒から恐れられている摩利らしくもない気弱な発言だが、他の女子生徒3人も同じなのかそれを責めたりしなかった。

それほどまでに彼女達を震え上がらせたしんのすけの“ケツだけ星人”を思い浮かべ、克人は——実に感心した様子で腕を組んでいた。

「まさかあんな場所で、幻とも言われていた“ぶにぶに拳”を見られるとは思わなかった」

「……ぶにぶに、何だつて?」

おおよそ克人の口から出てきたとは思えない響きの単語に、摩利は思わず自分の耳を疑った。

「『ぶにぶに拳』。功夫カンフーの一種で古い文献でしか記されていない伝説の拳法で、それを極めた者は世界を平和にすると謳われている。全部で10の奥義があり、野原が昨日見せたあの動きは9番目の『戦意尻失』と呼ばれるものだ。その効果は俺達が体感した通り、それを見た者の戦意を喪失させるというものだ」

「……ええと、十文字くん? 何かの漫画かしら?」

「確かにその存在を疑問視する者も多いが、現にアレを見た俺達は精神干渉魔法に掛かったかのように動くことができなかつた。それに古式魔法の中には、体術の中に魔法を発動する結印の動作を混ぜたものも存在している。おそらく『ぶにぶに拳』もその類なのだろう」

大真面目な表情で子供の妄想としか思えない拳法について流暢に喋る克人に、真由美達は哑然とし、普段は冷静沈着な鈴音でさえ困惑を隠せずにいた。しかし彼の堂々たる振る舞いのせい、妙に説得力があるように聞こえてしまうのだから質たちが悪い。

「それで十文字くんは、なんでそれを知ってるのかしら?」

「我々十文字家は『一騎当千』を信条としているからな。少しでも自身の戦闘力を上げるため、そういった文献にも広く目を通すことになっているんだ。俺も昔、独学でぶにぶに拳を習得しようと試みたことがある」

「習得しようとしたのか!? ぶにぶに拳を!?!」

「9つの奥義を全て試してみたのだが、残念ながらら3つ目の『猫手反発』しか習得できなくてな」

「習得できたの!?! ぶにぶに拳を!?!」

「というか、試したのか!?! 『戦意尻失』を!?!」

摩利と真由美のツツコミを気にする素振りも無く、克人は「野原にコツを尋ねてみるか……」とぶにぶに拳に思いを馳せていた。

そんな彼の姿を見て、彼女達は思った。

——前から思ってたけど、やっぱり彼って『天然』だわ……。

横浜騒乱編

第48話「怪しい人達と論文コンペだゾ」

24時間体制を実現するための自動化が推し進められた港湾諸施設は、現代ではほぼ無人で運営されている。通関は日中にまとめて行われ、夜間は船舶の入港・荷揚げや積み込み・出港の作業が全自動化され、監視のための人員が僅かに配置されているのみである。

よって人手を減らした分、密入国者対策として保税区域と市街地の遮断がより厳重に行われるようになり、保税区域での船舶乗組員の上陸が禁止されている。逆に港湾施設が自動化する深夜は、保税区域以外の接岸が禁止されている。

『5号物揚場に接岸した小型貨物船より、不法入国者が上陸しました。総員、5号物揚場へ急行してください』

10月のある日、場所は横浜山下埠頭。

そろそろ日付も変わろうとしていた頃、私服刑事である千葉寿和警部は部下の稲垣警部補を引き連れて、短距離無線の声に従ってフェンスやコンテナなどの障害物を跳び越えながら目的地へと走っていた。「やれやれ、やはりあそこか」

「ぼやいてる場合じゃないですよ、警部！ きりきり走る！」

「……稲垣くん、君は僕の部下だよね？」

「歳は自分の方が上です」

「……やれやれ」

千葉は会話の通り呑気な表情で、稲垣は真面目一辺倒といった真剣な表情で、普通ならばどんなに全力疾走しても2分は掛かる道のりを30秒で駆け抜けた。常人には到底出せないスピードで走る2人は、もちろん常人ではなく魔法師だった。

「しかしまあ、やはり人員不足だなあ」

「仕方ないでしょう。魔法犯に対処できるのは魔法師の刑事だけなんですから」

「本当はそんなことないんだよ？ 例えば最近特に話題になった」

代々木コージロー”とか——」

「あんなの、イレギュラーに過ぎるでしょう」

「確かに彼ほどの実力者はそうそういないが、それでも実力のある非魔法師というのは案外いるもんだ——、よー」

不自然に会話を区切って気合いを入れた千葉は、魔法によって実現した驚異的な跳躍力で密入国者の人垣を軽々と跳び越えた。密入国者達は即座に3点バーストでサブマシンガンを乱射させるが、千葉の体は空中でグニャグニャと軌道を変えて銃弾を擦り抜けていく。そして着地と同時に彼らに肉迫、いつの間にか持つていた全長1メートルほどで反りの少ない木刀でたちまちの内に3人を打ち据えた。

そして稲垣も挟撃の形で彼らに応戦、マシンガンの射手を拳銃で打ち倒していく。10人ほどはいた密入国者のグループはあつという間に制圧された。他の場所でも同じような小競り合いが起きているが、わざわざ助太刀する必要は無さそうだ。

それよりも今は、

「稲垣くん、あの船を止めてくれ。多分あれが本命だ」

「……良いんですか？ 自分だと、沈めますよ？」

「心配するな。責任は課長が取る」

「……せめて『自分が取る』と言ってくれれば、締まるんですけどねえ……」

文句を言いつつも稲垣は拳銃を沖合いの船に照準を合わせ、引き金を引いた。グリップに仕込まれたCADによって発砲と同時に起動式を展開、移動と加重の複合魔法が銃弾の軌道を固定して貫通力を増大させる。

そして銃弾は船尾を貫通、船の形状から予測しただけだということに見事にスクリューのギアボックスを撃ち抜き、船の勢いは目に見えて弱くなっていく。

「お見事」

言葉少なく部下を褒めながら、千葉も手に持っていた木刀の留め金を外し、冷たく光る白刃を外気に晒した。木刀に見えていたそれは、真剣を内に隠す仕込み杖だった。

その瞬間、千葉の体は海の上にあつた。惰性で漂い始めた船に一直線に向かい、着艇と同時に刀を振り下ろして鉄製の船室扉を真っ二つに切り裂いた。百家・千葉一門の秘剣「斬鉄」によるものであり、単一概念として定義された刀は単分子結晶のように折れることも曲がることも欠けることもなく、あらゆる物体を切り裂いていく。

返す刀で進入路を確保した千葉は、単身船の中に入り込んだ。

「お疲れ様です、警部」

「骨折り損だったけどね」

白み始めた空を見上げながら、千葉は部下の労いの言葉に他人事のように答えた。稲垣が今にも吹き出しそうに笑いを堪えているのは、とりあえず今は黙っておいてやろう。

千葉の言う通り、彼が侵入したときはすでもぬけの殻だった。船底のハッチに穴を空けて脱出したようで、千葉が風通しを良くしたおかげもあつて船はすぐに沈没していった。

「賊の行方は、まだ分かっていないようです」

「……そんなもん、分かりきってるじゃないか」

千葉はそう呟くと、朝日を背に西へと視線を向けた。

千葉が視線を向けた先、埠頭から程近い場所にある全国的に有名な繁華街の中、とある飲食店の裏側に人が入れそうなほどに大きな井戸があつた。

そしてその井戸の傍らに、こんな朝早くからスリーピースで身なりを整える青年が立っている。二十代半ばほどに見えるその青年は、いかにも貴公子然とした見目麗しい外見をしていた。

と、そのとき、彼が見つめていた井戸の蓋が突然外れ、中からずぶ濡れになった男達が次々と姿を現した。最終的に16人となったところで、一番最後に出てきた中年の男が青年の前に立って挙手敬礼をした。青年もそれに応え、右手を左胸に当てて腰を折ることで返す。

「まずは皆様、着替えてお寛ぎを。朝食を用意させております」

「周先生、^{チュウ}ご協力に感謝します」

男のまったく感謝しているように聞こえないぞんざいな礼に気分を害した様子も無く、青年は16人の男達を先導して建物の中へと入っていった。

* * *

「失礼します」

達也が魔法幾何学準備室に入ったとき、最初に目が合ったのは正面の席に座る甘楽計夫^{つづらかずお}だった。若干二十代で魔法大学の准教授に王手を掛けていた英才だが、あまりに自由すぎる発想と言動のために「教育者としての経験を積む」という名目で魔法科高校に飛ばされた変わり者である。

「よく来ましたね、司波くん。まあ、座りなさい」

変わり者だからか、この教師は第一高校の中では珍しく一科生と二科生とで態度を変えるようなことはしない。優秀な人材ならば一科二科を問わず、そして本人の都合も問わず関わってくる。

そんな人物に呼ばれた達也も最初は警戒心を顕わにしていたが、同じ部屋の応接セットに鈴音と五十里、そして平河の姿を見つけてその表情を疑問に染めた。

「今月末に、魔法協会主催で論文コンペが行われるのは知ってますね？」

「はい、詳しくはありませんが」

「確かに九校戦と違って地味ですからね、1年生の君が知らなくても仕方がないでしょう。九校戦が52人の大選手団を編成するのに対して、こちらはたったの3人ですからね」

その違いに達也も一瞬驚いたが、確かに論文を作成してプレゼンするだけの作業に大人数は必要無い。人を増やしたところで「船頭多くして〜」となるのが関の山だ。

「では本題です。司波くん、第一高校代表チームの補佐として、論文コ

ンペに参加してもらえませんか？」

甘樂の突然の申し出に、さすがの達也も言葉に詰まった。先程の前置きで予測できるような話題ではなかったからである。

「……補佐というのは、代表の皆さんの手伝いをするということですか？」

「手伝いをしてくれる生徒は他にもいますが、彼ら彼女らはあくまで代表3人の指示を受けて作業を行います。それに対して司波くんは代表の3人を直接補佐する役割であるため、時には他の生徒達に指示を出すこともあるでしょう」

つまり立ち位置としては、代表選手とその他生徒達の間といったところか。実質的な“4人目の代表”と表現して差し支えないかもしれない。

「……理由を、聞かせてもらえませんか？」

「彼女達3人から、人員の追加を打診されたのですよ。今回取り組んでいるテーマが難しく、補佐的な役割でも良いのでとにかく手を借りたいと」

「それは何となく理解できます。なぜ自分が選ばれたのか、という意味なのですが」

「それについては、君を補佐に推薦した市原くんに説明してもらいましょうか」

甘樂の言葉に鈴音が軽く一礼して、達也への説明役を引き受けた。

「2学期が始まってすぐの頃、地下の資料庫で私と話したときのことを憶えていますか？」

「はい、もちろんです」

達也はその返事と共に、頭の中からそのときの記憶を即座に呼び起こした。

2人が話したという地下の資料庫とは、外部に持ち出し禁止となっている魔法科高校所蔵の文献の中でも特に管理の厳重なものが保管された場所だ。そんなものが普段の授業で必要になるはずも無く、生徒どころか教師ですらそこを出入りすることは滅多に無い。

そんな場所で達也は何を調べていたのかというと、“賢者の石”に

ついでだった。

“エリクシール”と区別して定義する場合のそれには、卑金属を貴金属に変換する魔法に使用する触媒の役割がある。触媒なのでそれ自体が材料ではなく、物質変換魔法を発動させるための道具と見られている。つまり魔法的なプロセスも無く石だけで魔法が使えるのであれば、石そのものに魔法式が保存されていると見るのが自然だ、と達也は考えていた。

そしてそれを聞いた鈴音は、真っ先に彼に尋ねた。

仮にその魔法式保存機能があつたとして、それを“重力制御”に応用することは可能か、と。

「我々が今回挑んでいるのは、“重力制御魔法式熱核融合炉の技術的可能性”について。達也くんが個人的に研究している案件とも、部分的な違いこそありますが概ね一致します」

「だから自分を、皆さんの補佐に推薦したということですか？ 自分はいくまで個人的に調べているだけのことです。皆さんの期待に応えられるかどうかは——」

「それもありますが、一番の理由は私の目指す“目標”が司波くんのそれと一致していることです」

「……………」

達也の言葉に被せるようにして発せられた鈴音の台詞に、彼は思わず口を閉ざした。呆然としたからではなく、納得がいったからである。

先の地下資料庫で鈴音が語ったその“目標”とは、政治的圧力ではなく経済的必要性によって魔法師の地位を向上させること。魔法を経済的に必要不可欠な要素とすることで、兵器として生み出された魔法師の宿命を本当の意味で解放できる、と彼女は考えていた。

だからこそ、重力制御魔法式熱核融合炉に必要な核融合を維持するために魔法師が付きつきりで魔法を掛け続ける、というのは避けたかった。現実的ではないのは当然として、それでは魔法師が“兵器”から“部品”に変わっただけで根本的な解決にはならない。なので鈴音は、魔法式を保存する機能をシステムとして構築する方法を模索

していたのである。

達也がその考えを聞いたとき、自分と同じ考えを持つ者が身近にいたことに感動を禁じ得なかった。酔乙女あいを筆頭に一部の有力者が魔法の経済的有用性に注目してはいるものの、世間の大多数は未だに魔法師と軍事がイコールで結びついている。達也の喜びはまさに、アングラな趣味を理解されない者が偶然同じ趣味を持つ者を発見したときのそれと酷似していた。

それを思い出した達也は、同時に理解した。

「最初に話を聞いたとき、先輩はなぜ他の応募者から選ばず、論文選考すらしていない自分を指名したのか疑問でしたが、そういうことだったのですね」

「こちらにいる2人も、私の考えに賛同して集まってくれました。いくら代表が3人とはいえ、3人がそれぞれ志がバラバラではいけません。議論を重ねることは大事ですが、そればかりで纏まらないと本末転倒なので」

「成程、確かにそうですね。例えばお三方の次点だった方とかを呼ばなかったのも——」

「関本くんは駄目です。彼は今回の作業には向いていません」

今までは淡々と説明していた鈴音が、このときばかりは実に感情の籠もった力強い声でそう言い放った。あまりにも突然の変貌ぶりに達也は面食らい、五十里と平河は苦笑いを浮かべている。

関本というのは風紀委員の関本勲先輩のことか、と達也が考えていると、鈴音を始めた3人が立ち上がって一斉に頭を下げた。

「突然のお願いで、司波くんに迷惑を掛けることは重々承知しています。それに今回の仕事はあくまで補佐であり、正式な代表でない以上論文の作成者に名を連ねることもありません。なので司波くんからしたら、自分にまつたく旨味の無い話だとは思いますが——」

「いいえ、そんなことはありません。正直なところ、先輩方がどのようなアプローチで研究に取り組んでいるのか純粹に興味がありますし、それを間近で見られるのであればこちらにとっても充分メリットと言えるでしょう」

「と、ふうことは——」

「はい。その申し出、お引き受け致します」

達也の言葉に、3人がホッと胸を撫で下ろすのが分かった。よつぽど手が足りなくて困っていたのだな、と達也は少なからぬ同情を覚えた。

特に平河など、心の底から嬉しそうにニコニコと満面の笑みを浮かべている。

「いやあ、ありがとね司波くん！ よし！ じゃあ論文コンペ初心者
の司波くんのために、私が論文コンペとは何かつてのを教えるね！」

平河は妙なテンションで達也をソファアに座らせると、大判レポート用紙サイズのタブレットを彼へと渡した。

「論文コンペっていうのは、高校生が魔法学や魔法工学の研究成果を
発表する場よ。学会とかの発表場所が無い高校生が、自分達の研究を
世に問う場所でもあるわ。優秀な論文を発表すると魔法研究機関か
らスカウトされるだけじゃなく、そのまま魔法大全に収録されて大学
や企業で利用されることもあるの」

平河の説明を聞きながら、達也は手元のタブレットで案内書を眺める。

「開催日は毎年10月の最終日曜日、だから今年は10月30日ね。
開催地は京都と横浜をローテーションしてるんだけど、これは日本魔法協会の本部が京都、副本部的な位置づけの関東支部が横浜にあるからみたいね。今年は横浜の国際会議場よ」

達也は頭の中でスケジュール帳を引っ張り出した。幸いにも10月30日は何の予定も無い。

「参加資格は魔法科高校から推薦を受けた者、または予備選考を通過した高校生のグループってなってるけど、過去に推薦を受けてないグループが論文コンペに参加した例は無いわね」

「規定上はオープン参加のはずですよ？ それはなぜですか？」

達也が手を挙げて平河に質問すると、彼女は実に嬉しそうに笑みを深くして答える。

「普通の高校生にとっては、30分ものプレゼンに耐えられるだけの

論文を書き上げるのは、モノリスやミラージに出ること以上に難しいことだからよ。学校から推薦を受けた私達でさえ、生徒会と部活連の協力が無かったらとても論文なんて出来なかっただろうし」

そういうものか、と達也は他人事のように思った。FLTで新商品のプレゼンをする機会の多い彼にとっては、彼女の言葉にあまり実感が持てなかった。

「テーマは原則として自由。でも公序良俗に反していないことが条件ね。一昨年なんか、大量破壊兵器に替わる魔法の開発をテーマにした生徒がいてね、事前審査で跳ねられたの」

「それはまた、随分と突き抜けた生徒がいましたね。——ん？ でも事前審査で跳ねられたってことは、当然その論文は非公開なんですよね？ なんて平河先輩はそのことをご存知なのですか？」

達也の質問に、平河は気まずそうな視線を鈴音へと向けた。達也がそれに倣うように鈴音へと標的を変えると、彼女は溜息混じりで呟くように答えた。

「……その論文を作成したのは、我が校の当時の生徒会長でした」

「……そうでしたか。——ちなみに、そのときの論文って残ってたりしますか？」

「確か地下の資料庫を漁れば出てくると思いますが……。まさか司波くん、それを再現してみようなんて考えてはいないでしょうね？」

「まさか。純粋に興味があるだけですよ。『怖いもの見たさ』ってヤツです」

それに『大量破壊兵器』なら既に開発していますので、とはさすがに言えなかった。

「そんなわけで、論文の完成稿と機材や術式を含めた企画書を、事前に魔法大学に提出しなくちゃいけないの。期限は再来週の日曜日で、学校を通しての提出になるわ。甘楽先生にチェックしてもらおう時間も考えると、来週の水曜日までには仕上げた方が良いわね」

「甘楽先生がチェックするんですか？」

「甘楽先生が今年の校内選考責任者だからね」

五十里がそう言うと、甘楽は「面倒事を押しつけられただけです」

ね」と困ったように笑った。

「ですが、甘楽先生はとても優秀な方です。通常の指導よりも遥かに踏み込んだレベルで教えを受けられる私達は、むしろ幸運と言っていでしょう」

鈴音の言葉に五十里も平河も揃って頷いていたが、生憎教師からの通常の指導すら受けられない二科生の達也にとっては特に感慨深いものは無かった。

そんなことを言えば部屋の雰囲気は気まずいものになることは間違いないので、けつして口にはしなかったが。

*

*

*

「えっ？ 達也、論文コンペの代表の補佐に選ばれたの？」

学校近くにある、割と本格的な佇まいをしている喫茶店「アイネブリーゼ」。達也たちもよく通っており、マスターからもそこそこ常連扱いされている。その日の放課後いつもの9人でそこに集まっており、話題は自然と魔法幾何学準備室に呼び出された達也のことになった。

驚きの表情を浮かべる幹比古に対し、達也の反応は「まあね」と何とも淡泊なものだった。

「どうしたの、達也くん？ 感動薄すぎじゃない？」

「そりゃあ、達也からしたら正式な代表じゃなきや意味無いってことだろ」

「それでも実質的には“4人目の代表”みたいなことでしょ？ 1年生でなんて、ほとんど前例の無いことじゃない？」

「皆無ではないだろ？ それに学校も、インデックスに新しい魔法を書き足すような“天才”を無視できねえって！」

「“天才”は止めてくれ」

レオが口にしたその言葉に、達也は心底嫌そうな表情でそう言った。

「達也さん、本当に“天才”って呼ばれるのが嫌なんです」

「都合の良い事後評価だからな。結果を出せなかった人間に対して、天才」とは言わないだろう?」

「んもう、達也くんは相変わらず捻くれ屋さんですなあ。素直に喜べば良いのに」

「そうそう。しんのすけみたいに堂々と天才を自称しろ、とまでは言わねえけどさ」

「いやあ、照れますなあ」

「別に褒めてるわけじゃ——いや、或る意味スゲエとは思ってるけどよ」

レオとしんのすけの遣り取りに、皆がアハハツと笑い声をあげた。

「いや、それでもやっぱり凄いよ。あの大会で優勝したら『スーパースーパー』に論文が載るんでしょ? たとえ優勝しなくても、注目された論文が学会誌に載ることだって珍しくない」

「あれ? でも、期限まであまり時間が無いんじゃないの?」

「だいたい9日ってところだな。でも大した問題じゃないさ。俺はあくまで補佐だし、論文自体は夏休み前から進められてきたからな」

「ですが、急なお話であることに変わりありません。よほど難しいテーマなのでしようね」

「おお、そういうえば論文のテーマを聞いてなかったな。どんなのだ?」

興味津々といった感じでレオが尋ねてくるが、隣にいたエリカが「あんた、そんなこと聞いて理解できるの?」と言っているのが聞こえた。もちろん、レオはそれをガン無視だ。

「『重力制御魔法式熱核融合炉の技術的可能性』だ」

「成程成程。で、日本語で何て言うの?」

「最初から日本語だったんだが、しんのすけ?」

達也がツツコミを入れる中、最初に反応できたのは幹比古だった。

「それって『加重系魔法の三大難問』じゃなかったっけ? 随分と壮大なテーマに踏み込んだね」

「達也さんが選ばれたから、てつきりCADに関連したものかと思っ
てました」

「あ、それアタシも思った。啓先輩もメンバーに入ってるんでしょ?

そのテーマだったら、優勝間違いなしだと思っただけだ」

「どうせ達也のことだ、重力何たらってテーマでも、ものスゲーの書くに決まってるんだろー!」

「……レオ、重力制御魔法式熱核融合炉ね」

「難しさも分かってないのに、テキトーなこと言わないの」

調子の良いレオに、エリカがツツコんだ。その漫才のようなテンポの良さに、皆が再び笑い声をあげる。

と、メロンソーダをストローでズゾゾと一気に飲み干したしんのすけが、ストローから口を離してこう言った。

「そっか達也くん、休みの日なのに大変だね。頑張ってるね」

「何言ってるんだい、しんのすけくん。君も無関係じゃないんだよ」

「えっ、そうなの?」

「風紀委員は毎年、警備として会場に同行するのが習わしになっているんだから」

「そんなあ! せっかくゴロゴロしようと思ってたのに! 休日手当とか出ないの?」

「いや、出るわけじゃないでしょ」

テーブルに突っ伏して落ち込むしんのすけを中心として和気藹々とした会話が行われる中、達也だけは真剣な表情で思案に耽っていた。そんな彼の様子を見逃すはずも無い深雪も、チラチラとそれを見遣りながら心配そうに眉を寄せている。

達也の考えていたことを端的に表すなら、まさにこれだった。

—— 今度の論文コンペ、まさか何か起きたりしないよな?」

*

*

*

駅で友人達と別れて帰路についていた司波兄妹は、司波家の駐車場に車が止まっているのを見て顔を見合わせた。その車は「カー・シエアリング」という概念が一般化したことから街でよく見掛けるようになったシテイコミュニーターで、達也の愛車である大型二輪とは似ても似つかない。

つまりそれは、司波家の来客が乗ってきたものということになる。それも、司波家の駐車場に勝手に車を止められる人物が。

「……………」

達也が先に立って玄関のドアを開けると、地味なデザインの見慣れないパンプスが揃え置かれていた。それを見た深雪の顔が強張り、立ち尽くしそうになったところを達也に優しく肩から抱き寄せられる。と、そのまま靴を脱いでかまち框に足を掛けたところで、パタパタとスリッパを鳴らすような足音が奥から聞こえてきた。

そうして姿を現したのは、

「お帰りなさい。相変わらず仲が良いのね」

髪を後ろできつく縛ったパンツスーツ姿の小柄な女性に、達也は察した。

どうやら今回もまた、厄介な事件に巻き込まれるのだと。

第49話 「怪しいタマタマと危ないタマタマだゾ」

「こちらに帰るのは久し振りですね、小百合さん」

「……ええ。本社に近い方が便利だから、仕方ないわね」

「ええ、そうですね」

冷たい眼差しと声を向ける達也に、玄関で兄妹を出迎えた小百合という女性がその小柄な体をピクツと震わせてそう答えた。自分達に無許可で家に上がり込んだことを咎めない程度には顔見知りなようだが、交わされる会話は実に義務的でそこには感情が一切含まれていない。

彼女のフルネームは、司波小百合。FLTで研究員をしていたときに司波龍郎と出会い恋人となったが、彼が四葉深夜と結婚することになった後も愛人として交際を続け、2年ほど前に龍郎と深夜が離婚したことで念願叶って正式に彼の後妻となった。ちなみに現在は研究職を離れ、本社の管理部門に異動している。

離婚の際に達也と深雪の親権は（実情はどうであれ）龍郎が取得しているのです、つまり彼女は2人にとって義理の母となるが、だからといってそんな簡単に親しくなれるものではなかった。経緯が経緯なので、それも致し方ないだろう。

それに小百合の方も、兄妹に歩み寄る意思は無かった。たとえ彼女が家に来たとしても、彼女が寝泊まりできる部屋も寝具もこちらには無い。そもそも龍郎と結婚して以来ずっと彼と2人で住んでおり、住民登録がこちらにあるだけで一度も住んだことがない。先程の会話は、それを分かったうえでのものであった。

「お兄様、すぐに夕食のお支度をします。何か召し上がりたいものはありませんか？」

少し落ち着きを取り戻したらしい深雪は、小百合には目もくれずに達也へと向き直った。どうやら彼女の中で、そのような対処をすることに決めたようだ。

「おまえの作るものなら何でも。急がないから着替えておいで」

「分かりました。着替えの方も何かリクエストがお有りでしたら、深

雪はどのような格好でも致しますよ」

「こらっ、調子に乗り過ぎだ」

軽く小突くフリをする達也に深雪は首を竦め、軽やかな足取りで2階へと上がっていった。

「では、お話を伺いましょうか」

そうして深雪の姿が見えなくなった途端、達也は小百合にそう呼び掛けてリビングへと足を進めた。席に促す素振りが一切無い彼に小百合は戸惑うが、彼がソファアに腰を下ろしたことでようやくその正面へと歩き始め、そこに座る。

「……相変わらず、あなた達は私のことが気に入らないのね」

「深雪はそうでしょうね。自分が生まれる前から愛人関係だったんですから、多感な年頃の深雪が嫌悪感を抱いたとしても不思議ではありません」

「達也さん、あなたはどうかのかしら？」

「俺は別に何も。そういう風に出ていきますから」

「……そう」

小百合がそのまま黙り込んでしまったことで、達也は軽い苛立ちを覚えた。深雪が席を外している間に、さっさと用件を済ませてしまいたい。

「それで、用件は何ですか？」

「……単刀直入に言うわ。あなたに本社の研究室を手伝ってほしいの。できれば高校を中退して」

「お断りします。深雪が一高生でいる間は俺も一高の生徒である方が、何かあったときに色々都合が良いので」

「……あなたが進学しなければ、別のガーディアンが手配されたはずでしょう？」

「深雪の護衛に限って言えば、自分以上の適任はいませんので」

既に何度も行われたその遣り取りに、小百合は演技でない溜息を吐いた。

「……あなたのような優秀な人材を遊ばせておく余裕は、うちの会社には無いだけけれど？」

「遊んでいる、とは心外ですね。先日、USNAの海兵隊から飛行デバイスの注文が大量にありましたよね？ あれだけでも、昨年度の利益の20パーセントにはなったと記憶しているのですが」

「……………」

挑発的とも取れる達也の言葉に、小百合は悔しそうな表情を浮かべた。彼の言葉は紛れもない事実であり、反論の余地は無かった。

そもそも魔法工学関連の部品メーカーだったFLTをCAD完成品メーカーとして一躍有名にする立役者となったのが、達也の開発したシルバー・モデルだ。特に今回の飛行デバイスは『FLTを特化型CADメーカーとして世界トップレベルに押し上げる』と予想するアナリストもいるほどの画期的な新商品であり、元々研究員だったがいまいち成果を上げられず管理職に異動した彼女からしたら嫉妬せずにはいられないだろう。

「……………ならばせめて、こちらの用件は引き受けてもらうわ」

そのような感情を呑み込んで、小百合がハンドバッグから大きめの宝石箱を取り出した。

慎重な手つきで蓋を開けると、中には赤味を帯びた半透明の玉が1つあった。

「……………これは、にのまがたま瓊勾玉系統の聖遺物レリックですね」

達也の言う「レリック」とは、魔法的な性質を秘めるオーパーツを意味している。人工物とも自然物とも断定できない物質に対してはこの定義に当て嵌まり、例えばキャスト・ジャミング効果を持つアンテナイトもレリックに分類される。

「達也さんには、このレリックの解析をお願いするわ」

「……………どこで出土されたんですか？」

「知らないわ」

「成程、国防軍絡みですか」

非外資系としてトップクラスの技術を持つメーカーとして、FLTは軍関係の仕事を受諾することも多い。なので達也も、ここまでは予想の範囲内だった。

「まさかとは思いますが、瓊勾玉の複製を請け負ってたりはしてませ

んよね?」

達也の言葉に、小百合は明らかに動揺を見せた。

それで色々察した達也が、呆れから来る深い溜息を吐いた。

「……現代技術で複製することが難しいから、レリックに分類されるのですか?」

本来オーパーツとは出土した時代の技術水準を超えるものを指すが、レリックに関しては現代技術をもってしても再現が困難な物を指し、だからこそ「聖遺物」なんて仰々しい名称がついている。

「国防軍からの強い要請を、私達が断れるわけがないでしょう」

絶対的に人口の少ない魔法師を相手に商売を続けていられるのは、国による全面的なバックアップに依るところが大きい。「魔法を振興する」という政策上高価にするわけにはいかず、国からの補助金が不可欠となるからだ。だからこそ、FLTを始めとした魔法工学関係の企業は政府に逆らうことができない。

唯一逆らえるとすれば、酔乙女ホールディングスの「酔乙女魔工製作所」くらいだろう。たとえ国からの補助金を打ち切られたとしてもグループ全体の潤沢な資金でいくらでも補填できるし、むしろ下手に魔法関係の事業から撤退される方が国にとってのダメージが大きい。酔乙女家の事業によって生計が成り立っている魔法師がそれだけ多く、またエンタメ事業などによって魔法師に対する世間からの悪感情が緩和される効果がそれだけ大きいからだ。

閑話休題。

「しかし国防軍といえども、レリックと呼ばれる所以は知っているでしょう。なぜそんな無茶な要求を?」

達也の問い掛けに小百合が答えるまで、1呼吸以上の間があった。

「瓊勾玉には、魔法式を保存する機能があるそうよ」

「……それは実証されてるのですか?」

如何にも胡散臭そうだ、という態度でいられたのは、達也が持ち前の演技力を総動員したからだだった。その甲斐あって、自分がレリックに強く興味を惹かれていることを彼女が気づいた様子は無かった。

「まだ仮説の段階だけど、軍を動かすには充分な観測結果が出ている

わ

もしそれが事実だとしたら、確かに軍としては無視できないだろう。魔法を保存するシステムが確立すれば、半永久的な魔法装置を開発することもできるし、魔法師のいない部隊に魔法兵器を配備することもできる。

そして何より、達也の目指す『常駐型重力制御魔法式熱核融合炉』の実現にも大きく貢献する。

「しかし今のFLTの業績を考えれば、敢えて火中の栗を拾う必要は無いと思いますが」

「すでに賽は投げられているわ」

「何の勝算も無く、ですか？」

「いいえ、勝算ならあるわ。達也さんの魔法ならば、解析は可能よ」

小百合の本音が見え見えの言葉に、達也はフツと鼻で笑ってしまった。つまり必要としているのは達也の頭脳ではなく、彼の『異能』のようだ。いつものように。

「複製できる保証はありませんが、どうしても言うなら第三課にサンプルを回しておいてください。あそこなら、俺も頻繁に顔を出すので」

「そ、それは……」

達也の目的はあくまで魔法式の保存機能であって、瓊勾玉の複製など二の次だった。故に本社の研究員に振り回されるような事態は避けたいし、本社の研究室ではスケジュールを自由に組めないので都合が悪い。

しかし第三課に研究の手綱を握らせるのは、小百合にとって都合が悪かった。といっても、研究そのものに対する都合ではない。単純に『これ以上第三課ばかり成果を上げさせるわけにはいかない』という派閥争い、そして更には『これ以上達也に発言力を持たせたくない』という個人的感情に基づくものだった。

「それとも、そのサンプルをお預かりしておきましようか？」

「——結構よ！ あなたに頼ろうとしたのが間違いだっただようね！」

達也の提案は言葉に詰まった小百合への助け舟のつもりだったの

だが、結果的にそれで癩癩を起こした彼女は瓊勾玉の入った宝石箱を鞆にしまうとその場で立ち上がった。

「貴重品をお持ちだ、駅まで送りましたよか？」

「必要ありません。コミュニーターがありますので」

「そうですか、お気をつけて」

気を悪くした様子を一切見せない達也の慇懃な態度に、小百合はますます腹を立てて乱暴な足取りで玄関へと歩いていった。そしてそのままの勢いでドアを開けて出ていくのが、リビングの壁越しでも手に取るようによく分かった。

だからだろう、小百合が出ていったその直後を見計らったかのように、オールインワンのキャミソールワンピース姿の深雪が恐る恐る階段を下りてきたとしても何ら不思議は無かった。

「あの、お兄様……。子供じみた真似をして、申し訳ございません」

おそらく先程の小百合への態度を恥ずかしがっているのだろう、剥き出しの腕や肩、うなじの辺りをほんのり紅く染める深雪に、達也はニコリと微笑むだけでお叱りの言葉は無かった。

その代わり、達也は首からネクタイを抜いて深雪に手渡しながら玄関へと歩いていく。それで察したのか、深雪はコート掛けから達也のブルゾンを手に取った。

「……お出掛けに、なるのですか？」

「ああ。——危機管理意識の低いあの人を、ちよつとフォローしてくる」

*

*

*

——やってしまった……。

自動運転のコミュニーターの中で、小百合は後悔と自責の念に駆られていた。管理部門に移ってから折衝事は日常茶飯事のはずなのに、達也を前にすると平静を保てなくなってしまう。

それは彼が憎きあの女性の息子であり、技術者として自分よりも遙かに高みにいる才能と実績、そして全てを見透かそうとしているかの

ようなあの視線が原因だった。最後に関しては自分達が彼を道具としか見ていないという感情が作り出した鏡像なのだが、さすがに彼女もそこまでは気づいていない。

とはいえ、自分が痼癢を起こしたせいで彼の協力を得るのが難しくなってしまった、ということは彼女にも分かっている。だからこそ彼女はこうして落ち込んでいたのであり、彼女は大きな溜息を吐いて窓の外へと視線を向けた。

と、まだそれほど遅い時間でもないのに、周りに車の姿がまったく無いことに気がついた。コミューターのパネルに交通情報を映し出してみると、故障車を避けるために迂回路を通っている旨が知らされ、小百合はホツとしたように座席に深く座り直した。

すると今度は、背後から管制下に無い自走車が接近していることを知らせるアラームが鳴り響いた。しかし小百合は、この時代にもドライブを趣味とする人が少なからず存在しており、そういう人物は自分の車に交通管制システムの干渉を拒否する改造を施していることも珍しくないことを知っていた。

よって今回もその類だろうと思ひ、彼女は耳障りなアラームの音を切った。少し経って、黒いワゴンタイプの車が後ろから小百合の乗るコミューターを追い越していく。

そしてその車は突如ドリフトをして反転すると、コミューターの行く手を遮るように割り込んできた。

「なっ——」

小百合が悲鳴をあげる暇も無く、コミューターの衝突回避システムが作動し、減速しながら街路樹へと突っ込んでいった。もちろんエアバッグが作動しているので、乗っている小百合に怪我はまったくない。

しかしその車から男が2人降りてきてこちらに向かっけてきているという状況に、小百合はそれどころではなかった。1人の手に銃が握られているのを見れば尚更である。

「さっさと降りろ。抵抗すれば——」

「おおっ！ 凄い勢いで突っ込んでたけど大丈夫っ!？」

突然背後から声を掛けられ、男達は驚愕の表情を浮かべた。人払いの魔法を周囲に掛けていているにも拘わらず、という状況が彼らの焦りを更に加速させる。

勢いよく後ろを振り返ると、魔法科高校の制服の上から真っ赤なスカジャンを羽織る少年がこちらに走ってきているのが見えた。男達は知らないが、そのスカジャンは“カンタムロボ”というアニメに登場する主人公・山田ジョンをモチーフとしたものである。

しかし彼が着ていた制服、そしてその腰に巻かれたベルト型のCADで魔法師だと判断した男達は、即座に片方が真鍮色の指輪を嵌めた手を彼へと向け、もう片方が小百合に向けていた拳銃を彼へと向け直した。その指輪はアンテナイト製であり、1人が魔法防御を無効化する隙にもう1人が仕留めるとするのは少人数相手の魔法師への模範的な対抗策だった。

しかしいくら模範的とはいえ、それで常に結果を出せるとは限らない。

まさにアンテナイトからサイオンノイズが発せられる直前、横から突如強烈な光が男達を襲い、彼らは思わず眩しそうに手をかざしてそちらに目を向けた。こちらに向かつてくるバイクのヘッドライトが上向きになっており、ちょうど正面にいる男達を照らす形となっていた。

そして男達がそれに気を取られた隙に、先程の少年・しんのすけの振り上げた脚が男の持つ拳銃に当たり、頭上数メートルの高さまで吹っ飛んでいった。それに対して男達が何やら叫んでいたが、しんのすけがその意味を理解するより前に男達が突然悲鳴をあげて横倒しに転がった。

「しんのすけ!」

「おおっ! 達也くん——」

「そこで身を低くして待機!」

先程のバイクを運転していた達也が走行しながらしんのすけへと

呼び掛け、思わず走り寄ろうとしていた彼をその場に留まらせた。現在路上に転がったまま気絶している男達が乗ってきた車に、達也は拳銃型CADの銃口を向けたまま接近していく。

圧縮ボンベ式の水素燃料車に迂闊に攻撃をすると、大爆発を引き起こすことになる。普通は燃焼緩和の安全装置が組み込まれているものだが、取り外されていると考えて然るべきだろう。もつとも、すぐ傍に立ち並ぶ民家への被害を考えれば向こうも強引な手はそう採れないだろう、と達也は考えていた。

結論から言えば、それは一種の油断だった。

ふいに右斜め上より照射された殺意。

達也は半ば反射的に回避行動を取ったが、それでも超音速で飛来する凶弾を躲しきることはできなかった。銃弾が彼の左胸を貫き、その衝撃が彼の体を跳ね飛ばす。

「達也くんっ！」

「俺は平気だ！…しんのすけはそこを動くな！」

しかし達也は逆にその衝撃を利用して街路樹まで移動し、焦るしんのすけにそう呼び掛けた。

達也の言葉は、けっして強がりではない。確かに彼の左胸に空いていたはずの穴は、身に着けていた服も含めて跡形も無く消え去っている。それこそ、初めから銃撃など受けていなかったと考えるのが自然なほかに。

これこそが「分解魔法」と並んで達也が生まれつき持っていたもう一つの魔法、「再成魔法」の効果である。

その仕組みは、個別情報体エイドスの変更履歴を最大で24時間遡り、外的な要因により損傷を受ける前の情報をフルコピーして現在のエイドスに上書きするというものだ。通常であれば復元力によって魔法による改変から元に戻ろうとする力が働くが、この場合は上書きされた情報もそれ自身が由来であるため復元力が働かず、読み出した履歴の時点から現在までの時間が経過した状態で定着する。そのため、一般的な治癒魔法と違い魔法の定着に継続的な施術を必要としない。

もつとも死者を蘇らせるほどに絶対的なものではなく、死体に再成

魔法を掛けても傷の無い死体が出来上がるだけだ。ただし、即死の致命傷であつても肉体を再建し血液を循環させることで蘇生する可能性が完全にゼロでない限り、死者を生に呼び戻すことが出来る。

達也は自身が戦闘行動に支障を来たすダメージを受けた場合、自動的に発動して修復するようプログラミン^{オーバーアタック}グしてある。九校戦で一条将輝による過剰攻撃から一瞬で復帰したのもこれのおかげであり、普通ならば致命の重傷も彼の魔法に掛かれば一瞬の内に完治する。もつとも痛みを感じないわけではなく、その余韻で彼の額には脂汗が滲んでいる。

しかし達也はそれに気を取られること無く、狙撃手の位置を既に探り始めていた。

銃弾の角度と方向、障害物となる建物の配置から、狙撃ポイントをここから1キロほど離れた商業ビル群と当たりを付けた。その距離で人体を貫通、しかも傷が小さかったことから尖頭被甲弾が使われたと推測する。

「達也くん！ さっきの人達、どっか行っちゃうゾ！」

「放っておけ！ 今はこっちが先だ！」

路上に倒れていた2人組がフワリと浮かび上がり、先程の車に吸い込まれていくのは達也も確認していたが、今は狙撃手を何とかするのが先決と判断して敢えて無視した。

達也は情報分析の能力をフル回転し、自分を貫いた銃弾に付随する情報を読み出していく。絡みつく体液、人体の抵抗、風の影響、重力、発射時のガス圧――。次々と彼の頭に流れ込んでくる情報を精査し、それらを逆算して過去へと遡っていく。

そして銃弾が発射された時点における狙撃手の位置情報を割り出し、それを現在に当て嵌める。

――見つけた。

その狙撃手は、未だに構えを解いていなかった。2射目が来なかったのは、奴から見てコミュニターの向こう側にいたしんのすけに狙いを定めるために微調整をしている最中だったからだ。

――しんのすけが撃たれなかったのは、単なる「幸運」だった。

いや、もしかしたらそれすらも、酔乙女あいの言うところの「主人公補正」というヤツか。

達也はそんなことを考えながら、CADの引き金を引いた。

ここから1キロ離れたビルの屋上で、1人の人間が悲鳴もあげずに消滅した。

*

*

*

達也たちがその場を離れたのは、男2人を乗せた車が逃走してから10分ほど経ち、危険は去ったと判断してからのことだった。どうやらしんのすけはコミュニーターに乗っていたところを偶然通り掛かったらしく、それぞれ元々使っていた乗り物で最寄り駅まで向かった。

そして駅に到着し、小百合をプラットホームまで送った途端、彼女は瓊勾玉が入った箱を強引に達也へと押しつけ、そのまま逃げるようにキャビネットへと乗り込んでいった。随分と青い顔をしていた彼女は、しんのすけに対して自己紹介どころかお礼を言う余裕すら無かった。

仮にも「四葉」の端くれなのだから多少の荒事には耐性があってほしいものだ、と達也は心の中で思いながらそれを見送り、そしてようやくくずつと疑問に思っていたことをしんのすけにぶつけた。

「ところでしんのすけ、こんな時間になんでコミュニーターに乗ってたんだ？」

「それがさ、聞いてよ達也くん！ オラン家のHARが急に壊れちゃって、しかも今度の日曜まで修理屋さんが来てくれないんだゾ！

まだ夕飯食べてなかったのに、本当困っちゃうゾ！」

HARとはHome Automation Robotの略称であり、現代では単身者用の賃貸でも割と標準装備となっている、家庭内の電化製品を一括制御して空調管理や電気錠の開閉、更には料理や洗濯などの家事をも補助するシステムのことである。ほぼ全ての作業が自動化されたそのシステムに完全依存していたしんのすけにとって、HARの故障は急を要する非常事態と言えるだろう。

なので仕方なく夕飯の調達に外へと繰り出した、というのは達也も納得できた。しかしまさかそれによつて、あんな命の遣り取りに巻き込まれることになるうとは。

「というか、わざわざコミュニティに乗ってまで遠出しなくとも、近くにファミレスかコンビニくらいはあつたんじゃないか?」

「まあ、そんなだけどね。せっかくだし、最近会ってなかったお知り合いのお店にでも行こうかと思って。——そうだ、達也くんも一緒に来る? それとも、夕飯もう食べちゃった?」

「……いや、夕飯はまだだが、深雪が家で待つてるからな。俺は自宅に戻るとするよ」

「そう? 大丈夫? さっきの人が達也くんに渡したのつて、どう考えてもヤバイヤツでしょ? 家に帰ったところを悪い奴らに狙われるとか無い?」

確かにその可能性も無くはないが、尾行などは達也もすぐに気づくので問題は無い。

とはいえ、達也も何となくこの場で帰るのは躊躇われた。しんのすけがこれから会いに行くという「知り合い」というのが、単純に気になったからである。

「……そうだな。夕飯は食べないが、しんのすけに付き合うことにするか」

「いやくん、〝付き合う〝だなんてえ。達也くんの好意は嬉しいけど、オラは綺麗なお姉さんがタイプだから——」

「そういう意味じゃないからな」

クネクネと腰を動かすしんのすけに、達也の冷静なツツコミが入った。

そんなこんなで、2人は目的地へ向かうことにした。しんのすけは達也のバイクに乗りたがっていたが、生憎と同乗者用のヘルメットは女性用しか無かったなので、結局はしんのすけのコミュニティに達也が後ろからついていく形となった。

「それじゃ、出発おしんこ——」

「あつ、待ってくれ。深雪に帰りが遅くなると電話を入れなくては」

「……達也くんって案外、深雪ちゃん尻に敷かれてるよね」
「尻に敷かれてるわけではない。夕飯を作って待っている深雪への配慮だ」

しんのすけの指摘をキツパリと否定しながら、達也は携帯端末を取り出した。

*

*

*

「着いた着いた、ここだゾ」

第三次世界大戦を経た後でも日本有数の繁華街として賑わいを見せる、新宿。

そこにある雑居ビルの階段を昇った先にあるそこそが、しんのすけが夕飯を求めて目指していた“知り合い”の経営する店だった。

「……………」

何とも微妙な顔つきの達也が、そのドアの横にある看板に目を遣る。

どぎついピンク色のそれには“スウィングボール”と書かれていた。

第50話 「懐かしい人達がいつぱいいるゾ」

達也は学生であると同時に国防軍に籍を置く非正規の軍人、そしてFLTのエンジニアとしての顔も持っているが、そういった場での飲み会というものに参加したことは一度も無い。彼自身が未成年だからという理由もあるが、どちらにおいてもその正体が嚴重に秘匿されているために職場の仲間達と一緒にいるところを誰かに見られるわけにはいかないという事情があるからだ。

なので他の学生と比べると圧倒的に人生経験が豊富な達也であるが、居酒屋やバーといった場所に行ったことはほとんど無い。あるとすれば、『実家の仕事』でそういった場所を根城にする人物がターゲットだったときくらいだろう。

「あらあ、アタシ好みのイケメンじゃなくい！ 食べちゃいたいわあ！」

「しかもこの歳でかなり鍛えてるじゃないの〜！ ちよつと触らせなさいよー！」

「本当にしんちゃんと同じ高校生？ 落ち着きっぷりが全然違うわあ。学校ではさぞかし女の子にモテてるんじゃない？」

「ホントホント、滲み出るオーラが半端じゃないわ〜」
「……………」

ましてやニューハーフパブなど行こうと思うはずも無く、オカマ4人に囲まれて口説かれて体をベタベタ触られたことなど一度も無い。初めて訪れる未知の世界に、達也は情報処理が追いつかないのか遠い目をした無表情で動かなくなっていた。

達也が店に入った途端に押し掛けてきたのは、大柄で口周りの髭が濃いスキンヘッドのオカマ、意外とスタイルが良く女性に見えなくもないスキンヘッドのオカマ、細い目と厚ぼつたい唇をしたスキンヘッドのオカマ、そして紫の髪をラビット・スタイルに纏めたうえで巻き貝のように丸めるといふ実に個性的な髪型のオカマだった。その世界の中でもイロモノな彼ら、もとい彼女ら4人がこの店に籍を置く全コンパニオンである。

しかしその4人が従業員の全てではなく、バーカウンターにてプロレスラーのように大柄で強面の男の姿も確認できる。ちなみに彼は入口の騒ぎは完全に無視し、我関せずといった表情で手際良くフライパンを振るっている。

「あらやだ！ アタシ達ったら、自己紹介もしない内から盛り上がりちゃって！ 達也くんが困ってるじゃないの！」

「本当、年甲斐も無くはいじやったわあ！ 達也くんみたいな年頃の男の子と話す機会なんてほとんど無いものねえ！」

「えっ？ オラは？」

「しんちゃんはノーカンよ。っていうか、しんちゃんは十代に数えて良いの？」

「そんなこと言ったら、アタシらなんてどうなんのよ！」

「いやあ！ 実年齢とか考えたくないわあ！」

「えっと、とりあえず自己紹介するわね。アタシ達スキンヘッドの3人は兄弟で、名前は——」

「たけし、つよし、きよしだゾ」

「ちよつと、しんちゃん！ アタシ達の本名を言わないでよお！ 上からローズ、ラベンダー、レモンだからね！ ちゃんと憶えてよ達也くん！」

「それでアタシはジャークっていうの。よろしくね」

自己紹介ですらやかましいオカマ達にむりやり引っ張られ、達也は店の一番奥にあるボックス席へと座らされた。5人が座っても余裕がある広さにも拘わらず、達也を中心として4人が彼に体重を掛けるように寄り添っている。

ちなみに彼をここに連れて来た張本人であるしんのすけは、その隣にあるソファアー席に1人で悠々と座っていた。そしてバーカウンターにいた男・サタケの作ったナポリタンとハンバーグを勢いよく食べ進めている。どちらも本来は店のメニューには無いものであり、彼が飲むオレンジジュースも普段は酒を割るために使われるものである。

「それにしても、しんちゃんが1人で来るなんて珍しいじゃない」

「オラん家のH A Rが壊れちゃってさあ。ファミレスとかでも良かったんだけど、せっかくだから久し振りに来てみようかなって思ってた。あら、嬉しいわあ！ 月曜日ってほとんどお客さんも来なくて暇なのよお！」

「しかもこんな素敵なお友達も連れて来てくれるなんて気が利くわあ！」

ラベンダーがそう言っただ也の体をベタベタと触り始め、他の3人もそれに対抗するようにベタベタと触ったり撫で回したりしてきた。個性的な見た目や化粧によって年齢不詳な4人のオカマに詰め寄られ、普段はポーカークフェイスな達也が明らかに迷惑そうな表情を浮かべていた。

しかもこの4人、イロモノな見た目に反してやたら良い匂いがした。身嗜みには気を遣っているということなのだろうが、視覚情報とのギャップで頭がおかしくなりそうだった。

「すみません、トイレはどこでしょうか？」

「ああ、奥行つて右ね」

達也は4人の手から逃れるように立ち上がり、ローズが指差した店の奥へと歩いていった。

その途中、バーカウンターの一番奥で突っ伏して眠りこけている長髪でジャケット姿の女性を見掛けたが、すぐに彼女から視線を外してトイレへと向かっていった。

『随分と連絡が遅かったな、特尉』

「申し訳ありません、少佐。電話を掛けられる状況ではなかったもので」

トイレのドアの前で達也が電話を掛けたのは、独立魔装大隊司令部の風間少佐だった。店に流れている音楽のおかげでフロアのしんのすけ達に声が漏れることは無いだろうが、こちらに近づく者がいないか警戒しながら会話を続ける。

『街路カメラの方は心配するな、既に処理は終わっている。——それ

にしても、随分と思いい切りの良い相手だな。都心ではないとはいえ、都内でいきなりライフルをぶつ放すとは」

「油断していたことは否めませんが、恐るべき技量でした」

『魔法は使っていないかったのだな？』

「間違いありません」

達也の知覚力をもってすれば、弾道を誘導する魔法の存在に気づかないはずがない。

風間もそれをよく知っているため、それ以上追及することは無かった。

『ふむ、夜間に光学スコープのみで千メートル級の狙撃を成功させるか。それだけの腕を持つスナイパーを調達できる組織は、世界でも限られてくる。敵の正体は案外簡単に分かるかもしれないな。車の方も既に見つけているから、こちらで取り調べたうえで処分しようと思う。構わないな？』

「お手間を掛けます」

逃した相手は自分の手で、というこだわりも特に無い達也は、風間の提案にあつきり頷いた。必要な情報の遣り取りも終えたため、特に世間話をすることも無く軽い挨拶だけで電話を切った。

このまま席に戻っても良いが、トイレに行くという名目で席を立った以上トイレを使わないのは不自然か、と達也はトイレのドアノブに手を掛けた。

「……………」

ぱたん、と達也はドアを閉めた。

達也がトイレから戻ると、サタケがバーカウンターでパフエグラスにアイスやらクリームやらフルーツを盛りつけている最中だった。見た目に反してその飾り付けは華やかながら繊細で、酒の入ったサラリーマンにも好評なのだという。

「大丈夫か、ボウズ？ 顔色が悪いみてえだが」

「心配には及びません。……少し、気分が優れないだけです」

「そうか。……まあ、悲鳴をあげなかっただけでも大したモンだと思うぜ」

「……ありがとうございます」

達也へと向けるサタケの目には、明らかに憐憫の色が浮かんでいた。達也もまさか、自身の生い立ちに感謝する日が来るとは思わなかっただろう。

と、そんな達也にオカマ4人が一斉に彼へと駆け寄ってきた。皆が彼を心配するように眉を寄せているが、ローズを目の前にして先程のトイレの光景がフラッシュバックしたのか、達也は顔をしかめて仰け反っている。

しかしローズ達が心配しているのは、どうやらそれではないようだった。

「ちよつと達也くん！ しんちゃんから聞いたわよ！ 悪い奴に襲われたって本当!？」

「しかもどこかから狙撃されたっていうじゃない！ この辺も物騒っちゃや物騒だけど、そんな事件は滅多に起きないわよ!？」

「というか、達也くんは平気なの!？ 撃たれたって聞いたけど!？」

「……………」

矢継ぎ早にぶつけられる質問に事情を察した達也は、ローズ達ではなくその奥に座るしんのすけへと視線を向けた。

「しんのすけ、さっきのことを話したのか?？」

「おっ?？ 話しちや駄目だった?？」

「…………まあ良い、口止めしなかった俺にも非はあったということにしよう」

純粹な眼差しを達也に向けて尋ねてくるしんのすけに、達也は大きな溜息混じりに諦めを多分に含んだ声色で吐き捨てた。それよりも今は、撃たれたはずなのに傷1つ無い理由をどう誤魔化すかの方が重要だ。再成魔法はおいそれと他人に話せるものではない機密事項だ。

しかし達也のその心配も、オカマ3兄弟の末弟・レモンの一言によつて掻き消された。

「ひよつとしてそいつが狙ってたのって、達也くんが今持つてる勾玉

？」

「——しんのすけ、勾玉のことも話したのか？」

「ううん、それはまだ話してないゾ」

「ああ、この子ね、昔からアタシ達の中では一番『能力』が高いのよ。だから何か不思議な力でも感じ取ったんじゃない？」

だからそんなに警戒しないでちょうだい、と笑顔で話すローズだが、達也からしたら捨て置けない事実である。

「能力、というのは魔法のことですか？」

「いやいや、そんな大層なものじゃないわよ。何ていうか……霊力っていうの？ アタシとラベンダーはほとんど無いんだけど、レモンは少しだけ霊力があって、そういう不思議なオーラを持つ物とか判別できるのよ」

「つまり皆さんは、そういった力を持つ家系の出身ということですか？」

「まあ、一応ね。『たまゆら珠由良』っていう、古いことだけが自慢みたいな家よ」

口元に手を当ててオホホと笑うローズに、達也は相槌を打ちながら頭の中で古式魔法に関する記憶を掘り起こした。魔法師の家系に関してはそれなりに知識を有している彼からしても、『珠由良』という名字は聞き覚えが無かった。

「でも、もしその勾玉が達也くんの襲われた原因だとしたら、また誰かが達也くんを狙ってくるなんてこと無いかしら？」

「というか、狙撃されたとか普通に事件じゃないのよ！ 警察に相談とかした方が良くないんじゃないの!？」

「ご心配には及びません。こういうときのための伝手はありますので」

「あらっ！ 何よ、その含みのある感じ！ 達也くんったら、ミステリアスうー！」

「そういうの、アタシめっちゃタイプよお！」

達也の受け答えが琴線に触れたのか興奮するオカマ達に、達也はあからさまに顔を引き攣らせていた。普段は冷静で自分の感情を隠す

傾向のある彼にしては非常に珍しい反応である。

そしてとうとう我慢が利かなくなつたのか、オカマ達が一斉に達也へと跳び掛かろうとした、そのとき、

「あなた達、話は聞かせてもらつたわ」

凜とした声にその場の全員が振り向くと、1人の女性がこちらに近づいてくるのが見えた。

黒いタンクトップの上から緑色のフライトジャケットを羽織り、ショートパンツから少し日焼けした長い脚を惜しげも無く剥き出しにしたワイルドな出で立ちをしている。癖のあるブラウンの長髪も相まって、それはまさしく古い洋画にでも出てきそうな女性刑事の姿そのものだ。

確かトイレに行くときにバーカウンターで酔い潰れていた人か、と達也が彼女を見ながら記憶を掘り起こしていると、その女性は彼に視線を向けてニヤリと不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「その少年、アタシがここにいたことを幸運に思うことね。この日本きつての名刑事・グロリアの手に掛かれれば、善良な市民を不安に陥れるどんな凶悪犯も一網打尽よ！」

「グロリアって、あんたの本名『東松山よね』でしょうが」

「しかも今のアンタ、刑事じゃなくてただの資料室の整理係でしょうが」

「アンタなんか、犯人に狙撃されて1発でお陀仏よ」

「うっせえな、おまえら！ 寄つてたかつて何なんだよ！」

せつかく（本人としては）格好良く決めたところなのにオカマ3兄弟のせいで色々と台無しにされ、グロリアもとい東松山よねは大声で怒鳴り散らした。

しかしそんな彼女を、しんのすけが更に追い詰める。

「資料室？ また？ 今度は何やらかしたの？」

「下着泥棒相手に拳銃撃つたんだって」

「ちや、ちゃんと威嚇射撃だったからな！」

「だから何だっていうのよ、相手は丸腰だったんでしょ？ よくそれでクビにならないわね」

「というか、本当に威嚇射撃だったの？　ただ単に外したんじゃないやなくて？」

「俺に向かって撃ったときも、あんな近くにおいて1発も当たらなかつたしな」

そしてオカマ3兄弟だけでなく同僚のオカマ、そしてバーテンダーも一緒によねへの集中攻撃を始めた。登場時はあんなにドヤ顔だった彼女も、今や顔を真っ赤にしてほとんど涙目だ。

「ええっと、どちら様ですか？」

「司波達也くん、だったっけ？　アタシはグロリ——」

「東松山よね」

「……名前なんて些細なことよ。アタシは千葉県警に所属する刑事、今は訳あって資料室にいるけど、普段は千葉を拠点にして色々な所を渡り歩いているわ。しんちゃんが困ってるのを助けてあげたことなんて、一度や二度じゃないんだから」

「何言ってるの。当たらない拳銃をバンバン撃ってただけで、ほとんど足手纏いだったじゃない」

「い、妹のひまわりちゃんを助けてあげただろうが！」

都道府県制から広域行政区制にシフトして久しい現代ではあるが、未だに以前の名残は強く残っており、警察本部の管轄などはそのままであったりする。しかし以前よりは行政区内における人事交流が盛んに行われ、よねのように複数の本部を転々とする刑事も少なくない。

しかしそういった人間というのは、複数の本部からお呼びが掛かるほどに優秀か、あるいは複数の本部で押し付け合うほどに問題児か、のどちらかに偏る。周りの反応からして目の前の女性は後者のようだな、と達也はけっして顔には出さずに納得した。

普通ならばそんな人間を頼りにするはずも無く、何なら話を聞かれないよう即刻退散するのが常だ。しかし彼女が春日部の人間でないのに「サザエさん時空」に巻き込まれ、そしてしんのすけと縁浅からぬ関係にあるという点が、彼をこの場に留まらせる選択を採らせた。

「……捜査していただけるのは有難いのですが、1人で勝手に動いて大丈夫なんですか？」

「心配はいらないわ。こういうときのために、有給を貯めているんだから」

「少し休んだところで何の問題も無いわよ、資料室の整理係なんだから」

「やかましい。——それにこちとら100年も刑事やってんのよ、こういうのに詳しい情報屋の10人や20人は知ってるから、そいつらに聞けば何かしら分かるわよ」

確かにそれは頼もしいが、風間少佐の方でも色々と調査を進めていることを考えると、いくら向こうからの提案とはいえ彼女に捜査してもらう必要があるかどうかは疑問がある。

しかし達也は同時に、こう考えてもいる。

しんのすけの「主人公補正」が既に発動しており、その結果が現状であるとするならば、自分がこの事件に大きく巻き込まれることはほぼ決定事項だ。ならば被害が自分に及ばないよう距離を取ろうとするよりも、むしろ彼女達と共に事件の渦中に飛び込んでしまった方が、結果的に被害が少なくすむのではないだろうか、と。

「……分かりました、それではお願いしようかと思えます」

「了解！ お姉さんに任せなさい！」

ドンと胸を叩いて力強く答えるよねを見て、達也はどうにも不安を隠せない表情を浮かべる。

「事件を解決して、あわよくば刑事に戻してもらおうって魂胆ね」

「あの子、資料室に飛ばされる度に、しんちゃんに『何か困ってることは無いか』って泣きついてたものね」

「まあ、その度に都合良く事件に巻き込まれてるしんちゃんもしんちゃんだけど」

「いやあ、照れますなあ」

「褒めてねーぞ、ボウズ。——ほれ、デザートだ」

「うっほほーい！ これを待ってたんだゾ！」

そしてそんな2人の横で、他の面々がそんな会話を交わしていた。

*

*

*

達也が論文コンペにおける実質的な“4人目の代表”となったという事実は、翌日の朝には既に学校中に知れ渡っていた。いったい誰が流しているのか達也としても気になるところだが、遅くとも近日中には知れ渡っていることだったのだと犯人を追及することは無かった。

教室でクラスメイトと挨拶を交わし、そのついでとばかりに告げられる実質代表入りへの謝辞に返事をしつつ、達也は自席の端末を立ち上げてから既に登校していた幹比古に声を掛けた。

「おはよう幹比古、相変わらず早いな」

「おはよう、達也。最近ようやく朝の勤行ごんぎょうに加えてもらえるようになったから、本当はもう少しゆっくりしても良いんだけど……習慣かな」

“勤行”とは元々仏門修行を指す言葉だが、神仏混淆の影響か神道系である幹比古の実家でもこの言葉を使っている。幹比古は『加えてもらえるようになった』と表現したが、エリカや彼本人から聞いた話から『また参加できるようになった』の方が適切だということを達也は把握している。

着実に力を取り戻し、更にそれを向上させている友人が、達也は嬉しくもあり羨ましくもあった。そもそもスランプさえ無ければ普通に一科生でもおかしくなかったことを考えると、もしかしたら二科から一科に転籍なんてことも有り得るかもしれない。

など取り留めの無いことを考える達也だったが“本来の目的”を思い出し、まだ本来の主が登校していないのを良いことに幹比古の隣の席に腰を下ろした。幹比古も、普段はそんな行動をしない達也に若干の緊張感を滲ませている。

「ところで幹比古、少し訊きたいことがあるんだが……」

「良いけど、何だい？」

「“珠由良”、という名字に聞き覚えは無いか？」

その瞬間、幹比古は目を丸くして達也を見つめた。

「……よく知ってるね達也、現代魔法師の中ではほとんど知られてい

ない一族なのに」

「まあ、偶然にも小耳に挟んでな。どういった一族なんだ？」

「僕もそこまで詳しいわけじゃないんだけど……」

幹比古はそう前置きしてから、自身の持つ知識を口にする。

「古式魔法を伝承する一族っていうのは多かれ少なかれ秘密主義なところがあるものだけど、『珠由良』はそれに輪を掛けて謎に包まれた一族だ。その一族と深い関係にあると言われる『珠黄泉』^{たまよみ}というのもあるんだけど、どちらもルーツ自体がよく分かっていないんだよ」「ルーツ？ 術式の基となった宗派ということか？」

「そう。昔は寺社勢力が武家政権や朝廷に並ぶほどに強い権力を持っていたから、どこかの寺や神社の庇護を受けながら術式を発展させていったものなんだ。だから古式魔法の家系は、少なからずそういった場所に記録が残っている。——だけど『珠由良』も『珠黄泉』も、そういう記録が一切残っていない。おそらくどこにも属せずに独自で研究を続けてきたんだろうね」

「宗派を推測できる情報は何も無いのか？」

達也の質問に、幹比古は首を横に振った。

「無いわけではないよ。どちらの一族も、青森の『あ、それ山』を拠点にしていたらしいから——」

「ちよつと待て。『あ、それ山』？ 『恐山』ではなく？』

「今は恐山の一部になってるけど、昔はそう呼ばれてたみたいだよ。でもまあ、恐山の近くに拠点があったからか、曹洞宗の教えを彷彿とさせる部分が所々に見られたみたいだ。もつとも、恐山の菩提寺にそういう人物が在籍していた記録は存在しないけどね。——それと、」

幹比古はそこで言葉を区切ると、周りを気にするようにチラチラと目を遣った。

そして少しだけ達也へと身を乗り出し、小声でこう続けた。

「本当かどうか定かではないけど、今から数百年ほど前に2つの一族が協力して1体の『魔性』を退治したっていうんだ」

「魔性？ 妖魔みたいなものか？」

「そう。もつとも、懐疑的な意見が大多数だけどね。僕ら古式魔法師の間では、日本で本物の魔性を退治したのは900年前の安倍泰成あべのやすなりによる妖狐退治が最後だったというのが定説だ」

でも、と幹比古は1拍置いて、

「実際のところ、その魔性が出現したとされる時期にあの辺りで自然のものとは思えない異常気象が観測されている記録が残っているんだ。そしてそれを境に、『珠由良』と『珠黄泉』の一族は古式魔法の歴史から完全に姿を消している」

「異常気象というのは、魔性が発生するときによく見られるのか？」

「いや、そうだった例はほとんど無い。もし本当に魔性の仕業だとすれば、そいつは相当大きな力を持つていたことになるね。——ちなみにその異常気象だけど、実は今から100年ほど前に、しかも東京都心で同じような現象がほんの一瞬だけ観測されている。だから魔性にしろそうでないにしろ、何かしらあるんじゃないかと僕個人は思ってるんだけどね」

成程な、と達也は得心したように小さく頷いた。

「ちなみに『珠由良』や『珠黄泉』は、今でも残っているのか？」

「……いや、少なくとも僕はそんな話は聞かないな。たとえ子孫が生き残っていたとしても、術式の伝承は途絶えているんじゃないかな？」

もしくは、完全に裏の世界に隠れてしまっているとか」

「成程、よく分かった。色々教えてくれてありがとうな」

「いやいや、これくらいは何てこと無いよ。——ところでなんで、急にそんなことが気になったんだい？」

珠由良の子孫を名乗るニューハーフと出会ったので、と素直に言う気は無かった。

表向きにはそのように伝わっているんだな、という感想を抱きながら、達也は幹比古の質問を意図的に無視した。もつとも幹比古の方も素直に答えてくれるとは思ってなかったので、特に不満に感じている様子は無かった。

第51話 「達也くんのタマタマが狙われてるゾ」

論文の校内提出まで残り3日に迫ったその日の夜、達也は自宅の地下にあるワークステーションでデータ処理をしていた。このワークステーションはおおよそ一般家庭が持つものではない、どこかの企業か公営機関かと見紛うほどに立派な設備が整っており、司波兄妹（時々しんのすけ）が使うCADの整備やデータ処理はこの部屋で行われる、いわばこの家の心臓部のようなものである。

そんなワークステーションのホームサーバーが、執拗なまでに何度もアタックを受けていた。同時に複数の経路をアタックするその手口はどう見てもプロの仕業であり、そうなるよこのサーバーを最初から狙い撃ちしていると考える方が自然だ。

——何度撃退されても、まったく諦めようとしな……。狙いは論文コンペの資料か、それとも勾玉の解析データか……。

とりあえずこのアドレスはもう使えないな、と達也は溜息を吐きながら逆探知プログラムを立ち上げた。

*

*

*

次の日、昼休み。

達也は一高のカウンセリング・ルームを訪れ、部屋の主である遙に自分の悩みを相談していた。

「——ですが途中で接続を切られてしまいましたね、結局攻撃元は掴めませんでした」

しかし彼のような人間が世間一般の学生が持つ思春期特有の悩みを抱えるはずも無く、その相談内容は昨夜に起きたサーバーアタックについてだった。

そしてそれを聞く遙の表情は、実に迷惑そうに歪められていた。カウンセラーとしてあるまじき態度だが、達也との過去の遣り取りを考えれば一概に彼女だけを責めることはできないだろう。

「……それで？ 私はネットワークチェイスなんてできないわよ」

「分かっていますよ、先生の得意分野くらい。そこまで手間を取らせるつもりはありません」

「それじゃ、何？」

あからさまな疑いの目を向ける遙に、達也は白々しい愛想笑いを浮かべて、

「最近、魔法関係の秘密情報売買に手を出してる組織について、ご存知の範囲だけでも教えてもらえませんか？」

「……達也くん。私にも守秘義務があることくらい知ってるわよね？」

「無論です。何なら、報酬をお支払い致しますよ？」

「……あのね達也くん、私がお金欲しさで何でもやる女だと思ったら大間違いよ？」

「ええ、存じています」

眉一つ動かさずにじつと遙を見つめ続ける達也に、遙は大きく溜息を吐いた。

そして、観念したように口を開いた。

「……先月末から今月の初めにかけて、横浜や横須賀で相次いで密入国事件が起こってるわ」

「密入国？ やはり……」

「やはり？ 心当たりがあるの？」

「いいえ、こちらの話ですので。それで、そいつらの正体については？」

「県警と湾岸警備が合同で捜査してるんだけど、結果は芳しくないみたいね。それと時期を同じくして、マクシミアンやローゼンに部品を納入しているメーカーが相次いで盗難に遭ってるわ」

「つまり、魔法機器の製造に関わりのある企業が狙われているということですか」

「そいつらがやったって決まったわけじゃないけどね。——達也くん、論文の提出はオンラインじゃなくてメディアに入れて持ってた方が良いわよ」

最後のその言葉だけは、余計な感情が一切入っていないように思え

た。真意を確認しようとした達也だったが、遙は彼に背中を向けてデスクに座ってしまった。これ以上は話せないという意思表示であり、達也もその辺りは引き際を弁えているのでそれ以上は訊かなかった。「報酬については、先日教えてもらった口座で宜しいですか？」

「別にいいわよ、これくらい」

「そうですか、ありがとうございます」

達也は「失礼します」と軽く頭を下げて、部屋を後にした。

『成程、横浜での密入国に魔法機器メーカーの盗難騒ぎか……。確かに関連はありそうね』

「捜査の手助けになるかは分かりませんが、お伝えした方が良かったと思ひます」

『いやいや、助かったわよ達也くん。正直、手掛かりが掴めなくて困ってたところだし』

周りに人気が無いことを確認してから、達也は先日知り合った際に交換した東松山よねの番号に電話し、先程仕入れた情報を彼女に話した。もちろん、提供元である遙の名前は伏せてある。

『ありがとう、参考になったわ。早速、横浜に行つて調べてみるわ』
「大丈夫なのですか？ 1人では調べるのにも限界があるでしょう？」

『へーキへーキ。横浜にも知つてる情報屋は何人かいるし、1人の方が気楽にできるつてモンよ。——つっても、上司に有給を申請したら「連絡は逐一入れろ」とかわれちゃったんだけどね。つたく、こつちは名目上とはいえ休暇中だつてのに』

ぐちぐちと文句を零すよねに、達也は黙つてそれを聞きながら訝しげな表情を浮かべた。確かに彼女の上司の命令は、個人的な捜査のために有給を取ることが分かっていたとしても不思議だ。あるいはそんなに信用が無いのだろうか、などと失礼極まることさえ考えていた。

『とりあえず、横浜の密入国者を中心に調べてみることにするわ。ま

た何かそつちで分かったら連絡しようだい』

「お手間を掛けます」

『良いってことよ。それじゃ』

一通り愚痴を言つて満足したよねが電話を切り、達也も携帯端末をポケットにしまつて午後の授業へと向かった。

*

*

*

そして、その日の放課後。

風紀委員本部にて、達也は五十里を相手に昨夜の不正アクセスの件を報告していた。ちなみにその場にはしんのすけもいるのだが、話の内容が理解できないのか、あるいはそもそも興味が無いのか、携帯端末を取り出してゲームに熱中していた。

「えっ！ ホームサーバーにクラッカーが？」

「はい。幸いなことに、被害はありませんでしたが。——五十里先輩の方は、何事もありませんでしたか？」

「僕の方は何も無かつたけど……。その口振りからすると、やっぱりコンペ絡みなのかな？」

「狙っていたのは魔法理論に関する文書ファイルのようでしたし、定期的に考えてもその可能性が高いかと」

実際にはレリック絡みの可能性の方が高いのだが、そこまで馬鹿正直に答える必要も無い。それにコンペ絡みの可能性も充分に存在する以上、後で鈴音にもこの話をして警戒してもらう必要があるだろう。

と、そのとき、

「啓、お待たせー！」

ばんっ！ とドアが開かれ、入口から勢いよく走ってきた花音がそのまま五十里に抱きついてきた。「会いたかったよー」と体を擦り寄せる花音に、五十里は口では落ち着くように諭してはいるが満更でもなさそうで、僅かながら表情を崩しているのが分かった。

「まったく、花音は相変わらずだな」

そして達也が考えていたことと同じ台詞を吐きながら部屋に入ってきたのは、風紀委員長の任を退いてからすっかり顔を合わせる事が少なくなつた摩利だった。とはいえ、最後に会ったのが10日ほど前と考えると、果たしてその表現が適切かどうかは疑問の余地が残るが。

「おおつ、摩利ちゃん。お久しぶりブリー」

「久しぶりだな、しんちゃん。新しい風紀委員長の仕事ぶりはどうだい？」

「凄い頑張ってるゾ。摩利ちゃんよりも物を捨てるの早いし」

後半のしんのすけの言葉は、摩利と花音のどちらにも深く突き刺さつた。摩利は整理整頓をせずに本部をゴミ屋敷一步手前に追い込んだことを、花音は必要なものまで捨ててしまい風紀委員総出で捜索に当たらせてしまったことを気にしているようだ。

「それで渡辺先輩、用事は何でしょうか？」

達也が本題へと促すと、摩利は気分を変えるように大きく咳払いをした。

「論文コンペの警備について、少し相談があつてな」

「おおつ。そういうえば風紀委員がするんだっけ？ 休日手当とか出る？」

「出るわけないだろ。警備といつても、会場は魔法協会がプロを手配するから、チームメンバーの身辺警護とか資料や機器の見張り番だよ。コンペには『魔法大学関係者以外非公開』の資料も使われているからな、だから時々産学スパイの標的になることがあるんだ」

摩利の説明に、達也と五十里が揃って顔を見合わせた。つい先程まで、まさにその件で話をしていたからだ。

「……例えば、ホームサーバーをクラックするとか、ですか？」

「いやいや、そこまで本格的なものじゃない。所詮はチンピラの小遣い稼ぎレベルで、置き引きや引つたくりくらいだ。とはいえ、警戒するに越したことはないな。4年前には、会場に向かうプレゼンターが襲われて怪我をした例もある」

確かに、現代ではネット内での情報窃取は強盗よりも重い罰が科せ

られている。データの改竄に至っては殺人未遂レベルだ。そんな重いリスクを背負って、わざわざ高校生の論文を盗み出そうなんて奇特な輩はそうそう現れないだろう。

「当校でも護衛がつけられていて、毎年風紀委員と部活連執行部から選ばれている。だが具体的に誰が誰を護衛するのかについては、本人の意思が尊重されるけどな」

「もちろん、啓はあたしが守るからね!」

花音は当然とばかりにそう言って五十里に抱きつき、彼もそれを拒否しなかった。ここは決まりだろう。

「ちなみに市原には、服部と桐原がつくことになっている」

「部活連会頭が自らですか。それはまた……」

若干棒読み気味に聞こえる達也の言葉に、摩利は「あいつは市原に頭が上がらないからな」と人の悪い笑みを浮かべて答えた。

「平河については同性の方が本人も良いだろうからそれで見繕うとして、問題は達也くんだな。君は補佐とはいえほぼ代表みたいなものだから護衛を付けるのに異存は無いが、下手に護衛を付けると却って足手纏いになりかねんだろ。だから普段から風紀委員の活動と一緒にするしんちゃんが適役だと思うんだが、しんちゃんはそれで良いか?」

「やれやれ、仕方ありませんなあ」

発言はともかく本人から了承の返事が出たことで、達也の護衛役はしんのすけに決まった。もともと摩利の言う通り、その辺のチンピラが襲ってきたところで達也1人で返り討ちにできるだろう。もしかしたらしんのすけも、それを分かったうえで承したのかもしれない。

「よし、これでメンバーは決まったな。服部にはアタシから伝えておくでしょう」

「——あれっ? そういえば、なんで摩利ちゃんが動いてるの? 摩利ちゃんはまだ引退したんだから、花音ちゃんがやるものなんじゃないの?」

「へっ? いや、別に深い意味は無いというか……」

言葉を詰まらせしどろもどろになる摩利に、達也は軽く眉を上げてみせた。

過保護ですね、という彼の無言のメツセージは伝わったらしく、摩利は頬を紅く染めて決まり悪くそっぽを向いた。

部屋を退出する摩利を見送った達也たちは、コンペに使用する3Dプロジェクター用の記録フィルムの買い出しに出掛けた。いつもなら校内の売店でも売っているのだが、たまたま今日に限って切らしていたために外の商店街まで足を運ぶことにしたのである。

「わざわざ先輩達についてきてもらわなくても、自分達だけで大丈夫でしたが……」

「いや、2人に任せきりじゃ悪いよ。僕も自分の目でサンプルを見ておきたいし」

「……そうですか」

道のりを半分ほど過ぎてから達也が声を掛けたのは、言葉通りの意味以上に所構わずイチャイチャする2人(花音が一方的に迫っているだけに見えるが、それを止めようとしないうちにも責任はある)を見ていられないから、という理由が強いのだが、達也はこれ以上何も言わずに大人しく歩を進めることにした。

「啓くんと花音ちゃんって、いつも仲が良いよね」

と思った矢先、しんのすけが何の躊躇いもなく踏み込んできた。

「そりゃあ啓は格好良くて強くて頭も良くて性格も良いからね！もし許嫁じゃなかったとしても、啓以外と結婚なんて考えられないもんね！」

制服を変えるだけで“背の高い中性的な美少女”になる五十里を格好良いと表現するのは些か珍しいが、価値観は人それぞれだからと達也は口を挟むことはなかった。というより、挟みたくなかった。というより、人目も憚らず大騒ぎする彼女達とは他人のフリをしていたかった。

というわけで達也が一切の無言を貫いている内に、目的地の商店街

へと辿り着いた。

基本的に達也は目的の買い物を済ませるとさっさと帰宅するタイプだが、花音は五十里と一緒に出かけると意味も無く時間を費やすタイプだ。なので必然的に達也としんのすけは、花音達が出てくるのを店の外で待つ形となっている。

そうして5分ほど経った頃、唐突にしんのすけがキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

「どうした、しんのすけ?」

「えっ? いやあ、誰かに見られてるような気がして……」

「奇遇だな、俺もだ。——後ろ30メートルの曲がり角、分かるか? なるべく後ろは見るな」

最後の忠告にしんのすけは一瞬戸惑う素振りを見せるが、すぐに携帯端末を取り出して暇を潰すフリをしながらカメラモードで後ろの様子を確認する。

「おおっ、いたいた。女の子だゾ、制服を着てるから一高生かな?」

「断言はできないな。制服だって手に入れようと思えばできなくもないから——」

「あっ、というか千秋ちゃんじゃん」

「何っ、知ってるのか?」

「うん。1年G組の、平河千秋ちゃんだゾ。廊下で何回か話したことあるから憶えてるゾ」

同じ1年生とはいえ一科生と二科生が廊下で立ち話をするというのは、こと第一高校においては珍しい光景だ。そんな些事を気にしないしんのすけはともかく、むしろ向こうの方が戸惑ったのではないだろうか。

「……ん? 平河? ということは、代表の平河先輩の妹さんか?」

「おおっ、そういえばそうだね。なんであんな所にいるんだろ? 帰りかな?」

「……どうだろうな。あまり良い気はしないが、即座に取り締まらなければいけないほど切迫した状況でもなし」

「いやあ、まさかオラに惚れてストーカーになってしまうとは……。」

モテる男は辛いゾ」

「それは絶対に無いな」

達也の容赦無いツツコミにしんのすけが「あふん」と撃沈したところで、五十里と花音が店から出てきた。花音の機嫌がやけに良いのは、五十里と一緒に買い物できたからだろう。

「お待たせ。ごめんね、遅くなっちゃって——2人共、何かあったの？」

「あつ、啓くん。えっとね、さつきからあそこでオラ達のことを見てる子がいて——」

「何それ、スパイってこと!？」

しんのすけの言葉に割り込んで、花音が大声でそう叫んだ。

それはわざわざ犯人に対して逃げろと言っているのと同じであり、案の定こちらを盗み見ていた視線が外れて気配が遠ざかっていく。

「——あいつか!」

しかし、さすが摩利の後釜に選ばれるだけあって花音はすぐさま怪しい人物の姿に気づくと、陸上部のスプリンターとして鳴らしている脚力を存分に活かしてそいつを追い掛け始めた。

「花音・魔法は——」

「分かってる! アタシを信用しなさい!」

五十里にそう呼び掛けてスピードをグンと早めた花音は、逃げていく小柄な人物の後ろ姿を視界に捉えた。自分と同じ第一高校の制服を着た少女の姿に花音は意外感を覚えて目を見開くも、すぐに気持ち切り替えてさらにスピードを上げる。

あと10メートル、となったところで、逃走している彼女が肩越しにこちらを振り返った。ゴーグルもマスクもしていないその顔を目に焼き付けようと、花音は彼女の顔を凝視した。

その結果、花音は気づくのが遅れた。

その少女が後ろ手にカプセルを放り投げていたことを。

花音がそれに気づいて咄嗟に腕で顔を庇った次の瞬間、カプセルから強烈な閃光が迸った。まぶた越しですら眼球を痛めつけるほどの光に、逃走劇をたまたま見ていた通行人のあちこちから悲鳴があがっ

た。

花音が何とかギリギリで難を逃れた右目で見遣ると、少女はスクーターに乗って逃走を図ろうとしているところだった。逃がすものかと花音はスクーターの接している地面に向かってお得意の「地雷原」を繰り出そうとする。

しかしそれは、背後から飛んできたサイオンの銃弾によって起動式を破壊されることで未遂に終わった。

「何をするの、達也くん！」

花音はサイオンの銃弾を放った張本人・達也を睨みつけ、すぐさま少女へと視線を戻した。

しかし少女は、先程の場所から少しも動いていなかった。いや、本人はアクセルを全開にしているのだが、タイヤが空回りして前に進まないのである。花音がハツとして五十里の方を向くと、彼はほっと胸を撫で下ろしたような表情でCADを構えていた。

放出系魔法 ロード・エクステンション “伸地迷路”。

タイヤと地面の境目にある電子の分布を操作してクーロン力を斥力に偏倚させることで、擬似的に摩擦力をゼロにする魔法である。複合的にジャイロ力を増幅する魔法と併用することで、スクーターは倒れることすらできずにその場を走り続ける。

あとはゆつくり彼女を捕まえるだけ、と誰もが思った次の瞬間、
ぼんっ——！

スクーターのシートが突如爆発し、2連装のロケットエンジンが火を噴き出した。弾き飛ばされるように急発進するスクーターに、少女は体を仰け反らせながらもハンドルから手を離すことはなかった。おそらく、手に嵌めているグローブに何らかの細工を施していたのだろう。

「……何考えてるのよ、あの子」

みるみる小さくなっていく少女の後ろ姿を見送りながら、花音は呆然とした表情で呟いた。五十里も達也も、口にはしなかったものの完全に彼女に同意だった。

あれだけの時間燃焼していられることから考えると、万が一転倒し

た拍子に引火した場合、通行人を巻き込んで派手に爆死していただろう。そもそも転ばずにまっすぐ走れたこと自体奇跡のようなもので、もしもジャイロ力を増幅させる魔法を使用していなかったら、前輪の摩擦係数が限りなくゼロに近づいていなかったら、急発進の加速でハンドルを取られて転倒して大惨事である。

「お互いに運が良かった、ってことかな……」

自分が死と隣り合わせな状態だったことに気づき、五十里は自然と体を震わせていた。

と、一足早くシヨックから立ち直った花音がハツとした表情を浮かべ、

「そういえばさっきの子、一高の制服を着てた！」

「うん、オラと同じ1年の千秋ちゃんだゾ」

「でかした、しんちゃん！ こうなったら早速——」

「問い詰めたところで、『追い掛けられたから思わず逃げただけ』と白を切られますよ」

やる気満々だった花音の出鼻を挫く達也に、彼女はギロリと不機嫌そうに彼を睨みつける。

「何を言ってるの、達也くん！もしかしたらスパイとしてアタシ達に探りを入れてたのかもしれないのよ！」

「明確な証拠が無い以上、それは単なる憶測に過ぎません」

「それじゃ達也くんは、このまま見過ごせって言うの!？」

「いいえ、そうではありません。彼女の姉である平河先輩に『妹さんがこちらを監視していたように見えたので事情を窺おうとしたら、改造スクーターで危険走行をしてまで逃走した』と伝えれば良いんです。家族から注意が入れば、大抵は治まるでしょう」

「もし治まらなかつたら？」

しんのすけが尋ねる横で、花音がウンウンと力強く頷いていた。

そんな2人を同時に視界に収めながら、達也はハッキリと言いつつ。

「もし次に何か決定的な行動を取れば、そのときに問い詰めれば良い」

「……まあ、それで良いわ」

一応は納得したのか、花音は悔しそうにそう吐き捨てた。
そんな婚約者の姿に、五十里が苦笑いを浮かべていた。

* * *

東京の池袋にある古いビルの一室、表向きは雑貨貿易商ということになっているそこは、旧式のモニターがびっしりと並び、男達が食い入るようにそれを見つめていた。そのモニターの内の1つには、先程達也たちから必死に逃げていた少女の姿がある。

そして彼女を眺めていたリーダー格の男が、後ろに立つ大柄な若者に渋い表情で問い掛けた。

「あの小娘は大丈夫なのか？」

「彼女を手配したのは周チユウたいじん大人です。たとえ彼女がハマをしても、我々の存在を知られることはないかと」

「あの若造の仲介か。どこまで信用して良いか……」

男はこのアジトを用意した青年の顔を思い浮かべながら、忌々しげに呟いた。気に食わないが信用するしかない、というのが男の本音だろう。

「例のレリックの方はどうなっている？」

「フォア・リーブス・テクノロジー社から持ち出された形跡はありませんが、現所在は不明です」

「……ふん、Four Leaf葉か。忌々しい名前だ。あの四葉とは無関係だったな？」

「是シ。詳細を調べましたが、何の繋がりも出てきませんでした。この国において四葉及び八葉を意味する名称は、魔法関連企業においては好んで用いられるものですので」

「ふん、虎の威を借る、とやらか……」

如何にも子供騙しだ、とでも言いたげに男は鼻を鳴らすが、その効果はけっして否定できなかった。現に自分達は、こうして四葉の影に怯えながら余分な時間と労力を浪費させられている。男の声色には、それに対する苛立ちが確かに含まれていた。

「——司波小百合が訪れたあの家については？」

「あの家には、夫の連れ子が住んでいるそうです。名前は兄が司波達也、その妹が司波深雪」

「義理の子供の機嫌取りにでも行ったというところか。下らない」

男はそう吐き捨て、次の質問へと移り——

「その子供の家から、例の瓊勾玉の反応があった」

部屋の隅から発せられたその声に、というよりもその内容に、リーダー格の男と大柄な若者が同時にそちらへと顔を向けた。

そこには古いビルの一室には似つかわしくない高級なソファアール字型に置かれ、そこには浅黒い肌をした金髪碧眼の男が座っていた。リーダー格の男に立つ若者と同じくらいの背丈だが、筋肉量がそこまであるわけではなく細身の印象を受ける。

そんな男の目の前に置かれたテーブルには、この時代には珍しい紙印刷の地図がいっぱい広げられ、男はそこに目線を落としている。

「司波小百合がその子供にレリックを押しつけたというのか？」

「状況的に考えれば、そういうことになるだろう」

「……奴の家にハッキングは仕掛けたか？」

「是。しかし結局入り込めず、逆探知を仕掛けられそうになったので諦めました」

「……あの女、命の危険に晒され、少しでもその可能性を排除したくなかったか」

リーダー格の男も大柄な若者も、達也の家にレリックが存在していることを前提で話を進めている。どちらも先程の男になぜそれが分かるのか尋ねないし、その信憑性を疑う素振りも無い。

「その兄妹の素性は？」

「どちらも魔法大学付属第一高校の1年生です」

「成程、魔法大学付属高校か……」

男はそこで黙り込み、思案する。その時間、10秒ほど。

「魔法大学付属第一高校を活動対象に追加。必要ならば人員を割いても構わんが、慎重に取り掛かれ。それと小娘に対する支援も強化、情報漏洩が最も効果的な報復になると教えてやれ」

そこで初めて、男は後ろへと顔を向けた。

「リユウ呂上尉。現地で指揮を執れ。余所の犬が嗅ぎ回ってるようなら排除しろ」

「是」

大柄な若者にそう命令し、男は静かに立ち上がって部屋を出た。

若者は頭を下げてそれを見送り、ソファアの男は一切そちらに目を向けること無く、テーブルに広げられた地図をジッと見つめていた。

第52話 「怪しい人達がいっぱいだゾ」

今日は論文の原稿とプレゼン用データの提出日。とはいえ代表の3人も達也もギリギリまで原稿をチェックする主義ではなく、提出用データは昨日の内に既に仕上げている。遥のアドバイス通り原稿は物理メディアに記録しており、昼休みに4人で集まって最後の点検をすると、メインである鈴音が代表して甘楽の所へと持って行った。

それを終えた達也が教室に戻ると、彼の席にはエリカが座っていた。彼が戻ってきたことに気づいたエリカはすぐさま立ち上がるが、そのまま達也のテーブルの隅に腰掛けるのを見て、彼は何か言いたげに口を歪め、結局何も言わなかった。

「達也くん、美月が話したいことあるって」

「美月が？ どうした？」

達也が隣の席の美月へと視線を向けると、確かに彼女は不安そうな表情をしていた。というより、何かを怖がっているように見える。

「えっと……、視線を感じるんです」

「視線？」

「そう……。今朝からずっと、何だか物陰からこつちを見ているような気味の悪い感じで……」

「ストーカーの類か？」

「そんな！ 私をストーカーする人なんて！——何て言うか、個人の誰かを狙ってるっていうよりも、もっと大きな網を構えているような……」

美月の言葉に、達也の目がスツと細められた。

「すみません、私の勘違いかもしれないけど……」

「いや、勘違いじゃないよ。今朝から校内の精霊が不自然に騒いでいる。多分誰かが式を打っているんだろう」

自信なさげな美月をフォローするように現れた幹比古に、今まで黙っていたレオが口を開く。

「シキっていうのは、式神とかいうスピリチュアル・ビーイングか？」
「そう。僕達とは術式が違うから詳しいことは分からないけど、誰か

が探りを入れてることは間違いない」

「でもそれって、珍しくないんじゃないの？ 魔法科高校なんて、スパイにとつちや格好の標的だろうし」

「確かにそうだけど、普通なら外壁の防御魔法に阻まれたらその日は諦めるような輩ばかりだ。何度撃退されてもしつこく攻めてくるほど執拗なのは、少なくとも僕が入学してからは初めてだよ」

エリカの言葉をやんわりと、しかしハッキリと否定した幹比古に、達也が尋ねる。

「幹比古、自分達と違う術式と言ったな？ それは神道系とは違うという意味か？ それとも日本の古式魔法とは違うという意味か？」

達也のその問い掛けに、幹比古は表情を引き締めて答えた。

「……日本の術式じゃない、と思う」

「つまりそれって、外国のスパイってことか？」

「そういうことでしょうね。——まったく、『警察』は何をしているのかしら？」

目を丸くして驚くレオの隣で、エリカは溜息混じりで憤りを顕わにする。しかしそれは警察組織全体に対する憤りというよりは、誰か特定の人物に対するそれを感じられた。

ほんの僅かなその違和感に、達也と幹比古が不思議そうに首を傾げた。

*

*

*

密入国したと思われる外国人の行方を捜査する千葉寿和警部と稲垣警部補の2人は、横浜の山手の丘を歩いていた。つい先程まで横浜港埠頭近くの地域で聞き込み調査をしていたのだが、その結果が芳しくないため千葉の薦めで移動している最中である。

「警部、どこに向かっているんですか？ こんな所に来て、目撃者なんて出ると思えないんですけど」

「いや、目撃者はいるんだ。ただ喋ろうとしないだけでね。だったらここは1つ考え方を変えて、蛇の道は蛇よろしく『蛇の巣穴』に飛び

込んでみようと思つてな」

「……まさか警部、裏取引でもしようつていうんですか？ 違法捜査ですよ」

「そんなこと言つてられる状況かい？」

「……まあ、そうですよ」

渋々といった様子で頷く稲垣を連れて千葉がやって来たのは、山小屋風のデザインをした落ち着いた雰囲気喫茶店だった。全開になっている観音開きの鎧戸から、芳醇なコーヒーの香りが漂ってくるのが分かる。

「……警部、休憩が悪いとは言いませんが、今から『蛇の巣穴』に行こうつてときに——」

「いいや、ここがその『蛇の巣穴』だよ」

「えっ？ ということは、ここはもしかして——」

「いや、別にこのマスターは犯罪歴とかは無いよ。ただ普通の人より『情報網』が広いだけで」

「……我々に尻尾を掴ませないほどの大物、ということですか？」

「大物と言うより、職人だけだね」

千葉は呑気にそう言つて、『ロツテルバルト』と書かれた扉を開いて中へと入った。

ランチタイムは過ぎているが、結構客が入っていた。観光地が近くにあるからかとも思ったが、店内に賑わいは無く、静かにカップを傾ける年配者が多い。おそらく観光客よりも常連客の方が多いのだろう。

2人がカウンター席の端に座ると、千葉がブレンドを2つ注文した。

「警部、話を聞き出さなくて良いんですか？」

「まあまあ、そう焦らない。このマスターはどちらの仕事にも手を抜かない職人気質でね、ああしてコーヒーが出来るまでは何を訊いても答えちゃくれないよ」

本当にコーヒーを飲みに来ただけなのでは、と疑うほどにリラックスした雰囲気千葉に、稲垣は疑いの目を向けながらもそれに従うこ

とにした。しかし落ち着きは無く、先程からそわそわと店内を見渡し
ている。

と、2つ隣の席に飲みかけのコーヒーカップが置いてあるのを見つ
けた。カップを下げてないところを見るに中座しているだけなのだ
ろうが、せつかくのコーヒーが冷めたら台無しじゃないか、とお節介
な思考が稲垣の脳裏を過ぎる。

「……つたく、ちよつと定時報告に遅れただけで怒鳴るなっつーの」
するとそんな稲垣の思考が届いたかのように、店の奥（おそらくト
イレだろう）から戻ってきた女性がその席に着いた。黒いタンクトツ
プの上から緑色のフライトジャケットを羽織り、シヨートパンツから
少し日焼けした長い脚を惜しげも無く剥き出しにしたワイルドな出
で立ちをしている。癖のあるブラウンの長髪も相まって、それはまさ
しく古い洋画にでも出てきそうな女性刑事の姿そのものだ。

そして彼女は見た目に違わぬワイルドな動作でカップの置かれた
席にどっかりと座り、カウンターにその身を投げ出した。

「ははっ、随分と怒られたみたいだね」

「――！」

と、コーヒーを作っている最中だったマスターが親しげにその女性
に話し掛け、そんなマスターに千葉が秘かに目を見開いていた。彼の
反応を見るに、どうやらかなり珍しいことなのだろう。

しかし女性の方はそんなことを気にする素振りも無く、

「本当よー。まったく、アタシのことを資料室に押し込んで、こう
いうときだけ上司面して色々言ってくるとか……。あれは部下に嫌
われるタイプね」

「まあまあ、そう言わないであげなよ。つまりそれだけ、よねちゃんに
期待してるってことじゃないかな」

「ちよつとマスター、アタシのことはグロリアアって呼んでって言うて
るでしょ」

「すまないね、横文字は苦手なんだ」

「『ロツテルバルト』なんて店名付けておいて!？」

気の置けない関係性が垣間見えるその遣り取りは、彼女がこの店に

やって来たのが1回や2回程程度ではないことが窺えた。俺でもあんなに親しく話したこと無いのに、と内心悔しがつている千葉に対し、その異常性をよく知らない稲垣は何と無しにそれを眺めているだけである。

やがて、よね（本人曰くグロリア）と呼ばれた女性がカップに残ったコーヒーを一気に煽って立ち上がる。

「それじゃマスター、そろそろ行くわ」

「そうかい、久し振りに会えて良かった。また来てくれると嬉しいよ」
「アタシのことをグロリアって呼んでくれるようになったらまた来るわ」

「そうか、君ともここでお別れなんだね……」

「そこまでして呼びたくない!?!」

プリンプリンという擬態語でも付きそうな不機嫌さで、よねは店を後に

「待ってください!」

突然店内に響いた大声に、入口へと足を伸ばしかけていたよね、コーヒーをカップに注ごうとしていたマスター、そして驚愕で目を見開く稲垣が一斉に声のした方へと振り向いた。

席から立ち上がった千葉が、真剣な顔つきでよねへとまっすぐ視線を向けていた。

「警察省の千葉寿和といいます。刑事の方ですよね？ 少しお話をお伺いしたいのですが」

「……はあ」

突然の申し出に、よねは訳も分からず気の抜けた声を返すしか無かった。

*

*

*

校門でA組の深雪・ほのか・雫・しんのすけの4人と合流して、総勢9人となった達也たちは駅までの短い道のりを一緒に歩き始めた。達也が代表補佐に選ばれてから9人全員で一緒に帰る機会はめつき

り減っていたためか、特にレオとエリカ辺りが浮き足立っているように見える。

「それで達也さん、論文コンペの準備はもう終わったんですか？」

「一段落、といったところかな。リハーサルとか模型作りとかデモ用術式の調整とか、細々としたものはまだ残ってるけど」

「そういえば、美月のところで模型作りを手伝ってるんだっけ？」

「うん。中心となってるのは2年の先輩だから、私は何もしてないけど……」

「模型作りは五十里先輩に任せつきりだからな。自然とそうなるんだろう」

「ん？　じゃあ、達也は何してるんだ？」

「俺はデモ用術式の調整だ」

達也の答えに、雫がコテンと首を傾げる。

「普通、逆じゃない？」

「そうか？　物作りに関しては俺よりも五十里先輩の方が数段上だと思うが——」

「まあ確かに、啓先輩は『魔法使い』っていうより『錬金術師』のイメージだよねえ」

エリカの発言に真っ先に反応したのは、しんのすけだった。

「ほーほー。それじゃ達也くんは何になるかな？」

「ん？　俺か？」

「そりゃ、マッドサイエンティストでしょ」

「それはちよつと、世界観が合わない？」

「それじゃ、山奥で秘術を伝授してくれる賢者とか？」

「賢者つつーには、武闘派な気がするけどな」

「じゃあいつそのこと、世界征服を企む悪の魔法使いとか！」

「だったらもう、魔王とかで良くない？」

「達也くらいになれば、主人公と一緒に魔王を倒した後に『実は俺が真の魔王だったのだー！』って立ち塞がる真の黒幕くらいは普通にやりそうだよな」

言いたい放題な友人達を前に、達也はさすがに顔をしかめて頭に手

を遣っていた。

「おまえ達の中で、俺はどんなイメージなんだ……」

「おっ？　もしかして達也くん、アクション仮面みたいなヒーローになりたいとか？」

「……いや、俺は正義の味方なんて柄じゃないしな」

「いいえ、お兄様！　力こそが正義です！　お兄様の歩いた大地に、正義の道ができるのです！」

「うわ、さすが魔王様の妹」

「とりあえず深雪ちゃんは、魔王のために自ら進んで命を投げ出す側近役ね」

「——ちよつと、エリカにしんちゃん！」

深雪が2人を追い掛けて、皆が笑い声をあげる。そんな如何にも学生らしく賑やかに騒ぐこの時間を、達也はとても好ましく思っていた。存外俺も「普通の学生」に憧れを抱いていたのかもな、などと考えてフツと思わず笑みを零す。

だからこそ、その時間を邪魔する無粋な輩が気になって仕方がなかった。

「みんな、ちよつとここに寄ってかないか？」

そう言つて達也が指差したのは、喫茶店「アイネブリーゼ」だった。

「さんせーい！」

「達也はまた明日から忙しくなりそうだしな」

「そうだね。少しお茶でも飲んでいこうか」

エリカとレオと幹比古が積極的に賛同し、それに釣られるように他の面々も賛同を示した。

約1名を除いて。

「いや、オラは家に帰つてアクション仮面を観ないと——」

「そんなの携帯端末でも観られるでしょ。はいお一人様追加です！」

中に入った9人は、いつものようにカウンターとテーブルに分かれて座った。しんのすけ・達也・深雪・美月・ほのかの順でカウンター、残りのエリカ・レオ・幹比古・雫の4人がテーブル席となっている。つまりしんのすけのおかげで、達也が女の子を侍らせるハーレム野郎に見えることは辛うじて避けられた。

舌の肥えた達也や深雪も通うだけあって、この店のコーヒーはなかなかの物だ。なのでここにいる全員がコーヒーを注文する——かと思いきや、しんのすけだけはいつもココアやメロンソーダなど甘い物を注文する。たまに気紛れでコーヒーを飲むこともあるが、結局は角砂糖を幾つも投入することになる。

「おっ。ここってナポリタンもあるんだ、頼んでみよっかな？」

「しんちゃん、ナポリタン好きなの？」

「ちよつと前にお店で食べてから、マイブームなんだよねえ」

そう言っただけでコーヒーを作るマスターに追加注文するしんのすけに、エリカが「確かにそういうのってあるわよねえ」と呟いた。まさかそのお店というのがニューハーフパブで、しかもそこに達也も同席していたなど考えにも及ばないだろう。

そうして8人分のコーヒーと1人分のメロンソーダをお供に、達也たちは会話を再開した。内容はもちろん、論文コンペについてである。

「へえ、達也くんが代表に選ばれたのか。凄じやないか」

ナポリタンを運んできたマスターが、そのまま会話に加わった。

「今年は確か横浜だったかな？ 会場がいつも通り国際会議場なら、その近くに僕の実家があるんだよ。実家も喫茶店をやっててね、山手の丘の中程にある“ロッテルバルト”って店なんだが」

「実家も喫茶店なんですか」

「時間があったら寄ってみてよ。親父と僕のコーヒーどっちが美味しいか、忌憚のない意見を聞かせてくれると嬉しいな」

「おおっ！ マスターったら、商売上手ですなあ！」

しんのすけのからかいに、カウンターとテーブル席から笑い声が起こった。

そうやって会話も進み、達也のコーヒーが残り3分の1にまで減ったとき、エリカがクイツとコーヒーを一気飲みしてカップをソーサーに置いた。少しも音をたてていないところに、彼女の育ちの良さが滲み出ている。

そして彼女は、スツと立ち上がった。

「どうしたの、エリカちゃん?」

「ちよっとお花を摘みに」

彼女が店の奥に消えたのとほぼ同時、今度はレオがポケットに手を入れたまま立ち上がった。

「わりい、電話だ」

そのまま店の入口へと消えていくレオの背中を見送って、達也は幹比古の手元に注目した。メモ帳というより小さめのスケッチブックを広げて、何やら幾何学的な模様を描いている。

「幹比古、何してるんだ?」

「ん? いや、忘れない内にメモしておこうと思ってね」

「そうか。——あまりやり過ぎるなよ」

苦笑いを浮かべる幹比古を尻目に、達也は何事も無かったかのようにコーヒーを口につけた。

「……しんのすけは、何をやってるんだ?」

「ガムシロップを何個積み上げられるかチャレンジしてる。今30個目だゾ」

「いや、地味に凄いな」

喫茶店から数軒挟んだ所にあるその小道は、昼間でも人通りがほとんど無い。

そんな小道に、テイクアウトの飲み物を片手に建物の壁に身を預ける1人の男がいた。休息にしては真剣な顔つきであり、その視線は喫茶店の入口に固定されている。

と、そのとき、

「おじさん、あたしとイイコトしない?」

後ろから突然声を掛けられ、男は思わず飲み物を落とすようになるのを寸前で堪え、ゆっくりと後ろを振り返った。

そこにいたのは、先程店に入った高校生グループの中にいた、「美少女」と呼ぶことに何の躊躇いも必要ないポニーテールの少女だった。男は即座に脳内の記憶にアクセスし、彼女が周囲の友人にエリカと呼ばれていたことを思い出す。

入口から出た形跡は無いから店の裏口から回り込んだのか、と男は思いながら口を開いた。

「大人をからかうもんじゃない。今日はもう帰りなさい。こんな人通りの少ない場所にいたら、通り魔に襲われてしまうぞ？」

「通り魔ってのは、例えば俺みたいな奴のことか？」

背後から聞こえてきた少年の声に、男はバツと後ろを振り返った。

そこにいたのは、エリカと同じくあのグループの中にいた少年（名前は確かレオだ）だった。彼は闘志を顕わにした獰猛な笑みを浮かべて、黒い手袋を嵌めた拳を掌に打ちつけている。

ジャキンツ、と背後で音がしたので男が振り返ってみると、エリカの右手には伸縮警棒が握られていた。

「助けてくれ！ 強盗だー！」

次の瞬間、男は大声でそう叫びながらその場を逃げ出そうとした。少女相手に随分と情けないが、武器を携帯しているとすれば気の弱い男ならばそんな反応をしても仕方がないだろう。

もつとも、レオもエリカも戦闘態勢を崩すことは無かったが。

「無駄よ。ここら辺には境界が張ってあるから、誰もここには近づけないし声も届かない。あたし達の『認識』を要にして作り上げてるから、あたし達を気絶させない限りここから脱出できないよ」

「——チツ」

男が舌打ちをしたその瞬間、男はエリカとの距離を一気に詰めて拳を鋭く突き出した。普通の人間だったら反応することすらままならない攻撃を、エリカはスツと体を僅かに移動させることで難なく避けた。

そしてその隙に、レオが背後から彼に襲い掛かる。男は即座に反応

して振り返ると、彼の拳を片腕だけで受け止めた。互いの袖口が高速で擦れ、摩擦熱で一時的に高温となる。

「……あまり怪我をさせたくなかったのだが、仕方がない」

男はそう呟くと空いていた左手を握りしめてレオに向けた。レオは咄嗟に腕でガードをするも、そこからは男による一方的なラツシユとなった。1秒間に何発も繰り出される拳に、レオは反撃もままならずガードするに留まっている。

やがてそのガードも度重なる攻撃で緩くなり、とうとうガードを突き抜けた男の拳がレオの顔面を捉えた。パン！ とまるでゴム風船でも破裂したかのような音を響かせて、レオの体が後ろに吹っ飛んで建物の壁に激突した。

「レオー！」

思わず名前を叫ぶエリカに、男は振り向きざまにダガーナイフを投げつけていた。遠心力を利用した高速のナイフが、まっすぐエリカへと突っ込んでくる。

しかしそれは、エリカが内側から外側へ払った警棒によって阻まれた。男が僅かに驚いたような表情を浮かべる。

すると、

「おらあつー！」

先程吹っ飛ばしたはずのレオが、男にショルダータックルをお見舞いした。背中にモロに食らった男は、その勢いそのまま顔面を地面に激突させる。痛みで顔をしかめる男だったが、不利な状況と判断したのか即座にその場から逃走しようとして体を僅かに起こした。

そして次の瞬間、レオの蹴りが男の腹部に深々と突き刺さった。目や鼻や口から液体を垂れ流すほどの衝撃を受けた男は、そのまま地面に蹲って激しく咳き込んでいる。

「……おー、いってえ。こいつ、ただの人間じゃねえな？ 機械仕掛けってわけでもなさそうだし、ケミカル強化ってところか」

「いや、そういうあんたこそ、あんな攻撃受けといてなんでピンピンしてるのよ」

「俺の爺ちゃんは『研究所育ち』だったからな。俺も4分の1はそれ

を受け継いでるってことさ」

エリカとレオがそんな軽口を叩いていると、男が咳き込みながらも立ち上がった。

「……まったく、降参だ。そもそも私は君達の敵ではないのに、こんな所で死んでは割に合わん」

「よく言うぜ。あんたの攻撃、俺とこいつじゃなかったら死んでるぜ」
「それはお互い様だ。私じゃなかったら、あの蹴りで内臓が破裂しているぞ」

「そりゃ、強化されてるって思ってたからな」

一切悪びれる様子の無いレオに、男は深い溜息を吐いた。

「んで、俺達の敵じゃないっていうなら、あんたは何者なんだよ」

「……私の名前は、ジロー・マーシャル。いかなる国の政府機関にも所属していないし、先程も言った通り君達と敵対するつもりもない」

「何の目的で、あたし達を尾行していたの？」

「……………」

「おい、まさかこの状況でだんまりを決め込むつもりじゃねえだろうな？」

「……分かった。機密情報に抵触しない範囲で話そう。——私の仕事は『或る人物』とその周辺を監視して、何かしらの『異変』が起こったときは依頼主に報告、場合によっては対処することだ」
「或る人物？ それって誰のことだよ？」

レオの質問に、ジローは答えなかった。知らないフリをしているのではなく、それを伝えても良いか迷っているといった感じだった。

「おい、自分が今どういう状況か分かんねえのか？ もう一度蹴り飛ばしても良いんだぜ？」

「……良いだろう、教えてやる。——野原しんのすけだ」

「—————！」

ジローの口から飛び出した名前は、レオを驚愕させるのには充分すぎた。正直なところ名前が挙がるとすれば達也辺りかもしれないと考えていた彼にとって、その答えは些か不意打ちだった。

「…………おい、テキトーなこと言ってるじゃねえだろうな？」

「残念ながら、これが真実だよ。君達が普段仲良くしているあの少年に、世界中の有力者が注目している。賞賛の言葉でもって彼の活躍を歓迎する者、数奇な人生を歩む彼に無知ゆえの羨望と興味を抱く者、その名声と功績に嫉妬の炎を燃え上がらせる者、そして稀代の英雄たる彼の存在に憎悪と呪詛をぶつける者——。そのリアクションは様々だが、誰もが彼に目を離せないという点では同じことだ」

「おい、てめえ。嘘をつくにしてももっとマシな——」

「レオ、多分本当よ。少なくとも、コイツは嘘をついていない」
今にも掴み掛かりそうな雰囲気のリオに対し、エリカは冷静な声で彼の肩を掴んで止めた。レオが反論しようと彼女へと顔を向けたが、彼女があまりにも真剣な表情を浮かべていたせいでリオの勢いも萎んでいく。

その代わり、レオはジローへと向き直り、こう尋ねた。

「……仮にてめえの言ってることが本当だとして、なんでおまえの依頼主はそんなことをしてるんだ？　少なくとも、この国の関係者じゃないんだろ？」

「……やはり、君達には分からないか。世界情勢というのは、一国だけの問題ではない。遠い異国の地で起こった出来事が、連鎖的に自分達を巻き込む大事件に発展する可能性は常に存在する。——成程、確かに彼の活躍は第三者の立場からしたら実に痛快だろう。だが当事者の立場ではそうもいかない。更にそれが彼と敵対する立場だとしたら、考えただけでも恐ろしいよ」

ジローの言葉を聞くレオの目は、最後まで懐疑的なそれから抜け出すことは無かった。

別にジローとしても、彼にそれを信じさせようとも思っていないかった。

その証拠に、彼は含みのある笑みを浮かべて右腕をスツとエリカへ向けた。掌に隠れるほどに小さな拳銃が、まっすぐ彼女へと向けられている。

「君達は納得できないだろうが、私にとってはこれでも話し過ぎた方だ。そういうわけで、そろそろ帰してもらおうか」

「てめえ……」

「おっと、動かないでくれよ。それとも、君達の魔法構築スピードは私が引き金を引くよりも早いのかね？」

「——ミキ」

エリカが何も無い空間に呼び掛けた瞬間、彼らを取り巻く空間が僅かに揺れた。幹比古が張っていた結界が解かれたのだろう。

「最後に一つ、君達に助言をしておこう。彼と関わりを持つ限り、君達に平穏が訪れることは無い。つまり、君達の身の安全は保障されないものと考えてくれたまえ」

ジローは最後にそう言い残して、ジャケットの裏から取り出した缶のようなものを投げつけた。

レオとエリカが後ろへ跳び退いたのと同時、軽い爆発音を起こして缶から白い煙が吹き出した。毒を警戒して口や鼻を押さえていた2人がそれを解いたときには、ジローの姿はすでにどこかへと消え失せていた。

*

*

*

横浜・山手の喫茶店「ロツテルバルト」の駐車場。

そこに停まっている車には、ハンドルが無かった。特段それは珍しいことではなく、パームレスト型のコントローラーで操作するタイプの車では、運転席前のダッシュボードがすべてコンソールパネルに取って代わられている。

カスタム次第では家庭用の情報端末レベルの機能と使い勝手をそのまま持ち込むことも可能だが、その車には更にそこから数段飛ばしで高性能の情報端末機能がこれでもかと詰め込まれていた。そこに車の持ち主が持つ「魔法技能」が加われれば、もはや「電子戦車」と呼んでも差し支えない電子戦能力を発揮することができる。

『達也くん』のお友達、『吉田幹比古』……。吉田家の元・神童が一枚剥けたみただけで、もうちよつと街中つてことに気を配ってほしいところね」

その車の持ち主・藤林響子は、明確な意図をもってそんな独り言を口にしていた。名前は実体の象徴であり、実体を特定する鍵となる。自分と精神的に近い人間を基点として固有名詞・状態・行動を口にするので、魔法を行使する対象に焦点を合わせていく。

「古式魔法とはいえ、監視システムの記録には残るのよ」

古式魔法はあくまでも「術者の特定が現代魔法よりも難しい」というだけで、システムの記録としては魔法の痕跡はしつかりと残る。こうやってわざわざ藤林が記録の改竄に乗り出さなければ、いずれあの場所で魔法が使われたことがバレてしまう。

「そうなたっちゃったら、達也くんの周りに不必要な注目が集まっちゃうでしょ。『本命』が警戒しすぎて達也くん近づいてこなくなったら、こつちとしても困るのよ。それに『彼』の周りでいらない騒動が起こって、それによって『彼』の持つ力が変な方向に働いたらそっちの方が面倒だしね」

ただでさえ、警察との協力体制を築くために千葉寿和と接触を図ろうとしていた藤林の計画は、一足先に店へとやって来た東松山よねによつて中断しているところだ。今は彼らが店の中で会話をしている最中であり、おそらく彼らはこのまま共に事件を捜査することになるだろう。

ならばよねにも協力してもらえば良いではないか、と普通なら考えるだろうが、藤林にとつてそれは1つの「賭け」だった。

独立魔装大隊の一員としてしんのすけに関する情報を多く知る彼女は、当然ながらよねのことも頭に入れていた。それは過去の情報だけでなく、犯人逮捕時に問題を起こしたことで資料室の整理係に押しやられているという近況も含めてのことである。

なぜ彼女をそこまで気にするかというと、彼女がそうして資料室に押しやられたときに限って何かしら大きな事件が起こり、それを彼女が解決に導くことで刑事に返り咲く、ということはこの100年の間に何十回も行ってきたからである。今回の処分のおきも、彼女が所属する警察署の上層部は「今度はどんな事件が起こるのか」と戦々恐々としていたらしい。

そしてそんなときに起こる「大きな事件」というのが、他ならぬしんのすけが大きく関わっている出来事だったりするのである。

「彼」の力は、既に動き始めている。もしそこに私が介入するのなら、覚悟を決めなくちゃいけないわ。——実に面倒なことだけど」
胸に湧き上がる憂鬱感をむりやり抑えつけながら、エレクトロン・ソーサリス「電子の魔女」の異名を持つ彼女は持ち前の希少スキルを発動した。

*

*

*

レオとエリカから逃げおおせたジロー・マーシャルは、周りの人間に見られるリスクを犯してまで競走馬に匹敵するスピードで疾走していた。普通の人間がどれだけ鍛えようと絶対に出せないスピードで走る彼に、追いつくことのできる人間なんているはずが——
「……………」

そのとき、ジローが突然立ち止まった。身の安全を確保したと判断したためではない。むしろその逆、自分にぴったりと貼りついてくる気配があつたからだ。その正体をまだ確認していないが、彼はそれが自分と同じ「人間」であることを信じて疑わなかった。

相手が魔法師であれ強化人間であれ、自分を追い掛けてくる以上は敵だ。彼は基本的に1人で行動するタイプの工員であり、予定外のバックアップが派遣されるときは同士討ちを恐れて事前に連絡が来るはずだ。

ジローは警戒レベルを最大にまで引き上げて、周囲に神経を集中させた。自分を尾行している人間が堂々と姿を見せているはずがなく、間違いなく物陰に隠れてこちらの様子を伺っているだろうと判断したためである。

だが、その予想は大きく外れた。
ふいに寒気が走りジローが顔を上げると、その男は隠れる素振りも無く立っていた。

大柄で引き締まった体つきの東洋人、灰色のスーツスラックスに同色のジャケット、黒のトレーナーを着るその男は、人混みに紛

れば途端に見失うほどに凡庸でありながら、人間を捕食する猛獣と相対しているかのような錯覚をジローにもたらした。

The man-eating tiger
「人喰い虎」リュウ・カンフウ

「呂剛虎」

ジローが呟いたその名は、白兵戦で人を殺すことにかけては大亜連合随一と噂される、大亜連合特殊工作部隊のエースを示すものだった。

そしてそれと意識したときには既にジローの右手に銃が握られ、呂に狙いを定めていた。数え切れない反復訓練を積み重ねた結果、彼の肉体は彼自身が思うよりも早く的確な行動を選択できるようになっていた。

しかし引き金を引く直前、いつの間にか目の前に移動していた呂の指が、銃を握るジローの手首に突き刺さっていた。呂が手首の内側から力を込め、ジローの手から銃が零れ落ちる。

いったいいつの間に、とジローが思案するよりも前に、彼の喉に呂の右手が突き刺さった。意識が闇に塗り潰され、力を失った彼の肉体がドサリと音をたてて地面に倒れ伏した。

「——フン、こんなものか」

呆れを滲ませる声色で短く呟いた呂が、右手にこびりついた血を拭き取った紙を死体へと放り投げた。落ちる途中でハンカチ大の大きさに広がって死体に貼りつき、そして鮮血よりも赤い炎をあげた。

そうして燃え盛った炎が消えた頃には、何もかもが無くなっていった。死体も、服も、ましてや骨も残らず、つい先程までそこに人間が横たわっていた事実すら残っていなかった。

この一幕を見届けていたのは、彼を殺害した呂本人と、破壊された街路カメラだけだった。

第53話 「人の心は儘ならないゾ」

九校戦の代表チームが52人に対し、論文コンペの代表は僅かに3人。これだけ人数に違いがあると、校内での盛り上がりもさぞかし差があることだろう——と思いきや、校庭では大勢の生徒達が1ヶ所に集まって何やら作業をしていた。あちこちから大声があがるその光景は、普通の高校ならば文化祭を思わせるような賑わいである。

それもひとえに、論文コンペが九校戦と同じくらい重要な行事と見なされているためである。

理由は2つ。1つは、これが実質的に魔法科高校間での優劣を競う大会だからであり、九校戦で成績の振るわなかった高校は雪辱戦のつもりで臨むため。そしてもう1つは、代表に選ばれなかった生徒でも直接関わることでできる機会に恵まれているため。

論文の発表に『実演』が含まれている以上、張りぼてでは評価されない。魔法装置の設計、術式補助システムの製作、システムを制御するソフト、搭載するボディ、テスト要員と補助要員、安全確保のためのシールド精製要員と、その作業は多岐に渡る。

また製作作業だけでなく、それらプレゼン用の機材やデータ、さらにはプレゼンターを警備するために風紀委員や部活連の有志が駆り出されるし、少し関係が薄いところを挙げるならば、作業に携わる生徒達のために女性生徒有志による飲み物・お菓子の差し入れ部隊まで組織されている。そしてその部隊の中には、ロボット研究部が有する人型家事補助機械・3H (Humanoid Home Helper) まで導入されるといふ総力戦ぶりである。

しかし、賑わいの原因となっているのが彼らの声や作業の音だけかと言われると、必ずしもそうではなく——

「あ、いたいた！ おーい、達也くん！ しんちやーん！」

エリカが大きく手を振りながら、作業している生徒達の中心にいた達也とその傍にいるしんのすけの下へと駆けていった。ちなみに彼女についてきたレオと幹比古は少し離れた所で他人のフリをしており、美月は顔を真っ赤にして「邪魔しちや駄目だよ……」と恥ずかし

そうに注意していた。

彼女の性格をよく知る達也は作業の手を止めて苦笑いを浮かべ、しんのすけはそもそも気にする素振りも無く手を振り返している。

そしてもちろん、そんな彼女に苦言を呈する者もいるわけで、

「おいっ、千葉！ おまえ、ちよつとは空気読めよ！ 今達也が作つてんのは論文コンペのキモ、一番大事なところなんだからよう！」

「あ、さーやも見学？」

熱弁を奮う男子生徒・桐原を無視して、エリカはその隣にいる紗耶香に話し掛けていた。彼のこめかみに、くつきりと血管が刻まれる。

「おい千葉！ 無視すんな、こらー！」

「えーつと、どちら様ですか？」

「桐原だよ、桐原！ ってかおまえ、普通に何回か話してるだろ！」

「そう！ せっかく紗耶香ちゃんとお付き合いを始めたのに、手を繋ぐことすら儘ならない初心うぶな桐原くんだゾー！」

「余計なお世話だ、野原！」

「エリカは見学じゃなさそうだな、何か用か？」

桐原が本格的に怒る前に達也が話を切り出すと、エリカもそれを悟って「美月が美術部としてお手伝いに呼ばれたから、その付き添い」と簡潔に答えた。

「エリカ、面白いものが見られるからこつちにいらっしやい。しんちゃんも一緒にどうぞ？」

「面白いもの？ どれどれ？」

「ほっほーい」

と、達也たちの輪の中に入ってきた深雪の言葉に興味を惹かれ、2人はそのまま彼女に連れられてこの場を離れていった。その際に深雪は、達也たちを見遣り申し訳なきそうに頭を下げていた。

「……おまえの妹、本当にできた奴だよな」

「ええ、同感です」

腕を組んで真面目な表情で深雪を眺める桐原と達也に、紗耶香は思わず吹き出してしまった。

2人が深雪に連れられた先にあつたのは、台座と4本の腕で支えられた直径120センチほどの透明な球体だった。その装置を組み立てるスタッフだけでなく、騒ぎを聞きつけてやって来た野次馬が周りを取り囲んでおり、活気溢れる作業場の中でも特に賑わっていた。

「……でっかい電球？」

「あれはプレゼン用の常温プラズマ発生装置よ」

「常温？ 熱核融合ですよね？」

いつの間にか近くに来て来た幹比古が、未だに癖の抜けない丁寧語で深雪に問い掛けた。

そして深雪はそれに対し、自分の頭の中から記憶を引っ張り出して答える。

「熱核融合というのは反応のタイプであつて、超高温であることは必ずしも必要ではないみたい。……ごめんなさい。私も詳しいことは理解していないから、後でお兄様に訊いてみる方が良いと思うわ」

「深雪ちゃんがかんないなら、オラ達が聞いてもかんないゾ」

しんのすけの言葉にエリカが「それもそうか」と快活に笑い、深雪は否定するように苦笑いで首を横に振る。ちなみにレオは、先程から興味津々といった感じで実験装置に釘付けになっていた。

と、周りが途端に静寂に包まれた。多くの視線を集める中、五十里が鈴音に目で合図を送り、平河と達也がモニターする据置型の大型CADへ鈴音がサイオンを注ぎ込む。身につけて携行する小型CADよりも遙かに高速な術式補助機能が発動し、行程が幾重にも積み重なった複雑な魔法式が発動した。

高速の水素ガスがプラズマ化し、分離した電子が発光ガラスに衝突して光を放つ。高い電圧を掛ければ簡単に引き起こせる現象も、魔法だとエネルギー供給無しに電子を分離して電氣的引力に逆らつて電子を外側に移動させるという操作を持続的に行う必要がある。

その光景を目の当たりにした生徒達は「やった！」とか「第一段階クリアだ！」などといった歓喜の声をあげた。その声が大きかったおかげで、エリカの「やっぱ電球じゃん」という失礼な呟きが掻き消さ

れた。

「皆さん、お疲れ様でした。引き続き、よろしくお願いします」

あくまでこれは数多くある装置の1つに過ぎず、残っている作業はまだまだ沢山残っている。鈴音の声に生徒達はそれぞれの持ち場に戻り、それに釣られるように野次馬も解散していった。

しかしそんな中、しんのすけだけはその場を動かず一点だけをジッと見つめていた。

「どうした、しんのすけ?」

「達也くん、あそこに千秋ちゃんがいるゾ」

しんのすけが指差す先には、校舎の陰に体をほとんど隠しながら頭だけを出してこちらを窺う女子生徒・平河千秋の姿があった。そして達也がこちらを見ているのに気づいたのか、ギョツと目を見開いて踵を返すのが見える。

そんな彼女の手には、携帯端末のような機械が握られていた。

「——おっ、達也くん?」

「んっ、どうしたの?」

「何だ?」

いきなり走り出した達也に桐原・エリカが反応して後を追い、1拍遅れてレオ・紗耶香がそれに続く。

「あらっ、お兄様は?」

「何だか千秋ちゃんを追い掛けて行っちゃった」

深雪は目を丸くして彼らを見送り、しんのすけは不思議そうに首を傾げてその場に残り、

「——えっ? 千秋?」

そして作業中だった平河小春が、妹の名前に反応して顔を上げた。

「その女子生徒、止まれ!」

達也の鋭い声に、全速力で逃げていたその生徒が咄嗟に足を止めた。声に驚いて体を強張らせてしまったのか、逃げられないと悟って諦めたのかは分からないが、彼女の逃走劇は芝生の敷き詰められた中

庭で幕を下ろし、その間にエリカ達が2人に追いついていた。

「1年G組、平河千秋だな。今ポケットに隠したデバイスを出してもらおうか」

「……何のことですか？ 私にはさっぱり——」

「エリカ」

「オツケー。さて平河ちゃん、ボディチェックのお時間ですよー」

「……分かりましたよ。出せば良いんでしょ？」

ふてぶてしい態度を崩すこともなく、千秋は普通の人間には見覚えの無い携帯端末を取り出した。達也はそれを見て、自分の憶測が正しかったことを悟る。

しかしその正体を知る者が、彼以外にもう1人いた。

「無線式のパスワードブレーカー……」

それはパスワードを盗み出すマルウェアをハード化したもので、パスワードに限らず様々な認証システムを無効化し情報ファイルを盗み出す機械だ。もちろんそれは立派な犯罪行為であり、よってこの機械も違法な代物である。

憤りが籠もった声が、紗耶香の口から漏れた。そんな彼女に、桐原が心配そうな視線を向ける。

「目的は、論文コンペのデータか？」

「……だったら、どうするつもり？」

「外部に情報を漏らす可能性のあるおまえを、風紀委員権限で拘束する」

「——はっ。そうやって、また優越感に浸るつもり？ 私のことを馬鹿にして」

鼻で笑ってそう吐き捨てた千秋の言葉に、達也だけでなく他の面々も首をかしげた。

「どうせあんたは、自分のことを頼ってきたお姉ちゃん達のこと馬鹿にしてるんでしょ！ 一科生が二科生である自分を頼ってくるのを見て、内心では優越感に浸ってるんじゃないの!？」

「……何を言っているんだ？」

「本当はアンタ、普通に一科生になるだけの実力があるんでしょ！

なのにならと二科生で入学して、自分の方が上だと思ってる奴らのプライドを踏み躪るのが快感なのよ！ 九校戦のときだって、技術スタッフとして裏で牛耳ってるのはさぞ楽しかったでしょうね！ モノリス・コードで一条家の御曹司を公衆の面前で倒したときなんて、小躍りしたくて仕方がなかったんじゃないの！」

「……アンタ、さつきから聞いてれば——」

エリカが怒りを顕わにして千秋に詰め寄ろうとするのを、達也が腕を真横に伸ばして制した。

「そのことが、どうして論文コンペのデータ漏洩に繋がる？」

「別にデータが目的じゃなかったわ。プレゼン用のプログラムを書き換えて使えなくできれば、それで良かった」

「プレゼンを失敗させることが目的か？」

「まさか。どうせアンタなら、その程度のハプニングはカバーできちゃうんでしょ？ でも本番直前でプログラムが駄目になったら、少しは慌てるんじゃないかしら？ 何日も徹夜してダウンしちやえば、いい気味だつて思った。……私はただ、あんたの困った顔が見たかった」

今にも泣きそうな表情で声を絞り出す千秋の姿に、達也の後ろで話を聞いていた面々は、彼女の話聞いていたときの「違和感」の正体に気づいた。

達也を責めているように聞こえる彼女の言葉だが、それは全て彼の実力の高さを認めたくえでのものだった。彼の実力を信じて疑わないからこそ、達也が実力を隠して他人のプライドを踏み躪っている、という考えが成立するのである。

別に達也としては、彼女の勘違いについてはどうでもよかった。自分が彼女にどれだけ嫌われようとも、そもそも碌に話したことも無い間柄なのだから気にする必要も無い。

達也が気になるのは、はたしてその勘違いから自分の意思だけで論文コンペの妨害という行動へと繋げていったのか、という部分だった。しかも非合法のハッキングツールなんて、一介の女子高生が手に入れられるような代物ではない。

「……平河さん、あなたが持つてるそのデバイス、どこから調達したの？」

達也の隣に移動した紗耶香が、千秋に問い掛けた。

「……借りたものです」

「誰から？」

「……誰だって良いじゃないですか」

所在悪そうにあちこちに視線をさま迷わせる千秋に、紗耶香は溜息を吐いて口を開いた。

「平河さんだからこそ、教えるね。——アタシも、スパイの手先になつたことがあるの」

「——！」

紗耶香の言葉に、千秋はハツとなったように彼女へと顔を向けた。

「だからこそ忠告するわ。今すぐそいつらと縁を切りなさい。長引けば長引くほど、後で苦しむことになるわよ」

「……先輩には、関係の無いことです。放っておいてください」

「放っておけるわけじゃないでしょう！ あれから半年経ったけど、アタシは今でも体の震えが止まらなくなる時があるの！ 自分でも気づかない内に唇を噛み切ったこともあるし、掌に爪を食い込ませたときだってある！ あなたには、アタシのような想いを味わってほしくないの！」

「だから！ そんなの、先輩には関係無いじゃないですか！」

千秋のその言葉は、明確な拒絶を意味していた。しかし紗耶香もここで諦めるわけにはいかない。もしここで彼女を踏み留まらせることができなかつたら、彼女はもう二度と“こちら側”へは戻ってくることはできない。

紗耶香の意志を感じ取ったのか、桐原もエリカもレオも戦闘態勢に入った。生憎得物は無かったが、武道の心得の無い彼女を取り押さえられるくらいは訳無いだろう。

そして千秋も、相手がそう思っていることは織り込み済みだった。だからこそ彼女にとっては、ポケットに忍ばせている閃光弾が何よりの切り札になる。

一触即発。まさにそんな状況のとき、
ごすんつ！

鈍い音を響かせて頭をグーで殴られた千秋は、痛みのみならずその場に蹲ってしまった。そして緊張感がピークに達していた紗耶香達は、見事にその雰囲気も粉砕してしまったその生徒へと呆然とした表情を向ける。

その生徒とは、論文コンペ代表の1人にして千秋の姉・平河小春だった。

「お、お姉ちゃん！　なんでここに——」

「こんな大勢で妹を追い掛けてるって聞いたら、普通気になって見に行くものでしょ。そしたら何だか妹が洒落にならないことをやっているもんだから、そりゃ殴ってでも止めるのが姉の責務ってものよ」

「で、でも私は——」

「皆さん、妹がご迷惑をお掛けして、本当に申し訳ありませんでした」
「お姉ちゃん！　なんでそんな奴に頭を下げてるの！　アイツはお姉ちゃんのことを——」

ごすんつ！

千秋の主張を遮るように再び頭にげんこつを食らわせた小春は、蹲る妹をむりやり立たせると「はい、ごめんなさいしようね」と彼女の頭をむりやり下げさせた。彼女は未だに文句を言っているが、誰もそれに耳を傾けられる状況ではない。

「んで、達也くん。風紀委員に突き出すのは、少し待ってもらえないかな？　せめて私達で『家族会議』を行ってからってわけにはいかない？」

「……分かりました。それで構いません」

「うん、ありがと。それじゃ達也くん、ついでで悪いんだけど、急用ができたから今日は帰るって市原さんに伝えてくれないかな？」

達也が首を縦に振って了承すると、小春は千秋をむりやり引つ張つてこの場から離れていった。途中千秋が何度も声を荒らげて振り解こうとするが、小春がそれに堪える様子は微塵も無かった。

「……作業に戻るか」

「そうですね」

2人の背中を見送った桐原の言葉に、その場にいた全員が同意した。

達也と小春がその場を離れたことで、彼が操作していたキーボードの前に人の姿が無くなった。そのディスプレイには、論文コンペに使用する術式の原データが表示されている。

そのディスプレイの近くを、1人の男子生徒が通り掛かった。彼はディスプレイの前でふいに立ち止まると、興味深そうな表情を浮かべてそのデータに顔を近づけていく。

「関本くん、何してるの?」

突然背後から声を掛けられ、関本と呼ばれたその男子生徒は、ビクツ! と体を震わせて振り返った。

そしてそこにいたしんのすけの姿を認めると、深呼吸をするように大きく息を吐いた。鼓動が早くなった心臓を落ち着かせる目的もあるだろうが、どことなく安心して胸を撫で下ろしているようにも見えた。

「ああ、野原か。いきなり話し掛けるな、驚くだろうが。———というか、俺のことは『関本先輩』と呼べと何回も言ってるだろ」

関本はしんのすけと同じく風紀委員に所属している3年生であり、生徒会の代替わりを機に辞めた摩利や辰巳と違って未だに籍を置いたままだ。そして他の先輩のように諦めたり面白がったりすることなく、未だにしんのすけの上級生への言葉遣いを矯正しようとしている。

「んで、関本くんは何してるの?」

「……別に大したことじゃない。論文コンペの内容がどんなものか、少々気になったものでね」

「だったらリンちゃんに教えてもらったら? ———リンちゃん!」

関本くんが教えてほしいってー!」

「お、おい野原!」

離れた場所で作業をしていた鈴音に呼び掛けるしんのすけに、関本は慌てふためいていた。口を塞ごうと手を伸ばしかけるが、既に彼女はその声に反応してこちらへと顔を向けた後だった。

そして鈴音の目が関本へと向いた途端、彼女はスツと目を細めてこちらへと近づいてきた。いつも以上に感情を見せない能面のような彼女に関本は気まずそうに視線をさ迷わせるが、大きく1回咳き込んで気を取り直すと嫌みったらしい自信満々な笑みを浮かべる。

「やあ、市原」

「関本くんは、このような実用的なテーマには興味が無いと思っていました」

その表情に違わぬ冷たい声に、しかし関本は怯む様子は無い。

「基本コードのような基礎理論や術式そのものの改良を重視すべきという意見は変わっていないが、応用技術に興味が無いわけではない」
「基礎理論を軽視しているわけではないわけではあります。実用化に伴うリスクを軽減するためには、理論のための理論を研究するよりも、厳格な基礎理論の検証が必要ですから」

「検証と研究は違う。研究は創造だ。検証だけでは前進が無い」

「人間の役に立たない理論に価値はありません。実用化されてこそその理論です」

「今は役に立たないように見えても、基礎理論の研究は未来により大きな果実をもたらす」

「未来の大きな果実は、現在の小さな前進を否定する根拠にはなりません。未来とは現在の積み重ねの上にあるものです」

冷静に、しかし頑なに自分の主張を続ける2人の上級生を、しんのすけは興味深そうに観察していた。正直2人の口論の内容は何一つ理解できないが、2人が「水と油」と表現できるほどに仲が悪いことだけは理解できた。

と、そんな2人が同時にしんのすけへと顔を向けた。

「しんのすけくんはどう思いますか？ 基礎理論を追求するばかりで実用化を想定しないのは、あまりにも無責任に思えますよね？」

「野原、おまえはどう思う？ 技術革新というのは、新たな理論によつ

て形作られるものだ。基礎理論の解明無くして、新たな世界を拓くことなどできない」

「いや、2人が何を言ってるのか全然分かんないゾ」

しんのすけの答えに、2人は同時に思案顔となり、そして再び口を開く。

「しんのすけくんが好きなアクション仮面で例えるなら、関本くんの理屈は、怪人を倒すための必殺技や武器の開発をせず、効果があるかも分からない基礎トレーニングをやり続けるようなものです。怪人を倒す目的を果たすのなら、真に意味のある必殺技や武器の開発に力を入れる方が良い」

「基礎トレーニングをしつかり行うからこそ現状の問題点に気づき、それが新たな必殺技の開発に繋がることだつてある。それにたとえ必殺技や武器を考案したとしても、それを使いこなすだけの基礎能力が無ければ意味が無い」

その例えでピンと来たのか、しんのすけは「ほーほー」と納得したように頷いた。

「アクション仮面のお話でも、今みたいな悩みをテーマにした回があるゾ。アクション仮面が今よりもっと強くなりたいてって思って、色々な武器や必殺技の特訓にチャレンジするの」

「それで、結論はどうでした?」

『地道にトレーニングするのが一番の近道だ』つてアクション仮面が言ってたゾ」

「ほらな、市原! やはり基礎理論の研究こそが魔法の発展に一番――」

「んで次の週のお話が、怪人ドロドロって奴を倒すために専用の武器を開発するって内容だった」

「ブレッブレじゃないか、アクション仮面!」

地団太を踏む関本に対し、市原は表情の変化こそ乏しいがどこななく胸を張って得意気だった。

「残念でしたね、関本くん」

「う、うるさい! そもそもアクション仮面で例えようとしたのが間

違いなんだ！ だいたい何だあの作品は！ 結局はビームを撃てば
終わりじゃないか！ だったら最初から撃つとけ！」

「それは違うゾ、関本くん！ そこまでの駆け引きがあつてこそそのア
クションビームなんだゾ！ それに敵と戦うお話ばかりじゃなくて、
中には感動的なのとか現代社会の風刺とか——」

「確かに娯楽作品を通して、当時の社会情勢を垣間見ることができ
るのは興味深いですね。特にアクション仮面ほどの長期シリーズだと、
その時代によって微妙に作風も変化して——」

「しかしその結果、過去の話との矛盾を孕んでしまう可能性もある。
特に怪人スネカジリーへの処遇の変化は、考察サイトでも度々議論に
挙がるほどの——」

「……深雪、しんのすけ達は何を話してるんだ？」

「申し訳ございません、お兄様。私では何とも……」

作業場に戻ってきた達也だけでなく、他の生徒達も3人の議論を遠
巻きに眺めながら困惑の表情を浮かべていた。

もつとも、さつさと作業に戻れ、という心の中での意見は全員が一
致していた。

*

*

*

3人のアクション仮面論議で大分時間を取られたが、無事に論文コ
ンペの作業が再開した。達也は代表補佐としての作業、美月は美術部
の手伝いとしてあちこち走り回り、幹比古は用事ができたとのことで
その場を離れていった。

なのでレオとエリカは一足先に下校することとし、2人は駅までの
道中を共に歩いていた。しかしレオとしてはたまたま近くに彼女が
いるだけで一緒にいる感覚は無く、よって互いに会話が無かったとし
ても特にそれを不思議には感じていなかった。

「ねえ、アンタはどう思う？」

「……何がだ？」

むしろ、エリカからいきなり問い掛けられ驚いたくらいだ。

「しんちゃんのことよ。昨日あのスパイから聞かされて、アンタはどう思った？」

「……正直なところ、突拍子が無くていまいち信用できねえな。『稀代の英雄』だの『世界中の有力者が注目してる』だの、規模がでかすぎで現実味もありやしねえ」

「確かに、アタシも正直そんな感じよ。——でもアタシは、あのスパイの話をデタラメだと一蹴することはできない」

エリカの言葉に、レオは信じられないと言いたげに彼女を睨みつけた。

「……エリカ、おまえ、何を言ってるんだ？」

「だったらレオは、しんちゃん達のことをどこまで知ってるの？ しんちゃんの交友関係が普通じゃないことくらいは、アンタも何となく察しが付いてるでしょ」

「……仮にあの話が本当だったとして、おまえはどうするつもりなんだよ。まさかおまえ、あのスパイの忠告を真に受けて——」

「面白くない冗談ね、レオ。アタシはね、今の心地良い生活が少しでも長く続けば良いって思ってるの。それを邪魔しようって奴らがいたら迷わず剣を向けるくらいにはね」

「何だおまえ、しんのすけの用心棒にでもなるつもりか？」

冗談めかしてそう尋ねたレオに、エリカは肯定も否定もせず真剣な顔つきで口を開く。

「レオ。アンタ、モノリスの決勝でしんちゃんが一条将輝に小通連を振るおうとしたとき、何か感じなかった？」

「俺は特に何も感じなかったが……、おまえは何か感じたのか？」

「……アタシはあのととき、しんちゃんが一条将輝を殺しちゃうんじゃないかって一瞬感じたの。あのとときのしんちゃんは、それだけの気迫があつた」

有り得ない、とレオは否定できなかった。エリカがそんな質たちの悪い冗談を言う性格でないことは、この数ヶ月の付き合いでよく分かっている。

「でもアレって、しんちゃんにとっては本意じゃなかったと思うの。」

小通連の刃先がバラバラに分解したとき、しんちゃんは我に返ったような感じだったし。——そしてそんなしんちゃんを見たとき、アタシもホツとしたのよ。『良かった、彼が人殺しにならなくて』ってね」
「……………」

「しんちゃんって、たとえ相手が敵でも傷つくのを見たくないって思ってる節があるでしょ？ もしあのスパイの言うことが本当だとして、アタシが心配しているのは、そいつらのせいだしんちゃんが傷つくことだけじゃなく、しんちゃんがそいつらを傷つけて自分を責めてしまうことなの」

「…………だからしんのすけが傷つくくらいなら、自分がその代わりに敵を始末してやろうってか？ 随分と過保護じゃねえか。達也辺りが聞いたら呆れ果てて物も言えねえだろうな」

「まったくね」

レオの軽口には、エリカはフツと気の抜けた笑みを漏らした。

そしてその口元を引き結んで、彼女はレオに向き直る。

「で、アンタはどうすんの？」

簡潔な問い掛けに、レオは数秒考える素振りを見せる。

数秒で、充分だった。

「——良いぜ、乗ってやる。おまえほど過保護になる気は無いが、しんのすけの周りで何かあるってんなら、備えておくに越したことはねえしな」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるレオに、エリカも同様の笑みで返す。

しかしすぐに、エリカは表情を引き締めた。

「だったらアンタには、これから身につけるべきものがある」

「…………身につけるべきもの？」

「そう。——レオ、あんたの歩兵としての潜在能力は一級品よ。短銃やナイフを使用した接近戦闘なら、おそらく服部先輩や桐原先輩よりも素質は上だと思う。素質って点ではミキも相当だと思うけど、有視界戦闘に絞ればあんたの方が勝ってるでしょうね」

「…………な、何だ急に」

普段の態度からは考えられない高評価に、レオは喜ぶよりも訝しむよりも呆気に取られた。

とはいえ、思考停止に陥ったのはほんの数秒だったが。

「……素質はある、ってことは今の能力に問題があるってことか？」

「足りないものが正しいわね。——アンタには、人を殺すための技術が無い」

「……人を殺す、技術か」

底冷えするような感覚が、レオの体を通り過ぎた。

「そう。もしも相手と対面したとき、相手を殺さなきゃ自分が死ぬってとき、一瞬の躊躇いで逆に追い詰められるって状況が存在する。そういうときに『相手を殺すための技術』を用意するのもしないのでは、いざというときの心構えが全然違うの」

そう言つて、エリカは目を細めた。矢で射抜くかのような鋭い視線が、まっすぐレオを捉える。

「あんたに、その覚悟がある？ 自分の手を汚す、覚悟が」

「——愚問だぜ」

そしてレオは彼女の視線から一切視線を逸らすことなく、即答した。

挑戦的な、それでいて気負いの無い彼の目つきに、エリカは僅かに頷いて応えた。

「だったら、アンタにピッタリの技を教えてあげる」

「技？ 何て言うんだ？」

「その名も『秘剣・う——』」

「やっと思つてたぜ、このモヤシ野郎！」

良い感じのキメ顔で技の名前を口にしようとしていたエリカだったが、どこかから飛んできた怒鳴り声のせいで遮られてしまい、中途半端なところで固まっていた。

何とも不憚な、と思いつながらけつしてそれを表に出さないよう注意しながら、レオは声のした方へと顔を向ける。

そこでは数人の大柄な若者が1人の少年を取り囲みながら威嚇する、という何とも紋切り型な光景が繰り広げられていた。若者達の方

は夜の繁華街にでもいそうなチャラチャラした服装をしており、そして全員が警棒のような細長い得物を握り締めている。

一方取り囲まれている少年の方は、先程の「モヤシ野郎」という罵倒からも分かる通り、全体的に体の線も細く身長も男子の平均を少し下回る程度しかなく、濃いブラウンの髪はオシヤレに整えられ、その相貌は爽やかながら中性的だった。もしその肩に竹刀袋を携えていなかったら、どこぞのアイドルかと思っていたかもしれない。

そんな少年は、数人の若者に囲まれて睨みつけられて尚も平然としていた。

「やつと探し出したぜ、このモヤシ野郎。よくもふぎけた真似をしてくれたな」

「……その口振りからして、あの道場の門下生ですか？　どこの不良かと思いましたよ」

「うるせえ！　もう逃げられねえからな！　泣いて謝ったって許さねえぞー！」

「逃げていたつもりも無いですし、なんでそこまで自信満々なんですか？　こっちはあなた方の師も倒しているのですが」

「——てめえー！」

口喧嘩では敵わないと見るや、若者達が一斉に得物を振り上げて少年に襲い掛かろうと体重を移動した。

「おっと、さすがに加勢した方が良さそうだな」

「駄目よレオ。いくら彼がイケメンだからって、嫉妬して暴力に走っちゃ」

「そつちじゃねーよ！　むしろそのイケメンを助けに行くんだよ！」

「その必要は無いわよ。——もう終わってるし」

「へっ？」

エリカにツツコミを入れるために一度振り返り、そして再び前を向いたときには、少年に襲い掛かろうとしていた若者達は1人残らず地面に倒れ伏し、ピクリとも動かなくなっていた。しかしそれに反して彼らに目立った外傷は無く、何なら地面で居眠りしているようにも見える。

そしてそんな彼らを足元に見据え、少年は小さく溜息を吐いていた。

「まったく、これでは何のために剣を学んでいるのか分かったもんじゃない。——その2人も、そう思わないかい？」

レオとエリカへと顔を向けてそう尋ねる少年に、真つ先に答えたのはエリカだった。

「ええ、その通りね。——代々木コージローくん」

「やっぱり、僕を知ってたんだね。その制服に隠している伸縮性の警棒が、君の使うシーエーデーというヤツかな？」

「ええ、そうよ。見ただけで分かるなんて、さすがだね」

「これくらい、何てことないよ」

表面上はニコニコと笑みを浮かべながらの会話だが、それを間近で見ているレオは肌がヒリヒリと焼けつくような緊張感を覚えていた。

そして、その少年・代々木コージローは、ポツリとこう呟いた。

「……成程、今は『そういう流れ』なんだね、野原くん」

第54話 「強くなるために修行するゾ」

偶然（と呼ぶには些か出来すぎているが）エリカやレオと顔見知りとなったコージローは、これも何かの縁ということで2人を食事に誘ってきた。ほぼ即決でそれに応じるエリカに圧される形でレオもそれについていき、3人は第一高校の最寄り駅近くにあるファミレスに入っていった。

「でも良いの、代々木くん？ しんちゃんに会おうとしてたんじやないの？」

「不良に絡まれて足止めされて、そのうえで君達とこうして知り合っただ。『今日はそういう日じゃなかった』と思つてまた後日にするよ。滅多に会えないわけじゃないしね」

コージローの言葉は2人にはよく分からなかったが、とにかく本人が良いと言うのなら、とそれ以上は何も言わなかった。3人はタツチパネルで手早く注文を済ませると、普通の高校生らしくドリンクバーから飲み物を取つてきて軽い自己紹介から会話を始める。

エリカのように剣を学ぶ者の間では知らない者がいないほどの有名な人であるコージローは、中学を卒業して東京の体育科高校に進学したのを機に上京し、現在は学校近くの单身者用アパートで1人暮らしをしているらしい。もちろんそこでも剣道を続けていて、専門的な勉強をしながら部活でその腕を磨き、国内外の大会を荒らしに荒らしているようだ。

しかしレオにとつてもっぱらの関心事は、そこではなかった。

「にしても、まさか魔法師^{ウチ}らの間で話題沸騰中の『九十九里浜家を潰した非魔法師の少年剣士』ってのが、しんのすけの幼馴染とはなあ。世間は狭いというか何というか」

「僕としては潰したつもりは無いんだけど、やっぱりそういう見方になっちゃうんだね」

「そりやそうでしょ。面子と実績で成り立ってる『ナンバース数字付き』が、いくらあなたみたいな『イレギュラー』とはいえ非魔法師1人に正面からやられたんだから」

とはいえ、話題の大きさの割にはあまり騒動になってない、というのがエリカの正直な感想だった。九十九里浜家が門下生を御せていないことは以前から問題視されており、それによる潜在的な悪感情がここに来て明らかになったというのが彼女の分析だ。

一方コージローも魔法師界の内情に詳しいわけではないが、その辺りについては何となくだが察していた。最初彼は他の魔法師による報復も視野に入れていたのだが、せいぜいが先程のような元・門下生が“ちよっかい”を掛けてくるくらいで実に大人しいものだった。「そもそもなんで、九十九里浜家の道場を？」

「別に最初からそうするつもりで道場に行ったわけじゃないんだ。たまたまその門下生が一般の人に絡んでいたから、そんな彼らを育てる立場の道場がどんな場所か気になっただけだよ。そうして当主の方と話している内に、自然とそういつた流れになったというだけさ」
「……成程な。ってことは、一部の奴らが言ってる『魔法師の存在が気に食わなかったから』ってのは間違いだってことだな」

「もちろん、僕は魔法師に対して特別な感情は持ってないよ。——確かに、クラスメイトや教師の中には魔法をやたら敵視する人も多いから、そう思われても仕方ないのかもしれないけど」

現代における“スポーツマン”と呼ばれるような人々は、魔法への忌避感が一般的な人よりも強い傾向があると言われている。自身の純粋な身体能力のみで道を切り開く彼らのような者にとって、魔法は“人間由来のものではない異物”という見方が強いのもかもしれない。

ちなみにこの考えをより過激にしたのが“人間主義”と呼ばれる反魔法主義思想である。

と、そんな会話をしている内に3人が注文した料理がやって来た。レオはハンバーグ+唐揚げ定食（ライス大盛）と超ポリューミー、エリカはグリルチキンのサラダに雑穀米と栄養バランス重視、そしてコージローはシーザーサラダだけと高校男子にしたらかなり小食のメニューだった。

「随分と少なくねえか？ それで足りんのか？」

「今日は午後の練習を休んで来たから、そんなにお腹は減っていない

んだ。といつても、普段から食べる方じゃないんだけどね」

「スポーツばかりしてるんだから、食わないと体力保たねえと思うんだけどな」

「僕にとつてはこれが適量なんだけどね。学校の食堂は体育科高校だけあつて、やたら量が多いんだ。だから普段も食べきれない分を友人に食べてもらったりして——」

「んで、代々木くん。そろそろ本題に入らない？」

コージローの言葉を遮って突如そう切り出すエリカに、レオは戸惑いの表情を浮かべ、コージローは気分を害した様子も無く彼女を見遣る。

そしてコージローは、サラダを食べるのに使っていたフォークを静かに置いた。

「——君達を食事に誘つたのは、さっきの君達の会話が気になつたからなんだ」

「結構距離があつたはずなのに聞こえてたのかよ、地獄耳だな」

「聞こうと思つて聞いたわけじゃないんだ。——ただ君達が、野原くんの名前を交えながらやたらと物騒なことを話してたものだから、つい気になつてね」

「……やっぱり、〃剣道〃から見たらアタシ達つてそう見えるのかしら？」

含みのあるエリカの問いに、コージローはフツと笑みを漏らす。

「そりやまあ、一般的には仕方ないよ。〃剣道〃だつて元を辿れば真剣を使った戦いに備えた訓練、つまり実戦を想定したものだけど、今は心身を鍛えて己を律するための〃武道〃、あるいは競技性に特化した〃スポーツ〃の側面が強いから。ルールに則つた大会とかならまだしも、君達みたいに本物の切つた張つたを想定してるとなるとね」

「あなた自身はどう思うの？」

「別に君達は、誰でも良いから痛めつけたいとか自分の力を誇示したいとか思つてるわけじゃないんでしょ？ だったら僕から言うことは何も無いよ」

コージローはそう言うと、コップを手を取つてウーロン茶を一口飲

んだ。

そしてそれが合図だと示すように、話題を切り替える。

「ところで、西城くんだけ？ 何だか君を鍛えて技を伝授するみたいな話をしてみたいんだけど、それって僕もできるようになったりするのかな？」

話題を振られたレオだが、彼自身もそれを聞く前に例の喧嘩騒ぎに移ってしまったのでまだ詳細を知らないままだ。なので彼の視線は、自然と隣のエリカに向けられる。

そしてコージローの視線も彼女に向いたところで、エリカが口を開いた。

「これから彼に習得してもらうのは、千葉家が『薄羽蜻蛉』うすばかげろうと命名している魔法なの。だから非魔法師のあなたでは訓練しても使えない」「そっか、残念。——そしたらさ、それを見せてもらうことはできないかな？ その代わりに、僕も彼の特訓に協力するからさ」

「……そりゃ、あなたみたいな凄腕が協力してくれるっていうなら願ってもないけど、なんで会ったばかりのアタシ達にそこまで？」

当然と言える疑問をぶつけるエリカに、コージローはニコリと笑ってみせた。大抵の女子ならばそのイケメンぶりにクラツとしそうなものだが、彼女にはそれは通用せず表情に変化は微塵も無かった。

「理由は色々あるよ。君達が野原くんの友人だからというのものもあるし、将来は指導者になりたいからその予行練習も兼ねて、というものもある。——だけど一番の理由は、単純に『魔法』というものに興味を持ったからなんだ」

「興味？」

「そう。野原くんが学んでるってことで元々興味はあったんだけど、魔法を併用した剣技というのがどんなものかこの目で見てみたくなったんだ。野原くんと練習や試合をするときはこっちに合わせて魔法を使わないから、実際に見たのは九十九里浜家の道場が初めてだったし」

コージローの言葉を聞いて、レオがふとした疑問を何と無しに口にした。

「そういやコージローとしんのすけって、中学大会の全国決勝で試合したことあつたんだっけか。実際のところ、しんのすけの強さってどんなもんなんだ？俺は九校戦絡みでしか剣を使って戦うところを見たことが無いし、それだって純粋な剣技とは違うだろ？」

「そりゃアンタ、凄いつてモンじゃないわよ。その決勝戦での試合は今でも語り草になってるほどの激闘だったし、アタシだって試合の映像を何回観たか分からないわ。本当、なんでアタシみたいに武装一体型のCADをメインにしないのか不思議なくらいよ」

「彼は僕とは違って、剣道に対してそこまで思い入れが深いわけではないからね。——でもそうだな、彼の強さを分かりやすく表すとするなら……」

コージローはそう言つて思案する素振りを見せると、ニタリと何かを企む不敵な笑みを浮かべて、頬杖を突いて2人へと身を乗り出した。

彼の意図が分からず、2人は首を傾げている。
すると、

「――！」
「――！」

エリカとレオの体が、バラバラに切断された。

しかし2人は瞬時に、それが単なる錯覚だと気づいた。とはいえ体にむりやり刻み込まれた死の恐怖はそう簡単に消えるものではなく、エリカは奥歯を噛みしめながらも何とか姿勢を保ち、レオは全身から汗を吹き出しながら腕をテーブルに突いて倒れそうな体を支えている。

エリカは大きく息を吐き出しながら、2ヶ月ほど前の記憶を思い起こす。

「……今の、*“剣気”*ね？」

「そう。便利だよ、これ。街中で不良に喧嘩を売られることは時々あるんだけど、これを使えば余計な手間を掛けずに済む。——ちなみに野原くんだったら、汗1つ掻かず涼しい顔して受け流してるよ」
「成程、こりゃ凄えや」

まるで全力疾走でもしたかのようになり、レオは疲れ果てた様子で大きく息を荒らげていた。しかしそんなことをしているのは彼だけで、周りには夕食時もあったて多くの客が訪れているが、それぞれ食事したり談笑したりで変わった様子はどこにも無い。

そして彼よりも断然早く平常を取り戻したエリカは、震えていた。おそろくそれは、武者震いと表現できるものだった。

「さすがね、代々木くん！ あなたの協力もあれば想定よりも早くコイツを鍛えることができるし、アタシも純粋な剣の腕を底上げできるかもしれない！ ぜひとも協力してちょうだい！」

「こちらこそ、よろしく。あつ、でもこつちからお願いしといて何だけど、学校の授業は休めないから練習に参加できるのは放課後からってことになるけど」

「全然構わないわよ、そんなこと！ むしろ部活の時間を削ってくれることに感謝ね！」

トントントン拍子に事が決まっていっていく2人に、未だに呼吸が落ち着かないレオはこう思った。

——もしかしたら俺、死ぬかもしれない。

*

*

*

魔法科高校は土曜日にも実習込みでしつかりと授業が組まれているのだが、達也と深雪は土曜日の朝早くから八雲の寺を訪れていた。八雲から「〃遠当て〃用の練武場を改装したので試してみないか」と誘われたからであり、クラブに所属していないので学校の練習場をそれほど自由に使えない2人にとっては渡りに船だった。

練武場は本堂の地下に広がっており、正方形の部屋の壁3面と天井に無数の穴が空いていた。その穴から標的が発射されるのだが、壁4面でないのは「敵に囲まれて孤立する」というシチュエーション自体が現実的ではないからである。

内容は至ってシンプルで、穴から撃ち出された標的を狙い撃つだけである。ただし標的は一度に幾つも出現する上に、たった1秒でその

姿を隠してしまう。そして撃ち漏らした数に応じて模擬弾が発射されるという、これを設計した奴は絶対に性格悪いだろ、と悪態を吐いてしまいそうなシステムだった。

「——はいっ、止めー!」

八雲の合図と共に装置が停止し、部屋の中にいた深雪は気が抜けたのかその場に座り込んでしまった。薄手のトレーニングシャツにスパッツという珍しい姿をした彼女は今、全身から汗をびっしょりと掻き大きく息を荒らげていた。

元々深雪は点を狙うよりも面を塗り替える性質の魔法が得意であり、射撃に関しては（彼女にしては）という注釈付きで）あまり得意とは言えなかった。撃ち漏らしも所々で見られ、模擬弾自体は魔法で全てブロックしているものの、攻撃と防御を同時に行うことで足元が疎かになり転倒する、という光景が何度も見られた。

「お疲れ様、深雪」

「……あつ、お兄様。申し訳ございません」

達也からタオルを受け取り、深雪は謝罪の言葉と同時にそれで汗を拭った。そんな水草だけでも妙な色っぽさを見せる彼女だが、今ここにいるのは彼女と付き合いの長い面々ばかりなので、特に見惚れるといったことはなかった。約1名鼻の下を伸ばしている僧侶がいるが、完全無視である。

深雪に怪我が無いことを確認した達也は、言葉も無く部屋の中央へと移動した。愛用のCADを胸の前に掲げ、肘を折り曲げた待機姿勢のままじつと待つ。

そして深雪が部屋から引いた途端、何の前触れも無く装置が動き出した。3面の壁から同時に12個のボールが飛び出し、そして一瞬の内に粒と化して消えていった。次の瞬間に倍の24個が飛び出し、一切のタイムラグも無く同時に霧散していった。

原因は達也による分解魔法だが、彼はそれぞれ1回しか引き金を引いていない。そもそも彼は、どれか1つのボールに照準を合わせるといったことすらしていない。

ボールの材料である合成樹脂の粉末を避けながら、達也はカチツ、

カチツと引き金を引いていく。その頻度が徐々に狭まっていき、もはや部屋にボールが飛んでいない時間が無いくらいに次々とボールが撃ち込まれていくのだが、撃ち漏らしのペナルティである模擬弾が発射されることはなく、床に合成樹脂の粉末を雪のように薄く降り積もらせていくだけだった。

「――止めっ」

深雪のときよりも悔しさの滲んだ声で八雲がそう言うのと、装置は途端に静まり返った。ほう、と息を吐く達也に向かって、満面の笑みを浮かべた深雪が飛びつくような勢いで走り寄る。

「お兄様、素晴らしいです！ いつの間に同時照準を36にまで増やされたのですか！」

「今回は相手が撃ち返すのを待っている設定だったからね、待った無しの実戦なら今でも24がせいぜいだよ」

「やれやれ、これでも完全クリアか……。少し難度を抑えすぎたかな？」

「いえ、これでも結構ギリギリでしたよ。あんな嫌らしいタイミングで攻めてくるアルゴリズムは、もしかして風間少佐が組んだものですか？」

「制御式は風間くんから貰ったものだけど、作ったのは真田くんだよ？」

「ああ、成程……」

独立魔装大隊の中でもトップクラスに腹黒い素顔を人当たりの良い笑顔の裏に隠す技術士官の名前に、達也は納得したような表情を見せた。

使い心地を一通り確かめたところで、達也と深雪は八雲の私的な居住空間である庫裏くらりの縁側に案内された。練習後に八雲が茶を振る舞うことはよくあるが、そのときは庫裏ではなく本堂が常だ。いつもと違う彼の行動に、達也の表情も自然と緊張を帯びる。

「さて、学校もあることだし手短かにいこう」

3人分の湯呑みを持ってきた八雲が、達也の予感を裏付けるようにこう話を切り出した。

「達也くん、珍しい物を手に入れたようだね」

「……預かり物ですが」

八雲の言う「珍しい物」が瓊勾玉のレリックであることは明白であり、達也は特に白を切ることもなくあっさりとしてそれを認めた。この程度の不意打ちでいちいち動揺していたら、八雲と付き合っていくことなどできないのである。

「だったら、なるべく早く返した方が良い。それができないのなら、少なくとも自宅ではない然るべき所へ移すべきだ」

予想以上に真剣味を帯びた八雲の声色に、達也は意外感と共に緊張感を呼び起こされた。

「狙われているとは気づきませんでした。普段以上に気を配っていたはずなのですが」

「慎重に立ち回っているからね。それになかなかの手練れだ」

「何者か……と聞いても無駄なのでしょうね」

八雲の口振りは相手の並々ならぬ技量を警告すると共に、自分がその尻尾を掴んでいると仄めかすものだった。しかしこういうとき、八雲は思わせぶりなヒントを出すだけで正体そのものを素直に教えることはまず無い。なので達也の半ば諦めた口調での問い掛けも無理はなかった。

だがここで、彼の常とは違う言動が再び行われた。

「かつて野原しんのすけと対立した者が、今回の敵の中に潜んでいるようだよ」

「——何ですって?」

八雲が素直に情報を教えたこと、そしてその内容そのものに対して、達也は二重の意味で驚愕を覚えた。それを彼の傍で聞いていた深雪も、手を口元に当てて驚きを露わにしている。

「『珠黄泉』の一族の子孫である、強力な超能力者。君のことだ、それだけ聞けば充分だろう?」

「成程、それは厄介そうですね」

「それとは別に、忠告をもう一つ。敵を前にしたら、方位を見失わないよう気をつけるんだよ」

「方位、ですか？」

「おっと、サービスはここまで。それ以上は高くつくよ」

八雲の邪な笑みを前に、達也はこれ以上の詮索を止めた。

*

*

*

論文コンペまで、残り8日。校内は稀に見る喧騒に満ちており、プレゼンのバックアップは「学校一丸」という表現が誇張でない体制にまでなっている。

発表に使う実験装置は一通り完成しているが、より効果的な演出と確実な動作を目指す技術系スタッフのこだわりは留まるところを知らず、再三に渡る駄目出しと見直し・改良・調整が続けられていた。九校戦では出番の無かったインドア派の生徒、さらには二科生の中にも、舞台上の演出をプランニングしたり客席の効果的な応援を指導したりといった役目が与えられていた。

また女性生徒を中心として結成された炊き出し隊も、ここに来てフル稼働の様相を呈してきた。論文コンペに汗を流す生徒のため、お弁当作りにあちこち走り回っている。そしてその中には、美月の姿もあった。

さらに体育会系の生徒も、論文コンペに向けて準備に余念が無かった。このような文化系のイベントで彼らの出番があるのか、と疑問に思うかもしれないが、おそらく彼らが一番汗を流していると言っても良いだろう。

現在彼らがいるのは、学校に隣接された丘を改造した野外演習場。魔法科高校は軍や警察の予備校ではないのだが、そちらの方面に進む生徒も多いため、このような施設が屋内屋外問わず充実している。

その人工林で息を潜めるのは、幹比古だった。訓練相手である上級生を窺い見ると、彼は木々が疎らになってできている空き地にその姿を晒していた。隠れる様子も無い堂々とした佇まいに、思わず幹比古の心臓も脈を早めていく。

その人物とは、十文字克人だった。彼は今回の論文コンペにて、九

校が合同で組織する会場警備隊の総隊長を務めることになっている。他校の代表と会合を持つ傍ら、こうして自ら訓練の矢面に立つことで同じく警備部隊に抜擢された生徒の士気を高めていくのである。

幹比古が彼の練習相手に選ばれたのは、九校戦での活躍が認められたからである。しかし彼1人で克人の相手をしているわけではなく、幹比古の他にも9人の生徒が彼の練習相手を務めている。つまり現在は1対10の模擬戦闘を行っており、幹比古はその10人の内の1人だった。

しかし最初は10人だった彼らも現在は3人にまで減っており、何回か遠距離攻撃を仕掛けただけで直接戦闘は1度も無いはずの幹比古は背中にはびっしょりと冷や汗を掻き、克人から放たれるプレッシャーに押し潰されそうになっていた。

——早まったかもしれない……。

最初に練習相手の話が来たとき、幹比古は二つ返事で了承した。十文字家の次期当主と手合わせできるなんてそうそう叶うものではないし、現代魔法との戦い方を貪欲に学び取ろうという意志でここをやって来た。

しかし幹比古は先程から何回も、このまま殺されてしまうんじゃないか、という思念に駆られていた。倒された7人も気絶しているだけで大した怪我もしていないことから、克人がちゃんと手加減していることがよく分かる。それが分かっているなあ、彼は本能から湧き上がってくる恐怖で今にも体が動いてしまいそうだった。知らず知らず呼吸が可聴域にまで大きくなり、幹比古は慌てて自分の口を押さえ

る。室内ですら1メートルも離れば聞こえなくなるほどの大きさでしかなかったはずなのに、克人の体は幹比古の隠れている木に正確に向けられた。そのままゆつくりと歩を進める克人に、幹比古は止まっていた呼吸を無理矢理再開して、触覚と聴覚に神経を集中させる。居場所がバレていると分かっているのに、魔法的な探知も顔を覗かせることもできなかつた。というより、する勇気が無かつた。

耳を澄ませて空気の流れを掴み、地面につけた膝から僅かな振動を

感じ取り、目で気流の変化がもたらす僅かな光の屈折を見分け、鼻と舌で空気中の微量な化学物質の比率の変化を分析する。1つ1つは曖昧なデータであるそれを総動員することで、直接確認することなく克人の現在位置を割り出していく。

そして克人が或る地点に到達した瞬間、幹比古は仕掛けていた魔法を発動させた。地中を介した実体の無い導火線にサイオンを流し、地面に仕掛けた条件発動型魔法がそれをトリガーに効果を発動する。

「――！」

克人を取り囲むように正方形に配置された土柱が噴き上がって姿を現し、克人の立つ地面がすり鉢状に陥没する。『土遁陥穽』どとんかんせいと呼ばれる古式魔法であり、敵に土砂を浴びせて穴に落とすことで目眩ましと足止めを行い、逃走の時間を確保する術式だ。レベルの低い相手ならこれだけで充分捕らえられるが、克人がこれで捕まるような人物ではないことは幹比古が一番よく分かっていた。

発動した魔法の成果を確かめる暇も惜しんで幹比古が逃げた数秒後、土煙が晴れたその場所には、円形に押し潰された地面と円環状に降り積もった土砂と、土埃1つついていない克人の姿があった。

彼の防壁魔法は幹比古の魔法を完璧に防いだものの、視界を遮られてまふまと逃げられてしまったのもまた事実。

克人はニヤリと笑みを浮かべて、防壁魔法の反発力で僅かに浮き上がっていた体を地面に下ろし、再びゆっくりと足を踏み出した。

「達也くんとはまた違った種類の巧さがあるわね。今年の1年生は面白い子が多いわ」

「どちらかというと、二科生の方に見所のある奴が多い気がするが」「それは誤解よ摩利、総合力で勝ってるのはやっぱり一科生だもの。個人的な能力を持つ子が多いから、そういう印象を受けるだけ」

事故防止と事故発生時の救助活動を目的としたモニター要員として練習を見守っていた真由美と摩利が、先程の幹比古の魔法を見てそんな会話を交わしていた。

彼が一科生・二科生の枠を超えて優秀であることは九校戦でも確認しているが、実際にこうして戦っているところを見ると、特異な魔法技能以上に運用技術の高さが際立っているのが分かる。そもそも1年生ながらここまで生き残っているだけで、彼の技量は賞賛に値する。

「間違いないのは、コイツが他の1年生と比べても使えるということだ。類は友を呼ぶ、といったヤツかな？」

「九校戦を通して急激に伸びた、って先生方も仰ってたわね。こういう良い影響はどんどん広がってほしいところだけど……」

「達也くんって、先頭に立って誰かを引っ張るタイプじゃありませんからなあ」

上級生2人の会話に平然と割って入り、しかもモニターを眺めながらチョコビを食べるといふ、まるでテレビでスポーツ中継でも観ているかのようなしんのすけに、真由美も摩利も彼に対して呆れの視線を向けずにはいられなかった。

「そう言うしんちゃんは、皆みたいに練習に参加したりしないの？」

「ええっ？ 嫌だゾ、めんどくさくさい」

「面倒臭いって……。しんちゃんだってたまには思いつきり体を動かさなきゃ、せつかくの実力が鈍っちゃうだろ」

「んもう、そもそもなんで皆そんなに張り切ってるの？ 単なる高校生の発表会でしょ？ そんな大事にはならないって」

確かに普通に考えればしんのすけの言う通りなのだが、なぜだか真由美はそれを聞いて余計に不安な気持ちになった。

「何かあったときのために備えておくのが、我々魔法師のすべきことだ。——というわけで、しんちゃんにはアタシの練習に付き合ってもらうぞで」

「ええっ!?! いくら先輩だからってオーボードゾ！」

「アタシも剣士の端くれとして、しんちゃんみたいな実力者と一度やり合ってみたいんだよ。後でチョコビでも何でも買ってやるから付き合え、な？」

「もう、仕方ないですなあ」

「頑張つてね、2人共」

真由美はヒラヒラと手を振つて2人を見送ると、再びモニターへと視線を戻した。

「あら吉田くん、十文字くんに叩きのめされてるわ」

*

*

*

池袋の雑居ビルでも横浜の中華街でもない品川の料亭の個室にて、四十代の男性と二十代中頃の若者のコンビが待っていると、二十代過ぎの青年が頭を下げて入室してきた。

「申し訳ごいけません。お待たせしてしまいましたか？」

青年は恐縮した体を見せるがその姿に卑屈さは感じられず、柔らかい物腰と整った容姿のおかげで貴族然とした雰囲気漂っている。

「いえ、我々も先程来たところです」

それに対して、最年長の男性は言葉こそ丁寧だったが態度が尊大で素っ気なかった。傍らに座る若者は何も言わず、ただ黙つて顔を俯かせている。

「さつそくですが周チユウ先生、例の少女がしくじつたそうですな」

「陳閣下のご懸念は理解しているつもりです。ですが彼女にはこちらチエンらの素性は一切明かしておりませんので、情報漏洩の心配は無いと思われれます」

「ほう。それでよく、協力者に仕立て上げましたな」

「あの年頃は純粹で情熱的ですから。多くを知るよりも、多くを語ることが重要だと考えているのですよ」

傍目には男性——陳の質問に答えていないように聞こえる青年——周の回答だが、陳はそれだけで大体のことを理解したようだ。

「周先生がそう言うのなら、間違いは無いでしょう。しかし我々としては、〴〵が〴〵のことがないようにはしてもらいたいですな」

「心得ております。近日中に、彼女の様子を見に行くことに致しますよう」

周がそう言つて深く一礼するのを満足げに眺めていた陳は、テーブル

ルの呼び鈴を振った。このような高級料理店の場合、雰囲気重視のためアナログのシステムを採用している店は根強く残っている。

そして陳の隣に座っていた若者——呂剛リュウ・カンフウ虎は、周へ鋭い眼差しを向けていた。陳はそれに気づいていながら注意する様子は無く、周もその微笑みを崩すことなく平然と座っていた。

第55話 「迫り来る魔の手……だゾ」

日曜日はさすがに魔法科高校も休みなのだが、論文コンペの代表補佐に選ばれている達也は、深雪を引き連れていつもと同じ時間に家を出た。しかしその姿は制服ではなくライダースーツとフルフェイスのヘルメット、交通手段も公共交通機関ではなく達也の愛車である大型二輪、そして極めつけに2人を乗せたバイクは学校とはまるで別の方向へと走っていた。

2人の目的地は、FLTの開発第三課。達也がトーラス・シルバーの片割れとして働いている部署であり、達也が預かったレリックの解析作業を行う場でもある。よって現物であるレリックをそこへ届ける必要があるのだが、再度の襲撃を警戒して、民間の流通業者や公共交通機関を使わず直接運んでいるのである。

「……尾行がついてるな」
「えっ?」

運転する達也の体に腕を回してピッタリ体をくっつけていた(安全のためであり、断じて彼の体温を全身で感じるためではない。断じて)深雪が、ふいに呟いた彼の言葉に疑問の声をあげた。キョロキョロと辺りを見渡すが、それらしい人物は見当たらない。

「車ですか? それともバイク?」
「カラスだ」
「はい?」

達也の答えに深雪は目を見開き、しかしすぐさまその真意に気づいた。

「……使い魔、ですか?」
「ああ。しかも“化成体”だ」

化成体とは、霊的エネルギーを仮に実体化させたものである。現代魔法で作るならば、サイオンの塊を土台に光の反射をコントロールする幻影魔法で姿を作り、物質に干渉する加重・加速・移動魔法で肉体を持つているように見せかけることで完成する。

とはいえ、実際にこの術式を使うのは古式魔法に限定される。それ

に日本で古式魔法を使う流派は、すでに実体性を有しない術式にシフトしている。

つまり、

「日本の魔法師ではありませんね。一体どこでしょうか？」

「さあ、正体までは分からないな。しかしこのままラボまで尾行されるのは宜しくない」

達也はそう言うと、片手をハンドルから離して自身の腰に回されている深雪の手に触れた。一瞬ピクリと彼女の手が反応するが、達也の手を通してサイオンの信号が送られてきたことでその動きも止まった。

「深雪、座標はここだ。——撃ち落とせ」

「かしこまりました」

顔も視線も正面に固定したまま達也が深雪に命じると、深雪は喜色の籠もった声で返事をした。

そして次の瞬間、達也の言われた通りの場所にいたカラスが一瞬の内に凍りつき、術式を維持できなくなつたことで仮初めの肉体を構成していたサイオンが散り散りに拡散していった。

「見事」

たった一言でしかない達也の言葉に、深雪はニツコリと笑って応えた。

その様子は主人の命令に忠実な部下というよりは、親に褒められて嬉しい子供のようだった。

「ぐずぐず悩む前に、さっさと回線を切れ！ バックアップだあ？
んなもん、できるところだけで充分だろうが！」

「10番台、切断完了しました！ 再接続します！」

「馬鹿野郎！ 侵入されてるときに再接続するな！」

「侵入経路、確定しました！」

「つしやあ！ カウンタープログラムをお見舞いしてやれ！」

達也と深雪が開発第三課のラボに到着したとき、そこは今までにな

い喧騒に包まれていた。主任である牛山の指示の下、研究員達があらこちらへと忙しなく走り回っていた。

「お兄様、これは……」
「……………」

深雪の心配そうな声に応えることなく達也が部屋の奥へと進むと、牛山が「御曹司！」と彼らの存在に気づいて駆け寄ってきた。彼らがここに来てから声を掛けられるまで、大体1分。普段なら10秒以上待たされることなど無いことから、今がいかに緊急事態かがよく分かる。

「すみません、いらしているのに気づきませんで……。——おい！御曹司がいらっしやっただのを知らせなかつたのは、どこのどいつだ！」

「ひいっ！」

今までで一番大きな怒鳴り声に、端末と格闘していた研究員の半数が驚いて手を止めた。

「——手を止めるな！ モニターを続行！」

「は、はい！」

そしてその瞬間に今度は達也に怒鳴られ、彼らは再び端末を睨みつけることとなった。

「ハッキングですか？」

「……確かにハッキングなんでしょうが、どうも様子が変わりまして「変？」」

「技術自体はかなりのものなんです、何が目的なのかがどうにもハッキリしなくて……。何か狙いがあるわけじゃなく、とにかく手当たり次第って感じで……………」

「文字通りの意味での『興味本位』^{ハッ}ということですか？」

「個人の仕業とは思えませんね。侵入の手口は、かなりの人数を組織的に動かさなきゃできないものです。相手が国家組織だとしても不思議じゃないですよ」

「……流出が予想されるデータの一覧はありますか？」

「いえ、今のところ流出したデータはありません」

牛山の答えは、達也の頭を悩ませるものだった。一見手当たり次第に見えて何か規則性は無いか調べようと思ったのだが、どうやらそれもできないらしい。

「ハッキングは、いつからですか？」

「10分くらい前からです」

つまり、達也たちがここに来る直前である。まるで彼らが来るのを見計らったかのようなタイミングで侵入し、しかし何かのデータを盗み出す様子は無い。

「不正アクセスが、停止しました！」

「油断すんなよ！ 今日1日は、今の監視体制を維持すつかんな！」

——と、失礼しました。御曹司、今日は一体どんなご用件で？」

「……………」

達也は少しだけ悩む素振りを見せた後、小百合から預かったレリックについて牛山に話した。

*

*

*

「FLTのカウンターアタックです！」

「予定通り、回線を遮断しろ！」

陳チエンの指示でハッキングに使用されていた回線が“物理的に”切断されるのを確認して、陳は隣の部屋へ移動して副官の呂リュウ・カンフウ剛虎に話し掛けた。

「どう出ると思う？」

「…………不明です」

「10分以上にわたって不正アクセスを遮断できなかったのだ。司波達也はラボのセキュリティに疑念を抱いたことだろう」

「確かに」

呂の返事は素っ気ないまでに簡素なものだったが、陳はそれを気にする様子は無い。

「司波達也がFLTの関係者だとしても、レリックの玉たまをセキュリティの不確かな研究施設に預けようとは思えない」

「論理的に考えるならば、そうでしょう」

「確かに、司波達也はまだ高校生だ。狙われていると分かっている物をいつまでも手元に置いておきたくない、という心理が働いても不思議ではない。そのときは改めて、ラボからデータを盗み出す手立てを考えれば良い」

「何だ、随分と消極的じゃないか」

突然の横槍に、陳も呂も明らかに気分を害した様子でそちらを睨みつける。

部屋の隅に配置されたソファーに深く座り、目の前のテーブルに両脚を投げ出すリラックスした姿勢で、浅黒い肌金髪碧眼の男・ヘクソンが、この現代では珍しい紙媒体の文庫本に目を通していた。2人の気迫は彼に届いているはずだが、彼は特に気にする素振りも無く2人に目を向けることすらしない。

「レリックが欲しいんだろう？ 相手の様子を窺うような真似をせず、直接奪いに行けば良いではないか」

「……相手はただの高校生ではない。僅か15分で遠隔術式を発見し破るほどの奴だ、二級品のレリックに相応しいリスクを見極めなくてはいけない」

そう説明する陳だが、その表情は苦虫を噛み潰したように苦しげだ。おそらく彼自身も、自分の手の届かない遠隔操作の術式で監視する消極策を快く思っていないのだろう。しかもそれがすぐに破られたとなれば、その不快感は並々ならぬものだろう。

そしてそんな彼の態度に、ヘクソンは本から目を離さぬままフツと嘲笑を浮かべた。

「私に対して隠し事は無意味だ、おまえ達の恐怖心が手に取るように分かるぞ。——深入りしすぎて野原しんのすけの影響が自分達に及ぶことを恐れているんだろう？」

「——貴様！」

ガタンツ！ と大きな音をたてて、陳は思わず立ち上がった。彼が座っていた椅子が床に転がり、呂以外の部下の顔に緊張が走る。

それでも尚、ヘクソンの嘲笑が消えることは無かった。

「まあ良い、私はあくまでおまえの指示に従うまでだ。おまえ達がその消極的なやり方で構わないというのなら、私はそれ以上は何も言わん」

「……チツー」

陳は舌打ちをし、部下が慌てて元の位置に戻した椅子にどっかりと座り込む。

そうして近くに控える呂へと命令する。

「今日は周チュウが例の小娘の様子を見に行くらしい。——その前に消せ」
「是シ」

ともすれば貴重な協力者を失いかねない命令にも拘わらず、呂は思念を差し挟む様子も無く命令に応えた。

「……………」

そして先程の言葉通り、ヘクソンはそれに対して意見を挟むことは無かった。

*

*

*

いくら休日とはいえ、学校に行くときは制服を着用しなければいけない。なので司波兄妹は着替えのために、一旦家へと戻ることにした。

しかし達也はそこで、電話に1通のメッセージが入っているのに気づいた。携帯端末への転送を制限する設定がされており、つまり送り主はその内容を守秘性の高いものと考えている、ということだ。

「お兄様、どうなさいました?」

「平河先輩からだ。折り返しの電話が欲しいらしい」

タイミングからして、おそらく妹の千秋に関することだろう。着替えたらすぐにでも出発しようと思っていたが、あの子の顛末は気になるところなので電話を掛けることにした。

コールは、1回で繋がった。

『もしもし、司波くん? ごめんなさい、わざわざ電話してもらっちゃって』

「いいえ、こちらこそ遅くなりました。少し家を空けていたものから」

『この前は……その、妹が迷惑を掛けてごめんなさい』

「未遂です。結局何もされていませんので、気にしないでください。俺も気にしていません」

テレビ画面は真つ暗なので相手の表情は分からないが、電話越しでホツと胸を撫で下ろす反応をしているのは分かった。ちなみに達也の台詞は相手を気遣ったものではなく、嘘偽りの無い彼の本心である。

と、小春の話は単なる謝罪だけではなかった。

『あの後に妹とじっくり話し合って、最終的には反省してくれたと思ってる。——それで、例のパスワードブレイカーを貰ったときの窃盗団との遣り取りを記した通信ログがあるんだけど、達也くんだったらこれを役立たせることってできないかな?』

「窃盗団との、ですか……」

『うん、これでお詫びになるかどうか分からないけど……。あつ、さすがに妹のプライベートデータは、ある程度選別させてもらったから。もしかしたら多少残ってるかもしれないけど、達也くんだったら悪用しないよね?』

「まあ、それは当然ですが……」

正直なところ、既に放棄されたであろうアクセスポイントのログファイルだけを手掛かりに、ネットワークの中から狐を狩り出す自信は達也にも無かった。しかしそれが可能な人物の心当たりはあるので、その情報を活用する手立てはある。

達也が気になったのは、小春がそれを達也に託した真意だった。

「妹さんを悪の道に引き摺り込んだ輩は、当然許せないものですからね」

『……ごめんね、司波くん。正直、私の手には余ってさ』

「構いませんよ。手掛かり、ありがとうございます」

『うん。用件はこれだけ。それじゃ、また学校でね』

最後の遣り取りが若干慌ただしいように思えたのは、小春がその心

に罪悪感を覚えたことを誤魔化すためだったのか、達也には検討がつかない。

とりあえず達也は、先程思い浮かべた“心当たり”の番号をプッシュした。

*

*

*

「おつ、達也くんと深雪ちゃん。災難だったね」

「まったくだ」

「お兄様、すぐ乾かしますね」

学校に着く直前に雨が降り出してしまい、司波兄妹はほんの少しだけ濡れてしまった。本棟の入口で合流したしんのすけの前で、深雪の緻密な魔法によって2人の制服に染みついた水分が立ち所に消えていく。

深雪は生徒会室へ、達也としんのすけはロボット研究部の部室がある実験棟へと向かった。雨で野外作業が中止になったとしても、達也には論文コンペに使う起動式のデバッグ作業という重要な仕事が残っている。機体を制御する大型計算機にプラズマ核融合炉のデモ機を接続する作業は、すでにロボ研の部員によって終了しているようだった。

「重役出勤ですな、達也くん」

「……まあ、確かにその通りだな」

特に皮肉を意図したわけではないしんのすけの言葉を苦笑いで受け止め、達也はロボ研のガレージへと入っていった。デバッグ自体は達也1人でも可能なのでしんのすけがいる必要は無いのだが、彼は達也の護衛役ということで付き合ってもらっている。

2人がガレージに入室すると、“人間ではない存在”が出迎えた。

『お帰りなさいませ』

「……まったく、良い趣味してるよ」

2人の目の前にいるのは、膝上10センチのバルーンスリーブワンピースに、フリルのついた白いエプロン、白のストッキングに黒の

ローファー、そして頭にはフリルのついたホワイトブルーム——長々と描写したが早い話が“メイド服”を着た“少女”だった。

「1年E組、司波達也」

「1年A組の、野原しんのすけだゾ」

じつと2人の顔を見つめながら、“少女”が動きを止めた。顔認証と声紋認証を行っているためだろう。

『コーヒーとココアを、ご用意致します』

頭を下げて飲み物を用意するその言動は少しぎこちないが、よく観察しなければ気づかない程度である。

彼女の名前は“3HタイプP94（3Hのパーソナルユース94年型）”で、ロボ研では型番をもじって“ピクシー”と呼ばれている。当代のロボ研3年生に大手製造会社の関係者がいるらしく、AI改良を目的としたモニター用として貸し出されているらしい。高校という環境に合わせて十代後半に設定されたその外見は、そのまま立っていればクールビューティーと評される美少女だ。メイド服のせいでもかも台無しになっている気がするが。

達也がコンソールデスクの前に座って端末を立ち上げたところで、ピクシーが2人の飲み物を持ってきた。コトリ、と小さな音をたててグラスが置かれる。

——マニピレーター制御ソフトに改善の余地があるな。

「どもども〜」

達也がCADの開発者らしい視点でピクシーを観察している横で、しんのすけがピクシーに律儀にお礼を言っていた。

「ピクシー、サスペンドモードで待機」

『かしこまりました』

定型文のためスムーズに発音したピクシーは、入口近くの椅子に座ると微動だにしなくなった。

煩わしい視線も無くなり、達也はキーボードに指を置いて打鍵音代わりの電子音を部屋に響かせ始めた。最初はそれを眺めていたしんのすけも早々に飽き、鞆から携帯ゲーム機を取り出してゲームを始めた。隣で作業する達也のために、片耳だけにワイヤレスのイヤホンを

つけている。

達也はキーボードを操作しながら、時々左手をデモ機の大型CADのパネルに置く。術者がパネルにサイオンを送り込み、CADがそれを素に起動式を形成、術者がその起動式を受け取って魔法式に変換する。そして実際に本番で行われるその行程をワンステップごとに分解し、魔法式を未発の段階で解除したときの反動で意図通りの結果が得られているか確認する——と見せかけて、実際には魔法式の発動状況を直接「眼」で確認していた。

これは情報体エイドスを直接眼で見ることのできる達也だからこそできる芸当であり、これのおかげで達也は魔法を開発する効率が異常に高い。言ってしまうえば「インチキ」をしているのだが、せっかく与えられた能力なのだから存分に利用しない手は無い。

そんなことを繰り返して1時間ほど経った頃、

「ん……」

「ふああ……」

コンソールを見つめていた達也が突然の倦怠感を覚え、ゲームに熱中していたしんのすけが大きなあくびをした。根を詰めすぎたか、と達也が深呼吸をするが、眠気は覚めるどころかますます強くなる。外で一休みしようとして立ち上がろうとするが、鉛のように手足が重く体も覚醒しない。

「うーん、何だか急に眠くなってきたゾ」

目をぐしぐしと擦るしんのすけに、達也は今の状況が異常であることを確信した。

【身体機能：異常低下】

達也の体が自動的に異常を探知した。ただの睡眠欲ならば別段有害なものではないが、本人の意思に無関係である強制的な睡眠欲は戦闘において有害となる。

【自己修復術式：半自動スタート^{セミオート}】

【魔法式：ロード】

【コア・エイドス・データ：バックアップよりロード】

【修復：開始——終了】

そして達也の体は、瞬時に「眠気に囚われる前の状態」に戻った。しかし、まだ問題は解決していない。先程の飲み物に異物が混入していないことは視て確認している以上、空調システムに細工をされて催眠ガスを送り込まれているのだろう。

「しんのすけー！」

達也がしんのすけに呼び掛けるが、彼は眠気に抗うのを早々に諦めて口を大きく開けて眠りこけていた。

「ピクシー。強制換気システムを動かせ」

『強制換気装置を・作動させます』

達也の命令に反応したピクシーによって、空調システムとは別系統で設置されている災害時対応の強制換気システムが作動した。

ピクシーのような3Hの本分はホーム・オートメーションの音声対話型インターフェイスとしての機能であり、建物内に設置されたあらゆるシステムを遠隔制御することにある。つまり家事機能は後付けでしかないのだが、なまじそれが便利のために本来の機能が忘れられがちである。正直、達也も直前まで忘れていた。

催眠ガスが部屋の外に排出されていくが、吸ってしまったガスの影響が消えるわけではない。ガスは毒性が低く持続時間も短い代わりに、即効性が高くなるように調合されているようだ。

「ピクシー、俺達は避難時の二次災害を考え、ここに留まることにした。監視モードで待機。救助者の入室に備え、排除行動は禁止する」
『二次災害回避を・合理的と判断します』

3Hの機能からして、今頃は空調システムの復旧も行われているはずだ。

そんなことを考えながら、達也はテーブルに突っ伏して目を閉じた。

2人が目を閉じて突っ伏すその部屋に、足音を忍ばせて入る1人の生徒がいた。

「司波？・野原？」

聞き覚えのある声が、2人へと声を掛ける。本当に眠っているのか確かめるのと、仮に2人が目を覚ましたときに言い訳できるようにするためだろう。こんなタイミングで部屋に入ってきて言い訳も何も無いと思うが、そこまで相手に期待するのは酷というものだろう。彼だつて、こんな犯罪は初めてなのだろうから。

その生徒——関本は、デモ機へと視線を移すとおもむろにそちらへと歩いていった。そしてポケットから取り出した小型の機械を使つて、あれこれと悪戦苦闘しているようである。

と、そのとき、

「関本さん、何をしてるんですか？」

入口からふいに声を掛けられ、関本はあからさまに体を震わせて大きなリアクションを見せた。ぎこちない仕草で、ゆっくりと入口へと顔を向ける。

そこにいたのは、現・風紀委員長の千代田花音だつた。

「千代田！ どうしてここに！」

「どうして？ アタシがここに来たのは、この部屋で異常が見られたと知らせを受けたものですから。そう言う関本さんはどうしてここに？ それと、手に持つてるそれは何ですか？」

「知らせだと！ 確かに警報は切つたはず——あつ」

よつぽど動揺していたのか、それとも想定外の事態に弱いのか、その一言はあまりにも不用意すぎた。傍目には凄く間抜けに見える行為だが、そもそも犯罪をしているときは過度の緊張状態にあるものなので、普段からは考えられない行動を取つても不思議ではない。

ちなみに部屋の警報は確かに切られていたのだが、同じ部屋にいたピクシーが異常を察知して警報を送つたのである。つくづく、詰めの甘い男である。

『警報を切つた』とは、どういうことですか？」

「……………」

「この状況で黙っているのは、自分が犯人だと告白しているようなものですよ」

抑制の効いた花音の口調は、彼女の本気を感じさせるものだつた。

左腕に装着しているCADを見せつけるように胸の前に掲げ、しかもすでに起動式を展開できるだけのサイオンがチャージされているという状況が、さらに彼の焦りを加速させていく。

「……は、はははっ！ 冗談がきついな！ 一体僕が、何の犯人だというんだ？」

「エアコンに細工して、催眠ガスを流し込んだ犯人ですよ。産学スパイの現行犯でもありますね」

「失礼な！ 僕は事故によるデータ滅失を恐れて、こうしてバックアップを取ってだな——」

「ハッキングツールでバックアップ？ —— 達也くん、そんなの有り得ないでしょう？」

「そうですね、俺は聞いたことありません」

すぐ背後で聞こえてきたその声に、関本は何度目になるか分からない驚愕の表情を浮かべて後ろを振り返った。

そこには先程眠ったはずの達也が、悠然と立ってこちらを見据えていた。

「馬鹿な！ 催眠ガスが効かなかったのか！」

「彼は催眠ガスで大人しく眠ってくれるような、そんな可愛いタマではありませんよ。—— 関本勲。CADを外して、床に置きなさい」

花音の口調が、ガラリと変わった。それは同じ高校の先輩に対してではなく、1人の犯罪者に対する投降勧告だった。

関本の奥歯が、ギリツと鳴った。

そして、

「—— 千代田っ！」

その瞬間、関本はCADに手を触れて起動式を展開した。2年生の後半からとはいえ風紀委員に選ばれただけあって、魔法式を構築するまでのスピードは九校戦の選手と比べても遜色が無い。

しかし、

「格好つけすぎですよ、関本さん」

魔法の発動に名称を唱える必要が無いのと同じように、標的の名前を叫ぶ必要など一切無い。ただでさえCADの準備で先を取られて

いる状況で、しかも風紀委員長を相手にそんな無駄な動作を挟むのは致命的だ。

結局関本の魔法が発動する前に花音の振動系魔法が地面を媒介として襲い掛かり、彼は意識を刈り取られて床に倒れ込んだ。

「いやあん、ななこお姉さん。こんな所で大胆なんだから……」

そんな一瞬の戦闘の真横で、しんのすけはぐっすりと眠りこけ、随分と幸せそうな表情で寝言を呟いていた。

周りの光景とあまりにもギャップのある彼に、達也は思わず大きな溜息を吐いた。

* * *

一高で強盗騒ぎが起こっているまさにその頃、第一高校の制服を着て街を歩く2人組の少女がいた。顔立ちなどが似ているため、2人を知らない者でも姉妹と推測することは容易だろう。

「ま、待ってよ姉さん。もつとゆつくり歩いて」

「ゆつくりって……。それ以上どうやって遅くするっていうの」

姉・小春の言う通り、妹・千秋は周りを気にするようにキョロキョロと辺りを見渡し、その歩みも今にも止まってしまいそうなほどにゆつくりだ。このままだと学校に着く頃にはすつかり日が暮れてしまっただろう。

そんな千秋に小春は大きな溜息を吐き、大股で近づいて彼女の腕を取ると、そのまま彼女をむりやり引っ張ってズンズンと歩き始めた。

「ちよ、ちよつと姉さん。私まだ、心の準備が——」

「あなたに任せてたら、いつまで経っても学校に着かないでしょ」

「で、でも、多分みんな怒ってると思うし——」

「だからこそ、あなた自身が謝罪しないといけないの。——大丈夫、達也くんにご迷惑を渡したことで或る程度の誠意は見せてるし、もし何か言われたとしても私が傍についてるから」

「……………」

繋がれた手から伝わってくる小春の体温に、千秋の嫌がる素振りが

徐々に小さくなっていった。やがて小春が引つ張らなくとも自発的に歩くまでになり、小春もチラリと彼女を見遣って小さく微笑んでみせる。

そうして手が繋がれたまま、2人は心持ち身を寄せ合って学校へと歩いていく。

そんな2人から数十メートル後ろを歩く、1人の若者がいた。

灰色のスポーツスラックスに同色のジャケット、その下には黒つぽいトレーナーという至って平凡な服装をした、特別ハンサムでも醜くもない有り触れた顔立ちをした、引き締まった体をもつ大柄な東洋人だった。そんな有り触れた外見のためか、道行く者も彼のことなどに気に留めることなく擦れ違っていく。

2人との距離を一定に保ちながら歩いていると、彼女がふいに横道へと入っていった。学校までの近道として生徒達の間でよく利用される道だということは、事前の調べによって分かっていたことである。そしてその道が、他の人にはほとんど使われないために人通りが極端に少ないことも、彼には分かっていた。

彼は先程よりも歩くスピードを上げて、その横道へと入っていった。音をたてないギリギリの速さで徐々に2人との距離を詰めていく。その大柄な体の割にはやけに気配が希薄なせいか、後ろから近づいているのに2人がそれに気づく様子は無い。

そして大股で数歩進めば手が届く距離にまで近づいた、そのとき、「女子高生に襲い掛かるとは、とんだ変質者ですね」

「――」
背後から呼び掛けられたその声に、呂は足を止めて後ろを振り返った。

そこにいたのは、1人の少年だった。体的に体の線も細く身長も男子の平均を少し下回る程度しかなく、濃いブラウンの髪はオシヤレに整えられ、その相貌は爽やかながら中性的だ。もしその肩に竹刀袋を携えていなかったら、どこそのアイドルかと思ったかもしれない。

しかし呂は、彼の見た目で油断するような真似はしなかった。むしろ両目を鋭く細め、眉間に皺を深く刻み込み、右脚を後ろに退き無手の構えを見せる。

目の前にいる少年を、呂は知っていた。

今回の「任務」における要注リストにも記されており、しかもその警戒度は「野原しんのすけ」と同じ最大ランクと評されていたその人物の名は、

「――代々木コージロー」

「おや、僕のことをご存知なんですか。光栄ですね」

その少年・コージローはにこやかな笑みを浮かべながら、肩の竹刀袋から得物を取り出した。

それはよく使い込まれていることが分かる、木刀だった。

「申し訳ありませんが、名乗りは結構です。――どうせ魔法師のことは分からないので」

第56話 「天才剣士と魔法師の戦いだゾ」

多くの生徒が論文コンペの準備で学校に詰め掛けている日曜日、東京と川崎との境近くで潮の匂いを感じる場所に建てられた千葉家の道場でもレオとエリカが汗を流していた。

エリカが木刀を素振りするのを正面で観察し、それを真似るようにレオも木刀を振り下ろす。型を意識しながら木刀を振り続けるのは神経を磨り減らし、彼が持つ素振り用の長く太い鉄芯入りの木刀は容赦無く肉体に疲労を蓄積させる。上級者でも3時間降り続けられれば音を上げるような鍛錬だが、彼は間に昼食を挟んでいるとはいえ、6時間経った現在も全身に汗を滴らせながら木刀を振り続けていた。

「はい、止めっ」

エリカの合図と共に、レオは腕を下ろした。さすがに大きく息を吐いているが、その場に座り込むような真似はしない。

そんな彼の正面で、エリカが手拭いで額の汗を拭いていた。

「それにしてもタフね。アンタ、剣術の経験はあまり無いんでしょ？」

「そりゃここの人達に比べたら初心者も良いところだけだよ、部活で普段からピッケルとかツルハシとか振ってるからな」

「アンタ、山岳部で普段何やってんの？」

「その点については、俺も多少は思わないでもないぜ……。というか、そう言うおまえだって同じじゃねえか」

「アタシが振ってるのは軽いヤツだからね、アンタのと同じ物じゃとつくにギブアップよ」

エリカがそう言ってレオに木刀を放り投げ——ようとして、わざわざ数歩歩いてレオにそれを渡した。コージローと一緒にいたときに木刀をレオに放り投げ、それを見たコージローから「道具を粗末に扱うな」とお叱りを受けたのを思い出したからだろう。

そんな彼女から受け取った木刀を、レオは重さを確かめるように片手で何回か振り下ろした。そして、その顔に納得と困惑の色を浮かべた。

「確かに軽い……。けどよ、軽すぎて両手じゃ振りにくそうだな」

「そこが技よ」

謙遜も外連味も無くそう言って、エリカは首元に手拭いを当てた。剣道着に籠もった熱を逃がすため、前襟を少し持ち上げて扇ぐような仕草をする。

別に下着や肌が見えたわけではないし、彼女も見えないように注意しているのだが、何となく気まずさを覚えたレオは彼女から目を逸らした。

「……どこ見てんのよ」

「えっ!? い、いや、別に何も見てないぜ!」

「そんなの分かってるわよ! 余所見すんなって言ってるの!」

「お、おう、すまん」

レオの気まずさがエリカにも伝わったかのように、2人の間を何とも言えない空気が流れる。

とはいえ、彼女はいつまでもモジモジしているような質たちではない。

「……次の段階に行くわよ、ついてきなさい」

「えっと、次は巻き藁を斬るんだったよな」

「そう。こつちに來なさい」

エリカに先導され、レオはその後に続いた。

日本家屋のイメージそのままの長い廊下を歩く最中、2人は無言だった。普段ならば彼女と無言で歩いてても特に気にしないレオであるが、今は何となく無言が気になり、それを誤魔化すためにエリカへと呼び掛けることにした。

「しかしコージローも日曜だし朝から道場に来るのかと思ってたけどそうじゃないんだな」

「ああ、代々木くんならしんちゃんに会ってから来るって言ってたわ。そんなに長い時間話すつもりじゃないって言ってたから、そろそろ来るんじゃない?」

「そうか。——なあ、純粹に疑問なんだけだよ」

レオの言葉に、エリカは振り返らず足も止めず「何?」と尋ねる。

「コージローが剣術の道場に乗り込んで1人残らず叩き伏せたって話だけだよ、実際にそんなことって本当にできんのか? 確かにアイツ

の試合を幾つか動画で観たから凄いのは分かるけどよ、そうは言ってもアイツ自身は魔法をまったく使えないんだろ？」

「魔法を使えない人間が、魔法師に勝てるはずが無いって？」

「いや、そこまで言うつもりは無えけどよ、そうは言っても魔法の有無ってだいぶ影響大きいだろ？ 1対1なら分かるけどよ、そこまで一方的に打ち勝つなんてできるのか？」

「アタシだって代々木くんの試合は魔法を使わない剣道でしか見たことが無いから、魔法師を相手にどんな戦い方をするのかなんて分からないわよ。——でも代々木くんが放つ剣気は、アンタもその身に受けたから分かるだろうけど並の代物じゃなかった。ひよっとしたら、大半の門下生はアレ一発でやられたのかもしれないわね」

「それでやられなかった連中は？」

「そんなの、実際に見てないアタシが知るわけないでしょ」

投げ遣りに返された言葉に、レオは話題が終了したことを悟って口を閉ざした。

しかしそこから数秒、彼の予想に反してエリカが言葉を紡ぎ始める。

「実際にどうだったのかは知らないけど、少なくとも代々木くんが九十九里浜家の当主を負かしたのは事実よ。——でもウチの門下生の間では、それはあくまで『試合形式』だったから、って見方をする奴も少くないわ」

「……本気の殺し合いだったら、勝負は分からないってか？」

「代々木くんは今まで一度だって誰かを殺したことなんて無いでしょうし、そもそも誰かを殺すことを覚悟して剣道に打ち込んできたわけじゃない。そんな人間が、自分のことを本気で殺そうとしている奴を目の前にしてどこまで戦うことができるのか、っていうのは気になるところね」

「ふーん、成程なあ……」

エリカの説明に納得したようにそう呟くレオに、エリカが初めて後ろへ視線を向けた。

その目つきは、鋭かった。

「言っておくけど、アンタだって他人事じゃないんだからね？ ——
次の鍛錬から『真剣』を使うから、氣い抜くんじゃないわよ」
「——おう、分かってるぜ」

エリカの言葉に、レオは力強く返事をした。

*

*

*

『人喰い虎』の異名で知られる呂剛虎^{リユウ・カンフウ}は、対人近接戦闘において世界十指に入ると評される大亜連合の白兵戦魔法師だ。歳が近いこともあり千葉家の麒麟児である千葉修次と比較されることも多く、凶暴さと相手を萎縮させる『名』において呂が上回っていると結論づけられることも多い。

そんな彼の最大の特徴が、『剛気功』^{ガシキゴン}と呼ばれる魔法だ。元々体術の一種である気功術を発展させたもので、皮膚の上に鋼よりも硬い不可視の鎧を形成する。気功を纏った手は防御だけでなく攻撃にも優れ、ただ爪を立てて引つ掻くだけでも当たれば骨ごと肉体を抉り取るほどの威力がある。

そんな威力を纏った呂の右手が、恐ろしいスピードでコージローへと迫り来る。常人だったら視界に捉えることすら不可能なその攻撃に対し、コージローはまったく動じる様子も無く、木刀の剣先を相手の目に向けて中段に構える『正眼の構え』を取る。

そしてその瞬間、木刀の剣先が呂の手首を叩いた。パシツと軽い音と共に呂の右手が想定軌道から僅かに逸らされ、コージローの顔を横を文字通り間一髪で通り過ぎた。それによって呂の右腕が前方に伸び、右脇腹がコージローに対して晒される。

それを彼が見逃すはずも無く、いつの間にか下段に構えられていた木刀を逆袈裟に振り上げた。

バキンッ！

その音はおおよそ木刀で人間の体を直接叩いたときのそれではなく、まるで金属の鉄柱に木刀を叩きつけたかのような固いものだった。その音が周囲に大きく響き渡り、そのときになってようやく前方

を歩いていた平河姉妹が後ろを振り返る。

コージローの木刀が呂の脇腹に打ち込まれたが、呂に有効なダメージを与えることは無かった。木刀は彼の体ギリギリの所で見えない壁に阻まれたように食い止められ、呂の体には骨折どころか打撲の青痣すら刻まれていない。

しかし呂もコージローもわざわざ目で見てその結果を確認することとはせず、それぞれ体に伝わる感触のみでそれを判断した。思考を介さない反射的なスピードで呂は背中を軸に回し蹴りを繰り出し、コージローは即座に後ろに跳んでそれを避けつつ間合いを取った。

「な、何っ!？」

「どういうこと!? アイツら誰!？」

平河姉妹が驚くのも当然だ。普通に街を歩いていたら、高校生くらいの少年と二十代中頃の青年が自分達の背後で戦闘を始めているのだから。

そんな2人の耳に、呂から視線を離さず呼び掛けるコージローの声が届く。

「コイツは君達を狙ってる! 建物を背にして周りに注意して!」

「まさかコイツが千秋を!？」

「えっ、でもこんな奴知らない——」

呂を睨みつける小春に、咄嗟に状況を呑み込めず戸惑う千秋。

そんな2人に対し、呂が大きく足を踏み出した。陳チェンから2人の暗殺を命じられた以上、それが何よりの最優先事項となる。

もつとも、

「僕が、それを許すとも?」

落ち着いた声とは裏腹に猛スピードで呂との間合いを一気に詰め、その胴体の中心に向けて鋭い突きを放った。多少体を捻る程度では避けることは適わず、いくら木刀とはいえ鋭い先端がその体に刺されば悶絶もののダメージだ。

そんなコージローの攻撃に、呂は足を止めて一般的な防御の構えも取らずそれを迎え撃った。ガッツ、と再び人間の体から発せられる類ではない重い音が鳴り、木刀の先端は見えない壁から先に進むことは

無かった。

今度は、コージローが後ろに跳ぶ方が早かった。するとそれを追いつけるように呂がコージローへと襲い掛かり、よって互いの間合いが広がらず一定の距離が保たれた。どちらも近接戦闘を得意としているが、得物を持つていない分だけ呂の方が攻撃の間合いが短くなる。敢えて相手の土俵に飛び込むほど、呂は愚かでもないし慢心もしていない。

しかしそれによって、呂が平河姉妹から離れた。2人はその隙に走ってその場を離れ、路地の脇に建物を背中にして座り込むのをコージローが確認する。

呂が腕を突き出し、コージローが木刀を振り下ろす。しかしその腕に巻きつく螺旋の力場によって、木刀の方が逆に弾かれてしまった。気功術と同じく中華伝統武術の1つである、全身の筋骨を連動させて作り出した捻りの力を打撃部位に伝え攻防一体の武器とする。『纏てんしけい絲勁』を魔法的に発展させた技術によるものだ。

しかしコージローはそこで慌てることなく、まるで腕が起こす風に乘って木の葉がフワリと揺れるようにそれを避けた。その流れで再び後ろへと跳び退き、体勢の立て直しを図る。

ところが呂はそこから更に踏み込み、それを許さないとばかりに猛攻を仕掛けた。拳・掌・熊手と手の形を変えながら肘・肩・体当たりを随所に織り交ぜ、パターンを読ませない動きで怒濤の勢いで攻め立てる。それによりコージローは不安定な姿勢で避けながらズルズルと後退していくが、これだけの数を繰り返す呂の攻撃はクリーンヒットどころか擦りすらしていなかった。

傍目には呂の方がコージローを圧倒しているように見え、それを裏付けるように呂の表情には闘志以外の感情は見えないが、心の焦りを完全に消すことはできないのか攻めのリズムが徐々に早くなり、それにつれて一撃の威力が落ちていく。

と、側頭部を狙った右腕の横薙ぎをしゃがんで避けたコージローが、ガラ空きになった呂の右脇腹に再び胴打ちを繰り返した。先程も『剛気功』によってダメージを防いだこともあり、呂は気づいていた

が防御の姿勢は取らず次の攻撃を優先させた。
すると、

ビシイッ——！

先程までの金属に打ちつけるような重く固い音は相変わらずだが、そこに亀裂が入ったような破裂音にも似た音が混じっているように聞こえた。呂の顔に初めて動揺が過ぎり、攻撃に転じようとしていた呂の体がほんの一瞬だけ淀みを見せた。

すると少し前に受けた呂の猛攻をやり返すかのように、そこからコージローによる怒濤の攻撃が始まった。剣道でもお馴染みの面・小手・胴だけでなく、通常は防具の死角となるため狙わない肘や上腕、腿などにも容赦無く木刀を叩きつける。それこそ「最初から防具なんて無いんだからどこを殴つても一緒でしょ？」とでも言わんばかりだ。

それによって呂の体は先程のコージローのようにズルズルと後退を余儀なくされ、喉元に向けて鋭い突きが繰り返されたときは後ろに跳び退いて間合いを大きく取った。呂からしたら「取らされた」と表現する方が正しく、仕切り直しの形となってしまうことで呂の表情に悔しさが滲み出ている。

10メートルほど離れた場所に立つコージローは、それでも構えを維持したまま大きく息を吐いた。とはいっても疲れが出ている様子は無く、その顔や首筋にも汗は1滴も流れていない。

「成程、今くらいの威力でも多少は通るのか」

呂の体には未だに傷1つ付いていないが、防弾チョッキを着ても銃弾を受けた衝撃で動けなくなるのと同じように、魔法による補助を一切受けていないコージローの攻撃による衝撃は呂の動きを一瞬でも淀ませるほどの効果をもたらした。拳銃の実弾程度なら苦にもならないほどの防御力を誇るのだが、まさかそれを単なる木刀による打撃と刺突で超えてくるとは。

しかしここで怒りに身を任せて特攻を仕掛けるほど、呂の精神力は脆弱ではない。確かに彼は頭脳を駆使して策謀するよりも力で圧倒する戦いの方が得意だが、だからといって戦闘においてまったく頭を

働かせないわけではない。

さてどうするか、と呂が攻め手に頭を巡らせようとしたそのとき、

ビ

非常にうるさく、そうでなくても聞く人に不快感を与える警告音が突然鳴り響き、呂はコージローの存在も忘れて思わずそちらへと振り向いた。

ターゲットである平河姉妹の1人・姉の小春が、その手に防犯ブザーを握り締めてこちらを睨みつけていた。ピンを引き抜くと自動車のクラクション並の大ききで警告音が鳴り響くだけでなく、近くの交番や警察に自動的に通知が行くようになっていた。おそらく数分もしたら、ここに警官やパトカーが押し寄せてくるだろう。

これを防ぎたかったからこそ、呂は背後からの一撃で2人を仕留めたかった。今からでも2人を、少なくとも千秋だけでも殺しておくか、と呂が1歩足を踏み出し――

それは、ほとんど勘に近いものだった。特に気配が動く様子も無かったが、ふいに頭に過ぎった悪い予感にほぼ反射的に従った結果である。

10メートルほどの距離をその一瞬で詰めていたコージローが、両手で持った木刀を頭上に振り上げる。『上段の構え』を見せていた。後隙が大きい、左右の肘により視界が制限される、急所を晒すため防御面でも不利、とデメリットが大きい反面、振り下ろす動作は全ての構えの中でも最速、両手で振るため威力が増す、など非常に攻撃的な構えである。剣道においては『上級者のみに許された構え』と言われている。故に格上の相手に対して構えるのは無礼の極みとされている。

呂が気づいたときには、既に振り下ろす動作は始まっていた。コージローの急所は晒されているが、こちらの攻撃が届く前に木刀がこちらに到達すると瞬時に判断した呂は、咄嗟に左腕を頭上に構えて防御の構えを取った。

ガガガガガガガガガガガガガガ——！

まるで断崖絶壁から大量の水が流れ落ちるかのように猛烈な勢いで、コージローがその左腕に面を打ち続けた。1発1発の間隔が短すぎて1つの音に聞こえる連続音が、コージローと呂、そして平河姉妹の周辺に鳴り響く。

そして、

バキツ——！

今までとは明らかに違う、言うなれば“手応えを感じる音”が鳴り、呂の表情にほんの僅かだが苦痛の色が浮かんだ。

しかし呂はここで、ポケットから小さなボールを取り出して放り投げた。それはコージローの眼前で破裂し、物凄い勢いで白い煙をもうもうと吐き出し始めた。何の成分が入っているか分からないため咄嗟に跳び退いたコージローが見つめる中、その煙が呂の姿を覆い隠す。

真っ先に平河姉妹に目を向けるが、その周辺には煙が届かず2人の姿もすっかり見えている。2人に近づく者の姿は無く、千秋がCADを構えて何やら魔法を繰り出しているのが分かった。

すると煙が風に煽られ始め、みるみる薄れていった。

呂の姿は、既にどこにもいなくなっていた。

「——ふう。初めてやったけど意外に使えるな、“秘打・ナイアガラ”の滝」

コージローは周囲に視線を向け、木刀の剣先を水平より少し下げた“下段の構え”を取った。機敏に動けないため攻撃しづらいが、奇襲に対しての警戒・防御には向いている構えである。

その構えを維持したまま、コージローは平河姉妹のいる場所まで早足で移動した。

「アシスト、感謝します。怪我はありませんか？」

「わ、私達は大丈夫」

「良かったです。——今の奴、心当たりはありますか？」

「——私のせいだ」

コージローの質問に答えた、というより独り言を呟いたのは、千秋

だった。

「わ、私のせいでアイツが私を殺しに来て、それにお姉ちゃんやあなたが巻き込まれて——」

「僕は勝手に首を突っ込んだだけです、気にしないでください」

「そうよ、千秋。私だって、あなたのせいだなんて思っただけ」

「でも、でも——」

千秋はそれきり泣きじやくる。まともな会話は、しばらく無理そう
だ。

小春はそんな妹の背中を優しく撫で、コージローは小さな溜息を吐
いた。

「……出過ぎた真似、でしたでしょうか？」

高級乗用車を運転する周^{チュウ}青年は、後部座席に座る呂をバックミ
ラー越しに見つめながらそう問い掛けた。呂は正面を見据えたまま
口を閉ざしたままだが、ピリピリと肌を焼くような剣呑とした空気を
振り撒いている。

しかし周青年はそれに気を悪くすることも怯えることもなく、屈託
の無い声を彼へと向ける。

「それにしても驚きました。呂^{たいじん}大人が、まさか手傷を負われるとは。
しかも相手は魔法も使えぬ少年となれば、その驚きも一入^{ひとしお}と言えま
しょう」

失態をあげつらつているとも受け取れる彼の言葉にも、呂は眉一つ
動かさない。

その代わり口にしたのは、自分達への追手が来ない現状について
だった。

「——遁甲術を使うのか？」

「いや、お恥ずかしい。陳閣下の御技に比べたら、手遊びに毛が生えた
程度のものでして。皆様にお見せするほどのものではないので、今ま
で言わなかったただけのことですよ」

手の内を隠していたことを責めているとも受け取れる呂の言葉に

も、周青年はその笑顔を微塵も乱さなかった。

*

*

*

色々とおつた学校から帰宅した達也は、荷物を置くや着替えることも無く電話へと向かった。今朝にも掛けた電話番号にダイヤルすると、数コールの呼び出しの末に通話状態となり、画面に相手の顔が表示される。

『もしもし？ 1日に2度も電話してくれるなんて珍しいわね』

大手企業の若手秘書然とした、柔らかいながらも隙の無い微笑みでそう切り出したのは、独立魔装大隊所属の藤林響子少尉である。普段はわざと地味で目立たない装いをする彼女だが、普通にメイクして着飾ると平均以上に華のあるルックスをしているのがよく分かる。

「すみません、デートでしたか？」

『フフツ。残念ながら、お・し・ご・と、よ』

「そうですか。実はご相談したいことがあったのですが、明日にした方が良いですか？」

『大丈夫よ、今は1人だから』

言外に情報漏洩の懸念を示した達也に対し、それを正確に読み取った藤林がそう答えた。

それならば、と達也は用件を話し始める。

「実は今日、学校で強盗に遭いまして。睡眠ガスを使われてしまいましたよ」

『あらあら、大丈夫だったの？ って、大丈夫だからこうして電話してるのよね』

「ええ、まあ。そのときに現場の映像を記録しましたので、調べてもらえませんか？」

『映像？ どうやって？』

「独立稼働が可能なセキュリティ端末に記録させました」

『あつ、3Hね。へえ、達也くんってそういう趣味があつたんだあ』

「違います。——窃盗未遂犯とツールが映っています。ハッキングを

仕掛けられたCADのログも添付しておきます」

達也の言葉に、藤林の目がスツと細められた。

『……つまり達也くんは「そろそろ狐を仕留めろ」と言いたいのね?』
「そんな偉そうな言い方をするつもりはありませんが、概ねその通りです」

『気にしないで。隊長からもそろそろ片を付けるように言われてるし、今朝貰ったログで絞り込みもできているから、一両日中には捕まえられると思うわ。吉報を待っててね』

気負いもせず、藤林はそう予告した。随分と自分の腕に自信があるように聞こえるが、達也から見てもそれがけっして誇張ではないことを知っている。

エレクトロン・ソーサリス
“電子の魔女”

彼女に与えられたこの称号は、表向きには電子・電波に干渉する魔法に長けた魔法師という意味だが、情報ネットワークを手玉に取る悪魔的なハッカーという意味も含まれている。上書きされて消去された磁気・光学ストレージのデータさえ再構築してしまう彼女の特殊スキルをもつてすれば、1回でも電子情報ネットワークに痕跡を残したものをどこまでも追い掛けて突き止めることができる。彼女からしたら、世界中のネットワークが自分のテリトリーのようなものだ。

お気の毒に、と達也は顔も名前も知らない敵に感情の籠もっていない同情を心の中で思い浮かべながら、藤林との電話を切った。

達也との電話を終えた藤林は、車外に追いやっていた東松山よねを助手席に招き入れた。

若手秘書を思わせるレディスーツ姿である藤林に合わせたのか、よねの服装も普段のカジュアルでワイルドなものとは対照的なスーツ姿だった。着慣れない服装で違和感が拭えないのか、助手席に乗り込む間も頻りにスーツの具合を気にしている様子だ。

「ごめんなさい、よねさん。プライベートな電話だったもので」

「ああ、別にいいよ。響子さんくらい美人だったら、恋人の1人や2人

「はいてもおかしくないし」

さすがに2人いるのはおかしいだろう、というツツコミは藤林はしなかった。

それよりも、先程の電話の内容をよねが突っ込んで尋ねてこないことに内心拍子抜けしていた。事件の嗅覚に優れた刑事ならば、今の電話に何かを嗅ぎ取っても不思議じゃないというのに。

「さっきの電話の内容ですけど、狐に利用された哀れな鼠と、その鼠に貸し与えられた尻尾のスケッチを送ってきたんですよ」

「鼠？ 尻尾？ 響子さん、どんな男と付き合ってたの？ そんな訳分かんないモンを送り付けるような奴、さっきと別れた方が良くない？」

「……すみません、分かりにくい表現をして。あなたが捜査している事件にも関与している犯人グループの協力者とハッキングに使用したツールの情報が送られてきたんですよ」

「えっ!? 響子さんの彼氏さんが、なんでそんな情報を!？」

「……あの、まず電話の相手が私の彼氏だということから否定させていただきますね」

頭の血の巡りが悪い相手だとイライラする質たちをしている藤林だが、よねに対してはもはや1周回って可愛らしさすら覚えていた。サザエさん時空のことを抜きにしてもだいたい年上である女性への感情としては不適切であるとは分かっているのだが。

「その映像をお渡ししますので、街路カメラからその者の立ち回り先を調査してもらえますか？ 一般には手に入らない特殊なツールですので、必ず生身での接触があつたはずですよ」

「うーん、とりあえず今のアタシじゃ令状なんて取れないし、寿和くん達に相談してみるかあ」

よねの言う「寿和くん」とは、ロッテルバルトで声を掛けてきた千葉のことである。彼とその部下である稲垣、そして隣にいる藤林と事件の捜査を目的に即席のチームを組むこととなり、千葉達は現在2人とは別のルートで事件を捜査しているとところだ。

しかし1つのチームとはいえ、彼らの立ち位置はどちらかというと

「よねの協力者」と表現する方が適切だ。後から3人の間に割り込んできた藤林に対して、どうにも警戒心が拭えないといった様子が窺える。

「それにしても、そいつが顔を合わせた奴全員を調べるとなると、ほんだけの大人数を調べることになるやら——」

「それも大丈夫です。搜索地点は都内の32ヶ所、その中で協力者が過去1ヶ月に立ち寄った場所をピックアップしてください」

「えっ、もうそこまで分かっているの!? さすが響子さん!」

藤林の言葉によねは手放しで称賛するのみで、その情報をどこの誰から仕入れ、そしてどのように調べたのかについてはまるで疑問に思っていない様子だった。

藤林は当初、自らの美貌で千葉を骨抜きにしたうえで、自分に都合の良い駒として動かそうと考えていた。しかしよねの介入によりその目論見は外れ、彼と距離を置いて捜査する羽目になってしまった。

しかしそのよねが単純な性格をしているため、彼女を介して結果的にほぼ当初の目論見通りの動きができるようになっていた。それに単純に同性と行動を共にした方が自身の身の安全を確保しやすいので、むしろこちらの方が良かったのかもしれない。

——とにかく今は、少しでも早く産業スパイの件を片付けなきゃ。独立魔装大隊としては、むしろここからが本番なんだから。

よねが千葉に電話を掛けるその横で、藤林が内心で気を引き締めていた。

*

*

*

結局コージローは第一高校に足を運ぶことなく、レオとエリカが鍛錬している千葉家の本家道場へとやって来た。鍛錬に勤しむ他の門下生に軽く挨拶しながら、コージローは奥の部屋へと進んでいく。

ちなみに他の門下生がコージローに向ける感情は、敵意5割と興味5割といった感じだった。敵意といっても九十九里浜家の道場を潰したことに對してではなく、自身の師であり容姿端麗なことからアイ

ドル視されているエリカに「客人」として招かれたことによるやつかみである。エリカから「無礼な対応をするな」と通達があったためむりやり勝負を仕掛けてくることはないが、隙あらば稽古と称した勝負を持ち掛けられるためコージローとしても少々困っている。

さて、そんな事情はさておき、事実上エリカとレオの専用となつている道場の一室にやって来たコージローだが、どうにも雰囲気がおかしいことに気がついた。

エリカはブツブツと呪詛を呟きながら不機嫌なオーラを撒き散らし、レオはそんな彼女を刺激しないように体を小さくして大人しくしている。そんな彼の頬には真っ赤な紅葉が刻まれており、その犯人がエリカであることはこの状況から考えて明白だった。

そんな2人がコージローの来訪によって同時にこちらへ顔を向け、そして同時に訝しげな表情を浮かべた。

「えっと、代々木くん……。そこにいるのって、一高ウチの生徒よね？ なんで一緒にいるの？」

エリカの指摘した通り、コージローの後ろには制服姿の平河姉妹が並んでいた。小春は初めて立ち入った名家、しかもその心臓部である道場に興味津々といった様子で見渡していたが、千秋の方は目元を紅く腫らして顔を俯かせている。

「ちよつと2人が変質者に襲われそうになつて——」

「襲われた!? どんな奴!?!」

「それは分からない。そいつ自体は僕が追っ払ったから心配ないけど、もしかしたらまた狙われるかもしれないから、ここに匿わせてもらえないかな？」

「まあ、それは構わないけど……」

「よ、宜しくお願いします」

「……………」

コージローの背後で頭を下げる小春に、グツと口を引き結んで無言を貫く千秋。

色々と言いたいことが多いエリカとレオだが、コージローの方が早く動いた。

「それで、そっちは何があったの？」

「えっと、それは、その——」

「コイツが、アタシの裸を覗いたのよ」

「覗いてねーよ！　しかも裸じゃねーし！」

「あ、あんなの、ほとんど裸だったようなもんでしょ！」

ギヤーギヤーと言い争う2人から何とか事情を聞き出したところ、経緯は次の通りだった。

レオがエリカから課題を与えられ、その間エリカは休憩すると言い残して部屋を出た。しかしエリカの想定より早くレオの課題が終わり、それを伝えるためにレオはこの部屋を出て彼女を探し始めた。

すると廊下で、エリカの姉とバツタリ出くわした。彼女に事情を説明すると、おそらく休憩室にいるだろうと部屋の場合と行き方を表示したタッチパネルを貸してくれた。その通りに廊下を進んで部屋のドアを開けたところ、実はそのドアは救急用の非常口で、浴場付きの休憩所でバスタオルを巻いただけのエリカとご対面、というわけだ。「そりゃ、返事が来る前にドアを開けた西城くんが悪い」

コージローのハツキリとした判定に、後ろの平河姉妹もウンウンと頷いていた。レオは多少肩を落とした様子だったが、彼自身も今回の件は自分が全面的に悪いと思っっているので言い返すことはしなかった。

と、ここでコージローがエリカへと向き直る。

「とはいえ、千葉さんだってまったく非が無いわけじゃないよ。いくら西城くんが真面目でサボるような性格じゃないにしても、真剣を使った鍛錬なんだからちゃんとその場で見てないよ」

「……確かに、それはそうだけど」

「ところで、コレがその課題？」

コージローが興味を示したのは、この部屋の壁一面に組まれた格子状の巻き藁だった。ドアと窓以外の壁に限なく組まれたそれは、刃を真っ直ぐ入れて真っ直ぐ振り抜く修行に使うものだ。

そして現在、その内の1面において、横に渡されている巻き藁が1つ残らず断ち切られていた。最初の方は引っ掛かって曲がっていた

り、振り下ろした拍子に刃を食い込ませたような跡が残っているが、最後の1列は全て綺麗に両断され、それ以外の余計な傷も見当たらない。

「西城くん、これをどれくらいの間で？」

「大体10分くらいじゃねえかな」

「成程、確かに早いね」

巻き藁を見つめながら感心した様子で何度も頷き、コージローはレオとエリカへと向き直った。

「2人共、僕が『さっきのことは忘れて鍛錬を再開しよう』って言うても無理だよ」

ほとんど断定的な口調だったが、レオもエリカも黙ったままであるため反論は無いようだ。

するとコージローは何度も小さく頷き、自分が持っていた木刀を出して2人に見せつけた。

2人の目に疑問の色が浮かぶ中、コージローは笑顔でこう言った。

「だったら2人共、余計なことなんて考えられないよう鍛錬に打ち込めば良いよ。僕が付き合ってあげるからさ、体力が尽きて倒れるまで続けよう」

「えっ？」

「あつ、言うまでも無いけど魔法は禁止ね。だって僕、君達と違って魔法は使えないからさ。大丈夫、純粋な剣技を鍛えるのだからって剣術にとってプラスになるだろうから」

「いや、その——」

「ええ、それが良いわね。泊まり込みになるだろうけど、下着の替えくらいは用意できるわよ。経費で落とせるしね」

コージローの提案にエリカも乗っかってしまい、多数決の原理に則ってレオの反論は封殺されてしまった。2人共、レオに対して面白い玩具を見つけた子供のような目を向けている。

「……俺、生きてここから出られるかな」

何とも気の抜けた声が、レオの口から漏れた。

第57話 「超能力者のお出ましだゾ」

月曜日。

現代における電車事情についてだが、地方を跨ぐほどの長距離移動を除けば2〜4人乗りのキャビネットでの移動が一般的となり「満員電車」という言葉は死語となった。性質上渋滞が発生しないので到着時刻が大幅に遅れることはほぼ無いが、早く着く分には結構な時間差が生じることも多い。入学して間も無い頃は一高の最寄り駅で待ち合わせしてから学校に向かっていた達也たちも、程なくしてそれを取り止めるようになったくらいだ。

なので友人と駅で鉢合わせる機会は意外と少なく、しかもそれが登校や出勤の時間と照らし合わせれば「早朝」と表現されてもおおしくない時間帯となれば相当珍しい。達也が深雪と共にプラットフォームに降り立った際に、2つ後ろのキャビネットからレオとエリカの姿を見掛けて若干目を見開いたのも無理はなかった。

向こうも駅に到着した段階で達也たちの存在に気づき、2人はぎこちない愛想笑いを浮かべながらキャビネットを降りた。

「よ、よう達也……。随分と早いな……。論文コンペの準備か？」

「そんなところだ。レオ達はどうしたんだ？ いつもはもつと遅いじゃないか」

「い、いや、それはだな……」

「や、やだなあ達也くん！ アタシは大抵早起きだけどお！」

レオは明後日の方に視線を飛ばして言い淀み、エリカは不自然に明るい声と引き攣った笑みを浮かべて答えた。

「そう？ じゃあ、今朝は西城くんの方が早起きだったのかしら？」

「ちよつと、深雪！ その言い方は止めて！ 何か、まるでアタシが毎朝コイツを起こしてるみたいじゃない！」

「そうだぜ！ どつちかというと、今日は俺の方が早かったんだからな！」

「……………」

「……………」

「……………」

レオのせいで変な空気が流れ出し、エリカは無言でレオを睨みつける。

そんな2人を前に、達也と深雪はポーカーフェイスを貫いていた。もしもしんのすけがこの場にいたら、おそらく嬉々としてツツコミを入れていただろう。むしろそうしてくれた方が有難かった、という場面かもしれないが。

「……ちよつと2人共、何黙ってるのよ？」

恥ずかしいような恨めしいような居た堪れないような表情で顔を真っ赤にするエリカに、これ以上からかうのは可哀想かと思つた達也がフツと笑みを浮かべた。そしてエリカはそれを勘違いし、ますます目つきを鋭くしていた。

「大丈夫だ、変な誤解はしちやいないよ。大方、レオに何か新しい魔法を教えるためにエリカがしごいていた、といったところだろ？」

「えっ、なんで分かるの!? もしかして千里眼!？」

「遠隔視のスキルは無いよ。レオの気力が消耗していて、その反面魔力が活性化しているようだったからな」

「いや、気力とか魔力とか、そっちも大概だから」

「まあ、達也にとつちや今更だけどな」

そう言つて笑うエリカの様子に、どうやら機嫌はそれなりに回復したようだ、と達也は軽く息を吐いた。

と、そんなエリカがニイツと口角を上げた。

「だけど達也くん、さっきの予想はちよつと惜しかったね。正確には、レオをしごいているのはアタシだけじゃないの」

「ということは、千葉家の門下生も参加しているってことか?」

「そうじゃなくて。——実は、あの『代々木コージロー』も一緒なのよー!」

エリカの言葉に、達也も深雪も驚きを隠せず目を丸くした。

普段は色々と驚かされてばかりの自分が彼らを驚かせたことに、エリカは満足そうに胸を張っている。

「いやあ、ひよんなことから代々木くんと知り合つてさあ、向こうも剣

術に興味があつたみたいでアタシ達の鍛錬に協力してくれることになつたのよ。それで昨日は泊まり掛けで、アタシと代々木くんの2人でコイツをしごいてたつてわけ」

「そう言うエリカだつて、アイツとの鍛錬で結構やられてたじゃねえか」

「元々才能があるうえに100年鍛錬してるのよ、所詮10年足らずのアタシじゃ無理だつて！　それでも、最後の方は結構粘れるようになってきたんだから」

負けん気の強いエリカが自然と相手を上に立てていることに、達也は内心とても驚いていた。つまりそれだけ代々木コージローのことを認めており、何なら師として仰いでいるということの表れだろう。

と、そんな彼女の横でレオが、何か思い出したようにハツとした表情になる。

「そうだ、達也。そのコージローなんだけだよ、昨日の昼に千葉家の道場に来たとき、達也の邪魔をしようとした例の女子生徒とその姉ちゃんと一緒にたんだよ。事情を訊いたら、『変質者』に襲われそうになつたのを助けたんだつてよ！」

「――変質者？」

「そう！　タイミング的に考えて、達也くんの妨害に失敗したことで口の封じつぽくない？　昨日達也くんを襲つた関本先輩の件もあるし、これは間違いなく大きな組織が裏で動いてるでしょ！」

「もう知ってるのか。随分と耳が早いな」

「幹比古から電話で聞いたからな」

確かに幹比古は昨日も学校に来て模擬戦に参加していたため、達也の件を知っていても不思議ではない。

「その変質者について、平河千秋は何か言っていなかったか？」

「そいつとは会つたことも無いって。あの機械を渡してきたのは20代前半くらいに見える若い男だけど、自分のことはほとんど話さなかつたから詳しいことは分からないみたい」

「そんな調子だから、仮に関本先輩に事情を聞けたとしても無駄骨かもしれないねえな」

「でも、聞いてみる価値はあるでしょ？ 確か今は特殊鑑別所にぶち込まれてるのよね。ようし、こっそり忍び込んでみようじゃないの」
いつの間にか関本と面会する気マンマン（しかもかなり物騒な方法で）のエリカに、さすがに達也も「おいおい」とツツコミを入れざるを得なかった。

「そんなことをしなくても、学校の委任状があれば普通に面会できるぞ。関本先輩も、今はまだ一高生なんだからな」

「その委任状って、実質的には風紀委員が管理してるんだよね？」

エリカの問い掛けに、達也は首肯した。社会的に希少な逸材である魔法師の卵は、魔法犯の実行犯にでもならない限り、そう簡単には退学にならない。関本のような未遂犯の場合は特殊鑑別所に送られ、改心の度合いを見て処分を決定する。その度合いを確認するための代理人として、風紀委員がよく面会に訪れるのである。

「……まあ、確かに達也くんとしんちゃんがいるし、忍び込むよりは簡単か」

渋々、といった感じだがエリカが自身の提案を取り下げ、レオも納得したように頷いた。

*

*

*

そして時間は一気に飛んで、放課後の風紀委員本部。

「駄目」

関本への面会申請に訪れた達也、そして面白半分で彼についてきたしんのすけに対し、風紀委員長である花音の答えは実にシンプルだった。

「なぜですか？」

「駄目なものは駄目よ」

「んもう、ちゃんと理由を言ってくれなきゃ駄目でしょ、花音ちゃん」

「しんのすけの言う通りです。鑑別所の面会申請は風紀委員長や生徒会長を通すとはいえ、最終的な決定権は学校にあるはずですよ。理由も無しに門前払いでは納得できません」

冷静な口調で詰め寄る達也に、花音はあからさまに嫌な顔をして眉を顰める。しばらくはそうして突っぱねようとしていたが、達也が一向に引き下がらないのを見て諦めたように溜息を吐いた。

「……だって、どう考えても面倒なことになるでしょ」

「そんなことありません。関本先輩から話を聞くだけです」

「司波くん自身はそうかもしれないけど、君はいつもトラブルに巻き込まれてるでしょ！ 司波くんはトラブルに愛されてる体質なんだから、ただでさえ忙しいこの時期に仕事を増やさないで！」

確かに普段の活動でも、他の委員と比べても達也が事件に遭遇する確率は極めて高い。それはもはや何かしらの作為を感じるレベルであり、花音がそんな考えに至っても不思議でないのかもしれない。

しかし達也からしたら、それは普段ほぼ一緒に行動しているしんのすけのせいだと思っていた。自分は彼の「主人公補正」に巻き込まれているだけの、謂わば被害者なのだと言張したかった。

ところが、思わぬところから花音を擁護する者がいた。

「仕方ないゾ、達也くん。諦めよ」

しんのすけの言葉に、達也も花音も意外そうに目を丸くした。彼はただ達也について来ただけであり、せいぜい先程のような茶々を入れるくらいで静観の態度を貫くと思っていたからだ。

「ほら、ほらね！ しんちゃんもこう言ってることだし、司波くんも今回は大人しくしててちょうだい！」

「……しんのすけは、関本先輩がなぜ自分達を襲ったのか疑問に思わないのか？」

「うーん、オラとしてはどっちでも良いかなあつて感じだゾ。それに花音ちゃんもこんなに嫌がってるし」

「やっぱり持つべきは、物分かりの良い可愛い後輩ね！ というわけで司波くんも諦めて——」

「だから達也くん、あずさちゃんに頼めば？」

「——はえ？」

花音は変な声を漏らし、達也は即座に理解した。

先程達也自身が言ったように、鑑別所の面会申請は風紀委員長だけ

でなく生徒会長も窓口となっている。だったら許可を出し渋る花音を説得するより、生徒会長であるあずさを説得する方が早いだろう。彼女ならば、多少強引に押せば許可を出すだろうし。

「確かにそれでも構わないか。——というわけで委員長、失礼します」
「え？ あつ、ちよつと待って」

「あつはつはつ、残念ながらしんちゃん達の方が一枚上手だったようだな」

笑い声と共に部屋に入ってきたのは、引退した身のはずなのに頻繁に顔を出す摩利だった。

「何せ達也くんもしんちゃんも当事者だ、自分の耳で事情を聞きたいという気持ちも分かる」

「でも、摩利さんー！」

「まあまあ。ちようど明日、アタシと真由美で関本の面会に行く予定にしていたからな。それに同行する、という形なら良いんじゃないか？ このままだと、彼らは2人きりで鑑別所に行くことになるぞ？」

「……まあ、摩利さんと一緒なら」

特別仲の良い先輩からの提案に、さすがの花音も頑固な姿勢は貫けなかったようだ。

「2人も、それで良いね？ もつとも、そんなに大人数は申請できないから、我々と君達の4人だけということになるが」

「はい、構いません」

「……あれ？ オラも行くことになってる？」

「せっかくだ、一緒に来い。生徒自治を担う者として、これも勉強の内だ」

摩利の言葉に、しんのすけは渋々ながらも頷いた。

こういうときは素直に言うことを聞くんだな、と達也は思った。できればいつものように面倒臭がって拒否してくれば良かったのだが、とも達也は思った。

どうやら風紀委員長の持論を補強することになりそうだと達也は心の中で溜息を吐いた。

* * *

そして次の日、10月25日火曜日の放課後。

真由美と摩利、そして達也としんのすけの4人は、関本が拘留されている八王子特殊鑑別所に向かった。入口でこそ色々な手続きがあったが、一旦中に入ると拍子抜けするほどにフリーだった。案内用のLPS端末を渡されただけで職員同行すらなかったのは、おそらく真由美が「七草」の名前を使ったからだろう。

「拘留」と表現されているものの、彼がいるのは牢屋ではなかった。隣の部屋からマジックミラー越しに中の様子を窺い知ることができるその部屋は、少々狭いビジネスホテルのようである。関本自身も拘束されている様子は無いが、病院の検査着のような格好からして、当然ながら武器やCADの類は持っていないようだ。

関本には摩利1人で相対し、他の3人は隣の部屋でそれを観察する。関本程度の腕ならば万が一にも摩利には敵わないし、それに彼女には「あれ」がある。

「……渡辺、何しに来た？」

ベッドに座っていた関本は、摩利が部屋に入ってきた途端に驚愕の表情を浮かべ、そして不審と警戒を顕わにして睨みつけた。無意識に左手首をさすっているのは、没収されたCADを探っているのだろう。

そんな彼に、摩利はニヤリと不敵な笑みを浮かべて、

「もちろん、事情を聞かせてもらいに来た」

「——こ、ここでは魔法は使えないぞー!」

焦るように声をあげる関本の言葉通り、ここには魔法の使用を感知する装置が至る所に設置されており、一度魔法が発動されれば無効化ガスが噴射されたりゴム弾の銃座が形成されたり、アンテナナイトを身につけた警備員が駆けつける手筈となっている。

ただし、それはあくまでも「通常の場合」である。

「正直に話した方が身のためだぞ? ——真由美も見ていることだし

な」

その瞬間、関本は自分の意識が遠くなるのを感じた。咄嗟に呼吸を止めるも既に手遅れで、彼の意識は霞が掛かったように曖昧になっていき、やがて彼は焦点の合っていない目を俯かせた。

「あまり時間は無いからな。要点だけ聞かせてもらおう」

彼をじっと見つめながら、摩利は彼に話し掛けて——いるように見える独り言を呟いた。

「匂いを使った意識操作ですか」

摩利が何をしているのか、達也には一目で分かった。匂いが情緒や記憶に密接に関係することは前世紀から知られていること（アロマテラピーが最も分かりやすい例だろう）であり、現在摩利が行っているのは、複数の香料を強制的に嗅がせて心理的抵抗を薄れさせることで自白剤と同じ効果を生み出す魔法である。

「2人共、見るのは初めて?」

「はい。大っぴらに使われるとこちらが困りますが」

「何でも喋っちゃうなんて、何だか怖い魔法だゾ」

2人が初めて見た魔法の感想を述べていると、関本の「自白」が始まった。

『それで関本、何が目的でデモ機にハッキングを仕掛けたんだ? わ

ざわざ催眠ガスまで使って』

『デ、デモ機のデータを吸い上げるため……』

『それだけか?』

『……司波の、アイツの私物も調べるつもりだった……!』

「——!」

その言葉に、真由美と達也が揃って反応した。摩利も真相に近づく重大な秘密だと悟ったのか、彼に顔を寄せて先程よりも強い口調で尋ねる。

『達也くんの私物に何があるんだ! 答えろ!』

すると関本はベッドに体を倒して、まるで窒息でもしているかのよう
に苦しい表情を見せた。僅かに残っている自我と摩利の魔法との
板挟みでもがき、そして最終的に自我が敗北し口を開いた。

『……宝玉の聖遺物、だ……！』

「レリック!? 達也くん、そんな物を持つてるの!?!」

真由美が目丸くして問い掛けるも、達也は平然としていた。

「いえ、持ってません」

「でも——」

「少し前から『賢者の石』絡みでレリックのことを調べてたので、そ
れを勘違いしたんじゃないでしょうか?」

「……勘違いって、それにしても随分と大胆じゃない? 催眠ガスま
で使うなんて、まるで達也くんが持つてるのを確信しているような行
動だと思うんだけど」

「そう言われましても、俺には関本先輩の考えは分からないので」

真剣な表情でじつと達也を見つめる真由美の目は、もはや『睨んで
いる』と表現しても差し支えないほどにまでなっていた。そしてそ
んな視線を、腕を伸ばせば普通に届く至近距離から受けている達也
は、それでも表情を一切変えずに平然としている。

真由美は早々に追及を諦め、矛先を変えた。

「——しんちゃん、何か知らない?」

「し、知らないゾ! レリックなんて、見たことも聞いたことも無いゾ
!」

「……………」

「……………」

しんのすけのせいで変な空気が流れ出し、達也は無言で彼を睨みつ
ける。

そんな2人を前に、真由美は1周回ってポーカーフェイスとなつて
いた。

そして真由美が再び口を開きかけたそのとき、鑑別所中に警報が鳴
り響いた。

摩利は咄嗟に意識が朦朧としている関本をベッドに倒して部屋を

飛び出し、それと同時に3人も隣の部屋から出て天井のメッサージボードへと視線を遣る。

「侵入者ですネ」

「……一体、どこの命知らずだ……？」

摩利が戦慄を含む呆れ声をあげても無理はない。犯罪を犯した魔法師が一時的に拘留される施設だけあって、その警備体制は普通の鑑別所の比ではない。そんな場所に白昼堂々襲撃を掛けるなど、よほどの馬鹿か、あるいはそれほど実力に自信のある者だけだ。

達也はLPS端末を操作し、避難経路を立体地図で表示した。このルートを逆算することで、侵入者の現在位置を割り出すことができる。

「屋上から侵入したようですね。今は東階段の3階付近、といったところでしょうか」

「――さすがね、達也くん。大当たり」

焦点の合っていない目を虚空に向けていた真由美が、達也に賞賛の言葉に向けた。知覚系魔法“マルチスコープ”を発動し、彼の示した場所を実際に見て確認したのだろう。

「侵入者は全部で4人、対物魔法障壁に対抗してハイパワーライフルを使っているわ。警備員が階段の踊り場でバリケードを作つて応戦してるところ」

「ハイパワーライフルなんて、そこら辺のテロリストが用意できる代物じゃないぞ」

「確かに。でも警備員が応援に駆けつけてるし、だんだん侵入者が圧されてるようね。これなら鎮圧するのも時間の問題ね」

4人が今いるのは、中央階段寄りの2階。廊下の出入口が隔壁で閉鎖されているとのことなので、このままジツとしている方が下手に戦闘に巻き込まれないだろう。

「良かった良かった。これで安心ですな」

しかし、なぜだろうか。しんのすけが腕を組んでウンウンと頷いている姿に、なぜか他の3人は不安な気持ちに駆られた。

その直感に素直に従つた達也が、周囲に視線を遣り、

「こちらが『本命』のようですね」

「……えっ?」

中央階段を鋭い目つきで見据える達也の言葉に、摩利としんのすけが1拍遅れてそちらに目を向け、そしてそんな3人の様子に真由美が戸惑いながらその後が続く。

そして真由美の表情に、緊張が走った。

警報が鳴る鑑別所を堂々と歩いてくるのは、高身長ながら筋肉量がそこまであるわけではないため細身に見える男だった。浅黒い肌と金髪碧眼という一目で純日本人ではないと分かる外見をしており、しかしそれ以上に抜き身の刀をそのままちらつかせているような剣呑とした雰囲気纏っているのが印象的だ。

そんな男に、真由美・摩利・達也の3人は揃って臨戦態勢に入った。本来は逃げるのが正解なのだろうが、既にその男はこちらに狙いを定めるように視線を固定させている。生憎とその正体に心当たりは無いが、3人共がその雰囲気だけで只者ではないことを悟っていた。

そしてその瞬間、その男が口を開いた。

「司波達也、七草真由美、渡辺摩利、悪いが手出しは無用で頼みたい」

「——真由美はともかく、アタシ達のことでも知っているのか!」

「今知った。私がここに来たのは、そこにいる野原しんのすけに会うためだ」

「——!」

3人が即座に、しんのすけへと視線を向けた。

その男をじっと見つめる彼の両目は、驚きで大きく見開かれていた。

「おまえ、まさか——」

「知っているのか、しんちゃん!」

「……………誰だっけ!」

臨戦態勢だった真由美と摩利が、思わずズツコケた。達也はそういうキャラではないので体勢を崩すことは無かったが、心の中では呆れ果てて大きな溜息を吐いていた。

そして相對する男も特にズツコケたりはしなかったが、心なしかそ

の剣呑とした雰囲気は少しだけ鳴りを潜めていた。

「……ヘクソンだ」

「おおっ！ そうそう、そんな名前だった気がするゾ！」

「こんなときに気の抜けるボケをするな！」

「だって100年振りなんだゾ！ 名前を忘れてても仕方ないゾ！

そう言う摩利ちゃんは、100年前に会った人の名前を憶えてるの!?」

「アタシはまだ18歳だ！ そんなの知るか！」

「摩利！ しんちゃん！ 敵が目の前にいるから止めなさい！」

真由美の一喝により、しんのすけも摩利も渋々といった感じで言い争いを止めた。

何ともグダグダな雰囲気だったが、ここで達也が雰囲気を引き締めに掛かる。

「ヘクソンと言ったか。しんのすけと因縁があるようだが、何の用でここに来た」

「一応はその部屋にいる関本勲を始末するために来たが、私としてはそれはあくまでついでだ。私にとって興味があるのは、野原しんのすけただ1人だ」

「いやあ、そう言われましても、オラは綺麗なお姉さん一筋なので——」

「しんちゃん、お願いだから少し黙っててね」

「なぜ、しんのすけにこだわる？ 以前に戦って負けたことへの復讐か？」

その男・ヘクソンと対峙してから達也の脳裏に浮かんでいたのは、八雲から聞いた『かつて野原しんのすけと対立した“珠黄泉”の一族の子孫である強力な超能力者』のことだった。具体的な容姿は何も聞いていないが、雰囲気からしてコイツに間違いないだろう。

するとヘクソンはそんな達也に対し、挑戦的な笑みを浮かべた。

「成程、九重八雲という男から少しは私のことを聞いているのか」

「……おまえ、どこまで調べ上げている？」

「達也くん、そいつ、人の心を読むみたいだから気をつけてね」

まるでゲームを攻略するときの注意点を教えるかのような気軽さでそう言うしんのすけだったが、その感覚で齎された情報は達也たち3人にとつてかなり衝撃的なものだった。

「人の心を読むって……！ まさか『超能力者』なのか!？」

「その通りだ、渡辺摩利。だから今の私には、七草真由美が『魔弾の射手』で私を狙い撃とうとしていることも、渡辺摩利が『ドウジ斬り』で私の隙を突けないか考えていることも、司波達也が分解魔法で私の体に穴を空けようとしていることも筒抜けだ」

「――！」

まさに今考えていたことを言い当てられた3人が、ギリツと奥歯を噛み締めた。しかし達也にとつてそれ以上に脅威なのは、どれだけ自分がひた隠しにしていることも、この男の前では息をするように簡単に暴かれてしまうことだろう。

とはいえ、それ以上余計なことを口にされる前に攻撃に出る、なんて迂闊な真似はできない。おそらくそれを狙ったうえでの先程の発言であり、下手に前に出たところで心を読む能力でカウンターを食らうのが目に見えている。

「ちなみに野原しんのすけは、今日の夕飯は久し振りにココヒヤクのカレーを食べようかと考えている」

「おおっ！ 大当たりだゾ！」

「お願いしんちゃん！ 戦いに集中して！」

「んもう、何言ってるの真由美ちゃん。戦いに集中するからアイツに心を読まれるんだゾ」

「悔しいがしんちゃんの言う通りだ、真由美。――参ったな、さすがにこれは想定外だ」

不敵な笑みを浮かべて摩利はそう言うが、その心境としては大分追い込まれているように見えた。達也も先程から攻撃の手段を幾つも頭の中に思い浮かべているが、その瞬間にヘクソンにそれが伝わっているのかと思うと決断に踏み込めない。

と、そんな中、1歩足を踏み出した者がいた。

しんのすけだった。

「やれやれ、仕方ありませんな」

「ま、待てしんちゃん！　ここはアタシが――」

「渡辺先輩、この中ではしんのすけが最も奴との戦い方を心得ています。我々が後衛の方が合理的でしょう」

「……分かった」

真由美と摩利は、悔しそうに顔をしかめた。いくらしんのすけがサザエさん時空に巻き込まれていようと、彼が自分達の後輩であることに変わりない。そんな後輩を矢面に立たせてしまうのは先輩として情けないが、一度ヘクソンと戦ったことのある彼が前に出るのが一番確実だというのも理解できる。

渋々ながらも納得した様子の摩利が、自身のスカートを叩くように振り上げた。普段は生地形状保持機能で隠されたサイドの三角プリーツが広がってスカートが大きく捲れ上がり、焦げ茶のレギンスに包まれた形の良い脚が付け根近くまで露わになる。

そうして露出した太腿のホルスターからすかさず引き抜かれたのは、長さ20センチほどの短い角棒だった。剣道で使われる竹刀とは比べるまでもなく短い得物だが、彼女は迷うことなくそれを構える。

「それでは、始めよう」

「ほいほい」

互いに軽い口調で言葉を交わし、戦いの火蓋が切って落とされた。

第58話 「世界は不思議な縁でいっぱいだゾ」

コージローとの戦闘によって手傷を負った呂リュウが周チヨウに助けられる形でアジトに逃げ帰ったのは、日付が変わって少し経った深夜のことだった。呂の姿に陳チエンは愕然とした表情を浮かべたものの、負傷の経緯は尋ねなかった。任務の首尾については既に報告を受けており、帰還前の再襲撃を主張した呂を陳が呼び戻したためである。

また陳は、呂の失態を責めることもしなかった。確かに呂はそう簡単に手傷を負わされるほどの腕前ではないと考えてはいたが、それと同じくらいには代々木コージローをそう簡単に退けられる相手ではないと考えていた。真剣すら使っていないコージローに一方的にやられるのはさすがに予想外だったが、だからといって呂の責任を問いつ断する選択肢を取れるほど彼の自分に対する貢献度は低くない。

またそれ以上に、より重要度の高い問題が発生し、その対処に彼の方が必要になったからでもあった。

「状況が変わった。第一高校における我々の協力者である関本勲が、任務に失敗し当局の手に落ちた。收容先は八王子特殊鑑別所だ」

魔法技能を持つ未成年者の拘留（に代わる観護措置）施設であるそこに收容されたとなれば、並大抵の技量では手が出せない。しかも関本は自分達と直接接触しているため、周を通して間接的な繋がりしかない千秋とでは「処理」の優先度がまるで違う。

「平河千秋は後回しだ。——関本勲を処分せよ」
「是」

任務の困難度が跳ね上がったにも関わらず、呂は変わらず平然とした表情で答えた。そこからは、昼間に負った傷の痛みすら窺えない。

そうして呂が踵を返し、部屋を出ていく——かと思われた。

「その任務、私が請け負おう」

「——！」

突然部屋の隅から呼び掛けられたその言葉に、陳と呂が揃ってそちらへと顔を向けた。陳は若干の驚きを露わにして、そして呂は先程までとは打って変わって敵意を剥き出しにした表情で。

そんな2人の視線を一身に受けながら、古いビルの一室には似つかわしくない高級なソファアールに深く腰掛けるヘクソンはその表情を変えることなく2人を見遣る。

「そいつは先の戦闘で無視できない深手を負っている。そんな状況で任務に当たらせたとところで再び返り討ちに遭うのは、超能力を使わなくとも目に見えている」

「……特殊鑑別所の兵力と呂の実力を鑑みて、問題無いと判断したままでだ」

「そう判断して平河千秋の処分を命じ、たまたま通り掛かった代々木コージローにやられたのはどのどいつだ？ おそらく次も、何者かと鉢合わせになり突発的な戦闘が行われるだろう。——今度こそ、野原しんのすけが出てくるかもしれないぞ」

「……………」

ヘクソンの指摘は、陳にとっては言われるまでもなく分かっていることだった。野原しんのすけの“主人公補正”を考えると、関本勲の処分が何の滞りも無く成功するなどと考えることはできない。それならば、深手を負っている呂よりも万全な状態のヘクソンに任務を命じる方が絶対に成功率は上がるだろう。

しかしここで陳が即座にそう判断できなかったのは、ひとえに2人に対する信頼に大きな隔たりがあるからだだった。

大亜連合の特殊工作部隊として自分の腹心を務める呂、さらには共に密入国をした部下達とは違い、ヘクソンは日本に着いてから周に紹介された現地協力者だ。陳が周に対してまるで信頼を寄せていない以上、周の息が掛かった彼を自分の部下と同じように使うことはできなかった。

だが、それでも、

「——良いだろう、ヘクソン。関本勲処分の任務、おまえに命じる」
「了解した」

陳の命令を受け、ヘクソンはソファアールからゆっくりと立ち上がった。

*

*

*

「――『変身』!」

後ろで真由美と摩利と達也が、そして正面でヘクソンが見守る中、しんのすけが高らかにそう叫んでいつもの変身ポーズを取った。彼の腰に巻かれたベルト型CADが一瞬だけ青白い光を放ち、そしてすぐに消え去る。

青白い光の正体であるサイオンは、魔法の資質のある者にしか視認できないものだ。ヘクソンはあくまで超能力者であり魔法師ではないため、故にしんのすけの行動もただ変身ポーズを取っただけにしか見えない。しかしヘクソンはそれを嘲笑うことなく、無表情で観察するようにジツと見つめていた。

そうしてしんのすけの行動が終わったのを確認してから、ゆっくりとした足取りで歩き出した。姿を現してから一度も攻撃する素振りすら見せなかった彼の行動に、後ろで見守っていた3人の表情に緊張の色が浮かぶ。

そんな中、直接対峙するしんのすけだけが普段と変わらぬリラックとした顔つきのまま、こちらに歩いてくるヘクソンへと足を踏み出した。ゆっくりとした足取りで彼に近づくその様子は、まるで客人として出迎えるかのようなのである。

そうして互いに距離を近づけ、あと1歩大きく踏み出せば手が届くまடிになったとき、

「――!」

最初に動いたのは、ヘクソンだった。

目にも留まらぬ速さで足を踏み出し、空気を切り裂く鋭さでしんのすけの頭めがけて手刀を繰り出した。相手の心を読むという能力を活かしたカウンター攻撃を主体とすると考えていた摩利が、自分から攻撃を仕掛けたこと、さらにその動きが武道の達人が如き身のこなしであることに驚きを隠せない。

それほどまでに素早い攻撃を、しんのすけは最低限の動きだけでスツと避けた。

そしてそれを皮切りに、ヘクソンが猛攻撃を開始した。功夫カンフーを思わせる卓越した格闘術から繰り出される拳・掌・手刀、さらには足技をも織り交ぜた多彩な攻撃で全身の急所を的確に狙っていく。もしこの場にコージローがいれば、彼の動きが呂剛虎と比べても遜色ない洗練されたものであるのが分かったことだろう。

だが、それであっさりやられるしんのすけではなかった。1歩もその場から動かさずに、まるでコンニャクか何かのように体をグネグネと不規則にうねらせ、ヘクソンの猛攻をことごとく避けていった。その不気味な動きに真由美と摩利が味方にも拘わらず顔を強張らせ、達也は春の模擬戦で自分の攻撃を避けていたときのことを思い出した。

そのときの達也をなぞらえるように、ヘクソンは有効打どころか攻撃を掠らせることすらできないでいる。しかし彼はそれに焦りを覚えた様子は無く、まるで想定内だと言わんばかりに冷静な表情を崩さずにいる。

「――『和毛和布』か」

ヘクソンは何やら呟き、しんのすけの頭めがけて回し蹴りを繰り出した。しんのすけはそれを、膝を折って身を低くすることですんなり避ける。

と、ここでしんのすけが身を乗り出し、ヘクソンへと両腕を伸ばしてきた。しかしその手はまるで力が込められておらず、特別速いわけでもない。それこそ、単純に腕を伸ばして触ろうとしただけのようにも思える。

しかし今までその場を1歩も動かなかったヘクソンが、なぜかそれに対しては大きく後ろに跳び退いた。その表情も、明らかな焦りの色を含んでいる。

そうして距離を取ったヘクソンが、改めてしんのすけへと視線を――

「――↓」

向けようとしたそのとき、ヘクソンがほんの少しだけ目を見開いて横に跳んだ。

そして直前まで彼のいた空間を、ドライアイスの礫が亜音速で貫い

た。彼にとつては完全に死角から飛んできたはずだったのだが、まるで飛んでくるのが初めから分かっていたかのような反応の早さである。

もちろん、その攻撃を仕掛けた真由美の思考を読んだからこそその芸当だ。ヘクソンが真由美へと視線を向けると、悔しそうに口元を引き結ぶ真由美と目が合った。そしてそれを見て彼女が狙われると思つたのか、摩利が彼女の前に出てデバイスを構える。

しかしそれは、完全に勘違いだ。そもそもそのときには、ヘクソンの興味は既にそこから外れていた。

真由美へと視線を向けたとき、彼女の正面に立っているはずのしんのすけがどこにも見当たらなかったからである。

「――！」
そしてその一瞬後、ヘクソンはその視線を少し下へと向けた。

俯せの姿勢で床に寝転がっているしんのすけが、尺取虫のように体を波打たせてこちらに迫ってくるのが見えた。字面だけ見ると如何にもものんびりしていそうだが、まるで映像の早送りでも見ているかのようなスピードで、しかもまったく音を立てず、あつという間にヘクソンの足元にまで辿り着く。

するとしんのすけはその姿勢から、何の前触れも無くヘクソンの顎に向けて蹴りを繰り出した。俯せに寝転がった状態から逆立ちになるまでの過程が、それを見つめていた真由美にはまるで見えなかった。摩利と達也でさえも、辛うじて見えたという程度である。

それを示すように、ヘクソンはその場を動かさず、そして避ける動作もしない。

決まった、と摩利が心の中で確信した。

ぼよんっ。

しかし彼女の確信は、気の抜けた音と共に崩れ去った。

しんのすけの鋭い蹴りが、猫の手のように指を曲げたヘクソンの右手に阻まれた。しんのすけも決まったと思ったのか、「おっ？」と戸惑いの表情を浮かべる。

するとヘクソンはその隙を突いてその脚を掴み、その場で回転して

遠心力でむりやりしんのすけを持ち上げると、その勢いのまま達也たちのいる方へと投げ飛ばした。

「おおっ！」

「——しんちゃんっ！」

声を張り上げる真由美の見つめる中、しんのすけは勢いを保ったまま床に転がり落ち、そして2回ほど転がると達也たちの目の前でピタッと立ち止まった。両腕を水平に広げてポーズを取る様子は、まさしく新体操のそれである。

「しんちゃん、大丈夫!？」

「いやいや、別にやられてないゾ。新体操をしようとしてただけだから」

心配する真由美に、なぜかそんな言い訳をするしんのすけ。

そしてヘクソンは追撃する素振りを見せずに、その場に留まってしんのすけを見据えたまま口を開いた。

「さすがだな、野原しんのすけ。『芋虫行脚』から『糞転下肢』への移行に淀みが無い」

「いやあ、それほどでもお」

「そして私にやられた後の『受身美学』、なかなか素晴らしい演技だったぞ」

「前2つは良いとして、それには何の意味があるの?」

真由美のツツコミは至極もつともだが、残念ながらそれに応える者はいなかった。

達也も摩利も、それ以上に気になることがあったからだ。

「しんちゃん、もしかして今の動きが『ぶにぶに拳』というヤツか?」

「おっ、摩利ちゃん知ってるの?」

「十文字から聞かされてな、少しだけ知識があるんだ」

「どうやら知識があるのは、渡辺先輩だけではないようですけどね」
達也の指摘に、その場にいる全員の目がヘクソンへと向いた。

それを待ち構えていたかのように、彼が右手を彼らに向けて差し出した。

その手は、猫のように指が曲げられていた。

「『猫手反発』。相手の攻撃を猫の手で吸収する、ぷにぷに拳における防御の構えだ」

「ぷにぷに拳には全部で10の奥義があると聞く。その内の1つを使えるということは——」

摩利の言葉にヘクソンはフツと笑みを浮かべ、そしてしんのすけへと視線を向けた。

「安心しろ、野原しんのすけ。玉蘭は息災だったぞ」

女性らしきその名前は達也たちの知らないものだったが、その台詞からヘクソンがその女性からぷにぷに拳を習得したことを悟った。ただでさえ超能力で人の心を読むという大きなアドバンテージがある中で、この情報は3人をさらに緊張させるに足るものだった。

そしてそれを直接ぶつけられたしんのすけも、その台詞の意味をしっかりと理解した。

「つまりオラと一緒に修行したランちゃんの弟子ってことだから、オラの方が偉いってことだよな？ とりあえず、焼きそばパン買ってきて」

「しんちゃん、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

すっかりツツコミ役が板に付いた真由美の叫びに、しんのすけが「おっ？」と首を傾げた。相変わらずのマイペースっぷりに、摩利も達也も呆れ果てて大きな溜息を吐く。

そしてその直後、

「——」

達也がホルスターからCADを抜き、森崎もかくやというスピードで魔法を発動した。『フラッシュ・キャスト』と呼ばれる技術によってイメージ記憶として意識領域に魔法式を刻み込み、それを読み取ることによって魔法式構築の時間すらも省略して発動したその魔法は、達也固有の分解魔法によって人体に穴を空けるといふ、発動の予兆も無い静かなものだった。

達也本人としては、できるだけ意識しないよう一瞬で発動したつもりだった。しかしそれでもヘクソンは体1つ分横にズレてそれを避けると、即座に床を蹴って達也へと迫っていく。

みるみる距離が縮まる2人の視線が交錯し、達也が半身の構えを取る。

と、そのとき、

「——ヘクソンっ！」

突然大声で呼び掛けられたヘクソンが、半ば反射的にそちらへと視線を向ける。

その声の主であるしんのすけと目が合った、その瞬間、

「——っ！」

ヘクソンが途端に苦悶の表情を浮かべ、咄嗟に右手を頭にやって踏鞴たたらを踏んだ。

何をしたのか気になるが、それに気を取られる達也ではない。彼は即座にヘクソンとの距離を詰めると、握り締めた拳を彼の鳩尾に叩き込んだ。しかもただ振り抜くのではなく、相手の体に手を当ててから勢いよく押し込むことで内部に衝撃を伝える「裏当て」を織り込んだものだった。

初めて自分から跳んだのではなく後ろに吹き飛んだヘクソンの体が、数メートル離れた所でブレーキを掛けて止まった。しかし明確なダメージを負った様子は無く、冷静な表情のまま顔を上げて達也へ鋭い視線をぶつける。

しかし再び床を蹴ろうとする直前、ヘクソンは不自然な動作でむりやりその向きを真横へと変更した。

そうして誰もいなくなったその空間に、2枚の短冊状の金属片が重力加速度を超えた速度で落下した。もしヘクソンがその場に残っていれば彼の肩と背中を捉えたであろうそれらは、床に深々と突き刺さって放射状のヒビを入れるに留まった。

悔しさと奥歯を噛み締める摩利の横で、今度は真由美がCADを持つ右腕を構えた。

金属片を避けたヘクソンを背後から貫く勢いで飛ぶドライアイスの礫を、ヘクソンは一切そちらを見ずに今度は逆方向へと飛んだ。先程床に突き刺さった金属片を跨いで床に着地する彼の右脚めがけて、床上数センチの空間から突如現れたドライアイスの礫が襲い掛かる。

そして彼はそれをも、最低限の動作で跳び退くことすんなり避けた。

まるでダンスを踊っているかのような優雅な動きを見せるヘクソンだが、そんな彼が突如ステップを止めてチラリと天井を見上げた。ヘクソンの視界に飛び込んできたのは、球体だった。第一高校の制服にも使われる緑と白で彩られたその球体が、天井からヘクソンめがけて勢いよく落ちてきたのである。

ヘクソンは咄嗟に跳び退き、その直後に球体が地面に叩きつけられた。その衝撃で球体がゴムボールのように潰れ、しかしそれをバネにして勢いをつけた球体が逃げるヘクソンへと襲い掛かる。体重移動が間に合わず避けられないと判断した彼は、猫の手にした両腕をその球体へと差し向けた。

ぼよんっ、と気の抜ける音をたてて球体とヘクソンの両手が衝突し、跳ね返った球体が達也たちのいる方へと放物線を描いて飛んでいく。

するとその球体がモゾモゾと蠢き、人型へと姿を変えた、というよりに姿を戻した。じゅうなんだんがん「柔軟弾丸」と呼ばれるぷにぷに拳の奥義によつて人体では有り得ない完全な球体になっていたしんのすけが、先程の攻防によるダメージを微塵も感じさせない軽やかさで床に下り立った。そうして数メートルの距離を空けて対峙する、しんのすけ軍勢とヘクソン。

仕切り直しの形となり、このまま再び激しい攻防が繰り広げられる――と思われたそのとき、

「その侵入者！ 抵抗を止めて大人しくしろ！」

4人の武装した警備員がヘクソンの背後から現れ、銃器を構えながら1人が呼び掛けた。

前方へと駆け出す直前だったヘクソンはそれを聞き、スッと姿勢を正して気を落ち着かせるように軽く息を吐いた。投降したと思つたのか、警備員は銃器を向けたままジリジリと近づいていく。

しかしそんなヘクソンの口元には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「どうやら任務は失敗のようだな。私の完敗だ」

ヘクソンはそう言い残すと、突然床を蹴って走り出した。

しかしそれはしんのすけ達のいる正面ではなく、銃器を構える警備員がいる後方だった。突然の行動に警備員はほんの一瞬呆気に取られ、しかし即座に気を取り直して構えていた銃器の引き金を引いて発砲した。もちろん後方にいるしんのすけ達に当たらぬよう、ヘクソンの足元を狙ったのである。

ところがヘクソンはそれを、スピードを一切落とすことなく何度もジグザグに動いてそれを避けた。そうして警備員の目の前まで辿り着くと、一瞬だけ身を屈めて大きく跳び上がった。彼の体は警備員達の頭上を跳び越えて天井に到達し、そして警備員達の背後に降り立って走り去っていく。

「ま、待てー！」

警備員は慌てた様子で反転し、ヘクソンの後を追った。しかし4人全員がそうしたのではなく、1人だけがその場に残ってしんのすけ達へと駆け寄っていく。とはいえその警備員の視線は、その中で最も知名度も社会的立場も上である真由美へと向けられていた。

侵入者を捕り逃がした、という情報が彼女達の耳に入ったのは、それから10分ほど経ってからのことだった。

事情聴取を終えた達也たちが鑑別所のゲートを出たときには、外はすっかり真っ赤に染まっていた。4人の足元から伸びる長い影が、4人の動きに合わせてユラユラと揺らめいている。

特にこれといった理由も無く全員が無言を貫く中、摩利が躊躇いがちに口を開いた。

「達也くん、しんちゃん。その、今日アタシが見せた魔法だが、他言無用で頼む」

「それは先輩の得物のことですか？ それとも『ドウジ斬り』についてですか？」

「おっ？ それって、何か飛ばしてたヤツ？」

摩利の魔法を一目で看破した達也に、摩利も真由美も「やはり知っ

ていたか……」と嘆息の声をあげた。

2本の刀を遠隔操作し、手元の刀と合わせ3本の刀で対象を取り囲むようにして同時に斬りつける魔法剣技。本来の意味である「同時斬り」の名を「童子斬り」に隠して源氏一門の限られた剣士に伝承されてきた魔法だったが、魔法の存在が明らかになってからは「ドウジ斬り」の名だけが研究者の間で一人歩きしている状態だ。

「秘密にしたいというのであれば、術式の内容を喋ったりはしませんよ」

「いや、アタシが「ドウジ斬り」を使えることも他言しないでほしい」「おっ？　なんで？」

当然のように訳を尋ねるしんのすけに、摩利がホツとしたような顔で話し始める。

「実はあの術式、正式に伝承されたものじゃないんだ。家ウチに伝わる古文書を、その、恋人に協力してもらって試行錯誤していたらできてしまったね」

「おおっ！　摩利ちゃん、恋人がいるなんて初耳だゾ！」

「そ、そこに食いつくか……。とにかく、アタシの家は渡辺綱わたなべのつなの末裔せきってことになっていてな、一応源氏の一門とはいえ家格はけっこう高くないんだ。そんなアタシが源氏の秘剣を使えるとなれば、色々と面倒なことになるのは目に見えているからな」

「しかし実戦魔法師として身を立てるのであれば、いつまでも秘密と
いうわけには……」

「分かっているさ。だが、せめて学生の間は御免被りたい」

渋い顔でそう言う摩利に、達也もしんのすけも揃って頷いて了承した。そもそも2人共が彼女の魔法を吹聴する気は無いので、特に無理な相談というわけでもない。

それに達也の場合、それ以上に気になることがあるのだから。

「ところでしんのすけ、奴と戦っていたときに気になることがあったんだが」

「おっ？　何？」

先頭を歩いていたしんのすけが、疑問の声と共にクルリと振り返

る。そのまま後ろ向きで歩く姿は、小さな子供のように危なっかしい。

「奴が俺に襲い掛かったとき、しんのすけが奴の名前を叫んだ途端、奴が急に動きを止めて苦しがついていただろ？ 何をやったんだ？」

「ああ、アレ？ ものすごく色んなことを考えまくって、オラの心をむりやり読ませたんだゾ」

しんのすけの答えに、摩利が興味を示したように「ほう……」と声を漏らす。

「さすがに脳内で処理する情報量が大きいと負担になるのか」

「しかもあの様子からすると、読心能力は常に発動していてオンオフの切替ができないみたいね。とはいっても、戦闘中にまったく関係無いことを考えまくるなんて私には怖くてできないけど」

「しんちゃんは奴と戦ったことがあるんだろ？ そのときはどうやって倒したんだ？」

「えっと、みんなが歌を歌って頭を空っぽにしながら捕まえて——」

「はっ？ 歌？」

「んで、オラとひまの2人でくすぐり攻撃をしたの。アイツ、くすぐられるの弱いんだゾ」

「……やっぱり、私達には真似できないわね」

しんのすけの話を摩利と真由美が苦笑いで聞いているその横で、
「……………」

達也は一人で、何やら考え込んでいる様子だった。

*

*

*

ヘクソンが鑑別所を襲撃してから3日後。

論文コンペの本番を2日後に控えた、10月28日金曜日の夜。

食事も入浴も済ませてすっかり寛いでいた達也に、藤林からの電話が掛かってきた。

『——というわけで、スパイの実働部隊はこの3日間ではぼ全てを拘束しました』

事務的な口調での説明を終えた藤林が、ディスプレイの向こう側で表情を和らげる。

『達也くんからの情報はとても役に立ったわ。残念ながら隊長の陳祥山と腹心の呂剛虎は逃がしちゃったけど、産業スパイの件にチェン・チャンシエン
リュウカンフウ関しては概ね解決したと言っても良いわ。ありがとう』

「いえ、俺の方からお願ひしたことですし」

『だとしても、今回のスパイには多数の企業が悩まされていたからね。私達の部隊の性質上、魔法技術を狙ったスパイにも知らん顔できないし、あなたから依頼が無かったとしても近々出動する予定ではあつたのよ。それが達也くんたちのおかげで少し早まったんだから、こちらとしても感謝してるのよ』

「そうですか。——レリックに関しては、どこから漏れたのでしょうか?」

『お恥ずかしい話だけど、軍の経理データから漏洩してたみたいなの。魔法研究の委託費支払いがあつた先が、片っ端から狙われていたみたいね』

「どうりでやり方が中途半端だったわけだ、と達也は1人納得した。『拘束したメンバーは東洋系多国籍だけど、もしかしたらあの街の尻尾を掴めるかもしれないわ。——そのときは、達也くんにも協力してもらつても良いかしら?』

「任務とあれば、否やはありませんよ」

藤林のフレンドリーな問い掛けに、達也も軽い口調で答える。今回の産業スパイに関して、2人共がよくある事件の1つと認識していることの表れだ。実際達也が説明を聞いていたときの感想も「今回の相手は大物だったな」程度のものでしかなかった。

その事件に、余分な「イレギュラー」が存在していなければ。

「ところで、先程の説明には「ヘクソン」の名前が一度も出てきませんでしたね」

『——正直、私個人としてはこのまま無視したかったところなんだけどね』

「そうも言つてられないわよねえ、と藤林は諦めたように溜息を吐い

て姿勢を正した。

その表情は、産業スパイ事件の顛末を説明していたときよりも、よっぽど緊迫していた。

『今回捕まえた奴らの証言で、それらしき男の存在自体は確認されているわ。どうやら部隊に所属してたわけじゃなくて、あくまで“現地協力者”という立ち位置だったみたい』

「現地協力者ということは、元々日本にいたということですか？」

『それがよく分からないのよ。——何せ、奴は今まで“行方不明”だったんだから』

「行方不明？」

藤林は大きく溜息を吐いて、若干躊躇いがちに口を開いた。

『世界征服を企む珠黄泉族の野望が潰えて警察に逮捕された後、超能力者だったヘクソンも他の奴らと同じように普通の刑務所に服役していたわ。——だけどそれから数年後に世界各地で超能力の研究が行われるようになって、その流れで設立された陸軍の秘密研究機関にヘクソンが移されることになったの』

「早い話が、実験体選ばれたということですね」

『そういうこと。——でも奴もただで実験体になるほど大人しい性格じゃなくてね、研究機関に移動する途中で暴れられて逃げられちゃったのよ。事情が事情だから公表して大々的に搜索することもできないし、軍の方でも色々と手を尽くしてみたんだけど、結局は行方不明のまま時間だけが過ぎてったってわけ』

「そして今回の件で、100年弱ぶりに姿を現したということですか」
『しかも大亜連合の特殊工作部隊の協力者として、ね』

100年もの間どこに潜んでいたのか、なぜ大亜連合の特殊工作部隊の協力者になったのか、その詳しい経緯については知る由も無い。手掛かりがあるとすれば、しんのすけも習得している“ぶにぶに拳”という拳法、そしてそれを教えたときされる“玉蘭”という女性だろ
う。

しんのすけにもその辺りのことを尋ねてみたが、彼は“アイヤータウン”という春日部の中華街で彼女と知り合い、例の如く色々あった

後、修行に出るといふ彼女を見送って以来一度も会っていないようだった。軍としても彼と深い関わりを持つ人物としてマークしているものの、断片的な目撃情報を除いて足取りが把握できていないのが現状らしい。

『春日部の中華街で育った女性と、大亜連合の工作員に協力する超能力者、そしてその2人を繋ぐぷにぷに拳……。これらがどこまで深く関わっているのかは分からないけど、強力な超能力者だったヘクソンが更に大きな力を得たのは間違いないわね』

「しかし奴の言動を見る限り、自分を超能力開発の実験体にしようとした日本国に対して恨みを持っているようには感じられませんでした。奴がこだわっているのは、しんのすけ只一人のように思えます」

『過去に自分の野望を潰した彼に対する復讐ってことかしら？』
「にしては、恨みなどの強い感情は見られませんでした。しんのすけがどのような成長を遂げているのか興味があつた、というのが一番しっくり来ます」

『奴の動機は何にしても、再び彼の前に姿を現す可能性が高いってことね。——ねえ、達也くん』

藤林の呼び掛けに、達也は彼女に向き直って無言で続きを促す。

『不吉なことを言うようだけど……。今度の日曜日が“正念場”に思えてならないのよ』

「……奇遇ですね、俺もです」

『……日曜日、お互いに頑張りましょうね』

藤林との通話が切れ、達也はリビングのソファアームにどっかりと腰を下ろした。いつもと違う雑な動作が、彼の蓄積された疲労の大きさを物語っている。肉体的なスタミナに限れば1週間ほど徹夜と半徹夜を繰り返してもどうということはない彼にしては、かなり珍しいことである。

「お兄様……」

目を閉じて背もたれに頭を預ける彼の姿に、深雪が心配と不安を隠せない声を漏らした。

そして彼女は心の中で、或る“決意”を固めた。

第59話 「いざ横浜、だゾ」

次の日、土曜日。

本番を明日に控えた達也だが、午前中は他の生徒と同様に教室の端末で課題に取り組んでいた。さすがにこの日にもなれば作業という作業は無く、今日は本番と同じ段取りで作動状況を確認するというものだった。よって代表の出番は午後からであり、午前中の授業もいつも通り受けることに決めていた。

しかし周りの生徒達は普段通りとはいかないようで、論文コンペを話題にしたお喋りが教室のあちこちで交わされていた。元々担任のいない二科生の授業は半分自習のようなものとはいえ、基本は真面目なので普段はここまで騒がしくない。それだけ、このイベントが学校全体に注目されていることの証と言えよう。

「ねえねえ、達也くんは明日何時頃に会場入りするの?」

そんな授業時間の合間、エリカが達也の席にやって来て問い掛けた。さりげなさを装ってはいるが、その傍でレオが聞き耳を立てているのが丸分かりだった。

何を企んでいるのかは容易に想像できるが、特に隠すことではないので達也は素直に答える。

「8時に現地集合して、9時に開幕。30分のセレモニーの後、9時半からプレゼンがスタート。持ち時間は1チーム30分で、インターバルは10分。午前4チームで昼休憩は12時から1時で、午後5チームやるから終了時刻は4時10分。審査と表彰があつて、終了予定時刻は午後6時だ」

「……成程」

想像していた以上に詳細な答えが返ってきて、エリカは少々面食らった様子だ。

「それで、一高の出番は?」

「最後から2番目だから、午後3時だな」

「随分と後ね。時間が余っちゃうんじゃない?」

「まあな、だから市原先輩は午後に会場入りだ。俺達3人は機器の見

張り番とトラブルの対処とかあるから、午前から行くけどな」

「ふーん、現地集合なんだ……。デモ機はどうするの?」

「生徒会が運送業者を手配して、服部先輩が同行することになってい
る」

「あれ? 服部先輩って、市原先輩の護衛じゃなかったっけ?」

「当日は七草先輩と渡辺先輩が迎えに行く手筈になっている。――
で、どうしてそんなことを訊くんだ?」

達也の質問にエリカはたじろぎ、今まで無言を貫いていたレオが代
わりに口を開いた。

「……なあ達也、俺達にも護衛を手伝わせてくれないか?」

「それは構わないが、なんでそんな面倒なことにわざわざ関わろうと
するんだ?」

「まあ、せつかくあそこまで頑張って特訓したのに、何もしいまま終
わるのはちよつとな……」

「達也くんたちを助けるために特訓したのに、自分達の知らないところ
で事件が解決してるのって馬鹿みたいじゃない?」

レオの言葉に続けてエリカが言ったのは、おそらく火曜日の特訓鑑
別所でヘクソンと交戦したことを指しているのだろう。彼女として
はヘクソンのような敵を想定して特訓していただけに、とても悔しい
想いをしたに違いない。

「どんな動機にせよ、人手は多い方が助かるよ。鑑別所の襲撃者も取
り逃してしまった以上、何か起こる可能性は大いにあるからな」

「だったら達也、僕も護衛を手伝って良いかな?」

明らかに盗み聞きしていたであろうタイミングで声を掛けてきた
のは、幹比古だった。その隣には、遠慮がちに視線を向ける美月の姿
もある。

「十文字先輩の練習相手でしかないけど、それなりに鍛錬は積んでき
たつもりなんだ」

「え、えつと……。私は特に特訓とかしてないんだけど、もしかしたら
私の眼が何かの役に立つかもしれないし……。戦力にはならないと
思うけど、一緒に手伝わせてくれないかな……。?」

「ああ、人手は1人でも多い方が良いからな。頼りにしてるぞ、2人共」

達也の言葉に、幹比古と美月は力強く頷いてみせた。

そしてその横から、エリカが爆弾を投げつける。

「そういえば達也くん、当日は代々木くんも一緒に来るみたいよ。何か、達也くんと一度話をしてみたいんだって」

「……何だって?」

*

*

*

路上で呂リュウに襲われてから、平河姉妹は千葉家の道場に匿わせてもらっていた。姉の小春は論文コンペがあるのでレオとエリカを護衛として学校へ通っているが、妹の千秋は自主休学して基本的に道場で引き籠もっている。千葉の門下生が鍛錬を積む場所だけあって、戦力的な意味で自宅にいるよりよっぽど安全だ。

それに彼女達をここに連れて来たコージローも、その日からここで寝泊まりするようになっていた。拾ったのだから最後まで面倒をみるべき、というわけでもないが、自分の知らないところで彼女達の身に何かあれば目覚めが悪いのも事実だ。なので彼は現在、千秋の実質的なボディガードの役割を果たしている。

しかし今の彼には、それ以外にも重要な仕事があった。

「千秋さん、自分の体の真ん中にまつすぐ竹刀を振り下ろすことを意識して」

「うん、分かった」

「竹刀を振るときは肩も一緒に動かして。腕だけで振ると、手の握りが弱くなるから」

「ええと、こうかな……」

道場に閉じ籠もっている間、いつ来るか、そもそも来るかどうかも分からない襲撃者に対して気を張り詰めるのにも限界がある。何か気分転換になるものが必要であり、普段立ち入ることのない剣術の道場という環境、しかも剣道の中学チャンピオンが傍にいるということ

で、千秋はコージローに剣道を教わることとなった。

所作の1つ1つに気を配りながら竹刀を素振りし、コージローと簡単に試合形式の打ち合いをする。達也に対する嫉妬にも似た敵意に囚われ、そして命の危機に晒されることへのストレスで精神を摩耗していた千秋にとって、必然的に己を見つめ直す剣道の稽古は色々と学ぶことの多いものだった。

そうして汗を流し、休憩に入っていたときのことだった。

「失礼します。第一高校の市原さんという方が、平河千秋さんに御用だと伺っているのですが」

「……市原先輩が？」

千葉家の門下生が2人のいる部屋にやって来て伝えた内容に、2人は互いに顔を見合わせて首を傾げた。学校には自主休学の理由とその間の所在は伝えているのでここに来たのは理解できるが、論文コンペの本番を明日に控えたこのタイミングで鈴音が会いに来る意図が分からない。

とりあえず会ってみたいことには分からないか、と千秋は門下生の案内で応接室へと向かった。

「お久し振りです、平河さん。容態は大丈夫ですか？」

「は、はい。お陰様で、特に気分が悪いとかはありません」

今は代替わりしているとはいえ元生徒会役員、しかもあの七草真由美と渡辺摩利が信頼を置く鈴音を目の前にして、千秋は緊張を隠せず体を強張らせていた。

ちなみにソファーに座る彼女の後ろには、服部が手を後ろに組んで控えている。本来は鈴音1人で来るはずだったが、何かと物騒なことが起こっているからと真由美達に反対されたため妥協案として彼を同行させている、というのは千秋には知りようもない事実である。

「それで、市原先輩……。私に用事というのは……？」

「怒りに来たのではないので、そう緊張しなくて大丈夫ですよ。――

千秋さん、外を出歩くことに不安があるのは重々承知なのですが、明日の論文コンペを観に来てもらえませんか？」

「……ええと、それはまたなぜでしょうか？」

突然のお願いに、当然ながら千秋は疑問を口にする。

そんな彼女に、鈴音はまっすぐ見据えてそれに答える。

「後進の育成のため、ひいては学校のためです。——平河千秋さん、あなたは1学期定期考査の筆記試験において、魔法工学の科目で100点満点中92点という高得点をマークしました。これは学年全体でも2位、普通ならトップでもおかしくない成績です」

ちなみになぜトップでないかという点、他ならぬ達也が文句無しに満点を叩き出したためであるが、鈴音は敢えてそこには触れずに話を進めた。千秋もおそらく気づいているだろうが、若干眉を寄せた程度で口を開くことは無かった。

「夏の九校戦において我々一高幹部は、下級生に魔工技術師系の人材が乏しいという危機感を抱きました。1年男子の成績不振は精神的なものばかりでなくそこにも一因がある、というのが我々の見解です」

「……ですが、私以外にも優秀な人は——」

「確かに2年の中条あずささん、五十里啓くん、そして1年の司波達也くんと人材はいますが、言ってみればその3人だけで層が薄いのが現状です。一科生については教師の目も届きますが、二科生となると我々生徒会や部活連でなければ人材を見出すことはできません」

「……それで、市原先輩は私に目を付けたということですか？」

遠慮がちな千秋の問い掛けに、鈴音はそのまっすぐな視線のまま頷いた。

「千秋さん、あなたはどうかやらハードウェアの方が得意なようですね。1年生の内なら魔法工学もソフトが中心ですが、2年生になればハードの比重が大きくなっていきます。一方司波くんは、この3週間一緒に作業して分かりましたが、ソフトに比べてハードをあまり得意とはしていないようです。もちろん高校生の水準を大きく上回っていますが、〃かけ離れた〃と呼べるほどではないと思われま

「……………」

「司波くんにはソフトの分野を、そしてあなたにはハードの分野を。双方で力を補い合いながら、ぜひともその才能を母校のために役立てていただきたいのです」

今まで黙って鈴音の話を聞いていた千秋が、ここで初めてフツと笑みを浮かべた。

鈴音の見る限り、それは自嘲的なものではなかったように思えた。「失礼ですが、市原先輩がそこまで愛校心のある方だとは思いませんでした」

「私の愛校心は、誰にも負けないものだとは自負しております」

真面目な表情でそう言い切る鈴音に、千秋はフツツと笑い声をあげた。

「お心遣い、感謝致します。——実を言いますと、元々行く予定ではあったんです。私達のボディガードをしてきている人が論文コンペに用事があるようですし、何より姉が代表なので」

「おや、それでは出過ぎた真似でしたね」

「いいえ、そんなことは……。市原先輩にそこまで言っていただけで、とても有難かったです。その期待に応えられるかどうかは分かりませんが、自分なりにできるところまでやってみようかなって思えてきました。あははっ、我ながら現金ですよね」

弱々しく、しかし確かな笑顔を浮かべてそう言う千秋に対し、
「……………」

鈴音の表情は、下級生からの感謝を受け取るにしては少々固かった。

「あの、市原先輩……。ご気分が優れないようでしたら……」

「いえ、心配には及びません。ちよつとした自己嫌悪ですので」

千葉家を後にしてしばらく歩いた頃、鈴音と服部の間でそのような会話が交わされた。『自己嫌悪』というフレーズに服部は引っ掛かりを覚えたものの、それ以上尋ねることなく黙って彼女の後をついて

いく。

そうした空気の読める性格だからこそ、鈴音は服部に同行を許したのである。

——まったく、自分の小賢しさが恨めしいですね。

鈴音は実際に千秋と顔を合わせるまで、達也へのライバル心を焚きつける形で彼女を立ち直らせようと考えていた。しかし実際に会ってみて彼女の精神状態が想像以上に回復傾向にあったのを見て、咄嗟に『自身の才能を学校に役立ててほしい』と自分の想いを正直に打ち明ける方向にシフトしたのである。

それもひとえに、母校のためだ。

市原家は元々「一花^{いちはな}」と名乗っていたのだが、数字を剥奪されて現在の名字となった「数字^{エクストラ}落ち」である。彼女の父は魔法師のコミュニティで厳しい孤立を味わっており、その影響か鈴音は魔法師の社会に対する帰属意識を持ってないでいた。

そんな彼女が初めて帰属意識を持ったのが、現在通っている第一高校だった。そしてそのきっかけを与えてくれた真由美に対し、恩義にも近いものを感じている。

今回千秋を立ち直らせようとしたのも、結局のところは彼女自身を想うてのではない。ましてや、自分と同級生の姉を想うてのことでもない。結局は母校のため、つまり自分の想いを優先した結果でしかなかった。

——まあ、誰が不幸になるわけでもないですし。

自身の葛藤に、鈴音はその台詞でケリを付けた。

*

*

*

一高は会場まで近いので当日現地集合でも問題無いが、遠方の学校は前日あるいは前々日に現地入りしてホテルに宿泊することになる。

それは旧石川県を本拠地とする第三高校も同じであり、「カーディナル・ジョージ」こと吉祥寺真紅郎をメインとする代表選手だけでなく、当日の会場の警備や応援の生徒達も前日に横浜入りすることに

なっている。

「ジョージ、そろそろ横浜に着くぞ」

「……ん？ もうそんな時間か」

電子書籍の世界に没頭していた真紅郎は、将輝の呼び掛ける声をきっかけに現実世界へと戻ってきた。携帯端末から視線を離してバスの窓に目を遣ると、バスを丸ごと収容する長距離高速列車の窓越しに高層ビルがびっしりと建ち並ぶ港町が見えた。さらに遠くに目を凝らすと、横浜のランドマークである横浜ベイブリッジも見える。

「こうして実際にこの目で横浜の景色を見ると、いよいよ本番って感じがするな」

「そうだね。——明日の今頃は、『アイツ』とも顔を合わせてる頃かもね」

普段滅多に乱暴な言葉を使わない真紅郎の口から飛び出した『アイツ』という単語に、しかし将輝はそれを訝しむことなく力強く頷いた。2人の目には、ありありと闘志が浮かび上がっていた。

2人がここまで対抗心を燃やす『アイツ』とは、言うまでもなく司波達也のことである。九校戦で彼を含むモノリスチームに苦渋を味わわされた真紅郎にとって、今回の論文コンペはまさに雪辱戦である。将輝は直接対決することはないが、まるで自分のことのように真紅郎を応援していた。

そんなことを考えている内に、列車がターミナルへと到着した。とはいえ彼らはこのままバスで宿泊先のホテルまで一直線に向かうので、到着した感覚はあまり無いかもしれないが。

そういえば、と真紅郎がふいに口を開いたのはそのときだった。

「野原しんのすけくんも、当日は会場の警備を担当するのかな？」

「どうだろうな……。俺も詳しいことは聞いてないが、風紀委員は警備に参加する習わしがあるようだし、おそらくはそうなんじゃないかな？」

「そうか。将輝としては彼に会えるのは楽しみなんじゃないかい？」

「そりゃあな。とはいっても、今回は九校戦みたいに戦ったりすることも無いだろうし、会えたとしても少し喋る程度だろうけどな」

将輝の言葉に真紅郎も「確かにそうか」と納得顔で頷いた。

そしてその直後、その顔をハツとしたものへと変える。

「彼で思い出したけど、九校戦にも来ていた酔乙女あいつも今回の論文コンペに来るみたいだよ。もつとも、彼がいるからというわけじゃないけど、初回るときから毎回観覧に来ている常連らしいけどね」

「そうなのか。確かに論文コンペは魔法工学関係の企業も注目しているから、観に来るのも当然といえば当然か」

「とはいえ、企業のトップ陣が直接来るのはかなり珍しいけどね。しかも彼女一人じゃなく、将来有望な若手社員も引き連れて観に来るって話だ」

「へえ、そりや気合入ってんな。だとしたら、ジョージも彼女にスカウトされるかもしれないな」

「……もしそうだったら、将輝はどうする？」

「それは困る。俺の参謀はジョージだけだからな」

「……まったく、少しは自分でも鍛えてほしいものだよ」

真紅郎の台詞は将輝を咎めるものだったが、口元の緩みが隠しきれないせいで説得力が半減していた。

第三高校の生徒達が貨物用ターミナルから横浜入りしたのとほぼ同時刻、普通の乗客用のターミナルに乗り入れた長距離列車から一人の少年が下り立った。カジュアルな装いと大きめのスーツケースを転がすその姿は、周りの旅行者に紛れても違和感が無い。

そんな少年が多くの人でこつた返すプラットフォームをぼんやりと眺めていると、その人混みを掻き分けるようにこちらへと近づくと、高級なビジネススーツを身に纏う男を見つけた。少年が男を迎えるようにそちらへ歩いていくと、途中で視線のあったその男は若干慌てた様子で頭を下げた早足になった。

「新幹線での長旅、お疲れ様でした。私、本社秘書課の佐法さほうとすゐるぞう土擦造とすゐるぞうと申します」

「よろしくお願ひします」

「社長代理は近くのレストランでお待ちになっておりますので、ご案内させていただきます。宜しければ、そちらのお荷物もお持ちします
が」

「大丈夫です、これは自分の手で持っておきたいので」

「かしこまりました。……ところで、もうお一方いらつしやると伺っておりましたが」

「彼女は……寝坊したようで、遅れて来るとのことですよ」

高級なビジネススーツ姿の大人が、旅行者にも見える少年に対して物腰低く接するというのは、周りにはちぐはぐな光景に見えることだろう。幸いにも周りの人々は自分のことや来たる横浜に思いを馳せているため、それには気づいていないようだった。

佐法土がどこかへと電話を掛けている間、少年はおもむろに携帯端末を取り出した。その画面に明日開催される論文コンペの案内が表示され、各学校の発表する順番と論文のタイトルが掲載されている。

1番：第二高校 『収束魔法によるダークマターの計測と利用』

2番：第四高校 『分子配列の並べ替えによる魔法補助具の製作』

3番：第五高校 『地殻変動の制御とプレート歪曲エネルギーの緩やかな抽出』

4番――

専門的な単語が並び、普通の人ならば何を言っているのかすら分からないそれを、少年は平然とした表情を崩すことなく眺める。

そうして画面をスクロールする指が、ピタリと止まった。

8番：第一高校 『重力制御魔法式熱核融合炉の技術的可能性』

「……………」

少年はじつと、その文面を見つめていた。

*

*

*

その日の夜。

「それでは無事に事件解決したということ、かんぱーい！」

よねによる音頭で始まったその飲み会は、横浜港を望む高層ビルの

複合施設・横浜ベイヒルズタワーの最上階付近にあるバーラウンジ——ではなく、主要道路から1本路地裏に入ったところにある大衆居酒屋にて行われていた。

参加者はよねの他に、藤林、千葉、そして稲垣の計4人だった。すなわち例の産業スパイ事件を共に捜査していた面々であり、普段はこういう場所にほとんど縁の無い藤林と千葉は周りの喧騒と席の狭さに若干辟易している様子だった。もしもよねが「お堅い場所は肩肘張って仕方ない」と駄々を捏ねなければ、今頃はもっと静かで高級感のある場所にいたことだろう。

「皆さん、今回の件では本当にお世話になりました。特に犯人グループの摘発は、皆さんの協力が無ければ成し遂げられなかったことでしよう」

「いえいえ、今回のヤマは藤林さんのおかげで解決の目処がたったわけですし、せめて肉体労働は我々が務めなければ」

藤林の礼に、千葉が気軽さを含めた明るい声色で答えた。もしも彼女がバッチリとドレスアップした艶やかな姿をしていたら、妹から「和かずあにうえ兄上は女性にだらしない」と詰られる程度には遊んでいた彼ですら初心うぶな少年のように胸の鼓動を早くしていただろうが、大衆居酒屋でそんな格好をするはずも無いのでそんな事態にはなっていない。

そんな千葉の言葉に続いて、よねも藤林への感謝を口にする。

「ホントホント、響子さんがいなかったらもつと事件の解決が遅れてたでしょうね。いくら有給が貯まっていたとはいえ、いつまでも捜査を続けてるわけにもいかなかっただろうし」

「いえいえ、そんなことは無いですよ。皆さんの協力あってこそですよねさんなんて、真っ先に犯人グループのアジトに乗り込んで……その、フフツ、いえ、すみません」

「ちよつ、響子さん!?! なんで笑ってんの!?!」

「そうですよ藤林さん、彼女だって頑張って……ククツ」

「敏和くんまで!?! ——稲垣くん、この2人どう思う!?!」

「1人だけあんな立ち回りしていたら、そりゃそういう反応にもなりませんよ」

「ひどい！」

何かを思い出したのか笑いを堪えるのに必死な藤林と千葉、そして一番辛辣な言葉を吐く稲垣に、よねは不機嫌になってグラスのチューハイをグビグビと呑み干した。ちなみに何が起こったのかは彼女の名誉のために敢えて伏せておくが、例えるならば周りの刑事たちが『密着！警察24時』だったのに対し、彼女だけが『香港映画の最後に流れるNGシーン集』だった、といったところだろうか。

さて、そんなよねを3人で宥めてしばらく飲み会が進んだ頃、ふいに藤林が思い出したように口を開いた。

「そういえばよねさん、明日この街の国際会議場で、高校生による魔法学の論文コンペが開かれるんですよ」

「ああ、そうそう。アタシに事件の捜査を依頼してきた男の子が、そのコンペの代表なんだって。知り合いの男の子も観に行くみたいだし、せっかくだからアタシも観てみようかなって思ってる」

「それなんですけど、私もぜひお供させていただきませんか？」

「響子さんも？別に良いけど、そういうの好きなの？」

「ええ。それによねさんに捜査を依頼したその男の子、優秀な魔法師なんですよね？ぜひとも会ってみたいです」

「……あれ？響子さんにそこまで話したっけ？」

「この前一緒に飲んだとき、話してたじゃないですか。酔ってて憶えてないんですか？」

そうかな、そうかも、とよねが首を傾げながら呟く間、藤林の視線が千葉へと向いた。

「お2人も、ご一緒に如何ですか？」

「いえ、とても魅力的なお誘いではありますが、我々は遠慮させていただきます」

「あら、そうですか？何ならいつそのこと、部下の皆さんと一緒に来ていただければ、と思ったのですが。——それはもう盛大に、CADだけじゃなくて武装デバイスや実弾銃も一緒に持って」

愛想笑いを浮かべていた千葉の表情が、藤林のその言葉によって途端に引き締められた。

「——藤林さん、それって……」

「もちろん、何も起こらなければそれで良いのでしようけど」

藤林はそう言つて、グラスのワインを傾けた。

やはりこういう店のワインは値段相応か、と僅かに顔をしかめた。

*

*

*

明日——暦の上では今日、横浜にて『全国高校生魔法学論文コンペティション』が行われる。とはいえ街が特殊な雰囲気にも包まれるわけではなく、街の人間にとっては数多あるイベントの1つに過ぎない。横浜の主要な歓楽街の1つである横浜中華街も、いつものように客を呼び込んで営業し、いつもの時間で閉店にしている店が大半だった。

そして中華街の中でも一際大きなその店も、いつもの時間に店を閉めて明かりを落としている。現在明かりの灯っているこの部屋は、入口からは見えない奥まった場所にあつた。そこでは2人の男性が向かい合つて座り、テーブルには最高級の酒が入つた2つのグラスがそのまま放置されている。壮年の男性がなかなか手をつけないので、年若い青年もお預けを食らつていた。

「如何ですか、ヘクソンさん。それなりの上物を用意したのですが」
「分かつた。頂こう」

壮年の男性・ヘクソンがグラスを手にとって口をつけたことで、ようやく周もご相伴あずかに与ることができた。店でもなかなか出せない最高級の老酒ちゅうゆうは味もまろやかで香りも深く、口の中で転がして嚙下した周がフツと笑みを零すほどだ。

「陳閣下チエンからご報告がありました。本国から艦艇が派遣されるそうです。おかげで無事に『次の作戦』を遂行できる、と仰っていましたよ」

「そうか」

ヘクソンのぶつきらばうな返事にも、周は眉一つ動かさない。

「やはりあなたの関心事は、野原しんのすけ只1人というわけですか

「？」

「それでは不服か？」

「いえいえ、滅相もない。それでこそ、あなたと手を組んだ甲斐があるというものです。——とはいえ今のあなたは閣下達の協力者、関係が壊れない程度にはお付き合いをお願い致します」

「その心配はいらない。——どう転んだところで、どうせ明日には全てが終わる」

予言めいたことを言うヘクソンに対し、周は軽く肩を竦めるだけだった。

「私としては明日の、いえ、暦の上では今日ですか。閣下達の作戦でこの街になるべく被害が及ばぬようにしてもらえれば、とりあえずはそれで構わないのですが」

「私としても、一応の努力はしよう。そのうえで、私から言わせてもらうならば、」

ヘクソンはそこで一旦台詞を止め、周へと視線を向ける。

「そういうのを、この国では“フラグ”と呼ぶそうだ」

「いや、本当に止めてほしいのですが」

周のその言葉は、彼にしては非常に珍しく、彼の素が垣間見えるものだった。

*

*

*

こうして10月30日は、すぐそこまで迫っている嵐を感じさせないほど静かに幕を開けた。

第60話 「横浜に続々と集合だゾ」

10月30日。全国高校生魔法学論文コンペティション開催当日。達也と深雪、そしてしんのすけの一行は、道中これといったトラブルも無く予定通りの時刻に会場に到着した。舞台装置を乗せたトレーラーもすでに到着して荷台を下ろした後であり、五十里や花音、そして紗耶香と一緒にいる桐原の姿も見える。

そして彼らの中に、よく知る人物達で構成されたグループの姿も確認できた。

「やあやあ皆様お揃いで。オラ達が最後？」

「おはよう、しんのすけくん。それに達也と司波さんも。——ほとんど差は無いし時間には間に合ってるから、あまり気にするほどじゃないと思うよ」

最初に口を開いた幹比古を筆頭に、美月・ほのか・雫の3人も揃って頭を下げた挨拶をした。

「随分と早く来たんだな。他のクラスメイト達は、確か午後に来るとか聞いてたが」

「そりゃ僕達は警備を手伝わしてもらったために来たからね。光井さんと北山さんにうっかりそれを話したら、連れてつてくれって言われちゃって」

「エリカ達だけでそんな面白そうなことさせられない」

「わ、私はあまり役に立てないかもしれないですけど、精一杯頑張ります！」

幹比古の言葉に、雫はいつもの無表情ながらどこか得意気に、ほのかも気合い充分といった感じに拳を握り締めていた。ほのかの言葉はこの場にいる全員に向けて言っているようだが、そして本人もそのつもりなのだが、その視線はチラチラと達也の方へ向いていた。

「ところで、一番張り切っていたエリカとレオの姿が見えないんだが」
達也がそう尋ねると、幹比古達は気まずそうな苦い顔をして、先程五十里達を見掛けた辺りを指差した。

その集団の中心に、エリカとレオの姿があった。

花音とエリカが険悪な顔で睨み合い、レオが傍で所在悪そうに佇んでいる光景つきで。

「達也くん、出番だゾ」

「……俺が止めなきやいけないのか？」

「そういうの、達也くん得意でしょ？」

深雪の仲裁では花音が耳を貸さないし、五十里では本人の意思に拘わらず中立ではいられない。他の面々は花音と親交が無いため割って入ることはできないし、しんのすけはご覧の通り自分で動く気は更々無い。

達也は溜息を堪えながら、睨み合っている2人の間に割って入った。

「どうしたんですか？」

「あ、達也くん！ おはよー！」

達也の登場に、エリカは目の前の相手を無視して笑顔で挨拶をした。その態度が、花音の神経をますます逆撫でさせる。

「……司波くん。この聞き分けの無いお嬢さんに、あなたから何か言ってくれない？」

——あなたから「も」じゃなくて、か……。

本人が意識しているかどうかはともかく、彼女は達也にこの事態の收拾を丸投げするつもりらしい。とはいえ達也としても、誰かの介入があるよりは自分1人で仕切った方が手っ取り早い。

なので達也は、すべて自分に任せるという条件付きでそれを引き受けた。花音は一瞬間な顔をするが、隣にいる五十里が何も言わないことで渋々同意した。

「2人共、何してんの？」

その場を離れて開口一番、しんのすけのシンプルな問い掛けがレオとエリカの心を抉った。本人としては責め立てる意図は無く純粹な疑問だったのだが、迷惑を掛けてしまった気まずさを自覚していたためにそう受け取ってしまったのだろう。

「……ごめん、達也くんの手を患わせちゃって」

「まあ、事情はだいたい察したよ。何も真正面からぶつかるとは無

いだろうに」

「だってあの女、アタシ達が警備の手伝いに来たって言ったたら『部外者は大人しくしてなさい』って言うのよ！」

そのときの怒りがぶり返してきたのか、エリカが眉を吊り上げて力強く主張した。

そんな彼女に達也は先程堪えた溜息を吐いて、反論しようとして——
「そりや言うでしよう。向こうからしたら、僕が部外者なのは間違いない事実なんだから」

「——！」

突如背後から聞こえてきたその反論に、達也たちが一齐にそちらへと振り返った。

そこにいた少年は、全体的に体の線が細く身長も男子の平均より少し下、濃いブラウンの髪はオシャレに整えられ、その相貌は爽やかながら中性的だった。もしその肩に竹刀袋を携えていなかったら、どこのアイドルかと思っていたかもしれない。

そしてそんな彼に真つ先に反応したのは、しんのすけだった。

「おおつ、よよよぎくん！ お久しブリブリ〜」

「久し振りだね、野原くん。名前についてはもう諦めたよ」

おそらく100年もの間に散々呼ばれたのであろうその呼び名に、コージローは苦笑いを浮かべていた。達也と深雪、そしてレオとエリカ以外の面々は初めて見る顔に首を傾げていたが、しんのすけが親しくしていることで彼の旧友なのだと推察する。

むしろ彼らの場合、その興味はコージローの後ろに隠れるようにして立つ平河姉妹に向けられていた。その視線に気づいた千秋が気まぐすそうに顔を伏せ、姉の小春が頭を下げて挨拶をする。

ほのかと雫の2人が、姉妹に近づいて声を掛けた。

「初めまして、事情はエリカから聞いてるよ。えつと……」

「平河先輩、本番頑張ってください。応援してます。——千秋さんも、私達と一緒に先輩の発表を観ようね。分からないところがあつたら教えてくれると嬉しいな」

早々に言葉が詰まり始めたほのかに代わり、雫がそれぞれに対して

声を掛ける。小春は先輩らしく余裕のある微笑みと共に「ありがとう」と返し、千秋はほとんど消え入りそうな声ながらも「よろしく……」と俯きがちに頷いた。

そんな遣り取りの横で、達也の存在に気づいたコージローが歩み寄る。ニコニコと笑みを浮かべているが、それを迎える達也にはどうにも芝居がかった胡散臭さが含まれているように感じた。

「初めまして。ひよつとして君が司波達也くんかな？　千葉さん達から色々とは話は聞かせてもらったよ」

「どんな話か気になるところだな。こちらこそ初めまして、代々木コージロー。中学の剣道大会でのしんのすけとの試合、動画で観させてもらった」

互いに挨拶を交わして、握手を交わす。ガツシリと力強く握り合うが、握力勝負を始めたたり不意打ちでの組み手を始めたりすることなく、あっさりとその手は解かれた。

「ああ、あの試合か。恥ずかしいな、魔法師からしたらそう大したものじゃないでしょ？」

「そんなことはない、大変参考にさせてもらった。次はぜひとも、審判や観客に配慮しない本気の剣技を見てみたいものだ」

「——ああ、やっぱり分かるかい？　僕も野原くんも本気でやり合ったら審判が判定できないからさ、審判の目にも見えるスピードに抑えなきゃいけないかったんだよ。それでも手を抜いたつもりは無いし、僕としても久々に楽しい試合だったよ」

「成程、それだけの腕があるのなら、百家本流の剣術道場を潰すのも領ける」

「……言っておくけど、僕は『人間主義者』ではないからね？」

「大丈夫だ、それは分かっている」

なら良かった、とコージローはニコリと苦笑した。この部分だけは、演技ではない素の部分が見えたように思えた。

そうして挨拶を済ませた達也が、エリカへと視線を向けた。

「それにしても、彼も警備に参加させると言ったのか。そりゃ突っ返されて当然だな」

「部外者なのは分かってるのよ？　でもさ、彼の実力を知って何もさせないってのも……ねえ？」

「というか、本人はそのことを了承しているのか？」

「いやいや、僕はただ平河さんの付き添いと、単純にこのイベントに興味があつて来ただけで、会場の警備に参加するつもりなんて全然無いよ」

キツパリと否定するコージローに、エリカが「話が違う」とばかりに彼を睨みつけていた。

しかしその後すぐ、彼はこう続けた。

「僕はただ客席で、みんなのことは見ているだけだから。万が一会場で何か事件が起こったら、そのときは善良なる市民として協力するつもりではあるけどね」

「……そうか、それなら問題ねえよな」

「そうね。代々木くんはただ、その場に居合わせただけなんだから」
エリカもレオも彼の言葉にピンときたようで、いかにも悪巧みしているような不敵な笑みを浮かべていた。先程までのしおらしい態度が嘘のようである。

そんな2人の態度に達也は肩を竦め、そして口を開く。

「せっかく来たんだ、レオもエリカも暇だったら楽屋まで遊びに来れば良い。友達なんだから遠慮はいらないさ」

「……そうよね。友達なんだから、当たり前前よね？」

「そうだな、達也。後で邪魔させてもらうぜ」

声をたてずに笑う2人に、達也も同じような笑みを浮かべていた。
「よよよぎくんもみんなも、何だか回りくどいゾ。素直に手伝うって言えば良いのに」

「回りくどい方が上手く回るときもあるんだよ、野原くん」

しんのすけのツツコミに、コージローが苦笑いでそう言った。

*

*

*

開幕時間が近づいてくるにつれて、どの学校の控え室も賑やかに

なってきた。順番が後ろになるほど長く待たされることになるが、論文コンペに参加するような生徒は代表もサポーターも他校の発表に強い関心を持つているものだ。なのでロビーでは、他校の生徒同士で談笑する光景もよく見受けられている。

そんなロビーの片隅に、遥の姿があつた。生徒達の喧騒に紛れてコーヒーを飲む彼女の視線の先には、達也たち第一高校の控え室へと繋がるドアがある。

4月の事件以来、彼女の所属する公安の部署では達也やしんのすけの正体について深い関心を寄せていた。彼女の上司の話によると、身辺調査をしようとした矢先に上から圧力が掛かったらしい。やるなと言われると却ってやりたくなるのが人間というもので、かといって正規の調査員を動かすわけにもいかず、彼らの通う第一高校に潜入している遥に自然とその役目が回ってきた。

不本意とはいえ組織の人間である遥がそれを断れるわけもなく、仕方なく引き受けたものの結果は芳しくなかった。カウンセリングと称して様々な情報を聞き出すことを得意とする彼女だが、しんのすけはカウンセリングそっちのけでナンパしてくるし、達也に至ってはそもそもカウンセリングを受けたことが無い。よって彼女は遠巻きに彼らの動向に目を光らせるという、何ともアナログで効果も疑わしい消極的な方法しか採ることができなかった。

しかし今回に限って言えば、それも一応の成果があつた。

「あの人、まさか……」

一高の控え室に足を運んだ一人の女性に、遥は思わず独り言を漏らしていた。おそらく自分と同世代であろう彼女に見覚えのあつた遥は、公安御用達の隠しカメラで撮影した映像を端末に読み込ませて画像検索を掛けた。

「やつぱり……、エレクトロン・ソーサリス『電子の魔女』……」

遥が学生するとき、第二高校を九校戦優勝に導いた彼女はまさにヒーローだった。魔法科高校の入学試験に落ちたことで魔法師としての夢を絶たれた遥にとって、藤林響子というのは嫉妬と憧れの的だった。

そんな彼女が母校である二高ではなく、達也たちのいる一高の控え室へとやって来た。もしかしたら九校戦で活躍した彼らを青田買いに来たのかもしれないし、単に司波兄妹としんのすけ以外は部屋にいないことを知らずに来たのかもしれない。

しかし遥の直感は、達也たちとの密接な関係を疑わずにはいられなかった。

それにしても、

「彼女と一緒に部屋に入った女性は、何者なのかしら……？」

「やつほー、達也くんにしんちゃん」

「おおつ、よねちゃん」

部屋のドアを開けて顔を覗かせるよねに、しんのすけが真つ先に反応した。達也は少しだけ意外そうな表情を浮かべ、そして深雪は見覚えの無い彼女が兄の名を呼ぶことに首を傾げている。

挨拶もそこそこに部屋に入ってきたその女性・よねは、黒いタンクトップの上から緑色のフライトジャケットを羽織り、ショートパンツから少し日焼けした長い脚を惜しげも無く剥き出しにしたワイルドな出で立ちという普段通りの格好をしていた。魔法学や魔法工学の研究成果を発表するイベントの聴衆には似つかわしくないであろうその姿に、深雪がますます不思議そうに彼女の正体を推し量ろうとしている。

しかし結局答えは出ず、素直に兄に尋ねることとした。

「お兄様、この方は……？」

「この間の産業スパイ事件の捜査を個人的に頼んでいた、千葉県警の東松山よねさんだ。しんのすけとは昔からの知り合いなんだそうだ」

「お兄様……ってことは、この子、達也くんの妹？ ふへー、随分と美人さんじゃない」

「んで、なんでここに来たの？」

不躰と思われても仕方ないほどに深雪をまじまじと眺め回すよねだったが、しんのすけの一言で我に返ったのか慌てて身を引いた。

「いや、せっかく事件も解決したことだし、せっかくだから観ていこうかと思って」

「観たってどうせ分からないのにな？」

「べ、別に良いじゃねえか！ そりゃ、若干場違いだなんて思うけど！」

「それで、わざわざ挨拶に来てくれたというわけですか？」

「ああ、そうそう。それもあるんだけど、達也くんに会いたって人がいてさ」

「俺に？」

達也が首を傾げていると、よねが後ろを振り返って「響子さん」とドアの向こうに呼び掛けた。その名前に司波兄妹が、観察力のある者がよく目を凝らしてようやく違和感を覚える程度に小さく反応する。

そうして部屋に入ってきたのは、よねと違って露出の少ない落ち着いた平服姿の女性だった。

「司波達也くんね？ 初めまして、防衛省技術本部兵器開発部所属で技術士官をやっている、藤林響子といいます」

「……初めまして、司波達也といいます」

「妹の、司波深雪と申します」

もちろん達也も深雪も藤林とは初対面ではないが、彼女が『初めまして』と言ったからには「そういう設定」で接してほしいということの意味している。よねやしんのすけという事情を知らない人間がいる以上妥当な判断だろう、と2人は即座にそれを察して初対面の振りをした。

ちなみに彼女が口にした「防衛省技術本部兵器開発部所属の技術士官」というのは偽造ではなく、正式に拝命されている本物の肩書である。

そうして藤林が口を開き――

「おおっ！ お姉さん、オラのこと憶えてる!？」

司波兄妹の背後にいたはずのしんのすけが、一瞬で2人を通り過ぎて藤林へと詰め寄った。彼女の両手を握り締めて目をキラキラさせる彼の姿に、出来る女の雰囲気醸し出していた彼女が思わず顔を引

き攣らせる。

「どうしたの、しんちゃん？ 響子さん知り合い？」

「九校戦でオラの試合を観に来てくれたお姉さんだゾ！ お姉さんが応援してくれたから、オラは優勝できたんだゾ！」

「え、ええ、そういつた場所から有望な人材を探すのも、私の仕事の1つだから」

「成程。ひよつとして自分に用事というのは……」

達也の助け船もあって、藤林は目の前のしんのすけから彼へと視線を移した。

「ええ、その通り。九校戦で類稀なる活躍をしたエンジニア兼選手であるあなたと、ぜひともお近づきになりたかったの。産業スパイ事件と一緒に捜査したよねさんがあなたを知ってるって聞いたから、ここまで連れて来てもらったの」

「綺麗なお姉さん。オラも一緒に如何ですか？」

「えつと……、あなたはまたの機会ということだ」

しんのすけの誘いを愛想笑いで断って、達也へと向き直る。

「できれば色々と説明したいところだけど、本番前にそんな時間を取らせるのも忍びないし……。詳しいことについてはこれに書いてあるから、後で時間のあるときにでも見てちょうだい」

「分かりました。拝見させていただきます」

達也は軽く頷いて、藤林が差し出したデータカードを受け取った。おそらくこの中には、今回の一連の騒動について早急に達也に報告したい事柄が記載されているのだろう。

「それじゃ、私はこれで失礼させてもらうわ。本番頑張っつてね、達也くん」

「んじゃ、しんちゃんも警備頑張るな」

「よねちゃんも、客席でイビキを掻かないように頑張っつてね」
「うっせ」

藤林は達也に軽く手を振って、よねはしんのすけに軽く悪態を吐いて楽屋を出ていった。

「お兄様、警察の方に捜査を依頼してらしたのですね」

「ああ、成り行きだけだな」

「そうそう。達也くんと一緒にオカマバーに行つたときに――」

「――はっ?」

達也が思わず「馬鹿」と言いかけ、しかしそれよりも前に深雪が耳聴く拾い上げた。

とても美しく、だからこそ底冷えするような恐ろしい声と共に。

「……しんのすけ、どうしてくれるんだ」

「とつくに説明してると思ったゾ……」

*

*

*

時刻は8時45分。そろそろ客席も埋まりかけているであろう頃。

エリカとレオを筆頭とするそのグループは、ロビーの自動販売機前に置かれたベンチに腰を下ろし、ロビーを行き交う大勢の人々に目を光らせていた。とはいえその真剣具合には個人差があり、エリカとレオが最も熱量が高く、幹比古と雫が次点、見張るといつても何を基準にすれば良いか分からない美月とほのかがその後につき、そしてコージローと千秋は飲み物片手に完全にリラックスしていた。

そんな中、美月がロビーを眺めながら口を開く。

「それにしても、九校戦を観た後だからかな、結構知ってる顔が多く感じるね」

「確かに。特に警備スタッフの中には、九校戦にも代表選手として参加していた生徒も多くいるからね」

美月の言葉に同意した幹比古の言う通り、実力が物を言う警備スタッフと九校戦の代表選手は被っていることが多い。そもそも会場内の警備を担う“九校共同会場警備隊”のリーダー自体が、モノリス・コードの優勝チームから選ばれるという不文律がある。同じ高校生を主体とした大会である以上、密接な繋がりが生まれるのは必然だろう。

しかし中には、九校戦の代表選手でなかった生徒が警備スタッフに選ばれることもある。

例えば、言わずと知れた第三高校の一条将輝のパートナーとして一緒に会場を見回っていた、第一高校の生徒とか。

「あの人は確か、1年B組のとみつかはがね十三束鋼だっけ」

「違うクラスなのによく知ってるな、エリカ」

「そりゃあ、彼の『レンジ・ゼロ』は有名だもの。というか、レオも少しくらいはそういう知識を入れておきなさいよ」

エリカの言葉に、美月・ほのか・雫の3人が人知れず気まずそうな表情を浮かべていた。ちなみにコージローもその情報は知らなかったが、そもそも彼は魔法関係の人間ではないため特にダメージは無い。

そんな遣り取りも終わって互いに会話がなくなった後も、エリカ達は自主的なロビーの看視を続けていた。途中、警備スタッフの証である腕章を付けた森崎がやたら張り切った様子でロビーを横切ったが、彼女達は特にそれを気に留めることなく看視を続ける。

しかし彼女達のそんな態度は、1人の少年が話し掛けてきたことで崩された。

「何してるの、みんな？」

「えっ？——あれっ？ ボーちゃんじゃないの！」

思わぬところで顔を合わせた思わぬ顔見知り・ボーが目の前に現れたことで、エリカ達は破顔してベンチから立ち上がった。10日間一緒に九校戦を観て回った記憶は未だ色濃く残り、2ヶ月半ほど顔を合わせなかったとしても褪せることは無い。

逆に言えば、その記憶が無いコージローと千秋は座ったままだった。

「ボーちゃんだけ？ 他のみんなは？」

「今日は僕だけ。他のみんなは都合がつかなかったり、そもそも興味無かったり。僕はこういうの好きだから、毎年観に行ってる」

「へえ、そうなんだ。せっかくだから、アタシ達と一緒に観ない？」

「ごめん。先約があるから」

「そっかあ、残念。——先約ってというのは、あそこにいる彼女のこと？」

エリカがニンマリと笑って視線を向けたのは、彼女達から少し離れたところでこちらの様子を窺っていた1人の少女。

年齢は自分達と同じくらいで、紫色の長い髪をサイドテールに縛り、その反対側に黒いリボン、そして髪と同じ紫色のオーバーオールという恰好だからか幼い印象を受ける。一斉に視線を向けられて驚いたのかビクツと肩を跳ねさせ、おっかなびっくり近づいてくる様子から、ネネとは対照的に大人しく引つ込み思案な性格のようだ。

「ボーちゃん、この人達知り合い……?」

「九校戦のときに知り合った、しんちゃんと同じ学校の人達。——1人だけ違うけど」

「そっか。——えっと、貫庭玉サキっていいいます」

ペコツと頭を下げるその少女・サキに、エリカ達が一斉に挨拶を返した。そんな彼女達の反応に、サキは再び体をビクつかせる。

「んで、サキちゃんってボーちゃんのカノジョ?」

「違う。幼稚園の頃からの幼馴染」

「へえ、そうなんだ。もしかして、しんちゃんを探してる? 達也くんと深雪と一緒に楽屋にいるけど、会ってくれば?」

「いや、僕達も客席に戻る。——あいちゃんを1人にさせておくのも可哀想だし」

突然出てきた新たな名前にエリカ達は一瞬首を傾げるも、すぐにそれがしんのすけ達の幼馴染である酢乙女あいのことだと思いついた。

「彼女も来てるの? って、そりやそうか。優秀な人材を探すのには打ってつけだもんね。それでボーちゃんもサキちゃんも、彼女の付き添いってわけか」

「そう。下手に表に出ると混乱するから、裏から入ってVIP席に座ってる」

「成程ね。じゃあ、あんまり引き留めるのもアレか。論文コンペ、楽しんできてね」

「うん、そっちも。——代々木くんも、またね」

「うん、またね」

エリカ達の後ろに立っていたコージローに一言声を掛けて、ボーは

その場を去っていった。サキも皆に会釈してから、早足で彼の後を追い掛ける。

「コージローは、あの2人と話さなくて良いのか？」

「基本的に、野原くんを介しての付き合いだからね。友達の友達って、顔を合わせたときの反応に困らない？」

コージローの言葉に皆が共感していると、ロビーのスピーカーから女性の声でアナウンスが流れ出した。そろそろ開会式が始まることを知らせるものであり、それを境にロビーに屯たむろしていた人々が一斉に客席へと流れていく。

その流れに乗って、エリカ達も客席へと向かっていった。

九校戦が華やかな雰囲気で行われるのに対し、論文コンペは厳粛な空気で執り行われる。これは論文コンペが大学や企業や研究機関など「大人を相手にした発表会」であり、審査員や観客としてやって来る魔法学の権威を意識しているためだ。

そしてそれ以外の観客も、そのことはよく理解していた。開会式が近づくにつれ席に着く人の数が多くなり、それに比例して騒がしくなってくるホール内ではあるが、九校戦のようなお祭り騒ぎとはまた違った、言うなれば「秩序ある騒がしさ」と表現できる程度のものに抑えられている。

そんなホールの2階席、周りの観客席から切り離されて入口も別に作られたVIP席には、厳粛な空気を作り出す要因である「魔法学の権威」が顔を並べていた。審査員ではない魔法大学の教授や国立研究機関の重鎮、さらには日本でも有数の魔法工学メーカーの関係者など多種多様である。

そしてそんなVIP席の最前列に堂々と座るのが、酔乙女ホールディングス社長の一人娘にして実質的な次期社長、そして対外的には「社長代理」という肩書を持つ酔乙女あいだった。アナウンスがあるまでは周りの者達との挨拶回りや世間話で忙しかった彼女も、今は座席に腰を落ち着け開会式を待ち構えている。

と、こちらに近づいてくる気配に、あいは視線をそちらに向けた。ボーと、サキだった。

「あら、2人共お帰りなさい。しん様には会えたのかしら？」

「会えなかった。その代わり、代々木くんが千葉さん達と一緒にいるのを見た」

「代々木くんが？ いつの間に彼女達と知り合ったのかしら？」

あいが首を傾げている間に、ボーが彼女の右に、サキが彼女の左に座った。その際ボーは、座席に置かれたスーツケースをどかして足元に置き直している。

「怪しい奴がいらないか、ロビーを見張ってる感じだった」

「見張ってる？ 少し前に色んな企業で産業スパイ騒ぎがあったようだけど、それ絡みかしら？ ——まあ、私達は私達で発表を楽しみましょう。今年はどんな優秀な人材がいるかしらねえ」

「凄く、楽しみ」

「どうしよう、既に眠気が……」

値踏みする視線で見下ろすあいに、無表情ながら目をキラキラさせるボー、そしてアクビを噛み殺すサキ。

そんな三者三様の反応をする彼女達の見守る中、ついに論文コンペが幕を開けた。

第61話「始まったゾ」

午前9時。何の面白みも無い開会の辞が終わり、第二高校によるプレゼンが始まった頃。

遙は建物内にあるカフェで、コーヒーを片手にすっかりだらけていた。魔法技術そのものには関心が無く、達也としのすけの監視もいまいちやる気が見出せず、どうせならカフェで時間を潰した方がマシだと考えたからである。

コーヒー1杯で20分というのは、喫茶店からしてもあまり良い客とはいえない。そろそろ何か別のものを頼もうか、と遙が考えていたそのとき、

「すみません、相席しても宜しいでしょうか？」

突然声を掛けられた遙がそちらへと顔を向けた瞬間、彼女の心臓は一瞬だけ停止し、そしてその空白を補って余りあるほどにフル回転を始めた。どちらも彼女自身による錯覚だが、つまりはそれほど驚いたということである。

彼女に声を掛けたのは、先程第一高校の楽屋に入っていた藤林だった。一緒にいた女性は連れておらず、咄嗟に辺りを見渡してもその姿は見えない。

「……ええ、どうぞ」

若干の間を空けて返事をした遙に、藤林は「ありがとう」と品の良い仕草で腰を下ろした。すぐにやって来たウェイトレスに穏やかな声で紅茶を注文し、そうして運ばれてきた紅茶に彼女が口を付けてホウと息を吐くまでの間、遙はずっと彼女を見つめ続けることしかできなかった。

「……そんなに見つめられると、さすがに気恥ずかしいんですけど」

「す、すみません」

「いえ、『ミズ・フロントム』に関心を持ってもらえるのは光栄なことだと思いますので」

「――」

その藤林の台詞に、羞恥で熱を持っていた遙の心がスツと冷却され

た。

遥の異名である“ミズ・ファントム”は一般的に知られたものではなく、非法法の諜報活動に手を染める者の間でのみ囁かれる正体不明のスパイに対するコードネームだ。自分がそうであると特定されたという一事のみで、彼女にとっては決死の覚悟を決めるに足る。

彼女が動揺を表に出さずに済んだのは、もしかしたら春にレモンと名乗る女子生徒にその名で呼ばれた経験が生きたからかもしれない。

「……それで、『エレクトロン・ソーサリス電子の魔女』ともあろうお方が、私如きに何のお話でしようか?」

「これ以上申し上げなくとも、お分かりいただけただけなのでは?」

「すみません。私はあなたのように優秀ではなかったものですから」

「ご謙遜を。大学も研修所も優秀な成績でご卒業されていますのに。九重先生も高く評価していらつしやいましたよ」

「……………」

向こうはこちらを十分に調べ上げたうえでここに来ているのに対し、こちらが彼女を仕事の相手として意識したのはつい先程。

用意したカードで完全に上手うわてを行かれています以上、遥は自分が追い詰められていると認めざるを得なかった。

「何も無理なお願いをするつもりは無いんです。ただ『お互いの領分を守りましょう』と提案しているだけなのですよ」

「……仰っている意味がよく分かりませんが」

「はつきり申し上げても宜しいのですか?」

ギリツ、と遥の奥歯が鳴った。そんな彼女を、藤林は涼しい顔で見遣る。

「大丈夫ですよ。あなたが職務を遂行しなくとも、あなたにお咎めが来ることはありませんので。——それにこれは、あなた自身のためでもあるんです」

「……………どういう意味ですか?」

今までののは完全に理解していながらそれを認めたくないためしらばつくっていたのだが、この問い掛けに関しては完全に本心からのものだった。

そして今までは本心を悟らせないための仮面としての微笑みだった藤林が、ここに来て初めて感情を見せた笑みへと変わった。

その感情とは、遥に対する同情だった。

「——もう二度と、大勢の黒服に追い掛けられるような目には遭いたくないでしょう?」

そう言い残して軽やかに立ち上がった藤林の手には、遥の分の伝票も握られていた。テーブルでも会計が可能なのに、わざわざレジまで持つて行くところがまた嫌味だ。

しかし遥としても、まったく収穫が無かったわけではない。この夕イミングで釘を刺してきたということは、少なくとも藤林響子と野原しんのすけとの間には秘密にしなければならぬ関係があるということだ。それが分かっただけでも、今日ここに来た甲斐があったというものだ。

そうとでも思わなければ、遥はやってられなかった。

遥と別れた藤林がやって来たのは、というより戻ってきたのは、今まさに第二高校の生徒がプレゼンをしている真つ最中であるホールだった。よねと2人で自分達の席を確保した後、プレゼンが始まる直前のタイミングでトイレと偽って席を離れたのである。

プレゼンが始まって、まだ5分足らず。持ち時間は30分なのでまだまだ序盤であり、しかも1組目なので聴衆の気力も万全だ。

そんな状態の客席にて、

「くかー」

「……………」

もはや見事とでも言いたくなるほどに、よねは大口を開けて眠りかけていた。

5分も保たなかったかあ、と藤林はその光景を現実逃避気味に見下ろしていた。

*

*

*

第一高校にとって今日の主役である鈴音が到着したのは、3番目の発表校である第五高校のプレゼンが始まった直後、予定より1時間早い午前11時過ぎだった。

「早く来ちゃった」

あんた一体幾つだよ、とツツコミをしたくなる衝動を抑えながら、達也は真由美・摩利・鈴音の3人を控え室に招き入れた。遅刻は問題だが早く来るのは迷惑ではないし、職人肌の上級生がプレゼン用機材をゴソゴソと弄くり、その中でしんのすけがテーブルに突っ伏して居眠りしている現在では、人が3人増えたところでさして問題ではない。

ちなみに達也の傍には、当然と言わんばかりに深雪の姿もあった。しかし彼女は真由美が到着した時点で三猿を決め込み、置物か何かのように黙り込んでいる。

「それにしても、予定が繰り上がったのは何か理由があるんですか？」
「ああ、予定よりも早く尋問が終わってね」

「……尋問？ まさか、関本のですか？ なんでまた今日に……」
ヘクソンの襲撃事件があった後、関本は一時期錯乱状態に陥っていた。摩利は自分の魔法によるものではないと断言していたことから、ヘクソンの最終的な目的が自分の命だと気づいてパニックになったのだろう。

あくまで彼は犯罪組織の人間ではない以上、精神的な問題を持ち出されては「七草」の名前でゴリ押しして尋問することもできない。
「君らしくもない楽観論だな。平河も関本も、狙いは論文コンペの資料だった。実際にはそれ以外にも目的はあったようだが、背後の組織がコンペ当日の今日に何かしらの行動に移る可能性は低くないだろう」

「……可能性としては、あるでしょうね」

達也もそれくらいは予想していたが、背後組織に関する情報を今日掴んだところで、それに対抗するだけの準備をする時間が無い。結局のところは克人を中心に組織された会場警備隊で対応するしかない

以上、関本が具体的な襲撃計画を知っているのでも無い限り尋問する意味は薄いと達也は思った。

とはいえ、それをわざわざ指摘するような真似はしない。

「それで、何か情報は掴んだのでしょうか？」

「ああ。——関本は、マインドコントロールを受けていた形跡があった」

「……本格的ですね」

有用性は別として、この情報には達也も素直に驚いた。

春に紗耶香を含めた一部生徒がマインドコントロールによってテロ組織の手先になったことが明るみになってから、一高の生徒は月1回のメンタルチェック受診が義務づけられていた。そのメンタルチェックに引つ掛からなかったのか、というのは当然の疑問である。「メンタルチェックは月の初めに行われるから、関本はその直後にマインドコントロールを受けたということになる」

「そこまで劇的に効果を得られるとなると、薬物の類ですか？」

「そこまでは分かんよ。あたしも専門家じゃないからな」

摩利の言葉に達也は『本当か?』と疑いを持ったが、口にはしなかった。

しんのすけが起きていたら、間違いなく口にしていただろうが。

「まあ、いくら強力な精神干渉魔法があったとしても、被術者に“下地”が無ければそうそう上手くはいかないけどな」

「下地、ですか」

人間の精神力というのは、脆いようで案外強い。普段から指向性の定まらない感情や衝動ならともかく、明確な行動原理に干渉するというのは生半可なことではない。

「関本は元々、魔法が国家によって秘密裏に管理されていることに不満を抱いていた。世界中で魔法に関する知識が共有されてこそ、魔法の真の進歩があると考えていた。いわゆる“オープンソース主義者”だな」

「学問的には間違っていないでしょうけど、国家間での争いが厳然と存在していて、しかもその中心に魔法があることを考えると、あま

り現実的とはいえないわね」

真由美の苦笑混じりの言葉には、達也も深雪も同意見だった。

「とにかく、関本はそういう理想主義的なところを突かれたらしい。魔法後進国に優れた研究成果を伝導することが魔法先進国の義務だ、と思い込んでいるようだ」

「魔法後進国とは、具体的にどこを指すのですか？」

「残念ながら、聞き出すことはできなかった」

「つまり、意識にロックが掛かっていると」

達也の推察に摩利は頷き、緊張感の伝わる表情で真由美が口を開いた。

「こつちが考えている以上に、向こうは過激な方法を探ってくるかもしれない。リンちゃんには引き続き私達がついているから、はんぞーくんには会場に目を光らせるように伝えておいたわ。達也くんたちの方でも、気をつけておいてね」

「気をつけます」

達也は真剣な表情で答え、深雪は最後まで口を開かず、頭を下げて応えた。

そしてその間、しんのすけはテーブルに突っ伏して居眠りし続けた。いた。

すると摩利が彼へと近づいていき、テーブルの上に置かれた論文コンペのパンフレットを手にとってクルクルと丸めていき、

スパアーンツ——！

「おおっ！ 何事だあ!？」

「……達也くん、今の話を彼にもよく説明しておいてくれ」

「……かしこまりました」

ちなみにこの間、鈴音は平静な表情を崩すことなく原稿をチエックし続けていた。

真由美達から仕事内容の変更を言い渡された服部は、合わせて聞かされた尋問結果を報告するために、桐原と共に克人の下を訪れてい

た。ちようど食事中だった克人は2人に相席を指示し、簡単に摘めるサンドイッチを片手に2人からの報告を聞いていた。

そして克人は即座に、服部と桐原の2人に会場外周の監視に当たるよう指示を出した。何の迷いも無いその姿が彼の常であり、普段ならばそこで遣り取りは終了する。

「服部、桐原。現在の状況について、何か違和感を覚えた点はあるか？」

しかし今日に限って、下級生に意見を求めるという滅多に無い例外が行われた。

「……横浜という土地柄を考慮しても、外国人の数が多すぎるように思われます」

最初に答えたのは服部だった。生真面目な彼は今回の警備に先駆け、先週と先々週の2回も会場近辺を下見している。それに比べて明らかに外国人の数が多く、と彼は感じていた。

「確かにそうだな。——桐原はどうだ？」

「……申し訳ございません。外国人の件は気づきませんでした。ただ……」

「遠慮はいらない」

「はっ。会場よりも街中の雰囲気、妙に殺気立っているように思われます」

「ふむ、確かに」

頷いたきり、克人は黙り込んだ。その時間は10秒にも満たないほどに短い、それを見つめる服部と桐原にとっては何十倍にも感じられるほどに重い沈黙だった。

「2人共、午後の見回りからは防弾チョッキを着用しろ」

目を見開く2人をよそに、克人は近距離無線のハンドセットを手に取り、共同警備隊全員に先程と同じ指示が送られた。克人は無線機を置いて腰を下ろすと、2人をその場から下がらせた。

1人になった克人は、深刻な表情で何かを考え込むように黙り込んでいた。

一方その頃、同じ建物内の通信ブースでは、緊急コールを受けた藤林がその内容に驚きを顕わにしていた。

「出発を繰り上げる？ 何かあったのですか？」

『何かあったかと問われれば、今のところは何も無いと答えざるを得ないな』

電話の主・風間大佐は冗談めかしたような答えを返すが、彼はこんな質の悪い冗談を言う人間ではない。そもそもそんな冗談を言うために、緊急コールは存在していない。

『今その会場にいると分かっているだけでも、“サザエさん現象”に巻き込まれた者は何人いる？』

「……野原しんのすけ、代々木コージロー、酔乙女あい、貫庭玉サキ、東松山よね、そして“ボーちゃん”と呼ばれる彼の計6人です」

『春日部防衛隊や彼の家族など集団行動が予想される組み合わせではなく、普段は接点の少ないその6人が一堂に会しているという時点で、軍の上層部も看過できない状況であることには間違いない。さらには陳祥山、呂剛虎、そしてヘクソンの3人が未だ拘束されていない事実と照らし合わせた結果、出動の許可が出た』

しんのすけ達の動向が軍に与える影響力の大きさを改めて思い知り、藤林は思わず息を呑んだ。

『幸いにも明日保土ヶ谷ほどがやで行われる新装備テストのおかげで出動準備は整っている。出発を繰り上げて今からそちらへ向かう。到着予定は一五〇〇ヒトゴーマルマルだ』

「……了解しました。小官は状況を注視します」

『頼んだぞ、少尉』

風間の言葉に、藤林は相手に見えないことを分かっているながら敬礼をした。

*

*

*

昼の休憩を挟んで、午後のプレゼンは午後1時から始まる予定だ。

一足早く昼食を終えてVIP席に戻ってきた面々が、午前中に聞いたプレゼンから各々有力な学校を挙げ、あーでもないこーでもないと言葉を喋っている。それは階下の客席に座る一般客でも行われている普通の行動だが、企業関係者の場合は相手が目を付けている有能な人材が誰なのかという腹の探り合いも兼ねているため、傍目には「談笑」だが心の中では全然笑っていないかった。

そんな中、酔乙女あいはそういった会話には加わらず、自分の身内であるボーとサキの2人と、あくまで雑談として話していた。

「ボーちゃんの中では、今のところどこが有力かしら?」

「僕が興味を惹かれたのは、第四高校。今年の仕掛けも随分凝ってた」
「そう? 私は少し奇を衒いすぎているように思えましたけど」

「だとしても、あれだけ複雑な魔法の組み合わせを1つのシステムに破綻無く纏めるのは凄い」

「確かに、そういう見方もできますわね。少なくとも、何年前だったらあのレベルなら文句無しでトップだったでしょうね。やっぱり魔法工学の技術の進歩は目覚ましいですわ」

第1回から毎年欠かさず観覧しているあいは、中空に視線を投げて過去に思いを馳せていた。

しかしそれもすぐに終わり、隣に座るサキへとその目を向ける。

「サキちゃんはどうかしら?」

「私かあ……。正直、午前の発表はどれもこれも難しくてよく分からないや。最後にやる第三高校の「基本コード魔法の重複限界」くらいシンプルにしてくれないと」

「カーディナル・ジョージったら、容赦無く自分の得意分野をぶつけてきたようね。よっぽど九校戦の雪辱に燃えているのかしら」

「九校戦っていうと……。ああ、あの「司波達也」って人? でもその人、今回の代表には選ばれてないでしょ?」

「実質的には「4人目の代表」と呼べるほどの働きぶりだったようですよ。題材も彼の個人的な研究分野とほとんど同じようですよ、充分にリベンジマッチと呼べるのではないかしら?」

あいとサキがそのような会話をしている横で、

「……………」

ボーが普段通りの寡黙で感情に乏しいその顔を、誰も立っていないステージへと向けていた。

* * *

午後3時。第一高校のプレゼンは、予定通りの時刻に始まった。

「核融合発電の実用化には何が必要か。この点については、前世紀より明らかになっています」

自然色のライトが大道具の並ぶ舞台を照らし、鈴音の口から奏でられる抑制の効いたアルトが会場の音響設備によって淀みなく客席に届けられる。舞台上では五十里が鈴音の隣でデモンストレーション機器を操作し、平河小春は舞台裏でCADのモニターと起動式の切り替えを行う。

そして達也が彼女の傍に立ってその様子をじっと見守り、しんのすけは壁を背に座り込んで惰眠を貪っていた。

鈴音が巨大なガラス球の傍に立ち、小春が放出系魔法の起動式を指定する。鈴音がCADのアクセスパネルに手を置いた瞬間、中に封入されている重水素ガスがプラズマ化し、内側に塗られた塗料に反応して閃光を放つ。その演出に、客席が小さく沸いた。

「一つは、重水素ガスをプラズマ化して、反応に必要な時間その状態を維持すること。これは放出系魔法によって解決しています。核融合発電を阻む主な原因は、プラズマ化された電子核の電気的斥力に逆らって融合反応が起こる時間、原子核同士を接触させることにあります」

鈴音がアクセスパネルから手を離すことで、ガラス球に沈黙が戻った。それと入れ替わるように、巨大なスクリーンが舞台中央に下りてくる。

「非魔法技術により核融合を実現しようとした先人は、強い圧力を加えることでその斥力に打ち勝とうとしてきました」

その言葉と共に、今世紀前半まで繰り返されてきた実験の映像とシ

ミュレーション動画がスクリーンに分割表示される。

「しかし超高温による気体圧力の増大も、表面物質の気化を利用した爆縮の圧力も、安定的な核融合を実現するには至りませんでした。格納容器の耐久力の問題、燃料の補充の問題——。核融合の維持には成功したものの、生み出される莫大なエネルギーを制御できないという例もありました。——しかしすべての問題は、取り出そうとするエネルギーに対して融合可能距離における電氣的斥力が大きすぎるという点に収束します」

スクリーンが上がると、巨大な円筒形の電磁石が2つ、それぞれが4本のロープで向かい合わせに吊された、原始的に見える実験機器が姿を現した。

五十里が円筒の一方を引き上げる。もちろん魔法で引つ張っているのだが、彼は演出のためにわざわざ手で引つ張り上げるジェスチャーを加えた。そして彼が手を離すと、円筒は勢いよくスイングしてもう一方の円筒に衝突する——直前、もう一方の円筒がそれから逃げるように勢いよく振り上がった。

「電氣的斥力は、互いの距離が接近することでその力を幾何級数的に増大させます。強い同極のクーロン力を持つ物体は、接近することでその斥力を増大させるため衝突することはありません」

と、ここまで説明したところで鈴音がおもむろにヘッドセットを着した。そして支柱に設えられたアクセスパネルに手を置いた瞬間、あれほど互いに逃げ続けていた2つの円筒が突如衝突し、まるで銅鑼でも打ち鳴らすかのような大音量が会場中に鳴り響いた。

「しかし、電氣的斥力は魔法によって弱めることができます。今回私達は、限定空間内における見掛け上のクーロン力を10万分の1までに低下させる魔法式の開発に成功しました」

彼女の言葉に会場からどよめきが起こるのも束の間、メインの装置が舞台の下から迫り上がってきた。透明の素材で作られたピストンエンジンとも言えるそれは、鏡面加工されたピストンが下から差し込まれ、それはクランクと弾み車に繋がっている。円筒の上部には2つのバルブがあり、そこから伸びた透明の管が水を湛えた水槽を突つ

切っている。

「この装置では中性子線の有害性を考慮して、重水素ガスではなく水素ガスを使用しています。水素ガスを放出系魔法によってプラズマ化し、重力制御魔法とクーロン力制御魔法を同時に発動します。クーロン力制御魔法によって斥力の低下した水素プラズマは、重力制御魔法によって円筒中央に集められ、核融合反応が発生します」

観客が自分の説明に聞き入っているのを確認し、鈴音は再び口を開く。

「核融合反応に必要な時間は0.1秒。核融合反応が自律的に継続することはないので、外から作用を加え続けなければ反応はすぐに停止してしまいます。——当校は、この性質に着目しました」

鈴音が目で合図をし、五十里が実験機のアクセスパネルへと歩いていく。

「核融合反応が停止した後、水素ガスを振動系魔法によって容器が堪えられる温度まで冷却させます。このときに回収したエネルギーは重力制御魔法とクーロン力制御魔法に充当され、重力制御魔法によって下に引き寄せられたピストンが慣性で上昇を続け、適温に冷却された水素ガスを熱交換用の水槽へと送り込みます」

五十里がアクセスパネルに手を置いた。プラズマ化、クーロン力制御、重力制御、冷却、エネルギー回収、プラズマ化、クーロン力制御、重力制御、冷却、エネルギー回収——と、目まぐるしくループする魔法を、五十里は安定的に発動していた。

「現時点ではこの実験機を動かし続けるには高ランクの魔法師が必須です。しかしエネルギー回収効率向上と設置型魔法による代替で、点火に魔法師を必要とするだけの重力制御魔法式核融合炉が実現すると確信しています」

鈴音がそう締め括って頭を下げると、会場中から割れんばかりの拍手が沸き起こった。

重力制御型の熱核融合炉が技術的に不可能と言われるのは、魔法の対象である質量が核融合反応中に減少していくためである。起動式を展開するときに設定された質量から変化することで、対象不存在

“のエラーが発生してしまう。よって“継続的核融合”は不可能とされてきた。

そしてそれは、今回の実験でも変わらない。“ループ・キャスト”によって“継続的”反応ではなく“断続的”反応を実現させることで、重力制御型の熱核融合炉を実現するのに大きな壁となっていた問題を解決してみせたのである。

その斬新な発想と実現に至った確かな技術に、観客は惜しめない拍手を壇上の生徒達に贈った。

「やってくれたね。見事だった、と言わせてもらおうよ」

一方その頃、舞台袖では次の出番を待っていた真紅郎が達也に声を掛けていた。不敵な笑みを浮かべる彼に、達也は口を噤んだまま彼を見遣る。

「重力制御術式は、飛行魔法にも使われている一般的な術式の応用。クーロン力制御魔法は先代のシリウス、故ウィリアムⅡシリウスが開発した分子結合力中和術式のアレンジ版。そして何より、あれだけ洗練されたループ・キャストは並みの技術じゃない。素晴らしいアレンジ力だ」

「さすがは“カーディナル・ジョージ”。素晴らしい洞察力だな」

機材の片付けを終えた達也が、ゆっくりと立ち上がって真紅郎へと体を向ける。互いに向かい合って見つめる2人の横で、しんのすけは相も変わらずにグースカと眠りこけている。

せっかくの良い雰囲気壊されたくないとしても考えたのか、2人の体が若干しんのすけに背を向ける形で向きを変えた。

「でも、僕達だって負けないよ。——いや、今度こそ勝つ」

その言葉は、ともすれば“子供っぽい”と評されるような負けず嫌いの発露だった。しかしそれをぶつけられた達也も悪い気はせず、知らぬ内に口角を上げていた。

ここは何か気の利いたことでも言った方が良いだろう、と達也が口を開き——

*

*

*

現地時間にて、西暦2095年10月30日午後3時30分。
後世において歴史の転換点とされる「灼熱のハロウィン」の発端
となった「横浜事変」は、この時刻に発生したと記録されている。

第62話 「会場から避難するゾ」

警察の備品である通信用端末からの一報を受け、千葉寿和は魔法による全力以上の速さで車に飛び乗り、そのままの勢いで現場へと急行した。視線を正面に、両手をハンドルに固定しながらも、フリーハンドの通信機で稲垣からの追加情報を催促する。

「状況は!？」

『管制ビルに突っ込んだ車は炎上中。追加の特攻はありません』

稲垣からの返信に、寿和は思わず舌打ちをした。

ターゲットは、山下埠頭にある出入国管制ビル。建物自体は爆発の衝撃と熱を跳ね返したためほぼ無傷だが、公務員であつても非戦闘員である以上、テロが実行された場所で職員を働かせるわけにはいかない。

つまり、職員が避難して港湾警備員に業務が引き継がれるまでの間、入港の監視に一時的な穴が空くことになる。

——文民に拘りすぎだ！

軍や警察の勢力が拡大するのを恐れた政治家の抵抗により、港湾・空港管理には一般の公務員が充てられていた。島国にとつてはそのまま国境警備になる以上、軍まではいかなくとも武装警察くらいは配備させるべきだと千葉家はかねがね主張していたが、このような形で理論武装されるのは不本意だった。

と、通信機からまたしても嫌な情報が寄せられた。

『停泊中の貨物船よりロケット弾が発射されました！ 歩兵用ランチャーを使用した模様！』

「船籍は!？」

『登録上はオーストラリアの貨物船ですが、形状からして機動部隊の揚陸艦と思われまます!』

どいつもこいつも何やってんだ、と寿和は悪態を吐きそうになるのを寸前で堪えた。

報告を終えた稲垣が通信を切ったことで、車内を静寂が包み込んだ。耳からの情報が少なくなったことで、寿和の頭脳が情報整理に費

やされる。

そんな状況で寿和の脳裏を過ぎったのは、よねだった。自分達は常日頃から魔法師の犯罪者を相手にしているだけあつて荒事には慣れているが、彼女はあくまで通常の犯罪捜査を主としている。こういった緊急事態にどこまで動けるか、正直に言つてしまえば不安だった。

——いや、彼女は曲がりなりにも「刑事」だ。こういうときの行動は心得ているはず。彼女を心配するよりも、今は自分ができることをするべきだ。

寿和はそう結論づけ、通信先を切り替えた。

「親父、寿和だ！ 横浜の山下埠頭にて国籍不明の偽装戦艦が侵攻中！ 国防軍に出動要請を出してくれ！ ——それから雷丸イカツチマルと大蛇丸オロチマルを至急届けさせてくれ！ ……どうするか、だど？」

何を寝言を言つてるんだ、とでも言いたげなニュアンスで、寿和は通信機に怒鳴りつけた。

「エリカに使わせるに決まつてるだろうが！」

*

*

*

突然の爆音と振動に、ホールの聴衆はパニック1歩手前まで追い詰められていた。何が起こっているのか、どうすれば良いのか、答えを求めて宛ても無く騒いでいる。

そんな中、前もつて心の準備をしていたエリカから最後方のグループの行動は早かった。行動が著しく制限される客席から離れるべく、即座に立ち上がって通路へと飛び出していく。

そしてそれは前から2列目の関係者席に座っていた深雪も同じで、彼女も即座にステージ下へと駆け寄っていく。

「深雪！」

そしてそれに応えたのは、さすがと言うべきか達也だった。舞台袖から飛び出すと最初の1歩でステージ端まで跳び、次の1歩で勢いを調節して妹の前に下り立った。

「お兄様、これは」

「会場の入口付近で、グレネードか何かが発射したんだろう」

予想していたこととはいえ、実際に達也の口から聞かされたことで深雪の顔に衝撃が走る。

「先輩方は大丈夫でしょうか!？」

「正面は協会が手配した正規の警備員が配置されていたはずだ。実戦経験のある魔法師も投入されているから、通常の犯罪組織レベルには遅れを取らないと思うが——」

そう答えながらも、達也はどうにも悪い予感が拭えなかった。先程藤林から受け取ったデータカードには、外国の国家機関が関与している可能性が記されていた。

そしてそれを裏付けるように、複数の銃撃音が聞こえてくる。

——フルオートじゃない、対魔法師用のハイパワーライフルだ！

通常よりも弾丸の慣性力を強めることで障壁魔法さえぶち抜くその武器は、それ故に普通の重火器よりも数段高度な製造技術を必要とするものだ。当然ながら『通常の犯罪組織レベル』が手に入れられるような代物ではない。

とにかく今後の対応策を決めるに当たって、このホールは籠城に向いていない。故に今はできるだけ早くここから離れるべきなのだが、達也がそれを考えたまさにそのとき、荒々しく靴音を響かせてライフルを構えた集団がホールに雪崩れ込んできたのである。

聴衆から一斉に悲鳴があがり、達也が内心で『だらしない』と舌打ちをする。

そんな中、勇猛果敢な反応を見せたのはステージ上の三高生徒だった。プレゼンのテーマが対人攻撃に転用可能だったのか、携行していたCADを操作して攻撃魔法を展開——

ずどおんっ——！

しようとしていた矢先、その三高生徒を掠めて銃弾がステージの壁に食い込んだ。その破壊力からして、達也の予想通りそれはハイパワーライフルだった。

「大人しくしろっ！」

少々迪々しい日本語を話すそいつらは、おそらく日本に来てまだ日

の浅い外国人だ。制服や軍服ではないものの統一感のある丈夫な服を身に纏うそいつらは、おそらく軍やそれに準ずる組織で集団訓練を受けていることが雰囲気から伝わってくる。

「デバイスを外して床に置け！」

たとえ現代魔法が銃器と対等なスピードを手に入れたといっても、既に銃を構えられている状態でそれを覆すほどの速さではない。最初は立ち向かおうとしていた生徒達も、悔しそうな表情を浮かべながらも次々とデバイスを床に置いていく。

その様子を確認していた侵入者の1人が、司波兄妹に視線を向けたところでその動きを止めた。たまたまステージ前の通路に立つのが2人だけだったのもあるが、2人が他の生徒達のようにデバイスを床に置く動作をしていなかったためでもある。

「おい、オマエらもだ」

侵入者の1人が目敏くそれを見つけ、銃口を突きつけながら慎重な足取りで近づいていく。

一方達也はそんな状況でも取り乱すことは無く、冷静に侵入者達を観察していた。人数は全部で6人、フロントとバックアップのユニットが3つだ。そして達也は既にその全員に対し、CADを使わず魔法の照準を合わせている。

できれば誤魔化しの利く魔法で済ませたいが、と達也がそんなことを考えていると、

「おいつ、早くしろっ！」

苛立った様子で怒鳴る侵入者に、それでも達也は動こうとしなかった。抵抗を放棄すれば身の安全が保証されると正直に信じられるほど、達也は素直な性格をしていない。

銃を突きつけても怒鳴り散らしても、達也は一切口を開かず侵入者を見つめていた。いや、むしろ「観察していた」の方が適切だろう。彼の目には恐怖も不安も無く、ただただ無機質に目の前の侵入者を観察するのみだった。

そんな彼の冷やかな視線に恐れを覚えたのか、その侵入者は無意識の内にライフルの引き金に添えた人差し指に力を込め――

「——ケツだけ星人、ブリブリ〜！」

高らかに叫びながら舞台袖から飛び出したしんのすけが、壇上の端から端まで猛スピードで往復しながら、前屈の要領で尻を天井に向けて突き出して腰を振りまくった。聞く人が聞けばそのフレーズだけで想像ができる踊りだか何だかよく分からない代物だが、5歳児のときとは違ってさすがにズボンは脱いでいなかった。尻を丸出しにして許されるのは幼稚園児までである。

突如壇上で繰り広げられた珍妙なダンスに、ホール内の誰もが視線を（本人の意思とは無関係に）釘付けにされた。特にステージに近い者ほどその効果が大きく、最愛の兄が今まさに銃を向けられていた深雪ですらそちらに目を奪われ、そして気分を害したように口元を手で覆っている。

しかし最も大きな反応を見せたのは、侵入者達だった。

「な、何だ!？」

「侵入者達が、急に倒れたぞ!」

「まさか、し、死んだのか!？」

誰かの不用意な発言であちこちから悲鳴があがるが、それも無理ないことだった。

なぜなら今にも動き出そうとしていた達也の目の前で、侵入者6人が一斉に床へと倒れ込み、そのまま動かなくなってしまったのだから。瞬時に意識を失い、糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちていくその様に、見る者が“死”を連想してしまったとしても何らおかしくないだろう。

達也が慎重に近づいて、侵入者達の安否確認を行う。怪我は無く呼吸も安定しており、意識が無いこと以外は特に異常は見られない。それこそ、ただ眠っているだけのようには思えた。

「達也くん、しんちゃん!」

「おいおい! いったい、どうなってんだ!？」

ほぼ同時に声をあげて競うように駆け寄るエリカとレオを筆頭に、幹比古・美月・ほのか・雫といういつもの面々が駆けつけ、そしてその後ろからコージロー、さらにその背中に隠れるように千秋が歩い

て、司波兄妹としんのすけの下へと合流していく。

「しんのすけ、こいつらに何をした？」

「いやいや、オラが一番ビツクリしてるゾ！ オラはただ
〃戦意尻失せんいしりしつ〃をしただけなのに、なんでこの人達眠っちゃったの!？」

ぷにぷに拳の知識が無い達也たちには「戦意尻失」というのは分からなかったが、本人の意図していない結果になったというのは理解できた。というか、もしあの珍妙な動きに催眠効果があったとしたら、生徒会長選挙のときに自分達も同様に眠っていたはずだ。

ちなみに眠りこけている侵入者達は、共同警備隊のメンバーである生徒達によって拘束され、どこからか持ってきたロープでグルグル巻きに縛り上げられていた。武器のハイパワーライフルも押収されたため、この場は収まったと判断して良いだろう。

真っ先に頭を切り換えたのは、エリカだった。

「んで、これからどうするの、達也くん？」

「逃げるにしろ追い返すにしろ、とりあえずは正面入口の敵を片づけないとな」

「よーし！ だったら早いとこ俺達でカタを付けて——」

「その必要はありませんわ」

レオが獰猛な笑みを浮かべてやる気を出したそのとき、その出鼻を挫くようなタイミングで達也たちに声を掛ける者がいた。

この非常時にも拘わらず落ち着いたその声の持ち主は、VIP席に座っていたはずの酢乙女あいだった。彼女の背後にはスーツケースを片手に持つボーと、その集団の中では唯一顔見知りであるしんのすけに小さく手を振る貫庭玉サキぬぼたまの姿もある。

「おおっ、サキちゃんにボーちゃん！ いたならいたって言ってくれれば良いのにい！」

「えっと、ゴメンしんちゃん。何かタイミングを逃したって言うか——」

「それで酢乙女さん、『その必要は無い』とは？」

「既に正面入口の敵は制圧されているから迎撃の必要は無い、という意味ですわ。ほら、ライフルの音とか聞こえてこないでしょう？」

確かにあいの言う通り、耳を澄ませてみても先程のような発砲音などは聞こえてこない。

しかしながら、達也の目には疑いの色がありありと滲み出ていた。自分の目で見たものしか信じない、というわけではないが、ここから確認できないはずの入口での出来事を把握しているかのような彼女の言動に不信感を覚えているのは確かだ。

そしてあいも、達也がそう考えていることなど百も承知だった。

「そんなに気になるのなら、情報収集のついでに入口の様子でも見に行きましようか？」

「情報収集の伝手があるのですか？」

「ええ、もちろん。——そちらの雫さんも、ご存知でしょうか？」

突然名前が挙がり、それによって全員が一斉に視線を向けたことでピクツと肩を跳ねさせる雫だったが、即座に思い至った様子で目を見開いた。

「もしかして、『VIP会議室』のこと？」

「何だそれ？ そんなのがあんのか？」

「一般には公開されてない会議室があるの。閣僚級の政治家や経済団体トップの会合に使われるような部屋だから、大抵の情報にはアクセスできると思う」

「暗証キーもアクセスコードも、私なら知っていますわ。警察や沿岸防衛隊の通信も提供されていますから、ほぼリアルタイムの戦況も分かれますわよ」

あいの口振りは、自分も一緒について行くことを言外に示すものだった。確かに暗証キーやアクセスコードを知らなければ部屋に入ることすらできないのだから、当然といえば当然だろう。

しかしながら、それを聞いた雫が待ったを掛けた。

「私も知ってるから、行くなら私が行く。あなたは安全のためにここに残って」

「雫も？ ……そっか、お父さんから聞いたんだね？」

「小父様、雫を溺愛してるから」

ほのかの言葉に、実際に雫の父親・北山潮に会ったことのある達也

たちは納得した。確かに彼なら、それくらいのことはいやうだ。

「そう？ それならお願いしますわ。——あつ、こちらからも一つお願いが」

「お願い？ 何ですか？」

「しん様と……、それからそちらの代々木さんに少しお話したいことがありますの。なのでVIP会議室には、その他の皆さんで行ってもらえませんか？」

「えっ？ オラ？」

「……僕にも？」

あいから名指しされたしんのすけとコージローが、揃って不思議そうに首を傾げた。特にコージローの場合、いくら同じ春日部出身であり、しんのすけという共通の友人がいるとはいえ、彼女自身とはほとんど面識も無い。

しかしながら、彼女の頼みは理由を殊更に掘り下げなければいけないほどおかしなものではない。現に達也も多少の引掛かりは覚えたものの、特に悩むことも無く頷いた。

「分かりました。とにかく今は情報を集め、一刻も早くこの場を離れることを考えるべきです。こいつらの最終目的が何であれ、第一の目的は優れた魔法技能を持つ生徒の殺傷もしくは拉致でしょうから」

「まあ！ ということは、しん様の身に何か起こるかもしれない、ということですか!? 何をグズグズしてらっしゃるんですの!? 早くVIP会議室に行ってきたさい！」

「……………」

顔色を変えて達也たちへそう命じるあいには、彼らは気の抜けた表情を浮かべるもツツコミの言葉を口にすることなく、ホールの扉を潜って外へと飛び出していった。

*

*

*

「達也くん！」

ホールを飛び出して正面入口へと駆けていた一行が鉢合わせたの

は、フライトジャケットを開けて腰に巻く拳銃のホルスターが丸見えになっているよねだった。彼女は集団の中に顔見知りである達也がいることに気づくや、血相を変えてこちらへと駆け寄ってくる。

しかし彼と深雪以外の全員が彼女と顔見知りではないため、突然現れた謎の人物に疑問の表情を浮かべていた。

「達也くん、あの人誰？」

「知り合いの刑事だ。産業スパイの件を捜査してもらっていた」

どういう経緯で知り合ったのかエリカ達は気になったが、よねがすぐ目の前まで迫っていることと、達也に対する『まあ達也だし』という謎の信頼感で追及することは無かった。

そしてそのことに、達也は秘かに胸を撫で下ろしていた。ニューハーフパブで出会ったなんてことがバレたら、特にエリカ辺りが面倒臭い反応を示しそうだ。ただでさえ深雪への説明で色々と精神を磨り減らしたというのに――

「お兄様、私がおか？」

「――！」

達也の背筋にかつてない寒気が走ったのと同時、よねが彼らの下へと辿り着いた。

「ねえ、ちよつと！ いったい何がどうなってるの!？」

「外国籍と思われるゲリラ兵による攻撃を受けていて――」

「いや、そっちは何となく分かるのよ！ 響子さんもそんなことを言ってたから！ アタシが訊きたいのは、こっちのことだ――」

よねはそう言うのと皆を正面入口の方へと促し、自身も踵を返して再び駆け出した。彼女の只ならぬ様子に達也が即座に走り出し、エリカ達も「響子さん」について尋ねる暇も無くその後続く。

銃器を持ったゲリラ兵が侵攻しているというのに、よねは身を隠したりせず堂々と廊下のだ真ん中を駆け抜けていった。発砲音なども聞こえず妙に静まり返っていることもあり、達也の脳裏にしたり顔のあいが浮かび上がる。

そうして正面入口へと辿り着くと、そこには、

「――ど、どういふことだ？」

国際会議場へと侵入を試みたゲリラ兵は、全員が東アジア系の顔立ちをしていた。色が不統一のハイネックセーターにジャンパー、そして余裕のあるカーゴパンツ風のズボンという、ホールに乱入してきた者達と同じ格好をしており、通常のスナイパーと対魔法師用のハイパワーライフルで武装している。

しかしその全員が、比喩表現ではなく文字通り深い眠りについていた。日本魔法協会が手配したプロの魔法師が次々と拘束しているが、奴らは一向に目覚める様子は無く、ただ無抵抗にされるがままとなっている。

「いつから、こんなことに？」

「いや、アタシも詳しくは……。魔法師の人達がゲリラ兵と銃撃戦をしてたから加勢しようと思ったら、ゲリラ兵達が一斉にバタバタと倒れだして……」

「まあ、こちら側に怪我も無く敵を制圧できたんですから、良いことなのでしょうか……？」

「何言ってるの、美月。得体の知れない魔法が誰にも気づかれずに行使されたってことでしょ？ 自分達にそれが降り掛からないとも限らないんだから、脅威には変わりないでしょ」

エリカがそう話す横で、達也は眠ったままのゲリラ兵と、その対処に追われる魔法師達をつぶさに観察していた。催眠効果のある生物兵器などを警戒してか若干動きに迷いを見せる彼らだが、体調不良を訴える者は1人もおらず、達也の眼でもそういった兆候は見られない。

と、よねが思い出したように声をあげる。

「——つと、こんなことしている場合じゃないわね！ ここにいる人達を早く避難させないと！ あなた達も早くホールに集まって！」

「自分達は情報を集めるためにVIP会議室に向かうつもりです。予想外に大規模で深刻な事態が進行しているようですし、行き当たりばったりの避難では泥沼になるかもしれません」

「ああつと、確かにそうね……。よし！ アタシは先にホールに行くから、何か分かったらアタシのケータイに電話ちょうだい！」

「分かりました、お願いします」

「任せなさい！」

よねはそう言い残し、先程走ってきた廊下を逆戻りしていった。颯爽と走り去るその姿は、まさしく理想の警察官そのものだと言えよう。

「へえ、なかなか格好良いじゃないの。馬鹿兄貴にも見習ってほしいところね」

エリカがニヤニヤと笑みを浮かべてそんな感想を漏らすのを聞いて、達也はふと考えた。

もしも彼女が下着泥棒相手に拳銃を発砲して資料室の整理係に追いやられていると知ったら、皆はどんな反応を示すのだろうか、と。

*

*

*

達也たちが扉の向こう側に姿を消してから、ホールの中は一旦静寂を取り戻した。激しい爆発音も発砲音も聞こえず、侵入者達がすぐに取り押さえられたことで聴衆達もパニックに陥ることは無く、せいぜい小声でザワザワと会話を交わす程度である。

しかし侵入者達の所持する銃器が、事態の深刻さを静かに、しかし鮮明に物語っていた。侵入者達が突然眠りについたことも、自身の安全に対する安堵と共に「次は自分達がこうなるのでは」という漠然とした不安を抱える要因となっている。その不安感がジワジワと心を蝕んでいくのを誰もが感じ取っていた。今はまだ良くて、そう遅くない内に目に見える喧騒として表れることとなるだろう。

——いざとなったら、あーちゃんの魔法でみんなを落ち着かせないと……。

そんな中、壇上から客席全体を見渡していた真由美は、審査員席に座るあずさへと視線を向けて秘かにそんなことを考えていた。ちなみになぜあずさが審査員席にいるのかというと、各学校の生徒会長は生徒審査員として自分以外の学校の発表に点数を付けることになっていたからだ。

そんなあずさが固有の魔法として身につけている「梓弓」は、情動干渉系にカテゴライズされ、霊子フシオンを震わせた波動で一定のエリアに
いる人間を一種のトランス状態に誘導する効果がある。意識を奪つたり意思を乗っ取るほど強力ではないため相手を無抵抗状態に陥れることはできないが、精神干渉系の魔法では珍しく同時に多人数に対して仕掛けることができ、興奮状態にある集団を沈静化させるにはもってこいの魔法だ。

しかし精神に干渉する魔法は他のものと比べても特に規制が厳しく、未成年の判断で軽々しく使うことはできない。しかし真由美は、緊急事態であることと「七草」セブン草が持つ権威で押し切ることも辞さない構えだった。

そのタイミングを見極めながら、同時に自身の携帯端末から情報を収集することも忘れない。繰り返すが彼女は「七草」であり、いい加減な憶測を口にすることが許されない立場である以上、普通の人間では見られないデータベースにまでアクセスできる権限を有している。そして彼女は今まさに、それを閲覧しているところだった。

そうして仕入れた情報は真由美の予想を超える深刻さであり、彼女の表情が思わず強張ってしまふほどだ。少なくともここに留まっているのが何よりも危険だと考えるほどには事態が切迫している、と彼女は判断した。

と、そんな彼女に客席のフロアから近づく者がいた。

「突然失礼します。七草真由美さん、ですね？」

「あなた……、酔乙女あいさんね」

無意識に壇上から下りようとする真由美を、あいは片手を差し出して制止した。

「七草さん、おそらく既に或る程度は情報を掴んでいるのでしよう？」

「教えてくださらない？」

「え？ えつと……」

「大丈夫ですわ、誰にも漏らしませんから」

ニコニコと人当たりの良い笑みを浮かべるあいには、真由美は迷う素振りを見せながら客席を見渡した。誰もこちらに注目している様子

は無く、彼女と知り合いであるしんのすけ達も旧友達と何やら会話をしている最中だ。

「——現在、この街は侵略を受けています」

「あらまあ」

衝撃的な内容であるはずの真由美の発言に、あいは何とも気の抜ける返事をした。

「港に停泊中の所属不明艦からロケット砲による攻撃が行われ、それに呼応して市内に潜伏していたゲリラ兵が蜂起した模様です。先程捕縛した侵入者も、おそらくはその侵略軍の仲間でしょう」

「状況は？」

「湾内に侵入した敵艦は1隻、他の敵艦は見当たらないそうです。上陸した兵力の規模は具体的には分かりませんが、海岸近くはほぼ敵に占領されつつあるようです。陸上の交通機関は完全に麻痺しています、こちらはゲリラの仕業でしょう」

「狙いは？」

矢継ぎ早に繰り返される質問に、真由美は少し顔を伏せて考え込む。

「横浜には日本魔法協会の支部があり、そこにはメインデータバンクがあります。重要なデータは京都と横浜で集中管理していますので。おそらくそれが狙いだと私は考えます」

「ここにいる魔法師や学者の皆様を狙っている、という可能性は？」
「それにしても、この建物に対する攻撃が激しくないと感じます。もちろん日本政府と交渉を有利に進めるための人質に取る可能性は充分ありますが、メインはあくまで魔法協会支部でしょう。もともと、この建物の耐久性なども考慮すると、ここに留まるのは危険でしょう。一刻も早い避難が必要です」

「成程。丁寧な説明、ありがとうございます」

真由美の口から語られるそれらは、普通の人々が聞けばその場でパニックを起こしてもおかしくない内容だ。しかしあいはそれらに対しても平然とした顔を崩すことなく、説明してくれた真由美に礼を述べる余裕すらある。

さすがは世界規模の企業を束ねる社長の1人娘だ、と真由美は何やら考え込んでいるあいを眺めながらそんな感想を抱いた。

するとあいが顔を上げ、真由美に向かってこう言った。

「——七草さん、私から提案があります」

第63話 「あいちゃんの思惑と達也くんの出陣だゾ」

雫のアクセスコードを使ってVIP会議室に足を踏み入れた達也たちは、警察から受信したマップデータをモニターに映し出した。東京湾沿いに広がる街を一望できるその地図は現在、海に面する一帯が危険区域を示す真っ赤な色に染まっており、そして現在進行形で内陸部へとみるみる拡大していく。

「ひっでえな、こりや……」

「こんなに大勢、いったいどうやって……」

レオ達が驚愕で顔をしかめる通り、侵攻速度から見て相当な規模の兵力が注ぎ込まれているのは間違いない。具体的な数値こそ分らないが、少なくとも数百人規模、それこそ600人〜800人とされる大隊規模の兵員が投入されている、というのが達也の推測だ。

達也のしかめ面は目立たない程度だったが、妹の深雪には不安で瞳を揺らすくらいには伝わってしまった。達也はその不安を和らげようと、彼女の頭を軽くポンポンと撫でる。

「想像以上に悪い状況ですね……」

「ここに留まっていたら、軍が来るより前に敵に捕捉されるかも」

「でも、交通機関は動いてないんでしょ？ それでどうやって街から出るの？」

「海から出るのはどうだ？ 沿岸警備隊が瑞穂埠頭みずほに輸送船を向かわせてるってあるぞ」

「いや、それも望み薄だな。出動した船じゃ全員は収容できないだろうね」

美月、雫、ほのか、レオ、幹比古の順でモニターの情報を基にあれこれと議論を交わしていく。幹比古の輸送船に対する意見には、近くで聞いていた達也も同意見だった。

「そうになると、やっぱりシエルターに避難するのが現実的だろうな。ここも頑丈に造られているとはいえ、建物自体を爆破されてはどうしようもない」

達也の言う「シエルター」とは、会議場の最寄り駅に存在する地下

シエルターのことだ。災害や空襲に備えたもので、会議場にいる全員が避難しても充分収容できるだけの広さがある。しかし今回のような陸上兵力、しかも魔法師による攻撃にどこまで耐えられるかは未知数だ。

とはいえ先程達也が言った通り、このままここに留まるのが最も危険であることを考えると、素直にそちらに移動するのが得策だろう。「そういえばこの会場って、そのシエルターと地下通路で繋がってるんですよね?」

「よし! だったら今すぐにでも——」

「いや、地下は止めた方が良く。地上を走ろう」

今にも駆け出しそうな顔で促すエリカに、達也が「待った」を掛けた。当然出鼻を挫かれたエリカは怪訝な顔を見せるが、即座に納得したように小さく何度も頷いていた。さすがは実戦魔法の名門だな、と達也は口に出さずに感心する。

どうやら他の面々も地上から行くことへの反論は無いようなので、達也は自身の携帯端末を取り出して電話を掛け始めた。もちろんその相手は、一足早くホールへと向かったよねである。

しかしながら、10コールほど経っても相手からの応答は無い。眉を寄せて電話を切る達也に、周りですべてを見ていた深雪達も首を傾げる。

「出ないのですか、お兄様?」

「そのようだ。まあ良い、とりあえず向かおう。——それと、デモ機のデータを処分しておきたいんだが、構わないか?」

「だったら、達也くんはそっちに向かってよ。刑事さんにはアタシ達から伝えておくから」

「すまない、頼んだ」

そんな遣り取りを経て全員が部屋を出て、達也(そして当然のように深雪も)とその他とで別方向へと走り出した。

「司波」

デモ機が置かれているステージ裏へと向かう司波兄妹に、ずっしりと腹に響くような声が掛けられた。これほど重みのある声を出せる高校生など、達也も深雪も一人しか知らない。

案の定、その声の主は十文字克人だった。鱗状に重なり合う小さなプレートで表面を覆ったボディアーマーを着用する彼の姿に、強力な魔法障壁を持つ彼ですらそうせざるを得ない事態の深刻さを感じ取る。

「ホールを出ていったと聞いたから、避難したものだと思ったが」

「自分達なりに情報を集めてから、念のためデモ機のデータが盗まれないよう消去に向かうところです」

「そうなのか。他の生徒や関係者は既に地下通路へ向かったぞ」

克人の言葉に、達也は困惑を隠せなかった。「任せなさい」と豪語してホールへと向かったよねとは電話が繋がらず、こちらで情報を集めて避難ルートを考えている間に避難が開始されているのだから、話が違ふと彼が思うのも当然だろう。

一方克人は、その反応を別の理由によるものと勘違いした。

「地下通路だとまずいのか？」

「……まずいというほどではありませんが、地下通路は直通ではありませんから、他のグループと鉢合わせる可能性があります。場合によつては——」

「遭遇戦の可能性もある、ということだな。確かにその可能性は七草からも拳がっていた。だから沢木と服部らだけでなく、協会が派遣した魔法師も何人が同行してもらっているんだが」

高校生とはいえ、各校の中でも腕利きで構成されている警備隊は実戦面でも相当な実力を有する。そのうえ（先程はホールにゲリラ兵を侵入させる失態を犯したものの）プロの魔法師も同行しているとすれば、現時点での遭遇戦への対策としては充分と言えるかもしれない。「とにかく急ぐぞ」

今は一刻を争う状況であり、状況を確認するにも足を止める余裕は無い。克人が短く呼び掛けて走り出すその言動に、達也たちの意向を認めてその手助けをするという意図を即座に読み取った司波兄妹は、

今度は彼の後に続く形で廊下を駆け出した。

そうしてステージ裏に向かう道中、達也が克人に問い掛ける。

「その避難者の中に、現役刑事である女性の方はいませんか？」

「ああ、いたな。その刑事と七草とで話し合い、地下通路に避難することを決めたらしい」

「らしい、ということは、その場には十文字先輩はいなかったのですね？」

「ああ、そうだ。俺は七草から地下通路を通ってシエルターに避難する旨を報告され、同時に遭遇戦に備えて戦力が欲しいと相談された」
克人の返答に僅かに目を伏せて考え込む達也に、並走しながらそれを心配そうに眺める深雪。

考えを纏めるためにももう少し時間が欲しかったが、その前にデモ機が放置されているステージ裏へと続く扉までやって来た。達也は頭を切り換えると、その扉を開けて中へと足を踏み入れた。

「あつ、達也くん」

最初に声をあげて駆け寄ってきたのは、VIP会議室前で別れたエリカ達だった。おそらく彼女達がホールにやって来たときには既に避難が行われていたのだろう、何とも困り果てた様子で達也に助けを求める様子が印象的だった。

しかし達也はそんな彼女達よりも、その避難グループに混ざらずデモ機を弄る鈴音と五十里、そしてその様子を見守る真由美・摩利・花音・桐原・紗耶香に気を取られていた。

そしてそれは、克人も同じようだった。

「七草達は避難しなかったのか」

「リンちゃんや五十里くんが頑張ってるのに、私達だけ先に逃げ出すわけにはいかないでしょ？」

「ここは僕達がやっておくから、司波くんは控え室の機器を頼めるかな？」

「できれば他校の分もお願いね」

「こつちが終わったらアタシ達も控え室に向かう。今後の方針を決め

よう」

真由美が当然のようにそう答え、反論する暇も無く五十里・花音・摩利からの依頼を受けた達也は、仕方なく踵を返して控え室へと向かった。

そして達也の隣にいた克人も「避難が遅れた者がいないか確認する」と言い残し、同じくその場を去っていった。

デモ機のデータを処分する方法として達也が採用したのは、分解魔法によって情報を記録したパターンを分解してストレージを空にする、というものだ。普通にデモ機を弄るよりも圧倒的に早い時間でデータを削除できるが、分解魔法自体が機密事項なので事情を知らない者に作業を見られたくないのが達也の本音である。

なので彼は、作業を手伝いたいというエリカ達の申し出を断った。もう少し食い下がられるかと思ったが、魔法師が秘密にしている術式を尋ねるのはマナー違反だという認識が浸透しているためか、彼女達もあっさり引き下がった。

その代わりというわけではないだろうが、達也が最後の部屋での作業を終えてドアを開けると、その前にエリカ達が並んで待ち構えていた。盗み見ようとすれば達也が気づかないはずが無いのでその心配は無用だが、それでも一斉にこちらへと視線を向ける様子は達也でも身構える光景だ。

「もう終わったのか、さすがだな達也」

「それにしても達也くん、結局あの刑事は何だったの？ 自分に任せろって言うっておきながら、電話は繋がらないわ先に避難するわ……」

レオの劳いの言葉もそこそこに、エリカが不機嫌を露わにした顔でよねへの不満を口にした。おそらく心の中でずつと燻っていて、早く自分にぶつけたくて仕方なかったのだろう、と達也は口元が緩むのを抑えるのにそれなりに苦労した。

「エリカ達が行ったときには、もう中の人達は避難していたのか？」

「全員ではなかったけど、ほとんど終わってたから止められなかった

わ。多分、アタシ達がホールを出てすぐに避難経路を決めたんだと思う。七草先輩に確認したらそんな感じだったから」

「どうやらホール内に残っていた人々の避難誘導を指揮したのは真由美らしい。彼女はあくまで高校生でしかなく、その場には審査員の学者や教師もいたのだが、そのルックスと魔法実績による知名度の高さ、そして何より『七草』の名が持つ力の大きさが考慮された結果だろう。」

「成程。だとしたら、あの刑事がホールに着いたときには既に話が動いていて、今更取り消せる状態ではなかったとも考えられるな」

「まあ、確かにそうかもしれないけど、それでも電話くらい出ても良くない？ あの場だけでの口約束なのは分かるけど、それでも一応電話はしたんだからさ」

口を尖らせて文句を言うエリカに、達也も同情的な笑みを浮かべた。自分達が集めた情報を伝えようと急いで走ってきたのに無駄骨だったとなれば、確かに文句の1つも言いたくなるだろう。

「慰めの一言でも掛けてやるか、と達也が口を開きかけ、

「でもまあ、僕も少し気に掛かるところはあるよ」

「……どういう意味だ、幹比古？」

「七草先輩に聞いたんだけど、僕達と会話した酔乙女あいつて子が避難誘導に凄く協力的だったんだって。地下通路での遭遇戦の可能性も元々は彼女からの助言で気づいたものだし、七草先輩の指示で動くのが不満だったVIPの人達を自ら進んで説得していたみたい」

「えっ、そうなの!? アタシらが情報収集してるのを知ってたんだから、それを待ってからにしてくれて七草先輩に言ってくれても良いじゃない!」

「七草先輩も独自に情報を集めてて、それを彼女にも教えたいみたい。だから情報に関してはそので事足りた、ってことじゃない?」

「だったらアタシ達にもそれを教えろってのよ! ああもう、これだからお嬢様ってヤツは!」

不満を爆発させるエリカに、他の面々も苦笑いでこそあるが反論の言葉は無かった。もつともエリカ自身も、世間一般の基準に照らせば

充分に「お嬢様」といえるのだが。

そして幹比古の話聞いた達也は、エリカみたいな不満こそ無かったが、あいに対しての不信感は強まった。避難誘導に関する情報を達也たちに伝えなかったのは明らかに意図的であり、もしかしたらよねが電話に出なかったのも彼女の差し金による可能性があるからだ。

「そーいやしんのすけとコージローも見ねえけど、酔乙女あいと一緒に避難したのか？」

「ボーちゃん達も一緒だったし、多分そっちに付き添ったんだらうね。しんのすけくんとしても、知り合いが無事に避難できるか不安だらうし」

「まさかとは思うけどさ、しんちゃんと一緒に避難したいから邪魔なアタシ達を遠ざけた、とか無いわよね？」

「それはさすがに……無い、とは思うけどなあ」

エリカの言葉を否定しようとするレオだったが、その口振りは何ともフワフワしたものだ。達也もその可能性を考え、正直なところ充分に有り得る話だと思えてしまっている。

「おっ、どうやら終わったみたいだな」

と、どうやら作業が終わったらしい摩利達がこちらにやって来たことで、エリカ達との会話は中断された。

「さて、これからどうするか、だが」

摩利が口火を切り、真由美が自身の手に入れた情報を皆に伝える。その内容は少し前にあい伝えたそれとほぼ同じであり、敵の狙いが魔法協会支部のメインデータバンクだと推測されること、沿岸防衛隊の輸送船は避難者と比べて充分な大きさではないことも変わらない。「状況は聞いてもらった通りだ。シエルターがどの程度余裕があるか分からないが、船を頼れない以上そちらに向かうのが現実的だと思うのだが、どうだろう？」

全体を見渡しての摩利の言葉に、その場にいた者達は次々と賛同を示すように頷いていた。

レオ達1年生の視線は、達也に集中していた。

そんな彼らに対して、達也は——まったく別の方を向いていた。

「お兄様!?!」「達也くん!?!」

深雪と真由美の驚く声にも応えず、達也はホルスターからCADを抜いてそれを壁に向けた。

*

*

*

『国際会議場突入部隊から定時連絡無し。——状況を開始しろ』
「了解」

トラックの運転手は、その通信を合図に行動を開始した。

道路規格が向上したことにより、トラックなどの業務運搬用の車両はより一層の大型化が実現した。このトラックもその恩恵を受けたものであり、高さ4メートル、幅3メートルと元々大型なうえに、何層もの装甲板を取りつけたことで総重量は30トンという規格外である。

しかしそれは、荷物を運ぶという目的で改造されたものではない。そもそも荷物の運搬に装甲板は必要無い。

その男は国際会議場を視界に捉えると、文字通り「まっすぐ」建物へとトラックを走らせていく。みるみる近づいていく会議場に、男はそれでもスピードを緩める気配は無く、それどころかアクセルを踏んでエンジンを吹かしながらスピードを上げた。

あと数秒ほどで、男の乗ったトラックは会議場の壁に激突するだろう。男はにやりと獰猛な笑みを浮かべた。

しかし次の瞬間、男の乗っていたトラックが消失した。

「↓」

トラックが一瞬の内に金属と樹脂の塵と化し、走っていたトラックの慣性に従って運転手（だった男）が空中に放り出された。

男はそのままの勢いで地面を転がって壁に激突、金属と樹脂の塵もその勢いで壁を叩いたが、表面に細かい傷を作っただけで内部にダメージは無かった。

*

*

*

「……今、のは？」

知覚系魔法「マルチスコープ」によって壁の向こう側の景色を見ていた真由美は、建物に突っ込もうとしていたトラックが突然塵と成って消え失せた光景を目の当たりにし、呆然とした表情を浮かべていた。その視線は自然と、トラックが向かってきていた方向へまっすぐCADを突きつけていた達也へと向けられる。

そんな彼女の反応を受け、魔法科高校の生徒達も恐る恐るといった感じで達也に目を向ける。達也は舌打ちをした気分になったが、幸いというか、それどころでは無くなった。

「まだ攻撃は続いているわー！」

真由美が叫んだ通り、今度は小型のミサイルが数発こちらに向かっていった。どうやら敵側は、ここに残っている自分達を危険勢力と判断したらしい。意識の一部で他人事のように冷静な思考を展開する傍ら、それとは別の部分でミサイルを迎撃する魔法を編み上げていく。

しかし今回は、達也が手を出す必要は無かった。情報体次元（イデア）に直接アクセスして視界を拡大していた達也の目には、逃げ遅れた者がいないか会場周辺を見回っていた克人がミサイルに対処しようとして動いているのが見えた。

しかし達也が必要無いと判断したのは、克人が対処してくれるからではなかった。

克人が障壁魔法を展開する直前、ミサイルが空中で突然爆発した。横合いから打ち込まれたソニックブームによるものであり、このような芸当ができるのは国防軍の中でも特殊な兵器に限られる。案の定、会場のすぐ傍にスーパー・ソニック・ランチャーがあった。

それを確認した達也と真由美が、拡張していた視界を元に戻したそのとき、

「お待ちせ」

部屋の外から突然声を掛けられ、その場にいた全員がそちらへと顔を向けた。

そしてそこに立っていた軍服姿の藤林に、達也は覚悟を決めるよう

に秘かに表情を引き締め、残りのメンバーは軍の関係者が突然現れたことにただただ驚いていた。特に彼女と旧知の仲らしい真由美など「えっ? えっ?」と驚きで言葉を紡げなくなっている有様だ。

しかし、姿を現したのは彼女だけではなかった。同じ国防陸軍の軍服に身を纏い、少佐の階級章をつけた壮年の男性がやって来たことで、達也の表情に浮かぶ緊張感が増していく。

そんな彼の前まで男性はまっすぐ歩いていき、手を後ろに組んで立ち止まった。

「——特尉、情報規制は一時的に解除されています」

彼の隣に立つ藤林の言葉に、達也は姿勢を正して男性に対して敬礼で応えた。その姿を深雪以外の全員が、ちょうど部屋にやって来た克人も含めて驚きを隠せず見つめている。

達也の敬礼に同じく敬礼で返す男性は、克人の姿を目に留めてそちらへと向き直った。

「国防陸軍少佐、風間玄信はるのぶです。訳あって、所属についてはご勘弁願いたい」

「貴官が、あの風間少佐でいらっしやいましたか。師族会議十文字家代表代理、十文字克人です」

魔法師の世界における公的な肩書きを克人が名乗ったことで、今が“そういった場”であることを悟った周りの面々が緊張で表情を強張らせ、その遣り取りを見守る。

「藤林、状況を説明してさしあげろ」

「はい。我が軍は現在、保土ヶ谷駐留部隊が侵攻軍と交戦中。また、鶴見と藤沢より各1個大隊が当地に急行中。魔法協会関東支部も独自に義勇軍を編成し、自衛行動に入っています」

「ご苦労。——さて、特尉」

呼称と共に、風間が顔を達也へと向けた。

「現下の特殊な状況を鑑み、別任務で保土ヶ谷に出勤中だった我が隊も防衛に加わるよう命令が下った。国防軍特務規定により、貴官にも出動を命じる。——国防軍は皆さんに対し、特尉の地位について守秘義務を要求する。本件は国家機密保護法に基づく措置であることを

「ご理解されたい」

後半の台詞は、揃って口を開きかけた真由美や摩利に対する牽制だった。厳めしい単語や重々しい口調よりも、その視線の力でもって2人は抵抗を断念する。

と、部屋に新たな人物がやって来た。風間と同じく軍服に身を包む人物・真田繁留^{しげる}大尉が、口を閉ざしたままの達也へと呼び掛ける。

「特尉、君の考案したムーバル・スーツをトレーラーに準備してあります。急ぎましょう」

「分かりました。——すまない、聞いての通りだ。みんなは先輩方と一緒に避難してくれ」

「特尉、皆さんには我々がお供します」

「宜しくお願いします、少尉」

藤林に一礼し、達也は部屋を出ていく風間の後に続いた。怒濤の展開についていけないのか、達也を視線で追うものの誰も声を掛けられずにいる。

その背中に声を掛けることができたのは、彼女だけだった。

「——お兄様、お待ちくださいっ！」

張り詰めた声で呼び掛ける深雪に、達也は足を止めて視線で風間に問い掛け、風間は頷きを返して先行した。

踵を返してこちらを見つめる達也の目の前にまで、深雪が歩み寄る。その瞳の奥に覚悟と決意を感じ取った達也は、姫君に跪く騎士のように片膝を突いた。

深雪が達也の頬に手を添え、まぶたを閉ざした彼の顔を上へ、つまり自分へと向ける。

そして深雪は、彼の額に優しく口づけた。

名残惜しそうに唇を離し、彼から少しも目を離さずにゆっくりと後ずさる。

すると次の瞬間、彼の体が眩い光に包まれた。

皆が思わず目を逸らすその光は、物理的なものではなく魔法の根源と呼ばれる粒子だった。普通では考えられないほどに活性化したサイオンが、達也の体を包み込むように吹き荒れている。やがてその光

が収まった後も、サイオンは彼の周囲で静かに渦巻いている。

「ご存分に」

「ああ、征ってくる」

スカートを摘んで優雅に膝を折る深雪に、達也は力強く返事をした。

万感を込めた妹の眼差しに見送られ、達也は戦場となった横浜の街へ出陣した。

*

*

*

会場から地下通路を通ってシエルターへ避難しようとしているのは、第一高校の生徒や職員、そして複数の学者や観覧客を含めた総勢60名以上にも達する大規模なグループだった。襲撃を受けたのが第一高校の発表直後だったこともあり、応援の生徒数もピークに達していたのである。

地下通路といっても洞窟のような薄汚い場所ではなく、しっかりと整備されているため幅は広く、非常灯も備えつけられているため明るい。しかしそれは、余計な遮蔽物が無く視界も明るいため身を隠す場所が無いということにもなる。元々自然災害や空襲に対する避難ルートとして作られたので、通路内で戦闘することを想定していないのである。

そんな地下通路を60名以上の大所帯を引き連れて歩くのは、魔法協会が派遣したプロの魔法師、生徒有志で結成された会場警備隊のメンバー、そして千葉県警所属の刑事と名乗る女性だった。その中には克人より同行を命じられた沢木や服部の姿もあり、曲がり角などで視界が遮られる度に動きを止めて安全を慎重に確認しながらゆっくりと進んでいく。

魔法師は不死身ではない。切られれば血を流すし、撃たれれば当然死ぬこともある。そうしたりスクに対する恐怖と戦いながら、彼らは非戦闘員を守るために我が身を盾にしていた。

そして現在、彼らは緊張感の中に困惑を緋い交ぜにした複雑な表情

で、目の前の光景をつぶさに観察していた。

「服部、この状況をどう見る？」

「……眠っている、ように見えるが」

生真面目な性格である服部にしては珍しい返事だったが、生憎と沢木はそれを冗談だと笑うことはできなかった。

ハイネックのセーターにジャンパーにカーゴパンツという、ホール内へと襲撃したゲリラ兵と同じ服装。戦闘する場所を想定してかハンドガンやコンバットナイフといった近接戦向けの武器を携えたその男達は、おそらくここを通る避難者を待ち構えていたと考えて間違いないだろう。

しかしその男達が、ことごとく眠りについていて。彼らはホールから直接地下に避難したので分からないが、まさしく会場の正面入口で起こっていた現象とまったく同じことがここで繰り広げられていた。

とはいえ沢木も服部も、そして集団の矢面に立っていた他の魔法師達も、奴らがここで眠っている理由にまるで心当たりが無かった。つまりそれは自分達にも降り掛かる危険のあるトラップである可能性も否めず、こうして少ない材料からその安全性を見極めるのに時間が掛かっていた。

「ねえボーちゃん、後どれくらい掛かりそうかしら？」

「分からない。けど、いつまでもここに留まるわけにいかないから、それほど時間は掛からないと思う」

そうして予期せぬ理由で足止めを食らっていたグループの中に、あいとボーの姿があった。

あいは地下通路の床にそのまま腰を下ろして壁に寄り掛かるといふ、普段の彼女ならば考えられない格好で疲労が溜まった体を休めている。一方ボーはまだ体力に余裕があるのか、彼女の隣で立った状態で壁に寄り掛かっていた。そうして軽く目を閉じながら両腕を組む姿は、何かを考え込んでいるようにも見える。

「今になって考えてみれば、別に私は他の皆さんに付き合っただけでシエルターに避難する必要は無いのよね。自前でへり呼べるし」

「それを実際にやっちゃったら、かなりのひんしゆく響躉を買うと思う」

「他の皆さんも乗せられるだけのへりを呼んだら、あるいは……？」
「全員が飛び立つまでの間、へりが攻撃されないように誰かが守る必要がある。かなりの負担」

「……まあ、取り残された人を助けるならまだしも、これだけの人数を、しかも九校分も用意するのは現実的ではないわね。敵からも集中的に狙われるでしょうし」

大きな溜息を吐いて、あいは自身の考えを退けた。どのみち手遅れである以上は詮無い話であるが、こういった会話でもして気を紛らわさないとやってられない気分だった。

そうして今度は、ボーとは反対側に腰を下ろすサキへと視線を向けた。彼女は背中を丸めて膝を抱え込み顔を伏せているため、傍目にはその表情を窺い知ることはできない。

「……………」

あいは彼女を一瞥するのみで声を掛けることはせず、再びその顔を正面へと戻した。

彼女の口から、ぽつりと「しん様……」と声が漏れた。

第64話 「みんなで出来ることをするゾ その1」

第三高校の代表団とその応援団は、来たときに利用したバスで避難する方針を固めて駐車場まで移動している最中だった。

「まったく、なんでこんな離れた所に……」

「そういう街の構造なんだから仕方ないでしょ。日帰りのつもりで運転手を待機させてただけでも幸運だったんだから、文句言わないの」

国際会議場から離れた大型車両専用の駐車場までは、避難の船が到着する予定の埠頭よりも近いとはいえ、結構な距離を歩かなければいけない。つい愚痴を零してしまった将輝を、真紅郎が真剣な表情で叱りつけた。

とはいえ、真紅郎としても不安はあった。駐車場は会場の南側、つまり偽装戦闘艦が接岸している埠頭に近いのである。しかし尚武の気風が強い第三高校の生徒にとっては『卑劣な侵略者など蹴散らしてしまえ』とばかりに却って氣勢を上げている。

真紅郎はそんな彼らに対し、どうにも楽観的という印象を拭えなかった。いくら第三高校のカリキュラムが実戦向きとはいえ、実際に人を殺すような戦闘を経験した生徒などごく少数だ。今回引率している教師もイベントの性質上学者肌の人間ばかりで、いざというときに動けるかどうかは疑問が残る。

そんなことを考えている内に、ようやく自分達の乗ってきたバスが姿を現した。耐熱耐衝撃の軍事車両と同じ装甲板を取りつけているあのバスならば、一旦乗ってしまえば余程の集中攻撃を受けられない限り街からの脱出は可能だ。

将輝と真紅郎がホッと一息吐いた、その瞬間、

「あ」「あ」

2人の目の前で、バスがロケット砲の爆撃を受けた。幸いにも着弾地点は最後尾付近だったので、運転手は即座に脱出して無事だったし、車体も若干焼け焦げているが穴の空いた様子は無い。

その代わり、タイヤは無惨なことになっているが。

「――」の野郎！」

一瞬で臨界点に達した将輝を真紅郎は落ち着かせようとし、すぐに放っておくことにした。タイヤを交換するまでの間、敵をバスに近づけさせてはいけけない。だったら将輝を好きに暴れさせておいた方が都合が良い。

「先生、敵は将輝に任せてタイヤの交換をしましょう」

「き、吉祥寺。そうは言っても——」

「ここは大型車両や特殊車両専用の駐車場です。簡単な整備をするための施設も併設されているので、タイヤのストックくらいは常備しているはずですよ」

「そ、そうか！——よし、手の空いてる者は交換用のタイヤを探してきてくれ！」

教師の呼び掛ける声と共に、その場にいたほとんどの生徒が動き出した。上級生も教師も、皆が1年生の真紅郎を中心に動き始める。

そして彼らの声を背後で聞きながら、将輝はホルスターからCADを取り出した。

*

*

*

藤林が引き連れている部隊は、オフロード車2台に本人も含めて8人という分隊にも満たない小規模なものだった。しかし彼らの姿を見た真由美達の目に不安は無く、人数を補って余りあるほどの手練れであることが雰囲気からして疑う余地のないものだと言信していた。

「真由美さん、残念ですが全員は乗れません」

「いえ、大丈夫です。最初から徒歩で向かうつもりでしたので」

「しかしそれでは、あまり長距離は進めません。どちらへ向かう予定ですか？」

藤林が克人ではなく真由美に話し掛けたのは、単純に彼女が顔見知りだからだろう。しかし真由美としては、明らかに自分よりこういうシチュエーションに慣れているだろう克人に相談してほしかった。

「保土ヶ谷の部隊は野毛山を本陣として、小隊単位でゲリラの掃討に当たっています。山下埠頭の敵偽装艦に今のところ動きは見られま

せんが、じきに機動部隊を上陸させてくるでしょう。そうなれば海岸地区は戦火の真つ只中に置かれることになりますから、やはり内陸へ避難した方が良いでしょうね」

「えっと……、それじゃ、予定通り駅のシェルターに避難する……？」

真由美は不安そうな表情で克人へと視線を向け、彼が力強く頷いたことでホッと胸を撫で下ろした。その遣り取りを見ていた藤林が、前と後ろを車で固めながらゆっくりと移動することを提案、真由美はそれを了承して全員で駅へと向かおうとした、

まさにそのときだった。

「藤林少尉」

「何ででしょうか、十文字さん？」

克人の呼び掛けに、藤林はタイムラグ無しで振り返った。反応が早いというよりも、声を掛けられることを予期していたといった感じだった。

「誠に勝手ではありませんが、車を1台貸していただけますか？」

「どこへ行かれるのですか？」

「魔法協会支部へ行き、戦闘に参加します」

聞く者の体にズツシリとのし掛かるような重い声には、年若い少年が抱きがちな薄っぺらいヒロイズムとは一線を画す、いわば「覚悟」が滲み出ていた。

しかしながら、摩利は声をあげずにはいられなかった。

「なぜだ、十文字！ アタシ達と一緒にシェルターに行けば良いじゃないか！」

「俺は代理とはいえ、師族会議の一員として魔法協会に対する責務を果たさなければならぬ」

「しかし、十文字はまだ——」

なおも食い下がろうとする摩利を止めたのは、真由美だった。普段はニコニコと無邪気な笑みを浮かべる彼女が口を引き結んで黙って首を横に振る姿に、摩利は彼女の制止を振り払うことができなかった。

「——分かりました。楯岡軍曹、音羽伍長。十文字さんを護衛なさい」

藤林の命令に部下2人が敬礼で返すと、2台しかない貴重な車の内1台を克人に分け与えた。それは実にあっさりとしたもので、提案した克人の方が却って戸惑うほどだった。

そんな彼の反応をよそに、藤林はもう1台の車に乗り込み、その荷台に立って真由美達へと呼び掛ける。

「さて、行きませう。無駄にできる時間はありませんよ」

*

*

*

あずさが率いてきた（という表現が正しいかはともかくとして）一高の生徒と教職員＋αの集団は、他校に少し遅れて地下シェルターの入口によくやく到着した。60人規模の集団を1人の取り零しも無く、いつやって来るか分からないゲリラ兵の警戒をしながらの移動は想像以上の困難さであった。

災害時ならば自由に出入りできるドアも、敵の勢力が跋扈する（ばつこ）現在ではそうもいかない。あずさが代表してドアを開けるように説得し、その間によねや沢木達が脱落者の有無を確認する点呼を行う。遙もカウンセリングの知識を駆使して、不安で押し潰されそうになっている生徒のケアに当たっている。

「大丈夫、千秋？」

「……うん、私は平気だよ、お姉ちゃん」

姉の小春にそう答える千秋だったが、台詞とは裏腹にその表情は明らかに不安を滲ませたものだった。当然小春もそれは分かっていたが、彼女にはそれを指摘するのは躊躇われた。その言葉がそっくり自分に返ってくるような気がしたからだ。

一方千秋も、自分が大きな不安を抱えていることは充分に理解していた。そして姉がそれに気づき、敢えて指摘しないでも気づいていた。彼女は心の中で姉に謝罪しながら、頭の中にとある人物を思い浮かべる。

その人物とは、コージローだった。

自分の命が狙われたあの日から、おそらく自分が最も一緒に時間を

過ぎたのが彼だった。いつ来るか分からない襲撃者に備えてボディーガードの役割を果たし、気分転換に剣道を自分に教えてくれ、そして何てことない内容でも一緒に話してくれた。

だからだろうか。今こうして彼が自分の傍を離れてしまったことが、彼女を何よりも不安たらしめていた。如何に自分の中で彼の存在が大きくなっていたのか、彼女は今更になってまざまざと思い知っていた。

まさかこれが、自分が今まで経験したことのない、所謂「恋」というものでは――

「皆さん！ 頭を庇って伏せてください！」

突然の呼び掛けに、千秋はむりやり現実へと引き戻された。それは一高代表選手の校内選考責任者であり、その縁で今日観覧に来ていた甘楽つづらの叫びだったのだが、千秋はそれに気づく余裕も無く咄嗟に顔を上げた。

そんな彼女の視界に、みるみるヒビ割れていく天井が飛び込んできた。コンクリートの軋む音があちこちから聞こえ、照明が突然消えて地下通路が闇に包まれる。

その瞬間、皆の反応は様々だった。悲鳴をあげる者、ただしやがみ込む者、落ちてくる鉄とコンクリートを土砂に変えようと魔法を試みる者――。それら全員が、天井が崩壊する轟音と共に土埃に巻き込まれてその姿を隠していった。

千秋も、その中の一人だった。姉の体にしがみつき、悲鳴をあげることもできずに目を瞑ってしやがみ込むことしかできなかった。

しかし、彼女達は生き埋めにならなかった。

「えっ――」

千秋が恐る恐る目を開けると、鉄筋とコンクリートの破片がジグソーパズルのように複雑に重なり合い、円弧状のトンネルを作り出していた。それぞれが絶妙なバランスで互いの重量を支え合い、人が中腰で立てるほどの空間を形成している。

まるで奇跡のような偶然に、千秋は自分が置かれている状況も忘れてその光景に見入っていた。

もちろん、これは単なる偶然ではなかった。

甘楽の専攻は魔法幾何学、その中でも多面体理論と呼ばれる分野を研究している。マクロ現象を三角錐や四角柱などの単純な多面体の集合で捉え、仮想多面体の運動で現象の変動を把握し、仮想多面体の運動を制御する魔法式で事象を改変する理論である。

つまり甘楽は1つの出来事を多数の要素によって成立する結果として捉え、その要素の一部を改変することで、通常よりも少ない魔法力で事象を改変させることができる。地下通路の崩壊を避けられないと悟った彼の手により、土砂の圧力によってアーチが形成されるように破片をビリヤードのようにコントロールしたのだろう。

しかしこの魔法は、破片そのものの耐久力が上がったわけではない。地下通路の崩壊に生じる圧力を利用していただけであり、破片そのものが壊れてしまえばどうしようもない。

だからこそ今すぐにでもその場から動かなければいけないのだが、一度は死を覚悟したところからそれを免れるという緊張と緩和の落差が大きいせいで、千秋の思考は未だに混乱状態から抜け出せずにいる。姉の小春もそれは同じで、互いの温もりが唯一の命綱かのように縋り合っている。

と、トンネルを形成する瓦礫に、再び亀裂が走った。

「何してんの！ 早く逃げなきゃ！」

「——！」

我に返った平河姉妹の目に飛び込んできたのは、1人の少女だった。年齢は自分達と同じくらいで、紫色の長い髪をサイドテールに縛り、その反対側に黒いリボン、そして髪と同じ紫色のオーバーオールという恰好だからか幼い印象を受ける。

そんな彼女が必死の形相で、こちらに腕を伸ばしていた。

2人が反射的にそれを手に取ると、少女は力任せに2人を引っ張り上げて立ち上がらせると、そのまま2人を引っ張って走り始めた。前方には弱い光がこちらに差し込んでおり、おそらく瓦礫のトンネルを抜けた人がライトを照らしているようだった。

2人はとにかく、その少女と無我夢中で走った。

頭上から、ギシリ、と嫌な音が聞こえた。

瓦礫の一部が重みに耐えきれず、崩れていく。

「出口にいた一高生徒が、CADをこちらに向けて魔法を発動した。がくん、と少女を含めた3人の体が見えざる手に引っ張られる。」

そうして3人の体がシエルターに続く通路へと文字通り飛び込んだ瞬間、地下通路は崩壊した。先程まで自分達がいた場所がコンクリートの破片や土砂によって埋め尽くされていく様子が、振り返る3人の眼前でスローモーションのようにゆっくりと展開されていく。

「サキちゃん、お手柄」

「運動は苦手なのに、無茶しますわね」

背の高い少年・ボート、臍脂色の高級服を着た少女・あいが、平川姉妹を引っ張ってきた少女・サキを出迎えた。ボートは無表情ながらその声は力強く、あいにはサキを咎める台詞ながら優雅な笑みを浮かべていた。

「あ、ありがとう……」

「あなたのおかげで助かったわ、ありがとう」

「……どういたしまして」

そして平河姉妹の礼に、サキが頬を紅く染めて消え入りそうな声で返した。そんな彼女の健気な姿に、遠巻きにそれを眺めていた人々も思わず頬を緩めていた。

サキ達5人が、シエルターへと足を踏み入れた。既に避難していた人々と合わせて100人は超えているが、部屋自体が広々としているので狭い印象は無い。壁や天井に固定された棚が幾つかあり、そこに数日分の食料や水が入った段ボール箱が積まれている。

そんなシエルターの様子を、サキは興味深そうに眺めていた。そんな状況ではないと分かってはいるが、滅多に入ることの無い場所に来たことでの好奇心はそうそう止められない。そしてそれは他の4人も、大なり小なり同じだった。

だからこそ彼女達は、背後から近づく男の存在に気づかなかった。

「オマエら、全員動くな！」

「きゃっ——！」

背後から突然サキの首に右腕を回した男が、左手に持つコンバットナイフを彼女の顔へと突きつけた。

沢木達我真つ先に反応してCADを構えるが、それとは別に数人の男達が一斉に動き出し、それぞれが手榴弾を持った手を彼らに見せつけた。いざとなったらこの場で爆発させるといふ言外の脅しに、彼らは息を呑んで動けなくなる。

そんな中で真つ先に口を開いたのは、友人を人質に取られた形となるあいだった。

「あなた、地上で暴れてるゲリラ兵の仲間ね？」

「ああ、その通りだ。さすがに頭の回転が早いな」

「予想はしていました。一般人の振りをしてシエルター内部に入り込み、避難してきた人々を人質に取る真似をしてくるのは充分考えられたので。そのために魔法師の皆さんと一緒に連れてきたのですが……、まさか直接狙ってくるとは思いませんでしたわ」

つらつらと言葉を並べる様子は落ち着いているように思えるが、そう話すあいの表情はとても緊迫したものだった。街がゲリラ兵の侵攻を受けていると聞いたときも落ち着き払っていた様子だった彼女だが、さすがにこの状況ではその余裕も無いようである。

そして彼女の隣に立つボーも、いつも以上に目つきを鋭くして、サキを人質に取るゲリラ兵を睨みつけていた。

「そのあなた、要求を言っつてごらんなさい」

「俺達の要求は、酔乙女あい、オマエだ」

「分かりました。それでは私が彼女の代わりに人質となりますので、彼女を離してください」

「断る。コイツはオマエの友人だな？ オマエ自身を人質にするよりも、コイツを人質にした方が色々都合が良さそうだ。——動くなど言っつた！」

後ろ手にCADを操作しようとしていた魔法師の1人を一喝し、男はサキを拘束する腕に力を込めた。その弾みで左手に持つナイフが揺れ、刃の側面が彼女の頬にピタリと触れた。

「ひっ——！」

「その子を離しなさい。私が狙いなのでしよう？」

「やはりな。オマエは自分の命よりも、自分の大切な者の命が脅かされることを嫌う。コイツを選んだ俺の目に狂いは無かった」

「いいえ、違うわ。ハッキリ言つて、あなたの選択は考え得る限りで、最悪」よ。今すぐその子を離しなさい」

「そんな見え透いた嘘には動じない。シエルターの入口は塞がれてしまったが、じきに仲間がここにやつて来るだろう。そのときには酔乙女あい、オマエも一緒に来てもらうぞ」

「いや——いや——」

目の前にナイフを突きつけられる死の恐怖と、自分のせいでそんな恐怖を友人が肩代わりしようとしているという恐怖。そんな二重の恐怖に晒されたサキは、目に涙を浮かべて小刻みに体を震わせていた。

そんな彼女の反応に、CADを構える魔法師達の顔に緊張が走った。人質が錯乱状態に陥つてしまえば、どんな行動を取るか分からない。それが犯人を刺激し、最悪の結末となる可能性だつて充分に考えられる。今すぐにも助けてやりたいが、自分達を見据えながら手榴弾をちらつかせる他の男達の存在がそれを邪魔している。

そしてあいも魔法師達と同じように、かなり切迫した焦りの表情を浮かべていた。

しかしその内容は、彼らとは少し違っていた。

「大丈夫よ、サキちゃん。彼らにとつてもあなたは大切な存在、だからあなたに危害を加えることは彼らだつて極力避けたいことなの。だから落ち着いてちょうだい」

「でも、でもあいちゃんが——」

「私は大丈夫だから。あなたが心配することじゃないわ」

「でも——でも——」

「大丈夫よ。それにきつと、しん様が助けに来て——」

「さつきからゴチャゴチャとうるせえ！ 無駄なお喋りができないように黙らせてやろうか!?!」

「あいの口が『馬鹿』という言葉を紡ぐよりも早く、サキの『能力』が発動した。」

サキは現在、酔乙女ホールディングスが支援する研究所で父親と共に、人々の夢から抽出できる未知のエネルギーである『ユメルギー』の研究を行っている。

元々は研究中に起こった爆発事故によって母親を失い、その原因が自分にあると思い込んだサキが悪夢にうなされるようになったことで、父親が彼女を悪夢から救うために目をつけたのがユメルギーだった。その一件については5歳のときに知り合ったしんのすけ達によつて解決し、今度はそのユメルギーを平和利用しようと親子で研究を始めるようになった。

ユメルギーを化石燃料や再生可能エネルギーに続く新たなエネルギーとする動きもあつたが、供給源である人間の健康への影響を鑑みて現在ではほとんど下火となっている。その代わりユメルギーを解析することで夢のメカニズム、それが人間に与える影響、さらには特定の夢を見せる方法など、過去の定説を覆す新事実を次々と明らかにし、睡眠に由来する症状で悩む人々への画期的な治療法を確立した。今やその分野において、貫庭玉親子を知らぬ者は無学扱いされるほどだ。

しかしサキには、世間には知られていない『もう一つの顔』があつた。

いつの頃からか、彼女には魔法による再現が困難な『能力』が身についていた。しかし普通の魔法は使うことができず、その点だけを見れば遙と同じ『先天的特異能力者』、つまり『BS魔法師』と呼ばれる者達と同じように思える。しかし彼女は元々その能力が使えたわけではなく、『先天的』の定義からは外れる。

彼女が身につけたその能力とは実に単純明快、『任意の相手を眠らせる』というものだった。

その効果からユメルギーが関係しているように思えるが、共同研究者である父親にはそのような傾向は見られない。ユメルギーの研究と平行して2人で原因を調べてはいるものの、結果は芳しくなかった。もつと頭数を増やせば分かるかもしれないが、2人はこの件をごく一部の親しい者以外に話す気は一切無い。後天的にBS魔法師を増産できるかもしれないとなれば、彼女を人体実験の材料にしようと画策する者が現れてもおかしくないからである。

能力の説明に戻ろう。この能力の最たる特徴は、眠らせることそのものよりも「狙った相手を選べる」ことにある。しかもホールの中から建物の入口にいる敵を眠らせたことから分かる通り、視界の届かない場所にまでその能力の効果が及ぶ。

だからこそ、地下通路のように視界の遮られた場所においてその能力の効果は絶大だ。シエルターまでの道中でゲリラ兵と思われる者達が眠っているところが発見されているが、実際には周辺の経路にもゲリラ兵は潜んでいて、そして誰にも（それこそ本人にすら）知られることなくその全員がサキによって無力化されている。

なぜ遠くの敵の位置が分かるのか、それはサキ自身にも分からない。彼女としては「敵の姿を視認する」というよりは「人間が発する感情を読み取る」とする方が感覚的に近いらしく、父親は『元々自分に向ける感情に対して敏感だった性格に起因するのでは』という仮説を立てている。

そんなサキの能力だが、当然ながら欠点も存在する。

1つは、能力の発動に或る程度の集中力を必要とすること。自分に敵意を向ける者に対して常に発動する類のものではないため、先程のように不意打ちには対応できないのである。

そしてもう1つの、最大の欠点と呼ばれるものが、術者であるサキが精神的に追い詰められてパニックになってしまうと、能力が「暴走」してしまうことだった。

「……………」

つい先程まで、入口の地下通路崩落、そして突然のゲリラ兵の登場に大騒ぎとなっていた地下シエルター内部であったが、今は一転して

とても静かなものだった。100人を超える避難者の誰一人として声をあげず、せいぜい息遣い程度しか聞こえない。

それもそのはず。子供も、大人も、老人も、男性も、女性も、魔法師も、非魔法師も、敵も、味方も、そこにいるほぼ全員が一切の区別無く床に倒れ伏し、深い眠りに就いていた。

サキを人質に選んだゲリラ兵も、奴らに攻撃する隙を伺っていた一高の生徒やプロの魔法師達も、彼女の代わりに人質となろうとしていた酔乙女あいも、その様子を注視していたボーも、その遣り取りを見守っていた他の人々も、今や全員が仲良く夢の中である。

「……………」

そんな集団の中で、ただ一人、サキだけがその場に立っていた。辺りを見渡し、自分を害そうとする輩が眠っているのを確認すると、彼女は大きく息を吐いてゆつくりとその場に座り込んだ。友人達も眠ってしまったているが、眠っているだけなので特に問題は無い。

当然の危機から脱することができたサキは、ただただホツと胸を撫で下ろしていた。

自分達を誘導していた女刑事がシエルターの中にいないことなど、気づきもしなかった。

*

*

*

藤林達に先導されてシエルターが地下に設置されている駅前広場に辿り着いた真由美達は、その「惨状」に息を呑んだ。

特に彼女達の目を惹いたのが、大きく陥没した広場に君臨する巨大な金属塊だった。

「直立戦車……、一体どこから……？」

藤林としても予想外な敵だったのか、呻くような声が零れた。

複合装甲板で覆われた人型の移動砲塔であるそれは、太く短い2本の脚に無限軌道のローラースケートを履かせたようなフォルムの下部構造と、1人乗りの小型自走車に様々な種類の火器がセットされた長い両腕と首の無い頭部をつけた上部構造で構成されている。全高

約3メートル半、肩高約3メートル、横幅約2メートル半、長さ約2メートル半という、人間からしたら巨大だが兵器としてはそれほど大きくはないそれは、市街地で歩兵を掃討することを想定して東欧で開発されたものだ。

弾薬フル搭載、兵員搭乗時の総重量は約8トン、広場には2機いるので合計で16トンとなるが、それだけで舗装された路面が陥没するものではない。シエルターや地下通路に向けて攻撃が加えられたことは明白だ。

そんな兵器を目の前にした彼女達の反応は、——困惑だった。

「直立戦車が、動かない……?」

「響子さん！ あそこで大勢の市民が意識を失っています！」

真由美が指差す先には駅があり、おそらく先程の崩落によってシエルターに逃げる事ができずに取り残された市民が集まっていた。しかし彼らは取り残された絶望からパニックになることもなく、むしろ戦火のど真ん中で穏やかな眠りに就いていた。

深雪達にとってその光景は、ひどく既視感のあるものだった。

ホールで、会場の入口で、まさにそんな風に眠るゲリラ兵を目撃した彼女達にとって。

「ああもう、ホント訳わかんないわよ！ 何が起こってるの!?!」

ガシガシと頭を掻いて苛立ちを露わにするエリカの横で、幹比古が目を閉じたまま、心の一部をどこか別の場所に置いてきたような表情で口を開いた。

「……精霊を飛ばして確認してみたけど、現時点ではこの周辺で魔法は確認されなかった。少なくとも、今すぐに僕達が眠りに就くことは無さそうだよ。——それと、地下道を通っていたみんなは全員無事だ。誰かが生き埋めになった様子も無い」

「吉田家の方がそう仰るなら確かでしょうね。ご苦労様でした」

「それで、これからどうすんだ?」

レオの問い掛けに、藤林は広場に立ち尽くす直立戦車に目を向けて、

「こんな所にまで直立戦車が入り込んでいることからして、事態は想

像以上に急展開しているようですね。私としては、野毛山の陣内に避難することを勧めますが」

「しかしそれでは、敵軍の攻撃目標になるのでは？」

「摩利、相手は戦闘員とそれ以外の区別はつけていないわ。軍と別行動したって危険は少しも減らないし、むしろ危ないと思う」

真由美のその言葉は戦場における原則論とは外れているが、最初に国際会議場を占拠しようとしたり、今のように地下シェルターに攻撃を加えているところから考えても、真由美の言葉が正しいことが分かるだろう。

「それでは七草先輩は、野毛山に向かうべきだと？」

五十里の質問に真由美は小さく首を横に振り、視線を駅の方へ向けた。

「私は逃げ遅れた市民のために、輸送へりを呼ぶつもりです」

「な——！ おまえも避難せずに残ると言うのか！」

すかさず摩利が、それこそ克人のときと同じように声を荒らげることが、真由美の決意は固かった。

「私達十師族は様々な便宜を享受し、そして時には法律の束縛すら受けずに自由な振る舞いをするのが許されている。だけどそれは、こういうときに自分の力を役立てることを対価として得られる権利なの。私がここで避難せずに残ることは、いわば十師族としての義務なのよ」

「そんな……」

普段の生活ではほとんど感じることはないが、真由美は十師族の直系である。その立場がどれほど重いものかを改めて思い知った摩利は、真由美の覚悟に吞まれて口を閉ざすしかなかった。

そんな中、五十里が真つ先に手を挙げて口を開いた。

「ならば、僕もここに残りますよ。数字を持つ百家の一員として、政府から色々な便宜を受けていますから」

彼のその言葉に、他の生徒達も次々と手を挙げる。

「啓が残るんならアタシも！ アタシだって『千代田』っていう百家の一員なんだから！」

「なら、アタシもそうね。これでも一応『千葉』の娘だから」

「私も残ります！ お兄様が戦っているのに、私だけが何もしないわけにはいきません！」

「わ、私だって！」

「会社のヘリをよこすよう、私も父に連絡します」

「俺は十師族でも何でもないけど、これだけ名乗りを上げてる中で俺だけ尻尾撒いて逃げるなんて真似、出来るわけがないですよ！」

「僕も残ります。『吉田家』は百家ではありませんが、政府から便宜を受けている立場は一緒です」

「下級生が全員残ると言っているのに、アタシ達だけが避難するわけにはいかないよな、市原？」

「ええ、そうですね。それに真由美さんは意外と抜けたところがありますし、真由美さん1人では不安です」

「あなた達……、みんな馬鹿ね」

結局その場にいた全員が残ると言い出した事態に、真由美は嘆きの台詞を漏らした。しかし口元に笑みを浮かべていては、本気で受け取る者は1人もいないだろう。

「申し訳ございませぬ、藤林さん。せっかくのご厚意ですが……」

「いいえ、皆さん頼もしいですね。それでは、私の部下を置いていきますので——」

「それには及びませぬよ、藤林少尉！」

その言葉は目の前の一高生達ではなく、藤林の背後から掛けられたものだった。

「あら、警部さん」

「か、和兄貴！」

その声の主を見て、藤林は含みのある笑みを、エリカは心の底からの驚愕を浮かべた。

「軍の仕事は敵の排除です！ 市民の保護は、我々警察にお任せを！」
「了解しました。我々は本隊と合流しますので、後はよろしくお願いします」

あまりにもタイミングの良すぎる登場に、まるでリハーサルでもし

ていたかのような決め台詞を口にする千葉寿和だが、藤林はそれを意に介する様子も無く敬礼をして颯爽とこの場を去っていった。彼女の部下達も、それに続く。

そしてその後ろ姿を、寿和はジツと見つめていた。

「和兄貴、あの人は兄貴の手に負える人じゃないから諦めなつて」

「……いや、そういうんじゃない」

「……………」

エリカからしたら随分と珍しい兄のシリアスな表情に、彼女は不思議そうに首を傾げた。

*

*

*

天井や壁が崩落し、照明も落ちてしまったためにほとんど暗闇に包まれた地下通路。

シエルターへと続く道を塞ぐ瓦礫の山を前に、よねは途方に暮れていた。

「……しまったな、完全に取り残された」

状況に反して、彼女の声色は呑気なものだった。

天井が最初に崩落したとき、よねは集団の最後方にいた。警察官たる自分が市民より先にシエルターに入るなど言語道断という意識が働いたのか、避難者の安全を確認してから最後にシエルターに入ろうと思っていたのである。

なので甘楽によって一時的にトンネルが作られた後も彼女は後ろから避難者の誘導を続け、そして再び崩落が始まったとき、シエルターには間に合わないと判断したために後ろへと走り出したのである。

つまりこの状況は彼女自身が選択した結果であり、だからこそその呑気な態度なのかもしれない。それに（寿和の心配とは裏腹に）彼女にとってこの程度のピンチは何度も経験しており、今まで無事だったのだから今回も何とかなるだろう、と根拠も無く樂觀視していたのも要因だろう。

なのでよねは、すぐに意識を切り替えた。

「……仕方ない、とりあえず他の出口から地上に出るか」

よねはそう独りごちると、踵を返して地下通路の奥へと走り出した。

第65話 「みんなで作れることをするゾ その2」

国際会議場から魔法協会支部が入っている横浜ベイヒルズタワーへ向かうには海岸沿いに進む方が近いが、内陸寄りの道を使ってもそれほど遠回りになるわけではない。敵の主力は国籍不明艦が吐き出す上陸部隊であり、市内に潜伏していた兵力も海岸沿いで活発に活動している状況だ。

藤林の命で克人を乗せたオフロード用車両を運転する音羽伍長は、後部座席に座る克人に「迂回しますか？」と尋ねた。対する克人の回答は「ノー」であり、故に車両は砲火の飛び交う海寄りの道路を最短経路で突っ切っていた。

ベイヒルズに、そして山下埠頭に近づくにつれて、敵は重武装化していく。侵攻軍の機動兵器（つまり直立戦車）を見掛ける頻度も少しずつ上昇し、脇道に待機する多連装ミサイルランチャーを担いだ小集団の姿も散見される。

と、その小部隊から克人の乗る車両めがけて、対戦車ミサイルと思しき4発の携行ミサイルが発射された。

いくら初速の遅いミサイルとはいえ、オフロード用車両で躲せる状況ではない。しかしハンドルを握る音羽伍長に動揺は無く、助手席の楯岡軍曹も風防越しにオートライフルを携える。

ミサイルは、車両前方5メートルの空中で爆発した。爆炎が容赦無く車両に襲い掛かるが、炎は車両と一定の距離に近づいたところで急激にその矛先を変え、まるで意思を持ったように炎は車両を避けて後方へと流れていく。

そうして炎は消え去り、透明な防壁に守られた車両が無傷で姿を表した。

すると今度は、車両側から銃弾の雨が横殴りに撃ち出された。こちららは透明な防壁を難なく通り過ぎ、国籍を明らかにする紋章は無いものの統一されたデザインの野戦服を身につける敵兵を薙ぎ払っていく。

外からの攻撃は通さず、中からの攻撃は妨げない。

指向性を有するこの防壁は、言うまでもなく克人が作り出したものだ。自分を中心とした半球面状の薄い空間を、一定量以上の熱量と酸素分子より大きな物質の侵入を許さない性質へと改変する魔法技術は、たとえ高速で移動する車両の上でもまったく揺らがなかった。

十字字家の持つ異名は「鉄壁」。

音羽も楯岡も、この短い時間でそれが持つ意味を実感していた。

*

*

*

「……で、なんで和兄貴がここにいるわけ?」

「おいおい、随分な言い草だな。愛する妹の窮地に駆けつけるのは、心優しい兄としては当然のことだろう?」

「心優しい? どの面下げてそんな空々しい台詞を」

「こらこら、エリカ。女の子が『どの面』なんて汚い言葉を使つてはいけないよ」

「アンタが! 今更! このアタシに! お嬢様らしく振る舞えなんて言えた義理?」

「やれやれ、悲しいなあ……。俺はこんなに妹のことを愛しているのに」

駅前広場の片隅で、千葉兄妹による心温まるとは程遠い会話が繰り広げられていた。ちなみに現在、駅前広場では直立戦車をどかしてへの発着スペースを確保、ついでに直立戦車のパイロットを引っ張り出して尋問する作業をしているのだが、2人はそのどちらにも向いていなかったのであぶれてしまっていた。現役警官が尋問に向いていない、というのは些かどうかと思うが。

エリカの表情がいよいよ冷たいを通り越して氷のようになってきた辺りで、寿和はフウツと大きな溜息を吐いて彼女を見遣った。ニヤニヤと含みを持たせた笑みと共に。

「良いのかエリカ、そんな態度で? せっかく良い物を持ってきたというのに」

「いらないわよ、そんなの」

「まあまあ、そう言うな。今のおまえには必要なものだ」

寿和はそう言つて、自分が乗つてきたワゴン車から何かを取り出した。細長い袋に入った緩やかなカーブを描く長い得物に、胡散臭げに彼を眺めていたエリカの目が見開かれる。

袋から取り出したそれは、エリカの身長を軽々上回る全長180センチの大太刀だった。刃渡りだけで140センチもするそれは、太刀にしては極端に反りが少ない。

「大蛇丸……い……なんで——」

「愚問だぞ、エリカ。大蛇丸は“山津波”を生み出すための刀だ。だったら“山津波”を使える奴が持つのが道理だ。そして“山津波”を使えるのは、親父でも修次でも、ましてや俺でもない。今の千葉家で“山津波”を使えるのは、エリカ1人だけだ。——故に大蛇丸は、おまえのための刀だ」

寿和から説明されながら渡されたその刀を、エリカは震える手で受け止めた。白兵専用の武器を製造している千葉家が、イカツチマル雷丸と並んで刀剣型武器デバイスの最高傑作と自負するほどの秘密兵器。たとえほんの一時だとしても自由に振るうことが許されたことに、エリカは心奪われたように刀に魅入っていた。

「自分の分身である愛刀を手にしてそんなに嬉しいか、エリカ？ たとえ親父がどう思おうと、修次が何を考えていようとも、やっぱりおまえは“千葉家”の娘だよ」

「……今回は礼を言つてやるわ」

そんな捨て台詞を残して足取り軽く去っていく妹の姿に、寿和は楽しそうな笑みを浮かべた。

一方その頃、パイロットを引きずり出した直立戦車のコックピットには、上半身を突っ込んだ五十里が敵の正体を特定するものが無いか確認していた。

「五十里くん、何か分かった？」

真由美の問い掛けに、五十里は上半身を引き抜いて首を横に振つ

た。

「駄目ですね。僕もこういった兵器に詳しいわけではありませんが、中古市場に回っている旧型機だと思います。国籍を特定するのは難しいでしょう」

「兵器にも中古市場があるの?」

「ありますよ。局地戦や途上国の内戦では、大戦期の兵器が今でも現役です。——とはいえ、同盟国の兵器の方が中古でも手に入りやすい、という事情もあります。この兵器は東欧製なので、大亜連合の工員である可能性は高いでしょうが……、やはりパイロットから直接聞き出すのが確実でしょうね」

「やっぱりそうよね……。——あ、摩利が戻ってきたわ」

パイロットの尋問を担当していた摩利がこちらに戻ってくるのに気づいた真由美が、五十里（と彼にピッタリ貼りついている花音）と別れてそちらへと向かった。

「どうだった?」

その質問に、摩利は悔しそうに首を横に振った。

「だんまりだ。こうなることが分かっていたら、もっと強い香水を持ってくるんだったな」

「仕方ないわ。薬を使わない、というのが関本くんを尋問する条件だったから」

「……いつそのこと、拷問でもしてみるか」

「ちよつと、それはいくら何でも——」

「分かっている。ちよつとした冗談だ」

それにしても目つきが随分と真剣に感じたのか、真由美はまっすぐ疑いの眼差しを摩利に向けている。

居心地の悪さを感じた（その時点で白状しているようなものだが）摩利は、逃げるようにその場を離れ、少し離れたベンチで携帯端末を見つめる鈴音の下へと向かった。もちろん彼女は1人でサボっているわけではなく、端末に周辺の地図を映し出して今の状況を確認しているのである。

そしてそんな彼女の隣にほのかが座り、光を屈折させる魔法で足元

の地面にその地図を投影していた。縦3メートル、横4メートルの大きさのそれは低高度偵察機並みに鮮明で、桜木町から山下町までの海岸通り地区の詳細を俯瞰で把握できる。これだけの映像を光の屈折だけで再現するなど摩利でも記憶に無く、もはや別種の魔法と考えた方が良くくらいだ。

「鈴音、そっちは何か分かったか？」

「はい。——光井さん、お願いします」

鈴音がほのかに指示を出すと、彼女は「はい！」と返事をして自身が投影する地図に赤い点を打ち始めた。

それを見ていた摩利は即座に、それが現在戦闘が行われている地点を意味していると悟った。

「戦線が派手に広がっている割には、兵力が少ないように見えるな」

「現在、戦線と呼べるものは存在していません。内陸部で行われている戦闘は、全て点で展開されています。おそらく潜入したゲリラ兵が交通や通信を麻痺させ、上陸部隊が直線的に目標を制圧するスタイルだと思われます」

「リンちゃんの言う通りだとして、敵の目標って何かしら？」

「1つは真由美さんの推測通り、魔法協会支部のデータベースでしょう。もう1つは脱出を試みている市民を狙っているようですが、こちらはおそらく人質を目的としたものでしょう」

「人質、か……」

「もし市民の殺傷を目的とするならば、揚陸艦ではなく砲撃艦で侵入するでしょう。人質交換か身代金か、目的は不明ですが……」

「ということは、少なくともいきなり砲弾やミサイルが飛んでくることとは無いということか？」

「おそらくは。しかし人質が目的なら、おそらくここも標的になる可能性が高いですね」

そう言っって鈴音が視線を遣ったのは、改札前に集まった市民だった。最初にここに来たときに集まっていた市民は未だに眠っているが、こうしている間にもシエルターに逃げ遅れた市民が次々と集まり、その数を増やしていく。

「ぎつきの響子さんの話からすると、鶴見の援軍はそろそろ到着するはずだわ。ルートからして瑞穂埠頭に集まった人達を保護して余った戦力で掃討戦、という手順になるはず」

「はい、私もそう思います」

「となると、守りの薄いここに流れてくることになるな」

摩利の言葉に、真由美も鈴音も力強く頷いた。

「よし、分かった。——集合——」

摩利が広場中に響き渡るほどの大声で呼び掛けると、その場にいた全員が作業を中断して摩利の下に集まってくる。

「敵はおそらく、ここに集まってくる市民を人質に取ることが予想される！ 真由美と北山が輸送ヘリを用意してくれたから、それが到着するまで敵をここに寄せ付けてはいけない！ 今から幾つかのグループに分かれて、ここを守り通すぞ！」

「——はいっ——」

摩利の呼び掛けに、全員が戦意を頭わにする強い眼差しで返事をした。

*

*

*

国際会議場の大型特殊車両専用駐車場は現在、第三高校の生徒とゲリラ兵が衝突していた。激しい戦闘の末、三高の生徒のほとんどが戦闘不能に陥っている。

しかしそれは、ゲリラ兵にやられたからではなく、

「ちよ、一条！ 少しは手加減してくれ！」

「先輩こそ、下がっててください！」

将輝の攻撃によって繰り広げられている光景に、皆が吐き気を催していたからである。

彼の得意とする魔法は「爆裂」。対象物内部の水分を瞬時に気化する魔法である。もしそれを人体に対して使えば、血漿が瞬時に気化して、その圧力で筋肉と皮膚が弾け飛ぶ。

先程から駐車場では、ゲリラ兵による真っ赤な花火が地上で次々と

咲き誇っていた。彼が敵を1人屠る度に、敵も味方もどんどん戦意が下がっていく。将輝としては『この程度で気分が悪くなるようなら、最初から戦場に立とうと考えるなよ』と言いたい気分だが、いくら歴戦の兵士だとしても人間が破裂して鮮血を撒き散らす光景を見て平然としていられるだろうか。

そうやって敵を片づけてきた将輝だが、ふいに敵軍の攻撃が途絶えたことに気がついた。彼には情報を手に入れる手段が無いので、戦線と呼ばれるものが存在しないほどに敵陣が薄いことが分からないのである。

「……もう終わりか？」

「終わりかどうかなんて、僕達には分からないよ。でも、脱出するなら今だ」

将輝の独り言に答えたのは、いつの間にか彼の背後にいた真紅郎だった。ちなみに彼以外の三高生徒は、すでにタイヤの交換を終えたバスの近くに集まっていた。将輝を放っておいて。

「行こう。できるだけ早く出発した方が良い」

真紅郎のその誘いに、将輝はCADをホルスターにしまつて振り返り、首を横に振った。

「……いや、俺はこのまま魔法協会支部に向かう」

「そんな、無茶だ！　そもそも、何のために！」

「もちろん、援軍に加わるためだ。協会の魔法師がこの状況を黙って見ているはずがない。義勇軍を組織して防衛戦に参加しているだろう」

「だからって——」

将輝が参加する必要は無い、と続けようとした真紅郎は、

「俺は、一条、だからな」

当たり前のように放たれた将輝の言葉に、それ以上続けることができなかつた。

「俺達十師族の人間は、魔法協会に対する責任がある。一条家の長男として、この状況で自分だけ逃げ出すわけにはいかないんだよ」

「……だったら、せめて僕も——」

「ジヨージは、みんなを無事に脱出させてくれ。先生や先輩達だけでは、戦場となったこの街から無事に脱出できるかどうか心配でならない」

そう言っつて、将輝は真紅郎に背中を向けた。これ以上何も言うことは無い、と言いたげに。

「……分かったよ。その代わり、将輝も必ず戻ってきてよ」

将輝は僕にとつてたった1人の「将」なんだから、と真紅郎は心の中で付け加えた。

それを知っつてか知らずか、将輝は振り返らずに片手を挙げて応え、1人戦場の奥地へと突き進んでいった。

*

*

*

独立魔装大隊は、独立した作戦単位として名前こそ「大隊」となっているが、構成人数はせいぜい2個中隊の規模でしかない。それに今回は元々魔法技術を利用した新装備の運用テストのために出動準備を行っつていたため、導入された人員は50名ほどであり、その人数分の装備だけがトレーラーに搭載されている。

「どうだい、特尉！ 防弾・耐熱・緩衝・対BC兵器はもとより、簡単なパワーアシスト機能も設計通りに組み込んでいる！ 飛行ユニットはベルトに搭載、緩衝機能と組み合わせて射撃時の反動相殺としても機能するように作っつたから、空中での射撃も思いのままだ！」

まるで深夜のテレビショッピングのような真田大尉の説明を聞きながら、彼が開発した新装備である「ムーバルスーツ」に身を包んだ達也が自身の体を見つめていた。プロテクター付きのライダースーツのような外観にフルフェイスのヘルメットという、すべて着用すると全身が黒で包まれるデザインとなっつている。

「お見事としか言い様がありません。自分が設計した以上の性能です」

「いやいや、僕としても良い仕事をさせてもらっつたよ」

そのままガツシリと握手を交わす2人に風間少佐が近づいて咳払

いをする、真田は我に返ったように手を離して上官に敬礼をした。「さてと、特尉にはさつそく任務を言い渡す。瑞穂埠頭へ通じる橋の手前で、敵部隊の足止めをしている柳の部隊と合流してくれ」

「柳大尉の現在位置は、バイザーに表示可能だよ」「了解しました」

マスクの情報から柳隊との相対位置を確認し、達也はトレーラーの外へと勢いよく飛び出した。その勢いが消えない内にベルトのバックルを叩き、飛行魔法用のCADを作動させる。

軽く地面を蹴った達也の体は、そのまま空へと駆け上がっていった。

瑞穂埠頭へと向かうその部隊は、機動性を重視した装輪式装甲戦闘車両6台から成る2列縦隊だった。彼らが目指しているのは、海路による街からの脱出を図る民間人が必ず通るであろう大きな橋だった。ちよつとした障害物などいとも容易く踏みつぶすそのパワーは、市街地においてはまさに脅威といえるだろう。

そんな装甲車の行く手を阻むように現れたのは、アーマースーツとヘルメットを着用した1人の兵士だった。他に仲間も武器も見当たらないことから、装甲車は砲塔から火を噴くこともなくキュラキュラと突き進んでいく。おそらくその巨大な車輪で踏み潰すつもりなのだろう。

しかし、何の勝算も無く彼が1人でやって来るはずはない。その男・柳^{やなぎむらじ}連は獰猛な笑みをヘルメットの裏に隠しながら、銃剣付きのライフルを構えたCADの引き金を引いて、すぐさま遮蔽物の陰へとその身を隠した。

まっすぐに上がった土埃が道路を直線に刻んだ次の瞬間、その直線に触れた装甲車の車輪がフワリと地面から離れた。直線の東側を走っていた装甲車が西側を走る別の装甲車にのし掛かるように横転し、地面を揺るがすほどの轟音を辺りに響かせる。

加重系魔法“千畳返し”。地球の重力を南北に走る“線上”で瞬

間的に遮断することにより、対象物が地球自転の遠心力に引つ張られて横転するという魔法である。相手の運動ベクトルを利用して戦う白兵戦技術に優れた古式術者の柳が、CADという現代魔法の技術により大規模で高速な魔法を可能にしたことによって誕生したものだ。

装甲車が横転した瞬間、空中に飛び出した別の魔法師がライフル形態のCADから銃弾を発射した。貫通力を向上させる魔法を付与された銃弾が、横転したことで晒される装甲車の底面部にある燃料タンクを撃ち抜き、装甲車は爆発して跳ね飛んだ。

その衝撃によって、のし掛かられていた装甲車も押し潰された——かに思えたが、意外にもその姿には傷一つついていなかった。どうやら敵の中に反発の魔法を得意とする者がいるらしく、機銃砲塔が上を向いたかと思うと即座に大口径の機銃弾がばらまかれた。

宙に浮いていた魔法師の内2人がその攻撃を食らい、体勢を崩して地上へと落下していく。アーマースーツのおかげで体が千切れるまではない。一刻を争う大怪我であることに変わりはない。

と、ここで柳が再び遮蔽物から姿を現すと“千畳返し”を発動させた。敵も負けじと防御魔法を展開させるが、柳の魔法は地球の重力に働きかけるものであって対象物の情報に干渉するものではないので、敵の装甲車は激しく横転し、その衝撃で防御魔法も解除された。

その隙を狙って空にいる魔法師が狙撃、装甲車の燃料タンクを貫いて残りの3台も最初の3台の後を追った。

飛行魔法によって達也が空からやって来たのは、最初の戦闘が終結して柳が怪我人の応急処置に当たっていたときだった。本当ならば達也がその戦闘に助太刀で入ることも考えられたのだが、さすがは独立魔装大隊に選ばれるだけはある、といったところか。

達也は柳の傍に下り立ってサツと敬礼をすると、スーツを脱がされて横たわっている負傷者を覗き込む。

「撃たれたんですか？」

「あ、ああ……。一応弾は抜いてあるが――」

「どいてもらえますか?」

達也は柳の返事を聞かずに膝を折って負傷者に近寄ると、左腰から銀色のCADを取り出した。

「待ってくれ、特尉! その魔法は――」

そして柳の言葉を無視して、達也はCADの引き金を引いた。負傷者の低い呻き声が安らかな吐息へと変化し、その代わり達也の閉ざされた口から奥歯の軋む微かな音が聞こえ、彼の額に脂汗が滲み出る。そして達也は小さく息を吐くと、もう一人の負傷者にも同じことを繰り返す。

「……大丈夫か、特尉?」

「ご心配には及びません」

達也の語気を強めた返事は、柳の罪悪感を不要だと告げるものだった。そんな彼にいつまでも申し訳なさそうにするのは逆に失礼だと思った柳は、即座に気持ちを切り替えてその感情をスツと打ち消した。

そしてそんな彼を敢えて無視して、達也は装甲車の残骸に登って中を漁り始めた。

一辺30センチほどの立方体を発見したのは、それから程なくしてのことだった。

『どうやら“ソーサリー・ブースター”を見つけたようだね』

カメラが取り付けられたディスプレイから聞こえる真田の声に、達也は九校戦で“無頭竜”の幹部を拘束したときに藤林から聞かされた話を思い出した。

取っ手以外にこれといった装飾も無い箱に、達也は訝しげに眉を寄せる。

「ただの箱に見えますが」

『接続も操作も全て呪術的な回路で行われるから、機械的な端子は存在しないんだ』

「装甲車の対物防御魔法は、ブースターで増幅されていたということか?」

『その通り。憶測に過ぎないけど、間違いないだろうね』

柳の推測に真田が同意を示すと、柳は口元に笑みを浮かべた。

「これで敵の正体がハッキリしたわけだ。まあ、最初からそれ以外の可能性は無いが」

『証拠というには弱いけど、僕達は警官でも判事でもない。それに分かったからといって、対応が変わるわけでもないしね』

「それで、港に停まってる大亜連合の偽装戦闘艦はどうする？ 撃沈するか？」

『港内で撃沈するのはまずい。港湾機能に対する影響力が大きすぎる』

「では、乗り込んで制圧しますか？」

真田を押し退けて画面に割り込んできた風間と柳が話す横で達也は、この少人数で敵艦に攻撃を仕掛けるのが規定事項になりつつあるな、と若干呆れ気味に思った。今更ながら達也は、彼らが冗談の通じない、というか冗談のような無茶を日常的に押し通している人種だということに改めて思い知った。

しかし今回は、柳の問い掛けに風間が首を横に振った。

『それは後回しだ』

もつとも、達也の考えが否定されたわけではなかったが。

『特尉。駅前広場にて、民間人が避難民脱出用のへりを手配しているとの情報が入った。現在地点の監視を鶴見の先行部隊に引き継いだ後、駅へ向かい脱出を援護せよ』

「了解しました」

柳と共に敬礼をしながら、随分と勇気のある民間人がいたものだと達也は秘かに感心していた。自分が脱出するついでとはいえ、この状況で他の民間人も一緒に連れて行こうと考えられる者はそうそういない。

なので、

『ちなみにへりを呼んだ民間人の氏名は、七草真由美と北山雫だ。両人から要請があった場合は、助力を惜しまぬよう全員に徹底してくれ』

思わぬところで聞き覚えのあるどころではない名前が耳に入ってきたため、達也は思わず咳き込みそうになった。

しかしすんでのところでそれを押し留め、達也は飛行魔法を展開して地面を強く蹴ろうと脚に力を加えて踏み込んだ。

まさに、そのタイミングでのことだった。

『♪』

「――！」

頭上から突如聞こえてきたのは、電子音で構成された軽快な音楽だった。街中の様々な場所から一斉に発信され、達也の耳に届くまでに時間差のあるそれらが、まるで輪唱でもしているかのようにズレて重なって聞こえてくる。

おそらくこの音楽は、防災無線を通して流されている。正午や夕方など決まった時間になると音楽を流すことでお馴染みのアレだが、今はその定時ではなく、さらに思わず体がリズムを刻みたくなるようなノリの良い音楽を流すものではない。そもそもゲリラ兵に街を侵攻されている現状で、避難勧告を指示することはあってもこんな音楽を流す正当な理由はどこにも無い。

『……何だ、この音楽は？』

『分かりませんが、どこかで聞いたことあるような……』

ディスプレイの向こう側で風間と真田が困惑している中、音楽が短い前奏を終えて歌唱パートに差し掛かった。1人の成人男性と多数の子供達による合唱団が歌うその歌詞は、特撮物や昔のアニメ主題歌によくある、主人公の生い立ちや勇姿を紹介するというものだった。

そして、この歌が紹介している主人公とは――

『ワーツハツハツハツハツ！ アクション仮面、参上！』

流れ続ける歌をバックに、高らかな笑い声と共にその人物は名乗りをあげた。20世紀末からシリーズが続いており、同一俳優が主演を務める作品物としては世界最長ということまでギネスにも登録されている人気特撮シリーズの主人公の名を。

しかし当然ながら、達也はそれを本物のアクション仮面だとは微塵も考えていなかった。彼は架空の人物であるし、そもそも今聞こえて

いるその声は前に達也が聞いたことのあるそれと似ても似つかない。達也にとつてその声は、アクション仮面などよりも遥かに聞き覚えのあるものだった。

『この声……、まさか、野原しんのすけか!?!』

2人の驚きと困惑は、そっくりそのまま達也も感じていることだった。

これが本当にしんのすけの声だとしたら、彼はこの非常時に防災無線の基地局に潜り込んでこれを流していることになる。彼は確かに常識外れの行動を起こすことはよくあるが、こんな悪戯の一言では済まされない悪質な悪ふざけをしでかすような性格ではないはずだった。

と、無線から流れる「自称アクション仮面」の言葉が尚も続く。

『横浜の街の平和を脅かす悪党共め！ おまえ達の悪行もここまでだ！』

——横浜のみんな！ このオラ……じゃなかった、私が来たからにはもう大丈夫！ 泥舟に乗った気持ちで待っててくれたまえ！』

『泥舟だと沈んじゃうよ、大船に乗せないと』

自称アクション仮面の台詞の裏で、少年のような声が冷静なツツコミを入れていた。やけに小声だったのはマイクに入らないよう注意してのことだったのだろうが、現代のマイクは性能が良いので普通に拾い上げてしまっている。

そしてこの声も、達也には聞き覚えがあった。彼の優秀な頭脳が、一瞬の内に記憶を引っ張り出して照合を終える。

——今の声、まさか代々木コージローか？

『悪党共！ この私を倒したければ、横浜公園にある野球スタジアムまで来るが良い！ 私はそこで待ってるゾ！ ワーツハツハツハツハツ！』

自称アクション仮面はそう言い残し、高らかな笑い声と共に無線を切った。軽快な音楽がブツ切りで途絶え、辺りは遠くから砲火の音が微かに聞こえる先程までの状況に戻った。

今の無線の内容は、優秀な頭脳を持つ達也でさえ悩ませるものだった。そもそも「悪党を許さない」とか言いながら自分から奴らを倒し

に行かず、むしろ向こうが指定の場所に来いというのはおかしい話である。そんなことを言ったところで、単なる悪戯だとゲリラ兵が切り捨てれば無視されてお終いで――

――だが、それを無視しないでやって来る奴らがいるとしたら……？

「少佐」

『特尉の任務は先程と変わらず、避難民脱出用への援護だ。他の者達もそれぞれに任務があり、余力を割くことはできない』

「……了解しました」

胸の奥に燻る焦燥感を自覚しながら、達也は風間の命令に頷いて答えた。

第66話 「困ってる人のために戦うゾ」

真由美と雫が呼んだヘリが到着するまでの間、鈴音が予想した駅前広場への侵攻経路を警戒するために、腕に覚えのあるメンバーでチームが結成された。

チームは全部で2つ、1つは深雪・エリカ・レオ・幹比古の1年生4人、もう1つは五十里・花音・桐原・紗耶香・寿和の2年生+警察官という組み合わせだ。『警戒』と銘打ってはいるものの、状況とメンバーの意気込みを鑑みれば『迎撃』と表現した方が適切かもしれない。

「——来たよー!」

1年生チームの中で最初に敵の接近に気づいたのは、幹比古だった。風に乗せてばら撒いた呪符によって喚起された精霊が、幹比古の脳内に映像を送ってきたのである。

彼の呼び掛けに深雪とレオとエリカが表情を引き締め、それから数秒後にビルの陰から直立戦車が姿を現した。3人は一斉に構えの姿勢を取り、そしてそれを崩さぬまま3人の表情に疑問の色が浮かんだ。

直立戦車は市街戦を想定して作られた兵器であり、完全な戦闘用ロボットとして作られたものではない。狭い路地に入れるように移動砲塔を上に向けられるようにし、階段や瓦礫を越えられるように無限軌道に短い脚部を装着しただけだ。たとえ直立戦車が『人型』と称されているとはいえ、人間の動きを完全に再現できていくわけではない。

しかし彼女達の前に姿を現したその直立戦車は、明らかに先程見たものとは違っていた。右手にチェーンソー、左手に火薬式の杭打ち機、さらには右肩に榴弾砲、左肩に重機関銃を備えつけられたそれは、ロボットであることを感じさせないほどに滑らかな動きを実現していた。

「嘘っ! 戦闘用ロボット!?!」

自分の妄想が現実のものになったかのような驚きを頭わにする工

リカの隣で、深雪はその冷たい眼差しを直立戦車（仮）に向けていた。そして、既に魔法を発動させていた。

2 輦の直立戦車の足元が突然凍りつき、動きをむりやり停止させた。前のめりになって倒れるようなことが無かったのは、おそらく優秀なバランス制御システムを搭載しているからだろうが、残念ながら直立戦車が深雪に反撃することはできなかつた。

凍結魔法で動きを封じると同時に、深雪は「フリーズ・フレイム凍火」を発動していた。熱量の増加を禁じるこの魔法により、直立戦車の榴弾砲も機関銃も火を噴くことなく沈黙している。

そしてそれを確認するや、レオが飛び出した。

手にする得物は、双頭ハンマーに似た短いステイック。ハンマーヘッドから突き出た先端はグリップよりかなり幅広で長さも約10センチ、横幅の比率はむしろラテン十字の十字架に近いかもしれない。

そのヘッド部分がモーターの駆動音をたて、ステイックの先端から薄くて黒く透き通ったフィルムが吐き出された。そしてモーター音が止まった直後、そのフィルムがまっすぐな2メートルの刃に変貌を遂げた。完全な平面であり、横からでは存在を視認できないほどだ。

これこそが、千葉一門の秘剣「うすばかげろう薄羽蜻蛉」。カーボンナノチューブを織って作られた厚さ5ナノメートルの極薄シートは、硬化魔法で固定されることでどんな刀剣よりも鋭い刃となる。

それこそ、直立戦車の装甲板を易々と切断するほどに。

レオがスタートを切るのに1歩遅れを取って、エリカも動き出した。

鼓膜保護用の耳当てを即座に装着し、左腕で抱くように立てていた大蛇丸の柄を掴んで鯉口を切った。刀身の長い鞘を抜かず蝶番に開くことで、ほとんど反りの無い刀身を顕わにする。

全長180センチ、重さ10キロにもなる刀を、エリカはいとも軽々と肩に担ぎ上げた。この時点で既に魔法は発動しており、だからこそ彼女はそんな芸当ができるのである。

そして次の瞬間、エリカの姿が消えた。

直後、直立戦車の「向こう側」に彼女の姿があった。大太刀を地面まで振り下ろした姿勢のエリカの背後で、前面の装甲を唐竹割で真っ二つに断ち切られ、そのままの勢いで直立戦車が仰向けに倒れていた。

これこそがエリカの切り札である、加重系・慣性系魔法「山津波」。自分と刀に掛かる慣性を極小化して高速接近、インパクトの瞬間に消していた慣性を上乗せして刀身を対象物に叩きつける秘剣である。この偽りの慣性質量は助走が長ければ長いほど増大し、慣性を消して得たスピードに乗せて叩きつけることにより、最終的には10トンものギロチンを空高くから叩き落とすかの如き破壊力を生み出す。これほどの攻撃力に堪えられる装甲は、少なくとも今の人間界では存在しないと断言できる。

慣性消去から慣性増大へと切り替えるタイミングを見極める目に、慣性の無い不安定な状態で相手に接近する足捌きに、刀身をぶれさせない技術が合わさって初めて可能になるこの技は、エリカの先天的な才能に加えて努力に努力を重ねた末に辿り着いた境地が具現化したものといえる。

「さすがエリカ、見事に一撃ね」

「レオも凄いよ。よほど鍛錬を積んだんだね」

深雪と幹比古が素直な賞賛を口にする、エリカもレオも居心地悪そうに僅かに口元を歪めた。

「アタシはともかくコイツは、まあよくここまで出来るようになったと思うわ」

「そりゃ、てめえとコージローの2人がかりで散々扱きやがってくれたからな。本当あの日々は今思い出すだけでも……思い……あば、あばばばば」

「レオ!? 正気に戻るんだ、レオ!」

「……エリカ、あなた何をやったの?」

「いや、ほぼ代々木くんのせいだから」

なぜか錯乱状態に陥ったレオを女子2人が宥める間、幹比古は先程レオとエリカが切り裂いた直立戦車へと目を遣った。ちなみに直立

戦車は破壊されたものの中にいた操縦士は（奇跡的というレベルで）無事であり、戦車ごと地面に倒れた衝撃で気を失っているものの命に別状は無かった。

それを見て、幹比古は思わず訝しげな視線をエリカへと向けた。すると気配でそれを察知したのか、エリカがバツと顔を彼に向けてきた。あまりにもタイムラグが無かったからか、彼の肩がビクツと跳ねた。

「どうしたの、ミキ？ 何か気になる？」

「僕の名前は幹比古だ。——まあ、確かにさっきの戦車の動きは気になるね」

幹比古が口にしたのは頭に思い浮かべていたのとは別の疑問だったが、そちらも気になっていたことには変わらないので嘘を吐いたわけではない。

「そーいや確かに、あの動きは妙に人間っぽかったな。無駄なくらいに」

「良かったレオ、元に戻ったんだね。……つと、レオの言う通りだよ。そもそも直立戦車と人間は構造が違うのに、そんなことをしたら却って動力のロスになる」

「つまり、何かしらの魔法が働いていたということですね？」

さすが筆記試験2位の秀才だけあって頭の回転が早い深雪に、幹比古は力強く頷いて答えた。

「あれはおそらく『剪纸成兵術』の応用だ」

「……せんせいへいじゅつ？」

「陰陽道系の、人形使役ひとがたの術式ですか？ 元は道家の術だとか」

「そうです。紙を人の形に剪み切り、雑霊を宿して兵と成す術、という意味です」

「ということとは、敵は大亜連合？」

「いやいや、そうとは限らないぞ？ 陰陽道系ってことは、売国奴の可能性だってある」

レオが珍しく慎重論を口にしたが、幹比古が大袈裟に頭を振ってそれを否定した。

「いや、僕はエリカが正しいと思う。奇妙な話だけど古式魔法にも流
行があつてね、ここ10年以上は国内のどの系統でも実体を持つ式神しき
は使われなくなつてゐる。剪纸成兵術もこの国では既に廃れてしまつ
てゐるし、そもそも直立戦車でチェンソーや杭打ち機を使わせたい
ならそれ自体に術を掛けるとかもつと効率的な方法がいくらでもあ
るのに無駄が多いと分かつてわざわざ廃れた術式を持ち出すほど僕
ら古式魔法師は頑迷じゃ——」

「分かつた、分かつたから！ 敵は大亜連合の魔法師、これで良いだろ
！」

レオの辟易した表情に、幹比古も八つ当たりだと自覚して恥ずかし
そうに口籠もつた。

何とも気まずい空気が流れかけるが、それを断ち切つたのはエリカ
だつた。

「んで、それをアタシ達に説明するつてことは、何か考えがあるんで
しょ？」

「そ、その通りだよ、エリカ。——柴田さんを、僕らのチームに加えた
い」

「おいおい、それって……」

レオが思わず反論を言いかけるのも無理はない。美月はこの中で
も直接的な戦闘力に乏しく、だからこそチームに入れないことにした
のは本人とも話し合つて決めたことだつた。

「僕が使う魔法とは性質が異なるから、僕には敵の術式を上手く捉え
られない。でも柴田さんの『眼』なら、魔法を継続的に行使する敵の
動向を僕よりも早く捉えられるはずだし、敵の魔法の核を見つけるこ
ともできるはずなんだ。それさえ見つければ、僕の魔法で術を無効化
させられる」

「……広場にいるよりも危険度はずっと高くなる。ミキもそれは分
かつてるでしょ？」

「もちろん、分かつてゐる。——僕が、絶対に彼女を守つてみせる」

思いがけず目の当たりにした幹比古の男らしい姿に、深雪は「あら」
と口元を手で隠し、レオはヒュウと口笛を吹き、エリカは「へえ」と

意地の悪い笑みを浮かべた。

そしてその反応に自分が何を言ったのか自覚したのか、幹比古の顔がサツと紅く染まった。

「……良いじゃない、ミキ！　ちよつとでも美月に怪我させたら承知しないわよ！」

幹比古の背中に勢いよく平手を打つエリカに、幹比古は痛みと恥ずかしさで顔をしかめた。

*

*

*

一方、もう1つの警戒チームである彼らも、2輦の直立戦車と対峙したところだった。

五十里が地下3メートルの地層に振動を遮断する壁を作り出し、地面を媒体とする振動魔法が得意な花音が地下通路を気にせず魔法を使えるようにすると同時に、地面の振動を感知することで索敵の役割も果たす。

とはいえ、万全を期するためにもあまり強力な魔法は使えない。なので花音は、「地雷原」のバリエーション魔法の1つである「振動地雷」という魔法を発動した。舗装された地面に細かいヒビが入って砂となり、地面から水が滲み出て水溜まりが作られる。そして液状化した地面が直立戦車のキャタピラを苦も無く呑み込み、頭1つ分沈ませた。

直立戦車の無限軌道が唸りをあげて泥水を掻き出そうとするが、数秒もしない内に地面の水が抜けて凝固した。花音が水分子を振動させて蒸発させたからだだが、単に水を含んでいた砂が固まった状態なので完全に拘束したとは言い難い。

しかし、戦闘の最中に敵の目の前で数秒間身動きが取れなくなるというのは、それだけで致命的である。

直立戦車が捕らえられた瞬間、寿和が空中から姿を現した。

そしてその場にいる誰もが彼の動きを認識できないまま、寿和が振り下ろした刀が直立戦車を真っ二つに切り裂いた。

千葉家に伝わる秘剣「斬鉄」は、刀を単一概念として定義することで折れることも曲がることも欠けることもなく物体を切り裂く魔法だ。そして彼が持つ雷イカツチマル丸でそれを使うと、刀を持つ剣士自体が集合概念として定義され、僅かなブレも無い高速の襲撃が可能となる。

雷丸による斬鉄——「迅雷斬鉄」は、刀を振り下ろすときに自分がどのような動きをするのか隅々まで把握する必要がある。なので寿和は何千、何万、何十万回と素振りを繰り返してきた。つまり「迅雷斬鉄」は型を極めたことで可能となる技であり、故に攻撃の最中は型通りの動きしかできない。なので寿和は型を読まれないためにも人目を盗んで練習するしかなく、そのため彼を怠け者と誤解する者が門下生にも多かったのである。

そして寿和が片方の直立戦車を沈黙させる横で、桐原も地面を蹴っでもう片方に迫っていた。

直立戦車の上半身がクルリと回転し、機銃の銃口を彼へと向ける。しかし最終的に、その機銃が火を吹くことは無かった。

彼の背後から飛来した小太刀が機銃に突き刺さり、直立戦車の肩からもぎ取ったからである。そしてもう一本飛んできた小太刀が榴弾砲を同じようにもぎ取り、2本の小太刀は放物線を描いて、桐原の斜め後方に立つ紗耶香の手へと戻ってきた。

打ち合いでは女性故にどうしても腕力に劣る彼女が、投げる動作に合わせて魔法を発動させれば腕力は関係無いと身につけたのがこの「投剣術」だ。剣術で実戦に臨んだ魔法師である父の手解きを受け、地道に修練を重ねて物にした技術である。

火器が無力化されたと知るや、桐原は最後の1歩を踏み込んだ。頭上からチェーンソーが振り下ろされるが、既にその機動を見切っている桐原は体を自然にスライドさせてそれを避けながら、直立戦車の左脚を「高周波ブレード」で両断した。

のし掛かるように倒れ込んでくる車体に対し、桐原は後退しながら杭打ち機を根本から切り落とし、側面に回って操縦席に刀剣を突き込んだ。肉を貫く感触に桐原は僅かに顔を歪めて刃を引き、大きく跳び退いて転倒する直立戦車から距離を取った。

「……桐原くん、大丈夫?」

「心配すんな、壬生。怪我はねえぜ」

悲痛な表情を浮かべて尋ねる紗耶香に、桐原はむりやり笑顔を作つてそう答えた。彼女が尋ねているのはそういう意味ではないと分かつていながら、敢えてそう答えた。

そんな2人の下に、寿和がやって来た。

納得できないと言わんばかりの、訝しげな表情と共に。

「……この状況は、不自然だな」

寿和の呟きに、桐原も紗耶香も揃って首を傾げた。

「敵はわざわざ、俺達が待ち構えてるここを選んでやって来ている。もし駅前の広場に行きたいってんなら、ここ以外の狭い路地を使うという選択肢も当然あるはずだ」

「なのに奴らは、直立戦車を使ってまでここを通ろうとしている。——あるいは、ここを通ることで俺達に対処させようとしている」

「つてことは、奴らの狙いはアタシ達の足止め……!」

紗耶香の言葉に、寿和も桐原も口を引き結び——

「3人共、次の敵が来たよ!」

背後からの五十里の呼び掛けに、3人は推理を中断せざるを得なかった。

*

*

*

広場でへりを待っていた雫が装着する通信ユニットに、着信が入った。

「黒沢さん? ……うん、そう。……ううん、ありがとう」

雫が通信ユニットを耳から離すのとほぼ同時、遠くの空からへりのローター音が聞こえてきた。

「七草先輩、ウチのへりがもうすぐ到着するそうです」

「……そう、分かりました」

雫の報告を受けた真由美は、本来なら嬉しいニュースのはずなのにどこか浮かない表情をしていた。彼女の手には情報端末が握られて

おり、彼女は雫に話し掛けられる直前まで険しい顔でそれを睨んでいた。

「……何か問題でも?」

「……正直に言うくと、2機のヘリが同時に到着するのが理想だったのよ。どちらかが先に到着すると、避難を後回しにされる市民が出てくるでしょう? ただでさえこんな子供に主導権を握られている今の状況に不満を抱いている人がいるというのに、そんな扱いをされて不満が爆発する人がいるかもしれないわ」

真由美の言葉に、雫は納得した素振りを見せた。

とはいえ、このまま愚痴ってばかりもいられないことは、真由美も重々承知している。

「それでは北山さん、女性と子供連れの家族を優先してヘリに収容して脱出してください。稲垣さん達は先に避難する人とそうでない人の誘導をお願いします。それと稲垣さんは、北山さんと一緒にヘリに乗って彼女のサポートをお願いします」

「了解しました」

雫と稲垣が同時に返事をして、市民の集まっている場所へと歩いていった。まだまだ予断を許さない状況であることには変わりはないが、少なくともこれで懸案事項の「半分」が達成されたと言っても良い。

そうこうしている内に、雫の呼んだヘリが上空から姿を現した。ダブルローターの輸送ヘリであるそれは、確かに人を運ぶには打って付けた。

そしてそれを操縦するのは、夏休みのおきに達也たちを乗せたクルーザーを運転していたハウスキーパーの黒沢女史だった。あいのボディガードである黒磯しかり、名前に「黒」の付いたお嬢様の側近は万能でないといけない決まりでもあるのだろうか。

そんな黒沢の操縦するヘリが徐々に高度を落とし、駅前広場へと着陸の準備を進めていた、

まさにそのとき、

「――!」

何も無い空間から湧いて出たとしか思えないほどに突然、まるで黒い雲のようなイナゴの大群が現れた。たかがイナゴとはいえ、エンジンの吸気口に入り込まれたら厄介なことになる。そもそもこんな不自然なタイミングで現れたイナゴが、野生の生物であるはずがない。最初に動いたのは、へりの出迎えに動いていた雫だった。ポーチから取り出した銀色のCADは九校戦終了直後に購入したシルバー・モデルのセカンドマシンであり、それに登録されている「フォン・メーカー」がループ・キャストによって矢継ぎ早にイナゴの大群に襲い掛かる。

音による熱線が、イナゴを次々と消失させていく。

しかし、

「……数が多すぎる！」

魔法によつて消失しているのは大群のほんの一部だけで、大部分が熱線をかき潜つてへりに迫っていく。真由美や鈴音もCADを取り出して対処しようとしたが、雫の魔法と相克を起こすのを恐れて手が出せない。

そしてイナゴの大群がへりに取りつく——と思われたそのとき、

突如としてイナゴの大群がその輪郭を曖昧にし、まるで幻のようにスツと消えていった。

「——！」

信じられない光景に真由美と鈴音が目を丸くし、ほのかと雫が空を仰いだ。

その視線の先には、全身黒づくめのプロテクトスーツに身を包んだ人影が、銀色のCADをイナゴの大群が先程までいた空間へと突きつけていた。

「……達也、さん？」

雫がぽつりと眩く中、その人影と同じ黒づくめの集団がへりを取り囲み、へりは再び降下を開始した。

「化成体による攻撃を撃退。へりの降下を護衛します」

『護衛は他の者に任せ、特尉は術者の排除に移れ』
「了解」

通信を終えた達也は、先程のイナゴを作り出した術者を捜すべく、眼を凝らした。彼が先程分解したのはイナゴの個体ではなく、イナゴを作り出した魔法式そのものである。術式が分解されてイナゴがサイオンの粒子へと返っていく過程で、達也は魔法式の出所を掴んでいた。

そして達也はほぼ同時に、ここから離れていくように逃走を図る魔法師を見つけた。ここからでも充分に排除は可能だが、直接視認した方がより確実だ。

達也はちらりと駅前広場へ視線を向け、そこにいる見慣れた人物一人一人を見遣ると、すぐさま逃走する魔法師の頭上へと向かっていった。

やがてヘリが広場に到着し、市民が次々と乗り込んでいく。

そしてその間にも、黒ずくめの集団が上空でヘリを取り囲むように円陣を形成していた。プロテクトスーツ以外これといった装備は無いが、その集団は自由自在に空中を飛び回り、その動きにはまったく疲れを感じさせない。全員がハイレベルな魔法師であることは間違いないだろう。

その集団を食い入るように眺めていた真由美は、ふと或る噂を思い出した。

特定分野に突出している癖の強い魔法師を集めて作った、国防陸軍所属の実験部隊。個々の魔法師のランクは大したことのないように見えるが、実戦では戦局を左右するほどに強大な力を発揮する部隊である、と。

成程、確かにこの性質は「彼」のそれとぴったり一致する。

「……何者ですかね、彼らは」

正体不明の黒ずくめの集団。その見た目からすれば、確かに何の事情も知らない者の目には不気味に映るだろう。

しかし稲垣のその問い掛けに、真由美はにこりと笑って自信満々にこう答える。

「とても頼もしい、私達の味方です」

雫と稲垣、それから多数の市民を乗せた輸送ヘリが狙撃の届かない高度にまで上昇したのを見届けた独立魔装大隊の飛行歩兵隊は、周囲を警戒すべくビル街へと散らばっていった。広場に残る鈴音と摩利も、その光景をジツと見つめていた。

残された市民達にも、明らかに安堵感が漂っていた。正体不明の気味悪さこそあるものの、子供に主導権を握られるよりは安心できるのか大人しく次のヘリを待っている。

と、鈴音がふいに周囲を見渡して口を開いた。

「——妙ですね」

「妙？ 何がだ？」

当然ながら疑問の声をあげる摩利に、鈴音は普段通りの冷静な表情で答える。

「現在この広場の周辺で深雪さん達を筆頭にここを狙う敵を警戒、もとい迎撃してもらっている状況ですが、おそらく向こうは機動部隊で戦力を前方に引きつけ、その間に歩兵部隊が抜け道を通って広場にやって来ると予想していました」

「なっ——！ そんなことを考えていたのか!? だからアタシをここに残したと!?!」

「摩利さんの場合は機械化部隊と相性が悪いという考えもありましたが、そんなところですよ。そして仮にそうだとして、タイミングとしては市民の一部が脱出して人数が減った今、真っ先に人質となるのが真由美さんと親しく対人戦闘力が低いと思われるであろう私だと思っていました」

「……おまえ、そういうことは事前にアタシや真由美に言え！」

鈴音は表情を一切変えずに「すみません」と頭を下げ、すぐに言葉を続ける。

「しかし先程から周囲を警戒してみても、そのような者達が広場に來る気配がありません。敵の動きからして戦力を足止めしている様子なのは窺えるのですが……」

「つまり足止めの目的が、鈴音が予想していたものとは違うということか？」

「おそらくは。魔法協会支部への襲撃に人員を割いているか、あるいは……」

「——横浜公園」

防災無線を使った「自称アクション仮面」による放送は、当然ながらこの広場にも届いていた。市民からは「こんな非常時に悪戯なんて何という馬鹿な奴だ」とばかりに憤慨する声が聞こえ、もし自分達もその声の主と知り合ひでなければ同じ反応を示したことだろう。

正直なところ鈴音も摩利も、相手が狙うとしたら横浜公園よりも魔法協会支部の方が圧倒的に可能性が高いだろう、と今でも考えている。

しかしそれでも、心の奥底に巣くう不安を拭いきれないのも、また事実だった。

*

*

*

十師族直系の義務感から義勇兵として魔法協会支部を目指していた将輝は、現在中華街の手前で義勇軍に加わっていた。敵が往來する真つ只中を堂々と歩きながら、時折真紅の華を咲かせながら踏破していった結果、たまたま侵攻軍と交戦中だった彼らと居合わせたからである。

負傷者から譲り受けたプロテクターを身に纏い、赤味を帯びた光沢を放つCADを握りしめる彼は、大きく肩を上下させて息をしていた。彼の得意魔法「爆裂」を連発したこと、そして敵の攻撃が機甲兵器から魔法によるものに切り替わったことへの対処により、彼の体に疲労が蓄積していったからである。

しかも現在の相手は、将輝の疲労をさらに倍加させるような戦法を

採っていた。

「くそっ、卑怯な……」

将輝の前に立ち塞がるのは、隊列を組んだ「幽鬼」だった。これは比喩ではなく、かといって本物でもない。これは古式魔法によって作られた、いわば幻影だ。

しかし、将輝の「爆裂」に対しては非常に有効な戦法となる。「爆裂」は対象物内部の液体を瞬時に気化させる魔法であるため、対象物に液体が無ければそもそも成立しない。なので将輝が幽鬼に対応するためには、普段使っている特化型CADではなく汎用型CADを使って、干渉力を放射させることで幽鬼を消滅させる他ない。

そしてこの幽鬼自体には、攻撃力が備わっている。催眠術、あるいはプラシーボ効果と同じような理屈で、幻影に斬られた者は赤い線を残して絶命する。魔法師ならば情報強化でそれを防げるが、魔法師ではない一般市民も混じっている義勇兵ではそうもいかない。

この攻撃を打ち倒すためには、魔法式を展開している魔法師そのものを叩かなければならない。将輝は得意の魔法を封じられた状態で、幻影の攻撃を凌ぎながら、敵がどこにいるのかを探し当てなければならなかった。

「……………こうなったら」

しかし一向に打破できない状況に嫌気が差したのか、将輝は発想を変えることにした。今までは市民の巻き添えを恐れて単体のみを対象とした攻撃しか行わなかったが、このまま事態を長引かせては却って市民に被害が拡大すると思ったのである。

3人1組で散開する敵が最も集中しているエリアを狙って発動箇所を設定すると、左腕に嵌めたCADを操作してその魔法を発動させた。

最初の変化は、緩やかなものだった。敵兵は体が熱を持ったくらいにしか感じなかっただろうが、それはすぐにひりつく熱さに変わり、地面を転がり回る激痛に変化し、30秒後には眼球を白く濁らせた死体へと変わり果てた。

その魔法は、液体分子を振動させる加熱魔法「叫喚地獄」。

威力自体は「爆裂」の劣化版であり、本来なら一瞬で液体を気化できるものを30秒から1分の時間を掛けて気化させる。その代わり、「爆裂」の対象があくまで物であることに対し、こちらの対象は「領域」だ。将輝が設定したエリアはその名の通り地獄と化し、そこから激しい動揺が伝わってくるのを感じる。

この魔法も人体に直接干渉する魔法であるため、情報強化を纏う魔法師には効きづらい。しかし裏を返せば、その魔法で生き残っている者は魔法師であることを示している。

——とにかく今は一刻も早く、この場を鎮圧しなければ……。でないと、横浜公園にいる「野原しんのすけ」が危ない！

そう。最初は魔法協会支部を目指していた将輝だったが、例の放送を聞いた次の瞬間には、その目的地を横浜公園に変更する方針を固めていた。しかしそのときには既に義勇軍との合流を済ませ、中華街の手前まで進んでしまった後だった。この戦闘が終わり次第、彼はUターンして横浜公園へ向かう腹積もりである。

将輝は一高生徒ではないため、しんのすけと直接話をする機会はない。故に彼の為人ひととなりなどほとんど分からないし、ましてや今回の行動の真意など分かるはずもない。

しかし十師族の一員として「野原しんのすけ」に関する話を父親から或る程度聞いていた将輝にとって、『その行動を起こしたのが野原しんのすけである』の一点のみで、自分が動く理由としては充分に足る。

「——さっさと退きやがれ、侵略者共！」

自らを奮い立たせる意図も込めて、将輝は目の前の敵に向かってそう叫んだ。

第67話 「みんな横濱から脱出するゾ」

魔法協会が組織した義勇軍は、現在苦戦を余儀なくされていた。

北上した部隊は直立戦車と装甲車の混合部隊であり、どちらかとうと装甲車の方に主力が割り振られている。しかし協会を攻めている部隊は白兵専用で改造された直立戦車が主力であり、さらには多数の魔法師が同行していることが特徴的だった。

そんな彼らの使っている主な魔法は、犬に似た獣が炎の塊となつて爆ぜる「禍斗^{かど}」に、一本足の鶴に似た鳥が火の粉を撒き散らす「畢方^{ひつぽう}」の2つである。どちらも大陸系の古式魔法であり、魔物に似せた化成品を作り出して使い魔とする魔法である。化成品による攻撃は義勇兵に強烈なダメージを与えるが、仮に化成品を攻撃したとしてもそれを操る魔法師には一切のダメージが無い。

対する日本の魔法師が使うのは、もはやすっかり世界のスタンダードとなった現代魔法。早さ、つまり手数では古式魔法に対して圧倒的に勝るが、侵攻軍はそれを化成品の数で補っていた。そして時間が経つにつれて、頭数の多さによるアドバンテージが表面化してきたのである。

「くそっ、撤退するぞー！」

「後退して、防衛ラインを立て直す！」

義勇兵の1人が叫んだその提案に賛同するムードが、義勇軍全体に流れ始めた。確かにこのまま陣営を保って戦い続けるのは無理があるが、一度後退してしまうとズルズルと押し込まれてしまうのが常である。それが分からない彼らではなかったが、背に腹は代えられないと考えたのだろう。

しかし、次の瞬間、

「――後退するなー！」

義勇兵達の怯懦を一喝する声が轟き、火を撒き散らしていた鳥形の化成品が地面に叩きつけられ、押し潰される形で消滅した。

火を吐く犬が、炎の翼を持つ鳥が、その他様々な幻獣を象る使い魔が次々と叩き潰されていく。

「奮い立て、魔法を手にする者達よ！ 卑劣な侵略者から祖国を守るのだ！」

義勇軍の背後から姿を現し、魔法を行使しながら彼らの先頭に歩み出たのは、プロテクトスーツのせいで鎧武者のような出で立ちをしている克人だった。

克人がスツと右手を挙げ、そして下す。

その瞬間、敵の直立戦車が1輦叩き潰された。その光景はまさしく、目に見えない巨大なハンマーが打ち下ろされたかの如き光景である。

たったそれだけで、義勇兵達は彼が何をしたのか思い至った。

十文字家の代名詞、『フアランクス』。

絶対の防御力を有する多重障壁魔法だが、その真価はむしろそれを用いた攻撃にある。言うなれば『障壁で対象を叩き潰している』だけなのだが、シンプルだからこそ問答無用の攻撃性能を誇る。

対物非透過という性能のみに絞り込んだ攻撃用の障壁は、物質を対象としたものでありながら、その干渉力により他の魔法の存在を許さない。射程距離の短さ、実体化・具現化した現象にしか通用しないという欠点はあるものの、面による敵の制圧、さらには対物・対魔法防御を兼ねたこの攻撃は、近距離集団戦において絶大な威力を発揮する。

何をされたのか分からないが、少なくともそれをしたのが克人であることは明らかだ。

突然の出来事に呆然としていた侵略軍だったが、すぐにターゲットを克人に定めると、直立戦車3輦が隊列を組んで機銃を彼へと向けた。しかしただの1発も銃弾が発射されることはなく、右の掌を突き出した瞬間に3輦纏めてスクラップへと成り果てた。

頭上から炎と雷が一齐に克人を中心とした義勇兵へと襲い掛かるが、即座に展開された耐熱・耐電の魔法防壁が彼らを守ったため無傷だった。プロセスを現象として具現化しなければ即効性のある事象改変を行えない古式魔法は、克人にとって対処しやすい部類に入る。

たった1人の人間の登場で、あれだけ劣勢だった戦況がいとも容易

くひつくり返った。最初はそれを呆然と見つめていた義勇兵だが、彼に遅れを取ってはならないと鬨とぎの声をあげて侵攻軍に襲い掛かっていった。単純なように思えるかもしれないが、戦いというのは案外そんなものである。

あれだけ義勇軍を攻めていた侵攻軍が、今度は逆に後退を強いられていた。

*

*

*

空の向こうからヘリのローター音が聞こえてきたとき、真由美が最初に思ったのは「やつと来たか……」というものだった。脱出を切望する市民からのプレッシャーをひしひしと感じていた彼女にとって、これが嘘偽りの無い正直な感想である。

軍用の双発ヘリは、雫が呼んだものより一回り大きい。これならば残った市民も全員問題無く乗せられることだろう。

しかし、やって来たヘリはそれ1台だけではなかった。戦闘ヘリがそれに随従しているのに真由美が気づいたのと同時に、彼女の通信ユニットに着信を知らせるコール音が鳴った。

『お嬢様、ご無事でいらつしやいますか』

「——名倉？」

そこから聞こえてきたのは、彼女のボディガードを務める老紳士の声だった。

『私は戦闘ヘリの方に乗っております。お嬢様はこちらの機体で脱出するように、と旦那様から仰せつかっております』

「……分かりました」

十師族の一員である以上戦場に残るのが望ましい、というのはあくまで真由美個人の想いであり、当主である七草弘一はそう思わなかったようだ。むりやり残ろうとも思ったが、残念ながら近接戦闘では名倉の方が一枚上手だし、だからといって救援に来たヘリを撃つわけにはいかない。

「……リンちゃんは、市民の皆さんをお願いね」

「分かりました。真由美さん達は？」

「私達はあのヘリに乗って、他のみんなを拾ってから脱出するわ」

「……あまり、無理をしないようにしてください」

真由美がニコリと笑みを浮かべて応えるのを確認し、鈴音は（若干後ろ髪を引かれる思いはあったもの）市民達の下へと歩いていった。

そうして残った市民全員がヘリに搭乗し、空へと上がっていく。黒い兵士達はその周辺を飛び回り、安全高度まで上昇したのを確認してから海岸の方へと飛び去っていった。

「さて、私達も行きましよう。深雪さん達を拾って、ここから脱出します」

「——承知致しました」

真由美の指示に何やら言いたげな雰囲気だった名倉だが、結局恭しく頷いて副操縦席へ戻った。どうやら彼が運転するのではなく、専用の運転手がいるようだ。

真由美と摩利、そしてほのかの3人が戦闘ヘリに乗ったのを確認し、ヘリは空へと飛び立った。

その途中、真由美はビルの屋上で自分達を見送る1人の兵士に気がついた。ほのかも摩利も、逆サイドを見ていて気づいていない。

真由美はヘリの中で、その兵士に向かってこつそり舌を出した。

真由美の「あかんべえ」をバツチリ目撃した達也は、スモークバイザーの奥で苦笑いを浮かべた。

そして、ヘルメットの通話スイッチを入れる。

「七草真由美嬢はヘリに搭乗し、低空飛行で海岸方面へ向かいました。途中で同級生・下級生を拾った後、この場を離脱する模様です」

『了解した。引き続き、戦闘領域離脱まで護衛を続けよ』

風間少佐の指示に、達也は「了解です」と答えて通信を切った。

そして屋上の端に移動し、CADの銃口を下に向けて引き金を引いた。

建物の角でポツと火が上がり、そしてすぐに消える。ミサイルランチャーが路面に転がるのが見えたが、現在の携行兵器はその程度で暴発するほどちやちな造りをしていないので気にしない。

それを5回ほど繰り返し、へりを狙おうとしている輩を排除したところで、達也は後ろを振り返った。

そこには、抜き身の刀を持つ寿和の姿があった。ただぶら下げているだけのように見えて、一切の隙が無い「無形の構え」を取っている。

「何者だ？」

間隔の狭い2つのビルの壁を交互に蹴って屋上まで駆け上がるという尋常でない方法を使った割には随分と平凡な質問だな、と皮肉めいたことを思いながら達也は答えた。

「国防陸軍第一〇一旅団、独立魔装大隊特務士官、大黒竜也」

「何っ？」

質問はしたものの正直に答えるとは思っていなかったのだろう、寿和は聞いたことの無い部隊名よりもそのことに虚を突かれ、凶らずも構えに隙を作ってしまう。

その間に、達也はビルの外側へと跳んだ。彼の左手がベルトのバックルを叩き、彼の体が重力の支配から解放されてフワリと浮き上がる。

そうして右手のCADで寿和を牽制したまま、拳銃の弾が届かない上空まで飛び上がっていった。

釈然としない表情を浮かべる寿和が、その場に取り残された。

*

*

*

深雪達のグループと敵との遭遇戦は散発的なものとなり、直立戦車や装甲車などは姿を見せなくなっていた。幹比古の雷撃魔法で歩兵部隊を無力化したのを確認すると、彼らはビルの陰に集まって先程の通話の内容を確認する。

「アタシ達のためにもう1台へりを用意してくれるとか、さすが七草

は太っ腹ね」

「こういうのって、〃太っ腹〃って言うのかな？ 先輩を確実に脱出させるためのものでしょ？」

「とはいえ、これのおかげで私達も避難の目処が立ちましたから有難いことです」

「——あつ、来たみたい」

エリカが空を見上げてそう言うが、ヘリのローター音は他の全員の耳に届いていた。

しかし広場からここまで自分の足でも10分掛からないほどの距離だというのに、いつまで経ってもヘリの姿が見えてこない。

と、深雪の通話ユニットに着信があった。

『深雪さん。悪いけど狭くて着陸できないの、ロープを下ろすからそれに掴まってくれる？』

それと同時に、空からロープが5本下りてきた。それを目で辿るとロープの端は空中で途切れており、その辺りで陽炎が揺らめいているように見える。

「透明化、いえ、光学迷彩と言うべきかしら。器用ね、ほのか」

そう呟きながら深雪はロープを掴み、末端のステップに足を置いた。準備完了の意を込めてロープを軽く引つ張ると、彼女を乗せたままロープがスルスルと上がっていく。

その光景に、他の4人が慌ててそれに倣った。

深雪達とは対照的に、桐原達のグループはライフルとミサイルランチャーを主力とする魔法師混じりの歩兵部隊から猛攻撃を受けていた。上空からそれを見た真由美は動揺を覚えながらも、すぐに彼らの援護に当たる。

歩兵部隊の周囲に、そして奴らに紛れるように、ドライアイスの粒が空中で突然生成され、自然界では有り得ない超音速で奴らに襲い掛かった。九校戦のときとは段違いの攻撃力に設定された〃魔弾の射手〃が、まさしく弾丸のように奴らの防護服を貫いていった。頭上、

背後、側面と様々な場所から様々な角度で撃ち込まれる弾丸の十字砲火に、奴らは魔法師がどこから仕掛けているのかも見極めることのできないまま次々と薙ぎ倒されていく。

真由美がその場を制圧するのに、5分も掛からなかった。

「ありがとうございます、先輩」

『今ロープを下ろすから、みんな上がってきて』

戦果を誇るでもなく真由美がそう言うのと同様、彼らの頭上にロープが人数分下りてきた。

五十里と花音、桐原と紗耶香がペアとなって歩き、ロープへと向かっていく。

つい今しがたまで激戦の渦中であつた彼らにとって、そのロープはまさに「救いの女神が差し伸べた手」だつた。光学迷彩を解除したヘリが頭上から守つてくれる安堵感もあつた。

故に彼らが周囲の警戒を無意識に怠つてしまったとしても、仕方のないことなのかもしれない。

しかしゲリラ兵の真骨頂とは、そうした心の隙を突いた不意打ちにこそ存在する。

先程真由美が鎮圧した歩兵部隊の中で、運良くそれを免れた数人の兵士。彼らは周りの仲間達に紛れて地面へと倒れて戦闘不能になつた振りをしてながら、反撃の機会を虎視眈々と狙つていた。

そして今がまさに、その千載一遇のチャンス。

その手に持っていたライフルを、ミサイルランチャーを構え、ロープを掴んで上空に上がろうとする彼らへと狙いを定めた、

まさに、そのとき、

「ああー！ やつと地上に出られたあー！ くっそお、迷いに迷つたじゃねえか！」

「――！」

真横の建物から突然出てきた1人の女性に、兵士達は完全に不意を突かれて反射的にそちらへと武器を構え直した。

「――つとー！ アンタ達、今すぐ武器を捨てて投降しろー！」

するとその女性は一瞬だけ怯んだものの、すぐさま腰のホルスター

からベレッタM92Fを取り出して両手で構えた。ライフルとミサイルランチャーに対抗するには心許なすぎる装備だが、互いに近距離で銃口を向け合うという状況が、互いに軽率な行動を抑止する効果を生んでいた。

しかし結果的にその睨み合いを終結させたのは、そのどちらでもなかった。

「な、何だあ!？」

その女性・よねの見ている目の前で、その兵士達がいきなり銃撃された。様々な場所から様々な角度で一斉に撃ち込まれるその光景は、少なく見積もっても狙撃手が5人はいないと成立しないほどの猛攻撃だ。

やがてその場に立つのがよね1人だけになった頃、ふいに周辺に影が差したため彼女は空を見上げた。風切り音を響かせながら戦闘ヘリが上空に留まり、複数のロープを垂らしている。

そして同時に地上では、4人の高校生がこちらに駆けてくるのが見えた。ヘリに乗ろうとしたタイミングで何やら騒ぎが起き、それによつて未だにヘリに乗ることが叶っていない桐原達である。

「すみません、あなたに話があるようなのですが」

その内の1人、紗耶香が通信ユニットを差し出しながらよねにそう言った。差し出す方も差し出される方も戸惑いの表情を浮かべるが、よねはすぐに気を取り直してそれを受け取り耳に当てる。

『司波達也の妹、司波深雪と申します』

簡潔な自己紹介。

そしてその後には添えられた、これまた簡潔な「お誘い」。
それだけで、よねは彼女達のヘリに乗ることを決めた。

*

*

*

市役所に隣接した場所に造られた横浜公園は、遊郭の跡地を整備して明治9年に開園した、市内で山手公園に次ぐ2番目に古い公園である。元々は在留外国人の生活環境改善を求めた条約に基づき整備さ

れたものだが、一般の人々にも開放されたため当時は「彼我公園」とも呼ばれていた。日本庭園風の池と流れ、噴水や多目的広場、さらには水道の貯水設備と共に整備された水の出る4つの彫刻が特徴の水の広場、そして春になると16万球ものチューリップが咲き誇る市民の憩いの場として、日頃から多くの人で賑わっている。

しかしそんな憩いの場も、ゲリラ兵が街を侵攻する現在は人々の姿も無く静まり返っていた。地震などの自然災害ならば避難場所として機能したであろうこの場所も、陸上兵力から身を守るには向かないと考えられた結果だろう。

しかしその公園内にて、樹木や植え込みに身を隠して息を潜める集団がいた。

「隊長！ 我が軍が後退を始めました！」

「そうか」

部下の報告を聞いた大亜連合軍特殊部隊上校・陳祥山チエン・シャンシエンは、驚きも悔しさも意外感も無くたったそれだけ答えて頷いた。「作戦目標」が達せられれば戦闘レベルの勝敗は関係無い、という彼の潔い性格もあるが、しんのすけの「主人公補正」を考えれば味方が敗走する可能性の方が高かったのが正直なところだった。

「我々はこれより、「作戦」を実行する」

付き従う兵士は、20名。けっして多いとはいえないが、混乱に乗じて本国から呼び寄せた戦闘のスペシャリストばかりだ。最初に連れて来た潜入作戦要員とは練度が違う。

そしてその中には、一度は不覚を取ったとはいえ戦闘力に関しては陳が最も信頼を寄せる部下・呂剛虎リュウ・カンフウの姿もあった。白と金を基調とした甲冑・「白虎甲」バイフウシヤを身に纏っており、それによって自身の代名詞である「剛氣功」ガンシゴンを十全に発揮できるようになっている。表面積でいえばオフロードバイク用のプロテクター程度の軽装備だが、今の彼はたとえ装甲車の機銃掃射であろうともものもしないだろう。

「呂上尉。あくまでも作戦が第一だ、無理に報復しようなどと思うな」「分かっております」

その心中がどうであれ、呂は完璧な自製の利いた声で上官に答え

た。

そうして「行くぞ」と陳の号令を合図に、彼らは秘かに進軍を開始した。

彼らの向かう先にあるのは、公園内に建設された野球スタジアム。自称アクション仮面が、自ら「ここにいる」と宣言した場所である。

*

*

*

上空に飛び上がったへりからだ、現在の戦闘の状況がよく見える。

真由美達が駅前広間に到着したときには戦線が存在しないほどに各地で戦闘が行われていたが、現在は魔法協会支部、そして中華街の周辺くらいでしか戦闘が行われていない。へりに搭載された十師族専用回線からの情報も合わせると、いち早く組織された魔法協会の義勇軍、動員から1時間足らずで大隊規模の援軍を投入した国防軍の活躍もあり、敵の狙いと思われる主要施設の占拠や市民の拉致も空振りに終わっている。

遠からず敵は撤退し、治安維持のための掃討戦に移行すると思われる。もはや市民を脱出させる必要も認められないほどに状況は改善しているのだが、実際にその光景を見下ろす真由美達は専門知識の不足もあってそこまでの判断はできなかった。

「それにしても、娘を街から脱出させるために自前でへりまで用意するとは……。七草ちゃんって、かなりのお嬢様だったんだなあ」

「改めてそう言われると、何だか恥ずかしいんですけど……」

「いやいや、別に責めてるわけじゃないから。むしろ市民のために脱出用のへりを用意してくれるとか、アタシがお偉いさんだったら絶対表彰してるわ」

「いや、それはそれで恥ずかしいので止めてくださいね」

へりの中では、真由美とよねがそんな会話を交わっていた。会場から避難する際に何回か言葉を交わしたことがあるという薄い繋がりではあるが、この中では真由美が彼女と最も顔見知りであることには

変わりない。

だからこそよねは、彼女を話し相手に選んだのである。

ヘリに乗ったときから自分を睨みつける、エリカの視線から逃れるために。

「んで、刑事さん？ 達也くんとの約束を破って勝手に避難した挙げ句、アタシ達にそれを黙っていたことに対して何か申し開きは？」

「いや、アタシもまさかみんなが知らないとは思わなかったのよ……。あのお嬢様がみんなと知り合いで『避難のことは自分が伝えるから心配いらない』って言うから……」

「やっぱりあのお嬢様の差し金か……。ってことは、達也くんからの電話に出なかったのもお嬢様がそう言ったから？」

「ごめん、それは単純にアタシが気づかなかっただけ」

「ふざけんじゃないわよ！ ちよつとでも頼もしいと思ったアタシが馬鹿だったわ！」

体をシートベルトで固定されていなければ確実に掴み掛つていたであろう勢いで叫ぶエリカに、よねは情けないやら申し訳ないやらで体を縮こまらせていた。戦火の真つ只中から上空に避難した安心感も相まって、ヘリの中に弛緩した空気が漂う。

と、苦笑いを浮かべていた真由美がよねに尋ねる。

「ところで、その酔乙女さん達と一緒にシエルターに避難したはずのあなたが、どうしてあんな場所から出てきたんですか？」

「いや、シエルターの入口までは行ったんだけど、地下道が崩れたときにアタシだけ取り残されちゃってさ。生き埋めになった人がいないのは分かってたから、とりあえず別の場所から外に出ようと思って歩き回ってたらあそこに着いたんだ」

「ということは、シエルターで何があつたか把握はしてないってことか……」

若干落胆を滲ませる声色でそう呟く摩利の声を、よねが耳聡く拾い上げた。

「ん？ 何かあつたの？」

「それは不明ですが、ちょうどシエルターの真上に位置する駅前広場

で市民やゲリラ兵が眠っているのを見つけたので、シエルターに避難している人達も同じ目に遭ってないかと思ひまして……」

「そっちでも!? アタシ達がシエルターに向かう途中の地下通路でもゲリラ兵っぽい奴らが道の真ん中で眠っててき、やっぱアレって会場の入口で眠ってたのと同じ奴の仕業なのか!?!」

「いや、そこまでは私達にも——」

「そんなことよりもさ、訊きたいことがあるんですけど」

如何にも不機嫌だとアピールするような表情と声色（おそらく本人は無自覚なのだろうが）で会話を遮って尋ねるエリカに、よねは若干の緊張を携えて彼女へと視線を向けた。

「しんちゃんがアクション仮面を名乗ってゲリラ兵に呼び掛けたあの放送、刑事さんも聞いてたよね。アレもお嬢様の差し金?」

「アタシも詳しくは分かんないけど、あのお嬢様が好き好んでそんな危険な真似をしんちゃんにさせるとは思えないのよねえ……。真由美ちゃんと話してたときに遠くから見ただけど、しんちゃんを見送るあの子の顔は本気で無事を祈ってるような感じだったし」

よねの話に「えっ?」と反応したのは、レオだった。

「見送るってことは、しんのすけは他の奴らよりも先にホールを出たってことか?」

「ええ、そうよ。避難を呼び掛けるよりも前に、しんちゃんの他にイケメンで背が少し低い男の子も一緒にホールを出て行ったの。別の男の子が持ってたスーツケースを持ってね」

よねの答えに、1年生の面々が一斉に自分の記憶を呼び起こした。確かにあいと会話を交わしたとき、しんのすけの幼馴染であるボーがスーツケースを持っていたのを憶えている。そしてよねの言う「イケメンで背が少し低い男の子」というのは、おそらく放送でも声が漏れ聞こえていたコージローのことだろう。

しかしそれがいったい何の関係が、と全員が首を傾げていた、そのとき、

「——あつー!」

美月が突然悲鳴をあげ、咄嗟に自身を庇うように顔を伏せた。

へりに乗った後も彼女は自主的に眼鏡を外して地上を確認していたのは知っていたので、戸惑う素振りも無く深雪が彼女に声を掛けた。

「美月、どうしたの？」

「えっと、へりの前方で何だか『野獣』のようなオーラが見えた気がして……」

「野獣のような？ 好戦的で凶暴な、という意味？」

幹比古は美月に問い掛けると同時に懐から呪符を取り出し、術を発動して目の前にかざした。

呪符越しにフロントガラスから外の景色を見つめる彼が、その顔を驚愕の色に染めた。

「——敵襲！」

「確かなの、ミキ!？」

「少人数による奇襲だ、恐ろしい呪力を感じる」

幹比古の答えを聞いたエリカは、しかし怯んだ様子は無く、むしろギリリと目を輝かせた。

「突然人が眠る現象とか、しんちゃんの行動の意図とか、とにかく色んなことが分からなくて頭がパンクしそうだけど、アタシ達がこれからやるべきことは『ただ1つ』よ。——そうですよね、七草先輩!？」

最前列に座る真由美にエリカが呼び掛けると、彼女は力強く首を縦に振って口を開いた。

「ええ、千葉さんの言う通りよ。私達がこれからすべきことは、横浜公園のスタジアムにいるしんちゃん達を拾ってこの街から脱出すること」

「彼がなぜあんな行動を取ったのか、そんなことは彼本人から後でいくらでも聞き出せる。おそらく敵も相当の手練れだ、それでも皆はついてきてくれるか？」

真由美の台詞を受け継いだ摩利の呼び掛けに、へりに乗るメンバーの（前方に集中している運転手と助手席の名倉以外）全員が、一切臆することなく頷いた。

戦闘が繰り広げられる横浜の街並みを眼下に据え、真由美達の乗る

戦闘へりは一直線に目的地へと向かう。

その場所こそ——横浜公園の野球スタジアムであった。

彼女達も、彼女達の乗るへりを見守る達也も、達也に指示を出す風間少佐も、そして各々の判断で横浜公園へと向かう者達も、しんのすけがなぜあのような行動を取ったのか知る由も無い。酔乙女あい達も現在地下シェルターの中にいる以上、それを語る事ができるのは、横浜公園の野球スタジアムにいるしんのすけ本人、そして彼と一緒にいると思われる代々木コージローのみだ。

しかし彼らは全員、しんのすけが単なる悪戯やその場の気分である行動を取ったのではない、と信じて疑っていなかった。

彼らのその考えは、当たっていた。

しかし彼らは、知らなかった。

そもそも今回の横浜侵攻自体が、野原しんのすけ唯一人のためだけに起こされたものだ、ということ。

第68話 「決戦の地、横浜スタジオムだゾ」

達也たちがホールを後にし、あいが真由美から情報を得ているときのこと。

しんのすけ・コージロー・サキ・ボアの4人がホール内の通路で固まっていると、扉を開けてホールの中に入ってくる1人の女性に気がついた。

「おっ、よねちゃんだ」

「よねちゃん？ 今ホールに入ってきた女性のこと？」

「そ。ちよつと前まで刑事で、今は資料室の整理係」

「成程、野原くんの知り合いなだけあって、一筋縄じゃいかない人のようだね」

しんのすけとコージローがそんな会話を交わす間に、しんのすけの存在に気づいたよねが慌てた様子で駆け寄ってきた。

「しんちゃん！ さつき達也くんとそこで会って、情報を仕入れてから避難の方針を固めることになったって聞いたんだけど！」

「えーつと、そうだったっけ？」

「避難については聞いてないけど、こんな状況だし避難するしかないよね」

「そ、そうだよね……」

サキがブルリと体を震わせたところで、真由美との話を済ませたらしいあいが戻ってきた。見知らぬ女性の姿に一瞬だけ不機嫌そうに目を細めるも、すぐにしんのすけの態度が平時と変わらないことに気づいて元に戻る。

「えつと、しん様、そちらの方は？」

「アタシは東松山よね、しんちゃんの知り合いの刑事だ」

「今は刑事じゃなくて資料室の整理係でしょ」

「う、うっせえな！ すぐに刑事に戻ってやるから見てろよ！」

「とにかく警察関係者なのでしたら、避難誘導に協力していただけませんか？」

しんのすけとよねの漫才めいた遣り取りにも耳を貸さず、あいには真

剣な表情でよねにそう問い掛けた。自分よりもずっと年下だが只者でない雰囲気を漂わせる彼女に、よねも釣られて真剣な表情で彼女に向き直る。

「ああ、それはもちろんそうするつもりだけど、責任者って誰なんだ？」

「それでしたら、あちらのステージの上にいる女子生徒と相談してくださいな」

「えっ？ いやいや、こういうときは立場ある大人がやるのが相場であって——」

「確かに彼女はまだ高校生ですが、この中では一番頼りになりますわ。よろしくお願いしますね」

「マジかよ。うーん、とりあえず行ってみるかあ……」

半信半疑といった感じながらも真由美の下へと去っていくよねを見送ったあいが、優雅な所作でクルリと踵を返してしんのすけ達へと向き直った。

「さて、しん様と代々木くん、とても大事な話があります」

「僕らをここに引き留めてまで話したかった件、ですね」

コージローの言葉にあいは頷き、説明を始めた。

「現在、市内に潜伏していた大亜連合の戦闘員が一斉蜂起し、この街を襲っているところです。その目的は、この街にある魔法協会支部のメインデータバンクから情報を盗み出し、さらには一般市民や魔法関係者を拉致することで日本政府に圧力を掛けること——」

「おおっ！ だつたらすぐにここから出なきゃ——」

「——というのが『建前』としての理由です」

あいが付け足した台詞に、しんのすけが「建前？」とオウム返しに尋ねた。ポーは特にこれといった反応を見せず、サキはしんのすけと同じように首を傾げ、そしてコージローはあいへと向ける目を疑わしげに細める。

しかし彼が疑っているのは、彼女の話の信憑性に対して、ではなかった。

「酢乙女さん、あなた、最初から知ってたんですね？」

「はい。今更隠す理由も無いので正直に話しますが、私は大亜連合が今日この街に侵攻してくるといふ情報を、既に“とある筋”から聞いて掴んでいました。当然、その“真の狙い”も合わせて」

「“とある筋”って？」

「ごめんなさい、しん様。たとえしん様であつても、それを教えることはできないのです。しん様が私と結婚をしてくださるのであれば、全てをお話しすることができのですが——」

「で、その“真の狙い”とは何ですか？」

あいの台詞をぶつた切つて尋ねるコージローに、彼女は拗ねた様子で唇を尖らせ、しかしすぐに真剣な表情に戻してそれに答えた。

しんのすけを、まっすぐ見据えて。

「大亜連合の狙いは、——しん様です」

「えっ？ オラ？」

その場にいる全員の視線がしんのすけへ向けられ、当の本人が首を傾げてそう尋ねる。

その問いに対して、あいは力強く頷いた。

「はい、そうです。他国籍に偽装した揚陸艦を港につけ、数百人もの戦闘員を街中で暴れさせ、数十機もの装甲車や直立戦車を使ってまで協会支部に攻撃を仕掛けているのも、全てはしん様お一人を拉致するという真の目的を隠すための“囿”ですわ。——まあ、それを知らされているのはごく一部のみで、ほとんどは本気でそれを目的として動いているのですが」

「待つてよ、あいちゃん！ なんでその人達はこんなことまでして、しんちゃんを拉致しようとするの？」

「そんなの決まってるでしょ、サキちゃん。——こんなことまでして手に入れようと思うほど、しん様の“力”には価値があるからですよ」

手短かに説明します、とあいは若干早口気味に話し始めた。確かに現在進行形で襲撃を受けている以上、どんな事情があろうと早く避難しなければいけない状況には変わりない。

「我々が“主人公補正”と呼んでいるしん様の力は、その気になれば

世界を支配することも滅ぼすことも思いの儘なほどに強大です。それだけの力を私利私欲ではなく他人のために使えるからこそ、しん様は英雄視され、恐れられ、そして恨まれていきます」

「あいちゃん、言ってる意味が全然分かんないゾ」

「それだけの強大な力を自分の物にしたいと考える者が現れるのは、むしろ必然でしょう」

しんのすけについての話にも拘わらず、当の本人の疑問を無視して話が進む。

「しかし、しん様の力を手に入れると一口で言っても、その方法が悩みどころでした。下手に強引な手段を取れば自分達が敵と見なされ、その力によって返り討ちに遭います。味方にしようとハニートラップなどを仕掛けた奴らもいましたが、最初は良くても『騙し続ける』というハードルを越えられずにボロを出し、結局力が発動して返り討ちに遭います。そんなことを何回も繰り返す内に、いつしか誰もがしん様の力を手に入れるのを諦めるようになりました」

「だとしたら、この状況はおかしいですよね？ 強引な手段どころじゃないんですが」

コージローのごもつともな指摘に、しんのすけを除く全員が頷いて同意を示す。

そしてそれは、あいも同じだった。

「その通りですわ、代々木くん。——ですが昔と今とでは、『事情』が違うのです」

「事情？」

「はい。——今から10年ほど前に『サザエさん時空』が消滅したために、しん様が歳を取るようになったことです」

あいの言葉にピンと来たような反応を見せたのは、ボーとコージローの2人だけ。

サキはまだ分からないようで、首を傾げたまま。

しんのすけに至っては、もはや色々諦めたのか話を聞いてるのかも怪しかった。

「長らく5歳児のままだったしん様も、今や16歳。その気になれば

子供を作れる歳です」

あいが付け足したその説明に、サキがようやく思い至ったようである。(若干頬を紅く染めながら) 納得したように頷いた。

「しん様本人を引き込めれば万々歳、そこまでは至らなくてもしん様の『遺伝子』を持ち帰ることさえできれば、現代の技術力ならばしん様の子供を作ることには容易ですわ」

「しんちゃんの力って遺伝するの?」

「試してみる価値はある、と考えてもおかしくないでしょう? たたえ劣化したとしても度合いによつては充分に脅威ですし、逆に多少劣化した方が自分達が御しやすくなる、くらいには思っているかもしれませんがせんわ。あるいは直接しん様のクローンを作るという手も無くないですが、過去の研究で魔法師のクローンがオリジナルの力を受け継ぐことは無かったのを考えると、そちらについては成功する可能性はほぼ無いでしょうね」

あいの説明に、ボーもコージローも納得した様子だった。

しかしサキだけは、どうにも納得しがたい、といった表情を浮かべている。

「んん? でもさ——」

「んで、結局オラはどうすれば良いの?」

と、サキが何か質問しようとしていたが、とうとう痺れを切らしたのか、しんのすけがむりやり会話に割り込んできた。

確かにこの辺が頃合いか、とあいも説明を打ち切った。

「とにかくしん様が本命である以上、しん様は一刻も早くこの街を脱出するべきですわ。この会場のすぐ近くにヘリを待機させてますから、それを使ってくださいいな」

「オラ、ヘリなんて運転できないゾ」

「大丈夫ですわ、黒磯に運転させますから。私が別名義で所有しているビルに隠してますから、黒磯にそこまで案内させます」

「酔乙女さん、僕も彼に同行させてもらっても良いですか?」

手を挙げて提案するコージローに、あいは眉を寄せて難色を示した。

もちろん彼は、しんのすけに便乗して一刻も早くこの街を脱出しようと考えてそう言ったのではない。そしてあいもそれは分かっている、だからこそ先程の反応なのである。

「代々木くんが一緒なら有難いけど、あなたがいることは想定外だったから何も用意できていませんわよ?」

「それは大丈夫。ちょうど千葉さんから『武器』を借りて、というか半ばむりやり押しつけられてるから、いざってときは自分なりに頑張ってみるよ」

コージローはそう言つて、自身の脇腹辺りを服の上から擦った。おそらくそこに、エリカから借りたという『武器』が仕込んであるのだろう。

と、ここでしんのすけが「おつ?」と不思議そうに眉を寄せた。

「そういうえば、あいちゃん達はどうするの? とうか、達也くんたちは?」

「とにかくしん様の脱出が最優先です、できるだけ少人数で動いた方が相手にもバレずに済みますわ。——大丈夫ですわ、この場の皆さんは私達が責任を持ってシエルターまで避難させますし、魔法科高校のご友人達もあんな奴らに遅れを取るほど柔じゃありませんもの」

「急ごう野原くん、むしろ君がこの場に留まる方が危険みたいだよ」

あいとコージローの言葉にしんのすけが迷いを見せる中、ボーが持っていたスーツケースを彼へと差し出してきた。

「しんちゃん、もしものときはこれを使って。問題無く動くはずだから」

「……分かったゾ、ボーちゃん」

「さあしん様、この場は私達に任せて早く行ってくださいな」

「気をつけてね、しんちゃん」

「……………」

やがて決心したように力強い表情を浮かべ、しんのすけはその場を走り出してホールの扉を抜けていった。

コージローも一瞬遅れてその後続き、しんのすけが開けた扉を音も無く擦り抜けていく。

「——しん様、ご無事で」

既に見えなくなった彼の背中に向けて、あいがポツリと呟いた。

しんのすけとコージローがホールを飛び出すと、即座に黒髪黒スーツ黒サングラスの大柄な男性・黒磯が2人へと駆け寄ってきた。普段は冷静沈着で感情をほとんど表に出さない彼だが、状況が状況だからかよく観察すると若干口元を強張らせているように見える。

「お待ちしておりました。裏手のVIP専用口から表に出ますので、私について来てください」

おそらく事前にあいから話は聞いていたのだろう、黒磯はそう言うや返事も待たずに踵を返して走り出した。しかし数歩進んだところで2人が自分の後について来ないことに気づき、黒磯は困惑の表情で後ろを振り返る。

床に顔を伏せているせいで表情が見えないしんのすけと、そしてその隣でジツと彼を見つめるコージロー。

主人からの命令を忠実に遂行しようとする黒磯が、動き出そうとしないしんのすけに呼び掛けようと口を開き——

「野原くん、そのスーツケースの中身は何だい？」

かけたタイミングでコージローがしんのすけに呼び掛けたため、黒磯の呼び掛けは中断されてしまった。まるで自分の言葉を遮ったかのような印象を受けた黒磯だが、わざわざそれを指摘して時間を取る必要は無い、と即座にその考えを頭の外へと放り捨てる。

そんな黒磯を尻目に、しんのすけはポーから貰ったスーツケースを床に置いてそれを開けた。

緩衝材が敷き詰められたその中に折り畳まれて入っていたのは、プロテクターが付いたライダースーツのようなコスチュームに、口元のみが露わとなっているヘルメットだった。

胸部は緑、肘先・膝先・腰回りは赤、それ以外の部分は青に着色され、目元を覆うバイザー部分には黄色で目がペイントされている。スーツと一体化しているベルトのバックル部分には“A”の文字が

刻まれ、ヘルメットには鶏のトサカと牛の角を合わせたような飾りが施されている。

まさにテレビからそのまま飛び出したかのようなその姿に、しんのすけは目をカッと見開いて爛々と輝かせた。

「おおっ！ まさしくアクション仮面の変身コスチューム！」

「単なるコスプレ衣装、つてわけじゃなさそうだね」

「ずっと前からボーちゃんに『せっかくアクション仮面の必殺技が使えるんだから、アクション仮面と同じ格好で戦いたい』つて相談してたんだゾ！ 何だボーちゃん、完成したんならそう言つてほしいゾ！ んもう、足臭いんだからあ！」

「それを言うなら『水臭い』じゃないかな？ というか、それつてさっきの彼が作ったの？」

「そうそう！ ボーちゃん、昔から手先が器用だったから——」

「あ、あの！ しんのすけ様！ お話中のところ申し訳ありませんが……！」

そのまま会話に夢中になるところだった2人に割り込む形で、黒磯がようやく呼び掛けることができた。

2人は黒磯の存在を思い出したようにハツとした表情になり、そして彼について行く形で待機中だというへりに向かう——かと思いきや、

「野原くん、せっかくだからここでそのスーツに着替えてきたらどうだい？」

「おおっ？」

「待つてください！ 今は一刻も早く——」

「そうは言いますが、いざ敵が攻めてから着替えたのでは間に合いませんよ？ どうせ数分もあれば終わりますから」

確かに武器であれば即座に手に取つて使うこともできるが、魔法補助を目的とした戦闘服となればコージローの言う通り着替えなければ使えない。

「……分かりました。それでは、そちらに着替えてからへりに向かうとしましょう」

「ほい来た！ それじゃさつそく——」

「ま、待つて野原くん！ さすがにここで服を脱ぐのはマズイからー！」
真つ先にズボンを脱ぎ出したしんのすけを必死に止め、3人は近くにあるトイレへと向かった。スーツケースを持ってしんのすけがトイレの中へと入り、コージローと黒磯は入口で彼が出てくるのを待つ。

そうして2分ほど経った頃、

「……すみません、逃げる前に用を足してきますね」

コージローがそう言つてトイレの中へ入つていくのを、黒磯はサングラスの向こうに隠された視線だけを動かして見送つた。

そうして待つこと、5分ほど。

さすがに遅いのではと感じた黒磯が、トイレの中へと足を踏み入れて、

「——！」

サングラスの向こうに隠された目を、これ以上ないほどに見開いた。

綺麗に掃除されたトイレの中には、左に小便器が4つ、右に個室が4つ。

そしてその奥にある壁には、大人1人が通るのに丁度良い大きさの穴が空いていた。

床に散らばつた瓦礫の断面は、まるで鋭利な刃物で切り落とされたかのように綺麗だった。

*

*

*

両脇に等間隔で樹木が立ち並ぶ、公園の入口からスタジアムまで続く園内のメインストリートを悠々と歩くのは、全部で21名という小隊にも満たない規模の大亜連合の工作部隊だった。

しかし最後尾に据えられた甲冑姿の呂剛虎リュウカンフウを始め、その全員が極めて高い戦闘力を有する実力者揃いだ。しかも彼らはこれから行う“作戦”に対する並々ならぬ熱意によって、ピリピリと肌を焼く剣呑

な雰囲気にも包まれている。仮に彼らの目の前に装甲車を幾重にも並べたバリケードが敷かれてたとしても、その進軍を止めるのは至難の業だと認めざるを得ないだろう。

と、そんな集団の先頭を歩く1人の兵士が、途端に足を止めてその腕を水平に伸ばした。後続の兵士達が一斉に止まり、何事かと前方に目を凝らす。

彼らから10メートルほど離れた場所に立つのは、1人の少年だった。全体的に体の線も細く身長も男子の平均を少し下回る程度しかなく、濃いブラウンの髪はオシヤレに整えられ、その相貌は爽やかながら中性的だった。それこそ、どこぞのアイドルかと思えるほどだ。

現在この横浜は“戦場”と呼んでも差し支えないほどの非常事態下にあり、しかも明らかに外国籍と思われる兵士の集団と鉢合わせるという状況だ。にも拘わらず、その少年はまるで怖がる素振りを見せず、それどころかその顔には穏やかな微笑すら浮かんでいる。

兵士達が一斉に銃器を構え、その銃口を少年へと向けた。

確かにその場に似つかわしくない反応を見せるその姿は恐怖を誘うものだが、何も彼らはその恐怖に突き動かされたわけではない。その少年の右手には、鏢が無いために警棒にも見える銀色の刀が握られており、未だ何の構えも見せていないものの戦闘の意思ありと判断したためである。

後は引き金に掛けた指を軽く動かすだけで、目の前の少年が蜂の巣となって倒れ伏す。

しかし結論から言えば、彼らの銃器はただの一度も火を吹くことは無かった。

次の瞬間、兵士達は一斉に全身を切り刻まれた。

そしてそれは、彼らの錯覚だった。しかしあまりにもリアルなその錯覚に、彼らは無意識の内に踏鞴たたらを踏み、急に暑くなったわけでもないのに全身から汗が噴き出していた。

とはいえ彼らも、百戦錬磨のプロだ。突然の事態にも即座に気を引

き締め直し、小刻みに震える膝を気合いで押し留めると、10メートル離れた場所に立つ少年へと再び意識を向ける。

そんな彼らを襲ったのは、目に見えない何者かに胸を叩かれたかのような衝撃だった。

「な、何だっ!?」

「ぐあぁっ!」

あまりの衝撃に思わず母国語で困惑の声をあげる彼らだが、衝撃はその一瞬で終わらない。

目に見えない何者かが、彼らの体をズルズルと後ろに押しやっていった。彼らはその場に踏み留まろうと体勢を低くするが、幕内力士の張り手を何十回も受けたかのように彼らの上体がみるみる持ち上がっていき、やがて完全に体を仰け反らせた者からフワリとその体を浮き上がらせ、そして為す術も無く宙へと放り出されていった。

そうして吹き飛ばされる直前、彼らは理解する。

自分達に襲い掛かっているのが、目の前の少年が刀を目にも留まらぬ速さで回転させて生み出した爆風である、ということ。

その少年・コージローがその手に持つ刀を回転させることで、まさしく超巨大な扇風機の要領で強力な風が発生していた。それはまさしく非常に勢力の強い台風にも匹敵する風速であり、銃口の狙いを定めるどころかまともに立つこともできないほどだ。

そうして兵士達が次々と吹き飛ばされていく中、甲冑姿の呂は地面から足を離さずにその場で踏み留まっていた。確かに他の兵士よりも大柄で重いのは確かだが、コージローの攻撃にいち早く反応して自身に加重魔法を掛けたためである。ちなみに彼の他に数人が吹き飛ばされる前に魔法構築を完了し、同じようにその場に踏み留まることに成功した。

とはいえ、裏を返せば部隊の大多数がこの攻撃で吹き飛ばされてしまったことを意味する。そのいずれもが地面や樹木に体を打ちつけて気絶しており、戦線復帰は見込めない。残りの面々は自身に加重魔法を掛けながらコージローに対処することを強いられた。

兵士達はその事実には舌打ちしながら、その手に持つ銃器を再び構え

直し、

コージローが猛烈に横回転しながら、こちらへと迫ってくるのによやく気づいた。

「
」
彼らが驚愕で目を見開くのと同様、コージローが回転しながら手に持つ刀を一番近くの兵士の横っ腹に叩きつけた。遠心力も相まって兵士の体はあっけなく宙に浮き、近くの仲間も巻き込んで吹っ飛んでいった。その姿は、奇しくも先程爆風で吹き飛ばされた仲間と同じようだった。

最後尾で爆風に耐えていた呂は、猛烈な横回転をするコージローが仲間を次々と吹き飛ばしていく光景を目の当たりにしていた。どうやら峰打ちらしく彼らの体から鮮血が噴き出すようなことは無かったが、それでも鈍器で思いつきり殴られることには変わりなく、肋骨の1本や2本は覚悟した方が良さだろう。

こうして記述すると長く感じられるが、実際には最初に相対してから10秒にもなるかといった出来事だ。たったそれだけの時間でほとんどの兵士を無力化したコージローが、そのままの勢いで呂へと接近していき、

「がきいいんっ——！」

呂は僅かに身を屈めて脇腹を腕で防御する姿勢で、コージローの刀を受け止めた。金属同士がぶつかる甲高い音が鳴り響き、その余波で強烈な風が衝撃波のように辺りを襲って木々の葉をバサリと揺らした。

如何にも防御力に優れた見た目をした甲冑姿をした呂だが、案の定他の兵士と違って彼はその攻撃を耐えた。

しかしコージローは、それこそ呂が攻撃を耐えるか確認するよりも前に刀を上段に構え直し、

そして呂は、ほとんど反射的なスピードで両腕を上に掲げて頭部を守る。

「ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ——！」

まるで断崖絶壁から大量の水が流れ落ちるかのように猛烈な勢い

で、コージローがその左腕に面を打ち続けた。1発1発の間隔が短すぎて1つの音に聞こえる連続音が、コージローと呂、そして周辺にて倒れ伏す兵士達の周辺に鳴り響く。

それは以前に戦ったときにも見せた。秘打・ナイアガラの滝だが、木刀のときよりも威力が上がっているようで、呂の足元で舗装された地面が捲れ上がる。

しかしそれでも、呂は耐えていた。甲冑に隠された腕の怪我は未だに全快ではないが、鋼氣功ガンシゴンを増幅させるこの甲冑があれば苦にならないし、今の彼は自身に傷を負わせたコージローへの雪辱に燃えている。

やがてコージローが呼吸を整える一瞬に攻撃の手が緩んだのを見計らい、呂は彼に向けてその右腕を鋭く振り払った。鋼氣功によって破壊力が大きく向上された熊手を、しかしコージローは即座に反応して攻撃を中断し、大きく跳び退くことで避ける。

最初に対峙したときと同じ10メートルの距離を空けて、2人の攻防は仕切り直しとなった。

「代々木コージロー、貴様の死をもって、この傷の報いとさせてもらおう」

「あ、すみません。中国語、分からないんですよ」

何とも気の抜ける返事をするコージローだが、呂はそれを気にする様子も無く地面を蹴って跳び出した。

*

*

*

コージローと呂が外で対峙している頃、チエンシャンシエン陳祥山は従業員用の入口からスタジアムの中へと潜入していた。普段は野球の試合や様々なイベント毎に大勢の人々でごった返すその場所も、今は仄かに明かりが灯るのみで他に誰もおらず、ひどくがらんどうに見える。

そんな広々とした通路を、陳は特に急ぐでも隠れるでもなく悠然と歩いていった。その堂々とした佇まいからは、他の誰かに見つかる可能性を露ほども疑っていない。

鬼門遁甲。きもんとうんこう

表向きは方位の吉凶を占う術であるが、その正体は方位を操って人々を術者の望む方位へ認識を誘導する魔法である。この術に掛かった者は方向感覚を狂わされ、いつまで経っても目的地に辿り着くことのできない迷路に迷い込むことになる。

それに加えて、今は自身の部下達が「囿」としてコージローと戦っている。そうした二重の仕掛けによって、陳は至って普通の足取りでスタジアムへと辿り着いたのである。

従業員入口にも、そしてグラウンドへ続くドアにも電子システムの鍵が掛かっていたが、陳は慌てることなく懐から取り出した端末をカードキーのパネルに押しつけた。端末を介してシステムに取り憑いた「電子金蚕」でんしきんさんがロックを解除し、それに反応して警報が周囲に鳴り響く。

しかし陳は、それにも動揺する様子を見せない。街そのものが非常事態となっっているこの状況でスタジアムの侵入者に警備員を動員させる可能性は低く、仮にそうなっただとしても駆けつけるまでに十分な時間がある。その頃には、どうせ全ては終わっている。

彼は勝手知ったる我が家のような気概で、ドアを抜けてグラウンドへと足を踏み入れた。

マウンドにブルーシートが敷かれている以外は、普段テレビ中継などで見かける野球場そのままの光景がそこに広がっていた。屋根が収納されているため、日が傾いて赤く染まり始めた空を眺めることができる。その空から降り注ぐ夕日のおかげで、照明が無くともフィールドの様子を観察することは容易だった。

よって陳はすぐに、その人物の存在に気づくことができた。

野球でいうセンターポジションに位置する場所に立つその人物は、プロテクターが付いたライダースーツのようなコスチュームに、口元のみが露わとなっているヘルメットを身につけていた。胸部は緑、肘先・膝先・腰回りは赤、それ以外の部分は青に着色され、目元を覆うバイザー部分には黄色で目がペイントされている。スーツと一体化しているベルトのバックル部分には「A」の文字が刻まれ、ヘルメツ

トには鶏のトサカと牛の角を合わせたような飾りが施されている。

それはまさしく、特撮ヒーローである「アクション仮面」がテレビからそのまま飛び出したかのような姿だった。

例の呼び掛けを聞いてここにやって来た陳だが、まさか本当にアクション仮面の格好をしているとは思わなかったのか、ほんの少しだけ口角を上げると、先程までと同じように堂々とマウンドを突っ切ってそのアクション仮面——しんのすけへと近づいていく。

位置的には完全にしんのすけの視界に入っているが、それでも陳はその歩みを止めることは無かった。彼の「鬼門遁甲」をもってすれば、たとえしんのすけがドアを見張っていたとしても、ドアが開いた瞬間に術中に嵌って陳の姿を見失ってしまう。「鬼門遁甲」による認識の捻じ曲げは、それだけ強力なのである。

歩みを進めながら、陳は観客席へと目を凝らす。少なくとも、陳の視界には誰の姿も映らなかった。意図的に姿を隠している可能性は否めないが、仮にそうだとしても、そもそも同じように認識が捻じ曲げられ自身の姿を見ることはできない。

作戦の成功が近づく胸の高まりを抑えながら、陳はそのまましんのすけへと歩いていく。

そうして、地面がブルーシートから人工芝へと切り替わった、まさかその瞬間、

しんのすけが、まっすぐ陳を指差した。

「今、セカンドベースの辺りにいるゾ」

陳が目を見開いた瞬間、彼の両肘と両膝に穴が空いた。

体を動かすにあたって、関節というのは非常に重要な役目を担う。それを突然奪われた陳は、何かが起こったことを理解する前に地面へと崩れ落ちた。

鮮血を地面に染み込ませながらその身を横たわらせる陳は、驚愕と怨念に満ちた目をしんのすけへと向けた。しかし彼はひどく驚いた

様子でこちらを見下ろしており、どう考えても自分を攻撃した術者とは思えない。

ではいったい誰が、と陳は辺りに視線をさまわせ、そしてその目を更に驚愕で見開かせた。

その人物は、しんのすけから僅か数メートル離れた場所に立っていた。元々そこにいたのか、それとも陳が倒れている間に駆けつけたのか今となっては分からない。

その人物は、プロテクター付きのライダースーツのような服にフルフェイスのヘルメットという出で立ちをしていた。しんのすけと似たような構成だが、彼ほどカラフルではなく黒一色で装飾品も少ない。それこそ彼と並んで立つと、ヒーローと敵対する怪人か悪の親玉にも見える。

「……なぜ、俺の存在に気づいた？ 術が通用しなかったのか？」

「結論から言うと、そうだ。からくりまで教えてやる義理は無いがな」

陳の苦しい問い掛けに、黒づくめの人物——達也は答えた。

再び陳が何か言おうと口を開きかけるが、その言葉が紡がれることは無かった。それよりも前に達也がCADを取り出し、引き金を引いて魔法を発動させたからである。振動数の異なる3つのサイオン波を撃ち出して脳震盪を起こす、という4月の模擬戦でも見せたその魔法が今回もきっちりと効果を発揮し、ただでさえ弱っていた陳の意識を完全に刈り取った。

「達也くん！ このおじさん、大丈夫なの!？」

と、しんのすけがヘルメットの上からでも分かるほどに慌てた様子で陳へと駆け寄った。仮にも自分を狙う敵への態度とは思えず、達也は思わず秘かに溜息を吐いた。

「心配するな。怪我したように見えたのは錯覚だ」

「えっ、そうなの？ ——おおっ！ 本当だ、怪我してないゾ！」

しんのすけが陳の肘や膝に顔を近づけるが、先程はしっかりとこの目で確認したはずの穴は見当たらず、それどころか地面や服にも血の痕が一切見られなかった。

もちろんこれは達也がこっそり再成魔法を行使した結果であるが、

オブラートに包んだ表現をするならば「素直」な性格であるしんのすけは彼の言葉をまんまと信じた様子だった。

「ところで達也くん、このおじさんがさつき言ってた「ちゃん・りん・しゃん」って人？」

「『チエン・シャンシエン』だ。おそらく、コイツがそうだろうな。認識阻害の魔法を使っていたんだろうが、しんのすけには通用しなかったようだな」

正確には『しんのすけが使っているパワードスーツには』だが、と達也は内心でそう補足しながら、彼が着ているアクション仮面スーツをチラリと見遣った。

精神に働き掛ける魔法は想子を媒体サイオンにしているが、その際に発生する霊子光フシオンそのものに効果は無い。従って霊子光だけを見ていれば意識を別方向に誘導されることは無く、また、認識阻害の魔法は「今そこにいる」と確信して目を向けられると途端に効力を発揮しなくなる。

おそらく彼のヘルメットには、霊子光を可視化する機能が備わっているのだろう。最初彼から「オラのヘルメットは「見えない敵」も見えるんだゾ」という言葉を聞いたときは正直半信半疑だったが、どうやら想像以上に高性能のスーツなのかもしれない、と達也は考えを改めていた。

「ところで達也くん、なんでここにいるの？」

「今更な質問だな。七草先輩達がヘリで横浜を脱出するつもりだから、俺はそれを援護していたんだ。もうすぐここに到着するから、おまえもそれに乗って早くここから脱出しろ」

「……達也くん、オラはここに残るゾ。このおじさんみたいにオラを狙ってる奴がいたら、みんなに迷惑掛けちゃうゾ」

何をふざけたことを、と達也は口に出そうとして、バイザーの裏から微かに見えるしんのすけの表情があまりに真剣だったせいか途中で動きを止めた。

ヘルメットの下で一瞬だけ困惑の表情を浮かべる達也だったが、即座に回復して口を開く。

「ここに飛んできたときに確認したが、今このスタジアム周辺は、正面入口前で代々木と交戦している部隊以外に敵はいない。敵のほとんどが例の放送後もその動きを変えなかったことを考えれば、おまえがへりに乗っても他の皆が標的になることは無いだろう」

「……本当に？」

「ああ。とりあえず、しんのすけも一緒に外に出るぞ。代々木の援護をしつつへりの到着を待って——」

「いや、その前に、私の相手をしてもらおうか」

「おっ?」

「——!」

突然聞こえてきた声に、しんのすけは首を傾げて、達也はその目つきを鋭くして素早く声のした方へと振り向いた。

そこにいたのは、高身長ながら筋肉量がそこまであるわけではないため細身に見える男だった。浅黒い肌と金髪碧眼という一目で純日本人ではないと分かる外見をしており、しかしそれ以上に抜き身の刀をそのままちらつかせているような剣呑とした雰囲気纏っているのが印象的だ。

「……ヘクソン」

「また会ったな、司波達也。そして、野原しんのすけ」

その男・ヘクソンは、2人分の視線を受けながら、その両腕をゆっくりと開いた。

まるで、2人を歓迎するかのように。

「それでは野原しんのすけ、第2ラウンドを始めよう」

「敵いるじゃん。達也くんの嘘つき」

「……………」

達也の深々とした溜息を合図に、ヘクソンの言う「第2ラウンド」は始まった。

第69話 「最後の戦いが始まったゾ」

がきいんっ！

真正面から一気に距離を詰め、逆袈斬りに振り下ろすコージローの刀を、呂剛虎はその場から動かさずに両腕で受け止めた。衝撃がビリビリと呂の体を伝わり、その体を若干後ろにずらしながらも呂はその剣を受け切った。

その際に甲高い金属音が辺りに響いたが、金属で作られた刀と甲冑がぶつかったのだから当然のことだ——と思いきや、実際のところその2つは接触しておらず、その間にはほんの数ミリほどの隔たりがあった。呂の「剛気功」によるものであり、そしてその光景は先程から何度も見られたものだった。

なのでコージローは今更驚きもせず、平然とした表情をピクリとも動かずに追撃を加えた。剣道でもお馴染みの面・小手・胴だけでなく、通常は防具の死角となるため狙わない肘や上腕、腿などにも容赦無く剣を叩きつけるが、防御しながらもズルズルと後退していた初戦とは違い、甲冑姿の呂はその場から1歩も動かさずにそれを受け止めていた。甲冑姿なことも相まって、まるで巨大な巖のような重厚感を覚える光景である。

と、コージローが一瞬攻撃の手を緩めたその隙を狙って、呂がコージローの細い体躯に向けて双手突きを繰り出した。傍目には単に両手で突き飛ばそうとしているようにしか見えないが、「剛気功」を十全に発揮する甲冑によって威力を大きく底上げしたそれをまともに受ければ、当たり所によっては即死も有り得るほどに危険な代物となっている。

しかしコージローは、それを最低限後ろに下がるだけで避けた。そしてそのままの勢いで彼はスキップするように大きく後退し、間合いを空けることで仕切り直しの体を取る。追撃しようと足を踏み込んでいた呂だが、ふいに思い留まったようにその動きを止めたため、コージローの思惑通りここは小休止と相成った。

そのタイミングで、コージローはふと自分が持つ得物に目を向け

た。

——武器としては一級品だけど、さすがに軽すぎるな……。

コージローが今使っている、鍔が無く警棒のようにまっすぐな見た目をした銀色の刀は、横浜に向かう際にエリカから半ばむりやり渡されたものだった。警察でも採用される白兵戦用の武器を製造する千葉家謹製（むしろそっちの方が収入のメインらしい）だけあって非常に丈夫で、しかも特殊な金属を使用しているのか木刀よりも遥かに軽く腕にまったく負担が掛からない。

しかしこの場においては、その軽さがネックとなっていた。

得物による攻撃に伴う破壊力は、得物を振る速さだけでなくそれ自体の重量にも比例する。生身の人間が相手ならばまず問題にはならないのだが、今回のように純粋な破壊力を要求される場面においては逆に軽すぎて威力を發揮できないのである。

元々千葉家はスピード重視の剣技であるし、破壊力が必要ならばその都度魔法で補助している。なので千葉家の門下生が使うには最良の武器なのだが、今回は非魔法師であるコージローの弱点が如実に表れてしまっていた。

つまりこの勝負、呂の方が遥かに有利——と結論づけられるほど、事はそう簡単ではなかった。

——忌々しいが、スピードは完全に向こうが上手か……。

けっして表情に出すことなく、呂は内心でそう吐き捨てた。

得物が軽いことがコージローの攻撃力不足の原因ではあるが、それだけ軽いからこそ彼の動きが竹刀での試合以上に機敏であることもまた事実だった。その速さは本当に自己加速術式を使っていないのかと問い質したくなるほどであり、対人接近戦闘で世界の十指に入ると称される呂ですら未だに1発も攻撃を当てられていない。

更にコージローはそれに加えて、当然のように“縮地法”と呼ばれる走法を使いこなしていた。

一部の創作物によって“目に見えない超高速で移動する術”のように誤解されているそれだが、実際は“相手の意図しないタイミングで移動して反応を遅らせる術”と表現した方が正しい。普通人間が

動くときは何かしらの予兆があるものだが、その予兆を極力減らしたうえでいきなりトップスピードに持つて行くことで、相手はたとえ近づくのが見えていたとしても反応に遅れて動けなくなってしまうのだという。

先程の攻防で呂がコージローの刀を正面から受け止めたのも、呂が自分の意思で迎え撃ったのではない。コージローが動き出したことに気づくのが遅れてしまい、結果的に受け止めざるを得なかったのである。そんなこと、百戦錬磨の呂をもつてして初めての経験だった。

——さてと、どうするかな……。

コージローは正眼の構えを取りながら、こちらを睨みつける呂をつぶさに観察する。呂の眼光の鋭さは未だ衰えを知らず、先の戦闘のダメージや疲労などはまるで感じられない。

先程から何度も自身の刀は彼を捉えているものの、ダメージが通らなければそんなことに意味は無い。これは剣道の試合ではなく、ルール無用の実戦だ。故に、魔法で身を守ることを卑怯だ何だと難癖をつけるつもりは微塵も無い。

——仕方ない、か。

コージローは心の中でそう結論づけると、小さく溜息を吐いた。もし刀を構えている最中でなければ、軽く肩を竦めるジェスチャーもつけていたかもしれない。

そうして彼は気持ちを切り替えると、一切の予兆も無く突然走り出し、呂との距離を詰めた。

呂は一瞬目を見開くも、即座に両腕を構えて防御の姿勢を取った。先程よりもその決断に迷いが見られなかったのは、おそらく何度もコージローの攻撃を受けたことで十分に防御が可能だと結論づけたためかもしれない。

しかしコージローの刀と呂の腕が激突するその直前、刀の動きがピタリと止まった。所謂寸止めというヤツであり、そしてその代わりと言わんばかりにコージロー自身が腕を畳むようにしてその身を呂へと詰め寄せさせた。

呂が再び目を見開く中、両手で刀を握りしめていたコージローの右

手が刀から素早く離れ、懐に突っ込んだかと思うと即座に抜いて呂の顔へと腕を伸ばしていった。

その右手に握られているのは、掌に包めるほどに小さなスプレーだった。

プシュツ。

「↓」

その瞬間、呂の目・鼻・口に刺すような痛みが襲い掛かった。

呂の「白虎甲」は伝統的な中華風甲冑であり、機密マスクなるものは付いていない。古式魔法の呪法具という性質上仕方のないことだし、敵味方が入り乱れる状況でガス兵器が使われることは通常無いので運用方法上それでも構わない、という事情もあった。

だからこそ、刀剣の間合いでその類の攻撃を仕掛けられる、というのは呂にとって一種の不意打ちだった。ましてや剣の達人であるコージローがそのような小細工を仕掛けてくるはずがない、という無意識の思い込みもその不意打ちに一役買った。

まさかコージローが、唐辛子にも含まれるカプサイシンを主成分とした薬品で暴漢の粘膜を刺激して涙を止まらなくさせる、防犯グッズとして非常に有名な催涙スプレーを使ってくるなんて、呂は夢にも思わなかった。

大の大人でも咄嗟に動けなくなるほどの痛みを伴う催涙スプレーだが、耐毒訓練を受けている呂の肉体はすぐにそれを克服した。

しかしその僅かな間は、催涙スプレーの刺激によって呂の呼吸が機能不全に陥った。

つまりその僅かな間は、呂の身を守る「剛気功」の効果も弱まった。

そしてその僅かな間は、コージローが攻撃を仕掛けるには十分な時間だった。

「↓」

コージローは右手に持った催涙スプレーを指に挟み、空いた掌底を呂の顎に振り上げた。掌底は的確に呂の顎を捉え、呂は梃子の原理によって脳を大きく揺さぶられながら強制的に上を向かされた。グツ、

と呂の口から苦痛の声が漏れる。

そうしてガラ空きになった呂の喉元に、今度はコージローの刀が突き刺さった。とはいえ、鋭い切れ味を持つ切っ先ではなく、持ち手である柄の方なので正確には「めり込んだ」と表現する方が正しいだろう。それでも呂の気管がひどく圧迫されたダメージは深く、呂の呼吸は再び儘ならなくなり、一時的な酸素欠乏と脳震盪が合わさって肉体の運動機能にも陰りが表れる。

「悪いけど、しばらくここから離れてもらうよ」

コージローがそう言い放つと同時に、刀を高速回転させることで発生した暴風が容赦なく呂に襲い掛かった。先程と違い意識も朦朧としている中ではまともに立つことすら儘ならず、呂の巨体はズルズルと後退して自らコージローと距離を空けていき、上半身が仰け反って隙だらけの胴体を差し出すように曝け出している。

ドツ、とコージローが地面を蹴って駆け出した。自身が発生させた風に乗ってそのスピードを上昇させ、回転による遠心力を上乗せした刀を呂の体めがけて振り上げた。

“必刀・風車”。

刀を高速回転させることにより風を生じさせて相手の姿勢を崩し、無防備になったところで遠心力を乗せて威力を増大させた刀を相手に叩きつける。打倒しんのすけという目標を掲げたコージローが開発した大技であり、その威力は開発した5歳当時をして面打ちでプールの水を叩き割るほど。肉体的・技術的に大きく成長した今となっては、当然ながらその威力も大きく増している。

そんな一撃必殺の大技を、峰打ちとはいえ一人の人間相手に繰り出せばどうなるか、

「ぐがああっ——！」

野太い悲鳴をあげて、呂の体は大きく吹っ飛んだ。すぐ後ろに野球スタジアムがあるためか、その光景はさながらバックスクリーンも大きく飛び越える特大ホームランの様相である。

一方コージローも、無事では済まなかった。自身の身長を大きく超える大柄な成人男性を吹っ飛ばす衝撃が刀にも跳ね返り、とにかく頑

丈なはずの千葉家謹製の刀はグニヤリとひしゃげて使い物にならなくなり、彼の両腕にもビリビリと鈍い痛みが残っている。

「備えあれば憂い無し。やっぱり平河さんみたいにな、防犯グッズは持っておくべきだね」

痛みを逃すように手首をブラブラと振りながらそんなことを呟いていると、ふいに頭上からヘリコプターのローター音が聞こえてきた。

しかし空を見上げてみるもそれらしき姿は見当たらず、暮れかけた空が広がっているのみだ。しかしローター音は前方から近づいてくるようにみるみる大きくなっていき、そして後方へと離れていくようにみるみる小さくなっていった。

「もしかして、野原くんのお仲間かな……？ とりあえず、野原くんの所に行くとするか」

ひしゃげた刀を片手に持ったまま、コージローはスタジアムの方へと歩き出した。

*

*

*

達也にとって戦いというのは、『如何に相手の不意を突くか』に重きを置くものだった。

それはひとえに、自身の魔法力が（世間一般の魔法師の基準では）劣っているからであり、自身が得意とする“分解魔法”が相手の不意を突くことにおいて非常に優れているからでもあった。よって達也はできるだけ自身の魔法を秘匿し、魔法に頼らない隠密行動の技術に身につけ、超長距離からの狙撃魔法を徹底的に磨き上げてきた。

だからこそ達也は、ヘクソンが自分達に攻撃を仕掛ける前に自ら姿を表したことについて、最初は不思議で仕方がなかった。いくら敵とはいえ不意打ちなんてフェアじゃない、なんてどこぞの少年漫画でもない限り通用しない理屈である。

しかし戦いが始まってすぐに、達也はヘクソンの意図に思い至った。

達也がホルスターからCADを抜き、"フラッシュ・キャスト"によって魔法式構築の時間を省略して魔法を発動した。今回の作戦においても敵の魔法式を破壊したり、非魔法武器を無力化するのにも大活躍した分解魔法の一種であり、設定した軌道上に存在する人体に穴を空けるといふ発動の予兆も無い静かなものだった。

しかしこれは最初にヘクソンと対峙した鑑別所するときにも見せた魔法であり、そしてそのときと同じようにヘクソンは達也が引き金を引くよりも前に回避の行動を始め、魔法の性質を完全に理解したかのように最低限の動きでそれを避けた。

——やはり避けられたか。なるべく意識しないようにしたんだが……いや、そういう考え自体が既に間違いか。

心理学用語の1つに"心理的リアクタンス"というものがある。これは『自由を奪われると感じる事柄に抵抗したくなる心理現象』を意味しており、例えば「テストが近いんだから早く勉強しなさい」と親に注意されて「今やろうと思ったのにやる気無くした」と返すような反応もこの一種だとされている。

達也は以前の戦いでヘクソンが相手の心を読む超能力者だと知っており、よって『彼と対峙するときにはなるべく自身の行動や作戦を頭に思い浮かべてはならない』と自身に抑圧を掛けることになる。しかし心理的リアクタンスは他人からの言葉だけでなく自分発信の考えにも適用され、行動や作戦を思い浮かべないようにしようとするほどむしろ思い浮かべてしまうことになる。

つまりヘクソンの場合、自身のテレパシー能力を十全に発揮するためには、むしろ相手にその情報を積極的に開示するのが最適解ということになる。

鑑別所での戦闘でも感じていたことだが、これほどまでに戦いにくい相手はそういない。しかも前回からそれほど時間が空いてないこともあり、達也は彼への対抗手段を身につけられていない。

何とも歯がゆい感覚に、達也は自然と口元を歪めていた。

「アクション・キック！」

だがしんのすけはそんなことなどまるで気にする様子も無く、魔法名を高らかに叫んで強く地面を蹴って跳び上がった。空中で右脚を突き出した、所謂ドロップキックの状態でヘクソンに向かつていくその技は、達也も4月の模擬戦で実際に経験したことのあるものだ。

しかしアクシヨン仮面のスーツを着た今の彼が繰り出すそれは、以前のそれとはまさしくスピードが桁違いだった。以前も「ミサイルのような」と形容したそのスピードだが、今のそれはまさに彼をミサイルと表現するに相応しいスピードだった。

爪先で空気を勢いよく突き破りながら、達也へと体を向けるヘクソンの脇腹へと迫っていく。

しかしヘクソンは、それこそ魔法が発動するよりも前にその攻撃に気づいていた。視線を向けることすら彼にとっては無駄な動作でしかなく、彼は地面につけた足を1歩も動かすことなく、膝を曲げて上半身を前に倒すことでそれを避けた。それはまるで海の中の海藻が波に合わせて揺らめくような動きであり、ほんの一瞬前に彼の体があった空間にしんのすけが重なった。

しかしヘクソンの動きはそれで終わらず、そのまま両手を突いて地面に倒れ込むと、その反動かのように鋭く右脚を振り上げた。普通の人間にとっては無理な姿勢での蹴り上げだが、彼の動きには淀みがあったく見られない。

しかし彼のすぐ真上に位置するしんのすけも即座に反応し、ドロップキックの姿勢を解いて即座に手足を折り畳んで背中を丸め、人体では有り得ない完全な球体へと変貌を遂げた。アクシヨン仮面カラーのボールと化した彼をヘクソンが蹴り上げると、打撃音と呼ぶには程遠いブニヨンという音をあげて飛んでいき、綺麗な放物線を描きながら、外野席の背後にある栄養ドリンクの巨大看板に激突した。

しかしヘクソンがそれを目で追うことはなく、ヘクソンは即座に立ち上がると大きくその場から跳び退いた。達也が魔法照準を自分に合わせていることに気づいたからであり、ヘクソンは着地と同時に達也へと視線を定め、地面を強く蹴って駆け出した。

達也も即座に反応し、拳銃型CADの銃口をヘクソンへと向ける。そしてその瞬間、ヘクソンは地面に倒れるような勢いで姿勢を低くして達也の魔法照準から再び外れた。

達也もその後を追おうと、視線と銃口を僅かに下へと向け、

ヘクソンがいた辺りの地面に彼の姿は無く、達也は目を見開いて視線を左右に振ってその姿を探した。

——いや、下か！

達也が半ば反射的に視線を自身の足元に向けると、俯せの姿勢で地面に寝転がる姿勢のまま尺取虫のように体を波打たせてこちらに迫るヘクソンの姿があった。字面だけ見ると如何にもものんびりした間抜けな姿だが、まるで映像の早送りでも見ているかのようなスピードで、しかもまったく音を立てず、あっという間に達也の足元にまで辿り着く。

達也が体を仰け反らせると、ヘクソンが達也の顎を狙って蹴りを繰り出すのが同時だった。ヘクソンの足は、ギリギリのところまで達也の顎を掠めて空振った。

達也はそのままヘクソンと距離を取ろうとして、

寸前で踏み留まって、むしろ距離を詰めながら掌底を繰り出した。今まで魔法を使っていた者が近接戦闘に切り替えたとなれば、通常は何かしら驚きの反応を見せるものだが、ヘクソンは顔色一つ変えずに両手を構えて応戦した。

互いの拳が間髪入れずに突き出され、目まぐるしく体と攻守が入れ替わる。単なる打撃の応酬ではなく、上下左右から襲い掛かる拳や手刀や掌しやうを躲し、掴み取り、振り払う。

いくらテレパシー能力で先読みできたとしても、そもそも体がついていかなければ意味が無い。つまりそれだけヘクソンの格闘術が卓越したものであり、八雲に鍛えられた体術を駆使する達也と対等に渡り合えることからそのレベルの高さが窺える。

「——アクシヨン・キック！」

と、頭上から声が聞こえたその瞬間、ヘクソンが指を折り畳んだ猫の手で達也の拳を受け止めた。ぼよんっ、と気の抜けた音と共に達也の拳が跳ね返され、その隙にヘクソンは大きく跳び退いてその場から離れた。

そして次の瞬間、脚を突き出したしんのすけが猛スピードでヘクソンのいた場所に落下し、地面に衝突したのと同時に大量の土埃を舞い上がらせた。芝生で覆われた地面は大きく掘り返され、その中心でしんのすけがヘクソンの蹴りによるダメージを感じさせない自然な立ち姿を見せている。

「うーん、当たると思ったんだけどなあ」

2対1という数的有利があるにも拘わらず、達也としんのすけはヘクソンを捉えることができずにいた。今のところはこちらも大したダメージを負わずに済んでいるが、何かしら決定打が無ければこのままジリ貧となってしまうのは明らかだ。

実戦でここまで焦りを覚えたのは本当に久し振りだ、と達也が顔をしかめた、

まさに、そのときだった。

「おっ?」

「!」
「!」

突如頭上から聞こえたヘリのローター音に、達也とヘクソン、そしてしんのすけの3人が一斉に空を見上げた。

スタジアムの天井は開けているため暮れかけた空がよく見渡せるが、どこに目を凝らしてもヘリの姿はどこにも無かった。しかし達也は中にいるであろうほのかのステルス魔法によるものと即座に思い至り、そしてヘクソンはそんな達也の思考を読んでそれを知った。そんなわけで、しんのすけだけがいつまでも首を傾げたままだった。

と、そんな（普通の人間の目から見たら）何も無い空に、豆粒ほどの大きさの人影がいきなりパツと姿を現した。ほのかのステルス魔法の範囲から外れたその人影は、重力加速度に従ってみるみる近づいていき、次第にその詳細を明らかにしていった。

へりの存在については最後まで分からなかったしんのすけだが、その人影の正体については、よく知った仲だったこともあつてかなり早い段階で気がついた。

「おおっ！ 深雪ちゃんー！」

しんのすけが声をあげて大きく手を振る中、達也は空から下りてくる（というより落ちてくる）妹に気を配りながらもヘクソンに注意を向けていた。しかしヘクソンは隙だらけなしんのすけに攻撃を仕掛けることも無く、突然の乱入者である美少女をただジッと見つめていた。

そうして3人が見つめる中、長い黒髪をはためかせながら落ちていた深雪だが、スタジアムの3階席辺りの高度に差し掛かったところで途端に落下速度がガクンと緩やかになった。おそらく彼女が自身に減速魔法を掛けたためであり、パラシュートも何も身につけず生身でへりから跳び下りた彼女は、妖精かと思紛うほどに優雅な所作でフワリとスタジアムに下り立った。

「深雪ちゃん、なんでここに!?! とうか、どつから来たの!?!」

「ほのかの魔法で見えないけど、頭上にへりが停まつてるのよ。——お兄様、正面の敵は代々木くんが退けたようです。私達はしんちゃんと代々木くんを連れて横浜を脱出します」

「ああ、頼む」

スタジアムの上空から下り立つという派手な登場をした深雪だが、しんのすけの質問に答え、達也に報告をする彼女の姿は、今ここが戦場になっていることすら知らないかのように平時のままだった。

それこそ、金髪碧眼の超能力者など最初から眼中に無いかのように。

「さてと、お待たせして申し訳ありません。あなたがヘクソンですね」
しかし実際はそんなことは無く、深雪はしつかりとヘクソンを見据えて彼へと呼び掛けた。しかし口元に笑みを携えるお嬢様然とした彼女の姿は、やはり敵を目の前にしたのものとしてはどこまでも相応しくない。

ともすれば事の状況が分かっていないと揶揄されても仕方のない

深雪に対し、しかし彼女に鋭い視線を向けるヘクソンの表情には嘲りの感情は一切無かった。

「その女、——何者だ？」

「あら、おかしなことを訊くのですね。超能力があるのですから、それで私の心を読み取れば良いではないですか」

優雅な微笑みを崩さぬままそう口にする深雪だが、その目には明らかに自信の感情が浮かんでいた。まるで『自分の感情を読み取ってみろ』と挑発するかのようであり、そしてヘクソンが自分の感情を読むことができないと確信しているかのようだった。

そしてそんな態度の深雪を前に、ヘクソンはフツと笑みを漏らした。

しかしそれでもなお、彼の表情に嘲りは無かった。

「過去に私が手を組んでいた或る女は、自身の心に鍵を掛けることで私に思考を読ませなかった。どうやらおまえも、それと同じことができるようだな」

「その口振りからすると、どうやら私の心は読めていないようですね。それでは自己紹介させていただきます。私は司波深雪、こちらの司波達也の妹であり、——あなたの『天敵』です」

「天敵、か。随分と大きく出たな」

見え見えの挑発に対してヘクソンはそれだけ言うと、右足を下げて半身の構えを取った。一方深雪は臨戦態勢の彼に対し、特に構えを取ることなく自然体で立ったままだ。

まるで西部劇でガンマンが対峙しているかのような、一触即発の張り詰めた緊張感が2人を包み込む。それを見守るのは、深雪の後ろに立つ達也としのすけ、そして頭上でローター音を響かせるステルス状態のヘリコプター。

そんな状況下でヘクソンが選択した行動は、——逃亡だった。

ヘクソンにとって感情を読み取れない相手との戦闘は、実のところ初めてではなかった。先程彼が話した『或る女』と出会うよりも以前にも、そして出会った以後にも、そういった者というのは少ないながらも存在していた。しかし彼は超能力者であると同時に格闘術の

達人でもあり、純粋な戦闘力によってそういった者との戦闘にも勝利を収めてきていた。

しかし目の前にいる少女は、彼にとって初めての“魔法師”だった。達也のように思考した瞬間に魔法効果が即座に分かるならまだしも、そうでない状態で初見の相手とまともに戦おうと思うほどヘクソンも無謀ではない。

よってヘクソンはまったくの予備動作無しで、一番近くにある出口に向かって駆け出し――

「逃がしませんよ」

「――ぐああああああああああああああっ！」

その瞬間、ヘクソンの頭に痛みが走った。

いや、もはや“痛み”だと認識することすらできなかった。自身の脳を何物かが食い散らかし、体をブクブクに膨れ上がらせて中から頭蓋骨を粉碎し、そのまま皮膚を食い破って外へと飛び出していくかのような錯覚に、彼はまともに動くこともできずに地面に倒れ込んで蹲った。

しかしヘクソン自身は、自分が地面に倒れたと認識するのにすら時間を要した。あまりにも強い頭痛が超能力どころか一般的な感覚機能すら阻害し、自分が立っているのか座っているのかすら今の彼には咄嗟に判断ができなかった。

「おおっ！ 急にどうしたの!?!」

しんのすけが驚くのも無理はない。彼の目から見れば、ヘクソンがいきなり地面に倒れて苦しみ出したようにしか見えないのだから。目を凝らしても彼が何かしらの怪我を負った様子は無いし、彼に何かしらの攻撃が加えられている様子は無い。

一方達也は、一切驚いた様子も無くその光景を眺めていた。まるで、最初からそうなることが分かっていたかのよう。

「き、貴様……！ 私に何をした……!」

「私はあなたに何もしていませんよ。あなたが勝手にそうなっている

だけです。——お兄様、この者はどう致しますか?」

「とりあえず無力化し、後詰め部隊に引き継ぐよう指示を受けてる」
「了解です」

深雪はそう返事をする、その右手をヘクソンへと向けた。

その瞬間、ヘクソンの頭が小刻みに揺れた。脳を揺さぶられたことで軽い脳震盪を起こした彼は、先程まで騒いでいたのが嘘のようにプツリと悲鳴を途切れさせ、そして無抵抗にドサリと突っ伏したまま動かなくなった。

しんのすけが恐る恐るヘクソンに近づいて確認するが、呼吸音を確認したことでホッと胸を撫で下ろした様子だった。

「問題なく魔法は発動したようだな。さすが深雪だ」

「いえ、お兄様が設計なさった魔法式の賜物でございます」

「えっ、今の深雪ちゃんがやったの!?! どうやって!?!」

困惑しきりのしんのすけに対し、深雪がチラリと達也に視線を遣り、達也が小さく頷いたことで深雪が口を開いた。

「奴が人の心を自動的に読み取る能力があることを知ったお兄様は、まず『心を読まれなくする魔法』の開発をお始めになったの。さつき奴は『心に鍵を掛ける』という表現をしていたけど、私の感覚としては『心全体を包み込んで蓋をする』という感覚の方が近いかしら」
「ほーほー。だからヘクソンは深雪ちゃんの心を読めなかったわけですか。んで、なんでそれで苦しむの?」

「奴は人の心を自動的に読み取る。でもそれは裏を返せば、能力のオンオフができないということになるわ。だからお兄様は『その能力を逆手に取ってヘクソンにダメージを与えられないか』とお考えになったの」

「どうやって?」

しんのすけの簡潔な問い掛けに、深雪は口元に笑みを携えて答えた。

「やってることは、しんちゃんが鑑別所で奴と戦ったときと同じよ。情報量の多い煩雑な思考をぶつけければ、奴は激しい頭痛に苛まれるのでしょうか? だからお兄様は、さつき説明した『心を読めなくする蓋

“自体に膨大な情報を貼りつける方法を考案なさったの”

「そうすれば奴は勝手に自滅する、と踏んでな。——とはいえ、今説明したどちらの魔法も、俺1人では今日までの完成には間に合わなかっただろうな。魔法式を組み上げられたのも、結局は俺の仮説を聞いた深雪が感覚的に魔法を完成させてくれたおかげだしな」

「そんなことはありません！ お兄様の的確なご説明があつてこそです！ それに私の稚拙な魔法を再現性の高い魔法式に構築したことは、間違いなくお兄様の功績でございます！」

「“再現性の高い”と言われてもな……。精神干涉魔法の高い適正と、膨大な情報量を操るだけの常人離れた魔法構築規模が無ければ成立しない魔法だ。今のところは、実質深雪専用だよ」

「ふふ、それではこの魔法は、私とお兄様の“共同作業”で出来た魔法ということ——」

「達也くん、深雪ちゃん、イチヤイチャしてる場合じゃないでしょ」

呆れ果てた表情で（ヘルメットをしているので傍目には分からないが）しんのすけがツツコむと、深雪は顔を真っ赤にして慌てふためき、達也は若干ばつが悪そうに口元を引き結んだ。

そうしていると、安全が確保されたと判断したのか、頭上のヘリから深雪と同じように何人かが下りてくるのが見えた。そしてそれとほぼ同時に、陳が入ってきたのと同じドアからコージローがグラウンドに入ってくるのも見える。

その間、地面に寝転がったまま気絶している陳チエンとヘクソンは、ピクリとも動かず起き上がる気配すら無かった。

*

*

*

十師族の直系で義勇軍に合流しているという点では同じでも、克人と将輝では軍との関わり方が違った。克人は積極的に主導権を握って士気を高めることに重点を置いているが、将輝は指揮を執ることなくむしろ義勇兵をかばうように前線に出ているのが特徴である。

そうして侵略兵を迎撃していた将輝達だが、ここに来て足止めを余

儀なくされていた。

彼らの目の前にあるのは、横浜中華街の北門である玄武門。

この中華街は戦後の再開発によって、ビルが壁の役目を果たして東西南北の門からしか出入りできないようになっていた。他国の地で自分達だけで集まって要塞化するというのは将輝個人としては少し気に入らないが、普段ならばそれにケチをつけるつもりは無かった。しかし侵攻軍がこの中華街に逃げ込み、そして門が内側から固く閉ざされているとなれば、話は別だ。

「門を開ける！ さもなくば、侵略者と内通していたものと見なす！」玄武門の前に立つ将輝が、勇ましい声で門の中へと呼び掛けた。ちなみに他の義勇兵は、彼の希望によってここからは見えない場所で待機している。

いつ銃弾が、はたまた魔法か榴弾が飛んでくるか分からず、もしかしたら自分の防御力を超えるものが降り掛かってくるかもしれない。そんな状況であるため、彼の表情は自然と緊張で強張っていった。いつでも魔法を発動できる状態にしておき、目の前の変化を見逃さないために意識を集中して観察する。

と、そのとき、軋むような音をたてて門が開き始めた。

その光景に、門を開けると要求していた将輝は目を丸くして驚いた。たとえ敵と内通していなくても、門の開閉は侵攻軍が真つ先に掌握しているはずであり、将輝の要求に素直に応じるとは思っていなかったのである。

そして開かれた門の向こう側から出てきたのは、将輝よりも6歳くらいは年上に見える、貴公子のような雰囲気漂わせる青年を先頭とした集団だった。

そして彼らの傍らには、中華街に逃げ込んだ兵士が拘束された姿で付き従っていた。

「周公瑾しゅうこうきんと申します」

「……周公瑾？」

青年の名乗りに将輝は訝しげに首を傾げ、そして青年はそんな反応に慣れているらしく「本名ですよ」と困ったような笑みを浮かべてみ

せた。

それを見た将輝が、慌てた様子で頭を下げた。

「失礼した。一条将輝だ」

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます。——私達は侵略者とは関係していません。むしろ被害者です。それをご理解いただくために、協力させていただきました」

周はあくまでその低姿勢を崩すことなく、一点の曇りも無い誠実な態度でそう言った。

だからこそ、将輝は彼に疑念を抱いた。

彼の言っていることは、一見すると理に適っているように思える。門を閉じたことについても、敵を油断させるためだとすれば納得もできる。

しかしここで問題となるのは、どうやって武装した兵士を捕らえたか、だ。とはいえ、今の将輝に民間人を取り調べる権限は無い。一般的な見方に則れば民間人の協力によって戦闘が終結した状況であり、これ以上彼を問い質す正当な理由が無い。

将輝は周青年に礼を述べ、他の義勇兵と協力して捕縛された兵士を引き取った。

そうして将輝が、兵士を連行するためにその場を離れようとした、まさに、そのとき、

どがしやああああんっ——！

「な、何だ!?!」

「——!」

突然門の中から大きな音が鳴り、全員が一斉にそちらへと振り向いた。反射的にCADを構えて戦闘態勢に入る将輝の傍で、周青年が冷静で不敵な笑みの仮面を無意識に剥がして目を丸くしているのが印象的だった。しかしそれも一瞬のことで、次の瞬間には元の冷静な微笑みに戻っているのだから大したものだ。

と、1人の男が血相を変えて門の外へと飛び出し、キョロキョロと辺りを見渡して周を見つけると一直線に駆け寄ってきた。

「あ、あの、周先生」

将輝が目の前にいるというのに小声で耳打ちしようとするその男は、肩で息を切らす勢いでやって来た割にはどうも歯切れが悪かった。

「どうしたんですか、早く話さない」

「あの、それが、先程の音は、空から人間が落ちてきた音のようで」「空から人間が落ちてきた!？」

あまりに突拍子の無い台詞に、思わず将輝が驚きの声をあげた。

男はチラリと将輝に目を遣るが、すぐに周へと視線を戻して話を続ける。

「どうやら野球スタジアムの方から飛んできたらしくて、白い甲冑を着た大男なんですけど……」

「——ほう、それで？」

「そいつが落ちてきたのが、まさに周先生の店です……」
「……………」

冷静な微笑みのまま、周青年は固まった。

「他の店は何とも無いんですが、周先生の店だけ屋根から1階の床まで見事にぶち抜かれてまして……」

「……………」

「あの惨状じゃ、しばらく営業は無理じゃないかと……」

「……………」

笑顔のまま動かない周青年と、気まずげに佇む男。

そしてその2人の間で視線を行ったり来たりさせる、何なら先程よりも緊迫した表情を浮かべる将輝。

やがて周青年は、その動かない笑みを将輝へと向け、

「……少々お待ちいただけますか？ 今、その馬鹿野郎を連れてまいりますので」

「あ、ああ、分かった」

将輝はただ、頷くことしかできなかった。

第70話 「横浜事変が終わったゾ」

「それでは、我々はこれで失礼します」

スタジアムに軍服姿の男達がやって来たのは、戦闘が終結して数分が経過した頃だった。或る程度の事情は聞いているのか、それとも任務最優先で不干渉を貫いているのか、魔法科高校の制服姿の深雪達、そしてアクシヨン仮面の格好をしているしんのすけには目もくれず、地面に転がる陳チエンとヘクソンを抱えると最低限の挨拶を残して足早にその場を去っていった。

そうして彼らがグラウンドを出ていくまでの間、しんのすけはヘクソンのことをただ黙ってジッと見つめるのみだった。その表情からは感情が窺えず、彼が何を思っただけでそうしていたのかは分からない。

しかし全員がそれを見ていたわけではなく、コージローはヘリから下りてきたエリカとレオと会話を交わっていた。その右手には、呂リュウとの戦闘でグニヤリとひしゃげた刀が握られている。

「ごめん、千葉さん。千葉さんから借りた武器なんだけど、使ってたら壊れちゃったんだよね」

「ああ、うん。貸したというかあげたようなものだから、それは別に大丈夫よ。……普通は曲がるどころか、刃はこぼ毀れもしない代物のはずなんだけど」

「つーか、ヘリからチラッと見えたんだけど、大の大人を漫画みたいに特大アーチでブツ飛ばしてなかったか？ おまえ、本当に魔法師じゃないんだよね？」

「何を言ってるの、西城くん。当たり前じゃないか」

と、会話に花が咲きそうなそのタイミングで、達也が「みんな」と呼び掛けた。

全員の視線が、ムーバル・スーツとヘルメットで全身黒づくめの達也へと集中する。

「しんのすけ達とも合流したことだし、皆はこのままヘリで横浜を脱出してくれ」

「おっ？ 達也くんは？」

真つ先にそう問い掛けたのは、やはりというべきか、しんのすけだった。

「俺はまだ『用事』がある。——何、心配はいらないさ。上空から見た通り、この街での戦闘はほとんど終結している。ちよつとした『野暮用』みたいなものだ」

「行きましょう、しんちゃん。みんなが横浜を無事に脱出してくれた方が、お兄様もきつとご安心なさると思うわよ」

達也の言葉に続いて、まるで小さな子供を説得するような口調で深雪がそう呼び掛けた。

しんのすけは少しの間、トレードマークである太い眉を寄せて考え込む素振りを見せていたが、やがて決心したように表情を引き締めて達也へと向き直る。

「達也くん、ちゃんと帰ってくるんだぞ」

「ああ、分かっているさ。——レオとエリカも、またな」

「おう！ しんのすけは俺達が責任持って連れていくから安心しろ」

「じゃあね、達也くん。また学校でね」

しんのすけの言葉に達也が軽い口調で返し、レオとエリカもそれに合わせて笑顔で声を掛ける。それはまさしく、普段学校の最寄り駅で友人達と別れるときの遣り取りに酷似していた。

そんな彼らの後ろで、深雪は無言で兄に向けて深々と腰を折って頭を下げ、そして上空を見上げると軽く右手を挙げて合図を出した。

それに合わせて、何も無い（ように見える）空からロープが下りてきた。ロープの端は空中で途切れており、その辺りで陽炎が揺らめいている。深雪・レオ・エリカは既に体験したことだが、初めてそれを見るしんのすけとコージローは小さく「おおっ」と感嘆の声を漏らした。

「よし、さっさとヘリに上がろうぜ」

「ほっほーい。——とところで、何か忘れてるような……」

「野原くんも？ 僕もさっつきから、何かモヤモヤしてる感覚なんだよね」

しんのすけとコージローが揃って首を傾げていた、そのとき、

「ちよ、ちよつとお待ちください！」

バンツ、とグラウンドのドアが勢いよく開かれ、そこから黒髪黒スーツ黒サングラスの大柄な男性・黒磯が姿を現した。彼の体はあちこちが土埃で汚れ、スーツも所々がほつれて草臥くたびれているのが分かった。

そして何より、普段は冷静沈着で感情をほとんど表に出さない彼が、しんのすけを見るや心底安心したという様子で表情を崩し、ほとんど泣きそうになりながら駆け寄ってきていた。

「ご無事で何よりです……！　論文コンペの会場で逃げられ、ゲリラ兵に追い回されながら街中を探していたときはどうなるかと……！」

「ああ、ごめん黒磯さん、コツテリ忘れてたゾ」

「それを言うなら、すっかり」だよ、野原くん」

「わ、忘れ——!?!」

必死の思いでここまで辿り着いた自分に対してあんまりな一言に、黒磯はドシヤリとその場に膝から崩れ落ちていった。

それを後ろから眺めていたエリカ達は、同情を隠すことができなかった。

*

*

*

克人が指揮官としての役割を果たす義勇軍は、既に戦闘状態と呼べる状況ではなくなっていた。先程まで矛を交えていた敵は一部の足止め要員を除いて逃げてしまっており、そしてその足止め要員も生き残りは全て降伏している。

と、そんな状況下で、克人の隣に待る伝令役の青年（おそらく年齢は克人とそう変わらない）が、魔法協会支部を経由した情報を口にした。

「敵戦闘艦が離岸した模様です！」

その報告に、克人は意外感で軽く眉を上げた。こうして視界に収まる範囲内でさえ、敵兵の撤退は完了していないように見えたからだ。

しかし現在この横浜は、北からは鶴見の大隊、南からはようやく到

着した藤沢の部隊、西からは保土ヶ谷の駐留部隊とこれに合流した藤沢の支隊と、3方向から一斉に攻撃を仕掛けられている。さすがにこの猛攻には耐えきれなかったようで、敵艦は上陸部隊の収容を途中で切り上げ、慌てた様子で出港しているとのことだった。

「敵は残存兵力の収容を諦めたようです。掃討戦に移りますか？」

そう問い掛ける伝令の目は、明らかに期待で輝いていた。苦戦を強いられ、少なくない仲間を犠牲にした直後とあつては、復讐に心を滾らせたとしても無理はないだろう。

だからこそ克人は、力強く首を横に振って答えた。

「それは我々の為すべきことではない。後は国防軍に任せるとしよう」

「——分かりました！」

その青年の口から、義勇軍全体に戦闘停止が触れられた。

たとえその行動が、心から納得したわけではなかったとしても。

敵艦が出港しようとするその光景は、瑞穂埠頭に向かう途中のエリアで侵略軍の迎撃に当たっていた柳大尉も確認していた。

当然、それを見逃す彼ではない。逃げ遅れた敵兵を後詰め部隊に任せ、自分達は直接敵艦を攻撃、航行能力を破壊する、と即座に周りの部下に指示を出した。とはいえ敵艦に直接乗り込んで内部から制圧することはせず、指向性気化爆弾のミサイルや貫通力増幅ライフルなどで遠距離から攻撃するのが狙いである。

しかし彼らが今まさに飛び立とうとしたそのとき、通信機から制止の声が掛かった。

『柳大尉、敵艦に対する直接攻撃は控えてください』

「……………どういふことだ、藤林？」

『敵艦はヒドラジン燃料電池を使用しています。東京湾内で船体を破損させては、水産物に対する影響が大きすぎます』

それを聞いた柳は、小さく舌打ちをした。

なぜそんなことが分かる、とは問わない。1キロ以上の距離を置い

て微弱な脳波パターンの違いから普通の魔法師とジェネレーターを見分けられる藤林にとつて、放射性隔壁も無い容器に大量蓄積された燃料の分子構造を特定するのはそれほど難しくくない。

と、ここで通信の相手が藤林から風間隊長に変わった。

『退け、柳。敵残存兵力の掃討は鶴見と藤沢の部隊に任せ、一旦帰投しろ』

「了解です」

「一旦」ということは、隊長の命令は作戦終了を意味するものではない。

情報の少ない文章からそれを読み取った柳は、迷う素振りも見せずに移動本部への帰投を部下に命じた。

*

*

*

東京湾を脱出し、相模灘さがみなだを南下中の大亜連合所属偽装揚陸艦の艦内は、安堵感に包まれていた。

「やはり日本軍は攻撃してきませんでしたね」

「ふん、奴らにそんな度胸があるものか」

「ヒドラジンの流出を恐れたのでは？」

「同じことだ。今更環境保護などという偽善に囚われているから、みすみす敵の撤退を許すことになる」

艦長とその直属の部下が、そのような会話を交わしていた。自分達の状況を「敗走」と言わない辺りに、彼らの軍人としての心理が見え隠れしている。

彼らは、たとえ人工衛星や成層圏プラットフォームなど何らかの監視手段で追跡されていたとしても、自分達が攻撃を受けるなどとは微塵も考えていなかった。それはけっして油断などではなく、その気があるならとうに仕掛けているのがセオリーであるし、十キロ四方に敵の影も形も無く艦艇や航空機による追跡も行われていないことから当然の結論だった。

「——憶えておれよ。この屈辱は倍にして返してやる」

だからこそ、帰還を既定の事実として報復を誓う気の早い士官も、1人や2人ではなかった。

そうした剣呑な雰囲気に含まれながら、揚陸艦は大島の東を通過しようとしていた。

そしてその瞬間、艦内に警報が鳴り響いた。

CADの照準補助システムにロックオンされたことを知らせるものだった。

「何事——」

艦長の問い掛けは、最後まで紡がれることは無かった。

甲板上に生じた灼熱の光球が、空気を加熱して衝撃波を発生させ、甲板を溶かして金属蒸気の噴流を生み出し、ヒドラジンを含めた全ての可燃物を一瞬で完全燃焼させ、巨大な炎の塊と化して艦を呑み込んだ。

そしてそこには、何も残らなかった。

ベイヒルズタワーの屋上には、現在4人の姿があった。

独立魔装大隊隊長である風間少佐、そしてその部下である真田大尉と藤林少尉。

そしてムーバル・スーツに身を包んだ、達也だった。

「撃沈しました」

バイザーにリンクさせた成層圏監視カメラからの映像を確認し、達也が短くそう言い放った。先程まで構えていた大型ライフルの形状をしたCADの銃身を下ろし、知らず緊張していた体を弛緩させるように小さく息を吐いた。

そのCADの名は、「サード・アイ」。長距離微細精密照準補助機能を強化しており、成層圏プラットフォームや低軌道衛星とリンクして映像を受信する機能も備わっている、達也の「戦略魔法兵器」には欠かせないアイテムだ。

そうして敵艦に向かって撃ち出されたその魔法の名は、「マテリアル・バースト」。

達也が得意とする分解魔法の究極形であり、その効果は『質量をエネルギーに分解する』という単純明快なもの。しかしその威力は絶大で、質量を直接エネルギーに変換するため対消滅反応のようにニュートリノ発生によるエネルギーロスが起こることも無く、アインシュタイン公式の通りに質量を光速定数の二乗の倍率でエネルギーに変換される。

今回、質量を分解するターゲットに選んだのは、船体のヒドラジン燃料タンクの直上にある甲板に付着した水滴だった。せいぜい50ミリグラム程度のごく微量の物体だが、これを質量分解することによって発生する熱量は、TNT換算にしておよそ1キロトン。

揚陸艦を撃沈するには、あまりにも充分すぎる威力である。

「モニターを確認。津波の心配はありません」

「約80キロの距離で50立方ミリメートルの水滴を精密照準、サード・アイ」は所定の性能を發揮しました」

藤林が現場の状況を伝え、真田が(若干得意げな表情を隠せずに)風間に報告する。今回が「マテリアル・バースト」を実戦で使用する初めての機会だったが、何ら滞りなく状況は終了した。

「苦勞だった」
「ハッ」

風間の労いに、達也は敬礼で応えた。

その目には、揚陸艦を丸々呑み込む大爆発を引き起こしたことへの気負いは一切無かった。

*

*

*

戦闘終了が宣言され、国防軍の兵士達によって入口の瓦礫が撤去されたことで、駅の地下シェルターに閉じ込められた避難者がようやく救出された。日もとづくに暮れた夜遅くの出来事であり、その頃にはサキの魔法によって眠っていた人々もほとんど起きた後だったため、結果的にサキが国防軍に目をつけられる事態は避けられた。

中に潜入していたゲリラ兵が国防軍によって連行され、疲れ果てた

様子の市民達が国防軍に先導されて地下通路を歩いていく。その中には魔法科高校の生徒や教師、さらには魔法大学の教授や有力企業の重役といった顔触れも並んでいる。

そしてそんな行列の最後尾に、あい・ポー・サキの3人が並んで歩いていた。

「何だかとっても長く寝ていた気分ですわね。具体的には2ヶ月くらい」

「あいちゃん、そういう発言はいけない」

「ごめんね、2人共。私のせいで……」

「サキちゃんは悪くありませんわ。下手に刺激したゲリラ兵達が悪いのです」

肩を落としてしよげているサキを慰めるあいの横で、ポーが携帯端末の画面を覗き込んでいた。普段の彼の言動からは想像もできないほどに指を忙しなく動かし、恐ろしいスピードで自分達が閉じ込められていた間の情報を収集しているようだった。

そしてその結果、例の騒動が彼らの知るところとなった。

「あいちゃん、これ見て」

「何かしら、ポーちゃん？ —— 『各地でゲリラ兵が暴れる非常事態の中で、特撮ヒーローを名乗る人物が防災無線を乗っ取ってゲリラ兵を挑発する悪質な悪戯が発生』……」

「えっ!? これって、もしかして——」

「おそろく、そうでしょうね」

驚愕で目を丸くするサキに対し、あいは軽く肩を竦めるだけで反応がいまいち薄かった。

「あいちゃん、もしかして予想してた？」

「……しん様の性格と『主人公補正』を考えれば、こちらの思惑通り素直に横浜を脱出してくれるとは思ってませんでしたわ。さすがにアクション仮面を自称してゲリラ兵に呼び掛けるなんて派手な真似をするのは予想外でしたけど」

「でも、黒磯さんも一緒にいたんでしょ？ 止めなかったのかな？」

「逃げられたんでしょうね。——黒磯の処遇については、追々決める

ことにしましょ」

溜息混じりでそう答えるあいの声色には、明らかに黒磯に対する怒りが滲み出ていた。しんのすけ単体でも大変なのにコージローも加わってしまったては、さすがに黒磯といえども相手が悪かったと言わざるを得ないのだが、長年彼を秘書兼運転手として扱き使ってきたあいには関係無かった。

と、ここであいがパンと手を叩いて話題を変えた。

「さてと、せっかくですから論文コンペの話をしましようか。そのために今日は横浜まで来たのですから」

「そういえば、結局第三高校は発表できなかつたんだよね。カーディナル・ジョージの発表が気になるけど、それを抜きにして考えたらやっぱり第一高校が最有力じゃない?」

「僕もそう思う。あの核融合炉のシステムは画期的、実現性も高いと思う」

「そうね。確かに私が見ても、第一高校の発表は頭一つ抜けてたと思うわ。——もつとも、司波達也はまだ何か隠し持っていそうでしたけど」

あいが付け加えたその台詞に、サキが「えっ?」と疑問の声をあげる。

一方ポーは、平時の無表情のままだった。

「あの発表で提唱された核融合炉のシステムは、確かに実現性は高いですが安定性という点ではどうしても未知数なところがありますわ。そうなると仮にアレを建設するとしたら、安全を考慮して住民の少ない場所、例えば離島とか海上に造るのが一番反対が少ないでしょうね」

「……それで?」

「遠隔地に送電するロスを考えれば、核融合炉で得たエネルギーを直接送るよりも、別の燃料に変換するスキームを採用する方が効率的でしょう。つまりあの核融合炉はそれ単体の完成が目標ではなく、それを組み込んだシステム全体の完成が最終目標だと考えられるの」

「高校生の論文コンペだよ? そこまで現実的なことを考えると」

えないけど」

「代表の3人はともかくとして、司波達也はそういうことも含めて考えるでしょうね。彼はそういう人物ですもの。——ボーちゃん、あなたもそう思うでしょ？」

ふいに話を振ったあいに対し、ボーは間髪入れずに頷いて答えた。

「第一高校の発表を聞いてて、僕は『市原さん達はこの研究を通して、魔法師の社会的立場を向上させようとしている』と感じた。だとしたら、単純に核融合炉を造るだけじゃなくて、それを実際に運用する方法まで視野に入っているはず」

「魔法師の社会的立場、かあ……。私はよく分からなかったなあ」

サキの正直な感想に、あいが思わず笑みを漏らし、そしてこう続けた。

「ふふ、ボーちゃんだからこそ分かることがあるのでしょう。——」

汎用的飛行魔法”の魔法式を、完成まで後1歩のところまでトールラス・シルバーにかつ攫われたボーちゃんだからこそ、ね」

「……………」

ボーはあいの言葉に答えず、鋭い視線を彼女に向けるのみに留めた。

そんな彼の、珍しく感情を露わにするような行動に、あいはますますその笑みを深くした。

「そんなに怒らないでくださいいな。ちゃんと私は、ボーちゃんが優秀な技術者だと知ってますから。まあ、しん様が使うCADの魔法とか、さつきしん様に渡した魔法補助スーツとか、多少趣味に走り過ぎるところがある気はしますが——」

「特撮ヒーローは男のロマン。再現したいと思うのが人情」

「…………まあ、”好きこそ物の上手なれ”という言葉もありますしね」

半ば諦めるような口調で、あいはこの話題を切り上げた。

多少思わないところも無いではないが、ボーにはこのまましんのすけを裏から支える立場でいてもらいたいのは彼女の本心だった。

おそらくこれから、しんのすけを取り巻く”物語”は大きく動いていくことになるのだから。

*

*

*

時刻は午後12時を回り、日付は10月31日となった。世間ではハロウインを連想させるこの日だが、キリスト教徒ではない達也にとっては特にこれといった感想は無い。

彼が今いるのは、対馬要塞だ。今から35年前の第三次世界大戦の後期、大亜連合高麗自治区軍の襲撃を受け、住民の7割が殺されるとい痛ましい事件が起きた。相手国を無闇に刺激しないためという理由で国境付近にも拘わらず最低限の守備隊しか置かなかつたためであり、それを補うかのように政府は対馬奪還後この島を要塞化した。

大規模な軍港、堅固な防壁、最新鋭の対空対艦兵装を備えたその基地に、達也を始めとした独立魔装大隊の面々が揃っていた。

「予想通り、敵海軍が出撃準備に入っている。——これを見てくれ」
風間の言葉と共に壁一面の大型ディスプレイが映し出したのは、衛星から撮ったと思われる写真だった。そこには2桁に上る大型艦船と、その2倍にはなるであろう駆逐艦や水雷艇の艦隊が出撃準備に取り掛かっている。

「今から5分前の写真だ。おそらく、遅くとも2時間後には出撃するだろう。動員規模から見ると一時的な攻撃ではなく、北部九州、山陰、北陸のいずれかを占領する意図があると思われる」

「本格的に戦争を始めるつもりでしょうか？」

おそらくここに配属されたばかりであろう若い少尉から疑問の声があがるが、彼がそう解釈しても仕方のないことだった。

大規模な海軍兵力の動員は、それが非戦闘目的であれば、たとえ領海内だけのものであっても周辺国に通告あるいは国際的に公表するのが慣例となっている。ましてや今回は、横浜に侵攻を仕掛けて数時間後というタイミングだ。そんな状況で相手が出撃（と見なされても仕方のない行動）の準備をしているのを、ただ黙って成り行きを見守るだけなどというのは有り得ない。

「既に動員を完了している敵艦隊に対し、残念ながら我が海軍は昨日より動員を開始したところだ。現状では敵の海上兵力に、陸と空の兵力で対抗するしかない」

このままでは、苦戦は免れない。

言外に示されたその意図に、反論する者はいなかった。

「そこでこれを打破すべく、我が独立魔装大隊は『戦略魔法兵器』を投入する。本件はすでに統合幕僚会議の認可を受けている作戦である」

風間の言葉に要塞のスタッフが期待を込めた目を彼へと向け、独立魔装大隊のメンバーは心配そうな目を達也へと向ける。

しかし当の本人——ムーバル・スーツとヘルメットとマスクという出で立ちをしている達也は、周りの人間に一切の感情を読み取らせない平然とした佇まいで、風間の説明する作戦内容を半分聞き流していた。

けっして、達也が不真面目だからではない。

彼の役目は『戦略魔法兵器』による攻撃だけであり、そしてそれだけ理解していれば充分だった。

達也はムーバル・スーツを身につけたまま、第一観測室の全天スクリーンの真ん中に立った。これは衛星の映像を三次元処理することで、任意の角度から敵陣の様子を観察することができるようにしたものだ。今は達也の希望により、水平距離100メートル、海面上30メートルの高さから見下ろした映像を映し出している。

そんな彼の手には、数時間前にも使用した『サード・アイ』が握られていた。

「大黒特尉、準備は良いですか？」

『準備完了。衛星とのリンクも良好です』

真田からの問い掛けに、ヘルメットによつて変調された声で達也が答える。

「『マテリアル・バースト』、発動準備」

風間の声に、達也はサード・アイを構えた。

その銃口の先にあるのは、鎮海軍港にある巨済島要塞コジエトの向こう側に集結した大亜連合艦隊。3次元処理された衛星映像を手掛かりに、艦隊の中央に位置する戦艦の旗艦に翻る戦闘旗に照準エイドスを合わせ、情報体へとアクセスする。

『準備完了』

「マテリアル・バースト、発動」

『マテリアル・バースト、発動します』

風間の命令を復唱し、達也はサード・アイの引き金を引いた。

対馬要塞の中から海峡を越えて、鎮海軍港へ。

今回のターゲットは、軍港の奥に停泊する旗艦になびく戦闘旗。

その質量、目算でおよそ1キロ。

アインシュタイン公式に基づいて変換されるその熱量は、TNT換算で約20メガトン。

その瞬間、旗艦の上に、太陽が生まれた。

計測不能の高熱が船体の金属を蒸発させて重金属の蒸気をばら撒き、急激に膨張した空気は音速を超え、熱線と衝撃波と金属蒸気の噴流が、艦隊と港湾施設に容赦無く襲い掛かった。

近くのものとは人と物の区別無く蒸発し、少し離れた人や物は爆発して焼失し、海面は高熱に焙られて水蒸気爆発を引き起こした。竜巻と津波が生じて、対岸の巨済島要塞を呑み込んだ。巨済島が堤防の役割を果たさなければ、対馬や北部九州沿岸も津波の被害を免れなかっただろう。

破壊は鎮海軍港に留まらず、衝撃波は周りの軍事施設に及んだ。不幸中の幸いだったのは、鎮海軍港周辺に民間人の居住する都市が存在しなかったことだろうか。

灼熱の暴虐が収まった頃、そこには何も残っていなかった。

「敵の状況は？」

「……敵艦隊は全滅、いや、消滅しました。攻勢を掛けますか？」

「不要だ。以降の作戦を省略し、作戦行動を終了する」

「全員、帰投準備に入れ！」

衛星からの映像に、対馬要塞のスタッフは1人残らず息を呑んだ。若い士官の中にはトイレに駆け込んで吐く者もいたが、誰もそれを咎めることはしなかった。独立魔装大隊の面々ですら、その青ざめた顔を隠すことができなかったのだから。

『……………』

ただ1人、マテリアル・バーストを発動した張本人である達也だけが、一切の動揺を見せることのない冷めた目で、その映像に広がる地獄絵図を眺めていた。

*

*

*

2095年10月31日。

この日に起こった出来事は、後に“灼熱のハロウィン”と呼ばれるようになる。

軍事史の、そして歴史の転換点と位置づけられているこの日は、魔法師という“種族”の栄光と苦難の歴史の、真の始まりの日であった。

そして“2つの物語”が本格的に交わっていく、象徴的な出来事でもあった。

第71話 「家族会議と悪巧みだゾ」

11月6日。

後世に「灼熱のハロウィン」として知られる日から、今日で1週間。

大きめの武家屋敷調日本家屋。これが、門の外から見た四葉本家の特徴だった。一般家庭に比べたら確かに広く、「お屋敷」という表現をしてもしつくり来る。しかし七草家や一条家といった大邸宅と比べたら、質素でこじんまりとしている印象は拭えない。

しかしそれは、四葉家の「秘密主義」が大きく関係していた。普通なら様々な要人を招く機会の多い十師族だが、四葉家ではそのようなことは無い。つまり普段から住む者とその親類くらいしか訪れる人がおらず、大邸宅ではかえって持て余すと考えているのかもしれない。

他人事のようにそんなことを思いながら、達也と深雪は重厚な門を潜って四葉本家へと足を踏み入れた。

外から見たら武家屋敷だが、中は近代的な洋風のデザインとなっている。2人は屋敷の執事によって、充分すぎるほどに広い応接室へと案内された。プライベートに使用される小さな部屋ではなく、「謁見室」と呼ばれる公的な場に招かれたということ、今回2人を呼び出した四葉真夜は、叔母としてではなく、「四葉家当主」として呼び出したことを意味する。

深雪の記憶にある限り、今まで真夜は親族一同が揃う慶弔の場を除いて達也と顔を合わせることをしなかった。しかしこのタイミングで、深雪が同席しているとはいえ間近で顔を突き合わせるという事実、深雪は不安と緊張で胸が詰まる想いを抱いていた。

「おや」

と、中庭に面した窓を眺める達也がふと声を漏らし、深雪の意識が兄へと向けられる。

「お兄様？」

「黒羽の姉弟だ」

即座に、そして僅かに驚きを含ませた声色で答える達也に、深雪も半端に腰を浮かせて窓へと目を向けた。

2人が出てきた離れには、2人の祖母であり、司波兄妹の祖父の妹であり、現当主である真夜の叔母に当たる人物が住んでいる。弟の文弥が次期当主候補2番手であることを考えれば、祖母の住まいへご機嫌伺いに来たとしても不思議は無い。

「偶然でしょうか？」

「それは分からないが、俺達がここにいるのを知って素通りする2人じゃないとは思う」

文弥は歳の近い兄貴分として、亜夜子は共に魔法の修行を乗り越えた戦友として達也を慕っている。さらに亜夜子は深雪に対して並々ならぬ対抗意識を有していることを考えると、確かに兄の言う通りだと深雪は納得した。

しかし深雪が見たところ、離れを出たときの2人の表情は、単純に祖母に顔を見せた程度では説明できないほどに緊迫したもののように感じられた。遠くから見ただけなので勘違いの可能性も否めないが、深雪はどうにも胸のざわめきを抑えることができなかった。

何となくそれを吐露したい気持ちのあつてか、深雪は隣の達也へ顔を向けて口を開きかけ、

「――！」

達也がふいにドアへと向き直ったことで、深雪はハツとした表情で口を閉じた。表情にも背筋にも緊張が見える達也と同じように、ソファーから立ち上がってドアへと向き直る。

やがて、

「失礼致します」

形式的なノック、そして2人の返事も待たずにドアを開けたのは、如何にも執事然とした見た目初老の男性だった。その人物はこの家に勤める使用人の中でも1番の地位を持つ“執事長”の葉山であるが、彼は部屋に入ったもののそれ以上の口上は無かった。

ただドアを開けるだけの役目なら、葉山ほどの人間がいちいち行うようなものではない。

しかし兄妹のどちらもが、葉山のその行動に疑問を持つことは無かった。

「お待たせしました」

果たして葉山に続いて部屋に入ってきたのは、この家の主人であり現四葉家当主・四葉真夜だった。ほとんど黒に近い色合いのロングドレスを身に纏い、異性を妖しく惹きつけずにおかない妖艶な魅力と、思春期の少女を連想させるような可愛らしさという相反した印象を同居させている。実年齢は40歳を超えているはずなのに、どう上に見積もっても三十代前半くらいにしか見えない。

「東京からわざわざ来てもらって、ごめんなさいね。どうぞお掛けになつて」

「……失礼します」

真夜が促し、深雪が彼女の正面にゆつくりと腰を下ろした。しかし達也は動かず、故に深雪の隣に立ったままとなっている。その光景はまさしく、真夜の隣に控える葉山と鏡合わせであるかのようだ。

しかし誰もそれに触れることなく、ソファーに座る2人の前に白磁のティーカップが置かれる。

真夜が話を切り出したのは、深雪に紅茶を勧め、自身もそれに口をつけた後だった。

「本日来てもらったのは、横浜事変に端を発する一連の軍事行動について、お知らせしたいことがありますからですの」

「……お知らせしたいこと、ですか？」

ソファーに座る座らないという遣り取りからでも分かる通り、この場では達也が真夜の許可無く発言することはできない。なので必然的に会話を促すのは深雪の役目となり、それに気づくのが遅れた深雪は返事をするのに1拍遅れた。

そんな深雪に真夜は意味ありげな笑みを浮かべてから、こう言った。

「今回の軍事行動につきまして、国際魔法協会に『懲罰動議』が提出されました」

「えっ！」

深雪は思わず大きな声をあげて驚き、対して達也はその表情をまるで崩さなかった。

そんな達也に、真夜は視線を向けて尋ねる。

「あら、達也さんはあまり驚かないのですね」

「懲罰動議が出されていたとは知りませんでした、そのように落ちて着いていらつしやる場所を見るに、すぐに棄却されたのでしょうか？」

達也の（ほとんど確信しており形式上での意味しか持たない）問い掛けに、真夜は面白そうに笑みを深くして頷いた。

「懲罰動議の内容は『1週間前に行われた鎮海軍港を消滅させた爆発が、憲章に抵触する『放射能汚染兵器』によるものではないか』というものでした。当然そのような事実は無く、あの魔法にもそのような効果は無いので国際魔法協会によってすぐにそれは否定され、よって懲罰動議も棄却されました」

『放射能汚染兵器』とはその名の通り、放射能による環境汚染の恐れのある兵器を指す。兵器に限らずそのような効果を引き起こす魔法の使用も処罰の対象であり、そのような兵器の使用の疑いが強いと判断されれば、協会の手によって実行部隊となる多国籍チームを編成することになる。そうなればこれ幸いと各国が強力な魔法師をチームに推薦し、日本に送り込んでいたことだろう。

しかし達也が使用した『マテリアル・バースト』は、放射性物質の残留が観測されるような魔法ではない。達也本人がそれを知らないはずも無く、故に彼のポーカーフェイスはそのような事態に発展することが無いと確信してのことだった。

「では、その爆発によって消滅した敵艦隊の搭乗員に『震天將軍』が含まれていて、戦死が確実視されていることはご存知ですか？」

「劉雲徳が、ですか？」

しかし次に真夜からもたらされた情報は、思わず達也が表情を崩すほどのインパクトがあった。

劉雲徳とは、それぞれの国が国威発揚を目的として公表している13人の『戦略級魔法師』の内の1人であり、大亜連合の威信を背負つ

ていると言っても過言ではない重要人物である。『戦略級』と称されるだけあってその人物1人だけで戦局を大きく左右するほどの実力を持ち、だからこそ各国は彼ら（もしくは彼女ら）の動向に細心の注意を払っている。

「大亜連合は随分と嚴重な情報管制を敷いていますけどね。でもまあ、こうして『十三使徒』は『十二使徒』となりました」

軍事バランス的にはかなりの重大ニュースを、真夜はいとも簡単に纏めてみせた。

しかし真夜の話は、これでは終わらない。

「日本はこれに乗じて、大亜連合に対して大きな譲歩を引き出したと考えているのでしょうか。参謀長より五輪家いっわに出勤要請があり、佐世保に集結した艦隊に滯さんが同行しています」

「あの方が、軍艦に乗船されているのですか？ お体に障るのでは……」

「それほどの奇貨だと考えているのでしようね」

驚きで思わず問い掛けた深雪に、真夜はあっけらかんとした様子でそう答えた。

五輪滯。若干26歳でありながら、現時点で日本が公表している唯一の戦略級魔法師、いわば日本にとっての切り札的存在だ。しかしその強大な魔法とは裏腹に肉体面はかなり虚弱であり、20歳を過ぎた頃から少しでも体力の消耗を抑えるために車椅子での生活を余儀なくされ、大学を卒業後は実家の屋敷から出ることすらほとんど無い。「こちらが劉雲徳の情報を持っているように、向こうも滯さんの動向を掴んでいることでしょう。また未確定の情報ながら、ベゾブラゾフ博士がウラジオストク入りしたとの情報もあります」

真夜のその言葉に、達也が再び驚きを顕わにした。

『イグナイター』『イーゴリ・アンドレイビッチ・ベゾブラゾフ。彼はソビエト科学アカデミーに所属する科学者であると同時に、新ソ連が擁する戦略級魔法師でもある。』

今までは示威にのみ使われ実戦に投入されることのなかった戦略級魔法師だが、ここに来て4人（達也は存在を秘匿されているので公

には3人)が一気に動員されたことになる。

「ですが、これもおそらく大亜連合が掴んでいるでしょう。近日中に講和条約が締結される可能性が高い、と私は考えております。——大亜連合が後先考えない馬鹿である可能性を除けば、ですけどね」

最後に付け足されたその言葉に、今まで仮面を被るかのように本音を隠していた真夜の素の感情が見えたような気がした。

しかしそれも一瞬のことで、真夜は即座に若々しくも大人の可愛らしさと色気を兼ね備えた魅力的な笑顔で再びその感情を隠してしまった。

「しかし今回の鎮海軍港消滅は、多数の国が関心を寄せています。あの攻撃が戦略級魔法師の仕業だと当たりをつけ、術者の正体に探りを入れている国も1つや2つではないでしょう。——達也さん、あなたの正体を知られることは私達にとって大変好ましくない事態です」
「重々、承知しております」

達也へと視線を向けながらそう話す真夜に、達也は深々と頭を下げてそう答えた。

そしてそれを見て、真夜は演技とは分からないくらいに自然に顔を綻ばせた。いや、もしかしたら本心から満足して笑ったのかもしれないが。

「ご理解ただけて嬉しく思います。——それでは念のために、しばらく国防軍の方々との接触は控えるように。向こうとも既に話をつけていますので」

「……かしこまりました」

横浜事変のように何かあれば達也の力を借りることに躊躇いが無い独立魔装大隊ではあるが、達也も達也で何かあれば彼らの力を遠慮無く利用している。なので彼らと接触できないのは色々と不便に感じる達也だが、四葉家当主である真夜から接触禁止を言い渡されてしまえば従わざるを得なかった。

おそらくだが、わざわざ電話などではなく直接本家に呼び出したのも、これを伝えたかったためだろう。それを示すかのように、真夜は満足げにニツコリと笑って『四葉家としての話はこれで終わりだ』と

でも言わんばかりに手を叩いた。

「さてと、久し振りに会うのだし、積もる話もあるでしょう。葉山さん、深雪さんをサンルームに案内してあげて」

「はい、かしこまりました」

葉山は恭しく礼をすると、深雪へと歩み寄って「こちらへ」と促した。

しかし深雪としては、ここで「そうですか」と素直に立ち上がれなかった。達也がそれに呼ばれないということは、真夜と達也がこの部屋で2人きりで対峙することを意味している。

しかし深雪の不安そうな表情を敏感に悟った達也が、努めて柔らかい笑みを彼女へ向けた。

「心配するな、深雪」

「……かしこまりました」

兄が自分の退出を望むのならば、深雪がそれに従わない選択肢は無い。深雪は真夜に向かって深く一礼すると、葉山と共に応接室を後にした。

そして部屋には、達也と真夜のみが残された。

すると今までソファアに座らず立ったままだった達也が、無言で真夜の正面に腰を下ろした。

無言で。つまり、断りも無く。

さらに背もたれに体を預けるその姿は、緊張や畏怖とは程遠いものだった。

しかしそれを見る真夜の目に、達也の不遜を咎める色合いは無い。

「こうして向かい合うのは、随分と久し振りね」

「高校入学前が最後ですから、半年ほどになりますか。『随分』という表現を使うには、些か期間が短いのでは？」

「あら、私にとってはそれでも充分に長いのです？」

先程までと比べて随分と砕けた口調になっている真夜に、冗談めかしたように言葉を返す達也。

そんな2人の姿は、甥をソファアにも座らせず立たせたまま話を聞かせていた先程までと比べると相当大きなギャップのある、しかし甥

と叔母という関係で見れば実に健全なものだった。

それこそ、その辺にいる普通の家族と同じかのように。

「せっかくですから、お茶でも如何？」

「自分にお茶など出しては、取り巻きの方々にうるさいことを言われませんか？」

「周りを気にする必要なんて無いわ。言いたい人には言わせておきなさい」

達也が反論しようとして口を開くのも待たず、真夜はテーブルの呼び鈴を手に取って鳴らした。

防音対策が施されているであろう部屋の中で鳴らしたにも拘わらず、1分も掛からずドアがノックされて葉山が入室してきた。何らかの方法でこの部屋がモニターされていることに他ならないが、達也は慌てることなく座ったまま彼を出迎える。

そしてそれを見た葉山も、血相を変えて達也を怒鳴りつけるなんて真似はしなかった。

「葉山さん、私にお茶のお代わりを。それから達也さんにも同じ物をお持ちして」

「かしこまりました」

葉山が2人分の紅茶を持ってきて退室するまで、2人は一切会話を交わさなかった。部屋を重苦しい無言の空気が包み込むが、どちらも居心地の悪さを覚えている様子は無い。

カップの紅茶に口をつけて、真夜はようやく本題を切り出した。

「今回はごく活躍だったわね、達也さん」

「いえ、そのようなことは」

「でも四葉にとつては、困ったことをしてくれたものだけ」

「申し訳ありません」

芝居染みた溜息と共にそう言う真夜に、これまた達也も形式的な謝罪を示した。僅かながら頭を下げるのみで、土下座とかテーブルに額をこすりつけるなんてことはしなかった。

そしてそんな彼の態度に、それでも真夜は難色を示さなかった。

いや、むしろ楽しそうに微笑んでいた。

「達也さんが気に病む必要は無いわ。私としては、今回の結果には非常に満足しています。あれだけ派手にやられたのだから、大亜連合もしばらくは『彼』に対して何かしようなどとは考えないでしょう」

「やはり大亜連合の目的は、しんのすけを拉致することが第一だったということですか？」

「そうなるわね。子供1人拉致するのに工作部隊を投入して大々的に侵攻するだなんて、大亜連合も随分とめちやくちやなことを考えるものだわ」

溜息混じりでそう吐き捨てる真夜の言動には、普段は自身の感情を巧妙に隠す彼女にしては珍しいほどに侮蔑の感情が透けて見えた。

そんな彼女に、達也が背もたれから身を乗り出して問い掛ける。

「2つほど、訊きたいことがあるのですが」

「答えられることでしたら、答えましょう」

真夜の厚意に、達也は遠慮なく1つ目の質問をぶつけた。

「なぜ叔母上は、奴らの『真の目的』を知ることができたのですか？」

大亜連合が横浜に侵攻するという動き自体もそうですが、実働部隊のほとんどが表向きの目的のみを聞かされており、真の目的については情報管理が徹底されていたはずです。そんな中で正確な情報を探り出せるとは、スパイでも潜り込ませているのですか？」

「生憎だけど、達也さんでも教えられないわ」

さっそく『回答拒否』という結果となったが、達也は食い下がることなくあっさりと退いた。彼としても、真夜が馬鹿正直に教えてくれるとは思っていなかったのだろう。むしろペラペラと喋り出される方が困惑したに違いない。

なので達也は、即座に2つ目の質問に切り替えた。

「奴らはなぜ、横浜事変を起こしてまでしんのすけを拉致しようとしたのでしょうか？」

「それだけのリスクを冒してでも手に入れたい、と考えたのでしょうか」

「いえ、しんのすけを狙うこと自体は理解できるのです。俺が気になっているのは『なぜ穏便な方法を取らず、今回のような強引な手段に出たのか』ということです。『主人公補正』によって自身に危害が

及ぶ可能性を考えれば、少しでも穏便な方法を取ろうと考えるのが自然なはずですが」

「そんなの、本人達に聞かなければ分からないでしょう?」

「確かにその通りです。そのうえで、叔母上の意見を頂ければ」

そのまま突っぱねられる可能性も考えられたが、真夜は「そうねえ」と顎に指を当てて考え込むジェスチャーをした。

そうして真夜は、クスリと笑った。いや、嗤った。

「彼を刺激しないように穏便な方法を取るということは、自分達が彼の力に屈して怯えていることになる。奴らからしたらそんなの、それこそ死んでも認めることができないんじゃないかしら?」

「つまり、自尊心を優先した結果、ということですか?」

「あら、納得できない? 人間が常に合理的な判断ができるわけじゃない、というのはさすがにあなたも理解できるでしょう?」

「まあ、確かにそうですが……」

口ではそう言いながらも、達也はなお首を傾げたままだった。

そんな彼に、真夜はクスリと笑った。今度は侮蔑の感情は微塵も無く、それこそ何の事情も知らなければ愛しい我が子を見つめるかのような慈愛さえ見出せるかもしれない。

しかし真夜はサツと表情を切り替えると、パンと小さく手を叩いた。

「さてと、今日達也さんに伝えたかったのは、そんなどうでもいいことではありません。——先の一件で達也さんがしたことについて『四葉にとつては困ったことをしてくれた』と言ったことは憶えていますか?」

「はい。何か具体的な問題が生じているのですか?」

達也の問い掛けに、真夜は身を乗り出して彼の目をジツと見つめた。

それに対抗するわけではないが、達也も同じように彼女の目をジツと見つめる。いくら彼女が絶世の美貌を携えていたとしても、彼が(深雪以外で)女性の美貌に心を動かされることは無い。

そうして互いに見つめ合う中、真夜が口を開いた。

「『スターズ』が動き出しています」

そうして彼女の口から飛び出したその言葉は、達也を一瞬硬直させるだけの威力を持っていた。

「それはつまり、アメリカ自体が動き出したということですか？」

「今はまだ、スターズが独自に調査を開始した段階です。しかし彼らは既に、あの魔法が質量をエネルギーに変換する魔法によって引き起こされたものであると掴んでいます。そして術者の正体についても、かなりの段階まで絞り込んでいます。——達也さんと深雪さんを容疑者の1人として特定するほどに」

なんでそれを知っている、とは今更問わない。達也が不思議がるほどの真夜の『情報収集力』をもってすれば、世界最強の魔法部隊を自認するUSNA軍スターズの諜報活動の成果を、ほぼリアルタイムで探り出すことも可能なのだろう。

「とにかく、身の回りには気をつけなさい。アメリカの覇権を揺るがすと判断されれば、実力で排除に掛かってくる可能性もありますよ」
「それが四葉にも飛び火する可能性が出てくれば、更に別のところから刺客が送り込まれる、ということですね。肝に銘じます」

達也の答えに、真夜は満足そうに笑みを浮かべた。

そしてその笑みのまま、口を開く。

「あなたを退学させてしばらくここに謹慎させる、というのも考えたけど、せっかく『彼』とお友達になったのに離ればなれになるのは寂しいでしょう？」

「寂しいかどうかはともかく、今このタイミングで辞めれば自分がその犯人だと自白するようなものですし、第一深雪の護衛にも支障が生じますから現状維持が適当でしょう」

「そこはどうにでもなると思いますが……、まあ良いでしょう。あなたは私の可愛い甥ですし、これくらいワガママは認めてあげます。分家の皆様には私から説明しましょう」

四葉の分家当主は（程度の差こそあれ）達也を本家の中心から遠ざけたいという考えで基本的に一致しており、その理由付けとなる失態を常に狙っている節がある。おそらく今回の件もそういった動きが

あったのだろう、と達也は真夜のどことなくうんざりした表情で察した。

と、真夜がその表情を固定したまま、その視線を達也へと向けた。「もつとも私としては、スターズ以上に厄介なことになりそうな案件があるのだけれど」

「スターズ以上に、ですか？ それはいったい……」

スターズだけでも達也にとっては充分脅威だというのに、まだこれ以上の出来事があるというのか。達也としてはこのまま聞かなかつたことにしたいところだが、他ならぬ真夜がここで話題に出した以上聞かないわけにもいかない。

そんな感情を極力表に出さないように注意していた達也の耳に、こんな台詞が飛び込んできた。

「あなた達が頑張って捕まえてくれたヘクソンだけど、どうやら逃げられたみたいよ」

*

*

*

『いやいや、横浜の件を聞いたときは心配だったんだが、周先生が無事で良かった良かった！』

「わざわざお電話も頂きました、真にありがとうございます。お店の方は残念ながらしばらく営業できませんが——」

『ああ、分かっているとも！ 営業再開が決まったら、真っ先に電話してくれましたまえ！ 我が社の宴会でパーツと派手にお祝いしてやろうじゃないか！』

「ありがとうございます。その際はぜひとも」

工事の音と作業員の掛け声が微かに聞こえる、横浜中華街の中でも人気を誇る店の奥の事務スペースにて、店のオーナーである周公瑾が電話の相手と談笑していた。相手の大きな声に時折顔をしかめることはあっても、基本的に周の表情はにこやかな笑みで彩られている。

それから数分會話は続き、やがて相手が『次のスケジュールがある

から』という理由で会話を切り上げ、電話を切った。周は携帯端末をポケットにしまうと、軽く溜息を吐いて高級ソファアの背もたれに深く体重を預ける。

と、電話が終わったそのタイミングを狙い澄ましたかのように、部屋のドアがガチャリと開いた。しかしそれは店舗スペースへと繋がる表のドアではなく、さらに建物の奥へと続くもう一つのドアだった。

そのドアから姿を現したのは、浅黒い肌と金髪碧眼という一目で純日本人ではないと分かる外見をしており、しかしそれ以上に抜き身の刀をそのままちらつかせているような剣呑とした雰囲気纏っているのが印象的な男。

先週の横浜事変にて、野球スタジアムで達也としんのすけを相手取り、そして深雪にやられたことで国防軍に拘束されたはずのヘクソンだった。

「お疲れ様でした、ヘクソンさん。何か軽く摘みますか？」

「いや、結構だ」

周の問い掛けにもヘクソンは素っ気なく返し、彼が座っていたソファアの対面にどっかりと腰を下ろした。

「あなたが逃げ出したことで、奴らは今頃大騒ぎで搜索していることでしょうね。もつとも、100年前と同じように箝口令を敷いているようなので、大っぴらには動いていないようですが」

「一緒に捕まった陳チエンや呂リュウとかは、解放しなくても良かったんだな？」

「ええ、構いません。——所詮彼らも、他の奴らと同じく『捨て駒』ですのぞ」

ハッキリとそう言い放つ周の表情は、彼らを『閣下』や『大人』と呼んでいたときは比喩物にならないほどに冷たいものだった。

「それにしても、ヘクソンさんならばもしや行けるかも、と思っておりますが、まさか魔法科高校の女子生徒にやられるとは……。やはり野原しんのすけの『主人公補正』は侮れませんね」

「忌々しいことだが、あの女に関しては私の力が完全に裏目に出た形となったな。あの女をあのスタジアムに近づけてしまったことが、今

回の最大の敗因だ」

「ですがそれ以外に関しては、私の想像通りの結果となりました。――あなたがこうして、私の前に再び戻ってきたことも含めてね」

周の言葉に、ヘクソンが彼へと視線を向けた。抜き身の刀のような鋭い目が彼を捉えるが、それを真正面から間近に浴びながらも周の顔は平然としたままだ。

「今回の一件で、臍気ながら見えてきました。やはり私の睨んだ通り、
“主人公補正”は野原しんのすけだけが持つ固有の能力というわけではなく、正確には彼に近い存在である様々な者達によって発揮されるものである。――そしてその“彼に近い存在”というのは、かつて彼と敵対したことのある者達も含まれている」

「……………」

「奴を出し抜くためには、こちらも手駒を揃える必要がありますね。かつて彼と敵対したことのある者達、さらにはかつて仲間だった者も場合によってはこちらに引き込めるかもしれません」

「さつき電話していた相手も、その工作活動の一環というわけか？」
「いえいえ、あれは単にこの店のお得意様だというだけですよ。“金有電機”の社長なのですが、よく宴会でここを利用してくださるので。まあ、この間の九校戦のときには、あちらとの利害も一致したので少々協力させていただきましたが――」

「……………」
どうにも周の話を聞き流している印象のあるヘクソンだが、当の周はそれを気にした様子も無く話し続けていた。

*

*

*

真夜との話を終えた達也は、深雪が待つサニールームへと向かった。高級なカーペットが敷かれた廊下を静かに歩く達也に対し、時折擦れ違う女中はほんの少し会釈するだけで足も止めずに素通りする。仮にも現当主の甥への態度とは思えないが、分家を含めたほとんどの人間が達也を冷遇する雰囲気の使用人にも伝わり、自然とそれに倣う

風潮が出来上がっていた。人によっては、会釈すらせずに完全無視を決め込むこともあるくらいだ。

しかし達也はそんな彼女達に対しても、眉一つ動かすことは無い。彼女達の自分への態度など彼にとっては（強がりなどではなく本心から）どうでもいいと思っており、よって改めさせようという気すら起さない。

現に、今の彼の関心事といえば、おそらくサンルームで自分の到着を待っているであろう深雪のことだけだ。

そうして達也がやって来たのは、綺麗に手入れされた庭園に迫り出した部分が透明なガラスに囲まれた空間だった。太陽の光によって発生する熱を蓄えて冬場でも心地良い暖かさで空間を満たすことも、逆に夏場には光だけを通して外気の熱を遮断することもできるそこは、真夜もよく入り浸っているお気に入りの場所である。

廊下を繋ぐドアが開いていたためそのまま部屋に足を踏み入れた達也は、自然の光を照明代わりにテーブルで紅茶を嗜む深雪をすぐに見つけ、

「あら、達也くん。お久し振りですね」

「ご無沙汰してます、——桜井さん」

空いた深雪のカップに紅茶を注ぐのは、実年齢は30歳を過ぎているはずなのにどう見ても20歳過ぎにしか見えない顔立ちをした女性・桜井穂波。全面的な遺伝子操作を受けた魔法師の受精卵から誕生した調整体魔法師「桜」シリーズの第一世代であり、生まれる前から四葉家を買われることが決まっていたという数奇な運命を持つ彼女だが、悲壮感などまるで無い優しい笑みを浮かべて達也を出迎えた。達也と彼女は、同じガーディアン同士ということもあって昔から良好な関係を築いていた。彼にとって敵の多い四葉家の中でも、彼女は完全に味方として分類される。

そんな彼女がガーディアンとして仕えている人物というのが、

「久し振りね、達也」

「ご無沙汰しております、——母上」

現当主・真夜の双子の妹にして、達也と深雪の実母。20歳までの

短い活動において数々の伝説を生み出し、様々な国家機関にて、忘却の川の支配者”の名で恐れられていたが、その後を境にパツタリと表舞台から姿を消し、現在の魔法師界では結婚・出産どころか生死すら不明となっている伝説の女性魔法師。

一時期は”司波”の姓を名乗っていたその女性・四葉深夜が、サンルーム内の暖かな空気に包まれて紅茶を口にしていた。

「真夜との話は終わったのかしら？」

「はい。ですが、少ししたらこちらに窺うと仰っていましたので、まもなくやって来るかと」

「そう。別に来なくても良いのに」

辛辣な深夜の言葉に達也が反応に困っていると、深夜が隣の椅子を引いて達也を見上げた。

「いつまで立ってるの。早く座りなさい」

「しかし——」

「良いじゃないですか、達也くん。せっかく顔を合わせたんですから、紅茶の1杯くらい」

「……分かりました」

最終的には桜井の笑顔に折れる形となり、達也は深夜が引いた椅子に腰を下ろした。

一連の流れを戸惑いながら眺めていた深雪だったが、兄と一緒に紅茶を飲むことが嬉しいのか結局はニコニコと満面の笑みを浮かべていた。

そして彼をここに招き入れた深夜は、終始無表情で一切感情が見えなかった。

”灼熱のハロウィン”から1週間経った、午後の出来事であった。

来訪者編

第72話 「クリスマスマスの送別会だゾ」

北アメリカ大陸を版図とする北アメリカ合衆国（USNA）のテキサス州ダラス郊外に位置する、ダラス国立加速器研究所。現在ここでは全長30キロの線形加速器リニアコライダーを使った一大実験が、今まきに行われようとしていた。

その内容とは、余剰次元理論に基づくマイクロブラックホールの生成・蒸発に関するもの。準備自体は2年前に終えていたのだが、安全性のリスクを読み切れないとの理由でなかなか実行には至らなかった。

しかしここに来て、急激に実験を後押しする声があがった。

その理由は、極東での軍事都市と艦隊を纏めて吹っ飛ばした“大爆発”だった。

USNAの科学者達は激しい議論の末、質量をエネルギーに変換したことによるものだと結論づけた。しかし通常の理論で質量をエネルギーに変換した場合、核分裂・核融合の際に残留物質が生じるはずなのだが、今回の爆発ではそれがまったく存在しない。つまりそれは、自分達が想定している方法で引き起こされたものではないということになる。

魔法によるものならば再現できないのも無理はないが、その仕組みが分からないとなれば、いざその矛先が自分に向いた際に対処のしようがない。せめて質量・エネルギー変換のシステムに関する手掛かりだけでも掴もうと、今回の実験と相成った。

例の“大爆発”は、おそらく今回の実験とは違うメカニズムによるものだ。しかしホーキング放射は対消滅に比べて観測が不十分な現象であり、理論的予測に収まらないデータが得られる可能性がある、かもしれない。場合によっては“大爆発”と一致する現象が観測される、かもしれない。

そのような儂い根拠で危険な実験にゴーサインを出すというのは、

通常ならば考えられないことだ。つまりはそれだけ、USNA首脳陣が精神的に追い詰められていたということかもしれない。

だからこそ、彼らは利用されたのだ。

この世のモノならざる、世界を手中に収め得るほどの実力を有する“災禍”によって。

*

*

*

2095年12月24日。学生にとっては2学期最後の登校日であり、世間一般ではクリスマス・イブとされている日だ。

3度の世界大戦を乗り越えた日本だが、この国は相も変わらず宗教に対して無頓着だ。一神教の絶対神ですらも神々の1柱として扱う日本人にとって、クリスマスと正月を同じように祝うことに対する抵抗など存在しない。

この時期になると、街はクリスマス一色に染まる。ここで達也は「クリスマス “商戦” 一色の間違いだろうか？」などと斜に構えるようなことはしない。そもそも彼自身、今から魔法科高校の友人達とクリスマスパーティーを始めようとしている真っ最中であり、見目麗しい美少女達に囲まれながら不必要な発言をして場を白けさせる必要性を感じない。そんなことをすれば、わざわざ家からサンタの衣装でやって来たしんのすけに申し訳が立たない。

それに今回のパーティーは、クリスマスパーティー以外にもう1つ意味合いがある。

「それじゃ、雫ちゃんの海外留学をお祝いしまして。——メリークリスマスアス！」

「メリークリスマス！」

しんのすけの挨拶、そしてクリスマスに限らずお祭り大好きな面々によるはっちゃけた歓声と共に、クリスマスパーティー兼 “雫の送別会” は幕を開けた。

雫がアメリカに留学することが皆に伝えられたのは、定期試験に向けて勉強会をしていたときのこと。年が明けたらすぐ出発で、期間は

3ヶ月ほど。優秀な魔法師は軍事資源の流出を防ぐために海外渡航が制限されているのだが、なぜか雫にはその許可が下りたという。雫の父親・潮の話では「交換留学だから」だそう。

とにかく留学が決まったのなら送別会をしようということになり、どうせクリスマスも近いのだから一緒にやっちゃおう、ということ。今回のクリスマスパーティーが企画された。

会場は達也たちが普段から懇意にしている喫茶店「アイネブリーゼ」が選ばれ、マスターの厚意で貸切にしてもらっている。テーブルには大きな生クリームホールケーキが用意されているが、真ん中に飾られたホワイトチョコの板には「MERRY XMAS」と書かれていた。この店の流儀に従えば「WEIHNACHTEN」の方が相応しいのでは、なんて気にしているのは達也くらいである。

「ねえねえ、雫！ 留学先ってどこなの？」

「バークレー」

「あれ？ アメリカの魔法研究って、ボストンのイメージが強いんだけど」

「東海岸は、雰囲気は良くないらしくて」

「ああ、最近「人間主義者」が騒いでるってニュースでやってたよ」

幹比古の言葉に、特にレオやエリカといった面々がうんざりした表情を浮かべる。もちろん、幹比古に向けられたものではない。

一方、フライドチキンをこれでもかと頬張り、ハムスターのように頬を膨らませているしんのすけだけが、彼らの態度の意図が分からずキョトンとしていた。

「おつ？ なんでみんな、うんざりしてるの？ というか、ニンゲンシユギシヤって何？」

しんのすけの口調は皆に向けたものだったが、その視線は既に達也へと固定されていた。4月からの付き合いによつて、しんのすけの中では『分からないことはとりあえず達也に訊けば答えてくれる』という信頼が生まれているようだ。

「『人間主義』というのは、元々はキリスト教亜種のカルト運動から生まれた『人は人に許された力でのみ生きなければならぬ』という

思想を指す言葉だ。奇跡は神にのみ許された御業であり、神が定めた自然の摂理を神ならざる者が捻じ曲げるのは悪魔の所業である、というのが奴らの主張らしい」

はたして今回も、達也はしんのすけの信頼に応えて見事に説明を試みせた。言葉は知っていても詳細は知らなかったらしいエリカやレオなどが、達也の説明に何度も小さく頷いていた。

もつとも、だからといって彼女達の反応が変わるわけではなかったが。

「表向きの理屈がどうであれ、結局は自分達の主張を通すために暴力的な行動に出たら意味が無いっての」

「本当だぜ。結局は『魔女狩り』が『魔法師狩り』に変わっただけじゃねえか。歴史は繰り返す、ってヤツだな」

「まったくの繰り返し、ってわけでもないんじゃないか。魔女狩りにどんな背景があったか知らないが、ここ最近のは『新白人主義』と根っこが同じみたいだからな」

達也の言葉に、全員の視線が彼へと向いた。

「ふーん、そうなんだ」

「活動団体のメンバーリストを見てると、結構な確率で同じ名前を見掛けるからな」

「へえ、そりゃ知らなかったな。メンバーリストなんて見たことねえぞ」

「そりゃな。普通は表に出るようなものでもないし」

「んもう、せつかくのクリスマスパーティーなのに、そんな変な話しないの！」

口元を油でベタベタにして叱りつけるしんのすけに、達也も苦笑いで肩を竦めた。確かにクリスマスパーティーには相応しくない話題だったと反省したのである。

エリカもそう思ったのか、クルリと雫に向き直って明るい声色で別の話題を振った。

「それで雫、代わりに来る子は分かってるの？」

「代わり？」

「『交換留学』なんでしょ？」

「……同じ歳の女の子、つてだけは」

「それ以上は分からない？」

エリカの問い掛けに、雫は首を縦に振ることで答えた。

「そうですよね。自分の代わりに誰が来るのか、気になったところで答えてくれる人がいませんものね」

美月の言葉に、その場にいた誰もが納得したように頷いた。結局留学生の話はそこで打ち切りとなり、その後は留学先の学校のことや勉強の内容などにシフトしていった。

そんな中、テーブルに並べられた料理を取りに行くために達也が皆の輪から離れた。テーブルにはケーキやフライドチキン、さらにはピザやフライドポテトなどパーティの定番メニューがこれでもかと並んでいる。普段から店でも提供されているメニューはマスターの手作りだが、それ以外は料理の手配を担当したしんのすけが用意したものである。普段は深雪の作った料理を食べることがほとんどの達也には、あまり縁のないものばかりだった。

さて、どれを食べようか、とそれらの料理を物色する達也に、自然な足取りを装って近づく者がいた。

「やつほー、達也くん」

「どうしたエリカ、お代わりか？」

「あーっと、それ『も』あるかな？」

エリカは悪戯っぽい笑みを浮かべ、チラリと周りを一瞥した。他の面々とは少し距離が空いており、小声で話せば喧騒が壁となつて周りには聞こえない。

エリカはそれを確認したうえで、スツと達也へと身を乗り出した。

「達也くんから見てさ、今回の『留学』つてどう思う？」

そう問い掛ける彼女の表情は、口元こそ笑ってはいるものの、その目の奥には剣呑な雰囲気が見え隠れしていた。下手な誤魔化しはすぐに見破ってやる、とでも言わんばかりに。

「……エリカは、どう思う？」

「雫くらいの魔法資質がありながら留学が認められた、つてのが不自

然だよ。最初は「大実業家の娘」としての留学かと思ってたけど、だったら相手のことを知らないなんて変でしょ。この時期にいきなり留学の話が持ち上がるってのも、裏があるような気がしてならないし」

「裏、か……。確かに不自然な点は見受けられるが、本当にただの留学生かもしれないぞ？　せつかくの機会だ、その海外の魔法師から色々と学べることも多いんじゃないか？」

達也の言葉はもつともだが、それを聞いたエリカは「ん？」と首を傾げた。

「留学生って、零の代わりだからA組に入るんでしょ？　アタシ達とは接点無いんじゃない？」

「いや、そうとも限らないぞ？　何年ぶりか分からない留学生となれば、同じクラスで生徒会副会長の深雪が自然と留学生の面倒を見ることになるだろう。そうなれば俺達とも無関係ではなくなるさ」

「成程！　つまり、そうやって関係を築きながら探りを入れれば良いつてことね！」

「いや、そんな意図は無かったんだが……」

積極的に留学生と関わろうとするエリカに、むしろ関わりを持ちたくない達也は溜息を吐かずにいられなかった。

なぜなら彼は、2ヶ月ほど前に大亜連合の軍事都市と艦隊を吹っ飛ばした「マテリアル・バースト」の仕組みと術者を突き止めるべくU S N Aの魔法師部隊「スターズ」が近々やって来ることを、真夜からの「忠告」で知っているからだ。そんなタイミングでの「留学生」となれば、さすがに偶然の一言で片付けられるものではない。

もつとも留学の話が実現しようとしている時点で、真夜がそれを黙認しているのは明白だろう。四葉家は十師族の中でも七草家と主導的地位を争う地位にあり、優秀な魔法資質を持つ魔法科高校生の留学というイレギュラーな事態を知らないはずは無いのだから。

「仮にその留学生に裏があったとして、エリカはそいつの目的が何だと思っっているんだ？」

「そりゃあ、やっぱり——」

エリカは具体的な名前を挙げず、視線を投げることで回答とした。しかしその視線の先は、正面にいる達也ではなかった。

彼女の視線が向けられているのは、友人達と談笑するしんのすけだった。

「達也くんだって、とつくに気づいてるでしょ？ しんちゃんは多分、アタシが思ってるよりもつとずっと大きな意味で、色々な奴らの注目を集めている。この前の横浜だって、そんな奴らがしんちゃんを狙った結果なんじゃないか、なんて思ってるの」

エリカは達也のように軍と関わりがある者達とは違い、大亜連合の工作部隊が引き起こした横浜事変がしんのすけ1人を拉致するため、の隠れ蓑だったことを知っているわけではない。しかし彼女の野性的な嗅覚は侮れず、嘘を吐くのが下手なしんのすけの態度である程度の察しはついているのだろう。

しかしそれでも、エリカは彼の傍を離れる選択肢を採らなかった。あくまで彼の友人であろうとし、そしてそれを脅かすかもしれない存在へ立ち向かうことを選択した。

「とにかく、まだそうと決まったわけではない。下手に先走りしすぎても良いことは無いぞ」

「そりゃ、まあ、そうだけどき……」

渋々ながらも納得してみせるエリカに、我ながら白々しいな、と達也は自嘲した。

*

*

*

日本でクリスマスパーティーが行われている頃、太平洋を隔てた北米大陸中部ではまだクリスマス・イブの前夜だった。単なるイベントの1つとして捉えることの多い日本人と違い、アメリカ人の多くは遥かに真摯に、敬虔に、熱心にクリスマスを迎える。なので人々は明日に備えてぐっすりと眠っており、街は静まり返っていた。

しかしUSNAの大都市・テキサス州ダラスの一画では、ビルからビルへ跳び移って逃亡を図る者と、その不審者を頭上から包囲する複

数の魔法師が暗躍していた。まだ普及が始まったばかりの飛行魔法特化型CADを使用していることから、追い掛けている集団は警察か軍の関係者ということが推察できる。

「止まりなさい、アルフレッド・フォーマルハウト中尉！ もはや逃げ切れないのは分かっているはずです！」

と、そのとき、逃亡者を包囲する魔法師の1人、目の周りを覆う仮面をつけ、首に大きなストールを巻いた小柄な人影が、逃亡者の正面に下り立って進路を塞いだ。少女のように甲高いその声に、呼び掛けられた逃亡者はピタリと足を止める。

「なぜですか、フレディ？ “一等星”のコードを与えられたあなたともあろう人が、なぜ隊を脱走するなんて真似を……」

「……………」

先程の居丈高な呼び掛けから一転し、不安と戸惑いの入り混じった声で問い掛けるが、逃亡者からの返事は無かった。

「この街で起きている連続焼殺事件も、あなたのバイロキネシスによるものだと言う者もいます。まさかとは思いますが、あなたの仕業ではありませんよね？」

「……………」

「——答えてください、フレディ！」

その瞬間、逃亡者に反応があった。

言葉を使った弁明ではなく、魔法を使った迎撃というものだったが。

咄嗟にそれを感じ取った少女は、首に巻いていたストールを残して後ろに飛び退いた。逃亡者の視線から少女を隠すことになったそのストールは、次の瞬間、何の火種も無いはずにも拘わらず突然炎を上げて燃え盛った。

バイロキネシスは体系化された現代魔法ではなく、かつては“超能力”とも言われた発火念力である。CADを使わず、CADよりも圧倒的に早い攻撃を仕掛けることが可能だが、視線をキーとして発動する能力のため、こうして障害物を超えて向こう側にいる人物を攻撃することはできない。

だからこそ、バイロキネシスの発動が確認された次の瞬間、逃亡者の周りから一切の光が消えた。一定の空間に光が侵入しなくなる。ミラー・ケージ”によって、逃亡者が魔法を発動する視線を遮ったのである。

それに気づいた逃亡者が離脱を試みるが、彼は既に別の魔法によってその身を拘束されていた。

「フォーマルハウト中尉！ 連邦軍刑法特別条例に基づく、”スターズ総隊長”の権限により、あなたを処断します！」

悲痛な声でそう叫んだ仮面の少女は、逃亡者に向けてサプレッサー付きの自動拳銃を構えた。

強力な情報強化によって一切の魔法干渉が無効化された弾丸が、逃亡者の心臓を1発で貫いた。

スターズ専用機のクラスターファンVTOLで基地に帰還し、統合参謀本部に暗号通信で報告を済ませた後、USNA軍統合参謀本部直属魔法師部隊”スターズ”の総隊長であるアンジー・シリウスことアンジェリーナ・クドウ・シールズ少佐は、制服のまま自室のベッドに横になった。そのまま寝返りを打って俯せになり、枕に顔を押しつける。

彼女にとって、処刑任務は何回やってもけっして慣れることはなかった。最初のように任務終了後に嘔吐することは無くなったが、それは単に心の痛みが慣れただけのことである。むしろ任務を経験する度に、心の痛みは大きくなっていった。

「……何をやっているんだろう、私」

ふいに呟いたそのとき、部屋の呼び鈴が鳴った。それを聞いたシリウス少佐は苦笑いを浮かべてベッドから起き上がり、リモコンで鍵を開けながらドアホンのマイクに向かって「どうぞ」と呼び掛けた。

「失礼します、総隊長」

そして入ってきたのは、スターズのナンバーツーであり、彼女が不在のときは総隊長の任務を代行する第1隊の隊長、ベンジャミン・カ

ノープス少佐だった。スターズは階級と地位がリンクしていない編制を採っているため、隊長と総隊長の階級が同じということは珍しくない。

スターズは12の部隊から成り、総隊長は各隊長を統括する立場にある。つまりシリウス少佐の部下は自分の部下の面倒を見なければいけない立場にあるのだが、カノープス少佐の場合はこういう任務の後には決まって様子を見に来てくれる。おそらく彼自身に彼女よりも2歳年下の娘がいることが大きいのだろう。

「差し入れです、総隊長」

彼はいかにも高級士官といった、叩き上げの兵士とも民間のビジネスマンとも違うスマートな所作で、シリウス少佐に湯気を立てるハニーミルクを手渡した。自分の父親にも似た年齢の部下からの気遣いに、彼女は照れ臭いような申し訳ないような表情を浮かべながらそれを受け取った。

「ありがとうございます、ベン」

「どういたしました。——『準備』は、もう終わったんですか?」

「ええ、大体は」

「さすがに手際が良いですね。日本人の血、というヤツでしょうか?」
「日本人だからって、みんなが几帳面というわけではありませんよ」

自分の体に流れる4分の1の血を言われて、シリウス少佐は軽く肩を竦めた。

「せっかくの機会です。しばらく因果な任務のことは忘れて、のんびり羽を伸ばしてください」

「ベン、休暇じゃなくて特別任務です。……それに、のんびり羽を伸ばすなんてできるわけないじゃないですか。我々がこれから調査するのは、あの『稀代の英雄』と近しい人物達なんですよ」

「だからこそですよ、総隊長。確かに総隊長の役目はとても重要ですが、下手な真似をして総隊長の身に何かあってはそれこそ目も当てられません。それくらいならば、いつそ何の成果も挙げられなかった方がマシなレベルです」

彼女が担当するターゲットである東京の高校に通う兄妹2人は、世

界中の有力者が一目置き、そして同時に最大級の警戒心を抱く。野原しんのすけ”と親しい関係にあった。妹はクラスメイトとして、兄は学内自治活動での良き相棒として、友人と呼んで差し支えない間柄となっている。

それが上層部の頭を大いに悩ませた。しんのすけが有する”主人公補正”は、自身やその周辺の人物に敵対的行動を取る者に対して発動される。その容疑者2人を下手に突つつくことで力の矛先がこちらに向けば、どのような結果になるか予想もできない。かといって、軍事的脅威をそのまま放置しておくこともできない。

そうして考えた結果、万が一に備えて畑違いではあるが戦闘力は申し分ないシリウス少佐を矢面に立たせ、多くの専門家が彼女のバックアップに当たるという体制を採用したのである。

「野原しんのすけもそうですが、この2人自身も油断ならない相手です。戦略核を凌駕する魔法の使い手かもしれないうえに、こちらの調査でも正体を掴ませなかった。だからこそ総隊長の役目は諜報そのものではなく、容疑者に接触して揺さぶりを掛ける面の方が大きいと思われれます」

「ええ、そうでしょうね。諜報技能に関しては、私は素人同然ですから」

「だとしたら、変に気負わずに学生生活を満喫した方が良いかもしれませんよ。その方が、相手が隙を見せる可能性も高い」

「……まあ、そうかもしれないね」

シリウス少佐はカップをテーブルに置いて立ち上がると、カノーパス少佐の正面へと回った。

「ベン、留守中のことはよろしくお願いします。残りの脱走者の処分も終わっていない状況で、本来私が負うべき役割をあなたに押しつけるのは心苦しいのですが……、私の代わりをお願いできるのはあなたしかいませんので」

「お任せください、総隊長。少し早いですが、いつてらっしゃいませ」

慈しみの籠もった笑顔で敬礼をする部下に、シリウス少佐は感謝の意を込めた笑顔で返した。

*

*

*

脱走兵が人知れず処断された現場から2キロほど離れた路地裏で、1人の男がフラフラと覚束ない足取りで歩いていた。

麻薬密売の取引所となっているクラブに入り浸り、自身もバイトと称して何回か運び屋のような真似をしている二十代半ばのその男は、酒を呑んで上機嫌に鼻歌を口ずさみながら自身の家へと向かっていた。夜も更けているため近所迷惑になりかねないが、周りには彼を注意する通行人の姿も無い。

と、そんな男が突然苦しそうに声をあげながら、その場に倒れ込んだ。上着の左胸辺りを鷲掴みにしながら苦悶の表情を浮かべていたが、やがてパタリと動きを止めて静まり返る。

そうしてしばらく経った後、男が何事も無かったかのようにスツと立ち上がった。その表情には苦悶の色は微塵も無く、体中から不機嫌を表すオーラが滲み出ている。

そして男は、ポツリと吐き捨てた。

「——ったく、暑苦しいお嬢ちゃんだったわ。ああいうの大嫌い」

第73話 「リーナちゃんがやって来たゾ」

西暦2096年の元旦は、司波兄妹はいつも通り2人で迎えた。父親は今年も後妻宅（兼セカンドハウス）だろうが、達也たちにとっても気まずい思いをしなくて済むので文句は無い。

達也も深雪も、正月だからといって自堕落な生活には縁が無い。普段の登校時間とさほど変わらぬ時刻に玄関で待っていた達也は、深雪の「お待たせしました」の声に目を上げる。

光沢のある赤い生地に、白と薄紅で図案化した牡丹ポタンを描いた振袖。白粉おしろいなど必要無いほどに透き通る白い肌に、ただ1ヶ所だけ色鮮やかな紅を差した唇。結い上げた髪に揺れる枝垂れかんざしが若干子供っぽいが、むしろそれが大人びた美貌の中で年相応の可愛らしさを演出するアクセントとなっている。

伝統的な振袖で細い腰とボリユームを増した胸を表現しつつ、襟元は慎ましく隠し淑やかに振る舞うその様子を見て、達也は冗談抜きで「世界一可憐な艶姿」だと誇らしげに感じていた。

「うん、とても綺麗だ」

「もう、お兄様だったら……からかわないてください」

恥じらいつつも視線を外さず上目遣いで抗議する姿は、免疫の無い男性なら（そして一部の女性も）悶え死にそうな破壊力があつた。それをあつさり受け止め「じゃあ行くか」と促す達也は、さすが伊達に深雪の兄を16年務めていないというべきだろう。

そんな遣り取りを経て玄関を出た2人を、無人運転のコミューターが出迎えた。しかし無人運転ではあっても無人ではなく、後部座席には1人の成人男性と1人の成人女性が乗っている。

「明けましておめでとうございます、師匠」

「明けましておめでとうございます、九重先生。本年もよろしく願い致します」

達也が手短かに挨拶をし、深雪が丁寧に腰を折る。

そんな2人に対し、というより深雪に対し、九重八雲はシートに座ったまま嬉しそうな笑顔で応えた。

「いやあ、今日の深雪くんは一段と艶やかだねえ。吉祥きつしやうてん天もかくやの麗しさだ。今日の深雪くんを目にしたならば、須弥山しゆみせんの天女も羞恥に身を隠してしまうかもしれないね」

「……もつと他に言うことがあるでしょう」

僧侶としては似つかわしくない、しかし八雲個人としては実に似つかわしい台詞を吐く彼にツツコミを入れたのは、彼と同じコミューターから姿を表した小野遥だった。

「小野先生、明けましておめでとうございます。しかし宜しいのですか、師匠と一緒にの場所を見られても？」

「おめでとう司波くん、新年早々嫌なこと聞くのね。——先生と会ったのは偶然よ、今日はあなた達の引率に来たんだから」

偶然会った相手に「先生」という呼称はどうだろうか、そもそも高校生相手に引率というものも些か苦しいのでは、など色々とツツコミを入れたいところはあるが、待ち合わせの相手は2人だけでないため、このまま玄関前で話をするのは宜しくない。

達也が深雪の乗車に手を貸し、ドアを閉めてドライバーシートに乗り込んだところで、自動運転のコミューターが駅に向かって出発した。

主に深雪が原因で大層な視線を浴びながら駅まで歩き、キャビネットに乗って今回の待ち合わせ場所の最寄り駅まで向かい、そして待ち合わせ場所までの徒歩5分に再び大勢の視線を浴びた一行を出迎えたのは、

「わっ、深雪さん！ 綺麗ですね！」

「明けましておめでとうございます、達也さん。良くお似合いです、少し意外ですけど」

うっとりとした表情で挨拶もすつ飛ばして深雪を褒めたのは、ロングワンピースの上からファー付きのケープコートを羽織った美月だった。その熱視線は、隣の達也が見えているのか疑問に思うほどだ。

そして彼女の隣に立つ振袖姿のほのかは、クラスメイトの艶姿に圧倒されて最初は怯んだ様子だったが、地味ながら普段とは違う姿の達也に意識が逸れたため、すぐに笑顔を取り戻していた。

一方達也は、ほのかの最後の一言に自分の衣装を見下ろして苦笑いを浮かべた。

「意外ということは、やっぱり少し違和感があるのか？」

「いやいや、良く似合ってるぜ達也。どこぞの若頭かって貫禄だ」

「ヤクザは言い過ぎかもだけど、羽織袴がそこまで様になる高校生は珍しいわね」

「どちらかというと、与力か同心のイメージだね」

本気かからいか判別の付きにくい口調で答えるのは、普段通りジャケツト姿のレオだった。そしてそんな彼に、1歩遅れてついて来ていた遥と八雲がそれに続く。

確かに彼らの言う通り、達也の羽織り袴に雪駄という純和風な装いは実に良くはまっていた。いっそ腰に大小と十手を差していないのが寂しく感じるほどだ。

本日待ち合わせしたのは、美月・ほのか・レオの3人。エリカと幹比古は多数の門下生を抱える実家の都合で参加できず、雫はいよいよ留学間近ということで、こちらも実家の都合上参加を見送った。

そしてしんのすけは、年末年始を春日部で過ごすために帰省していた。夏休みは九校戦もあって帰省していなかったため、春日部の地を踏むのは実に9ヶ月ぶりとなる。おそらく今頃は家族や幼馴染み、そして個性豊かな春日部の住人達と楽しくやっているとだろう。

「あれっ、遥ちゃん。明けてましておめでとーございます」

「明けてましておめでとーございます、小野先生。——あの、こちらの方は？」

レオが砕けた風に新年の挨拶を述べ、ほのかが見慣れぬ成人男性に疑問の表情を浮かべる。

「九重寺住職、八雲和尚かしよう。俺達からしたら、忍術使い・九重八雲師の方が通りが良いかな？ 俺の体術の先生だ」

達也の紹介に美月とほのかが目丸くし、レオが何やら納得顔で頷

いた。

「成程、だから日枝神社にしようって話だったのか」

「ん？ どういうこと？」

「和尚かしやうってことは、天台宗の坊さんってことだろ？ 山王信仰さんかうと台密たいみつ

は切っても切れない関係じゃんか」

当然の知識かのように説明するレオに、八雲の弟子であるはずの遥は頭に疑問符を浮かべ、八雲は若いのに博識だと満足そうに微笑んでいた。

互いに自己紹介を終えた彼らは、遥と八雲が一緒にいる理由を訊くことも無く参拝する流れとなった。参道の両側には前世紀からお馴染みとなった光景である露店が並んでいるが、世界的な食糧危機の頃には姿を消していたものであり、当時を知る年配の人々には感慨深い光景だろう。

とはいえ、戦後生まれの達也たちにとっては無縁の感傷だ。戦乱の時代を生き抜いたしんのすけだったらどんな反応を見せるのか気になるところだが、この場にはないので考えるのも詮無いことだ。

露店に寄るにしても参拝後ということで、彼らはまっすぐ本殿へと向かった。長い階段を昇って神門を潜り、拝殿前の中庭に入る。

と、達也は不意に視線を感じた。不躰にジロジロ見るものではなく、こちらを窺い見るようなものだった。

「達也くん、心当たりはあるかい？」

「いいえ、ありません」

「異人さんには、達也くんの格好は珍しいのかねえ」

八雲の言う通り、その「異人さん」は金髪碧眼の少女だった。しかし現代では、その外見だけで外国籍だと決めつけられるわけではない。それに彼女の面立ちには、どこことなく日本人めいた印象を受ける。その点から考えても、彼女は自分達と同世代と見て良いだろう。「お兄様、何をご覧になっっているのですか？ ——まあ、綺麗な子ですね」

その言葉に深雪がどのような感情を込めたか分からないが、深雪が「綺麗」と褒めても嫌味にならないほどの美貌であることは達也も

同意だった。色鮮やかな髪と瞳は、深雪と対照的な美少女と言える。しかし、達也が「深雪以外の少女」に見惚れるようなことは無い。なので彼は、そのような意味で彼女に注目していたわけではない。

そのことを頭に入れながら、深雪は改めて彼女を観察した。

鮮やかなグリーンのパーカー、赤を基調とした黒チエツクのミニスカート、脚全体を覆うダークブルーのタイツ、鮮やかな赤色をした膝下までのストレッチブーツ、そして鮮やかな金髪の上にはデニム生地の青い帽子に、厚手の赤い手袋。日本の神社よりは原宿辺りの方が馴染みそうなファッションではあるが、特に外見上はおかしな点は見られなかった。

しかし、なぜだろうか。初めて見たはずにも拘わらず、彼女から「既視感」のような謎の印象を受けるのは。

「お兄様、彼女に何か不審でも？」

「いや、不審というほどでもないが……。彼女のファッション、しんのすけが好きな「アクション仮面」と色合いがそっくりだと思ってな」

「——ああ、成程！」

自分が抱いた既視感の謎が解けた、と深雪は思わず声をあげた。確かにそう言われると、去年の横浜事変の際にしんのすけが着ていたアクション仮面のコスチュームと重なって見える。キャラクターを知らない者にとっては普通のファッションにしか見えないが、逆に一度意識するともはやそれとしか見えなくなってしまうほどだ。

と、その少女がふいに達也たちの方へと歩き出した。一瞬こちらの会話が聞こえたのかと身構える深雪だったが、彼女の表情は特にこちらを意識したものではなく、深雪はホツとした様子で構えを解いた。そのまま少女は彼らと擦れ違い、先程彼らが昇ってきた階段へと向かっていった。

擦れ違いざまに意味ありげな眼差しを向けてきたのは、けっして達也の錯覚ではなかった。

もつとも達也にとって一番印象深かったのは、その意味ありげな眼差しではなく、

「……どうやら、偶然の一致ではなさそうだな」

グリーンのパーカーの背面にでかどかとプリントされた、アクシオン仮面が笑顔で決めポーズを取る全身図だった。

* * *

アンジェリーナ・シールズ少佐（コードネーム：アンジー・シリウス）に与えられた任務は、潜入捜査でありながら陽動の意味合いが大きい。その一環としてターゲットの容姿を確認すると同時にこちらを印象づけるためのファーストコンタクトは、どうやら上手くいったようだ。

気配を隠して近づいたら気づかれないのでは、と最初は思ったのだが、部下の言う通りそれは杞憂に終わった。しかし本人としては、あそこまであつさりと感じかれるのもそれはそれで釈然としない。

まあ作戦が成功したのだから別に良いか、と彼女は気持ちを切り替えながら、今回の任務における生活拠点であるマンシヨンのドアを開けた。

「お帰りなさい」

「シルヴィ、帰っていたんですか」

わざわざ玄関まで出迎えた年上の同居人に、彼女は愛称で話し掛けた。

同居人の名は、シルヴィア・マーキュリー・ファースト。〃シルヴィア〃以外はコードネームであり、スターズ惑星級魔法師〃マーキュリー〃の第1順位を表している。階級は准尉、年齢は25歳。まだ若いながら〃ファースト〃を与えられた、将来を期待された女性准士官である。

シルヴィアは元々軍人志望ではなく、大学ではジャーナリストを専攻していた。今回はその情報分析能力を買われて、シリウス少佐の補佐役に抜擢されたのである。

「シルヴィ?」

その同居人がなかなか返事をせず、まじまじと自分のことを見つめているのに気づき、シリウス少佐は疑問の声をあげた。

「……リーナ、何ですかその格好は」

「これですか？　せつかくターゲットに接触する最初の機会ですからね、気合を入れてアクション仮面と同じカラーリングになるようにしました。我ながら自然に再現できたと思うんですが」

「そんなことだろうと思いましたが……。それで、そのパーカーは？」
「これに目をつけるとは、さすがシルヴィー！　これ、10年ほど前に有名なアパレルブランドとコラボして作られた限定物で、今だと結構値が張るんですよ！　こういう機会でないと、なかなか着られませんからね」

シリウス少佐改めリーナは、その場で1回転でもしそうな勢いでシルヴィーに自分のファッションを見せた。彼女が頭痛を堪えているような表情をしていることには気づかない。

「……ところでリーナ、ターゲットの注意を惹くことはできましたか？」

「はい、上手くいったと思いますよ」

「そうですか、それは何よりです。ところで、その格好では目立ちませんでしたか？」

「そういえば、周りの人達がやたらとこちらを見ていたような……。とはいえ、あれは外国人が珍しかっただけでしょう。気にするほどではありませんよ」

アハハと軽く笑って流すリーナに、シルヴィーは溜息を漏らしそうになるのを堪えながら部屋の中を見渡した。数日前に引っ越してきたばかりだが荷解きは既に終えており、備え付けの家具に自国から持ってきた様々な生活用品が全て収まっている。

しかしそれはあくまで“生活用品”のみであり、アクション仮面を始めとした様々なキャラクターのフィギュアが低めの棚の上に所狭しと飾られ、部屋のどこに目を向けても必ず視界に入るくらいの勢いで壁には同作品のポスターが貼られていた。

「リーナ、私は『必要最低限の荷物に纏めるように』と言いましたよね？」

「はい、もちろん憶えていますよ。言われた通り、本当に必要な物だけを

持ってきています」

「……フィギュアやポスターも、その必要な物の内ですか？」

「もちろんです。慣れない土地で慣れない任務をするのですから、私にとつては何よりも必要なんです。これでもかなり厳選した方なんですよ」

そう力説するリーナの表情は実に真剣なもので、冗談でも『ふざけているのか』と叱責できるものではなかった。

「……………」

だからこそ、シルヴィアは思わず頭を抱えてしまったのだが。

*

*

*

色々あった冬休みも終わり、今日から新学期が始まる。

その「色々あった」の中には、海外へと旅立つ雫を空港で見送りに行った際に突如繰り広げられた「涙の別れ」（主演：雫・ほのか、助演：深雪・美月）に巻き込まれるというイベントも含まれていたが、きつとそれも良い思い出に変わるに違いない。というか、そうであつてほしい。

A組には今日から雫の代わりに留学生が来るはずだが、とりあえず達也にとつては他人事だった。深雪が留学生の世話をすることになる以上は無関係ではいられないが、少なくとも自分から積極的に関わる意思は無い。

しかし彼のスタンスはやはり少数派であり、2時限目後の休み時間には物見高い友人によつて噂話の渦に巻き込まれていた。

「何か凄い美人なんだって。綺麗な金髪でさ、上級生まで見に来てるらしいよ」

「エリカは見に行かないのか？」

「あんな人集りじゃ入っていけないって」

「へえ、おまえでも遠慮ってモンを知ってたんだな——いつてえ！」

エリカの手厳しいツツコミを後頭部に受け、レオは前のめりに体を折つて悲鳴をあげた。あんなことを言えばそうなるのは目に見えて

いるのになんで言うんだろうか、と達也は割と本気で不思議に感じた。

頭を抑えて悶絶するレオを尻目に、エリカは何食わぬ顔で達也へと向き直る。

「まあ、アタシは女だしね。いくら美少女とはいえ、あんな窮屈な所を掻き分けてまで見に行く気にはなれないのよ」

「別にそれだけが目的じゃないんじゃないか？ 転校生すら想定していない魔法科高校で、しかもここ十年以上は無かったであろう留学生がやって来たんだ。好奇心の1つでも湧くだろう」

「以前のことは知らないけど、今回留学生が来たのはここだけじゃないみたいだよ」

3人の雑談に割って入ってきたのは、幾何準備室から戻ってきた幹比古だった。

「第二、第三、第四高校でも短期留学生の受け入れがあったそうだよ。大学の方にも共同研究の名目で何人か来てるらしい。ウチの門人が話してたから」

「あつ、大学の方はアタシも聞いた。この前の横浜事変で飛行魔法の軍事的有用性に気づいた国が、慌てて探りを入れに来たんじゃないかって噂してた」

古式魔法と現代魔法の違いはあれど大勢の門下を抱える千葉家と吉田家だと、やはり入ってくる情報量が個人のそれとは桁違いだ。どうやらUSNAは想像以上に大掛かりで人員を投入しているらしく、真夜から聞いていたときよりも事態は一層深刻化しているのだと達也は感じた。

と、どうやら悶絶から復活したらしいレオが、その遣り取りを聞いてこんなことを聞いてきた。

「ってことは、A組の留学生もスパイってことか？」

「いや、アンタねえ……」

「レオ、そういうのは思っても言わない方が良いよ」

「そうだよレオくん、私達も同級生として付き合っていかなきゃいけないんだから」

エリカが呆れたように吐き捨て、幹比古が苦い表情で苦言を呈し、そして幹比古から少し遅れて教室に戻ってきた美月からも責められたレオは、さすがに今のは失言だと感じたのかガツクリと肩を落とした。

と、美月が「そういえば」と声をあげた。

「A組で思い出したんだけど、しんちゃん、今日はまだ学校に来てないんだって」

「えっ、マジかよ。まさか風邪でも引いたのか？」

「分からないけど、今まで学校を休んだことなんて無かったから結構噂になってるみたい」

一科生と二科生の教室は建物からして完全に分かれているので、片方の間で交わされる噂がもう片方にまで広がるのはかなり珍しい。どちらの区別も無くあちこち動き回っている彼ならではの現象といえよう。

それを聞いたレオと幹比古の反応は、随分と珍しいこともあるもんだな、という程度だった。その話題を持ち掛けてきた美月も、その2人とあまり大差ないように見える。

しかしクリスマスパーティーで留学生に対する疑いを吐露していたエリカは、他の3人にバレないようにこっそりと達也に目配せしていた。達也もそれに気づき、よく見なければ分からない程度に小さく首を横に振って応える。そしてエリカはそれを見て視線を戻し、3人の会話に何気なく加わった。

——いや、さすがにここまで早く仕掛けるとは思えないが……。

内心ではそう思いながらも、どうにも不安を拭いきれない達也だった。

*

*

*

あまり留学生とは関わりを持ちたくないと考えていた達也だったが、残念ながら予想していた可能性の中で最も早い段階で関わりを持つこととなってしまった。

それは昼休みの学食でのこと。昨年までの習慣に倣って先に席を取って深雪達を待っていると、深雪とほのか、そしてそこに並んで金髪碧眼の少女がこちらに歩いてくるのが見えた。

双眸の深い蒼は、水や氷というよりも蒼穹の空を思わせる。

頭の両脇にリボンで纏めた波打つ黄金の髪は、解けば背中の中半ばを超えるだろう。A組では一番の長さを誇る深雪のそれよりも長いかもしれない。

高校1年生にしては大人びた顔つきは、やはり欧米の血が色濃いことによるものだろう。その割にコケティッシュな髪型は少し不釣り合いに見えなくもないが、それが却ってシャープな美貌の印象を和らげて親しみやすさを演出している。

そんな彼女を見た達也は「おやつ？」と意外感を覚えて少しだけ眉を上げた。髪や瞳の色は聞いていたし、美少女であることも散々聞かされている。達也が驚いたのはそこではなく、彼女が日枝神社で見掛けた例のアクション仮面ファクションの異人さんだったからだ。

「同席させてもらって良いかしら？」

少女の口から、ややアクセントを強調した話し方ながらも流暢な日本語が流れ出た。さすがに日本に留学してくる（もしくは留学生を装って潜入する）だけのことはある。

少女の視線は達也に向いていたため、自然と達也がそれに答える役目となった。彼は特に気負う様子も無く「勿論どうぞ」とぎっくばらんに応える。そうして深雪達3人が料理を取ってくるまでの間に周りに椅子を持ってきて、3人がそこに腰を下ろして昼食会が始まった。

「それじゃみんな、紹介するわね。アメリカから来た、アンジェリーナ・クドウ・シールズさんよ。もう聞いてると思うけど、今日からA組のクラスメイトになった留学生よ」

「リーナって呼んでくださいね」

深雪の紹介に合わせて、リーナが華やかな笑みと共に一礼した。

「E組の司波達也です。深雪と区別がつかないでしょうから、達也で良いですよ」

「ありがとう。それと敬語は無しにしてくれれば嬉しいんですけど」
「分かった。そうさせてもらうよ、リーナ」

「よろしくね、タツヤ」

リーナがテーブル越しに手を伸ばしてきたので、達也はその手を押し戴くように下からそつと握った。まるで貴婦人に接吻でもするかのような所作が意外だったらしく、リーナの目に明らかに動揺が走った。

「もしかして、タツヤってミユキのお兄さん？」

「ああ」

ポーカークフェイスはあまり得意ではないのか、と思いながら達也は頷いた。先程深雪が自分のことを「お兄様」と呼んでいたことについては指摘しなかった。

「あたしは千葉エリカ。『エリカ』で良いよ、リーナ」

「柴田美月です。『美月』と呼んでください」

「俺は西城レオンハルト。『レオ』で良いぜ。がさつ者なもんで、こういう口の利き方だけど気にしないでくれ」

「吉田幹比古です。僕のこと『幹比古』で良いよ」

「エリカ、ミツキ、レオ、ミキ・ヒコね。よろしく」

幹比古の名前だけ辿々しく聞こえたのは、やはり外国人にとって彼の名前は発音しにくいからだろう。

「言いにくいでしょう？ 『ミキヒコ』じゃなくて『ミキ』で良いんじゃない？」

「ちよつと待って、エリカ——」

「あら、そう？ じゃあ、お言葉に甘えて『ミキ』で良いかしら？」
「……ええ、それで良いですよ」

リーナがホツとしたような笑みと共にそう言ってきたとなれば、幹比古としても了承せざるを得なかった。ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるエリカには、どうせ効かないと分かっているながらも一睨みして抗議の意思を伝えた。

そこからは、わざわざ日本料理の代表である蕎麦を選んで危ない手つきで箸を使うリーナへの質問タイムとなった。不躰な質問をする

者が1人もいなかったこともあり、彼女は全ての質問に嫌な顔1つせず答えてみせる。

そうして随分と打ち解けてきた段階で、おそらくこの場にいる全員が気にしているであろう疑問を達也が尋ねた。

「リーナのミドルネームが『クドウ』ということとは、もしかして九島閣下のご血縁なのか?」

「ああ、そういえば聞いたことあるぜ。確か『老師』の弟さんが渡米されて、そのまま向こうで結婚したんだったよな?」

「ローシ?」

「ああ、日本では九島閣下のことを『老師』と呼ぶこともあるんだ」

レオの言葉に首をかしげるリーナに、達也が横から説明を入れた。

「閣下」も「老師」も九島烈を指す敬称だ。しかし「老師」はもっぱら日本の魔法師の間で使われるものであり、公的に通用するのは退役将官であることに由来する。「閣下」の方である。

「昔のことなのに、よく知ってるわね。ワタシの母方の祖父が、九島將軍SHOGENの弟なの」

「へえ、向こうでは九島閣下のことを『將軍』って呼ぶのね」

「随分長い間、日本の魔法師を指導する立場にいらっしやっただけからな。アメリカではそのイメージが強いんだろう」

達也の説明に、エリカ達は「へー」と声を漏らした。

「そういう縁もあって、ワタシのところに留学の話が来たみたい」

「じゃあ、リーナも自分から留学を希望したわけじゃないんだ?」

「えっ? ええ、そうよ。先生の方から話が来て、受けることにしたの」

リーナの言葉の後にすかさず差し込まれたエリカの質問に、若干の緊張と動揺と共にリーナが答えたのを、達也は見逃さなかった。

なのでついでに、もう1つ揺さぶりを掛けてみることにした。

「リーナ、名前ついでにちよつと訊きたいんだが」

「何かしら、タツヤ?」

「アンジェリーナの愛称は普通『アンジー』だと思うのだが、俺の記憶違いだったかな?」

その質問は、特におかしなものではなかった。この場に同席していた面々のほとんどは、話の流れで尋ねてみた程度のものだと思っただろう。

しかしその質問に対して、ほんの一瞬だけだったが、リーナの目に狼狽が過ぎった。

「いえ、記憶違いじゃないわよ。でも『リーナ』って略すのも珍しいわけじゃないの。小学校の同じクラスにアンジェラって子がいて、その子が『アンジー』って呼ばれてたから」

「ああ、だから『リーナ』と呼ばれるようになったんだな」

納得したといった感じに頷く達也に、ニコニコと笑顔を振りまくリーナ。

全員が食べ終えたことだし、そろそろお開きか、と達也が口を開こうとして、

「いやあ、皆様お揃いで、お久し振りですなあ」

突如背後から聞こえてきた耳馴染みのある声に、全員がそちらを振り向いた。

左腕に紙袋をぶら下げるしんのすけの姿に、その場にいた全員が大なり小なり驚いた様子で目を見開いた。つまり、その中にはリーナも含まれていた。

「しんちゃん、今学校に来たの？ 朝から来なかったから心配したよ」

「いやあ、今日から学校が始まるのをすっかり忘れててさあ。家でのんびりしてたら今日から学校なのを思い出して、急いで走ってやっと着いたところだよ」

「ちやつかりじゃなくて、うつかりね」

「とにかく、風邪とかじゃなくて良かったです」

「いやあ、ゴメンゴメン。これ、お土産の草加煎餅ね」

ラッピングされていない、中身が丸見えの透明な袋に入れられた煎餅を、しんのすけは1人1袋ずつ達也たちに手渡していった。誰も鞆など持っていないので、少なくとも教室までは剥き出しの状態で持つていかなくはいけない自分の姿を想像し、誰もが苦笑い混じりで受け取っていく。

そうして友人達全員に手渡したところで、しんのすけの視線がリーナへと向いた。ピクン、と彼女の肩が跳ね、ほのかが若干身を乗り出して横から説明をする。

「紹介するね、リーナ。彼は私達と同じA組の野原しんのすけくん。——しんちゃん、彼女が留学生のアンジェリーナ・クドウ・シールズさん」

「Hi、シンノスケくん。ワタシのことはリーナって呼んでね。代わりにワタシもシンちゃんって呼ばせてもらおうから」

深雪とまとも張り合うレベルの美少女から笑顔でそう言われれば、普通の少年ならば多少舞い上がってしまっても不思議ではない。しかししんのすけはそんな普通の少年からかけ離れた存在なので、そんな彼女にも普段通りのマイペースを崩さなくてもまったくおかしくない。

しかし、リーナの挨拶に対する彼の返事は、全員の予想を大きく裏切るものだった。

「おおつ、リーナちゃん！ お久しぶりぶり〜！ まさか留学生がリーナちゃんだなんて思わなかったゾ！」

「——！」

いくら初対面の相手にもフレンドリーに接するとはいえ、しんのすけの口振りはまるで彼女と旧知の仲であると主張するものだった。当然のことながら、その場にいた全員が一齐にリーナへと視線を向ける。

しかし当のリーナ自身が、完全に不意を突かれた様子で驚きに目を見開いていた。皆からの視線にも彼女は戸惑いの表情で返し、そしてしんのすけに対しても恐る恐るといった感じで辿々しく問い掛ける。「え、えっと、シンちゃん……？ ワタシとは初対面だったと思うんだけど、ワタシのことを知ってるのかしら……？」

だがしんのすけは彼女の質問には答えず、両腕を組んで「いやあ、それにしても随分と大きくなりましたなあ」と親戚のおじさんのような台詞で懐かしさを噛み締めていた。

そして彼は、さらに特大の爆弾を落とすとしていく。

「ところでリーナちゃん、こんな所にいるってことは、アメリカの軍隊は辞めちゃったの？」

「……………、はっ？」

『ワタシがアメリカの平和を守るんだ！』って、あんなに張り切ってたのに！ “スターズ” だっけ？ あそこって凄く優秀な人じゃないと入れないんでしょ？ せっかく頑張って入ったのに、何だか勿体ないゾー！」

「……………」

「ああ、でも軍隊って訓練が凄く厳しいんだっけ？ だったら辞めちゃっても仕方ないかあ。でもまあ、辞めたとしても人生長いんだし、リーナちゃんくらい魔法ができるんだったらどうとでもなるでしょ。ダイジョーブダイジョーブ」

「……………」

「そういえばリーナちゃん、オラみたいな “必殺技” を持ちたいってあのとき言ってたけど、あれから何か使えるようになったの？ もしできたんなら、せっかくだしオラに見せてほしいゾ。あっ、それともそんなに簡単に使えないとか？」

「……………」

「あれっ、リーナちゃん？ どうしたの、さっきから黙っちゃって——」

「本当に久し振りねシンちゃん懐かしいわ懐かしすぎてちよつと2人で話したくなってきたからみんな悪いんだけどちよつと失礼させてもらうわねシンちゃんも一緒にこっち来てー！」

純日本人ですら噛まずに言えるかという長台詞を息継ぎ無しで言い切ると、達也たちの返事も聞かずに、自分が食べた蕎麦の器も片付けずに放置して、しんのすけの背中を押しながら、まさしく逃げるように食堂を後にしていった。ただでさえ目立つ留学生のそんな行動に、学食を利用する生徒達がギョツとした表情で彼女を見遣るのが見える。

一方取り残された達也たちだが、彼女の行動を無礼だと怒ることは無かった。全員がそんなことを気にするどころではなく、2人が食堂を出ていくのを黙って見送っている。

やがて2人の姿が見えなくなった頃、エリカが口を開いた。

「えーっと、今のは聞かなかったことにした方が良いのかな？」

その問いに答えられる者は、1人もいなかった。

第74話 「オラ達だけの秘密だゾ」

リーナが留学生としてA組にやって来た、その日の夜。

司波家の地下にある作業室、その機材の1つである想子^{サイオン}波測定装置を内蔵した検査用ベッドに、深雪が下着姿で寝転がっていた。服自体にもエイドスが存在し、僅かながらサイオンを放出・吸収することによるノイズの発生を防ぐためのものであり、達也に疚しい気持ちは一切無い。その証拠に、測定結果のデータが表示された画面を見つめる達也の表情は、まるでアンドロイドのようなポーカーフェイスだった。

むしろそれに対して深雪が不満そうにする中、達也は測定を終了して画面から目を離れた。その際にほんの微かな、しかし深雪には確かに感じ取れるレベルで憂慮の色が浮かぶ。

「何か至らぬところがございましたか、お兄様？ どうぞ遠慮なさらず仰ってください」

「いや、至らぬところがあるとすれば俺の方だ。魔法式構築規模の上限が予想を超えてレベルアップしているせいで、CADの処理能力がおまへの魔法力について行けていないようだ。余裕を持たせた設定にしていたつもりだったが、読みが甘かったな」

「すみません……」

「何を謝るんだ？ 逆に誇るべきことなのに」

シユンと俯いてしまった深雪を慰めるように頭を撫でると、彼女はふと顔を上げて嬉しそうに笑みを浮かべた。そこまでは良いのだが、頬を紅く染めるのは如何なものだろうか。

沈黙に居心地の悪さを覚えた達也は、若干早口気味に彼女が成長した理由を口にする。

「ヘクソン対策に開発した魔法が相当な情報量だったからな、何度も構築して訓練したことで鍛えられたんだろう」

ヘクソンのテレパシー能力に対抗する形で開発された例の精神干涉系魔法は、ヘクソンが行動不能になるレベルの莫大な情報量を操る必要がある。その情報量は並の魔法師ではまともに発動すらできな

いほどであり、単純な難度でいうと魔法師ライセンス試験でA級受験者の用の課題として出題される「氷炎地獄^{インフェルノ}」をも軽々と凌駕する。

いくら精神干渉系魔法に適性があり規格外の才能を有する深雪といえど1回や2回の練習で安定して発動できる代物ではなく、何度も練習を重ねてようやく使えるようになったほどこだ。とはいえこの場合は、論文コンペまでの短い間に使えるようになった深雪を褒めるべきだろう。もしくは、一度対峙した相手への対抗策として、自分でも使えないような高いレベルの魔法を開発してしまう達也を褒めるべきだろうか。

深雪のCADを改良するのはまた後日ということで、2人は検査を切り上げて地下の作業室から1階のリビングへと移動した。部屋着に着替えた深雪が達也のコーヒーを用意し、ソファーに座る達也の前に置いてから自身もその正面に腰を下ろす。

普段なら隣にでも座って密着するかどうかという距離にまで詰める彼女が、キチンと膝を揃えて真剣な表情でまつすぐ達也を見据える。深雪が彼に何か大事な話や相談をしたいと思っっていることを示す無意識の表れであり、それを感じ取った達也は目配せのみで彼女に話を促した。

「ところでお兄様、リーナのことなのですが」

おそらくずっと気になっていたのだろう、満を持してといった感じで話を切り出した深雪に、達也は何とも言い難い微妙な表情を浮かべた。口元は笑みを浮かべているものの、微笑むというよりは苦笑いに近い。

「今更言うまでも無いと思うが、かなり高い確率でリーナは「アンジー・シリウス」と思われる」

「……はい、私もそう思います」

本来ならば驚くべき事実なのかもしれないが、昼間の出来事のせいで微塵も意外性の無いものとなってしまっていた。

「しんのすけのことが無かったとしても、叔母上の「忠告」と合わせて考えればリーナがスターズの一員であることはほぼ決定的だ。おそらく彼女が単独で潜入しているわけではないだろうが、戦略級魔法

師の疑いがある者と接触するとなれば必然的に戦闘力のある者が矢面に立つ必要がある。特に俺達はしんのすけと近い関係にある。そんな人間と接触するとなれば、おのずとスターズの中でも上の人間に絞られるだろう」

「お兄様がリーナに渾名のことを尋ねたのは、やはり鎌を掛けたものだったんですね」

「鎌を掛けるという意味でなら、エリカの質問もそうなるな。あれで少なくとも、彼女が今回選ばれたのが上層部の意向であることは分かった」

渾名については深雪もすぐに分かったが、エリカの質問については思い至らなかった。深雪は反省するように若干俯くが、達也の口を開く気配にすぐさま気を取り直して彼へと向き直る。

「とはいえ、諜報活動に使うにはシリウスはあまりに大物すぎる。それだけ俺達、もしくはしんのすけを危険視しているとも考えられるが、リーナとしんのすけが旧知の仲だというならば彼女が抜擢されたのにも納得がいく」

「しんちゃんが好印象を抱くリーナならば、しんちゃんの『主人公補正』がリーナに牙を剥くことは無いから、ですね」

「少なくとも、彼女にとってマイナスになることは無いだろう。本人の感情を考慮しなければ、という注釈付きだがな」

最後に付け足されたかのような達也の言葉には妙に実感が籠もっており、深雪は苦笑いを抑えずにはいられなかった。

しかしその苦笑いもすぐに消え、深雪は心中に渦巻く心配事を吐露する。

「ですが、お兄様のことをスターズが嗅ぎ回っていることには変わりありません。四葉家がそれを放っておくとは思えないのですが……」
「確かに深雪の言う通りだ。あるいはスパイ活動はついでで、本来の任務が別にあると考えることもできる」

仮にそうだと考えれば、真夜がスターズの潜入を許していることにも納得がいく。四葉からしても達也の正体がバレるのは避けたいはずであり、その危険性を重々承知のうえで、何かしらの問題をスター

ズが解決することを期待している、のかもしれない。

「USNAがシリウスを国外に投入するほどの任務とは、いったい何でしょう?」

「分からないが、情報が無い今の段階で気にする必要は無いと思う。それよりも問題は——」

達也がそこで一旦言葉を区切り、深雪が真剣な表情で頷く。兄がこれから何を言おうとしているかなど、彼女には手に取るように分かる。

もつとも、大体の者には分かるレベルのものではあるが。

「なぜリーナ自身が、しんのすけのことを憶えていない素振りだったのか、だ」

*

*

*

司波兄妹がそんな会話を交わすのと、ほぼ同時刻。

第一高校から数駅離れた場所にある少人数家族用のマンションの一室が、リーナの現在の住まいである。

魔法科高校は全国に9つしかなく必然的に遠方からの生徒が多くなるが、それに反して第一高校には寮というものが無い。家事を取り仕切るホーム・オートメーション・ロボット(HAR)が一般家庭にも普及し、日頃の買い物もオンライン注文・個別配送で済ませられるとなれば、1人暮らしでも不自由しないというのがその理由だ。国からの支援によって学費が免除されているために生活費の心配が少ない、というのも大きな理由の1つだろう。

なので自宅から通えない生徒は部屋を借りることになるので、留学生であるリーナが部屋を借りていても不思議は無い。彼女はそれを良いことに、自身の補佐役であるシルヴィアも共に住ませ、実質的な活動拠点の役割も負わせていた。

「リーナ。あなたが調査を依頼した件について、本国からの調査結果を報告します」

そんな部屋のリビングルームにて、シルヴィアがL字型のソファ―

に座っていた。タブレットを片手に深刻な表情を浮かべるシルヴィアに対し、リーナは背筋を伸ばして毅然とした表情でそれを待つ。

「あなたと野原しんのすけが過去に知り合っている可能性については、本国で調べた結果そのような記録は存在しませんでした。記録上は、あなたと彼はあのとかが完全に初対面です」

「……つまり、上層部は私と彼が旧知の仲だと知っていて任務に抜擢したわけではない、ということですね？」

「そもそも、本当に彼と知り合いだったのですか？ あなた自身には、そんな記憶が無いのでしょうか？ 仮にあなたが何かしらの理由で記憶を改竄されていたとしても、軍の記録まで改竄することはできませんよ」

「……単純に、軍がそのことを把握していないという可能性は？」

「仮にこれが只の一般兵であれば、軍も見落としが無いとは言い切れません。しかしあなたは、USNA軍統合参謀本部直属の魔法師部隊の総隊長なのですよ？ あなたに対する身辺調査は他の兵士の比ではありませんし、今回の任務に当たって彼と面識が無いか改めて入念な調査が行われています。それも踏まえたとえでの結論なのですよ」

ハッキリとそう言っただけのシルヴィアに、リーナは拗ねているようにも見える表情で彼女に尋ねる。

「それではシルヴィアは、彼が嘘を吐いていると？」

「……こうは考えられませんか？ スターズが日本に潜入するという情報がどこからか漏れて彼に伝わり、彼はあなたがそのスパイかどうか確かめるために鎌を掛けた」

「シルヴィアだって、彼のことは知っていますでしょう？ 彼は良くも悪くも純粋で、自分の内心とまるで違うことを装えるほど器用な人間ではありません。実際に彼と話してみても確信しました、あれだけ感情が表に出る人間が鎌を掛けるなんて真似ができるとは思えません」

リーナの言葉に、シルヴィアは口を引き結んで黙り込んだ。しんのすけに関連する情報を頭に叩き込んでいる彼女から見ても、リーナの分析が間違ったものではないと思えたのだろう。

だからといって、彼女にとっては到底安心できるものではない。

「経緯は不明ですが、とにかく彼はあなたの正体を知っています。彼が我々のターゲットである司波達也や司波深雪にそれを告げ口しないという保障は無いのですよ。上層部の中には、任務を即座に中止して本国に引き上げるべきだという意見もあります」

「シルヴィアも、そうすべきだと考えているのですか？」

「……今すぐに、というのは却って危険でしょう。このタイミングであなたが第一高校を去れば、どんな理由を付けたところで『彼の言ったことが事実だから逃げ帰ったのだ』と思われると思います。そうしなければ他のメンバーの活動にも支障が生じるでしょう」

シルヴィアが自身の見解を述べても、リーナの表情に動揺は見られなかった。そんな彼女の態度に、シルヴィアは不審な目を向ける。

そもそもスパイにとつて、潜入先のターゲットや周辺人物に身元がバレるといのは、たとえどれほどのベテランだろうと何よりも恐ろしいものだ。しかも今回の場合、その恐怖を抱えながらしばらく任務を続行しなければいけない。スパイにとつて、これほど追い詰められる状況もそうそう無いだろう。

だというのに、リーナにはそれに対する恐れといった感情が微塵も見受けられない。いくら諜報活動が初めてとはいえ、そこまで思い至らないほど鈍感だとは思えない。

「……リーナ、改めて尋ねますが、野原しんのすけがリーナの『協力者』になったと考えて本当に宜しいのですね？」

シルヴィア達に『自分としんのすけとの関係を洗い直せ』とリーナが命じたのは、食堂を抜け出した直後のこと。おそらく彼の目を盗んで携帯端末で指示を出した後、彼女本人は（留学初日に学校を抜け出すという不自然さを重々理解したうえで）しんのすけを近くのアミレスに連れ込んで、2人きりで数時間にも及ぶ『話し合い』を行った。

そしてアミレスから帰還したリーナが、調査を終えて彼女の帰りを待ち侘びていたシルヴィアにこう告げた。

野原しんのすけを自身の『協力者』に仕立て上げること成功した、と。

「我々の調査に全面協力してくれる、というわけではありません。当然ですが、任務内容は彼に伝えていませんから。しかし私の正体については友人達にも秘密にすると約束してくれました」

「……つまり、リーナがスターズの一員であるという事実を否定することはできなかつた、ということですね?」

「残念ながら、それについては彼も確信していた様子だったので。ですが、だからこそ協力を得ることができたとも言えます。『自分は今の世界の平和を守る極秘のミッション』の真つ最中であり、そのために魔法科高校の留学生という立場で日本に潜入している』と言つたら、彼も嬉々としてそれに協力してくれたわけですから」

「……まさか、それを素直に信じたと言うんですか?」

「正義の味方が周りに自身の正体を隠しながら悪と戦う、なんてまるでアクション仮面みたいじゃないですか。特に彼の場合は今までの経験が経験ですからね、すぐに信じて私の正体隠匿に協力することを約束してくれましたよ」

自分の立場で言えたことではないが、そんなにすぐ信じて大丈夫なのだろうか、とシルヴィアはしんのすけに対して心配の情を抱くのを止められなかつた。

「とはいえ、ターゲット達には既に伝わってしまったてますよね? それはどうするんですか?」

「それについても、彼ともしつかり話し合つて口裏を合わせることにしています」

「思いつきりバラされて、口裏合わせも何も無いと思いますが……。具体的にはどうするのです?」

シルヴィアに問われたリーナは、なぜか若干のドヤ顔混じりで話し始めた。

その内容は、以下の通り。

2人は過去に数日ほど交友関係があったが、それは自身も記憶が朧げなほどに幼い頃。だから食堂で顔を合わせたときは即座に思い出せず、初めて会ったかのような反応になってしまった。2人が出会つた経緯については、今となつてはよく思い出せない。

しんのすけが彼女をアメリカ軍の兵士だと言ったのは、そのときに彼女が『将来は軍隊に入つて国の平和を守りたい』と語っていたのを勘違いして憶えていただけで、実際に軍隊に入っていたわけではない。しんのすけが話していた『スターズ』とか『必殺技』とかも、そのときに空想交じりで話していたのを中途半端に憶えていただけのこと。そして彼女が食堂であれだけ慌てていたのは、言ってしまうとそのときの空想があまり掘り返してほしくない『黒歴史』だったからである。

「いや、だいぶ無理がありません？」

「どうせ否定できるだけの証拠がないのですから、別に構いませんよ。私のような16歳の小娘がスターズの総隊長で戦略級魔法師である、というよりは遥かに現実味があるでしょう？」

如何にも納得していないという表情ではあったが、シルヴィアはそれ以上反論しなかった。達也たちが馬鹿正直にそれを信じるとは思っていないし、確実に警戒されるようになるだろうが、状況が状況だけに白々しくてもそれで押し通すしかないのも確かだ。

それに見方を変えれば、これはチャンスでもある。

今回の任務における最重要懸念は、何を置いても野原しんのすけによる『主人公補正』が自分達に向けられることだった。しかし彼がリーナに対して好意的な印象を抱いているとなれば、自分達に不利な状況となる可能性は格段に減らせる。

とはいえ、それを盲目的に信じ込むこともできない。

自分達の任務は彼の友人の身辺調査であり、その結果によっては彼らと敵対する可能性も充分に有り得る。そうなればしんのすけの『主人公補正』が自分達に向かうことは必然的であり、実際に発動するタイミングは現時点ですらまるで予想ができない。そしてそれは、彼が好意的な印象を抱くリーナですら例外ではない。

「……………」

だというのに、シルヴィアの見ている限り、リーナはそれに関してまるで心配している素振りが無かった。彼に対して全幅の信頼を寄せており、自分にとって悪いことにはならないという確信さえ持つて

いるように思えるほどだ。

確かにスターズではしんのすけに関する情報が多く取り扱われ、故に過去の功績やその為人ひととなりについても或る程度は把握している。しかしそれはあくまで机上の話であって、あたかも数年来の仲間かのように彼を信頼するなんて――

「……リーナ、訊きたいことがあるのですが」

「はい、何でしょうか？」

何の前触れも無くシルヴィアが尋ねても、リーナは身じろぎ一つせずに関心を促した。

まるで、最初から彼女がそうすると分かっていたかのよう。

「先程までの話が野原しんのすけとファミレスで話していた内容だとするのなら、数時間も話し込んだにしては随分と足りないように思えるのですが？」

「そうでしょうか？ アクション仮面の話題で、少々盛り上がりすぎたのかもしれないね。リアルタイムで追っただけであって彼の知識量は相当なものですから、私も思わず熱が入ってしまったよ」

「本当にそれだけですか？」

「何ですか、シルヴィイ？ まるで私が嘘を吐いていると言っても言いたげじゃないですか」

「嘘かどうかなんて、我々には判断できませんよ。何せ私も他のスタッフも、2人の話し合いには立ち会っていませんし、その内容を盗聴することもしなかったのですから」

ちなみにそれは、リーナの指示によるものだ。下手な行動をして彼女達に「主人公補正」を向けられてはいけない、というのがその理由であり、それを妥当だと感じたからこそシルヴィアもそれに従った。

「だからこそ我々は、あなた本人に尋ねるしかないので。先程報告したこと以外に、彼と何を話したのですか？ ——いいえ、何を聞いたのですか？」

「……………」

含みを持たせたシルヴィアの問い掛けに、リーナはまっすぐ彼女を

見据えて、ハッキリとした口調でこう答えた。

「たとえば私が彼から何を聞いていたとしても、私があなたに話すことはこれ以上何もありません」

リーナのその答えに、シルヴィアは確信した。

おそらく彼女は、しんのすけから全て聞いている。

彼とリーナが、過去にどのようなようにして出会ったのか。2人の間に何が起き、どのような繋がりをもたらしたのか。そしてなぜ、リーナにその記憶が一切残っていないのか。

それらを全て知ったうえで、それら一切を報告しない、という選択肢を採ったのだと。

「……リーナ、これは私とあなただけの問題ではありません。USNA軍統合参謀本部直属の魔法師部隊の総隊長であるアンジェリーナ・シールズが、軍も把握していないところで野原しんのすけと繋がっていることが判明したんですよ」

「はい、もちろん分かっています。そのうえで、回答を拒否していません」

「……上層部が話すよう命じても、同じように拒否するつもりですか？」

「はい。たとえば大統領であろうとも、私はこれを話すつもりはありません」

「……リーナは我々と、USNAと対立しても構わないと言いたいのですか？」

「私は今でも、シルヴィイ達のこととは大切な仲間だと思っています。――だからこそ、私はこれを話すべきではないと考えています」

リーナのその言葉に、徐々に険しくなっていたシルヴィアの表情が一瞬和らぎ、困惑の色を浮かべた。

しかし即座に持ち直すと、再び剣呑な声色で彼女に詰め寄る。

「たとえばあなたがどれほど我が国にとって重要な存在であろうとも、場合によっては上層部がどのような決定を下すか分かりませんよ」

「ええ、そうでしようね」

「それが分かっていながら、なぜあなたは——」

「シルヴィア・マーキュリー・ファースト」

先程までの愛称ではなく軍より与えられたコードネームでシルヴィアを呼ぶリーナに、彼女はなぜか背中に寒気が走るのを覚えた。

そんな彼女に、リーナは口元に微笑みを携えて、しかし目は僅かに細めて口を開く。

「私は野原しんのすけから『友人』であると同時に『仲間』だと思われていきます。——そんな私に何か危害を加えて、はたしてその方々が無事でいられると思いますか？」

「——！ あ、あなたは！ 我々を脅すつもりなのですか!？」

「そこまでして話したくない、ということですよ。察してください」

リーナはそれだけ言い残すと、シルヴィアから視線を外してソファアから立ち上がり、その場を去っていった。これ以上話すことは無いという明確な拒絶の意思表示であったが、シルヴィアは黙り込んだままそれを見送ることしかできず、彼女の姿が見えなくなった後もそこから動くことができなかった。

——リーナ、あなたは何を知ったというのですか？

上司でありながら、どこか自分の妹のような親愛の情を覚えていたリーナが、このときのシルヴィアにはとても遠い存在のように思えた。

*

*

*

いつの時代も、夜になると『後ろ暗い者達』が闇に紛れて駆け回っている。

しかし一般市民の生活がそれに脅かされることなく（少なくとも破壊されることなく）済んでいるのは、その『後ろ暗い者達』と戦う者が同じように闇に紛れて駆け回っているからだ。

しかしその戦う者の1人であるはずのこの男は、目の前の惨劇に対して憤る様子も見せずに相棒の男へと延々愚痴を零していた。

「まったく、次から次へとどうしてこう厄介事が——」

「……………」

「厄年は今年で終わったと思っただがねえ、やっぱりお祓いに行つた方が——」

「……………」

「そもそもこの事件は何だ？ これならまだ密入国とか侵略の方がまだ分かりやすい——」

「それを調べるのが我々の仕事でしょうが！ 『税金泥棒』なんて揶揄されたくなければ、つべこべ文句を言わずに働いてください！」

その男の部下である稲垣がとうとうキレてしまっても、その男・千葉寿和は「本当は警察が暇な方が——」などと未練がましく呟いていた。

いい加減説教してやろうか、と思つた稲垣だったが、耳に引つ掛けていたレシーバーから応答を求める声が聞こえてきたので、ひとまずそちらを優先することにした。

「はい、こちら稲垣。——分かりました、現場に向かいます」

その報告を聞いた途端、稲垣の表情と声は緊張を押し殺したものとなった。そして彼の隣では、何となく報告の内容を察しているはずの寿和が、未だにだらけた表情でそれを眺めている。

「警部、『5人目』です。死因は過去のガイシヤと同じく衰弱死。外傷が無いことも同じです」

「そして血が無くなつてることと同じ、だろ？ ったく、1ヶ月で5人の変死体か。マスコミを抑えるのもいい加減限界だぞ」

とにかく億劫そうに溜息を吐く寿和だったが、その目だけは獲物を狙う狩人のように鋭い光が宿っていた。

第75話 「平和な日常と事件の匂いだゾ」

リーナが第一高校に来てから、今日で1週間。彼女はこの1週間の内に、全校生徒で彼女を知らない者はいないという存在にまでなった。

これまで第一高校でトップの美少女といえば、上級生も含めて満場一致で深雪のことを指していた。しかしリーナが編入したことで“女王”が“双璧”となった。深雪と共に行動する機会が多かったことも、その評価が広まっていった要因だろう。

しかしリーナがそれだけ話題を呼んでいるのは、その美しさだけが要因ではなかった。

「ミユキ、行くわよ」

「いつでもどうぞ、リーナ。しんちゃん、カウントお願い」

「ほいほーい」

3メートルの距離を開けて向かい合う深雪とリーナ、そして2人の横に立つしんのすけ。

深雪とリーナの間には、直径30センチほどの金属球が細いポールの上に乗っている。実習室には同じ器具がズラリと並んでいるのだが、クラスメイトの全員が手を止めて彼女達の様子を見守っていた。サファイアよりも蒼く輝く瞳に陽光に煌めく黄金の髪と、黒真珠よりも黒く澄んだ瞳と夜空よりも深い漆黒の髪というコントラストが織り成す魅惑の光景ではあるが、何も彼らはそれに見惚れているだけではなかった。

今回の実習の内容は、同時にCADを操作して中間地点に置かれた金属球を先に支配した方の勝ちという、魔法実習の中でもシンプルかつゲーム性の高いものだ。シンプルだからこそ、互いの単純な実力差が如実に表れる。

「それじゃ、行くゾー。3、2、1——」

しんのすけが“1”と口にすると同時に、深雪とリーナが据置型のCADのパネルに手をかざした。

「ゴー！」

最後の掛け声だけ深雪とリーナも声を揃え、その瞬間に深雪はパネルに指でそつと触れ、リーナは掌をパネルに叩きつけた。対照的な起動動作をする2人だったが、2人由来による眩いサイオンの光がほぼ同時に対象の金属球の座標に重なり合って爆ぜた。外部からの魔法的干渉を抑制する技能が未熟な生徒が、一斉にこめかみを押さえたり首を振ったりする。

しかしそれも一瞬のことで、サイオンの光が消えた次の瞬間、金属球はコロコロとリーナの方へと転がった。

「あーっ、また負けた!」

「フフツ、これで私が2つ勝ち越しね」

途端に悔しそうな表情を見せるリーナに、深雪はどこかホツとした笑みでそう声を掛けた。

周りの生徒が、一斉に感嘆の声を漏らした。それはアメリカからの留学生に勝利した深雪に対するものであると同時に、そんな彼女に真正面からぶつかって「たった2つの負け越し」で食らいつく留学生に対するものでもあった。

そもそも深雪は、先月から始まったこの実習で1回も負けたことが無かった。圧倒的な強さでクラスメイトを寄せ付けず、互いに実習の意味が無いと教官が認めざるを得ないほどである。それを聞きつけた新旧生徒会役員（プラス風紀委員長）が深雪に勝負を挑み、そして見事に返り討ちに遭ったという逸話まで存在する。

そんな深雪を相手に、留学生が互角の勝負を演じている。この事実だけでも、如何にリーナの魔法力が優れているか分かるだろう。

先の試合も深雪が勝ちこそしたが、それを見ていた誰もがストレスでの勝利だと感じた。術式の発動はむしろリーナの方が早かったが、干渉力で深雪が上回っており、リーナの魔法が完成する前に制御を奪い取ったという流れであり、単純に力量で勝ったというよりも作戦勝ちの印象が強い内容だった。

「今では駄目ね。ミユキに勝つためにはもっと早く魔法を完成させるか、干渉されないほどのパワーで押し切らないと」

「あら、そう簡単にいくかしら?」

「余裕があるのも今の内だけよ、ミユキ！ シンちゃん、カウントお願い！」

「ほーい」

その後、時間内に行われた勝負は4回でスコアは2対2。

今日の実習は、深雪が2つのリードを保ったまま逃げ切った。

「ああもう、悔しいわ！ これでもステイツのハイスクールレベルでは負け知らずだったのに！」

「でも、リーナも凄いよ。選ばれて留学してくるくらいだから相当な実力者だとは思ってたけど、まさか深雪と互角に競うほどだとは思わなかったもの」

「そう言うホノカだつて、精密制御は私よりも上じゃない。さすが魔法技術大国・日本よね」

昼休み、いつもの学生食堂にて。

達也と深雪達のグループにリーナが同席しているが、これは毎日というわけではない。魔法科高校ではかなり珍しい留学生、それも絶世の美少女となればあちこちからお誘いの声が掛かり、リーナも幅広く交流する留学生の流儀に従ってそれを了承していた。なのでこの1週間で達也たちと食事をしたのは初日だけであり、学食で顔を合わせるのも今回が2回目である。

「大人気ね、リーナ」

「ありがとう。皆さん良くしてくれて嬉しいわ」

エリカの褒め言葉に、リーナは照れたり謙遜することなくあつげらかんと答えた。民族性によるものとも考えられるし、あまり周囲の評価にこだわらない彼女の個性によるものとも考えられる。

ちなみに前回の学食での一件については、リーナとしんのすけによる説明が行われて以来、一度として蒸し返されることは無かった。もちろんあの説明で皆が納得しているわけもないのだが、リーナが話した通り明確な証拠が無ければ水掛け論に終始するのがオチだ。なので表面上はそのまま付き合いを続け、その裏で腹の探り合いが行われ

ている状況となっている。

ちなみにそれに気づいていないのは、例によってしんのすけのみである。

「ところでリーナって、放課後は何をしてるの？」

「色々と見学させてもらってるわ。部活動を見させてもらったり、実際に参加させてもらったり」

「もちろん、私が同行してるわ。無用なトラブルは避けたいもの」

リーナの答えに、深雪が横から説明を入れた。彼女の言う「無用なトラブル」とは、おそらく新入生勧誘期間のときのようなものを指しているのだろう。

「とはいっても、どうせ部活に入れたとして大会には出られないんだろう？」

「もつと別の種類の下心がありそうなのよ。——軽体操部の見学をしていたときに、部活の人間ではない人達がうろちよろしていたから問い詰めたら、軽体操部のコスチュームを着たリーナの写真を撮って売り捌こうと思ってたらしいわ」

軽体操部とは重力や慣性を低下させて演技する魔法系競技であり、早い話がトランポリン無しでトランポリンの演技をするようなものだ。ちなみに九校戦の競技の「ミラージ・バット」は、軽体操の発展形の1つである。

心底軽蔑するような表情で溜息と共に吐き捨てる深雪だったが、絶世の美少女だとこのような仕草ですら絵になってしまう。全員が彼女の言動に気分を悪くすることなく、むしろ彼女に同調するように顔をしかめた。

「……写真部なんて、この学校にあったか？」

「美術部の写真チームですよ」

「でもリーナさんでしたら、確かに絵になりそうですね」

「売り捌くのはどうかと思うけどな」

「いやいや、そもそも写真を撮ること自体が駄目でしょうが」

エリカがそう言って、レオの頭を軽く叩いた。漫才のような遣り取りに、皆がアハハと笑い声をあげた。

しかしすぐに、深雪が表情を曇らせた。

「でも部活間でのリーナ争奪戦が気になってきたのよね……。今はまだ水面下での争いでしかないけれど、このまま放っておけば実害が出ることにもなりかねないわ」

「だったらいつそのこと、リーナを生徒会の臨時役員にするという手もあるのでは？」

「そうね……。あなたは どう思う？」

幹比古の提案に深雪は少しだけ思案し、リーナ本人へと話を振った。

リーナは少し考える素振りを見せ、フツと視線を向ける。

そこにいたのは、達也としんのすけだった。

「……そういえば2人って、風紀委員のメンバーなのよね？」

「うん、そうだよ」

「部活や生徒会も気になるけど、生徒による自治活動ってのも面白そうだよ。今日の放課後、見学させてもらっても良いかしら？」

その提案に、達也は少しだけ迷いを見せた。確かに今日は2人共当番の日だが、どうにも厄介事の匂いがして仕方がない。特にリーナとしんのすけが「共犯者」のような関係を構築している今となっては。

「別に良いゾ。花音ちゃんだったら、多分OKするだろうし」

すると（それを裏付けるように、というわけではないだろうが）しんのすけが二つ返事で了承してしまった。

達也は誰にも聞かれないように、こつそりと溜息を吐いた。

*

*

*

風紀委員のメンバーは普段からCADの携帯が許可されているが、達也が学校内でそれを使う場面は意外とそんなに無い。CADは元々四系統魔法の補助として開発された道具であり、特に無系統魔法でサイオンを飛ばすような単純な魔法ならばCADが無くてもさほど不自由は無い。

それでも達也が風紀委員での活動で必ずCADを身につけている

のは、生徒に対する示威的效果を期待してのものだ。実際のところ牽制効果は馬鹿にできないものであり、4月の頃ならいざ知らず、達也の知名度が上がっていくにつれて（特に九校戦以降）達也の取り締まりに反発するような生徒はみるみる減っていった。

「タツヤ、CADを2つもつけてるの？」

「色々と理由があつてな」

本部に寄ってCADを装着するときに、達也とリーナがこのような短い会話を交わした。すっかり見慣れたものとなったことだが、何も知らない者からしたらやはり奇異に見えるだろう。彼女は多少気になった様子だったが特に追及することなく、3人は学内の見回りを開始した。

部活動をしているグラウンドや実習室や実験室などを、時折説明を入れながら回っていく。もしこれが達也とリーナの2人きりだったら達也も多少の気まずさを感じていたかもしれないが、しんのすけが間に入ることでもコミュニケーションは円滑に行われた。彼のそういうところは、達也も素直に賞賛している部分である。

「リーナちゃんの通ってる学校って、風紀委員みたいなのって無いの？」

「えっ!? えっと、そのう……」

「……1年生の内は、そういうのに疎くても仕方ないんじゃないか?」
「そう! その通りなの、タツヤ! それで1年生の頃からこういう活動に参加するこの学校のノウハウをもっと知りたくてね!」

しかし、なぜだろうか。口裏を合わせているはずのしんのすけによつて、リーナが度々窮地に立たされているように達也は思えた。本当に彼はリーナの秘密を守る気があるのだろうか。そして彼女も彼女で、いくら前線フォワードタイプの魔法師とはいえここまで動揺を隠せないものだろうか。

しかも彼女の場合、しんのすけと会話しながらこちらに探りを入れる気配がまるで隠し切れていない。本人は誤魔化しているつもりなのだろうが、達也からしたら気づいているのを逆にこちらが誤魔化すレベルである。

さらに同じ気配で挙げると、話題の留学生を連れ歩いているせいで道行く生徒達からの視線がなかなか痛かった。こちらは留学生を前にみつともない姿を見せられないと考えていたのか、実力行使に及ぶような者がいなかったことが救いである。

そんなわけで、結局のところ達也は気まずさを覚えながら見回りをする羽目になっていた。

そうして実験室が並ぶ特殊棟の端、裏庭に降りる階段の踊り場でリーナがふいに足を止めた。

「おつ、どうしたのリーナちゃん？ 休憩する？」

「いいえ、大丈夫よ」

しんのすけの提案を、リーナは若干ぎこちない笑みを浮かべて断った。

そして何かを逡巡するような仕草を見せたが、やがて達也へと向き直る。

「ねえ、達也って補 alternate 欠……二科生、なのよね？」

「そうだけど？」

正面切って言われたのは随分と久し振りだな、と達也は何だか懐かしむ心地になっていた。

「A組のみんなと制服が違うからなんでだろうと思ったから、ミュキに訊いてみたの。そしたらミュキ、もの凄く不機嫌そうな顔で教えてくれたわ。——二科生って、その、一科生の人と比べて、実力で劣るって意味なのよね？ でもホノカの話だと、タツヤは一高でもトップクラスの实力者だって聞いたわ」

「……………」

達也が無言で話の続きを促すと、リーナは意を決したように再び口を開いた。

「タツヤは、なんで劣等生の振りをしてるの？ 劣等生の振りをしてるのに、どうして簡単に実力を見せちゃうの？ タツヤのやってることは凄くチグハグで、なんでそういうことをするのか分からないわ」

成程そういうことか、と達也はリーナの言いたいことを知って微笑

を浮かべた。

「フリなんてしてないよ、本当に俺は劣等生なんだ。実技試験で評価されるのは、国際基準と同じく『速度』と『規模』と『強度』の3つだ。だが実戦の評価はそれだけでは決まらない。肉体の能力なども勝敗を分ける重要な要素だからな」

「実技の成績は悪いけど喧嘩は凄く強い、つてのが達也くんですからな」

達也の説明を受け継ぐ形でそう言うしんのすけに、達也は思わずフツと笑みを漏らした。実技では3位以下を大きく引き離して深雪の次点に付けている彼からしたら、ほとんどの生徒が『実技の成績は悪い』になるだろうに。

一方リーナは、達也の説明に一応は納得したようだ。

その代わり、別の質問が達也にぶつけられる。

「……タツヤは、もっと別の場所に行きたいって思ったことは無いの？」

「別の場所？」

「そう、自分の実力が正当に評価される場所。私の国でも国際基準が主流だけど、そうじゃない所だっていっぱいあるわ。ステイツは自由の国で、多様性の国でもあるもの。たった1つの物差しに合わないからってだけで補欠扱いされるくらいなら、もっと自分の実力を評価してくれる所に行きたいとは思わないの？」

リーナの質問は、言外に自分の国へ達也を招待する旨が含まれていた。

思いがけない提案に、達也はどう返事しようか頭を巡らし、

「達也くんが凄いの、オラ達がよく知ってるゾ」

「——へっ？」

思いがけないタイミングで横から割り込んできたしんのすけに、リーナが、そしてそれ以上に達也が驚きを露わにした。

「達也くんは勉強が凄くできて、オラが質問するといつもすぐに答えて教えてくれるんだゾ。それにCADにも凄く詳しくて、オラが使ってるヤツは達也くんがメンテナンスしてくれているんだゾ。初めて

見た魔法もすぐに見破って解説してくれるし、深雪ちゃんとかほのかちゃんとか女の子にもモテモテなんだゾ」

「へ、へえ、そうなの……」

「オラ達一年生だけじゃなくて、達也くんを知ってる色んな人が凄く凄く褒めてるゾ。——学校の成績がどれだけ悪くても、オラ達には関係無いゾ」

しんのすけの話聞いて、リーナは達也へと視線を向けてニツコリと笑みを浮かべた。

もつともそれは、多分にからかいの意を含んだものだったが。

「あらあら、ここだつて充分に、自分の実力を評価してくれる所”だったつてわけね。ごめんなさいねタツヤ、余計な気を回しちゃつて」

「……………」

やはり今のしんのすけは、自分にとって敵だ。

達也は自分の胸に湧き上がる気恥ずかしさに蓋をして、そんなことを考えていた。

*

*

*

「お帰りなさい、リーナ」

「シルヴィ、先に帰っていたんですか」

「もう夜ですよ？」

リーナが生活拠点であるマンションの部屋に帰ると、補佐役兼同居人のシルヴィア准尉が待ち構えていたように玄関で出迎えた。色々と寄り道していたリーナは返された言葉に小さく苦笑し、荷物を片手に制服姿のままダイニングへと移動する。

すると、

「ミア、来ていたんですね」

「は、はい、お邪魔しております、少佐」

若い女性がリビングのソファから立ち上がり、緊張した面持ちでリーナを出迎えた。

「座ってください、ミア。シルヴィ、お茶をお願いします」

「ミルクティーで良いですね？ ミアもお代わり如何ですか？」

「あつ、はい、いただきます」

リーナの気遣いとシルヴィアの問い掛けに、ミアは恐縮した様子で頭を下げた。

彼女の名は、ミカエラ・ホンゴウ。リーナと同じ日系アメリカ人だが、外見は少し肌が浅黒いくらいでほとんど日本人と区別がつかない。

彼女はリーナ達よりも一足早く日本に送り込まれた諜報員の1人だが、本職のスパイではない。彼女の本職は放出系魔法を研究する国防総省所属の魔法研究者であり、11月に行われたブラックホール実験にも参加していた才媛だ。結果が芳しくなかったダラスの実験に代わる“対消滅ではない質量のエネルギー変換”の糸口を求めて、今回の任務に志願したのである。

多くの魔法研究者と同じく彼女自身も魔法師であり、今月から共同研究の名目で来日した偽学生とは別口で、先月初めからマクシミリアン・デバイス日本支社のセールス・エンジニア“本郷未亜”として魔法大学に潜り込んでいる。ちなみに住まいは、リーナの隣の部屋である。

「何か分かりましたか？」

「公的なデータベースを洗い直していますが、今のところはまだ新しい情報は何も」

「そうすぐに結果が出るものでもないですしね。——ミアはどうですか？」

「こちらはまだ、これといって……。すみません」

お茶のおかげで若干落ち着いたように見えたミアが、再び緊張で縮こまってそう答えた。

ここまで過度に緊張されるのはリーナとしても本意だが、研究者と戦闘員という違いはあるとはいえ、相手はミドルティーンながらUSNAの魔法師のトップに君臨する“シリウス”だ。これでも最初の頃よりは随分と改善した方だ、とリーナはむりやり自分を納得させ

た。

「リーナは如何です？　少しはターゲットと親しくなりましたか？」

「少しは親しくなった、と思います」

「そうですか、それは何よりです。——もともと、野原しんのすけの方とは随分と親しくなったようですが」

シルヴィアがそう言うつてリーナが持っていた荷物に視線を遣ると、彼女はまるで勉強をサボって遊んでいたのがバレた子供のように、気まずそうな顔でピクリと肩を跳ねさせた。

その荷物は店のロゴが印字された買い物袋であり、日本全国にチェーン展開するホビーショップのものだった。映像コンテンツは今やオンデマンド配信が主流で物理ディスクはほとんど見掛けなくなったが、フィギュアやプラモデルなどは今でも現役で販売されており、その手のマニアも多数存在する。

「……例によって、アクション仮面ですか？」

「はい！　見てください、この造形美！　このバランス！　この躍動感！　マントが風にはためく一瞬を切り取ったこのフォルムなんて、まさしく葛飾北斎の『富嶽三十六景・神奈川沖浪裏』が如き芸術品ですよ！　これほどまでの一品が平然と棚に並んでいるなんて、日本人のサブカルチャーに対するこだわりにはただただ敬服するのみです！」

「分かりました、とりあえず落ち着いてください。ミアが驚いていますよ」

頬を上気させて目をキラキラさせて熱弁するリーナに、シルヴィアが呆れを隠す素振りもせず溜息を吐き、ミアは初めて見るシリウスの姿に啞然としている。

そしてリーナはそんな2人を見て、恥ずかしそうにすごすごとソファアに座り直した。

「……まあ、野原しんのすけと敵対するよりはずっと良いですし、ターゲットとの外堀を埋めるという意味でも有用でしょう。やはり『秘密』を共有するというのは、仲を深める重要なエッセンスとなるのですね」

「シルヴィ」

「分かっていますよ、リーナ。無理に訊こうとはしませんから」

やはり「秘密」のこととなるとガードは固いか、とシルヴィアは素直に引き下がった。

とはいえ、彼女にも譲れない点はある。

「リーナ、分かっていると思いますが、我々は任務のためにこの国に来たのです。——それだけは、忘れないでくださいね」

「はい、もちろんです。私はスターズ総隊長、アンジー・シリウスなのですから」

まっすぐな目で言い放つリーナに、シルヴィアは安心したように微笑んだ。

そしてその隣で、ミアが居心地悪そうに縮こまっていた。

*

*

*

日付が変わる頃、都心の路上には車の姿は無く、代わりに若者の騒ぎ声で溢れていた。

自動運転・個別輸送のキャビネットは24時間運行しており、地下に張り巡らされた動力歩道ムーブパスを使えば駅まですぐに辿り着く。それに在宅勤務のインフラが整備された現代では深夜まで事務所にしがみつく必要も無いため、昼間はビジネスマンが行き交う渋谷も、夜になると途端にアウトロー気取りの若者が闊歩する歓楽街と早変わりする。

そんな馬鹿騒ぎの街の真ん中で、トレーナーにジャンパーという真冬とは思えない軽装で歩くレオの姿があった。その足取りは「どこか目的地を定めて進む」というよりも「宛ても無くフラフラとさま迷う」といった不確かなものだった。

レオは現在、彼が持つ悪癖である「放浪」を行っていた。彼は時々、深夜が近づくにつれて、思いつくままにフラフラと歩きたくなる衝動に駆られることがある。今日みたいに都心を歩くこともあれば、郊外にまで足を運ぶときもあるし、時には山奥にまで入り込むこ

ともある。

レオはこれを、自身の遺伝子に刻まれた本能だと思っていた。

彼の祖父は、世界で最初に遺伝子操作による魔法師調整技術を実用化したドイツの最初期に開発された「城塞シリーズ」の数少ない生き残りの1人だった。

ブルク・フォルゲは肉体の耐久性向上に重きを置かれた調整体だ。「魔法を使える超人兵士」を目指し、人間より遥かに頑丈な大型哺乳類を参考にした遺伝子改造を施された。その無理な遺伝子操作によつて第1世代の多くが幼少期に死亡し、成長後も大半が発狂して死んだ。

レオはその明るい性格からは想像もつかないが、いつか自分も同じように狂ってしまうのではないか、という恐怖を抱えていた。そこで小さな衝動をこまめに解放することにより、大きな衝動に心が押し潰されて壊れるのを先延ばしにしようと思い、こうして深夜に放浪するようになった。自由に生きて天寿を全うした祖父の姿が、彼をそうさせたのだろう。

そのような事情により、今日彼が渋谷にやって来たのはまったくの偶然だった。

「あれっ？ エリカの兄貴の警部さん？」

擦れ違った相手がたまたま顔見知りだったために、何となく声を掛けた。レオにとっては、その程度の認識でしかなかった。

しかし次の瞬間、主に若者が屯たむろしている辺りから剣呑な視線が集まってきた。

「君、ちよつと一緒に来てくれ」

「えっと、稲垣さんだっけ？ 何スカ急に」

「いいから」

今にも舌打ちしそうな表情でレオの手首を掴んできた稲垣に、レオは何が何だか分からないまま引つ張られるようにについていった。レオの力なら簡単に振り解くこともできたが、彼の切迫した雰囲気こそそれを躊躇させた。そしてレオが元々声を掛けた人物・千葉寿和は、そんなレオの後ろにびったりと貼りついて移動する。

レオが連れ込まれたのは、路地奥にある小さな酒場。看板には「BAR」と書かれているが、横文字にする必要性を感じない居酒屋だった。カウンターの奥でグラスを磨いていた主人に軽く声を掛け、突き当たりの階段を昇っていく。

辿り着いたのは、小さな丸テーブルに4脚の椅子を置いただけでいっぱいになるほどに狭い部屋だった。ご丁寧に入口には宇宙船にあるようなハッチまで備えつけられ、3人が部屋に入ったところで稲垣が両手を使ってハンドルを回し、機密性の高い扉をしっかりとロックした。

「西城くん、だったね。ちゃんと気配は消していたつもりだったんだけど、よく分かったね」

「……ひよつとして、捜査の邪魔しちゃいました?」

「いやいや、そういうわけじゃないよ。気配を消していたのは、無意味なトラブルを避けるためさ。深夜のここは、何かと警察が目撃されるからね」

「ああ、確かにそんな感じっすね」

納得したように深く頷くレオの態度は、若者よりも警察の方にシンパシーを抱いていることを示していた。それを見た稲垣が、この部屋に来てからずっと鋭くしていた目つきを幾分か和らげる。

「それにしても、こんな時間にこんな場所をうろつくなんて、魔法師とはいえ随分と危ないんじゃないかい?」

「こんな時間ってのは言い訳できないスけど、ここに来たのはたまたまですよ。そんな気分だったってだけで、いつも来てるわけじゃないです」

「ふーん。最後にここに来たのはいつ頃だい?」

「えーつと……、大晦日も確かここだったかな?」

「2週間ほど前か……。じゃあ、都内の繁華街で奇妙な事件が起こってるのは知ってるかな?」

寿和が口にした話題は現時点で報道規制が掛かっているものだったが、稲垣は止めようとはしなかった。どうせ数時間後には「スクープ」として知れ渡ることになるのだから。

「奇妙な事件？ それこそ、毎日起こってるんじゃないですか？ —
—っていうか、警部さんって横浜の担当じゃなかったっけ？」

「俺達は警察省所属なんだ。日本全国をあちこち異動してるよ。というわけで、今は都内の連続変死事件を捜査中だ」

軽く口にした言葉であったが、レオはそれを聞き逃さなかった。

「……変死？ 猟奇殺人ってことツスカ？ しかも連続で？」

「……西城くん、やっぱり君は賢いね」

寿和は目をギラリと光らせ、稲垣に目配せした。

すると彼は無言で携帯端末を取り出し、画像ファイルをレオに見せた。スライド形式に切り替わっていくそれに、さすがのレオも息を呑んだ。

「最新の犠牲者は3日前、場所は道玄坂上の公園だ。死亡推定時刻は、午前1時から2時の間」

「こんな都会の真ん中ですか？」

「昼間だったらそうだろうけど、夜は何が起こってもおかしくないよ、この街ではね。——そこで訊きたいんだけど、妙な奴に心当たりは無いかい？ 噂に聞いたってだけでも良いんだけど」

「夜中にここを彷徨うろついてるのは妙な奴ばかりだぜ？ 具体的にどんな奴のことを知りたいんだ？」

「それが分かれば苦労しないんだが……」

寿和は考え込むように視線を逸らし、そしてすぐにレオへと戻した。

「さつき見せた変死体だが……、死因は7人全員が衰弱死で、かすり傷以上の外傷は無し」

「外傷が無いってことは、毒か？」

「ところが薬物反応は陰性、おまけに傷は無いくせに体内の血液が1割ほど失われている」

「……成程、確かに“変死”だ。猟奇殺人というより、怪奇現象だな」
「随分とオカルトじみてるけど、残念ながら全てリアルの出来事だ。」

——さて、こういうオカルトじみた真似をしでかすような奴らに心当たりは無いかな？ 特に最近余所から流れてきた連中で、妙な噂が

立っているような連中とか」

質問される前からレオは腕を組んで唸り声をあげるが、やがて諦めて腕を解いた。

「悪いけど心当たりが無いツスわ。ダチから情報仕入れてきますよ」

「いやいや、そこまですることはないよ。ここからは警察の仕事だし、下手なこととして目をつけられないとも限らない」

「でも警部さんが夜の渋谷で聞き込みって、かなり難しいんじゃないの？」

「……………」

レオの指摘は、寿和達にも重々分かっていることだった。でなければ、知り合いというだけで捜査情報をペラペラ喋ったりはしない。

「危険なことに首を突っ込むつもりも無いツスよ。これでも鼻は利く方なんで」

「……………そうかい？ それじゃあ」

「警部！」

さすがにこれ以上はまずいと思った稲垣が声をあげるが、寿和はそれを無視して懐から名刺を取り出した。

「何かあったら、ここにメールしてくれ。キーの手入力は最初だけで、2回目からは自動的に更新されるから」

「嚴重ツスね。んじや、何か分かったら知らせるんで」

レオはそう言って立ち上がると、稲垣が両手を使って閉めた機密ロックのハンドルを片手で軽々と回して部屋を出ていった。

第76話 「吸血鬼事件で大騒ぎだゾ」

レオが渋谷の居酒屋で話し込んでいたのと、ほぼ同時刻。

ベッドで眠っていたリーナが、同居人のシルヴィアに叩き起こされた。正規の軍人になって3年以上、スターズの総隊長になって1年半が経った彼女の体は、こういう非常事態にすぐさま意識を覚醒するようになっていた。

リーナはベッドから起き上がると、すっかり覚めたクリアな表情でシルヴィアに問い掛ける。

「何事ですか、シルヴィ」

「カノープス少佐から緊急の連絡です」

USNA国内にてスターズ総隊長代行の任に就いているベンジャミン・カノープス少佐は、スターズの中でも屈指の常識人だ。日本とアメリカの時差を充分理解しており、そんな彼がこんな時間に連絡してきたという事実だけでリーナの表情が緊迫の色に染まり、返事をする間も惜しんで無線機の前へ走った。

「ベン、お待ちせしました。音声のみで失礼します」

『「こちらこそ、お休み中に申し訳ございません」』

「構いません。何が起こったのですか？」

『先月脱走した者達の行方が分かりました』

カノープス少佐の報告に、リーナの目が大きく見開かれた。

先月に発生したスターズ一等星級、アルフレッド・フォーマルハウト中尉の脱走事件は記憶に新しいが、USNA軍首脳部にも大きな衝撃を与えたその事件は、リーナの手によって本人が「処分」されたことで終わりではなかった。同時に7人も魔法師や魔工師が脱走し、その中には最下級の「衛星級^{サテライト}」とはいえスターズの隊員も含まれている。

「どこです、それは—」

『それが……、日本です。しかも横浜に上陸後は、東京に潜伏しているものと思われます』

「なぜ日本……、しかもこの東京にですか！」

『統合参謀本部は、追跡者を追加派遣することを決定致しました。日本政府には極秘で、です』

外国領土内での諜報活動と、戦闘行為を伴う脱走者の追跡作戦では、相手国政府に対する心証がまるで異なる。主権に対する重大な挑発行為として国交断絶に発展する恐れすらある決定を下したことに、ペンタゴンがいかにこの一件を重大視しているかリーナは改めて思い知った。

『参謀本部からの指令をお伝えします。アンジー・シリウス少佐に与えられた現任務を優先度第2位とし、脱走者の追跡を最優先せよ、とのことです』

「了解しました、と本部に伝えてください」

『了解です。総隊長、お気をつけて』

その言葉と共に、通信は途切れた。顔を俯かせて考え込むリーナを、シルヴィアが不安そうな表情で見守る。

リーナの頭を占めているのは、こんな思いだった。

——もしかして、シンちゃんのもの“主人公補正”が発動した……？

とにかく今夜はもう眠れないな、とリーナはむりやり考えを打ち切った。

* * *

週明けの教室は、怪奇事件の話題で持ちきりだった。

国内で2位の規模を誇るニュースサイトでスクープ記事として配信されて以降、様々な報道機関がこぞってその“都内連続猟奇殺人事件”を報じていた。殊更にオカルト面を強調したセンセーショナルな報道によって、瞬く間に日本中へと広まっていった。

そしてそれが広まるにつれて、日本中で推理合戦が始まった。プロの犯罪組織による犯行説、臓器売買ならぬ血液売買のブローカー説、あるいは本当に“未知なる存在^{オカルト}”による犯行説など、様々な人間が事件を題材にして遊んでいる。中には『血液を抜き取った後に魔法で痕跡を消した』と魔法師の犯行だと決めつけるものもあったが、魔法師

に否定的な勢力によるいつものパフォーマンスである。

「おはよっ、達也くん！ ねえねえ、昨日のニュース観た？」

読者を煽るような報道にはけっして踊らされず、しかし故意犯的に踊ってみせるタイプの筆頭であろうエリカが、教室に入ってきたばかりの達也に満面の笑みで話し掛けてきた。

「……ニュースというと、『吸血鬼』の？」

「そうー！ アレってさ、やっぱり単独犯じゃないよね？ プロの犯罪組織とか？ アタシとしては、臓器売買ならぬ『血液売買』組織の犯行って説に一票なんだけど」

「それだと1割しか血を抜かなかった理由が分からないな」

そんな会話を交わしながら達也は自分の席に向かい、椅子に座る前にエリカが彼の机に浅く腰掛けた。その姿勢から体を捻って顔を近づけてくるが、1年生の中では深雪（とりーな）に次ぐ容姿と評される彼女の顔を間近で見る達也の感想は『随分と体が柔らかいな』程度だった。

「殺すつもりは無かったとか？ 生かしておけば血液工場に使えただろうし」

「だったら死体を街中に放置しないだろ。それに血を抜き取った跡が無いというのも不可解だ」

血が抜き取られていた、血を抜いた痕跡が残っていなかった、という事実はいたずらに世間を騒がせないよう当局が隠しておきたかったことだろうが、なぜかそれらの情報は『吸血鬼事件』とセットで世に広まってしまっている。

2人がそんな話をしていると、隣の席から美月が表情を曇らせて、というより少しビクビクした表情で会話に入ってきた。

「テレビで言ってるように、オカルト的な存在による殺人なんでしょうか？」

「吸血鬼なんてものが本当にいるのなら、とうに分かっていそうなものだが……」

現代魔法が理論体系化される過程で、それまで『魔法使い』と呼ばれていた者達の存在も明るみとなった。もし実体を持つ妖怪変化の

類が実在するのならその流れで発見されていそうなものだ、と達也は考えていた。

しかし同時に達也は、しんのすけが過去に関わった事件には地球外生命体など未だにオカルト扱いされていながら存在が関与している事実も踏まえ、そういった存在はどこかに身を潜めているだけで実在していても不思議ではない、とも考えていた。それこそ、しんのすけの「主人公補正」によってそういった存在が引き寄せられるまでありそうだ。

しかし達也はそんなことをおくびにも出さず、現時点で意見を仰げる「オカルト専門家」に尋ねることにした。

「おまえはどうだ、幹比古？ 妖怪とか魔物とか、そんな存在が関わってると思うか？」

「ただの人間の仕事とは思えないけど、断言はできないな……」

「達也くん自身はどう思ってるの？ もしかして、魔法師絡みだと思ってるのか？」

「街路カメラの想子サイオンレーダーには何の反応も無かったというし、その可能性はそこまで高くないと思う。——とはいえ上級者ならレーダーを誤魔化せるし、精神干渉系の系統外が使える術者なら都会の真ん中で誰にも気づかれずに犯行に及ぶことは可能だろうな」

「精神干渉系の系統外が使える術者」の辺りで達也の脳裏に「或る人物」の顔が浮かんだのは、完全に余談である。

と、いつも連つるんでいる最後の1人がやって来た。

「はよッス、何の話だ？」

「おはよ、レオくん」

「始業ギリギリに来るとは、今日は随分と遅かったな？」

「まあ、ちよつと野暮用で夜更かししちまって……。んで、何の話？」

「例の「吸血鬼事件」ですよ」

美月がそう答えると、レオは顔をしかめた。

彼の口から「またかよ」という呟きが聞こえた気がしたが、端末に1時限目開始のメッセージが表示されたため、確かめる間も無く朝の井戸端会議はお開きとなった。

そんな彼らの遣り取りと、ほぼ同時。

A組の教室でも、E組と同じように「吸血鬼事件」で盛り上がった。一科生と二科生という隔たりはあるものの、こういった反応は年頃の若者らしく違いなど存在しない。深雪とほのかもその例に漏れず事件の話をしているが、他のクラスメイトほど興奮した様子は無く、あくまで落ち着いていた理知的な会話をしている。

と、教室に入ってきた1人の男子生徒が、そんな2人に足早に割つて入る。深雪に対してそんな真似ができる男子など、このクラスでは1人だけだろう。

「2人共、こんばんは」

「朝だから「おはよう」だよ、しんちゃん」

「おはよう、しんちゃん」

いつもの調子で挨拶をするしんのすけに、ほのかが苦笑い混じりで挨拶を返し、深雪がそれに続いた。

しんのすけは自分の席に荷物を置き、2人の近くの壁に寄り掛かった。そうして初めて教室を見渡し、普段にも増して騒がしい教室に気づく。

「何か騒がしいね。何かあったの?」

「ほら、例の「吸血鬼事件」だよ」

「吸血鬼? 何それ?」

キョトンとした顔で首を傾げるしんのすけに、深雪とほのかは驚きで目を見開き、しかしすぐに納得したように元に戻った。世間がそれ一色で染まっている中でまったく知らないというのも逆に凄いが、ニュースサイトをチェックする彼の姿が想像できないのも確かだ。

ほのかがニュースサイトに書かれてた内容を一通り説明すると、しんのすけは「ほーほー」と普段ときほど変わらないリアクションを見せた。こういう話題には真っ先に食いつきそうな印象だったが、吸血鬼というオカルトな存在にも反応が薄い。

「吸血鬼かあ。ニンニクとか効くのかな?」

「ニンニクが効くかどうかは分からないけど、雫の話だとアメリカでも似たような事件が起こってるんだって。雫のいる西海岸じゃなくて、中南部のダラスの周辺らしいんだけど」

「ほーほー、ワールドワイドですなあ」

「アメリカでも起こってるっていうのは、ニュースサイトにも無かったわね」

「向こうでも報道規制は結構あるみたい。雫が知ってるのもニュースサイトじゃなくて、留学先の情報通の生徒に聞いたって言ってたよ」

達也が（叔母の警告のこともあって）USNA関連のニュースを熱心にチェックしていたことを知る深雪だが、兄からそのような話は聞いたことが無かった。特に自分に隠すような話題でもないし、もしかしたら兄も知らなかったのかもしれない。

そうになると、そんな事件を知っていたという「留学先の情報通の生徒」というのが俄然気になってくる。深雪は秘かに、この件を兄に報告することを心に決めた。

しかし、しんのすけにとつて「吸血鬼事件」は既に興味を失った話題のようで、

「あれっ？ そういえばリーナちゃんは？ オラよりも遅いなんて珍しいゾ」

「ああ、彼女は今日休みよ。お家の関係で所用ができたんですって」「ふーん」

深雪の答えにしんのすけは納得したようで、壁から背中を離してリーナの席へと腰を下ろした。持ち主が来ないと分かって、始業まで席を借りようと考えたのだろう。

彼のそんな反応に、どうやら詳しい事情は知らないようだ、と深雪は結論づけた。

*

*

*

1年生や2年生は通常通りの日程で授業が行われているが、3年生は既に自由登校となっている。下級生が教室や実習室に拘束されて

いるのを尻目に、3年生の男女2人が誰もいない部室でこっそりと顔を合わせていた。

しかしながら、そのシチュエーションを聞いて当然のように想像される甘い雰囲気は、この2人の間には皆無だった。いくらこの2人——七草真由美と十文字克人がそれぞれの親からいずれ結婚相手にと考えられているとはいえ、本人達には関係の無いことだった。

「なんで私達がわざわざこんな所で、とは思うけどね」

「すまない、人目につかない場所が良いと判断した。四葉を刺激するのは十文字家としても避けたいところだ」

「ウチと四葉家が冷戦状態なものだから……。まったく、あの狸親父は余計なことを……」

「七草でも、そういう言い方をするんだな」

「あら、はしたなかつたかしら？ オホホホホ」

芝居つ気たつぷりにしなを作る真由美に、克人が僅かに苦笑を浮かべた。

「おまえの相手をしていると、男扱いされてないように感じるときが時々あるぞ」

「あら、そんなことないわよ？ 十文字くんは私の知ってる限りでも、ピカイチに男らしいわ。入試のときから3年間ずっとライバルだったから、今更そういうことを意識できないだけ」

真由美はそう言って一頻り笑うと、途端にその表情を真剣なものに変えた。とはいえ、笑っている間もその雰囲気にはどことなく重苦しいものがあつたので、「スイッチを切り替えた」というほどではなかったが。

「七草家当主・七草弘一からのメッセージをお伝えします。——七草家は、十文字家との共闘を望みます」

「穏やかではないな。『協調』ではなく『共闘』とは」

克人が目線で続きを促すと、真由美はそれを感じ取って口を開いた。

「『吸血鬼事件』について、どの程度知ってる？」

「報道されている以上のことは知らん。当家は手駒が多くないので

な」

「十文字家のモットーは『一騎当千』だものね。無駄に数だけ多い七草家で分かつてる限りでは、吸血鬼事件の犠牲者は報道されている数の3倍、昨日の時点で24人の犠牲者が確認されているわ」

さすがの克人もその新事実には驚きを隠せなかつたようで、僅かに目を見開いた。

「……東京近辺のみで、か？」

「正確には、都心部のみで、よ」

「警察が把握していない被害者を、七草家が把握している。しかも被害が発生しているのは、限られた狭い区域内……。もしや被害に遭っているのは、七草の関係者か？」

「半分正解。警察が把握していない被害者は、全員ウチと協力関係にある魔法師よ。それ以外の被害者も、魔法師あるいは魔法の資質を持つていた人だと判明している。魔法大学の学生とかね」

「つまり犯人は、魔法師を狙っているということか……！」

その瞬間、克人の表情に凄みが増した。普段から高校生とは思えない威圧感を放っている彼がそんなことをするものだから、至近距離でそれを目の当たりにした真由美が表情を引き攣らせて僅かに後退った。

「……十文字くん、ちよつと怖いんだけど」

「むっ、すまん」

「……犯人が単独か複数かは分からないけど、少なくとも魔法師を狙っていることは確かよ。時系列的には魔法大学の学生や職員が最初に被害に遭って、それを調査していた七草の関係者が振り返りに遭って、そして被害はなおも拡大しているって感じなんだけど」

「何か手掛かりは無いのか？ 七草の魔法師を害するほどの実力とすると、考えられるのは強化兵か魔法師だろう。それも外国人の可能性が高い。事件発生の前後に入国あるいは上京してきた外国人の中に疑わしい者は？」

克人の質問に、真由美は残念そうに首を横に振った。さすがにそれくらいのこととは思っていたのだろう。

「その時期に入国してきた外国人といえ、USNAから来た魔法師の留学生や魔法技術者かしら。当校にも1人、留学生がいるわね。――彼女、どう思う?」

「怪しいとは思いますが、犯人ではないだろう。まったくの無関係とは思わないが、当面は放っておいて構わないのではないか?」

「十文字くんがそう言うなら……」

真由美としても本気でリーナを疑っているわけではないようで、自信なさげに目を伏せながらもその仮説を引つ込めた。

そして彼女が頭の中に思い描いている『野原しんのすけに關係する者達の仕業ではないか』という仮説については、敢えて口に出さないことにした。現状それを裏付けるだけの証拠が無いというのもあるが、口に出した瞬間に現実化しそうで怖い、というのが偽らざる本音だった。

「しかしそういうことなら、尚更四葉とも協力すべきだと思うのだが」「本当は私もそう思うんだけど……。不文律^ルを破つたのはこっちだから、こちらから頭を下げない限り關係修復は無さそうね。そしてあの狸親父は謝罪の意思が無いから……」

「今回の件で協力を仰ぐのは難しい、か……。弘一殿と真夜殿との『確執』を考えれば分からなくもないが、四葉がここまで態度を硬化させるのも珍しい」

四葉は取り憑かれたように自らの性能アップのみに邁進し、他の家が何をしようと気にしないというスタンスを取ってきた。他の家が多かれ少なかれ政治的な駆け引きを加味したうえで十師族に残っているのに対し、ただその実力のみで十師族の座を守り続けているというのは、十師族の中においてもひたすら異端である。

だからこそ、こうして明確な対立姿勢を四葉が取ってきたことは無かったはずだった。

「……いったい何をしたのか、訊いても良いか?」

「私も詳しくは知らないんだけど、四葉の息が掛かっている国防軍情報部の某セクションに、あの狸親父がこっそり割り込みを掛けたみたいで……」

本当に余計なことをしてくれやがって、とでも言いたげに真由美の表情が険しくなっていた。少なくとも時間を掛けて平静を取り戻した彼女は、改めて克人へと向き直って口を開いた。

「それで、如何でしょう。十文字家は、七草家と共闘していただけませんか？」

「協力しよう。十文字としても、この事態は放置しておけないからな」
相変わらず即断での頼もしい言葉に、真由美は感心したように何度も頷いていた。

頭の中で誰と比べていたのかは、あえて追及しないでおこう。

*

*

*

十師族の直系2人の会話の中にほんの少しでも話題に挙がっていた留学生・リーナは、学校へ行かずにUSNA大使館を訪れていた。通信回線越しに話すことができない重要案件についてミーティングを行うためである。

「つまりフレディ……いえ、フォーマルハウト中尉の脳皮質には、普通の人間にけっして見られないニューロン構造が形成されていた、ということですか？」

「『普通の人間』では語弊があるかもしれません。『魔法師を含めたこれまでの人間』としましょう」

リーナの質問に答えたのは、白衣こそ着ていないものの科学者然とした外見の男だった。

「解剖の結果、フォーマルハウト中尉の脳には、これまで観察例の無かったニューロン構造が発見されました。具体的には、前頭前皮質に小規模の脳梁のうりょうに似た組織が形成されていました」

曖昧な表情を浮かべる参加者（リーナもその1人だ）が多いことを受け、その男が大学の講義のように説明を始めた。

人間の脳は大きく2つ、『右脳』と『左脳』に分かれている。この2つは完全に分離しているわけではなく、それぞれの中心部を架け橋のように繋ぐ組織が存在する。これが『脳梁』である。

つまり、普通の人間の脳は中心部にしか左右を繋ぐ組織が無く、表面部分である前頭前皮質に脳梁があるはずがない。

「そこに脳梁があったとして、どのような機能を果たすと考えられるんだ？ 前頭前皮質というと、思考力や判断力と密接な関係のある部位だと聞いたことがある。そこに新たな脳細胞が形成されるということは、思考力に影響があるということか？」

向かい側に座っていた高級武官からの質問に、科学者は愛想笑いを浮かべて首を横に振った。

「我々USNAの魔法研究者の間では、脳は独立した思考器官ではなく、真の思考主体であるプシオン情報体——いわゆる“精神”からの情報を肉体に、肉体からの情報を精神に送信する通信器官である、という仮説が支持されています。この仮説に従うならば、フォーマルハウト中尉の脳に形成された新たなニューロン構造は、従来ダウンロードされることのなかった未知の精神構造とリンクするものである、と考えられます」

仮説に基づく理論というのは、どうにも抽象的で雲を掴むような話になりがちだ。参加者の顔にまたしても途方に暮れる表情が浮かぶ中、考え込んでいたリーナが発言を求めて手を挙げた。

「少佐、何か？」

科学者に発言を促されても、リーナはなかなか言葉を発しない。そんな状況ではないと分かっているながらも目を惹かれずにはおけない彼女の唇が動いたのは、それから3秒ほど経ってからのことだった。「ドクター、その未知の精神機能が、外部から意識に干渉する未知の魔法という可能性はありますか？」

「フォーマルハウト中尉が何者かに操られていた、という可能性を指しているのだとしたら、残念ながらその可能性はありません。仮説ではありますが、肉体と精神は1対1で対応するものと考えて間違いありません。他者の精神に介入できたとしても、それが脳の組織構造にまで影響することは無いでしょう」

間髪入れぬ科学者の返答に、リーナは目に見えて落ち込んだ。

それを気の毒に思ったのか、その科学者は即座に言葉を続けた。

「もつとも、他者の精神構造そのものを作り替えるような強力な魔法ならば、それも可能かもしれないが」

「精神構造、そのものを……」

そのフリーズから、リーナは1人の魔法師を思い浮かべた。

今から30年ほど前、当時十代だったその少女が引き起こした数々の所業は、当時の魔法師や各国有力者を恐怖に震え上がらせた。精神構造そのものを作り替え、小国ならばたった1人で落とすことも可能な彼女は、スターズにおいても「伝説」として語られている。

しかし彼女は、20歳を超えた辺りで表舞台から突如姿を消し、それ以降の消息については何も明かされていない。死亡したとの情報は流れていないのでまだ生きているのかもしれないし、もしかしたら結婚して子供もいるのかもしれない。

——もし「彼女」が犯人だとしたら、そのときは……。

その伝説の魔法師「四葉深夜」の名前を思い浮かべながら、リーナは1人覚悟を決めた。

「……あら？ ひよつとして、眠っていたのかしら？」

「はい、深夜様。それはもう、ぐっすり」と

外の冷気を内部に一切伝えることなく、太陽の光によって発生する熱を蓄えるサンルームは、冬場でも心地良い暖かさに包まれている。そのような場所で読書をすれば、穏やかな陽気によって眠気を誘われること請け合いだろう。

事実、自然の光を照明と暖房代わりにして読書をしていた四葉深夜（つい数年前までは司波深夜だったが、離婚した現在では四葉姓に戻っている）は、いつの間にか夢の世界へと旅立っていた意識を現実世界へ引き戻し、隣で紅茶の用意をしていた桜井穂波が微笑んで彼女を出迎えた。

深夜は両腕を挙げて大きく伸びをすると、ふわあ、と大きなあくびをした。かつて世界中を震え上がらせた「精神構造干渉魔法」の世界唯一の使い手だとはとても思えない、彼女のガーディアンである桜

井ですらほのぼのとしてしまう姿である。

「……………ここはいつも平和ね。東京とは大違い」

「達也くんたちは、大丈夫なんでしょうか？」

2人の頭の中には、現在東京にて極秘任務中のスターズ、そして彼らの来日とほぼ時期を同じくして発生した「吸血鬼事件」が思い浮かんでいた。

「桜井さんは、今回の事件の犯人をどう見るかしら？」

その口振りは事件が発覚してから推理遊びをして楽しむ様々な人間達の間違ったが、その目つきだけは獲物を探す肉食獣のようにギリと鈍く光っている。

「そうですね……………。外傷も無しに血液が抜き取られているなんて真似、普通の人間にできるなんて思えません。巷では「吸血鬼」の仕業だなんてまことしやかに語られています。もしかしたら本当にそういった未知の存在によるものかも……………」

「そうね、そんな存在がいたって、ちつともおかしくはないわ。——それこそ、「彼」が今まで関わってきた事件のことを考えれば、ね」

深夜の含みを持たせた言葉に、桜井はピクリと肩を跳ねさせた。

「……………深夜様は、今回の件に彼の関係者が関わっている可能性があるかと？」

「そういう不可思議なことができる存在といえ、みたいなどころがあるでしょう？ それに単なる可能性の1つよ」

「可能性、ですか」

桜井の問い掛けに、深夜は小さく頷いた。

「そうね。例えば、ターゲットを中から操る魔法が使われた可能性もあるわ」

「……………中から、ですか？」

「ええ。操られていたと考えればUSNA軍の兵士達が突然脱走した理由も説明できるし、外的要因でないから外傷が無いことにも説明がつく。そうね……………、血液の一部が無くなっているのは「相手の精神を乗っ取るための材料」なんて考えられるわね」

「……………そのような魔法、有り得るのでしょうか？」

「どんな魔法も、有り得ないなんてことはないわ。そもそも魔法は属人的なところがあるし、今まで考えられなかった魔法が開発されてもおかしくないわ。——それに、私だってできるわよ」

その言葉に、桜井はハツとなった。自分が仕えているこの女性は、精神構造そのものを作り替える強力な魔法の使い手だ。既に表舞台を退いて久しい彼女だが、その実力は未だ衰えておらず、実の息子の無意識領域に人工の魔法演算領域を構築するほどである。

と、そんな深夜の表情に、ほんの僅かながら嘲りの感情が浮かんだ。「それにしても、もしその精神魔法にターゲットの血液が必要不可欠なんだとしたら、その魔法師は『未熟』と言わざるを得ないわね……。私だったら、血液すら必要としないでターゲットを完璧に操ってみせるわよ」

深夜はそう言つて笑みを浮かべると「さて、どこまで読んだかしらね……。」と途中になつていた本をパラパラと捲り始めた。何てことないかのように、そして実際に可能だという確固たる自信が垣間見える彼女の姿に、桜井は背筋が寒くなるのを抑えることができなかった。そんな彼女の耳に、がちやり、とドアの開く音が聞こえた。

「あらあら、昼間から紅茶片手に読書だなんて、随分なご身分ね」
優雅な笑みを浮かべて辛辣な台詞を吐くのは、薄手の真つ黒な服に身を包む、深夜とそっくりな外見をした双子の女性・真夜だった。その後ろには、彼女のプライベートな用向きを果たす（本当の意味での）執事・葉山の姿もある。

そんな彼女の登場に、深夜は隠そうともせず顔をしかめた。まるで自分の時間を邪魔されたことを不機嫌に感じる子供のようなのである。「そう言うあなただって、特に仕事という仕事はしてないじゃない。他の当主の方々は表向きの職業があるのに、あなたにはそれすら無いんだから。せいぜい指示を出すだけで、実際に動いてるのは葉山さん達でしょ?」

「指示を出すのだって立派な仕事だし、そのために色々『下準備』があるから結構忙しいのよ? それに私の場合、ただ存在しているだけで仕事しているみたいなところはあるもの。——そういう意味で

言えば、対外的には生死不明のあなたはそれすらしていないことになるわね」

「あら、だったら大々的に公表しても良いのよ？ 『精神構造干涉魔法の使い手である四葉深夜は存命で、かつて活動していたときよりも更に力を付けてます』 って」

「皆さんの驚く顔が目には浮かびそうな提案ね。——時期が来たら、本当にそうしようかしら」

最後に付け加えられたその一言だけは、冗談めかしたものではない、彼女の本心が含まれているような声色だった。聞く者が聞けばすぐ分かるその変化に、桜井はギョツと目を丸くして彼女へを顔を向け、深夜はチラリと視線だけを動かして反応する。

「さてと、私も紅茶が欲しいところね。葉山さん、用意してちょうだい」

「かしこまりました」

真夜の申し出に、葉山が恭しく腰を折って応えた。

世間の喧騒とはどこまでも無縁な、穏やかな午後の出来事であった。

第77話 「レオくんが襲われたゾ」

日本有数の繁華街である渋谷は、たとえ夜であろうと人通りが途切れることは無い。しかしそれは渋谷という街をマクロ的に捉えた場合であつて、短い時間でなら虫食いのように人がいなくなる場所が存在する。ビルとビルの間には挟まれた狭い路地や、表通りと裏通りの間にある申し訳程度の広さしかない公園も、そういった場所に該当する。

そして1脚のベンチだけ置かれた猫の額ほどの緑地帯も、2つの人間の形をしたものが存在しているだけで人通りは無い。1人はベンチに横たわる、ハーフコートの下にニットのセーターとミニのラップキュロット、厚手のレギンスで装った若い女性。そしてもう1人はその女性に覆い被さる、ロングコートにマフラー、丸いつばのついた帽子を目深に被った、人相も性別も不明な影のような人物。

その帽子の人物が体を起こした直後、背後に新たな人影が現れた。

——どんな感じ？ また不適合？

帽子の人物とまったく同じ外見をした人影が、空気を震わせることのない声でそう尋ねた。

——駄目ね。生きたまま無力化して命を吹き込んでみたけど、血液から魔力を少し奪い取っただけですぐに戻ってきちゃったわ。

1人目が、同じく無音の声で2人目に答えた。

——成功と失敗の基準がよく分からないわね。資質があつても望みが無ければ駄目なのかしら？

——望みの無い人間なんて、この世にいるのかしら？ それとも、望みは望みでも適合する種類があるとか？

——条件を絞り込むためにもっとサンプルが必要だけど、さすがに騒ぎが大きくなり過ぎちゃったわね。どうもアイツが嗅ぎ回ってる気配があるし、もっと慎重になった方が良いかしら？

——はあ、アタシ達も焼きが回ったわね。さすがに100年もあんな所に閉じ込められちゃ、腕が鈍っちゃって仕方がないわ。

——まあ、のんびり行きましょ。どういいうわけか知らないけど、あ

そこはなぜか残ってるみたいだし。

——そうね……んっ？

2つの人影が、思念会話を中断して同時に同じ方向へと顔を向けた。

——結界を突破した人間がいるわね。2人……いや、3人かしら？

——強度は高めてたはずだけど、随分と高い資質の持ち主なのね。

——どうする？ 一旦退く？

——せっかくだし、サンプルにしちゃえば？ それだけの逸材ならば適合するかもしれないわよ。最後尾の1人は他の2人から離れてるみたいだし、その1人が合流するまでには最初の2人を無力化できるでしょ。

——それもそうね。

ベンチの上に女性を残して、2つの人影は街灯の光の外へと姿を消した。

スターズはUSNAの中核的魔法戦力であるが、軍に所属する魔法師全員がスターズ隊員というわけではない。現に国家が公認している3人の戦略級魔法師でスターズに所属しているのはアンジー・シリウス1人だけで、残りの2人はそれぞれアラスカ基地と国外のジブラルタル基地に配属されている。

しかしそれでもスターズがUSNAにとって魔法戦力の主軸であることに変わり無く、特に“一等星”のコードを与えられた魔法師ともなれば“世界最強の魔法戦力”を象徴する存在だ。だからこそその1人であるアルフレッド・フォーマルハウト中尉の脱走事件はかなりの衝撃であったし、今後このようなことを繰り返さないためにも、残りの脱走者を見せしめの意味も込めて“処分”しなければならない。

現在夜の渋谷を早足で進む、夜遊びに興じる若い女性という格好をした2人の女性も、そんな任務に駆り出された精鋭である。彼女達の所属は“スターダスト”と呼ばれ、スターズと同じくUSNA軍統合

参謀直属の魔法師部隊でありながら星々スターズになれなかった星屑、とされている。しかし実戦魔法師として猛者であることは疑いようもない事実であり、特定分野に限ってはスターズの一般隊員にも引けを取らない実力の持ち主だ。

そしてこの2人は、搜索・追跡に優れていた。サイオン波のパターンを識別してその痕跡を感知するという、まだ日本では実用化されていない技能を植え付けられた強化魔法師である。その甲斐あって、現在彼女達は脱走者の1人、スターズ「衛星級サテライト」ソルジャーであるデーモス・セカンドことチャールズ・サリバンを徒歩距離内にまで追い詰めていた。

「奴はこの先の空き地だ」

足を止めた女性に相棒が頷き、コートポケットから情報端末を取り出した。ターゲットのいる公園までの路地は一本道であり、2人から見て左側と、右の角を曲がった所に入口がある。

「挟撃しよう。私は右を行く。仕掛けるのは同時だ」
「了解だ」

短い会話で意思疎通をした2人は、即座に左右に分かれてその公園内へと足を踏み入れた。

目深に被った帽子とマフラー、そしてその間から覗く翼を広げたコウモリの描かれた灰色の覆面、という出で立ちの人物を見つけたのは、それから10秒と経たない頃だった。

「脱走兵デーモス・セカンド。両手を挙げて指を開きなさい」

覆面の前に躍り出た女性が呼び掛けるのと同時、背後に回り込んだ女性がガラスを引っ掻いたようなノイズを覆面に浴びせ掛けた。とはいえ、そのノイズは普通の人間に聞こえることはない。

それは「キャスト・ジャマー」が放つサイオン波だった。USNA軍魔法技術部が開発した携行武器による魔法妨害は、アンテナナイトのような無差別妨害ではなく、CADの機能を妨害するものだ。サイオンを放出するタイプの無系統魔法に長けた者しか使えない、有効範囲はせいぜい5メートル以内、という非常に限定的なものだが、非常に高価で希少な鉱石を使わずに魔法妨害ができる画期的な秘密兵器

である。

突き付けられた銃口を前に、覆面——サリバンは両手を挙げて指を開いた。彼女達に与えられたデータによれば、サリバンはCADが無ければ魔法を行使できず、身体能力も一般兵の域を出ない。魔法師であると同時に生化学的強化措置が施されている彼女達の敵ではない。「おまえには発見次第即時消去の決定が下されている。しかし他の脱走兵の情報を提供するなら、刑一等を減じるとも命令されている」

「デーモス・セカンド。10秒だけ考える時間をやろう」

「いいえ、必要無いわ。スターダスト捜索班^{チエイサーズ}、ハンターQとハンターR^{18th}」

恐怖どころか緊張の欠片も無いサリバンの声に、そして自分達のコードを言い当てられたことに、2人の女性ことQとRの眼光に鋭さが増した。

しかしそれと同時に、彼の女性を思わせる柔らかな語り口に困惑を隠せなかった。

「この子の記憶からの推測だけど、あなた達にアタシは倒せないわよ」サリバンの言葉と共に、Qが構えていた銃が火を噴いた。サプレッサーによっておもちゃのエアガンと変わらぬほどに銃声が静粛されているが、放たれた弾丸は人の命を奪うのに何の不足も無い本物だ。従ってその銃弾はサリバンの胸を抉って心臓に達する——ことなく、彼の後ろにいたRの腕を抉った。

「ぐっ——！」

苦悶の声を漏らすRに、Qは思わず目を見開いた。銃という武器からしたら至近距離とも言って良い場所でターゲットを外す、なんてことは訓練された兵士であるQには有り得ない。どこぞの女刑事じゃあるまいし。

しかしQは、その現象が引き起こされた原因にすぐさま思い至った。そしてそのうえで、驚愕の表情を浮かべていた。

「軌道屈折術式だ——！」

「何をそんなに驚いているの？ この子がそれを得意としていたことくらい、あなた達だって聞いているはずでしょ？」

「なぜだ！ キャスト・ジヤマーは確かに発動していた！ なぜそんな状況下で、魔法を行使することができる！」

「それって、あのCADとかいう変な機械を使えなくするヤツでしょ？ あんなのが無いと魔法を使えないなんて、この世界の人間ってのは不便なものね」

Qがスカートの下に隠していたホルスターに銃を突っ込み、Rと共に袖口からナイフを引き抜いてサリバンの襲い掛かった。強化された身体能力と阿吽の呼吸で繰り出される連撃は、生身の人間には到底避けることのできないものだった。

しかし強化措置を受けていないはずのサリバンは、ひらひらと華麗な動きでそれを躲していく。彼の身体能力が不自然に向上しているのみならず、的確に彼の急所を狙っていたナイフが不自然に軌道を変えて軌道を逸らしていた。

その事実にも、QとRの目がまたしても見開かれた。手に持つナイフの軌道を変えらるというのは高度な技術であり、以前の彼ならばそのような強力な魔法を使えるはずがないからだ。

「アタシ達がいけない間にこの世界の人間が魔法を使えるようになってたのは驚きだけど、だけどやっぱりまだまだね。この子本人よりもアタシの方が、この子の魔法を上手く扱えるわよ」

「何を訳の分からないことを！」

QとRが、再びサリバンの突っ込んだ。しかしそれぞれのナイフはまたしても軌道をねじ曲げられ、Rが苦悶の声を漏らしながらバランスを崩していく。そしてサリバンが手品のような手際で2人と同じナイフを取り出して握り締めると、Rの背中に向けて振り下ろした。しかしそのナイフは、空中に築かれた透明な壁に跳ね返された。

「ベクトルの反転——！」

「総隊長！」

サリバンの台詞に被せるようにして、Qが叫ぶ。その意味を瞬時に理解したサリバンが、体勢を崩したままのRに跳び掛かった。

そしてそんなサリバンの背中に降り注ぐ、4本の短剣。

それを察知したサリバンが短剣を避けるように体の軌道を横に逸

らし、着地したのと同時にRをQ目掛けて突き飛ばし、その直後に4本のナイフを2人へと投げつけた。しかし地面に刺さる寸前だった短剣が軌道を変え、その4本のナイフを叩き落とす。

その隙に、サリバンは近くのビル目掛けて飛び上がった。向かい合わせの壁を3回蹴ることで、路地を構成するビルの屋上へと到達する。

それを見た赤髪・金瞳・仮面の魔法師が同じルートで追跡を行おうとし、その直後に路地の向こう側で新たにサイオンが活性化するのを感じ取った。

一瞬動きを止めて考え込んだ魔法師は、サリバンの追跡を断念し、新たな犠牲者が発生するのを防ぐべく行動を開始した。

レオは今日も、深夜の渋谷を歩き回っていた。しかしいつものように宛ても無くさ迷うのではなく、知り合いに聞いて回って怪しげな連中の情報を収集し、それを基に実際に足を運んでいた。

なぜこんな刑事の真似事しているのか、レオ自身にもよく分かっていなかった。正義感から動いているにしては、他の理不尽な犯罪にはさほど関心は無い。渋谷がホームタウンではない以上縄張り意識は適当でないし、単なる好奇心としても実は犯人の正体にそれほど興味は無い。

レオは自分の行動を、《第六感》によるものだと考えている。

彼は元々、危険に対して人並み以上に鼻が利く。それが彼の出自によるものかどうかは定かではないが、魔法科高校に入学して様々な事件に巻き込まれてきたせいも、さらにその感覚が鋭くなったように感じている。

本来ならば、その感覚を危険から自分を遠ざけるために使うべきなのだろう。しかしレオはこの感覚によって、別方向からの予感も感じ取っていた。

この事件が、いずれ自分達に火の粉として降り掛かってくる。

だからこそ、今の内にできるだけの情報を集めようとしているのか

もしれない。自分達の生活が脅かされることのないように。自分達の大事な人を守り抜けるように。

「……さつきから、気になるんだよなあ」

先程からレオが聞き取っている、虫の羽音のようなノイズ。耳に直接聞こえてくるのではなく、彼の意識の奥底近くを過ぎっているそれを、彼は魔法的な力を使った会話だと直感していた。

その発信源へと吸い寄せられるように歩いていくと、

「――！」

急激に膨れ上がった闘争の気配に、レオは足を止めた。ここから先は好奇心で踏み込める領域ではない、とレオは本能的に感じ取った。寿和に話した「危険なことに首を突っ込むつもりは無い」というのは嘘ではない。

レオはポケットから通信ユニットを取り出すと、寿和に教えられたアドレスへ短いメールを送信した。『吸血鬼はここにいます』という内容で位置情報を公開しているので、寿和がすぐに気づけば容疑者を捕捉することができるだろう。

これ以上巻き込まれないようにレオはそのまま踵を返そうとして、公園のベンチに横たわる人影に気がついた。レオは周囲への警戒、そしてベンチの人影自体にも警戒を怠らずに、そのベンチへと近づいていく。

「おい、大丈夫か」

恐る恐る肩に手を触れて揺するが、その女性からの返事は無い。首筋に手を当ててみると、肌が冷たく、指先から今にも消えそうな鼓動が伝わってくる。レオは慌てて通信ユニットを取り出した。今度は警察ではなく、救急車を呼び出すために。

「――！」

そして次の瞬間、レオは反射的に振り返って端末を持つ手を顔の前に掲げた。

通信ユニットが砕け散る。その得物が伸縮警棒だということは、後ろに大きく飛び退いてから分かったことだ。

その伸縮警棒を持つ人物は、一言で言えば「異様」だった。丸いつ

ばのついた帽子の下は、目の部分だけが切り抜かれた不気味な白一色の覆面。足首まで届くケープ付きの長いコートは体の線を完全に隠し、性別の判断すら判然としない。いや、ここまでくると性別どころか人間かどうかすら分かったものではない、とレオは他人事のように考えていた。

そしてその間にも、レオの意識に例のノイズが過ぎる。先程は会話のように聞こえたそのノイズは、今度は仲間に退却を促す警告だと直感する。

しかしレオがそれに気を取られている隙に、覆面の怪人が一気にレオとの距離を詰めてきた。まるで自己加速術式のような動きだが、魔法式を構築する予兆をまるで感じなかった。不意を突かれた形となったレオは、硬化魔法を編み上げる余裕も無く、横殴りで襲い掛かる警棒を咄嗟に左腕で受け止めた。

何かが潰れる、鈍い音。

そうして折れ曲がった警棒に、覆面に隠された怪人の目が驚愕に彩られる。

「いてえじゃねえか、この野郎！」

雄叫びと共に放ったボディーアッパーが、怪人の胸を捉えて硬い音をたてた。大きく後方によるめく怪人に、痛そうに手を振り払うレオ。しかし骨が折れた様子は無く、先程警棒を受け止めた左腕にも損傷の様子は無い。

武器を用意するんだったな、と内心でほぞを噛みながら油断無く覆面の怪人を見据え、構えを取った。この怪人が「吸血鬼」であると、レオは直感的に悟った。

「コートの下は、カーボンアーマーか？ ご大層なこって」

「暑苦しい性格に見えて、意外と冷静なのね。アタシ好みだわ」

まさか返事が来るとは思っていなかったレオは、怪人の言葉に虚を突かれたように目を丸くした。声色は完全に男のそれ、しかし口調は女のそれというチグハグさも、彼の困惑を増幅させる要因となっている。

と、次の瞬間、風に乗って怪人が再び襲い掛かった。自己加速術式

に流体移動魔法による追い風をプラスしたスピードに合わせ、カミソリのように薄い刃が飛んでくる。レオはそれを、硬化魔法を展開したジャケットで弾き飛ばした。

しかしすぐさま、怪人が手刀が振り下ろしてきた。レオはそれを、左腕で迎え撃つ。

と、そのとき、怪人がその左腕を掴んできた。

「――！」

そして次の瞬間、その左手から真つ黒な流体が飛び出してレオの腕に巻きついてきた。ヘドロのような粘性を持ったそれはみるみる腕を包み込み、彼の左肩から全身へと浸食を始めていく。

魔法なのかどうかも判断がつかない未知の現象にレオが顔を引き攣らせていると、怪人がズイツと顔を近づけてニタリと目を細めた。

「あなた、体も丈夫そうだし、アタシの家来にしてあげる」

「――悪いが、お断りだ！」

レオは叫び声と共に気力を爆発させて、握り締めた右の拳を怪人のだんちゆう胸ちゆうの中央にある急所に叩き込んだ。怪人は「うぐうっ！」と奇妙な声をあげて転倒し、レオは脱力感に耐えかねて片膝をつく。その拍子に彼の左腕に絡みついていたヘドロのような液体が水分を失うようにヒビ割れ、ボロボロと崩れ去って地面に落ちる直前に粉末状に姿を変えて消え去っていった。

今の一撃は手応えこそあったが、決定打にはなっていない。ここで意識を手放すのは負けを認めたと一緒だと考え、レオは己に鞭を打って懸命に顔を上げた。

怪人は既に立ち上がっているが、レオに追撃しようとはしなかった。怪人は正面にいるレオではなく、まったく別の場所に視線を遣っている。

そこにいるのは、赤い髪に金色の瞳をした仮面の人物。距離があるからか小柄に見えるその人物に、レオが感じた最初の印象は「鬼」だった。

――何だ、あれ……？

逃げる怪人と追う鬼の光景を遠くに捉えながら、レオの視界が黒く

塗り潰された。

仮面の魔法師 “シリウス” となったりリーナは路上に倒れるレオを一瞥するが、すぐさま怪人の追跡を開始した。ハンターの救出を優先したためにコウモリ覆面の怪人——デーモス・セカンドことチャールズ・サリバンに逃げられてしまっている以上、白覆面の怪人は何としても捕まえておきたかった。

「シルヴィ、^{サイオン}想子波パターンは識別できましたか？」

『申し訳ございません。ノイズが多く、特定には至っていません』

「カメラはどうですか？」

『今のところ捉えておりますが、都市部ですので障害物が多く、いつまでトレースできるものか』

「分かりました。追跡を続行します」

技術的なサポートに頼れないと分かったリーナは、追跡の足を速めた。真夜中にも拘わらず路上に溢れる若者に紛れ、怪人の残留サイオンは急速に薄れつつある。人間には不可能な速度で逃走する怪人の背中を見失わないよう、リーナは自己加速魔法のギアを更に上げた。

と、怪人が突然細い路地裏へと逃げ込んだ。怪人の姿が見えなくなるが、リーナはすぐさま曲がり角へと辿り着き、その路地裏へと突入する。

「——えっ?」

角を曲がった路地裏の先にも、怪人の姿は無かった。

それどころか、つい今まで感じ取っていたはずの残留サイオンすら、路地裏を少し進んだ先で突然途切れていた。それこそ、怪人がその場で消滅してしまったかのように。

『少佐、どうしました!?!』

「……見失ってしまいました。移動基地へ帰投します」

いきなり立ち止まったリーナの身を案じるシルヴィアに、リーナは悔しげに、しかし潔く自分の失敗を口にした。

* * *

千葉エリカの朝は、日の出前から始まる。小さい頃から続けてきた鍛錬を行うためだ。

10歳までは、父に逆らえず言われるままに。14歳に自分が何者か思い知らされるまでは、誰よりも千葉の剣士らしくあろうとして。そして去年の3月までは、ただ惰性で。

しかし去年の4月に達也やしんのすけと出会ってからは、自らの意思で強くなりたいという想いで鍛錬を続けている。惰性の日々を過ごしていたときには等閑なおよぎになりがちだったロードワークも、強くなるうと決意した日からは、家にいるときは1日たりとも欠かしたことが無い。

今朝も目覚まし時計が鳴ると同時に目を覚ましたエリカは、何千回と繰り返されてきた習慣だからか、あくびを噛み殺しながらも危ない足取りで彼女専用のバスルームへと歩いていった。

バスルームといってもシャワーブースとシャンプードレッサーのみの簡易的なものだが、一般家庭には普及していないそれをエリカが持っているのは、ひとえに彼女が資産家の娘だからだ。彼女の父親は少なくとも、物によって子供を差別するタイプではないらしい。

真冬に冷水を頭から被って眠気を洗い流したエリカは、トレーニングウェアに着替えるためにクローゼットの前に立ったとき、視界の隅でメールの着信ランプが点灯しているのに気がついた。時間から考えて真夜中に届いたのであろうそのメールを、何か嫌な予感がしたエリカは後回しせずに開いた。

シンプルが故に今も現役のテキストメールを読み進める内、エリカの表情がみるみる険しくなった。ぎりぎり、と歯軋りが聞こえてきそうなほどに奥歯を噛みしめ、怒りが今にも溢れてきそうな声で呟く。

「あの馬鹿兄貴……、馬鹿に何やらせてんのよ……!」

乱暴にパジャマを脱ぎ捨てたエリカは、トレーニングウェアの代わりにセーターとスカートに手を伸ばした。

達也の元にそのメールが届いたのは、登校のために家を出ようとしていたときだった。

家の電話にはではなく携帯端末に送り込まれたプレーンテキストのメッセージは、普段は災害予報のような速報性を最優先した情報の配信にしか使われない。不吉な切迫感を漂わせるそれを、達也はすぐに開いて中の文章に目を通した。

そうしてメールを読み進めていた達也から目敏く感情を読み取った深雪が、心配そうに彼を見上げていた。

「お兄様、良くない知らせなのですか？」

「エリカからメールだ。レオが『吸血鬼』に襲われ、病院に運び込まれた」

「……冗談では、ないのですね」

深雪の質問に、達也はゆっくりと頷いた。

「中野の病院で治療を受けているらしい。幸い命に別状は無いようだから、見舞うのは放課後にしよう」

「……はい」

達也の決定に、深雪が反対することはない。それに達也は母親によつて強い感情を奪われていたとしても、人間としての情までも失つたわけではない。

おそらく誰かが彼についているのだろうと結論づけて、深雪は達也の提案に肯定の返事をした。

第一高校から数駅ほど離れた場所に建つ、何の変哲も無い単身用アパートの一室。

そこが、野原しんのすけの現在の住まいだった。

第三次世界大戦によつて人口が減少した影響もあり、賃貸の部屋は大戦前に比べて全体的に広くなっている。しんのすけが住むこの部屋も高校生が住める家賃でありながら、風呂とトイレが別々に作られ、備え付けの家具も一通り揃っている。

本来しんのすけにとつてこの時間は、テレビで天気予報を観るのが日課だった。現代における天気予報は大戦前よりも更に高い精度で予測できるようになったが、彼の場合は天気の子エックではなくそれを伝える美人リポーターの麗しい姿を鑑賞するのが目的だった。あまりにそれに夢中になるあまり、雨だと予報された矢先に傘を忘れて出掛けることもしばしばだった。

しかし今のしんのすけは、テレビこそ点けているものの、視線はそちらに向いていなかった。携帯端末を目の前にかざし、画面を何度も上下にスライドさせている。

やがて彼は大きな溜息を吐いて、独り言を呟いた。

「リーナちゃんの電話番号、聞いておけば良かったゾ」

第78話 「レオくんをお見舞いするゾ」

レオの入院をメールで知り合いに一斉送信したエリカは、そのまま彼が入院している中野の警察病院へと向かった。学校を休むこと自体はそのメールに書かれているし、学校にも連絡を入れているため問題は無い。

しかし、エリカの目的はレオの見舞いではなかった。いや、一応顔を合わせたのでその目的も無いわけではないのだが、彼女の主たる目的は違っていた。

「……………」

エリカは現在、レオが入院している個室の前に置かれた長椅子に腰掛けていた。その表情はとても険しく、まるで部屋に怪しい人物が入ってこないか監視しているようだった。

事実、彼女は監視していた。

レオは「吸血鬼」と思われる存在に襲われた。そして生き残った。ならばその仲間が報復のために、あるいは自分達の正体に辿り着く恐れのある者を排除するために、レオを襲撃する可能性があった。それを迎撃するために、エリカはこうして朝から監視を続けているのである。

「……………」

監視を始めて数時間が経った頃、レオの個室に2人の人間が訪ねてきた。エリカがその姿を見掛けたとき、ほんの僅かに目を見開き、直後に鋭く細められた。

彼の病室にやって来たのは、七草真由美と十文字克人。成程、元生徒会長と元部活連会頭が見舞いに来たとなれば、自校の生徒が襲われて心配だったからという名目は立つ。彼らはもう自由登校なので、授業時間中ここへ来るのも問題無い。

しかしレオは、生徒会にも部活連にも関わっていない。そんな生徒を、既に役職を退いている2人が揃って見舞いに来るのは少々不自然だ。まだ現役の生徒会長や部活連会頭が見舞いに来る方が自然だろう。

克人は入口脇に座るエリカをチラリと見遣り、すぐに関心が失せたようにドアへと向き直った。真由美も愛想笑いの見本のような笑顔で会釈をして、すぐにドアへと向き直った。そのままドアをノックして入っていく2人を、エリカは止めなかった。

2人が部屋に入ったところで、エリカは立ち上がってその場を去った。

彼女が向かうのは、先程の個室から程近い場所にある事務室。ノックもせずに入ってきた彼女を、部屋の中にいた2人は気まずそうな表情で出迎えた。

その人物とは、エリカの兄・千葉寿和と、彼の腹心・稲垣。寿和の頬が少し赤く腫れているのを見て、エリカはもつと殴ってやれば良かったと思った。この「馬鹿兄貴」が何の抵抗も無く殴られる機会なんてそうそう無い、積もり積もった恨みを少しでも晴らす機会を無駄にするべきでは――

「えっと、お嬢さん？ 何か物騒なことを考えていませんか？」

エリカの思考を遮って話し掛けてきた稲垣だが、エリカが冷たい刀のような鋭い目を彼に向けると、彼は即座に口を引き結んで視線を泳がせていた。

明るい性格とコケティッシュな美少女ぶり、そして父や兄2人ですら使えない秘剣「山津波」やまつなみを実戦で使いこなす實力によって、エリカは門下生の間でアイドル的人気を掴み取っている。そんな彼女に睨まれば門下生の1人である稲垣は色々立場が悪くなるし、実質免許皆伝の腕前を持つ彼女に稽古の相手にでも指名されれば遊び感覚で小突き回されるに違いない。

「兄貴。あいつの所に、七草の直系と十文字の直系が来てるんだけど」
何の用事か知ってるんでしょ、とエリカは無言の圧力を込めて寿和を睨みつけた。隣にいる稲垣はすっかり萎縮してしまっているが、寿和はそこまで妹に畏れ入るつもりは無い。

「西城くんと一緒に救出された女性が、七草家の家人けにんだったらしい」

「それだけ？」

「それ以上は詮索するな、と上からのお達しでね」

「霞ヶ関ならともかく、桜田門はこっちのフィールドでしょ」

「残念、俺達は霞ヶ関の人間なもんでね」

「ほんっと、使えない」

舌打ち混じりで吐き捨てるエリカだったが、それ以上八つ当たりじみた真似はしなかった。

「盗聴器は？」

「部屋に入ってきた途端に壊された。『妖精姫』のマルチスコープが、ここまで高性能だとはね」

「部屋の外に仕掛けてたのは？」

「そっちは十文字家の音波遮断で無効化されました」

寿和と稲垣の答えに、エリカはもはや文句すら口にできなかった。

「じゃあ推測で良いわ。心当たり、あるんでしょ？」

「……本当に推測でしかないぞ？ どうやら七草は、被害者を隠匿しているようだな」

「隠匿？ 死体を隠してるってこと？」

いくら十師族が超法規的な権利を有しているとはいえ、大量殺人の捜査を邪魔するような真似をすることに、エリカは疑問を禁じ得なかった。

しかしエリカも頭が回る方だ。すぐに裏の意図に思い至った。

「……今回の事件に、魔法師が絡んでるってこと？」

「多分ね。加害者か被害者かは分からないが」

「被害者？ 加害者だったら秘密裏に処理しようとするのも分かるけど、被害者が魔法師だからってなんで隠す必要があるのよ？」

「そこなんだよな。今回の事件、どうも一筋縄ではいかない気がするんだよなあ」

エリカの質問に、寿和がニヤリと不敵な笑みを浮かべて答えた。
と、そのとき、

「——ん？」

寿和の隣で会話の成り行きを見守っていた稲垣が、耳を押さえて疑問の声をあげた。

「どうした？」

「いえ、どうやら彼の病室に來客があつたようで」
「來客？」

稲垣の答へに、エリカと寿和が揃つて首を傾げた。

「——成程。訊きたいことは以上よ。ごめんね、体調が辛いときに」
「いえ、別に良いツスよ。2人が最初に來たときは結構ビビりましたけど。——ところで、なんで2人が一緒にこの事件を捜査してるんですか？」

「悪いが西城、それについては答えられない」
「そツスカ。まあ、そうですね」

病室のベッドで上半身を起こすレオの傍には、真由美と克人が並んで椅子に座つていた。真由美に見舞いに來てもらえたとなれば健全な男子は大なり小なり喜ぶものだが、克人が横にいるだけでその喜びも相殺されてしまうだろう。もつとも、レオの場合はそんな感情とは無縁だが。

「それじゃ、私達はそろそろお暇するわね。いつまでも居座るのも悪いし」

「そうだな。邪魔したな、西城」

そう言つて2人が立ち上がろうとしたそのとき、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。部屋に入ったときに克人が施した音波遮断は指向性を持つ魔法であり、外からの音は聞こえるようになっていた。

しかし中から外の音は聞こえないようになっていた。レオは外に呼び掛けようとして、それに気づいたのか動きを止めた。それを見た真由美が、代わりにドアへと歩み寄つてそれを開けた。

すると、そこにいたのは、

「やつほーレオくん、お見舞いに來たゾ」

「しんちゃん！」

授業時間中には友人達は來ないだろうと踏んでいた真由美が、第一高校の制服姿で手提げ袋を持ったしんのすけに驚きの声をあげた。

レオも克人も声こそあげなかったものの、同じように驚きの表情を浮かべている。

一方しんのすけも、レオの病室にいる上級生2人に意外そうな表情を向けた。

「おつ？ 真由美ちゃんに克人くん、なんでここにいるの？ サボリ？」

「しんちゃん、自由登校の私達と違って、あなたの方がよっぽどサボりだからね」

「オラはサボりじゃないゾ、ちゃんと1回学校に寄ってから来たんだゾ」

「いや、授業に出なきや意味無いからー！」

真由美のツツコミを軽く聞き流し、しんのすけはレオのベッドへと駆け寄って袋の中身を取り出していく。

「レオくん、病室に飾るお花を買ってきたゾ。ほい、シクラメンと菊と紫陽花あじさいと椿」

「ことごとく見舞いに持って来ちゃ駄目なヤツじゃねえか！」

「それと入院中は暇だろうから、アクシヨン仮面のDVDボックスもドーズ」

「おまえ、自分の趣味を押しつけるのも嵩張るのも、見舞い品には適さないヤツだからな！ つてか、絶対に分かってやってるだろ！」

「いやあ、何というかネタ振りされてる気がしまして」

「してねえよ！ —— ああもう、こう見えても結構ダメージ大きいんだよ、あんまり大きな声出させないでくれよ」

レオはそう言うと、ボスンと音をたてて上半身をベッドに倒した。顔色が悪く呼吸も荒いその様子は確かに辛そうで、それを見た真由美が自分達の質問に答えてたときは割と平気そうだった彼とのギャップに驚いているほどだ。

「おおつ、本当に辛そうだゾ。見た感じ、全然ケガしてないのに」

「そう簡単にやられて堪るかよ。俺だって無抵抗だったわけじゃないんだぜ」

「ふーん、じゃあなんでやられたの？」

「それがよう、よく分かんねえんだよなあ……」

落ち込むでも負け惜しみでもなく、心底納得いかないといった表情でレオが首を捻った。

そんな2人の遣り取りを、そろそろ帰ると言ったはずの真由美と克人が黙って眺めていた。

「殴り合ってるときに急に相手が腕を掴んできたらよ、ヘドロだか何だかよく分かんねえモンが飛び出してきて、俺の腕に絡みついていたんだよ。自分の家来にするとか言ってくるし、さすがにヤベエって思っただけで1発良いのを入れたら逃げてったけど、こつちも立つてられなくて道路に寝転がってる所をエリカの兄貴の警部さんに見つけてもらってな」

「ふーん、毒でやられたってこと？」

「いや、そうじゃねえんだ。体中調べてもらったけど切り傷も刺し傷も無かったし、血液検査もシロだった」

レオの説明に、しんのすけは「ほーほー」といつもの調子で相槌を打つ。

「吸血鬼って、どんなだった？ やっぱり牙とかあった？」

「牙は分かんねえな、白い覆面してたし。目深に帽子を被って、ロングコートの下にハードタイプのボディアーマーだから、人相も体つきもよく分からなかったよ」

「なーんだ、綺麗なお姉さんだったら会いたかったのに」

「会ってどうすんだよ……。それに多分、男だと思っぞ。女言葉だったけど、声は明らかに男だったからな」

「オカマの吸血鬼とか、まったく興味がありませんな！」

「ああ、おまえはそうだろうよ」

腕を組んで堂々と言い放つしんのすけに、レオは色々と諦めたような口調で吐き捨てた。どんな状況でもブレない彼に、真由美が思わず苦笑いを浮かべる。

と、ふいにしんのすけがこんなことを尋ねてきた。

「そういえばレオくん、リーナちゃんってどこに来た？」

「は？ リーナ？ 別に来ちゃいねえけど、なんで急に？」

「うーん、何となく」

何とも要領を得ない返事に、レオだけでなく真由美や克人も疑問符を浮かべる。

そしてそんな空気の中、

「んじゃ、オラそろそろ帰るね。レオくんも元気そうだし」

「いや、俺入院してんだけど」

「じゃあねレオくん、お大事に〜」

散々搔き回すだけ搔き回して、まさしく嵐のようにしんのすけが病室を後にした。

残されたのは病室の主であるレオ、そして一度「帰る」と言いながら何となくその場に居続けていた真由美と克人は、疲労を露わにした表情で互いに見合った。

「……西城くん、とにかく今はゆっくり休みなさい」

「……はい、そうします」

レオは力無く答え、枕に頭をズブズブと沈めていった。

「しんちゃん、わざわざ学校休んで来てくれたのね」

「おおつ、エリカちゃん」

しんのすけが病室を後にして少し歩くと、エリカと寿和と稲垣の3人が揃って彼を出迎えた。3人の表情はそれぞれ、エリカが喜色と驚愕、寿和は興味と緊張、そして稲垣は興味と警戒といったところか。

寿和も稲垣も彼がエリカのクラスメイトであることは知っているが、彼自身を知ったのはそれよりも前、具体的には中学の剣道大会で代々木コージローと戦ったときである。当時から（大人と戦っても）敵無しと思われていたコージローを打ち負かした逸材にいつかは出会いたいと、そして願わくば手合わせしたいと考えるのは剣を嗜む者としては当然のことだろう。

しかし現在はそれ以上に、彼らにとってしんのすけは警戒すべき相手となっていた。

先の横浜事変の際、彼はコージローと共に戦乱の横浜を動き回り、

横浜市中区役所の防災無線基地に忍び込んでゲリラ兵に架空の特撮ヒーローを名乗って挑発する、という悪戯では済まされないことをしでかしている。どのような意図があつてそんなことをしたのか、そもそも何かしらの意図があつたのか、それすら分からない状態では警戒せざるを得ないだろう。

しかも寿和の場合、自分の父（つまり千葉家現当主）が弟の修次なむつぐを九校戦へ赴かせ、しんのすけの戦い振りをその目で確かめさせたことも関係している。それを知ったときに父親に問い質し、彼の口からその「狙い」を聞いた者からすれば、もはやしんのすけのことを純粹な好奇心で見ることができない。

と、そんなしんのすけが寿和と稲垣を見て首を傾げた。

「エリカちゃん、その2人誰？」

「こっちはアタシの兄の千葉寿和で、こっちがその部下の稲垣さん。2人共警察省に務めてる警察官で、——今回の事件にレオを巻き込んだ張本人」

「ちよつ、エリカ——」

「ほーほー、エリカちゃんのメールに書いてあつた人達ですな」

しんのすけは納得したように頷くと、ゆっくりとした足取りで歩き出した。2人共それに対して警戒心を覗かせるが、あくまで妹のクラスメイトに接するのだからと即座に笑顔を取り繕つて彼を迎える。

やがてしんのすけは手を伸ばせば届くほどの距離で足を止めると、値踏みするようにジロジロと寿和を観察し始めた。その目には特にこれといった感情は見られないが、状況が状況だけに寿和の顔が僅かに緊張で強張る。

そうして一通り観察を終えてから、しんのすけが口を開いた。

「エリカちゃんのお兄さん、首筋が赤くポチッと腫れてるけど、虫に刺されたの？」

「はっ？ そんなはずは無い、昨日は痕が残るような真似はさせなかった——あつ」

寿和は首筋を手で隠しながら何やら口走り、そしてそれが失言だと気づいたのかピタリと動きを止めた。

ギギギギ、と古いブリキ人形のようにぎこちない動きで横を向く。顔を真っ赤に染めて小刻みに震えているエリカが、自分を睨みつけていた。

「——最っ低！ このエロ兄！」

「んぐつ——！」

「け、警部！」

エリカが叫び声と共に寿和の股間を蹴り上げ、彼は苦悶の表情を浮かべてその場に崩れ落ちた。間近でそれを目の当たりにした稲垣が驚愕の表情で彼に駆け寄り、そしてしんのすけはエリカの見事な蹴りに感心した様子だった。

そして何事も無かったかのように、しんのすけはエリカに向き直る。

「そうだエリカちゃん、リーナちゃんってここに来た？」

「へっ？ 朝からここにいてるけど、別に来てないわよ」

「そっか。——じゃ、そういうことで」

しんのすけはヒラヒラと手を振ると、未だに床に寝転がって悶絶している寿和を跨いでその場を去っていく。

その背中をしばらく見送っていたエリカだったが、ふと何かに気づいた。

「ちよつと待って、しんちゃん！ なんでリーナを探してるの!?!」

エリカはここが病院であることも忘れて大声を出しながら、未だに床に寝転がって悶絶している寿和を跨いでしんのすけの後を追っていった。

稲垣は2人が去っていった方向を見つめながら、その表情に警戒心を露わにしていた。

足元から聞こえる苦悶の声は、しばらく止みそうになかった。

*

*

*

第一高校にて全ての授業が終わって少し経った頃、リーナはマクシミリアン・デバイス東京支社を訪れていた。CADメーカーを魔法科

高校生が見学するのは珍しいことではなく、大使館の用意した紹介状と一高制服が持つ信用で受付を通過した彼女は、タイトスカートのスーツを纏う2人の女性社員に会議室に案内された。

しかしリーナがここに来たのは、社会見学のためではない。ここは彼女の隣人である本郷未亜ことミカエラ・ホンゴウの勤務先であり、今回の脱走兵追跡部隊の秘密拠点にもなっている。彼女を出迎えた女性社員も、昨晚彼女が助けたスターダストの隊員だ。

「少佐、昨晚は危ういところをありがとうございました」

並んで敬礼をする2人に手振りで楽にするよう指示し、リーナもソファアーに腰を下ろす。

ちなみに現在のリーナは、赤い髪に金色の瞳、そして顔つきもまったく別人となっていた。しかし2人共戸惑う素振りも無く、感情の伴わない無表情でリーナの向かいに座り報告を開始する。

「デーモス・セカンドを捕捉した我々は、事前に与えられたデータに従いキャスト・ジャマーを使用しました。ですがキャスト・ジャマーは奴に対して有効ではありませんでした」

「作動が妨げられたのですか?」

「いえ、キャスト・ジャマーは正常に作動していました。奴の弁によればCADを必要としなくなったようでした」

「CADを必要としない……サリバン軍曹がサイキック化したということですか?」

リーナの問い掛けは疑わしげなものであり、現に2人は答えに詰まる。

しかしそれは、肯定も否定もできない、ということだ。

「——我々は昨晚の奴の言動から、デーモス・セカンドが何者かに意識を乗っ取られている可能性を提示します」

「——何ですって!」

思いがけない報告に、リーナは思わず大声をあげて立ち上がった。しかし即座に座り直し、2人に報告の続きを促す。

「奴はデーモス・セカンドを『この子』と呼称していました。また事前のデータではデーモス・セカンドにセクシヤル・マイノリティの傾

向は見られませんでしたが、昨晚の奴は女性の口調で話していました」

「また、奴は我々のことを『この世界の人間』と呼称していました。仮にデーモス・セカンドが何者かに意識を乗っ取られていると仮定すると、その何者かは『別の世界』から来たと解釈できます」

「別の世界……？ サリバン軍曹が我々を攪乱するためにそのような言動を取った可能性は？」

「否定できません。奴は我々に関する知識を有しており、デーモス・セカンドが元々得意としていた軌道屈折術式を使用していました。——しかしCADは使わず、かつ事前のデータよりも強力になっていきます」

「また、奴の身体能力は強化を受けた我々を上回っておりました」

脱走兵のサイキック化については前から推察されていたことだが、身体能力の向上については新しくもたらされた情報だ。リーナは少し考え込み、そして2人に尋ねる。

「サリバン軍曹の想子波特性サイオンは変わっていないかったですね？」

「少なくとも、我々に識別可能なものでした」

「私はサリバン軍曹を追跡中、彼の仲間と思しき者と接触しました。そちらについては観測できませんでしたか？」

「……申し訳ございません。少佐とデーモス・セカンド以外は、認識できませんでした」

頭を下げる2人に、リーナは目を閉じて再び考え込む。

「……その何者かについては何とも言えませんが、少なくとも戦闘面においては過去のデータは当てにならないようです。今後、脱走者を捕捉した場合は追跡に留め、直接手を出すことの無いように。私が、直接対応します」

「イエス・マム」

立ち上がったスターダストの2人に敬礼を返し、リーナは会議室を後にした。

*

*

*

それと同じ時刻、達也たちがレオの病院に見舞いにやって来ていた。

メンバーは達也・深雪・ほのか・美月・幹比古の5人。彼らは午前中にしんのすけが見舞いにやって来て、彼と一緒にタイミングでエリカも帰っていったことをレオに聞いてから、彼を襲った吸血鬼に関する検証を始めていた。

しんのすけに話したのと同じ内容を彼らに説明すると、幹比古が意を決したようにレオへと問い掛けてきた。

「レオ、君の『幽体』を調べさせてもらっても良いかな?」

「ユータイ? 何じゃそりゃ」

「幽体というのは僕達古式魔法師の間で使われている言葉で、精神と肉体を繋ぐ霊質で作られた、肉体と同じ形をした情報体のことだよ」
「それを調べると、何が分かるんだ?」

興味があるのか、若干目を輝かせた達也が尋ねてきた。

「レオが脱力して意識を失ったのは、ひよつとしたら幽体を吸い取られたからかもしれない。幽体は精気、つまり生命力の塊で、古来より人の血肉を食らう『魔物』はそれを通じて精気を糧としていると考えられているんだ」

「もし俺のユータイが減っていたら、俺が出会ったその『吸血鬼』はそれが狙いだったってことか。良いぜ幹比古、存分に調べてくれ」

レオの許しを得たところで、幹比古は様々な道具を取り出して測定を開始した。紙に墨で書かれた由緒正しい札から、達也でさえ初めて見るような伝統呪法具を駆使してレオの幽体の測定する。

やがて測定を終えた幹比古は、結果を知った瞬間にその表情を驚愕の色に染めた。

「……レオ、君は本当に人間かい?」

「おいおい、随分なご挨拶だな」

冗談に聞こえないほどにしみじみと呟かれたせいで、さすがのレオも笑い飛ばすことができなかった。とはいえ、幹比古自身も冗談で言ったつもりは微塵も無いのだろうか。

「レオの失った幽体の量からしたら、普通の人間は起きていどころか意識も保てないほどなんだ。そんな状態で体を起こして話ができるなんて、よっほど肉体の性能が良いんだろうね」

「……おうよ。俺の体は特別製だぜ？」

悪意の無い言葉だとは分かっているが、性能アップのための改造を施された遺伝子を持つレオにとって、先程の言葉はどのような聞こえたのだろうか。それでもレオは八つ当たりすることなく、冗談めかしてそれを受け流した。

「んで、俺のユータイが減ってるってことは、やっぱ『吸血鬼』はそれが狙いだったってことか。だとしたら、そいつはただの人間じゃなさそうだな」

「……いや、もしかしたら元々はただの人間だったのかもしれない」

幹比古の言葉を聞いた全員が、眉を寄せて首を傾げた。

代表して尋ねたのは、達也だった。

「幹比古、さつきから随分と含んだ言い方だな。犯人に心当たりがあるのか？」

「……多分、レオが遭遇した『吸血鬼』の正体は、『パラサイト』だと思う」

躊躇いがちに口を開いた幹比古だったが、その口調はどこか自信を覗かせるものだった。

「寄生虫？ パラサイト そのままの意味じゃないよね？」

「超常的 PARANORMAL 寄生物 PARASITE、略してパラサイトと、僕ら古式魔法師の間では呼ばれている」

魔法の存在と威力が明らかになって国際的な連携が図られたのは、何も現代魔法だけの話ではない。古式魔法も従来の殻に籠もって停滞することは許されず、国際化の流れは避けられないものだった。古式魔法の伝道者達による国際会議がイギリスを中心に何度も開催され、用語や概念の共通化並びに精緻化が図られていった。国際的な連携に関しては、むしろ現代魔法よりも活発だったらしい。

パラサイトも、そうして定義されたものの1つである。妖魔、悪霊、ジン、デーモン——。それぞれの国でそう呼ばれていたモノ達の内、

人に寄生して人間以外の存在に作り替える魔性のことをそう呼ぶ。

「国際化が図られたとはいえ、基本的に古式魔法は秘密主義だからね。みんなが知らないのも無理はないよ」

「妖魔とか悪霊とかが実在するなんて……」

「それを言うなら、魔法だって実在すると思われていなかった。だが俺達がこうして魔法を使っている以上、未知の存在だからといって無闇に怯える必要は無い」

恐怖に震えるほのかに対し、達也は彼女の肩に手を置いて宥めるようにそう言った。天然でそういう振る舞いをしているのではなく、自分が彼女に対して大きな影響力を持っていることを認識したうえでの行動だ。

そうしてほのかが落ち着きを取り戻した頃、幹比古が自身の疑問を口にする。

「だけど、変だよな？ レオの話だと、わざわざ血を奪わなくても精気を吸い取れることになる。傷痕を残さず血を奪う方法も分からないけど、なんで血を奪うなんて余分な手間を掛けているんだろう？」

「こうは考えられないか？ —— 血を奪うのは、精気を奪うのが目的ではない」

幹比古の疑問に真っ先に答えたのは、達也だった。

当然、皆の視線が達也に集まる。

「レオの話によれば、その『吸血鬼』はレオを自身の『眷属』にするつもりだった。それを狙って行使した魔法によってレオの精気が奪われたわけだが、逆に今回レオは血を奪われていない」

「だから血を奪うことと精気を奪うことは、そもそも因果関係が無いということか」

「あくまで推論だ。—— 幹比古、パラサイト関連から奴らの狙いを推察することはできるか？」

「残念ながら『本物の魔性』に出会うこと自体が稀だから、魔性に対する研究はほとんど進んでいないんだ。経験則に伴う定説で推論を導き出すしかないのは、結局のところ同じだよ」

「そうなんですな。頻繁に出現してるんだったらどうしよう、って思

いました」

美月がホツとした口調で胸を撫で下ろす。

それを見た幹比古は、安心させるためか柔らかな笑みを浮かべて説明する。

「そんな滅多に出現するものじゃないよ。少なくとも僕ら古式魔法師が把握している内では、本物の魔性による仕業は少なく、魔性による仕業を装った人間の術者であることがほとんどだ。例えば有名な大江山の酒呑童子しゅてんどうじだって、その正体は西域さいいきから流れてきた呪術師だった、っていうのが僕達の間では定説になってるし」

「本物の魔性に出会う可能性は、どのくらいのものなんだ？」

「そうだな……、1つの流派で10世代に1世代、といったところかな。それだって偶然この世界に迷い込んだ個体を見つけた場合がほとんどで、本物の魔性が人間に害を成して術者がそれを退治するなんて、世界的に見ても100年に1回有るかどうかってレベルだよ」

それを聞いた達也は、日本で本物の魔性を退治した記録は900年前の安倍泰成あべのやすなりによる妖狐退治が最後だ、と以前幹比古が言っていたのを思い出した。

「でも今回の事件の犯人は、本物の魔性なんだよな？　偶然だと思うか？」

達也の問いに対する幹比古の答えは、ひどく慎重なものだった。

「歴史が現代に近づくにつれて、間違いなく魔性の観測例は減少している。偶然という可能性もゼロではないけど、何の原因も無く起こったとは考えられない」

「つまり今回の事件は人為的な原因で魔性がこの世界に引き摺り込まれたか、何者かによって手引きされた可能性が高いというわけか」

「どこの誰か知らねえが、おかげで俺がこんな目に遭わされるとはな。見つけたら1発ぶん殴ってやる」

拳をもう片方の掌に叩きつけて、レオが獰猛な笑みを浮かべてそう言った。

それを聞いた達也たち全員が、レオの場合は自分から事件に関わっていったんだろう、と思ったが、全員が空気を読んで口にはしなかつ

た。

そんな中、達也は1人思考を巡らせていた。

先程の会話にて思い出した、安倍泰成による妖狐退治。それが日本で本物の魔性を退治した最近の記録であるというのが幹比古を始めとした古式魔法師の認識だが、しんのすけ関連の出来事を考慮すればおそらくそれは誤りだ。彼は自分達の知らないところでそういった奴らとも対峙し、そしてその度に何らかの方法でそれを切り抜けていると思われる。

ぜひともその知識を借りたいものだが、と達也は秘かに考えていた。

*

*

*

しかし、それから数日後。

しんのすけは学校を休むようになり、常に寝不足気味のエリカと幹比古を学校で見掛けるようになった。

第79話 「吸血鬼ってナニモノ？ だゾ」

それは、レオが入院してから2日後のこと。

達也は九重寺にて、八雲と毎朝の組み手を行っていた。

両者互いに数メートルの間合いを空けて始まったそれは、互いの拳が間髪入れずに突き出され、目まぐるしく体と攻守が入れ替わる激しいものだ。単なる打撃の応酬ではなく、上下左右から襲い掛かる拳や手刀や掌しょうを躲し、掴み取り、振り払う。

高度な駆け引きを展開している内に、両者の間合いが再び数メートルにまで広がった。体術は互角、体力は上、駆け引きは自分の方が遙かに下の達也にとって、駆け引きを弄する暇も与えずに攻め続けることが八雲に勝利する手立てだ。

達也は一気に間合いを詰めて拳を繰り出そうとして、八雲の存在に揺らぎを感じた。達也は即座に情報体を分解する対抗魔法を発動、それによって八雲の幻術が解除されて彼の姿が霧のように消えた。

右か、左か。さすがの八雲も、背後に回り込む時間は無かったはず。

達也の判断通り、八雲は彼の背後にはいなかった。しかし達也の推測とは違って、八雲は彼の真正面、先程達也が狙いを定めた場所から僅か30センチほど後方で打撃動作に入っていた。

達也は一旦止めかけていた拳を突き出した。このまま八雲が打撃を繰り出せば、相打ちに持ち込めると踏んでのことだった。

しかし八雲の体は、彼自身の拳について行かなかった。体を残したフエイントの手打ちに誘い込まれた達也の体は、八雲の投げで宙を舞い、地面に叩きつけられた後も八雲は彼の手を離さずに関節技へと持ち込む。

しばらくして八雲が手を離れた後も達也は何度も咳き込み、立ち上がるまでに時間を要した。片腕を取られたせいで満足な受け身も取れず、慣性を中和させることで辛うじて骨折だけは免れたが、衝撃を完全に殺すには至らなかったのである。

「いやあ、焦った焦った」

「……師匠、今のは？」

「いやあ、まさか『纏衣の逃げ水』が破られるとは思わなかったよ」

八雲が口にしたその台詞、そして額の汗を袖で拭うオーバーな仕草は、傍目にはふざけたものだったが驚き自体は本物だった。体を残したフェイントは意図的ではなく咄嗟のアドリブであり、直前の術が破られることまでは想定していなかったのである。

「師匠、アレはいつもの幻術ではありませんね？」

「やっぱり分かっちゃうのか。視ただけで術式を読み取ってしまう君の異能は、相手にとって脅威そのものだ。——でも、それを逆手に取る手段が無いわけじゃないんだよ」

「今の幻術が、それだと？」

達也の問い掛けに、八雲は頷いた。

口元の端が楽しげに歪むのを隠しきれずに、いや、隠そうともせず

に。
「『纏衣』は本来、この世のものならざるモノの目を誤魔化すための術だ。どういう仕組みかは……自分で考えてみてごらん。君ならすぐに分かるはずだよ」

勿体つけるな、とは思わなかった。術式の種明かしを要求するのはマナー違反だ、という心構えもあったが、それ以上に気になることが八雲の台詞に含まれていたからである。

「師匠、今『この世のものならざるモノ』と仰いましたか？」

「僕達が相手にするのは、人間ばかりじゃないよ。この世のものならざるモノの相手は、それほど珍しいことじゃない」

「俺の友人である古式の術者は、本物の魔性に遭遇するのは極めて稀だと言っていました。つまり偶然ではない、つまり何者かの作為の下でならけつして珍しくはない、ということですか？」

「うーん、辛うじて及第点、かな」

その言葉が示す通り、八雲の表情は満足には程遠かった。

「如何に知恵者といえども、記号化と先入観の罍を避けるのは難しいということか。おそらく『彼』ならば、すぐに正解に辿り着いたと思うよ」

八雲の言う『彼』とは、しんのすけのことだろう。確かに彼の発想

の柔軟性は、達也もよく驚かされる。九校戦での“小通連”の使い方などがその代表例だろう。開発者の意図しない使い方はしないほしい、というのが達也の偽らざる本音だが。

と、本題から逸れかける達也の思考が、八雲の次の台詞によって吹き飛んだ。

「君自身、一度や二度は“この世のものならざるモノ”と接触しているはずだよ。——君ら現代魔法師がS B魔法と呼んでいるものは、いったい何を媒体としているんだい？」

「——！」
それはまさしく、達也にとって盲点だった。

知性や意思の有無などというのは、この際問題ではない。例えば細菌は知性も意思も無いが、人の体に入り込んで肉体の機能に干渉して健康を害する。ウイルスに至っては不完全な増殖機能しか持たないが、学術的には厳密な“生物”に該当しなくとも、人の肉体を蝕む“生き物”と見なせることに異論は無いはずだ。

ならば幹比古が行使する精霊も、たとえ現象から切り離された孤立情報体に過ぎなくとも“この世のものならざるモノ”、正確には“肉体を持つ生き物ならざるモノ”と定義できるかもしれない。そもそも精霊に意思が存在しないと証明した者は1人もいない。与えられたコマンドに対して自律的な処理を行うアルゴリズムが魔法式に全て組み込まれていると考えるよりは、精霊自体に意思があると考えの方がむしろ合理的ですらある。

「師匠、もう1つ質問しても宜しいでしょうか？」

「言つてごらん」

「現代魔法学においては、精霊は自然現象に伴ってアイデアに記述された情報体が実体から遊離して生まれた孤立情報体、となっております。元になった現象の情報を記録しており、魔法式で方向性を定義することにより、その情報から現象を再現することができます。これが精霊魔法だと解釈されています」

「大体それで合ってると思うよ。そういった理屈付けに関しては、現代魔法の方が一枚も二枚も上手だ」

「ならば師匠は、パラサイトが何を由来とした情報体かご存知でしょうか？」

ふむ、と八雲は顎に手をやった。

「パラサイト……イギリス風の表現だね。残念ながらそれは僕も知らないよ。——ただ、人の精神に干渉するものだから、精神現象に由来するものだとは思うけど」

「精神に由来する情報生命体、ということですか」

「僕は、人型の妖魔も動物型の妖怪も、情報生命体である妖霊がこの世の生物を変質させたものじゃないかと考えている。物理現象に由来する精霊がこの世界と背中合わせの影絵の世界を漂っているように、精神現象に由来する妖霊は精神世界と背中合わせの写し絵の世界からやって来るんじゃないかと思うんだ」

「そうになると遭遇例が少ないのは存在しないからではなく、俺達がまだ精神を観察する術を十分に持たないからだ、とも考えられますね」
「ロンドンに集まった連中からしたら異端に聞こえるのかもしれないけど、それが僕の偽らざる自説だよ」

さすが古式魔法の大家たいかの称号は伊達ではない。達也は久し振りにそう思った。

*

*

*

1年E組。始業前の教室にて。

「レオくん、大丈夫でしょうか……？」

「大丈夫だろ、打ち身以外に目立った怪我也無かったし。まさか医者
が嘘を吐いているわけでもあるまいし」

互いの自席に座って会話をするのは、達也と美月の2人。入学から付き合いのある2人ではあるが、この2人だけで過ごすというのはほとんど無かった。レオが入院して登校できず、いつもはもつと余裕のある時間に来るエリカと幹比古が未だに来ていないからこそその現象だった。

ちなみにエリカが来ていないのは、レオの看病で泊まり込んでいる

とかではない。そもそも彼女が見舞いに行ったのは最初の1回だけで、しんのすけと共に病院を後にして以来一度も病院に顔を出していないようだ。昨日も遅刻ギリギリに駆け込んできたし、おそらく今日もそうなるだろう。

「おはよ〜」

「おはよう、達也、柴田さん……」

と、そんなことを考えていると、アンニユイな雰囲気を漂わせるエリカと、疲れの残る顔をした幹比古が早足で教室に入ってきた。

授業開始のメッセージが画面に表示されたのは、その直後だった。

その日の昼休み、達也たちの行動はいつもと少し違っていた。

エリカは食堂にも行かず、自分の机に突っ伏して寝息をたてている。幹比古は頭痛を訴えて、お昼を食べ終わるとすぐに保健室へと向かった。おそらく寝不足から来る疲労だろうからと、付き添いは美月に一任している。

そして達也はというと、ほのかに頼んで雫に電話を掛けてもらっていた。

現代の通信システムでは、小さな携帯情報端末でも直接顔を合わせると遜色無いクリアな映像を表示できる。同時通話の機能を使って再会した雫の顔は、まだ1ヶ月も経っていないのに記憶よりも少し大人びて見えた。

「すまないな、夜遅くに。メールにしようかと思ったんだが、直接話さないと要領を得ないだろうから」

『大丈夫だよ、まだ8時だから。——それで、何?』

「ああ、ほのかに聞いたんだが、そっちでも吸血鬼が暴れてるそうだな。詳しい話を聞かせてくれないか?」

達也の問い掛けに、画面の雫がコテンと首を傾げた。

『……日本では本当に吸血鬼が出たの?』

「日本では?」

『アメリカでは、今のところまだ都市伝説扱い。少なくともメディア

では報道していない』

実在するものが噂になっっている以上、事件は間違いなく起こっているはずだ。つまりUSNAでは未だに報道管制の下に置かれているということであり、もしかしたら想像より遥かに根が深い事件なのかもしれない。

「単なる噂でも構わない、できるだけ詳しい話を聞きたいんだが」

『何かあったの?』

「——レオが、吸血鬼らしきモノの被害に遭った。幸い、命に別状は無い」

『——!』

画面からでも伝わるほどに、雫はその事実ショックを受けた様子だった。

それこそ、慌てた様子で達也がフォローを入れるほどに。

「いや、本当に大丈夫だ。レオは自力で吸血鬼を撃退したんだが、その際に相手の異能でダメージを受けて、今は病院で大事を取っている」

『……分かった。だから達也さんは、こっちで何が起こってるのか知りたいんだね』

「もちろん、分かる範囲だけで構わない。無理して情報を集める必要は無いからな」

『でも達也さんは、アメリカに手掛かりがあると思ってる。違う?』

「手掛かりというか、正直に言えば、事件の犯人はアメリカから来たと思ってる」

この推理は初めて告げるものだ、雫だけでなく深雪とほのかも息を呑んだ。

「だから余計に危険な真似は謹んでほしいんだ、くれぐれも危ない橋は渡ってくれるなよ。そっちの情報が必須というわけではないんだから」

『……うん、期待しないで待ってて』

「それは“情報”についてだよな? まさか“危険な真似は謹んで”の方じゃないよな?」

『もちろんだよ』

雫は馬鹿でも怖いもの知らずでもないはずなのだが、彼女のこの返事に関しては達也も不安を拭いきれなかった。

と、雫が若干体を傾けて、達也の後ろを覗き込むような仕草をした。『達也さん、そこってA組の教室？』

「えっ？ ああ、昼休みはあまり人がいないからな、借りさせてもらっている」

『ということは、そこにしんちゃんもいる？』

「いや、しんのすけは今日は休みだ。ここ最近は休みが続いているようだが」

そう口にしながら達也の視線は深雪に向けられ、彼女はしっかりと達也を見据えて頷いた。

「何か用事か？ 伝言を頼まれても良いんだが」

『ううん、それは大丈夫。——ただ、レオが吸血鬼に襲われて入院して、しんちゃんが心配してるかもって思ってる』

雫の言葉を聞いて、3人の視線は自然としんのすけの席へと向いた。

主のいないその席は、ディスプレイの電源も入れられずに沈黙したままだった。

*

*

*

エリカの知る限り、都内で発生している吸血鬼事件に対して組織的な対応を取る勢力は、全部で3つ。

1つ目は、警視庁を主力とし、警察省の特捜チーム（日本版FBI）に、同じく警察省の配下である公安が加わった警察当局。寿和や稲垣は、このチームに属している。

2つ目は、七草家が音頭を取って十文字家が続く形で組織された、十師族の捜査チーム。彼らは内閣府の情報管理局のバックアップを受けて警察とも部分的に協力している半官半民の勢力だが、力関係は通常と異なり“民”の方が上である。

そして3つ目は、千葉家で組織された私的な報復部隊。つまり自分

自身である。

「やっぱり先輩達に協力した方が良いんじゃないかな……？ 街路力メラとか防犯システムを使えるようになるだけで、随分と効率が上がると思うんだけど」

「監視システムをフルに活用できる警察が尻尾を掴めないでいるのよ、そんなの関係無いでしょ」

「人手に頼るにしても、連携が無いよりあった方が良いと思うんだけど……」

「だからこうして協力をお願いしてるじゃない」

「いや、僕達だけじゃなくて……」

しかし現在、都内の繁華街を歩くエリカの隣には幹比古の姿もあつた。エリカが吸血鬼を探すのを放っておけなくて自主的に手伝っている、というわけではなく、千葉家から吉田家に対して非公式な（しかし正式な）要請による結果である。

元々エリカは、自分1人ででも「吸血鬼」を搜索するつもりだった。たった数日間だけとはいえ、レオは千葉家の門を跨いだ「門人」であり、同時にエリカが（コージローと共同とはいえ）直々に手解きした「最初の弟子」でもある。そんな彼が襲われたとあっては、武人としての義理に厚い彼女が放っておけるはずもなかった。

しかし彼女の決意を知った寿和が、裏で手を回してきた。警察の科捜査が芳しくないことを千葉家の総帥（つまり寿和やエリカの父親）に伝えると、彼は吉田家が持つ占術の技能を利用することに決めたのである。彼は魔法以外のオカルトを全部一緒くたにして考えている節があり、もしかしたら「オカルトにはオカルトを」と考えたのかもかもしれない。

そうして選ばれたのが、次期当主の兄をも凌ぐ実力を持ちエリカとの親交も深い幹比古だった。彼の右手には細長い筒状の鞆が握られ、その中には「道占い」に使われる杖が入っている。一方エリカも同じように筒状の鞆を肩に提げ、そしてその中には刀を模した武装デバイスを潜ませている。

しかし2人がそれを使う様子は無く、学生が散歩くことを鑑みると

“遅い時間”と表現して差し支えない時刻にも拘わらず人通りの多い道を歩き、駅の近くにあるビルへと入っていった。

エレベーターで3階まで上がり、激安で美味しいイタリアンが自慢のファミレスへと向かう。店員に人数を尋ねられたエリカが待ち合わせだと告げると、店員は「あちらの席になります」と入口に近い窓際のボックス席を掌で指し示した。

「んもう、2人共遅いゾ。オラ、待ちくたびれちゃったゾ」

その席に座っていたしんのすけが、エリカと幹比古を見るや唇を尖らせて文句を言った。どうやらそれは嘘ではないようで、彼の座るテーブルには幾つかの料理の皿と、様々なドリンクを混ぜたのだろうカラフルな飲み物が入ったグラスが乱立している。

幹比古が「約束の5分前だけど……」と呟くのを無視して、しんのすけはテーブルに置かれたタッチパネルに手を伸ばす。

「ま、とりあえず座って座って。2人共、何食べる?」

「いや、アタシ達は別に食べないから、今すぐここを出るわよ」

「ええっ? せっかくだから食べていけば?」

「そんなことしてる間に吸血鬼が出たらどうすんの。……それとしんちゃん、多分アタシ達が探してる吸血鬼にニンニクは効かないわよ」
「えっ、そうなの? せっかくだからこんなに食べたのに」

テーブルに並べられた食べかけのペペロンチーノ、ガリックトースト、ムール貝のガリック焼きを見下ろしながら指摘するエリカに、しんのすけはそれでも勿体ないからと残りを急いで食べ進めた。

そうして電子マネーで支払いを済ませて立ち上がる彼の姿からは、レオに危害を加えた吸血鬼をこれから探しに行こうという気負いはまったく見られなかった。剣呑な雰囲気や隠そうともしないエリカとは対照的だが、幹比古は彼を薄情な性格だとは考えていない。むしろこのような状況で平時の精神状態を保てる芯の強さに、内心舌を巻いているくらいだ。もちろん、エリカの芯が弱いなどと考えているつもりは無いが。

と、そんな言い訳めいたことを考えている内に、しんのすけとエリカは店を出ていこうとしていた。幹比古はハッと我に返り、早足で2

人の後を追い掛けていった。

ケープ付きのロングコートに、目深に被った帽子。顔の前面を隠すのは、灰色の生地に黒のコウモリを描いた覆面。元スターズ衛星級^{サテライト}デーモス・セカンドことチャールズ・サリバンは、新たに獲得した身体能力をフルに使って逃亡していた。

しかしそれでも、追跡者を振り切るには至らない。

今回の追跡者は星^{スターダスト}層のハンターとは訳が違う、夜空で最も明るく輝く星のコードを与えられた「処刑人」だ。赤髪金瞳の仮面の魔法師、アンジー・シリウスに姿を変えたリーナは、モーターバイク並のスピードで覆面の怪人をしつかりマークしていた。

もちろんサリバンはただ逃げているだけではなく、幾度もサイオンのノイズをリーナに浴びせていた。その度に彼女自身の感覚はサリバンを見失うのだが、即座に彼女の耳に装着されたコードレスイヤホンから仲間の声が聞こえる。

『総隊長、次の角を右です』

テレビ中継車に偽装した移動基地のサイオンリーダーが、サリバンの居所をしつかりと捕捉していた。一度サイオン波のパターンを特定されればリーダーの探査圏外まで逃れなければならず、掌サイズにまで小型化された中継アンテナをリーナが持っている以上それも叶わない。

「クレア、レイチェル、サリバンの正面に回りなさい」

リーナが通信機で呼び掛けたのは、ハンターQ^{17th}とハンターR^{18th}だ。リーナが口にした名前はもちろん本名ではなく、コード名で呼ぶのを嫌うリーナが便宜的に名付けたニックネームだ。なのでクレアの頭文字がCだったとしても、リーナも本人も特に問題にしていない。

猛スピードで走りながら、リーナがダガーを前方へ投げた。武装一体型のCADであるそれは、投げることで移動系魔法が発動して、術者の意図したルートを飛んで標的に突き刺さるようになっていく。今回もダガーは空中で何度か軌道を変えながら、同じく猛スピードで

逃げるサリバンの背中へと襲い掛かった。

サリバンがそれに気づいたのは、まさしく今にも背中に刺さろうかというときだった。吸血鬼の身体能力をもつてしても間に合わないタイミングだが、今の彼ならばCADを使わずに得意の物体軌道干渉でダガーを逸らすことも可能だ。

possible、はずだった。

「――！」

しかし結果的に、そのダガーはサリバンの右腕に深々と突き刺さった。事象干渉力のレベルが桁違いであり、軌道を変えることが不可能だと悟ったサリバンが咄嗟に右腕で庇ったためである。

そうして一瞬動きを止めたサリバンの背中を、Rのコンバットナイフが抉った。普通の人間ならば間違いなく致命傷たり得る深手だが、サリバンはむりやり腕を横殴りに振り回し、ナイフを握ったままのRをはね飛ばした。

しかしここで追いついたリーナが、足を止めて拳銃を抜いた。

そしてQもRもリーナも気づかなかったタイミングで、街路樹の陰から突如電撃が放たれた。

だが、その電撃がリーナを脅かすことはなかった。彼女が咄嗟に展開した領域干渉によって、魔法が無効化されたためである。拳銃は尚もリーナの手にあり、その銃口は尚もサリバンの心臓を捉えている。

リーナが、引き金を引いた。

情報を強化された銃弾が、何物にも邪魔されることなくサリバンの心臓を破壊した。

そして間髪入れず、リーナは再び走り出した。目標は、先程自分に對して電撃を浴びせた吸血鬼である。

そのため、サリバンが事切れる直前に口にした台詞を聞くことは無かった。

「はい、回収完了。――今回は割と溜まった方かしら」

ファミレスを後にしたしんのすけ達3人は、通行人で溢れる表通り

を外れて中層ビルに挟まれる裏道へと入っていった。幹比古を先頭にして、しんのすけとエリカがその後ろに続く布陣である。

幹比古は緊張した表情で、エリカは戦意を露わにした表情であるのに対し、しんのすけはファミレスのときと変わらず呑気なものだった。

「いやあ、それにしても、こんな夜中に友達とファミレスに行つて夜の街をぶらつくなんて、まるで不良になった気分だぞ」

「夜中って、まだ日も跨いでないじゃない」

「オラにとつては、いつもなら寝てる時間だから『夜中』なの。ここんところ学校も休んじやつてるし、父ちゃんと母ちゃんにバレたら確実に怒られますな」

「しんのすけくん、学校を休んでるの？ 僕とエリカなんて、寝不足なのを我慢して必死に学校に行つてるのに」

「ほーほー。ミキくんはともかく、エリカちゃんも案外真面目なんだね」

「しんちゃん、それってどういう意味？」

エリカがしんのすけをギロリと睨みつけ、しんのすけが「おっと」と両手で口を塞いだタイミングで、3人は十字路に差し掛かった。

そのまま歩こうとするしんのすけをエリカが片手で制し、幹比古へと呼び掛ける。

「ミキ、どつちね？」

幹比古は彼女の問いに答えず、その手に持っていた3尺の長さの杖を歩道に突き立てた。細かな文字が墨でビツシリと書かれた円柱状のそれは、幹比古が手を離れた後も何の支えも無く路面に立ったままだった。

そうして幹比古が後ろ向きで3歩離れ、クルリと体を反転させた直後、杖が見えない支えを失ったかのようにパタリと右向きに倒れた。「こつちね」

十字路を右に曲がって、エリカがズンズンと先に進んでいく。連れを待つどころか振り返る素振りも無い。

苦笑いを浮かべて杖を拾う幹比古に、しんのすけが歩み寄る。

「ねえミキくん、コレって本当に合ってるの？ エリカちゃんを誤魔化すためにテキストにやっってるんじゃない？」

「そんなことしたら、僕がタダじゃ済まないよ……。昔から伝わる、精霊や魔性といった存在を感じる魔法が施された杖だから、闇雲に歩き回るよりはよっぽど効率的だと思うよ」

その説明にしんのすけは納得したのか、エリカの後を追い掛けていった。

彼の背中を、そしてその向こうに見えるエリカの背中を見つめながら、内ポケットから情報端末を取り出して、自分の位置をグループ登録された端末に知らせる。『シグナルモード』になっていることを確認すると、アドレス帳から新たな通知先を一つ加えた。

そうして端末を懐にしまい、2人の後へと続いた。

アンジー・シリウスことリーナが自分に電撃を浴びせた吸血鬼と対したのは、ビルが立ち並ぶ区画の中に災害時の被害緩衝用として作られた小さな公園だった。申し訳程度に木や植え込みがあるだけで遊具も存在しないそこならば、小細工無しの真正面からのぶつかり合いとなる。

圧倒的な魔法力を有するリーナにとって有利に働くと思われたその場所での戦闘だが、事態は彼女が思っているような展開ではなかった。

「グハハハハ！ どうした小娘、さつきまでの威勢はどこに行っちゃー」
2メートルは超えていようかという身長に夜の僅かな光源をも反射する見事なスキンヘッド、そして『鋼の肉体』という比喻表現が大袈裟ではないほどに盛り上がった筋肉。おおよそ今までの吸血鬼とはかけ離れたイメージの人物であるが、間違いなくこの大男がリーナに電撃を浴びせた張本人である。

そんな大男と対峙しているために、ただでさえ小柄なリーナが余計小さく見えた。そんな彼女は彼の挑発にも一切耳を貸さず冷静な表情を保ったまま、腰のホルスターから取り出した拳銃を彼に向けて引

き金を引いた。

中型の自動小銃であるそれは只の拳銃ではなく、握るだけで起動式が展開される単一用途の武装デバイスだった。銃身部分に情報強化の魔法式が形成され、速度や耐久力が高められた弾丸が発射されて大男へと襲い掛かる。

「ふんっ——！」

しかし大男は気合いの声をあげると、一瞬その姿がブレるほどのスピードでそれを避けた。普通の人間では絶対に不可能なその動きは自己加速術式によるものだが、CADらしき物を持っている様子は無い。彼も他の吸血鬼と同じく、サイキック化しているということだろう。

そして大男はそのスピードのままリーナへと踏み込み、丸太のように太い腕の筋肉を盛り上がりながらパンチを繰り出した。その拳は彼女の鳩尾に深々と突き刺さり、そして次の瞬間に彼女の体がまるで煙のように掻き消えた。

「ん？」

大男が首を傾げるその隙に、いつの間にか先程消えた場所から数メートル離れた場所に移動しているリーナが、右手に持つ5本のスローイングダガーを一気に投げた。

彼の虚を突いて放たれた5本のダガーは、しかし脅威の反射神経を見せた大男が体を仰け反らせたことで、それぞれ明後日の方へと飛んでいった——

「アクティブイト、ダンシング・ブレイズ——！」

かに思われたが、リーナが叫んだその瞬間にダガーが呼び戻されるようにその軌道を変え、彼女と相対する大男の背中へと向かっていった。そのダガーも武装一体型デバイスであり、しかも音声認識によって遅延発動術式をアクティブ化するといふかなりのレア物だ。

ダガーに対して完全に背中を晒し、そして大男がその場を動く素振りには無い。

決まった、とリーナが内心で確信していると、
がきいんっ——！

大男の背中に刃を突き立てたダガーは、しかし刺さることなく金属音のような甲高い音をたてて弾き返され、地面にボトボトと落ちていった。防壁魔法か、とリーナは一瞬でそのカラクリを見破ってギリツと奥歯を噛み締めた。

とはいえリーナの知る限り、質量もエネルギーも同時に防ぎ止める障壁は現在の魔法技術では構築できないはず。多重障壁を展開している可能性もあるが、物は試しだと彼女は圧倒的なスピードで魔法を編み上げていく。

しかし結果的に、その魔法が使われることは無かった。

「アクション・ミサイル」!

「ぐふうっ——!」

突然横から（文字通り）飛んできたしんのすけの頭が大男の横腹に突き刺さり、大男は筋骨隆々なその体を「ぐ」の字に曲げて苦悶の声と表情で吹っ飛ばされていった。あまりにも突然の出来事に、リーナは鬼とも評されるアンジー・シリウスの姿でポカンとなっていた。

直立の姿勢で俯せのままミサイルのように飛んでいき、そのまま頭から相手に突っ込んでいくという何とも間抜けな見た目だが、実は幾つもの系統魔法を同時に展開する高度な魔法だった。自身の体に硬化魔法を掛けて身を守り、加速魔法と移動魔法を併用して軌道をコントロールする一連の流れに淀みが無かったのも、しんのすけの卓越した魔法技術だからこそ成せる業^{わざ}である。

「や、やっと追いついた……!」

「さすがしんちゃん、見事なスピードね。つと、どうやら既に始まっているみたいね」

その声にリーナが振り向くと、しんのすけを追い掛けてきたらしい幹比古とエリカがやって来るのが見えた。リーナは舌打ちしたい衝動に駆られるが、しんのすけが吹っ飛ばした吸血鬼が起き上がる気配に、彼女はそちらへと意識を集中させた。

一方エリカと幹比古も、金色の瞳を仮面で覆う真紅の髪の人に強い警戒心を抱いた。しかし、しんのすけが彼女のすぐ隣にいながら一切そちらに注目せず、吸血鬼と思われる筋骨隆々の大男が起き上がるう

としているのを見つめている様子に、2人も自然とそれに倣って大男を注視する。

大男は派手に吹っ飛ばされたものの、リーナのダガーを防いだときにも見せた障壁魔法のおかげでほとんどダメージは無かった。それを示すように素早く起き上がると、こめかみに青筋を立てて攻撃を仕掛けたしんのすけを睨みつける。

「このクソガキ！ よくもやってくれたじゃない……か……」

しかし大男の威勢は急激に萎んでいき、それにつれて怒りの表情が困惑に塗り潰されていくようだった。

突然の変化に、リーナ達は追撃も忘れて首を傾げている。

そうして数秒後、大男がいきなり叫んだ。

「てめえ！ まさか『ジャガイモ小僧』か!? なんでこの時代に生きてやがる!?!」

「……………おっ?..」

全員の視線が一斉にしんのすけへと向く中、当の本人は疑問の声をあげるのみだった。

第80話 「思い出は追憶の彼方へ、だゾ」

しんのすけ達が吸血鬼と相対した次の日の放課後、魔法戦技によるサバイバルゲームを取り扱うクロス・フィールド部の第2部室へと達也はやって来た。

彼がここを訪れた理由は、今日の朝に妹と共に学校へ向かう途中、学校の最寄り駅で待ち構えていた真由美から「放課後にここに来てほしい」と誘われたからである。周りには生徒の姿もあり、ゴシツプ的な意味合いでその遣り取りを遠巻きに眺めている者も多くいたが、誘われた張本人である達也はそのような期待は一切持たずにドアをノックし、中へと入っていった。

案の定、中では真由美だけでなく克人の姿もあつた。クロス・フィールド部は元々克人が所属していたクラブであり、この部屋が部活連の非公式な会合に使われていることが暗黙の了解だったことを考えれば、彼も一緒にいるのは推測できて当然のことだ。

「独りか？」

「ええ、呼ばれたのは俺だけですから」

そうでなければ、深雪が達也を独りで行かせるはずが無い。もっとも、自分も同行すると強硬に主張する彼女を達也が何とか宥めずかし、ケーキバイキングに財布込みで付き合う交換条件で了解してもらった、という経緯があるのだが。

と、さっそく真由美が達也に尋ねてきた。

「達也くん、昨日の晩、外出しなかった？」

「はい、バイクで出掛けました」

「……どこに行ってたか、教えてもらって良いかしら？」

「件くだんの吸血鬼を捜索していた吉田に呼ばれたので、吸血鬼と交戦中だった公園まで行きました。しかし俺が着いた頃には既に戦闘は終わっていて、吸血鬼にも逃げられてしまいました」

このままでは長引きそうだと感じた達也が、自分から話を前へと進めた。

そこまで正直に話すとは思わなかった真由美は目を白黒させ、克人

はまったく動じた素振りを見せず端的に問い掛ける。

「いつからだ？」

「昨日は呼ばれたから駆けつけただけで、俺は吸血鬼の捜索に加わっていません」

2人がどう思っているか知らないが、少なくとも達也に腹の探り合いをする意思は無かった。

「お2人共、1年E組の西城が襲われたのはご存じですね？ 何が起こっているのか知りたいのが普通ですし、犯人を見つけて引き渡してそれで終わり、では到底安心できません」

2人に向けて喋っていた達也が、ここで視線を真由美1人に向けた。

「七草家でどこまで事態を把握し、どのような決着をつける気なのか。それを教えていただかない限り、協力もできません」

先手を打たれたことで却って開き直りのような感情が生まれたのか、真由美は溜息を吐いて作り笑いを消した。

「現在、七草家と十文字家との合同で『吸血鬼狩り』のチームを組織し、それに当たって十師族・師補十八家・百家の各当主に協力要請の通達を出しています。——もし達也くんが私達に協力してくれるなら、私達が掴んでいる情報を教えるわ。ただし、分かっていると思うけど他言無用ね」

「了解です、協力しましょう」

「……それは、私達の捜索隊に加わってくれる、ということ？」

「そう解釈していただいて結構です」

「……協力する前に情報を開示するのが条件、つてさつき言っただけだった？」

「騙されたと判断すれば、こちらも掌を返すだけです」

あまりにも正直すぎる、そのくせ裏の裏まで意図が隠されている。そんな達也の言葉に、真由美は思わず乾いた笑い声を漏らした。

そうして「達也くん、性格悪すぎよ」の一言が添えられたうえで、真由美の口から現在彼女が知っている吸血鬼事件に関する情報が語られた。

その中で、達也にとって目新しいのは3つ。

1つ目は、被害の規模が報道よりもずっと大きいこと。

2つ目は、その被害規模から吸血鬼自体が複数存在する可能性が高いこと。

そして3つ目は、真由美達の搜索を妨害する第三勢力が存在すること。

3つ目の「第三勢力」については、最初聞いたときはエリカ達のことかと一瞬考えたが、自分達の手で片づけたという思惑はあっても他勢力の妨害までするとは思えない。

おそらく公園で鉢合わせた仮面の魔法師がその勢力に属しており、そしてその正体も達也はほぼ推測できている。だからこそ、なぜそんなことをしているのか彼には分らなかつた。おそらく構図自体は単純なものかもしれないが、それを決定づけるピースが欠けているのが何とももどかしい。

「お2人は吸血鬼を捕まえて、どうするおつもりですか？」

「尋問して、正体と目的を突き止める。その後は……」

「処分することになるだろうな」

真由美が答える途中で言い淀み、克人が補完するように続きを答えた。達也としても、その辺りが妥当な落とし所だろうな、といった内容だ。彼のみの感覚に基づいて、という注釈付きだが。

とにかく、これで達也が事前に提示した条件は全て達成された。

よって次は、達也が持ち札を開示する番だ。

「それじゃ達也くん、昨日何が起こったのか話してくれる？」

「それは構いませんが、俺よりも吉田や野原の方が詳しいのでは？」

「吉田くんは体調が優れないみたいだし、しんちゃんはそもそも学校に来てないからね」

真由美の答えに、達也は一応納得した素振りで頷いた。エリカに尋ねるといふ選択肢については、どちらも最初から検討もせず除外していた。

さてと、どこまで話すべきか、と達也は頭の中で昨日の出来事について振り返った。

*

*

*

幹比古の携帯端末から発信されているシグナルの位置情報を頼りに、達也は街中でバイクを走らせていた。繁華街を抜けてビルとビルの間を縫う裏道へと入り、災害時の被害緩衝用に造られた小さな公園に差し掛かったところで、フルフェイスのヘルメットに覆われた達也の視界が見慣れた人物達の姿を捉える。

先頭にはしんのすけ、数歩後ろにエリカと幹比古。

しんのすけの隣、達也から見て手前側に立つのは、赤髪の仮面の魔法師。位置的に、まるでその魔法師としんのすけがエリカ達を率いているようにも見える。

そしてその4人が見つめる先にいる、筋骨隆々の大男。状況からして、おそらくコイツが吸血鬼だろう。

状況を一瞬で読み取った達也が、加勢しようとCADに手を伸ばした次の瞬間、

「あつ——！」

吸血鬼が踵を返して逃げ出し、それを見た幹比古が声を漏らす。

その吸血鬼に魔法の照準を合わせようとする達也だったが、結果的にそれは中断された。

しんのすけの隣にいた仮面の魔法師が、吸血鬼ではなくしんのすけ達の方を見ながら、拳銃を持つ右手を動かしたのである。ほんの微かな気配の揺らぎでそれを感じ取った達也は、奴が彼らに危害を加える気では、という考えで反射的に魔法の矛先をそちらへと変えた。

しかしその拳銃は彼らではなく、自身の足元へと向けられたまま銃弾を吐き出した。地面に衝突したことで火花が散り、しかし一瞬で消えるはずのそれが強烈な閃光となって仮面の魔法師を覆い隠した。突然の閃光に、しんのすけ達3人は目を覆っている。

しかし達也はそれに構うことなく、魔法師本人に魔法の照準を合わせた。

そうして相手の足に向けて分解魔法を発動——しなかった。

——中身が無い!?

相手の実体を反映しているはずの情報体は表面^{エイトス}だけで、材質や質量や構造に関する情報が抜け落ちていた。つまり今そこにいるのは単なる幻影であり、達也が咄嗟に辺りを見渡した限りでは本物はどこにも見当たらない。

そうして閃光が落ち着いて元の月明かりに戻った頃、達也はヘルメットを脱いで公園へと足を踏み入れた。3人が一斉に達也へと顔を向け、特にしんのすけが大きく手を振って駆け寄ってくる。

「これはこれは達也くん、土偶ですなあ」

「それを言うなら『奇遇』だし、そもそも奇遇じゃないんでしょ?」

エリカがツツコミを入れつつ達也に尋ねると、達也はほんの一瞬だけ迷い、正直に答えることにした。

「幹比古に連絡を貰ったんだ」

「……へえ、そうなんだあ。いつの間に連絡したのか知らなかったわあ」

やたらと棒読みなエリカの台詞に、幹比古の表情が引き攣った。

「いや、その——」

「ミキはアタシやしんちゃんが、あの吸血鬼に後れを取るとでも思ったのかしらねえ?」

「ということとは、やはりあの男は吸血鬼だったのか」

達也の問い掛けにエリカの視線が達也に向き、幹比古が秘かにホッと胸を撫で下ろした。そんな彼をしんのすけが白けた目で見つめ、それに気づいた幹比古が顔を強張らせる。

そんな遣り取りの横で、エリカが「うーん」と頭を悩ませる。

「いや、多分状況的には吸血鬼だとは思うんだけど、アタシとミキがここに来た直後に逃げられちゃったから戦ってる場所は見てないのよ」

「ふむ。とりあえず、状況を教えてくれないか?」

達也の問い掛けに、エリカは頷いて説明を始めた。

レオを襲った吸血鬼を搜索していた3人がここにやって来たのは、街中を歩いていたときに何やら鬪争の気配を感じたからだ。自

己加速術式でしんのすけが真っ先に飛び出していき、エリカ達が追いついたときには既にしんのすけと仮面の魔法師が吸血鬼らしき男と睨み合いをしている状況だったという。

加勢しようとしたエリカ達だったが、ここで大男がしんのすけを見てなぜかひどく驚いた様子を見せた。どうやら彼を知っているようで、彼がここにいること、というより彼が生きていることに対して驚いている感じだったらしい。

「そーいやしんちゃん、あの男って誰なの？ しんちゃんの知り合いつぽかったけど」

「ええっ？ オラ、あんな奴知らないゾ」

「でもアイツ、しんちゃんを見て『なんでこの時代に生きてるんだ？』とか言ってたじゃない。生きてること自体に驚いてるってことは、ずっと昔に会ったことがある奴なんじゃないの？」

「そう言われても、オラ、会ったことある人みんな憶えてるわけじゃないゾ」

「いや、そりやそうかもしれないけど……」

相手の反応からして結構な因縁がありそうな気がする、とエリカは直感的に感じ取っていた。それは幹比古も、話を聞いてるだけの達也も同じだった。

とはいえ、しんのすけが憶えていない以上は掘り下げても意味は無さそうだ。なので達也は、別の質問に移ることにした。

「それじゃしんのすけ、さっきの仮面の魔法師については何か知ってるか？」

「おっ？ さっきのオジサンに襲われてたみたいだったから、助けてあげただけだゾ」

「何か会話は交わしたか？」

達也の質問に、しんのすけは「何も」と首を横に振って答えた。表情などを見る限り、何かを隠している様子は見られない。

しかし達也は先程の魔法師を、アンジー・シリウスに化けたリーナだとほぼ確信していた。任務中でも無い限り自分の所属を明かす理由が無いはずなので、彼女がスターズの隊員であると知っていたしん

のすけもあの姿で面識があるものだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

これもここで追及する意味合いは薄そうだと達也は更に別の質問へと移った。

しかし今度は、エリカに対してである。

「エリカ。どうしてしんのすけを誘ったんだ？」

ピクリ、とエリカの口元が歪んだ。

反射的に視線を逃げるように逸らし、しかし一瞬後で意識的に達也へと向き直す。

「……別に深い意味は無いわよ。授業を休んでまでレオの見舞いに来てくれたから、レオを襲った吸血鬼と一緒に探さないか誘っただけ」
「そうか。レオを襲った吸血鬼を仮に捕まえたとして、どうするつもりだ？」

「……………」

達也の質問に対し、エリカは口を引き結んで黙り込んだ。猪突猛進に見えて頭の回る彼女が、そんなことすら考えずに（門下生まで引き連れて）夜の街に繰り出したとは到底思えない。彼女の素振りに達也は、彼女が答えを用意していないのではなく、用意した答えを口に出すのを躊躇していると感じた。

達也はしんのすけへと視線を向けて、同じ問いを繰り返す。

「しんのすけ。レオを襲った吸血鬼を仮に捕まえたとして、どうするつもりだ？」

「えっ？ 警察に突き出すんでしょ？」

「吸血鬼に人間の法律が適用されるのか、少し気になるところだが……」

「何言ってるの、達也くん。吸血鬼だって何だって、悪いことをした奴は警察に捕まるんだゾ」

胸を張って堂々と答えるしんのすけに、エリカはほんの少しだけ目を背けるように顔を伏せた。それはまるで、強烈な光に目が眩んだかのような反応だった。

そんな彼女を、幹比古が心配そうに眉を寄せて見つめている。

そして、或る意味そんな状況を作り出した原因である達也は、ふと携帯端末に目を遣った。

「残念だが、時間だな。そろそろ誰かがここにやって来てもおかしくない」

達也のその一言にエリカがハツとした表情になり、幹比古がトレーサーのモニターを呼び出した。味方の搜索隊を示す光点がランダムな折れ線を描きながら接近してくるのが分かる。

おそらく2人は、七草家を中心とした搜索隊には断りを入れていない。別にチームに加わらなかつたからといって何かお咎めがあるわけではないが、それを無視する形で勝手に吸血鬼と戦闘した点についてはできれば追及されたくないところだろう。

と、悩む素振りを見せるエリカと幹比古を横目に、達也は自身が被っていたヘルメットをエリカへと投げた。突然のことで驚きながらも、エリカはそれを危なげなく受け取る。

「エリカ、乗ってくか?」

「……うん、お願い」

「待つて達也、僕は?」

「悪いが幹比古、定員オーバーだ」

幹比古が「えっ」と目を丸くする中、エリカはタンデムシートに跳び乗って達也の腰に手を回し、達也がモーターのスイッチを入れる。「幹比古も、早くここを離れた方が良いぞ。——しんのすけも、とつくにいなくなってるしな」

「えっ? ——あつ、本当だ!」

つい先程まで傍にいたはずの友人が影も形も無くなっていることに気づいた幹比古を置いて、達也とエリカを乗せたバイクはその場を走り去った。

あつという間に独りになった幹比古は、しばらくその場に呆然と立ち尽くしていた。

*

*

*

改めて昨日の遣り取りを思い起こした達也は、結局仮面の魔法師に
関することを除いて真由美達に伝えた。つまりあの場にはしんのす
け達3人と吸血鬼以外誰もいなかったことになり、しんのすけとの問
答もそれに関する部分は省かれた形となる。

一方それを聞いた真由美達も、おそらく達也が全てを包み隠さず伝
えたわけではないことには気づいているだろう。しかし2人は特に
それを追及することなく、彼の報告に「分かりました」と頷いてみせ
る。

「それで、俺は何をすれば良いのですか？」

「そうね。それじゃ今晚から私達に同行して——」

「いや、司波は独自に動いてくれ。手掛かりを掴んだら報告してほし
い」

自分の指示を覆す克人を見る真由美に不快感は無かったが、不審な
思いはありありと浮かび上がっている。それに気づいていながら達
也は「分かりました」と頭を下げ、そして2人の前から退いて部屋を
出て行った。

スパイ対策で部屋の周囲に仕掛けられたマイクから達也の足音が
消えた頃、真由美が克人へと尋ねた。

「十文字くん、どうして達也くんに別行動させるの？」

「その方が効率的だと考えたからだ」

「今のままじゃ、千葉家の方に与^{くみ}するかもしれないわよ？」

「こちらが本当のことを言わなければそうなる可能性もあったが、
我々が誠意を見せている間は司波もこちらを裏切りはしない。アイ
ツは、そういう男だ」

やけに自信たっぷりな言い切る克人に対し、真由美はどうにも
懸念を拭い切れない。

「徹底したギブアンドテイクね……。何とも微妙な関係だわ」

「武士の忠義も元を辿れば『御恩』と『奉公』、つまりギブアンドテ
イクだ。条件がハッキリしている分、盲目的な服従よりも余程信頼で
きる」

そんなものか、と真由美はそれなりに納得した様子だった。

今日は土曜日なので、放課後といっても午後を少し過ぎたばかりだ。部屋を後にした達也は、生徒会室で待っているであろう深雪のために心持ち早足で廊下を歩いていった。

深雪が達也を待たずに昼食を済ませる、というのは有り得ない。先に食事を済ませるよう言い含めて（命令して、の方が正確か）おけば話は別だが、今日はそれほど遅くならないと踏んで特に指示は出してない。とはいえ達也としては、妹を待たせているというだけで気が急くのであった。

しかし廊下の向こうから或る人物が歩いてくるのを見掛けると、達也は歩くスピードを急激に緩め、正面に立ち塞がるようにライン取りを変えた。一方その人物も達也がスピードを緩める辺りでその存在に気づき、彼を出迎えるようにその足を止める。

「やぁリーナ、調子はどうだ？」

「ハイ、タツヤ。上々よ」

ホームコメデイ的一幕にでもありそうな紋切り型テンブツレの挨拶を交わす達也とリーナだが、その表情は台詞に見合わないシリアスなものだった。

「ひよつとして、生徒会室に用事があったのか？」

「ええ、そうよ。あまりにもクラブの勧誘が激しいものだから、留学中は生徒会の臨時役員になることが決まったわ。ワタシとしては不本意だけどね」

「そうだろうな。せつかくの放課後に“自分の時間”が取りづらくなるのだから」

含みを持たせた達也の台詞に、リーナは自身の感情を隠そうともせず達也を睨みつける。

そんな彼女に達也はフツと笑みを漏らし、口を開いた。

「話がある。一緒に屋上まで来てもらえるか」

「あら。愛の告白でもされるのかしら？」

「悪いが、そんな冗談に付き合っていない状況じゃない」

動揺の1つも見せずキツパリとそう言い放つ達也にリーナは軽く肩を竦め、階段へと向かう彼の後ろをついて行った。

「達也、誰にメールしてるの?」

「深雪だ。先に食べてるように言っておかなくてはな」

「……………」

うわあ、とでも言いたげなりリーナの冷たい視線が、容赦無く達也へと突き刺さった。

当然、達也に動揺は無かった。

屋上はちよつとした空中庭園になっていて、お洒落なベンチに座ってお弁当を楽しむなんてこともできる。しかし真冬に吹き曝しとなったこの場所で過ごす猛者はほとんどおらず、達也とリーナが訪れたこのときも屋上に人影は1人もいなかった。

達也にとっては強がる必要も無いほどに大したことのない寒気だが、リーナにとっては看過できないものだったらしい。彼女は携帯端末型のCADを取り出すと、2人を囲むエリアを快適な温度に保つ魔法を発動させた。

「さすがだな」

「別にこれくらい、何てことないもの」

茶目つ気たつぷりにウィンクして答えるリーナに、達也は微笑みを携えて紳士然とした所作でベンチへと促した。

それにリーナが応え、2人は拳1つ分ほどの間隔を空けてベンチに腰掛ける。

そして開口一番、達也が問い掛けた。

「リーナ、おまえはスターズ総隊長、アンジー・シリウスだな?」

「……………いくら何でも直球すぎない?」

「今更取り繕う必要も無いだろう」

無駄な遣り取りは一切許さない、とでも言わんばかりの達也の態度に、リーナは大きな溜息を吐いて背もたれに体重を掛けた。

「アンジー・シリウスの素顔と正体を知った者がどうなるか、頭の良い

あなたには今更言うことでもないでしょう?」

「そつちこそ、随分と直球で来るじゃないか。——だがリーナ、おまえに俺が殺せるか?」

「あら、嘗めた口を利用してくれるじゃない。ワタシの実力では、あなたを殺せないとしても? それともこの1ヶ月足らずの交流で、ワタシがあなたを殺せなくなるほどに情が湧いたとでも?」

やたらと演技掛かった口調で不敵な笑みを浮かべるリーナに、達也は同じく不敵な笑みで彼女をまつすぐ見据えて答える。

「おまえが俺をどう思っているかは知らんが、少なくとも俺としんのすけはこの1年足らずで“友人”と呼んで差し支えない関係を築いている。——そんな人間に危害を加えたとして、しんのすけの“主人公補正”がおまえに対してどう動くだろうな?」

「——!」
ギリツと奥歯が鳴りそうなほどに、リーナが悔しそうに口元を歪めた。

「……あなた、やっぱり知ってるのね。彼が何者なのか」

「全部知っている、というわけではないがな」

軽く肩を竦めるジエスチャーをして、達也は話を続ける。

「とはいえ、俺ばかり有利というわけではない。どうやらしんのすけはおまえと旧知の仲らしく、それ故におまえのことを好ましく思っていると考えると、同じ理由で俺の方からもリーナに危害を加えることができない状況だ」

「だから仲良くお手で繋いで協力しよう、とでも言いたいのか?」

「つまらない意地を張っている場合じゃない、というのはおまえだつて分かっているはずだ。——吸血鬼の正体がしんのすけと因縁のある奴らである可能性が出てきた今となつては、な」

「……………」

リーナは今にも頭をガシガシと乱暴に掻きそうな態度で苛立ちを露わにし、しかし大きく何回も深呼吸することですそれを抑えた。

そうして気分を落ち着かせてから、リーナは話し始めた。

「……ワタシ達が追っている吸血鬼は、元々USNA軍から脱走した

「魔法師なの」

「事件の規模からして、単独ではないんだろう？ 国で嚴重に管理されている軍属の魔法師が一斉に脱走するほど、パラサイトの影響力が強いということか？」

「……本当に、何なのあなた？ そこまで知ってるなんて、まさか日本の高校生はみんなこうだって言うんじゃないでしょうね？」

「安心しろ、俺は色んな意味で『例外』だ」

『特別』とは表現しない辺りに達也の屈折した心情が窺えるが、今のリーナにそれを理解する余裕は無かった。

「しんのすけに対して妙な反応を見せたという吸血鬼も、USNA軍の魔法師なのか？」

「……いいえ、あんな男はワタシ達のデータには無かった。もしかしたら、ワタシ達が処断した吸血鬼から乗り移ったのかもしれないわね……」

「レオを襲った吸血鬼は、レオを自分の眷属にするつもりだったらしい。実際にそれらしき魔法も受けたそう。だとすると、奴らには新たな吸血鬼を生み出す能力があるのだろう」

「それって、放っておくと吸血鬼はどんどん増殖するってこと？ ふざけんじやないわよ……」

可憐な外見に似合わない悪態を吐くリーナだが、達也もまさしく同じ気分だった。

とはいえ、達也の優秀な頭脳は分析を止めなかった。

「いずれにしても、吸血鬼化したその男が偶然しんのすけと因縁のある者だった、というのか？ その割には、しんのすけは面識の無い様子だったか……」

「……シンちゃんと面識があるのが、パラサイトの方だとしたら？」

リーナが口にしたその仮説は、達也が思わず目を丸くするほどの驚愕をもたらした。

「パラサイトというのは、自我を認識できるほどに強い意思が備わっているものなのか？」

「いいえ、本来はパラサイトそのものに明確な意思は無く、あくまで

取り憑いた宿主の意思を変質させるとされているわ。でもワタシ達が戦った別の吸血鬼は、明確に自分と宿主の区別をつけていた。——今は便宜上『パラサイト』と呼んでいるけど、もしかしたらそれとはまったく異なる存在なのかもしれないわ」

そしてそんな存在が、しんのすけと過去に因縁のある奴らである可能性がある。

何とも厄介な話だ、と達也は溜息を吐かずにはいられなかった。

するとそれを見たリーナが、なぜか得意気な表情で口を開いた。

「そんな奴らとシンちゃんが関係しているなんて、もしかして信じられない？ 彼について色々と教わってきたワタシからのアドバイスとしては、たとえどれだけ信じられないことだったとしても、シンちゃんが関わっているのであればそれが『真実』だと仮定して動くべきよ」

「別に信じていないわけじゃないし、確かにそう考えるべきかもしれないとは思っているさ」

「そうかしら？ ワタシの目には、あなたはまだ心のどこかで『さすがにこれは有り得ないだろう』という一線を引いているように思えるわ」

「別にそんなつもりは無いが」

「そう？ だったら——」

リーナはそこで言葉を区切り、達也へと身を乗り出してこう問い掛けた。

『ワタシとあなたは過去に出会っている』と言われて、あなたは素直にそれを信じられる？」

「——リーナ、それはどういう意味だ？」

「そこでそういう問い掛けをしている時点で、あなたはまだまだということよ」

当然の質問をする達也に対し、リーナは勝ち誇ったような表情を浮かべてベンチから腰を浮かせて立ち上がった。

そして、まるで踊っているかのような軽やかなステップで達也へと振り返る。

「状況が状況なのは分かるけど、だからってワタシはあなたと馴れ合うつもりは無いわ」

「分かっているさ。所詮俺達は、住む世界が違うからな」

「……バツカじゃないの」

敢えて古臭いロマンス小説の別れのシーンにでも使われそうな台詞を選んだ達也に、リーナは呆れを多分に含んでそう吐き捨てた。しかしその表情には今までの緊張感は無く、素の笑顔が自然と漏れ出たような柔らかな雰囲気醸し出されている。

そうしてリーナが屋上を後にしてからも、達也はしばらくそのベンチに座ったままだった。

第81話「黒い穴がどーのこーの、だゾ」

アメリカの西海岸。日本だったら「宵の口」と表現されるであろう時間。

雫は現在、ホームステイ先で開かれているホームパーティーに参加していた。日本の大企業の娘が留学する際のホストに選ばれるだけあってかなりの上流階級であり、一口にホームパーティーと言ってもそこら辺のホテルよりよっぽど豪華なものだった。

そんなパーティー会場にて、雫は床スレスレまであるスカート丈に、肩・二の腕・背中が剥き出しになったドレスを着て、肘まで覆う長手袋を身につけるといいう、パーティードレスとしてはかなりクラシクな装いをしていた。ふと周りを見渡すと、コルセットで体を締め上げないと着られないようなドレスも中には見受けられる。USNAが部分的に伝統回帰していることは聞いていたが、まさかここまですは雫も思っていなかった。

「ティアア！」

と、そのとき、大袈裟に手を振ってこちらに駆け寄ってくる少年の姿を見つけ、雫は内心苦笑しながら小さく手を振り返した。

彼の名は、レイモンド・S・クラーク。雫の留学先の男子生徒で真っ先に彼女に話し掛けた人物であり、それ以来何かと彼女の傍に寄ってくる白人（西海岸では今時珍しい生粋のキングロスaxon）である。彼が今着ているのはこれまたクラシクなタキシードだったが、彼の貴公子然としたルックスに大変良く似合っていた。

ちなみに、雫のニックネームである「ティアア」を考案したのも彼である。雫が自己紹介したときに名前の意味を訊かれた際、彼女は「ティアドロップの『ドロップ』だと説明したのだが、どういう訳か彼は「ティア」の方を採用してしまった。同じクラス的女子生徒曰く「真珠のイメージにぴったりだからじゃない？」だそうなので、とりあえずそのままにしている。

「素敵なドレスだね、ティアア。いつもよりもっとチャームングだ」

「そう？ レイも似合ってるよ」

「ありがとう！ ティアにそう言ってもらえるなんて光栄だよ！」

本当に嬉しそうに言うレイモンドの姿に、雫は自分の弟を連想した。人種的には年齢以上に大人びて見えるのが相場なのだが、彼の場合は豊かな感情表現によって年齢よりも幼く見える。

「レイは1人なの？」

「ティア以外の女性をエスコートする気は無いよ」

「ううん、女の子のことじゃなくて」

「えっ？ あ、そ、そうだね……。1人……と言えば1人かな？」

随分歯切れの悪い答えだと雫は首をかしげたが、レイモンドの後ろの方で男子生徒数人が、彼を見て忙しなく手を動かしながらニヤニヤしているのを見つけて、そういうことか、と雫は他人事のように悟った。

そしてレイモンドもそれを察したのか、ばつが悪そうな表情で視線をさ迷わせてから、別の話題を見つけたとばかりに表情をパツと明るくして雫に話し掛けた。

「……そ、そうだ、ティア！ この前に頼まれてた件なんだけど——」

その瞬間、雫の目つきがほんの少し鋭くなった。

「レイ、場所を変えよう」

力強いその言葉にレイモンドは口を引き結んで黙って頷き、2人はパーティー会場の一部である庭へと出ていった。

それを見ていた男子生徒数人が、何やら勘違いした様子で茶化すように口笛を吹いていた。

さすがに冬だけあって、太陽も沈んだこの時間ではコートを羽織っ
ていても肌寒い。なので会場の一部とはいえ庭に出ている参加者は
1人もおらず、だからこそ雫は「内緒話」の場ここを選んだのであ
る。

雫はハンドバッグの中にしまっていたCADを操作して、2人の周
辺に暖気のフィールドを作り出した。寒空の下でも凍えることのない
ように、と同時に、自分達の会話が周りに聞かれることを防ぐ効果

もある。

「ありがとう、ティア。——魔法っていうのは、こんなに便利なんだね」

「この程度なら、珍しくないはず」

「この国に住む人達にとつての魔法っていうのは、こんなに役に立つものじゃないんだよ。日常的に魔法を応用する場面なんて、この国じゃほとんど目にしない。魔法は力や知識や地位を誇示するためのものなんだ」

「つまり、出し惜しみしているってこと？」

「ははは、そうだね……。ステイツの魔法研究は軍事利用を除いて、基礎研究ばかりが重視されているんだ。民生利用とか日常生活への応用とかは、下等なことと見なされているんだよ。大金が稼げると分かればその限りじゃないんだけど……。そんなだから——」

「それで？ “例の件” で、何か分かったことがあるの？」

逸れかけている話題をむりやり打ち切った雫に、レイモンドは恥ずかしそうに頬を掻いた。

雫が口にした“例の件” というのは、日本とこの両方を騒がせている“吸血鬼事件” のことだ。ほのかに話した“情報通の生徒” というのがまさに彼のことであり、達也と約束した（と本人は思っている）情報収集の協力者でもある。

「まず“吸血鬼” についてだけど、実在しているのは確かなようだね。原因は不明だけど、無関係とは思えない情報が手に入った」

「話して」

もちろん、とレイモンドは力強く頷いた。

「高度に情報封鎖されているけど、11月にダラスで“余剰次元理論に基づく極小ブラックホール生成・蒸発実験” が行われたらしい」

「余剰次元理論？」

「ごめん、詳しいことは僕にも分からないんだ。後でそういうのに詳しいお友達に訊いてみて」

「うん、分かった。それで？」

雫は頭の中に達也を思い浮かべながら、レイモンドに続きを促し

た。

「実験の詳細については不明だけど、その実験の直後から吸血鬼の目撃情報が挙がってる」

「つまりレイはその実験と一連の吸血鬼事件の間に、因果関係があると思ってる？」

雫の質問に、レイモンドは再び力強く頷いた。

彼がどこから情報を仕入れて、何を根拠として判断しているのか、雫には分からない。自分には伝えていない情報を握っている可能性も、十分に考えられるだろう。彼が自分に協力してくれる理由も、彼個人によるものなのか、あるいは彼が所属している組織の意向によるものか、そもそも彼が組織に所属しているのかも雫は知らない。

しかし確実に言えるのは、彼の情報は信用できる、ということだ。

「ありがとう、レイ」

「他ならぬティアの頼みだからね。僕で役に立てることがあれば、いつでも相談してよ」

雫からの礼に心からの笑顔を浮かべながら、レイモンドは実に嬉しそうにそう言った。そんな彼の「露骨なアプローチ」に対し、雫は特に普段と表情を変えることなく受け止めた。おそらく彼女の中では、彼の態度について『留学生が物珍しいのだろう』くらいにしか思っていないだろう。

そんな彼女の鈍感さは、はたして先天的なものなのか、それとも最近の友人関係で伝染したものなのか、それは誰にも分からなかった。

*

*

*

学生以外の顔を幾つも持つ達也にとって、この日は久々の「何の予定も無い日曜日」だった。しかし彼は元々宛ても無く外出するような性格ではないため、この日はずっと家の中で深雪と共に過ごしていた。

深雪としては兄を独占して世話ができたことに大変満足した様子だが、そんな達也は現在、夕食を終えたりリビングのソファアームに座って

真剣な表情で考え込んでいた。キッチンの自動洗浄機に食器を並べる深雪はそんな彼が気になって仕方がなかったが、考え事の邪魔をするわけにはいかないので口を閉ざしたままにいる。

達也の頭を悩ませている原因、それは、

——俺とリーナが過去に出会っている……？ それはどういう意味だ……？

昨日リーナが口にしたあの台詞は仮定の形を取ってはいたが、明らかに実際に起こったことを想定したものだ。しかもしんのすけの話題の中でそれを出したということは、2人の出会いに彼が大きく関わっていることを表している。それこそ、彼とリーナが旧知の仲である理由に繋がることかもしれない。

しかし当然ながら、達也にそのような記憶は無い。顔を合わせてはいるが相手がしんのすけやリーナだと認識してない状態だったという可能性もあるが、はたしてその程度の希薄な繋がりを彼女がこれ見よがしに主張するだろうか。

——いや、リーナも最初はしんのすけのことを顔見知りだと認識していなかった。

それはまだ記憶に新しい、留学初日の食堂での出来事。あのときは確実に、リーナはしんのすけと初対面だという認識だった。そして彼女は慌てて彼をその場から連れ去り、そして“何か”を聞いた後はガラリとその態度を変えている。

その何かの中に、まさか自分も含まれていたというのだろうか。

——リーナと同じように、俺も何かを忘れて……？

だとすると問題は、それが単なる物忘れなのか、第三者による記憶の改竄によるものか、ということになる。

前者はともかく後者は有り得るのか、というのが普通の考えだ。しかし達也は、その可能性を有り得ないと切り捨てることなどできなかった。

この世界には、既に“サザエさん時空”という前例が確認されている。

特定の人物が一切歳を取らないという現象も不可思議だが、達也は

むしろそれ以上に『世界中の人間がそれを不思議と感じなかつた』ことの方が深刻だと考えている。その現象が引き起こされた原因やメカニズム、そしてその首謀者については知る由も無いが、世界中の人間の認識を捻じ曲げることは可能だという純然たる事実だけは今もハッキリと残っている。しんのすけという存在が、それを無意識に主張している。

それだけのことが可能なのだ。たかだか数人の記憶を消し去ることに、いったい何の障害があるというのだろうか。

プルルルル——。

ふいに鳴った電話のベルに、達也は思考の海から上がって現実世界へと戻った。キッチンから早足で駆け寄ろうとする深雪を片手で制してリモコンを取り、その画面に『北山雫』と表示されているのを確認し、テレビにリモコンを向けてボタンを押す。

雫からの電話をテレビ電話に切り替えたことで、居間のテレビの画面に雫の姿が映る。

その瞬間、達也はその行動に出たことを後悔した。

「ちよ、ちよつと雫！ 何て格好をしてるの！」

挨拶よりも先に深雪が叫んでいたが、達也がそれを窘めることは無かつた。

テレビ画面に現れた雫は、ファッション性重視のネグリジエ姿だった。シルクのように薄く光沢のある生地なので、雫のほっそりとした肢体を隠すのにあまり役立っていない。しかもどうやら上半身の下着を身につけていないようで、ふんだんに縫い付けられたレースと細やかなドレープで大事な部分を一応隠しているが、少しでも着崩れたら簡単に顕わになってしまいそうだ。

さらに今の雫は、視点が定まっていないうようにブーツとした顔つきだった。頬だけでなく体全体が仄かに桜色になっており、普段は幼くすら見える雫に大人っぽい色気も加わって非常にまずい状況となっている。主に深雪の精神的な意味で。

『えつと……、2人共、こんばんは』

「挨拶は良いから！ せめてガウンを羽織って！」

深雪の必死な呼び掛けに、雫は首を傾げながらもモソモソとガウンを着始めた。深雪は雫の行動に深く溜息を吐いて、ソファアに座る達也を盗み見るようにチラチラと見遣った。そして達也が（表面上は）何の反応も示していないのを確認して、ホッと胸を撫で下ろした。

やがてガウンを羽織った雫が、改めて画面に向き直った。

『えつと……、夜遅くにごめんなさい』

眠気とは違う倦怠感に、所々怪しい呂律ろれつ。

「こちらは特に遅くないから問題無いが……。もしかして、呑みでるのか？」

『何を？』

「……まあ良い。それより、どうしたんだ？」

『えつと……、吸血鬼事件について色々知ったから、できるだけ早く知らせようと思って』

「もう分かったのか。凄いな」

『もっと褒めて』

「……………」

平坦な口調でねだられ、達也は急激な脱力感を覚えた。どうやら雫は酔うと幼児退行を起こすようだ、と必要無い知識を得たことで、達也は彼女に酒を吞ませた顔も知らぬ相手に心の中で悪態を吐いた。

「いや、本当に凄いな雫は。それで、何が分かったんだ？」

『えつと……、吸血鬼が生まれた原因についてなんだけど』

想像以上にセンサーシヨナルな話題に、達也も深雪が揃って身を乗り出した。

『えつと……、確か、余剰……、何だっけ？ 余剰何とかの黒い穴の実験がどうのこうの……』

「余剰？ 黒い穴？ どういう意味よ、雫？」

まったく要領を得ない単語の羅列に、深雪の頭上には疑問符が飛び交った。

深雪の頭上に、だけだった。

「雫。その“黒い穴”というのは、もしかしてブラックホールのことか？」

『あつ、そうそう。ブラックホールの生成が何たらかんたら——』

「まさか“余剰”というのは、余剰次元理論のことか？」

『あ、うん。そんな感じだったと思う』

「そうか……、“アレ”をやったのか……」

雫の少ないヒントから何やら推測したらしい達也は、いつもと変わらぬ冷静な声と表情ながらも大きな衝撃を受けていることが深雪にはすぐに分かった。

「お兄様、それはどのような実験なのでしょう？」

「おそらく雫が聞いたのは“余剰次元理論に基づくマイクロブラックホールの生成・消滅実験”のことだろう。理論自体は昔から存在していたから、興味本位で調べたことがある」

『それって、どんな実験？』

実際に尋ねてきた雫だけでなく深雪も知りたそうにしているの、達也は簡単に説明することにした。

実験の内容は、ごく小さなブラックホールを人工的に作り出し、そこからエネルギーを取り出すというものだ。ブラックホールとは膨大な質量が高密度に集中することで発生するものであり、それが蒸発して消失する過程でその質量が熱エネルギーに変換されることが予想されている。

今回の実験の場合、ブラックホールを生成する際に“余剰次元理論”が用いられている。余剰次元理論とは『この世界は高次元の世界に閉じ込められた三次元空間の薄い膜のようなもので、物理的な力において重力のみが次元の壁を越えられる』というものだ。

この理論に基づくと、重力はその力の大部分が別次元に漏れているので、この次元では本来よりもずっと小さな力しか観測できないことになる。しかし素粒子スケールの極小距離では、重力が別次元に漏れ出す前にこの次元の物体同士で作用することになるので、普通のスケールで観測するよりも遥かに強く引き合うことになる。これを利用すれば、本来の想定よりも遥かに小さなエネルギーでブラックホールの生成が可能になる、というのがこの実験の土台となる理屈である。

『……その理屈が、吸血鬼とどう関係するの？』

「雫には話していなかったが、俺は吸血鬼の正体を、別次元からやって来た怪異」だと踏んでいる。もしかしたらその別次元へとやって来る原因となったのが、その実験かもしれないんだ」

達也の説明を聞いて尚も、深雪と雫は揃って首を傾げていた。

それを見た達也は「そうだな……」と脳内で文章を組み立ててから話し始めた。

「それを説明するために、そもそも魔法がどのようなメカニズムで発動しているかについて考える必要がある。——2人共、エネルギー保存の法則」については知っているな？」

達也の問い掛けに、2人は揃って頷いた。

「それを踏まえて、移動系魔法か加速系魔法でボールを撃ち出した場合を考えてみよう。魔法が発動する様子を観察しても、ボールを撃ち出すだけの物理的エネルギーが供給されることは確認できない。にも関わらず、実際には魔法が発動している。そのことを考えると、一見「エネルギー保存の法則」が成立していないように思える」

「現代魔法の第一パラドックス」と呼ばれている命題ですね」

『でもその命題は、それ自体が不完全ふきやんぜんな結論けちゆろんだったはず』

かなり呂律が怪しくなっている雫だが、頭の回転はまだ鈍っていないようだ。

「その通り。ここで重要なのは、「エネルギー保存の法則」は『閉じた系の中でのエネルギーの総和は一定である』という法則だということだ。つまりエネルギーの総量に変化があったように見えるのなら、観測の仕方がそもそも間違っているか、その系が閉じていないと考えるべきだ」

「……ええと、つまり余剰次元理論が成立すると仮定した場合、この世界は「閉じた系」ではないことになるから——」

『そうか！ 魔法に必要なエネルギーにやは、異次元から供給きよーぎやうしやされている！』

深雪の台詞を奪って力強く叫んだ雫に、達也が口元に笑みを浮かべて頷いた。その光景を眺めながら、深雪がこっそりと悔しそうにして

いる。

「そのような説を唱える魔法研究者は最近増えているし、俺もそう思う。おそらく魔法式の中に、異次元の壁を壊さずにエネルギーを引っ張ってくるプロセスが組み込まれているんだろう。物理的なエネルギーが供給されている形跡が観測されないのは、そのエネルギーが非物理的な性質を持つ魔法的なもので、魔法式がそれを事後的に物理的なものに変換しているんだと俺は思っている」

ふむふむ、と深雪も雫も納得顔で頷いている。

「ここから先は何の根拠も無い空想に近いものだが、異次元に作用している重力というのは、異次元の壁を支える役割を果たしているのかもしれない。しかし今回の実験では、本来別次元に逃げるはずだった重力が使われている。つまり一時的に次元の壁を支える力が奪われたということだ。これによって次元の壁に一時的に揺らぎが生じ、その隙に『別次元に存在していた怪異』がこの次元へと逃げ出したのではないか、というのが俺の持論だ」

「さすがはお兄様です。こんな少ない情報から、そこまで読み取ってしまわれるなんて」

「いや、俺だって雫から実験について聞かなければ、ここまで考えることはできなかっただろう。雫のおかげだな」

『達也たちゅやしやんさんの役に立てて嬉しい』

達也の賞賛に、雫は素直な気持ちを口にした。酒のせいで上気した頬。幼児退行のせいで普段より表に出るようになった感情。そして舌足らずな口調。今の雫は女性としての色気と幼児性が同居する、男の感情を悪戯に掻き乱す存在となっていた。

そんな彼女を、前世紀と比べて解像度が飛躍的に向上したテレビの大画面で目の当たりにしている達也だが、それでも彼は普段とまったく変わらない態度だった。

時差を考えれば向こうは真夜中だ、あまり雫を引き留めておくのも良くない。なのでその後は特に世間話をすることもなく、簡単な挨拶を交わして通話を終了した。居間のテレビ画面から、雫の姿が消える。

そうしてリビングが2人だけの空間となったところで、深雪が口を開いた。

「……零には、その『怪異』がパラサイトであるとはお伝えしないのですか?」

「パラサイトとはまた別の存在である可能性が出た以上、それを零に伝えるのは得策ではない」

「……その怪異がしんちゃんと関係あるモノ達である可能性があることも、ですか?」

「それを伝えたところで、どうなるというんだ?」

「……申し訳ございません、浅慮なことを申しました」

頭を下げて謝罪の言葉を口にする深雪に、達也は「いや、俺の方こそすまなかつた」と答えた。

そんな彼の姿に、深雪は言いようの無い不安を覚えた。テロリストが学校を襲撃しても、仲間が国際犯罪シンジケートに狙われても、自分のいる街が海外勢力に侵攻されても普段通りの態度を崩すことの無かつた彼が、今は明らかに精神的な余裕を無くしている。ぎゅつ、と深雪の拳に自然と力が込められた。

*

*

*

司波家でそんな遣り取りが行われているのはほぼ同時刻、しんのすけは自宅である単身用アパートの一室でのんびりとテレビを観てアハアと笑っていた。

親の目が届かない気楽な一人暮らしではあるが、彼の暮らし振りは意外にも健全なものだった。学校をズル休みすることは無いし、放課後や休日に遊びに行くのはもっぱら太陽が昇っている間だけ、たまの夜更かしも家の中でテレビを観るかゲームをするくらいで夜の街に繰り出して遊び歩くなんてことは無い。

つまり、エリカと幹比古と共に吸血鬼捜索をしていたときが、むしろ彼にとっては例外だったのである。例えるならば(彼女達には気の毒だが)悪い友人に唆されて不良の遊びに付き合わされていた、と

いったところか。

しかし金曜日に吸血鬼と対峙して、その後エリカの提案で吸血鬼捜索を中止したしんのすけは、この土日の間につきり普段通りの生活を取り戻していた。この調子ならば、明日からの授業も普通に1時限目から出席できるだろう。

プルルル——。

と、テーブルの上に置いていた携帯端末が震えた。着信を知らせるその画面には、でかかど『非通知』の文字が並んでいる。

普通ならば警戒心の1つでも抱いて当然の状況だが、しんのすけは特に何も考えずにそれを取って耳に当てた。

「もしもし、アンタ誰？」

『おっと、臆すること無くいきなり直球で来るとは、さすが野原しんのすけくんだね』

少年のように無邪気で擦れたところの無い声が、少し発音に癖があるものの充分に流暢とあって良い日本語で話し掛けてきた。当然ながらしんのすけにも聞き覚えが無く、その太い眉を寄せて首を傾げている。

「んで、アンタ誰？」

『すまないけど、今は名前を名乗るわけにはいかないんだ。とりあえず僕のことば「賢人^{セイジ}」とでも呼んでくれると嬉しいよ』

「成程、セイジくんですな。んで、そのセイジくんがオラに何の用？」

電話の相手が名乗った「セイジ」という単語を、しんのすけはそのまま個人の名前だと解釈したようだ。その単語に隠された意味を理解してくれなかった彼に、しかし電話の相手は特に残念だという想いを抱いた様子は無かった。

それよりも自称賢人は、しんのすけと話をしているこの状況を楽しんでいた。

『君のことは、前々から注目していたんだ。まさしく物語の主人公のごとき八面六臂の大活躍、それこそ読み物として凄く楽しませてもらったよ』

「ほーほー、よく分かんないけど、どういたしまして」

『あつはっはっ！ まったく動じないなんて、君って本当に凄いな。読者が作品世界に介入するなんて無粋の極みだけど、どうやらその心配こそが無粋だったみたいだ』

顔も分らない音声だけでの会話だが、端末から聞こえてくるその声には裏の意図などまるで無く、本当に心からしんのすけを凄いと感じている想いが伝わってくるようだった。

しかしそれが本音だろうか建前だろうか、しんのすけにとっては至極どうでもいいことだった。

「んもう、悪戯だったら切るゾ」

『ああ、待ってよしんのすけくん。いや、君の親しい友人達に倣ってしんちゃん』と呼ばせてもらっても良いかな？』

「初めての癖に馴れ馴れしいゾ」

『あつはっはっ、手厳しいなあ』

辛辣な言葉にも一切めげる様子は無く、自称賢人はしんのすけへの用件を話し始めた。

『君が捕まえようとしている吸血鬼について、とても有意義なネタを持ってきたんだ。お代は見てのお帰り、と言いたところだけど、今回はお近づきの印に無料で提供させてもらおうよ』

「ええっ？ 怪しいですなあ」

『まあまあ、そう言わないで。——明日の昼間、ちょうど昼休みの時間に、マクシミリアン・デバイス日本支社の社員になりました吸血鬼が、君の通う第一高校に潜入しようとしている。しんちゃんにはそれを捕まえてほしいんだ』

「なんでオラが？」

『それはもちろん、君がこの作品の“主人公”だからさ』

自称賢人の答えになつてない答えに、しんのすけは「ふーん」と反応するのみで追及しない。そもそも、相手の思惑そのものに興味が無い様子だ。

『信じるも信じないも君次第だし、これを聞いた君がどんな行動を取ろうと構わない。おそらく君のことだから、どのように動いたとしても必ずや僕を満足させてくれるだろうしね。——さてと、用件も伝え

たし、そろそろ失礼させてもらうよ』

自称賢人はそう言うと、しんのすけの返事も聞かず電話を切った。彼と会話することを楽しんでいたとは思えないほどに、その幕引きはあっさりとしたものだった。

そんな態度を取られたしんのすけは、不機嫌そうに唇を尖らせていた。一方的に用件を話して一方的に電話を切ったとなれば、そんな反応になるのも当然だろう。しかしいつまでも引きずるほどのことでもなかったようで、数秒後にはテレビを観てアハアハと笑ういつもの調子に戻っていた。

彼の頭に先程の用件が残っているかどうか、それは本人にしか分からない。

第82話 「吸血鬼がやって来たゾ」

ここ最近、それこそ毎日のように吸血鬼との戦闘が街中で繰り広げられていたが、この土日はそれとは打って変わって穏やかなものだった。しかしそれは街に平和が戻ったわけではなく、むしろ相手が警戒して動きを巧妙化させたことの裏返しとも見られる。

そうした状況はリーナにとっても焦りを抱くものではあったが、彼女が現在請け負っている任務は吸血鬼関連だけではない。優先度は低くなったとはいえ「灼熱のハロウィン」で暗躍した戦略級魔法師の特定も任務の1つである以上、たとえ心の中はどうかであれ学校にはちゃんと行かなければならない。

パジャマ姿のままダイニングのテーブルに着いたリーナの前に、シルヴィアが作った蜂蜜入りホットミルクが置かれた。リーナはおぼつかない手つきで少しずつそれを口にし、カップの中身を飲み干してホウと息を吐いた頃によくやく意識を覚醒させた。

「ごちそうさまでした。——本部からの指示はありませんか?」

「今のところは、まだ何も。どうやら本部でも意見が割れているようですね」

「そうですか……」

フワフワした厚手のパジャマにブラシも当てていない頭ではあるが、顔を伏せて物思いに耽るその姿は間違いなくスターズ総隊長のそれだった。そうでなくても、こんなだらしない格好でありながら見苦しくならないのだから「絶世の美少女」というのはお得である。

金曜日の吸血鬼との戦闘後にリーナが齎した『吸血鬼に取り憑いたモノの正体が過去に野原しんのすけと対立した者達である可能性が浮上した』という情報のせいで、現在作戦本部は上を下への大騒ぎとなっていた。彼の近辺で活動するだけでも神経を使うというのに、それどころか自分達が「渦中」のど真ん中にいたとなればそんな反応も当然かもしれない。

現在本部では今後の対応について議論されているが、シルヴィアの言った通り意見が割れていた。本格的に野原しんのすけとの協力体

制を築くべきだとする者、下手に突いて事態を悪化させないよう現状維持すべきだとする者、むしろ被害がこちらに及ぶ前に任務を中止すべきだとする者、いつそ彼に全てを任せて静観すべきだとする者、など様々な意見が平行線を辿っているようだ。

この土日がリーナにとつて穏やかだったのは吸血鬼と遭遇しなかったからなのだが、方針が決定するまでの間そもそも街中での搜索自体を休止するよう言われていたからだった。おかげでリーナはゆっくりと体を休めることができたが、精神的な疲労はむしろ増したように思える。

「我々の方ですが、別動隊もまだ特筆すべき成果は挙がっていないようです」

「そういえば、ここ最近ミアの姿を見ませんね」

「ここ数日、真夜中過ぎまで走り回っているみたいですよ。どうやら、機器を卸している大学の担当者に気に入られたみたいで」

「セールス・エンジニアはあくまで偽装なんですけど……」

口では苦言を呈している風のリーナだが、その口元には笑みが浮かんでいた。勤勉である同僚が思わぬ形で評価されている状況に、シルヴィアも思わずクスリと笑みを漏らす。

「そういえば、今日ミアが第一高校に行くそうですよ。CAD調整用測定器の納入に同行するようです。——お昼からの予定らしいですし、ランチタイムにでも会ってみたらどうですか?」

「えっ?」

シルヴィアからの提案に、リーナの表情がピシリと固まった。スターズの総隊長でありながら高校生をやっている自分を見られたくないという、或る意味授業参観に挑む子供のような心理の彼女だが、本人は学生経験がほとんど無いためにそれに気づかなかつた。

未知なる感情に戸惑うリーナを見つめるシルヴィアの表情は、まさしく愛娘を見守る母親のようだった。

*

*

*

先週までとは違い始業開始まで余裕のある時間に教室にやって来たエリカと幹比古だが、先に来ていた達也と普通に談笑する幹比古に對し、エリカは彼を一瞬見遣るのみで、それこそ先週までと同じように机に突っ伏してしまった。空き時間の度にそうするものだから、エリカと達也は昼休みまで一度も会話を交わさない状態となっている。おそらく何かあったのだろうと察した美月は、エリカを手近な空き教室へと連れ込んだ。午後からのカリキュラムには体を動かす内容のものは無いし、1食くらい抜いても大丈夫だと半ば自分に言い聞かせて。

「……ねえエリカちゃん、達也さんと喧嘩でもしてるの?」

美月がそう問い掛けた瞬間、分かりやすいくらいにエリカの肩が震えた。

「な、何を言ってるの美月は! 喧嘩なんかしてないって!」

「そんなに慌てなくても、エリカちゃんが達也さんに何かしたとは思ってないよ。エリカちゃんが何かしたところで、達也さんなら笑って流しそうな気がするし」

「……喧嘩じゃないのよ、何というかアタシが一方的に気まずく思ってるだけ。それに達也くんが原因ってわけでもないから、達也くんからしたら完全にとぼっちりなのは分かってるの」

「つまり原因は、しんちゃんってこと?」

美月の何気ない言葉に、エリカはまるでミュータントでも見るかのような目を美月に向けた。

「……えっ、なんでそう思ったの?」

「だって幹比古くんやレオくん相手ならそこまで引きずるほど悩ましいし、深雪さんやほのかさんとはそもそも喧嘩しないでしょ?」

「……あははっ、よく分かってるじゃない、美月」

芝居染みた台詞回しでむりやり笑みを浮かべて、エリカは朝来たときのるように机に突っ伏した。

もちろん眠るためではなく、自分の顔を美月に見られたくないからである。

「アタシが気まずく思ってるのはしんちゃんが理由だけど、別にしん

「ちゃんは何も悪くないの。悪いのは完全にアタシ、しんちゃんはむしろ巻き込まれた被害者って言った方が良いのかな」

「ぼつぼつと話し始めるエリカを、美月は黙って見つめていた。

「しんちゃんがレオのお見舞いに来たとき、しんちゃんが吸血鬼を探したがってるのを知って『一緒に探さない？』て誘ったの。1人で探すよりも効率的でしょ、なんて理由をつけて。……でもそのとき、しんちゃんはリーナと連絡を取りたがってたの」

「リーナさんとう？」

「多分そのまま放っておいたら、しんちゃんはリーナと一緒に吸血鬼を捜索していたと思う。ほら、しんちゃんとリーナって昔からの知り合いみたいじゃない？ なぜかリーナはそれを憶えてなかったみたいだけど。多分しんちゃんの中では、リーナと一緒になら吸血鬼を見つけられるって信頼があったんだと思う」

机に突っ伏した姿勢のまま、エリカはガシガシと乱暴に頭を掻いた。

「それを知ってさ、何か胸の中がモヤモヤした感じになったの。しんちゃんと知り合って1年も経ってないけど、しんちゃんはアタシ達のことを仲間として信頼していると思ってたから」

「別にしんちゃんは——」

「分かってる、これが単なる被害妄想だってことも。……それでも、一番にアタシ達を頼ってほしかった。しんちゃんを誘ったのも、今にして考えればリーナと一緒にさせたくないっていう思いがあったからかもしれない。——あくあ、自分がこんなつまらない嫉妬をするような女だとは思わなかったわ」

「そう言っただけで体を起こしたエリカの顔は、むしろ先程よりもサバサバしたものだっただけだ。」

美月は若干迷いを見せながらも、尋ねることにした。

「それで、どうして達也さんに気まずい思いをすることになったの？」
「……アタシとしんちゃんが一緒に吸血鬼を捜索してるって達也くんが知ったとき、直接は言われなかったけど達也くんに責められたの」「責められたって、リーナさんと一緒に捜索するのを妨害したことを」

「？」

「妨害って……まあ、確かにその通りなんだけど……。そつちじやなくて、アタシがしんちゃんと一緒に吸血鬼搜索をしてること自体を」「えっ？　なんで？」

特に問題点が思い浮かばなかった美月の率直な質問に、エリカはバツが悪そうに視線を逸らしながら口を開いた。

「アタシとしんちゃんでは、『目的』が違うの」

「目的？　吸血鬼を捕まえることなんじゃないの？」

「捕まえた後のことよ。しんちゃんは単純に吸血鬼を捕まえて罪を償わせることが目的だったけど、アタシはレオを襲った吸血鬼に『報復』することが目的だった」

「報復……ってことは……」

顔を強張らせて尋ねる美月に、エリカはコクリと小さく頷いた。

「正直それって、一緒にチームを組むには致命的でしょ？　正直自分でもよく分かんなくなっちゃってさ、土日の吸血鬼搜索は中止することにしたの。『警察や七草先輩達が搜索してるから大人しく待っていろよ』なんてテキストに言い訳を並べて。……自分から誘ったくせにね」

エリカはそう言っつて、両手で顔を覆い隠してしまった。指の隙間から、紅く染まった肌が見え隠れしている。

「本当、自分でも最低だって思う。すっごく恥ずかしいし、自分勝手な理由で振り回されたしんちゃんに申し訳が立たないわ」

「……ねえ、エリカちゃん」

美月が問い掛けてもエリカの反応は無かったが、それでも美月は言葉が続けた。

「しんちゃんと一緒に吸血鬼を探してたとき、しんちゃんは迷惑そうにしていたの？」

「……いや、むしろ夜の街を歩くのを楽しんでた気すらしてる」

「しんちゃんに吸血鬼搜索を止めようって言ったとき、しんちゃんはどんな反応だったの？　自分から誘っついておいて勝手だ、って怒ってた？」

「……全然、『エリカちゃんがそう言うならそうするゾ』って感じ」

「なんだ、エリカちゃんだってしんちゃんから信頼されてるじゃない」
美月の言葉に、エリカは顔を覆っていた指を僅かに開き、その隙間から弱々しい目を覗かせた。

そんなエリカに向かつて美月は手を伸ばし、彼女の顔を覆うその両手を取って下げさせた。

「多分しんちゃん本人は、エリカちゃんに何かされたとすら考えてないと思うよ。たとえ何をされようと自分のやりたいことをやるのがしんちゃんなんだから、そんなしんちゃんを振り回したとか言っても自己嫌悪しても意味無いと思う」

「……………」

「しんちゃんが本当にリーナさんと一緒に行動しようと思つたら、エリカちゃんに誘われてもそれを断つたんじゃない？ エリカちゃんがどう思おうと、しんちゃんがエリカちゃんの誘いに乗った以上、それはしんちゃんが自分の意思でエリカちゃんと一緒に行動しようと思ったからだよ」

最初は伏し目がちだったエリカの表情も、美月が言葉を重ねる内に力を取り戻していった。

しかしそれも、普段の半分ほどにまでなつたところでピタリと止まる。

「……それってさ、しんちゃんに甘えてることにならない？」

「友達なんだから、少しくらい甘えたって仕方ないよ。何となく感じてたけど、エリカちゃんってしんちゃんのことを弟みたいに思ってる節があるよね」

「ああ、それはあるかも。普段の言動が言動だしねえ」

複雑な事情を抱えるエリカだが、それを抜きにして考えれば自分が家の中で最も年下だ。だから幼い言動の多いしんのすけに対して、自分の中に燻っていた世話焼き精神が働いてしまうのかもしれない。

成程、何となく彼を気に掛けてしまうのはそういう感情からか、とエリカが新たな発見とばかりに自己分析をしていたそのとき、

「あつ、やっぱり何も持ってない」

独り言のようにそんなことを言いながら、幹比古が部屋の中に入ってきた。その手にはビニール袋が握られており、エリカ達がそれを問い掛けるよりも早く彼が中身を取り出した。

「はい、エリカはニンジンツナポテト、柴田さんは卵サンドだったよね？」

「わざわざサンドイッチを持ってきてくれたんですか？　ありがとうございます」

「へえ、ミキ、気が利くじゃない」

「どういたしまして、と言いたいところだけど、これは達也からの差し入れだよ。自分は避けられているようだから、代わりに持っていつてくれてさ」

思わぬタイミングで飛び出したその名前に、エリカと美月は互いに顔を見合わせた。

「……とりあえず、変な気を遣わせた達也くんには後で謝っておこう」

「うん、それが良いね」

2人でそんな会話を交わし、自分のサンドイッチを取り出した幹比古と共に遅めの昼食を摂ることにした。

*

*

*

CAD調整用測定器の納入作業のために第一高校の業者用通用門を通る、マクシミリアン・デバイスの小型トレーラー。

それに乗る作業員の1人が、ちょうど敷地を跨いだタイミングで、誰にも気づかれない程度にほんの僅かだが体を震わせた。

——今、何か揺らいだような感覚がありませんでした？

——やっぱり魔法科高校だけあって、結界くらいは仕掛けていたよ
うね。

——えっ!?　それって大丈夫なんですか!?

——あなた達という霊子^{フシオン}が揺らいだだけだから気づける人間の方が稀だし、傍目にはほとんど人間と区別がつかないから大丈夫……のはず。

——な、何だか不安なんですけど……。

——どこかのタイミングで危ない橋は渡らなきゃいけないし、誰が介入してくるか分からない街中よりは学校の方がまだ対処し易いがあるわ。

——いつそのこと、それに気づいて「彼」が来てくれれば良いんですけど……。

——そう都合良く行くかしらね？

一切空気を震わせない会話を交わしながら、その作業員はトレイラーに揺られて敷地の中へと入り込んでいった。

* * *

一方その頃、A組のクラスメイト（深雪は不在だ）と一緒に食事をしていたリーナは、この後の予定について考えを巡らせていた。昼休み終了まではまだ30分はあり、普段ならば友人達と食後のお茶を楽しむか、生徒会の臨時役員として顔を出したりする。

しかし今日に限っては、もう1つの選択肢が存在する。

——やっぱリミアに会った方が良いかしら……？

ミカエラ・ホンゴウとは隣人であると同時に、『日本の隠された戦略級魔法師を暴き出す』という共通のミッションを持つ同僚でもある。そんな彼女が第一高校にやって来るとなれば、情報交換という意味でも良い機会と言えるだろう。

とはいえ、彼女はマクシミリアン・デバイスのセールス・エンジンニアとしてやって来る。そんな彼女に、現在は一介の高校生でしかない自分が正面切って会いに行くのは不自然かもしれない。

やはりここは動かずにいた方が良いだろう。後で連絡などいくらでも取れるのだから——

——って、まるでワタシがミアに会いたくないみたいじゃないですか。

今まで抱えたことのない感情を持って余していることを自覚したリーナは、この感情を消し去ることも兼ねて彼女に会いに行くことを

決めた。ちなみにリーナがこのように考え事をしている間も、友人から話を振られれば即座に相槌を返すことができる。潜入捜査については素人である彼女だが、この程度のことなら簡単にできた。

やがて最後の料理を食べ終えて、テキトーな理由をつけて席を立つとした。

その直後、

「――！」

リーナは反射的に立ち上がりかけ、腰を少し浮かせたところで思い留まった。同席しているクラスメイトには座り直したように見えたらしく、幸いにも不信感を抱かれた様子は無い。

当たり障りの無い愛想笑いを浮かべながら、リーナは胸の内の焦燥感を抑えながら辺りを見渡した。周りの生徒達に変わった様子が無いのは、おそらくそれが魔法的なもの――つまり想子の波動サイオンではなかったからだろう。

しかしリーナにとって先程一瞬だけ感じ取った異質な波動は、ここ数日間ですっかりお馴染みとなった感覚だった。

この波動は、吸血鬼のものだ。

その発生源がかなり近くだったことは驚きだったが、そのおかげで方角も大雑把にだが見当がついた。実験棟の裏手に位置する、普段生徒が使用することのない、業者が出入りするときに使われる資材搬入口だ。

――そうだ、ミアが危ない！

「すみません。少し用事を思い出したので、お先に失礼させていただきますね」

丁寧な断りに完璧な笑顔を添えて、リーナは席を立ってその場を去っていった。

*

*

*

エリカ・美月・幹比古の3人が、揃ってサンドイッチにかぶりつこうとした、

まさにそのとき、

「痛っ——！」

美月が突然悲鳴をあげ、顔をしかめて両目をきつく閉じた。その拍子に彼女の手から零れ落ちたサンドイッチを、エリカが見事な反射神経で器用に掴み取る。

眼鏡を外して両手で目を押さえる美月に、幹比古は咄嗟に呪符を取り出して霊的波動をカットする結果を張った。CADの携帯を禁止する校則の穴を突いた形であるが、今はそれが功を奏した。

眼鏡を掛け直した美月が落ち着きを取り戻したのを確認した幹比古が外に意識を向け、想子サイオンよりも更に根源的な霊子フシオンの波動に気がついた。

「これは、『魔』の気配……!?!」

「まさか、吸血鬼が学校に来たってこと?! 良い度胸じゃない!」

「待ってエリカ、まずは得物を取りに行こう。僕も呪符だけじゃ心許ない」

「分かった! 美月は教室で待ってて!」

そう言い残して部屋を出ていこうとするエリカに、美月が「待って!」と呼び掛けた。

「私も行く。その方が良い気がするの。理由は……分からないけど」

美月の言葉に応えたのは、直接言われたエリカではなく、隣でそれを聞いていた幹比古だった。

「分かった。1人のときに襲われるより一緒にいた方が対処しやすいし、それに柴田さんの眼はきつと役に立つ」

「……だったらミキ、アンタが責任持って美月を守りなさいよ」

問答する時間も惜しいとばかりに、エリカはそう言って今度こそCADを預けている事務室へと走り出した。

それから少し遅れて、幹比古と美月もその後続いた。

その際に2人の手が握られていたのは、彼女を置いてけぼりにしないように配慮した結果であり、断じて自分の感情を優先させたわけではない、と幹比古は誰にともなくそんな言い訳を心の中で並べていた。

「緊急事態です！ CADの返却をお願いします！」

事務室のカウンターに駆け込めば、エリカが叫ぶように中の職員へと呼び掛けた。若い女性であるその職員はその迫力に一瞬気圧されそうになるが、すぐさま平静を取り戻すと、

「まだ規定の時間ではないので、返却はできません」

「緊急事態だって言ってるでしょ！ 春にテロリストが襲撃したときは返却されたじゃない！」

「あれは緊急事態だと認められたからです。今は異変を確認することはできませんので、CADは返却できません」

職員の返事にエリカは声を荒らげそうになるが、ここでふと思い出した。高校の事務員というのは基本的に、広域行政区庁（昔でいう都道府県庁）の職員が務めている。それは魔法科高校でも基本的に変わらず、なので魔法的な感覚に対して鈍感な、つまり一般の人々が事務員となるケースがほとんどだ。

なのでテロリストが襲撃するような分かりやすい異変はまだしも、今回のようなケースに対応することができないのである。仮にも国の未来を担う魔法師の子供を預かる機関として如何なものか、と思わないでもないが、今回のような異変に気づけるような「優秀な人材」ならば、学校の事務員よりもむしろ教師として採用されるだろう。二科生に教師を充てられないほどに、魔法師の数には余裕が無いのだから。

さてどうするか、とエリカが頭を巡らせ始めたそのとき、

「おまえ達、どうしてここに？ おまえ達も司波から聞いたのか？」

普通の人間の何倍もの濃密な存在感にエリカが振り返ると、そこには跳ね返りである彼女でさえも一目置かざるを得ない克人の姿があった。彼のすぐ後ろには、どうやら今追いついたらしい幹比古と美月も見える。

思わずエリカが身を引き、空いたスペースに克人が滑り込んだ。カウンターの手を置いて身を乗り出す彼に、女性職員が息を呑んで圧倒

されている。

「緊急事態につき、CADを返却願います」

「し、しかし、今はまだ規定の時間では——」

「緊急事態です」

エリカ達と同じ台詞で拒否しようとした職員を、克人はその一言で黙らせた。

「事は一刻を争います。放置すれば、重大な結果を招く恐れがあります。——CADの返却を」

「……は、はい」

「この3人は、俺のアシスタントです。3人のCADも返却願います」
「はい——」

いい大人であるはずの職員が高校生に気圧されるという光景だが、よほど肝の据わった人物でなければ彼のプレッシャーをはね除けるなんて真似はできないだろう。

自分には真似できない問題解決の方法に、エリカは思わず感心していた。

*

*

*

屋上庭園で昼食を摂っていた達也がそれに気づいたのは、魔法的な感覚に優れた深雪が違和感を覚えたからだだった。学校を囲む対抗術式に何か引掛かったのだとすぐに思い至った達也は、真由美に電話を入れたうえで飛行デバイスで屋上から一気に現場へと向かい、深雪も当然の如くその後続いた。

ちなみにその場にはほのかもいたのだが、飛行デバイスを持っていなかった彼女は屋上に置き去りにされてしまった。

とはいえ、何も起きていない状況でいきなり空から舞い降りるような真似はできない。実験棟の陰に下り立った2人はそのまま空き教室に隠れ、資材搬入口に横付けされたトレーラーと、荷物の積み下ろし作業をしている6人の作業員を見張っていた。

警備の術式に引掛かった時点で監視はついているだろうが、正規

の手続きを経て入ってきたマクシミリアンの社員を相手に正当な理由も無く無茶はできない。それに監視がある状態で不用意に戦闘を開始し、機密指定術式の行使を余儀なくされでもしたら、揉消しと口封じにどれだけ手間が掛かるか想像しただけで憂鬱だ。

「リーナ？」

達也の隣で、ふいに深雪が声をあげた。

リーナがトレーラーに近づいてきているのは、深雪が声をあげる前から気づいていた。標的に忍び寄るといふ感じではなく、かといって周りへの注意も充分とはいえない。現に彼女は、こちらの視線にも気づいていない様子だ。

様子を見守っていると、その中では唯一の女性である1人の作業員がリーナの存在に気づき、彼女へと歩み寄っていった。

そして、それを見たリーナの唇が「ミア」と動いた。どうやらこの女性はUSNA軍が送り込んだスパイのようだな、と達也は推測する。

と、その女性が突然自分の顔辺りを手で払う仕草を見せた。

自分の顔にまとわりつく虫を追い払おうとしている、と考えれば自然なように思えるが、今は冬であり、今日の気温はそれに相応しくらいに冷え込んでいる。そんな気候で屋外を羽虫の類が飛んでいるとは思えない。

そう考えながら、達也は^{エレメンタル・サイト}「精霊の眼」を発動させた。拡張された視力が、常人の目には見えない物を捉える。

その女性の顔に纏わりついているのは、多数の「精霊」だった。

達也は、確信した。

「アイツが、吸血鬼か」

第83話 「吸血鬼とお話するゾ」

達也と深雪が実験棟の空き教室からリーナ達を監視していたのと同時、それとは別のアングルから幹比古・エリカ・美月・克人のグループも、普通の魔法師には見えず感触すら覚えない精霊を振り払う技術者然とした女性の姿を目撃していた。

呪符を片手にその精霊を操っている幹比古が、後ろを振り返って口を開く。

「彼女です、間違いありません」

「リーナの奴、グルだったのね……」

返ってきたリアクションは、三者三様だった。エリカは小太刀の状態に展開した武装デバイスを握り締めながら怒気を孕む声で吐き捨て、美月は初めてその目で見る怪異に恐怖を隠せぬ様子で体を縮こまらせ、克人は彼の報告に無言で頷いた。

幹比古は手に持っていた呪符を胸ポケットにしまい、別の呪符を6枚取り出す。

「視覚と聴覚を遮る結界を張ります。機械は誤魔化させませんが……」

「そこらは俺が何とかしよう」

「分かりました。——エリカ、まだまだよ」

「分かっているって」

気が逸つてはいても冷静さは失っていないエリカに、幹比古は頷いて手にした呪符を投げた。6枚の短冊が見えない羽根を備えているかのように地面スレスレを滑空していく。

そしてそれらが、トレーラーごと彼女達を取り囲む六角形のエリアの頂点に着地した。

「——いきます」

幹比古の両手が印を切り、現代魔法とは術式の異なる知覚阻害の領域魔法が発動した。

「どうしたんですか、ミア？」

「……いえ、何でもありません」

虫を追い払うように手を振るミカエラにリーナが訝しげに首を傾げて尋ねると、彼女は即座にその動きを中断してそう答えた。声色だけなら本当に大したことのないことだと思えるが、そう口にする彼女の表情には明らかに動揺が走っている。

リーナにはその動揺が、それこそ致命的な失策を犯したとミカエラが思っているように感じた。はたしてその失策とは何なのか確かめたい衝動に駆られるリーナだが、そもそもここに来た目的を思い出してそれを止めた。

とにかく今は、彼女を「吸血鬼」の脅威から少しでも遠ざけなければ。

その想いを胸に、リーナは1歩彼女へと近づき、

「——何これ、囲まれた!？」

認識障害の領域魔法が自分達を取り囲んで発生したことで、リーナの意識はそちらに奪われた。

咄嗟に周りを見渡してみても、その光景に何かしらの変化は確認できない。つまりこれは自分達の認識を歪ませるものではなく、周囲の人間が自分達への認識を歪ませるものだ。とリーナは瞬時に判断した。そしてその目的が、自分達への襲撃を周囲に、あるいは学校側に悟られないようにするためだ、ということも容易に想像がつく。

まさか「吸血鬼」が自分達に仕掛けてきたのか、とリーナが頭を巡らせていると、

「——!」

その回避動作は、完全に直観頼りのものだった。咄嗟にミカエラを突き飛ばし、その反動で自分も後退する。

そうしてミカエラから離れた次の瞬間、リーナの眼前を白刃が閃いていた。

リーナは地面に転がり砂だらけになりながらも、内ポケットから旧式の情報端末を取り出した。側面のスライドスイッチを滑らせると端末が前後に割れ、板状の汎用型CADがその中から表れる。

それを片手に立ち上がりながら、彼女は突然この場に現れた襲撃者

を睨みつけた。

「何をやるの、——エリカ！」

リーナの叫ぶような問い掛けにもエリカは耳を貸さず、ついでに彼女には目もくれず、リーナに突き飛ばされて倒れたままとなっているミカエラへと片手突きの体勢に引き絞った小太刀の先端を向けた。

リーナは舌打ちしながら魔法式を構築、その標的をエリカの足元に設定した。

しかしその魔法は、発動するよりも前に突如エリカを覆った対魔法障壁、というよりも事象干渉力の塊に塗り潰されたために不発に終わった。

「カッツト・ジユウモンジ!」

巖のような巨体に圧倒的な存在感を有する十師族当主代理・克人の登場に、リーナは思わず声をあげて呆気に取られていた。日本にやって来る直前の調査でも要注意とされていた人物の思わぬ乱入に、正規の軍人といえどもティーンエイジャーでしかないリーナが激しい動揺に襲われる。

そしてその動揺の際に、エリカは最後の1歩を詰めていた。

「ミアー」

仲間の身を案じたりリーナが悲鳴にも似た声をあげるが、すぐにそれは驚愕の叫びに取って変わられた。

エリカの小太刀を、ミカエラはCADも使わずに素手で受け止めていた。

いや、よく見るとその掌には小規模の防壁魔法が展開されていた。しかしCADを使っていないことには変わりなく、国防総省所属の魔法研究者でしかない彼女が手練れの魔法師相手にこれほどの確な防御魔法を展開できるとは思えない。

「どういふことなの、ミア……?」

「どういふこと? そんなの決まってるでしょ」

無意識の内に呟かれたリーナの問いに答えたのは、ミカエラ本人ではなくエリカだった。

その目はまっすぐミカエラに向けられ、先程防がれた小太刀を隙無

く構えている。

「アンタのお仲間であるあの女こそが、例の『吸血鬼』の1匹だつてことよ」

「——まさか、ミアが吸血鬼だなんて！」

リーナにとつてミカエラはあくまでチームメイトであり、隣の部屋に住んで時々お茶を飲んだりお喋りをする程度の間柄でしかなかった。それでも自分と共にミッションに参加していたメンバーが吸血鬼となっていたというのはショックが大きく、リーナはすぐさまそれを信じる事ができなかった。

しかし無実を信じるリーナの視線に対し、ミカエラ本人は即座にそれを否定しなかった。それどころかその視線から逃れるように顔を逸らし、悔恨を表すかのように口元を引き結んでいる。

「そんな……」

ミカエラの反応からそれが事実と認めざるを得ず、リーナは思わず声を漏らしていた。

「あれは、吉田くんの結界ですか？」

「おそろくな。大した腕だ」

実験棟の空き教室から様子を窺っていた司波兄弟の目には、大型トレーラーと作業員達、そしてその1人に近づくとリーナが何の前触れも無く姿を掻き消したように見えていた。高校1年生にしてこれほどの規模と強度を持つ認識障害の陣を構築できるほどの逸材は、たとえ一科生の中でもそうそういない。二科生として入学した幹比古の急成長ぶりに、深雪は驚きを隠せない様子だった。

一方達也はそれを眺めながら、効果が視覚と聴覚の遮断であること、実体の移動を阻害する効果は無いことを突き止める。事前の打ち合わせが無いことに不安はあったが、せつかくのお膳立てを無駄にするのは勿体ない、と達也は繋ぎつ放しの音声通話をサスペンドから復帰させた。

「七草先輩、司波です」

『どうしたの?』

「実験棟資材搬入口付近に吸血鬼が出現しました。周辺の監視装置のレコーダーをオフにしてください」

何とも無茶な要求を顔色一つ変えずに言っただけの達也に、目に見えない通話口の向こう側から呆れるような雰囲気伝わってきた。

しかし達也としては、それほど無理な頼みではないと思っただけ。確かに街中ならば七草家令嬢といえども無理な話だが、校内ならば或る意味好き放題やってきた彼女には可能はずだと踏んでのことだ。

『……はい、切ったわよ』

現に真由美は(若干不服そうではありながらも)達也の要求に応えた。達也は「ありがとうございます」と簡潔に礼を述べると、彼女の返事も待たずに通話を切った。

深雪に視線を向けると、通話の様子を見守っていたらしい彼女と目が合った。

そのまま無言で頷き合い、空き教室の窓から飛び出していく。

「行くぞ、深雪」

「はい、お兄様」

「2人共、どこ行くの?」

突如後ろから聞こえてきた第三の声に、2人は驚きの表情と共に振り返った。

この場の緊迫感には似つかわしくない呑気な表情のしんのすけが、右手を軽く挙げて「よっ」と2人に挨拶をした。

「それで、吸血鬼さん? どうして魔法科高校にやって来たのかしら? わざわざ業者のフリまでしてさ」

隙無く小太刀を構えながら、エリカがミカエラに問い掛けた。もし彼女がレオを襲った犯人ならば今すぐにでも切り捨てていただろうが、彼女の風貌からしてレオを襲ったのはおそらく別人であり、ならば情報収集を優先するべきだと判断したのかもしれない。ちなみに克人もそう判断したのか、口を挟まずエリカの行動を静観している。

一方リーナは、未だに判断を決めかねていた。たとえ仲間だろうと吸血鬼になったのならは処断するのがスターズ総隊長としての役割だが、ミカエラが自分達に襲い掛かる様子を見せていないことから『今ならばまだ引き返せるのではないか』という淡い希望を抱いている状態だ。

そうして3人分（実際にはもつといるのだが）の視線を一身に受けるミカエラだが、エリカの質問には答えずだんまりを決め込んでいた。しかしそれは無視しているのではなく、リーナへ視線を向けては口を開くべきか迷っているといった感じだ。

「ミア、あなたの処遇にも関わることです、正直に話してください」
そうしてリーナが助け舟を出すと、やがて恐る恐るといった感じにミカエラが口を開いた。

「……私は確かに、現在世間を騒がせている“吸血鬼”と同じ存在です。ですが信じてください、私は今まで誰一人として殺していませんし、危害を加えることもしていません」

「そんなこと言われて『はいそうですか』って素直に信じられると思ってるの？ そんなことは後でいくらでも調査できるんだから、今はアタシの質問に答えなさい」

「……分かりました。私がここに来たのは、この学校に通う“とある人物”に会うためです」

「とある人物？ リーナのことじゃないわよね？」

エリカがそう口にしなからリーナへと視線を向けるが、リーナは彼女へと視線を返して首を横に振った。

「じゃあ誰なのよ」

「えっと、それは……」

「まさかと思うけど、この期に及んで黙秘権とか存在すると思ってるの？」

「うう……」

今にも頭を抱えて蹲りそうな雰囲気醸し出すミカエラに対し、エリカは苛々を隠そうともせず大きな溜息を吐き、リーナへと視線を向けた。

それを受けて、リーナは大きく頷くことで応えた。上司からの許可を得たこともあつてか、ミカエラは俯きがちだった顔を上げてまつすぐリーナを見据えた。実際に質問しているエリカでない辺りに、彼女のエリカに対する印象が見て取れる。

そして意を決したミカエラが、声を発するため口を開いて息を吸った。

「私が会いたかったのは——」

「おおつ、本当だ！ みんなが急に現れたゾ！」

突然の乱入者に、結界の中にいた全員が咄嗟にそちらへと視線を向けた。ミカエラの一挙手一投足に注目しており、結界に近づく者への警戒はこの場にはない幹比古と美月の役目だったため、誰もその存在に気づかなかつたのである。

そこにいたのは、しんのすけだった。そして彼の背後から、おそらく離れた場所で様子を窺っていたのであろう司波兄妹が付き従うように歩いている。

2人はともかく、なぜしんのすけがここにいるのか。

疑問に思つたエリカが、それを問い掛けようと口を開き——

「野原しんのすけくん！ あなたにお話ししたいことがあります！」

襲撃されたことでオドオドと怯えていたミカエラが、まっすぐ彼を見据えながら突然声を張り上げてきた。今度は全員の視線が一斉にそちらへと向き、特にエリカなど右足を下げた半身の姿勢で臨戦の構えを取っている。

それだけの視線を浴びながら、尚も目つきに力の籠もるミカエラが、こう言つた。

「——私の中にいる『トツペマ・マペット』さんが、あなたに会いたがつています！」

「……トツペマ？」

ポツリと零れたしんのすけの眩きは、戸惑いの色に満ちていた。

*

*

*

昔々ある所に、夢いっばいのおとぎの国「ヘンダーランド」がありました。その国は魔法がとても発達していましたが、人々はけっして争い事はせず、とても平和な日々を送っていました。

しかしその平和も、どこからかやって来たドラゴンによって脆くも崩れ去ってしまいました。メモリ・メモリ姫がドラゴンに攫われ、ヘンダーランドは闇に覆われ、滅亡まで時を待つばかりかと思われました。

そんなときに立ち上がったのが、伝説の剣を携えたゴーマン王子でした。手下である魔物を切り伏せて奴の根城まで辿り着き、壮絶な死闘の末、王子は見事ドラゴンを討ち果たすことに成功したのです。

ヘンダーランドを覆っていた闇は晴れ、王子が助けに来るのを待っていた姫はすぐ目の前です。王子は笑顔で、姫の下へと駆け寄ってきます。

しかしそのお姫様は、ただの人形でした。

そして再びヘンダーランドは闇に覆われ、王子様の前にドラゴンを操っていた本当の侵略者が姿を現しました。

その侵略者の名は、マカオとジヨマ。幾つもの世界を滅ぼしてきた凶悪な魔法使いです。

2人が真の黒幕だと知った王子様は勇敢にも立ち向かいますが、マカオとジヨマの力は絶大で、残念ながら王子様は敗れてしまいました。

こうしてヘンダーランドは闇に包まれ、マカオとジヨマは次の侵略先——地球へと向かっていったのでした。

「えーっと、それ何かの童話？」

「童話ではなく、実際に起こった出来事です」

実験棟資材搬入口で唐突に始まったミカエラの話は、まるで斜に構えた作家が書いたようなバッドエンドの童話みたいなエピソードで幕を開けた。それを聞いていたエリカが前述のような問い掛けをしてしまったのも当然といえば当然だろう。

ミカエラが一同を見渡す。話を聞くのはエリカ以外に達也と深雪、克人にしんのすけ、そしてリーナの計6人。幹比古と美月はそのまま物陰に待機しながら、結界の維持に努めてもらっている。そんな彼らはとりあえず態度を保留にしているのか、今のところ特に表立って反応を示していない。強いて挙げるとするならば、しんのすけが腕を組んでやたらと頷いているくらいか。

「そうしてマカオとジヨマが地球にやって来たのが、今からちょうど100年前の1996年。2人は日本の群馬県にある大きな湖に“ヘンダーランド”と名付けたテーマパークを建設し、そこを拠点として地球侵略の準備を着々と進めていました。——しかし結果的に奴らの企みは潰されることとなり、誰にも知られないところで地球侵略の危機は食い止められたのです」

ミカエラはそこで言葉を区切り、視線を動かした。達也ら彼女の話聞いていた面々も、それに釣られて視線を動かす。

その視線の先にいたのは、しんのすけだった。

「そのときに中心的な役割を果たしたのが、こちらにいる野原しんのすけくんでした」

「——！」

「いやあ、照れますなあ」

それを聞いた全員が驚きで目を見開く中、しんのすけは頭を掻いてニヤニヤ笑ってみせた。照れると口では言っているが特にそういった様子は見られず、単なるポーズであることは明白だ。

「野原しんのすけくんとそのご両親は、マカオとジヨマを相手にダンスバトル・ババ抜き・鬼ごっこを繰り広げ——」

「遊んでんじゃないの」

「最終的にマカオとジヨマは、力の大部分が消滅した状態で異次元の彼方に封印されることとなりました。2人に支配されていた世界も元に戻り、奴らの拠点だったテーマパークも救出された姫の魔法によってヘンダーランドへと帰っていったのでした」

途中のエリカのツツコミにもめげず、まさに「でめたしでめたし」もとい「めでたしめでたし」の一文でも添えられそうな雰囲気だ。ミカエ

ラの話が一区切りついた。

そのタイミングで、達也がリーナへと話を振る。

「リーナは、というかUSNAはこの一件について把握していたのか？」

「まさか！　ワタシだって初めて聞いたわよ！　そりゃ、しんちゃんに関わってる事件全てを知り尽くしてるとは思ってたけど、ここまでファンタジーな事例はさすがに想定外よ！」

困惑8割、興奮2割といった配分の感情で彩られた表情で、リーナが力強くそう答えた。もはや彼女がUSNAで重要な立場にあることを前提とした遣り取りだったが、正直今はそれどころではないため誰もがそれに触れることは無かった。

そしてそれは、レオを襲った吸血鬼捜索に躍起になっているエリカとて例外ではない。

「んで、それと今回の吸血鬼事件がどう関わってくるのよ」

エリカの質問に、それまで流暢に話していたミカエラが途端に口籠もった。

しかし数秒の後、意を決したようにミカエラは再び話し始める。

「事の発端は、去年の11月にダラスで行われたブラックホール実験にまで遡ります」

ファンタジックな童話から一転、SF要素の強い現代劇へと話が飛んだ。

「正確には、余剰次元理論に基づくマイクロブラックホールの生成・消滅実験」といい、実験内容は人工的な極小ブラックホールを作り出し、そこからエネルギーを取り出すというものです」

「その実験は知っている。『別次元に漏れていると予想される重力を利用することで、本来よりもずっと小さなエネルギーでブラックホールを生成する』という理屈で合っているか？」

達也の質問に、ミカエラは小さく頷いて答えた。その遣り取りにエリカが感心した様子で達也を見つめ、しんのすけは眉間に深い皺を寄せたまま動かなかった。

「後で判明したことです、実験の際に利用した重力はこの世界と」

別次元の世界”を隔てる壁を支えるものだったようです。なのでその実験によつて次元の壁が揺らぎ、別次元の世界に存在していた“モノ”がこの世界へと流れ込んでしまったようで……」

「まさか、そのときに流れ込んできたのが……」

「はい……。100年近く封印された状態でさ迷っていたマカオとジヨマの魂が、次元の壁の揺らぎをきっかけにこの世界にやって来て人間に取り憑いたのが、所謂“吸血鬼”と呼ばれる存在の大元だと思われます……」

「つまりアンタ達のせいで吸血鬼が生まれて、巡り巡つてレオが襲われたつてわけね」

「はい、その通りです……。申し訳ございません……」

ドスの利いたエリカの詰問に、ミカエラはすっかり恐縮した様子となった。

しかしそんな仲間の様子に、リーナがギロリとエリカを睨みつけた。

「エリカ、彼女は国からの指示で実験に参加してただけよ。責めるなら、実験の指示を出したUSNAの首脳陣にしてちょうだい」

「エリカ、気持ちちは分かるが今は話を聞くのが先だ」

「……分かったわよ」

リーナだけならともかく、立場としては同じ達也にまで言われてしまつては、さすがのエリカも怒りの矛を収めざるを得ない。大分不服そうではあったが。

と、そんな彼女と入れ替わるように、達也がミカエラへと問い掛ける。

「俺達は吸血鬼の正体を“パラサイト”だと予想していたんだが、実際の正体はマカオとジヨマという、過去にしんのすけと対峙したことのある魔法師だということだな？」

「“魔法師”ではなく、“魔法使い”が正確です。奴らが使う魔法は、この世界での現代魔法や古式魔法とは理屈や体系がまるで異なりま

す」

「奴らが得意とする魔法には、どんなものがある？」

「代表的なのは『人形に命を与える魔法』や『相手を物や別人に変える魔法』、それから『相手を洗脳して自分の手駒にする魔法』などを得意としているそうです」

「『命を与える魔法』か……。確かに、この世界の魔法の常識では考えられないな」

随分と荒唐無稽な話だが、克人はそれを指摘することなくそんな感想を口にした。

一方エリカは敵意と胡散臭さを織り交ぜた目つきでミカエラを睨みつけていたが、克人とは別のワードに食いついて身を乗り出した。「洗脳して自分の手駒にする!! それってレオがやられそうになってた魔法じゃない!」

「そ、そうなんですか? だとしたら、その人を襲った奴がマカオかジヨマのどちらかだと思います。奴らは命を与える魔法で多くの部下を増やしていますが、その魔法を使えるのはその2人だけなので」
「その『命を与える魔法』というのに制限は無いのか?」

達也の問い掛けに、ミカエラは「ちよつと待ってください」と言っただけ黙った。もしかしたら、彼女の中にいるという『トツペマ』なる存在の話を知っているのかもしれない。

「トツペマさんが知る限りでは特に制限は無かったようですが、それにしては今の吸血鬼の数は明らかに少ないようです。人形ではなく魔法師の体を基にしているところから見ても、封印された影響で能力が変質しているのかもしれない、というのがトツペマさんの見解です」

「そういやずつと気になってたんだけど、結局のところアンタの中にいる『トツペマ』ってのは何者なの? その話し振りからして、ヘンダーランド側だっていうのは分かるんだけど」

「トツペマは、オラの仲間だゾ」
エリカの質問に真っ先に答えたのは、ミカエラではなくしんのすけだった。

全員の顔が、一斉に彼へと向けられる。

「オラが幼稚園の遠足でヘンダーランドに行ったときにみんなが迷子

になっちゃって、仕方なくオラが探してたときにサーカスのテントでトツペマと出会ったの。それでスゲーナ・スゴイデスのトランプを渡されて『マカオとジヨマを一緒に倒してほしい』って頼まれたんだぞ」
「スゲーナ……まあ、そのトランプとかいうのは置いといて、つまりそのトツペマっていうのは100年前のしんちゃんの意味方だったってことね。でもなんで、他の奴らみたいに魔法師の体に取り憑いてるの？」

「えつと、少々事情がややこしいんですが……」

ミカエラはそう前置きすると、頭の中で情報を整理するために数秒沈黙し、そして話し始めた。

「まず『トツペマ・マペット』というのは、元々はメモリ・メモリ姫と同一の存在でした」

「——へっ？ それって、ヘンダーランドのお姫様だっけ？ そうなの、しんちゃん？」

「えっ？ そうだったっけ？」

当時深く関わっていたはずのしんのすけが首を傾げ、ミカエラは若干呆れたような表情を浮かべた。まるでそれは、彼女の中にいるという『トツペマ』の感情が表出したかのようなだった。

「100年前の侵攻の際、姫はマカオとジヨマに捕らえられ肉体と精神を分離されてしまいます。そのとき精神は1体の操り人形に移され、それが『トツペマ・マペット』として野原しんのすけくんと行動を共にすることとなったのです」

「ああ、何かそんな感じだった気がするゾ」

「……それから100年弱が経過し、我々の実験によつてマカオとジヨマが復活したことをヘンダーランド側も察知しました。すぐにも対処しなければいけないと姫も考えましたが、万一に備えて自分も動くことができません。そこで姫は自身の精神を複製し『トツペマ・マペット』を新たに作り上げ、次元の壁が揺らいだその瞬間を狙って地球に送り込んだのです」

さりげなく語られた内容に、さすがの達也も思わず横から口を挟む。

「ちよつと待て。次元の壁を越えたことは置いて、その口振りだと過去の時間に遡って刺客を送り込んだことになるが」

「……私にもわかには信じられませんでしたが、トツペマさんの話を聞く限りではそういうことになります。トツペマさんが言うには『質量ゼロの精神体であれば時間逆行によるエネルギーの消費は最小限で済む』ということらしいのですが……」

「……………」

自分達とは魔法の体系が違うとはいえ、タイムトラベルという離れ業を事も無げにやってのけるその技術力に、達也は久し振りに世界の広さを痛感した心地になった。

「……つまり我々が実験を行ったあの瞬間、あの場にはマカオとジョマ、そしてトツペマさんがいたことになります。しかしマカオとジョマには逃げられ、精神のままでは存在を保つことができなかつたトツペマさんは緊急避難という形でやむなく私の体に取り憑いた、というわけです」

このタイミングで口を開いたのは、ミカエラの上司であるリーナだった。

「つまりミア、あなたが今回の作戦参加を志願したのは、最初からそのトツペマという者のためだった、ということですか？」

「はい、私はトツペマさんの存在と吸血鬼に関する情報を故意に隠匿していました。……どのような処分でも、覚悟しているつもりです」
「リーナちゃん」

「分かってるわよ、しんちゃん。まったくのお咎め無しってわけにはいかないだろうけど、ワタシからも情状酌量するよう出来る限り掛け合ってみるつもり」

自分の意見がどこまで通るか分からないけど、という言葉は呑み込んで、リーナは努めて頼もしく見えるよう笑みを浮かべてみせた。

そしてしんのすけは素直にそれを信じたようで、ホツとしたような顔つきでミカエラへと話し掛ける。

「ねえねえミアちゃん、オラもトツペマと直接お話することはできないの？」

「えつと、ごめんなさい……。今はまだ、私の体から離れることはできないんです。むりやり引き剥がすと力が暴走しかねなくて——」
「話しているところすまないが、そろそろ時間だ。あまりここに長居すると、生徒達に不審がられる。眠ってもらっているマクシミリアンの社員へのフォローも必要だしな」

携帯端末を確認していた克人の呼び掛けに、全員が（内心どうであれ）納得した表情を見せた。学校側には最低限話を通しておく必要があるだろうが、できるだけ騒ぎは大きくしたくないところだ。それに時間的に考えれば、敵に囲まれた状態だともいえるリーナ達への「お迎え」が気になりだす頃合いでもある。

今後の話し合いをするにしても、別の場所に移した方が良いだろう。そういつた考えもあり、皆がその場からの撤収の準備に入った。とはいえ特に荷物を広げているわけでもなく、強いて挙げるなら幹比古による結界を解くくらいである。

幹比古が解除の印を結び、結界が解かれた。元々中にいる者達には分かりにくいのが、外から見た者からは彼らの姿とマクシミリアンのトレーラーが突然現れたように見えたはずだ。

「襲撃者」は、まさにそのタイミングを狙っていた。

「——みんな、伏せろ！」

「——！」

時間的猶予が無い中で最低限の単語だけ添えた達也の叫び声に、それでもほとんどの者達が即座に反応して行動した。実戦慣れしたエリカや克人はもちろんのこと、しんのすけも持ち前の反射神経で言われた通りその場に俯せとなった。

一方、皆に呼び掛けた張本人である達也は、彼らとはまた別の行動を取った。深雪のガーディアンであり、またその立場を差し引いても深雪の安全が最優先事項である彼は、深雪を自身の体に引き寄せ、自らを盾にするように地面に倒れ込んでいった。深雪は突然のことで驚愕したが、体を僅かに強張らせるのみでされるが儘となっていた。

そしてリーナも、自身の仲間であり非戦闘員であるミカエラを守るべく、彼女へと駆け寄っていった。しかし肩が触れ合うほどの間隔

だった司波兄妹と違い、リーナとミカエラとでは数歩ほどの距離が空いている。

そしてその距離が、まさしく“致命的”だった。

「——ミアっ！」

まさしく手が触れる寸前だったリーナの目の前で、

ミカエラの心臓が、虹色に輝くレーザーに撃ち抜かれた。

第84話 「吸血鬼？ と戦うゾ」

毛先を肩の辺りで切り揃えたセミロングに黒縁の眼鏡、レディースーツをキツチリと着こなすことで清潔感はあるものの地味という印象は拭えない。

そんな目立たないOLのような外見をした女が、第一高校から数百メートル離れた上空、雑居ビルの屋上から10メートルほどの高さに浮かんでいた。それは比喩表現などではなく、背中に翼も無いのに足場も何も無いその空間でフワフワと漂っていた。仮に魔法に知識のある者がその光景を目撃すれば、トールス・シルバーが今年の夏に開発した飛行術式魔法を疑うのだろうか、現時点の彼女がそういった人間に目撃されることは無いので詮無い話だろう。

なぜならその女は現在、自分に対して認識障害の魔法を掛けているからである。しかし彼女の両腕は重力に従ってダラリと垂れているだけで、CADの類を持つている様子は見当たらない。

——マカオ様、ジヨマ様。トツペマが憑いていた女を魔法で狙撃、絶命を確認しました。

——了解。それじゃ「後始末」は彼らに任せて、アナタは見つからない内にずらかりなさい。

女が脳内で呼び掛けると、即座にその返事が脳内に響いた。まるで目の前で話し掛けられているようにクリアな音声だが、当然彼女の周りに人の姿などあるはずもない。

女は最後にもう一度だけ第一高校の方へ視線を向けると、すぐに興味を失ったようにフンと息を吐き、その場でクルリと踵を返し——

「——！」
その勢いのままもう半回転して、一瞬前とまったく同じ姿勢に戻る。

そこには、一瞬前にはいなかった「人間」の存在があった。

髪型は顎の線で切り揃えたストレートショートボブ、服装は黒いミニ丈のジャンパースカートに同色のレギンス。顔だけ見ると十代半ば特有の中性的な顔立ちのため性別の判断は難しいが、胸は僅かなが

らも確かに膨らんでいるのが確認できる。

しかし女は、そんなことを確認するために少女(便宜上そう呼ぶ)を見渡したのではない。

事実、彼女が最も目に留めたのは、少女が右手にはめたナツクルダスターだった。

「てめ——」

女が何かを口にしようとしたその瞬間、女は表情を強張らせて発言を中断した。いや、中断させられた。

グラリと女の体がバランスを崩し、浮力を失ったのか重力に引つ張られて雑居ビルの屋上へと落ちていく。10メートルの高さから地上に衝突する1秒半足らずの間、しかし女は即座に意識を持ち直して自身に重力緩和の魔法を掛けたことで落下速度が緩やかとなり、結果掠り傷1つ負わずに下り立った。

しかし女は、そのまま2本足で立つこともできずに崩れ落ちて膝立ちとなった。そんな彼女を、数メートル離れた場所に同じくフワリと下り立った少女が見下ろしている。

「はあ……、はあ……!! 何だコレ、幻覚か……!? くそっ、やっぱ本調子じゃねえな……!!」

「いいえ、凄いですよ。気絶させるつもりで放ったんですから」

額に脂汗を滲ませながら悪態を吐く女に、少女は冷やややかな声色でそう言った。少女にしては低く、少年にしては高い声だった。

「まったく、狙撃の瞬間を見られてたか……!! どうせここから逃げたところで『お仲間』が控えてるんだろ……?」

「はい、その通りです。なので抵抗は無駄ですよ」

「……いや、それはどうかな?」

女がそう呟いて不敵な笑みを浮かべ、少女が怪訝そうに眉を寄せる。

そして女はその表情のまま、人差し指を立てて自身のこめかみへと向ける。

それを眺めていた少女が、ハッと目を見開いた瞬間、

「今度はちゃんと遊びましょ? ——ボクちゃん」

どしゆつ、という音と共に、女の側頭部から血が噴き出した。血に染まったコンクリートに女の体が横倒れとなり、そしてそれきり動かなくなった。

その場を動かずにジツとそれを眺めていた少女の背後に、また別の少女が現れた。こちらはクラシカルな黒いワンピースに背中まで届く緩い巻き髪、そして薄いながらも化粧を施した可愛らしい顔立ちから「少女」だと断言できる外見だった。そして先の少女と非常に似た顔をしたことから、歳の近いきょうだい、あるいは双子だと推測できる。

「逃げられちゃったわね、ヤミちゃん」

「……………」

「まあ、ご当主様もその辺りは特にこだわりも無かったようだし、構わないんじゃないかしら。——第一高校の方については、達也さんたちに任せるしかないでしょうね」

「……………」

「ちよつと、どうしたのヤミちゃん。大丈夫？」

ヤミと呼ばれた少女がまるで返事をしないことに、後から来た少女が心配そうな表情で歩み寄っていく。

と、そのタイミングでふいにヤミが振り返った。

その表情は、やけに嬉しそうだった。

「姉さん。あの人、僕を一発で男だと見抜いていた」

「あら、そうなの？ 魔法の性質的に直観力が高かったりするのかしら……………」

「初めて、初対面の人に男だと見てもらえた……………」

「……………」

ヤミと呼ばれた少女、改め少年の独り言に、少女は白けた目を向けて溜息を吐いた。

*

*

*

「ミアー！」

自分の目の前で倒れ行く仲間の姿に、リーナは思わず叫び声をあげた。傷口がレーザーで焼かれているのか、左胸に空いた穴からは出血はほとんど無いが、それが致命傷であることは医学的な知識の無い者が見ても明らかだ。

リーナの声に、その場にいる全員が一斉に視線を向けた。そしてミカエラの姿で事態を認識するや、実戦経験に長けたエリカや克人といった面々は即座に攻撃が仕掛けられたであろう方向へと視線を移す。しかしそこには学校を取り囲む外壁と空くらいしか見え、敵の姿はどこにも見当たらない。こちらが視認できない魔法を使用していいのか、あるいは既にその場を離脱しているのか、情報の少ない現状では判断のしようが無かった。

しかしそんな中、この中でもとりわけ実戦経験に長けているであろう達也はというと、意外にもそちらには目もくれず、地面に倒れ込むミカエラへと即座に駆け寄っていった。

そうして彼女に辿り着くまでの道中、腰のホルスターからCADを抜いた。

銀色の拳銃型であるその銃口が、ミカエラへと向けられる。

「お兄様！ それは——」

「タツヤ！ 何する——」

同時に発せられる2人の制止の声をBGMに、達也は引き金を引いた。

【情報体変更履歴の遡及を開始——復元地点を確認】

達也が発動した魔法に必要な時間は、本当に僅かなもの。しかし深雪は、達也がこの魔法を発動している僅かな時間に想像を絶する苦痛を味わっていることを知っている。現に達也の表情は変化に乏しいが、よくよく観察すれば額に脂汗が滲んでいることを確認できるだろう。

しかし兄の身を案ずる深雪以外の全員が、その後起こった劇的な変貌に目を奪われたため、それに気づくことは無かった。

【復元開始】

エイドスの変更履歴を遡り、負傷する直前のエイドスを復元し複写

する、達也の固有魔法の1つである『再成』。

事象には情報が伴い、情報が事象を改変する。魔法の基本原理に従い、ミカエラの体が怪我をしなかった状態へと復元する。怪我を治すのではなく、怪我を負った事実を無かったことにする。

【復元完了】

そうしてミカエラの体が霞んだように見えた次の瞬間には、彼女の体には傷1つ見当たらなくなっていた。

「えっ!? これって……えっ?」

「おおっ! 元通りだゾ!」

目の前で繰り広げられた、時代によってはそれこそ『神の奇跡』と称される現象に、リーナは頭がパニックになって言葉を紡げなくなり、しんのすけは純粹に賞賛の言葉を達也に贈る。

しかしそんな2人の頭に冷水をぶっかける言葉を吐いたのは、他ならぬ達也だった。

「まだだ、2人共。——トツペマ・マペットらしきモノの情報が、彼女の中に無かった」

「——!」

「ん? それって、どういう意味?」

達也の言葉の真意を瞬時に悟ったリーナに対し、しんのすけが首を傾げて尋ねる。

しかし幸いにも、いや、不幸にも、彼に説明する手間を掛ける必要は無くなった。

「——危ないっ!」

この場から少し離れた場所で俯瞰的に状況を把握していた幹比古からの、突然の警告。

それに真っ先に反応した克人が、自分達を取り囲む防壁魔法を展開した。

そしてその直後、達也・深雪・リーナ・ミカエラ・エリカ・克人・しんのすけの7人に、魔法の雷が襲い掛かった。

「うおおっ! 何だ!?!」

空は今にも雪が降り出しそうな分厚い雲に覆われているが、雷はそ

れよりもずっと低い場所、それこそ頭上10メートルほどの何も無い空間から突然現れている。その速度は時速10万キロメートルに遠く及ばない、せいぜいクロスボウから射出される矢のスピードではないが、ゴルフボールくらいの小型球電でも人を行動不能にするには充分であるし、同時に10発も食らえば死に至るだろう。

幸いにも防壁魔法によって初撃を防ぐことはできたが、それで攻撃が収まったわけではない。

深雪の背後に生じた閃光は、彼女が振り返るよりも早く達也が消し去った。

エリカの頭上に生じた閃光は、深雪が作り出した氷の粒に帯電したことで消えた。

克人の障壁が電光を阻み、リーナのプラズマが電撃を蹴散らした。達也の“視界”には現在、様々な物質や自然現象に関する情報が記載される“情報の海”が広がっている。サイオンで編まれた魔法式の情報を読み取ることで、ランダムに発生しているように思える放電の兆候を察知している。

——あれが、トツペマ・マペット……。 “吸血鬼”の正体か……！
しかしそんな達也の“眼”を持ってしても、“それ”は^{フシオン}霊子の塊にしか見えなかった。

幹比古と美月は、他の面々から少し離れたトレーラーの陰から様子を窺っていた。

美月の目には現在、空中に生じた閃光が友人達に届く前に四散する光景が映っている。魔法の兆候や余波が見えていないのは、幹比古が彼女を想って魔法的な波動をほとんど遮断する結界を張っているからだ。肉体を放棄した情報生命体は魔法的な波動でこの世界を知覚しているのか、結界に守られた2人に電撃が襲い掛かる様子は無かった。

友人達の置かれた状況は、けっして芳しくない。攻撃自体は散発的であり圧倒されている感覚は無いが、相手の位置が分からないため反

撃のしようが無く、謂わば互いに攻めあぐねている膠着状態といったところだろう。

ハラハラした様子でそれを見守っていた美月の耳に、幹比古の呟きが聞こえた。

「おかしいな……、なぜ逃げないんだ……?」

「トツペマ！　なんでオラ達を攻撃するの!?!」

しんのすけが必死に頭上の何も無い空間に呼び掛けるが、返事はおろかその声に反応する様子も無い。不意打ちのように電撃の魔法が編み上げられ、しかし事象改変に結びつく前に達也の手によってそれが分解される、という遣り取りが続くのみである。

現代魔法のような起動式の展開プロセスが無かったせいで最初是要領を掴めなかったが、達也は既にほぼ確実にトツペマの魔法を撃ち落とせるようになっていた。攻撃に対処する余裕ができたことで、疑問を覚える余裕も心に生じる。

「司波、なぜだと思っ？」

最低限の台詞で、克人が達也に問い掛ける。具体的な疑問の内容は何も無かったが、達也はそれが先程しんのすけが口にしたこと、つまりトツペマが自分達に攻撃を仕掛けている理由であると正確に読み取った。

しかし達也がそれを口にするよりも前に、2人の会話に横槍が入った。

「待つてくださいい！　おそろくトツペマには、私達に攻撃する意思はありません!」

達也の再成魔法によって命を取り戻した、そしてつい先程までトツペマをその体の内に宿していたミカエラが、それこそ自分の仲間を庇うような必死の形相で2人に呼び掛けた。

「確かにヤツの立場からしたら、俺達に攻撃する理由が無いことは分かる。だとすると、この現状はどういうことだ?」

「ミア、説明してください」

リーナがミアに対して語り掛けたその口調は、仲間をお願いするというよりも上司が部下に命令する意味合いの強いものだった。しかしそれによって、たとえミカエラが機密事項を達也たちに明かしたとしても、上司であるリーナの指示で行ったことであるという名目が立つ。

「……ヴァンパイアの本体は『パラサイト』と呼ばれる非物質体である、というのがトツペマを宿した私を除く関係者の見解でした」
「ロンドン会議の定義だろう。それは知ってる」

達也の言葉、そしてそれに同意するように頷く深雪と克人に、ミカエラは絶句したように目を見開き、リーナは若干同情するような視線を彼女に向けた。

ちなみにその隣でしんのすけが「パラサイトって何？」とエリカに尋ねる光景が見られたが、そちらは彼女に任せてミカエラは説明を続けることにする。

「結果的には違いましたが、精神体の状態でこの世界にやって来た彼女達にパラサイトと似た性質があることは確かです。トツペマも、宿主として人間を求める自己保存本能が自分に芽生えていることを認めていました」

情報次元からやって来た存在であるパラサイトにとって、人間に寄生するというのは物質次元であるこの世界に自分の存在を定義することも意味している。ミカエラが一時的に死亡したことでむりやり宿主から引き剥がされた今のトツペマは、この世界に対して不安定な存在になっている状態だと推測される。

もしかしたらこの電撃魔法も、意思自体が不安定となり魔法の行使を止められない暴走状態の表れなのかもしれない。

「つまりこうして我々をこの場に留めているのは、自分を安定させるためにこの中の誰かに取り憑こうとしている本能が働いているため、ということか？」

「おおっ！ だったらオラが——」

「止める、しんのすけ！ 今度も同じように宿主が自我を維持できる保証は無い！」

今にも達也の傍を離れていきそうだったしんのすけを、達也が一喝して制止する。

「おそらくトツペマさんも、それと同じ懸念を抱いているのだと思います。パラサイトとしての本能に必死に抗いながら、私達が自分を見失わないようにこの場を動かずにいるのかもしれないですね」

「……まさかヤツは、俺達に自分を倒させようとしているのか？」
「待って、達也くん！ トツペマはオラ達の仲間だゾ！」

必死に縋りつくしんのすけに、口を閉ざして黙り込む達也。

口を挟まず事の成り行きを見守っていたエリカや深雪が、そんな達也をジツと見つめていた。彼がどのような判断を下すのか、心配そうな表情で眉を寄せている。

しかし達也としては、倒す倒さない以前の問題だった。

確かに達也は、情報次元にてトツペマの姿を視認できている。しかし物質次元との座標が明確に定義されていないせいで、それが現実世界のどの座標に対応しているのかが分からない。そもそも相手はプション情報体であり、座標が分かったとしても構造が分からなければ攻撃の手段は無い。

正直なところ、ジリ貧と言うほか無かった。

「まずいな……。せめてどこにいるのか分かれば、手の出しようもあるんだけど……」

幹比古本人は認めないだろうが、彼は焦っていた。もう少し落ち着いていたら、美月が聞き耳を立てている中でこんな不用意な呟きは漏らさなかつたはずだ。

そしてそんな彼の独り言に、美月は或る決心を固めた。

「吉田くん、結界を解いてください」

「えっ？ 柴田さん、何を……」

「私の眼があれば、居場所が分かるかもしれません」

それを聞いて、幹比古はようやく自分の失態に気がついた。

「……駄目だ、刺激が強すぎる。妖気を抑えた状態であれだけ影響が

あつたんだ、妖気を解放した状態でアレを直視したら、最悪失明の危険性だってあるんだよ」

「魔法師であることを選んだ以上、リスクは覚悟のうえです。皆が危ない今だからこそ、私の能力が存在している意味があるはずなんです」

美月の家は術者の傍系ではあるものの、美月が先祖返り的な見鬼けんぎの能力を持たなければそれすら気づかなかったほどに魔法とは無縁だった。自分を魔法の附属物と見なす考え方は魔法によって多くの見返りを得ている名家であれば時折見られるものだが、たまたま魔法の才能を持って生まれただけの「少女」が持つべきではない考えだ。「……分かったよ」

しかし、幹比古は最終的に首を縦に振った。自身が古式魔法の名門出身であるが故に、美月の考えが痛いほどよく分かってしまった。

とはいえ、何の対策もせずにそんな暴挙を許すはずも無い。幹比古はブレザーのポケットから折り畳んだ布を取り出して美月に渡すと、それを広げて首に掛けるよう指示する。ショールのように薄いそれは、神道の宝具を参考にして作られた吉田家の魔法道具であり「比礼ひれ」と呼ばれている。

「危ないと思ったら、それで目を覆うんだ。——けっして無理はしないって、約束して。自分のために誰かが犠牲になるなんて、誰も望んではいないんだから」

「……うん、約束する」

まっすぐ自分を見つめて話す幹比古に、美月は顔が近いことへの羞恥も忘れて真剣な面持ちで頷いた。

行くよ、と呼び掛けられ、はい、と返事をする。たったそれだけの遣り取りに、美月は声が震えないよう気力を振り絞る必要があった。

幹比古が、隣の美月にすら聞こえない音量で何かを呟く。

「――！」

その瞬間、目が痛いと感じる暇も無く全身に激痛が走った。自然と折れそうになる膝に精一杯の力を込めて、美月はその目を開いた。

普段極力目を背け、閉ざしてきた混沌の世界が、容赦無く美月に襲

い掛かる。

その中で一際目立つ、異質な存在。

美月は直感的に、それが「トツペマ・マペット」だと気づいた。

「エリカちゃんの頭上2メートル、右寄り1メートル、後ろ寄り50センチ！　そこに異質な存在の接点があります！」

指を差す美月に、幹比古は答える間も惜しんでCADに指を走らせた。扇形の専用デバイス、明王の纏う炎の術式が記された短冊を開き、サイオンを注ぎ込んで形成された起動式を回収する。

アンチ・デーモン
対妖魔術式・迦楼羅炎。

情報体に外的なダメージを与えることを目的とした「炎」の独立情報体が、美月の指定した座標に向けて射出された。

「燃烧」の概念を持ちながら、物理世界に「何かを燃やす現象」を具現化しない。現象と切り離された情報体として投射された魔法式が暴走状態のトツペマにダメージを与えるのを、達也の特殊な眼が確かに確認した。

しかし達也をそれ以上に驚かせたのが、それまで曖昧にしか捉えられなかったトツペマの座標が、急にハッキリと見え始めたことだった。それはまるで、不確定だったパラメーターに突然具体的な数値が入ったかのような変化だった。

「シユレデインガの猫」という有名な思考実験があるが、この実験の本質は『観測者に観測されることで不確かだった事実が確定する』という点にある。魔物のような情報体の場合、観測者に観測されることによって、観測者以外の第三者にとつても同じことが起きるというのか。美月に観測されたことで、物質次元における存在が強まったというのか。

だとすると、自らの属性情報に変更を加えるほどの視線を、トツペマが気づかないはずが無い。もちろんトツペマ自身に彼女を害する意図は無いだろうが、意識が曖昧になっていると思われる今の状態だと本能が勝る可能性の方が高い。

達也が慌てて「眼」を凝らす。

懸念していた通りの光景が、今まさに展開されようとしていた。

「――美月が危ない！」

「えっ!？」

達也の叫びに、エリカ達が一斉に彼女が潜むトレーラーへと視線を向けた。

当然、それにはしんのすけも含まれている。

トツペマが自分に向かってくるのを、美月も気づいたのだろう。先程までは友人を助けなければという使命感で誤魔化せた恐怖心が一気に臨界点に達したのだろう、彼女は首に巻いた布で両目を覆ったまましやがみ込んでしまった。彼女の隣にいる幹比古が迎撃しようとCADを構えるが、相手の正確な位置を知らないことには十全の対応は望めない。

判断は、一瞬だった。

「――達也くん! トツペマを止めて!」

「――!」

しんのすけがそう叫んだ次の瞬間、達也は左手を美月の辺りに向けて「術式解体」を発動した。

咄嗟のことでCADは持てなかったが、達也にとっては問題にならない。瞬間出力の最大限まで振り絞ったサイオンを左手に集め、美月に近づくにつれて座標情報の揺らぎが収束していくトツペマに向けてそれを解き放った。

名前こそ「解体」となっているが、実際にはサイオン流の圧力で情報体押し流す術式だ。対象が魔法式ならば情報体から魔法式を剥ぎ取るようにして無効化できるが、それ自体に情報体を破壊する効果は無い。

つまり魔法式より強固な構造を持つ情報体ならば、「術式解体」を受けたところで情報構造が壊れずに押し流されるだけ、という結果に終わるのは十分に予想できることだった。

「柴田さん、大丈夫!？」

動転するあまり声がひっくり返りそうになる幹比古に、懸命に頷く

ことでそれに応える美月。

そんな2人を視界に捉えながら、エリカやリーナ・深雪といった面々は緊張した表情で周りを警戒する。先程までの電撃は無くなつたが、トツペマの存在を知覚できない、つまりすぐ傍にいたとしても気づけないということだ。警戒心が消えることは無い。

そして同じくプシオン情報体を認識できないしんのすけは、美月へと伸ばした左腕をゆっくりと下ろす達也をジッと見つめていた。

普段の彼からは考えられない、不安と恐怖が緋い交ぜになった表情で。

「――逃げたか」

「はい」

そうして克人の簡潔な問いに達也が答えることで、ようやくその場にいる全員の体から緊張が抜けた。

皆が構えていた武器をしまつていく中、リーナが気になるのはやはりミカエラの容態だった。達也の魔法を受けて復活したように見える彼女だが、治癒魔法というのは何度も掛けて偽りの情報を世界に定着させることで初めて治療が完了となる。今は無事なように見える彼女も、いつまた症状が再発するか分からない。

「ねえ、タツヤ……。さつきミアに掛けた治癒魔法のことだけど――」
だからリーナにとって、それは至極当然の質問であつた。

そしてそれに対し、達也の答えは、

「……魔法？ 何を言っているんだ？」

「はっ？ いや、何を言ってるって、さつきミアにやってた――」

「俺はそんなことをした覚えは無いが、みんなはどうだ？」

「達也くんが魔法？ アタシは特にそんな記憶は無いけど？」

「そうね。お兄様がその女性に魔法を使ったところなんて見てないわ」

「ああ。俺も特に見た記憶は無い」

真剣な表情ですつとぼける達也に、エリカと深雪だけでなく克人までもがそれに乗つかつてしまった。ひよつとしてアレは幻覚だつたのか、とリーナは思わずミカエラへと視線を向け、そしてミカエラが

ブンブンと勢いよく首を横に振る姿にハッと我に返る仕草を見せる。眉間に皺を寄せて達也を睨みつけるリーナに、それでも達也は平然とした表情を一切崩さない。しばらくその睨めつこを続けていた2人だったが、やがて折れたのはリーナだった。

「ああもう、分かったわよ！ 黙ってろってことでしょ？ とはいえ、完全に誤魔化せるとは思わないでよ」

溜息混じりにそう答えるリーナに、達也は「悪いな」と短く返事をした。リーナの主観であるが、全然悪いと思っただけで表情が見えた。

危機は去り、これで一件落着——とはいかない。これまでの遣り取りに一切参加しなかった1人の少年に、その場にいる全員が一斉に視線を向けた。

その少年・野原しんのすけは、トツペマと思われるプシオンの塊が達也の魔法で押し流された地点、美月と幹比古が潜んでいたトレイラーの陰をジッと見つめていた。彼は達也や美月と違ってそれを確認する手段は無いため、先程も現在も同じような光景にしか見えてないはずだ。

達也たちの位置からは、しんのすけの背中しか見えぬ表情は確認できない。黙り込んだままのため、どのような精神状態なのかも分からない。知らず、達也たちを取り巻く空気に緊張感が増していく。

そしてその体勢のまま、しんのすけが声を発した。

「達也くん、オラ、先に戻ってるね」

「……ああ」

その声はひどく平坦で、感情の読み取れないものだった。達也が返事をする、しんのすけはまっすぐ前へと足早に歩き、その場を去っていく。

彼の表情は、最後まで確認することができなかった。

*

*

*

“それ”は元々、この世界に属する存在ではなかった。一刹那だけ揺らいだ壁を越えて、形の無い世界を介して形を記した世界へとやつ

て来た影響か、狂喜・悲嘆・憎悪・願望・祈念といった様々な“渴望”の持つプシオン波動に引き寄せられるという性質を持つようになっていた。

“それ”はこの世界に自分の存在を定義するために、プシオンを吸収し続ける必要があった。しかし“形ある世界”において“それ”は独力でプシオンを吸収することができず、プシオンを集められる“形あるもの”と一体化しなければならなかった。

仕方なく偶然そこにいた1人の人間を緊急避難先としたが、宿主である人間の意識を乗っ取ることはしなかった。新たに芽生えた本能と戦いながらも、“それ”は宿主との交流を深めて自らの宿敵と対峙するための協力体制を敷くことに成功した。

そうして日本にやって来た“それ”だったが、ようやく自身の目的を達成するためのキーマンに接触できた矢先に宿主を殺され、むりやり“形あるもの”から引き剥がされたことでこの世界での定義を揺らがされた。その影響で自身の意思も朦朧となり、魔法の暴走によってこの世界に来てから貯蔵していた大量のプシオンをも失う羽目になった。

今の“それ”の力では、意思ある生物のバリアを破って体内に侵入することはできない。本能によって宿主の意識を乗っ取ることをよしとしない“それ”としてはむしろ好都合ではあったが、このままでは物質次元に干渉することができなくなる。

とにかく今は、どこか休む場所が必要だった。

例えば、意思を無くした生物に流れる血液の中、とか。

例えば、人の形を与えられたことによつてプシオンを集める意思無き人形の中、とか。

ふらふらと虚空を漂っていた“それ”は、第一高校の敷地の端に建つ倉庫の中で、休むのに打って付けな“器”を見つけた。

第85話 「みんなが色々と企んでるゾ」

トツペマ・マペットと思われる情報思念体を何とか撃退してから、ちよようど1週間。

達也は毎朝の日課である九重寺での鍛錬に赴いていたが、ここ1週間の修行内容は通常のそれとは大きく異なっていた。

「師匠、お願いします」

達也の声に、いつものように薄い笑みを浮かべる八雲が印を結んだ。傍目には何の変化も無いように思えるが、情報次元に漂う情報体を認識できる達也の目は標的となる孤立情報体（式神の一種らしい）を確かに捉えていた。

掌の中にサイオンを集めて握りしめるといふ行為は、達也が「術式解体」を行使する際に用いるイメージである。通常ならばそれを起動式や魔法式に叩きつけるが、今回は情報体の作用している実体を手掛かりに座標を特定するのではなく、情報の次元のみにおいて座標を特定することを目指していた。

握っていた手を開く。腕を伸ばすようなことはしない。情報次元に意識を集中している今は、物理的な方向性のイメージとなる動作は却って邪魔になる。

標的に座標を重ねるようにして、達也が放ったサイオンの塊がアイデアに出現した。物理次元では複数の物質が同時に同一座標に存在することはできないが、情報次元ではそのような制約は無い。

しかし圧縮の状態から解放された達也のサイオンは、孤立情報体に何の影響も与えずに拡散して消えた。

「くっ——」

「さすがの君も苦戦しているねえ。まあ、できない人間はどんな努力をしてもできない類の技だからね、これは」

悔しそうに声を漏らす達也の反応を見て、八雲は飄々とした口調でそう言った。それが突き放したように聞こえたからか、隣で心配そうに見守っていた深雪がキツと鋭い視線を八雲に向ける。

それでも表情を変えない八雲はさすが、と言いたところだが、こ

めかみの辺りに冷や汗らしきものが浮いているように見えた。

「3日で理ことわりの世界に遠当とおあてを放てるようになったんだから、適性がまったく無いというわけではないと思うんだけどね」

確かに3日で情報次元に遠当てを放てるようになったのは、並の修行者からしたら充分素晴らしいスピードだ。しかし元々エレメンタル・サイト「精霊の眼」という大きなアドバンテージがあったことを考えると、未だに的に対してサイオン弾を作用させられない現状に、達也はどうしても自分に対して肯定的な評価を下すことができなかった。

「適性の有無は結果でしか分からないところもあるし、今日できなかったことが明日突然できるようになったりするのも術法というものだから」

「しかし師匠、その“いつか”を待っていられる状況ではありません」
「確かにその通り。君の場合はどこを狙えば良いか分かるんだから、遠当てとは別の攻撃手段を編み出すのも1つの手だと思うよ」

八雲の提案に、達也は失礼だと知りつつも苦笑を漏らしてしまった。

「そんなにホイホイと新しい魔法を開発できるわけではありませんよ。行き詰まってるのは認めますが、それにしても買い被りすぎです」

「そうかな？ 術式の開発・改良における君の才能からしたら、自分から可能性を狭めてしまうのは得策じゃないと思うけどね。現に君は、珠黄泉族の子孫である超能力者への対抗魔法も短期間で開発してみせたじゃないか」

「アレは母親の精神干渉魔法に対する深い知見と、深雪という非常に高い適性を持つ魔法師の直感が噛み合ったからこそ成立したものです。あそこまでの確に敵の弱点に刺さる状況の方がむしろ珍しいですよ」

「そんなことありません、お兄様！」

謙遜ではなく本気でそう思っている達也だったが、そんな彼を深雪が強く激励する。

「お兄様なら必ずや、余人には考えも及ばないような素晴らしいアイ

デアを実現できます！ 僭越ながら、どちらも諦めてしまう必要は無いかと存じます。『術式解体』による直接攻撃を第一の目標として、新たな魔法の開発も並行して進めれば宜しいのではないのでしょうか？」

もしこれが深雪の台詞でなかったら、達也も「無茶言うな」と一蹴しただろう。

しかし最愛の妹の、期待と表現するのも不適切なほどの信頼しきった眼差しを前にしてしまつては、「不可能だ」と回答することこそが達也には不可能だった。

「――師匠、次をお願いします」

とにかく今は少しでも解決の糸口を掴むことだ、と達也は修行の続きをリクエストした。

*

*

*

トツペマ・マペットとの邂逅は、多くの者達にとって大きな影響を与えた。パラサイトにも似た性質を持つ敵との戦闘を見据えて動き出したのは達也だけではなく、あの場にながら有効打を与えられなかったエリカや幹比古や克人、更にはそれを監視カメラ越しに見ていた真由美も同じことだった。

しかし彼らと同じくその場にいたりナ、ひいてはその背後にいるUSNA軍の場合、彼らとはその動き方に少々違いが見られた。

「現代魔法とは原理の異なる魔法が存在する異世界に、そんな異世界を滅ぼすほどに強大な『魔法使い』だと？ 今まで『彼』が関わってきた事件は確かに常識では考えられないものばかりだが、今回はそれらにも増して荒唐無稽ではないかね」

「そのオペレーターの話は、どこまで信用できるのかね？ 今も吸血鬼に取り憑かれたままで、虚偽の情報で我々を混乱させようとしているのかもしれないぞ」

『吸血鬼に取り憑かれたが誰も襲っていない』というのも眉唾物だな。それが事実かどうか、どうやって証明するつもりだね？」

学校を欠席して都内にあるUSNA大使館にて開かれる査問会に赴いているリーナだが、彼女はそこで人生初とも言うべき居心地の悪さを味わっていた。大統領主催の茶会に招待されたときに女性として屈辱的なまでの徹底したボディチェックを受けたこともある彼女だが、不快感でいえばそれにも勝るレベルかもしれない。

「アンジー・シリウス少佐。そのオペレーターは、君の隣の部屋で寝起きしていたんだろう？ 1ヶ月もの間共に任務に就いていたというのに、まったく気がつかなかったのかね」

それは彼女をオペレーターとして採用したあなた方も同じだろう、とリーナは声を大にして言い返したかった。しかしそれを実際に行動に移すことはなく、彼女は大人しく俯いたまま口を閉ざすに留めている。

「しかもスターズの総隊長ともあろう君が、吸血鬼相手に手も足も出なかったそうじゃないか。そのような体たらくでは、シリウスとしての資質に疑問を抱かざるを得ないな」

「まったく、そのオペレーターといい他の吸血鬼に取り憑かれた者達といい、そのような輩に体に乗っ取られるヘマを犯すとは、祖国を守る者としての自覚が足りていないんじゃないかね。私が若い頃は、そんなことは一切無かったのだが」

「しかもそのせいでここまで被害が拡大しているとすると、もはやその責任は免れないものと考えるのが妥当だろう」

今ここにいる男達(なぜか女性は査問委員に選ばれていない)は、官僚ではあるものの「実戦」というものから縁遠くなって久しい、いわゆる「現場を知らないエリート」だ。そしてそんな奴らほど、実力主義とはいえ十代で少佐にまで上り詰めたリーナに嫉妬する傾向が強い。

そのような事情もあつてか、彼らの口から出てくるのはネチネチとした嫌味ばかりだ。そもそも責任の所在を問うのなら、事件の発端であるマイクロ・ブラックホール実験を強行させた上層部にもあるはずだ。あるいはそれを認めたくないからミカエラの証言を虚偽だと言いつ張っているのか、とリーナはそんな意地の悪いことすら考えるよう

になっていた。

と、そんな彼女に対し、査問委員の1人から更に「燃料」が投下される。

「ところで、少佐のメデイカルチェックは万全なのか？ 吸血鬼と数度にわたって接触があったのだろうか？ 少なくとも体のどこかに噛まれた痕が無いかどうか、今すぐにもチェックするべきだと思うのだが？」

今回の被害者は外敵損傷も無く絶命しており、だからこそ世間ではオカルトと持て囃されているのだが、こいつらはその程度のことも把握していないのか、とリーナはカツと頭に血を上らせた。

そして怒りのままに怒鳴り散らそうと口を開きかけ、

「それは少佐に対して、あまりにも失礼というものでしょう」

突然査問会に乱入してきた女性の声に、リーナはすんでのところ堪えることができた。

そして査問委員達はその女性を咎めようと口を開きかけ、その女性の正体に気づいたことで咄嗟に口を閉じた。

彼女の名前は、ヴァージニア・バランス大佐。ヴァージニア 乙女座バランスに天秤座なんて如何にもスターズらしいコードネームだと思いかもしれないが、れっきとした本名だ。つい先日40歳になったばかりなのだが、とてもそう見えない颯爽とした「お姉さん」である。

そんな彼女の役職は「USNA統合参謀本部情報部内部監察局第一副局長」。つまり制服組・私服組問わずに内部の不正行為に目を光らせる内部監査局のナンバー1だ。つまり最初からこの場にもおかしくない人物なのだが、他の査問委員の反応を見るに彼女は呼んでいなかったようだ。彼女の地位と役職からして、この査問に合わせて来日していることを知らないはずはないのだが。

「失礼。発言を許可していただけますか？」

一段高い場所に座る監査委員をジロリと睨みつけながらの慥懃な言葉に、彼らの誰かが思わず「あ、ああ、許可しよう」と口にした。

「ありがとうございます。なぜ私が最初からこの場に呼ばれなかった

のかにつきましては、別の機会にお訊きすることに致しまして。——今回のシリウス少佐に与えられた任務は、彼女の職務及び能力から見ても適正なものではなく、全ての責任を彼女一人に負わせるのは適当ではないと思われまます」

バランス大佐がそう言うのと、査問委員達は明らかに怯むような表情を見せた。同じ女性であるリーナを庇う発言は予想していたことだが、ここまで真正面から擁護するのは想定外だった。

ですが、とバランス大佐は発言を続けた。

「責任の有無とは別に、スターズ総隊長の地位に身を置く者が魔法戦闘で遅れを取ったという事実は、けつして見逃せるものではありません。シリウス少佐も、雪辱の機会を望んでいるはずです。——そうだな、少佐？」

「もちろんです！」

バランス大佐の問い掛けに、リーナは力強く答えた。

「本官はシリウス少佐に現行任務を継続させるべきだと考えています。それと同時に、現地の支援レベルを最高水準に引き上げることが合わせて提案致します」

「具体的には？」

「本官が東京に在駐し、彼女の支援に回ります。——また本部長からは、既に『ブリオネイク』の使用許可を頂いております」

「なっ、何だと！」

前半の提案だけでもぎわめきが起こったというのに、後半の言葉でそれがどよめきへと進化した。突然のことで動揺を隠せないのは査問委員だけでなく、話の中心にいるリーナも同じだった。いや、おそらく彼女の方が動揺が大きいだろう。

「これによって、今まで以上に専門的な支援を、現場の状況に即して臨機応変に行うことが可能となります。またシリウス少佐も万全の状態となったことで、先日のような遅れを取ることも無いでしょう。——

如何でしょうか？」

突然やって来てまともな思考の時間も与えずに怒濤の攻めを展開したバランス大佐によって、査問会はすっかりリーナを吊るし上げる

空気ではなくなっていた。

査問会を終えて部屋から出てきたリーナを出迎えたのは、何やら神妙な面持ちで背筋を伸ばして立つシルヴィアだった。気を許した友人のように接する彼女の常ならぬ表情に嫌な予感がしたりリーナだったが、彼女の口から飛び出した言葉にそれが気のせいではないことを知った。

「帰国命令!」

「はい、参謀本部より正式に受領しました。検査の結果、私が吸血鬼に感染したことが否定できないと診断されたため、本国にて精密検査を受けることとなりました」

「そんな馬鹿な! あれはウイルスの類で引き起こされる変異ではありません! 変異前の感染の有無がメデイカルチェックで判定できるはずが無い!」

「だからだよ、少佐」

憤慨するリーナに対して宥めるような声で話し掛けたのは、バランス大佐だった。

「シリウス少佐の言う通り、変異前に感染を判定する方法は今のところ無い。つまり裏を返せば、マーキュリー准尉が感染していないと断定することもできない」

「でしたら私も——」

「確かに、少佐が感染していない保証も無い。だが仮に少佐が軍と敵対した場合、その被害は甚大なものとなる。よって感染していないことが判明するまで、少佐を帰国させることはできない」

逆にシルヴィアが軍を裏切った場合、彼女のスキルを考慮すると軍の機密が漏洩する危険が生じる。故に、実際に吸血鬼に取り憑かれていたミカエラと共に帰国させることが決定したのである。

つまりバランスがリーナの任務続行と彼女への支援を申し出なければ、リーナは遠い異国の地に1人追放される恐れすらあったということだ。

「そういうわけだ。貴官の補佐には別の者を手配する」

「……いえ、それには及びません。小官と同居するということは、その者にも感染の疑いが生じるということなので」

「そうか、貴官がそう望むのならそうしよう」

「そう言い残して立ち去るバランスを、リーナとシルヴィアが敬礼で見送った。

「そうして彼女の姿が見えなくなった後、シルヴィアはリーナへと向き直る。

「総隊長、最後まで後方支援の任務を果たすことができず、申し訳ございません」

「シルヴィ、そんな堅苦しい喋り方は止めてください。今まで通りでお願いします」

「私の目が無いからって、ソファーで寝たりレトルトの食事で済ませたりしないように。それと部屋の掃除は定期的にして、アクション仮面のグッズは買いすぎないように——」

「あなたは私のお母さんですか!? 1人暮らしくらい平気ですから！」

声を荒らげるリーナに、シルヴィアがフツと自然な笑みを漏らした。

「私達のシリウスは、異界の魔法使いにやられるほど脆弱な存在ではないと信じています。——だから早く任務を終えて本部に帰ってきてください、総隊長殿」

「もちろんです」

瞳に笑みを残して敬礼するシルヴィアに、リーナは自信に溢れた様子で答礼した。

*

*

*

自分達が住む街でどのような事件が起きようと、それが身内に被害を及ぼさない限りは他人事でしかない。吸血鬼の魔の手がすぐそこまで迫っていたことなど気づく素振りも無く、ほとんどの学生達は普

段と同じ日常を過ごしている。

しかしそんな中でも、確実に変化していることはあった。

例えば、昼休みの食堂にて同じテーブルで昼食を共にする達也ら1年生グループ。入学早々に知り合いとなり、1学期末頃から幹比古も加わるようになった彼らだが、今年頭から交換留学として雫が離脱、1月中旬頃から吸血鬼に襲われ入院したレオが離脱、という具合に徐々に顔触れが減っていった。

そして先週からは、そのグループの中心的存在と言っても良いしんのすけが顔を見せなくなっていた。いや、学校には出席しているのですがその表現は不適切かもしれないが、達也らE組の面々はおろか同じクラスの深雪やほのかとも会話を交わしていない。

「しんのすけの様子はどうだ?」

「相変わらず気落ちしているみたいで、授業中も心ここにあらずといった感じで溜息ばかり吐いています。休み時間も自分の席で突っ伏してばかりですし……」

「普段明るいしんちゃんが暗いせいか、A組全体も何だか暗い感じになっちゃって……」

達也の問い掛けに深雪が答え、ほのかが付加えたその内容に、他の面々はこの場にはいないしんのすけに同情するような表情で頷いていた。

ちなみに先日の戦闘に参加しなかったのはこの場ではほのかだけだが、彼女に対してもミカエラが話していたのと同じ内容を伝えてある。しんのすけの特異性に関してあまり吹聴すべきでないのは確かだが、レオが襲われた現状からして彼女も同じように巻き込まれる可能性がある以上、情報の共有を優先すべきだと達也が判断したためである。

「トツペマ、だったっけ? 大丈夫かな……?」

「俺が放った魔法は奴を吹き飛ばしたただけで倒したわけじゃない。とはいえ暴走状態を鎮めるためにある程度は弱らせる必要があったから、しばらくは人間に取り憑いて俺達に接触するような芸当はできないだろう」

「しんちゃんからしたら、気が気じゃないでしょうね……」

美月の言葉を最後に、そのテーブルを重苦しい沈黙が包み込んだ。しんのすけにレオと、このグループの中で積極的に場を盛り上げる面々が立て続けにいなくなってしまうことで、一旦雰囲気が悪くなるとなかなかそれが戻らなくなってしまったこと、一旦雰囲気が悪くなるとうなると、積極的に場を盛り上げる面々”の最後の1人にその期待が掛かってくる。

そんな空気を敏感に感じ取ったわけではないだろうが、その最後の1人——エリカが、パンツと大きく手を叩いて皆の視線を集めた。

「こうなったら、アタシ達の手でしんちゃんに元気になってもらわないとね!」

「下手に突くと、余計にこじれることにならないか?」

「時間が解決してくれる問題ならそうかもかもしれないけど、今回に限ってはそういうモンじゃないでしょ? とはいえ、ストレートに元気出させて言っても意味が無いのは事実。そこで——」

エリカはそこで勿体ぶるように言葉を区切り、そして口を開いた。

「2月14日・バレンタインデーに、みんなでチョコを持ち寄ってパーティーを開きましょう!」

第三次世界大戦を境に文化の風潮がガラツと変わった印象の強い日本だが、実際には廃れずに残っている文化も多く存在しており、バレンタインデーもその1つである。

ここで『聖バレンタイン・デーは本来そんな軽薄なものではなく』だの『チョコをプレゼントするなどお菓子会社の陰謀が』などと力説したところで意味は無い。若者はそんなことを百も承知で自ら踊っているのであり、エリカも丁度良く「口実」が転がり込んできたから利用するだけなのだから。

しかし、そうは知らないほのかが呑気な声でエリカに話し掛ける。「へえ、エリカってそういうイベントに興味無いと思ってたから少し意外かも」

「いや、別にアタシだって積極的に参加してるわけじゃないわよ? まあ、無関係ってわけでもないけど……」

首を傾げる女性陣に、それを察したエリカが説明を加える。

「ウチの道場の男共がね、毎年うるさいのよ。あげないと拗ねちゃうような奴が何人もいるし、そういうのに限って腕が立つから無視もできなしいし……」

「欲しい人にだけあげるとってわけにはいかないの？」

「そうすると『不公平だー！』って騒ぎ出すお調子者がいるのよ。普段は全然纏まらないくせに、こういうときだけ一致団結しちゃってさあ。一応、門下生との親睦のため〃って名目で親からお金が出るから、女の子のお弟子さんと一緒に買い出しに行くんだけど……。それだけでも面倒臭くって、その度に『この世からバレンタインなんて無くなれ』って思ってるわ」

「でも今回は、わざわざパーティーまで開くつもりなのね」

「そりゃ、他ならぬしんちゃんのためだもの」

深雪の言葉に平然と即答するエリカに、達也は思わず顔も名前も知らない千葉家の門下生男子に同情していた。ちなみに深雪の声色にはほんの少しだけからかいの意図が込められていたのだが、エリカは気づいているのかいないのか、特にそれに対して反応を示すことは無かった。

その代わり、エリカはニヤリと口角を上げて幹比古へと視線を向ける。

「その点、ミキの所は良いよねえ。お弟子さんは女性の方が多いし、選り取り見取りでしょ？」

「えっ……？　そうなんですか……？」

「そ、そんなこと無いよー」

エリカの台詞そのものよりも、その後続いた美月のツツコミの方がダメージが大きかったらしく、幹比古はむしろ美月に視線を向けて声高に否定した。

何とか彼女に納得してもらわなければ、という焦りがあったのか、幹比古は頭に思い浮かんだことを反射的に口にする。

「だいたい、そんな浮ついた気持ちで修業に臨むなんてとんでもないよ」

「言つてくれるわね、ミキ。ウチの道場が浮ついでるって言いたいわけ？」

「いや、そういう意味で言つたんじゃ……」

ジトリと据わった眼差しに、ぐ丁寧に拳をポキポキと鳴らすジエスチャアを加えるエリカに、幹比古は冷や汗交じりにたどたどしい弁明を試みる。

それを苦笑いで眺めていた達也だったが、そろそろ幹比古が不憫に感じてくるタイミングでエリカに問い掛ける。

「パーティーというと、どこかの会場を借りるのか？」

「うーん、そうは言ってもクリスマスと違って昼間にやるつもりだから、アイネブリーゼを貸切るのは申し訳ないしねえ……」

「あら？ 誰かの誕生日会でもあるのかしら？」

と、唐突に聞こえてきたその声にその場にいた全員が振り向き、そして大なり小なり驚きの表情を浮かべた。

「ぐ、ぐ無沙汰してます、七草会長」

「柴田さん、元会長だからね」

おそらく最も驚いているであろう美月がうつかり言い慣れた役職名で呼んでしまい、達也たちに声を掛けた張本人・真由美は笑顔でそれを訂正する。

自由登校となった三年生ではあるが、生徒会長として深く学校に関わってきた真由美が学校に来ること自体はさほど珍しいことではない。しかしそんな彼女が昼時の食堂に顔を出し、しかも顔馴染みとはいえ1年生のグループに話し掛けるとなれば多少の驚きも無理はないだろう。

「誕生日会ではなく、最近元気の無いしんのすけを元気付けてやれないか、と考えておりました」

「成程、そのための集まりってわけね。时期的に考えれば、バレンタインデーを口実にする感じかしら？」

「ぐ明察です」

予想が当たって喜びを露わにする真由美とは対照的に、発案者であるエリカは不機嫌そうに唇を尖らせていた。自分のアイデアをこう

も簡単に言い当てられたからだろうか。

「会場に困ってるなら、学校の空き教室を使ったら？」

「こういったことに許可が下りますか？」

「周りに迷惑を掛けなくて後片付けをちゃんとやってもらえるなら、そうそう許可が下りないなんてことは無いわよ。いざとなったら、私が口添えしてあげても良いし」

「たまたま聞いただけのイベントに随分と肩入れするな、と達也は思ったが、彼の疑問は真由美の次の台詞で氷解する。

「その代わりというわけじゃないけど、私もそれに参加しても良いかしら？ しんちゃんは私の中でも特に印象深い後輩だし、もうすぐ卒業するって思うと何だか寂しくなっちゃって……」

「そういうことでしたら……、はい、構いませんよ」

「ザツと一通り見渡しても特に反対を訴えてくる者もいなかったの、達也は了承の返事をした。先程不機嫌そうだったエリカは若干迷いを見せている様子だったが、特に反論してこないのも大丈夫だろう。」

「それでは、詳細が決まったらこちらから連絡しますのよ」

「分かったわ。もしかしたら参加者が増えるかもしれないから、そのときは達也くんにも連絡する感じで大丈夫かしら？」

「はい、ではそれで」

「ふふふ、14日が楽しみねえ。どんなチョコを作ろうかしらあ」

「上機嫌のオーラを振り撒きながら、真由美はその場を去っていった。」

「何となくそれを見送っていた達也の耳に、幹比古の独り言にも似た台詞が届く。」

「何だか、想定よりも大事になりそうな予感だね……」

「達也だけでなくその場の全員が、それを否定することができなかった。」

第86話 「バレンタイン・パーティーだゾ」

2月14日。言わずと知れた「ふんどしの日」であり、「煮干しの日」でもある。また「血栓予防月間」の最中でもあるし、「建設産業の労働時間短縮推進キャンペーン」という非常に重要な取り組みを行っている最中でもある。

あと、ついでに付け足すならば「バレンタインデー」でもある。

「先生にとつては異教の風習かと思いますが、ぜひお受け取りください。先生には兄がいつもお世話になっておりますので」

そんな2月14日の早朝。達也と深雪の姿は、八雲の寺にあった。達也は日常的に行っている鍛錬のためであるが、深雪の場合は昨日の内に作ったチョコを八雲に渡すためである。

「いやいや、異教の風習であろうとも、良い物はどんどん取り入れていかなければ」

そして八雲は「にんまり」といった笑顔を浮かべながら、深雪からのチョコを受け取った。ちなみに深雪が彼にチョコを渡したのはこれで3回目であり、八雲がこの台詞を言ったのも同じく3回目である。

そしてそれに気づいたのは、深雪の隣で見ていた達也だけでなく、遠巻きにそれを眺めていた八雲の弟子達もだった。

「師匠、皆が見ていますよ」

「良いんじゃないかな？ 修行の励みにもなるし」

「色欲は戒律に触れるのでは？」

「肉欲に結びつかなければ構わないんだよ」

口では飄々とした感じで受け答えているが、顔は相変わらずだらしなくにやけたままだった。処置無しだな、と達也が軽く肩を竦めるのを、八雲の弟子達が無言で同意した。

と、八雲がそのだらしない笑みを（注視しなければ分からないほどに若干）引き締めて、達也へと視線を向けた。

「そういえば達也くん、今日の放課後に「彼」を元気づけるためのパーティーを開くんだろうか？」

「……はい、そうですが」

八雲にそれを報告した記憶は達也に無いが、いちいち「なぜそれを知っているのか」と質問するのも疲れるため、それに触れることなく端的な答えを返した。

「それによつて、彼が元気になつてくれると良いね。一個人としてもそれ以外の立場からしても、彼が元気になつてくれるに越したことは無い」

「……しんのすけのメンタルが、それほどまでに影響があるということですね」

「そういうとき。——とはいえ、それは大人の、それも『彼』とは無関係の者達の都合だ。君達はそんな余計なことを考えず、ただパーティーを楽しめば良いと思うよ」

はたしてその『大人』という言葉には、どこまでの立場の人間が関わってくるのか。

「はい、そうさせてもらいます」

ある種の開き直りとも取れる心持ちで、達也はそう返事をした。

*

*

*

時刻表に則つて運行する多人数輸送型電車から、時間を気にせずに乗れるキャビネット小型電車に転換してから久しい。様々な点で便利になったキャビネットだが、『到着駅で待ち合わせをする』という点では少し不便になった。渋滞の概念が無いために到着時刻が大幅に遅れることは無いが、レール内での法定速度が無いために予定より早く到着することは充分に有り得るからである。

なので最初の頃は駅で合流してから学校へ向かっていた達也たちも、今ではすっかり教室で顔を合わせるようになっていた。

「よつ、達也」

1年E組の教室に足を踏み入れて自分の席へと歩いていった達也は、その近くに見知った顔——しかしここ最近は学校で見なかつた顔に気づいて、軽く顔を挙げながら彼に近づいていった。

「よう、レオ。昨日退院したばかりだっていうのに、随分と元気じゃないか」

「体自体はとっくに元通りだったからな。医者がなかなか退院させてくれなかっただけで」

レオはそう言っただけであっけらかんと笑ってみせるが、当初の診断では少なくとも後1ヶ月は病院暮らしだったはずなのを考えると、むしろ彼の回復力が（担当医が懐疑的になるほどの）常識外れだと見るのが自然だろう。

しかし検査で異常は見られず、本人も退院を強く希望している以上はいつまでも病院に留め置くことはできないということで、今日から復帰と相成ったのである。

「おはよう、2人共。レオもすっかり元通りだね」

「おはよう。レオくんは今日から登校なんだね。元気になって良かったです」

久し振りに学校で顔を合わせる友人の姿に、揃って教室に入ってきた幹比古と美月に挨拶を返した。『揃って』という辺りで邪推する者もいるかもしれないが、達也はともかくレオも単独ではそのような野次馬根性を発揮することはないため、この場でそれが追及されることは無かった。

そしてそんな野次馬根性の持ち主であるエリカも、本日の矛先はその2人ではなかったようで、

「あらレオ、随分と急いで退院したのね。そんなにチョコが欲しかったの？」

「何だとエリカ！」

「あらあら、そんなに慌てるなんて、もしかして凶星？」

椅子を蹴る勢いで立ち上がって反論してきたレオの姿は、確かに意地の悪い見方をすれば凶星なのを誤魔化しているように見えただろう。本人もそれを自覚したのか、レオは「ぐぬぬ……」と悔しそうに歯噛みしながら腰を下ろしてそれ以上の反論は止めた。

「今日は遅かったんだな、エリカ」

「放課後」用のチョコを生徒会室の冷蔵庫に入れてきたの。――

まあ、ウチの男共の相手してたのもあるけど」

うんざりといった感じに溜息を吐いて席に着くエリカに、事情を知らないレオを除く面々が納得顔で頷いた。

「今までは既製品だったけど、今回はしんちゃんの手で手作りしたのを渡したのよ。そしたら手作りのチョコは初めてだとか言つて大騒ぎしちゃつてさ」

「それでも喜んでくれたんだから、良かったんじゃないの?」

「喜び方が問題なのよ。何か『自分に気があるんじゃないか』とか言ってくる馬鹿も出てきたし。まあ、そういう馬鹿は念入りに叩き潰してやったから良いけどね」

ニカツと眩しい笑顔で物騒なことを口にするエリカに、レオと幹比古と美月は若干引いたように苦笑いを浮かべ、達也は常の無表情で小さく頷いた。

そんな空気を変えるためかどうかは知らないが、レオがここで「そういうや」と話題を変えた。

「今日の放課後にやるパーティーだけど、俺はまだ詳しく聞いてねえんだよな。どういう手筈になってるんだ? というか、まさか生徒会室でやるのか?」

「いや、会場は風紀委員本部だ。七草先輩が色々と声を掛けたからか参加者が結構な人数になってな、チョコの保管場所とかも考えるとそこが一番妥当だったんだ」

「生徒会室と風紀委員本部って、専用の階段で繋がってるでしょ?」

だからチョコとか会場の飾りとかは生徒会室に隠しておいて、頃合いを見計らつて階段から会場に運び込むって寸法よ」

達也の説明とエリカの補足に、レオも「成程な」と納得顔で頷いた。「でもよ、他の風紀委員にしたら迷惑じゃないか?」

「それは大丈夫。今日の巡回当番は、達也くんとしんちゃんなのよ。元々先輩方に予定があつたみたいで、1年生の2人に体よく押しつけられていたのを利用させてもらったってわけ」

「その辺も抜かりなしってわけか。——ん? でも今回のパーティーって、本人にはサプライズなんだろう? 本部に立ち寄つてから

巡回当番に出るんだとしたら、会場の設営とかどうするんだ？」

レオがその質問をした瞬間、美月は申し訳なさそうな表情で、エリカは悪戯を企むような笑顔で、そして幹比古は運命を共にする戦友への同情的な表情で、それぞれレオを見つめた。

そしてその表情を保ったまま、エリカが問い掛ける。

「ねえレオ、自分が少し前までいた部屋が戻ってきたときにパーティー会場になっていた、とか最高のサプライズにならない？」

「はっ？……まさか？」

「しんちゃん達が達也くんと一緒に本部を出て、学校を巡回して戻ってくるまでの間に、レオ達男性陣で生徒会からチョコとかを持ってきて会場の設営をしてほしいのよ」

「やっぱり、そういうことかよ……！」

「達也くんもできるだけ時間は稼いでくれるけど限界はあるから、とにかくスピード勝負よ！特にレオは材料の買い出しとかしてないんだから、その分他の人達よりも頑張らないと！」

「仕方ねえだろ！俺、入院してたんだぞ!？」

「何だか2人の会話を聞いてると、やっとな元の日常が戻ってきた感じがしますね」

「からかわれているレオからしたら、堪ったものじゃないだろうけどね」

美月と幹比古の遣り取りに、達也は両方の言葉に対して無言の肯定を返した。

*

*

*

朝から浮ついた空気に包まれていた本日の一高だが、それでも生徒達は自粛していたようで放課後になって一気にそれが爆発した。校内のあちこちで甘酸っぱい光景が繰り広げられ、祭りに乗れない者からしたら何とも居心地の悪い雰囲気となっている。

今日ばかりは一高生も『魔法師の卵』ではなく『高校生』として青春を謳歌しているのか、普段のように風紀委員が出張するような喧嘩

は起こっていない。その点は達也にとって楽なのだが、本日の巡回は普段の業務とは別にミッションが課せられているためけつして気を抜くことはできない。

「この辺りは問題無いな、次は闘技場を見るところか」

「……ほい」

達也の呼び掛けに、しんのすけは気の抜けた声で返事をした。そうして目的地に向かっているときも、一通り闘技場を見て回っているときも、普段ならば一面花畑にする勢いで雑談に花を咲かせるしんのすけが一切口を開かないため、2人の間には重苦しい沈黙が広がっている。

本来そういった沈黙を気にする質ではない達也だが、その相手が生身のすけだと話が別だ。とりあえず何か話題を振るか、と口を開きかける達也だったが、自分よりも少し前を歩くしんのすけがこちらに呼び掛ける方が早かった。

「達也くん、あれから吸血鬼ってどうなったの？」

「……はつきり言つて、膠着状態といったところだな。マスコミにも情報が拳がってこない状況だ。とはいえ例年よりも行方不明者の数が多いと七草先輩が話してたから、事態が沈静化しているというよりは相手の動きが巧妙化していると解釈すべきだろう」

「……そう」

しんのすけは短くそう答えたきり、再び黙り込んでしまった。

と、ここで達也の携帯端末が小さく震えた。受信したメールにサツと目を通し、表情を一切変えずにしんのすけの背中へと呼び掛ける。

「しんのすけ、そろそろ戻ろう」

「……ほい」

そうして風紀委員本部に戻る間も、2人の間には一切会話が無い。とぼとぼ、という擬態語でも付きそうな足取りで歩くしんのすけに対し、達也はさりげなく歩幅を小さくするなどして彼の数歩後ろという位置をキープする。

そうして本部のドアの前に辿り着くと、2人の位置関係もあってか自然としんのすけがドアを開ける役目となった。生徒用のIDカー

ドをドア横の機械にかざし、ガチャンとロックが外れる音が辺りに響く。

そうしてしんのすけがドアに手を掛け、それを開けた。

「ハッピーバレンタインっ！」

「うおっ！ な、何だ!？」

男女混合のユニゾンで発せられた呼び掛けに、パンパンと小気味良い音を鳴らすクラッカー。まるで誰かの誕生日会のような光景に出くわしたしんのすけは、今日一番の大きなリアクションで驚きを露わにした。

つい1時間ほど前に2人が出て行った風紀委員本部は、その僅かな時間で「パーティー会場」と呼ぶに相応しい光景と化していた。部屋を大半を占領していた机や応接セットなどは壁際に追いやられ、代わりに簡易的な造りをした長テーブルが幾つも並べられていた。壁にはそれこそ小学生の誕生日会などで見るような、色鮮やかな薄い紙を折って作った花や、折り紙を細く切って鎖のように繋いだアーチ、そして壁に貼ってすぐ剥がせるステッカーなどが飾られている。

しかしそれ以上にしんのすけの目を惹くのは、何といてもテーブルの上に所狭しと並べられたチョコプレートの数々だろう。定番のハート形チョコはもちろん、チョコチップクッキーやチョコのカップケーキ、大皿いっぱいになべられたトリュフチョコや粒チョコといった一口サイズのお菓子から、見るからにチョコがふんだんに使われたザツハトルテ、粉砂糖が雪のように鮮やかなガトーショコラといった切り分けるタイプの物まで取り揃えられている。その豊富なラインナップは、まるで即席のチョコ専門店かのような装いだ。

「おおっ！ チョコがいっぱいだゾ！」

「フフフ。とりあえずはドッキリ大成功、といったところかしら？」

クラッカーを握り締めたまま悪戯が成功したかのように笑みを浮かべるのは、一高生からして見れば「錚々たる」という形容が大きいではない顔触れだった。

1年生からは、しんのすけとよく一緒に行動する深雪・ほのか・レオ・エリカ・幹比古・美月は当然として、同じクラスからはリーナ、違

うクラスからは英美・スバル・紅葉あかはが参加している。リーナは言わずもがな、後者の3人も優秀な成績と高水準のルックスで将来的に第一高校の中心的存在になると目される注目株だ。

2年生からは、あずさ・五十里・花音・桐原・紗耶香の5人。いずれもしんのすけと深い関わりのある先輩であり、特に後者2人は彼に對して色々と恩義があるため今回の参加と相成った。

そして3年生からは、真由美・摩利・克人・鈴音という懐かしさすら感じる顔触れだ。間違いなく3年生の中心人物である4人がこの時期に揃い踏みになることも驚きだし、何より克人がこのような場に参加するということが自体が驚きである。

「そっかあ。今日はバレンタインデーだったつけ。コツテリ忘れてたゾ」

「コツテリじゃなくて、すっかりね」

「これだけ喜んでくれりゃ、必死になって用意した甲斐もあったってもんだぜ」

「その階段を何往復したかも憶えてないほどに走り回ったからな……」

おそらく特に動き回ったのであろうレオ・桐原・幹比古が、疲れを隠せない弱々しい笑みを浮かべてそう呟いた。

しかししんのすけの興味は彼らの表情ではなく、既にテーブルの上に並べられた数々のチョコに向けられていた。そしてその中で彼が真っ先に駆け寄ったのは、おそらく一番大きいからであろうザッハトルテとガトーショコラだった。

そしてそれを用意したのだろう3人の肩が、ピクリと跳ねた。

「それは僕達が用意したんだ。しんちゃんのお眼鏡に適ったようですよ」

「おおつ、スバルちゃん。エイミイちゃんとサクラちゃんも」

「しんちゃんとは九校戦で一緒になったし、夏休みするときにも個人的にお世話になったからね。そのお礼も兼ねて、ってヤツだよ」

そう言っただけと笑った英美の表情には、特に恥じらった様子はない。元々気後れしない性格であり、プラス男女関係に天真爛漫など

ころがあるためだろう。スバルと紅葉も、彼女の付き添いという側面が強いためか平然とした表情を保っている。

「ほうほう、これがエイミイちゃん達のつてことは、この山盛りの粒チョコは花音ちゃんかな？」

「えっ!?.. なんて分かったの、しんちゃん!?」

「花音ちゃんって量で愛情表現するタイプっばいし、五十里くんにも大きな箱に粒チョコとか詰めてプレゼントしてそうだなって思って」「凄いいねしんちゃん、まさにその通りだよ」

啞然とした表情で口をパクパクさせる花音に代わり、彼女のフィアンセである五十里が苦笑い混じりにしんのすけの予想を肯定した。

そしてそんな2人の脇を擦り抜けて、紗耶香が（若干緊張した面持ちで）しんのすけへと近づいていく。

「それじゃしんちゃん、アタシが作ったのはどれか分かる？」

「うーん、そうですねあ……。紗耶香ちゃんが作ったのは……。このクッキーとか？」

「さすがしんちゃん、正解だよ。——しんちゃんには春のことも含めて色々とお世話になったし、少しでも感謝の気持ちを形にできたらな、って思ってた」

「ほうほう。——んで、桐原くんの本命チョコには何を作ったの？」

「へっ!?」

「お、おい野原！ 今は俺関係ねえだろ！」

分かりやすく顔を紅くして声を荒らげる桐原に、他のメンバー（特に女性陣）がほっこりとした笑顔を浮かべる。ちなみに2人に関して は、昼休みに二科生にとつて敷居の高い一科生の教室に乗り込んで顔を背けながらリボンの掛かった赤い箱を差し出す紗耶香と、今にも小躍りしそうな雰囲気醸しながらそれを受け取る桐原の姿が多くの生徒に目撃されていた。

その後も、しんのすけがテーブルの菓子指差ししては作った人物を挙げる流れが続いた。カップケーキはほのかと美月、トリュフチョコは深雪とエリカ。特に後者に関しては、一度に大量に作れるからエリカが門下生の分も纏めて作ったことまで言い当てられ、本人は気恥ず

かしいやら何やらで複雑な表情を浮かべていたのが印象的だった。

そしてハート形チョコが摩利と鈴音のお手製であることも、しんのすけは見事に言い当てた。理由は『バレンタインといえばハートだろうという真由美と鈴音の言葉に、最初は抵抗していた摩利も最終的に言い包められたため』というものであり、摩利が「アタシ達以外誰もハートなんて無いじゃないか!」と2人に詰め寄る場面もあった。

と、テーブルの上に並ぶ菓子はこれで全部となった。

「あれっ? リーナちゃんと真由美ちゃんは、何も作ってこなかったの?」

「リーナは声を掛けるタイミングがギリギリになっちゃってさ、とりあえず参加しなかったって呼び掛けただけなのよ」

「そうなの。リーナったら、ここ最近、お家の用事^{ウチ}で学校を休みがちだったから」

「……何だかミユキの言い方に含みがあるけど、アタシだって手ぶらで来たわけじゃないのよ」

リーナはそう言うのと、この部屋に来たときに壁際に追いやった自身の荷物へと駆け寄り、見慣れない肩提げバッグを手に戻ってきた。勝ち誇ったようなドヤ顔付きで。

そうしてバッグから取り出したのは、

「はいシンちゃん、ロイヤル・プレジデント・チョコビよ。たくさん買ってきたから、好きなだけ貰ってちょうだい」

「おおっ! やったあ!」

片手で掴むのも苦労しそうな大きいパッケージに、しんのすけは目を大きく見開いて飛びつく勢いでそれを手に取った。

「その菓子って、しんのすけが好きなヤツだっけか」

「そう。その辺で普通に売ってるヤツだけど、高価だから普段なかなか食べないかなって思ってた」

「やつほーい! ありがとう、リーナちゃん!」

「ちよつとしんちゃん! アタシ達るときよりも随分リアクション大きくない!」

エリカのツツコミを聞いているのかいないのか、しんのすけは実に

嬉しそうな表情でチョコビに頬擦りしていた。何だか自分達が前座にされたような気がする、とエリカの鋭い視線がリーナへと向けられ、それを敏感に察したリーナがビクンと肩を跳ねさせる。

と、ここまで無言を貫いていた真由美が、満面の笑みと共に口を開いた。

「ふふふ……、本当ならパーティーの中盤辺りで出す予定だったけど、最初にチョココを見せる流れになったのなら仕方ないわね……」

「どうした真由美、気持ち悪い笑い声をあげて」

気の置けない仲であるが故の遠慮無い摩利の言葉を無視して、真由美は自身の鞆から綺麗にラッピングされた箱を取り出した。厚紙でできたそれは内側にビニール加工が施されており、チョココ自作派の間では「御用達」と呼べるほどに多用される代物だ。

全員の視線を集める中、真由美がその箱の蓋を開けた。

「……何だ？ 普通のチョココか？」

「一見、溶かしてダイス状に固めただけに見えますが」

下級生の会話に割って入ってまで今回のパーティーへの参加を希望した彼女が満を持して用意したチョココ、にしては何とも味気ない外見をしたそれに、摩利も鈴音もガツカリしたのを隠せない落胆した表情でそう呟く。

しかし真由美は、むしろその言葉を待っていたかのようにニンマリとその笑みを深くした。

そして高らかに、こう宣言した。

「只今より！ 『第1回！ ロシアン・バレンタインチョコ・ルーレット』を開催します！」

「——はっ。」

全員の気持ちを端的に代弁した摩利の声が、風紀委員本部に広がった。

「ここにあるのは一見普通の美味しいチョココ！ だけどこの中の幾つかは、とくっても苦いチョココだから注意してね！」

「ほうほう、ちなみにどれくらい苦いの？」

「ベースのチョココはカカオ95%で糖類ゼロ、さらには駄目押しとし

てエスプレッソパウダーをふんだんに盛り込んでるわ！」

「本当にどうした真由美、受験ノイローゼで頭がおかしくなったか？」
辛辣な言葉をぶつける摩利をとことん無視し、真由美は本日の主役であるしんのすけへとその箱を差し出した。どうやら早速運試しが行われるようで、彼がノリノリでチョコを手を取ったのを皮切りに、その場にいる全員が有無を言わず参加する流れとなってしまう。ちなみに仕掛け人の真由美は、最後に残った1個を食べることになる。

ちなみに達也がチョコを手取る際に半分本気で観察してみたが、どれも見た目に違いはなく、エスプレッソパウダーの苦い匂いが全てのチョコにこびりついているせいで嗅覚でも区別が付かなかった。指で摘まめるサイズにも拘わらずズッシリと重量を感じるほどに中身が詰まっているのも余計に恐怖心を煽らせ、ほのかや美月などは小刻みに肩を震わせるほどだった。

「ちなみに真由美、まさか全部苦いチョコでしたなんてオチじゃないよな？」

「そんな冷めるようなことしないわよ。苦いのは6個だけだから」
チョコは全部で参加者と同じ21個なので、苦いのが当たる確率は3割弱。生憎とこういった場に参加した経験の無い達也には、はたしてその確率が適切なものなのか判断が付かなかった。そもそもロシアンルーレット自体が不適切なのでは、と言われればそれまでなのだが。

「それじゃみんな、一齐に口の中に入れて！　せーの！」

真由美の掛け声と共に、全員が一齐に口の中にチョコを放り込んだ。

そして、

「ぐえああっ！」

「ふぐうっ！」

「があああああ！」

真っ先に反応したのが、レオ・幹比古・桐原の男子3人だった。3人ともがその場に崩れ落ち、咄嗟にチョコを吐き出そうとして懸命に

堪える、しかし飲み込むこともできずに背中を波打たせる勢いで嘔吐えずく、というのを何回も繰り返す。

「アツハツハツ！ レオ、見事に当てたじゃない！」

「幹比古くん、大丈夫ですか!？」

「桐原くん!?! ほらっ、お水よ!」

どうやらセーフらしいエリカが悲惨なことになってるレオを指差して笑い、美月がただただ呆然と幹比古を見遣り、そして紗耶香がペットボトルの水を甲斐甲斐しく桐原に差し出す中、

「……どうやら俺のも、苦いヤツだったらしいな」

「よく食えるな十文字。アイツら、のた打ち回ってるぞ」

平然とした表情を崩さないまま口をモゴモゴと動かす克人に、摩利が信じられないものを見るかのような表情を彼へと向け、

「お兄様、先程から黙ったままですが、もしかして当たりましたか？」

「……………」

「お兄様？ あの、大丈夫ですか？」

「……………」

「お兄様？ おに、お兄様!？」

口を手で押さえたままやがて微動だにしなくなった達也に、深雪がまるで今生の別れかのような悲惨な声をあげ、

「おごえええあああああ!」

ロシアンルーレットの主権者である真由美が、最後の最後に残った“それ”を見事に引き当て、見目麗しい女子とは思えない声をあげて膝から崩れ落ちた。

「ま、真由美さん!?! 大丈夫ですか!？」

「自分で仕掛けた罠に自分で嵌っていたら世話無いですね」

「見ろ、しんちゃん。アレが“エルフィン・スナイパー”だの“妖精姫”だの呼ばれ、十師族の中でも特に名高い七草家のご令嬢の姿だ」

「真由美ちゃん、大学生になったら一気に開放的になって、サークル活動とか言って飲み会しまくるパリピ系とかになってそうだよね」

苦悶の表情で床に四つん這いになる真由美を本気で心配しているのはあずさだけで、鈴音と摩利は白けた目を彼女に向け、しんのすけ

はやけに具体的な未来予想を口にしながら携帯端末のカメラを彼女に向けていた。

「ちょ、ちよつと待ってしんちゃん！ 何を撮ってるの!?!」

「いやあ、せつかくの楽しい思い出を形に残しておこうと思って」

「お願いしんちゃん、止めて！ 私が悪かったから!」

今にも泣きそうな表情で追い掛ける真由美に、ヘラヘラと笑いながら後ろ向きで器用に逃げる（もちろん携帯端末はそのままだ）しんのすけ。

そんな彼女のはっちゃけた姿に、初めて見たのであろう紗耶香や英美ら下級生は唾然とした表情を浮かべ、逆に彼女の本性を知る克人や鈴音は呆れ果てた様子でそれを眺めている。

そんな中リーナが、チョコのダメージから回復した達也の傍へと歩み寄る。

「マユミ先輩って、とてもユーモアがある人なのね」

「……ユーモア、まあ、オブラートに包んだ言い方をするとそうなるな」

「あら、結果的にしんちゃんが笑顔になったんだから良いじゃない」

「なあ達也、そろそろ他のチョコを食べても良いか？ 早いところ、口の中の苦みを消し去りたいんだけど」

「アタシもサンセー！ 特にこのザツハトルテとか美味しそうじゃない!」

正式なパーティーとは違って特に挨拶が行われることもなく、真由美としんのすけの追いかけてこが行われる中、他の参加者達はチョコの並んだテーブルに群がっていった。

或る意味こっちの方が「らしい」か、と達也も苦笑い混じりでテーブルへと向かっていった。

*

*

*

風紀委員本部から発せられる鮮烈な感情の波動が、敷地の片隅に建てられたガレージへと伝播する。もちろんそれは物理的な影響を及

ぼすものではなく、この世界に住まう大部分の生物は感知のしようもない代物だ。

しかし、仮にそういった波動に敏感な存在がいるとしたらどうだろうか。

たとえば、心を持たぬ人形の中で微睡んでいた“それ”などは、鮮烈な感情の波動にどのような反応を示すだろうか。

*

*

*

パーティーで用意された菓子はしんのすけをメインに用意されたものだが、他の参加者に向けた義理チョコ・友チョコの側面もあった。故にパーティーが終わった後はそれぞれに余った菓子が配られ、大量のチョコを抱えながら帰路に就く姿が見受けられた。

当然達也もそうだったのだが、家に到着して玄関で靴を脱ぐや否や、深雪がチョコの入った袋を奪い取ってそのまま冷蔵庫へとしまい込んだ。経緯が経緯なのでチョコを贈った相手に嫉妬したとは思えないが、それでも彼女の笑顔は自身の感情を読ませない仮面のように達也には思えた。

「お兄様、すぐに夕食の準備に取り掛かりますので、しばらく部屋でお待ちください」

そんな綺麗な笑顔のまま、深雪が達也にそう言い放った。意識すれば『呼ばれるまで見に来るな』という彼女の言葉に、達也は去年までと違う展開に一抹の不安を覚えながらも大人しく自室に籠もっていた。

そうして1人になって思い出すのは、パーティーが終わって帰路に就くまでの間の出来事。

実はそのとき、達也はほのかに「少し時間を頂けませんか」と誘われ、そして可愛らしい包装紙に包まれたチョコレートを受け取っていた。如何にも甘酸っぱい青春の1ページであるが、それを思い返すには彼の表情は苦々しげに歪められている。

——俺は、ほのかの心を弄んでしまった。

ほのかからチョコを受け取った達也は、そのお返し（来月とは別口で）として、あらかじめ用意してあった純度の高い水晶をあしらった髪飾りを手渡した。愛しの人物からの思わぬプレゼントに、ほのかは喜び舞い上がっていたのをよく憶えている。

それこそ、達也の「迷惑」通りに。

その髪飾りは、深雪が選んだものだった。それだけなら「嘘も方便」で通るが、そもそも達也が贈り物をした理由というのが、そうすれば彼女の意識がその事実で飽和されて「気持ち」を表す言葉が浮かぶ余地も無くなる、と予想したからだ。

妹に対する情愛以外の情動を廃された達也では、ほのかの「気持ち」に応えてあげられない。それを少しでも誤魔化すための姑息な計略に、あろう事か妹も巻き込んでしまった。達也の心中は先程から、それに対する自己嫌悪に充ち満ちていた。

と、深雪の呼び掛けによって、達也の思考は現実世界に帰還した。チラリと時計を見ると、家に着いてから1時間ほどが経過している。そうしてダイニングに下りた達也は、

「……成程、こう来たか」

目の前に広がる光景に、達也は思わず眩いていた。

ダイニングに充滿する甘い匂いは、先程までのパーティーでも充分すぎるほどに嗅いできたチョコレートのもそれ。そしてその発生源である数々の「料理」を前に、深雪は満面の笑みで達也を出迎えた。

メインの肉料理は、牛フィレ肉のチョコレートソースがけ。

付け合わせは、ナッツぎつしりクッキーのチョコレートフォンデュ。

デザートはフルーツの、ブランデーを加えたホワイトチョコレートフォンデュ。

誇張抜きのココ尽くめな料理は、一緒に住んでいる深雪にしか用意できないバレンタインチョコレートと言えるだろう。

しかし達也の戸惑いはチョコ料理そのものよりも、それを用意した深雪自身にあった。

「……深雪。その衣装はどこで手に入れたのかな？」

「衣装ですか？　これは単なる給仕用ですが……。似合っておりませんか……？」

深雪の衣装は、パフスリーブのブラウスに、胸元が編み上げになったジャンパースカート、フリルたっぷりのエプロンという、所謂チロリアンドレス・スタイルであり、ある種の趣味人が集うレストランでよく見られるものだった。

しかし「絶世の美少女」という呼称がまったく誇張にならない深雪がそれを着ると、まるで完成された芸術品であるかのような、そこそ二次元の存在がそのまま具現化したかのような錯覚すら引き起こすほどの完成度だった。

「いや、似合っているよ。とても可愛い」

ただでさえそんな彼女に対して、ましてや達也にとつては「特別な存在」である彼女に『似合っていない』などと言えるはずもなく（そもそも似合っていないなどと考えるはずもなく）、達也は戸惑いを彼方に追いやってそう答えた。

「本当ですか！　ありがとうございます！」

そして心の底から嬉しさを表現するようにパアツと晴れやかな笑顔を浮かべる深雪に、妹が喜んでくれるなら良いか、と達也は満足げに頷いた。

そう。たとえ先程散々チョコを味わい尽くし、これからしばらくはチョコを消費する日々が待ち受けている中、せめて今夜くらいはチョコと離れたかったと本心では思っていたとしても、最愛なる深雪が用意してくれたチョコを無碍にするなんて選択肢はハナから存在していないのである。

ダイニングの椅子に腰掛ける達也の心境は、それこそゲリラ兵に侵攻される横浜に出陣するときのそれと酷似していた。

*

*

*

しんのすけが1人暮らしをしている、単身者用アパートの一室。

その部屋の中心部に位置するリビングは現在、1辺が膝丈を超える

立方体の段ボール箱が幾つも並び、それらに床の大部分を占領されていた。

『しん様！ あいのプレゼント、受け取っていただけましたか!?』

「うん、さっそく1個食べてるゾ」

しんのすけが電話の向こうにいる酔乙女あいにそう返事をしながらバリバリ食べているのは、彼が好物としてのお菓子であるチョコビだった。リーナからは昼間に最高級品の「ロイヤル・プレジデント・チョコビ」を贈られたが、こちらはそれよりも幾分か値段の安い、それこそ普段彼が食べている通常のチョコビと大差無いグレードの商品である。

しかしそのチョコビは、まだ一般流通のされていない「試作品」だった。チョコビの製造元である製菓会社は酔乙女ホールディングスの傘下企業（元々グループ企業の1つとして創業されたのではなく、会社の名前を残したまま買収されたという経緯を持つ）であり、その立場を利用して毎年この時期に新作チョコビを山のように贈る、というのがあいの習慣となっていた。

サザエさん時空によって100回近くバレンタインデーを経験し、世界中のあらゆる高級チョコを試した結果それが最善だと結論づけたあいの作戦は靦面で、しんのすけは昼間に散々チョコを食べたことなど感じさせない勢いでチョコビを口の中に放り込んでいた。

『ああ、しん様！ 直接お渡しすることのできない不出来なあいをお許しくださいませー!』

「いいっていいって。お仕事で忙しいんでしょ?」

『さすがしん様、なんて寛大なお心をお持ちなんでしょう！ 本当はサボろうかとも思ったのですが、あの人が取締役になってから監視の目が厳しくて』

「仕事はちゃんとした方が良くと思うゾ、あいちゃん」

冗談の一言では片づけられない真剣な声色でそう話すあいに、しんのすけは思わずツツコミの言葉を口にしていった。普段はボケの役割が多いしんのすけだが、彼女との会話ではツツコミに回ることも少ない。

あいちゃんは相変わらずマイペースですなあ、と「おまえが言うな」の大合唱が聞こえてきそうなことを思いながら、しんのすけはまた1個チョコビを口の中に放り込んだ。

『申し訳ございません、しん様。もっとお話したいのですが、これから商談があります』

「ほいほーい。頑張つてね」

『ああ！・なんて有難いお言葉！・ しん様の声援を励みに、あい、頑張りますわ！』

自分の言葉1つで頬を紅潮させて満面の笑みを浮かべるあいには、しんのすけが抱いた感想は『テンション高いなあ』だけだった。しかしあいはそんなことを知る由も無く、挨拶と彼への愛情を並列させた言葉を一頻り並べてから電話を切った。

その後もしばらくチョコビを食べ進めていたしんのすけだが、やがて1袋分食べ終えたところでソファから立ち上がると、床に置かれた段ボール箱を避けながらキッチンへと歩いていき、ゴミ箱にそれを放り込んだ。

そしてリビングに戻ろうとしたとき、ふと視界の端に映り込んだ「それ」に目を向けた。

それは一見すると宅配便で届いた何の変哲も無い荷物のように見えるが、通常ならば添付されているはずの送り主や届け先が書かれた紙がどこにも見当たらなかった。しかしそれはしんのすけの部屋宛の宅配ボックスに入っていた物であり、つまりそれは誰かが業者を介さず直接そこまで持ってきたことを意味している。

普通ならばそんな荷物は怖くて部屋に入れないだろうが、しんのすけは特に疑問を覚えることなくそれをキッチンまで持ってきた。

彼にとつてそれはこの時期恒例のことであり、その送り主もおおよその見当が付くからである。

「さてと、マヤちゃんとミヤちゃんのチョコはどんなのか楽しみですなあ」

第87話 「彼女」が目を覚ましたゾ」

エリカの通学時間は一高生の中でも長い部類であり、入学時には学校近くに部屋を持つことも検討されていた。しかしそれは彼女自身の強い申し出により却下され、毎回すつかり暗くなつた通学路をコミューターも使わずに結構な時間を掛けて歩いている。年頃の、しかも「美少女」である彼女にはあまりお勧めできない行為だが、痴漢やひつたくり程度の輩に傷つけられるはずがないという考えからであり、そしてそれは客観的な事実だった。

彼女が自宅通いに固執したのは、彼女が親離れできていないからではない。むしろその逆で、エリカのために部屋を買ってやると言った父親への反抗心からである。父や長兄の言いなりになるのに比べれば、多少の不便などどうということもない。

彼女の部屋は母屋には無く、道場と並んで建てられた離れに存在する。エリカは自室に入るや否や、鞆を放り投げて制服のままベッドに倒れ込んだ。普段はこんなだらしない真似はしないのだが、ここ数日による「お祭り騒ぎ」に疲れ果てていた。

「お祭り騒ぎ」というのは当然ながらバレンタインデーのことだが、しんのすけを元気づけるために企画したパーティーは疲労の原因に含まれない。彼女が辟易しているのは、チョコを作るときや配るときに門下生達による馬鹿騒ぎや、学校での生徒達（男女問わず）からの自分を伺い見るような不躰な視線に晒されることに対してだった。自分の容姿がそれなりに優れているのは自覚しているし、損得抜きでブサイクよりも美人の方が良いと思っている。しかし外見だけでチャホヤされるのは嫌であり、その好意が過剰なものであれば互いにとって不幸を招くものだと思っている。

彼女がそのような考えに至つたのも、ひとえに彼女の身近にいた「反面教師」の影響である。

エリカの母親、アンナ＝ローゼン＝鹿取。

日独のハーフである彼女は、姓が「千葉」でないことから推測される通り、千葉家現当主（つまりエリカの父親）の愛人だった。エリカ

が生まれたのは父親の正妻が病死する前であり、つまり2人は正妻が病床に伏せているそのときに“そういうこと”をしていたことになる。

確かにそんな事情があれば、エリカの母親が千葉家から冷たい目で見られるのは納得だ。

しかし責任が両親共にあるにも拘わらず、母親だけが悪者扱いされていることは断じて認められなかった。

理由も分からずに蔑みの目を向けられ、小さな体をさらに縮めて息を潜めて過ごしていた時期もあった。自分と母親を認めさせるために、がむしゃらに剣を振っていた時期もあった。結局エリカが14歳のときに母親が死ぬまで“千葉”を名乗ることが許されず、母親の死をきっかけに剣術に対する熱意を失った時期もあった。

しかしエリカは、今が一番楽しくて充実していた。

素直に敵わないと思わせてくれる女友達と、どれだけ目を凝らしても底の見えないボーイフレンド。ほのぼのさせてくれるクラスメイトに、弄り甲斐のある喧嘩友達&幼馴染み。

そして自分よりもずっと長生きなのにまるでそれを感じさせず、その自由奔放な性格で周りの人間を否応なしに巻き込ませる、まさに“嵐を呼ぶ”という形容が似合う少年。

そんな彼らとの日常が、彼女には何よりも大切だった。その日常を守るために力を振るうことを決め、“目的”を見つけたことで再び剣術への熱意を取り戻した。そんな今の彼女にとって、“恋愛遊戯”など単なる邪魔物でしかなかった。

そんなことを、ぼんやりと天井を見つめながら考えていたそのとき、ふいにドアホンのチャイムが鳴った。離れのドアが開かれた合図であり、鍵を掛けてなかったので誰かが勝手に入ってきたのだろう。

誰だろう、と体を起こしたところで部屋のドアがノックされる。抑えられた足音、乱れの無い息遣い、制御された気配から該当するのは2人の兄だろうが、長兄は例の事件に掛かりきりで毎晩遅くまで帰ってこないはずだ。

「次兄上ですか？ どうぞお入りください」

ベッドから机の前に移動してからドアに声を掛けると、エリカの予想通り、千葉家の次男・修次が部屋の中に入ってきた。

エリカは机の前で背筋を伸ばし両手を膝に置いていたのだが、修次はベッドをチラリと一瞥すると「寛いでいたところに悪いね」と眉尻を下げた。〃千葉家の麒麟児〃と謳われるだけの眼力をもつてすれば、その程度のことを見抜くくらいは容易なのだろう。

「いえ、少し体を休めてただけです。それで、何か御用がおりなのでは？」

「ああ……。言うべきかどうか迷ってたんだけど、やっぱり伝えておこうと思ってね。——エリカと同学年の野原しんのすけくんとは、今でも付き合いがあるのかな？」

「ええ、それが何か？」

表面上は何てことないかのように答えたエリカだったが、内心では結構動揺していた。夏休みの九校戦で父の命によりしんのすけの試合を観戦していた修次だったが、それ以来特に彼を話題に出すことは無かったから油断していたともいえる。

しかし修次の次の一言に、エリカは表面を取り繕う余裕も無くなった。

「彼は国防軍に監視されている」

「——はっ？」

「いきなりなことでは信じられないのも無理はない。だけど本当のことだ。——僕も、非公式の命令を受けた」

「正式には防衛大の学生でしかない次兄上を起用するほどの任務、ですか？」

「内容は『彼を監視し、必要ならば護衛せよ』というものだ。どうやら彼は、軍が動くレベルの厄介事に巻き込まれているみたいだね」

〃厄介事〃と聞いてエリカが真っ先に思い浮かべたのは、例の吸血鬼事件、改めマカオとジヨマ事件のことだった。彼の立場からしたら巻き込まれるどころかむしろ中心的な立ち位置なのでは、と思ったがそれを素直に口に出すことはしなかった。

「エリカ、しばらくは彼の周囲に近づかない方が良いでしょう。最近は

彼と夜に歩き回ったりしているようだが、それもすぐに止めた方が良
いだろう」

「……そちらは既に止めてるので構いませんが、学校の中でも近づく
など言うのですか？」

「いや、さすがに学校で襲われることはないと思うが……」

修次の言葉に、エリカは内心で「おや？」と思った。吸血鬼事件に
ついて聞いているのなら、学校でトツペマ・マペットがマカオとジヨ
マの一味と思われる者の襲撃に遭い暴走させられたことは聞いてい
るはずだ。それとは別口なのか、あるいは単純に情報を制限されてい
るのか、今のエリカでは判断ができない。

「でしたら兄上、ご懸念には及びません。最近のことが例外であって、
普段は帰宅後に待ち合わせて遊びに行くような仲ではありませんか
ら」

「むっ、そうなのか……。九校戦に足を運ぶくらいだから、てつきりそ
れなりに仲が良いと思っていたのだが……」

修次の反応に、エリカから二度目の「おや？」が出た。自分の予想
とは違ったという反応は良いとして、当てが外れて残念に思っている
ようにエリカには感じられたからである。しんのすけに近づかない
でほしいのなら、仲がそれほど良くないのはむしろプラスなはずなの
だが。

「そういうえば、今日はバレンタインだったか。門下生が手作りチョコ
だって騒いでたよ。——僕が記憶してる限りだと、チョコを手作りし
たのって今年が初めてだったっけ」

「……ええ、まあ」

「門下生の話だと学校の友人にプレゼントするついでだったみたいだ
けど、その相手は喜んでくれたかい？」

「……珍しいですね。次兄上からそのような話題が出てくるなんて」

「あつと、不躰な質問だったね。すまない」

しまった、とでも言いたげにハツとした顔になって謝罪を口にする
修次に、エリカは「いえ、気にしてはいませんが」と返した。しかし
彼女の表情から怪訝の色が未だ消えておらず、故に感情の伴わない

取って付けたような言い回しになってしまった。

何となく居心地悪くなったのか、修次は「とにかく気をつけるんだよ」と言い残して足早に部屋を出ていった。平時とは雰囲気の違いに首を傾げるエリカだったが、すぐに気を取り直してフツと笑みを浮かべると、既に閉じられたドアに向けてポツリと呟いた。「言われた通り、しんちゃんと一緒に気をつけます」

*

*

*

2月15日。

バレンタインを過ぎたことで浮かれていた空気が終息し、学校内は普段の落ち着いた雰囲気を取り戻した——かと思いきや、このタイミングで新たな事件が発生した。

いや、事件というよりは「怪奇現象」と称した方が適切かもしれない。『学校の七不思議』というのはどこの学校にでもある定番の怪談話だが、魔法科高校の場合は普段から魔法の暴発などによって不思議な現象が7つどころではなく発生しているため却って話題に挙がらない。

しかし今回は、普段から観測される現象とは少々『特殊』だ。それにはほとんどの生徒にとっては直接関係のある出来事ではなく、だからこそ無邪気な好奇心を媒介としてあつという間に全生徒に広まっていったのだろう。

「ねえ達也くん、オラ達も行ってみない？」

特にそういった好奇心が人一倍強い生徒の場合、実際に自分の目で確かめようと思ってもおかしくない。例えば、こうして昼休みにわざわざ二科生のクラスに足を運んで達也を誘ってくるしんのすけのよう。

元気になったのは良いが、きつそく面倒事に自分を巻き込んでくるのはどうしたものか、と達也は内心溜息を吐きながら辺りを見渡した。エリカやレオはもとより、美月や幹比古までもが好奇心を隠しきれずにソワソワしているのが、達也ほどの観察眼を有していなくても

容易に分かる。

「……俺はそこまで興味は無いから、行くならしんのすけ達だけで行けば良いだろう」

「ええっ？ 達也くんも一緒に行こうよ。達也くんだったら、怪奇現象の正体とか分かっちゃうかもしれないでしょ？」

「……そういうのは、俺よりも幹比古の方が適任じゃないか？ 本人も行きたがってるようだし」

「な、何を言ってるんだ達也は！ そ、そんなことは——」

あたふたと慌てる幹比古をエリカとレオが疑いの眼差しを向け、しんのすけは「達也くんはノリが悪いですなあ」と幼い子供のように唇を尖らせる。

吸血鬼事件を境に変わった日常が元に戻った光景が目の前に広がっているが、今の達也では生憎と感傷に浸る気分にはなれなかった。内心ではなく実際に溜息を吐く達也に、美月が同情を携えた苦笑いを浮かべる。

と、達也の携帯端末がメールを受信したことで小さく震えた。

メールの差出人とその内容を確認したのか、達也の口元が僅かに歪む。

「どうしたの、達也くん？」

「千代田会長からの呼び出しだ。——ロボ研のガレージに来い、つてな」

「おおっ、なら丁度良いゾ」

しんのすけの発言に反論しなかった達也だが、今は何を言っても八つ当たりになかならなさそうなので止めた。

ロボット研究部が部室として割り当てられたガレージ。

それこそが、今話題となっている怪奇現象の「現場」だった。

事の発端は、まだ生徒の誰も登校していない朝7時。

ロボ研のガレージに保管されていた家事手伝いロボット3H・通称ピクシーが、外部からの無線通電によりサスペンドから復帰して自己

診断プログラムが作動した。遠隔管制アプリで自動的にモニターされ、ガレージ内のカメラで監視される中、異常を発見すること無く自己診断は終了した。

通常ならここで3Hはサスペンド状態に戻るのだが、異常が無いはずの3Hはそのまま機能を停止せず、サーバーと通信を始めたのである。アプリからの強制停止コマンドをも無視して当校の生徒名簿にアクセス要求を続け、最終的にサーバー側が無線回線を閉じるまでそれは続けられた。

その間、表情を変える機能が備わっていないはずのピクシーが、ずっと嬉しそうな笑みを浮かべ続けていたという。

「あつ、司波くん。ごめんね、昼休みに呼び出しちゃって」

ガレージにやって来た達也を真っ先に出迎えたのは、彼を呼び出した風紀委員長の花音ではなく、彼女の婚約者である五十里だった。ちなみにガレージには2人だけでなく、生徒会長のおずさと役員であるほのかと深雪、そして部活連会頭である服部の姿もある。

「ほーほー、これが例のお人形さんですかあ」

「お人形っていうか、ロボットね」

「ふーん、見た目的には他と大差無いけどな」

そして達也の後ろからついて来たのは、E組で一緒にいたしんのすけ・エリカ・レオ・美月・幹比古。しんのすけは風紀委員であるためまだ言い訳できるが、椅子に座った状態で待機しているピクシーをマジマジと観察する彼らの姿は完全に野次馬のそれである。

それを見ていた服部が苦い顔を浮かべているが、達也と五十里は完全にそれを無視して会話を交わす。

「事情は粗方聞きました。事実だとすれば、高校生の手には余ると思うのですが」

「さつきまで甘楽先生が調べてたけど、ハッキリした結論は出せないと仰ってたよ」

「つまり、否定もできないと?」

「P94のボディから高濃度の想子の痕跡サインが確認されたよ。先生が言うには、ボディの胸部中心から外部に放出されたものだそうだ」

「胸部というと、電子頭脳と燃料電池の部分ですよね。発生源は——」
「電子頭脳、だそうだよ」

それはまた出来過ぎた話だ、と2人は揃って溜息を吐いた。
チラリ、と達也はピクシーに視線を移した。しんのすけが顔を間近に近づけているが、今はコマンドに従ってサスペンド状態で待機しているようで特に異常は見られない。

「それで、俺は何をすれば良いのでしょうか？」

「ピクシーの電子頭脳をチェックしてほしいんだ。我が校の中でCADソフトウェアに最も精通してるのは君だからね、九校戦のときみたいに『電子金蚕』でんしきんさんみたいなものが紛れ込んでいないとも限らないし」
確かに潜伏型の遅延術式なら、人形が魔法を使ったように見せることはできるかもしれない。動機については不明だが、愉快犯の可能性もゼロではない以上調べる必要はありそうだ。

とはいえ、本格的なチェックをするにはCADのメンテナンスルームを使う必要がある。達也がそれを告げると、あずさが慣れた手つきで携帯端末を操作して部屋の使用許可を取ってくれた。ちなみに許可が下りたのは、4時限目の終わりまで。つまり授業をサボれということか、と達也は心の中でツツコんだ。

「というわけだ、しんのすけ。それを運ぶ必要があるから離れてくれ」
「……………」

「…………しんのすけ？」

達也が呼び掛けても、ピクシーの眼前を陣取るしんのすけがその場を動くことは無かった。ただジツとその顔を覗き込む彼に、後ろからそれを眺めていたエリカ達も怪訝そうな表情を浮かべる。

そうしてエリカが後ろから肩を叩こうと手を挙げたその瞬間、

『ピクシー、サスペンド解除』

しんのすけが口にしたのは、サスペンド状態から起動させる音声入力の定型文だった。おそらく論文コンペの準備で達也と共にガレージに来た際、彼が何回もそうするのを横で見ている記憶のたのらう。

しかしそれに反して、ピクシーは一切反応しなかった。家庭用ならば特定の人間しか使えないよう声紋登録することはあるが、学校で共

用しているピクシーではそんな設定は施されていない。

「……音声認証に異常があるのででしょうか？」

「甘楽先生が調べてたときは、別にそんな様子は無かったはずだけだなあ」

2人が話す間もしんのすけが何回か呼び掛けてみるが、依然ピクシーに変化は無い。

するとしんのすけは、まるで寝ている人間を起こすかのようにピクシーの肩を大きく揺さぶり始めた。その程度の衝撃で壊れるほど柔な造りはしていないとはいえ、少女の姿をしたピクシーが首をガクガクと揺らす光景は見ていて心配になってくる。おそらくそんな気持ちになったのだろう深雪が、遠慮がちに「しんちゃん、その辺で……」と呼び掛けた。

そして達也もピクシーを何と無しに眺めていた、そのとき、

「……ん？」

ふと浮かび上がった『違和感』に、達也はピクシーから視線を移した。

その視線の先にいるのは、すっかり傍観者と化していた美月だった。

「美月」

「は、はいつ?! 何ですか!?!」

「ピクシーの中を覗いてくれないか? 幹比古は美月が大きなダメージを負わないようガードしてほしい」

「……達也は本当に、ピクシーに何か憑いていると考えてるのかい?」
「調べれば分かる」

幹比古は半信半疑の様子だったが、呪符を取り出して念を込めた。美月は緊張と怯えの入り混じった表情でピクシーを見据え、眼鏡を外す。

美月が、驚きで目を見開いた。

「どうだ美月。——見つけたか?」

「……はい、います」

美月が小さな声で答え、今度は幹比古が驚きで目を見開いた。

彼女の答えに、達也はその場にいる全員に呼び掛けた。

「申し訳ありませんが、ここから先は他言無用でお願いできますか？」
「……達也くんがそれをお願いするってことは、きつと何かあるってことだよな？ だったら僕はそれに従うよ」

「啓がそう言うんなら、アタシも」

「分かりました。生徒会長として、ここで聞いたことは誰にも話しません」

「僕も同じだ、司波」

五十里・花音・あずさ・服部が、矢継ぎ早に返事した。残る深雪達は返事をしなかったが、それは達也の言葉を守る気が無いのではなく、改めて言葉にするまでもないと言わんばかりに力強く頷いていた。

それを聞いた達也は、ピクシーへと視線を向けて口を開いた。

「というわけだ。そろそろ話してくれないか？ ——トツペマ・マ

ペット」

「えっ？」

達也の言葉に反応したしんのすけが、ピクシーへの揺さぶりを止める。

と、ピクシーの肩に乗せられたしんのすけの両手が、ピクシー自身の手によってどかさされた。つい先程まで音声に反応しなかったピクシーが独りでに動き出したことに、達也を除く全員が大なり小なり驚きを露わにする。

しかしピクシーはそんなことに頓着する様子を見せず、首を左右に振ったり肩を回したりしてみせる。それはまるで凝り固まった体を解すかのような動きであり、家庭用家事手伝いロボットには unnecessary 行動である。またその表情も、元々表情を変える機能は備わっていないはずにも拘わらず、どこか疲れを覗かせる印象が普通の人間と遜色無いレベルで伝わるものだった。

そうして一連の動作を終えたピクシーは、ゆっくりと顔を上げて視線を合わせた。

目の前にいる、しんのすけに。

『久し振り、しんちゃん。変わり果てた姿になっちゃったけど、私のこと憶えてる?』

「——トッペマー!」

迷い無くその名前を口にしたしんのすけが、喜びを爆発させてピクシー（敢えてこの呼称のままとする）に抱きついた。ピクシーは両目を若干開かせて驚きを表すも、すぐに口元に笑みを浮かべて両腕を彼の背中に回した。

傍目にはお人形遊びをする危ない男子高生の光景だが、周りにいる誰一人としてしんのすけをそういう目で見える者はいなかった。むしろ『ロボットに怪異が憑りつく』という怪談話としては定番のシチュエーションがまさに目の前で繰り広げられているという事実には衝撃を隠せないでいる。

「再会に喜んでいるところ悪いが、幾つか訊かせてもらえるか?」

『ええと、あなた司波達也くんね。その節はお世話になったわ』

「あのときのことには記憶に残っているのか?」

『ほとんど意識が残ってない状態だったから、ぼんやりと靄が掛かっている状態だけだね』

達也とピクシーがそんな会話を交わしていると、ピクシーに抱きついたままだったしんのすけの体がピクリと跳ねた。

「ト、トッペマー……。あのときはゴメン……。痛かった?」

『しんちゃんが気にすることは無いわ。むしろ止めてくれてありがとうね』

自責の念でしおらしい表情になるしんのすけを、ピクシーが苦笑い交じりで励ましながら軽く頭を撫でる。見た目的には達也たちと同じ十代後半くらいの設定とされるピクシーだが、そこから滲み出る雰囲気は彼よりも年上のお姉さんだった。

と、そんな光景をほっこりとした表情で眺めていたあずさが、ピクシーの“声”が耳ではなく直接意識に響いているような感覚で聞こえていることに気がついた。

「能動型テレパシー、ですか?」

『この体だと音声は理解できても発声に難があるから、そっちの方が』

楽なのよ。表情を変えてるのも、一種の念動力ね』

「あのときのように暴走する可能性はあるか？」

『ミアのときみたいに体に乗っ取らないよう注意する必要も無いし、あなた達に見られることで自分の存在が確立されていく感覚があるから、多分この前みたいなことにはならないと思うわ。魔法もある程度は使えそう』

「えっと、さっき眼鏡を外して見たときに気づいたんですが——！」

あずさと達也の疑問にピクシーが答えていると、話を聞いていたギャラリーの中から美月が手を挙げて発言してきた。彼女にしては珍しい積極的な行動に、その場にいる全員が一斉に彼女へと顔を向ける。

その視線の多さに若干緊張しながら、美月は言葉が続けた。

「ピクシー、じゃなくてトツペマさんから感じるフシオンのパターンが、どこなくしんちゃんに似ている気がするんです。しんちゃんの思念波の影響下……とまではいきませんが、しんちゃんの“想い”が焼き付けられていると表現するのが近い感じでしょうか」

「ほーほー、成程成程。……つまり、どういうこと？」

『私はあなた達で言うところの“パラサイト”とは違う存在だけど似たような性質を持つてる、というのは聞いてるでしょ？ この体に避難してた私の意識が目覚めたとき、しんちゃんの感情が私の中に流れ込んでくる感覚があったの。つまり私がこうして再び喋れるようになったのはしんちゃんのおかげで、そのときの影響が未だに残ってるってことね』

「影響というのは、具体的には何だ？」

達也の疑問に、ピクシーはそちらへと視線を向けて口を開く。

『あなた達と直接会話をするのは今回が初めてだけど、あなた達に対して仲間意識だとか親近感のようなものが芽生えている感覚がある。多分しんちゃんがあなた達のことを強く想うきっかけがあって、そのときに私の意識が目覚めたんだと思うんだけど、何か心当たりある？』

その瞬間、主に1年生達から「ああ……」と何やら得心がいったと

する空気が流れた。そしてしんのすけも同時に思い至ったのか、若干頬を紅く染めて拗ねたように唇を尖らせた。

そしてピクシーも彼らの反応で察したようで、それ以上尋ねることは無かった。

その代わり彼女が口にしたのは、これからのことだった。

『それで司波達也くん、これからどうする？ マカオとジョマの奴らには、私が復活したことは知られない方が良いと思うんだけど』

『そうだな。しばらくはこのまま3Hのフリをしてくれると助かる。こちらからも色々聞きたいことはあるが、適当な口実を作つて学校で話し合うことになるだろう。それに万が一にも第三者に持ち去られないよう、ピクシーの所有権を買い取った方が良いだろうな』

達也の提案に、生徒会長であるあずさが口を挟む。

「でも達也くん、ピクシーは元々ロボ研が部活で使用するという名目で、製造元と第一高校との間で貸与契約が結ばれていますよ」

「学校に置いておく必要がありますし、貸与契約は維持したまま所有権だけを製造元から買い取るのが最も簡単でしょう。その辺りについてはロボ研や学校側とも相談の必要がありますが」

「それについては、僕も協力しよう」

部活連会頭である服部が間に入ってくれれば、おそろく話し合いはスムーズにいくだろう。権力でゴリ押ししている感は拭えないが、緊急事態ということでお目溢し願うしかない。

と、ふいに達也が携帯端末に目を向けた。

「——そろそろ昼休みが終わるな」

「どうする？ メンテナンスルームは予約してるけど、正直もう必要無いでしょ？」

「ええっ？ セっかくだし、このままサボっちゃわない？」

「しんちゃん、ちゃんと授業は出た方が良いよ……」

しんのすけの（或る意味普通の高校生らしい）発言に、優等生気質の強い美月やほのかが苦笑いを浮かべた。達也も彼を窘めるように深い溜息を吐くが、達也の場合は『なるべく目立つ行動を取りたくない』という理由に基づくものである。

しかしここで、意外なところから待ったの音が掛かる。

『いや達也くん、それとしんちゃんも、できれば少し話がしたいから時間取れないかな?』

その声の主・ピクシーの誘いに、名前が挙がった2人だけでなく全員の視線が一斉に向く。

「おっ? どうしたの、トツペマ?」

『できるだけ早い内に、私を連れてってほしい場所があるの。ミアの体にいたときは彼女の立場もあって勝手に行動できなかつたから、行くに行けなくて』

「どう?」

端的に尋ねるしんのすけに、ピクシーも同じく端的に答えた。

『——この世界にあるテーマパークの方の“ヘンダーランド”よ』

第88話 「みんなで夜のお出掛けだゾ」

怪奇現象が学校中で話題となった、その日の夜。

午後7時ともなると生徒は全員下校し、教職員もごく一部を残すのみ。校門も閉鎖された学校はシンと静まり返っており、賑やかな声で溢れる昼間とは別世界のようである。この時間帯に出入りが許されているのは、宿直の職員、契約している警備会社の警備員、夜間に作業するシステムメンテナンスのエンジニアなど学校が認めた者——そして、生徒会が特に認めた生徒のみだ。

生徒自治にしては少々行き過ぎにも見えるこの権限は、真由美が生徒会長だったときに導入したものだ。七草家の思惑と権威が見え隠れするが、利用する立場である達也にとっては裏の事情などどうでもいい。

「ほら、2人のIDカードだ」

「どもども〜」

「ありがとうございます、お兄様」

通用口の守衛に生徒会長発行の夜間入構許可証を提示して来訪者のIDカードを3枚受け取った達也が、自分の後ろを歩いて来ている深雪としんのすけにその内の2枚を渡した。警備システムに不審者だと認識されないようIDカードをしっかりと携帯したうえで、3人は敷地内へと足を踏み入れた。

3人は現在、制服ではなくそれぞれが防寒と動きやすさを両立させた服装に身を包んでいる。制服着用のルールは夜間入構時には適用されないというのもあるが、その後の予定を考えれば制服は不適當だという結論に至ったからである。

夜の学校というシチュエーションに興奮気味のしんのすけ、そしてそんな彼を宥める深雪を連れて、達也はロボ研のガレージへと辿り着いた。鍵の掛かったドアを前に携帯端末を取り出し、昼間に作成したばかりの認証キーを兼ねた暗号文を近距離通信モードで送信する。

『3人共、待ってたわ』

ガレージの扉を開けて顔を出したのは、若干表情が微睡んでいるよ

うに見えるピクシーだった。サスペンド状態で椅子に座った姿勢のまま待機するのが退屈で居眠りしていたのだろう、出迎えの声（正しくはテレパシーだが）にも待ちかねた感が滲み出ている。

「早速だが、コレに着替えてくれ」

挨拶も抜きで話を切り出す達也に、深雪が手に持つ鞆から着替え一式を取り出した。

襟を立てるタイプのオーバージャケットに伸縮性の高いセーター、ヒップラインを隠す三段フリル付きの膝上丈スカートに、首元を二重巻きできるほどに長いマフラー。そして厚手のタイツにブーツと、細部を隠しながらも脚のシルエツトを強調するファッションとなっている。これは達也やしんのすけの趣味などではなく、服を用立ててくれた独立魔装大隊補給担当の女性下士官のアドバイスを全面的に採用したものだった。

深雪からそれを手渡されたピクシーはしばらくそれをジツと見つめ、そして呆れるような顔を達也としんのすけへと向けた。

『……いや、2人共出てってほしいんだけど』

「そ、そうですよお兄様！ 何を平然と見ておられるのですか！」

ピクシーと深雪に指摘されて、そこで初めて達也はハツとした表情になった。彼にとつてピクシーは未だにロボツトという感覚でしかなく、そこまで精巧に人体を模倣しているわけではない3日よこしまに邪な感情を抱くという発想が無かったのである。

しかし納得した表情の達也に対し、しんのすけは不服そうに頬を膨らませる。

「んもう、トツペマはオラの裸を何回も覗き見したくせにい」

「——えっ?」

『の、覗き見じゃないから！ 私がしんちゃん家ちに行くときに限って、あなたがお風呂に入ってただけでしょ！』

頬こそ紅くならなかったものの、それ以外は完全に人間と遜色無い反応でピクシーが羞恥と怒りを露わにした。「んもう、ワガママですなあ」という台詞を残し、男2人が部屋を出ていった。

人間の骨格と構造が違うため着替えに手間取る可能性があったが、

3Hのボディが柔軟だったため着替えは問題無く行えた。多少下半身に不自然なところもあったが、それを見越して大きめのサイズにしてあったのでさほど目立たない。

そのまま立っていると、まさしく本物の少女にしか見えない。着替えて若干乱れた髪を整える様子など、まさに人間的な仕草だといえるだろう。

「よし、行くぞ」

「それじゃ、出発おしんこ〜！」

達也の呼び掛けにしんのすけが元気良く号令を発し、深雪とピクシーが苦笑いを浮かべる。

『作戦開始』の合図にしては、何とも気の抜けた遣り取りだった。

*

*

*

ロボ研のガレージでピクシーが『ヘンダーランドに行きたい』と発言した後のこと。

あずさが使用許可を取ってくれたCADのメンテナンスルームへと場所を移し、ピクシーから更なる事情聴取が始まった。五十里・花音・あずさ・服部といった上級生組は事情を察したのかついて来なかったが、エリカ達1年グループは当然とばかりに一緒に部屋で話を聞く姿勢に入っている。

そのことに思うところが無いわけではない達也だったが、結局それを口にするには無かった。

「んで、なんでトツペマはヘンダーランドに行きたいの？ 遊ぶの？」
『別に遊びに行くためじゃなくて、あそこが今どうなってるのか一度確かめたかったの。場合によっては、奴らが企んでいることにも関わってくるかもしれないし』

ピクシーの答えに、達也を始めとして全員が興味を惹かれる顔つきとなった。

言外に『続きを話せ』と促される形となったピクシーが、口を開く、もとい思考を飛ばす。

『そもそも奴らは、なんで人間を襲っているんだと思う?』

「えっ? そりゃ、血液が欲しいから……?」

「いやいや、〝吸血鬼〟ってのはあくまでもアタシ達がそう呼んでるだけだから。レオが襲われたときみたい、仲間を増やそうとしているからでしょ?」

「でもそれって、血液が減ったのとは関係無いんじゃない?」

『奴らの目的を一言で表すと「〝魔力〟を集めるため」になるわ』

答えが出そうにない議論を打ち切るように発言したトツペマに、元々旺盛な好奇心が刺激された達也が真っ先に問い掛けた。

「魔力というのは、俺達で言うところの〝サイオン想子〟や〝フシオン霊子〟に相当するものか?」

『それよりももっと根源的なものね。私達にとっての魔力は、あなた達にとってのそれらよりもっと万能なの。魔法を使うエネルギーなのはもちろん、自身の生命維持にも使われるし、魔力を使って強力な〝道具〟を作成することもできる。つまり奴らが何を起こそうとするにも、まずは魔力を集めなければどうにもならないってこと』

「その手段として人を襲っている、ということか」

『そういうこと。この世界って空気中に含まれる魔力の量が私達の世界よりも少ないから、より効率的に魔力を集めようとするなら必然的に人間から吸い取るしかないってこと』

「トツペマもそうなの?」

『私は今のところ大丈夫。魔法は考えなしに撃てないけど、ただ存在するだけならしばらく心配いらないわ』

しんのすけの問いにそう答えるピクシーの声色は、悲しい事実をひた隠しにするような後ろ暗さは特に感じられなかった。とりあえずは彼女の言葉をそのまま信じて良さそうさだ。

とはいえ、先の説明だけでは血液が失われていたことへの理由にはならない。トツペマもそれに関しては確証を得ていないようで、眷属化する魔法の副作用、魔力を奪うという目的を悟られないための偽装工作など仮説は挙げられるが、今それを追究しても意味は薄そうさだ。『とにかく今はそうやって人間を襲って魔力を集めてる奴らだけ、

100年前にこの世界に侵攻したときはもつと別の方法で人間から魔力を集めてたの。私がヘンダーランドに行きたがっているのは、その「装置」が今も機能しているか確かめたかったからなのよ』

「そうは言うが、今建設されているヘンダーランドは100年前のそれとは別物だ。その装置というのも、存在していないんじゃないか？」

『機能しているかは別にして、装置自体は存在しているわ。——ヘンダーランドのシンボルマークである「ヘンダー城」こそが、魔力を集めるための装置なんだから』

実際にヘンダーランドに行ったことは無くとも、テレビのCMやネットの広告などで見たという者は多い。その際にほぼ必ずと言って良いほどヘンダー城が使われ、故にあの独創的な形状をした城の知名度はかなり高い。

その城自体が人間から魔力を集めるための装置だと聞かされれば、達也を始めとした面々が驚きの表情を浮かべても無理はないだろう。『奴らが自分達のアジトをテーマパークにしたのも、多くの人間を集めて魔力を収集しやすくするためだったの。莫大な魔力があればそれだけ強力な魔法が使えるようになって、それを足掛かりにこの世界を征服するのが奴らの計画だったのよ』

「そんなことをしたら、遊びに来ていた人達が危ないんじゃないか……？」
『いいえ、そこは上手く調整されてたわ。せいぜい「何だかいつもより体が疲れるな」程度にしか感じないわ。場所が場所だけに、バレル可能性はほぼ無いわね』

ピクシーの言葉に、エリカ達は深刻な表情で考え込む。つまりそれは、今まさに装置が稼働していたとしても自分達では気づけないことを意味しているからである。

『もつとも、デメリットが無いわけじゃないけどね。魔法に使われる魔力も自動的に集めてしまうから、城の中ではたとえ奴らであっても魔法を使うことができないの。——最後にしんちゃん達と奴らの追いかけてつこうが純粋な体力勝負になったのもそれが理由ね』

「成程、そういうことだったんですね。初めて知ったゾ」

得心がいったとばかりに、しんのすけがウンウンと頷いた。もつともピクシーが齎もたらしたその情報は当時彼もすっかり説明されているのだが、どうやらすっかり忘れ去っているようだ。

しかしそれを知る者はいないため、ツツコミの言葉は無いまま話は進む。

『まあ長々と説明したけど、要は奴らがその装置を狙ってヘンダーランドを襲撃するかもしれないから、今も稼働してるのか確かめたいってことよ』

「確かに、その魔力があれば奴らも本来の実力を取り戻すってことだよ？ しかも更に強力な魔法が使い放題となりや、相当ヤバいことになりそうだな」

レオの素直な感想に、他の面々も言葉にはしないながらも同意の反応をする。

もつともピクシーに関してのみ、 “部分的な” という注釈が付くが。

『確かにそれも相当ヤバいけど、奴らにとって魔力を集める “一番の目的” は別にあるの』

「……何よ、これ以上まだ何かあるって言うの？」

もうお腹いっぱいなんだけど、と言いたげなエリカに、残念ながらね、と言いたげにピクシーが肩を竦めた。

『前に学校の裏口で話してたとき、私がしんちゃんに “スゲーナ・スゴイデスのトランプ” を渡したって話をしたのは憶えてる？』

「確かに、しんのすけがそんな話をしていたな」

ほとんど間髪入れずにそう答える達也に、エリカが思わず「よくそんなこと憶えてるわね」と半ば呆れるような口調で呟いた。そしてその言葉に、なぜか深雪が得意気な表情を浮かべていた。

「しんのすけ、そのトランプには具体的にどんな効果があるんだ？」

「えーっと、綺麗な水着のお姉さんと呼んだり、アクション仮面とカンナムロボとぶりぶりがえもんと呼んだり、オラが汽車とか飛行機に変身したり——」

『要するに “何でもできる” ってこと。ぎっくりとした制約はあるけ

どね』

「ピクシーがトランプの効果を手伝ってサラリと言ったのけるが、その効果の絶大さは達也が思わず表情を強張らせてしまうほどだった。」

そしてその表情が、説明をするピクシーにも伝播する。

『ヘンダー城で集めた莫大な魔力を使って奴らが作り上げたのが、そのスゲーナ・スゴイデスのトランプだったの。そのトランプと奴らの魔法が合わさっていたら、間違いなくこの世界は滅ぼされていたでしょうね』

「でもトツペマ、オラが水着のお姉さんと呼んだときはすぐ消えちゃったゾ」

『確かに、私利私欲に使った魔法はすぐ解ける。って制約はあるけど、そんなのいくらでもやりようはあるわ。私利私欲に引っ掛からない方法で使うとか、一瞬で効果が終了する類の魔法とか』

その代わり、とピクシーが話を続ける。

『トランプ作成のデメリットもかなり大きいんだけどね。トランプのジョーカーが制作者にとって明確な「弱点」となって、拠点の特定箇所にそれをセットすることで問答無用に封印されるようになるのよ。100年前にしんちゃんや奴らに勝てたのも、その弱点を的確に突いたからなの』

「ってことは、むしろトランプを作ってもらった方が勝てるんじゃないか？」

「何言ってるの、ほのか。元々そいつらは世界丸ごと滅ぼせるレベルの魔法使いなんですよ？ トランプを作れるってことはほとんど力を取り戻してる状態ってことだから、弱点を突くとかそういう話じゃなくなるでしょ」

『その通り。実際しんちゃんが奴らからジョーカーを奪えたのも、奴らが相当油断していたからよ。同じ手は二度も通じないと考えるべきでしょうね』

ピクシーの言葉を最後に、部屋の中を重苦しい雰囲気包み込む。楽観的にも悲観的にもならずフラットな視点で物事を見ることがで

きる達也でさえ、他の面々と同じように深刻な表情を浮かべている。いや、達也だからこそ、そんな表情になっているといえるだろう。そもそも達也は、マカオとジヨマがわざわざ日本にやって来たことが不思議だった。魔力を集めて自身の力を取り戻すことだけが目的なら、現地の人間を狙うだけで充分事足りるはずだ。しかし仮にヘンダー城が今も魔力収集の機能を保持しており、奴らがそう思うだけの明確な根拠があったとするならば、危険を冒してでも海を渡る価値はあると考えるだろう。

それに達也は、しんのすけには「主人公補正」という能力があることを知っている。

はたしてその能力が『別にヘンダー城にそんな機能はありませんでした』などという展開を認めるだろうか。

「よく分かんないけど、とりあえずトツペマはヘンダーランドに行きたいってことでしょ？ いつにする？」

そしてしんのすけは事の重大さをよく理解していないのか、達也たちが深刻そうにしているのを尻目にピクシーに問い掛ける。

『えっ？ まあ、早いに越したことは無いけど』

「だったら今夜にでも行く？ 閉園してるときの方が、トツペマも周りの目とか気にしなくて良いんじゃない？」

『そりゃ、そっちの方が有難いけど、閉園中のテーマパークとか入れないでしょ？ 100年前とは違って人間の会社が運営してるんだから』

「ダイジョーブ。オラ、ヘンダーランドを経営してる潮おじさんとお友達だから。今から電話して入れてもらえないか訊いてみるゾ」

『えっ、そうなの!? さすがしんちゃん、頼りになるわ！』

「いやあ、それほど〜」

何やら着々と展開が進んでいるのを見つめながら、達也は大きな溜息を吐いた。しんのすけとピクシー以外の面々も、同じように憂鬱な表情を浮かべている。

——絶対に、ヘンダー城を見るだけでは終わらないだろうな……。

彼らの思いは、概ねこれで一致していた。

*

*

*

来たときよりも1人増えた達也たち一行が、訝しむ守衛の眼差しを平然と受け流して校門を後にした。そうして街灯のおかげで最低限の視界が確保できている道路を少し歩いた先に、10人乗りの大型車が路肩に停まっているのを確認する。

達也たちがその車に近づいていくと、運転席の窓が開いてそこから運転手が顔を出した。

その運転手とは、藤林だった。

「お疲れ様、達也くん。問題無く連れ出せたみたいね」

「お世話になります、藤林さ——」

「お久しぶりです、藤林お姉さん。こんな所で会えるとは、やはりオラとあなたは運命の赤い糸で繋がっているようですね」

藤林と達也が挨拶を交わしていると、目つきをキリツとさせたしんのすけが横から割り込んできた。どこから出したのか、というよりなんで持っていたのかバラの造花を差し出してキザな台詞を決める彼に、藤林は「アハハ……」と乾いた笑い声をあげていた。

もちろん彼女がここにいるのは、偶然でも運命でもない。ヘンダーランドに向かうことが決まった後に達也が独立魔装大隊に協力を仰いだ結果、大隊の幹部である彼女が運転手として抜擢されたためである。

達也と彼女が顔を合わせるのは、横浜事変以来だ。四葉家当主・真夜の命によって達也と独立魔装大隊が接触を禁じられていたためであるが、今回の件に当たってその禁を解いてもらおうと彼女に電話を掛けたところ、さほど詳しい説明を求められることも無くお許しが出たのである。それはまるで達也が電話するのを待ち構えていたかのようであり、何やら作弄的なものを感じる達也だったが、考えても仕方ないことだと割り切ることにした。

「立ち話も何ですし、早いところ車に乗ってもらえるかしら」

「ええっ!? せっかくお姉さんと会えたんだから、もっとお話したい

ゾ」

「ほら、向こうで待ち合わせしてる人もいるんでしょ？ その人を待たせたら可哀想よ」

軍務で鍛え上げられた作り笑顔で説得する藤林に、しんのすけは渋々ながらも運転席の窓から離れ、グルリと前方を回り込んで助手席のドアへと手を掛けた。若干笑顔が引き攣ったように見える藤林を横目に眺めながら、苦笑い混じりの深雪が後部ドアを開け、その後に呆れた様子 of 達也とピクシーが続く。

「お疲れ、3人共」

「おおつ、見事に人間にしか見えねえな」

「本当、普通の女の子ですわね」

先に車に乗っていたのは、エリカ・レオ・美月・幹比古・ほのか。つまり昼間にピクシーの話を聞いていた面々が全員揃っていた。仮に出発時間が半日早ければ、文句無しに『仲の良い高校生グループが引率を伴ってテーマパークに遊びに行く』という光景そのものだろう。

全員が乗り込んでドアを閉めたのを確認した藤林が、後部座席に座る達也に呼び掛ける。

「それじゃ出発するわね。高速道路を使うけど大丈夫？」

「はい、それで構いません」

「それじゃ、ヘンダーランドに向かって出発おしんこ〜！」

しんのすけの愉快的号令と共に、達也たちを乗せた車が動き出した。

目指すは旧群馬県桐生市の湖上に浮かぶ、夢と魔法の国『群馬ヘンダーランド』である。

「動き出したようです。こちらも出発します」

「了解。くれぐれも見失わないように」

そこから50メートルほど離れた場所でランプも点けずに停まっている車の中にて、そのような会話が交わされた。

* * *

高速道路でヘンダーランドへ向かう場合、最寄りのインターチェンジは館林となる。八王子市にある第一高校から出発するのなら、首都圏中央自動車道から高速道路に乗って久喜白岡ジャンクションで東北自動車道に乗り換え、館林で一般道に下りて30分ほどの道程を経る、というのが最も素直なルートだろう。

都市部の一般道では通勤ユーザーによるカー・シェアリングが一般的だが、高速道路での長距離移動に限定すると第三次世界大戦以前の交通事情とさほど変わらない。とはいえあまり交通量も多くない時間帯なので、順調に行けば2時間ほどで到着する見込みだ。

しかし高速道路に乗って少し経った頃、車内ではとある「事件」が発生していた。

「しんちゃん、大丈夫?」

「……大丈夫じゃないかも。漏れそう」

「あんなにジュースを飲むからよ。……つて、高校生相手にする小言じゃないでしょコレ」

助手席に座るしんのすけがウンウン唸りだしたのは、今から5分ほど前。嬉々として藤林に話し掛けていた彼の突然の変化に何事かと身構える一同だったが、何てことはない、ただ尿意を催してきただけのことだった。

とはいえ、高速道路の車内という状況ではそれなりに絶望感が大きいことだろう。ピクシーが言うところの「装置」を確認したらすぐ帰るとはいえ万一何が起こるか分からず、故に体調は万全を期しておきたいところでもある。

「……仕方ないわね、達也くん。丁度パーキングエリアがあるから、そこに寄りましょう」

「……はい、お願いします」

苦笑いを浮かべる藤林が、チラリと視線を上に向ける。

入口の案内板に書かれた「菖蒲」の文字を一瞥してから、藤林は速度を落とすにつつ車を左の車線へと移動させた。

「パーキングエリア」というとサービスエリアと違ってトイレと小規模の売店、あるいは自販機コーナーが置かれただけの小規模なイメージが強いが、21世紀初頭の再開発ラッシュの影響によってサービスが充実したパーキングエリアも数多く見られるようになった。

彼らが立ち寄った菖蒲パーキングエリアもその一つであり、上下線集約型であるそこにはフードコートやカフェ、さらには圏央道沿線の特産を取り揃えた土産屋も併設されている。なので普段は多くの利用客で賑わっているのだが、彼らが立ち寄った時間は大半の店が閉まっているので人影も疎らだった。

「おおっ！ 急げ急げ〜！」

しかし今のしんのすけにとつて何より重要なのはトイレであり、藤林が駐車場の一面に車を停めた瞬間にドアを開け、そこから弾かれるような勢いで飛び出していった。幼稚園児がそのまま体を大きくしたような彼の姿は4月からの付き合いで何度も見てきたとはいえ、その背中を見送る達也たちに呆れや苦笑いの感情が浮かぶのも致し方ないだろう。

皆がしんのすけを見つめる中、運転席の後ろに座るエリカはチラリと窓の向こう側へと視線を向けた。自分達の車から3つ離れたスペースに同じく10人乗りの車が停まり、そこから20代前半くらいの男女がゾロゾロと降りていく。全員が細長い筒状の鞆を肩に提げる大学サークルの集まりのような彼らを、エリカは若干目の奥に剣呑な光を携えた目つきで眺めていた。

「念のため訊くけど、他のみんなは大丈夫？ それとも飲み物か何か買ってくる？」

藤林が後部座席の面々に尋ねると、美月が遠慮がちに右手を挙げた。

「あつ、すみません。飲み物が欲しいので、買ってきても良いですか？」

「だったら、俺が代わりに買ってくるぜ。丁度俺も欲しいモンがあつ

たし」

「レオのセンスに任せてたら不安だわ。アタシも行ってくる」

レオがそう言っただけでドアに手を掛け、それを追うようにエリカの台詞が続いた。レオが『何だとコンニャロ』みたいな視線をエリカに向けているが、当然ながら彼女はそれをガン無視だ。

「それじゃ2人共、お願いね。無糖の紅茶だったら、銘柄は何でも良いから」

「オツケー。チャチャつと買ってくるぜ」

そう言い残して、レオとエリカが素早い身のこなしで車から降りる。

そして建物へと向かおうとする2人を、達也が呼び止めた。

「2人共、〃目当ての商品を見つかるまで探し回るような真似〃はするなよ」

「……ああ、分かってるよ」

「心配性ねえ、達也くんは」

達也が匂わせた〃含み〃を完全に理解したうえで、レオとエリカはそう答えた。

しんのすけが足を踏み入れたとき、丁度トイレには誰もいなかった。彼は少しでも時間を短縮しようと入口から一番近い小便器へと駆け寄り、最後の最後で緩みそうになる膀胱と必死に戦いながらズボンのチャックを下ろしていく。

そして、

「おおぅ……」

無事に用を足すことができた喜びに、変な声をあげながら頬を紅く染めて顔を綻ばせた。そのまま溜めに溜めていた中身を全部出し切るべく、彼はしばらくその姿勢のままジツとしていた。

するとそんな中、トイレの入口から1人の少年が入ってきた。歳はしんのすけと同じくらい、ガニ股気味に歩くその姿は飄々としていて、今にも口笛を吹きそうな能天気さを醸し出している。

そしてその少年は、他に誰もおらずガラガラにも拘わらずしんのすけの隣の小便器へと歩いていった。チラリとしんのすけが彼を見遣るも、特に不思議に感じることも無く再び視線を落とす。

そうしてしばらく隣り合っていた2人だが、ふいに少年が口を開いた。

「いやあ、初めて来たけどなかなか良い場所だなあ」

「そうですね。埼玉出身だけど、オラも初めて来たゾ」

「へえ、埼玉出身なんですかい。つてことは、高校もここの近くで？」

「ううん。東京の魔法科高校つて所だゾ」

「ほう！ つまり兄貴も魔法師つてヤツですかい？」

「まーね」

用足しが終わったのか、しんのすけの体がブルリと震えた。ズボンのチャックを上げて洗面台へと歩く彼に合わせて少年も小便器から離れ、しんのすけの隣、入口により近い側の洗面台へと歩いていく。

「んで、兄貴はこれからどこへ行くんで？」

「友達と一緒にヘンダーランドに行くんだゾ」

「ああ、あそこねえ。俺も行ってみてえなあ。でも今から行っても閉まってるんじゃない？」

「ダイジョーブ。閉まった後に入れるようにしてもらってるから」

「へえ、そりゃ何とも羨ましい限りだなあ。——つまり、今ならセキユリテイも手薄つてわけか」

それまで社交的な態度だった少年が最後に付け足したその台詞は、それまでとはひどくギャップのある無感情なものだった。さすがのしんのすけも違和感を覚えたのか、手を拭うハンカチからその少年へと顔を向ける。

少年は洗面台の前に立ちながら手も洗わずに、無表情のままジツとしんのすけを見つめていた。

「それで兄貴、どうしてそこまでしてヘンダーランドに行こうと思っただんで？」

「……別に、単なる思いつきだゾ」

「思いつき……へえ、成程ねえ……。——誰が提案したんだ？」

「……べ、別に、誰だって良いでしょ」

「いいや、俺にとつちやそういうわけにやいかねえなあ。」

——トツペマの奴、復活したんだろ？」

「↓！」

目を見開くしんのすけ。

それで答えを確信したのか、少年はニイツと口角を上げた。

「やつと2人きりになれたわねえ、——しんちゃん？」

第89話 「クールなアイツがやって来たゾ」

今から、数時間ほど前のこと。

「次兄上、エリカです」

ドアの向こうから自分に呼び掛ける声が聞こえたとき、修次はベッドの上で横になっていた。眠っていたわけではなく監視（場合によっては護衛も含まれる）任務の緊張感で張り詰めた体を休めていただけなのだが、妹とはいえせつかくの休息を邪魔されたことへの不満は隠しきれない。

とはいえ、用事が無い限り極力母屋へ来ることのない彼女がわざわざ来たとなれば、それなりの用事だと推察できる。修次は淀みない動きでベッドからデスクの前に置かれた椅子へと移動すると、努めて優しい声で「入りなさい」と答えた。

そうして入ってきたエリカは、若干緊張した面持ちに見えた。そしてドアを閉めた際に視線がチラリとベッドへと向かれ、すぐさま戻された。おそらくそこで色々と察したのだろうが、彼女は敢えてそれには触れずに口を開く。

「このような時間にすみません。少し、お耳に入れておきたいことが」「言つてごらん」

何と無しに話を促した修次だが、そのときにエリカの服装に違和感を覚えた。

防弾・防刃機能を持つ多機能合成ゴム製のアンダーウェア、そしてその上からフェイクレザーのライダースーツジャケットにショートパンツ、膝には動きを阻害しないプロテクター、両手には掌と指の内側部分が極薄になった合織の手袋。

部屋着にしても、不良少女よろしく繁華街に行くにしても仰々しいその出で立ちに、修次は自然とエリカの話を聞き入れる体勢を改めて整えていた。

「私はこれから友人達と、ヘンダーランドへ行つてまいります」

しかしエリカの第一声は、クラスメイトとテーマパークに遊びに行くという、今時中学生でもいちいち報告しないような案件だった。そ

もそも今から行ったところで着いた頃には閉まってるだろうに、わざわざそんな物々しい格好で行くような場所では――

「――エリカ、その『友人達』というのは……」

「はい。次兄上の監視対象となっっている野原しんのすけくんも一緒に」

帰宅後に待ち合わせて遊びに行くような仲ではないんじゃないか、と修次はツツコミを入れたくなかったが、今の問題はそこではない。

ここで考えるべきなのは、なぜ監視対象と共に外出するとわざわざ自分に伝えたのか、だ。

「エリカ達はなぜ、そこに行こうとしているんだ？」

「……申し訳ございません、それに関してはお答えすることはできません」

「なぜだい？」

あくまで穏やかな口調と表情を崩すことなく尋ねる修次に、エリカは数秒ほど逡巡するような仕草を見せ、やがて覚悟を決めたように修次へと視線を向けた。

「今回の案件は、イチマルイチ『第一〇一旅団・独立魔装大隊』の管轄となっています」

「――なぜエリカがその名を知ってるんだ？」

エリカの口から飛び出したその名称に、修次の問い掛ける声に自然と鋭さが含まれた。

そのことに一瞬怖じ気づくエリカだったが、即座に持ち直してそれに答える。

「……横浜事変の折、私はその大隊の一員と行動を共にしていたことがあります。風間少佐と仰る方より固く口止めされていたため、今までお話しすることができませんでしたが――」

「風間少佐――『大天狗』はるのぶ風間玄信か！」

相手を萎縮させる目的も兼ねて大仰になりがちなのが二つ名だが、

『大天狗』はその中でも際だって異質だ。エリカがそう感じたのを察したのか、修次は風間についての説明を始めた。

山岳戦・森林戦における世界的なエキスパートとして知られる古式魔法師であり、空挺部隊の運用においても国内屈指の名指揮官と言われている。20代前半の頃に参加した大越紛争において、インドシナ半島南進を目論む大亜連合を相手にゲリラ戦を繰り広げていたベトナム軍に加わり、大亜連合軍から悪魔か死神と恐れられるほどの活躍を見せたという。しかしそのせいで大亜連合との正面衝突を回避したかった当時の軍中枢部に睨まれることとなり、出世コースから外れて以降は目立った活躍は無かったという。

「噂の独立魔装大隊は、風間少佐が率いる部隊だったのか……。そんな部隊が関わっていると考えると、余程の事情があると考えるべきか……」

自分に言い聞かせるように独り言を呟く修次に、エリカはここぞとばかりに口を開く。

「私が禁を破ってまで兄上になんかお伝えしたのも、まさにそのことを分かっていただきたかったからです」

「成程、事情は分かった。確認したいのだが、エリカ達がヘンダーランドに向かうのは、独立魔装大隊からそうするよう要請があったからか？」

「いいえ、私達が個人的にヘンダーランドへ向かう用事があり、それを知った独立魔装大隊が後から協力してきた形となります」

「その『個人的な用事』の内容については？」

「……申し訳ありませんが、お伝えすることはできません」

緊張した面持ちで頭を下げるエリカに、修次はフムと顎に手をやって考え込む。

そして数秒後、修次は顎から手を離した。

「伝えてくれて感謝するよ、エリカ。『可愛い妹の夜遊びが気になって後をつけていた』という名目なら、彼の後をつけていたことへの言い訳も立つだろう」

修次の言葉に、エリカはその場で一礼した。

“可愛い妹”の部分で頬が微かに紅く染まっているのを誤魔化すように。

パーキングエリアの駐車場に車を止め、門下生を引き連れて車を降りる修次。軍からの正式な命令を受けての任務ではあるが、今はあくまでも『可愛い妹の夜遊びが気になって後をつけていた』という名目での行動だ、表面上はあくまで警戒心を見せず一般客と同等のリラックスした雰囲気を纏っている。

しかし彼の周りを囲む門下生は、その誰もが真剣な表情を浮かべていた。彼らは千葉家の中でも中核を担うほどの実力者揃いであるが、同時に「エリカ親衛隊」を自称しエリカの手足として動いている。そんな彼らからすれば、たとえ名目通りだったとしても並々ならぬ熱意を抱いて当然といったところなのだろう。

門下生からの人望も厚いようで一安心だな、と修次はどこかズレた思いを胸に抱きながらトイレへと歩いていった、そのとき、

「――！」

それは普通の人間には感知できない、ほんの僅かな気配の揺らぎ。ちらほら見受けられる一般の利用者は一切気づいてない様子だが、実戦的な鍛錬を積んでいる修次は誤魔化せない。

その気配の発生源は、監視対象者であるしんのすけが先程入ったトイレだった。

「おいおい、マジか――！」

思わずそんなことを呟きながら、修次は千葉家の十八番おはこである自己加速術式を発動した。一瞬遅れてついてくる門下生の気配を背中に感じながら、彼は夜の闇を跳ね除けて煌々と輝く公衆トイレの入口へと飛び込んでいく。

そうして見えたのは、怯えの混じった驚愕の表情を浮かべるしんのすけと、

こちらに背を向けてしんのすけを見つめる、ごくごく平凡な見た目でありながら好戦的な雰囲気が出ている少年だった。

「そこのおまえ！ 彼から離れろ！」

たとえどのような見た目だろうと、修次は相手の力量を見誤ること

は無い。彼は懐から20センチほどの棒を取り出し、先端近くのポタンを押して刃渡り15センチほどの刃を飛び出させると、まだ太刀の間合いであるにも拘わらずその刃を勢いよく振り下ろした。

一方その少年は、修次の呼び掛けに首を回して後ろを振り返った。そして修次の姿を認めるとニヤツと笑みを深くするが、迎撃も回避もすることなく棒立ちのまま彼の行動を見守っている。確かに傍目には刃が全然届かない場所で短刀を振り下ろしているだけなので、当たりはしないと高を括ってもおかしくないだろう。

しかしこのとき、修次は既に魔法を発動していた。

その名も「^{へしき}圧斬り」。細い棒や針金に沿って極細の斥力場を形成し接触したものを割断する近接術式で、修次はこれを短刀を起点として空中に作り上げることで擬似的に刃渡りを伸ばしている。それをよく知る門下生達は、攻撃が決まったと内心笑みを浮かべた。

バリイツ——！

しかし修次の見えざる刀身は、少年に届く数センチ手前で突如その勢いを止められ、火花のような閃光と音を鳴らすのみに終わった。少年には傷1つ付いておらず、それどころか1歩もその場を動いていない。

修次が僅かに目を見開くが、動きは止まらない。自ら魔法を無効化して圧斬りを短刀の空振りに戻すと、何の抵抗も無く腰まで振り下ろされた刃を素早く斜めに切り上げた。しかし少年は棒立ちのまま刃の動きを目で追うだけで、そして再び見えざる刃が見えざる壁に阻まれて動きを止める。

「ス・ノーマン！」

しかしここで、突如少年が謎の言葉を発した。すると次の瞬間、見えざる壁から突然電撃のような火花がバチバチと散り始めた。

しかしそれ自体に痺れなどを感じさせる効果は無く、しかしその代わり見えざる壁に接していた見えざる刃が勢いよく跳ね返され、その衝撃が本体の短刀に伝わったためか修次がたたらを踏んで数歩後退った。

自身が得意とする間合いから離れ、しかもバランスを崩して咄嗟に

反撃できない状況。それらを感じ取った周りの門下生の数人が、即座に修次と入れ替わるように少年へと向かっていった。

「止め——」

「ス・ノーマン！」

修次の制止と被せて発せられた少年の声に、果敢にも攻めていった門下生達が一齐に後ろへと弾き飛ばされた。それはまるで少年のいる場所で起こった爆発に巻き込まれたかのような光景で、彼らは体を壁などに叩きつけられて苦悶の表情を浮かべている。そしてその中の1人が洗面台に激突し、蛇口が壊れたのか水が噴き出して床を濡らしていく。

少年を観察してもCADらしき物は見受けられず、魔法発動の直前に発する呪文のような言葉からしても、エリカが事前に話した「魔法使い」の印象と一致する。今まで戦ったことのないタイプの敵に、修次はこれまでの任務の中でもトップクラスの緊張感を覚えた。

しかしそんな状況でも、修次は優先すべきことを見誤ったりはしない。

「しんのすけくん！　ここは僕が引き受けるから、君は早くここから脱出を——」

「あの小僧なら、とつくにここから逃げてるぞ」

「えっ？　——あれっ？　いつの間にな！」

よりによって敵である少年から教えられた事実には、修次は驚きと共に辺りを見渡した。確かに天井近くにある明かり取り用の窓が開いており、しんのすけの姿はどこにも見当たらない。別に共闘を期待していたわけではないし、そもそも彼を逃がすことが目的なのだから全然構わないのだが、修次はどうにも胸の奥がモヤモヤする感覚に陥った。

とはいえ、今は目の前にいる少年だ。コイツが何者なのかを突き止められれば、世間を騒がせている吸血鬼事件と併せて事件の全容が見えてくる——

「——！　何だ、これは……!?!」

少年を見据えていた修次の視界が、突如周りに現れた白い靄もやによつ

てモザイクのように覆い隠されていく。それと同時に肌を刺すように鮮烈な寒気を覚え、足元から聞こえてくるパキパキと何かが軋む音に目を遣れば、壊れた蛇口から溢れる床の水がみるみる真っ白に染まりながら凍りついていく。

防寒も兼ねた装備すら突き抜けて襲い掛かる寒気に、修次は目の前の少年へと視線を戻して強く睨みつけた。

「冷却魔法、なのか……？」

「悪いなあ、旦那。俺にとつちや、こつちの方が快適なんでね」

ニタツと不敵な笑みを浮かべてそう言い放つ少年に、修次を始めとした門下生の面々が一斉に武器を構えた。

千葉家の中でも精鋭揃いの彼らを相手に、それでも少年の表情が揺らぐことはない。

「俺を捕まえてえんだろ？ 手抜きのアニメみたいに、ブーツと突っ立ってんじゃねえぞ」

*

*

*

パーキングエリアの中でもトイレというのは、それだけのために立ち寄る者もいるほどに利用者が多い施設だ。そんな男子トイレで突如始まった魔法師同士（一方は厳密には違うのだが、一般人からしたら違いなど分からない）の戦闘に、トイレの周辺では困惑と恐怖の入り混じった表情で立ち尽くす人々でちよつとした人垣ができていた。そんな人垣の端っこで忙しく辺りを見渡していたレオとエリカだったが、ふと視界の隅に一人の少年を見つけたことで即座にそちらへと走り出した。

「良かった！ しんちゃん、無事だったのね！」

「おおつ、エリカちゃんとレオくん！ いやあ、トイレで急に襲われて――」

「話は後だ！ とにかく今はここを脱出するぞ！」

会話する時間も惜しいとばかりに、3人は駐車場へと駆け出した。しんのすけは車をまっすぐ見据えて突き進み、レオとエリカは彼の後

を追いながらもチラチラと周辺に視線を遣っている。やがて車まで5メートルほどまで近づいたところで助手席と後部座席のドアが開かれ、しんのすけは助手席に、レオとエリカが後部座席にそれぞれ体を滑り込ませると、ドアが閉まるかギリギリのタイミングで車が勢いよく走り出した。

車が少ないのを良いことに白線を見殺ししてまっすぐ出口へと突き進む中、エリカが後ろを振り返って最後部の窓から外を覗いた。しかし見えたのはせいぜい建物とトイレ周辺に群がる人々くらいで、その中で何が起こっているかまでは判別できない。一瞬だけ彼女の表情に不安が過ぎるが、直後に1回小さく深呼吸をしたときには不安の色は無くなっていた。

「どうやら他の仲間はいないみたいだな」

「単独で仕掛けてきたってことかい？ それはまた、何とも大胆不敵な奴だね」

「それだけ実力に自信があるってことでしょうか……」

車に乗り込んでからずっと窓の外を睨んでいたレオの言葉に、幹比古と美月が素直な感想を口にする。

「しんちゃん、襲ってきた奴の特徴ってどんなだった？」

一方、感想よりも情報収集を優先したのは、襲われた張本人であるしんのすけの隣に座る藤林だった。そしてその後ろでは、タッチの差で先を越された達也が静かに口を閉ざす。

藤林の問いに、しんのすけは眉間に皺を寄せて「うーん」と唸り声をあげてから、

「見た目は知らない奴だったゾ。オラと同じくらいの歳の男の子」

「吸血鬼だとしたら、見た目の情報は当てにならない。言動で何か気づいたことはあるか？」

「ゲンドー？ うーん、そうですなあ……」

腕を組んでしばらく考え込むしんのすけに、自然と全員の視線が集まる。運転手である藤林も顔こそ正面に固定しているが、チラチラと視線を彼に向けて次の言葉を待つ。

そうして皆が待ち構える中、しんのすけが口を開いた。

「そういえば、雪ダルマの奴にフィンキがそっくりだったゾ」

「……ゆ、雪ダルマ？」

襲撃してきた人間への感想を求めた結果出てきたとは思えない単語に、車の中は張り詰めた空気が弛緩するような雰囲気にも包まれた。

ただ1人、ピクシーを除いて。

『——まさかそれって、ズ・ノーマン・パー”って奴のこと!?!』

「知ってるのか、トツペマ？」

『知ってるも何も、マカオとジヨマが認めた幹部の1人よ。新参だったから私はよく知らなかったけど、しんちゃんの話聞く限り相当厄介な相手よ』

「そんな……。エリカちゃんのお兄さん、大丈夫でしょうか……?」

意図せずに口から漏れたような独り言に、実際に口にした美月本人がハツとした表情になって口元を手で押さえた。そして恐る恐る、エリカの方へと視線を向ける。

しかし予想に反して、エリカの表情に不安は無かった。むしろ美月の視線を迎えるようにまつすぐ彼女を見つめ、彼女の心配を消し去るように柔らかな笑みを浮かべている。

「大丈夫よ、美月。ウチの兄貴は相当な実力者、ちよつとやそつとの奴らに後れを取るなんてことは——」

「ね、ねえ！ 後ろから何か追い掛けてきてない!?!」

エリカの台詞を遮るようなほのかの悲痛な叫びに、運転手である藤林を除いた全員が一斉に後ろを振り返った。

木曜の夜ということもあり車の通りは疎らであり、仮に猛スピードで走ってくる車やバイクがいれば即座に気づけるほどには目立つだろう。ほのかの声に反応した面々も、そのような乗り物がこちらを追い掛けてくる光景を思い描いていた。

しかし彼らの目に飛び込んできたのは、まさにそんな“常識”をぶち破る光景だった。

「おおっ！ アイツだゾ、トイレでオラを襲ってきた奴!」

達也たちの乗る車から50メートルほど後方にいたのは、紛れもなくあの少年だった。睨みつけるように鋭い視線をまつすぐこちらに

向け、しかし口元は不敵な笑みを浮かべている。

「つてか、何だアイツ！ 生身のまんま俺達を追い掛けてきやがるぜ！」

だがその「移動手段」が尋常ではなかった。一切の乗り物を使わず、まさしく己の足のみで時速100キロほどのスピードを出すこちらに食らいついていた。

とはいえ、それは自分の足で走っているという意味ではない。よく見ると足元にはローラーが付いており、ジェット噴射の要領で時速100キロの推進力を生み出しているようだ。しかし足元にエンジンなどを搭載しているようには見え、何らかの魔法的要因によるものと考えられる。

「何してんの、次兄上……！」

エリカの口から漏れたその言葉は少年を足止めしていたはずの兄を責め立てるが、その声色や表情は兄の身を案ずる弱々しいものだった。

一方、達也は自身の傍にある窓を開けて身を乗り出すと、CADをホルスターから抜いて後ろに銃口を向けた。

「おつ、達也くん、シートベルト外して危ないなあ。コンプライアンスに引っ掛かるゾ」

「言ってる場合か」

しんのすけの言葉に冷静なツツコミを入れながら、達也はCADの引き金を引いた。

次の瞬間、少年の眼前でバチツと火花が散った。

達也が一瞬目を見開き、続けざまに3回引き金を引く。それに合わせて、少年の眼前で3回火花が散る。

それを見届けてから、達也は体を戻して再び席に腰を下ろした。

「どうしたの、達也くん？」

「魔法を防がれました。多重障壁です。仕組みは十文字家の「ファラリンクス」と似たようなものでしょうか」

「成程。対象物に直接作用するからバリアを貫通できない達也くんじゃ相性悪いか」

特に残念がることも無く平静を保っているように聞こえる藤林の言葉に、達也もまた特に悔しがることも無く軽く肩を竦めて応えた。とはいえ2人のそんな遣り取りに、達也なら何とかしれくれるのではないか、という想いを無意識に抱いていたほのか・美月・幹比古辺りが顔を青くする。

と、次の瞬間、突然パラパラと何かが車体を叩きつける軽い音が彼らの周囲で鳴り響いた。

「これは……、雨？」

ぐつしよりと濡れたフロントガラスを見た藤林の独り言に、窓際に座っていた全員が一斉にガラス越しの空を見上げた。雲一つ無いとまではいかないものの星空の割合が圧倒的に大きく、雨を降らせるような雲はどこにも見当たらない。

しかし現に車体は濡れており、そして暗くてよく見えないが車の前方、少なくともヘッドライトの届く道路上も通り雨でも降ったかのように濡れているようだった。

突然の雨、濡れた路面、雪ダルマ。

断片的なワードが、達也の頭の中で急速に繋がっていく。

「藤林さん！ 今すぐブレーキを——」

パキパキパキ——！

達也が声をあげた次の瞬間、フロントガラスが絵具をぶちまけたかのように真っ白に染まり、一気に視界が遮られて何も見えなくなつた。咄嗟の判断で藤林がブレーキを掛けるが、自分達の足元からキュイキュイとゴムが擦れる音が聞こえるだけでスピードが緩まってしまうようには思えない。

そんな中、更に追い打ちを掛けるような事態が発生する。

パンツ——！

何かが破裂する音、そしてその瞬間に車体が傾いて重力に引つ張られるような感覚に、誰もが車のタイヤがパンクしたことを悟った。もちろん、それが単なる不運な事故ではないことも。

路面凍結に加え車体のバランスを崩したことでハンドルを持ってかれそうになる藤林だが、腕だけでなく体全体を使って支えることで

何とか進行方向をまつすぐに保っていた。しかしそれもいつまで続くか分からず、しかも先程から前回まで踏んでいるブレーキもほとんど作用していない。

「レオー」

「ああ、分かってる！——パンツァーツー！」

レオの叫び声と共に音声認識のCADが発動し、彼が最も得意とする硬化魔法が車体全体を包み込むように発動した。

そしてその数秒後、車はカーブしていた高速道路の壁面に衝突し、ガリガリと火花を散らしながらそのスピードを緩めていき、やがて止まった。薄い金属でできた壁面には事故の様子が思い起こせるほどに直線状の傷が刻まれていたが、車体の方には特に傷らしきものは見当たらず、車体の凹みや潰れなども見られない。

一斉に車のドアが開かれ、中から達也たちが続々と降りてくる。しかし全員がそうしているわけではなく、最後部に座る美月とほのか、そしてその間に挟まれて座るピクシーはそのまま車内に残っていた。

車を降りて後方に目を向けたとき、真っ先に彼らの目を惹いたのは、片側3車線に渡る高速道路を横断する氷の壁だった。大型のトラックでさえすっぽりと隠すほどの高さを誇るそれに、行く手を遮られたのだろう後続の車がクラクションを鳴らすのが聞こえてくる。

そしてそんな壁の前で、生身の状態で自分達を追い掛けていた例の少年が、ズボンのポケットに両手を突っ込んだまま悠然とこちらに向かって歩いていった。

「やあ皆さんお揃いで！ 良かった良かったあ！」

待ち合わせの相手にようやく会えたかのような爽やかな笑みでそう呼び掛ける少年に、しんのすけ・達也・深雪・レオ・エリカ・幹比古・藤林の7人が車に背を向けた横並びの陣形で迎え撃つ。

そんな彼らを見渡しながら、少年は笑みをフツと消してこう言った。

「——まとめてあの世へ行ってもらおうか」

第90話 「クールなアイツと戦うゾ」

異世界からの侵略者、マカオとジョマ。単独でも世界を圧倒するほどに強大な力を持ち、「命を与える魔法」によって魔力の続く限り部下を自在に増やすこともできる2人だが、基本的には少数精鋭を好む傾向にあり、テーマパークに擬態したアジトを運営するために頭数が必要な場合などを除いては、自分達の命を直接受ける幹部ですら片手で数えるほどしかない。

マカオとジョマを支える幹部は、現在3人。

1人は、クレイ・G・マッド。本来の姿はシルクハットにタキシードというサーカスの団長然とした中年男だが、その正体は狼男である。魔法もある程度は使えるが、フィジカルを活かして相手を圧倒する戦い方を得意とする。

1人は、チョコキリーヌ・ベスタ。本来の姿は露出の多い水着のような衣服に身を包む褐色肌の女性であり、しんのすけ好みの所謂「綺麗なお姉さん」である。しかしその見た目に反して性格の悪さは手下の中でも随一で、卓越した魔法の腕も相まって相手にするには相当厄介だ。

そして最後の1人が、ス・ノーマン・パー。幹部の中では最も新参であり、本来の姿は間抜け面の雪ダルマそのもの。しかしその戦闘力は折り紙付きで、それは人間に寄生せざるを得ない今もなお健在だ。

「ねえトツペマ！ アイツとは前にも戦ったんじゃないの!? 何か弱点とか無い!?!」

車の中に残ったほのかがピクシーに問い掛けると、彼女は念動力でロボットの表情を深刻なものに変えながら考え込み、やがて小さく溜息を吐いて（ピクシーに呼吸器は無いためあくまで素振りである）首を横に振った。

『残念だけど、アイツとはほとんど面識は無いわ。人形の体に封印されていたときは一度も会わなかったし、本来の姿に戻った後にしんちゃん達を襲おうとしてたアイツを倒したときくらいよ』

「で、でも倒したってことは——」

『本来の姿で、しかもマカオとジヨマが封印されて弱体化していたと
きを狙って、だけどね。正直今の私だと、アイツの一撃を凌ぐのも至
難の業でしょうね』

あくまでも冷静に自己と他者の力量差を分析するピクシーに、襲撃
者の弱点を問うたほのか、そしてその遣り取りを聞いていた美月がゴ
クリと息を呑んだ。

そんな2人の視線を受けながら、ピクシーが窓の外へと視線を飛ば
す。

その視線の先にいるのは、100年もの間けっして忘れることにな
かった恩人がいた。記憶にある姿よりも随分と成長しているが、その
中身についてはほとんど変化が無く、100年の空白を埋めるのにさ
ほど時間が掛からなかったほどだ。

『しんちゃん……』

ぽつりと、ピクシーの口から言葉が漏れた。

*

*

*

生身で高速道路を駆け抜けて自分達を追い掛けてきた少年1人に
対し、こちらは車を降りた人員のみを数えても、しんのすけ・達也・
深雪・レオ・エリカ・幹比古・藤林の7人。単純に頭数が多いだけ
なく、遠距離攻撃から近接戦闘まで幅広くカバーできる手数が多さ
がある。単純に考えれば、皆で協力すれば少年1人抑え込むなど訳無い
ように思えるだろう。

しかしその場にいたほとんどの者が考えていたであろうその思惑
は、戦闘開始の瞬間にあっさりと崩れ去ることになる。

実力未知数の少年によつて——ではなく、味方である深雪の “一手
” によつて。

「ちよつ、深雪!」

「おいおい、いきなりかよー」

今にも少年へと飛び掛かろうとしていたエリカとレオだったが、隣
で急激に想子サイオンを活性化させる深雪に嫌な予感がして踏み留まった次

の瞬間、指揮者のように優雅な所作で差し出された深雪の手が示す先——少年が立つ周辺の空間に変化が生じた。

「何だ何だ、見た目より随分喧嘩っ早いな！」

そして少年はむしろ楽しそうに笑みを浮かべながら、深雪と同じように右手を彼女に差し向けた。こちらは特に見た目に何かしらの変化が表れる様子も無く、ほとんど「瞬時」と表現して差し支えないタイムラグで空間に変化が生じる。

そうして2人のちようど中間辺りで、2人が作り出す偽りの世界が激突した。

深雪が繰り出したのは、気体分子をプラズマに分解し、さらに陽イオンと電子を強制的に分離させることで高エネルギーの電磁場を作り出す領域魔法「ムスペルスヘイム」。

一方少年が繰り出したのは、空間内の水蒸気や二酸化炭素を凍結させるだけでなく窒素までも液体化させるほどの冷却魔法。現代魔法に照らし合わせると、高難度の領域魔法「ニブルヘイム」に相当するほどの大技だ。

雷光瞬く雷炎の世界と晶光煌めく氷雪の世界が激突することで、冷気が熱プラズマを気体に戻し、熱プラズマが凍結した空気を気体に戻す。それによって地上にはオーロラの帳とほりが下ろされ、まるで光が舞っているかのような幻想的な光景を生み出していた。それこそ、死と隣り合わせであることを忘れてしまうようなほどに。

「おおっ、綺麗ですなあ」

「な、何よ、この光景……！」

目の前に突如現れたその光景に、しんのすけは呑気な口調で正直な感想を漏らし、藤林はその危険性と魔法をぶつけ合う深雪と少年の實力に啞然となり、

「……やべえな、早々に俺らの出番が無くなったぞ」

「仕方ないわよ、アタシ達は所詮殴る斬るしかできないんだから」

そして近接戦闘専門のレオとエリカは、昂っていた戦意にニブルヘイムをぶっ掛けられたような心地になって半分いじけていた。

しかしそんな中でも、遠距離攻撃の手段を持つ達也と幹比古は尚も

CADと呪符を構えていた。

達也が放ったのは、先程少年が追い掛けてきたときにも使用した分解魔法。しかしその矛先は少年だけではなく、少年が放つ魔法そのものに対しても向けられていた。しかし現代魔法とは構造が違うからか魔法式に相当する箇所は見つけられず、ならば深雪への対応に追われる今ならばと少年に分解魔法を仕掛けるも、残念ながらそちらも先程と同じくバリアに阻まれてしまった。

一方幹比古も、精霊を介して少年への攻撃を試みる。地面の表層を振動させる古式魔法「地鳴り」や雷を起こす「雷童子」を用いるも、達也と同じくバリアに阻まれて効果はさほど見られない。用途に応じて様々な種類の障壁魔法を使い分ける必要があるという常識に則って複数の魔法を発動させた幹比古だが、その光景に彼はチツと無意識に舌を鳴らした。

「こちら藤林。奴らの一味と思われる少年と交戦中、増援を要請します——」

とはいえ、現在彼らの背後では藤林が携帯端末にて味方に増援を要請している。このまま時間稼ぎをして増援を待つというのも、彼らからしたら立派な作戦の1つだろう。

「うーん、やっぱ退屈だよなあ」

「——！」

しかしそのとき、少年が唐突に口を開いた。

当然ながら、達也たちが一気に警戒心を膨れ上がらせる。

「魔法のぶつけ合いが魔法使い同士の戦いの醍醐味つてのは分かるんだが、やっぱ景色が変わらねえつてのはつまんねえよなあ」

「おっ？ だったらどうするの？ 降参してくれる？」

「おいおい、それこそつまんねえだろ、元ジャガイモ小僧。そうだな——」

少年はそこで1呼吸分だけ間を空け、そして続きの台詞を口にした。

「——ここで意外なゲストが登場、つてのはどうだ？」

その瞬間を見計らったかのように、少年のすぐ隣に1人の男が姿を

現した。とはいえそれは突然湧いて出たのではなく、高い所から跳んで地面へと舞い下りたと表現するのが正しい。おそらく少年の背後にある氷の壁を登ってそこから飛び降りたのだろう。

そしてその男は、少年の言う通りまさしく「意外」だった。

「――次兄上!？」

エリカが驚きの声をあげた通り、それはまさに先程パークングエリアで少年を足止めしていた修次だった。

なぜ彼がここにいるのか。

捕り逃がした敵を追い掛けてきたのか。

少年と戦ったはずなのに怪我をした様子が無いのはなぜか。

少年を追い掛けてきたのなら、なぜ今まさに隣にいる少年を狙わないのか。

むしろ、こちらを睨みつけているのはなぜなのか。

様々な疑問が頭を駆け巡るが、その修次がその手に持つ短刀を大きく横に振りかぶったところで、それらの疑問は塗り潰された。

「――みんな、伏せて!」

「――全員、伏せろ!」

エリカと達也が同時に声を張り上げ、そしてそれを聞いた全員がほぼ反射的に膝を折ってその場に身を伏せた。

その瞬間、全員の頭上に何かを通り過ぎるような感覚が過ぎった。視線だけを上へと向けるが、頭上には空が広がっているだけで何かあるわけではない。正面にいる修次を確認しても、彼は着地した場所から1歩も動かず、両手で柄を握り締める短刀がその切っ先を横に向けているだけだ。

しかし先程声をあげたエリカと達也は真っ先に後ろへと振り返り、驚愕に目を見開いた。

自分達がここまで乗ってきた車が、ちょうど半分の高さで真っ二つになっっていた。

そして車が衝突した薄い金属製のフェンスも、車とまったく同じ高さで真っ二つに切り裂かれていた。

「おおっ!?! 何だコレ!」

ワンテンポ遅れて2人の視線を追ったしんのすけ達も次々と驚きを見せ、そして同時に何が起こったのか、というよりも修次が何をしたのか思い至った。

それによつて起こり得る『最悪の結末』と同時に。

「美月！ ほのか！」

「トツペマ!」

車の中にいたはずの3人（傍目には2人と1体だろうが）に呼び掛けるレオとしんのすけの声にも、無意識に悲痛の色が浮かぶ。

『——あつぶな！ もう少しで真つ二つだったわ!』

しかしそんな2人の声に応えたのは、半分になった車からニヨキツと姿を表したピクシーだった。もはやロボットとは思えないほどに焦りの感情を露わにするピクシーの両脇で、同じようにニヨキツと頭を生やすのは恐怖で顔を青く染める美月とほのかだった。

3人の無事を確認し、ホツと胸を撫で下ろすレオ達。

しかしそんな彼らの気の緩みを、達也の叱咤が断ち切った。

「気を緩めるな！ まだ来るぞ!」

「その通りだぜ、ガキンチョ共!」

達也の言葉に応えたのは、あろう事か敵である少年だった。

そうして不敵な笑みを浮かべる彼の周りには、鋭い切っ先を持つ氷の槍が糸で吊られているかのように宙を浮いていた。ザツと数えただけで数十は優にある氷の槍が、1つ残らずこちらへと向けられている。

そして次の瞬間、氷の槍が見えない力に押されて一斉に射出された。

達也が舌打ちをしてCADを構える——

「みんな！ オラの近くに集まって!」

その横でしんのすけがそう叫び、そして返事を聞く前に想子の活性サイオン化を始めた。

「『アクション・ローリング・ハリケーン!』」

必殺技らしき名前を叫んだ直後、しんのすけの周囲に突然竜巻のような突風が発生した。その竜巻は術者とその近くにいる友人達を守

る盾となり、彼らに向かつて一直線に飛んできた氷の槍を物の見事に弾き飛ばしていく。

自分の攻撃を防がれた少年だが、悔しがるところかむしろ楽しんで破顔した。

「へえ！ やるじゃねえか、元ジャガイモ小僧」

「いやあ、それほどでも」

「野原くん、なに敵に褒められて照れてるんだい……」

魔法の行使中に頭を掻いて照れる様子を見せるしんのすけに、幹比古が呆れを多分に含む声で呟くようにツッコんだ。完全に余談だが、彼の周りには様々なタイプのツッコミ要員が揃っているように思える。

「よし、だったらもつと数多くしてやってみようか」

あくまで軽口を崩さない口調で少年はそう告げて、宣言通り氷の槍を更に増やして突撃させた。その濃密さたるや、まるでマシンガンを携帯した兵士を並列させて一斉射撃でもさせるかのようなだが、それでもしんのすけの起こす竜巻は内側への侵入を許さず、氷の槍は突風に衝突しては粉々に砕け散っていく。

しかし彼らは無傷でも、竜巻に守られていない周囲はそうもいかな。少年が繰り出す氷の槍はその全てが彼らへと特攻しているわけではなく、路面は所々ヒビ割れて小さなクレーターを作り、修次の攻撃を逃れたフェンスも氷の槍による猛攻を受けてボコボコに凹んでいる。

そうして竜巻を逃れた氷の槍の中には、しんのすけ達の後ろへと飛んでいくものもあった。

修次によって背丈が半分となった、ほのか達が身を隠す車へと。

「——くっ！」

達也が顔をしかめながら後ろを振り返り、CADのトリガーを引いて魔法を発動した。しんのすけが攻撃を防いでくれていることもあり同時照準を36にまで増やせる達也だが、空中で粉々に砕け散る氷の煌めきに混じり、その鋭い先端をそのままに車へと突っ込む氷の槍が幾つも見られる。

迫り来る氷の槍に美月は咄嗟に座席へと身を伏せるが、ほのかは恐怖のあまり体が凍りついたように動かない。

『ほのかちゃん、危ないっ！』

そしてすぐ隣にいたピクシーがほのかの体を引き寄せ、そのまま体を捻って自身を盾にするように背中を氷の槍へと晒した。

「ヤバい！ トツペマが——」

「えっ——」

エリカの叫びに、しんのすけが反応して後ろを振り返る。

竜巻越しに見えるのは、迫り来る氷の槍から身を挺して友人を守ろうとするピクシーの姿。

咄嗟にピクシーの下へと飛び出そうとするが、自分が動けば周りの友人達に危害が及ぶ。

「——トツペマ！」

しんのすけにできることは、彼女の身を案じてその名前を呼ぶことくらいだった。

そしてその瞬間、達也は確かに感じた。

魔法よりもっと直接的な思念の干渉とも言うべき、サイオン波の急激な高まりを。

『「アクション・ローリング・ハリケーン」！』

それは現在しんのすけが展開している、竜巻を発生させる魔法の名称。

しかしそれを口にしたのは彼ではなく、今の技術で可能な限り人間に近づけた人工音声。

そしてそれを示すように、ピクシー達の乗る車を取り囲むように突然竜巻が発生した。

「あれって、まさか……！」

「しんちゃん！ 一度に2つも竜巻出せるの!?!」

「知らないゾ！ オラは何もやってないゾ！」

「……何だ何だ？ 何がどうなってる？」

レオ達が驚愕し、少年が怪訝の表情を浮かべる中、ピクシー達を守る竜巻は氷の槍を弾き飛ばし、粉々に砕けた氷の粒が周辺に撒き散らされた。その威力はまさしく、しんのすけが繰り出したそれとほとんど遜色無いように見える。

少年が魔法を解いたことで氷の槍による猛攻も止み、それと同時に2つの竜巻が同時に掻き消えた。それによってピクシー達の様子も明らかとなるが、3人共がキョトンとした表情を浮かべたまま固まっております、つまりそれは（魔法を行使したピクシーも含めて）誰一人状況を理解していないことを意味している。

それをレオ達が理解する、ほんの1呼吸ほどの合間。

「『アクション・ミサイル』！」

しんのすけが高らかに技の名前を叫び、その瞬間に反応した彼のベルト型CADが構成した魔法式によって魔法が発動した。硬化魔法・加速魔法・移動魔法を併用して弾丸となったしんのすけが、最短距離でまっすぐ少年へと突っ込んでいく。

そしてそれに反応したのが、短刀を構えてしんのすけと少年の軌道上へと向かう修次。

そして更にそれに反応した達也が、修次へとCADの銃口を向けてトリガーを引いた。

「なっ——！」

そうして修次の右腕が根本から切り離されてボトリと地面に落ち、それを見たエリカが思わず声を漏らし、

「げふうっ！」

しんのすけの頭が腹にめり込んだ少年は間抜けな声をあげて、技の名前よろしくミサイルのように突っ込んだスピードそのままに吹っ飛び、通行を妨げている氷の壁へと激突した。しかしすぐさま両脚で地面を踏み締めて立ち上がる様子から、おそらくバリアを張っていたためにダメージはさほど無かったと思われる。

それを示すように、少年は腹の辺りを撫でながら達也へ視線を向けてニヤリと笑う。

「おいおい、友達の兄貴だつてのに随分と容赦無いんだな」

「兄貴？——エリカ、奴はエリカの兄上だったのか？」

達也が平然とした表情で、それこそ開き直つているとも取れる態度でエリカに問い掛ける。

その問いに対してエリカは——笑顔でこう答えた。

「コレが兄貴？ そんなわけないじゃない。剣の振り方が素人みたいに隙だらけだし、何よりこんだけ切り刻まれて血の1滴も流さないなんて普通じゃないでしょ」

エリカがそう言い放つて見下ろした自身の足元には、四肢を根本から切り落とされ、首も真つ二つに切断されたことで6つのパーツに分かれた修次が、それこそ感情を無くしたように無表情のまま平然としていた。更にはそんな状況にも拘わらず絶命する様子は無く、それぞれのパーツが陸に打ち上げられた魚のようにビクビクと蠢いている。

確かにこんな光景を前にして、奴を普通の人間だと思つてはいないだろう。それこそ、何らかの理由で動くマネキンか何かだとする方が自然なくらいだ。

「何だ、すぐにバレちまったか。もうちよい动摇すると思つただけだな」

吐き捨てるように少年がそう言つて、達也たちに向き直つた。分かりやすい再戦の合図に、彼らも無言でCADや呪符を構えて応対する。

ふとしたタイミングで激しい戦闘が始まりそうな、まさしく一触即発の雰囲気。

そしてこの場にいる誰がその雰囲気を崩すのか、と無言の心理戦が行われていた、

まさにそのとき、

達也たちと少年のちょうど中間の辺りに、金色の天使が舞い下りた。

その少女は小さな仮面で目元を覆っているが、その程度では隠し切れないほどの美貌を携えている。まるで自ら輝いているのかと錯覚

するほどに艶のある金色の長い髪は後ろで纏められ、蒼穹の瞳は青空を閉じ込めたかのように澄み渡っている。

そしてその少女は、全体の3分の2が細く、残りの3分の1が太くなっており、大小の境目に箱状の棒が十字に取りつけられた全長1.2メートルほどの、魔法使いの「杖」と呼ぶにはあまりに奇妙な形をした物を握り締めていた。

「あれっ？ リーナちゃん、なんで——」

急に見知った顔が目の前に現れ、しんのすけが素直な疑問の声をあげる。

しかしその少女・リーナは彼の言葉に応えず、後ろをクルリと振り返って少年へと向き直り、

「——はっ？」

かっ——。

まるでサーチライトのような強烈な光が、まっすぐに少年を貫いた。その光はあまりに太くて眩しく、光に呑み込まれた彼の姿がまったく見えないほどだった。

そして光が消えて元の夜闇と高速道路の照明が入り混じる薄暗さを取り戻したとき、少年の姿はどこにも見当たらなくなっていた。少年が立っていた場所には小さく炎が上がっており、燃えカスのような黒い何かが転がっているのが見える。しかしその後ろにある氷の壁には一切傷がついておらず、おそらくその直前で先程のビームが消えたのだと思われる。

「あれっ？ リーナちゃん、アイツはどこ行ったの？」

「アイツ？ ああ、アイツは……、どこ行ったのかしらね？」

1人だけ状況がよく分かっていないしんのすけの問い掛けに、リーナはキョトンとした表情で首を傾げながらそんな答えを返した。傍から見れば明らかに演技であることは丸分かりだし、現にエリカ辺りは「うわあ……」とでも言いたげに顔をしかめているが、しんのすけは「ほほう、そうですかあ」と彼女の答えに納得した様子で頷いていた。

しかし達也としてはさすがに看過できないのか、眉間に手を遣って

頭痛を訴えるようなジエスチャーをしながらリーナに近づいていった。ちなみに彼の隣には当然のように深雪の姿もあり、そして彼女もリーナに対して呆れたように目を細めている。

「リーナ、おまえ……」

「あら、タツヤ。随分なりアクションじゃない。せつかくピンチのところを助けてあげたのに」

「それについては感謝する。だが知っての通り、アイツはパラサイトと似た性質を持っている。宿主を殺したところで、奴はまた別の人間の体に乗っ取るだけで根本的な解決にはならないんだが」

達也の言葉に、リーナはそれでも悪びれる様子も無く答える。

「だとしても、アイツがシンちゃんと因縁のある奴だとしたら、相当厄介な相手だっていうのはタツヤだって分かるでしょ？」

「……それは奴の能力という意味だけでなく、しんのすけの『主人公補正』も関係しているという意味でしろ？」

「その通りよ、タツヤ。だからこそワタシは、奴に対して全力で攻撃を仕掛けたのよ。生け捕りのために手を緩めるなんて真似はできないわ」

「いや、だからって……」

達也の視線はリーナが未だに持っている、魔法使いの『杖』と呼ぶにはあまりに奇妙な形をした魔法兵器へと向けられた。いや、その魔法兵器を用いて発動された『魔法』を思い起こした、の方が正確か。

——おそらくさっきの魔法が、戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』だな。

重金属を高エネルギープラズマに変化させ、気体化を経てプラズマ化する際の圧力上昇を更に増幅して広範囲にばら撒く、という原理で繰り出されるこの魔法は、本来は高エネルギープラズマを爆心地点から全方位に放射するものだ。しかし先程の魔法は指向性を持つビームとなっていたし、おそらくその有効射程もコントロールされていた。

そしてそれを実現しているのが、リーナの持つ『杖』なのだろう。普段の達也ならば賞賛を惜しまなかったところだが、生憎と今は素直

にそれを表現できる気分ではない。まさか戦略級魔法をこんな往来で、しかも人の目がある場所でぶっ放すなどとは夢にも思わなかった。

「まあまあ達也くん、そんなに怒らないの。せつかくリーナちゃんが助けてくれたんだから」

と、しんのすけがリーナを擁護する言葉を口にしたからか、彼女が勝ち誇ったようにニヤリと笑って胸を張った。

「シンちゃんの言う通りよ、タツヤ。少しは素直に感謝したらどう?」
「おまえ達、何を呑気なことを……」

呆れて物も言えないといった感じに大きく溜息を吐く達也に、隣で聞いていた深雪もさすがに兄を不憫に思ったのか2人に向けて口を開き――

「そうだぜ、おまえら。まだ戦いは終わってねえんだからよ」

「――!」

突如聞こえてきたその声に、その場にいた全員が一斉に目を見開いて辺りを見渡した。声色は初めて聞くものだったが、その語り口調が、そして何より声が纏う「空気」が、先程リーナが消し飛ばしたはずの少年そのものであると誰もが確信する。

そうして達也たちが反応した次の瞬間、彼らの周りに青白い光の粒がポツポツと現れ始めた。最初は数えるほどだったそれも数秒経たない内にその数を急激に増やし、夜空の星が地面に下りたような幻想的な景色へと変貌を遂げる。

そしてその光が風に乗って流されるように移動を始め、彼らから少し距離を置いた箇所に集まりだした。光の粒はやがて1つの大きな光の塊となり、そしてその光の塊がグネグネと動き出してシルエツトを形成する。

「……雪ダルマ?」

そのシルエツトを見ていた誰かがポツリとそんな言葉を呟いたとき、光が弱まって「奴」が姿を表した。

絵本の中から飛び出したかのような、まさしく「生きた雪ダルマ」としか表現できない外見。

その姿を見ただけで、そいつが「外の世界」から来た存在であることが理解できた。

「初めまして、とでも言うべきか？ スノーマン」

「スノーマンじゃなくて、ス・ノーマンな。『ス』で区切るのが俺のこだわりなのよ」

達也の言葉に、その雪ダルマ——ス・ノーマンは眉を動かしてそう答えた。眉の角度くらいしか変化する箇所が無いからか、少年だったときよりも感情表現が希薄に見える。

「それが本来の姿か」

「さっきのガキから貰った魔力で、ようやく必要な量まで溜まったかな。そこのお嬢ちゃんには感謝しないとなあ」

ほぼ無表情ながら小馬鹿にしているのがよく分かるス・ノーマンに、悔しそうに口元を歪めるリーナ。

しかし達也はそれを気にする素振りも無く、話を続ける。

「それで、こうして姿を見せたということは、本気で俺達を殺そうというのか？」

「おいおい、そんな喧嘩腰じゃいけないよ達也くん。別に俺はそこまで君達と争う気は無いんだから。だって——」

——おまえらの目を惹くって任務は、もう達成してるんだからな」
プルルルルル——。

突然鳴り響いた飾り気の無いデフォルメ設定の着信音に、本体が同時に震えているため真っ先に反応した藤林がポケットから携帯端末を取り出した。

自然と周りの面々がス・ノーマンを警戒するように藤林を守る陣形を取り、そして彼女自身も奴から目を離さずに画面をタップして耳に当てた。

「はい、藤林です」

『風間だ。——やられたよ』

「——！」

電話口の相手——直属の上司である風間大佐の簡潔な言葉に、藤林は大きく目を見開いた。

ピクシーからもたらされた情報は達也を通して独立魔装大隊にも伝えられ、任務遂行のために大隊は人知れずバックアップ体制を構築していた。しかしそれはそれは藤林と乗り物を派遣し、ピクシー用の服を提供するだけでなく、閉園後のヘンダーランド入口で待機して秘密裏にしんのすけ達の後方支援を担うチームも存在していたのである。

そして隊長である風間は、まさにその後方支援チームを担当していた。

そんな彼から、そのような報告があったということは――

『未確認の高速飛行物体が我々の頭上を通過し、そのままヘンダーランド内へと侵入した。方向からして、おそらくそのまま城の中に突入したと思われる。なお、園内にいる従業員には今のところ人的被害は無い模様』

「高速飛行物体？ まさか――」

『映像班に解析を急がせているが、どうやら人間に似た姿をした複数の生物らしいとのことだ。確認はできていないが、十中八九マカオとジヨマ達だろう』

と、風間の報告が終わったタイミングで幹比古が「あっ！」と声をあげ、すかさず藤林も会話を中断してス・ノーマンへと目を向ける。

その瞬間、ブオンツ！ とエンジンのような音を鳴らし、ス・ノーマンが勢いよく飛び出して自分達の脇を通り過ぎた。その足元をよく見ると、車を追い掛けてきたときのローラーブレードのような物に変形しているのが分かった。

「じゃあな、おまえら！ 先にヘンダーランドで待ってるぜ〜！」

そうしてス・ノーマンは軽い口調でそう言い残し、手でも振っていきな軽やかさでそのまま高速道路を走り去っていった。車とフェンスが切り裂かれ、路面のあちこちがクレーターとなっていて、高速道路のど真ん中で、達也たちはただ小さくなっていく奴の背中を眺めているしかなかった。

「いやあ、まんまとやられてしまいましたなあ」

まるで他人事のように呑気にそんなことを言うしんのすけにツツ

コミを入れる余裕は、その場の誰にも無かった。

第91話 「ヘンダーランドに乗り込むゾ」

『首の後ろにチップが貼られてると思うんだけど』

「チップ？ あっ、あった」

ピクシーの言われる儘に、手足と首を切り落とされて6つのパーツに分かれた修次の頭を掴んで持ち上げたエリカが、彼女の言われた箇所には1円玉の大きさをしたチップを見つけた。道化師の仮面のようないデザインをしたそれは外見や感触こそ金属で出来た普通のそれに見えるが、魔法師としての本能なのか何者かに見つめられているかのような心地になる。

レオや幹比古などが引き気味で見つめる中、エリカはピクシーに言われるままそのチップを剥がした。

「——うわっ！」

するとその瞬間、バラバラにされながらもピクピクと動いていた修次がその動きを止め、そして風船の空気が抜けるようにシユルシユルと体が縮んでいった。最終的にそれは片手で持てるほどの大きさとなり、そして顔の凹凸や服などの装飾品も消えていき、最終的にデザイン人形のようにシンプルなデザインの人形となって高速道路のアスファルトにポトリと落ちた。

「本当に人形だったんだね……」

『マカオとジヨマが得意とする魔法の1つで、チップに記録された魂を人形に宿らせたの。とはいえチップが人形から離れると魂は消滅しちゃって、人形も元の姿に戻っちゃうのだけどね』

『魂が消滅って——』

『ああ、違う違う。その魂ってのはあくまでオリジナルから複製されたもので、オリジナル本人じゃないから。あの人形に宿っていた魂は、能力こそエリカちゃんのお兄さんの物だけど、そのお兄さんが身につけていた純粋な戦闘技術は反映されてなかったでしょ？ それこそ、マカオとジヨマによる魂の複製魔法の特徴なの』

ピクシーの説明に、エリカは知らず強張っていた体を弛緩させて大きく息を吐き出した。

そしてその隣で達也は、如何にも興味を惹かれているような強い眼差しで人形を眼前に掲げて観察していた。先程のチップも横に並べているが、両方とも達也の眼をもつてしても普通のそれには見えな
い。

達也が僅かに目つきを鋭くする中、ピクシーの説明が耳から入ってくる。

『んで、その魔法のもう一つ大きな特徴が「オリジナルの魂が存在しなければ複製された魂が能力を発動できない」ってものなの。理屈としては、オリジナルとの間に魔法的な繋がりがあって、それを通して能力が発動しているみたい』

「成程。つまりその魔法は、オリジナルの魂をOS、チップが取り付けられた人形を利用者端末とするシステムコールのような機能をしている、ということだな」

『……えっと、コンピューターのことはよく分からないけど、多分そういうことだと思う。つまり裏を返せば、少なくともチップを剥がすその瞬間までお兄さんの無事は確定だったってわけ』

どうやら彼女の世界にコンピューターは存在しないようで、計算機理論を用いた達也の言葉に苦笑いでそう答えた。ロボットでは再現できないであろう微妙な表情に、達也は多少首を傾げながらも人形観察を再開する。

一方その近くでは、戦闘に乱入してきたリーナと藤林が対峙していた。

「直接顔を合わせるのは初めてかしら？ 藤林響子よ、宜しくね」

「初めまして、アンジェリーナ・クドウ・シルズといます」

藤林は九島烈の孫であり、そしてリーナは烈の弟の孫である。つまり2人ははこの関係にあるのだが、魔法師はそうそう海外渡航などできないので会うのはこれが初めてとなる。

だからだろうか、藤林の表情には親戚に向けるような親近感など微塵も無く、彼女を疑っていることを隠そうともしていない。

「それにしても凄い偶然ね。私達が戦っているところにこうしてやって来て、あんな強力な魔法で奴を倒すなんて」

「ええ、本当に。ワタシも友人である彼らを助けることができず良かったです。——もしかしたらこの状況も、彼の思し召しかもしれないね」

含むところの多い藤林の言葉を、リーナは軽くないなして視線を逸らした。

その視線の先にはしんのすけの姿があり、そして彼はリーナの視線に気づいたのかこちらに顔を向けて近づいてきた。

「どうしたの、リーナちゃん？」

「いいえ、何でもないわ。シンちゃん達が無事で良かったって話してたの。——そうですよね、キョーコさん？」

「……ええ、そうよ」

ニツコリと人当たりの良い笑みを浮かべながら話を振るリーナに、藤林も一旦表情から猜疑心を消して笑ってみせた。

「ところでしんちゃん、その子とは仲が良いの？」

「リーナちゃんど？ そうだゾ。リーナちゃんはオラの“仲間”ですからな！」

——仲間？ 友人、ではなく？

しんのすけの答えに引つ掛かりを覚えた藤林だが、それを問い質そうと口を開きかけたその瞬間、彼女の携帯端末が震えて着信を知らせてきた。ちよつと失礼するわね、と一言添えて藤林がその場を離れていく。

そしてそんな彼女の隙を突くように、リーナがしんのすけへと話し掛けてきた。

「ねえシンちゃん、あそこにいる3Hって、もしかして今日学校で話題になってた幽霊の？」

「うん、そうだゾ。トツペマが中に入ったの」

「トツペマって、ミアの体に宿っていた異世界の魔法使いね。——Hi、トツペマ。ワタシのことは憶えてる？」

『ええ、もちろん憶えてるわ。ミアは大丈夫？』

「吸血鬼に取り憑かれたってことで検査のために本国に帰ったけど、特に拘束されたりはしてないから安心してちょうだい」

リーナの答えに、ピクシーはホツと胸を撫で下ろした。ロボットの人間臭い仕草にリーナが興味深そうな表情を浮かべるが、すぐに気を取り直して体ごとしんのすけへと向けて問い掛けた。

「ところでシンちゃん、こんな時間にみんなと一緒にどこ行くの？」

「トツペマと一緒にヘンダーランドのヘンダー城を見に行くんだゾ」

「ヘンダー城？ 何のために？」

「魔力を集めてオカマ魔女がパワーアップするかもしれないんだって」

「オイしんのすけ、何正直に話してんだよ」

「そうよしんちゃん、この女、何を企んでるやら」

レオとエリカがリーナに疑いの眼差しを向けるが、そのような態度を示すのは2人だけではない。彼女がスターズの総隊長で自分を戦略級魔法師だと睨んでいることを知る達也だけでなく、それこそ美月やほのかですら大なり小なり警戒心を露わにしているほどだ。

まさに四面楚歌といった状況に置かれて尚、リーナの笑顔はまったく揺らがない。

「人間きの悪いことを言わないで、エリカ。ワタシはただ、純粋にシンちゃんのことを心配なだけなんだから」

「ハッ、どうだか」

鼻で笑うエリカを無視して、リーナはさも今思いついたかのように手をパンと叩いてみせた。

「そうだ！ せっかくこうして出会ったんだし、ワタシもシンちゃんと一緒にいて行っても良いかしら？」

「おっ？ リーナちゃんも？」

「そうそう。さつきみたいに誰かに襲われでもしたら大変でしょ？ ワタシだってそれなりに戦えるつもりよ？ どう、シンちゃん？」

「確かにリーナちゃんも一緒に来てくれたら、豚に真珠で心強いゾ」
「……もしかして『鬼に金棒』か何かと間違えてない？」

「おおっ、そうともいう〜」

「そうとしか言わないでしょ！」

漫才めいた遣り取りを繰り広げる2人に対し、エリカ達の視線は自

然と達也へと向けられた。

何を訴えているのか理解した達也は、軽く肩を竦めて2人へと歩み寄る。

「しんのすけ、どうする?」

「リーナちゃんが行きたいなら、オラは別に良いけど」

「分かった。——リーナ、来るのは構わないが単独行動はしない、いざってときは俺達の指示に従うのを誓えるか?」

「ええ、それで結構よ」

「ちよつと達也くん、大丈夫なの?」

詰め寄るエリカに、達也は答えなかった。彼女も多少は不満そうな態度を見せるも、達也が反対しなかったからかそれ以上反論することは無かった。

達也としても、リーナを連れて行くことに思うところはある。だがしんのすけの『主人公補正』が明らかに彼自身をこの事件に関わらせようと動いている中、彼の味方としてやって来たリーナを突っぱねるのは何となく躊躇われたのである。

「随分と賑やかね、何の話?」

と、そのタイミングで電話を終えた藤林がこの場に戻ってきた。

その声に達也が彼女へと視線を向けるが、彼女の表情は電話に出る前と比べて明らかに深刻なものとなっていた。本人は努めて平静を装っているようだが、観察眼に優れた達也を誤魔化せるほどではない。

しかしそんな彼女の努力もしんのすけ相手には有効なようで、彼は特に疑問に思う様子も無く彼女の質問に答えていた。

「リーナちゃんも一緒にヘンダーランドに行きたいんだって。藤林お姉さん、一緒に連れて行っても良い?」

「シールズさんも? ——あなた達も賛成なの?」

達也たちからも特に反論が無いのを確認した藤林は、何やらブツブツと独り言を呟いて、そして何やら納得した様子で小さく頷いて彼らへと向き直った。

「みんな、ここから先はへりに乗って向かうことになったわ」

次の瞬間、微かに聞こえてきたプロペラ音に全員が空を見上げると、こちらに近づいてくる2台のヘリコプターが月明かりで浮かび上がって見えた。まるで彼女の台詞に合わせたかのようなタイミングだが、単純にもうすぐ到着するから連絡してきたのだろう。

「ほうほう、今度はアレに乗ってヘンダーランドに向かうというわけですか」

「そういうこと。——それでみんな、本当にヘンダーランドに行くというのね？」

藤林の言葉に、その場にいる全員が頷いた。彼らの目には力強い光が宿っており、藤林の言葉の裏に隠された意味をキチンと理解したうえで頷いていることが分かる。本当に理解してるのか疑わしいのは、しんのすけくらいのものだろうか。

それを確認したうえで、藤林は口を開いた。

「国防陸軍少尉として、あなた方をお願いしたいことがあります」

*

*

*

「シリウス少佐、ターゲット並びに野原しんのすけと共にヘンダーランドへ向かいました」

「応答は？」

「ありません」

部下の言葉に、ヴァージニア・バランス大佐は大きく息を吐いて肩を落とした。

彼女達がいるのは、リーナ達から数百メートル離れた高速道路のど真ん中。氷の壁で遮断されたせいで大渋滞に巻き込まれたそのワゴン車は、見た目にはマスコミが使うような中継車に偽装されているが、最新鋭の機材が取り揃えられ、矢面に立つリーナを後方支援する移動中継基地の役割を果たしている。

その基地に乗っていたリーナが飛び出したのは、今から数分ほど前。スターズ総隊長「シリウス」には単独行動の権限が与えられて

いるためそれ自体は構わないのだが、許容されているからといって何をしても許されるわけではない。

ましてや、彼らの目の前で戦略級魔法をぶっ放すなど完全に予想外だった。いくらブリオネイクの使用を彼女の自主判断に任せたとはいえ、物事には限度というものがある。しかもその場には日本軍の一員である女性もいたというのだから、バランス大佐の頭は痛くなるばかりである。

——とはいえ、野原しんのすけの仲間として行動できるという点はかなり大きい。彼女もそれを狙っていたと考えれば、多少の無茶は見逃して釣りが来るほどだが……。

リーナとしんのすけが過去に出会っていた。最初にその事実が判明したときはUSNA軍上層部では大混乱が巻き起こり、本人からその詳細を聞いたはずのリーナが報告を拒否したときは連れ戻して査問会に掛けるべきだという声すら挙がったほどだ。

結局のところ、しんのすけの「主人公補正」を恐れてその主張もほとんど下火になっているが、たとえこの任務が終わってUSNAに戻ったとしても彼女の置かれる立場は微妙なものになるだろう。

——そこまでして彼女は、何を隠そうとしているんだ？

*

*

*

既に閉園時間を過ぎてほとんどの客が帰っているため、ヘンダーランドの駐車場にはほとんど車が残っていないかった。逆に今でも残っている車の持ち主は戻ってきておらず、侵入者のせいで閉じ込められたまま出られなくなっていると思われる。

しかし園内に続く入口ゲート付近は、それとは対照的にとても賑やかなことになっていた。仮設の照明によって強烈な明かりに包まれ、草色をした数多くの大型車が駐車場の白線を無視して無造作に停められ、白い布で覆われたテントが幾つも建てられている。そうしてテントの間を大人達が忙しなく行き交う光景は、その者達の服装が迷彩柄でなければ街のお祭りでもやっているのかと思うほどの騒々しさ

だ。

そんな大勢の人々で賑わう駐車場にて、更に騒々しい客がやって来た。喧しいプロペラ音と強烈な風を周囲に撒き散らしながら上空に現れたヘリコプターに、駐車場内を走り回っていた者達が足を止めて空を見上げる。

そしてその音を待っていたかのように、最も大きなテントから2人の男が外に出た。日焼けや火薬焼けによってなめし皮のような顔をした風間少佐と、相手に警戒感を与えない人当たりの良い笑顔を浮かべる真田大尉が、駐車場に着陸するヘリコプターへと近づいていく。

そうして2人が視界に捉える中、ヘリコプターのドアが開かれ、「どうっ——！」

勢いよく飛び出したしんのすけが、アスファルトの地面に見事な着地で一番乗りを果たした。思ってもいなかった意外な行動に、風間と真田が驚きで足を止める。

と、その気配の揺らぎで気づいたのか、しんのすけが2人へと顔を向けた。

「やあやあお2人さん、出迎えご苦労」

『しんちゃん、その2人偉い人っぽいけど大丈夫？』

胸を張って腰に手を回した如何にも偉い人といったポーズで2人に話し掛けるしんのすけの後ろで、メイド姿の人型家事手伝いロボット・ピクシーが呆れた表情と口調でツツコミを入れる。あまりにも人間と遜色無いその姿に、2人はまた違う意味で驚きを露わにしていた。

そしてしんのすけとピクシーに続く形で、ゾロゾロと他の搭乗者がドアを潜ってヘリコプターから降りてきた。達也・深雪・エリカ・レオ・幹比古・美月・ほのか・リーナ、そして藤林が駐車場へと下り立ち、藤林は背筋を伸ばして風間と真田へと敬礼する。

「国防陸軍少佐、風間はるのぶ玄信です」

「同じく大尉の真田しげる繁留です。この度はご協力いただき、真に感謝致します」

「うむ、よきにはからえ」

「余計なことは言うな、しんのすけ」

小声でしんのすけを注意する達也に、風間が仕切り直しの意を込めて軽く咳払いした。

「特にそちらのアンジェリーナ×クドウ×シールズくん、日本国民でないにも拘わらず我々に協力してくれるとは感謝の念に堪えない」

「いえいえ、お気になさらず。ワタシとしても、『親友』のシンちゃん
の危機とあれば喜んで協力させていただきます」

優雅な笑みを携えながら『親友』の部分強調して話すリーナに、横で聞いていたエリカが「うわあ……」とでも言いたげに引き気味だった。

そうして一通り遣り取りを終えたタイミングで、若干表情が固い藤林が話を切り出した。

「それで隊長、現在の状況についてですが」

「……ふむ、それについては実際に見てもらった方が良いだろう。――着いて早々申し訳ないが、宜しいかな？」

深刻な表情になって尋ねる風間に全員が首肯すると、彼は「こちらへ」と短く告げて自分達が歩いたルートを逆方向へと歩き出した。隣にいた真田も、そして藤林も達也たちを追い越して彼らの隣へと移動する。

そうしてしんのすけ達を引き連れた風間が、自分達が先程までいたテントを通り過ぎ、入口ゲートへと向かっていった。『ヘンダーランドへようこそ』と書かれたそのゲートはまさしく遊園地のイメージそのもので、タッチパネル式の券売機もその横に見ることができると。

そしてそのゲートまであと50メートルほどになったとき、先導していた3人の足がピタリと止まった。当然、3人について来ていた達也たちの足も止まる。

「……………」

「……………」

「……成程、こういうことですか」

「おっ？ どうしたの？ 行かないの？」

その場所に留まったまま動こうとしない風間と真田、そして何やら

納得したように呟く藤林に、しんのすけが不審な目を向けて問い掛ける。

そして彼の質問に、真田が至って真面目な表情でこう答えた。

「あそこに行かなければいけないのは分かっているんですが、どうにもあそこに行こうという気持ちにならないんです」

「はっ？ どういう意味ですか？」

疑問の声をあげるリーナの傍で、真つ先に答えに辿り着いたのは幹比古だった。

「人払いの結界ですか」

「おそろくは」

彼の言葉に、風間が頷いた。古式魔法にも似たような効果を持つものがあり、古式魔法の名門出身である幹比古にとってはまったく未知の現象というわけでもない。もっとも、明確な意思を持って進もうとする者すら足止めするほどに強力なものは、幹比古ですら聞いたことが無いのだが。

「ええっ？ でもオラは何ともないゾ」

と、風間達を追い越してゲートへと数歩足を進めたしんのすけが、クルリと軽やかに半回転しながらそんな言葉を放った。自分にはまるで影響を感じられないからか、3人に対しての不信感や猜疑心を隠そうともしていない。

それを見て、他の面々も歩き出した。そしてその全員が3人を追い越して、特に何の問題も無くしんのすけの傍へと辿り着いていく。

「うん、ワタシは何ともないわね」

「アタシも」

「俺もだな。本当にそんな結界が張られてるのか疑問に感じるくらいだぜ」

「で、でも、確かに結界らしきものは見えるよ」

冗談めかして結界の存在を疑う言葉を口にするレオに、眼鏡を外した美月が入口ゲートを見つめながらそう言った。

とはいえ、しんのすけを含む魔法科高校の全員が結界の影響を受けていないのは事実。その結果に、風間達も首を傾げるばかりである。

「もしかしたらとは思ったが、結界が適用される者とされない者で何か違いがあるのか……?」

『単純に、術者が選別してるんでしよう』

ピクシーの言葉に、全員の顔がそちらへと向いた。

『術者はほぼ間違いない、マカオとジヨマね。多分ヘンダーランド全体を囲むように結界を張って、余計な人間が入らないようにしてるんだと思う。——そしてこれだけの規模の魔法を維持できるということとは、ヘンダー城の魔力収集装置は問題無く稼働していたってことでしょうね』

「俺達はその“余計な人間”に含まれていない、ということか?」

『あなた達が選ばれたのは、あなた達自身が理由というよりも、しんちゃんの仲間だから』ってことでしょうね。マカオもジヨマもプライドが高く、負けず嫌いなどところがあるから、一度してやられてるしんちゃんへの雪辱を狙って誘ってるんじゃないかしら?』

「おおつ、だったら丁度良いゾ。早く中に入るゾ」

「ま、待って! あなた達だけなんて危険すぎるわ!」

本当に遊びに行く感覚で入口ゲートへ向かおうとするしんのすけを、藤林が慌てて呼び止めた。

「隊長、やはり彼らだけで中に入るのは危険です! この結界を解析して解除するまで待つことはできないのですか!?!」

「もちろん今も隊員に当たらせているが、結果は芳しくない。これ以上時間を掛けると、中に閉じ込められた客や従業員の安否に関わる」
「……だったらトツペマさん! あなたの力があれば——」

『時間を掛ければできなくはないかもしれない、程度の可能性ならね。それよりは中に入れる人だけでヘンダー城を壊しちゃった方がまだ可能性としては高いんじゃない?』

「だとしても、私達はただ見ているだけなんて——」

「藤林」

風間の呼び掛けは特別大きな声ではなかったが、藤林が思わず口を閉ざすほどには圧が籠もっていた。

そうして部下を黙らせた風間が、しんのすけ達へと向き直る。

「国を守る軍人として、それ以前に1人の大人として、とても情けないことを頼もうとしていることは自覚している。我々としてもできるだけ結界への対処に尽力するつもりだが、園内に取り残された方々のために一刻も早い救助が必要だ。——ぜひとも、君達の力を貸してほしい」

風間は沈痛な面持ちでそう言っ、直角に腰を折って頭を下げた。それに合わせて隣に立つ真田、そして迷いを見せていた藤林も同様に頭を下げる。そして周りでその遣り取りを見つめていた部下達も一斉に頭を下げていくことで、大の大人数十人が子供達に頭を下げるという奇妙な光景が出来上がった。

「ほいほい、分かったゾ。——それじゃみんな、出発おしんこ」
するとしんのすけが皆に呼び掛けて、その返事も待たずに入口ゲートに向けて歩き出した。その足取りが速いのは、頭を下げる風間達に居心地を悪くしたのかもしれない。

そんな彼に、エリカがフツと笑みを漏らした。
「まあ、アタシとしては兄が人質に取られてる以上、千葉家の人間としてただ見てるだけなんて真似はできないしね」

「面白いじゃねえか。異世界から来たっていう魔法使いの顔、拝ませてもらうぜ」

「現代魔法師とは違う視点があれば、未知の魔法にも対抗できるかもしれない」

「わ、私も、この『眼』があれば何か見えるかも……!」

「私だつて、しんちゃんやトツペマの役に立てるのなら……!」

「待つてなさい、吸血鬼の親玉。USNAに喧嘩を売ったこと、後悔させてやるんだから」

次々と自らを奮い立たせる言葉を口にしながら、先に歩くしんのすけへと続いていく。

深雪は無言のまま風間達にニコリと笑みを向けて、颯爽と皆の後に続く。

そして残された達也は、3人へと改めて向き直り敬礼をした。

「出動します」

「武運を祈る」

短い遣り取りの末、達也もしんのすけ達と合流した。

9人の少年少女と1体のロボットの入口ゲートを通過して園内に足を踏み入れた。

第92話 「ヘンダーランドで戦うゾ その1」

ヘンダーランドは大きな湖に浮かぶ複数の島で構成されており、正面ゲートから伸びる橋以外に入口は存在しない。ゲートを潜った来園者は橋の上を通る線路を走る汽車に乗るか、橋の下を通る湖底トンネルを歩くことで最初のエリアである「おとぎの森」に入ることができる。

どちらにしても逃げ場の無い一本道であり、もし敵が待ち伏せしていたら正面からぶつかり合うことになる。相手は未知の魔法を使うだけに、なるべく早く通り抜けてしまいたいところだ。

「ねえねえ達也くん、せっかくだから汽車に乗って行こうよ」

「何が「せっかくだから」なのか知らんが、そもそも動かせるのか?」「ダイジョーブ! ここでバイトしてたときに動かし方は教わったから!」

スキップ混じりで走っていくしんのすけに達也たちがついて行くと、子供の玩具のように原色に塗られた蒸気機関車が彼らを出迎えた。もともと本当に蒸気で動いているのではなく、あくまでそう見えるように作られただけで実際には電動らしい。

蒸気機関車の後ろにはトロッコに屋根が付いたような客席が3つ連結されているが、柵の無い開放的なシートに乗れるのは背の低い子供のみで、大人は最後尾の鉄格子に囲まれたシートに纏めて押し込められる形となる。とはいえ今の状況で律儀に檻の中に入る者はおらず、しんのすけに倣うように身長制限のバーを次々乗り越えていく。

そうしてしんのすけが運転席へと突き進んでいくと、

「ウキッ?」

運転席から猿が顔を出し、しんのすけを見るや睨みつけるような顔でゆつくりと降りてきた。服を着て帽子を被り、口に啜えた煙草から煙が一筋立ち上っている。

「えっ? まさか猿が運転してんのか?」

「本物に見えるけど、精巧に作られたロボットなんだって」

「やあやあお猿さん、緊急事態だからちよつと借りるね」

驚くレオにほのかがパンフレットから得た知識を披露する中、しんのすけが猿の脇を通り抜けて運転席へと乗り込もうとして、
バンツ——！

猿が運転席のドアを足で勢いよく閉め、そのまま睨め上げるようにしんのすけへと詰め寄っていく。それはまさしくヤンキーが喧嘩を売っているようであり、その迫力にしんのすけは「おっ？ おっ？」と戸惑いながら後ろへと追いやられていく。

「なあ。アレって本当にロボットか？」

「きつと凄いいAIを使ってるんだらうね」

ほのかが感心したように頷く横で、エリカが「仕方ないわね」とばかりに猿としんのすけの間に割って入った。

「ごめんね、お猿さん。アタシ達はこのテーマパークから悪い奴らを追い出すために、ヘンダー城に向かわなきゃいけないの。この汽車を借りても良いかしら？」

ニッコリと人当たりの良い笑みを浮かべるエリカに対し、猿は彼女の顔に視線を向け、そこからゆっくりと足先まで下ろし、そして再び胸の辺りまで視線を戻し、

「——へッ」

「おい今どこ見て鼻で笑った？ 首を切り落として本当にロボットか確かめてやろうか？」

「止めるエリカ！ 猿相手にムキになるな！」

武装デバイスを振り回すエリカをレオが後ろから羽交い締めにして止める横で、今度は深雪が猿の前に躍り出た。

「お願いします、お猿さん。汽車を貸してもらえませんか？」

体の前で手を揃え腰を折って頭を下げる深雪に対し、猿は彼女の顔に視線を向け、そこからゆっくりと足先まで下ろし、そして再び胸の辺りまで視線を戻し、

「ウツキイイイイ！」

鼻の穴を大きく膨らませて蒸気機関車顔負けの煙を吐き出すと、そのまま深雪の手を引っ張って運転席に連れ込んでしまった。

「えっ？ えっ？」

「おおつ、さすが深雪ちゃん！ お猿さんもメロメロにするなんて凄いゾー！」

「良くやったわ、ミュキ！ そのままその猿に運転してもらって！」
「へえ、本当に良く出来たロボットだね」

「まだ言うか？」

深雪を隣に座らせた猿がやる気に満ちた顔と慣れた手つきでテキパキと準備を進める間に、しんのすけ達は後ろのシート席に素早く乗り込んでいく。

ちなみに席順は、1つめのトロツコにしんのすけ・達也・リーナ・ほのか・ピクシーが、2つめのトロツコにエリカ・レオ・幹比古・美月といった感じだ。

「それじゃ、出発おしんこー！」
「ウツキイー！」

煙突からもうもうと白い煙を吐き出しながら、しんのすけ達を乗せた汽車が駅を出発した。そして程なくして、湖を突っ切る一本橋へと差し掛かる。

元々は子供が座る客席だけあって、トロツコの壁面は腰ほどの高さしかない。湖面の一本橋を走るためシートの端に座るとなかなか恐怖を感じるが、壁面に手を遣るなどしてバランスを取ればやり過ぎせる程度だ。

そうして周囲に目を光らせる達也たちだったが、特に敵の姿も無ければ汽車の進路を妨害されることも無かった。せいぜい途中で数字が大きく描かれたゲートが行く手を阻むくらいであり、それもセンサーが仕込んであるのか汽車が近づくと自動的に開き、特に何事も無く通り過ぎていく

結局汽車はそのまま一本橋を渡りきり、最初のエリアである「おとぎの森」に入っていた。先程までの開放的な湖上と一変して、木々が生い茂る見通しの悪い景色へと変貌を遂げる。

「おおっ！ 達也くん、あそこにリスが並んでるゾー！」

「しんのすけ、頼むからもっと集中してくれ」

本当にテーマパークに来たかのようににはしゃぐしんのすけに、達也

を始めとした魔法科高校の面々が呆れやら苦笑いといった反応を見せる。

しかしただ一人、ピクシーだけが彼の指差すリスを見て目つきを鋭くした。

『……今このリス、感覚共有の魔法が掛けられてた』

「感覚共有？ あのリスを通して誰かが俺達を見てたということか？」

『そういうこと。みんな、注意して』

ピクシーの呼び掛けに、皆が表情を険しくして今まで以上に周囲に意識を向ける。

そうして最初に気づいたのは、先頭の運転席に猿と一緒に座る深雪だった。

「——お兄様！ 前方から何か音がします！」

深雪の言葉に、名前を呼ばれた達也だけでなく全員が身を乗り出して前に注目した。

森を真っ二つに切り裂くように作られた線路が伸び、汽車がそれに沿って進んでいく景色が見える。それまでは大きな樹を避けるように細かく左右に振られていたが、ここからしばらくは長い直線が続く、正面の景色に限っては見晴らしの良い景色となっている。

そんな線路の先から、自分達が乗っているのと同じ汽車がこちらに迫ってくるのが見えた。

しかもその汽車が走る線路は、自分達のそれと同じである。

「ウツキイイイ!?!」

「やべえぞ！ このままじゃ正面衝突する！」

「みんな、伏せろ！」

達也の叫びに皆が（運転手の猿も一緒に）その場に伏せたのを確認した達也は、腰のホルスターから拳銃型のCADを抜き、銃口を前方の汽車に向けてトリガーを引いた。

その瞬間、達也お得意の分解魔法によって汽車が分解された。汽車のように数多のパーツによって構成された機械の類は達也にとって分解しやすい物であり、汽車だったときの加速度をそのままに切り離

されたそれぞれのパーツが、地面に落下した衝撃でさらに細かく壊れたり明後日の方向へ吹っ飛んだりする。それでも自分達へと迫ってくる、ある程度重量も強度もあるパーツについても、達也の分解魔法によつてそれ以上に細かい粉末状へと変貌を遂げる。

そうしてほとんど破壊力を伴わない物体に成り果てた元・汽車のごく一部が、達也たちの乗る汽車へと襲い掛かった。とはいえ、せいぜい砂混じりの風を浴びた程度のものでしかなく、腕で顔などを覆う程度で充分に防御できるほどだ。

「さすが達也くん！ これくらい何てこと——」

「みんな！ 森の中に誰がいる！」

達也を褒め称える言葉を口にしようとしたエリカを止めたのは、彼女のすぐ隣で体を起こしたばかりの美月だった。周囲を警戒している最中だったからか、いつも掛けているトレードマークの眼鏡を外している。

前方を指し示す彼女に皆がそちらへと目を凝らす中、ほのかがCADに手を伸ばして光波振動系魔法を発動した。要は強烈なスポットライトのようなものであり、月明かりがあまり届かない鬱蒼とした森の中が彼女によつて明るく照らされる。

そこにいたのは、高速道路でも自分達に襲い掛かってきた修次だった。いや、正確には修次の姿をした人形だ。仮にそいつが本物だとしたら、無表情を通り越して感情が欠落していると思えない彼の表情に対する説明がつかない。

そんな修次の姿をした人形が、抜き身の刀を思いつき振り上げていた。

「まさか——」

誰かが何かを口にしようとした瞬間、そして達也たちを乗せた汽車が人形の正面に差し掛かった瞬間、人形がその刀を振り下ろした。

本来の刀身ならば、線路から数メートル離れた場所に立つ人形が振り下ろしたところで、何かがあるわけではない。しかしその刀は高速道路で相対したときにも見せた魔法により、擬似的に刀身が伸ばされていた。

それによつて、汽車が引つ張つていたトロツコの1つ目と2つ目を繋ぐ連結部分の金具が、ものの見事に切断された。

「やばっ——！」

2つ目のトロツコに乗るエリカ・レオ・幹比古・美月の4人が血相を変えた。

自分達の乗るトロツコが推進力を失つたことでみるみるスピードを落としていく中、エリカ達は大急ぎで前方へと走り始めた。しかし10列ほど設置されたシート席が横幅を占めるトロツコの中では、走るというよりも「乗り越える」と表現した方が良いだろう。

普段から体を鍛えているエリカ・レオ・幹比古は順調に進んでいくものの、魔法を除けば普通の少女並の運動能力しか持ち合わせていない美月はどうしても遅れてしまう。最初に幹比古が彼女のサポートをするために遅れ始め、それに釣られてレオとエリカも2人の様子を確かめるためにどうしても足を止めてしまう。

と、そんな4人に更なる妨害の手が降り掛かる。
がさっ——。

ほんの微かな葉擦れの音と共に、修次の姿をした人形がレオ達の頭上へと躍り出た。キラリと光る刀を中段に構え、最も近くにいたレオへと狙いを定めている。

「面白え！^{おもしろ} 本当にエリカの兄貴くらいの実力があるのか確かめてやる！」

そしてレオは、足場の悪さもあつてか回避ではなく防御の選択を採った。自分が得意とする硬化魔法の力を信じ、「パンツァー！」と叫んで音声認識のCADを発動させた。

「駄目レオ、避けて！」

「伏せろ、レオ！」

しかしエリカと達也が同時に叫び、それに驚いたレオはほとんど意識を挟まず反射的にその場にしゃがみ込んだ。

そしてその直後に刀がレオの頭上を通り過ぎ、そして達也の魔法によつて人形が四肢と首と胴体の6つに分けられた。近くで見ても本物としか思えない修次の姿をした人形がシート席にボトボトと落ち

る様に、美月が思わず「ひいっ！」と悲鳴をあげる。

と、そんな攻防を挟んだせいで、レオ達のトロツコは達也たちのそれとかなり離れてしまった。少し前までならば飛び移れなくもない距離だったが、今では魔法でも使わない限り到底届かないだろう。

「お猿さん、汽車を止めて！ エリカちゃん達が——」

「駄目よ、しんちゃん！ みんなはそのまま行つて！」

運転席の猿に呼び掛けるしんのすけを、エリカが大声をあげて止めた。驚愕の表情で振り返る彼に対し、エリカだけでなくレオ・幹比古・美月の3人も彼を安心させるように口元に笑みを浮かべている。

「心配すんな、しんのすけ！ すぐに追いつくから先に行つて待つてろー！」

「大丈夫だよ、野原くん！ 視界の悪い森の中は、むしろ古式魔法師のどくせんじょう独擅場だ！」

「しんちゃん達が結界を解けば閉じ込められた人達が出られるし、外から応援が来られるようになるから！」

そうしている間にも遠くなつていくレオ達の言葉に、しんのすけが助けを求める目を達也へと向ける。

「緊急事態だ、俺達だけでも先に向かう。——あの4人なら、そう簡単にやられはしないさ」

達也がそう言ったタイミングで、線路が大きくカーブした。遠心力を感じながらしんのすけが振り返るが、4人を乗せたトロツコは既に見えなくなつてしまった。

しばらく後方の景色を見つめるしんのすけだったが、やがて覚悟を決めたかのようにキリツとした表情で前へと向き直つた。

「——アジトに向かう途中で仲間とはぐれるなんて、随分と『物語的』じゃない？」

「……とにかく今は、しんのすけの『主人公補正』を信じるしかないな」

小声で交わしたリーナと達也の会話は、2人以外には聞こえなかった。

トロツコがある程度のスピードにまで落ちると、エリカ達4人は早々に地面へと降り立った。

「すごいやエリカ、なんでさっきは止めたんだよ？　いくら偽物とはいえ、エリカの兄貴の剣を受け止めるのは無理って判断したのか？」
「魔法で刃渡りを伸ばして殺傷力を上げたとしても、あの人形の腕ならレオでも止められたでしょうね。——でもあのとき、アイツは『^へ圧斬り』を使ってた」

『^へ圧斬り』は加重系の系統魔法で、細い棒や針金に沿って極細の斥力場を形成して接触したものを割断する近接術式である。早い話が刀の切れ味を物凄く高める魔法であり、光に干渉するほどの強度があるため正面から見ると切先が黒い線になるのが特徴だ。

「もしかしたら止められたかもしれないけど、ぶっつけ本番で賭けるほど切羽詰まった状況じゃないでしょ。というか、初見の相手に硬化魔法でゴリ押すの止めなさいよ」

「おお……、悪い」

普段ならば反論の1つでもしただろうが、彼女の言うことはもつともだったためかレオは素直に謝罪の言葉を口にした。そんな2人の遣り取りに、幹比古と美月が微笑ましそうに笑みを漏らす。

「それでエリカ、これからどうする？　野原くん達を追う？」

「そうね……。普通ならばそうするんだけど——」

幹比古の問い掛けに答えている最中、エリカは唐突に発言を止めて体を反転させた。

それと同時に振り抜いた武装デバイスが、エリカの背後から猛スピードで迫っていた修次の姿をした人形の腹を切断した。短距離であれば時速120キロに達すると言われる修次のスピードを忠実に再現したそのスピードそのままに、人形の上半分と下半分が森の中へと吹っ飛んでいった。

「どうやら、向こうはそれを許してくれないみたいよ」

森の中から続々と現れる修次の姿をした人形達に、エリカは武装デバイスを構えながら回答の続きを口にした。

* * *

ヘンダーランドのシンボルであるヘンダー城は、エリアの最奥部分に位置する湖面に建つ巡回型アトラクションである。普段は城門の跳ね橋が下りて「プレイランド」とを繋いでいるのだが、閉園時間だから現在は橋が上げられて中に入ることができなくなっている。

そんなヘンダー城だが、客が入れる場所はもちろんのこと、スタッフですら滅多に入らないような場所ですらかなり作り込まれている。各部屋には家具が揃えられ、水道などのライフラインも完備しており、それこそ今すぐにでも人が住めるほどだ。

いくら「神は細部に宿る」とはいえ、ここまで作り込むのはハッキリ言えば無駄だろう。現・ヘンダーランドの創設者である北山潮が特に拘った建物らしいが、当時のスタッフによると、いざ完成した城を見た潮が「さすがにやりすぎたかもしれない」と小さく呟いたのだという。

とはいえ、まさにその拘りのおかげで、現在城を乗っ取っているマカオとジヨマは優雅な一時を過ごしていた。煌びやかな夜のヘンダーランドを眼下に望む城の窓を眺めながら、2人は互いに肩を寄せ合って芳醇な香りを漂わせる紅茶を口にすする。

丸刈り頭の金髪でダイヤのマークが入ったバレエ衣装を身に纏うマカオと、団子に結った紺色の髪とハートのマークが入ったバレエ衣装を身に纏うジヨマ。一目見れば確実に記憶に刻まれるであろう特徴的な外見は間違いなく2人オリジナルのそれであり、つまりそれは2人がこの世界の人間に寄生しなくても存在を保てるようになったことの表れである。

「失礼します、マカオ様、ジヨマ様」

ドアをノックして部屋に入ってきたのは、白い長髪にチョコキを象った髪飾りを身につけ、褐色肌で豊満の体を惜しみなく見せつける露出の多い黄色い衣服に身を包む美女。その名もチョコキリーヌ・ベスタ、マカオとジヨマの直属の部下である三幹部の1人であり、2人と同様

にオリジナルの姿でこの世界に存在している。

「野原しんのすけ一行と例の剣士を模した人形の部隊が交戦、4人ほど切り離しに成功しました」

「そう。そしたら残りは次の『ヘンダータウン』に行つたかしらね」

「人形の部隊を率いてるのはアイツだったわね。油断してハマやらかさなきや良いけど」

チヨキリーヌの報告を受けて、マカオとジヨマはそんな感想を口にした。侵攻を受けているというのに、その口調はあくまで穏やかだ。

「私も奴らの排除に向かいましょうか？」

「いいえ、あなたはこの城周辺の警備に専念してちょうだい。あなたが幹部の中で最も空中戦に向いているもの」

「『ヘンダータウン』といえば、丁度良いのがいるじゃない。それで奴らが全滅したらそれでよし、奴らの攻撃を掻い潜つて『プレイランド』に来たなら、そのときにアンタが出迎えば良いわ」

2人の指示に、チヨキリーヌは「畏まりました」と礼儀正しく一礼した。

*

*

*

乗客が10人から6人に減つた汽車は、『おとぎの森』を抜けて2つ目のエリアである『ヘンダータウン』に入った。ヘンダーランドの様々なキャラクターが住む中世のヨーロッパを模した街並みが広がるエリアであり、大小様々な建物の隙間を縫うように線路が組まれている。

普段ならば線路から見える建物からキャラクター達が生活を営む様子が見えるのだが、今は閉園時間だからか姿が見当たらない。しかしそれ自体が今はキャラクター達が寝静まつているという演出にも感じられるのは、それだけ街が細部にわたって作り込まれているからだろう。

「ほのか、パンフレットを見せてくれるか？」

「は、はいー」

力強く返事をしてパンフレットを渡すほのかにリーナとピクシーが野次馬根性丸出しな視線を向ける中、達也は今時珍しい紙のパンフレットを軽く広げて現在地を確認する。

「深雪、次のカーブを曲がった先にあるちよつとした広場で車を止めるよう指示してくれ」

「分かりました、お兄様」

運転席の隣に座る深雪は即座に返事して隣の猿に話し掛けるが、しんのすけは不思議そうに首を傾げて達也に問い掛ける。

「おつ？ このまま車でヘンダー城まで行かないの？」

「さすがにこれ以上はな。森の中だと方向感覚が狂うリスクがあるから降りられなかったが、街中ならばその可能性も少ないだろ」

達也の答えにしんのすけが納得の表情で頷いている間に、達也の指定した場所に汽車が到着した。徐々にスピードが緩やかになっていき、小走りと同じくらいになったところで皆が壁面を跳び越えて続々と降りていく。

「ウツキイ」

「えつと、お猿さん……。このメモは……。えつ？ 連絡先？」

「なんで猿がケータイ持ってんのよ。てか言葉通じないでしょ」

猿から受け取った紙片を困った顔でポケットにしまふ深雪達を残して、猿が運転する汽車はそのまま線路を進んでその場を去っていた。

達也たちは近くの建物の軒下に身を潜め、先程ほのかから受け取ったパンフレットを地面に広げて作戦会議を開始する。

「俺達が今いる場所はここ、最終目的地であるヘンダー城はここだ。

——トツペマ、城の魔力収集機能は城自体を破壊すれば止まるんだな？」

『おそろくね。とはいえ向こうもそれは承知の上だろうから、ガチガチに防御を固めてるだろうけど。誰か、超強力な魔法とか持ってない？』

ピクシーの質問に、皆の視線が自然とリーナに集まる。

正確には、彼女の持っている「杖」に。

「……まあ、多分ワタシの“ヘビィ・メタル・バースト”が一番威力があるでしょうね。もつとも、去年のハロウィンで誰かさんが発動した質量・エネルギー変換魔法の方が威力は上でしょうけど」

意味ありげな視線を達也に向けてそう話すリーナに、達也は軽く肩を竦めてみせる。

「“無い物ねだり”をしたところで意味は無いし、仮に発動できたとしても周りに甚大な被害が及ぶ可能性のある魔法を使うわけにもいかないだろう」

「ふーん、無い物ねだりねえ……」

「ねえねえ、その“ヘビィ・メタル・バンド”ってどんな魔法なの？」

何やら不穏な雰囲気が始めた2人の会話だが、しんのすけが割り込んで質問したことでそれは打ち切られた。

“バンド”じゃなくて“バースト”ね、とリーナはツツコミを前置きにして説明する。

「元々は重金属をプラズマ化して周囲に撒き散らすって魔法だったんだけど、この“ブリオネイク”っていう魔法兵器を使えば収束ビームとして放つことができるの」

「ビーム!? それってアクション仮面みたいなの!」

「そう! 実はこの魔法、まさにアクション仮面の“アクションビーム”を指して作られたのよ! もちろん、安全面も考慮済よ! ビームを放つときに軌道を設定するから周りに余計な被害を及ぼさないの! “正義の味方”は、余計な破壊はしないものなのよ!」

拳を握り締めて熱弁するリーナにしんのすけがパチパチと賞賛の拍手を贈る一方、達也は彼女の持つ“ブリオネイク”へと意識を向ける。

——ブリオネイク……Brionake……^{B r i o n a c}ブリユーナク……ケルト神話の光明神・ルーが持つ武器の名称だが、それを再現したということか?

人は名前に意味を持たせたがる生き物だ。ブリユーナクは相手を貫く光の穂先を発生させる槍とも、自在に飛び回る槍あるいは光弾とも伝えられている。おそらく後者の“自在に”という部分が肝なの

だろう、と達也は予想を立てる。

高速道路で実際に発動してみせたときの光景と相まって、達也の中で徐々にパズルのピースが組み上がっていく。

「リーナちゃんのビーム、見てみたいゾー！　ここから城に向かって撃つちやええば？」

「そう？　よーし、やってみようかしら？」

「待って待って！　攻撃をするのは城周辺の安全性とか諸々確認してからだ！」

しかし達也の考察も、2人の会話が何やら物騒な方向に進み始めたことで中断せざるを得なくなった。普段冷静な彼が目を丸くして止めに入る姿に、さすがのリーナも「じよ、冗談よ……」と先程の発言を取り下げる。

「それではお兄様、如何なさるおつもりで？」

「できる限り城に近づいて、トツペマに直接城を見てもらって確認してもらおうしかないな。異世界由来の魔法が仕込まれていても、俺達では気づかない可能性がある」

「よーし！　みんなでトツペマをお守りするゾー！」

しんのすけが拳を掲げて呼び掛けると、各々が各々のテンションで同じように拳を掲げた。最もテンションが高いリーナ、若干達也を意識しながら恥ずかしげにする深雪とほのか、そして肩を竦めて小さい動きながらも付き合っただけの達也と様々だ。

そうして当面の作戦も決まったところで全員が腰を上げて、

「――！」

達也・リーナの2人がほぼ同時に拳銃型CADを取り出し、自分達が身を潜めていた建物の向かいにある集合住宅風の建物の屋根へとその銃口を向けた。

「おおっ！　ヘンダーくんだ！」

しんのすけが喜びの声をあげた通り、屋根の上から達也たちを見下ろしていたのは、ヘンダーランドのマスコットキャラであるヘンダーくんだった。しかし遊園地によくいるような着ぐるみではなく、身長はおそらく達也たちの腰くらいで、本当にイラストが立体化したと思

える自然な “生き物感” がある。

しかしそれはあくまで動きだけの話であり、表情が歯を見せて笑うそれに固定されている辺りに、先程の修次の姿をした人形のような “作り物感” も同居していて何とも不気味だ。

「トツペマ、こいつらもマカオとジョマの手下か？」

『おそらくはね。でもこんな奴、100年前にはいなかったはずだ』
ど』

ヘンダーくんから目を離さずに達也とピクシーが会話を交わす中、ヘンダーくんが達也たちに向けて腕を伸ばして人差し指を向けた。

そして次の瞬間、人差し指の先端から野球ボールほどの大きさの火炎球が何も無い空間から生み出された。

「——魔法!？」

「みんな避ける！」

達也が呼び掛けるまでもなく、全員が即座にその場から跳び退いた。彼らが屯^{たむろ}していた場所の丁度ど真ん中に火炎球が飛び込み、爆発するように激しく燃え上がったのはその直後だった。

それを視界の端で確認した達也が、再びヘンダーくんへと目を向ける。

そんな彼が見たのは、ヘンダーくんと似たデザインをしたマスコツトキャラが多数体、ヘンダーくんと同じように屋根の上からこちらを見下ろしている光景だった。

第93話 「ヘンダーランドで戦うゾ その2」

異世界の結界魔法によって特定の人物以外の往来を禁じられたテーマパーク、ヘンダーランド。

その正面ゲートから数えて2つ目のエリアである、ヘンダータウン。

達也たちは現在その場所で、このテーマパークのマスコットキャラクターによる魔法での襲撃を受けていた。

『●▲■◆▼〜!』

意味のある言葉には聞き取れない声を叫びながら、キャラクター達が次々と魔法を繰り出していく。ヘンダーくんは掌から炎を吹き出し、ヘンナちゃんは鎌鼬かまいたちのように切れ味のある突風を浴びせ、ナンダくんは特定の領域内の重力を極端に重くし、ソーダくんは火花を散らす電気の球を空中に発生させる。

1つ1つの魔法はさほど強力なものではなく、達也や深雪にとつて対応は容易だ。分解魔法で魔法そのものを無効にもできるし、発動までの隙を突いて強力な魔法でカウンターを見舞うこともできる。

だが、数が容易ではなかった。前述のキャラだけでなく街中に住む数十体のキャラが動員されているせいで魔法の攻撃が絶えず、達也たちがいくらか反撃しても次から次へと湧いて出てくる。

しかし、そんな状況でも気づいたことがある。

「お兄様! これって——」

「ああ……。奴らを使う魔法は、俺達のそれと同じ “現代魔法” だ……!」

達也が奴らの攻撃に分解魔法で対応できるのは、その攻撃に魔法を発生させる根源である “魔法式” が存在していたからだ。高速道路でス・ノーマンと戦ったときには見られなかったそれは、達也の言葉通り、奴らの魔法が自分達の世界由来であることの証左である。

「それはつまり、奴らもエリカの兄君と同じく……!?!」

「そういうことだろうな……!」

トップエマの魂が取り憑いていたミアが第一高校にやって来てから、

マカオとジヨマ達の活動が表に出てこない代わりに魔法師の行方不明者が相次ぐ時期があった。そのときは吸血鬼の餌食になったのだろうと思っていたが、おそらくそれだけでなくこの人形達の「素材」になった者達もいたのだろう。

だとすると、エリカの兄と同じようにどこかに閉じ込められている可能性もある。とはいえ今の状況でその者達を搜索する余裕も無く、達也と深雪は迫り来るマスコットキャラを迎撃しながらエリアを離れようと奔走するしかない。

と、深雪がふと辺りを見渡して、ハッと目を見開いて達也へと顔を向けた。

「お兄様！——ほのかがどこにも見当たりません！」

「何っ——!?!」

「どうしよう……。みんなとはぐれちゃった……」

達也と深雪から数本ほど離れた通路にて、ほのかが1人、周りに怖々と視線を遣りながら小走りをしていた。

マスコットキャラ達による攻撃は、1つ1つの威力は弱くとも密度の濃いものだった。それへの対処に夢中になるあまり、他の仲間達とはぐれてしまったのだろう。もしかしたら敵側も、それを狙った襲撃だったのかもしれない。現にほのかを追い掛けるマスコットキャラはおらず、他の仲間への襲撃に集中しているようだ。

そしてほのかもそれを分かっているからこそ、なるべく早く他の仲間と合流しようと足を進めていた。しかし募っていく焦りに反して、彼女の視界が仲間の姿を捉える様子は無い。

こんな状況を、彼女は最近ネット配信のホラー映画で観たことがある。

リゾート地に紛れ込んだ殺人鬼によってパニックに陥る人々。そんな中、1人はぐれて森の中をさまざまに迷っていた女性が殺人鬼に見つかり、そういった類の映画特有の過剰演出により無惨に殺されてしまうという、まさしく「様式美」に則った内容だ。

しかしどれほど非現実的な内容であろうと、今の自分の状況に照らし合わせると途端に現実味を帯びてくる。

「おやあ、どうしたのお嬢ちゃん？ お仲間とはぐれちゃったのかい？」

「――！」

特に、自分達を狙う敵がまさにすぐ背後にいる状況ともなれば。

ほのかが恐る恐る後ろを振り返ると、絵本の中から飛び出したかのような、まさしく“生きた雪ダルマ”としか表現できない外見をしたス・ノーマン・パーがそこにいた。眉の角度くらいしか動かせる箇所が無いにも拘わらず、今の彼（便宜上そのように呼称する）は自分を嘲笑っているのだらうと不思議なほどによく分かった。

「人間の魔法使いなんざ幾ら集めても使えねえだろって思ってたが、こうしてお嬢ちゃんを孤立させるくらいの仕事はできるもんなんだなあ」

「……わ、私をどうするの？ こ、殺すとか……？」

「まあまあ、そう慌てなさんな。どうせアイツらのことだ、お嬢ちゃんを人質にでも取れば大人しく姿を見せるだらうよ。殺すかどうかは、それから決めさせてもらうさ」

ス・ノーマンが1歩近づく度に、ほのかが1歩後退る。小刻みに体を震わせる彼女の姿は、いくら一高でトップクラスの成績を修めようと普通の少女と大差無いものだった。

「だから城まで運ぶのに、ちょいとぼかし眠ってもらうぜ」

ス・ノーマンはそう言つて、空中に氷の礫つぶてを生成した。大きさはほのかが両腕を回して抱えられるくらいで、それなりの速さで彼女の細い体のどこかにでも当たるだけで簡単に気絶させられることだろう。そうして作られた氷の礫が、ほのかへ向かってまっすぐ飛んでいく。

顔を真っ青に染め上げて目を見開き、恐怖のあまり1歩も動けないほのか。

そうして氷の礫は、まったく何の抵抗も無く、ほのかの体を擦り抜けていった。

「——あん？」

ス・ノーマンが素つ頓狂な声をあげるのとほぼ同時、突然彼の体から炎が上がり、真つ赤に燃え上がった。

「アチャチャチャチャ——！」

大慌てで手足をバタつかせるス・ノーマンだったが、彼の体に纏わりつく炎はその間にもみるみる勢いを弱め、そしてすぐに鎮火した。

人体自然発火現象は前世紀から様々な場所で報告例が挙げられているが、当然ス・ノーマンはこれが自然現象によるものだとは考えていない。即座に目の前にいるのかへと顔を向けようとするが、彼女はつい先程までいた場所から忽然と姿を消していた。

そして代わりに、そこから数メートルほど横にズレた場所でブリオネイクとは別に持っていたCADを構えるリーナの姿があった。

「成程、今のはテメエの魔法か……！」

「まんまと釣れるとは思わなかったわ、雪ダルマさん」

系統外魔法、『仮装行列』。

この魔法は自分の姿を別人に見せるだけでなく、自分が今いる場所をも偽装することができる。その偽装は情報次元にも及び、達也の眼を欺いて逃げおおせたのもこの魔法によるものだ。

そして普段は架空の人物に仮装するところを、今回はほのかの姿に偽装して仲間からはぐれたように見せ掛けたのである。ちなみに姿はほのかでも声はリーナのままだったのだが、ほのかのことをよく知らないス・ノーマンはまんまと騙されてしまったというわけだ。

「舐めた真似してくれるじゃないの……！ 覚悟はできてんだろうなあ……！」

怒り心頭のス・ノーマンを眼前に、リーナは不敵な笑みを携えてブリオネイクを構えた。

「ひいつ！ な、何かさつきよりも更に増えてない!？」

「これはこれは、100年前よりも種類が豊富になってますなあ」

『本当ね、一覧表が欲しいくらいだわ』

一方その頃、本物のほのかはしんのすけとピクシーと共に、数十体にも及ぶマスコットキャラクターの群れに追い掛けられていた。

緑色のキャラが炎を吐き出し、桃色のキャラが水鉄砲を放つ。

黒色のキャラが強風を巻き起こし、銀色のキャラが地面を隆起させる。

そんな感じで各々が好きないように魔法を使うものだから、周りの建物や石畳の通路はその流れ弾を受けて大惨事となっている。しんのすけは持ち前の身体能力でアクロバティックに避けているが、ほのかはピクシーの防御魔法による補助を受けながら懸命に走るだけで精一杯だ。

「アクション・キック！」

炎を避けながら建物へと駆けていき、壁を蹴ってジャンプしながら発動した「アクション・キック」によって推進力を得たしんのすけの脚が、マスコットキャラの1体の腹に突き刺さった。そのキャラは「■◆▲●★〜！」と意味不明な悲鳴をあげ、その後ろから追い掛けている他のキャラ数体を巻き込んで吹っ飛んでいった。

『ナイス、しんちゃん！ この調子でさっさと次のエリアに——』

「ちよつと待って！ 前からも何か来てない!？」

グツと拳を握るピクシーの横でほのかがそう言って指差した先には、現在自分達を追い掛けているのと同じくらいの数のマスコットキャラがこちらに向かってくるのが見えた。ちなみにここは両端に建物が並んだ一直線の通路であり、逃げ場などどこにも存在しない。

「どどど、どうすんのしんちゃん!? このままじゃ——」

「いやあ、参りましたなあ」

慌てふためくほのかに、相変わらず呑気なしんのすけ。

そして何やら魔力を溜めている様子のピクシー。

そうして前と後ろからマスコットキャラの大群に挟まれる、まさにその直前、

「3人共！ その場から動かないで！」

どこからかそんな声が聞こえてきた次の瞬間、何も無い空中から突然現れた「何か」が次々とマスコットキャラ達に襲い掛かった。

様々な場所から様々な方向へと同時に “何か” が飛び交うその光景は、まるで彼らの周りにだけ雨が降っているかのようである。

正体不明の攻撃にマスコットキャラ達は一斉に（表情こそ笑顔のままだったが）慌てふためき、意味を成さない悲鳴をあげながら散り散りにその場から逃げていった。前と後ろからやって来た彼らが即座に後ろと前に逃げていく様に、ほのかがキョトンと目を丸くしている。

ピクシーも訝しげにそれを見つめていたが、足元に転がった “何か” を見つけてそれを拾い上げた。触れた瞬間にピクツと肩を跳ね上げて驚いた様子だったが、即座に持ち直して眼前にそれを持って来る。

「——ドライアイス？」

「良かった。みんな、無事のようなね」

ピクシーが声をあげるのと同時、しんのすけ達に呼び掛けながら通路脇の建物の屋根から姿を表したのは、まさしく遊園地に遊びに来たような私服姿の真由美だった。

重力軽減の魔法を掛けながら通路に降り立つ彼女に、しんのすけとほのかが駆け寄っていく。

「真由美ちゃん！ 土偶ですなあ」

「それを言うなら “奇遇” ね、しんちゃん」

「七草先輩、どうしてここに……!? 結界があって入れないんじゃない？」

「ああ、やっぱり結界に囲まれてたのね。何となく外に出る気になれなかったから、そんなことじゃないかと思ってたわ。——私達は元々、みんなよりも前に園内に入ったのよ」

真由美の説明に、ほのかが納得したように頷いた。

「それで、状況は？」

『結界を維持しているヘンダー城を破壊するために、できるだけそこに近づこうとしてたところ』

「了解。だったら私も一緒に行くわ」

「ほ、本当ですか!?! ぜひともお願いします!」

ほのかが真由美の両手を握り締めて、そのままブンブンと勢いよく縦に振る。あまりの勢いに、同年代と比べても小柄な真由美の体が持っていかれそうなほどだ。

「よ、よろしくね、光井さん……」

「やれやれ、困ったものですなあ」

そんなほのかに真由美は苦笑いを浮かべ、しんのすけは呆れたように首を横に振った。

*

*

*

しんのすけ達がマスコットキャラの大群に襲われていた頃、最初のエリアである“おとぎの森”では、エリカ達が複数体の“修次の姿をした人形”に次々と襲われているところだった。

最初は森の中に紛れて逃げる案も考えられたが、何の目印も無い森の中を、しかも敵の攻撃を掻い潜りながら抜けるというのは、たとえ訓練された兵士といえども至難の業だ。よってエリカ達4人は線路によって若干開けている場所を移動しながら、互いに背中合わせになる形で人形達からの攻撃に対処していた。

「ちっ……！ さすがにヤベエか……？」

とはいえ、状況は徐々に劣勢へと傾いていた。たとえ修次本人が積んできた技術が無くとも、その剣から放たれる魔法は間違はなく修次のものであり、更には数の利も相まって4人は徐々に追い込まれていた。人形にスタミナ概念が存在しないことも、その要因の1つであつたに違いない。

今はまだ目立った怪我は負っていないものの、それも時間の問題だろう。表面上は不敵な笑みを浮かべるレオだが、それについては悔しいが理解せざるを得なかった。

「おい幹比古……、あとどれくらい行けんか？」

「どうだろうね……。正直、残りの呪符も心許ないよ」

「こうなったらイチかバチか、森の中に逃げ込んでみるか……？」

ズリズリと距離を詰めようとする人形の修次からは目を離さず、レ

才は丁度自身の真後ろに位置するエリカへと問い掛けた。

しかし、彼女からの返事はなかなか無い。

「……おいエリカ、聞いてんのか？」

「あつ、ゴメン。聞いてなかったわ」

「おい！」

「だからゴメンって。——まあ、大丈夫でしょ」

直情的なように戦闘時には頭の回転が早い彼女らしからぬ楽観的な返事に、レオは一瞬だけその表情に怒りを覗かせるが、すぐさま何かに気づいたようにそれを改めた。

「……何か策があんのか？」

「とりあえず、アタシが向いてる方の人形を全力で潰すことだけ考えて」

視線を固定させたまま、レオも幹比古も彼女の指す方へと意識を向ける。直接的な戦闘能力が無い美月も、いつでも動けるように心構えだけは済ませておく。

エリカが地面を蹴って前へと飛び出したのは、それから数秒ほどのことだった。

「——！」

武装デバイスを通して発動した魔法で一気に加速し、驚きを表すように目を丸くする修次の人形へと詰め寄っていく。剣の柄を握り締める右腕が迎撃に動くが、エリカの優れた動体視力はそれが間に合わないことを瞬時に判断した。こういったところからも、目の前の人形があくまでも偽物ではないことがよく分かる。

エリカが人形を斬り伏せるのと同時に、レオと幹比古と美月が彼女の後を追う。美月はとにかく走ることに神経を集中、レオと幹比古が他の人形への動向に注視する。

彼らを取り囲む檻の一部が瓦解したことで、4人は脱出に成功した。とはいえ人形達も即座に4人を追い掛け始め、中には魔法を発動しようとする者もいる。

そんな中、4人の先頭を走るエリカが、正面の空間に向かって大声で叫ぶ。

「お手数をお掛けします！——十文字先輩！」

その瞬間、大柄な体からは想像もつかない機敏な動きで姿を表したのは、まさしく遊園地に遊びに来たような私服姿の克人だった。

エリカ達と擦れ違い、こちらに向かつてくる人形達へスツと右手を伸ばす。

その瞬間、自分とエリカ達を取り囲む魔法障壁が現れた。対物障壁自体は実戦魔法師として平均的な技能を持つ者なら普通に使いこなせる代物だが、『鉄壁』の異名を持つ十文字家の当主代理・克人の手に掛ければその強度も段違いとなる。

当然、こちらに向かつていた人形達の足はそこで止まり、擬似的に伸ばした刃渡りで力任せに振り抜いた攻撃も障壁に阻まれてこちらまで届かない。

「感謝します、十文字先輩！」

そして克人の横から、呪符を構えた幹比古が障壁の内側から魔法を発動した。味方が障壁に守られているのを良いことに、空中に発生した電撃の球から放たれた雷には一切の容赦が無く、秒速10万キロメートルの電撃が人形達に一齐に襲い掛かった。

それにより人形達の動きは鈍ったが、残念ながらそれで倒れることは無く未だに2本足で立ったままだ。人間ならば間違いなく致命傷になるが、生物としての生命器官を持たない人形ではそう上手くはいかないということか。

「サンキュー、幹比古！」

とはいえ、それはレオ達も織り込み済みだ。克人の障壁は指向性を持つため、外からの攻撃は防ぐが中からの攻撃は邪魔しない。障壁に一切進路を阻まれずに飛び出したレオとエリカが、電撃を受けて動けなくなった人形達を次々と殴りつけ、斬り伏せていく。

更には克人による、障壁で対象物を叩き潰す魔法『フランクス』による援護も手伝って、程なくして現在姿を表している人形全てが戦闘不能となった。

周りの気配を探って当面の安全は確保したことを確認してから、4人は克人へと向き直った。

「すみません、十文字先輩。おかげで助かりました」

「いや、構わない。それよりも状況の説明を頼む。コイツらは普通の人間ではないのか？」

「えっと、私の兄が敵に捕らえられまして、異世界の魔法によってその能力がコピーされた人形だそうです。首の後ろにチップがあつて、それを外すことによって完全に元の人形に戻ります」

「成程、不思議なものだな」

なかなかのトンデモ技術をその一言で済ませた克人が、地面に倒れる人形の1体に近づき、首の後ろに貼られたチップを剥がした。シユルシユルと体が縮み、片手で持てる大きさのデッサン人形らしき外見になったときには僅かに目を丸くしていたが、特に声をあげることもなくその様子を眺めていた。

そうしてエリカ・レオ・幹比古の3人も人形を元に戻そうと動き出したそのとき、

「あつ、ちよつと待つてほしいんだけど……」

他ならぬ美月が、3人を呼び止めた。3人だけでなく、克人も動きを止めて彼女を見遣る。

「どうしたの、美月？」

「えっと、さつき戦つたときは見間違ひかなつて思つたんだけど、その人形から^{プシオン}靈子に似た光が紐みたいに細長く出ていて……」

「プシオン？ 紐みたいって——」

「柴田さん！ それは本当かい!？」

幹比古が血相を変えて美月に詰め寄り、それに対して美月が顔を真っ赤に染め上げる。そしてその反応で我に返つた幹比古が同じく顔を真っ赤にして体を仰け反らせ、そして互いに気まずそうに目を逸らし——

「はいはい、ラブコメは後でやる！ それでミキ、何に気づいたの!？」
「ラブコメって——え、えっと、トップパマの説明で『オリジナルと人形の間^に魔法的な繋がりがあつて、それを通して能力が発動している』って説明があつただろう?」

「そういうことか！ つまり美月が見てるその光がまさに『魔法的な

繋がり”ってヤツで、それを辿って行けばエリカの兄ちゃんがいる場所
所に辿り着くって寸法だな!”

「やったじゃない、美月! お手柄よ!”

破顔して抱きついてくるエリカを、美月は仰け反って倒れそうにな
りながらギリギリのところまで受け止めた。いくら気丈に振る舞って
いても身内の安否が気掛かりだったのだろう、ホツとした様子のエリ
カに美月も嬉しそうだった。

「それじゃ柴田は案内を頼む。千葉と西城は彼女の護衛、吉田は俺と
周囲の警戒だ」

「はいっ!”

さすが最上級生というべきか、それとも克人だからこそ成せる業
か、彼の端的な指示に1年生4人が一斉に返事をした。

*

*

*

「あつたあつた、あれがヘンダー城だゾ」

「へえ……! 夜だからかな、凄く綺麗だね……!」

正面ゲートから2つ目のエリアである“ヘンダータウン”を抜け
た先、3つ目の“プレイランド”とを繋ぐ橋の上に到着したしんのす
け・ほのか・真由美・ピクシーの4人(3人と1体)は、湖面に設置
された照明でカラフルに彩られたヘンダー城を眺めていた。橋の欄
干に身を乗り出すしんのすけはともかく、ほのかもテーマパークのシ
ンボルを目の前に先程までの緊張感を緩ませて景色に夢中になっ
ている。

一方、真由美とピクシーは2人ほど油断しておらず、真由美は周囲
の警戒を、ピクシーは真剣な顔つきでヘンダー城をつぶさに観察して
いる。

「どう、トップマさん?」

『やっぱり、相当頑丈な結界で守られてるわ。ちょっとやそつとの魔
法じゃビクともしないでしょうね』

「つまりそれは、魔法自体を無効にするような効果じゃないってこと

ね？」

『確かにそれは救いだっただけど、本当に強力な魔法じゃなきゃ無理よ？』

「大丈夫！ リーナさんの戦略級魔法があれば、きっとその結界もぶち破れるわ！」

力強く言い放つ真由美に対し、ピクシーはどうにも信じ切れないといった表情だった。

そんな彼女の反応に真由美も一抹の不安を抱くが、けっしてそれを表に出すことは無かった。

「しんちゃん、そろそろ下りなさい」

「ほいほい」

もつとも、未だに景色に夢中なしんのすけに注意するという、一種の現実逃避と思われるでも仕方ない行動をしてしまったこともまた事実だった。

「あらあら、しんちゃんもトツペマも、随分と印象が変わったじゃない」

白い長髪にチョコキを象った髪飾りを身につけ、褐色肌で豊満の体を惜しみなく見せつける露出の多い黄色い衣服に身を包む美女が、そんな4人を上空から眺めていた。

第94話 「ヘンダーランドで戦うゾ その3」

「美月、この道をまっすぐで合ってる？」

「う、うん……。大丈夫、このまま進んで」

エリカを先頭とし、そのすぐ背後に美月とレオ、そしてその後ろに幹比古と克人という陣形を組んで、エリカ達は“おとぎの森”で見つけた道を突き進んでいく。

道といつても草木が僅かに禿げていることでようやく識別できる、謂わば“獣道”と称されるものであるが、テーパーパーク内にある人工の森でそれが見つかるということは、最近人間がそこを通ったという証明になる。美月の特殊な眼だけが捉えることのできる“道標”も併せて考えれば、それが彼女達の目的の人物である可能性は大いにあるだろう。

と、そんな中、とうとう耐えきれないといった感じでレオが口を開いた。

「……なあエリカ、よく平気でいられるな」

「はっ？ どういう意味よ、レオ？」

その問い掛けに最初は意味が分からない様子だったエリカだが、レオの視線の先を目で追ってその意味を察すると、ハントと鼻で笑うように顔をしかめた。

「どれだけ姿形が似てようと、所詮コイツは本物じゃないでしょ」

「いや、そりやそうなんだろうけど……」

それ以上言葉を紡ぐことができず、レオはエリカから顔を逸らした。煮え切らない様子の彼に苛立ちを覚えるエリカだったが、それを横で聞いていた美月と幹比古はむしろレオの方に同意するように苦笑いを浮かべている。

現在彼女達は、美月は修次の姿をした人形からフシオン霊子に似た光が紐状に出ているのを見つけたため、それを辿ることで本物の修次を見つけ出そうとしている。最初は光を辿れば良いのだから人形はその場に捨て置こうとしたのだが、その隙に人形が破壊されてしまうかもしれないと危惧したエリカが人形も一緒に持つて行くことを提案した。

しかし人形は基本的に首の後ろにあるチップを剥がさない限り、たとえば体が欠損しても動き続けようとする。なので余計な抵抗をしないよう、案内役に選んだ人形の首から下を切り落とし、発案者であるエリカがそれを持つことにした。

つまり今の彼女は、どう見ても自分の兄にしか見えない奴の生首を、髪の毛部分を握り締めて提灯のように持つていているという光景になる。しかも人形にはまだ意識があり、無表情ながらも目や口を動かしている状態だ。ハッキリ言って、ホラー以外の何物でもない。

「そんな馬鹿なこと言ってる内に、ほら、もしかしてアレじゃない？」
エリカがそう言って、手に持つ修次の姿をした人形の生首で前方を指し示した。

森が開けてちよつとした広場となつていているその場所に建つそれは、メルヘンチックなおとぎの森の中には似つかわしくない現代的なプレハブの建物だった。自分達とは反対側に細い道が延びているその建物は、おそらくスタッフルームの役割を果たしているのだろう。

「うん、間違いない……！ あの建物から光が伸びてるよ」

「つまりあの中に、アタシの兄貴がいるってことね」

「そして、その兄貴を見張ってる奴もな」

美月の言葉にエリカが不敵な笑みを浮かべ、レオが同じ類の笑顔で情報を補足する。

とはいえ、このまま闇雲に突っ込めば良いというわけではない。

「十文字先輩、どうしますか？ おそらくここのスタッフが人質に取られている状況だと思われませんが」

「ふむ、そうだな……。まずは中の状況を知ることが先決ではあるが」
幹比古の問い掛けに、克人も顎に手を当てて思案顔になる。

このまま作戦を練る時間になるかと思われた、そのとき、

「待って！ 誰か出てくる！」

エリカの呼び掛けに、全員が建物へと注目する。彼女の言葉通り、スタッフルームの建物のドアが開かれ、中から一人の男が姿を現した。

シルクハットにタキシード、そして左目にモノクルを掛けたその出

で立ち、サーカスの団長辺りにでもいそうな風貌だ。スタッフフルムから出てきたところを見れば、それこそヘンダーランドのスタッフの一員だと考えることもできるだろう。

「……あの人に、光が繋がってる」

美月の一言が無ければ。

「——皆さん、そこにいるのは分かっていますよ。出てきたら如何です？」

「——！」

明らかにこちらに顔を向けて話し掛けてくる男に、レオ・幹比古・美月の3人が息を呑む。

それに対し、エリカと克人は尚も表情を崩さない。

「ここは本当の森じゃなくテーマパークよ、監視カメラの1つや2つは普通にあるでしょ」

「俺が前に出よう」

有無を言わさない威圧感と共に、最後尾にいた克人が前へと躍り出た。そしてそのまま森を抜けて広場に足を踏み入れたことで、男が肉眼でも克人を認識する。

「十文字克人という。名前を窺いたい」

「これはこれはわたくし親切に。私、マカオ様とジヨマ様に仕える幹部の1人、クレイ・G・マッドと申します」

その姿と違わない紳士的な立ち振る舞いで、その男——クレイ・Gは口元に笑みを携えながら頭を下げてそう名乗った。

「テーマパークのスタッフが中にいると思うが、今はどうなっている？」

「我々の魔法で眠らせております。体に害は無いのでご安心を」

「おまえ達の狙いは何だ？」

「全てはマカオ様とジヨマ様のご意志の儘に。私はただ、それを手伝うのみでごいます」

「100年前はいざ知らず、ここは既におまえ達のような異界の者が

住む場所ではない。早々に立ち去ってもらおうか」

「冗談を。ならば私からも申し上げましょう。——ここは既に我々の場所だ、今すぐここから消えろ」

それまでずっと閉じていた左目を開けて、クレイ・Gはそう答えた。左目は義眼となっており、よく見れば瞳の部分に握り拳のイラストが描かれている。おそらく、ジャンケンのグーを表しているのだろう。そしてそれが合図だったかのように、周辺の森に紛れていた修次の姿をした人形が一齐に飛び出してきた。その数、およそ4体。

「っしやあー！ 行けオラア！」

そしてそれと同時に、レオとエリカが獰猛な笑みと共に飛び出してきた。レオは拳を握り締め、エリカは武装デバイスを握り締め、それぞれ手近な人形へと突っ込んでいく。

そんな2人に克人は視線を遣ることもなく、スタンバイ状態で待機させていたCADから起動式を読み込んで魔法を発動した。克人が、もとい十文字家が最も得意とする多重障壁魔法であり、それが一瞬でクレイ・Gを取り囲むように前後左右4枚に張られた。

「何っ——!?!」

驚きの声をあげるクレイ・Gに対し、克人が更に障壁を追加した。無色透明なそれは奴の頭上に突然現れ、対戦車携行ミサイルを物ともしない強度に任せて押し潰そうと襲い掛かる。克人の得意とする魔法“フランクス”であり、横浜事変の際はこの魔法で敵を戦車ごと叩き潰した、シンプルで力任せだからこそ絶大な効果を発揮する代物だ。

これによつてクレイ・Gが無力化される——と思われた。

「嘗めるな、クソガキイ！」

先程までの紳士的な振る舞いから一転、粗野で獰猛な言葉遣いでそう叫んだ次の瞬間、クレイ・Gの体が一気に膨れ上がってタキシードを引き裂いた。散り散りになった衣服は炎で焼かれたかのようにその場から消え失せ、“N”と描かれたタンクトップ一丁の姿となる。

しかしそれ以上に変わったのは、見た目の“種族”だった。全身から青みがかかった体毛がビッシリと生え、頭頂部から三角形の耳が伸

び、口元が前に伸びて鋭い牙が生え揃う。どこからどう見てもそれは二本足で立つ狼であり、まさしくフィクションの中でしか見たことのない「狼男」だった。

「うらあつー！」

狼の姿となつたクレイ・Gが、上から落ちてくる魔法障壁を雄叫びと共に受け止めた。傍目には奴が独りで重量挙げのジエスチャーでもしているようにしか見えないが、戦車すら耐えきれなかった押し潰しを受け止める怪力に克人が目を僅かに見開いた。

ならば更に重量を上げようと、克人が起動式の変数を変更しようとして、

「十文字先輩！」

「――！」

レオが相手していた人形の1体が彼の攻撃を逃れ、克人へと攻撃を仕掛けてきた。間隔が未だに離れている状況で刀を水平に構えて振り抜こうとする人形に、克人は咄嗟に障壁を自身の横に立て掛けるように形成する。

次の瞬間、魔法で擬似的に刃渡りを伸ばした人形の一撃が、克人の障壁に阻まれた。そして人形はその隙に、背後からのレオの攻撃によつて大きく吹っ飛ばされていった。

克人はそれを、僅かに視線を動かすことで見届ける。

バリインツ――！

そして次の瞬間、今度は別の方向からガラスのような物が割れる音が響いた。

克人がそちらに目を向けると、クレイ・Gが魔法障壁で囲まれたエリアの外側にいるのを見つけた。先程の音は奴が魔法障壁を打ち破った音なのだろうが、対戦車携行ミサイルを物ともしない強度にも勝るその力は改めて克人を驚かせるものだった。

交差する、2人の視線。

クレイ・Gがニヤリと不敵な笑みを浮かべた瞬間、その強靱な脚力によつて生み出された推進力によつて克人との距離を一気に詰めた。突然目の前に現れた敵に克人の表情に明らかな動揺が生まれ、クレ

イ・Gは刃物のように鋭利な爪を携えた右腕を大きく振りかぶる。

しかし克人にその爪が届くまであと1歩というところで、ふいにクレイ・Gが地面を強く踏み締めて大きく後ろに跳び退いた。

そしてその瞬間、一瞬前まで奴がいた場所に雷が落ちた。もちろんそれは自然発生したものではなく、魔法で制御されているためすぐ近くにいる克人には火花の1つも届かない。

「チッ！ 嘗めた真似してくれるじゃねえか！ ——おい、人形共！ 森の中にいるガキを探し出してブツ殺せ！」

「させるわけないでしょ、狼男！」

クレイ・Gの指示を受けて森へと駆け込もうとした人形達の進路を、武装デバイスを構えたエリカが先回りして塞いだ。そうして踏鞴たたらを踏む人形達の間を突いて、エリカが距離を一気に詰めて腰の辺りで一刀両断していく。

「良い気になるなよ、ガキ！ ——オイおまえら、出てこい！」

クレイ・Gの呼び掛けに応えて建物から出てきたのは、先程エリカが切り捨てたのと同じ、修次の姿をした人形だった。戦闘不能になった2体の人形が即座に補充されたことで、ほぼ一瞬で形勢が元に戻る。

「この……！ 人の兄貴を消耗品扱いすんじゃないわよ！」

エリカの叫びは、この場にいる全員の偽らざる本音だった。

*

*

*

正面ゲートから数えて3つ目のエリアである「プレイランド」は、絶叫マシーンからメリーゴーラウンドまで揃う一般的な遊園地の役割を担う場所だ。100年前と同じデザインに造られているが、当時の近未来的なコンセプトは100年後の現在でも充分通用し、子供だけでなく大人達も童心に戻って楽しむことができる。

「えっ？ 狼男？」

「そつ。ガオーって吠えたら服がバリバリバリって破れて、普通のおじさんだったのに狼男に変身するんだゾ」

「……今日は満月じゃないから、大丈夫かしら？」

『ああ、満月とかは関係ないのよ』

そんなエリアを歩く間、ほのかと真由美はしんのすけとピクシーからマカオとジヨマの部下である三幹部について教えてもらっていた。そしてその1人であるクレイ・G・マッドのファンタジー感溢れる情報に、彼女達はさっそく首を傾げている。

『今更、狼男くらい何てことないでしょ。喋る雪ダルマに比べたら遙かにマシなんだから』

「んもう、ほのかちゃんも真由美ちゃんも頭が固いですなあ」

『そうそう。しんちゃんと1年くらい一緒にいるんでしょ？　こういうこと、今まで1回も無かったの？』

「いや、せいぜい学校がテロリストに襲われたり、魔法競技大会で変な奴らに狙われたり、論文の発表会をしてたら会場だった街が外国人に攻められるくらいだったから……」

『あなた達、呪われてるんじゃないの？』

ピクシーが目を丸くして問い掛け、ほのかも「そうかも……」と気落ちして目を伏せる。

と、そんな場合じゃないと真由美が代わりに口を開く。

「えっと、その狼男がクレイジー・マッドで——」

『真由美ちゃん、グレイ・G・マッド』だから』

「あつ、そうだった。それで喋る雪ダルマが、えっと、スノーマン・パーで——」

「真由美ちゃん、ス・ノーマン・パー」だゾ」

「ややこしいわね！　とにかく、その2人が「グー」と「パー」ってことは、もしかして最後の1人が「チョコキ」ってこと？」

『さすがね、その通りよ』

ピクシーに褒められた真由美ではあるが、至極簡単な言葉遊びのため特に嬉しいとかは無かった。とはいえそれを素直に表すわけにもいかず、無難に愛想笑いを浮かべておく。

「オラ、よく憶えてるゾ！　チョコキのお姉さん、すっごく美人だったな
〜」

『フルネームは“チョコキリーヌ・ベスタ”。三幹部の中では扱える魔法の数が最も多くて、しかも飛行魔法も得意だから空中戦もお手の物。できればあまり相手にしたくないわね』

「すつごく美人だけど、すつごく性格も悪いんだゾ。トツペマからトランプを奪うために、5歳だったオラを人質にしたんだから」

『それはコロツと騙されるしんちゃんにも問題があるんじゃない!』

苦笑い混じりでツツコミを入れている最中だったピクシーだが、途端に口を閉ざして真剣な顔つきになると、素早く体を反転させて右腕を正面にかざした。

『トツペマ・マペット!』

自身の名を冠する呪文を口にしたその瞬間、自分としんのすけ達の正面に半透明のバリアが現れた。緑色に黄色の星マークがあしらわれたバリアによって、背後から自分達へと襲い掛かっていたビームがその行く手を阻まれる。

「おっ!? 何だあ!?!」

「みんな! あそこを見て!」

しんのすけが驚きの声をあげ、真由美が空を指差して呼び掛ける。

地面から10メートルほどの高さには、白い長髪にチョコキを象った髪飾りを身につけ、褐色肌で豊満の体を惜しみなく見せつける露出の多い黄色い衣服に身を包む美女が浮かんでいた。それは比喻表現などではなく、背中に翼も無いのに足場も何も無いその空間で直立のままフワフワと漂っているのである。

「トツペマ! もしかしてあの人が、さつき言ってた——」

『そう。アイツがそのチョコキリーヌ・ベスタよ』

「ハアイ、トツペマ。随分とイメチェンしたじゃない。そっちの方が可愛らしくて良いわよ」

ピクシーが顔をしかめて「余計なお世話よ」と返すが、チョコキリーヌはそれを無視して彼女の隣に立つしんのすけへと視線を向けた。

「しんちゃんも久し振り。すっかりイケメンになっちゃって、お姉さん惚れ直しちゃうかも」

「ホント!?! いやあ、照れますなあ」

「ちよつとしんちゃん！ 早速絆されなさいで！」

フラフラとチョコキリーヌへと歩いていきそうになるしんのすけを、ほのかが襟首を掴んで懸命に引き戻した。

その遣り取りに頭を抱える真由美に、ピクシーが小声で話し掛ける。

『私がアイツの相手をするから、しんちゃんをお願い』

「……あなた1人でどうにかなる相手なの？」

『アイツの空中戦に対応できるのは、この中では私だけでしょ』

「空は飛べないけど、私だってサポートくらいはできるわよ」

『……期待して良いのね？』

若干不安を隠し切れないピクシーの問い掛けに、真由美は自信たっぷりに胸を張って頷いた。

と、そのとき、

「あらあ、何2人でコソコソ話してるのかしら？」

ピクシーと真由美に向けて、チョコキリーヌが右手をかざした。魔力が右手に集まるのを感じ取ったほのか、顔をギョツと引き曇らせてそちらへと目を向ける。

ピクシーも真由美も、未だチョコキリーヌには視線を向けていない。

ほのかが危険を知らせようと口を開き――

「きゃっ！」

チョコキリーヌが悲鳴をあげ、魔法の発動をキャンセルして体を仰け反らせた。

ほんの一瞬前まで彼女がいた空間に、高速で「何か」が横切った。それはマスコットキャラ達を追い払うときにも役に立った、ドライアイスだった。

『しんちゃん、ほのかちゃん！ ここは私達が引き受ける！』

「えっ！ でも、トツペマ――」

「大丈夫よ、しんちゃん！ トツペマさんには私が付いてるから！」

「行こう、しんちゃん！ 七草先輩とトツペマなら大丈夫だから！」

「――分かったゾ！」

真由美とほのかの説得に、そしてピクシーの力強い笑みに、しんの

すけは踵を返して駆け出していった。そして一瞬遅れて、ほのかもその後をついていく。

『悪いけど、アンタはここで足止めさせてもらうわ』

「言うようになったじゃない、お人形ちゃん？」

睨み合うピクシーとチョコキリーヌの会話と共に、開戦の火蓋が切つて落とされた。

*

*

*

「このっ！」

リーナが掛け声混じりで発動したのは、高速道路での攻防で深雪が披露した領域魔法“ムスペルスヘイム”。雪ダルマならば溶かしてしまえば良いという安直な理由によるものだが、実際に効いている様子なので彼女は迷わずそれを選択した。

しかしその瞬間、ス・ノーマンの周囲で白い煙のようなものが発生して、途端に奴の姿を覆い隠してしまった。目を丸くするリーナだが、それは有毒性のある煙などではなく単なる水蒸気であり、おそらく奴が発動した冷却魔法と相殺されたことによる現象だと瞬時に理解する。

ブオンツ——！

そしてその直後、水蒸気に覆われた空間からス・ノーマンが飛び出した。足元の靴はローラーブレードに変形しており、高速道路を走る車にも引けを取らないスピードでリーナの正面から側面へと回り込む。

リーナがそれを目で追う中、ス・ノーマンがパーを象った右手を彼女に向けて掲げ、そこから氷の槍が勢いよく飛び出してきた。

「くっ！」

リーナが顔をしかめて半歩後退り、その僅かに稼いだ距離の合間で防壁魔法を発動させる。氷の槍は彼女に届く寸前で現れた対物防壁に阻まれ、粉々に砕けながらその場へと崩れ落ちていく。

しかし、リーナが胸を撫で下ろすことは無い。

「オラオラアッ！」

ス・ノーマンが雄叫びをあげながら、リーナへと突っ込んできたからである。

背丈だけでも2メートルを超え、雪ダルマだけあって横幅もそれなりにある奴の体格はそれこそ相撲取りに例えられるほどであり、そんな奴が時速100キロ以上のスピードでぶつかってくるとなれば、その衝撃はどれほどのものか計り知れない。リーナは対物障壁を重ね掛けしてそれを迎え撃つが、真正面から放たれる衝突音と衝撃に彼女は苦悶の表情を浮かべた。

「――！」

そしてその瞬間、《違和感》を覚えたリーナは自己加速術式を発動、対物障壁を置き去りにして数メートル後方へと跳び退いた。

「……成程、あまりあなたを近寄せない方が良さそうね」

「おっ、気づいたか。俺の体温はマイナス100度の超低温状態だからな、下手に触るとその瞬間にヤベエことになるぜ」

ス・ノーマンはおそらく表情があればニヤリと笑みを浮かべてそんな声色でそう言うのと、その瞬間にブオンツ！ とエンジンのような音を鳴らしてリーナとの距離を詰めてきた。

リーナは即座に後ろに跳び退きながら、懐から素早く取り出した5本のスロージングダガーを一振りで投げる。奴の周囲にはバリアが張られているのか、ダガーは奴の体に当たる直前に進路を阻まれて地面へと落ちていく。ス・ノーマンもダガーには一切目もくれず、彼女へとまっすぐ突っ込んでいく。

「アクティベート、《ダンシング・ブレイズ》！」

しかしリーナがそう叫んだ瞬間、ダガーは上から糸で吊られたようにフワリと宙に浮き上がり、再びス・ノーマンへと襲い掛かった。さすがにこれは奴も「何っ!？」とダガーに一瞬視線を向けたが、即座に視線を外してリーナへと向き直った。

「何度やっても同じだバーカ！ 俺にはバリアがあるんだか――ぶべっ！」

威勢良く啖呵を切っていたス・ノーマンだったが、見えない壁に思

いつきり体を叩きつけたことで無理矢理中断された。おそらく先程ダガーに気を取られたほんの一瞬の内に、進路上に障壁魔法を施したのだろう。

激突によるダメージはほとんど無かったが、ス・ノーマンを激昂させるには充分だった。

「テメエ、虚仮にしやがって許さねえ——」

ズドオンツ——！

しかしその台詞も、突然の横槍によって中断された。

障壁魔法によって行く手を阻まれたス・ノーマンに向けて、強力な雷が落ちたのである。爆発音にも似た強烈な破裂音と共に周囲が昼間のように明るく照らされ、飛び散った火花が引火してあちこちで火の手が上がっている。

空には満天の星が煌めいており、雷を落とすような雲などどこにも見当たらない。仮にそんなものがあつたとしても、敵が立ち止まって自分が障壁魔法で守られている絶好のタイミングで敵目掛けて雷が落ちるような奇跡が都合良く起こると思えない。

「手助けはいらなかつたかしら、リーナ？」

「一応礼は言っとくわね、——ミュキ」

リーナが視線を向けた先には、ブレスレット型CADを構える深雪がいた。背筋を伸ばして敵を見据えるその姿は、レイピアを掲げる男装の麗人を彷彿とさせる凛々しさを思わせる。

「わざわざ戻ってきてくれたの？ 愛しのお兄様と一緒に、シンちゃんをサポートに回つてると思つてたけど」

「リーナ、お喋りは後よ。——奴はまだ、倒れていないのだから」

深雪の言葉に、リーナが魔法障壁の向こう側へと目を向ける。

雷の直撃を受けたス・ノーマンは、怪我を負った様子も無くそこにいた。

「おいおい、可愛い子ちゃんもう1人やって来るとは、こりや人生最大のモチ期到来かあ!」

楽しそうに声を張り上げるス・ノーマンに、リーナと深雪が肩を並べて相對する。

ヘンダータウンでの戦いは、新たな局面へと突入した。

* * *

「おおつ、やっと着いたゾ」

「し、しんちゃん、足、早いね……」

ゼエゼエと息を切らすほのかを連れだしたしんのすけが立っているのは、〃ヘンダー城入口〃と書かれた看板が立てられた湖沿いの一画だった。色取り取りにライトアップされた城が真っ黒に塗り潰された湖の上に浮かび上がって見え、まさしく幻想的な空間を作り出している。

「いやあ、綺麗なものですなあ」

「でもこれが、ヘンダーランドを包み込む結界の源なんだよね？ どうすれば良いのかな……」

2人は湖越しに、ヘンダー城の観察を始めた。営業時間内ならば城門の跳ね橋が下ろされてプレイランドとの架け橋になっているのだが、今は橋が引き上げられて完全に閉じているため蟻の入る隙間もない。城は特に魔法的なもので守られている様子は無いが、異世界の魔法に関する知識など持ち合わせていない2人が気づかない細工が施されていたとしても不思議ではない。

「うーん、よく分かんないからさ、とりあえず壊しちゃってみない？」

「えっ!? だ、大丈夫かな……? どんな魔法で守られてるか分からないし、下手に攻撃して何かあったらマズくない……?」

「ええ? それじゃほのかちゃんは、トツペマがここに来るまで待つてろって言うの? せっかくトツペマと真由美ちゃんが足止めしてくれてるのに意味無いゾ」

「た、確かにそうだけど……」

腕を組んで考え込むしんのすけとほのかだが、悩んだところで答えが出る気配は無い。

やがて悩むのにも疲れたのか、しんのすけは大きく息を吐いて腕組みを解いた。

「まあ良いや、とりあえず撃つてから考えるゾ」

しんのすけはそう言うのと、ベルト型のCADを弄り始めた。

「えっ? しんちゃん、撃つって何を?」

「オラの取って置き の『必殺技』だゾ。いざつてときじゃないと撃つちやダメってボーちゃんに言われてるけど、まあ今は『いざつてとき』に入るでしょ」

「えっ!? そ、そんなの撃つて平気!? もしお城のバリアが反射系の効果があつたら、そっくりそのまま返ってくることになるんじゃないの!?!」

「ダイジョーブ。もしそうなつたら、そのときはそのときだゾ」

「全然大丈夫じゃない!」

慌てふためくほのかを気にすることなく、しんのすけはCADの操作を続け、

「おっ?」

キュラキュラと鎖が伸ばされる音に合わせて、閉じられていたヘンダー城の跳ね橋がゆっくりと動き出した。思わず動きを止める2人が見守る中、その橋がプレイランドとヘンダー城の間を繋ぐ道となる。

それと同時に、橋に塞がれていたヘンダー城の入口も開放された。

「ほうほう。——んじゃ、お邪魔しまゝす」

「えっ!? ちょっと、しんちゃん!」

先程と違って特に悩む素振りも無く、しんのすけは足早にその橋を渡り始めた。ほのかが慌てて引き留めようとするが叶わず、彼の後についていく形となっている。

そして2人が城の中へと足を踏み入れてその姿を消した頃、キュラキュラと鎖を引き戻して跳ね橋が上げられ、ヘンダー城は再びその入口を閉ざしていった。

第95話 「ヘンダーランドで戦うゾ その4」

異世界の結界魔法に阻まれてヘンダーランドの中に入れない独立魔装大隊の面々であるが、何もしないで手をこまねいているわけではない。通信手段は絶たれていないことを確認した彼らは、ヘンダーランドのスタッフに連絡して幾つか指示を出していた。

その内の1つが、中に残っている一般人の避難指示だった。ヘンダーランドに限らず多くの人が集まる場所では天災・人災問わず大勢の人々が一度に避難できるシェルターが地下に設置されており、来園者をそこまで迅速かつ安全に誘導するためのマニュアルが存在している。

今回の場合、結界魔法は普通の人間には認識できず、何者かがヘンダー城を占拠したこともほとんど知られていない。なので来園者は訳も分からずシェルターに案内された形となるが、それでも多少の混乱はあれど特に滞りなく避難が完了したのは日本人の気質によるものかもしれない。

「ねえちよつと、私達いつまでこの中にいれば良いの？」

「大変申し訳ございません。只今園内の安全を確認しております、それが終わり次第ご案内致しますので——」

「お腹空いた〜！ 何か食べたい〜！」

「ごめんね、お嬢ちゃん。もう少しだけ待っててね」

しかし地下に閉じ込められてしばらく経つとさすがに不満が溜まり始め、スタッフ達はそれへの対処に追われていた。ちなみにその不満の中に「帰りたい」の類が存在しないことは、不満を口にする本人達もスタッフも気づいていない。

「いやあ先輩、これっていつまで続くんすかね？」

「そんなの知るかよ。つたく、国防軍だか何だか知らねえけど、よりによってあの元バイトが貸切にして遊ぶ日にこんなことになるなんて……」

そんな中、警備担当のスタッフである先輩後輩コンビの2人が、避難所の端っことでそんな会話を交わしていた。

「ああ、そういやそれって結局どうなったんスかね？」

「こんなことになってんだぞ、中止に決まってるだろ。ここに来る途中で事情を聞いて、そのままUターンしてるだろうよ。まあ、巻き込まれずに済んだって点ではラッキーだったかもな」

先輩の男はそう言って、手元の携帯端末に目を落とした。その端末は警備スタッフ用に配られている物で、園内の監視カメラが映し出す映像を確認することができる。

その画面が、ヘンダータウンからプレイランドを望むアングルに切り替えられたとき、

「——ん？」

先輩の男が、眉間に皺を寄せて首を傾げた。

「どうしたんスか、先輩？」

「いや、空で花火みたいになんか爆発したように見えただが……。気のせいかな？」

旧群馬県の山間にある湖の真ん中に浮かぶヘンダーランドは、夜になると闇に包まれる周辺に対して人工的な明かりを迸らせるようになる。それはまるで夜空を地上に再現しているかのようであり、ロマンチックな雰囲気を求めるカップルなどには好評の景色でもある。

しかしそれでも、十分な視界を確保できるのはせいぜい地上十数メートルほどまで。それより上空となると、本物の夜空と併せて「闇」と称する程までではないものの視界不良はやはり否めない。

「『チョコキリーヌ・ベスタ』！」

魔法発動の呪文として自身の名を口にしたチョコキリーヌも、その視界不良に実力を十全に発揮できずにいた。高速飛行魔法によって空を飛び回る彼女の右手から飛び出したレーザーは、彼女に両足を向けて前方を飛ぶピクシーが僅かに体を傾けたことで空振りとなる。

チツと舌を鳴らすチョコキリーヌだが、続けざまに「チョコキリーヌ・ベスタ！」と魔法を発動した。今度は彼女の周辺に小さな電気の球が発生し、バチバチと火花を散らしながらピクシーへと襲い掛かる。

ピクシーは暗がりの空中を舞いながら、一瞬だけ後ろへと視線を向けた。チョコキリーヌの魔法は、というよりヘンダーランド由来の魔法は音声発動でありながら呪文が統一されているため、いちいち見て確認しなければ魔法を断定できないのである。

「アクシヨン・シールド！」

そしてそれに対してピクシーが発動したのは、本来彼女が使えるはずのない、人間の手によって発明された魔法だった。彼女を包み込むように現れた薄ら緑色をした半透明の魔法障壁が、襲い掛かる雷を悉く無力化する。

その結果に顔をしかめるチョコキリーヌが、再び魔法を発動しようと口を開き――

「――！」

その瞬間、チョコキリーヌは突如反転して後ろに飛んだ。慣性が体に掛かり表情を歪ませるチョコキリーヌの体ギリギリを、何も無い空間に現れた亜音速のドライアイスが掠めていった。

――くそつ、あのガキか！ 忌々しい！

心中で悪態を吐いたチョコキリーヌの脳裏に浮かぶのは、早々に空中戦に移行したために地上に置き去りにした1人の少女。ザツと地上を見渡してみるが、所々塗り潰されたかのような暗がり彼女の姿を覆い隠している。

――魔法の発動箇所も方向も自在に操れるとして、ここまで正確にアタシを狙い撃てるってことは視界も飛ばせるのか!? ったく、先にアイツを叩いておくべきだったか！

本来まともにもやり合えばピクシーなどチョコキリーヌにとって大した敵ではない。それでも今尚彼女を仕留められていないのは、真由美の狙撃によって攻撃を妨害されているからだ。所詮空を飛べないからと彼女を放っておいたのだが、そんな少女の存在がむしろ眼前のピクシー以上にチョコキリーヌを苛立たせた。

今すぐ地上に戻って探し出してやろうか、などと物騒なことを考えながら、チョコキリーヌは再び前方へと視線を向けた。

ピクシーの姿が、どこにも見当たらなかった。

「——しまった！」

チヨキリーヌは目を見開き、そしてすぐさま頭上へと向き直る。こちらに向かって落下しながら腕を振りかぶる。ピクシーと目が合った。

「ッアクション・パン——」

ピクシーが呪文を呟き、外部から魔力を注ぎ込まれる心地を味わいながら、その魔力を右手へと集中させる。

チヨキリーヌは避けきれないと判断したのか、両手を掲げてバリアを張った。

そうしてピクシーが右手を振り下ろす、まさにその直前、

「——！」

供給されていた魔力、そして構築していた魔法式が、突如として絶たれた。

ピクシーは啞然とした表情を浮かべて、ヘンダー城へと視線を向ける。

入口の跳ね橋が下りているのを見つけ、何が起こったのかその瞬間に察した。

——しんちゃん、城の中に入った!?

「あらあら、どうしたのかしらあ？」

そしてそれと同時にチヨキリーヌも同じ結論に至ったようで、先程までの動揺などおくびにも出さずに挑発的な笑みを向け、その長い右脚を見せつけるようにピクシーの腹部へと叩きつけた。

その衝撃に苦しむピクシーに対し、チヨキリーヌは距離を取るよう後ろへと飛び退いた。

直前まで彼女がいた空間を、ドライアイスが貫いていく。

それを確認しながら、彼女は両手をピクシーへと向けた。

「ッチヨキリーヌ・ベスタ——！」

その瞬間、彼女の服と同じ色の閃光が走り、アニメで見るビームのようなエフェクトと共にピクシーへと襲い掛かった。

「ぐっ——！」

ピクシーはまともに防御の構えを取ることができず、まともにその

ビームを食らってそのままの勢いで吹っ飛ばされていった。同時に彼女が発動していた飛行魔法の効果も途切れ、力尽きたかのようにピクシーはそのまま地上へと落下していく。

彼女が落下する先には、黄色とピンクに塗られた2つの大きなテナトが繋がった見た目の建物があった。

* * *

ヘンダー城へと足を踏み入れたしんのすけとほのかが最初にやって来たのは、学校の体育館を優に超える広さをもつエントランスだった。内装自体は中世ヨーロッパの宮殿にも似ているが、その色彩は童話に出てくるようなカラフルなものであり、まさにメルヘンの世界からやって来たたと表現するに相応しい印象を受ける。

そんなエントランスを、ほのかは興味深そうに、しかし敵の本拠地だけあっておっかなびっくりといった様子で歩いていく。ちなみに彼女の数歩先に行くしんのすけは、前回を含めても2回目の来訪であるにも拘わらず、既に勝手知ったる感じで悠々としたものだった。

と、2人が真ん中辺りまで進んだところで、唐突に部屋の照明が消されて真っ暗となった。

「な、何!？」

「おっ? 停電かな?」

「ちよ、ちよっと待ってねしんちゃん! 今魔法で明かりを——あれっ!? なんで魔法が使えないの!？」

突然の停電と魔法を発動できない事態に、ほのかが半ばパニック状態となる。

と、そのとき、

「何よアンタ、電気を消したただけなんだから少しは落ち着きなさい」
「最後まで連れて来た子だからどんな隠し球かと思ったら、随分と期待外れじゃない?」

女性口調を抜きにしても癖のある特徴的な男性の声が2人分、ほのかの耳に飛び込んできた。しかもその声はすぐ傍で発せられたかの

ようにハッキリとしたもので、彼女は顔を引き攣らせて懸命に周りへと目を凝らす。

次の瞬間、2人の前方10メートルほどの場所に向かってスポットライトが当てられた。

丸刈り頭の金髪でダイヤのマークが入ったバレエ衣装を身に纏うマカオ。

団子に結った紺色の髪とハートのマークが入ったバレエ衣装を身に纏うジヨマ。

吸血鬼事件に端を発する一連の事件の首謀者である2人が、2人の前に姿を現した。

なぜか、バレエの演技をしながら。

「……………」

ピルエット (pirouette)、アラベスク (arabesque)、グラン・フエツテ・アン・トルナン (grand fouetté・en tournant)、グラン・ジュテ (grand jeté・) と次々に技を披露しながら徐々に近づいてくる2人を、ほのかは唾然とした表情で、しんのすけは腕を組んで眺めていた。

そうして彼らの目の前までやって来たところで、見事にポーズを決めた2人が口を開く。

「初めまして、そしてお久しぶり。アタシはマカオ」

「アタシ、ジヨマ」

「仲良くしましょ」

奇天烈な格好をしたオカマ2人に最初は呆然としたまま固まっていたほのかだが、ハツと我に返って震えながらも2人を睨み返した。

「そ、そんな！ 仲良くするなんて、できるわけないでしょ！」

「あら反抗的。そういうの、嫌いじゃないわ」

「でもやっぱり男の子が良いわよね。それもクールな男の子」

「ねえしんちゃん。一番よく話してた男の子いたじゃない、シバタツヤだっけ？」

「あの子は一緒じゃないの？ あの子、凄くアタシ達の好みなんだけど」

「達也くん、オカマさんにモテモテですなあ。達也くんなら多分今――」

「ちよ、しんちゃん！ 何を仲良く話してるの!？」

ほのかがしんのすけの服を掴んで、マカオとジヨマから引き剥がして距離を取る。

「おおっ！ そうだったそうだった」

「んもう、真面目ちゃんね」

「せっかくの再会なんだから、少しくらい会話しても良いじゃない」

「なんで私、責められてるの……？ おかしくない……？」

唾然とした表情でブツブツ独り言を呟くほのかの横で、しんのすけがシレッツとした顔で本題に入った。

「2人共。みんなが迷惑してるし、ヘンダーランドから出てっくれない？」

「そう言われても、アタシ達だって遊びで来てるわけじゃないしねえ」

「そうそう。せっかくリベンジの機会を得られたことだし、今度こそこの世界を乗っ取るうかなと思って」

「何でも無い感じで世界征服を企まないで！ そんなの、私達が許さない！」

威勢の良いほのかの台詞に、しかしマカオもジヨマも怯む様子は微塵も無く、むしろ微笑ましげに口角を上げるのみだった。

「あらあら、随分と主人公っぽい言葉を吐くじゃない」

「でも残念。あなたのお友達は今、アタシ達の部下達が相手してるから。無事で済めば良いけど、うっかり殺しちゃったらごめんなさいね」

「た、達也さんたちが負けるはずがない！」

「へえ、そんなにあの子達を信頼してるのね」

「そんなに信じてるなら、戦つてるところを一緒に観てみる？ しんちゃん達だって、お友達がどうなってるか心配でしょ？」

マカオとジヨマがそんな提案をしている間にも、どこからか現れたヘンダーくん達がいそいそと準備を始めていた。何も無かった場所に巨大なモニターを運び込み、その正面にカーペットを敷いてソ

フアーを置き、なぜか花を生けた花瓶をインテリアとして飾り付ける凝りっぷりである。

「あ、あなた達と仲良く観戦なんてできるわけないでしょ！　そうでしょ、しんちゃん!？」

「ねえねえ、ポテチとコーラは無いの?」

「もう座ってる！　しかも寛ぐ気満々だ!」

ソファーのど真ん中を陣取って飲み物とおやつを催促するしんのすけに、勢いのあるツツコミを入れるほのか。

そんな2人の様子を眺めながら、マカオとジヨマは何やら納得したように頷いていた。

「成程、その子はツツコミ要員なのね」

「それじゃしんちゃん、誰から観たい?」

「うーん。それじゃ、最初に逸れちゃったエリカちゃん達からで」

「オツケー。アンタ達、映像超越して」

マカオの命令にヘンダーくんが頷き、モニターを弄る。ほのかも最初は困惑しきりだったが、やがて恐々とした様子でしんのすけの隣に腰を下ろした。

エリカ達の映像が表示されたのは、それからすぐのことだった。

*

*

*

ヘンダーランドに入って最初のエリア “おとぎの森”。

その森の中にひっそりと建つスタッフルームの前で繰り広げられるクレイ・G戦は、今まさに最終局面を迎えていた。

「ハア——ハア——」

「ったく、ようやく偽者の在庫が尽きたようね……」

四肢をバラバラにされた状態で、それでも意識が途切れず微かに蠢く修次の偽者を前に、エリカが悪態混じりでそんな言葉を吐き捨てた。彼女と一緒に偽者の対処をしていたレオ・幹比古・克人の3人も、言葉少なに同意を見せる。

4人の顔には隠し切れないほどの疲労が滲み出ているが、無理もな

い。正面の地面に転がっている偽者の数は1体や2体などではなく、ザツと数えただけでも10体以上は確実にいる。その1体1体が、技量はともかく魔法自体は『近接戦闘では世界で十指に入る』とまで言われる修次と同じ代物を使うため、特に魔法だけでなく実際に動きまわっていたエリカやレオなど肩で息を切らすほどだった。

とはいえ、勝ったのはこちら側だ。4人が見据える先には、もはや偽者を手下に動かしていた狼男のクレイ・Gのみ。周りの茂みから偽者が飛び出してくる様子も無く、もはや万策尽きたとさえ思える。

「フーン！ 人間の割には、なかなかやるようだな」

だが、奴の口は相変わらず笑みを浮かべていた。人間である自分達を見下す姿勢も変わらず、自身の勝利を信じて疑わないといったところだ。

「……ミキ、どう思う？ まだ何か隠し玉があるとか？」

「考えたくないけど、可能性としては有り得る——」

エリカの呼び方にツツコミを入れる余裕も無く、幹比古が彼女の間に答えていた、まさにそのとき、

「キャツ——！」

「——！」

後ろから突如聞こえてきた悲鳴に、全員がバツと後ろを振り返る。

彼女達の中で唯一戦闘に参加していなかった美月が、おそらく大きく回り込んでいたであろう修次の偽者に羽交い絞めにされ、その刀を首筋に添えられていた。美月は恐怖で顔を青ざめているが、どちらかという仲間迷惑を掛けたことへの居たたまれなさも多分に含まれているように思える。

「しまった！ 美月が！」

「ガハハハハッ！ 勝ちが見えて油断したなあ！ オイおまえら、仲間を殺されなくなかったら、どうすれば良いか分かるよなあ!？」

クレイ・Gの脅迫に、エリカ達が揃って悔しそうに歯噛みする。美月が非戦闘員であることは、先程の戦闘を見ればすぐに分かることだ。だとすれば彼女が狙われることも充分視野に入れるべきであり、修次の偽者に対処するために全員が戦闘に引きずり出されたことは

完全に自分達の落ち度といえる。

不甲斐なさに腹を立てながら、エリカとレオがクレイ・Gを睨みつける。たった1手で圧倒的優位に立った喜びからか、奴は鋭い牙の生えた大きな口をガパリと開けて自身の勝ちを確信したかのような笑い声をあげた。

「ガハハハッ！ 安心しろ、すぐには殺さねえよ！ マカオ様とジヨマ様の命令だからなあ！ おまえらは元・ジャガイモ小僧をぶっ潰すための餌だ！ ——もつとも、その後は本当の意味で俺様の餌になるかもしれないねえがな！」

自分で自分の言ったギャグが面白かったのか、クレイ・Gは更に高らかな笑い声をあげた。辺りに奴の笑い声が響き渡り、それに比例してエリカ達の表情も険しくなっていく。

だがその表情が、突如呆気にとられるものへと変化した。

全身や顔を黒いローブで覆い隠す如何にも怪しい人物が、クレイ・Gの背後の空中に突如出現したことによって。

「なん——」

何だおまえ、とクレイ・Gが疑問を投げ掛ける暇も無く、謎の人物は重力に引つ張られて地面に降り立つまでの間で、その手に持っているナイフを奴の首元に突き立てた。

「がっ——！」

小さな悲鳴をあげるクレイ・Gに対し、謎の人物は地面に降り立った直後に奴の背中を思いっきり蹴りつけた。魔法で身体強化でも施しているのか、どちらかという小柄な体格にも拘わらず、人間よりもだいぶ大柄な狼男はたたらを踏んで前のめりに吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされた先にいたのは、武装デバイスを構えたエリカだった。

「エリカちゃん！ そいつを倒せばこの偽者も止まるよ！」

「オツケー、美月！」

「オイ人形！ あの女をこ——」

クレイ・Gの命令は、エリカが奴の左胸に刀剣型のデバイスを突き立てたことで無理矢理中断された。

「ぐう——！」

「千葉！ そいつから離れろ！」

克人の呼び掛けにエリカは即座に反応し、クレイ・Gの左胸からデバイスを引き抜きながら飛び退いた。奴は苦悶の表情を浮かべるが、穴の開いた左胸から普通の生物なら噴き出すであろう血液の類が1滴も流れない。

そしてエリカが離れた次の瞬間、奴は目に見えない何かによって地面へと叩き潰された。まるで見えない巨人に上から叩かれたかのような光景だが、ここにいる全員が克人が多重障壁魔法によって対象を叩き潰したのだと瞬時に理解する。

「美月さん、大丈夫!?」

描写に堪えない姿になったクレイ・Gから目を背けて、幹比古が美月に呼び掛ける。

「だ、大丈夫……。魔法の繋がりが無くなったから、多分動かなくなっただと思う……」

美月は修次の偽者に羽交い絞めにされた状態のままだったが、当の偽者の方はまるで動く気配を見せなかった。目の焦点は合っており、無表情どころか生気の抜け落ちたその姿はまさしく精巧な作りの人形そのものだ。

美月が首筋の刀に気をつけてソツと腕から抜け出し、ほんの少しだけ力を込めて偽者を押した。すると偽者は一切の抵抗も無くグラリとバランスを崩し、そのまま地面に倒れこんでしまった。その衝撃で腕が1本外れるが、動く様子は微塵も無い。

と、次の瞬間、

「——！」

修次の姿をした偽者が風船の空気が抜けるようにシユルシユルと縮んでいき、片手で持てるほどの大きさをした、デッサン人形のようにシンプルなデザインの人形となった。

もちろん、首の後ろに付いていたチップには手を触れていない。しかし独りでにそのような変化を見せた人形に、エリカ達は一斉にクレイ・Gへと視線を遣る。

潰されたクレイ・Gは、いつの間にか掌サイズの犬の人形へと変化していた。そしてその人形の横には、奴が狼男になった後も着ていたタンクトップが落ちている。

すると、

ポフンッ！

「——次兄上！」

タンクトップから煙が破裂したように立ち上ったかと思ったら、それはエリカの兄である千葉修次へとその姿を変えていた。いや、状況から察するに“姿を戻した”と表現する方が適切か。

エリカが血相を変えて、地面に横たわる修次へと駆け寄った。背中に手を回して上半身を起こしてあげると、修次は意識を取り戻してゆっくりと目を開けた。

「次兄上！ 私のことがかかりますか!？」

「……ああ、エリカか。サービスエリアで少年と戦って、その後の記憶が無いんだが——」

「詳しい話は後で！ とにかく、無事で何よりです！」

兄妹の再会劇に割り込むほど、レオ達も無粋ではない。彼らは2人をそのままに、その傍に落ちている犬の人形へと注目した。

「……まさかこれが、アイツの正体だって言うんじゃないだろうな？」

「信じられないけど、そう考えるしか無さそうだね」

「魔法の繋がりも見られないから、とりあえずは安心だね」

レオ・幹比古・美月の3人がそのような会話を交わす中、

「……………」

唯一の上級生である克人が、険しい表情で夜の闇に包まれた森の向こうへと目を凝らしていた。

突然乱入した黒ずくめの人物は、とつくに姿を消していた。

「ターゲットは始末された。これから戻る」

『お疲れ様でした。気をつけてこちらに戻ってきてください』

「了解」

夜の森の中では、黒いローブに身を包んだその人物はまるで闇に溶け込んだかのようにその姿を隠す。そうして身を潜めながら、謎の人物は短い遣り取りを終えて携帯端末をポケットにしまい込んだ。

そして、小さく感嘆の溜息を吐いた。

「いくら人質に気を取られてたとはいえ、あそこにいる誰一人にも気取られずに『疑似瞬間移動』を成立させるとはな……」

謎の人物があの場合に突然現れたのは、自身の魔法によるものではない。

『疑似瞬間移動』は、加重・収束・収束・移動の4工程からなる系統魔法だ。物体の慣性を消して空気の繭で包み、真空のチューブ内を高速移動するのだが、その過程で周囲の空気を押し退ける気流が発生するため、移動先が事前に察知されてしまう欠点がある。

しかし今回の術者は、見事に移動先の誰にも魔法の発露を気取らせることは無かった。その技量の高さに、謎の人物は改めて舌を巻いた。

と、携帯端末が再び震えた。電話の主は、先程話した『疑似瞬間移動』の術者の弟だった。

『ナッツ、すぐに戻ってください。ちよつと問題が発生しました』
「……はいよ」

通話を切つて、ナッツと呼ばれたその人物は、今度は呆れるように溜息を吐いた。

「つたく、本当に人使いが荒いな……」

*

*

*

『プレイランド』のメインストリートから少し外れた場所にある、黄色とピンクに塗られた2つの大きなテントが繋がった見た目の建物。

そのアトラクションは人形劇とサーカスが融合したショーが観られるとして、園内でも屈指の人気を誇っている。まるで本当に命があるかのように活き活きと動く人形の演技がとても可愛らしく、しかし

どこか切なげで、また近未来をモチーフとした『プレイランド』の中でもどこか懐かしさを覚えるサーカスという演目に、子供だけでなく大人も夢中になること請け合いだ。

しかし今は閉園時間ということもあり、普段は小さな子供を中心に多くの観客で埋め尽くされる客席に人の姿は無く、照明も消されているため薄暗くなっている。それでも真っ暗ではないのは、先程上から落ちてきた『物体』によって天井に大きな穴が空き、そこから月明かりが差し込んでいるためである。

「……………」

チヨキリーヌが周りに注意深く目を遣りながら建物の中へ足を踏み入れ、月明かりに照らされたステージへと上がっていく。

そしてステージの中央に転がっているそれを、感情の読み取れない無表情で見下ろした。

膝上10センチのバルーンスリーブワンピースに、フリルのついた白いエプロン、白のストッキングに黒のローファー、そして頭にはフリルのついたホワイトブリム——長々と描写したが早い話がメイド服を着た十代後半くらいに見える少女。

しかしその少女が人間でないことは、今の彼女の状態を見れば一目瞭然だった。

なぜならその少女は、高所から叩きつけられた衝撃で四肢と胴体が千切れ、そこからネジやら配線やら機械的な部品が零れていたからである。当然動力部分もひどく損傷しており、ピクリとも動く気配を見せない。

焦点の定まらない目を開いたまま動かない少女の姿は、それこそ本当に人間が死んでいるかのような雰囲気を漂わせていた。

ガガガガガ——！

するとチヨキリーヌの背後で、硬い物同士がぶつかり合う音が響いた。しかし彼女は驚くことなく、むしろうんざりしたように溜息を吐いて後ろを振り返る。

床に落ちていたドライアイスの破片に、チヨキリーヌは真由美からの攻撃を受けたと確信した。それはここにやって来るまでに何回も

起きたことであり、そしてその度に周囲に展開しているバリアに阻まれている。空中戦の最中ならともかく、地上で誰とも交戦していない状態でドライアイスの弾丸を防ぐことなど彼女にとっては容易いことだ。

「さーとと、このままトツペマが消滅してくれてたら楽なんだけど……」

チョコキリーヌは独りごちながら、ステージの奥にある関係者用スペースへと歩き出した。小さく呪文を唱えて小さな光の球を自身の周囲に漂わせ、様々な小道具や段ボール箱が積まれた狭い通路を照らしていく。

おそらく公演で使うのであろう、デザインも大きさも多種多様な人形がズラリと並んでいる。前回ここを管理していたのはクレイ・Gだったため彼女は知らないことだが、その人形は百年前に運営していたときに揃えていた人形とまったく一緒だった。

もし彼女がそれを知っていたら、おそらく彼女は気づいていたことだろう。

現在その人形が、1体足りなくなっていることに。

「——トツペマ・マペット——」

その声は3E特有の合成音声ではなく、かといって声帯を震わせて発せられたものでもなかった。それを耳にした瞬間、チョコキリーヌが険しい表情となり反射的にそちらへと顔を向ける。

それは、このアトラクションの中でも一番の人気を誇る人形だった。

深緑を基調とした道化師風の衣装を身に纏い、左頬に星形のメイクを施されている。ぜんまいのネジを髪飾りのようにあしらひ、腰まで届くほどに長い緑色のツインテールをしている——ように見えるが実はこれは帽子であり、それを脱ぐと癖のあるショートヘアをしている。

そしてその姿はまさしく、100年前に当時5歳だったしんのすけ

が初めて出会った操り人形——トツペマ・マペットそのものだった。
100年振りに見たその姿への感傷に浸る余裕も無く、チヨキリーヌは自身の周囲に張っていたバリアに魔力を込めて強化する。

次の瞬間、トツペマが差し出した両手から極太のビームが飛び出し、そのバリアへと襲い掛かった。バリア越しに衝撃が伝わったのか、チヨキリーヌの表情に苦悶の色が浮かぶ。

「おまえ……い！ それだけの魔力を消費して、無事で済むと思ってんのかい!? さつきみたいに、あのガキンチョから魔力を貰ってないんだろ!?!」

「こうでもしないと、あなたを止めるなんてできないでしょ!?!」

ビームから、そしてそのビームがバリアに衝突したときの衝撃で飛び散る魔力の光が、月明かりすら届かない建物の中を昼間以上に明るく照らしている。人によっては癲癇^{てんかん}発作を引き起こしそうなほどに様々な色が激しく飛び交う空間にて、トツペマとチヨキリーヌはそれぞれ苦しそうに顔をしかめながら睨み合っていた。

しかし最初は互角で釣り合っていた形勢も、徐々にチヨキリーヌへと傾きつつあった。ビームが徐々に細くなっていく光景に、バリアを張るチヨキリーヌの口角がニヤリと上がる。

勝利が見えてきて、チヨキリーヌの心に油断があったことは否めない。
い。

このとき彼女の頭からは、この戦場に潜む「もう一人」の存在がすっかり抜け落ちていた。

バキバキバキバキ——!

「な、何だ!?!」

突如頭上から何かが壊れる音が聞こえてきたのと同時に、チヨキリーヌは目に見えない何者かによって地面へと引つ張られる感覚に囚われた。実際、彼女はその場に立っていられなくなるほどであり、徐々に体勢を低くしていき、ついには片膝を突くまでになっとう。

今にも地面に平伏しそうになるのを懸命に堪えて頭上を見上げると、ちようど彼女の立っている場所の天井に大きな穴が空いており、

おそらく元々そこにあつたであろう建材が無理矢理もぎ取られたかのように分解していた。そしてその建材にも彼女を襲う力と同じものが働いているらしく、自然落下とは比べ物にならない速さで彼女へと迫っていく。

更におまけと言わんばかりに、一瞬火花のような光が散つたかと思いきや、木材や天井の布テントの部品がいきなり燃え始めた。

「……ふざけんじゃないよ、おまえらあ！」

チヨキリーヌはそんな叫びと共に、頭上から隕石のように燃えながら落下してきた建材の下敷きとなり、そしてトツペマの放つ渾身のビームに建材ごと貫かれた。

ビーム自体に物理的な破壊能力は無いようで、天井から落ちた建材はそのまま地面に叩きつけられて更に細かく分解された。しかし建材に纏わり付いていた炎はビームによって掻き消され、故に建物内のどれにも引火することは無かった。

「……終わった、のかしら？」

音も光もすっかり静まった建物内に、トツペマの独り言だけが天井から吹き込む風に乗る。ソロソロと元建材の瓦礫へと近づき、そしてその中に女性を象った人形を見つけるとホッと息を吐いてその場へへたり込んだ。

「トツペマ！ 大丈夫!?!」

大きな足音をたてて真由美がその場に姿を現したのは、その直後のことだった。十代少女メイドロボから姿を変えたトツペマへとまっすぐ駆け寄っていき、地面に横たわっていた彼女の背中に手を回して上半身を起こしてあげる。

トツペマは高熱の風邪を引いたかのようにグツタリとした様子だったが、真由美の問い掛けに弱々しい笑顔を浮かべて頷いてみせる。

「ええ、大丈夫よ……。ちよつと魔力が足りなくて、思うように動けないだけ……。しんちゃんやんが城から出てくれば自動的に魔力が供給されるはずだから……」

「なら良いんだけど……。ひよつとして、あそこにある人形が？」

「そう。ああいう人形にマカオとジヨマが魂を吹き込んだのが、チヨキリーヌ達三幹部の正体ってわけ。——それにしても、あなたのその『マルチスコープ』って想像以上に便利そうね」

現代魔法における射程距離とは物理的なものではなく、改変対象を認識できればそこに照準を合わせて発動することが可能となる。しかしそれは中継された映像を観るといった方法だけでは難しく、五感によって十分に場所を認識することが必要と考えられている。

その点でいえば、真由美の『マルチスコープ』は視覚を飛ばして離れた場所を視認する魔法であるため、普通の魔法師よりもずっと離れた場所から、それこそ相手から視認されない場所から一方的に魔法を放つことができる。味方にとって、これほどまでに後方支援に向いた魔法も無いだろう。

「さすがにちよつと疲れたけどね……。トツペマ、悪いけど少しここで休ませてもらっても良いかしら?」

「構わないわ、私もしばらくまともに動けそうにないし」

「ありがと。——あつ、そうそう」

思い出したように声をあげる真由美に、トツペマが首を傾げる。

「その姿、とてもよく似合ってるわよ」

「……私も、これが未だにここにあるとは思わなかったわ」

*

*

*

ヘンダーランドを3つに分けるエリアの1つである『ヘンダータウン』の一面は現在、記録的な大災害に見舞われていた。

竜巻とも見紛う猛吹雪によって地面も建物も凍りつき、真っ白な雪が分厚く積み上がっている状況だった。例えるならば、豪雪地帯で車が立ち往生しているときの風景を想像してもらえば分かりやすいだろうか。更には街の一部が崩れ落ちて瓦礫の山と化しており、廃墟が雪に覆い隠されていく有様となっている。

「おらおら、どうしたあ! 格闘ゲームみたいにタイムアップでも狙ってんのかあ!?!」

そんな大災害を生み出す元凶は、雪景色にこれ以上ないくらいマツチングしている雪ダルマの魔法使い、ス・ノーマン。

「くっ——！」

そしてそんな大災害に真っ向から立ち向かうのは、携帯端末型のCADを構える深雪だった。彼女の周囲には物質の運動を静止させる魔法が働いており、^{あられ}霰の入り混じる吹雪がその領域内に侵入した瞬間、急速にその動きが鈍くなって深雪に届く前に氷の結晶が地面へと落ちていく。

しかし、それは完璧ではなかった。文字通り身も心も凍らせる吹雪が、隙間風のように時折深雪の肌を撫でていく。彼女の険しい表情にも苦悶の色が見え、けっして余裕で堰き止めているわけではないことは明白だ。

このままではそう遠くない内に魔法を維持できなくなり、たちまち内部は周りの街と同じように雪と霰に蹂躪されるであろう。

そんな状況でリーナは何をしているのかと言えば、深雪のすぐ傍で片膝を突いて激しい運動でもしたかのように大きく息を荒らげていた。

深雪が防御に専念している間、リーナは魔法の領域外を発動点としてス・ノーマンへの攻撃を試みていた。炎や雷で焼き尽くそうとしたり、サイオンの弾丸を射出したり、建物を破壊して瓦礫を奴にぶつけてみたりと方法は様々だ。そう、吹雪自体はス・ノーマンの仕業だが、周りの建物が破壊されているのはリーナの仕業だったりする。

しかし、そのどれもが芳しくない結果に終わった。ス・ノーマンの体を包み込むように自動展開されたバリアが、リーナのあらゆる物理的・魔法的な攻撃を防ぎきってしまった。

「リーナ、そろそろ限界かしら？」

「冗談！　そういうミュキこそ、どうなのよ!？」

「私もまだ大丈夫だけど、正直このままってわけにもいかないわね」

軽口を交わしながら、リーナは深雪へと視線を上げる。彼女の口元には笑みが浮かんでいるものの、ス・ノーマンを見つめるその目に余裕は見えず、逆に疲労が見て取れた。

「――！」

その瞬間、リーナはずっと手に持ったまま使わずにいた大きな杖を動かした。持ち手の部分を何回も押し引きして、その度にガシヤガシヤと音をたてている。

「……ミュキ、今の魔法を解除したうえでアイツの動きを止めてくれる？」

「どれくらい？」

「2秒……いや、1秒もあれば充分よ」

「……良いわ」

その答えと共に、深雪の指がCADのタッチパネルへと伸びた。

2人の周りを包み込むように発動していた減速魔法が、フツと消えた。

「魔法を消したな！ 覚悟しやが――うおっ!？」

さっそく攻撃魔法を試みたス・ノーマンに、強烈な突風が襲い掛かった。

対象領域内の物質の運動を減速させる魔法自体は、非常に有り触れたポピュラーなもの。しかし深雪の場合はそれを、領域内の気体分子に発動させていた。もちろん、並の魔法師にできることではない。

気体分子の運動速度と気体の圧力は、正比例の関係にある。つまり気体分子の速度が遅くなれば、その分だけ気体の圧力が弱くなる。そうして圧力の低くなった領域内の空気は、圧力の変わっていない領域外の空気に押されて体積を小さくし、それによって空いたスペースに領域外の空気が入り込んでいく。

すると領域内には、本来有り得ないほどに量の多い空気が充満することになる。もしこの状態で減速魔法を解除すれば、領域内の気体分子が運動速度を取り戻すことよって気体の圧力も元に戻り、局地的に密度が大きくなった空気は本来の姿に戻ろうと一気に空気を膨張させる。

そうして生まれた突風が、ス・ノーマンの動きを止めた。

リーナが要求した1秒が、これで満たされた。

「覚悟するのはそっちよ、雪ダルマー！」

リーナは「ブリオネイク」を構え、切り札である戦略級魔法を発動した。

戦略級魔法。戦略兵器として扱われるほどの威力を有する魔法であり『一度の発動で人口5万人クラス以上の都市または一艦隊を壊滅させることができる魔法』がその定義とされる。

リーナが扱う「ヘビィ・メタル・バースト」は、現時点で公開されている戦略級魔法の中では最高威力を誇るとされている。その威力は最大で戦艦の主砲に匹敵すると言われ、一度でも放たれば戦局に大きな影響を及ぼすことは想像に難くない。

しかしそれ以上に重要なのは、絶大な威力を有する魔法としては破格の「取り回しの良さ」だ。専用兵器「ブリオネイク」は機械的な機構が無いため、魔法師1人でも運べるうえにメンテナンスも容易だ。更には発動までのスピードも数秒で済むという圧倒的なスピードも、一撃離脱を基本とする戦略級魔法師の任務に大きく役立つ。つまり「ヘビィ・メタル・バースト」は、総合的な評価においても「戦略級魔法随一の性能」を誇るのである。

まさに国の技術の結晶ともいえる戦略級魔法が、ス・ノーマンだけのために使われた。

杖の先端に仕込んでいた顆粒状の接着剤を混ぜた重金属パウダーが充填され、突き棒で圧力を掛けて固めることで「弾」となる。その「弾」を高エネルギープラズマに変化させ、気体化を経てプラズマ化する際の圧力上昇を更に増幅してビームとして放出する。

数えるのも馬鹿らしいほどに訓練を重ねた一連の動きを経て「ヘビィ・メタル・バースト」は発動した。深雪の魔法に守られながら残りのパウダーを全て注ぎ込んで作られた重金属の層1つ1つがプラズマの弾丸と化し、矢継ぎ早にス・ノーマンへとぶつけられていった。

上下に圧縮する形で電子を水平方向へ円形に拡散させ、原子核を互いの電氣的斥力と電子との間に働く電氣的引力で高速拡散させる運動エネルギーを伴ったビームが、ス・ノーマンを狙うついでに巻き込んだ地面や瓦礫を破壊していく。

「これは……！」

ビームが撒き散らす光に目を細めながら、深雪はその破壊力に息を呑んだ。リーナの正体についてはほぼ確信していたものの、それが持つ意味を改めて思い知った形となった。

と、昼間かと思紛うほどに眩い光が消えていき、光が強すぎて逆に見えなくなっていたス・ノーマンの周辺が徐々に姿を現していく。

ビームの軌道は魔法式で設定できるため、左右の瓦礫に変化は無かった。しかし地面は積もり積もっていた雪が完全に溶けて蒸発しており、石畳の舗装が抉れて中の土が露わになっている。ス・ノーマンの背後にあった瓦礫もビームの軌道上にあった物は細かく砕け、周辺に吹っ飛ばされたことで周囲の木々や建物に甚大な二次被害を生んでいる。

そして、肝心のス・ノーマンはどうと、

「——あつぶねえ！　こんなのヒトに向けるヤツじゃねえだろ！」

土砂が露出した地面の真ん中でただ1ヶ所だけ無事だった舗装の上で、焦りと喜びが入り混じった声色でそう叫んだ。

ピンピンした様子の子の「ス・ノーマンに、リーナも深雪も信じられないと目を見開いた。

「うっそでしょ!?!　戦艦ですら当たり所によっては一発で沈む魔法よ!?!」

「切り札だけあって、確かに威力は凄まじかったさ。でもな！　たかだか1000年ぽっちのおまえらと違って、俺様の魔法は年季が違うんだよ、バーカー！」

すっかり気を良くしたのか、ス・ノーマンはケラケラと体を震わせてそう力説した。

そして、こう続ける。

「さすがにバリアは全部砕けたけど、そんなの幾らでも張り直せば良いんだしな！　おまえらの切り札が通用しない以上、俺様の勝ちは確定だ！」

「——そうか、それは良いことを聞いた」

「……………ああ？」

どこからともなく聞こえてきたその声に、ス・ノーマンは素っ頓狂な声をあげてそちらへと顔を向けた。

ここから100メートル近く離れた場所に建つ、周りのそれよりも背の高い塔のようなデザイン建物の屋根の上に、拳銃型のCADの銃口をこちらに向けた達也の姿があった。

それを確認した瞬間、腹部に違和感を覚えたス・ノーマンがゆっくりと視線を下に向ける。

奴の真つ白で丸い胴体部分に、大砲でも撃ち込まれたかのように大きな穴が空いていた。

「終わりです、ス・ノーマン・パー」

深雪が冷えきった声で死刑宣告を口にした、その瞬間、

「——ぐあああああああつ！」

突然ス・ノーマンがその場に崩れ落ち、体の奥底から絞り出すような悲鳴をあげた。あまりにも突然の変化に、無表情で見下ろす深雪の横でリーナがギョツと顔を引き攣らせている。

胴体にぼつかりと空いた穴を起点として、奴の体にビシビシと小さな亀裂が生じ始めた。それに加えて奴の体のあちこちからシユウシユウと白い煙が立ち上り、綺麗な球体だった胴体や頭部もその形を崩していく。それはまさに雪ダルマが溶けていくかのようなだが、奴の足元に水が滴り落ちる様子は無い。

「ぐっ！ 何だこれ、体が崩れてきやがった！ あのクソガキ、何をしやがっ——成程、これがアイツらが言ってた『分解魔法』ってヤツか！」

「アイツら……?」

ス・ノーマンの体が見るみる崩れていくのをただ眺めるだけだった深雪が、捨て置けない単語に反応してオウム返しに言葉を紡いだ。

「ったく、あのガキも前回の姫様も何なんだよ！ 全然出てこなかった癖に、最後の最後に美味しいところだけ持っていきやがってよ！」

「待ちなさい！ あなた達、他に協力者がいるの!?!」

「誰が教えるか、バーカ！ それにおまえら、俺を倒したと思ってるん

だろうが残念だったな！俺も他の奴らも、マカオ様とジヨマ様がその気になれば魔力一つで幾らでも復活できるんだよ！次はこう上手くいかねえから覚悟しやがれ！」

「待って——！」

深雪が思わず手を伸ばすが、それを嘲笑うかのようなタイミングでス・ノーマンの体が完全に瓦解した。ボロボロと雪の塊が地面に広がり、そしてほぼ一瞬で跡形も無く消えていく。

そうして最後に美術のデッサンで使うような簡素な人形だけが残り、そしてその人形も数秒しない内に煙となって消滅していった。

「つたく、厄介な相手だったわね……」

「……………」

リーナの言葉に深雪は返事せず、既に誰もいなくなったその場所を見つめていた。

「撃退した……か」

塔のような建物の屋根の上で戦闘の終了を確認した達也は、拳銃型のCADをホルスターにしまいながら溜息混じりに独りごちた。

しかし台詞に反し、達也の表情に充足感は無かった。

むしろそこにあるのは、後悔にも似た敗北感だった。

——今回はリーナが無理矢理バリアを破壊してくれたから何とかなったが、今後も分解魔法が通用しない相手が出てくることもあるだろう。その場合の対策を立てることが急務だな……。

そのためには、と達也が視線を向けた先にいたのは、先程の思考にも出てきたリーナ。

正確には、彼女が持つ「ブリオネイク」だった。

——FAE理論が、まさか実用化していたとは……。

FAE (Free After Execution) 理論はかつて日米共同で研究されていた仮説で、『魔法で改変された事象は本来存在しないはずの事象であり、故に改変直後は物理法則が作用するのに1ミリ秒以下のタイムラグが存在し、その間に新たな事象を定義で

できれば物理法則に抗うことなく定義を加えることができる』というものである。

日本語では『後発事象改変理論』と呼ばれるそれは、1ミリ秒以下という極小時間に介入するなど現実的でないという理由で破棄されたはずだ。しかしブリオネイクの存在が、FAE理論が正しかったこと、そして実用化に成功したことを裏付けている。

——これを使えば、あるいは……。

達也の思考は、深雪の呼び掛ける声が耳に届くまで続けられた。

*

*

*

「……………」
「……………」

巨大なモニターにて園内各地で行われていた戦闘の一部始終を見守っていたヘンダー城にて、マカオとジヨマが互いの手を取って身を寄せ合った姿勢のまま呆然と白目を剥いていた。

「いやあ、頼りになる部下達が全員見事に負けてましたなあ」

「良かったあ！ 一時はどうなることかと……………」

そして2人の隣のソファアでは、しんのすけがからかうようにケラケラと笑い、観戦中気が気じゃなかったほのかかホツと胸を撫で下ろしていた。

「いやいや！ アンタ達、ちよつと待ちなさいよ！」

「どいつもこいつも、1人相手に大人数で寄ってたかって！ しかも不意打ちで乱入とかしてくるし！ ちよつとはフェアプレー精神つてものがないのかしら?！」

「ええっ？ 1対1で戦わなきゃいけない、なんてルールは無かったゾ」

「キーツ！ 正論だからこそムカつくわあ！」

「結構な魔力を込めて呼び出した幹部達もやられるし、本当やってられないわあ」

達也たちの予想外の活躍に困り果てた口振りのマカオとジヨマだ

が、その表情にはどうにも真剣味が感じられなかった。幹部達がどうなるうと最終的に自分達の力でどうにでもできる、と言外に告げているように思えてならず、ほのかは警戒心を隠そうともしない目で2人を睨みつけている。

そうしていると、一頻り不満を爆発させてスッキリしたのか、マカオとジョマがふいに冷静な表情となった。

「こうなったら、アタシ達が直々に出張らなきゃいけないようね」

「まったく、困ったものだわ」

「――！」

かつてヘンダーランドだけでなく幾つもの異世界を滅ぼしてきた強大な魔法使いが、いよいよ自ら動き出す。それを察したほのかが恐怖で震える体を必死に抑え込みながらCADを構え、そしてすぐに城の中では魔法が使えないことを思い出して顔を引き攣らせる。

その隣ではしんのすけが、普段ほとんど見ることのない真剣な表情でマカオとジョマと対峙する。その姿が、ほのかの不安をより増幅させる。

マカオとジョマが、ニヤリと笑みを浮かべる。

「さてと、2人共」

「仲良く遊びましょ」

第96話 「ヘンダー城の決戦だゾ」

「七草先輩ー」

「達也くん。それに深雪さんとシールズさんも」

門が固く閉ざされたヘンダー城の前で佇んでいた真由美が、後ろから掛けられた聞き覚えのある声に反応して振り返った。

想像通り先頭を走るのは達也であり、その後にはリーナと深雪が続く。3人と別れたのは隣のエリア「ヘンダータウン」であるのに加え、ヘンダー城はヘンダータウンとプレイランドのちょうど中間に位置している。ス・ノーマンとの戦闘を終えた3人がこの短時間で駆けつけたとしても不思議ではなかった。

そんな3人だが、真由美の胸に抱かれた操り人形の存在に気づくと、一様に虚を突かれたように口をポカンと開けた。

「もしかして、七草先輩が抱えているその人形は……」

「お察しの通り、トツペマよ。3Hが戦闘で壊れちゃって、彼女の魂がこの人形に乗り移ったみたい。そういうわけだから、せつかく達也くんが買い取ってくれたところ申し訳ないんだけど——」

「いえ、それについては別に構わないんですが……。それでトツペマ、状況は？」

達也がトツペマに視線を向けて、真剣な表情で問い掛ける。そうしているとき真由美の胸を本人の目の前でガン見しているように思えるが、深雪もリーナも真由美もそんなことを言える状況ではないので黙っている。

そんなことはお構いなしに、問われたトツペマが人形の顔を動かして苦悩の表情を作った。

「城の中にしんちゃんとかほのかちゃんが入って、そのまま閉じ込められた状態よ。城全体を囲むように多重障壁魔法が掛けられていて、魔法的・物理的に関係無くちよつとやそつとの攻撃じゃビクともしないわ。とはいえ、反射みみたいな余計な効果は付いてないみたい」

「ということは、圧倒的な攻撃力の魔法をぶつけければ突破することは可能、ということか？」

「理論上はね。でもそれだけの攻撃力を持つ魔法なんて、それこそあなた達の言う『戦略級魔法』でやつとスタートラインに立てるってレベルだけだね」

トツペマの口から飛び出した『戦略級魔法』という単語に、全員の視線が一斉にリーナへと向く。

「残念だけど、ワタシは無理よ。さっきの戦闘で弾も尽きたから、もう1発も撃てないわ」

悔しそうに歯噛みするリーナの横で、深雪が心配そうな表情で達也を見つめる。

確かに達也の『マテリアル・バースト』ならば、この魔法防壁も貫けるかもしれない。とはいえ、それは自身がリーナ達の探していた戦略級魔法師であることを明かすことになる。

いや、それについては今はどうでもいい。問題なのは、どれほどの破壊力に設定すれば障壁を破れるのか分からず、結果的に城の中に入るしんのすけ達も巻き込んでしまう危険性があることだ。

「城の中にいるのって、過去にトツペマの世界も滅ぼしたような強大な力を持つてるんでしょ？ そんな奴らと一緒にだなんて、しんちゃん達の安否が心配だわ……」

「しんちゃん、ほのか……」

「……………」

真由美の言葉に、深雪は祈るように両手を胸の前で組む。

リーナも達也も、壁の向こう側を見透かそうとするかのようにヘンダー城を睨みつけていた。

*

*

*

「ぐっ……………」

「ほのかちゃん！」

苦痛に塗れた呻き声をあげて、ほのかがその場に崩れ落ちるよう倒れ込んだ。大きく息を荒らげて額に汗を滲ませる彼女に、しんのすけがハツとした表情で駆け寄った。

「ゴメン、しんちゃん……。でも私、もう限界……」

「諦めちゃダメだゾ、ほのかちゃん！ 世界の運命は、オラ達に託されているんだゾ！」

「そっか……。そうだよね……。私達がここで頑張らなきゃ、日本どころか世界だって危ないんだから！」

しんのすけに手を引つ張られて立ち上がるほのかに、マカオとジョマがニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「あら、まだ立ち上がる気なのね」

「そろそろ諦めた方が良いんじゃない？ あなたの腕じゃ、アタシ達に勝つだなんて夢のまた夢なんだから」

「たとえそうだとしても、私達は諦めるわけにはいかないの……！」

「その通りだゾ！ オラ達はまだまだ戦うゾ！」

「——良いわ、存分に掛かってらっしゃい」

「どうせ最後に勝つのは、アタシ達なんだから」

「やってみなきゃ分かんないゾ！ うおおおおお！」

しんのすけは雄叫びをあげ、ほのかは氣力を振り絞って構えの姿勢を取る。

それを目の当たりにしたマカオとジョマが、周りに控えるヘンダーくん達へと呼び掛ける。

「——あなた達！ ミュージック、スタート！」

号令と共にヘンダーくんがスイッチを押し、どこからともなく音楽が流れ始めた。

片や、クラシックを彷彿とさせる管弦楽。

片や、日本人のDNAに刻まれている笛と太鼓の祭囃子。

「行くゾ、ほのかちゃん！ ——ハイッ！ ラッセー！ ラッセー！」

「ラッセー！ ラッセー！」

「ラッセー！ ラッセー！ ラッセー！」

それと同時に、しんのすけとほのかの勢い良く踊り始めた。腰を低くしてステップを踏みながら前進して手振りを加える、日本人なら誰でも一度は見たことがあるであろう“阿波踊り”である。もつとも、掛け声も振付もこれが正式かどうかは2人共知らないが、こういうの

は勢いが大事なのである。

そしてマカオとジヨマも負けじとばかりに、バレエを踊り始めた。ひたすら熱くて激しいしんのすけ達とは対照的に、こちらはクールに優雅に次々と技を決めていく。ちなみにマカオが男性役、ジヨマが女性役である。どうでもいい情報である。

そしてそんな2チームの演技を、ヘンダーくん達が時折メモを取りながら審査をしていた。いつの間にか用意した横長のテーブルに並んで座り、頭を掻きながら悩む姿が見受けられる。

「と、ところでしんちゃん！ 勢いに圧されて踊ってるけど、なんでダンスバトルなの!？」

「あのオカマ魔女2人に、オラ達の心意気を見せるんだゾ」

「心意気なら、アタシ達だって負けてないわ」

「100年閉じ込められた程度で鈍るような腕じゃないってところ、見せてあげるわ」

ほのかの困惑を無視して、ダンスバトルは白熱の一途を辿っていく。ちなみに阿波踊りはきちんとした振付で踊れば1時間に1000キロカロリー近く消費する、それこそ水泳に匹敵するほどに激しい運動だ。

「も、もうこうなったら、どうにでもなれ〜！」

意識が朦朧としていきながらも、ほのかは尚も踊り続けた。その姿はまさに「踊る阿呆」そのものであり、その姿がヘンダーくん達審査員の心を打ったようで涙を流している。

「うおおおおおー！」

ダンスバトルは、佳境を迎えつつあった。

*

*

*

「達也くん！」

後ろから自分の名を呼ぶ声に達也が振り返ると、ヘンダーランドのシンボルマークが描かれた軽トラの荷台から跳び下りるエリカと目が合った。荷台にはレオ・幹比古・美月の姿もあり、運転席にはパー

クのスタッフと思われる若い男性が座っている。

「エリカ達、無事だったのね」

「十文字先輩のおかげだね。先輩は人質に取られてたスタッフの安全確保に動いてる」

「んで、少しでも力になれるかと思ってスタッフに車を出してもらったんだが……、どうやらそう簡単な話じゃないみてえだな」

レオの言葉に達也は頷き、現状を簡単に説明した。

「成程ね……。戦略級魔法レベルじゃないと話にならないってのはかなりキツイな……」

「リーナ、今からでも『弾丸』を調達することってできないの?」

「材料が何とかなったとしても、単純に魔力が足りないわ。普通に立ってるように見えるかもしれないけど、これでも結構ギリギリの状態なのよ」

「そう何発も撃つことを想定して設計されていないだろうからな」

達也のフォローにリーナが力強く頷く中、美月が心配そうに眉を寄せる。

「それにしても、中にいるしんちゃんと光井さんが心配ですよね……」

「でもアタシ達が中に入るにしろ、まずは城のバリアをどうにかしないと——」

「そのことなんだけど」

真由美の腕に抱かれた状態で黙っていたトツペマが、このタイミングで会話に割り込んできた。

「超強力な魔法なら当てがあるわ。しんちゃんと魔力的に繋がったとき、桁違いの攻撃力を持つ魔法を見つけていたの」

「えっ、しんちゃんが!?!」

エリカを始め皆が驚きの表情を見せる中、達也だけはそれを聞いて思い出すことがあった。

九校戦に備えて、しんのすけからCADを預かって調整していたときのこと。そこに記録されていた数々の魔法式に紛れて、意味を成さない無駄なデータが散見された。最初達也は古い魔法式を消去するときに処理しきれなかった残骸かと考えたが、何かの魔法式を切り刻

んで偽装しているのではという仮説を立てたのである。

「確かトツペマ、しんちゃん魔法を使えるんだったよね？ だったら——」

「今は無理。魔法の使用を制限している城の効果の影響で、私としんちゃんとの間にある魔法的な繋がりも絶たれてるの。だから結局、どうにかしんちゃん達を城の外に出すしかないってわけ」

「マジかよ。だったらしんのすけが城の中に入らないで待ってたら勝ち確だったじゃねえか」

「それを恐れて、マカオとジヨマはしんちゃん達を誘い込んだんでしようね」

トツペマ達の会話を聞きながら、達也は考えた。

「どうやら今回はしんのすけ自身が事件を幕を下ろす必要があると思うだ、と。」

*

*

*

ダンスバトルの結果は、何としんのすけ・ほのかペアの勝利となった。判定では「芸術」や「テクニク」といった技術面でマカオ・ジヨマペアが大差をつけるが、「味」や「コク」や「のどごし」で徐々に差を詰めていき、最終的に「汗」と「ハート」で逆転勝ちとなった。

しかしここで、マカオとジヨマから待ったが掛かった。審査員が公平でなかったと文句を付け、別のゲームでの再試合を提案してきたのである。ちなみに判定したのはヘンダーくん達なのでむしろ不利な状況だったはずなのだが、しんのすけがそれを受諾、次のゲームへと突入する。

そしてゲームも終盤、ほのかは人生最大の岐路に立たされていた。

—— 右か、左か……。2つに1つ……。

こめかみから流れる汗も拭わずに、ほのかは目の前にある「それに視線を固定させていた。胸の奥が絞めつけられるほどのプレッシャーで呼吸が荒くなり、気のせいかわ視界が霞んできたように見え

る。

——右か、左か、やっぱり右か、そう見せかけて左か……。

それはほのかもよく知っている、すぐに憶えられる単純なルールによつて子供からお年寄りまで誰でも一緒に参加できるゲームだった。彼女自身も小さい頃から何度も遊んできたために馴染み深いものであるが、まさかそれで世界の命運を決めることになるとは思ひもしなかった。

——いや、相手は私が右を取ると思わせておいて左を取ると読んでいるかも……。つて、駄目駄目！ 複雑に考えちゃ！

ほのかのすぐ正面では、マカオが不気味な笑みを浮かべながら彼女の出方を窺っていた。呼吸音すら聞こえないほど静かに見つめるその姿は、ほのかの一挙手一投足を観察して楽しんでいる余裕すら感じる。

世界を滅ぼせるほどの実力を有する魔法使いが目の前で自分を見つめているという事実には、ほのかは意識が遠くなる心地を一瞬味わいながらも、すぐさま気を取り直してマカオの手元に改めて視線を集中させる。

マカオの手元にあるそれは、ほのかもよく知っている——トランプだった。

——どつちかが私も持つてるエースで、もう片方が別のヤツ！ 何を迷う必要があるの、結局は二者択一なんだから！ 1か0か、イエスカノーか、達也さんか深雪か！ もし達也さんから告白されたら私は間違ひなくオツケーする……けど、正直深雪から告白されたら受け入れちやうかもしれない……。

「ほのかちゃん、何か別のこと考えてない？」

「ちよつと、目の前のゲームに集中しなさいよ。たかがババ抜きでも、これは世界の命運を賭けたババ抜きだつてことを忘れないでよ？」

「——！ えつと、それじゃ、こつち！」

横から声を投げ掛けられハツと我に返ったほのかが、そのままの勢いに任せてマカオが持っていた2枚のトランプの内、自分から見て右側のカードを抜き取った。その際、マカオの口元がニヤリと笑ったよ

うに見えたが、ほのかは敢えてそれを無視して自分の手元に持つていく。

自分が持っているのは、ハートのエース。

それに対してマカオから取ったのは——スペードのエースだった。

「——やった！ わ、私、勝ったんだ！ この長く苦しい戦いに勝ったあ！」

ほのかは思わず立ち上がり、柄にもなく両手で力強くガッツポーズをして、

「……あら、アタシも上がり」

「あつ、ジョーカーが残っちゃった」

「ぐへえっ！」

その直後にマカオがしんのすけからトランプを引いて上がり、しんのすけの最下位が決定したため、ほのかはそのポーズのまま後ろに倒れ込んだ。

「し、しんちゃん！ 何あつさり負けてんの!? このババ抜きに負けたら——」

「ダイジョーブだって。ほら、こうしてジョーカーが手に入ったんだから」

「だから、それが駄目なんだって！ 最後までジョーカーを持ってた人が負けなんだから！」

「前の勝負のときも、ここから大逆転勝利だったんだから。まあ見てて」

しんのすけは自信満々にそう言っただけ、そして大きく息を吸い込み、

「——『スゲーナ・スゴイデス』！」

城中に聞こえるのではと思うほどに大きな声で、高らかに呪文を口にした。

そして、何も起こらなかった。

「悪いけど、このトランプは普通のヤツだから」

「また同じ轍を踏むわけにはいかないものね」

「おおつ、そういえばデザインも違う気がする」

「駄目じゃん！」

城中に聞こえるのではと思うほどに大きな声で、ほのかがツツコミを口にした。

* * *

「いたよー！ 1階のエントランスだ！」

突如大声をあげた幹比古に、全員が一斉に彼へと振り向いた。

現在彼が展開している魔法は、自身が呼び出した精霊と感覚を同調させるといふもの。今回は視覚を共有しており、城の周りに精霊を飛ばして窓からしんのすけ達の姿を確認しようとしたのである。正直外から見えない場所にいる可能性も充分あったので期待値は低かったが、何事もやってみるものだ。

「それで、2人は無事なの!？」

「大丈夫、怪我をしている様子は無いよ。というか……」

言い淀む仕草を見せる幹比古に、皆の表情に怪訝の色が浮かぶ。

「おそらくトツペマが言ってた魔法使い2人組と一緒にいるんだけど、戦ってる様子が全然無いんだ。今はマスコットキャラみたいな奴らが色々と準備しているみたいなんだけど、4人はただそれを眺めているだけで緊迫した雰囲気は一切無くて……」

「はっ？ 何それ、向こうに敵意は無いってこと?？」

「少なくとも、敵意は見られない。もしくは、敵意を覚えないほどに自分達の実力に自信があるのか……」

「あるいは現時点ではアイツらに戦闘の意思は無いか、ね」

トツペマの言葉は、他の者達からすれば俄かに受け入れ難いことだ。魔力収集機能を持つヘンダー城を手に入れ、本来の姿を取り戻している2人が、世界征服をするうえで邪魔になるであろうしんのすけをアジトに誘い込んで何もしないなど、普通ならば考えられないことだろう。

「――『主人公補正』か」

ふいに達也が零したその単語に、一部が目つきを鋭くさせ、そして

残りはキョトンと首を傾げる。ちなみにその一部とは、深雪・リーナ・真由美・トツペマである。

「すぐ傍にいる私達が狙われていないのも、原因はそれかもしれないわね。とにかく、しんちゃん達が無事な内に手を打たないと」

「そうだな。——幹比古、しんのすけ達の位置取りは分かるか？」

色々と聞いたような表情の幹比古だったが、何かを振り払うように小さく首を横に振ると目を瞑り、そしてすぐに開いて口を開く。

「ちようど4人が1つのテーブルを囲んでいるところだ。しんのすけくんが窓に背を向けて、光井さんがその向かいで窓の方を見てる。そして奴らがその間に座っている感じだ」

「何かメツセージを送れるとしたら、ほのかが見られる位置取りか。だったら——」

達也の指示に幹比古は頷き、そして行動に移した。

*

*

*

ババ抜きで負けたしんのすけとほのかだったが、ダンスバトルで自分達が勝ったことを持ち出して現状イーブンだと主張、マカオとジヨマもそれを妥当だと判断し、これが本当に最後の勝負だと決めたくえでゲームを開始した。

最後の勝負に選んだゲームとは——4人いるからという理由で「麻雀」となった。

「いやあ、まさかヘンダー城に麻雀卓があるとは思わなかったゾ」

「アタシ達もビツクリよ。というか、ここって普段どんなアトラクションしてるの?」

「水道管の配列までまったく一緒とか、どこかに設計図でも残ってたのかしら? まあ、そのおかげで魔力収集装置としての機能も残ってたんだけど」

「……………」

何やら重要なことを言っているような気もするが、ほのかはそれも聞かずに意識を集中させて5巡目の牌をツモった。その結果、既に

持っている字牌チユンの中を捨てればツモった牌と合わせてテンパイとなる状況となった。

それに気づいたほのかは、すぐさま中に手を伸ばす。

「よし！ これに決めた！」

「ロン！」「ロン！」「ロン！」

「——はっ？」

そしてその瞬間、残りの3人が一斉にロンを宣言した。

つまり、味方であるはずのしんのすけもロンを宣言した。

「四暗刻！」
スーアンコー

「大三元」

「国士無双」

「はあっ!? えっ? ちよ、えっ?」

「あら、しんちゃんだったら単騎待ちだったのね、凄いじゃない」

「いやあ、それほども〜」

『『それほども〜』じゃないよ、しんちゃん!』

敵と一緒に喜ぶしんのすけに、さすがのほのかも椅子を後ろに倒す勢いで立ち上がる。今の彼女には、マカオの「マナー悪いわよ」というお叱りの言葉も聞こえていない。

「しんちゃん、私達って仲間だよね!」

「ゴメン、ほのかちゃん……。あまりにもカモだったから……」

「カモ!」

「とりあえず今のを計算すると、1位がしんちゃんの186,000点、2位がアタシの175,900点、3位がジヨマの174,800点で——」

「んで、最下位がほのかちゃんの▲436,700点ね」

「私だけ圧倒的すぎない? もう逆転しようがないんだけど」

すぐに勝負が着いたら面白くないからとトビ無しのルールにした結果の惨状に、マカオが大きな溜息を吐いた。

「仕方ないわね。本当は次もアタシの親なんだけど、特別にアンタの親で進めても良いわよ」

「本当ですか!」

まさかの敵からの恩情にほのかは即座に乗っかって、気合を入れながら卓上の牌を中央の穴に吸い込ませていき、定位置の場所から出てきた新たな山から所定の牌を取っていく。

つまり4人が現在囲んでいるのは全自動の麻雀卓ということになるのだが、子供に人気のテーマパークになぜこのような代物があるのか、ますます謎は深まるばかりである。

「よーし、とにかくできるだけ自分の親番を続けないと……」

ブツブツと独り言を呟きながら、とりあえず字牌を整理しようと白を切り、

「ロンー！」

「しんちゃん!？」

その瞬間、しんのすけに上がりを宣言されていた。

フルフルと小刻みに震えるほのかを横目に、マカオとジヨマが彼の牌を覗き込む。

「あら、人和レンホウだなんて初めて見たわ」

「おめでどう、しんちゃん。満貫よ」

「イエーイ！」

マカオとジヨマの言葉に、しんのすけは素直に喜びを露わにする。それはまるで彼ら3人が同じチームであるかのような光景であり、ほのかだけがその雰囲気から弾き出されていた。それこそ、1人だけ作風の違う世界に迷い込んだ別作品のキャラかと見紛う有様だった。

そしてそんな状況に、とうとう彼女の堪忍袋の緒が切れた。

バンツ——！

卓に両手を強く叩きつけたほのかに、さすがの3人も咄嗟に口を閉ざして彼女を見遣る。俯いているため表情を窺い知ることにはできないが、剣呑な雰囲気彼女から迸っているのはしんのすけにも伝わった。

「……しんちゃん」

「ほ、ほいっー！」

ほのかの呼び掛けに、しんのすけが直立の姿勢で応える。

そうしてほのかの顔を上げたとき、彼女はむしろ不自然なまでに満

面の笑みだった。

「作戦会議をするから、ちよつとこつちに来てくれる?」

「ほい!・ すぐ行くゾ!」

舎弟か子分を連想させるほどに機敏な動きで、しんのすけはその場を離れるほのかの後を追い掛けていった。

それを黙って見送ったマカオが隣のジヨマに視線を遣り、2人は互いに無言で肩を竦ませた。

さて、マカオとジヨマから距離を取ってエントランスの端にまでやって来たほのかは、そのまましんのすけへの呵責を開始——しなかつた。

「えつ?・ ミキくんからメッセージ?」

「そう。窓の外で吉田くんの精霊が飛んでたの」

先程麻雀をしていたとき、ほのかは自分の正面、そしてしんのすけの背後に位置する窓の向こうで幹比古の精霊がフワフワと飛んでいるのを見つけていた。近づきすぎると城全体を覆う結界によって消滅してしまうためか少し離れた場所だったのだが、チカチカと蛍のよう光っていたため発見できたのである。

「オラ、メッセージなんて全然聞こえなかつたゾ」

「声を発してたんじゃなくて、精霊の動きがメッセージになってたんだよ。光つてるときの動きを繋げるとカタカナの文字になって、それを読むと『ソトニデロ』ってなつてたの」

「ソトニデロ……外に出ろ? 外に出てどうすんの?」

「それは分からないけど、きつと何か作戦があるんだよ。だから私達は、どうにかしてこのお城から脱出しないといけないんだけど……」

顎に手を当てて考え込むほのかに、しんのすけが露骨にホツと胸を撫で下ろした。

「成程。つまりさっきのほのかちゃん、それを伝えるためのお芝居だったというわけですな。いやあ、オラもうビツクリしちゃったゾ」
「言っておくけど、さっきの麻雀に関して怒ってるのは本当だからね」

「いめんなさい」

腰が直角に折れ曲がる勢いで頭を下げるしんのすけに、ほのかは小さく溜息を吐いて首を横に振った。

「とりあえず、しんちゃんも外に出る方法を考えて」

「来たときの扉から出れば良いんじゃないの?」

「駄目。さつきさきりげなく見たけど、マスコットキャラ達が扉の前を陣取ってたの。別の場所から外に出ないと――」

「あらあら、2人で麻雀の相談をしてるのかと思ったら、何を企んでいるのかしら?」

「――!」

自分のすぐ背後から聞こえてきたその声に、ほのかは息を呑んでバツと後ろを振り返った。

こちらを見下ろして不吉な笑みを浮かべるマカオとジヨマが、そこにいた。

第97話「ヘンダー城の決戦、決着だゾ」

普段は老若男女様々な人々で賑わうテーマパーク・ヘンダーランド。時刻はとつくに営業時間が終了している深夜だが、突如謎の結界によって内外の往来が不可能となり、多くの来園者が取り残される異常事態となっている。

その犯人は、異世界の魔法使い・マカオとジヨマ。世界をも滅ぼし得る力を有する2人だが、封印の影響で本来の力を失っていたため、魔力収集装置であるヘンダー城を狙って一連の吸血鬼事件を引き起こしていた。そんな2人の野望を防ぐべくしんのすけ達はヘンダーランドに乗り込み、人知れず世界の命運を懸けた勝負へと挑んでいく。

そしてその勝負は、他ならぬヘンダー城にて佳境を迎えていた。

「ひいっ！・ちよ、どれだけいるのコレ!？」

「ほのかちゃん、舌噛むゾ」

先程まで激闘を繰り広げていたエントランスの奥にある階段を駆け足で上りながら、ほのかが顔を引き攣らせて叫び声をあげ、隣を並走するしんのすけが冷静にツツコミを入れた。

しかし今の2人の背後に広がる光景を目にすれば、彼女を責めることはできないだろう。

『●▲■★◆▽〜!』

『●▲■★◆▽〜!』

『●▲■★◆▽〜!』

『●▲■★◆▽〜!』

その階段は2人が腕を伸ばしても届かないほどの幅があったが、その階段をみっちり埋め尽くすほどに大人数のマスコットキャラ達が、意味のある言葉には聞き取れない声を叫びながら2人の背中を追い掛けていた。それはお世辞にもメルヘンチックな光景とは言えず、むしろホラー感満載だった。

それはヘンダータウンでの光景を再現しているように見えるが、違うところを挙げるならば、奴らは魔法を一切使用していないことだろ

う。ヘンダー城内では敵味方問わず魔法が使えない、という事実がここからも窺える。

そして違うところは、もう1つ。

「待ちなさい、2人共！」

「絶対に逃がさないわよ！」

マスコットキャラ達に紛れて、マカオとジヨマがその追い掛けっこに参加していた。2人も例に漏れず魔法が使えないが、バレエで鍛えた強靱な肉体によって軽やかに階段を駆け上がったいく。魔法使いは非力で打たれ弱い、という創作あるあるは2人には通用しないようだ。

「と、とにかくしんちゃん！ 早いところ出口を探さないと！」

「ほいほい！ 多分こつちだったと思うゾ！」

階段を上りきって左右に廊下が伸びる場所に差し掛かり、しんのすけが迷うことなく右へと進路を変えた。突然のことではのかがバランスを崩しながらもそれを追い、そして多数のマスコットキャラとそれらに混じるマカオとジヨマが大きくドリフトしながら強引に右へと旋回していく。

「オラア！ 逃がすかあ！」

『●▲■!?!』

マカオが一番近くにいたヘンダーくんの頭を鷲掴み、先を走るしんのすけ達に向けて投げつけた。隣を走るジヨマも同じようにヘンナちゃん達を投げ始め、何体ものマスコットキャラが悲鳴をあげて2人へと（本人の意思とは無関係に）襲い掛かる。

「うわあ！ 何かアイツら、仲間を投げてきたんだけ——ぶへえ！」

「とりあえず、あの部屋に避難するゾ！」

ほのかが振り返りざまにヘンダーくんを顔面に思いつきり食らいながらも、2人は足を止めることなく廊下の突き当たりにあつたドアを開けて勢いよく中に逃げ込んだ。

「馬鹿ね！ その部屋は行き止まりよ！」

「任せなさい、ジヨマ！ アタシが片を付けてくるわ！」

ドアを突き破るかのような勢いでマカオが部屋の中に入り、ジヨマ

とその他マスコットキャラ達は部屋の前で待機となった。これで万が一しんのすけ達が部屋の外に出ようとしても、奴らでそれを迎え撃つ布陣となる。

ジヨマの言葉通りその部屋には窓の類は無く、出入口はマカオが使ったドア1つのみだ。その部屋は所謂「衣裳部屋」であり、マカオとジヨマが着ているようなプリマドンナの衣装が部屋を横切るように置かれたハンガーラックにビッシリと並べられ、一番奥に人間が余裕で入れるほどに大きな箆笥（色はシヨッキングピンク）が鎮座している。

確かに行き止まりではあるが視界は悪く、箆笥の中や衣装に紛れて身を隠すことも可能だろう。部屋に入ったときこそ勢いの良かったマカオも、ドアを閉めて部屋中を見渡してからはゆっくりとした足取りで衣装の隙間などに目を凝らしていく。

「……………」
しかし2人の姿は見当たらず、残るは重厚な作りをした箆笥だけだ。

マカオはニヤリと笑みを浮かべ、箆笥の取っ手へとその手を伸ばし――
「カララッ――」

「――そこねっ!?!」
背後から、つまり唯一の出入口であるドア付近で微かに聞こえたその音に、マカオは即座に反応して振り返った。ハンガーラックに掛けられた衣装を手でどかしながら、そのドアへと一直線に早足で向かっていく。

そうしてもう少しでドアへと差し掛かろうかという、まさにそのとき、

「――ん?。」

後ろに引つ張られるような感覚に違和感を覚えたマカオが、ふと後ろを、つまり先程まで自分がいた箆笥の方へと振り返る。

箆笥の傍にいたのは、自分が追い掛けていたしんのすけ。
そんな彼は、箆笥の取っ手に紐状の何かを縛り付けていた。

その紐状の何かの正体は、自分が今まさに着ている衣装の一部である、肩から股間に掛けて繋がっているサスペンダーだった。その状態でマカオが出入口まで移動したことで、伸縮性の高いサスペンダーがキリキリと引っ張られている。

「えっ——」

マカオがそれに気づいた次の瞬間、ガタリと音を立てて箆筒が動き出した。

そして、

「ぐはあっ！」

「えっ、ちよつと何があつたの——ぐええっ！」

『●▲■◆★◇▼〽〽!』

『●▲■◆★◇▼〽〽!』

伸びきつたサスペンダーが一気に元に戻ろうとして箆筒を引っ張り、サスペンダーを身につけていたマカオに箆筒が激突、それでも勢いが止まらない箆筒がマカオを巻き込んで出入口のドアと周辺の壁を破壊して廊下へと飛び出していく、部屋前で待機していたジヨマとマスコットキャラ達をも巻き込んでそのまま吹っ飛んでいった。

「いやいや、見事に作戦大成功だゾ」

箆筒の下敷きとなつたマカオとジヨマ、そして大勢のマスコットキャラ達を眺めながら、しんのすけが悠々とした足取りでドアごと壁が破壊されて出来たトンネルを潜る。

それではもう1人のほのかがどこにいたのかというと、

「……いや、ちよつと待ってよしんちゃん！ 私、下手したら大怪我だったんだけど!?!」

マカオとジヨマ達を巻き込んで廊下に吹っ飛んでいた箆筒の中にいた。扉を勢いよく開けてマスコットキャラ達を踏みつけながら床へと下り立ち、怒りを表すかのようにズンズンと力強い足取りでしんのすけへと詰め寄っていく。

「まあまあ、怪我しなかつたんだから良いじゃない。というか、早く逃げないと——」

「逃がさないわよ、2人共お！」

「散々虚仮にしてくれちゃってえ！」

「ひいひいひいっ！」

箆笥を押し退けて勢いよく起き上がったマカオとジヨマに驚くほのかの手を引つ張って、しんのすけは再び城の中を走り出した。マスコットキヤラがいなくなったことで数こそ少なくなったが、マカオとジヨマが怒りまくっているためか威圧感は相当増したような気がする。

と、そのとき、

「あつ、しんちゃん！ アレ！ もしかして外に繋がってない!？」

両隣の壁にドアが並ぶ狭い廊下を抜けた先に、天井から床まで壁一面を占めるほどに大きな窓が現れた。窓の向こうには満天の星が発する天然の光と、おそらくアトラクションが発しているであろう人工の光が入り混じって夜の闇に浮かび上がっている。

「アクション、キック！」

しんのすけが走る勢いそのまま床を蹴って跳び上がり、そしてそのまま窓に飛び蹴りを食らわせた。ちなみに彼が使う魔法の名前を叫んではいるが、城の効果によつて魔法は発動しないため普通の飛び蹴りのままである。

しかしそれによつて窓は大きく開かれ、2人は半円状の足場と胸ほどの高さのある手摺りに囲まれたバルコニーへと躍り出た。真冬の冷たい空気に晒され、2人はようやく外に出られたことを知覚する。

「おおっ！ 外に出たゾ！」

「良かった！ これで——」

しんのすけが感慨の声をあげ、ほのかが反射的にCADに手を伸ばした。しかし建物の外とはいえ城の範疇であるためか魔法が構築される感覚は無く、密かに溜息を吐く結果に終わる。

「あつ、2人共出てきた！」

「オイおまえら！ 早く降りてこい！」

と、そんな彼女の耳に聞き覚えのある声が届いた。ほのかがハツとして手摺りに駆け寄ると、湖を挟んだ向こう岸に達也たちが一堂に会しているのが見えた。

先程声をあげたエリカとレオが大きく手を振り、深雪や美月もこちらに向かつて何やら叫んでいる。彼らの大きさからして、バルコニーの高さはビル4階から5階ほどだろうか。

「お、降りてこいって言われても——」

「分かったゾー！」

「えっ？　ちよつと待って——ひいっ！」

ほのかが戸惑いを口にする暇も無く、しんのすけがほのかの肩と膝裏に腕を回してヒョイと軽々担ぎ上げてしまった。所謂「お姫様抱っこ」の姿勢なのだが、今のほのかはそれをされたことに対するドキドキよりも、そのまま彼が手摺りの上に一跳びで上ってしまったことに対するドキドキの方が遥かに勝っていた。

そしてしんのすけは不安定な手摺りの上で、グツと膝を屈んで脚に力を込めた。

「ちよつ、しんちゃん！　まさかこのまま——」

「ジャンプっ！」

「やっぱりねえええええええ——！」

手摺りを思いつき蹴り飛ばし、しんのすけ（&お姫様抱っこされたほのか）がバルコニーから勢いよく飛び出した。しかし達也たちの待つ向こう岸には届かず、このままではビル4階から5階ほどの高さから真冬の夜の湖に叩きつけられることになるだろう。

もちろん、それを黙って見ている彼らではない。

「まったく、危ないわね……」

真由美による重力操作魔法により、重力加速度に従って自由落下をしていた2人の体が急激にそのスピードを緩めていった。更に本来有り得ない水平方向への移動も始まり、2人の体が地上で待つ達也たちの下へと吸い寄せられていく。

「おおっ！　何だか面白いゾー！」

「変な姿勢で引っ張られてるせいで気分が……！」

遊園地のアトラクションかのようににはしゃぐしんのすけに、顔を青ざめて体調を軽く崩しかけるほのか。

両極端な反応を見せながら2人がもう少しで岸に辿り着く、まさに

そのとき、

「させないわ!」

「逃がさないわよ!」

マカオとジヨマが、しんのすけ達と同じようにバルコニーの手摺りから飛び出した。バレエのグラン・ジユテのように股を180度を開いた2人の動きは、まるで鏡映しかのように寸分違わず揃っている。

そしてヘンダー城による魔法の制限区域から外れた途端、右のマカオが右手を、左のジヨマが左手をそれぞれ合わせた。すると2人がピッタリ貼りつけた掌の隙間に膨大な魔力が集まり、そして凝縮されたそれがレーザーのように放たれた。

そのレーザーの向かう先には、しんのすけの背中があった。

「——おっ?」

「しんちゃん!」

「マズい!」

それを地上で見ていた達也たちが、一斉に表情を強張らせた。しかし遠距離での魔法への対抗手段を持たないエリカ達は咄嗟に動けず、普段ならば頼りになる深雪やリーナも先の戦闘での消耗が祟って魔法を上手く発動できない。

そして達也も分解魔法を試みるが、現代魔法とは違うメカニズムで構成される異世界の魔法に、魔法式に相当する箇所をその一瞬で見定めることができなかった。

万事休すか、と達也が顔をしかめ、

「——「アクシヨン・シールド」!」

真由美の腕から飛び出したトツペマが両腕をしんのすけ達へと掲げ、特撮ヒーローの名を冠した魔法の名前を叫んだ。

その瞬間、しんのすけの背後に薄ら緑色をした半透明の魔法障壁が現れた。その障壁はあと少しで彼の背中に届いていた膨大な魔力の行く手を阻み、そしてその衝撃に揺らぐことなく耐え抜き、先にレーザー光線の方が消えていった。

「はあっ!?　なんでアイツがあんな強力な魔法使えるのよ!」

「よく見たら、あのボウヤと魔力的に繋がってるじゃないの!　まさ

かあの子と魔法を共有してるってこと!？」

マカオとジヨマが空中で驚きの声をあげる中、しんのすけとほのかが地上へと下り立った。

「ほっほーい！ 達也くん、みんなく！ おまたく！」

「よ、良かった……！ あそこから脱出できて本当に良かった……！」
呑気に手を振るしんのすけと、今にも泣きそうになっているほのか。対照的な反応を見せる2人は達也たちのいる方へと駆けていき、同じタイミングで2人の方へと駆け出した彼らとちようど中間地点の辺りで合流した。

「やあやあ皆の衆、出迎えご苦労——」

「話は後だ、しんのすけ！ ヘンダー城を徹底的に破壊しろ！」

「ええっ!？」

劳いの言葉の1つでも掛けようかと思っていたしんのすけだったが、達也から開口一番飛び出したテーマパークのシンボルをぶっ壊せ発言に、さすがの彼も戸惑わざるを得なかった。

「でも、そんなことしたら——」

「責任は俺が取る！ 手段は問わない、全力で行け！」

「ほ、ほい！ 分かったゾ！」

説明も何も無く達也に急かされるまま、しんのすけはクルリと半回転してつい先程までいたヘンダー城へと向き直った。

「——変身——！」

右腕をピンと伸ばして斜めに挙げて左手は胸の前で固く握り締める、特撮ヒーローが決めのシーンでやるようなポーズと共に、しんのすけのベルト型CADが一瞬だけ青白い光を放ち、そしてすぐに消える。1年近く彼の友人をやってきた達也たちにとって、それが彼の戦闘準備であることは周知の事実だ。

「——必殺——！」

しかしその後のキーワードは、今まで達也たちが一度として聞いたことのないものだった。これから何が起こるのか、事の成り行きを見守る彼らの表情が自然と緊張を帯びていく。

変化は、しんのすけのベルト型CADの中で起きていた。彼の声を

合図として設定されていたプログラムが発動し、数々の起動式に紛れていた意味を成さないデータが一瞬で修復されていき、そして1つの起動式を作り出していく。それは彼の魔法演算領域を介して魔法式へと変換され、現実世界を改変するための力を得た。

「な、何——!?!」

その瞬間、しんのすけから圧倒的な魔力を感じ取ったエリカ達が驚きで声を漏らした。その姿は20世紀の傑作バトル漫画に出てくる、パワーアップ時に金髪になる某何とか人を想起させるが、漫画に詳しくない達也たちはただ大きく目を見開くのみだ。

それだけの魔力を携えたしんのすけが、拳を顎の近くまで引き上げて脇を締める、ボクシングのファイティングポーズによく似た構えを取る。

「ヤバイ! 来るわよ!」

「こうなったら——アンタ達、あの子を止めなさい!」

しんのすけ目指して未だ宙を飛ぶマカオとジヨマが、彼のその姿を見て顔を引き攣らせた。

それと同時に、マカオがサスペンダーと繋がっている股間のポケットに手を突っ込んで3体の人形を取り出すと、それに魔力を込めながら彼目掛けて思いっきり投げつけた。3体の人形は空中でウネウネと蠢きながら急激に体積を大きくし、やがて2人の人間と1体の雪ダルマを形作った。

「承知しました、マカオ様、ジヨマ様!」

「悪いけど消えてもらおうわよ、しんちゃん!」

「オラア! 死にさらせ、クソポーズ!」

それはつい先程までヘンダーランドのあちこちでエリカ達が戦っていた、クレイ・G・マッド、チョコキリーヌ・ベスタ、ス・ノーマン・パーの三幹部だった。自分達が苦勞して倒した敵があつさりと復活した事実、ギャラリー達の中から「あつ、アイツら!」と声があがる。

三幹部がしんのすけに向かって飛び掛かり、そして地上に下り立ったマカオとジヨマが魔力を込め始めた、まさにそのとき、

「——アクション・ビーム——！」

しんのすけの勇ましい掛け声と共に、その魔法が発動された。

彼の腕から放たれたそれは、まるで稲妻が何重にもなつて水平方向に撃ち出されたかのような強烈な光を周囲に撒き散らした。ビームの軌道から僅かに漏れた魔力だけでも達也たちの体をビリビリと震わせるほどであり、本能的に身を守るかのように彼らは腕で顔を覆つて目線を逸らした。

「ぐへえっ——！」

「ぎゃっ——！」

「ぶべらっ——！」

そしてそんなビームの直撃を食らつた三幹部は一斉に悲鳴をあげ、そのままビームに押し返されて後ろへと大きく吹っ飛ばされた。それでもビームの勢いは止まらず、膨大な魔力を伴つたビームが一直線に、攻撃の構えを取っていたマカオとジョマへと襲い掛かる。

「えっ、ちょ——！」

「待っ——！」

そして三幹部と同じように2人も一緒にビームの餌食となり、そのまま魔力の物量攻撃を食らいながらビームと同じスピードで吹っ飛ばされ、そしてヘンダー城を包み込む結界に無抵抗のまま叩きつけられた。

結界とビームに挟まれて空中で固定されたまま動けなくなる、マカオとジョマと三幹部。

しかし数秒後、ビシッ！ と何かに亀裂が入つたかのような音と共に結界が破られ、5人はそのままヘンダー城の城門へと叩きつけられた。そして今度は1秒も掛からずに城門が大きくヒビ割れて決壊、ビームは城の正面に大きな穴を空けて城内を蹂躪し、反対側の壁も同じように突き破つて夜の湖へと飛んで行った。

しかしビームはそのまま湖の向こうの森まで進むことは無く、湖の中腹辺りでビームは闇夜に紛れるようにしてその姿を消していった。

地上のアトラクションのどれよりも強烈な光が無くなり、辺りはほんの十数秒前までの静けさを取り戻した。あまりにも突然の出来事に、先程の光景は幻覚か何かだと思ってしまうほどだ。

しかしそれが幻覚などではないことは、自分達の目の前にあるヘンダー城に空けられた大きな穴が証明していた。

「あつ」

それが誰の声だったのか。そんなことを考える余裕も無い内に、ヘンダー城に空いた大きな穴を起点として、蜘蛛の巣のように細かい亀裂が城壁を這うように駆け巡った。

複数の建物を無理矢理継ぎ合わせたような奇抜な形をしていたその建物が強固な土台を失えば、自重に耐えることすらできずに自然崩壊するのは自明の理。

それを表すかのように、ヘンダー城は大きな音と地響きを携えて、まるでジグソーパズルをひっくり返したかのようにバラバラに崩れ落ちていった。時折火花が散っているのは、城内に張り巡らされた電気配線が引き千切られたからだろうか。

そうしてしんのすけと達也たちが見守る中、ヘンダーランドのシンボルマークであるヘンダー城は、ただの瓦礫の山と化した。

「Foooooooo! 最高にcoooo!だったわよ、シンちゃん!」

「いやあ、それほどでも」

「あれがアクション仮面の必殺技なのね! 特撮の技を現実に再現しちゃうなんて、日本人の技術力の高さには感服だわ!」

「いやあ、オラ達としてはもう少し忠実に再現したいんだけど——」

なぜかテンションが最高潮に達しているリーナとビームを放ったしんのすけ本人を除いて、残りの面々は瓦礫の山から目を離すこともできずに口をポカンと開けたまま固まっていた。

そんな中で比較的早く我に返ったエリカが、それでも戸惑いを隠せずに固まった表情で達也に問い掛ける。

「ねえ達也くん、今のしんちゃんの魔法って……」

「……トツペマの発言を信じるのなら、間違いなく『戦略級魔法』に分類されるだろうな」

達也の答えに、彼らを包む沈黙に更なる重みが増した。

* * *

ヘンダー城の崩落は、テーマパーク内の様々な場所で観測可能だった。パーク内で一番高い建物であるために崩落の様子は鬱蒼とした“おとぎの森”以外の至る場所で直接見ることができると、そうだけでなくも崩落の音と地響きは相当なものだった。地下シエルターに避難していたスタッフや来場者もそれを感じできたほどであり、何者かによるテロ攻撃かと一時期パニック状態になっていたほどだ。

なのでヘンダー城から少し離れたアトラクション“地底超特急”入口付近に佇んでいた黒服の一団も、その光景を確認することは容易だった。その集団の中心にいる、積み重ねた歳月を表す深い皺を刻みながらもピンと姿勢の伸びた老人も、その光景を楽しそうな微笑を携えて眺めていた。

と、その老人が、ふと何かに気づいたかのように視線を移して向き直った。先程の楽しそうな雰囲気は鳴りを潜めるが、その口元は変わらず弧を描いている。

「九島閣下、お目に掛かれまして光栄に存じます」

その老人・九島烈に話し掛けたのは、豪華な黒のワンピースに身を包む可憐な少女。彼女の周りに老人のそれと同じような黒服の集団がいなければ、遊園地に遊びに来た一般客が紛れ込んだかのような出で立ちだ。いや、それを含めたとしても、どこぞのお嬢様がお忍びで遊びに来たのかと思うだろう。

「私は黒羽亜夜子と申します。四葉の本家に連なり、当主・真夜の使いを務めさせていただいてる者ですわ」

膝を折ってニツコリと微笑む少女・亜夜子の仕草は、優雅ではあっても貞淑ではなかった。そう評価するには、瞳に宿る力が強すぎる。

挑発的でありながら引き込まれる妖しい笑みだが、さすがに烈は動じない。

「四葉殿の代理の方か。道理でその若さにも拘わらずしつかりしてい

る。私のことは知っているようだね。それとも名乗った方が良いかな？」

「いえ、そのように畏れ多いことは申しません。ですが閣下、1つお尋ねしたいことが」

「言ってみなさい」

「ありがとうございます」

鷹揚に頷いた烈に芝居掛かったお辞儀で返し、亜夜子は尋ねる。

「本日はなぜ、このような場所にいらつしやったのでしょうか？」

「何、理由は君と同じだよ。偶には童心に帰ってみたくなってね、久しぶりにこのような場所に足を運ばせてもらった。すると何やら妙な事件に巻き込まれてしまってね、このままどうしようか途方に暮れていたところだよ」

「まあ！ 閣下のようなお方でも、そのようなことが？」

「恥ずかしいことだがね。しかしどうやらそれも解決したようだし、私もそろそろ帰ることにしよう。なかなか面白いものも見られたことだしね。——それでは黒羽亜夜子くん、弟くんとその部下の少女にも宜しく伝えておいてくれたまえ」

「……畏まりました。お気をつけて」

亜夜子が深々と頭を下げ、烈は彼女に見送られる形で黒服の一団を伴ってその場を後にした。

小さくなっていく彼の背中を視界に捉えながら、亜夜子は表情を変えず内心ホッと胸を撫で下ろした。

*

*

*

「……………」

四葉本家、一般的に言う「執務室」に相当する部屋にて、四葉真夜は目を覆うシェード型のモニター装置を外してデスクに置くと、背もたれに体重を掛けてゆっくりと目を閉じた。

しばらくそうしていた真夜だったが、やがてゆっくりと目を開けて起き上がると、モニターをデスクの引き出しにしまって脇に置かれた

ハンドベルを鳴らした。

程なくして、真夜の執事であり腹心でもある葉山が部屋の扉を開けて入ってくる。

「お呼びでしょうか、奥様」

真夜の前まで歩み寄った葉山が、恭しく頭を下げた。真夜は結婚歴が無いので「奥様」と呼ぶのは本来そぐわないのだが、その辺りについては便宜上といった感じだろう。

「貢さんが戻りましたら、こちらに来るように言ってください」

「了解しました」

葉山は深々と一礼して答え、そして顔を上げたときに彼女の座るデスクへと視線を遣った。もちろん彼が気を向けているのはデスクそのものではなく、先程しまったばかりのモニターに対してだろう。

しかし葉山は口を開くことなく、その視線を自身の背後にあるソファの方へと移した。すると「そこに座っている人物」は目敏くそれに気づき、彼の意向に気づいたことを示すように軽く手を振る。そして葉山もそれに応えて小さく一礼する。

その遣り取りの後、葉山は部屋を出ていった。

「……あんまり葉山さんを困らせるものではないわ、真夜」

するとその直後、部屋のソファに座っている人物——四葉深夜が、微笑みを携えながら真夜にそう声を掛けた。

「困らせる？ 確かにこんな時間に起こしてしまうのは、少し悪い気が——」

「分かってて言ってるでしょう？ 葉山さんが言いたいのは、そこにしまってる装置のことよ。——最近のあなた、「フリススキャルヴ」の情報収集能力に頼り過ぎていないかしら？」

真夜にとってはあまり愉快ではない話題に、普段から余り本心を表に出すことのない彼女には珍しく眉を潜めた。とはいえ、怒りを見せる、とまではいかなかった。

「アレの使用がメリットばかりではないことくらい、オペレーターである私は理解しているつもりよ。それにアレは純然たる科学技術の産物であって、未だにブラックボックスの部分が少ない魔法より

はよっぽど——」

「そういうことを言っているんじゃないの。それにブラックボックスで言うのなら、フリズスキヤルヴは本体の設置場所すら分かっていないものでしょう。今まで嘘を吐かなかったからって、これからも嘘を吐かないなんて保障がどこにあるの？」

屁理屈を正論で切り捨てられ、真夜はバツの悪そうな表情を浮かべた。もつとも彼女の場合、ただ単に「拗ねている」と受け取れなくもないが。

「いつそのこと、その装置の在処も達也さんに突き止めてもらったらどう？ 本体に直接アクセスできれば、独占的に支配することも可能じゃなくて？」

「まだ早いわ」

いったい何が早いのか。適切なタイミングとはいっつののか。

解釈の余地を残した曖昧な回答ではあったが、深夜はそれ以上追及はしなかった。

*

*

*

アメリカの西海岸に建つ、とあるマンション。そこはまさしく「可もなく不可もなく」といった評価が相応しい、单身者向けとしては実に中流的で特徴に乏しい建物だった。

「……………」

そんなマンションの一室にて、1人の少年がシェード型のモニター装置で目を覆いながら、ベッドに腰掛けていた。西海岸では今時珍しい生粋のアングロサクソンであり、実際の年齢よりも幼く見える貴公子然としたルックスをしている。

ふいに彼はモニター装置を外すと、それをベッドに無造作に放り投げた。そして天井を見上げながら、深い深い溜息を吐く。

そしてその姿勢のまま、ぼつりと呟いた。

「……………実に面白かった」

その少年——レイモンド・S・クラークが発したその声には、静か

な興奮がありありと滲み出ていた。それを示すかのように彼の頬は紅く上気し、心臓はバクバクと大きく脈動している。もしも事情を知らない者が彼の姿を見れば、生中継されていたスポーツの試合でも熱心に観戦していたんだろう、と思うかもしれない。

確かに「それ」を観ていたときの彼の心境は、それと非常に似通っていた。

実際にはスポーツの試合などではなく、USNAと日本の両国で大きな騒ぎとなっていた「吸血鬼」が、1人の少年が放つ魔法の前に敗れ去る映像だったのだが。

「それにしても、今頃ジード・ヘイグは悔しがっているだろうね。まるで狙い澄ましたかのように、自分の企みを潰されているんだから」

ジード・ヘイグ。またの名を顧傑^{グ・ジー}。

無国籍の華僑であり、国際テロ組織「ブランシユ」の総帥^{つかさはじめ}。達也たちが昨年春に捕まえたブランシユ日本支部のリーダー・司一^{つかさはじめ}の親分であり、国際犯罪シンジケート^{ノー・ヘッド・ドラゴン}「無頭竜」の前首領・リチャードⅡ孫の兄貴分でもある。

マカオとジョマが人間世界に現れたのはUSNAの実験によるものだが、2人が日本に上陸したのには彼が大きく関わっていた。ブランシユ日本支部と無頭竜の日本拠点を立て続けに失ったことにより日本に干渉する手段を無くした彼が、吸血鬼事件の騒ぎに乗じて日本での工作拠点を再建することが目的だった。

しかしその企みも、結局のところ失敗に終わった。

他ならぬ、野原しんのすけ達によって。

「だけど今回の場合、単なる失敗には終わらなかった。マカオとジョマは野原しんのすけに敗れたものの、その生死は不明で今後姿を現すかは未知数。そして奴らを退ける際に放った野原しんのすけの魔法は、少なくとも見積もっても戦略級に属するであろう絶大な威力。つまり今回の一件で、野原しんのすけが魔法師としても強大な戦闘力を有していることが明らかになったわけだ」

レイモンドが先程まで観ていた映像は、遠く離れた日本のテーマパークに張り巡らされている監視システムによるものだ。当然なが

らそう易々と覗き見できるものではないが、彼のように「フリーズキヤルヴ」を使えば見ることは可能だろう。

しかも今回の一件は、野原しんのすけが動いていたということ以外のおペレーターも注目していた。つまり先程の映像は、非常に局地的な範囲で注目度が高いものだったのである。

そこまで頭を巡らせたところで、レイモンドはハアツと大きく息を吐いた。その表情は歓喜を通り越して「陶醉」の域にまで達している。

「ああ、凄くワクワクするよ……。おそらくこれから数年の間で、世界情勢は大きなうねりと共に移り変わっていくだろう……。もしかしたら第四次世界大戦の幕開けになるかもしれない大事件が、手を伸ばせば届く距離にまで迫っているのを感じるよ……」

弾むような足取りで部屋中を歩き回るレイモンドの姿は、まるでゲームを買ってもらった子供がその日を待ち侘びているかのような、あまりにも純粋な「期待」に満ちたものだった。

「うーん……。こんなビッグウェーブ、乗らなきゃ勿体ないって感じだなあ……。でも今までのような、フリーズキヤルヴを振りかざして「賢者」を名乗るのは危険度が段違いだし……。ああ、でもこんな面白そうなこと、そうそう無いに違いないし……」

悩ましげな、それでいて実に楽しげな声は、しばらく止みそうになかった。

*

*

*

ヘンダーランドの開園によって人々の往来が格段に増え、最寄り駅とその周辺はホテルが建つなど再開発が活発に行われた。しかしそれはあくまでヘンダーランドの正面部分のみに限定したものであり、裏手に位置する湖周辺は未だに鬱蒼とした森が広がる自然豊かな場所となっている。

当然そのような場所に人工的な明かりなど存在せず、今は空に浮かぶ月と星がその役目を担うだけだ。なので少しでも森の中に入れば

黒の絵の具で塗り潰したかのような闇に覆われ、木々が比較的少ない湖の畔も常に薄暗い。

そんな湖の畔で、小さくパシヤパシヤと音を立てながら湖から姿を現す者達がいた。

「ああ、ひどい目に遭ったわ……」

「あの3人も、結局一瞬で消えちゃったものね……」

それは、随分とボロボロな見た目に変わり果てたマカオとジョマの2人だった。しかしボロボロなのは服だけで、その体には先程しんのすけの魔法を食らった跡は見受けられない。

とはいえ、けつして無傷だったわけではない。2人の体が無事なのは傷ついた体を魔力で回復したからであり、そのせいで残存する魔力は心許ないほどにまで減ってしまった。おまけに自分達の存在を気づかれないよう、今の今まで冷え切った夜の湖を自力で泳いでいたため体力もかなり消耗している。

畔に座り込んだマカオとジョマが、湖の方へと目を凝らす。ヘンダーランドの人工的な明かりによってここからでもぼんやりとシルエツトが確認できるのだが、そこには一番目立つ奇抜な形をしていたヘンダー城はどこにも見当たらなくなっていた。

と、微かに聞こえてきた音に2人が後ろを振り返った。

すぐ後ろは相変わらず闇に包まれた森であり、今の季節を考えれば小動物も活発に活動していないためとても静かなはずだ。しかし闇の奥から聞こえるその音は自然界では有り得ないエンジン音であり、そしてそれは徐々に大きくなっていく。

やがて2人の前に姿を現したのは、ヘッドライトも点けていない乗用車だった。しかもそれはかなりの高級品で、森の中よりも都会の方が似合っているような代物だ。

「お2人共、お疲れ様でございました」

そうして運転席から降りてきたのは、如何にも貴公子然とした見目美しい外見をした二十代半ばほどの青年・周公瑾^{しゅうこうきん}だった。おそらく2人の好みど真ん中の見た目をしている彼の登場に、しかし2人は特にテンションが上がることも無くゆつくりとした動きで立ち上がる。

それは魔力・体力共に著しく消耗しているからでもあるが、どうやらそれだけが理由ではないようだ。

「ちよつとアンタ、結局城も壊されちゃったけど、本当に大丈夫なんでしょうね？」

「ええ、もちろん想定内です。お2人が我々の作戦通り手を緩めてくたさったおかげです」

「あの子相手にあそこまで警戒しなきゃいけないとは思えないのだけれど」

「確かにお2人が本来の実力を発揮できれば、お2人の敵ではないかと思えます。しかし相手は、そういった『既定路線』を根本から塗り替える野原しんのすけですのぞ」

笑みを携えてつらつらと考えを述べる周に、マカオとジヨマは小さく鼻を鳴らした。

「まあ良いわ。とりあえず魔力がそれなりに回復するまで厄介になるわね」

「新しい魔力収集装置についても、本当に協力してくれるんでしょうね」

「もちろんです。お2人をお迎えするに相応しい場所をご用意しておりますのぞ」

自身が乗ってきた車に案内する周に、マカオとジヨマは互いに顔を見合わせて肩を竦めると、車に向かって歩き出した。

2人の乗客を乗せた車は、周の運転によってその場を静かに離れていった。

第98話 「終わりと始まりと振り返りだゾ」

風に乗って微かに聞こえてくる楽しいげな騒めきとは対照的に、第一高校内のカフェテリアは数人の生徒がいるだけで閑散としたものだった。その生徒の1人である達也はセラミックのカップに入ったコーヒーに口を付け、ソーサーの無いテーブルにカップを置いた。

今日は、第一高校の卒業式。予定の時間では既に式は終了していて、この後2つの小体育館を使ってパーティーが開かれることになっている。わざわざ2つの会場を使うのは一科生と二科生を分けるためであり、こんなときまで徹底しなくてもと思わなくもなかったが、本人達もその方が気楽なのだろう。

しかしながら、会場を2つに分けることで苦勞を被っている者達もいる。会場の設営や料理の手配を行う業者はその分追加料金を貰っているのでまだ良いが、パーティーを主催している生徒会はまさにその被害者の筆頭だろう。達也が現在カフェで時間を潰しているのも、その仕事に駆けずり回っている深雪達を待っているからだだった。

とはいえ達也もただ黙って見ていたわけではなく、手伝おうか呼び掛けた彼に対して深雪が「お兄様のお手を煩わせる訳にはいきません！」と拒否したという経緯がある。あずさは手伝ってほしそうにしていたのだが、結局は何も言わずに引き下がっていた。それで良いのか生徒会長。

ただ正直なところ、3年生にとって司波達也という存在はかなり微妙なものだろう。一科生にしたら自分達の存在を脅かす者、そして二科生にしても自分達の劣等感を刺激される者。卒業式というめでたい席で彼らに下手な横槍を入れずに済んで良かった、と達也は本気で考えていた。真由美などはそれを聞いて、大層不機嫌そうにしていたが。

ちなみに達也たちと交流のあった3年生の進路についてだが、真由美・克人・鈴音の3人は仲良く魔法大学へ進学するのに対し、摩利だけは『実戦魔法師として身を立てたい』という夢のために防衛大学への進学を決めた。真由美も直前までそれを知らなかったらしく、彼女

をやたらと冷やかしている姿が目撃された。会おうと思えばいくらでも会える距離とはいえ、別の学校というのは寂しいのだろう。

「お兄様、お待たせしました」

と、そんなことを思い出していると、少々息を弾ませた深雪の声に達也が顔を上げた。

そこにいたのは深雪だけでなく、卒業証書の入った細い筒を持った真由美と摩利、そしてその隣に寄り添うようにしんのすけとリーナの姿もあった。しんのすけは普段通りの飄々としたものだが、リーナはなぜか不機嫌そうに達也を睨みつけている。

「お2人共、どうしたのですか？ 二次会の誘いが無かったとは思えなかったのですが」

「その前に挨拶しておこうと思ってな」

「式が終わっても挨拶に来ないし、パーティーの間もずっとここにいた達也くんのことだから、知らんぷりして帰っちゃうかと思ってね」

真由美の言葉は表情的にも声色的にもからかっていることは分かったが、それを言われた達也本人としては釈明せずにはいられなかった。

「生徒会役員でもない俺が、先輩達のパーティー、しかも一科生の方に顔を出せるはずがないでしょう」

「別に遠慮しなくても良いのに」

「そうだゾ達也くん、オラもパーティーにお邪魔してたし。いやあ、まさか学校のパーティーであんなに美味しい料理が出るとは思いませんでしたなあ。思わず夢中で食べちゃったゾ」

「おまえはむしろ、少しは遠慮というものを覚えるべきだ」

2人の会話を真由美と摩利がのほほんとした表情で眺めていると、目にも鮮やかな金色が2人の間に割って入ってきた。

「なんでよ、タツヤ！ 風紀委員のタツヤがここで休んでる間に、臨時の私はパーティーの手伝いをしてたのよ！」

「風紀委員は生徒会の一員ではないからな。しんのすけだって、パーティーに参加はしてたが手伝いはしていないだろ？」

「そうだけど……、そうだけど納得できないわ！」

「そんなこと言って、リーナちゃんも凄いノリノリだったじゃん」
「あつ、ちよつ——！」

しんのすけのその一言に、リーナは慌てた様子で彼の口を手で塞ぐうとした。

「何かあったのか？」

「何でもないわよ、タツヤ！」

「臨時役員のリーナに手間の掛かる準備をさせるのもアレなので、彼女には余興を担当してもらったのですが——」

「ちよつと、ミュキー！」

リーナが深雪を止めるべく飛び掛かろうとするが、しんのすけの巧みなディフェンスによってその場を動けずにいた。

「別に余興と言っても自分で何かをする訳じゃなくて、在校生や卒業生から希望者を募るだけで良かったのですが、リーナはどうやら勘違いしたらしくて、自分でバンドを率いてステージに上がったんです」

深雪に全てをバラされたリーナは、「あああああ……」と嘆きながらその場に崩れ落ちそうになっていた。

「ふふつ、確かにアレはびっくりしたけど、会場も物凄く盛り上がったわ。リーナさん、歌も上手くて素敵な声だったわよ」

「ああ。立て続けに10曲くらい演奏してな、プロと比べても遜色ない出来だったよ」

「まあ、10曲はさすがに多いけど。音楽フェスの1ステージ分とか本気すぎるゾ」

しんのすけの冷静なツツコミに、リーナは顔を真っ赤にして今にも泣きそうになっていた。

それを見ていた達也は、微笑まじげな目つきとなっていた。

「良かったじゃないか、リーナ。『学校生活の良い思い出』が出来て」
「……………」

プイツとそっぽを向いたリーナの仕草に、彼女を除いた笑い声があった。

*

*

*

そしてその日以降、リーナの姿を見ることは無かった。学校には『帰国の準備で忙しいから』と説明したらしいが、おそらくそれ以前から撤収命令が出ていたのだろう。高校生としての潜入調査のためにギリギリまで粘った彼女だが、そのおかげで少しは『普通の高校生生活』を楽しめたなら幸いである。

「雲の乗ってる飛行機、ちよつと遅れてるみたいだね」

そんなことを思いながら、達也はエリカの言葉に合わせて到着便の遅延案内へと目を向けた。

今日は、アメリカへ留学していた雲が日本へ戻ってくる日。彼女を迎えるために、この1年間ですっかりお馴染みのグループと化した面々は、空の玄関口である東京湾海上国際空港へと足を運んでいた。

一昨日で、3学期が終了した。つまり、達也たちの高校生活最初の1年が終了したことになる。

達也の成績は、入学したときと変わらなかった。理論科目の点数が極端に高く、実技科目の点数がすこぶる悪い、総合順位としては中の下といったところ。エリカ達についても、入学時や節目でのテストの順位とそれほど変化は無い。

「それにしても、アメリカ本土からだとはやはり時間が掛かりますね」

「軍用機は4分の1以下で太平洋を横断するらしいけど、なんでそんなに差があるんだろうね？」

「エンジンが違うぜ。軍用機は大気圏外周まで上がるからな。民間機は安全性と経済性優先だ」

「よく知ってるじゃない、レオ。テストの成績は悪いくせに」

「何だとエリカ！」

「よしなよ、レオ」

「エリカちゃんも、いちいち茶々を入れないの」

深雪が達也に呼び掛け、ほのかがそれに反応し、レオが意外な博識っぷりを披露し、エリカが茶々を入れて、幹比古と美月がそれを窘める。そんな遣り取りも、ここ1年ですっかり定番となったことだ。

そんな遣り取りを横目に、大きめのポストンバッグを肩に提げたし

んのすけが、ニヤニヤしながら達也に近づいてくる。

「いやあ、雫ちゃんがどんな成長をしたのか楽しみですなあ」

「そうだな。向こうのカリキュラムは日本とは違うから、どういった学習を取り入れているのか興味がある——」

「そうじゃなくて。親から離れて日本から遠い異国の地で1人暮らしなんて、それこそ『イケナイ体験』の1つや2つはしててもおかしくないゾ」

「イイイイ、イケナイ体験!?!」

「し、しんちゃん! そ、それってつまり……?!」

しんのすけの軽口に、ほのかと美月が顔を真っ赤にして反応した。おそらく今の2人は、雫のような大企業の令嬢が海外留学の際に使用人の1人も同伴させないなど有り得ない、という事実も失念していることだろう。

と、そのとき、ゲートから出てきた大勢の人混みに紛れて雫が姿を現した。キャリーバッグを引きながら颯爽と歩くその雰囲気は、留学する前よりも随分と大人びて見える。

「し、雫!?! その雰囲気……もしかして、イケナイ体験をしちゃったの!?!」

「挨拶も無しにいきなり何を言ってるの、ほのか」

冷静にツツコミを入れる雫に、ほのかが目には涙を浮かべながら彼女に抱きついた。しばらく会えなかった親友との感動の再会にしては、どうにも空気が締まらない。

「ただいま、みんな」

「お帰り、雫」

「無事で何よりだよ」

そうしてほのかの抱擁を受けながら、雫は達也たちに視線を向けて改めて久々の再会に相応しい遣り取りを交わす。

それにしても、『イケナイ体験』というのは抜きにしても、彼女の行動の端々から以前よりも余裕のようなものが感じられる。おそらくそれは、彼女がアメリカ留学によって獲得した多くの知識によるものだろう。

「雫、向こうで色々学んできたんでしょ？ 向こうでの生活とか色々教えてくれる？」

深雪が雫にそんなことを訊いてきたのも、それを無意識の内に感じ取っていたからだろう。

「うん、良いよ。話したいこともいっぱいあるし。——でも私としては、私がない間に日本で何があったのかも色々と聞きたいんだけど」

「えっと、雫ちゃん……。その節については大変申し訳なく——」

申し訳なさそうに頭を下げるしんのすけに、雫がクスリと笑みを漏らす。

「それについては父さんが許してるなら私からは何も言わないけど、そもそもどういった経緯でそうなったのかは教えてくれるかな」

「そうだな。それも含めて、これからアイネブリーゼにでも行かないか？」

達也の誘いに、雫は一も二も無く頷いた。

雫を迎えた達也たちは、これまたこの1年の間にすっかり常連となったアイネブリーゼへと向かった。既に貸し切りの手配が成されているそこならば、周りの目を気にせず彼女の話を聞くことができる。

3ヶ月間で積もりに積もった彼女の話はとても長かったが、そのどれもが日本に閉じ籠もっている魔法科高校の友人達には新鮮なものだった。特に向こうの学校での授業内容は達也が前のめりになるほどの興味を惹いたが、しんのすけやレオやエリカなどの比較的不真面目な生徒である面々は若干退屈そうにその話を聞き流していた。

雫の話が一段落したら、今度は達也たちがここ3ヶ月間で起こった出来事について話す番だ。特に雫と入れ替わりで入ってきた留学生や、達也たちも当事者となった吸血鬼事件については雫も大いに関心を寄せ、異世界からやって来たというオカマの魔法使いやその部下達の話には、感情をあまり表に出さないタイプの彼女ですら驚いてい

た。

そして、「彼女」との初顔合わせについても。

「初めまして、さっきの話にも出てたトツペマ・マペットよ。よろしくね、雫ちゃん」

「……凄い、本当に生きてるんだ」

深緑を基調とした道化師風の衣装を身に纏い、左頬に星形のメイクを施し、ぜんまいのネジを髪飾りのようにあしらい、腰まで届くほどに長い緑色のツインテールを模した帽子を被る、生きた操り人形。

吸血鬼事件を経て再びしんのすけの仲間となった異世界の魔法使い——トツペマ・マペットの姿に、雫は驚きを通り越して目を丸くしていた。しかしその目の奥はキラキラと輝いているので、少なくとも恐怖の類は抱いていないようである。

「あの日以降、しんのすけと一緒に家に住んでいるんだ。元々仲間だったこともあるし、魔法的な繋がりがある今だと尚更一緒の方が良いと思ってるな」

「それに4月からは、しんちゃんと一緒に学校に行くことにしたの。いつどこで、マカオとジヨマやその部下達が襲ってくるか分からないからね」

「そうなんだ……。よろしくね、トツペマ」

ペコリと頭を下げる雫に、トツペマは「よろしくね」と笑顔で答えた。人形のトツペマの方が雫よりもだいぶ小さいのだが、精神年齢的にはトツペマの方が遥かに上であり、だからこそ雫に対してお姉さんとして接していることが雰囲気からも伝わってくる。

「ところで、トツペマのことは父さんも知ってるの？」

「ああ、ヘンダー城を破壊した件について雫の家にお邪魔させて頂いたときにな。さすがにトツペマやマカオとジヨマ達の存在を抜きにして、ヘンダー城を壊すに足る合理的な理由が思いつかなかったからな」

「そりやそうだな。いくら何でも、被害額が大きすぎる」

しんのすけがアクシヨンビームでヘンダー城を木つ端微塵に破壊してから最初の日曜日、達也と深雪、そしてしんのすけとトツペマの

3人＋1体は、ヘンダーランドを経営する北山潮に釈明するべく北山邸を訪れていた。それに伴い、異世界からやって来たマカオとジョマの存在はもちろんのこと、生きた人形であるトツペマの存在すら明らかにしたのである。

とはいえレオも指摘した通り、被害額が尋常ではない。おそらくヘンダー城の総工費は推定で数百億に上るだろうし、テーマパークのシンボルであるそれを壊したとなれば今後の運営にも少なからぬ影響が出るだろう。たとえやむにやまれぬ事情があつたとしても経営者としてはそう簡単に許せるものではなく、それこそ損害賠償事件に発展してもおかしくない。

「それでも、結局は許してくれたんだよね？ 何というか……凄いな」
「包み隠さず事情を説明したのが功を奏したのだろうが、だとしても雫のお父上の懐の深さに助けられたな」

「でもさ、城を再建するにしてもお金はどうするの？」
「その件については……」

エリカの問い掛けに、達也が気まずい表情でしんのすけへと視線を向けた。

「……お金については、あいちゃんが出してくれることになったゾ」
「あいちゃんって、あの酔乙女家の？ なんでまた」

「オラも知らないゾ！ オラも達也くんも話してないのに、急に電話が掛かってきて『私が何とか致しますわ』とか言ってきたんだゾ！ 代わりに何を要求されるのか分からなくて怖いんだゾ！」

「数百億なんて大金をポンと出すとか、世界規模の大企業の大嬢こつわ」

「確かに狙いが分からなくて怖いわな。主に思い当たりがあまりすぎるって意味で」

レオの言葉にしんのすけが改めてブルリと体を震わせ、エリカが「余計なこと言うんじゃないわよ」とレオを軽く小突く。

そんな遣り取りの中、ずっと思案顔だった雫が口を開いた。

「それにしても、あの城に魔力を集める機能があつたなんて……。まさか父さんはそれを知ってアレを造ったわけじゃないと思うけど」

……」

「確かに、そこが疑問だね。それって、トツペマの世界での技術なんだろう？ 何も知らずに造った建物に偶然そういう機能が備わった、なんて有り得るのかな？」

幹比古の疑問は、達也も同意するところだった。なので達也は北山家を訪れた際、ヘンダー城建設の経緯を尋ねていたのである。

北山家が経営しているホクザングループにある子会社の1つに、元々独立していた企業を買収したことで傘下入りしたものがあつた。その企業が初代ヘンダーランドを運営していた企業と繋がりがあつたらしく、縁あつて当時の設計図をその会社から譲り受けたらしい。当時の事情を知る社員は既におらずほとんど忘れられていたのだが、偶然それが見つかったことでヘンダー城を含めた幾つかのアトラクションを当時そのままの姿で再現することになったようである。

「その初代ヘンダーランドの運営企業って……」

「間違いなく、マカオとジョマが設立したものでしょうね。ヘンダーランドを普通のテーマパークに偽装して運営するために、書類やら何やらを魔法で偽造したんでしょ」

トツペマの答えは、その場にいる全員が納得のいくものだった。

「ということは、マカオとジョマが城の設計図をその会社に託して、将来再び自分達が復活したときに再建されたそれを利用しようと企んでいたってこと？」

「何というか、随分と用意周到だな。万が一自分達が封印されたときのために、復活した後のことを考えてたってことだろ？」

「用意周到っていうより、回りくどくない？ そもそも設計図を託したところで、本当にその城が再建されるかどうかなんて分からないじゃない」

「怪しいとするならば、設計図を持ってたっていうその子会社だけど……」

「雫のお父上の話を聞く限り、その子会社はシロだろうな。ヘンダーランド再建のプロジェクトにその子会社はほとんど関わっていなかったし、設計図も見つかるまで社員の誰もが存在にすら気づいてい

なかつたらしい」

「てか対策を立てるなら、城なんかよりも封印された後に復活する手段の方だよな。今回奴らが復活したのだって、結局はUSNAの実験が偶々そういう結果になっただけだろ？ そんないつ行われるかも分からない実験を見越して、復活した後に魔力を補充するための装置の心配をするか？」

疑問が疑問を呼んで堂々巡りをしているような状況に、全員の顔がみるみる苦悶の表情を浮かべていく。

そんな状況を打ち切ったのは、しんのすけだった。

「ねえねえ！ そんな難しいこと考えないで、今は雫ちゃんの帰国をお祝いするゾ！ せっかくケーキとかあるんだからさー！」

「……確かに、店主のご厚意を無駄にするわけにはいかないか」

「というわけで、いただきますーす！」

待つてましたとばかりに真っ先に飛びついたしんのすけに苦笑いを浮かべつつ、他の面々もケーキや軽食に手を伸ばしていった。

余談だが、雫も日本を旅立つ前に比べて食いつきが良いように思えた。別に日本食ではないのだが彼女には感慨深いようで、「やっぱり日本人の作る料理は繊細で量も普通だ」と呟いていた。いったいどんな食生活を送っていたのだろう、と達也は少し気になった。

*

*

*

雫の帰国祝いも終わり、司波兄妹も家に戻ってしばらく経った頃。達也がリビングで電子書籍に目を通しながら『今日は色々あったな』などと今日の出来事を振り返っていたまさにそのとき、来客を知らせるベルの音が鳴った。対応をするためドアホンに向かう深雪をチラリと目で追って、再び携帯端末へと視線を戻す。

そしてドアホンのボタンを押して来客の姿が画面に映し出されたとき、深雪から驚きの声が漏れた。そのときの彼女の顔には、驚愕と焦りの色が浮かんでいる。

「あの、お兄様……。お客様なのですが……」

「どうした？ 俺が出ようか？」

「いえ、それには及びませんが……。お客様は、その——」

戸惑いを見せる深雪の口から来客の名前が出ると、達也の顔も同じように驚愕で彩られた。いつまでも玄関に立たせておくのも悪いということ、その来客を中に入れることにする。

そうしてリビングにやって来たのは、3人。

1人は、達也と深雪の母親である四葉深夜の守護者ガーディアンを務める桜井穂波をそのまま十代半ばまで幼くしたような少女・桜井水波みなみ。彼女も穂波と同じく遺伝子操作を受けた調整体魔法師であり、本家でメイドとして働いているのを何回か見掛けている。

1人は、四葉の中で諜報部門を引き受ける分家「黒羽家」の長男にして、深雪と次期当主の座を争っている少年・黒羽文弥。中世的な顔立ちをした彼は、初めて訪れた達也の自宅に緊張しきりである。

そしてもう1人は、そんな文弥の双子の姉であり、文弥とペアを組んで諜報の任務を請け負っている少女・黒羽亜夜子。こちらは文弥とは対照的に、落ち着いた、それでいてどこか挑戦的な笑みを深雪に向けている。

「文弥と亜夜子はともかく、水波が本家を離れるとは珍しいな。今日はどういった用事だ？」

達也の言葉に、水波が代表して1歩前に出て達也に封書を差し出した。

とりあえずそれを受け取り、3人にソファアームに座るよう促して自身もそれに座り、封を開けて中の手紙に目を通す。

差出人は、四葉家現当主である四葉真夜。

決まり文句である時節の挨拶の後には、こんな文章が続いていた。

この度、文弥くん、亜夜子ちゃん、水波ちゃんを第一高校へ入学させることとなりました。

ついては達也さん、あなた達の家に3人を住まわせてあげてくださいいな。あなた達の家ならば第一高校からも近いでしょうし、わざわざ別の家を用意させるのも手間ですし。もちろん、3人分の家賃や生活

費はこちらで工面致します。

家事についても、水波ちゃんに任せれば大丈夫です。既に一人前の家政婦として十分な技量を持っていますし、住み込みのメイドとして働くような言い含めてあります。あなた達も高校2年生ともなれば色々と忙しくなるでしょうし、家のことを気兼ねなく言いつけてください。

それから、彼女には将来的にガーディアンとしての仕事を憶えてもらうつもりです。彼女の先輩として、色々と教えてあげてくださいね。

なぜだろうか。達也はこの手紙を読んで、真夜の高笑いが聞こえてくるような気分になった。

達也から手渡されたその手紙を深雪が読み終わったタイミングで、3人が立ち上がって深々と頭を下げた。

「未熟者ではございますが、よろしくお願い致します。奥様のお言いつけ通り、精一杯務めさせていただきます」

「突然押し掛けて申し訳ありません、達也兄さん、深雪さん！ よろしくお願い致します！」

「お2人との共同生活、楽しみにしておりました。よろしくお願い致しますわ」

横並びに立って揃って頭を下げる3人と、それを無言でジッと見つめる達也。

そしてその間で、オロオロと視線を行ったり来たりさせている深雪。

達也としても突然のことで戸惑いはかなり大きいですが、当主である真夜の命令を拒絶することはできない。もちろん彼女の真意を探る必要はあるだろうが、少なくともこの場で達也が口にすべき台詞は1つだけだ。

「——分かった。3人共、これからよろしくな」

新年度は今まで以上に波乱を巻き起こしそうだ。

そんな有難くもない予感が、達也の胸にこびりついて離れようとし

なかった。

それは第一高校の卒業式が行われた、その日の夜。

「前にリーナちゃんと話したのって、ここだった？」

「そうそう。ここのがファミレスね」

「……………」

第一高校から程近い場所にあるファミレスに、しんのすけ・リーナ・達也の3人がやって来た。全員学校から一旦家に帰ったのか、制服から着替えて私服姿となっている。

周囲に視線を飛ばす達也を最後尾に据えて3人は店の一番奥にある席へと進んでいき、達也とリーナが壁を背にしたソファーに肩を並べて座り、しんのすけがその正面の広々としたソファー席に座った。達也たちからは、店の全景が一目で分かるようになっていた。

「何でも好きなの頼んでね、シンちゃん。ワタシ達の奢りだから」

「いやあ、悪いですなあ。うくん、何にしようかなあ？」

嬉々とした様子でメニュー表に夢中になるしんのすけを視界に捉えながら、達也が小声でリーナに話し掛ける。

「どうやら本当に仲間は近づけていないようだな」

「当たり前でしょ、絶対に盗み聞きするような真似はするなって言いつけているんだから」

「それでも向こうからしたら、危険を冒してでも欲しい情報なんじゃないか？」

「仮にそうだったとしても、タツヤなら分かるでしょ？」

リーナの質問に、達也は答えなかった。肯定も否定もしなかった。そうしてしんのすけがタッチパネルで料理を注文し、店員がそれを持ってくる。奢りなのを良いことにこの店で一番高価なステーキセットとジャンボパフェを注文してきたが、2人からしたらこの程度の出費は痛くも痒くもない。

これから得られるであろう情報に対する費用としては、それこそ破格だろうから。

「しんのすけが食べてる間に、俺達で『例の物』を読ませてもらえるか？」

「おっ、そうだったそうだった。ちょっと待ってね」

ナイフとフォークを構えていたしんのすけが、一旦それをテーブルに置いて自分の鞆を漁り始めた。とはいえ大きな鞆ではなく、程なくして目当ての物を取り出して2人に手渡した。

どこにでも売っている簡素なノートを表紙には、こう書かれていた。

『2092年夏、沖縄の思い出』

『作：野原しんのすけ』

「……このノートに、俺達とのが書かれているんだな？」

「そうそう。この前リーナちゃんと一緒に話してたとき、そういえば日記書いてたなって思い出して。母ちゃん達に春日部から送つてもらったんだゾ」

そう言って再び食事に戻るしんのすけに対し、達也とリーナは真剣な面持ちで互いに視線を合わせ、そして意を決したように表紙を捲つ

た。

これから語られるのは、世界で数人ほどの記憶にしか残っていない、しかし確かに存在していた一夏の思い出。

もはや追憶することすら叶わなくなった記憶の断片を繋ぎ合わせて、あのととき何が起こっていたのかを正確に記した『記録』である。

追憶編

第1105話 「みんなで沖縄にやって来たゾ」

西暦2030年頃を境に始まった急激な寒冷化により、世界の食糧事情が大幅に悪化した。先進国は太陽光を用いた工場化農業のおかげでさほど影響は無かったが、急激な経済成長によって人口爆発を起こしていた新興工業国が受けた打撃は甚大なものだった。

最も深刻な事態に直面したのは、不運にも寒冷化と砂漠化が重なった華北地域。彼らは伝統的な手段（越境植民。つまり不法入植）でそれを乗り切ろうとして、その対象であったロシアが武力で徹底抗戦。両国の対立はやがて国境を越えて広がり、食糧事情に端を発したエネルギー争奪戦との相乗効果によって、まさに傍観者が1人もいない「世界大戦」へと発展していった。

第三次世界大戦。別名、20年世界群衆戦争。

2045年から2065年まで行われたこの戦争によって、世界の人口は大幅に減少した。世界の勢力図が大きく入れ替わるほどの戦争だったが、意外なことにこの戦争で熱核兵器が使われたことは1度も無かった。

2046年に設立された「国際魔法協会」。

放射性物質によって地球環境を回復不能までに汚染する兵器の使用を阻止することを目的に作られた国際機関。核兵器の使用を阻止するという目的に限り、魔法師は属する国のしがらみを離れて実力行使による紛争の介入が許される。

これによって国際魔法協会は、大戦後の世界でも国際的な平和機関として名誉ある地位を占めるようになった。

*

*

*

西暦2092年8月4日

シートベルト着用のアナウンスに、司波深雪は『読本・現代史』と

いうタイトルの魔法師向け教材の電子ファイルを閉じた。中学生になつたばかりの彼女には少し難しすぎる内容だったが、むしろこれくらいの方が退屈しなくて良いのかもしれない。

肘掛けにあるボタンを押すと、深雪の座るシートを覆う卵形の安全シールドの内側に南の島のリアルタイム映像が投影された。その鮮やかな緑と輝く海を見ていると、先程の教材にあつた寒冷化がフィクションの出来事に思えてくるが、気候が元に戻った現代でもその時代の名残を見ることができる。例えば肌を露出するのを良しとしない服装マナーも、寒冷化が深刻だった時代の名残に他ならない。

と、映像の南の島がみるみる近づいていき、やがて彼女達を乗せた飛行機はほとんど振動することなく那覇空港へと着陸した。形式上の意味を持たないシートベルトを外して、深雪はカプセルシートのシートを開いた。十分に距離を空けた他のシートでも客が荷物を纏めている中、彼女は同じくエグゼクティブクラスを利用する母親――深夜が来るのを待つ。

おそらく階下のノーマルクラスでは、多くの客が互いの肘がぶつかり合うほどに狭い座席に押し込められているのだろう。見ず知らずの人とそんな至近距離で1時間も同席するなど、深雪の感覚からしたら耐えられない。

「……………」
ノーマルシートのことを思い浮かべたところで、深雪の顔がムツとむくれた。

現在そこには、彼女の兄――達也がいる。

エグゼクティブクラスには通常のスタッフだけでなく、荒事専門の警備用乗務員も何か異変が無いか目を光らせている。ハイジャックや自爆テロなどの犯罪が発生するとすれば、警備が緩いノーマルクラスの方だ。達也がノーマルの席を選んだのは、深雪の「ガーディアン守護者」として万一の事態に備えるためだった。

そういう役目を与えられている、というのは分かっている。

自分の家が特殊である、という認識もある。

だとしても、いや、だからこそ、

「——家族旅行なんだから、少しでも一緒にいたかったのに」
深雪の口からポツリと漏れたその言葉は、紛れも無く彼女の本心だった。

深雪達が今回滞在するのは、恩納瀬良垣おんなせらがきに最近購入したばかりの別荘だ。本当はホテルでも良かったのだが、人の多い場所が苦手である深夜を慮おもんばかって、という理由で達也と深雪の父親である司波龍郎が急遽手配したものだ。

それを聞いた深雪の感想は、相変わらずあの人は愛情をお金で購え
ると思っっている、と冷ややかなものだった。彼女が父親に対して家族
愛を向けられないのも、ひとえに彼が自分達や四葉家に隠すことなく
堂々と愛人を作っているからだだろう。

もつとも、彼らにも同情の余地はある。元々先に付き合っていたの
は今の愛人の方であり、彼の持つ規格外のサイオン保有量に目をつけ
た四葉家が、半ばむりやり深夜の婚約者に仕立て上げたのだそそうだ。
とはいえ、娘であり思春期特有の潔癖性を持ち合わせる深雪にとって
は「愛人」というだけで父親を嫌う充分な理由になる。

——せっかくバカンスに来たのに、嫌なことを思い浮かべる必要は
無いわね。

軽く頭を振って先程までの思考を外に追いやりながら、深雪は深夜
と共に到着ロビーの会員制ティーラウンジを出た。

その入口にて、全員分の荷物を載せたカートを押す達也が2人を出
迎えた。

別に意地悪をしたくて、彼を別行動にしたのではない。エグゼク
ティブクラスの乗客は優先的に飛行機から降ろされ、荷物も優先的に
返却される。とはいえ少しは待たなければならず、荷物が出てくる時
間を考えると、ノーマルクラスの彼に取りに行ってもらう方が効率的
なのである。そもそもこれ自体、達也の方から提案したものだ。

とはいえ、それで深雪が納得できるかどうかは別問題である。

「お兄様！ 長旅でお疲れでしょう、ここからは私がカートを押しま

す！」

「いえ、自分は大丈夫ですので、どうぞお気になさらず」

深雪の申し出に、達也は眉一つ動かさず丁寧な口調でそう答えた。彼を使用人として見るならば、その行動に何ら非難されるところは無い。

しかしそんな彼に対し、深雪は唇を尖らせた。

「お兄様！　なぜ私に対して敬語をお使いになるのですか！　ここは実家ではないのですよ！」

「……ですが、どこに誰の目があるか分かりません。黒羽家の皆様も既に現地入りなさっていると聞きますし、自分が主人に対してタメ口を利いたとなれば——」

「達也」

ピシヤリと達也の言葉を遮ったのは、深雪の隣で2人の遣り取りを眺めていた深夜だった。

「確かにあなたの言うことも一理あるでしょう。しかしここには、それ以上に普通の方々が大勢います。そんな中で実の息子を使用人同然に扱っているとすれば、そちらの方が目立ってしまうと思うのですが」

「その通りです、お兄様！　ガーディアンとしてのお務めを果たそうとするのならば、むしろ普通の家族のように振る舞うのが正しいのではないですか!?!」

深夜に続いてやたら気合いの入った深雪に説得され、今まで無表情だった達也の顔に困惑の色が浮かんだ。普段実家ではほとんど感情を露わにしない兄の姿に、そしてそれを引き出したのが自分であることに、深雪は場違いだと自覚しながらも嬉しさを感じずにはいられなかった。

やがて達也は、フツと笑みを漏らしながら肩を竦めた。

「——分かったよ、深雪。これで宜しいですか、母上?」

「まだ固さが抜け切れていませんが、まあ及第点としましょう」

「さあお兄様、参りましょう！」

弾かれたような勢いで深雪は達也の隣へと移動し、カートを押そう

とする兄の腕を取って自らに引き寄せた。目を丸くする達也が深夜に視線を向けるが、彼女はニコリと笑って颯爽と歩き出していく。

諦めたように溜息を吐く達也、そして満面の笑みでご機嫌なオーラを振りまく深雪が、母親の背中を追って1歩足を踏み出す――

「――！」

その瞬間、剣呑な雰囲気を感じた達也が鋭い目つきとなり、大勢の人々で行き交うロビーの向こう側にある壁際で観光客風の2人の男を見つけた。1人の男が息を切らしてもう1人の男に駆け寄り、険しい表情で二言三言会話を交わして再び駆けていく。

頻りに周りの通行人を気にしているその姿は、誰かを捜索しているように思えた。しかし犯人を追う刑事にしては、その男達の纏う雰囲気かたぎに堅気かたぎの印象は覚えない。

「どうかなさいましたか、お兄様？」

「……いや、何でもない。少し気になる奴らがいたものでね」

「あらまあ、下手に巻き込まれない内にさっさと行きましようか」

若干震え声で尋ねる深雪に努めて優しい声色で答え、口調はのんびりしたものながらも目の奥に鋭い光を携える深夜の言葉に頷いて、達也はロビーを走り去っていく男2人を視界に捉えながらカートを押していった。

「いやあ、まさかオンシーズンの沖縄にタダで旅行できるなんて、しんのすけが商店街の福引きで1等を当てたおかげだな！」

「しかもこの時期はいつも忙しくしてたあなたも、なぜか急に仕事が一段落ついて暇になったおかげで、こうして家族4人揃って旅行に行けるんだものねえ！」

「パパもママも、なんでそんなに説明口調なの？」

国内線の到着ロビーにて早口で長台詞を捲し立てるのは、アロハシャツを身に纏う野原ひろし・みさえ夫婦だった。沖縄なのになんでハワイの衣装を、と疑問に思う者もいるかもしれないが、彼らにとつてはどちらも南国程度の認識しかないのである。

むしろ2人に後ろをついて歩く小学2年生のひまわりにとっては、2人のはしゃぎっぷりの方がよほど目に余っていた。周りの通行人が2人に白い目を向けているが、はしゃぐのに夢中な2人がそれに気づく様子はまるで無い。

「それにしても、さすがに暑いなあ。でもまあ、やっぱ沖縄はこうでなくちゃ！ 知ってるか、ひまわり？ 昔はこの沖縄も、パパの腰の高さまで雪が積もったときがあったんだぜ？」

「世界的な寒冷化の影響でしょ？ 学校で習ったから知ってるよ」

「そつかあ、やっぱひまわりは賢いなあ！ しんのすけも見習ってほしいぜー！」

「本当よねえ！ 一夜漬けの効率が良いせいとかテストの成績は良いけど、やっぱり学校の勉強は知識として身につけてこそよねえ！」

「今日のパパとママ、何だか凄く絡みづらいなあ……」

テンションが上がりまくる2人に反比例して、ひまわりは見るからにドン引きしていた。

とはいえ、2人がここまで盛り上がるのも仕方ないのかもしれない。なにせ野原一家が今回沖縄にやって来たのは、地元の商店街の福引きでしんのすけが『高級リゾートホテル宿泊券付き沖縄旅行8泊9日の旅』を当てたためだ。観光シーズンの沖縄に交通費も宿泊費も無料で行け、しかもそのホテルが超豪華となればテンションも上がるというものだ。ちなみに飼い犬のシロは、隣のおばちゃんの家で預けているため今回は留守番である。

しばらくそうして盛り上がっていた2人だったが、一頻り感情を解き放って満足したのかようやく平常運転に戻ったひろしが、ポケットに突っ込んでいた携帯端末を取り出してガイドブックのデータを呼び起こした。

「えーっと、ここからホテルまでどれくらいだっけ？」

「確か車で1時間くらいじゃなかった？」

「うへえ、飛行機に乗った後に1時間も運転してたら疲れちゃうぜ。自動運転のコミュニーターがあつて助かったな」

「でもパパ、早く捕まえないとコミュニーターが来るまで待つことになる

るんじやない？」

「おっと、そうだよな。だったら先に外に行って捕まえてくるぜ」

ひろしがそう言って1歩足を踏み出した、そのとき、

「——いつてえ！」

ロビーを走る2人組の男にぶつかり、ひろしは突き飛ばされて床に転がってしまった。

しかし男達はひろしに謝るところか、ギロリと睨んで舌打ちしてそのまま走り去ってしまう。

「ちよつと！ そつちがぶつかってきたんだから謝りなさいよ！」

「パパ、大丈夫？」

「ああ、ありがとなひまわり。怪我は特に無いから大丈夫だ」

男達の背中にみさえが怒鳴り声をぶつける横で、ひろしが差し出されたひまわりの手を取って立ち上がる。

「やあやあ皆さん、随分賑やかですなあ」

「あつ、お兄ちゃん」

ひろし達と同じくアロハシャツ姿でリュックを背負う中学1年生のしんのすけがその場にやって来たのは、まさにそんなタイミングのことだった。

「いやあ、とても立派なウンコだったから、思わず写真に撮っちゃったゾ。飛行機に乗ってたときは何ともなかったのに、降りた途端に催してくるのはなんでだろうね？」

「お兄ちゃん、そつちに変な男2人組が行かなかった？」

「おつ、そういえばさつき擦れ違ったゾ。どうしたの？」

「パパがそいつらとぶつかって突き飛ばされたのよ。しかも謝りもしないで行っちゃって」

みさえの説明に、しんのすけは「それは大変でしたなあ」と呑気な声で感想を返す。

「まあまあ。せっかくの旅なんだから、いつまでもムラムラしても仕方ないゾ」

「それを言うなら『イライラ』な。——まあ確かに、しんのすけの言う通りだな。せっかくの沖繩に来たんだ、楽しまなきゃ損だよな！」

「そうそう！ 高級リゾートホテルがオラ達を待つてるゾ！」

機嫌を戻したひろし達を引き連れて、しんのすけが先陣を切って空港ロビーを突き進む。

そうして野原一家は、当初の予定通り『恩納村』にある高級リゾートホテルへと向かっていった。

「ふん、まさかトイレの中に逃げ込むとはな……」

「まあ良いさ。『コレ』さえ手に入れば、俺達が世界を手にしたも同然だ」

到着ロビーに隣接したトイレでは、2人組の男が個室の前で声を潜めてそんな会話を交わしていた。2人のうち片方の男の手にはスタンガンらしき物が握られ、そしてその個室の中では白衣を身に纏う別の男が便器に座りながらグツタリと項垂れている。

どう見ても誘拐事件の現場だが、目撃者がいなければ事件に発展することは無い。空港という不特定多数の人々が入り出る場所にあるトイレを利用する者がいないというのは不自然だが、大陸系の古式魔法に精通する彼らの手に掛かれれば特定の場所を短時間無人にすることなど容易い。

「さてと、さっさとずらかるか」

「ああ、いつまでも魔法の効果が続くとは限らんからな」

スタンガンらしき物を持つ男の呼び掛けに、もう片方の男が白衣の男の腕を肩に回して持ち上げた。そうして3人組となった男達が、そのままトイレから出ていこうとする。普通ならばそんなことをすれば目立って仕方がないが、魔法によって周りの人間が彼らから認識を逸らすようになっていたため問題無い。

よって男達は悠々とした足取りで、そのままトイレの出入口へと進んでいく。

しかし、あと数歩までとなったそのとき、

その出入口を塞ぐように、1人の『美少女』が両足を肩幅に開いて

立っていた。

高級な絹糸のように煌びやかな金色の髪に、晴れやかな青空がそのまま閉じ込められたかのような碧い瞳。人形かホログラムかとばかりに整った容姿をしたその少女は、その華奢な体軀から見て年上に見積もっても中学生を超えないくらいの年齢だ。

そんな美少女が男子トイレに入り、気を失った男を連れて行くとする男2人組を眼前にして、まったく表情を揺らがせることなくまっすぐ彼らを見据えている。

「お嬢ちゃん、ここは男子トイレだぞ」

男の1人が、ゆっくりと少女に近づく。

その右手には、スタンガンらしき物。

そして男が突然大きく足を踏み出し、右手に握る物を少女へと押しつけ――

「――！」
ようとしたその瞬間、少女も一気に男との距離を詰め、彼が伸ばした腕を避けてその内側へと入り込んだ。

そして少女は男の左胸に掌底を叩き込んだ。しかもただ当てるのではなく、左胸に触れたところで一瞬動きを止めてから押し込む。裏当ての技術を織り交ぜている。相手の筋肉の膨張を抑えてから攻撃を放つことで力がストレートに体の内部に伝わり、華奢な少女の掌底に大の男が苦悶の表情を浮かべる。

その隙に少女の手が男の首筋に伸び、バチツと火花が散る音と共に男の意識が刈り取られた。

それまでの動作に掛かった時間、およそ2秒。白衣の男を肩に抱えるもう片方の男が驚愕の表情を浮かべる中、少女はそのままの流れでその男の首筋へと手を伸ばす。

「ちっ！」

しかし男は姿勢を低くしてそれを避け、それと同時に抱えてた白衣の男をタイル張りの床に転がすように捨てた。そうして白衣の男が完全に倒れ伏すよりも前に、男は少女に向かって駆け出して拳を振りかぶり――

「ぶべらっ！」

目の前に展開された透明の障壁魔法に気づかず、顔面から思いつき
り激突した男はそのままもんどり打って背中から崩れ落ちていった。
その際に頭を強く打ったのか、男は呻くような声をあげるばかりで立
ち上がれそうにない。

「終わりました」

少女が出入口に向かって短くそう呼び掛けると、大柄な外国人男性
4人が素早くトイレの中に入ってきた。そして内3人が床に転がる
2人組の男と白衣の男をそれぞれ背負い、そして残る1人が少女に対
して純粋な笑顔を向けて言い放つ。

「CADも持たずにこの手際とは……。さすがだな、シールズ准尉」

「はっ！」

その褒め言葉に、リーナと呼ばれた少女は威勢の良い返事と共に敬
礼をした。

*

*

*

「いらっしやいませ、皆様。お待ちしております」

別荘に着いた深雪達を出迎えたのは、実年齢は30歳を過ぎている
はずなのにどう見ても20歳過ぎにしか見えない顔立ちをした女性
だった。

彼女の名は、桜井穂波。彼女は深夜の「ガーディアン」であり、魔
法資質を強化された調整体魔法師「桜」シリーズの第1世代だ。2
0年戦争の末期に研究所で作られ、生まれる前から四葉に買われた魔
法師だが、普段はそんな生い立ちを感じさせない明るくさっぱりとし
た性格をしている。

そして女性ということもあり、本来ガーディアンの仕事ではない深
夜の身の回りの世話もしている。本人曰く「家政婦の方が性に合っ
ている」らしく、今回も彼女の護衛を達也に任せて現地の情報収集や別
荘の掃除などをしていたのである。

「麦茶を冷やしておりますよ。それともお茶を淹れましょうか？」

「ありがとう、せっかくだから麦茶をいただくわ」

「はい、畏まりました。深雪さん、達也くんも麦茶で宜しいですか？」

「ありがとうございます」

「お手数をお掛けします」

そして桜井は四葉家の使用人の中でも珍しい、達也を深夜の息子として、そして深雪の兄として扱う存在だった。普通に考えれば当たり前のことだが、それだけ彼が身を置く環境が普通ではないことの証左である。

とはいえ、今は彼女以外に四葉家の目は無い。深雪はこれ幸いと、ソファアに座る達也の隣に勢いよく腰を下ろした。そんな彼女に桜井は「あらあら」と笑みを漏らし、深夜は若干呆れたような目を向ける。

「お兄様！ せっかくですし、少し散歩に出ませんか？」

「ああ、それは良いな。徒歩だと万座毛まんざもうはさすがに遠いけど、ビーチ沿いの遊歩道をのんびり歩くだけでも気持ち良いだろう」

達也が賛同したことで、深雪も嬉しそうに笑みを深めた。桜井も2人の遣り取りをニコニコと楽しそうに眺めている。

しかしここで、深夜が正面のソファアから水を差す（少なくとも深雪はそう感じた）ことを口にした。

「深雪さん、散歩も良いですけど、あまり遅くならないように。——今夜は『パーティー』がありますので」

「……分かりました」

深雪は努めて、声が尖らないよう注意して返事をした。

恩納村は沖縄県の本島中央部に位置する、日本でも屈指のリゾート地である。東シナ海の海岸に沿って走る国道沿いには多くの大型リゾートホテルが立ち並び、地元の漁業協同組合によって保全されるサンゴ礁が見所だ。

そんな恩納村だが、21世紀半ば頃までは総面積の3割近くを米軍基地が占めていた。しかし第三次大戦の激化によって米軍がハワイ

に引き上げたことで、一部が民間委譲されたうえで現在は国防軍が引き継いでいる。また戦争時は国境最前線だったために村の大きな収入源でもあった観光業が大きく悪化、リゾートホテルも次々と廃業を強いられた。

そうして大きな傷を残して戦争が終結した頃、とあるリゾート運営会社が真つ先に恩納村に乗り込んだ。荒れ果てた元ホテルの空き地を整備して、豊富なレジャーやショッピング施設を取り揃える高級路線の総合リゾートホテルを立ち上げると、瞬く間に日本全国だけでなく世界からも多くの富裕層が集まる人気ホテルへと成長した。その格式の高さからサミットの会場に選ばれるほどであり、周辺に次々とホテルが立ち並び観光業が復興した現在でも大きな存在感を放っている。

「その君、あそこの飾りが曲がっているから直すように」「はいっ！」

「空調の温度が少し高いから、1度か2度下げるように。いくら夏とはいえ、客人はそれなりに着飾るからな」「承知しました！」

そんなリゾートホテルの敷地内にあるパーティーホールでは、今日の夜に行われるパーティーの主宰者である男性が会場を走り回るスタッフに次々と指示を出していた。そのキビキビとした動きからは、今日のパーティーを絶対に成功させてやるという熱意をひしひしと感ずる。

今日は身内や親しい者のみを集めた小規模なもので、本来ここまで気合いを入れる必要は無いはずだ。しかし彼にとっては今日の招待客の中にいる人物こそが、それこそ仕事上の得意先よりも重要な存在だった。もつとも彼の場合、単純にパーティーで相手をもてなすこと自体が1つの趣味と化しているという見方もあるが。

一通り会場を見渡して順調に準備が進んでいることを確認すると、男は息抜きのためにホールを離れて敷地内の散策を始めた。緻密に計算された植物やオブジェの配置により、開放的でありながら建物ごとのプライバシーが守られた遊歩道は、彼にとってこのホテルを自分

達の宿泊地とする大きな理由の1つである。

彼が目指すのは、ホテルのフロント近くにある喫茶店。そこでコーヒーと軽く摘める物でも頼もうかと向かっていた、まさかそのとき、「おおっ！　これがオラ達が泊まるホテルですかあ！」

「すつごーい！　本当にこんな高そうな所にタダで泊まれるの!？」

「中にプールとか映画館もあるし、シヨツピングモールかってくらいにお店もあるみたいよ」

「おいおいマジか、ホテルの中だけで何日も遊べそうじゃねえか」

富裕層が利用するホテルにしては随分と騒がしい家族に、彼はガバツというオノマトペでも付きそうな勢いでそちらへと振り向いた。

しかし家族を見つめる彼の表情は、けっして迷惑そうなものではなかった。

彼の顔に浮かぶ感情を一言で表すなら、おそらく「驚愕」になるだろう。

「……な、なんで「彼ら」がこんな所に!?　まさか、ここに泊まるというのか!？」

喫茶店へ向かっていた彼は踵を返し、そのまま早歩きで先程歩いたルートを逆走し始めた。そしてポケットから携帯端末を取り出すと、焦りで指が震えるのを抑えながら電話を掛ける。

「私だ！　今すぐこのホテルの宿泊名簿を調べろ、大至急だ！　――

ああ、そうだ！　純粹なバカンスだったから私も完全に失念していたよ！　まさかこのホテルに「彼ら」が来ることになるなんてなあ！」

その男――黒羽貢は、もはやパーティーの準備どころではなくなっていた。

第1104話 「達也くんとの最初の出会いだゾ」

深雪達を乗せたコミュニーターが、パーティー会場のリゾートホテルへと近づいていく。運転席には桜井が乗っているが、自動運転なのでハンドル等には一切手を触れていない。

カクテルドレスに着替え、髪留めとネックレスを身につけ、ハンドバッグを手にする深雪が、窓の外を流れる景色を眺めながら小さく溜息を吐いた。それは本人にとって完全に意識外の動作であり、やつてから「しまった!」とばかりにハツとした表情になる。

そうして恐る恐る隣に目を向けると、同じくドレスで着飾った深夜と目が合った。本人としては普通にしているのかもしれないが、後ろめたさのある深雪は彼女に睨まれているように感じた。

「深雪さん、どうしました? パーティーに参加するのが嫌なのかしら?」

「い、いえ! そんなことはありません!」

「そう、なら良いです。——正直私は、あまり気が進みませんが。せめて沖縄に来た今日くらいはゆつくりしたかったわね」

あまりにも正直な深夜の言葉に、運転席の桜井から苦笑いの雰囲気
が漏れた。

「奥様も深雪さんも、そんなに不機嫌な顔をなさっては、せつかくのお
召し物が台無しですよ?」

「……分かりますか?」

「私には、ですけどね。でも世の中には、私よりも鋭い『目』を持つ人
はいくらでもあります。深雪さんは普通の中学生ではないのですから、
隙に繋がるようなことは極力避けるべきでしょう」

桜井の的を射た言葉に、深雪は反論する気すら起こらなかった。

「それでは、どうすれば良いのでしょうか?」

「気持ちというものは、どうしても目や表情に表れてしまいます。だ
からこそ大事なものは、自分の気持ちを上手に騙すことです」

「自分の気持ちを、騙す……?」

「はい。『建前』というのは、まず自分自身を納得させるためのもの

なんですよ」

「建前……」

桜井の言葉を深雪が反芻していると、コミュニーターがホテルの敷地内へと入った。少しして会場であるパーティーホールが見え、深雪からしたら無駄に派手なようにも見えるエントランスでコミュニーターが停止する。

助手席に座っていた達也がキビキビした動作でコミュニーターを降り、後部座席のドアを開けた。そうして深夜と深雪が外に出て、運転席から回り込んだ桜井と合流して4人はホールの中へと入っていく。

ロビーには強面の男性と凛々しい女性が、なるべく目立たないように立っている。とはいえ生まれたときからその手の人間と付き合ってきた深雪の目は誤魔化せず、彼女は心の中で修行不足を指摘しながら歩いていった。

そうしてパーティー会場へと繋がるドアが腕を伸ばせば届く距離にまで近づいた、そのとき、

「メンソオーレー！」

沖繩独特の挨拶と共に、そのドアが勢いよく開かれた。バーン！という効果音でも流れそうな迫力で深雪達を出迎えたのは、今回のパーティーの招待主である黒羽貢だった。

「奥様も深雪ちゃんも、よくおいでくださいました！」

「こちらこそ、本日はお招きいただき、ありがとうございます」

コミュニーターの中で不満を零していたことなどおくびにも出さず、深夜は完璧な所作で腰を折って紋切り型テンプレの挨拶を返した。そしてその横で深雪も、母と同じように頭を下げている。

「ささっ、こんな場所で立ち話も何ですし奥へどうぞ。亜夜子も文弥も、お2人に会うのをとても楽しみにしていたんですよ」

そのまま背中でも押しそうな勢いで迫る貢に勧められる形で、深夜と深雪は個人にしては広すぎる会場の中へと足を踏み入れた。

しかし奥へ進むのはその2人だけで、達也と桜井は入口に置き去りとなっている。こういった場所でボディガードは壁際に控えるのが慣わしとはいえ、達也は深雪の兄であり、本来ならば同じようにも

てなされる側の人間だ。それを抜きにしても兄をぞんざいに扱う彼が深雪はとにかく気に障り、だからこそパーティーに行くのが億劫だった。

「深夜様！・ 深雪姉様！・ お久し振りです！」

しかし桜井のアドバイスもあつて深雪は感情を表に出すことなく、元気いっぱいの声と共に駆け寄ってくる少年と、彼に付き従うように歩く少女を出迎えた。

「久し振りね、あやこ 亜夜子ちゃん、文弥くん」

「お元気そうで何よりです、深夜様。——お姉様も、お変わりないよう
で」

亜夜子はそう言つて、深雪に含みのある視線を向けた。学年は1つ下だが3月生まれの深雪とは歳が同じで、だからなのか深雪をライバル視している傾向がある。深雪としては後継者候補は文弥の方だから競争意識を持たれても、というのが正直なところだが。

と、頁がここぞとばかりに深夜へと詰め寄つて2人の自慢話を始めた。亜夜子がピアノのコンクールで入賞したのだ、文弥が乗馬の先生に褒められたのだ、横で聞く深雪にとっては非常にどうでもいいことを深夜は嫌な顔1つせず相槌を打って聞いている。これが大人というものか、と深雪は素直に感心した。

そんなとき、文弥がソワソワとし始めた。

「あの、深雪姉様……。達也兄様はどちらに……。？」

会場を見渡しながら尋ねる文弥の横では、亜夜子も平静を装いながらもチラチラとあちこちに視線を配っている。目の前の深雪よりも使用人である達也を気に掛けていることになるが、深雪が不機嫌になるはずもなく、何なら目に見えて機嫌を良くしていた。

深雪が達也のいる場所を指し示すと、文弥は「達也兄様！」と顔を綻ばせて小走りに駆けていった。そしてそんな弟に対し、亜夜子が「まったく仕方がないわね」といった態度で足早に文弥を追い掛けていく。そんな2人の分かりやすい態度に、深雪は表情筋を抑えるので精一杯だった。

——2人がお兄様に憧れるのも当然ね。確かにお兄様は魔法協会

の定めた基準に照らすと才能に恵まれていないのかもしれないけど、実戦ならば誰にも負けないほどの実力をお持ちなのだから。しかも学校の成績は飛び抜けて優秀、スポーツも超がつくほどの一流で、しかも魔法師にとつて天敵ともなり得る「切り札」もある。きつと男の子が憧れるヒーローというのは、お兄様を指すのでしょね。

深雪が頭の中で兄を褒め称える言葉をほとぼし進らせながら歩くと、さほど時間も掛からず達也と楽しそうに話す2人の声が聞こえてきた。

「達也兄様、こんばんは！」

「文弥に亜夜子か。久し振りだな」

「ご機嫌麗しゆう、達也さん。——桜井さんも、お久し振りです」

「こんにちは、亜夜子ちゃん」

達也とその隣に立つ桜井が、やって来た2人と挨拶を交わす。そうして集まった4人で会話を始めるが、大抵が最近自分が褒められたことを文弥が達也に話し、それを窘めるフリをしながら亜夜子がさりげなく自分の成果をアピールし、それに対して達也がそれぞれ賞賛の言葉を贈るといふものだった。そしてその遣り取りに対し、桜井はもっぱら聞き役とリアクション役に徹している。

と、文弥と亜夜子の微笑ましい姿に、達也が唇の端を小さく吊り上げて、僅かに歯を見せて笑みを浮かべた。

そしてそんな兄の姿に、深雪の心がズキリと痛んだ。

——あの2人に対してなら、お兄様も自然と笑顔を見せられるのですね……。

四葉に関係のある者達の目がある場所では、達也と深雪は普通に会話することすら儘ならない。ましてや親しげに笑顔を浮かべるなどあつてはならず、よつて公の場で達也は深雪の前でほとんど表情を動かすことがない。

深雪にとつて、それが何よりも心苦しかった。感情を表に出す自由すら無い兄の境遇に、そして他ならぬ自分が兄をそのような境遇に置かせてしまっていることに。

しかし今は、パーティーの真つ最中。けっして周りの人間にそんな感情を悟られないよう、深雪は掌に爪を食い込ませてでも愛想笑いを

保ち続けた。

「こちら、亜夜子、文弥。達也くんの仕事を邪魔してはいけないよ」と、深夜と話をしていた貢が「やれやれ」といった感じで達也たちへと歩いてきた。深雪と違い、その笑顔は内心を悟らせない完璧なものだった。

「ご苦労様。しっかりと勤めを果たしているようだね」

「恐れ入ります」

貢に声を掛けられて向き直った達也は、先程の笑みを完全に消した無表情で頭を下げる。

「あら、お父様。少しくらいは宜しいのではないですか?」

2人の会話に横槍を入れる亜夜子の表情には、達也との会話を邪魔されたからか若干不機嫌の色が窺える。

「深雪お姉様は、私達が招いたお客様。ゲストの身边に危害が及ばぬように手配するのは、達也さんではなく私達の役目ではありませんか?」

「姉様の仰る通りです! 黒羽のガードは、お客様1人守ることのできないような無能ではありません! そうでしょう、父さん!」

——あらっ? 文弥くん、叔父様おじのことを「お父様」と呼ばなくなったのね。

深雪がそんなどうでも良いことを気にしている中、貢は息子の言葉に少しだけ眉を寄せて困惑顔を見せた。

おそらく亜夜子も文弥も、父親の本音は分かっているのだろう。

文弥は、四葉の次期当主を狙う候補者。

一方達也は、同じく次期当主候補者である深雪の、単なる護衛役。ガーディアンなどと特別な呼び方をしたところで、所詮は使用人、いわば使い捨ての道具でしかない。道具と割り切ることができなければ、四葉の当主たり得ないのだろう。

しかし文弥と達也の関係だけで見れば再従兄弟はとこでしかなく、故に2人が仲良くなったところで何の問題も無いし、亜夜子に対してもそれは同じだ。つまり貢の懸念はただ外聞を気にしたものでしかなく、そしてそれは道具に感情移入するのをみっともないと感じるほどに彼

が骨の髄まで「四葉」であることの表れだ。

しかし、深雪は違う。

四葉の中での扱いがどのようなものであっても、深雪にとって達也は唯一無二の存在。本人はどう認識しているのか知らないが、それは家族愛や兄妹愛をとうに超えている。

そんな大切な存在を身内とはいえ他人に貶められ、深雪の心にマグマのように煮えたぎった怒りの感情が湧き上がった。それは直前に桜井から貰った建前のアドバイスを跳ね除けるほどで、深雪の表情にその怒りの感情が表れる――

「文弥、あまりお父上を困らせるものじゃないよ」

まさにその直前、他ならぬ達也の発言によって深雪はその怒りを鎮めた。

「黒羽さん、会場の中はお任せしても宜しいですか？　自分は少し外を見て回りますので」

「おお、そうかい？　それは立派な心掛けだ。奥様と深雪ちゃんは私達に任せておきたまえ」

達也の申し出に、貢は殊更大袈裟なりアクションを見せた。向こうから厄介払いの口実を提示してくれたためか、スラスラとリップサービスが出てくる。

「そんな！　僕達、明日には静岡に帰るんですよ！　ただでさえなかなか会えないのに、ゆっくり話もできないなんて……」

「文弥、少し落ち着きなさい。――達也さん、文弥が言った通りの事情ですので、早めにお戻りくださいね？」

「分かった、一通り見て回ったら戻ることにするよ。――桜井さん、ここはお願いします」

「……ええ、分かったわ」

達也は桜井に軽く会釈してから、淀みない足取りで会場の外へと出ていきました。

まるで、この場から逃げるように。

まるで、自分の「役割」を忠実に果たすかのよう。

――ならば私も、自分に与えられた「役割」を精一杯演じなければ

ならない。

最愛の兄がそうすると決めたのだから、妹である自分もそうしなければいけない。

たとえばそれが、如何に自分の本音と乖離していようとも。

兄の後ろ姿を、そして兄の出たいった入口をぼんやりと眺めながら、深雪はそんなことを考えていた。

「……………」

そうした一連の遣り取りを、深夜が貢の隣で一切の感情を見せない無表情で見つめていた。

*

*

*

達也は会場を出てロビーを通り抜け、そのままエントランスを経てホールの外へと出た。そのまま植木で仕切られた区画を超えると、その周辺をグルリと一周するルートを歩き始めた。

会場を警備するスタッフのほとんどは四葉とは無縁な外部の人間であり、おそらく彼らの目にはパーティーの参加者である子供が会場を抜けて散歩を始めたとしか思っていないだろう。現に会場で目を見張らせていた男の1人が、適度に距離を空けて自分の後について来ているのを達也は気づいていた。

それほど意識を向けずとも感じ取れるほどに漏れる彼の気配に、達也は「同業者」として心の中で修行不足を指摘する。

——いや、俺と彼らとでは「同業者」とは言えないか。

達也が深雪のガーディアンになったのは、今から7年ほど前の6歳のとき。そのときから、まったく同じ親から生まれた兄妹は「ミストレス護られる者」と「ガーディアン護る者」として明確に身分を分けられた。

ボディーガードとの違いを端的に表現するならば、ボディーガードは「仕事」で、ガーディアンは「役目」だ。

ボディーガードは護衛対象を命懸けで護衛し、その報酬として金銭を得る。警察のSPのように職務で行う場合もあるが、その職務によって報酬を得ているという点では同じだ。しかしガーディアンに

は、そのような報酬が無い。衣食住は確保され、必要なときには金銭が支給されるが、それはあくまでも護衛としての力を維持するためのコストでしかない。例えるならば、ボディガードは食べるために護り、ガーディアンは護るために食べる、といったところか。

ガーディアンに私生活は存在せず、その全ては「マスター」あるいは「ミストレス」と呼ばれる護衛対象に捧げられる。深雪のガーディアンになったその日から、達也はこの命が尽きるか、あるいは深雪に解任されるまで、「四葉現当主の姉の息子」ではなく「次期四葉当主候補のガーディアン」として生きていくこととなった。

自らの境遇について、達也は何とも思っていない。強がりでも自暴自棄でもなく、本当に何とも思っていない。

しかしそれも、当然といえば当然なのかもしれない。

なぜなら達也は、深雪のガーディアンとなる直前である6歳のときに――

「――ん？」

達也が会場を離れて外を見回っているのは、あくまでその場を離れるための方便だ。とりあえず気晴らしも兼ねて実際に見回っているが、そもそも四葉家の関係者がここにいるのを突き止めること自体が困難を極める以上、今日この会場を狙って何者かが襲撃を掛けるなどとは達也も考えていなかった。

しかし達也は自分が今いる遊歩道から少し離れた草原の、洒落たデザインをした照明の足元辺りに、1人の少年が俯せで転がっているのを見つけた。

上着で隠した腰のホルスターに自身のCADが収められているのを確認し、達也は慎重にその少年へと近づいていった。周辺には（後ろについて来ている警護スタッフを除いて）人の気配は無く、達也の「眼」で解析しても少年の周辺に罠が設置されている可能性は無さそうだ。

「もしもし、大丈夫ですか？」

達也は呼び掛けながら、少年を注意深く観察する。呼吸や脈拍は正常に動いており、目立った怪我や病気をしている様子は無い。

もしや眠っているのか、と達也が眉を潜めたそのとき、

「おっ?」

「……………」

グリーンと首を回したその少年と目が合い、達也はピタリと動きを止めた。

その少年は達也と同じくらいの年齢と身長で、短く切り揃えられた黒髪がスポーツ少年のように爽やかだった。太い眉毛がとても凛々しいものの、少年の浮かべる気の抜けた表情のせいか全体的な印象は柔らかい。

達也が動きを止めて見つめる中、その少年はゆっくりと立ち上がり、体に付いた草などを軽く叩いて落とした。

「えっと……、大丈夫か?」

「ヘーキヘーキ。ただの『死体ごっこ』だから」

「死体……何だつて?」

「いやあ、こんな豪華なりゾートホテルに泊まれてテンション上がっちゃつて。ついついやらずにはいられなくつて」

「……………そうか」

少年が口を開く度に、達也の目つきは胡散臭いものを見るものへと変化していった。より直接的な言葉で表すなら、ヤバそうな奴に声を掛けてしまった、といったところか。

「オラ、野原しんのすけ。しんちゃんって呼んでね。んで、誰?」

「……………、司波達也だ」

「ほうほう、達也くんですな。高そうな服を着てるけど、あそこのホールでやってるパーティーに出てるの?」

「……………まあ、そうだな」

本当は参加者ではなく参加者の護衛役としてついて来ただけなのだが、つい先程顔を合わせたばかりの人間に話すことではないのでテキトーに話を合わせることにした。

「ということは、達也くんの家はお金持ちってことですか! いやあ、羨ましいゾ。オラの母ちゃんはおケチだから、福引きで1等当てるくらいしないとこんな場所に泊まれないんだゾ」

「野原くんの母君も、色々とお考えなんだろう。何かあったときのために取っておく、とかな」

「でもさあ、少しくらいは贅沢しても良いと思わない？ 昔と違ってローンは払わなくていいんだし、ていうかむしろ貰ってるくらいなのに」

「……貰ってる？」

如何に早くこの場を立ち去るかだけ考えていた達也だったが、ここで初めて彼の発言に興味を持った。

ローンを払わなくていい、むしろ貰っている。普通ならば意味不明な発言でしかないが、達也の優秀な頭脳が様々な可能性を浮上させ、そして最も有り得る可能性をピックアップする。

「……もしかして野原くんは、春日部出身だったりするの？」

「えっ!? なんて分かったの!?!」

「まあ、何となくな……」

春日部市を始めとしたごく一部の地域、あるいは一部の人々が、局所的・限定的な時間のループに囚われるという「サザエさん現象」が明るみになったのは、達也が5歳だったときのこと。当時は世界的なニュースにもなったし、様々なメディアで連日連夜放送されるほどの大混乱を巻き起こしたため、達也もよく憶えている。

その現象に囚われた人々は、時間の経過という概念自体は認識しているが一切歳を取ることが無く、何十年も同じ姿で生活を続ける。寿命を迎えることも無く、学生は学生のまま進級せず、社会人も階級や部署すら変わらずに働き続ける。

そしてそれは、なぜか「ローンの返済」に対しても適用されていた。35年ローンを組んでいた者が35年経った後もなぜか払い続け、「サザエさん現象」が解けてから過払い状態であることが発覚する事件が一部で社会問題になったほどだ。

もちろん過払い分は返済されることになったが、なにせ数十年分に渡る過払い分を一度に返済できるはずもなく、最終的には分割で支払われることとなった。達也は先程のしんのすけの発言から、彼がそれに該当する人物だと読んだのである。

「ということは、野原くんも歳を取らずにいた時期があると……」

「まあね、結構長いゾ。大体100年くらいかな」

「100年……！ それはまた、随分長いな……」

大戦前どころか現代魔法黎明期からの生き残りだと判明したことで、達也の中でしんのすけへの興味が俄然湧いてきた。

とはいえ、そろそろ会場に戻らなければいけない頃合いだ。それに達也のような立場の人間が、無闇に人間関係を構築するのも好ましくない。

「ところで達也くん、このホテルに泊まってるの？」

「……いや、俺は別の所に泊まってるが」

「そっかそっか。オラはここに泊まってるから、寂しくなったらいつでも遊びに来て良いゾ」

「……考えておくよ」

しんのすけの提案に、達也は当たり障りの無い社交辞令の言葉で返した。

「んじや、オラはそろそろ行きますかあ。達也くん、またね」

「ああ、機会があったらな」

それでもしんのすけにとっては満足のいく返事だったようで、楽しそうにスキップしながらその場を去っていった。達也は小さくなっていく彼の背中を眺めながら、疲労感を露わにした表情で小さく溜息を吐いた。

そして達也もクルリと踵を返し、パーティー会場へと戻っていった。

*

*

*

ホテルの入口を潜っていくしんのすけを、2人の男が茂みの陰から見つめていた。

「『彼』の話によると、どうやらあの少年で間違いないそうです」

「……そうか。よりにもよって、といったところだな」

*

*

*

パーティーが終了し、深夜達4人を乗せたコミューターを会場の入口で見送った貢が、胸を撫で下ろすようにホッと息を吐いた。

「パーティーの最中に何か事件でも起こるかと思ったが、今日のところは何も無さそうだな」

第1103話 「絶世の美少女と出会ったゾ」

8月5日。

沖繩到着初日から親類主催のパーティーに参加し、それが終わって家に戻り、結局ベッドに入ったのは真夜中近く。こうして振り返ってみても随分とハードな1日だったのだが、深雪が日も昇りきらないような時間に目を覚ましてしまったのは、体に染み込んでしまった習慣の成せる業なのだろう。

二度寝をするようなならしない女になりたくない、と深雪は頑張つてベッドから起き上がると、カーテンと窓を開けて部屋の空気を入れ換えることにした。この部屋は裏庭に面した2階であるため、パジャマ姿を誰かに見られる心配は無い。だとしても最低限身だしなみを整えるのが、本当のレディというものなのだろうが。

潮の香りのする風を胸いっぱい吸い込み、体に溜まっていた古い空気と入れ換えるように大きく息を吐き出す。先程までぼんやりしていた意識も徐々に覚醒していき、だからなのか庭の方から物音が聞こえてくるのに気がついた。

裏庭では、達也がトレーニングをしていた。

腰を落として右足を踏み出し、右手を突き出して左手を突き出す。

腰を落としたまま左足を踏み出し、突き出したままの左手をさらに伸ばしたかと思うと、その手を素早く引いて交差するように右手を突き出す。

右足を左足に引き寄せながら体をターンさせ、右手を内側から外側へ、左手を外側から内側へ、右手を上、左手を下に力強く開く。

両手に1キロくらいのハンドウェイトを持って1つ1つの動作を丁寧に決めていく達也の姿は、それが空手なのか拳法なのかの知識も無い深雪ですら見惚れるほどに鮮やかだった。

そうして深雪が見つめる中、達也は裏庭の半分ほどをグルリと1周する円を描いたところで動きを止め、体の力を抜いて大きく息を吐いた。まさかもう終わりなのか、と深雪は深呼吸する彼の後ろ姿を未練がましく見つめている。

もう一度あの素晴らしい「舞」を見せてくれないか、と深雪が淡い期待感を抱いていると、達也は自然な動作で踵を返し、そして視線を上げて裏庭に面した2階の部屋の窓を、つまり深雪へと視線を合わせた。

「おはよう、深雪。もう起きたのか?」

「あつ、おはようございます、お兄さま——!」

突然声を掛けられたことに驚きながらも挨拶を返す深雪だったが、ここでハツと思いついた。

自分は今、寝起きのパジャマ姿のままにいることに。

「——も、申し訳ございません!」

大きな音をたてて勢いよくカーテンを閉めたことで、深雪の姿は裏庭から見えなくなった。

そんな妹の微笑ましい姿に、達也はクスリと笑みを漏らした。

四葉本家にいるときと同じように、朝食を用意するのは桜井の役目だ。この別荘にも自動調理機が備わっているのだが、彼女自身が「機械が作った料理は味気ない」と考えるタイプなので、基本的に司波家の料理は彼女の手作りとなっている。最近では深雪もよく手伝うようになったのだが、深雪としては「まだまだ」と言わざるを得ない。

「今日のご予定は決めていらっしゃいますか?」

「暑さが和らいだら、船で沖へ出るのも良いわね」

「ではクルーザーを?」

「そうね……。あまり大きくないセーリングヨットが良いわ」

「分かりました。4時に出港ということで宜しいですか?」

「ええ、それでお願い」

深夜の思いつきに近い提案に、桜井が慣れた様子で段取りを組んでいく。これで深雪達も4時以降の予定が決まったことになるが、直射日光の苦手な深夜はそれまで別荘で過ごすことになるだろう、と深雪は考えた。

「お兄様、どこか行かれない場所はお有りですか?」

「いや、こういうことを決めるのは苦手だな、深雪が決めてくれた方が助かる」

「深雪さん、達也くん。特にご予約が無いのでしたら、ビーチに出られるのは如何です？ 寝転んでいるだけでもリフレッシュできると思いますよ」

桜井からの提案に2人は顔を見合わせ、そして深雪が返事をする。「そうですね、午前中はそうすることにします」

「では深雪さん、お支度を手伝いましょう！ うふふ、水着になるのでしたら隅々まで日焼け止めを塗っておきませんか！」

待つてましたとばかりに満面の笑みを浮かべる桜井に、深雪はなぜか言い様の無いプレッシャーを感じ取った。

「えっ……？ いえ、自分でできるので大丈夫です」

「いえいえ、遠慮なさらずに。南国の日差しは強烈ですからね、塗り残しがあつては大変です」

「えっと、桜井さん、目つきが怪しくくないですか……？」

「水着の下までしっかりと処置しておきませんと。うふふふ……」

本能的に危機感を覚えた深雪がバツと踵を返し、しかし1歩も進まない内に桜井に手首をガツと掴まれてしまった。痛みを感じるほど強く握られているわけでもないのに、深雪がどうやっても振り解くことができない。

「さあ、お支度しましょうね」

「ちよつと待つてください、桜井さん！ —— お兄様！ あ、助けて

——」
そのまま2階に引つ張られながら深雪は必死に兄へと助けを求めるが、達也は笑いを堪えるように肩を震わせながら顔を背けてしまった。

弱々しい「お兄様あ……」の言葉を残して、深雪はダイニングから姿を消していった。

*

*

*

桜井の手で体の隅々まで日焼け止めクリームを塗りたくられた深雪は、達也と共に別荘から最も近い場所にあるビーチへとやって来た。

達也は膝上丈の海パンにパーカーを羽織り、深雪はビキニとまではいかなくともかなり露出の多いセパレートタイプの水着をチュニツクに隠している。当然ながらそれも深雪の趣味ではなく、桜井にむりやり着させられたものだ。

「大丈夫か、深雪？ シートとパラソルは用意したから、とりあえず横になると良い」

「はい、ありがとうございます、お兄様……」

とにかく楽な姿勢になりたかった深雪は、達也の厚意に甘えてチュニツクを脱いで俯せに体を横たえた。『絶世の美少女』という形容が嫌味でなく似合う彼女のそんなあられもない姿を目の前にして、達也は眉一つ動かさずに彼女の隣に腰を下ろして水平線を眺めるだけである。

せっかく海に来たのに泳ぎもせず自分の世話をさせていることに深雪はとても申し訳ない気持ちでいっぱいになるが、同時に愛しの兄を独り占めしていることへの充足感も覚えていた。そんな気持ちを紛らわすためか、深雪は兄から目を逸らしてビーチへと視線を飛ばす。

ビーチにはすでに何組かグループがいて、皆が思い思いに海を楽しんでいた。

小学校低学年くらいの女の子とそれよりも少し年上の男の子が、父親らしき男性を無邪気に海へと引っ張っていく。

その隣には無人のパラソルがあり、2人分のパーカーが無造作に置かれている。

更にその隣では――

「ん？ どうした、深雪？」

突然慌てたように視線を逸らした深雪に達也が尋ね、そして彼女が直前まで見ていた方へ視線を向けた。そして何やら納得した様子で、再び深雪へと視線を戻す。

そこには高校生くらいのカップルがいて、男性が女性にオイルを塗っていた。俯せになつているとはいえ女性是人目を遮る物が無いこの場所でビキニの紐を外して背中を全開にし、男性がその背中を丹念に撫で回してオイルを塗り込んでいた。それはかなり際どい所まで及んでおり、というか深雪としては完全に触っているようにしか見えなかった。

——男の人って、ああいうことが好きなのかしら？

深雪は学校の友人からの又聞きで、進んだ先輩がデートの度にボーイフレンドから体を求められて困っている、という話を聞いたことがあった。そのときは女の子を何だと思ってるのか、そもそも相手は中学生なのに、*「フリーセックス」*なんて悪しき習慣は半世紀も昔に終わっているのに、と憤慨したことを憶えている。

とはいえ、先程の女性は深雪から見ても嫌がつている印象は受けなかった。俯せになつていたので表情こそ見えなかったが、するが儘になつているということは男性の行為を受け入れているのだろう。

——もしも私が、お兄様にそんなことをされたとしたら……。

そんな想いを抱きながら、深雪は首だけを動かして達也の顔を窺い見た。

深雪を見ていたららしい達也とバッチリ目が合い、深雪は硬直して視線を逸らすこともできなくなった。

「お、お兄様……」

「深雪……」

真つ赤に頬を染める深雪と、そんな彼女をジツと見つめ続ける達也。

2人の中に何ともいえない空気が流れ出した、そのとき、

「ねえねえお姉さん、オラ達と一緒に沖繩の海を満喫しな〜い？」

「ゴメンねボウヤ、今日はそんな気分じゃないから」

「イヤ〜ン、つれな〜い！」

自分達と同じくらいの歳をした水着姿の少年が、スタイルの良い水着姿の若い女性をナンパしている光景に出くわした。女性の方は達也たちの前を横切つて歩きながら軽く少年をあしらい、そして少年は

それに平行しながらめげることなく声を掛け続けている。

自分達の真正面でそんな遣り取りを繰り返されている深雪と達也は、それを唾然とした表情で見つめていた。

深雪は、自身が嫌悪しているタイプの人間がまさに目の前に現れたために。

そして達也は、その少年に非常に見覚えがあったために。

「やれやれ、仕方ありませんなあ。それにしても、綺麗なお姉さんがこんなにも沢山いるなんて、やっぱり沖繩はサイコーだゾ！ それじゃさっそく次のお姉さんを——おおっ！ そこにいるのは達也くんじゃないかあ！」

こちらの存在に気づいた少年——野原しんのすけに、達也は「気づかれてしまったか……」とでも言いたげに顔をしかめ、そして深雪は「嘘でしょお兄様！」とでも言いたげに達也へと勢いよく顔を向ける。「昨日だけじゃなくて今日もこうして出会うなんて……。やっぱりオラと達也くんは、運命の赤い糸で結ばれているのね！」

「えつと、お兄様……？ その……」

「誤解だ、深雪。昨日のパーティーの会場だったホテルに彼が泊まっていた、たまたま顔を合わせただけだ」

戸惑いを隠せない様子で言葉を詰まらせる深雪に、達也は若干早口で弁明した。恋人に浮気がバレたときの男の心情はこんな感じなのか、などと考えながら。

「そうだ、達也くん！ 達也くんも一緒に、綺麗なお姉さんに声を掛けに行かない？ さっかくこんな綺麗なお姉さんがいるんだから、仲良くならないなんて勿体ないゾ！」

「……悪いが、俺は遠慮する。妹と一緒に来てるんでな」

「んもう、達也くんはお堅いですなあ。——というか、妹？」

「あ、あのー！」

深雪が大声で呼び掛けたことで、初めて気づいたようにしんのすけが彼女に視線を向ける。

「わ、私、司波達也の妹の司波深雪と申します！」

「これはこれは。オラ、野原しんのすけ。しんちゃんって呼んで——」

「野原さん！ 兄はとても真面目で、学校でも先生や友人達からとても慕われているんです！ そんな兄を、ふ、ふしだらな道に引き摺り込もうとしないでください！」

「ふしだらだなんて人間きの悪い。オラはただ、綺麗なお姉さんと一緒に一夏の淡い思い出を作ろうと——」

「そ、それをふしだらだと言ってるんです！」

初対面の異性に対して詰め寄る深雪に、しんのすけは若干困った様子を見せながらも軽くあしらっている。ちなみにどちらとも露出の多い水着姿なのだが、どちらともそれに意識を向けている様子は無い。

2人の遣り取りを眺めながら、達也は内心しんのすけに感心していた。

達也は妹のことを、一切誇張抜きで“絶世の美少女”だと認識している。実際彼女と顔を合わせた者は同性異性の区別無く、そして年齢の区別無く彼女に見とれるのが通常運転だ。そんな彼女の水着姿となれば、どれだけ無関心を装おうと本能には抗えないとばかりに意識を向けるのが普通なのである。

だがしんのすけは、彼女を目の前にして一切それを気にする素振りを見せない。そもそも彼女に話し掛けられるまでその存在に気づかなかったというのが、達也としては結構な衝撃だったのだ。

「仕方ないですなあ。だったら達也くん、一緒に海で泳がない？ 母ちゃんとひまが買い物で父ちゃんがその荷物持ちだから、1人でずつと暇してたんだゾ。——深雪ちゃんも、それなら良いでしょ？」

「まあ、それでしたら……」

深雪がそう言って、チラチラと達也へ視線を向ける。

2人分の視線に、達也は小さく溜息を吐いた。

「分かった、それなら構わない」

「やつほくい！ んじゃ、オラは先に行ってるね〜！」

しんのすけは嬉しそうにそう言って、海に向かって全力で走り出した。浜辺では足が取られてスピードが出せないはずなのだが、今の彼はそれこそ短距離走の選手かと思紛うほどの速さだった。達也は再

び心の中で、彼に対する評価を上方修正した。
と、そのとき、

「いやあん」

語尾にハートが付きそうな声色で、海に向かって走っていたしんのすけが突然バランスを崩した。とはいえ、転ぶまでには至らなかった。反応が早かったために足を砂に突き刺し、その場に踏み留まることができたからだ。

しかしながら、無事にそれで終わったとは言いがたい。

「おいおい、どこ見て歩いてんだよ、ああん？」

しんのすけがバランスを崩したときに傍にいた男性グループが、凄んだ声で彼に因縁を付けてきたからだ。

最初に絡んできたのは、軍服を着崩した肌の黒い大柄な男だ。その後ろにも同じように軍服姿の男が2人いて、同じように海外の血が入った見た目をしている。そしてその全員が、彼を見下ろしてニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべている。

「お兄様！ あの人達は……！」

「ああ、おそらく『^{レフト・ブラッド}取り残された血統』だな」

レフト・ブラッドとは、20年戦争の激化によって沖縄に駐留していたアメリカ軍（当時はまだUSA）がハワイへ引き上げた際、沖縄に取り残されてしまった子供達のことを指す。

親を戦争で亡くした彼らの多くは、米軍基地を引き継いだ国防軍の施設に引き取られ、そのまま軍人となった者が多い。彼ら自身は立派に国防防衛を果たした勇猛な兵士だったのだが、その子供（つまり第2世代）は素行の良くない者も多く社会問題になっている。レフト・ブラッドには近づくな、というのがガイドブックでの定型文になっているほどだ。

そうでなくとも自分より頭1つか2つ分は大きな男達に対し、しんのすけは一切怯える表情を見せなかった。

「ええっ？ オラはちゃんと避けようとしたゾ。そっちからぶつかったきたんでしょ」

「ああ？ ガキのくせに、俺達に喧嘩売ろうっていうのか？」

「止めとけよ、ガキ。その歳で死にたくねえだろ？」

「ほら、さっさとママの所へ帰んな」

「んもう、メンド臭いですなあ。そんな絡み方、師匠ですら高校卒業する頃には止めてたゾ。もう良い歳なんだから、いつまでもチャラチャラしてないで大人になりなさい」

「な——何だとテメエ！」

こめかみに血管を浮かび上がらせて顔を赤らめる男達に、達也の背中に隠れる深雪は逆に顔を青ざめていく。

それを感じ取った達也が、小さく溜息を吐いてから彼らへと歩みを進めた。

「いい加減にしろ」

特別大きくはないがやけにハッキリ聞こえたその声に、全員がそちらへと顔を向ける。

「さっきのは、明らかにおまえ達の方からぶつかってきた。本来なら謝るのはこちらではなく、おまえ達だ。——詫びを求めるつもりは無いから、来た道を引き返せ。それが互いのためだ」

「……何だと？」

まるで少年らしくない口調で、まるで少年らしくない台詞を吐く達也に、男達は怒りの矛先をしんのすけから彼へと向け直して詰め寄ってくる。

しかし達也は、一切表情を動かさない。それは彼の背後にいる深雪も同じで、しんのすけが絡まれていたときと比べて今はむしろ落ち着き払った様子だ。

「おい、そのガキ。今何か言ったか？」

「山葵^{わさび}を求めるつもりは無いとか言っていましたぜ、アニキ！」

「聞こえていたはずだが」

「そうだそうだ！ 聞こえてなかったフリは白々しいゾ！」

「……地面に頭を擦りつけて、許しを乞いな。今なら青痣程度で許してやる」

「本来できるはずなのだ……！ 本当にすまないという気持ちで……胸がいつぱいなら……！」

「……土下座しろ、という意味だったら、『頭を』ではなく、『額を』と
言うべきだ」

「そうだそうだ！　『頭を』だと三点倒立でもOKになっちゃやうゾ
！」

「ちよつとしんちゃん！　あなた、どつちの味方なの!？」

コロコロと立ち位置を変えて口を挟むしんのすけに、ようやく深雪
がツツコミの言葉を入れた。「さすが深雪ちゃん、良い間でツツコン
でくれたゾ」と達也の脇へと戻る彼に、達也も男達も呆れたような白
い目を向ける。

「なあ^{ひがき}松垣、止めようぜ。正直、そういう空気でも無いだろ」

「うるせえー！　ここまで虚^{こけ}仮にされて黙ってられっかよー！」

松垣と呼ばれた男がそう叫び、その勢いに任せるように達也へと殴
り掛かった。これにはしんのすけもさすがに焦ったようで、「あつー！
と目を見開いて声をあげた。

情け容赦の無い、普通の子供が受ければ間違いなく吹き飛ばされて
重傷を負うであろう一撃。

達也はそれを、真正面から受け止めた。衝撃を完全に受け流したの
か、その体はほとんど後ろに下がっていない。

「おつ？　おつ？」

困惑の反応を示すのはしんのすけだけだが、松垣達も同じように驚
きの表情を浮かべていた。魔法でも使ったのかと思われるが、それら
しい兆候はまるで見当たらない。

「面白いな……。単なる悪ふざけのつもりだったんだが」

松垣はニヤリと笑うと達也から距離を取って腕を引き、左右の拳を
胸の前に構えた。ボクシングかあるいは空手か、格闘技や武道に詳し
くない深雪やしんのすけにはよく分からない。

ただ1つ分かるのは、遊び半分だった相手が本気になった、という
ことだ。

「良いのか？　ここから先は、洒落じゃ済まないぞ？」

「ガキにしちや、随分と気合いの入った台詞を吐くもんだな」

達也の挑発に松垣はそう答え、大きく1歩前へ踏み出し――

「君達、子供相手に何をしているのかね」

松垣の背後から近づいてきたその男が、今まさに振り下ろそうとしていた拳を掴んでその動きを止めた。松垣本人だけでなく彼を見守っていた仲間達、そしてしんのすけも男の存在に気づいていなかったようで、目を丸くしてそちらへと勢いよく振り向いた。

その男は白人系の見た目をしており、日本人の血が入っている松垣達と違って純粋な外国人のようだ。そしてその身長も体格も、軍人である松垣達と何ら見劣りしないほどに鍛えられているのが服の上からでも分かる。

「君達はこの国の軍人なのだろう。君達が日々鍛えているのは、自国の子供達に暴力を振るうためなのか？」

淀みない日本語を紡ぐ白人系の男だが、それ以上に目を惹くのはその眼光の鋭さだった。しかしその言動に粗野な部分は無く、毅然とした態度も併せてどこか紳士を思わせる。

そんな男の対応に、松垣はヒートアップしていた表情を落ち着かせ、そして居心地悪そうに歪ませる。

「——ふん、興が削がれた。テメエら、行くぞ」

「あつ、おい待て！」

その場から逃げるように去っていく松垣を、仲間の男達が慌てたように追い掛ける。

チラチラとこちらを見遣っていた男達が遠くなっていくのを見送って、白人系の男は達也たちへと向き直った。

「君達、怪我は無かったかね？」

「自分達は大丈夫です。お手数をお掛けしました」

「気にしないでくれ、と言いたいところだが、君の挑発的な言動は少しだけなかったな。自分の実力に自信があるのかもしれないが、面倒事を避けるための処世術というのも憶えておくべきだろう」

「……以後、気をつけます」

軽く頭を下げる達也の背後で、深雪は若干不満そうな目で白人系の

男を見つめた。

それに気づいた彼が苦笑いを浮かべる中、しんのすけが彼に話し掛ける。

「日本語上手いね。オラのお隣さんのベルトくんより上手いかも」

「そうかい？　ありがとう。日本には旅行で娘と良く来るんだ。今日もちょうど娘とビーチに遊びに来ていたところだね。――【リーナ、こちらに来なさい】」

しんのすけの問いに白人系の男は日本語で答えた後、少し離れた場所に英語で呼び掛けた。ちなみに「一内の台詞は英語とする。

彼に呼ばれてその場に駆け寄ってきたのは、「絶世の美少女」という形容がまつたく嫌味にならない少女だった。

高級な絹糸のように煌びやかな金色の髪に、晴れやかな青空がそのまま閉じ込められたかのような碧い瞳。人形かホログラムかとばかりに整った容姿をしたその少女は、その華奢な体軀から見て年上に見積もっても中学生を超えないくらいの年齢だ。

深雪という存在を普段から目にする達也でさえ、彼女の容姿には一瞬動きを止めたくらいだ。まさか自分の妹に匹敵する美貌が存在するとは、などとシスコン全開の思考を脳裏に過ぎらせる。

「自己紹介させてもらおう。私はベン、アメリカから旅行でここに来ている。――リーナ、挨拶しなさい」

「初めまして、ワタシはリーナ。多分みんなと同じくらいの歳かな？　宜しくね」

ベンと名乗ったその男に促され、ニコリと華やかな笑みを浮かべてその絶世の美少女――リーナはそう挨拶を口にした。

「何だ何だ？　俺達があの子達に絡みに行く予定じゃなかったか？」
「どうやら本当に地元の奴らに絡まれてたようだな。最初に作戦を聞いたときは随分とベタだと思ったが、どうやら問題無く接触できたよ
うだ」

「臨機応変につてヤツか。それじゃ俺達は当初の予定通り、遠くで待

機してるとしよう」

彼らから少し離れた場所にて、鍛え上げられた体を持つ外国人の男達がそのような会話を交わしていた。

*

*

*

『ターゲットが潜伏していると思しきホテルを発見』

「了解。地図データをこっちに寄越せ、俺もすぐに向かう」

『はっ！』

短い遣り取りの末に通話が切られ、その男は携帯端末をコートのポケットにしまった。真夏の沖繩にしては暑い服装に思われるが、サングラスを掛けたその男は汗1つ掻いていない。

男が横に目を向ける。南国特有の青く澄んだ海が視界に広がる。

それを眺めながら、男はポツリと呟いた。

「沖繩か。俺からしたら、些か華やかに過ぎるな」

第1102話 「南の島の陰謀だゾ」

ひよんなことから知り合った達也・深雪・しんのすけ・リーナ（とベン）は、近くの海の家からビーチバレーの道具一式を借りて2対2に分かれて試合形式で遊ぶことにした。丁度男女が2人ずつということ、達也&深雪としんのすけ&リーナにチームを分け、ベンは審判役ということで見学に徹している。

その辺に落ちていた棒で線を書き即席のコートを作り遊び始めた4人だが、試合が進むにつれて大勢のギャラリーに取り囲まれるようになった。確かに深雪もリーナも絶世の美少女であり、そんな2人が水着姿で遊んでいるとなれば人目を惹いたとして何ら不思議は無いだろう。

しかし実際のところ、注目される理由はそれだけではなかった。

「深雪ー！」

「はい、お兄様ー！」

しんのすけによる強烈なスパイクを拾い上げた達也が呼び掛け、深雪が砂に足を取られるのも厭わずに宙に浮かんだボールの下へと駆け寄った。両手を開いてボール（あくまで遊戯用のためビニール製だ）をトスして打ち上げ、ネット際に待機する達也へと絶妙なパスを送る。

それを受けて達也が砂浜を強く蹴って跳び上がり、上から叩きつける強烈なスパイクをお見舞いした。

「ほいほーいー！」

「ナイス、シンちゃんー！」

しかしそのボールが地面に落ちる直前、しんのすけが地面に転がり込んでその間に手を割り込ませた。ギャラリーの歓声が沸く中、リーナが先程の深雪と同じようにトスの構えを取る。次に来るであろうしんのすけのアタックに備え、達也も深雪もその場に留まってそれを待ち構える。

しかしそのとき、素早く立ち上がったしんのすけがリーナに向かって駆け出した。

」
リーナがそれを見てニヤリと笑い、達也が何かに気づいて口を開きかける。

上に打ち上げる構えだったリーナの手が握られ、手の甲でポンと軽く叩くように真横へとボールを弾いた。

そして彼女の手からボールが離れたその瞬間、大きく跳び上がったしんのすけが目にも留まらぬ速さでボールを叩き込んだ。今までの攻撃のリズムとは大きく異なる速攻に深雪は動けず、ボールは線のギリギリ内側にめり込んでクツキリと跡を残した。

「Yeah! さすがシンちゃん!」

「リーナちゃんも、ナイスアシストだゾ!」

「申し訳ございません、お兄様……」

「気にするな、まだ勝負は終わっていない!」

元気良くハイタッチを交わすしんのすけとリーナ、気落ちする深雪を励ます達也とネットを挟んだ両側でのリアクションは対照的だが、それを眺めるギャラリーは両チームに対して賞賛と激励の拍手を贈っていた。もはやそれはプロチーム同士の試合かと思紛うほどの盛り上がりで、何なら近くの海の家からやって来た売り子がギャラリー相手に飲み物を販売している始末だった。

「さすがに目立ちすぎではないか、シールズ准尉……?」

喧騒の声に包まれるベンが、苦笑い混じりにそう呟いた。

「ワタシ達の勝利よ、シンちゃん!」

「いやあ、リーナちゃんもなかなかやりますなあ!」

結局試合は、しんのすけ&リーナの勝利で幕を閉じた。しんのすけの運動能力がかなり優れていたことに加え、リーナもその可憐な見た目とは裏腹にかなり動けるようであり、結果的に深雪が達也の足を引っ張る形となってしまったことが原因に挙げられる。

とはいえ、彼女も同世代の女子と比べればかなり運動はできる方であり、けつしてあからさまに見劣りするような出来ではなかった。そ

れを示すように、試合が終わった後はギャラリーから惜しみない拍手が贈られ、そして良い物を見たといった表情で三々五々にその場を離れていった。

「いやはや、とても見応えのある試合だったよ！ 特にタツヤさんとシンノスケくんの動きは目を見張るものがあつたね！」

強く手を叩きながら賞賛の声をあげるベンに、しんのすけは「それほどでも」と素直に喜びを露わにし、達也は逆に表情を変化させず小さく頷くに留めた。

「2人共、何かスポーツをやっているのかい？」

「スポーツ？ オラは特に何もやってないゾ」

「そうなのかい？ せっかくあれだけの運動能力があるのだから、何か始めてみると良い。きつと良いところまで行けると思うよ」

「ふーむ、そういうものですかあ」

しんのすけが顎に手を当てて考え込む仕草になったところで、ベンの視線が達也へと移る。

「タツヤくんは、何かスポーツでも？」

「いいえ、特には」

「そうなのか。ということは、普段からよく体を鍛えてるということだね」

「そういうあなたこそ、よく体を鍛えてるようで」

「そうかい？ 君のような若者に褒められるとは、一生懸命ジム通いしている甲斐があるというものだ」

「ご謙遜を。あなたのその体つきは、けっしてジムに通うだけで身につくものではないですよ。——最初に会ったときなんて、さつき俺達に絡んできた奴らの仲間かと思っただくらいですから」

「……成程、ただ体を鍛えてるだけじゃないようだ」

温和な笑顔を浮かべたままのベンに対し、達也の視線は冷ややかなものだ。兄がそんな様子だからか、その背後に控える深雪は戸惑いながらもベンに向ける目に懐疑的な色が浮かぶ。

しかしそんな空気を、リーナがぶち破った。

「そうだ、パパ！ もうすぐお昼ご飯の時間だし、みんなも一緒にどう

かしら?」

「ああ、それは良い考えだね。どうだろう、こうして知り合ったのも何かの縁ということだ」

「おおっ! それは良い考えですなあ!」

リーナとベンの誘いに、しんのすけは特に考える素振りも無く即答した。

「大丈夫なのか、野原くん? ご家族の所に戻らなくて」

「うーん……、別に大丈夫ですよ」

「いや、一応連絡くらいはした方が良いでしょう」

「そう? 達也くんがそう言うなら」

しんのすけは渋々といった感じで携帯端末を取り出し、電話を掛け始めた。

リーナが達也に対して不満そうな表情を向けている気がしたが、達也が視線を向けると彼女はニコニコと笑みを浮かべるのみだった。

「そう言うタツヤは、ご家族の所に戻らなくて良いの?」

「まるで俺達には帰ってほしそうな物言いだな」

「そんなこと無いわ。ワタシはもつとタツヤやミユキと親交を深めたいもの」

絶世の美少女から至近距離でそんなことを言われれば、男ならば大なり小なり惹かれずにはいられないだろう。達也の傍でそれを眺めている深雪も、達也が何と答えるか気が気じゃない様子だ。

そんな彼女の笑顔を真正面に見据えながら、達也は口を開いた。

「——そういうことなら、ぜひとも一緒に緒させてもらおう」

「お兄様っ!」

リーナの誘いを受ける返事をした達也に、深雪が悲痛とも取れる叫び声をあげる。まさか兄が彼女の美貌に絆されてしまったのでは、と思っただろう。

しかしすぐに、深雪は気がついた。

彼女の美貌に絆されたにしては、その表情が真剣味を帯びていることに。

「……桜井さんに、お昼はいらないと電話してきます」

深雪はそう言っただけでその場を離れ、電話を掛け始めた。

そしてそのタイミングで、先に電話を掛けていたしんのすけが「うーん」と唸り声をあげる。

「どうしたの、シンちゃん？」

「さっきから何回も電話を掛けてるのに、全然出ないんだゾ。——まあ良いや、その内向こうから掛かってくるでしょ」

「そう？ それじゃミユキの電話が終わったら出ましょ、パパ」

「ああ、そうだな——おっと、すまない」

と、今度はベンの携帯端末が震えて着信を知らせてきた。彼は一言断りを入れてからそれを取り出し、画面を見遣る。

「——！」

「……………」

その瞬間、ベンが息を呑むのが雰囲気伝わった。表情にほとんど変化は無かったので普通ならば見逃すところだが、それとなく注意を向けていた達也がそれに気づかないはずがない。

「……………すまない。急に会社の同僚からメールが来て、少しそちらに掛からなきゃならなくなった。誘った立場で申し訳ないが、リーナと君達だけで昼食を楽しんでくれたまえ」

「大丈夫なの、パパ？」

「ああ、心配はいらないよ。後でリーナの端末に電子マネーを送っておくから、それで支払いは済ませておいてくれ。——それじゃ、私はこれで」

「ほいほーい。またねー」

「……………お気遣い、ありがとうございます」

なるべく平静を装っている様子だったが、立ち去っていくその足取りは速かった。小さくなっていくベンの背中を、鋭い目つきの達也がジッと見つめている。

電話を終えた深雪が戻ってきたのは、その直後だった。

「お待たせしました。午後の予定の時間までに戻れば問題無いとのことです」

「よし！ それじゃパパはいなくなっちゃったけど、さっそくご飯を

食へに行きましょ！ シンちゃん、何を食べたい？」

「そうだなあ……、分厚いステーキが食べたいゾ」

「ステーキね。それじゃこの近くにあるステーキハウスでも——」

しんのすけのリクエストに応えようと端末の地図アプリを開こうとしていたリーナだが、

「野原くん。やはり一度ご家族の所に戻らないか？」

「……えっ？」

達也が横からそう言ってきたことで、リーナの手が自然と止まった。

「もしかしたらご家族が昼食の店を予約してるかもしれないし、出会ったばかりの人間と食事することに難色を示すかもしれないぞ」

「ええっ、そうかなあ？ 普通に笑って許すと思うけど」

「念のためだよ。——リーナも、それで良いよな？」

達也の質問に、リーナはすぐに答えなかった。顔を伏せて口を引き結び、思いつめた様子で何やら考え込んでいる様子である。

ジツと見つめて答えを待つ達也に対し、リーナが顔を上げて正面から見据えて口を開いた。

「……ええ、別に構わないわよ」

「よし。それじゃ野原くん、ホテルに案内してくれないか？」

「ほいほい。それじゃ、出発おしんこ」

「……お新香？」

高らかに右腕を挙げて歩き出すしんのすけに、その際の言い回しに首を傾げる達也と深雪。

「まあ良いわ。いざとなったら、そのときは——」

そして一番後ろを歩きながら、リーナがボソリと言葉を漏らした。

*

*

*

恩納瀬良垣にある司波家の別荘にて。

冷房の効いた部屋のソファーに座って本を読む深夜の下に、携帯端末を片手に持つ桜井がやって来る。

「奥様。先程深雪さんから電話がありました、今日知り合った同世代の女の子とお昼を食べるそうです。達也くんも一緒みたいですよ」
「あら珍しい。あの子達、旅先でそんなにアグレッシブになる性格だったかしら？」

「よほど気が合ったんでしようね。なのでお昼は、奥様と私だけということになりますね」

「そう……。まあ、別に良いけど」

そう言つて、再び手元の本に視線を戻す深夜。

そんな彼女に、桜井がクスリと笑う。

「大丈夫ですよ、奥様。まだまだ旅行は続くんですから、一緒に食事をする機会なんてたくさんありますよ」

「あら、別に気にしてないけど？」

*

*

*

「ここがオラ達の泊まつてるホテルだゾ」

「昨日はパーティーホールに直行だったから気づかなかったけど、中つてこんなになんか広かったのね」

「へえ、凄いじゃない。こんなホテルにタダで泊まれるなんて、シンちゃんったらラッキーね」

「確かに、これは豪華だな……」

しんのすけが泊まっているリゾートホテルに1歩足を踏み入れた達也たちは、想像以上に広大で豪華なその造りに素直な感嘆の溜息を漏らしていた。

真つ先に目に飛び込んできたのは、まるで町が丸々1つ入ったかのようにズラリと並んだ建物だ。その1つ1つが高級ブランドの直営店であり、ガイドブックによればそういった店がザツと100店舗以上はあるようだ。それだけでも、ここの宿泊客が如何に金を落とす上客か分かるというものだ。

もちろん、楽しみはショッピングだけではない。ホテルの敷地内には趣向を凝らしたプールが子供用も含めると6エリア存在する。県

内最長のウォータースライダーや本物の滝のように岩や植物が配置されたプールなど、プール巡りだけでも1日遊べるほどの充実ぶりだ。

お腹が空いたら、敷地内のレストランへ。和洋中多種多様な料理の専門店があちこちに並ぶ飲食店の数は、露店形式を含めると30以上にもなる。もちろんホテルが提供する料理も一流で、ビュッフェ形式の朝食・夕食はこのホテルの名物となるほどだ。

他にも様々な施設やアクティビティが用意され、スパやエステからフィットネスジム、映画館や沖縄文化を体験できる教室、果ては結婚式も挙げられる教会やイベント開催にも使える会議室など、ホテルから1歩も出ずに旅行を完結できるほどの勢いだ。とはいえ実際には、ホテル前に島内各地を巡るシャトルバスやコミュニティターの乗降車ができる広めのターミナルなど、周辺の観光事業にもその恩恵は広がっているようである。

「オラ達が泊まってるのは、この建物ね」

町のようなショッピングエリアを抜けてしんのすけ達がやって来たのは、全部で6棟あるタワーホテルの1つで、値段的にはちょうど中間層に位置する建物である。野原家はその中でも中層階に客室を取っているようで、まさにこのホテルに泊まる平均的な部屋といった感じだ。

とはいえ、けっして手が抜かれているような印象は受けない。海沿いの立地だけあって眺望は良く、1階のフロントには専属のコンシェルジュが常駐している。しんのすけが達也たちを伴ってフロントに入ったときには笑顔で「お帰りなさいませ」と丁寧な所作で出迎え、部屋の鍵であるカードキーをしんのすけに手渡した。

彼らに乗せたエレベーターが上へと進んでいく間、達也がしんのすけに話し掛ける。

「……野原くんは、商店街の福引でここの宿泊券を貰ったんだよな？」

「そうー！ しかも8泊9日ー！ 凄いでしょ!？」

「ああ、確かに凄いな。それだけの景品を用意できるとは、その商店街はよほど賑わっているんだらうな」

「うーん、そうかな？　オラは普通の商店街だと思うけど」

「……そうか」

そこで会話は途切れ、達也は黙り込んで考えに耽る。

そんな彼を深雪が、そしてリーナが見つめていた。

——これだけのリゾートホテルに長期間、しかも家族全員分の宿泊券を交通費込みで。福引の目玉景品とはいえ、普通の商店街が用意できるものか……？

しんのすけがこのホテルに泊まることになった経緯を聞いたとき、達也が真っ先に疑問に感じたのがこれだった。しかも今の時期は観光真っ盛りのオンシーズンであり、その分飛行機の交通費もホテルの宿泊料金も跳ね上がる。いくら客引きのための景品とはいえ、そこまです身銭を切ることができるものだろうか。

とはいえ、彼らは実際にそうして沖縄にやって来ている。達也が疑問に感じたところで、実際にそうなっている以上は考えても仕方ない。なので達也も、最初はその疑問を切り捨てた。

しかしここで、再びその疑問を拾わざるを得ない状況になってきた。

「どうしたの、タツヤ？　ワタシの顔に何か付いてるのかしら？」

「眉と目と鼻と口が付いてますな」

「それはシンちゃんも一緒よ」

外国の観光客として自分達に近づいてきた、ベンと名乗る男と、リーナと名乗る少女。

親子を自称する2人だが、達也はそれが嘘だと既に見抜いている。彼の眼は少々“特殊”であり、目の前にいる人間のDNA配列の情報すら読み取ることができる。2人の間に親子関係が無いことは一目見たときから分かっていたし、よく一緒に旅行するにしては余所余所しさが隠し切れていないことも見抜いている。

更に問題なのは、彼女達が自分達に接触してくるときと前後して、自分達を監視するような視線を複数感じるようになったことだ。西洋風の奴らと日本人風の奴らに大きく分けられるそいつらが、同一のグループなのか別々なのかは今のところ判断がつかない。しかしそ

いつらが自分達、正確にはしんのすけに注目していることは明白だ。だとすると、商店街の福引自体がそいつらの差し金である可能性も否定できない。しんのすけ達が現在ここにいることすら、そいつらの計画の一端だとしたら――

「着いた着いた、ここがオラ達の部屋だゾ」

ドアが幾つも並ぶ廊下にてふいに立ち止まったしんのすけが、先程フロントで貰ったカードキーをドア横のパネルにかざした。ドアのロックが解除され、しんのすけが部屋の中へと入り、他の3人がドアの前で立ち止まる。

そのまま彼が出てくるのを待ってしようとした達也が、

「――！」

ふいに達也の目が僅かに見開かれ、ジワリと剣呑な雰囲気が出た。最初に深雪がそれに気づき、彼女の反応でリーナが達也の異変に気づく。

と、一通り部屋を確認したしんのすけが戻ってきた。

「うーん、まだ帰ってないみたい。とりあえず、オラ達だけでご飯食べに行かない？ オラ、もうお腹ペコペコ――」

「悪い、野原くん。部屋に入らせてもらうぞ」

「お、お兄様？」

しんのすけの返事を待たず、達也は彼の脇を擦り抜けて部屋の中へと入っていった。達也らしからぬ行動に深雪が戸惑いながらも後に続き、しんのすけとリーナが首を傾げながらそれを追う。

リビングにはダブルベッドが2つ置かれ、バルコニーの眼下からはプールで遊ぶ子供の笑い声が微かに聞こえてくる。トイレと洗面所、そしてバスルームが付いた、4人で泊まるには十分な広さを誇る一般的な部屋だ。

「どうしたの、達也くん？ ——はっ！ もしかして、オラのプライベートな空間がそんなに気になる？ イヤー、達也くんったらエッチ〜」

「野原くん達がここに来てから、ホテルのスタッフはこの部屋に入ってたか？」

「……んもう、ノリ悪いんだからあ。えっと、部屋の掃除とかは頼んでないから、多分入ってないと思うゾ」

「そうか……」

「さっきからどうしたの、タツヤ？」

リーナの質問にも答えずに達也は一頻り部屋を見渡すと、おもむろにテレビの裏を覗き込んだ。

テレビ本体から延びるコードが、壁のコンセントと繋がっている。しかし、直接ではなかった。

壁のコンセントには立方体の電源タップが差さっており、テレビのコンセントはそこに繋がっていた。しかしテレビ以外に、その電源タップに繋がっているコードは無い。

「お兄様、まさかそれは……!」

「ああ、古典的な盗聴器だな。しかもこれだけじゃなく、部屋中の至る所に仕掛けられている」

「——!」

達也の返答に深雪は息を呑み、リーナは目を丸くする。

事の重大性を理解していないのは、しんのすけだけだった。

「おっ? 盗聴器がなんでオラ達の部屋にあるの?」

「それを確認するためにも、フロントに電話をして事情を説明するべきだな。それと警察にも電話だ。——もしかしたら、野原くんのご家族が何か事件に巻き込まれてる可能性がある」

「ええっ!?!」

しんのすけが驚きの声をあげる中、達也は部屋の電話へと手を伸ばし——

「……どういっつもりだ、リーナ?」

受話器を取る直前にその手首を掴んだリーナに対し、達也は冷たい視線を投げ掛けた。いや、その鋭い目つきは「突き刺した」と表現する方が適切なくらいだ。

普通ならば、ましてや年頃の少女が間近でそれを直視すれば、思わず背筋を凍らせて動けなくなってもおかしくない。しかしリーナはそれでもなお、まっすぐ達也を見つめ返したまま彼の手首から手を離

そうとしない。

「……リーナ、とりあえずお兄様から手を離してくれないかしら？」
しかし深雪が優雅に微笑みながらプレッシャーを発するという器用な行動に、リーナはハッと我に返って後退り達也から距離を取った。

「……タツヤ、もしかしてワタシのこと疑ってる？」

「この状況で疑うな、という方が無理がある」

「まあ、確かにそうだけど……。とりあえず、ホテルに電話するのはお勧めしないわ」

「なぜだ。理由を説明しろ」

達也の簡潔な要求に、リーナは少しだけ考える素振りを見せる。

深雪は緊張した表情で達也を見つめ、そして自分の泊まる部屋で何やらシリアスな遣り取りをされるしんのすけは困惑頻りだった。

そんな雰囲気の中、リーナが意を決したように口を開く。

「分かった、正直に話すわ。実はこのホテル——」
ピンポン。

「——↓」
来客を知らせるチャイムの音に、その場の全員がドアへと顔を向ける。

「野原様、突然失礼致します。スタッフの者ですが、少しお時間宜しいでしょうか？」

ドア越しから聞こえてくるのは、女性の声だった。

しんのすけ・深雪・リーナの視線が自然に達也へと集まり、達也はドアを睨みつけながら思案顔となる。

そのドアには、このホテルの企業ロゴがプリントされていた。

そこには、「沖縄・スイートボイーズ・ホテル・ヴィレツジ」と記されていた。

*

*

*

ベンやリーナ達が滞在するホテルは、野原家が滞在するホテルから

少し離れた場所に存在する。野原家のホテルが幾つものタワーホテルやショップで敷地内に多くの建物があるのに対し、こちらは森に囲まれた広い土地に戸建てのコテージが最低限建っているだけだ。コテージは互いに離れているため滞在者同士で顔を合わせることは無く、ルームサービスが充実しているため、滞在していることを悟られたくない要人などに好まれている。

「……………」

部下から緊急事態発生メールを受け取ったベンが、緊張した面持ちで自身が滞在するコテージへと向かっていく。これまで誰とも擦れ違わなかったのはホテルの特色を考えれば普通のことだが、遠くで鳴く鳥の声すら聞こえるほどの静寂にベン表情が自然と強張っていく。

そしてそれは、彼の周りを囲むように歩く彼の部下達も同じことだった。ベンの補佐としてしんのすけ達から距離を空けて動向を見守っていた者達であり、現在は最低限の人員のみを残して全てこちらに回されている。

もう少しでコテージが見えるという所で、ベンは一度立ち止まって腰に手を当てた。上着に隠れて見えないが、そこにはCADを収納するホルスターが巻かれている。そこから拳銃型のCADを抜いて右手に構えた状態で、ベン再びコテージへと歩き始めた。

そして、

「……………」

コテージが視界に入った瞬間、ベンは驚きで目を見開いた。

彼らが泊まるコテージにはウッドデッキがあり、1階リビングの大きな窓からそのまま外に出ることができる。ウッドデッキにはテーブルや椅子だけでなくバーベキュー用のコンロなども設置され、ホテルが用意した素材を調理して食べることもできる。

そんなウッドデッキの椅子に座っているのは、自分の部下ではなかった。ソフト帽にグラスンという出で立ちをしたその男は、右手に文庫本、テーブルにはウイスキーの入ったグラスと、まるで自分がこのコテージの滞在客かのような寛ぎっぷりだった。

そしてその男は、ベンが動揺したのを肌で感じ取ったかのようなタイミングで文庫本を閉じ、そしてその場に立ち上がってベンへと顔を向けた。

「意外と遅いお着きだな、ベンジャミン・カノープス」

「——！ 成程、私のことも知っているとわかか」

「当然だ。USNA魔法師部隊スターズの第一部隊隊長にして、総隊長シリウスが空席の現在は総隊長代行として実質的なトップも担う重要人物を、俺が把握していないとでも思ったか」

ウッドデツキを歩き、そのまま短いストロークの階段を下りてコテージ前の広場へと降り立つソフト帽の男に、ベン改めカノープスは警戒心を露わにした表情でCADを構えている。拳銃で例えれば安全装置を外して銃口を向けられている状態だというのに、ソフト帽の男はまるで意に介した様子が無い。

「悪いが、君達が軟禁していたあの男は我々の方で保護させてもらった」

「保護だと？ あの男は、おまえ達からも逃げていたんだろう？ それと私の部下も一緒にいたはずだが、どこにやった？」

「安心したまえ、殺してはいないよ。我々は“戦争”をしに来たのではないのでね」

と、周りで動く気配に、カノープスは視線だけを辺りに遣った。クリーム色のワイシャツに茶色のズボンで統一された男達が一定の距離を空けて彼の周りを取り囲み、いつでも飛び掛かれるように構えの姿勢を取っていた。

鋭い目つきで睨みつけるカノープスに対し、ソフト帽の男は不敵な笑みを浮かべた。

「俺だけ正体を一方的に知っているとこのもフェアじゃないな。——俺の名は堂ヶ島。かつてはおまえと同じ戦場に立っていた人間で、そして今は“スウィートボーズ”という民間企業のしがない中間管理職さ」

「……奇遇だな。中間管理職という点では、私も同じだよ」

カノープスの言葉に、ソフト帽の男——堂ヶ島はフツと笑みを漏ら

した。

第1101話 「沖縄でも大騒ぎだゾ」

「スタッフの方ですか？　こちらから呼んだ覚えは無いのですが」
突然部屋の前にやって来た自称スタッフの呼び掛けに、しんのすけが咄嗟にドアへと近づこうとするのを手で制した達也が逆に呼び掛ける。

おそらく女性と思われる自称スタッフは、いたって平易な口調でそれに答える。

「現在そちらにいらっしやる野原しんのすけ様のお連れ様につきまして、お話したいことがございます。ドアを開けて、部屋の中に入れて頂けますでしょうか？」

「おっ？　伝言？」

「――！」

しんのすけが首を傾げ、深雪とリーナの表情に緊張が走った。

達也も目に携える鋭さを増し、しんのすけに差し向ける腕を下ろすことなく口を開く。

「話だけなら、そこでもできます。そこでどうぞ」

「何分プライバシーに関わる話ですので、他のお客様の耳に入る場所ではちよつと――」

「構いません、どうぞ」

「達也くん、オラが構うんだけど」

しんのすけが横からツツコミを入れるが、達也にそれを聞き入れる姿勢は見られない。ジツとドアを睨みつけているだけだ。

ほんの数秒、ドアの向こうから逡巡するような雰囲気を感じ取れた。

そしてその後、再び自称スタッフの声が聞こえてくる。

「先程、そちらの部屋に盗聴器が仕掛けられていることが判明しました」

「そういう論法で来たわけね」

リーナが独り言のように漏らした言葉は、まさに達也が内心思っていたことだった。

「そうですか。俺達が盗聴器を見つけたタイミングでそれを伝えに来るなんて、色々と勘繰ってしまいそうですね」

「盗聴器が仕掛けられたことに気づかず、お客様をお通ししてしまつたことにつきましては、誠に申し訳なく思っております。つきましてはお連れの方を当ホテルのスイートルームにご案内し、その間にこの部屋の盗聴器を撤去させて頂くこととなりました。もちろん盗聴器を撤去した後も、お客様はそのままスイートルームにご滞在なさることも可能でございます」

「なーんだ、父ちゃん達はそつちに居たのかあ」

「野原くん、奴の言葉を素直に信用しては駄目だ」

すっかり安心した様子のしんのすけに、達也が間髪入れず忠告する。

「つまりこの部屋の盗聴器は、ホテル側が仕掛けた物ではないと」

「当然でございます。我々がそのようなことをするはずがありません」

「それでは俺達がこの盗聴器を撤去して、その出処を調べても構いませんね?」

「お客様のご友人のお手を煩わせる必要はございません。盗聴器の撤去はこちらで致しますし、調査についても警察の協力の下で行わせて頂きます」

「俺達としても、部屋に仕掛けられた盗聴器の出処が気になって仕方がないのでですよ。こちらには警察にも引けを取らない調査能力を持つ伝手がありますので」

「えっ、そうなの?」

しんのすけが深雪に尋ねるが、彼女は苦笑いを浮かべるだけで答えなかった。

昨日のパーティーの主催者である黒羽家は、四葉の数ある分家の中でも特に諜報分野を担当している。達也の「警察にも引けを取らない」という評もけつして過大ではなく、盗聴器の出処を探るくらいならやってのけるだろう。とはいえ今回は完全に四葉とは関係無い事件なので黒羽家の力を借りられるとは到底思えないが、達也はあくま

で『伝手がある』と言っただけなので嘘ではない。

ちなみにリーナは、その遣り取りに軽く肩を竦めていた。どうやら達也の言葉をハツタリだと判断したようである。

「……大変恐縮ですが、今お話されてる方は当ホテルのお客様ではございません。お客様と直接お話しさせて頂きたいのですが」

今の自称スタッフの発言は、本人は努めて冷静でいるよう心掛けているようだが、僅かな声の震えから達也には相手が苛立っているように感じられた。

達也はすぐには返事をせず、代わりに無言のまま壁一面を占有する大きな窓をスツと指差した。真つ先に反応したのがリーナで、彼女はカーペットのおかげで足音一つ立てることなく窓まで移動してそれを開ける。潮風が部屋の中に入り込み、リーナと深雪の長い髪が小さく揺れた。

それを確認してから、達也は口を開いた。

「成程、部外者は黙っているということですか」

「いえ、けっしてそのような——」

「でしたら、こちらからも一つ確認させて頂きたいのですが」

自称スタッフの言葉を遮って、達也がドアの向こう側にいるそいつらに質問をぶつける。

「今こうして話している女性の方は別にして、その周りで臨戦態勢を取っている5人の男は本当にホテルのスタッフなのですか？ さすがに銃火器の類は無いようですが、それでも得物を隠し持っていますよね？」

「——！」

達也の言葉に、リーナがギョツと目を見開いて達也へと振り向いた。何故ドアの向こうにいる奴らの人数や武器を知ることができるのか、といった表情だ。そしてこんな状況にも拘わらず、しんのすけは相変わらずキョトンと首を傾げるばかりである。

ドアの向こうから、声が聞こえなくなった。部屋の中でも外でも、誰もが口を噤んだままその場を動かずにいる。

その均衡を破ったのは——達也だった。

「窓から飛び下りろ！」

いや、正確にはドアの向こうでまず動きがあり、それを受けて達也が3人に指示を出した。

「えっ？・えっ？」

最初にバルコニーへと飛び出した深雪が下を覗き込み、戸惑うしんのすけを無理矢理引っ張って達也がその後につき、リーナがドアを注視しながらしんがり殿を務める。

バルコニーは胸の高さほどの柵で囲まれているが、ビーチバレーで卓越した運動能力を見せつけた達也とリーナは当然として、深雪も意外と軽々とした動きで柵の上へとその身をよじ登らせる。

「野原くん。怖いだろうが、ここから飛び降りるんだ」

「えっ？・いや、急に言われても——」

その瞬間、背後でドアが蝶ちようつがい番から外れて破壊される大きな音がした。

全員がそちらへ顔を向けると、髪を顎の長さで切り揃えて前髪をセンターで分ける女性を筆頭に、全身黒服の男達が達也の言う通り5人、部屋の中に押し掛けてきた。こちらに向ける敵意を隠そうともしないその姿は、とてもまともなホテルのスタッフだとは思えない。

部屋の中とバルコニーとの間で行われる、一瞬の睨み合い。

その均衡を破つたのは——今度はしんのすけだった。

「おおっ！・ベージュおパンツのお姉さん！ お久しブリブリ〜！」

「——はあっ!？」

その言葉に女性が顔を紅くし、若干短めのスカートを手で隠すように身を振らせる。

それに釣られて、周りの男達も視線も女性の方へと向けられる。

「今だー！」

「えっ——おわあっ！」

達也の呼び掛けと共に、しんのすけの体が独りでにフワリと浮き上がり、バルコニーの柵を飛び越えてその外へと投げ出された。

それと同時に、達也たち3人も柵を自力で越えて空中へと飛び出していく。

「ま、待てっ！」

女性の叫び声が、部屋の中から聞こえた。

その男は、とある芸能プロダクションの3代目社長だった。社長とは言っても先代社長である親からその地位を譲り受けただけに過ぎず、エンタメ業界の厳しさというものをその身で感じたことなど1度も無い。彼にとって社長の椅子というのは、刹那的な虚栄心を満足させるための手段でしかなかった。

そんな彼は現在、沖縄でもトップクラスの高級リゾートホテルのプールにて、1人の女性と共に大きなフロートマットの上に寝そべっていた。少女を卒業したばかりの瑞々しさと初々しさが残るその美女は、彼のプロダクションに所属する女優であり、最近テレビで存在感を見せ始めてきた期待の若手である。

彼にとってタレント達とは、いわば“宝石”のようなものだった。磨き上げたりカットして付加価値を与えるのが自分の仕事だという意味でもあるし、たとえば他の職人が磨いたものでも金さえ積みめば買取れる“商品”でしかないという意味でもある。

そういった意味では、その女性は彼が今一番お気に入り“アクセサリー”と言える。元々は顔が良いだけの大根役者だったのをここまで育てたのは自分だと思っており、その労力に対する正当な報酬として“良い想い”をするのは当然だと考えている。そして彼にはそんな女性が、それこそ数十人はいた。

「どうだい、このホテルは？ 体を休めるには最適だろうか？」

「ええ、そうね。さすが人気のホテルなだけはあるわね」

引き締まった体を惜しげも無く晒す水着姿でそう評価する彼女に、男は得意気な笑みを浮かべている。自分が建てたりプロデュースしたわけでもないのに、なぜか自分が褒められているかのような態度で胸を張っている。

チラリ、と周りに目を遣る。高級なだけあって客層も身なりや言動に気を遣う富裕層が多いが、そんな彼らの間でも彼女の顔が知られて

いるのか、あるいは純粹に彼女の外見が目を惹くのか、露骨にならない程度にチラチラとこちらを窺っていることが分かる。自分のアクセサリーに皆が見惚れているのを肌で感じ、男はますます悦に入った様子だった。

一頻り下衆な欲求を満たしたところで、男は心の中で気持ちを切り替えた。こうしてわざわざ高級なりゾートホテルに彼女を連れてきたのも、ひとえに「見返り」を求めてのことだ。もつと言ってしまった。男としての「より直接的な欲求」を彼女で満たすためである。

彼女だって馬鹿ではない。こうして旅行に同行しているということは、少なからずそういった展開になることは織り込み済みのはずだ。男は逸る気持ちを抑えつつ、コホンと咳払いをしてから口を開いた。

「なあ、ところで今夜は——」

「あら？ 何だか暗くない？」

他ならぬ彼女に出鼻を挫かれたことに怒りの一つも湧いてくるが、それを懸命に抑えながら頭上へと視線を遣る。

快晴の沖繩の空に、2人の少年と2人の少女がいた。

そしてその少年少女は、こちらに向かって落ちてきていた。

「——はあっ!？」

男が声をあげたその瞬間、4人は男達のすぐ近くにドボンと着水した。その際に大きな波が立ちフロートマットが大きく揺れるが、それ自体が大きいのでひっくり返るには至らなかった。

その代わり、男の顔には思いつきり水が掛かった。

「エフツッ！ ゴホツッ！ エフンツッ！」

水が鼻の奥に入った男が半分濡れかけたような咳をするが、少年の1人が「早くここから脱出するぞ！」と呼び掛けるからか全員男には頓着せず、そのままプールサイドへと泳いでその場を離れようとする。

「ま、待て！ 謝罪の1つでも——!？」

それに文句を言おうと男が詰め寄ろうとしたが、2人の少女を認識したところでその言葉が中途半端に呑み込まれた。

自分の連れの女性を宝石とするならば、その2人は金を出せば買えるような代物ではない、例えるなら^{ザ・グレート・スター・オブ・アフリカ}偉大なアフリカの星”のような値段のつけられない原石だと直感的に理解した。その美しさはもはやこの世のものとは思えず、それこそ男達の願望が具現化された幻だとする方が自然だと思えるくらいだ。

しかも今の2人は、プールに落ちたことで全身が濡れている。どうやら服の下に水着を纏っているようで下着が見えるなどということはないが、首筋に張りついた髪などが中学生くらいの少女とは思えない艶めかしさを演出している。その二律背反を両立させる視覚情報の暴力が、男の発言と思考を無理矢理停止させた。

男が我に返ったのは、4人の少年少女がプールサイドに上がり切ったときのことだった。

「今のはいったい——」

「可愛かったわね、今の女の子」

背後から聞こえる軽やかな、しかし男にとっては禍々しく聞こえるその声に、男はビクツと肩を跳ね上げて後ろを振り返った。

自分の連れである女性が、惚れ惚れするほどに晴れやかな満面の笑みを浮かべていた。男が自分の手で育てたと豪語する演技力をフルに発揮し、胸の内をまったく悟らせない見事な笑顔だった。

完全に余談だが、その日2人は別れた。

*

*

*

「いただきマンモス！」

ホテルから少し離れた場所にある、大勢の客で賑わうステーキハウス。円形のテーブルに達也・深雪・リーナ・しんのすけの順に座り、タッチパネルで注文した料理がウェイターによって運ばれると、しんのすけが興奮した様子で真っ先にステーキに齧りつき、それを横目に達也たちも料理へと手を伸ばしていく。人気店だけあって、舌の肥えた達也たちも満足する味だった。

ステーキを所望したのはしんのすけだが、この店を選んだのは達也

だった。ホテルでの遣り取りから相手はあまり事を荒立てたくないのだと推測され、ならば無関係の人が多いここでは下手な真似はできないと読んだからである。もちろんしんのすけにはそういった考えは伏せたうえで、たまたま目についた店を選んだ風に装っている。

「それにしても、深雪ちゃんが魔法使いだったなんてビックリだゾ！服もあつという間に乾いちやうし、やっぱり魔法って便利だゾ！」

「魔法使いじゃなくて、正確には『魔法師』だけどね」

深雪が使用した魔法は、プールに飛び込むときの重力制御魔法に、その際に濡れた服の水分を飛ばす発散魔法。自分に敵意を持った相手から逃走するという精神的負荷が掛かった状態で自分も含めた4人に対して同時に作用させるという、中学1年生にしてはかなり高度なことをやってのけているのだが、案の定しんのすけはそれに気づいた様子は無かった。

しかし達也はそれよりも、深雪が魔法師であると分かってもしんのすけが一切態度を変えないことの方に興味を持った。達也と深雪が通う中学校は魔法的素質の無い者の方が多い一般的な学校なのだが、彼女はそこでクラスメイトから若干の距離を置かれている。高嶺の花でおいそれと近づけないという見方もできるが、おそらく魔法を使う彼女に対して恐怖心が拭い切れないのだろう。

だが、しんのすけに関してはそれが一切見られない。深雪の美貌に對して頓着しないだけあって、そういったことにも動じない性格ということなのだろうか。

あるいは――

「それで野原くん、これからどうするつもりだ？」

「そうですねあ……。やっぱり暑いからアイスにしようかな？」

「いや、デザートのことじゃなくて、奴らに連れ去られた野原くんのご家族のことなんだが」

達也が（おそらく本人にその自覚は無いだろうが）ツツコミを入ると、しんのすけは「あつ、そっち？」と今まで忘れてたかのような反応を見せた。敢えて惚けることで強がっているのだと達也は思うことにした。

「っていうか、ヘーキじゃないの？ スイートルームに移ったって、さつき言ってたじゃん」

「客の部屋に武器を持ってやって来て、拳銃の果てにドアを蹴破って中に入ってきた奴らの言葉をそのまま信じるならな」

「ふーむ……。それじゃ、父ちゃん達がどこにいるか調べる？」

「問題はその方法だが——」

「それならシンちゃん、ワタシに任せてちょうだい」

食器を一切鳴らさずにステーキを切り分けていたリーナが、待つてましたとばかりに横から会話に割り込んできた。

「パパの知り合いに人探しが得意な人達がいるから、彼らに協力してもらいましょう。きっとシンちゃんのご家族もすぐに見つかるわよ」

「おおっ！ それは頼もしいですなあ！ それじゃ——」

リーナに素直な賞賛を贈るしんのすけに、達也は手を伸ばして彼の発言を一旦制止させると、その鋭い視線をまっすぐリーナに向けて質問をぶつける。

「リーナ、そろそろ説明してくれないか？ 君達は何者だ？ なぜ親子だと偽って俺達と接触してきた？」

「——タツヤ、こっちからも言わせてもらうけど、あなたとミュキ違ってワタシと立場は大して変わらないのは分かっている？ 元々シンちゃんの友達ってわけでもないのに、どうしてそこまで気に掛けているの？」

達也とリーナの睨み合いに、深雪は固唾を呑んでそれを見守り、そして彼女の向かいに座るしんのすけは自分が話題の中心だというのに我関せずの態度でステーキを頬張っていた。

そして質問を質問で返された達也は、凶らずも虚を突かれた気分となった。確かにしんのすけと出会ってからの自分の行動は、普段の自分の性格から大きく逸脱している。彼は旅行先で初めて出会った人物と交友を深めるような性格ではないし、ましてや昼食を共にするなど一度として無い。

ほんの数秒の間だけではあるが、達也はリーナの質問について真剣に考え、

「……いくら初めて出会ったとはいえ、明らかに犯罪に巻き込まれているのを見過ごせるわけがないだろう」

初めてのケースだから普段と違う行動を取ったのだろう、という結論に達した。

「リーナの立場については、この場では一旦置いておこう。だったらせめて、あのホテルに関する情報は教えてくれないか？ 敵を知らなければ、こちらとしても対策を立てづらい」

達也の申し出に、リーナは迷う素振りを見せながらも口を開いた。

「……正直なところ、ワタシもスウィートボーイズという組織についてはよく知らないの。表向きはホテル事業をしていることくらい。そしてワタシ達は、あの組織から逃げ出したっていう1人の男の亡命を手助けしている」

「その男は何者だ？ なぜリーナ達が亡命を手助けする？」

「それについても、ワタシは聞かされていないわ」

「——使えないな」

「悪かったわね！ 所詮ワタシはただの『候補生』よ！」

「候補生？」

ピクリと眉が動いた達也に、リーナは「あっ」と自分がしくじったことを悟った。

「その外見、言葉のイントネーションからして、出身地はUSNA辺り……。俺達と同じくらいの年齢で他国の亡命者に助力する任務に従事、しかし自分の立場は『候補生』……」

「……………」

「余計なお世話だろうが、リーナに軍は向いていないと思うぞ」

「うるさい！ というかそれだけで見当を付けたら、あなた本当に何者!?!」

勢いよく立ち上がった大声をあげたからか、さすがに周りの客が不審な目を向けてきた。リーナはハッと我に返って再び椅子に腰を下ろし、小声でも聞こえるよう身を乗り出す。

「ワ、ワタシのことよりもシンちゃんよ！ シンちゃん、さつきホテルでワタシ達を襲ってきた女性を知ってる素振りだったけど、もしかし

て知り合いなの?」

「ベージュおパンツのお姉さんのこと?」

「……あの、できれば別の呼び方にしてあげて」

リーナのお願いに深雪が顔を紅くして、達也が気まずそうに口を引き結んだ。

そんなことはお構いなしに、しんのすけは「うーん」と首を捻る。「と言われましてもなあ……、オラもよく憶えてないゾ。ずーっと昔のことだし」

「憶えてるだけの範囲で構わない」

「えーっと……、今夜は焼肉だつて父ちゃん達とはしゃいでたときに、よく分からないおじさんがいきなり家に入ってきて、そのおじさんを追い掛けてきたよく分からないおじさんがそのおじさんを捕まえて、後から来た方のよく分からないおじさんが何か出せって言ってきて、オラ達何のことだか全然分からないから家から逃げたんだゾ」

「凄いわね、まるで要領を得ないわ」

思わず真顔でツツコミを入れるリーナの正面で、達也が難しい顔をしながらも何とかしんのすけの言葉を解説し、

「……つまり先程の女性は、そのときの男の仲間だったということか?」

「おおつ、さすが達也くん! いやあ、あのときは大変だったゾ。指名手配されたせいで街のみんなが追い掛けてくるし、あのお姉さんとにかくしつこいし——」

「ちよつと待て。——指名手配?」

聞き捨てならない単語に、達也は思わずしんのすけの話を止めた。「そうそう。テレビのニュースでオラ達が凶悪犯だつて言われちゃつて、懸賞金も掛けられちゃつたからみんな目の色を変えちゃつて。ホント、あのときは大変でしたなあ」

「いや、さすがにそれは——」

「ホント、大変だったゾ……。アクション仮面にはハレンチ呼ばわりされるし、ななごお姉さんには嫌われるし……」

「ちよつとシンちゃん、大丈夫!? 何かトラウマ引き起こしてない!?!」

急にテーブルに突っ伏してしまったしんのすけと、そんな彼を宥めるリーナ。

そんな2人を余所に、達也と深雪は困惑顔を互いに見合わせていた。

「お兄様、さすがにこれは嘘か誇張の類では……？」

「とはいえ、彼にそんなことをする理由が無いが……」

『臨時ニュースです』

と、困惑する司波兄妹の耳に飛び込んできたのは、店の壁に設置されたテレビの音声だった。先程までは昼間によくやる過去のドラマの再放送だったのだが、突然画面が切り替わり、ニュースキャスターがたった今渡されたであろう原稿を片手に緊迫した表情を見せている。

『沖縄広域警察は先程、沖縄本島にて凶悪犯が逃走中との情報を発表しました。』

——犯人の名前は、野原しんのすけ、13歳。

容疑は「児童変態罪」であり、警察は犯人逮捕に協力した方に懸賞金1000万円を授与するとのことですよ』

「……………」

「……………」

どこで手に入れたのか、証明写真のように真正面を向いたしんのすけの画像をでかでかと映すテレビ画面を、啞然とした表情で見つめる達也と深雪。

「今はそのななこお姉さんって人もシンちゃんにメロメロなんでしょ？ なら大丈夫よ」

「そうかなあ。いやあ、照れますなあ」

そんなテレビと司波兄妹の様子にも気づかず、懸命に励ましの言葉を掛け続けているリーナと、すっかり調子を取り戻したしんのすけ。

「……………」

そして満席になるほどに大勢の客が入っているにも拘わらず、誰一

人言葉を発することなく全員が（ウエイターでさえも）しんのすけの座るテーブルに目を向けている店内。

「あれっ？　なんでお店の中、こんなに静かなの？」

そんな静寂は、1人の客の呼び掛けによって壊された。

「――凶悪犯がここにいるぞお！」

*

*

*

『それにしてもこの歳で指名手配とは、凶悪犯罪の低年齢化が叫ばれますね』

『詳しいことは逮捕してからになりますが、やはりこのような凶悪犯が生まれる背景には社会や政治に対する不満が背景にあると――』

恩納瀬良垣にある司波家の別荘のリビングにあるテレビからは、先程流れた速報ニュースに対してコメンテーターがそれらしい表情でそれっぽいいことを話していた。

「……………」

「……………」

そしてそれを正面のソファ―に座る深夜^み、そして彼女の紅茶を用意していた桜井が無言で覗いていた。深夜は優雅な微笑みを携えているが先程からまったく表情が動いておらず、まるで仮面のような不自然さに桜井が緊張の面持ちで彼女を盗み見ている。

リビングにテレビの音声だけが流れる中、ようやく深夜が口を開いた。

「――穂波さん、貢さんに電話を繋いでちょうだい」

「畏まりました」

深夜の命令を最初から予測していたかのように、桜井は即座に返事をして自身の携帯端末を取り出した。

その最中にも、深夜は口元に指を添えて考えに耽る。

そしてポツリと、こんな言葉を漏らした。

「――まさか、〃物語〃が動き出したというの？」

* * *

「クソツ！ どこに逃げやがった!？」

「まだ遠くには行っていないはずだ！ とにかく探せ！」

「俺の1000万はどこだあ！」

通りを縦横無尽に走り回る人々を見下ろしていた達也が、小さく胸を撫で下ろしてその頭を引っ込めた。

達也たちがいるのは、先程のステークハウスも属する商業地区にある小規模なショッピングモールの屋上。変圧器や水道タンクくらいしか無く一般客は立入禁止となっているそこで、つい先程まで走っていた影響で荒くなった呼吸を整えている。特に女子の深雪とリーナは、大きく肩を上下させているほどに辛そうだ。

「いやあ、大変なことになりましたなあ」

そして渦中の人物であるはずのしんのすけが、まるで他人事のような口調でそう言った。達也たちと同じくらい走っているはずなのだが、その元気な姿はまったく疲れを感じさせない。

「リーナ、スウィートボーイズの連中は地元警察を牛耳られるほどの力を持っているのか？」

「そ、そんなの聞いてないわよ！ っていうか、何なのあのニュース！ 訳分かんない罪状で指名手配とか、誰も不思議に感じないの!？」

「方法はともかく、奴らはそれだけ野原くんを捕獲したいようだな……。野原くん、前回も同じようなことがあったみたいだが、そのときはどんな目的だったんだ？」

達也の質問に、しんのすけは「うーん」と考え込む素振りを見せる。そうして悩むこと、およそ10秒。

「——あっ！」

突然大声をあげたしんのすけに、達也が若干驚きながらも身構えた。

「何か思い出したか、野原くん?」

「オラ達、さっきのステークのお金払ってないゾ！」

そして彼の口から飛び出した言葉に、達也は途端に体の力が抜け

た。

「……そんなこと今はどうでも良いから、奴らの目的に心当たりは？」

「いやあ、全然憶えてないゾ」

「……まあ良い。とにかく早いところ、ここを離れる必要があるな」

「ですがお兄様、ここを離れたとして、どこに行くのですか？ 私達の

家は、というよりもお母様が受け入れてくれるかどうか……」

「あら、それならワタシ達がシンちゃんを匿ってあげるから——」

「ここぞとばかりにリーナが会話に割り込んで自分を売り込もうとするが、それは達也が彼女の前に掌を差し出してきたことで中断された。

リーナが不満を口にしようとするが、達也の視線は彼女とは別方向に固定されていた。

この屋上に唯一繋がる、出入口のドアへと。

「誰か来る」

「——！」

達也の言葉に、深雪とリーナの間に緊張が走る。しんのすけは、そのままだった。

4人は水道タンクの傍に移動して身を潜め、僅かに顔を覗かせてドアに注目する。

少し経ち、ドアがギイと軋む音をたてて開けられた。しかし開けたはずの人物の姿は見られず、そこから更に数秒ほど間隔が空けられる。

そうしてようやく姿を現したのは、1人の中年男性だった。その体はよく鍛えられており、そして見る者が見ればスポーツの類で身に付いた筋肉でないことが分かるものだった。それを裏付けるように、彼の顔は日焼けや火薬焼けによってなめし皮のようになっている。

しかし達也がそれ以上に気になったのは、彼が身に着けている軍服だった。

「ここに居る者達に告げる。私は国防陸軍大尉、はるのぶ風間玄信という。訳あって、所属についてはご勘弁願いたい」

「おっ？ 風間？」

その中年男性——風間の名乗りにも、なぜかしんのすけが真っ先に反応した。

第1100話 「沖縄の脱出劇だゾ」

「我々国防軍は、野原しんのすけくんの保護を目的として動いている。まずは話だけでも聞いてくれないだろうか？」

小規模なショツピングモールの屋上（関係者以外立入禁止）に突如現れた、国防陸軍大尉を名乗る風間玄信はるのぶの呼び掛けに、水道タンクの陰に身を潜める達也たちが互いに目を見合わせた。どうするの達也くん、という無言の問い掛けをしんのすけから感じた達也が、ザツと周りに目を向ける。

ショツピングモールは3階建てであり、この辺りは意図的に建物が低く制限されているのか、視界を遮るような建物は見当たらない。つまりそれは身を潜める場所が存在していないことを意味しており、少なくとも現在自分達を直接見張っているのは風間以外いないと結論付けて良いだろう。

しかし屋上唯一の出入口である扉は、現在風間が陣取ってしまった。彼は無害を主張する呼び掛けをしてはいるが、達也の目から見てもその所作に隙が見受けられない。不意を突いてその扉から脱出するという手段は取れないだろう。

柵を飛び越えて地上に逃げるといふ手段も無くはないが、実戦的な訓練を受けている達也（とおそらくリーナ）、そして豊富な魔法を取り揃える深雪は無傷で着地できても、しんのすけを連れていくとなるとどうしても隙ができるし、その隙を風間が見逃すとも思えない。

「……言われた通り、話だけでも聞くとしよう」

小さく溜息を吐いて答えた達也に、しんのすけは「ほーい」とお気楽な返事を添えて、深雪とリーナは緊張した面持ちを添えて水道タンクの陰から姿を現した。

「改めて、国防陸軍大尉、風間玄信だ」

「どもども。春日部防衛隊コンビニ隊長、野原しんのすけです」

「コンビニ隊長？」

思わずリーナが漏らした疑問の声は他の面々にとつても同じだったが、風間は小さく咳払いしてしんのすけに向き直った。

「知ってる通り、今この周辺は野原くんを巡って大混乱に陥っている。おそらく警察も機能していないだろう。よって我々国防軍が野原くんの身柄を保護し、事態の解決を図ろうと考えている」

「国防軍が警察と同じように操られていないという保証はありますか？」

横から割り込む形となった達也に対し、風間は特に不快感を示すことなく答える。

「明確な証拠を示すことはできない。しかし今こうして身柄を拘束しようと思わず穏便に話し合おうとしていることが証明にはならないか？」

「なりませんね。そういった作戦かもしれません」

「確かに」

風間が小さく頷いて一旦会話を途切れさせたことで、今度は達也が質問するターンに入った。

「現在国防軍がこの件に関して掴んでいる情報を開示してもらえれば、こちらとしても判断する材料にはなるかと」

「我々が虚偽の情報を与えるかもしれないぞ」

「聞いてからこちらで判断します」

「……君にはそれができると？」

「さあ、どうでしょう」

数メートルの間合いを空けて、鋭い目つきで互いを見つめる風間と達也。

達也の傍で、固唾を？んで2人の遣り取りを見守る深雪とリーナ。

そして暇そうにあくびをするしのすけ。

約1名この場の雰囲気になぐわれない者がいる気もするが、とりあえずそれには触れないことにして風間が口を開いた。

「我々としても調査を始めたばかりで、把握している情報に限りがある。野原くんが泊まっているホテルの者達が何やら怪しい動きをしていることは掴んでいるが、いったいどういう目的で野原くんを狙っているのかまでは分かっていない」

「警察を掌握した手段については？」

「それについても不明だ。元々賄賂か何かで繋がっていたと考えられなくもないが、だとしてもこのような荒唐無稽なやり方を押し通せるとは思えない。精神干渉魔法でも使ったと考えるのが自然なほどだが……」

風間が口にした「精神干渉魔法」に深雪がピクリと反応するが、風間がそれに気づいた様子は無い。しかし彼女の傍にいたリーナは何か感じ取ったかもしれない。

「成程、情報が少ないのは理解しました。——だとしたら、疑問が生じるのですが」

「何だ？」

「あなた方国防軍は、何故情報が少ない状況で野原くんの保護に動き出したのでしょうか？」

「……警察が示す罪状が、あまりにも荒唐無稽だからだ」

「ええ、確かにそうです。ですが、市民はそう思っていないようですね。野原くんの罪状と懸賞金が報道された途端、全員が目の色を変えて襲い掛かってきました」

「……成程、つまり？」

「仮にそのような魔法が使われたとして、自分達と市民との間に何かしら明確な差がある。そしてそれは、あなた方国防軍に対しても適用されている」

「……………」

「なぜ自分達は魔法の支配下に置かれなかったのか、何か心当たりはありますか？」

数メートルの間合いを空けて、鋭い目つきで互いを見つめる風間と達也。

達也の傍で、固唾を？んで2人の遣り取りを見守る深雪とリーナ。そして暇そうにあくびをするしんのすけと、そのすぐ傍をフワフワと浮くドローン。

「……………えっ、ドローン？」

ヘリコプターのようなプロペラが4つ搭載された、掌に乗るほどに

小さいサイズのドローンが、21世紀初頭の頃よりも格段に向上した静音性によつてほとんど音も無く空中に留まっていた。

あまりにも突然の乱入に、最初に発見したリーナだけでなく達也や深雪、更には風間までもがハツとした表情で向き直り、構えの姿勢を取る。

——いくら静かとはいえ、ここまで接近されて気づかなかつただと!?

達也が内心で自分のミスを信じられずにいる中、そのドローンの下底部に設置されていた長い金属製の筒が動き、まっすぐしんのすけへと向けられたところでピタツと止まる。

その金属製の筒は動きも相まって、まさしく機関銃の銃身のように見えた。

「——まずい！」

達也の脳裏に過ぎる『可能性』に、彼はほぼ反射的に叫びながらしんのすけへと迫った。戸惑うしんのすけの襟首を掴んで無理矢理後ろへと引っ張り、その反作用の力を利用するように代わりに自分がドローンの眼前へと躍り出る。

何かを察したリーナと深雪が口を開けて声をあげようとしたまさにそのとき、金属製の筒から弾丸が発射された。数発の弾丸がまっすぐ達也へと迫り、そして彼の額に命中する。

「——お兄様っ！」

深雪の悲痛な叫び声に、リーナが顔を青ざめる。風間が目を丸くして達也へと駆け寄り、しんのすけが尻餅を突いて「あふん」と変な声をあげる。

そんな中、額に弾丸を受けた達也はその衝撃で体を仰け反らせ——直後に地面を踏み締めてその場に留まった。

そして達也が僅かに右手を動かしてドローンのいる方へと掲げると、次の瞬間、ドローンはまるで一齐にネジが弾け飛んだかのようにバラバラに分解され、部品1つ1つが屋上の床へと落ちていった。

「お兄様、お怪我は!?」

「……ああ、大丈夫だ。痛みはあるが、怪我は無いな」

「普通の弾丸じゃなかった……ってこと？」

リーナが戸惑いの声をあげる中、風間が床に散らばった数多の部品の中からそれを拾い上げた。おそらく弾倉に相当する箇所収められていたであろう弾丸の正体は、

「これは……大豆だな。しかも生ではなく、煎^いつてある」

「煎った大豆？」

「おおっ。まるで節分ですな」

「セツブンって日本の行事よね？ 豆を投げて鬼を追い払うってヤツ」

「確かにそれならダメージが無いのにも納得ですが……なんで大豆？」

深雪の疑問に、その場にいる全員が一斉に首を傾げる。

しかし、その疑問を追及する時間は残念ながら貰えなかった。

「何かいっばい来たゾ」

しんのすけが指差す先、周りの建物がほとんど見えない南国特有のスッキリした青空に、先程達也が破壊した物と同型のドローンが大群となって飛んでいた。ザツと数えて幾十にもなるであろうその光景は、まさしく群れで行動する虫か鳥のようである。

その例えに則るなら、一斉に向けられているカメラはさながらトンボのような複眼といったところか。

だとしたら、1機残らずこちらに向けられた銃身は、何に例えられるだろうか。

「逃げろ〜！」

「えっ、ちよっ——」

「しまったー！」

風間が達也の傍まで移動したことで空いた扉に向かってしんのすけが走り出し、リーナ達が一瞬遅れてそれに続く。そして深雪と達也と一緒に走り出した辺りで、風間が自分の犯した失態に気づいた。

先頭のしんのすけが扉を潜り、階段を数段飛ばしで駆け下りていく。踊り場でUターンして再び駆け下りていき、関係者以外立入禁止の看板を通り過ぎて3階のフロアに下り立つと、私服姿ながら屈強な

体つきをした男達が一斉にこちらを振り返り、そして一様に驚いた表情を見せる。

「――なぜ対象が1人で!？」

「大尉はどうした!？」

「どうする!?! 俺達で止めるか!?!」

「おっ? おっ?」

おそらく風間の部下であろう彼らが戸惑いの表情を見せ、しかしほぼ一瞬で真剣なそれへと切り替えてしんのすけへと1歩足を踏み出した瞬間、

「ドローンの大群がモール内に侵入!」

誰かの報告を兼ねた注意喚起が合図だったかのように、下の階段から、エスカレーターから、スタッフ専用通路の扉から先程と同じドローンが一斉にフロアに飛び込んできた。

初めてそれを見た男達が構える中、それらドローンに取り付けられた銃身から（大豆の）弾丸が発射される。

「うわっ! 何だこれ!」

「痛てえ! けど怪我は無え!」

「でも単純にウゼェ!」

雨どころか豪雨とも言えるほどの勢いで一斉射撃される大豆の猛攻撃に、男達が苦悶の表情を浮かべた。ダメージこそ少ないものの彼らの言う通り動きを制限するには充分であり、腕で顔などを庇ったりその場から動くことすら儘ならない状況となっている。

そうして男達を攻撃するドローンもいれば、しんのすけに銃口を向けるドローンもいる。

「おっとおっ!」

だがしんのすけは全方位からの大豆の豪雨に対し、まるで全身に目でも付いているのかと思うほどの反射神経で避けた。まるでコンニャクか何かのように体をグネグネと不規則にうねらせるその様は、おおよそ人間の為せる動きとはかけ離れた不気味さを思わせるほどだ。

と、数秒ほど避けていると、しんのすけの周辺を飛ぶドローンだけ

が突然部品ごとにバラバラになってその場に崩れ落ちていく。

「野原くん！ 外まで走れ！」

「おおっ！ 達也くん！」

後ろから階段を下りて来た達也の呼び掛けにしんのすけが反応し、そして即座に言われた通りその場から走り出した。

「マズい！ 誰か彼を捕まえて——うわっ！」

中央のエスカレーターへと続く通路を走るしんのすけに男達が腕を伸ばそうとするが、ドローンの猛攻に阻まれてその場を動くことができない。そうして動けずにいる男達の脇を擦り抜けて、しんのすけはエスカレーターから下のフロアへと下りていった。

もちろんドローンの標的はしんのすけ、そしてその後を続く達也たちも含まれている。だがしんのすけを狙うドローンは達也の魔法によつてバラバラに分解され、そして達也・深雪・リーナの3人は自身を取り囲む魔法障壁によつて1粒の大豆も3人に届いていなかった。そうして国防軍とドローン両方の追撃を躲したり防いだりしながら、しんのすけと達也たちは1階へと辿り着いた。

「おおっ！ 出口が見えたゾ！」

シヨツピングモールの正面出入口を視界に捉えたしんのすけが喜びの声をあげるが、同時にその出入口の正面に1人の男が立っているのに気づいた。

まるで番人かのように立ち塞がるその男は黒い肌で大柄な体格で、薄手の布では隠しようもないほどに鍛えられた筋肉をしていた。

「また会ったな、ボウズ。まさかおまえが今回の保護対象者だとは——」

「おじさん誰？」

「少し前におまえに喧嘩を売ったばかりだろ！ もう忘れたのかよ！」

その男は、昼前にビーチでしんのすけ達に因縁を付けてきた「取り残された血統」の1人である桧垣だった。彼はしんのすけのお惚けに調子を崩されそうになりながらも、何とか持ち直して構えの姿勢を取る。

声にならない声をあげて苦痛の表情と脂汗を浮かべながら、松垣はその場に崩れ落ちていった。

そうして意識が薄れていく中、彼は思った。

出自とかそれ以前に、自分はまだまだ修行が足りなかったんだな、と。

「大丈夫か、野原くん！」

「ビューッ！ さすがねシンちゃん、一切容赦が無いわ！」

松垣が気絶した数秒後に駆けつけた達也が状況を確認し、リーナが興奮した様子でしんのすけを褒め称える。ちなみに深雪は目の前の光景に色々な意味でドン引きしていた。

しかし今は松垣に構ってる暇は無いと、4人は彼を素通りして外の駐車場へと飛び出した。カー・シェアリングが浸透している地域の駐車場は個別駐車車の区画が狭くなり、代わりにロータリーを多く設置してコミューターを乗り降りする人々が多く見られるようになった。

なので4人を出迎えたのは、そんな買い物前・買い物終わりの家族連れだった。勢いよく飛び出した4人にギョツとした顔を向け、そしてその中の1人が先程テレビで報道された凶悪犯（懸賞金付き）であることを知るや、全員が目の色を変えて1歩足を踏み出した。

「凶悪犯がここにいるわよ！」

「何っ?! 俺の1000万がっ?!」

「いや、俺の1000万だ！」

「おおっ！ こんな所にも！」

一斉に襲い掛かって来る大勢の一般客に、しんのすけが驚きの声と共に足を止めた。

後ろにいる達也たちも構えの姿勢こそ取るものの、魔法師ではない人々に魔法を向けるべきか判断しかねていた。たとえ魔法師だろうと自分の身に危険が迫っていれば正当防衛が成立するが、警察ですら操られているこの状況ではそれも通じないだろう。

いや、だからこそ応戦すべきか、と達也の思考が一瞬危ない方向に行きかけた、そのとき、

ブ——ッ！

盛大なクラクションの音が辺りに鳴り響き、達也は咄嗟にそちらへと顔を向けた。自分達を捕えようとしていた人々もそちらへと顔を向け、そして一斉にギョツと目を丸くする。

猛スピードでこちらに突っ込んでくる黒塗りのワゴン車に、人々が慌てた様子で車の進路から跳び退いた。ワゴン車はアスファルトに転がる人々の横を掠めながらキュルキュルとタイヤを鳴らしてブレーキを掛け、ちょうど足を止めていたしんのすけの正面でピタリと停まる。

後部座席のドアが自動で開かれ、助手席の窓が下がっていく。

「早く乗ってください！」

「えっ?」

ワゴン車よりはベンツやリムジンの方がよほど似合いそうなお嬢様然とした少女の呼び掛けに、しんのすけはキョトンと首を傾げ、

「野原くん、彼女は味方だ！」

「ほっほーい！」

後ろからの達也の言葉に、しんのすけは勢いよく後部座席に飛び込んだ。

「達也さんたちも早く！」

「リーナ、乗るぞ」

「えっ——ちよっ！」

そしてしんのすけに続いて深雪、何か言いたげだった様子のリーナ、そして周りの人々を目で牽制しながら達也が乗り込むと、ドアが閉じ切るよりも前にワゴン車がキュルキュルとタイヤを鳴らして急加速で走り出した。

人々が残念そうに溜息を吐くのをバックに、ワゴン車はモールの駐車場を後にした。

「いやあ、助かったゾ」

3列あるシートの中で最後部のそれを丸々1つ占領して、しんのすけがゴロリと寝っ転がって大きく息を吐き出した。疲れた体を休め

るという意味もあるが、外から彼の姿を見られないようにするためもある。

「すまない亜夜子、手を煩わせてしまったな」

「いえいえ、達也さんが気にすることではありません。いつも我々がお世話になつていているんですもの、これくらいの手助けは当然ですわ」

2列目の端に座る達也が助手席に座る少女・亜夜子に礼を述べると、彼女はニツコリと優雅な笑みを添えてそれに答えた。その際、ほんの一瞬だけ深雪の方をチラリと見遣り、そして深雪は一瞬だけ不機嫌そうに唇を尖らせる仕草を見せた。

そうして亜夜子の視線は深雪から、彼女の隣で緊張を隠す余裕も無いほどに表情を固くしているリーナへと向けられ――

「んで、あんた誰？」

「これは申し訳ございません、自己紹介が遅れてしまいましたね。私、達也さんと深雪さんの再従妹はとこに当たります黒羽亜夜子と申します。お2人のご友人であるしんのすけ様の身に危険が迫っていると知り、こうして馳せ参じた次第です」

「ほーほー。んで、今からどこに行くの？」

「それは行ってみてのお楽しみということで。もちろん、悪いようには致しませんわ。――そちらのアンジェリーナⅡクドウⅡシールズさんも、そんなに緊張なさらないでください」

「……………」

亜夜子の言葉に、リーナは口を固く引き結んだまま返事をしなかった。

そして彼女の言葉はリーナだけでなく、達也の表情にも変化をもたらす。

「亜夜子達がこうして来たのは、母上の差し金か？ 母上はどこまで把握している？」

「それも含めて、これから話し合うことになります」

「……………分かった」

亜夜子の返答に何かを感じ取ったのか、達也はそれ以上何も訊かなかった。そんな彼に深雪が慮るような視線を向けようとし、助手席か

ら何やら視線を感じて直前で踏み留まる。

若干の重苦しい雰囲気に包まれながら、ワゴン車は街頭カメラが設置されていない道路を選んで走っていく。

「ねえねえ、おトイレ行きたいんだけど」

「……シンちゃん、少しは空気を読んで」

*

*

*

「保護対象は？」

「はっ！ 突然乱入したワゴン車に乗り込み、そのまま離脱しました！ 現在A班とB班で、その行方を追っています！」

「分かった。A班とB班はそのまま、それ以外は先程のドローンの出所を探れ」

「はっ！」

モールから外に出た風間が部下からの報告を受け、そして指示を受けた部下が敬礼して走り去っていく。

小さく溜息を吐く風間だったが、その表情は任務に失敗したにしては悲壮感の類が見られない。

それよりも彼の関心を占めていたのは、先程のモール内での出来事についてだった。

「あの魔法障壁は、おそらく黒髪の少女だな……。あの歳で多くの敵に囲まれて走りながら、自身を起点とした障壁魔法をあれほど正確に維持できるとは……。少年が使う魔法は見たことも無いが、状況判断のスピードと的確さは目を見張るものがあるな……」

顎に手を当てて考えに耽るその様子は、何かを値踏みしているようにも見えた。

*

*

*

道中2回ほど車と運転手を入れ替えながら亜夜子達がやって来たのは、数多くのクルーザーや高級帆船などが停泊するマリーナだっ

た。シヨッピングモールほどではないが観光客もそれなりに見られる場所であり、指名手配されているしんのすけが来るのは不都合だと思われたが、この人々はニュースを見ていないのか特に反応は無かった。

そうして亜夜子の先導でしんのすけ達4人が連れられたのは、1艘のクルーザーだった。一般的なファミリータイプよりも大きいそれは、船酔いを防ぐためにスタビライザーと揺動吸収システムが搭載され、さらには空気抵抗や過剰な光線をカットするために甲板全体が流線型の透明なドームで覆われている。

当然それだけの機能を備えるだけあって、かなりの高価格だと思われる。しかし亜夜子も達也も深雪も慣れたものだし、リーナも達也の家族がそれだけの財力を持つことに内心驚きはしたものの、クルーザー自体に対する物珍しさといった反応は無い。

「おおっ！ 豪華なお船だゾ！」

だがしんのすけだけは、目の前のクルーザーに対して素直な興奮を露わにしていた。あれだけ豪華なホテルに泊まっているのに、と達也たちは一瞬疑問に感じ、そういうえば福引の景品で宿泊券を貰ったのだったと思い出して納得した。

「こちらのクルーザーにて奥様がお待ちです。沖縄の海を遊覧しながら、ゆっくりと今後について話しましょう」

にこやかに案内する亜夜子の言葉に、リーナが改めて緊張感を覚えた。逃げ場の無い海のご真ん中に連れて行かれることを意味しているからである。

そうして皆がクルーザーに乗り込もうとした、まさにそのとき、
「あら、やっと到着したみたいね」

呑気にも聞こえる声色で独りごちるようにそう言いながらクルーザーのデッキに姿を現したのは、達也・深雪の母親にしてこのクルーザーの所有者でもある深夜^{みや}だった。真夏の炎天下ではあるが透明なドームの中にいるからか、ほとんど黒に近い色合いのロングドレスを身に纏う彼女は、異性を妖しく惹きつけずにおかない妖艶な魅力と、思春期の少女を連想させるような可愛らしさという相反した印象を

同居させている。実年齢は40歳を超えているはずなのに、どう上に見積もっても三十代前半くらいにしか見えない。

あまりの美貌に、リーナは自分の境遇も忘れて思わず彼女に見惚れていたほどだ。そして我に返ってすぐに、しんのすけの反応が気になって彼へと視線を向けた。ビーチで水着の美人な女性をナンパしていた彼のことだ、即座に彼女に対して誘い文句の1つや2つは並べ立てるに違いない。

しかしリーナの、そして同じことを考えていた司波兄妹の予想に反して、しんのすけは彼女に見惚れる様子は無かった。

むしろ、キョトンとした顔で首を傾げていた。

「あれっ？　なんでこんな所にいるの——ミヤちゃん？」

「——はっ？」

「久しぶりね、しんちゃん。まさかこんな所で会うなんて思わなかったわ」

「——はっ？」

しんのすけの、そして深夜の遣り取りに、達也の口から漏れたのは困惑の声だった。

第199話 『今明かされる衝撃の事実だゾ』

クルーザーとは船種の定義として明確な区分があるわけではなく、サロンクルーザー・メガヨット・ギガヨットと呼ばれるタイプの総称とされている。一般的には25フィート以上の船舶で、サロンまたはラウンジ、トイレ、キッチン（ギャレー）、ベッドルーム、シャワーなどといった居住空間と居住設備のあるレジャー用のそれを指す場合が多い。

そして深夜みやの乗るクルーザーはザツと見積もっても40フィートから50フィートはあり、内装はそれこそ都内の高級ホテルにも見劣りしない立派なテーブルやソファが置かれ、先述の居住設備は一通り揃えられている。

「……………」

彼らが座るのは、中央のテーブルを囲むようにCの形をした豪華なソファ。通常の直線型と違って明確に顔を突き合わせるタイプではないが、今は彼らの精神状態を表すかののように、達也・深雪・リーナと深夜・しんのすけとのグループ間に若干の距離が空いている。

ちなみに桜井はバーカウンター越しのキッチンにいて、客人であるしんのすけ達の飲み物などを用意している。そして彼らをここまで連れて来た亜夜子は、全員がクルーザーに乗って出港するのをマリナーから見送ったため姿は無い。

「間に合わせて申し訳ないけど、良かったらどうぞ」

「おおつ、チョコビだ！ 行ってきまーす！」

市販のパッケージそのままではなく、わざわざ洒落たガラス製の大きな容器に入れて桜井が持って来たチョコビの山に、しんのすけは目を輝かせてそれに手を伸ばした。

「それと飲み物をどうぞ。――まずは、しんちゃんのプスライト」

「どもども〜」

「奥様は、こちらのシャンパンで宜しいでしょうか？」

「ええ、構わないわ」

「達也くんと深雪ちゃんは特に要望が無かったから、とりあえず麦茶

ね」

「……はい、ありがとうございます」

「お手数をお掛けします」

「いえいえ。——そちらのお嬢様は、本当に何もいららないのですか？」

「……ええ、ワタシは遠慮するわ」

桜井が（リーナを除く）それぞれの飲み物をテーブルに置いて、深夜の背後に控えた。

そうして話をする体勢が整ったものの、リーナは立場上迂闊に口を開くことはできず、達也と深雪も口を引き結んで出方を窺っている様子だった。深夜は微笑を浮かべるのみで口を開かず、しんのすけはチョコビをポリポリと頬張っている。

やがて小さく溜息を吐いた達也が、最終的に口火を切る運びとなった。

「……野原くんは、母と知り合いだったのか？」

「うん、そうだよ。っていうか、ミヤちゃんに子供がいただなんてビックリだよ！　そもそも結婚してることすら知らなかったし！　——ねえねえ、ミヤちゃんの旦那さんってどんな人？」

「別に、取るに足らない男だったわ。もう離婚してるし」

吐き捨てるようにそう言い放つ深夜に、しんのすけは「ほうほう」と頷いた。自分から訊いておきながら、彼も深夜の夫に対する興味は薄そうだった。

その証拠に彼はそれ以上何も訊かず、深夜と深雪の間で視線を行ったり来たりさせる。

「でも確かにこう見ると、深雪ちゃん、出会った頃のミヤちゃんにソツクリですな！」

「えっ？　お母様と出会った頃？　でもそれって——」

「ああ、深雪には話してなかったな。野原くんは春日部出身で、例の現象に巻き込まれた影響で歳を取らない時期が長かったんだ。——もっとも、それが中学生の頃の母上と面識がある理由にはならないのですが……」

言葉を紡ぎながら、達也の視線は深夜へと向けられる。

そして深夜はそんな彼に対し、優雅に微笑んでシャンパンを口にす
る。

「普通に考えて、母上が見ず知らずの野原くんを助ける義理はありま
せん。しかし亜夜子達まで動かしてこうして野原くんを保護したと
いうことは、それだけ彼に対する義理が存在することになります」

「……聞きたいかしら?」
「ぜひとも」

達也の力強い返事に、深夜は「そうねえ……」と言つて視線を逸ら
す。

いや、先程から顔を青くして全身で緊張を露わにするリーナに視線
を向ける。その瞬間、リーナの体がビクンと跳ねた。

「彼女は何者なのかしら?」

「詳しいことは本人からも聞いていませんが、おそらくUSNA軍の
魔法師部隊 “スターズ” の隊員候補生と思われます」

あつさりと彼女の正体を口にする達也にリーナが思わず「ちよつ
……!」と口を挟みかけ、すぐに深夜の面前であることを思い出して
口を閉ざす。

「ああ、確か “スターライト” だったかしら? どうしてそんな人間
が日本にいるのか、そしてしんちゃんに近づいたのか、それについて
は聞いているかしら?」

「日本に来た目的については、野原くんが泊まるホテルの運営会社で
ある “スウィートボーイズ” から逃げ出した1人の男の亡命を手助
けするためだそうです。それがなぜ野原くんと接触することに繋
がるのか、それに関してはまだ聞いていません」

「成程。——で、どうしてなのかしら?」
まつすぐこちらの目を見つめて尋ねる深夜に、リーナは思わず逃げ
るように視線を逸らした。

しかし深夜は彼女の態度に機嫌を損ねるところか、クスクスと楽し
そうに笑みを漏らす。

「あらあら、随分と怖がられてるわね。それじゃ、訊き方を変えましょ
うか。——あなたが彼に近づいたのは、彼を助けるためかしら? そ

れとも、彼を害するためかしら?」

「……私は、彼の身の安全を守るため、と聞いています」

「つまり、詳しいことは何も聞いていないと?」

深夜の問い掛けに、リーナはコクリと小さく頷くことで答えた。誰一人味方がおらず敵に囲まれ、しかも周りは海で逃げ出す方法も無いという状況を考えれば、まともに会話が成立するだけでも褒められたものだろう。

深夜は少しの間考える素振りを見せ、そして再び口を開き――

「ミヤちゃん、さつきから何だか怖いゾ。リーナちゃん、怖がつてるじゃない」

と、ボリボリとチョコビを咀嚼して炭酸飲料で胃の中に流し込んでいたしんのすけが、ふいに会話に割り込んで深夜に苦言を呈してきた。

深夜の視線が、リーナからしんのすけへと移る。

その瞬間、ジワリと醸し出されていた剣呑な雰囲気が一瞬と消えた。

「ごめんなさい。初めて会った子だから、つい警戒しちゃって」

「んもう、人見知りの性格は相変わらずですなあ。リーナちゃんはここに来るまでに、何度も変な人達からオラを助けてくれたんだゾ。そんなに心配しなくてもダイジョーブだって」

「そうね。しんちゃんがそう言うのなら、信じることにしましょう」
「えっ!?!」

深夜がそう発言した途端、達也が微かに、そして深雪が露骨に驚きの表情を浮かべた。特に深雪など、思わず声をあげてしまったほどである。

「深雪さん、何をそんなに驚いてるのかしら?」

「い、いえ、その……。随分とあっさり信じるなと思ひまして……」

「信じる、とは少し違うかもしれないけれど……。まあ、彼がそう言うのならそうなんでしょう」

「はあ……」

深夜の答えに、深雪は要領を得ないといった感じに首を傾げた。達

也も変化に乏しいながらも眉を寄せて怪訝そうな表情を見せているが、口を挟む様子は無い。

それを確認してから、深夜は仕切り直しとばかりに手をパンと叩いた。

「さてと、それじゃ私としんちゃんがどうやって出会ったかについてだけ」

頭の中で文章を組み立てているのか虚空に視線を遣って話す深夜に、達也も深雪も、そして先程まで精神的に追い詰められていたり―ナも興味津々な様子で身を乗り出す。

「といっても、私がしんちゃんと直接的に何かあったわけではないよね。私が初めてしんちゃんと顔を合わせたのは日本の本邸だったし、そのときには何もかも終わった後だったから」

「そうそう。日本に戻ったときにお礼がしたいって言われて、お家ウチにお呼ばれたときにミヤちゃんと初めて会ったんだゾ」

「それが、お母様が今の私と同じ中学生くらいだったときってこと？」
深雪の問いに「そうそう」としんのすけが頷いたところで、達也がハツとした表情になって彼へと身を乗り出した。

「野原くん。その『お礼がしたいから』っていうのは、どういう意味だ？」

「ええつと、ミヤちゃんの妹の『マヤちゃん』が変な人に誘拐されて、それを偶々オラが助けたんだゾ。その後も色々大変だったんだけど、あちこち逃げ回ってる内にどうにかなって、何とか日本に帰って来られたんだゾ。いやあ、あのときは大変でしたなあ」

『日本に帰って来られた』ってことは、それまで海外にいたってことだな。どこだ？」

「ええつと……。ミヤちゃん、あのときの中国って何て呼ばれてたんだっけ？」

「――↓」

直接的な答えではなかったが、それだけで達也の中で1つの確信が生まれた。

「……大漢だいかんか」

「おおつ、確かそんな名前だった気がするゾ。よく知ってるね」

「本当、私の息子は優秀ね。——今は存在しない国のことも、すぐに思い出せるんだから」

第三次世界大戦が勃発して早々、東アジア大陸国家（中国がビルマ北部・ベトナム北部・ラオス北部・朝鮮半島を征服してできた国）が分裂した。北部は大亜細亜連合、南部は大漢を名乗り、中華統一を懸けて激しく対立していた。

物量では大亜連合に分があつたが、この地域で大戦前より魔法開発をしてきた崑崙方院こんろんほういんが大漢側についたことで軍事的には拮抗していた。しかし大戦末期、その崑崙方院が突如壊滅する事件が発生、それにより軍事力の中核を失った大漢はたちまち崩壊、最終的に大亜連合に併合されることで決着がついた。

崑崙方院が壊滅した原因については、今もなお詳しい事実は分かっていない。しかし崑崙方院では前々から内部で激しい権力争いが行われており、その激化による自滅との見方が有力視されている。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待って！」

と、ここでリーナが大声をあげて会話に割り込んできた。

「ミヤ、マヤ、中学生、大漢——」

「どうしたの、リーナちゃん？」

「シンちゃん。まさかとは思うけど、そのミヤって人の苗字って……」

「え？ “四葉” だけど、それがどうかした？」

「——！」

リーナはあまりのショックに、一瞬意識が揺らぐ心地がした。先程まで精神的に追い詰められていたとき以上に、彼女の顔色は悪い。

「ミヤ・ヨツバ……！ まさかあなた、忘却レテ・ミスの川の支配者トレス” なの……

!？」

「あら、私のことを知ってるの？ 活動してた時期は、随分と昔だったはずだけど」

「あなたのことは、今でもUSNA軍の中では語り草となってるわ。……まさか、まだ生きていたなんて思いもしなかったけど」

「死んだなんて、誰も言っていないわよ」

おどけた様子でそう答える深夜に、リーナは顔が歪んで笑みにも見える表情を達也と深雪へと向けた。

「あなた達、只者ではないとは思ってたけど、まさか四葉家の人間とはね……」

達也は軽く肩を竦めるに留め、深雪は逃げるように目を伏せる。どちらも四葉家であることに對する自負といったものは見られないが、四葉家の評判などを考えればそのような反応も無理ないかとリーナは納得する。

「あれ？　そういえば達也くんと深雪ちゃん、最初に自己紹介したとき別の苗字じゃなかった？」

「ああ、離婚したことを周りには公表してなくてな、対外的には父親の苗字を使ってるんだ」

「ほうほう、大変ですなあ」

いや、そんなことよりも、今は四葉家と野原しんのすけとの繋がりについてだ。USNAですら把握してなかった彼の協力者がいただけでも大ニュースだというのに、それがかの悪名高き四葉家ともなれば世界がひっくり返るだろう。

なぜなら四葉家こそが、世間一般では権力争いの末の自滅と言われる崑崙方院を壊滅に追いやった「首謀者」なのだから。

それは2062年4月のこと。

当時の台北タイペイにて行われた「マギクラフトチルドレン少年少女魔法師交流会」にて、当時12歳だった四葉家の次女・四葉真夜まよが誘拐される事件が発生した。彼女は事件から数日後に崑崙方院の支部研究所にて発見、救助されたが、彼女はそこで人道に反する実験の被験体としての扱いを受けていたという。

崑崙方院が壊滅を始めたのは、それからだった。国中に散らばっていた支部が1つ1つ、蓄積された研究成果ごと徹底的に破壊された。当時関わっていた研究員達は揃って凄惨な目に遭い、軍政府関係機関が入居しているビルに戦闘機が突っ込むなど閣僚や官僚すらも当事者となる大惨事へと発展していった。

そうして誘拐事件からおよそ半年後、最後に残った本部も落ち、中

華大陸における現代魔法の研究成果が全て破壊し尽されたのである。

正確に述べるなら、四葉家が一国を崩壊させたテロ事件の首謀者だと断定されたわけではない。しかし当時の事情、そして事件現場周辺にて四葉家の者と思われる人物に関する記録が多く残されていたことから、今もなお最有力容疑者として疑われている。

そしてそれ以来、四葉家は「ア触れてはタツならない者達チャ」と呼ばれ恐れられるようになった。

四葉に手を出せば破滅する、という戒めを込めて。

「——ん？」

と、ここまで考えを巡らせたところで、リーナの口から疑問の音が漏れた。

「シンちゃんが四葉真夜を助けたって、さつき言ってたわよね？　と
いうことは、四葉家が崑崙方院に乗り込んだとき、シンちゃんも一緒
だったってこと？」

「ううん、違うゾ。マヤちゃん以外の四葉の人達と初めて会ったの、日
本に帰る直前だもん」

「えっ？　それじゃシンちゃんは四葉真夜と一緒に崑崙方院の研究所
に連れていかれて、自力でそこから脱出したってこと？」

「その回鍋肉院ホイコーローインとかいうのに捕まったことは無いゾ。鬼ごっこで逃げ
るのは得意ですからな！」

「崑崙方院ね。——えっ？　ちよっと待って」

頭の中が混乱してきたらしいリーナがしんのすけに掌を差し出し
ながら、こめかみにもう片方の手の指を当てて考えを整理する。

「つまり四葉真夜は、研究所に連れていかれてない？」

「だってオラが助けたもん」

「ってことは彼女はシンちゃんと一緒に逃げていて、でもそれを知ら
なかった四葉家が報復として崑崙方院を襲撃して壊滅させた？」

「いいえ、早々に真夜の無事は確認していたわ。でも2人の動きが激
しくて、なかなか合流できなかつたの。運良く近づけても何かしら起
こってまた離れ離れ、の繰り返しでね」

「いやあ、元造おじさん達もアイツらの仲間かと思って、だから頑張っ

て逃げてたんだゾ。味方なら味方って初めから言えば良いのに」

「父の話だと、結構激しく主張してたみたいだけど」

しんのすけと深夜との会話が、何やら思い出話のような雰囲気になっていく。

しかしそれは、リーナによる問い掛けによって阻止された。

「えっ？ それだと、四葉家が崑崙方院に報復する理由が無いんじゃない？」

「どうしてそう思うのかしら？ 仮にも当主の娘が誘拐されたのよ？

いくら無事だったとはいえ、ハイそうですかですかで許せると思う？」

「確かにそうかもしれないけど、だからって徹底的に滅亡させようとは思わないわ。崑崙方院を相手にするということは、すなわち一国をそのまま相手取るのと一緒よ。いくら四葉家の戦力が高いからといって、さすがに一国を相手に無傷で済むなんて思えない」

「でも実際には、大漢に行った者全員がそっくりそのまま日本に帰ってきた。——達也さん、そうよね？」

「はい、その一件で四葉家の誰かが犠牲になったという話は聞きませ——」

深夜からの突然の質問にもタイムラグ無しで答えていた達也が、プツリとその発言を途切れさせた。不思議に感じた深雪が彼へと視線を向け、そして驚愕する。

今の達也の表情は、普段から冷静沈着な彼らしくない、愕然という感情がピツタリなほどに驚きを露わにしていたからである。

「ど、どうしたの、タツヤ？」

「お兄様？」

「達也さん、何かに気づいたようね。聞かせてもらえるかしら？」

戸惑うリーナと深雪、そしてなぜか楽しそうな様子の深夜に促されて、達也が恐る恐るといった感じで口を開く。

「まさかとは思いますが……。大漢崩壊は、四葉家によって引き起こされたものではない？」

「——！」

達也の「仮説」は、深雪に大きな衝撃を齎した。四葉の後継者候補

として育てられた深雪だからこそ、その衝撃は大きいといえる。

なぜなら達也が現在与えられている「ガーディアン守護者」というのは、そもそも四葉真夜の誘拐事件があつて作られたものだからだ。あのような「悲劇」を二度と繰り返さないために、絶対に裏切らない忠実なボディガードを必要としたのである。

なのでその元凶である「悲劇」自体が嘘だった、そしてそれに対する報復も四葉家の仕業ではなかったとなれば――

「では達也さん。仮にそうだとすれば、四葉家の人間は大漢で何をしていたのかしら?」

「……「真の首謀者」のサポート」

「具体的には?」

「……首謀者が自分達であると捏造するための裏工作」

「なぜ、それをする必要があると?」

「……その「真の首謀者」に恩義があり、自分達が泥を被つてでも守ろうとしたため」

「では、我々がそうまでして守ろうとした「真の首謀者」とは?」

深夜の問い掛けに達也は答えず、代わりに視線を「そちら」に向ける。

深雪が、リーナが、その後が続く。

その視線の先にいたのは、

「穂波ちゃん、チョコビとプスライトお代わり」

「そんなに食べると夕飯が入らなくなっちゃいますよ」

「ダイジョーブ! 育ち盛りですから!」

今まさにおやつと飲み物を桜井に催促している、しんのすけだった。

「えっ――! ちょ――」

リーナが体を跳ね上げるようにソファから立ち上がり、その際にガシャン! とテーブルに膝か脚をぶつけた。しかし彼女はそれに痛みを覚える余裕も無いのか、顔を引き攣らせてしんのすけを恐怖に染まった目で見つめている。

「おっ? どうしたの、リーナちゃん?」

「シンちゃんの『主人公補正』って、国1つ滅ぼすほどの力を秘めたの!？」　そ、そんなの、世界を救うも滅ぼすも思いのままじゃない!」
「大漢崩壊は、別に彼の意思で行われたことじゃないわ。ただ単に彼は自分に降り掛かる災難に対処しただけであって、その結果国が1つ滅んだだけよ」

「そんな『自宅に出たゴキブリを駆除するために自宅を全焼させました』みたいなことある!？」

「実際に起こったのだから仕方ないわ」

シレッツと言い放つてシャンパンを呷る深夜に、リーナは納得できないといった表情で口をパクパク開いたり閉じたりを繰り返した。とはいえこれ以上の問答に意味は無いと悟ったのかゆつくりとソファーに座り直し、そして今になって痛みを感じてきたのか膝の辺りを手で擦っている。

「リーナちゃん、大丈夫？　チョコビ食べる?」

「……ええ頂くわ、ありがとね」

ももそととチョコビを食べ始めるリーナを横目に、達也が深夜に問い掛ける。

「大漢崩壊の真相を知っているのは、四葉家の者だけですか?」

「四葉家の中でも当時の作戦に参加していた者、そしてその親族だけね。ただ親族とはいっても、私達より下の世代には話していないし、しんちゃんと四葉家の繋がりも知らないわ。黒羽家の文弥さんと亜夜子ちゃんは知ってるけど、それはあくまで『任務』の都合上例外的について感じね。——だから達也さんと深雪さんだけ仲間外れにしてたわけじゃないのは理解してちょうだい」

「……いえ、そこは別に気にしていませんが。つまり、四葉家以外でこれを知る者はいないと?」

「ええ、そうよ。——あの方々以外はね」

意味ありげな視線を向けるだけで最低限の単語に留めた深夜の台詞だが、達也はそれだけで誰のことを指すのか理解したようであり、特に訊き返すことはしなかった。

代わりに、別の疑問を口にする。

「それでは、なぜそれほどまで嚴重に秘匿されていることを、部外者であるリーナがいるこの場で話したのですか？」

「——！」
チヨコビをモソモソと咀嚼していたリーナが、自分の名前が出たことで咄嗟に口の中の物を飲み込んだ。

そして達也の質問に対し、深夜はニツコリと笑みを浮かべた。

その笑顔に、なぜかリーナは背筋に寒気が走る心地がした。

「答えは簡単。——彼女は既に、しんちゃんに『仲間』として認識されているからよ」

「へっ?」

「おっ?」

予想外の答えに素っ頓狂な声をあげるリーナと、自分の名前が出たことに（チヨコビをボリボリ食べながら）首を傾げるしんのすけ。

達也も深雪も反応できない空白の間を狙い撃つように、深夜がリーナに向けて発言を続ける。

「あなた、さつき『主人公補正』って発言したところを見るに、それなりにしんちゃんのことを知ってるのでしょうか？ だったらその能力が誰に対して、そしてどのように作用するかについても、それなりに知ってるはずよね?」

「それ、は——」

「私の経験則から言わせてもらうと、達也さんも深雪さんも、そしてあなたも、既に野原しんのすけを中心とした『物語』に組み込まれているわ。しかも彼からの信頼を得た『仲間役』としてね」

「ワ、ワタシはまだ彼と出会って数時間ほどしか——」

「時間は関係無いわ。既にあなたは私達と同じ、野原しんのすけの仲間なの。——そんな仲間が彼の不利益になる行動を取るはずが無いわよね? 仮にそんなことをしたら、まるであなたが彼の敵みみたいなもの」

「ひい——」

顔を青ざめて小さく悲鳴を漏らすリーナの態度は、完全に幽霊か怪物の類に出会ったときのそれだった。違いがあるとすれば、恐怖の対

象は目の前にいる深夜ではないというところか。

だが、その説明で納得できるのは、あくまで“主人公補正”という言葉だけである程度意思の疎通が取れる者だけであり、

「母上、さつきから何を言ってるのか俺達にも分かるように——」

『緊急連絡！ 本島方向より、所属不明のへりを確認！』

達也の声を遮るように船内に響いたのは、運転手による緊迫した声だった。

*

*

*

20世紀中盤にアメリカで開発され、ベトナム戦争などで活躍した汎用ヘリコプター、UH-1（愛称・ヒューイ）。日本でも長らく軍に正式採用されていた歴史があり、今でも多くの国で現役を続けている、おそらく“軍用ヘリ”と聞けば真っ先に思い浮かべるであろうほどに有名な機体だ。

そんなへりが現在、沖縄の海を見下ろして飛行していた。

「今度は逃がさないわよ。——野原しんのすけ」

鋭い目つきでボソリと呟く、1人の女性の運転によって。

ダブルセブン編

第99話「それぞれの新生活だゾ」

2062年某日。四葉家当主・四葉元造の娘、四葉真夜まやが誘拐された。

誘拐された場所は、台北たいぺい。時はまさに第三次世界大戦の真つ只中であり、この4月に中学生になったばかりである真夜が海外に渡航するなど通常は有り得ない。しかし彼女は国際魔法協会東アジア支部が主催する「マギクラフトチルドレン少年少女魔法師交流会」に参加するために、通常ならば訪れることのない海外を訪れていた。そしてその海外渡航には、当時彼女の婚約者とされた七草弘一も同行していた。

悲劇は、そこで起きた。

まさに交流会の真つ最中に武装集団が会場に突撃し、この場にいる子供達の中で最も（政治的な意味で）有力な四葉真夜を誘拐した。会場には警備として魔法師も配置されていたのだが、その被害は甚大なものだった。彼らの中に敵と内通していた者がいたのでは、と後に陰謀論めいた仮説が提唱されるが、その真相は誰にも分からない。

そしてこのとき、彼女の婚約者だった七草弘一も重傷を負った。誘拐犯との戦闘により右手と右脚に裂傷と骨折、そして右の眼球を失うという有様だった。

彼の安否も心配ではあるが、それ以上に真夜は自分のこれからのことが気掛かりで仕方がなかった。麻袋で頭を覆われ、両腕を手首の辺りで縛られ、男2人に両隣を挟まれたまま車の座席らしきものに座らされている彼女だが、耳は塞がれていないので周りの会話は聞き取ることができると。

そしてそこから推測する限り、自分がこれから向かうのは大漢だいかんの泉州こんろんほういんにある崑崙こんろんほういん方院であることが分かった。

大漢は中国の南半分が分離独立してできた国であり、北半分を有する大亜連合とは敵対関係にある。対馬が半年にわたって大亜連合に占領されていたこともあり、日本とは同盟国とまではいかなくても共

通の敵を持つ協力関係にあったはずだ。つまりこれは日本にとっては、或る種の「裏切り行為」にも見えるものだった。しかし何のことはない、ただ「敵の敵は味方」なんて単純なものではなかったというだけだ。

そして崑崙方院は大漢の組織であり、分裂前から大陸の魔法研究の中心的な存在だった。物量では大亜連合に圧倒的に劣る大漢が互角に渡り合えるのは、ひとえにここから生み出される軍事力によるものだ、というのが一般的な見方である。

そしてここは、四葉が属しており事実上の主である第四研究所とは別の意味で「悪い噂」の絶えない研究所だ。その噂は、特に女性にとっては正視に堪えない内容となっている。

それを思い出し、真夜の体がブルリと震えた。今自分の両脇に座る男達が、目的地に着いた途端にその牙を向けてくるかもしれない、という思いが、成熟しきっていないとはいえ自身の「女性」たる部分が悲鳴をあげて助けを求めるとような感覚を生み出す。

「あー、それにしても今回は随分と「当たり」じゃねえ?」

そんな中、自分の隣に座る男がふいにそんなことを口を開いた。

「へへっ、そうだな。まあ、俺としては少しガキすぎる気もするが、このルックスなら充分釣りが来るわ」

「やっぱ何も言わねえ死体じゃなくて、ちゃんと反応してくれる普通の人間の方が興奮するわあ」

「おいおい、どうせてめえは死体の方が興奮するんだろ?」

「何を言ってるんだ。今回は「人体実験」の一環なんだから? だったらちゃんと殺さずにやってやるよ。俺は分別のついたオトナなんだぜ?」

「『分別のついたオトナ』がレイプなんてしねえって!」

「はははっ! それを言うんじゃないよ!」

自分のすぐ傍で頭を疑うような会話を繰り返す彼らに、真夜の体が無意識に恐怖で小刻みに震え出す。

しかし男達にとって彼女の反応は、自分達の劣情を駆り立てるスパイスでしかなかった。

「おやおや、どうしたんだいお嬢ちゃん？ そんなにブルブル震えちゃって、寒いのかなあ？」

「そりゃいけねえなあ。だったら俺の体で暖めてやらなきゃなあ」

「ああ、俺もう駄目だ。我慢できねえわ。ここで始めても良くね？」

「おいおい、一応実験なんだからよ、ちゃんと実験室でやらなきゃ意味ねえだろ」

「どうせ向こうでもやるんだろ？ だったら別に構いやしねえって」

あまりにも身勝手な会話を交わす男達に、真夜は恐怖と怒りとおぞましさと悔しさに体を震わせた。麻袋に隠れた顔は涙に濡れ、奥歯にヒビが入るのではと思うほどに噛みしめる。しかし今の彼らは真夜のそんな反応すら可笑しいらしく、聞くに堪えないノイズを彼女に浴びせ掛ける。

そして彼らは一頻り笑った後、彼女の腕を引っ張ってむりやり自分達へと引き寄せた。

「大丈夫だよ、お嬢ちゃん。怖いのは最初だけで、すぐに何も考えられないように——」

ずどおん——！

「きゃあつ——！」

すぐ傍で爆発でも起こったかのような音と衝撃に、真夜はなす術も無く悲鳴をあげることしかできなかった。どうやら自分達が乗っていた車ごと横転したようで、彼女は体を強く叩きつけられながらも意識を失うことなく、それどころか頭を覆う麻袋や手首を縛る紐が都合良く緩まったことで、真夜はどうにかそれらを解いて視界と自由の身を取り戻した。

男達は全員頭から血を流して気絶しており、真夜はその隙に粉々に砕け散った窓から車の外へと脱出した。どうやらそこは幹線道路から数本裏に入ったビル街の細道のようなだが、それ以上に真夜は車の進路を塞ぐように道路に鎮座する“それ”に目を奪われた。

“それ”はとても大きな、電飾に彩られた巨大な看板だった。おそ

らく元々はすぐ傍にあるビルの屋上にも設置されていたのだろうが、車が通り掛かるタイミングで壊れて落ちてきたのだろう。それは看板が突き刺さっている道路に張り巡らされている無数のヒビからも推測できる。

そしてその看板の上には、ヒーローの登場シーンのように堂々とした佇まいで1人の子供が立っていた。

その子供は小学生にも満たないほどに幼く、綺麗に刈り揃えられた坊主頭と激太の眉毛が目を惹く男の子だった。真っ赤な半袖のシャツに黄色の半ズボンというシンプルな服装をしたその子供は、訝しげに仰ぎ見る真夜の視線に気づいたのか、ピクリと肩を跳ね上げてこちらへと視線を下ろした。

そしてその子供は、開口一番こう言い放った。

「アンタ誰？」

「へっ？　——わ、私は四葉真夜と申します。えっと、あなたは？」

「オラ？　オラは野原しんのすけ、5歳。ネギは嫌いだけど、納豆にはネギを入れるタイプ。しんちゃんって呼んでね」

「あ、えっと、よろしくお願いします……」

同年代との交流がそれほど多くないとはいえ、明らかに今まで出会った中で類似性が見当たらない目の前の子供——野原しんのすけに、真夜は挨拶しながらも戸惑わずにはいられなかった。

「んで、マヤちゃんはなんでこんな所にいるの？　迷子？」

「えっと、私はその、その車にいる奴らに連れ去られそうになって——」

「おおっ、マヤちゃんも？　それは土偶ですなあ」

「それを言うなら奇遇では？　——というか、マヤちゃんも？」

何とも聞き捨てならない台詞を口にするしんのすけに真夜が尋ねようとして——

「やっと見つけたぞ、ジャガイモ小僧！　我々と一緒に来てもらおうか！」

その瞬間、そう叫びながらビルの屋上から飛び降りたのは、今時本場の人間でも着ないだろうというコテコテのチャイナ服を身に纏っ

た、スタイルは抜群だが化粧が濃い美人の女性だった。そして彼女の周りには手下つぽい仮面の男達（こちらもチャイナ服だ）が多数見え、そして全員がパラシュートを背負ってフワフワとこちらへ向かってきている。

明らかに普通の奴らではない集団の登場に真夜の顔が引き攣る中、「おおう！　また追ってくるなんて、しつこい奴らだぞ！　マヤちゃん、ここは逃げるぞ！」

「えっ、私も？　——きやつ！」

「子供が逃げたぞ！　追え！」

「我々『回鍋肉院』ホイコーローインから逃げられると思うな！」

変態の誘拐犯から逃げたのも束の間、返事も待たずに手首を掴んできたしんのすけに引つ張られ、真夜は謎のチャイナ服集団からの逃亡劇にむりやり参加させられることとなった。

これが後に『触アれてはタツならない者達』と称される四葉家の当主となる真夜と、『嵐を呼ぶ幼稚園児』として世界中の権力者に畏怖される野原しんのすけとの出会いである。

*

*

*

旧長野県との境に近い旧山梨県の、山々に囲まれた狭隘きせうあいな盆地にその村はあった。

その村に名前は無く、だからなのか地図にも載っていない。しかし名前以外のものは一通り揃っており、役場も警察署も消防署もライフルラインも存在している。道はきちんと舗装されているし、小中一体とはいえ学校もきちんと存在する。

2月のどんよりとした分厚い雲から降り続ける雪で、村は白く染まっていた。そのせいで家の中に閉じこもっているのか、村人らしき人々の影はどこにも見当たらない。せいぜい見掛けるのは、白っぽい雪中迷彩を身に纏いアサルトライフルを背負う10名ほどのグループくらいだろう。

そんな村の中心近くに、一際大きなお屋敷があった。広大な敷地の中に幾つもの家屋が立ち並ぶ武家屋敷調日本家屋という見た目に反し、その中は利便性を優先してか近代的な洋風のデザインとなっている。

そんな屋敷の中でも一番大きな母屋、その中でも「執務室」とでも表現されそうな部屋にて、この屋敷の主である四葉真夜がソファアールに軽く目を閉じて座っていた。異性を妖しく惹きつける妖艶な魅力と思春期の少女を連想させる可愛らしさという相反した印象を同居させ、実年齢は40歳を超えているはずなのにどう上に見積もっても三十代前半くらいにしか見えない彼女がそんな仕草をすれば、それだけで幾十億もの値がつく名画のモデルかと思わせるほどだ。

コンコンコンコン、と小さくノックが鳴り、それに反応した真夜が目を開ける。

「どうぞ」とドアに呼び掛けると、即座に「失礼致します」と1人の老執事が腰を折って入室してきた。

「皆様、応接室にお揃いでございます。——おや、お休みでいらつしやいましたか」

「少し目を瞑っていただけです、休んでいたというほどではありませんせんよ」

老執事・葉山の言葉に、真夜はニコリと優雅な笑みを携えてそう返した。それに対し、葉山は軽く会釈するのみに留める。事実はどうであれ、主人がそう言うのであればそれ以上追及することは何も無い。「さてと、せっかく集まってくれたあの子達を待たせるのは可哀想ね。行きましようか」

「畏まりました」

その代わり葉山は、ソファアールから立ち上がる主人をエスコートする役目を即座に買って出た。

応接室のソファアールには現在、3人の少年少女が実に緊張した面持ちで並んで座っていた。

1人は黒羽文弥くろばふみや、そしてその隣に座るのは黒羽亜夜子あやこ。苗字が同じことから分かる通り2人は姉弟、それも双子であり、この春に中学卒業を控えた15歳だ。しかし2人はその歳で既に、四葉家の分家の1つであり諜報部門を担う黒羽家の一員として暗躍しており、今日も真夜の命令で静岡の本拠地からわざわざこの村までやって来た。

そして残る1人は、桜井水波さくらいみなみ。年齢は先の2人と同じだが、彼女は遺伝子操作により人工的に魔法力を付与された調整体の両親から生まれた「桜」シリーズの第2世代であり、普段は四葉本家の住み込みメイドとして働きながら将来的に「守護者ガーディアン」となるべく訓練を重ねている。

そんな3人が緊張から会話も交わさずに静かに主人の到着を待つ中、形式的なノックと共に「失礼致します」と葉山がドアを開けて入室してきた。

その瞬間に3人が一斉にソファから立ち上がるが、それは返事も待たずにドアを開けた葉山を叱責するためではない。メイドである水波はともかく、分家とはいえ使用人を使う立場である文弥と亜夜子をして、この家に勤める使用人の中でも1番の地位を持つ「執事長」である彼を無下に扱うことなどできやしない。

もつとも3人がそのような行動に出た一番の理由は、葉山がドアを開けてすぐに部屋に入ってきた真夜を迎えるためなのだが。

「文弥さんと亜夜子さんには、静岡からわざわざ出向いてもらってごめんなさいね。3人共、どうぞ座ってちょうだい」

「し、失礼します」

緊張で体を強張らせながら、3人は再びソファに腰を下ろした。特に普段は使用人として働く水波など、文弥と亜夜子と並んで座るところに恐縮している様子だった。この部屋に呼ばれたときに葉山から座るよう促されていないければ、おそらく葉山と同じようにソファの後ろに立って話を聞いていたことだろう。

葉山が紅茶の注がれた白磁のティーカップを、真夜と3人の前に置く。ここでも水波は上司である彼に紅茶を振舞われて恐縮していたが、真夜はそれを無視して紅茶を一口飲み、そして話を切り出した。

「3人共、もうすぐ中学校卒業ですけど、高校はどうするか決まっているのかしら」

「……いえ、具体的にはまだ決めておりません」

「わ、私も、まだ決まっております」

文弥と水波がそのように答えるが、文弥（と亜夜子）と水波では事情が違う。

黒羽姉弟の場合、全国に9つある魔法科高校のいずれかに通うことはほぼ決定している。願書はオンライン化されているためこの時期に進路が未定でも問題は無いし、そのための勉強は積んでいるのでどこに通うことになったとしても合格は確実だろう。

しかし水波の場合、進学自体が彼女の意思で決められるものではなかった。彼女は四葉に「買われた身」であり、本人が進学を望んだところで主人が必要を感じなければそれまでだ。彼女の言う「決まっていない」は「まだ指示を受けていない」と同義なのである。

そもそも、その程度のことでは真夜も把握済みはずだ。つまりこの間い掛け自体が単なる形式的なものでしかなく、故にその次の台詞こそが彼女にとつての本題ともいえる。

「それならば3人共、東京の第一高校に進学するのはどうかしら？」

「――！」

彼女の問い掛け（の形をした命令）に、3人が驚きで目を丸くした。

当然、それを見逃す真夜ではない。

「どうかしましたか、文弥さん。ひよつとして、第一高校は嫌ですか？」

「いいえ、滅相も無い！ むしろ嬉しいくらいで――」

ハッと我に返った文弥が顔を紅くしながら小さく頭を下げ、そして気を取り直して話を続けた。

「我々とたつ……深雪さん達が1ヶ所に集まるのは良くないだろう、と父が言っていたので、おそらく自宅から一番近い第四高校になるかと思っております」

「あらあら貢さんったら、当主の意向を勝手に解釈してそれを子供に吹き込むなんて」

「えっ!? あなの、えっと——」

「なんて、冗談ですよ。実際、最近まではそう考えていましたしね」
分かりやすく狼狽える文弥に真夜がクスリと笑ってそう告げると、
彼は如何にも安心したという感じに胸を撫で下ろした。そしてそんな
彼を、隣に座る亜夜子が無言で睨みつけている。

と、悪戯っぽい笑みを浮かべていた真夜が、急に笑みをスッと消し
て真面目な顔つきになった。

それに合わせて、3人の顔も改めて引き締まる。

「事情が変わったのは、先日の吸血鬼事件を受けてのことです」

世間ではオカルトの面ばかり取り沙汰された“吸血鬼事件”だが、
その真相はそれにも増してオカルト染みたものだった。異世界から
地球侵略を目論んでやって来たオカマの魔法使いが引き起こした一
連の事件は、最終的に彼らの作戦の要であったヘンダー城をしんのす
けがぶっ壊したことで終結した。

ヘンダーランドに客として潜入し、陰ながらそれをサポートしたこ
とについては、文弥も亜夜子も未だ記憶に新しい。

「例の事件の首謀者であるマカオとジヨマ達については、未だ捕縛に
は至っていません。それにここ一年で“彼”の周りが随分と騒がし
くなってきたようですし、文弥さんと亜夜子ちゃんには東京での仕事
に集中してもらった方が良くと判断しました。であれば、学校も第一
高校に通う方が色々と都合が良いでしょう?」

真夜の口から出た“彼”という言葉に、文弥と亜夜子の表情に僅か
ながら緊張の色が浮かんだ。一方、使用人でしかない水波は事情が呑
み込めないようで、そんな2人に対して困惑の色を隠せないでいる。
ともあれ、当主からの命令とあれば受けないわけにはいかない。

「お話は理解致しました。であるならば、我々が住むのは調布の東京
本部ということですか?」

「いいえ。文弥さん達には、深雪さんと達也さんと一緒に住んでもら
うことになります」

「えっ——!」

真夜のその言葉は、ともすれば第一高校に進学しろと言われたとき

以上の衝撃があった。

「そこまで驚くことですか？ いざというときには達也さんたちにも手伝ってもらうのですから、常に情報は緊密に遣り取りする必要がありますし、自宅が一緒なら作戦会議のときにも場所や時間に困ることはないでしょう」

「た、確かにそれはそうですが……」

未だに衝撃が収まらない様子の黒羽姉弟を一旦放置し、真夜は水波へと視線を向けた。

「水波ちゃんの場合は、文弥さん達とは少し仕事の内容が異なります。4人のお世話をするハウスキーパーの役目を担うのと同時に、達也さんが何らかの事情で深雪さんの傍を離れる際に、達也さんの業務を一時的に肩代わりすることになるでしょう。とはいえ周囲の不審を招かないよう、表向きは文弥さん達と同じく2人の親戚ということにしておきます」

達也の業務というのは、すなわち深雪の ガーディアン「守護者」を指している。これに関しては1年ほど前からいざれ深雪の世話係になることは聞かされていたため、予想より早く、そして世話する相手が多いことを除けばそこまで意外感を覚えるものではない。

しかし彼女にとって最も大きな懸念は、まともに受験勉強していない自分が最難関校の1つである第一高校に合格できるのか、という点だ。

「試験の方は心配しなくて良いですよ」

それはもしかして裏口から手を回してもらえるのだろうか、と水波は正直期待して、

「試験日までの3週間、必要な知識は直接脳に書き込んであげるから」
四葉家はけっして甘くはない、と水波は内心落ち込んだ。洗脳装置のノウハウを利用して知識を脳に定着させる装置を使えば確かに試験には間に合うだろうが、その装置は神経をひどく消耗するのである。おそらく1週間は寝込む羽目になるだろう。

明日からメイドの仕事を免除とし、受験後にはしばらく休みをやる
と真夜は言うが、それは裏を返せば「逃げ場は無いから大人しく従え」

という意味だ。もちろん命令とあれば否やは無い水波だが、正直なところ憂鬱である。

「話は以上となります。皆さんの働き、期待していますよ」
「——はいっ！」

真夜の激励に、3人は揃って力強い返事で応えた。

* * *

「……成程、事情は理解した」

時と所変わって、雫がUSNAから戻ってきたその日、達也たちの自宅。

突然やって来て四葉家当主・真夜から一緒に住むよう命令されたことを報告する文弥と亜夜子に対し、達也は何とも言い難い複雑な表情を浮かべながらそんな一言を漏らした。

ちなみに深雪は現在キッチンにてコーヒーを淹れている最中であり、その隣で水波が所在なさげにその様子を眺めている。

「まあ、部屋は空いているから好きな場所を選ぶと良い。ご覧の通り、この家は2人で住むには広くて手に余っていたところだ」

「えっ?」

「ん?」

「い、いえ、何でもありません。ありがとうございます、達也兄さん」
慌てた様子で頭を下げる文弥に、亜夜子が「深雪お姉様にも感謝申し上げます」と付け加えてそれに続いた。

実は3人が達也たちの家に来たのは今回が初めてなのだが、その際に感じた第一印象は『平凡すぎて達也たちには似合わない』といったものだった。表面上はただの高校生なのだから普通の家に住むのが当然なのは理解できるが、2人ならば人里離れた古い洋館だとか高い塀に囲まれた秘密研究所とかの方がよっぽどお似合いだ、と本気で思ったのである。

「とっころで」

と、そんな後ろめたい思いを抱いていた文弥だったが、達也の呼び

掛けを受けて即座にその顔を上げた。

気の弱い者ならばそれだけで委縮しそうな鋭い目つきをした達也と、真正面から目が合う。

「4年ほど前の夏、沖縄での出来事を憶えてるか？」

どんな問い掛けが来るかと内心身構えていた文弥だったが、思いもよらぬその内容にキョトンとした表情を浮かべた。そしてそれは、彼の隣で同じように耳を傾けていた亜夜子も同様だった。

「えつと……。4年前というと、僕達が小学6年のときですよ。ホテルのホールを借りて黒羽家が主催したパーティーに、達也兄さんと深雪さんと奥様をご参加くださったのを憶えてますよ」

「文弥ったら、せっかく達也さんと久し振りに話せて喜んでたのに、達也さんが会場を出ていってしまつて不機嫌になつてたわね」

「ちよつ——！ 何言つてるの、姉さん！」

「本当のことじゃない。——それで達也さん、それがどうかしましたか？」

「……いや、何でもない」

狙いが読めない質問と一方的に打ち切られた会話に、文弥と亜夜子はますます訳が分からないといった様子でキッチンの深雪へと顔を向けた。しかし彼女も自分達と同様に、疑問で彩られた表情を浮かべていることを知るのみで終わった。

「……………」

3人の頭を占める疑問は、結局のところ解決されることは無かつた。

*

*

*

第一高校から数駅ほど離れた場所に建つ、何の変哲も無い単身用アパートの一角。しんのすけが現在暮らすその部屋は、実家からの仕送りで十分に払える家賃でありながら、1人で過ごす分にはまるで窮屈さを感じさせない広さとなっている。

少なくとも、人形1体が動き回っても何ら支障が無いくらいには。

「いやあ、届いた届いた」

今やどの賃貸にも標準装備となっている宅配ボックスから荷物を取りに行っていたしんのすけが、軽やかな足取りで部屋へと戻ってきた。その箱は両腕で抱えるほどに大きい代わりに薄く、それほど重量も無いように見える。

「何が届いたの、しんちゃん?」

ソファアーにちよこんと座ってテレビを覗いていたトツペマが、その荷物に興味を持ってしんのすけの傍までやって来た。とはいえ床を歩いていったのではなく、ソファアーから魔法を使って飛び上がり、緩やかなカーブを描いて彼の傍にフワリと下り立った形となる。

トツペマの問い掛けに、しんのすけは蓋を留めていたテープをビリビリと雑に剥がし、その中身を取り出して彼女に見せる。

それは、見るからに高級そうな生地で作られた、黒の礼服だった。

「立派な礼服じゃない。どうしたの?」

「いやあ、雫ちゃんからパーティーに誘われちゃってさ、家に置いてたヤツを母ちゃんに送ってもらったんだゾ」

「しんちゃん、礼服なんて持ってたの? 何だか意外ね」

「あいちゃんから時々パーティーに誘われるから持ってたんだゾ。有名人に会えるし、美味しいお料理がタダで食べられるしね」

何とも現金な、とトツペマが呆れ、ふと話の中に出てきた名前にハツとした。

「雫ちゃんって、潮さんの娘さんの?」

「そうそう。いやあ、雫ちゃんの家に行くのは初めてだから楽しみだゾ」

「いや、事情があったとはいえ、自分の会社が経営する遊園地を破壊した子を自分のパーティーに呼ぶって、潮さんもどんだけ懐が深いのよ」

「トツペマも一緒に行く?」

「……いや、今回は遠慮しておくわ。さすがにちよつと顔を合わせづらいし」

苦笑いを浮かべるトツペマに、しんのすけは「そう?」と言いな

らハンガーラックに礼服を掛けた。

「さてと、そろそろご飯にしよーつと。今日は何にしようかな〜？」

「冷蔵庫から食材を勝手に取り出して自動で料理を作るなんて、本当に便利な世の中ね」

「使い切ったのに気づかなくて、料理を作ろうってなって初めて気づくときがあるのが少し不便だけどね」

100年ぶりに人間世界へとやって来た人形の魔法使いは、浦島太郎の感覚を味わいながらも存外楽しく過ごしているようだった。

第100話 「雫ちゃんのパーティーに参加するゾ」

西暦2096年4月5日木曜日。第一高校の新年度始業式前日であり、入学式の3日前でもあるこの日、司波達也は全身を映すほどに大きな鏡の前で困惑の表情を浮かべていた。

そんな彼の隣に立つのは、花も恥じらうほどに艶やかな満面の笑みを浮かべた司波深雪。そしてその後ろには目をキラキラと輝かせて状況を見守る文弥と、そんな彼も含めて今の状況を若干引き気味に眺める亜夜子。更にその後ろには水波の姿もあるが、家政婦としての性さがなのか存在感を希薄にさせて無表情で佇んでいる。

そして姿見のすぐ横にあるハンガーには、1着の真新しい制服の上着が掛かっていた。

「お兄様、早く新しい制服をお召しになった姿を私に見せてください。それとも、じらしていらっしやるのですか？」

「……………」

ニコニコと満面の笑みで、しかしその実達也をせつつくような言葉を口にする深雪に、達也は色々と思うところはあるが一旦それを棚上げすることに決め、しかしそれでも未練がましくゆっくりとした動きで上着に手を掛けた。袖を通す手助けをしようとする水波が彼へ近づこうとするが、即座に動き出した深雪によって進路を遮られたのですぐに退いた。

深雪に手伝われながら上着に袖を通した達也は、彼女が服のシルエツトを整えたのを見計らって姿見へと向き直った。その鏡越しに、うっとりとした表情を浮かべる深雪の顔が窺える。

「お兄様、とってもよくお似合いです……………」

「深雪さんの言う通りです、達也兄さん！」

「……………そうか」

熱っぽい溜息を吐きながら身悶える深雪と、なぜかハイテンションで拳を握り締める文弥に、達也はこの一言を絞り出すので精一杯だった。

達也が現在着ているのは、つい昨日届いたばかりの新品である。登

校日には必ず着なければならぬとはいえず、普通は高校生活の3年間でそうそう取り替えるようなことのない代物だ。

しかし今回の場合、達也には新たに制服を用意しなければいけない「事情」があった。それは今まで着ていた制服とのデザイン面での変更点を見れば分かるだろう。

新しい制服の左胸と肩口——先程から深雪が焼き切れそうなほどの熱視線を送っているそこには、一科生を示す八枚花卉のエンブレムとよく似た、しかし八枚歯のギアを凶案化しているため別物のエンブレムがあしらわれていた。

これは今年から第一高校に新設されることとなった「魔法工学科」のシンボルである。

入学してからこの1年間、達也は対内的にも対外的にも無視できないほどの派手な実績を積み上げてきた。そんな彼に対し、そのまま「補欠」として扱うのは体裁が悪いと学校が判断して設立された、というのもつばらの噂だ。

新たな学科の設立によって第一高校のカリキュラムに抜本的な変更が加えられ、2年生に進級する際に一般魔法科と魔法工学科の選択が可能となった。一科生二科生を問わずに志望者を募り、3月の試験に合格することができれば、晴れて魔法工学科の生徒として魔法工学科技術系に重点を置いたカリキュラムを受けることができる。

クラス分けとしては、一般魔法科の一科生が4クラスで二科生が3クラス、そして魔法工学科が1クラスとなる。今回は試験運用ということで新入生の受け入れは行わないが、良好な成果を挙げることができれば将来的には入学時点で学科を選択できるようにする予定だ。

ちなみにこれにより、一科生から魔工科に異動となった生徒の人数分、二科から一科への転科が認められるようになった。対象者は実技の成績優秀者であり、達也の友人の中では幹比古が一科へ編入することが決定している。

とはいえ今の達也にとっては、妹の手によって着せ替え人形と化している現状の方が重要だ。鏡越しに視線だけで水波に助けを求め、3日前にも同じように深雪主催のファッションショーの餌食と

なった彼女は、諦めるような表情で首を横に振るのみだった。亜夜子も同様のため、達也が視線を向けるやスイツと視線を逸らす始末である。

——まあ、深雪も「女の子」ということだな。

実物の達也と鏡像の達也を交互に見遣ってはしやぐ深雪を横目に見ながら、達也はむりやり自分を納得させていた。

様々なポーズを取らされた末にようやく解放された達也は、満足顔の深雪に手伝ってもらいながら部屋着に着替えてリビングへと向かった。

「それじゃみんな、お茶にしましょうか」

深雪は上機嫌な様子でそう声を掛け、今にもスキップしそうな足取りでキッチンへと消えていった。そしてそんな彼女の後を、若干早足の水波が追い掛けていく。

水波としては達也や深雪も含めた4人の世話を一手に引き受けるものと考えてこの家にやって来たのだが、深雪からしたら「達也の世話をする」という仕事を彼女に譲る気は一切無かった。よって最初の5日間ほどは表面上はにこやかに、しかし結構熾烈な駆け引きが行われ、最終的には掃除と洗濯は水波の仕事、食事の支度は2人で一緒に、達也の身支度は深雪の仕事で彼以外の身支度は水波の仕事、といった具合に曖昧な協定が成立することとなった。

隙あらば相手を出し抜こうとするところはあるものの、2人の関係は達也の見る限り平和で良好なものだ。なので達也は早々に気にしないことに決めたのだが、文弥と亜夜子は未だに慣れないのか若干顔が引き攣っているときがある。

「お兄様、それと文弥ちゃんと亜夜子ちゃんもどうぞ」

「ああ、ありがとう」

「ありがとうございます、深雪さん」

「ありがとうございます」

5人暮らしとなったことで新たに買い換えた大きめのダイニング

テーブルに紅茶の入ったカップを人数分置き、深雪は達也の隣へと腰掛けた。そして2人の正面には文弥と亜夜子が、そして更にその隣の端っこに水波が座る、というのが5人の定位置だ。

そうして始まったティータイムの話題は、自然と3日後の入学式になつていた。

「今年の総代は男か。4年ぶり……だったか？」

「5年ぶりですよ、お兄様。七草先輩の先代も女子でしたから」

「七草家の双子が入学してくるのですし、てつきりそのどちらかだと思つてたんですが」

「そうね……。もつとも、入試で本気を出して良いのでしたら、総代は私か文弥だったと思いますけど」

随分と自信家な台詞を口にする亜夜子だったが、文弥は苦笑いするだけで否定せず、そしてそれは達也と深雪も同じだった。2人がそれだけの実力を有しているというのは、けっして身内最良などではない客観的な事実だからである。

「名前は七宝琢磨しっぽうたくま、だったかな？」

「はい、そうですね。あの『七宝』の長男です」

視線だけに向けて亜夜子に問い掛ける達也に、亜夜子がニツコリと意味ありげな笑みを浮かべて返す。

七宝家は魔法師の名門を表す数字付きナンバーズであり、魔法技能師開発研究所を共通の出自とする28の家系の1つである。この中から4年に一度の『十師族選定会議』にて10の家系が選ばれて十師族となるのだが、選ばれなかつた18の家系が『師補十八家』として十師族を補佐する役目を務めることとなる。

つまり同じ研究所の出自であり、十師族と師補十八家という立場の違いがある両家の子息が、同級生として第一高校に入学してくることを意味している。

「凄い偶然というか根の深い因縁というか……、厄介事を起こさなければ良いが」

「少しは騒ぎを起こしてくれた方がカモフラージュになって良いのでは……」

確かにそちらが諍いざかいを起こせば学校の注目はそのちらに集まり、黒羽姉弟や水波と司波兄妹との関係性を詮索する人間は減るだろう。深雪の指摘は、理屈のうえでは理解できる。

その騒ぎを誰が収めることになるのか、という部分に目を瞑ればの話だが。

「まあ、入学後のことについては今考えても仕方ないだろう。——差し当たつての問題は、今夜のホームパーティーについてだ」

達也がいきなり話題を変えたが、戸惑いの感情を抱く者は誰もいない。むしろ深雪も含めた全員が、それまでリラックスしていた表情を引き締めていた。

彼らは今晚、北山家（つまり雫の家）のホームパーティーに招かれている。USNAへの短期留学を終えた雫の帰国祝い兼進級祝いであり、身内と親しい者のみで行われる小規模なものと聞いている。しかし経済界の大物・北方潮（雫の父親が使うビジネスネームだ）が催すだけあって、普通のパーティーと何ら見劣りしない豪華さになるだろう。

「文弥と亜夜子が出席する以上、水波も出席した方が良かったら。水波も2人と同じく俺達の従妹いとこで通すならば、やはりパーティーに連れて行かないというのは不審に思われかねない」

「……ご命令でしたら、そのように致します」

水波の返事は使用人としては穏当なものだが、殊更に乏しい表情が『本当は気乗りしない』と物語っていた。しかし達也としても提案を取り下げるつもりは無く、端的に「ご苦労だが付き合ってください」と労いの言葉を掛けるに留めた。

そもそも達也が気に掛けているのは、文弥と亜夜子の方なのだから。

「2人にとっては初めてとなる顔合わせだが、変に緊張したり探りを入れるような真似はせず自然体でいけ。アイツは妙なところで鋭いときがあるからな」

達也の言う「アイツ」とは、パーティーに招待した雫でも、彼女の親友であり今夜のパーティーにも出席するほのかでも、ましてや主催

者である北山潮でもない。

その人物とはズバリ、しんのすけのことだった。

「分かりました。今日のところは、純粹に北山家のパーティーを楽しませてもらいましょう」

「ああ、それくらいの方が良いだろうな」

「それじゃ水波ちゃん、さっそくドレスを選びましょう。私も手伝うから」

深雪が手を打ち合わせる仕草に合わせてそう言うと、本人の返事も聞かずに軽く手を引いて2階へと連れて行った。

その際の水波の動揺を露わにした表情は、達也も文弥も亜夜子も見なかったことにした。

*

*

*

“ホームパーティー”と銘打っているように、今回はあくまで身内と親しい者のみで行われるものだ。しかし雫の父親は弟と姉妹が合わせて5人もいて、しかも彼が晩婚だったために雫の従兄弟いとこはほとんどが既婚者、もしくは婚約者持ちである。そしてそれぞれが家族や友人を連れて来ているものだから、結果的に参加者が結構な大人数に膨れ上がったようである。

しかし会場に到着してみると、その大人数を収容しているにも拘わらず混み合っているという印象を受けなかった。つまりそれだけ、北山邸の所有するパーティーホールが大きかったのである。

「さすがに広いな……」

思わずそう呟いた達也だったが、その感想は他の4人の共感を得るものではなかった。四葉家の跡取り候補として育てられた深雪と文弥、その補佐役として共に行動する機会の多い亜夜子、使用人とはいえ幼少期から四葉本家で育った水波とでは、軍や研究所で“庶民”と関わる機会の多い達也とは感覚の差があるようだ。

達也は内心で軽く肩を竦めて、会場を見渡して雫を探した。会場が広いといえど遠すぎて人の顔が識別できないというほどではなく、料

理の置かれたテーブルのすぐ近くに華やかなドレスで着飾った彼女の姿を認めた。そして彼女に寄り添うようにして、同じくドレスに身を包むほのかもいるのに気づく。

達也本人にその意思は無いのだが、結果的に後ろに引き連れる形で深雪達と共にそちらへと足を運んだ。すると自分達に近づくと人影に気づいたのか2人もすぐにこちらへと視線を向け、パツと表情を晴れやかにして（ほのかは特に分かりやすく、雫は逆に分かりにくい）向こうの方からも近づいてきた。

やがて声を張り上げなくても声が届く距離にまで近づくと、達也が口を開くよりも先に雫がペコリと頭を下げた。

「達也さん、深雪、来てくれてありがとうございます」

「こちらこそ、お招きいただきありがとうございます」

「2人共、ドレスがとてもお似合いよ」

「あ、ありがとうございます！ 深雪もすっごく綺麗だよ！」

勝手知ったる4人で一通り挨拶を交わすと、雫とほのかの興味は司波兄妹の後ろに控える見知らぬ3人の少女少女へと移る。

それを察した達也が目配せをすると、文弥と亜夜子が揃って1歩踏み出し、水波が2人よりも僅かに後ろの立ち位置に移動した。

「お初にお目に掛かります。達也兄さん、深雪さんの従弟いとこに当たります、黒羽文弥と申します。よろしくお見知りおきくださいませ」

「同じく、黒羽亜夜子と申します。どうぞ宜しくお願い致しますわ」

「同じく、桜井水波と申します。達也兄様、深雪姉様のご友人にお目に掛かり、光栄に存じます」

綺麗な振る舞いで挨拶をする3人に、雫とほのかは二重の意味で驚いた。達也と深雪に従弟妹がいたことそれ自体と、そんな彼らが明らかにこういういった場に慣れていることに。

「北山雫といいます。3人共、よろしくね」

「光井ほのかです、よろしくね！ へえ、達也さんたちに従弟妹がいたなんてビックリだよ」

「ちなみに3人共、第一高校に入学するんだ。何か困ったことがあったら助けてあげてほしい」

「もちろん。それが先輩の役目だしね」

力強く頷く、雫とほのか。どうやら2人との初顔合わせは無事に成功したようだ。

できればこの流れで、しんのすけとの初顔合わせも済ませておきたいところだが、

「ところで、しんのすけはまだ到着していないのか？」

「しんちゃんですか？ もう来てますよ。さっきまで一緒に喋ったりお料理食べたりしてて、トイレに行くって離れていきましたけど」

「そうか……。まあ、少し待ってれば戻ってくるだろう。せっかくだし、何か料理でも摘まませてもらうか」

「遠慮しないで沢山食べて。深雪の好きなケーキもいっぱい用意してるから」

「も、もう！ 雫ったら……」

雫の（表情に乏しいながらも）からかいを多分に含んだ言葉に、唇を尖らせる深雪。

高校生としてはひどく平凡な遣り取りに、文弥・亜夜子・水波の3人は珍しいものでも見たかのように驚きの表情を浮かべていた。

「いやあ、さすが潮おじさんのお家うちですなあ。トイレだけでもオラの家より広くて豪華だゾ」

そんな独り言を呟きながらパーティーホールに入ってきたのは、今日のために実家から送ってもらった黒の礼服に身を包むしんのすけだった。よく鍛えられた体は引き締まっており、成長して精悍な顔立ちとなった今の彼は黒い出で立ちも相まってスタイリッシュに決まっている。

しかしそんな彼の頭の中は、出席者に振舞われる豪華な料理の数々で占められていた。先程主催者である潮にも「存分に食べて飲んで楽しんでくれ」と言われたこともあり、トイレで小休憩を挟んだ彼の胃袋は臨戦態勢だ。

内心で気合を入れ、大きく1歩足を踏み出したしんのすけ——だっ

だが、

「そのあなた、ちよつと良いかしら？」

「おっ？」

しんのすけほどにでもなれば、声を聴いただけでその人物が美人かどうかすぐに分かる。普通ならば出鼻を挫かれて不機嫌になるところだが、美人だというだけで彼の機嫌を持ち直すには充分な理由になる。

そうして振り返った先にいたその女性は、間違いなく美人だった。見たところ、年齢は20代半ばほど。ルックスもスタイルも非凡であり、華やかな（もちろんTPOは弁えられている）ドレスやアクセサリーにもまるで負けていない。

「初めまして、小和村真紀と申します。もし違つてたらごめんなさい、もしかして野原しんのすけくんではないかしら？」

その美人——真紀は、自己紹介もそこそこにしんのすけの名前を確かめてきた。自分をアピールすることに慣れていない控えめな性格、というわけではない。彼女の表情に見え隠れする自信は、わざわざアピールしなくても相手が自分のことを知っていると確信していることとの表れである。

そしてその考えは、けつして彼女の自意識過剰ではなかった。

「おおっ！ もしかして女優の!? オラ、真紀お姉さんが出てた大河ドラマ観てたゾ！」

「あら、アレを観ててくれたの？ ありがとう」

しんのすけの言葉に、真紀は上品な笑顔を保つたままそう答えた。少し得意げな色が混ざっていたが、それくらいはご愛敬だろう。

彼女は若手と呼ばれるこの歳にして既に数多くのドラマや映画に出演する人気女優だ。ルックスだけでなく演技力でも評価されており、昨年夏に公開された『真夏の流水』という映画でパン・パシフィック・シネマ賞の主演女優部門にもノミネートされている。

そしてしんのすけが話題に挙げた大河ドラマというのが、一昨年に放送された『青空侍』という作品だ。

戦国時代の春日家に仕える戦の鬼・井尻又兵衛由俊と、春日家の1

人娘・廉姫^{れん}を主軸とした、時代に翻弄されながらも立場を超えた純愛を貫く物語である。そして真紀はこのドラマでヒロインの廉を務め、大名の娘としての覚悟を持ちながらも盲従せず自分らしく生きようとする芯の強い女性を体現し高い評価を得た。

ちなみにこの作品のモデルとなった又兵衛について、彼が命を落とした戦にて『鉄の塊でありながら馬よりも早く戦場を駆け抜ける謎の兵器が現れた』という記述が歴史書に残されている。これが現代でいう車であり、つまり未来からタイムスリップした何者かが彼を手助けしていた、などという都市伝説が時折テレビやネットを賑わせているが、ドラマではそういった怪しげな部分を一切削ぎ落として2人の関係を集中して取り上げたところも大いに評価されている。

「あの作品はとも思い出深かったわ。あなたのような子にも楽しんでもらえて嬉しいわ」

「――まあ、オラにとつては廉ちゃんの演技は、ちよつと惜しかった”って感じだけどね”

それまで上品な笑顔だった真紀だが、しんのすけのその一言で纏う空気が一瞬だけピリツと張り詰めた。

「……あら、そうなの？ 具体的にはどの辺りがそう感じたのかしら？」

「真紀お姉さんの廉ちゃんはシャキツとしてて格好良い美人さんって感じだったけど、本当の廉ちゃんはもつと柔らかくて可愛い美人さんなんだゾ。それでいて、いざつてときには大胆な行動に出たりとかするのがギャップがあつて良かったんですなあ、これが」

「……そう。貴重な意見だわ、今後の演技の参考にさせてもらうわね」
さすが人気女優、といったところか。真紀は笑顔を崩さず相手に自分の感情を読み取らせることなく、台本の台詞を読み上げるようにそれだけ言葉にした。

そして小さな呼吸1つで調子を整えると、再び上品な笑顔に戻して会話を続ける。

「それにしてもさすが優秀な魔法師さん、普通の人とは着眼点が違うのね」

「おっ？　　そういえばオラの名前を知ってたけど、どこかで会ったわけ？」

「いいえ、会うのは初めてよ。でも前に九校戦の中継であなたを観たことがあってね、とても絵になる男の子だなんて感心してたのよ。私の知り合いの俳優とか映画監督も同じ意見だったわ」

「いやあ、照れますなあ」

頭を搔いてデレデレと笑うしんのすけに、真紀はクスリと笑みを深くした。

「そうだ。来週は空いてるかしら？　　良かったら、私達のサロンに来てみない？」

「うーん、そうですねあ」

「ねえ、良いでしょ？　　せっかくこうして知り合えたんだもの」

内緒話でもするかのように顔をズイツと近づけて、真紀はそんな誘い文句を口にした。無邪気な表情で無垢な雰囲気を出しつつ、絡め取るような色気を忍び込ませている。

そんな彼女に、迷う素振りを見せていたしんのすけが口を開き――
「何やっているんだ、しんのすけ？　　こんな所で立ち話なんて」

かけたところで、ふいに呼び掛けられた声にしんのすけはそちらへと振り向いた。

声を掛けたのは達也だが、彼以外にも深雪・雫・ほのか・文弥・亜夜子・水波がその後ろに続いており、つまり先程顔を合わせていたメンバー全員がこちらに移動してきた形となる。

「おおっ！　　達也くんと深雪ちゃん、来てたんだね。――それと」

しんのすけが一旦言葉を区切って文弥達に目を向け、達也へと視線を移す。

後ろの文弥達からでは分からないほどに小さく、達也が首を横に振る。

「……いやあ、知らない顔ですなあ」

「俺達の親戚で、今度一高に入学するんだ」

達也がそう言って文弥達に目配せすると3人が同時に動き出し、先程雫とほのかにしたときとまったく同じ文面で自己紹介をした。し

んのすけはそれを受けて「これはこれはご丁寧に」と頭を下げる。

そしてそれが終わると、まるで自然な流れとでも言わんばかりに真紀が自己紹介を始めた。

「初めまして、小和村真紀と申します。宜しくお見知りおきください」
「えっ！　もしかして女優の——ぐえっ」

ミーハーなきらいのあるほのかが大きな反応を見せたが、すぐ隣にいた雫に襟首を引っ張られ発言を中断させられた。ほのかが恨みがましい視線を雫に向けるが、彼女はどこ吹く風とばかりに無視を決め込んで真紀を見つめている。

雫以外の面々も真紀へと視線を向ける中、注目されることに慣れている彼女は微塵も気圧される様子も無く上品な笑みを浮かべている。
「ごめんなさい、あなた方のご友人をお借りしてしまつて。九校戦の中継で彼のファンになったものだから、偶然彼を見掛けて柄にも無くはしゃいでしまったの」

「そうなんだつて！　しかもサロンに誘われちゃつて、オラ困つちやつたゾ」

全然困つてるようには見えない笑顔でそう言うしんのすけに、達也は真紀を見つめるその目を少し細めた。

それでもなお、真紀の笑顔は崩れない。

「でも今日はせっかくのお友達のパティーだし、彼もあなた達とお喋りした方が楽しいわよね。——それじゃあね、しんのすけくん。機会があればまた会いましょう」

「ほいほい、またね」

軽く手を振つてその場を去る真紀に、しんのすけも軽口を添えて手を振り返して応えた。達也たちも自然と、軽やかな足取りで会場を歩く彼女の背中を目で追っていく。

その中で最も鋭い目つきだったのは、意外にも文弥と亜夜子の2人だった。

*

*

*

都心にある20階建てのマンションが等間隔に林立している。高層マンション街の一面に、20世紀後半に流行したスポーツカーを模した電気自走車が1台停まった。ガルウィングのドアを開けて助手席から颯爽と降りたのは、先程パーティーに出席していた小和村真紀だった。

その車の運転席（といつても自動運転だが）に座るのは、軽薄な印象だが身なりは安っぽくない青年。この青年、実は雫の従兄であり、更に言うとな真紀の恋人でもある。年内には結婚の約束もしているほどの親密さで、だからこそ今日のパーティーにも彼女が出席していたのだが、それを雫が知ったのはパーティーが終わりかけの頃だった。「ここに良いわ。送ってくれてありがとう」

真紀の言葉に青年は明らかに物足りなさそうだったが、彼女が身を屈めて唇を彼の頬に触れさせてニッコリと笑い掛けるだけで、青年は満足そうな笑顔であっさり車を発進させた。

軽く手を振って笑顔で見送る真紀だったが、車が角を曲がって視界から消えた瞬間にその笑顔も消えた。白けた表情と共に溜息を吐き、彼女はマンションのエレベーターホールへと歩いていく。

彼女の部屋は、20階建てマンションの最上階。さすが大河ドラマのヒロインに抜擢されるだけあって都心のマンションの最上階に住めるほどの稼ぎがあるのか——と思われがちだが、彼女の場合は別の「事情」があった。

彼女の父親は、テレビ局を含む複数のメディア企業を傘下に持つ持株会社の社長。酔乙女家や北山家ほどではないが、小和村家もかなりの財力を有する上流階級の一員である。自宅には雑用兼務ではない正真正銘の女性ボディガードが2人いるし、部屋の調度品は彼女の稼ぎだけでは到底手に入れない代物ばかりである。

シャワーを浴びてリラックスドレスにガウン姿となった彼女は、ソファーに腰を沈めながらHAR（Home Automation Robot）にワインのボトルとグラスを持ってこさせた。

一通り香りを楽しみ、グラスの半分ほどに注いだワインが更にその半分になった頃、リビングのドアを開けてボディガードが入ってきた。

た。

「お嬢様、七宝様がお見えです」

「琢磨が？　そういえばそろそろ約束の時間ね。構わないわ、通しなさい」

とても来客を迎える格好には見えないが、ボディガードは「かしまりました」と簡潔に答えて部屋を出た。そして彼女は慌てて着替えることも無く、少し経って部屋に入ってきた来客をそのまま迎えた。

勝手知ったるといった感じで真紀の向かいに座るのは、170センチ半ばで肉付きの薄い体、整ってはいるが子供らしさの残る少年だった。少し生意気そうな印象に見えるのは、その瞳に宿る自己主張の強い光によるものだろう。

「こんばんは、真紀」

「いらっしやい琢磨、時間通りね。何か飲む？」

「いや、止めておく。アルコールは思考を鈍らせるからね」

真紀に酒を勧めた意図は無かったのだが、来客の少年——琢磨にはそれを指摘しなかった。口調も振る舞いも大人っぽさを過剰に意識している少年に付き合う大人の余裕を、彼女は持ち合わせている。

もつとも彼女にとって、琢磨は年下の恋人でも、ましてやツバメでもないのだが。

「北山雫とはコンタクトは取れた。でも今のところ、顔と名前を憶えしてもらっただけね」

「……芸能人には興味無しか」

「でも彼女の友人の光井ほのかは、随分と私に関心を持ってた様子ね」
「そうか。光井ほのかも新2年生トップクラスの優等生だ。味方のできればきつと役に立つだろうし、北山雫も取り込めるかもしれない」

「最初は同じ新入生の間で仲間を増やしていく方が良いと思うけど」

「俺達の目的はお互いの世界でニュー・オーダー「新秩序」を勝ち取ることであって、派閥を作ること自体が目的じゃない。北山家のように大きな影響力を持つ者を味方にすることを優先すべきだ。——真紀もそう思ったからこそ、北山家の縁者であるあのつまらない男に接触したんだろう

？」

真紀と琢磨の関係、それは言うなれば「同盟者」だ。2人はそれぞれ理由で魔法師の味方を、手駒を欲していた。その一環として、一高内で将来有望な生徒で派閥を結成しようとする目論みなのである。

最初のターゲットは光井ほのかにするか、と琢磨が脳内で皮算用をしていると、ふいに真紀がクスリと笑みを漏らした。

「どうした、真紀？」

「いえ、芸能人の私に興味を持ってくれた子がもう1人いたなと思つて。ほら、この前あなたが九校戦の中継映像を見せてくれたでしょう？」

「そこに映っていた誰かということか？」

「ええ。モノリス・コードに出ていた野原しんのすけって子なんだけど——」

ガタンツッ!

その名前が出た瞬間、あれだけ余裕たっぷりな演技（もちろんプロである真紀の目を誤魔化せるほどではないが）をしていた琢磨が目を見開き、座っていたソファアを動かすほどに体を跳ね上げさせた。

「……どうしたの、琢磨？ その子がどうかした？」

「……いいや、何でもない、大丈夫だ」

どう見ても大丈夫ではないが、こういうときの琢磨は下手に聞き出そうとしても口を割ることは無い。なので真紀としても、それ以上は訊かないことにした。

「それで、野原しんのすけは元々真紀のファンだったのか？」

「どうかしら。私のというよりは、私が演じてた大河ドラマの役柄のファンって感じだったわね。歴史が好きなのかどうか知らないけど、まるで本物を知ってるかのような口振りで私に駄目出しをする様は、ちよつと言い方が悪いけど厄介なオタクみたいで少し気持ち悪かったわね」

彼女にしては随分とストレートな毒舌に、彼女と知り合って1年ほど経つ琢磨も「そうか……」と若干引き気味だった。

「真紀の目から見て、野原しんのすけはどうだ？」

「彼自身は問題無いと思うけど、問題は彼の周りにいるお友達ね。彼をサロンに招待しようとしたら、司波深雪のお兄さんにそれを邪魔されちゃったの」

「何？ 確かに司波深雪と野原しんのすけは同じクラスだと聞いていたが、その兄とも付き合いがあつたのか……」

「そのようね。——そしてどうやら、その兄妹は前の生徒会長と特別な関係にあるみたい」

「前の生徒会長——七草か！」

司波兄妹とほとんど会話を交わさなかつた真紀が口にした明確な嘘を、琢磨は気づくことができず頭に血を上らせた。

「これは推測だけど、2人は七草家に取り込まれてるんじゃないかしら？ もしそうなら厄介ね。特に妹の方は校内に支持者も多いだろうから」

「味方が多ければ敵だつて多いのが世の中だ。七草の手先なら遅かれ早かれ衝突は避けられない。やってやるさー！」

「私が聞いた話によると、妹さんは重度のブラコンで、お兄さんは結構嫌われてるみたい。その辺りが攻略のポイントになるんじゃないかしら」

「成程、良く分かつた。しかしそうになると、その2人を通して野原しんのすけも七草の毒牙に掛かっている危険もあるな。ならば俺が彼の目を覚ましてやれば——」

何やらブツブツと呟く琢磨を、真紀が期待の籠もった目で見つめる。

その日の琢磨が彼女の「真意」に気づくことは、ついで無かつた。

第101話 「新学期が始まったゾ」

2096年4月6日。新年度の初日であるが入学式はまだなので、達也と深雪は水波達を自宅に残して学校へと向かった。おそらく兄妹2人きりの通学も今日と明日で終わるということで、深雪は普段よりも達也に密着していた。近づかなければ腕を組んでいると錯覚するほどに。

普段から注目を集めている深雪にとつて、自分を遠巻きに見ているだけの視線などいちいち気にしていたらキリが無い。しかし護衛役である達也としてはそうもいかず、彼女に向けられた数々の視線に悪意が含まれていないか確認しながら通学路を歩いていく。

そんな中、明確な敵意ではないがけっして好意的でもない視線があった。深雪に向けられるものとしては珍しく、しかもそれが少年のものとなれば尚更だ。

——あれは確か、七宝家の長男か。

その少年の容姿は、今年の新入生総代として立体映像付きの身上書プロフィールを見たために知っていた。店舗の陰に身を潜めてこちらを見つめていた琢磨だったが、達也が視線を向けたタイミングでスツと姿を消した。

「お兄様？」

その直後、深雪が訝しげに声を掛けた。有象無象の視線はともかく、兄の意識が自分から逸れるのは鋭敏に感じ取れるのだろう。

達也としては、深雪に余計な心配は掛けたくない。なので「何でも無いよ」と笑顔で首を横に振るだけに留め、琢磨のことについては何も言わなかった。深雪も兄が何かを隠していることは気づいているが、そんな兄の想いを無駄にしないために敢えて何も訊かないでおく。

「達也くくん、深雪ちゃくん、こんばんは〜」

「それを言うなら おはよう」でしよ、しんちゃん」

後ろから呼び掛けられた挨拶に、深雪は何度言ったか分からない定型文で返した。もはや後ろを振り返らずとも分かるその声の主は、予

想通りしんのすけのものだった。

しかし3月までの彼とは違って、肩から提げる鞆が今までよりも二回りほど大きいポストンバッグとなっていた。現代の教材はほぼ電子化されているので、そのまま短期旅行に行けそうなほどに大きな鞆など必要無いはずだ。

そんな彼の姿に達也と深雪が首を傾げる中、しんのすけが鞆のチャックを開け始める。

そうして半分ほど開いたとき、鞆の中から人間の腕らしきものがニョキッと伸びた。思わず深雪が息を呑むが、人間にしては幼児くらいに小さいこと、そしてその腕がプラスチックのような素材でできた作り物であることにすぐに気づく。

「——トツペマか」

「久しぶりね、達也くんに深雪ちゃん」

事前に話は聞いていたので、彼女が鞆から現れること自体に驚きは無い。魔法的にしんのすけと繋がる彼女がいるのといかないのでは戦力的にも戦略的にも段違いであるため、いつ襲ってくるか分からないマカオとジヨマ達に備えて彼の傍にいますという彼女の行動も理解できる。

「それにしても、本当に100年前とは色々変わったのね。電車もかなり様変わりしてるし、せつかくだから色々と見て回りたい感じだわ」

「……分かっているとと思うが、くれぐれも学校で姿を見られないでくれよ」

分かってるって、と返事をするトツペマだが、達也としては不安を拭いきれなかった。

そしてそんな兄の様子に、深雪も苦笑いを浮かべていた。

*

*

*

校内無線で通知された所属 ホームルーム H R の情報によると、深雪・ほのか・雫・しんのすけはA組、今年から一科生となった幹比古はB組、新設

された魔法工学科はE組なので達也と美月はそこに、そしてレオとエリカは揃ってF組となった。それを知ったとき2人は盛大に嫌な顔をしてみせたが、それが本心なのか照れ隠しなのかは本人のみぞ知るといったところだ。

新年度最初の登校日であるが、1時限目の履修科目の登録が終われば2時限目からさっそく通常通りのカリキュラムが始まった。基本的に勤勉な性質の多い魔法科高校生だが、しんのすけなどは「最初の日くらいゆつくりさせてよ」などと愚痴っていた。

そんなこんなで、昼休み。

「ねえねえ達也くん、E組の先生が外国の美人なお姉さんって聞いたんだけど、本当？」

「……さすが、耳が早いな」

生徒会室の会議テーブルに昼食を広げて食事会を楽しむ中、若干鼻息を荒くして尋ねるしんのすけに達也が溜息混じりでそんな感想を漏らした。

何やら不穏な雰囲気醸す深雪を意図的に無視して、達也が質問に答える。

「ジェニファー・スミス女史のことだろ？ 言っておくが18年前に帰化しているから今は日本人だし、それに彼女は既婚者だぞ」

その答えにしんのすけは「なーんだ」と露骨に興味を失い、深雪の座る場所からは剣呑な気配が掻き消えた。

当日になっても実技指導の教師が発表されなかったE組だったが、最終的には先月まで魔法大学で講師を務めていたジェニファー・スミス女史がその任に就いた。USNAのボストン出身であり、年齢は推定40代前半ほど、銀の髪に青の瞳をもつ高い身長に腰の位置も高い白人種であるが、なぜ魔法技術が最先端のUSNAから日本に帰化したのか、そしてなぜ魔法大学からここにやって来たかは達也としても気になるところだ。

ところで、現在この部屋には9人の生徒がいるのだが、前年度と同じ顔触れの達也・深雪・しんのすけ・ほのか・五十里・花音・あずさに加え、新たに幹比古・雫の姿もある。

なぜ2人がここにいるのか、それは新年度にあたり生徒自治の体制に変更が生じたためである。

一番の変化は、風紀委員だった達也が生徒会に移籍したことだろう。用意された役職は副会長であり、明らかに深雪の意思が働いているとは思えなかったが、それぞれの長であるあずさと花音が許可しているというのであれば特に達也としてはどっちでも構わなかった。「いや、中条さんは優秀な戦力が加わって満足だろうけど、アタシとしては最後まで反対だったんだからね。達也くんがいなくなったら、誰がしんちゃんという暴走列車を止めるって言うのよ!」

「それは風紀委員長である千代田先輩の役目でしょう」
「確かにそうだけどさあー!」

とはいえ、達也が抜けたことで風紀委員も人員不足であることは事実。よって達也の後任として生徒会推薦枠で幹比古が、更に昨年度末に欠員が出た部活連推薦枠として雫が指名され、両者共にこれを承諾したため風紀委員入りが決定した。

そして今日はその2人も誘って、歓迎会的なノリで昼食会を開催したというわけである。

「今日の放課後もしりりハールですか?」

「りりハールというよりも打合せですね。答辞のりりは春休み中と式直前の2回だけですし、それも段取りを練習するだけで実際に原稿を読み上げたりはしませんから」

幹比古の質問にあずさが答える中、口いっぱいにご飯を含んでいたしんのすけがゴクリと飲み込み、そしてテーブルに身を乗り出して彼女に尋ねる。

「ねえねえあずさちゃん、今年の新生入生ってどんなの? もう会ってるんでしょ?」

「七宝くんですか? ……そうですね、やる気がある子に見えましたよ」

「成程、野心家ってことね」

せっかくなあずさがオブラートに包んだのに、花音がそれを剥がしてしまった。そしてそれに苦笑いのみで否定しないあずさの反応を見

るに、どうやらその評価は的外れではないようだった。

はたして大丈夫だろうか、と達也が内心で憂鬱になる。

そのときの視線は、昼食を摂るだけなのにわざわざ持ってきたしんのすけの大きな鞆に向けられていた。

「紹介します。今年度の新入生総代を務めてくれる、七宝琢磨くんです」

そして放課後の生徒会室。既に顔を揃えていた役員一同（五十里・深雪・ほのか・達也）と、新入生を見にやって来たしんのすけを加えた5人は、あずさの紹介に合わせて彼女の隣に立つ真新しい制服に身を包む男子に目を向けた。

先輩の注目を受けて、琢磨はペコリと一礼した。その態度は新入生としてはまずまず普通であり、あずさ以外に唯一の上級生である五十里が自己紹介をしてもそれは変わらない。

「副会長の司波達也です。よろしく、七宝くん」

しかしそれは、達也の番になって途端に一変した。

「七宝、琢磨です。よろしくお願いします」

不自然に苗字を誇張する言い方だが、言葉遣いよりも態度の方が礼儀正しいとはいえなかった。

なぜなら琢磨の視線は達也の顔ではなく、左胸の辺りに固定されていたからだ。

「……七宝くん？」

「あつ、すみません。司波先輩が付けている歯車のエンブレムに見覚えが無かったもので」

「ああ、それは今年から新設された魔法工学科の物なんですよ」

「そうでしたか」

自分で話題を振ったにも拘わらず、琢磨の素振りは興味が無いと言外に表すものだった。

七宝家の切り札である“ミリオン・エッジ”は現代魔法にしては珍しくCADを必要としない術式であり、そのせいか七宝家は魔法工学

技術を軽視する傾向がある。それを知っていた達也としては、彼の態度を特段不快には感じなかった。

だがそれは、あくまで達也本人だけの話であって、

「——同じく副会長の、司波深雪です」

達也を世界一敬愛して止まない深雪にとって、琢磨の態度はけつして看過できなかった。

「ツンと澄ました」と表現自体は月並みだが、去年の生徒会長選挙ではその表情が当時の役員に死闘を覚悟させたこともある。そのときのレベルには程遠いが、それこそ「氷雪の女王」とでも形容できそうなほどのプレッシャーを放っており、それを真正面からモロに受ける琢磨が平静を失ってもおかしくない。

深雪の威圧に琢磨は思わずたじろぎ——

「ケツだけ星人、ブリブリ〜!」

かけたそのとき、しんのすけが深雪の真正面を猛スピードで往復しながら、前屈の要領で尻を天井に向けて突き出して腰を振りまくった。その珍妙なダンスのせいで不穩になりかけていた雰囲気は一気に霧散し、誰もがその動きに目を奪われて半強制的に視線を固定される。

特に自分の目の前で尻が行ったり来たりしている深雪など、そのショッキングな光景に体を震わせてその場に崩れ落ち——かけ、寸前で足に思いつきり力を入れて何とか踏み留まった。

「し、しんちゃん! なんでその動きをしたの!？」

「いやあ、深雪ちゃんが何だか去年の会長選挙みたいな威圧感を出してたものだから、体が勝手に反応しちゃって」

「そ、それについては確かに私も悪かったけど! だからって私の目の前でアレをやらないで! もはや精神干渉魔法かっくらいの威力なのよ!」

「でもさつきは崩れ落ちなかったじゃない。深雪ちゃんも成長してるってことだゾ」

「しんちゃんのおかげね、ありがとう!」

一触即発な空気から一転、まるで漫才のような遣り取りを見せるし

んのすけと深雪を目の前にして、琢磨の体は小刻みに震えていた。

まず彼の心に宿ったのは、怒りだった。しかしその矛先は深雪ではなく、先輩とはいえ女性に対してたじろいでしまった自分自身に対してだ。

だが彼の心には怒りだけでなく、しんのすけに対する畏れの感情も湧き上がっていた。自身が動けないほどのプレッシャーに真正面から立ち向かい、魔法の兆候すら感じさせずに深雪を無力化するその手腕は見事の一言に尽きた。

——— 昨年の総代を務めた実力者をも寄せ付けない真の実力者……！ 成程、これこそが野原しんのすけという男か……！

何やら目の奥に爛々と輝く光を携えながら、琢磨がそんなことを考えていた。

そしてそれを見ていた達也が、さすがに琢磨の心の内までは見通せなかったものの、こんな感想を抱いた。

何やらまた妙なことになっているかもしれない、と。

*

*

*

その日の夜、達也の自宅にて。

夕食を終えた後、キッチンでは水波が使用人らしく5人分の食器を洗っており、リビングでは達也と深雪がコーヒーをテーブルに置いて寛いでいるときのこと。

「七宝家長男の立場を考えれば、野心家になるのは仕方のないことだろう。とはいえ、まさかいきなり睨み合いになるとは思わなかったがな」

「申し訳ございませんでした、お兄様……」

「まあ、喧嘩に発展させしなければ無理に仲良くする必要も無いさ」

昼間の失態を思い浮かべてシユンとする深雪に、達也は小さな子供に言い聞かせるように優しい口調でそう諭す。

そうして反省の色を露わにする深雪だったが、躊躇いがちな口調で達也の言葉に持論を返す。

「ですがお兄様に対する彼の態度は、ただ不遜であるという種類のものではなかったように思います。もつとベクトルのハッキリした、敵対的な意思を秘めていたような……」

「確かに。彼は俺達を警戒していた」

達也が思い返すのは、今朝の当校中での琢磨について。とはいえ彼が敵意を向けているのはむしろ深雪の方であり、自分はせいぜい妹に対する敵意の付録みたいなものだ、と考えている。

しかしそれを感じ取ったように、深雪はズイツと達也へと体を乗り出した。

「理由は分かりませんが、あまり軽く考えない方が良いでしょう。思われます。去年のようなことが無いとも限りませんので」

「いや、さすがにそれは無いだろう。仮にも彼は二十八家の人間だ」

俺も彼の為人を知ってるわけではないが、と達也は前置きしたうえで、

「七草家への対抗心から、七宝家は師補十八家の中でもとりわけ十師族の地位に執着が強いと言われている。ただでさえ俺達の年頃の男というのは、自分の力を認めさせたいという自己顕示欲が強いからね」

「まあ、お兄様もですか？」

「そりやあな。俺も人並みにそういう欲はある。——七宝くんの場合、その自己顕示欲が人一倍強いんだろう。自分が十師族に相応しいと示したい、だから自分の邪魔になりそうな相手には攻撃的な態度を取ってしまう」

「私達は七宝くんの邪魔などしておりませんが」

「周りに認められたい奴にとって、既に認められている奴は邪魔なんだよ」

苦笑したまま告げられた達也の言葉に、深雪は納得したように手を叩いた。

「成程。つまり彼は、お兄様の名声を妬んでいたのですね！」

「……いや、嫉妬を向けられている、というよりライバル認定されているのはおまえの方だぞ」

「私が、ですか？」

「おまえは去年の新入生総代、そして九校戦でも大活躍している。俺はまあ、深雪の付属物としてついでに敵視されてる程度じゃないか？」

「そんな……！ お兄様は深雪の付属物などではありません！」

「いや、七宝くんから見た場合、という仮定の話なんだから」

「そのようなとんでもない仮定は受け入れられません！」

いきなり妙なスイッチが入ってしまった深雪を、達也は少々持て余し気味だった。思わずキッチンの水波に視線を向けるも、使用人モードの彼女が主人同士の会話に口を挟むはずがない。

さてどうするか、と達也が考えを巡らせようとしたそのとき、

「深雪お姉様、何を子供みたいなことを仰っているのかしら」

最近この家に住み始めた亜夜子の声に、達也は助け船とばかりにそちらへ顔を向け——ほんの一瞬だけ硬直した。そして彼の隣では、深雪も同じように口をポカンと開けている。

亜夜子はフリルなどの装飾品が過剰に添えられた、例えるならば『過激なビジュアルを売りにする系統のロックコンサートへ赴くサブリカル少女』とでもなりそうなド派手な格好をしていた。長い髪も内巻きにカールされて大きなりボンで彩られ、更にその左目には分厚く大きな眼帯が当てられている。

そしてそんな彼女の後ろにいるのは、髪型は顎の線で切り揃えたストレートショートボブ、服装は黒いミニ丈のジャンパースカートに同色のレギンス、顔だけ見ると十代半ば特有の中性的な顔立ちのため性別の判断は難しいが、胸は僅かながらも確かに膨らんでいるのが確認できる人物が、恥ずかしそうに頬を紅く染めて立っていた。

「えっと……、亜夜子と文弥、その格好は何だ？」

「これからご当主様の命により、海外から来た人間主義者に情報を売り渡そうとする自称ジャーナリストを捕まえに行ってきますの」

「その格好だと目立たない？」

「分かってませんわね、深雪お姉様。こんな格好だからこそ、この時間に出歩いて『ああ不良少女か』で済まされるのではないですか」

自信満々にそう言つてのける亜夜子に、達也はそれ以上何も言わなかつた。合同で任務に当たるのではない限り、互いの仕事に口を出すべきではない。

だからこそ達也は、亜夜子の後ろで恥ずかしそうに肩を震わせる少女の格好をした文弥についても一切触れないのである。

「というわけで、行ってまいりますわ」

「……行つてきます」

「ああ、言うまでもないだろうが、気をつけるんだよ」

本当の不良少女のように繁華街へ出掛けるノリで家を出ていく亜夜子と文弥を、達也と深雪は様々な感情を抑え込んだ表情で見送つた。その心情は凶らずも、不良となつてしまった子供に何て話し掛ければ良いか分からない両親のそれと酷似していた。

亜夜子の横槍によつて何となく微妙な空気になりかけたが、達也が小さく咳払いをして強引に軌道修正した。

「まあ、七宝くんが単なる野心家ならばさほど問題は無い。問題があるのは、俺達が十師族の関係者だと知つていて敵視している場合だ」「私達を四葉の関係者と？ それはさすがに考え過ぎではありませんか？」

「そうだな。彼に、というより七宝家に四葉の情報統制を突破する力があるとも思えないが、彼の目にはそれくらい強い思い込みが宿つていた気がする」

「そうですか……。確かに相手は二十八家の一つ、注意はしておいた方が良くもせぬね」

琢磨に関しては生徒会室での遣り取りでしか知らない深雪は、達也の懸念にいまいちピンと来ていない様子だった。それでも愛しい兄の言葉というだけで、心に留めるには充分な理由足り得るのである。

一方達也も、琢磨に關しての情報は深雪を僅かに上回るといふだけで、その全てを把握しているというわけではない。

だからこそ、七草との関わりを疑つている故の敵愾心であると気づけるはずも無かつた。

* * *

十文字家と共に伊豆を含む関東を監視・守護している七草家の邸宅（七草家の邸宅）は、東京の都心に近い高級住宅街にある、お金持ちと聞いて真っ先に思い浮かべるような洋風の豪邸となっている。十師族の中でも社交的な家柄で子供達の誕生日パーティも招待客を大勢呼んで毎年盛大に祝っており、それもあつてか普段から数多くの使用人が住み込みで働いている。

そんな使用人の一人である妙齢の女性メイドを介して父親に呼び出された真由美は、面倒臭いという感情を一切隠すことなく廊下を歩き、父親の書斎のドアを軽くノックした。

「真由美です」

「入りなさい」

中から聞こえる声に真由美がドアを開けると、部屋の主である父親・七草弘一が正面奥の椅子に座って彼女を出迎えた。

表向きにはベンチャーキャピタル企業を経営しており、スマートな経営者然とした見た目もその印象を補強している。しかし部屋の中にも拘わらず彼はレンズに薄い色の付いた眼鏡を掛けており、そのせいか表情から感情が読み取りにくくなっている。

しかしそれは、右目部分に嵌められた義眼の違和感を隠すためである。弘一は14歳のときに魔法師を対象とした国際拉致事件に遭遇し、その際の戦闘で右の眼球を失っている。成長が止まって義眼を使用するまでは眼帯を愛用しており、そのため十代の頃は「眼帯の少年魔法師」として魔法師界では有名だったらしい。

「何かご用ですか、お父様？」

「明後日の入学式についてだが」

つつけんどんな物言いで尋ねる真由美だが、弘一は特に気に留める様子も無く本題に入る。

「私も母さんも、明後日は用事があつて行けなくなつた。だから香澄（かすみ）と泉美（いずみ）には真由美が付き添いなさい」

「……かしこまりました。お話は以上ですか？」

一刻も早くこの部屋から立ち去りたいと言わんばかりな真由美の態度に、弘一は何か言いたげに口を開きかけるが、結局小さく溜息を吐いて別のことを尋ねた。

「……それとも何か、別の用事でもあったかな？」

「いいえ、そんなことはありませんが」

「なら、宜しく頼む。せつかくだし、仲の良かった後輩の様子でも見てきたら良い。——確か、司波達也さんと司波深雪さんだったかな？」

この場面でなぜ2人の名前を出したのか知らないし、ましてや新入生総代だった深雪を差し置いて二科生でしかない達也を真つ先に出す意図も分からない。

真由美が分かるのは、父親がまた余計なことを考えている、ということくらいである。

「そうですね。せつかくですし、お父様の言う通りみんなが頑張つてるところを見てこようかと思えます。——久し振りだなあ、しんちゃんとか元気かしら？」

「その“しんちゃん”というのは、誰のことかな？」

「あら？ お父様もよくご存知でしょう？」

真由美の言葉に弘一は答えず、サングラス越しに娘をジツと見遣る時間が続く。しかし真由美もその笑顔を一切崩すことなく、父の視線を真つ向から迎え撃つ。互いに顔を見合わせる親子だが、2人の間に流れる空気はけっして“親子の団欒”などといった温かなものではなかった。

その均衡を崩したのは、軽く肩を竦めるジェスチャーをした弘一だった。

「……まあ、先も言った通りだ。明日は宜しく頼んだよ」

「はい。失礼します」

真由美は腰を折って一礼すると、そのまま部屋を出ていった。

「——野原しんのすけ、か」

弘一以外誰もいなくなった書斎にて、彼の独り言が小さく漏れた。

第102話 「入学式と役員勧誘だゾ」

4月8日。国立魔法大学付属第一高校入学式当日の朝。

達也と深雪、そして新入生である文弥・亜夜子・水波の5人は、入学式が始まる2時間ほど前に校門に到着した。去年も同じように2時間前に学校入りしていたが、去年は深雪が新入生総代として答辞をするため、今年は達也と深雪がスタッフとして入学式の準備をするためである。

5人は校内に入ると、そのまま最終打合せを行う講堂の準備室へと向かった。部外者である自分達が入って良いのかと文弥達が気にしていたが、去年達也が時間を持って余した経験から強引に連れて来たのである。

「おはようございます、達也さん！ 深雪もおはよう」

「おはよう、司波くん。時間通りだね」

先に到着していたほのかと五十里と挨拶を交わし、初対面である五十里に文弥達3人が自己紹介をする。

それが終わった頃に、あずさと花音、そして新入生総代である琢磨が部屋に入ってきた。花音は一通り会場の見回りを終えてきた後だが、あずさはまさに今やって来たためか少しだけビクビクしている。

「おはようございます……。あの、もしかして私が最後ですか？」

「おはようございます、会長。時間通りですよ」

本当は3分ほどオーバーしてるのだが、深雪の笑顔はそれ以上の謝罪を許さない（逆の意味での）威圧感があった。

あずさが予定していた謝罪文句を呑み込んでいる中、後ろから進み出た琢磨が五十里と達也に声を掛ける。

「おはようございます、五十里先輩、司波先輩」

「おはよう、七宝くん」

五十里の返事に黙礼し、今度は深雪とほのかの方へ。

「司波先輩、光井先輩、おはようございます。本日は宜しくお願いします」

「おはようございます、七宝くん。今日は頑張ってくださいね」

一昨日とは打って変わって殊勝な態度の琢磨に、深雪は可憐な笑みと優しい口調で返事をした。

しかしこれは、深雪が琢磨を許したということではない。完璧な淑女の振る舞いはあくまで仮面でしかなく、態度を変えただけで先日の無礼を謝罪したわけではない琢磨に深雪の方から歩み寄るつもりはまったく無いのである。

余所余所しくも文句の付けようがない笑顔に、あずさも五十里も困惑の表情を浮かべた。注意する点が無いため深雪を窘めることができず、かといつて漂い始めた気まずいムードを放置するわけにもいかない。

そんな雰囲気を狙っていたかのようなタイミングで、部屋のドアが勢いよく開けられた。

「やつほー、みんな。こんばんはー」

間延びした声で挨拶するのは、しんのすけだった。全員が一斉に彼へと視線を向け、そしてその何人かは助かったとでも言いたげにホツとした表情を浮かべている。

「おはよう、野原くん。随分早いんじゃない？ 風紀委員の集合時間はもつと後でしょ？」

「いやあ、何だか目が覚めちゃって。せつかくだから来たんだゾ」

そして真つ先に挨拶を返して雑談風に尋ねる五十里に、しんのすけはそんな答えを返した。ちなみに余談だが、五十里は彼の言い間違いについては早々にツッコむのを止めた派である。

と、そんな2人の会話が切れた僅かなタイミングを狙って、琢磨が大股でしんのすけに近づいて直角に近い角度に腰を折った。

「おはようございます、野原先輩！ 本日はどうぞ宜しくお願い致しますー！」

「お、おお……。気合い入ってるね、琢磨くん……」

今までの誰に対してよりも一際力の籠もった挨拶をする琢磨に、若干引き気味のしんのすけ。

そしてそんな琢磨に、完璧な笑顔を崩さないまま不穩のオーラを撒き散らす深雪。

「——全員揃ったようですから、まずは式次第を確認しましょうか」
「そうね！ 時間を無駄にすることも無いわ！」
「まずは、開会30分前の配置から。来賓の誘導は深雪、放送室にほのか——」

達也の提案を花音が即座に賛同し、そして達也がそのまま強引に打合せを始めた。

あずさは本来自分が行うはずだった役目を後輩に取られて手持ち無沙汰になり、そして部屋の端っこに立つ文弥達については完全に忘れ去られたのであった。

*

*

*

「それじゃ、オラもお仕事に行ってくるゾ」

「はい！ 野原先輩、お気をつけて！」

無事にリハーサルも終了したのを見届けたしんのすけは、本番30分前のタイミングで（琢磨の威勢の良い見送りの挨拶を受けながら）講堂を後にした

本日の彼の仕事は、校内の警備という風紀委員のいつもの仕事に加えて、迷子となっている新入生の誘導も兼ねている。とはいえ、ボストンバッグを肩に提げたまま巡回する姿は、普通に在校生が荷物を持ったままウロウロしているだけに見えるかもしれない。

「いやあ、今日は暖かくて良い天気ですなあ」

「絶好の入学式日和って感じね」

1人で巡回しているしんのすけの言葉に返事をするのは、ボストンバッグに身を潜めるトツペマだった。中からチャックを動かせるように改造が施されており、それを使って開けたチャックの隙間からひよっこりと顔を出しているのである。

「トツペマって入学式とか出たことあるの？」

「学校は行ったこと無いけど、王家直属の騎士隊の入隊式とかは出たことあるわよ。まあ、出たっていうか出迎える側なんだけど」

「ほうほう、そういうのもあるんですなあ」

周りに人がいないのを何となく確認しながら、トツペマを連れたいのすけは道沿いに歩いて前庭へとやって来た。彼は知る由も無いが、ちょうどそこは去年の今頃に達也が暇潰しで読書をしていて真由美と出会ったときのベンチが置かれた場所だった。

と、そのとき、

「あらっ、しんちゃんに……トツペマ？」

「おっ、真由美ちゃん」

「久し振りね、ヘンダーランド以来かしら」

2人がバツタリ顔を合わせたのは、真由美だった。もし近づいてくのが別の人物だったらトツペマも鞆に隠れていただろうが、ヘンダーランドで共闘した彼女ならとそのまま挨拶を交わす。

「しんちゃんと一緒に行動してるのね」

「いつどこで、マカオとジョマの奴らに襲われるか分からないからね」

「……ごめんなさい。七草家でも調査してるけど、奴らについては今のところ何も情報が掴めていないの」

「ああ、別に気にしないのでちょうどいい。そう簡単に奴らが尻尾を掴ませるとは思っていないし」

「ところで真由美ちゃん」

ふいに会話に割り込んできたしんのすけが、まじまじと真由美を観察する。

彼女はもう一高生ではないため私服姿なのは当然だが、胸元にフリルをあしらったブラウスに丈の短いジャケット、膝下丈のタイトスカートという、一高女子の制服からそれほどかけ離れた印象ではないスタイルだ。

しかしヒールの高い真紅のパンプス、薄化粧でありながら彩りを増したメイク、大きなリボンに代わって髪を纏める鬘べっこう色のバレツタによるものか、今の彼女は先月までとまるで別人のように大人びている。

「いやあ、しばらく見ない間に大人になっちゃって〜」

「ちよつとしんちゃん、卒業式から1ヶ月も経ってないでしょ」

まるで久し振りに会った親戚のようなことを言うしんのすけに、真

由美は気の抜けた苦笑いを浮かべた。彼女の言う通り最後に会ってから1ヶ月足らずとはいえ、少しも変わったところの無い彼の姿に、真由美はなぜかホツとしたような心地になった。

「何だか制服じゃない真由美ちゃんって新鮮かも」

「そうかしら？ 九校戦のときだって、行き帰りのバスでは私服だったでしょ？」

「でもあのときと違って、今日の真由美ちゃんは何だか大人っぽいゾ」

「そ、そうかな？ 大学生になったからかしら？ 一昨日に入学式を終えたばかりなんだけど」

「きつとそうだゾ！ いやあ、そうして見ると、何だか真由美ちゃんが年上に見えますなあ」

「もう、しんちゃんったら！ 自分よりも年上に見えるだなんて——ん？」

しんのすけに褒められて良い気分になっていた真由美だが、ここに来て彼の発言に違和感を覚えて笑みを消した。

「いやいや、ちよつと待って。しんちゃん、私の方が普通に年上よね？」

「えっ？ 真由美ちゃんも、オラみたいに100年くらい生きてるの？」

「……あつ、そ、そういう意味ね！ そりやしんちゃんの実年齢からしたら、私どころか九島閣下すら年下になっちゃうものね！ けっして

『高校2年生としての自分から見て』って意味ではないわよね！」

「いや、普通にそういう意味だけど」

「はああああああつ!?!」

もしも達也が見れば『怒髪天を衝くとはこのことか』などと考えそうな勢いで、真由美はしんのすけへと詰め寄った。

「ってことは何!?! しんちゃんはずっと、高校1年生の立場で私のことをずっと年下だと思ってたって言いたいわけ!?!」

「うん」

『うん』って！ そんなアツサリと認める!?! っていうか、私の方が2つも学年が上なんだから、普通に考えて私の方が年上でしょ!?!」

「そりやそうなんだけど、真由美ちゃんと話してると、何だか妹のひまわりを相手にしてるような感じになつてたゾ」

「……ちなみに、そのひまわりちゃんの学年は？」

「今年、小学6年生になるゾ」

「小学生!?!」

その発言で彼女の何かが切れたのか、ただでさえ近くなっていた間隔を更に詰めてきた。もはや“至近距離”と表現して差し支えないほどにまで近づき、身長差から睨め上げるような目つきへと変化する。

当人達は意識していないだろうが、第三者の誤解を招きかねない距離感である。

「ほら、よく見なさいよ！ 背は少し低いけど別に童顔つてわけじゃないし、体つきだってむしろ同世代の中ではメリハリのある方なんだからね！」

「おおっ、どうしたの真由美ちゃん、テンション高いね」

「しんちゃんつて、年上のお姉さんが好きなんですよ!?! ほら、目の前に年上のお姉さんがいるわよ！ ほら！ ほら！」

「今日の真由美ちゃん、すっごく面倒臭いゾ……」

ほとんど怒り顔でズイズイと詰め寄ってくる真由美に、ウンザリしているという感情を一切隠す気の無いしんのすけ。いくら互いに密着しそうなほどに距離が近いといっても、その表情も込みで見れば“良い雰囲気”だと表現できる者はまずいない。

しかしそれは裏を返せば、遠巻きに見ればそう表現できなくもないということだ、

「こらーっ！ お姉ちゃんから離れろ、このナンパ男！」

その叫び声がしんのすけの耳に届き、彼は声のした方へと目を向けた。ちなみにその瞬間、トツペマは即座に鞆の中に身を潜めていた。

甲高い声に相応しい小柄な少女が、桜並木に挟まれた道をこちらへと一直線に駆け抜けてくるのが見えた。癖の無い髪をショートカットにした一高制服に身を包むその少女は、駆け寄る姿も相まって活発で体育会系の印象を抱く。

「——えっ、香澄ちゃん!？」

そんな彼女に、真由美は驚きと共に彼女の名前を口にした。そして先程の彼女の言葉を思い返し、顔をしんのすけへと戻して、慌てた様子で勢いよく1歩後退した。顔を紅くしたその様子から、どういう誤解をされたのか思い至つたのだろう。

だがしんのすけは、どうやら真由美の妹らしい香澄という少女をジツと見つめるだけで、彼女が何をそんなに怒っているのか未だに見当もついていない様子だ。そしてそれは、香澄の体がフワリと浮き上がり、小柄な体が空中で加速しながら放物線を描かず一直線に飛び、突き出された膝が彼の顔面めがけて襲い掛かってきても変わらない。そうして彼女の膝はしんのすけの顔面に——当たらなかつた。

「えっ——」

しんのすけの両足が地面から離れるどころかズレることもなく、上半身だけを仰け反らせて香澄の飛び膝蹴りをアツサリと避けた。彼女の口から困惑の声が漏れる中、彼女の体は元々彼の頭があつた空間の目前で急激に減速し、そして空中でピタリと静止した。

「このっ——!」

そこから香澄がしんのすけに向かって懸命に蹴りを繰り返すが、体重を預ける場所も無い空中では単に脚を伸ばしただけでしかない。故にスピードもほとんど乗らず、よってしんのすけも簡単に彼女の蹴りの軌道上に左手を滑り込ませることができた。

その左手は、猫の手のように指が折り曲げられていた。

ぼよんっ。

「わーっ!」

可愛らしいとはあまり言えない悲鳴をあげて、香澄は蹴りを繰り返した勢いそのままに後ろに吹っ飛んだ。とはいえ蹴り自体がそこまですではなかつたため、ほんの数メートルほどの距離でしかない。

しかし彼女がバランスを崩すには充分で、このままソフトコート舗装の地面に激突すれば、頭を打つことは無くても体のあちこちに出血を伴う打撲痕を刻むことになるだろう。そのまま入学式に臨んだとなれば、高校生になつたばかりの少女にとって辛い経験となるに違い

ない。

だがそれは、香澄の体に貼りついた魔法式によって防がれた。彼女の身を守る情報強化の防壁であるエイドス・スキンを一切損なうことなく展開された魔法によって、彼女の落下速度が緩やかになっていく。

自分自身に対して魔法を掛けたのなら有り得る話だが、当の香澄がワタワタと慌てている様子から、その魔法が第三者によるものだと推測できる。もつとも、しんのすけがそのような推測をすることは一切無いが。

「香澄ちゃん、大丈夫ですか!？」

「助かったよ泉美、ありがとう」

そうしてゆっくりと地面に下り立った香澄の傍に、髪型以外は彼女とまったく同じ顔、同じ体格の少女が駆け寄った。誰が見ても香澄と一卵性の双子だと分かる光景だが、ストレートの髪を眉の高さと肩に触れる長さで切り揃えるその少女・泉美は、香澄と比べて文学少女というかインドアの印象を受ける。

「泉美、こいつナンパ男のくせに強いよ」

「えっと、香澄ちゃん？　というか、この方は——っ！」

瞳に敵意を燃え上がらせる香澄に困惑しながらも泉美はしんのすけへと視線を向けて、そして次の瞬間にその顔を引き攣らせた。

「ボクの直感が告げてる、こいつ只者じゃないよ！　こうなったらアレをやるしか——」

「ま、待ってください香澄ちゃん！　この方は——」

何やら慌てた様子で止めようとする泉美に、聞こえていないのか！　人で盛り上がる香澄。

そしてこの辺りが——真由美の堪忍袋の限界だった。

「いい加減にしなさいっ！」

「——！」

香澄の後ろに立っていた真由美が、彼女の頭上に拳を叩き落とし。その威力は香澄が声も出せないほどに悶絶するほどで、しんのすけはなぜか視界いっぱい「げんこつ」の文字が広がる光景を幻視

した。

「お姉ちゃん、いきなり何をするのさー!」

「それはこっちの台詞です! 香澄ちゃん、あなたいきなり何してるの!? 魔法の無断使用は犯罪だって何度も教えたでしょう! それを高校入学の初日から……いつたいどういうつもり!?」

「だ、だって、あいつがお姉ちゃんにやらしいことをしようとしてたから……」

「そ、そんなわけないでしょう!? 何言ってるの、あなたは!」

「そうだゾ! むしろオラの方が真由美ちゃんから迫られて——」

「しんちゃん! 話がややこしくなるから今は黙ってて!」

姉妹の話に割り込むしんのすけに、見事なツツコミを入れる真由美。

そしてその会話を聞いていた香澄は、彼女の発言に含まれていた「しんちゃん」という単語を拾い上げて——サツと顔を青くする。

「……えっ? しんちゃん? それって、まさか——」

「そうです。先程香澄ちゃんが襲い掛かったあの方こそが、あの野原しんのすけ先輩です」

泉美がそう答えた瞬間、香澄の目がこれ以上無いほど見開かれた。口をあんぐりと開いてブルブルと震える様子は、まるでリゾート地で凶器を携えた大量殺人鬼に遭遇したかのようなのである。

「えっと、あの、その……! も、申し訳ございませんでした! その、お姉ちゃんが絡まれていると思ったら、居ても立ってもいられなくて、その——」

「私からもお詫び申し上げます、野原先輩。香澄の……無礼をどうかお許しください」

「本当にごめんね、しんちゃん。妹にはキツク言っておくから……!」
見目麗しい美少女3人から一度に謝罪を受けるといって、人によつては居心地の悪さを覚えるであろう状況で、しんのすけは真剣な表情で目を瞑り、腕を組んで考え込む素振りを見せる。

まるで裁判所で判決を待つ被告人のような気分で彼の言葉を待つ、七草3姉妹。

やがてしんのすけは目を開き、真剣な表情のまま口を開いた。

「——三つ子?」

「みみみみみ、三つ子!? 言うに事欠いて三つ子ですって!」

その一言で再度激昂した真由美が、しんのすけに詰め寄って再び自らの大人っぽさをアピールし始めた。先程のように体を密着させる2人だが、今度は彼らの表情もよく見えるため香澄が勘違いすることも無い。

「お姉様、そうやって必死にアピールするところが子供っぽく見られる所以ゆえんでは?」

泉美の痛烈な指摘に、香澄は隣で苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まさか開式30分前の巡回の間に、七草の双子と一悶着起こして顔見知りになるなんて……」

「彼の『主人公補正』の賜物かしら? だとしたら、あの2人も『登場人物』に加わったことになるけど……」

しんのすけ達がいる前庭から少し離れた場所で彼らの遣り取りを盗み見るのは、文弥と亜夜子だった。しんのすけが巡回に出た少し後に「式に参加するため」と称して達也たちの傍を離れ、こうして尾行しつつ様子を窺っていたのである。

と、文弥が携帯端末を取り出して画面を操作し始めた。

「あら? データを消してあげるの?」

「このままだと、たとえ野原先輩が黙っていたとしても、校内に設置された観測装置からいざれ学校側にバレちゃうからね」

説明しながら、文弥が携帯端末を操作する。まるで校内の監視システムにハッキングしてデータを抹消できるかのような口振りだが、それは紛れも無く事実であった。

達也も深雪も、そして文弥も亜夜子も、色々と探られたくない後ろ暗いところが多い。よって監視システムへの介入手段を構築する必要があると判断した文弥は、春休みいっぱいを掛けて監視システムにハッキングする準備を整えてきた。そしてその結果、第一高校の内部

システム限定ではあるが、監視システムに侵入してデータを書き換えるだけの技能を身につけたのである。

「よし、オツケー。そろそろ僕達も、入学式の会場に行こうか」

「ああ、可愛い弟がどんどん腹黒くなっていく……」

憐憫の情を携えた声色で呟く亜夜子を、文弥がジトツとした目で睨みつけた。

*

*

*

入学式は、特にアクシデントも無く予定通り終了した。琢磨の答辞も無難なものであり、去年のように会場全ての目を釘付けにすることも無ければ、一昨年のように在校生・新入生がハラハラしながら見守ることも無かった。

とはいえでそれで仕事が終わったというわけではなく、来賓の出欠チェックや祝辞の整理、業者との撮影データの受け渡しなど様々な雑務を終えたうえで、ようやく達也たちスタッフは解放された。現在は校門から最寄り駅の間にある喫茶店「アイネブリーゼ」に集まり、コーヒーを片手に（しんのすけだけはジュースとパフェも添えて）雑談に興じている。

ちなみに参加者は、しんのすけ・達也・深雪・ほのか・雫・幹比古の2年生に加え、今日めでたく一高生となった水波・文弥・亜夜子も顔を並べている。

「そういえば、主席くんの勧誘はどうなったの？」

「それが、駄目だったんだよね。本人としては、しんちゃんと同じ風紀委員に入りたいんだって」

「生徒会の勧誘を断ってまで風紀委員入りを希望するなんて、よっぼどしんのすけくんを慕ってるんだね」

感心した様子でそう言う幹比古に、しんのすけは「男にモテても意味無いゾ」と大きく溜息を吐いた。

「でもお兄様、今年って生徒会の推薦枠は空いてませんよね？」

「ああ、確か教職員の枠しかなかったはずだ。とはいえ主席だし、本人

が希望すればおそらく通るだろう」

「だとすると問題は、七宝くんの代わりに誰を生徒会に勧誘するかだね」

「新入生が誰も生徒会に入らないというのも、後々を考えると具合が悪いな」

「そうだ！ お兄様、水波ちゃんを役員にするのは如何でしょう？」

深雪の思いつきに、それまで黙って上級生の会話を聞くだけだった水波の表情が強張った。

「深雪、それでは水波が可哀想だ」

そして達也が即座にそれを却下したことで、水波はホッと胸を撫で下ろした。

「主席を生徒会に勧誘するのが慣例なのだから、代わりの候補も入試成績から選ぶのが良いんじゃないか？」

「次席って誰だっけ？」

「七草泉美さんだね、七草先輩の妹さんの。3位も同じく七草先輩の妹さんの香澄さんで、上位3人は本当に僅差だったから誰が1位になってもおかしくなかったんだって」

「ほうほう、あの2人ってそんなに成績良かったのかあ」

「あれっ？ しんちゃん、2人に会ったことあるの？」

「今朝学校の見回りをしてたときにね。いやあ、真由美ちゃんと話してただけなのに、香澄ちゃんがいきなり襲い掛かって——」

「そ、それで達也兄さん！ 生徒会役員についてはどうするのですか!？」

しんのすけの言葉を遮って尋ねる文弥に、達也は（気になりはしたものの）フムと腕を組み、

「近日中に2人を勧誘してみるしかないな。もちろん決めるのは会長だが、最終的には本人のやる気次第だ」

結局のところ達也をもつてしても、そのような当たり障りの無い考えに帰結するしかなかった。

達也がトイレで手を洗っていると、幹比古が中に入ってきた。偶然タイミングが重なっただけだろうと達也はそのまま出ていこうとするが、彼の「達也」という呼び止める声に達也はその足を止める。

「どうした、幹比古？ 向こうじゃ話にくい話題か？」

「……達也は話が早くて助かるよ」

「あまり長居しない方が良い。しんのすけ辺りからかわれるぞ」

達也の言葉に、幹比古は慌てた様子で本題に入った。

「今日の式に、新任のローゼン日本支社長が来てたのは知ってる？」

「ああ、一言だけ挨拶させてもらった。今日は幸いにも時間が無かったからな」

幹比古の言う「ローゼン」というのは、酢乙女家と魔法工学機器メーカートップの地位を争っているドイツの企業「ローゼン・マジクラフト」のことだ。達也は昨年夏の九校戦後夜祭にて、当時の日本支社長から熱心な勧誘を受けていた。

「名前はエルンスト・ローゼン。ローゼン本家の人間らしいな」

「そうだね、久々の大物だつて業界紙が騒いでる。——そして彼は、エリカのお母さんの従弟に当たる人物だ」

迷いを振り切るような、少し自棄になったような目つきで話す幹比古に、さすがの達也もポーカークーフエイスを保てなかった。

幹比古の話によると、エリカの母方の祖父が日本人女性と恋に落ち、親族の反対を押し切って日本に逃げてきたらしい。それ以来本家とは断絶状態で、女性の実家も2人の関係をよく思わなかったこともあり、娘であるエリカの母親は相当苦労したようだ。

そしてその一件以来ローゼン本家は日本に良い印象を持つておらず、商売上日本に拠点を置くことはあっても本家の人間が籍を置くことは無かったらしい。

「僕の考えすぎかもしれないけど、エルンスト・ローゼンの来日はエリカと無関係じゃない気がするんだ」

「それで、俺にどうしろと？」

「具体的に何かしてほしいわけじゃないよ、ただ気に掛けてほしかったんだ。——いや、そうじゃないね。僕一人が抱え込むには少し重す

ぎるから、達也を巻き込んでおきたかったのかな」
「ひどい話だ」

幹比古に対する達也の率直な感想は、言葉に反して非難する色合いを持たなかった。

*

*

*

4月10日。新入生にとっては入学3日目の昼休み。

達也は生徒会室で、香澄と泉美と向かい合っていた。こちらは達也1人ではなく他の生徒会役員も一緒なのだが、彼としては既視感を刺激されるシチュエーションである。あのときは深雪の付き添いでこの部屋にやって来て、そしてあれよあれよと風紀委員に入る羽目になってしまった。

もしあのときこの部屋に来なければ、自分は平和な高校生活を享受していただろうか。

達也はそんな疑問を覚え、

「おおっ！ 達也くん、今日のメニューはチーズハンバーグだゾ！」

すぐにそれが甘い考えであるという結論に至った。

「それでは、私達のどちらかを生徒会役員として取り立ててくださるということですか？」

「やる気があるなら、もちろん2人一緒でも構わないが」

泉美の発言で意識をこの場に引き戻した達也がそう返事をする時、

泉美はうっとりとした表情で頬に手を当て、そして香澄は真剣な表情で考え込む仕草を見せた。

「深雪先輩とご一緒に仕事できますなんて……夢のようです」

「……深雪、彼女とは既に会っているのか？」

「えっと、入学式が終わった後に少し……」

「九校戦の中継で拝見しておりましたが、こうして直にお目に掛かりますとその何倍もお綺麗で、まるでこの世に降臨なされた女神様のようです……。それはもう、ぜひとも私のお姉様になっていただきたいくらいで……」

「泉美ちゃん、本物のお姉ちゃんが悲しむよ」

泉美は香澄の言葉も無視して、深雪の美貌を目に焼き付けるのに夢中だ。今の彼女にとっては、深雪が何の感情も読み取らせない鉄壁の愛想笑いであつてもまったく問題無いのだろう。

「では泉美さん、生徒会に入っていただけですか？」

「はい、喜んで！」

できれば彼女を敬遠したいという本音をひた隠しにして問い掛ける深雪に、泉美はますます熱を帯びた眼差しをまっすぐ彼女に向けて答えを返した。

そうして愛想笑いを貫く深雪を横目に、達也は香澄へと視線を移した。

「それで、君はどうする？」

「……お誘いいただいて申し訳ございませんが、生徒会入りは辞退させていただきます」

わざわざ椅子から立ち上がった深く頭を下げる香澄に、達也としても「そうか」と答えるだけで無理強いすることは無かった。他の役員からも残念そうな雰囲気を感じるが、本人にその意思が無ければどうしようもない。

そうして勧誘の話もこれで終わり——と思いきや、香澄は椅子に座らず体の角度を少しズラして向き直る。

その先に座るのは、しんのすけだった。

「無礼を承知でお願い致します。野原先輩、私を風紀委員に入れていただけませんか？」

「えっ？」

我関せずといった態度でハンバーグを頬張っていたしんのすけはキョトンとなり、他の役員や泉美は思わぬ展開に目を丸くする。

「入学式の時、野原先輩の実力を拝見する機会がありました。ぜひとも野原先輩の傍で勉強させていたいただきたいのですが」

「……だそうだ。しんのすけ、どうする？」

「どうするって言われても、オラはどっちでも良いゾ」

琢磨と違って女子からの申し出だが、しんのすけのテンションは変

わらないようだ。

「当校の風紀委員のシステムは知ってますか？」

「はい、姉から聞いてます」

「なら話は早いですね。今年は教職員推薦枠が2つ空いてるので、先生方と千代田委員長からは私の方から話を通しておきますね」

あずさの提案に、香澄は「ありがとうございます」と頭を下げた。一連の遣り取りを泉美がポカンとした表情で眺めているところを見るに、彼女にも自分の意思を伝えていなかったのだろう。

——しかし“七”の家系が同級生になるだけでなく、どちらも風紀委員入りするとは……。

「いやあ、生徒会でも新入生を確保できて一安心ですよ。今年は何事も無く勧誘期間に入れそうですねえ」

のほほんとなんかことを言うあずさだが、残念ながら達也はそれに同意できなかつた。

第103話 「センパイというのはめんどくさいゾ」

新入部員勧誘週間2日目となる、4月13日。

前日の放課後に続き、達也と深雪が部活連本部に待機していた。去年は真由美と服部が務めていたポジションで、勧誘活動のトラブルが発生した際に生徒会の立場で（実力行使を視野に入れた）対応をするためである。

ちなみに部活連からも、実行部隊として人員が回されている。男女総勢20人を4交代ローテーションで本部に常駐させるスタイルで、人数だけを見れば生徒会や風紀委員すら上回る。

昨日のメンバーは達也とあまり接点の無い顔触れだったが、今日は達也もよく知る人物がそこにいた。

「それにしても不思議だよな、去年は取り締まられる側だった俺が、今年は取り締まる側にいるなんてよ」

「先輩、それ自分で言います?」

「桐原、あまり余計なことは言わないでくれ……。変な勘違いをする奴が出たら困る」

剣術部所属である桐原の言葉に、達也は少し、服部は大分呆れを表に出した反応を見せる。しかしそれに対し、彼の返事は「良いじゃねえか、俺達以外誰もいないんだし」と呑気なものである。

と、丁度そのタイミングで3年女子生徒が、小体育館の見回りから戻ってきた。時間的には剣道部の演武が始まったところであり、その1つ前を割り振られていた拳法部はキツチリ時間を守ったようである。

「そういうえば、先輩は剣道部に出なくても良いんですか? 3月は剣術部よりも参加する時間が多かったじゃないですか」

「……よく知ってるな、おまえ」

「先月まで風紀委員でしたので、時々練習を見学していました」

飄々と答える達也に、桐原は「気づかなかったぜ……。」と戦慄と警戒を含んだ眼差しを彼へと向けた。

「別に移籍したわけじゃねえよ。再来週にある剣道部の練習試合に出

させてもらうことになってな、良い機会だから無駄にしたくなかったんだ」

「成程、そういうことですか」

「……とはいっても、まだまだ野原や代々木コージローに挑戦しようなんて気分じゃねえけどな。どうにも俺の中では、中学時代の試合が思ったよりもトラウマになってるみてえだわ」

無理に笑顔を作っているような不自然さで歯を見せて笑う桐原に、達也も深雪もどう返事をすれば良いか分からなかった。

と、服部のデスクに置かれた電話が鳴り、彼がそれを取って短い会話を交わす。

「司波、司波さん。ロボ研のガレージでトラブルが発生した。仲裁に入ってくれ」

「分かりました」

ややこしい呼称で指示を出す服部に、達也と深雪が素早く椅子から立ち上がった。

「ロボ研のガレージですか……。あの辺りには確か、魔法競技系のクラブが無かったと記憶していますが……」

「争奪戦が主に行われるのが魔法競技系だというだけで、他の部活で衝突が起こらないわけじゃないということさ」

ドアへと歩きながら、2人がそんな会話を交わす。

しかし服部の耳はそれを拾い上げ、そして言いにくそうに口元を歪めながらそれに答える。

「いや、確かにきつかけはそうらしいんだが、現在トラブルを起こしてるのはどうやら違うみたいでな……」

「……はい？」

「いい加減にしなさいよ！ スミスくんはロボ研に入るって言ってるでしょー！」

「プレス機の使いすぎで耳がおかしくなったの？ スミスくんはそんなこと一言も言っていないし、先に声を掛けたのはウチなんだから、

そつちこそちよつかい出さないでほしいわ！」

「早い者勝ちとか、小学生じゃあるまいし。時代遅れのレシプロエンジンに脳味噌までシイクされちゃったんじゃない？」

「時代遅れですって!? さすが等身大メカ人形遊びに現を抜かしてる最先端オタクは仰る事が違いますねえ！」

自走二輪部は走ることもよりも自走二輪車を作ったり改造することを目的とする部活であり、元々はロボット研究部と1つだった。しかし移動手段に脚を使うかバイクを使うかで揉めて袂を分かった経緯があり、よつて2つのクラブは日頃から大変仲が悪い。

そんなわけで、ロボ研のガレージ前でロボ研と自走二輪部が1人の新入生を挟んで罵り合いを行うというのは、むしろ自然なことなのかもしれない。もちろん、巻き込まれた新入生には堪ったものではないのだが。

騒動の中心となったその新入生は、プラチナブロンドに銀の瞳に白い肌と大層目立つ外見をし、小柄な体躯と愛嬌のある顔立ちは確かにとても可愛らしい印象を受ける。それこそ女子生徒辺りがマスクトとして狙いそうな「男の子」であり、現に罵り合いの中心は女子部員だ。

しかし彼女達の背後に控える男子部員も、「時代遅れ」だの「オタク」だのといったワードに青筋を立てている。このままでは遠くない内に、全部員を巻き込んだ大乱闘（魔法込み）に発展するかもしれない。

「えつと、あの、僕は……」

そもその原因である、新入生を置き去りにして。

まさに一触即発の空気が充満してきたそこに、真っ先に駆けつけたのは、

「ロボ研もバイク部も落ち着いてください！」

「双方話を聞きますので、まずはそれぞれCADから手を離して！」

新入りらしく張り切った表情の琢磨と香澄が、2つのクラブの間にほぼ同時に割って入った。あまりの勢いに、新入生が弾かれるように集団の輪から外れていく。

そこにやって来たのは、歩いてこの場にやって来たしんのすけだった。新入生が彼の存在に気づき、そしてハツとした表情になって駆け寄っていく。

「あ、あの！　もしかして、野原しんのすけ先輩ですか!？」

「おっ？　オラのこと知ってるの？」

「はい！　去年の九校戦でのモノリス・コードを拝見しました!？」

「ほうほう、それでオラのファンになったということですか？」

「いいえ！　僕は司波達也先輩のファンで、野原先輩は司波先輩のチームメイトとしてついでに憶えてただけです!？」

「随分ハツキリ言うね」

あまりにも正直すぎる新入生の言葉は、しんのすけを思わずツツコミ役に回らせるほどだった。

「あつ！　すみません、自己紹介が遅れました！　自分は1年G組の隅守賢人すみすけんとといひます!？」

「スミス？　もしかして、達也くんのクラスのスミス先生と……」

「はい、そうです！　僕の母です!？」

「やっぱりね、どうりで似てると思つたゾ。——んで、なんでここにいるの?？」

しんのすけとしては単純に尋ねただけなのだが、ケントは「すみません!？」と突然謝つてきた。

「まだどのクラブに入るか決めてなくて、今日は見学だけさせてもらうつもりだったんですけど、それで詳しい話が聞けるといふので中に入ろうとしたら、いきなり後ろから……」

「ほうほう。……つまり、どういうこと?？」

「ええとですね——」

動揺しているためにまるで整理されていないケントの証言にしんのすけが首を傾げていると、まさしく部員達が集まっている場所から言い争う声が飛んできた。

「先に声を掛けたのはバイク部だ！　それを考慮すれば、新入生を勧誘する権利があるのはバイク部というのが自明の理だ!？」

「何言つてんの。バイク部はロボ研の見学希望者をおつ攫つただけで

しようが。だったら先に勧誘できるのはロボ研に決まってるでしょ」
「ロボ研のガレージに入っていたのならそうかもしれないが、バイク部が声を掛けたときはまだ入っていなかったんだらう？ 部活動の実演エリア外で勧誘することに何の問題がある！」

「だーかーらー！ いくらエリア外だろうが、明確に目的地を目指してた新入生を呼び止めて奪い取るのはマナー違反でしょうが！ この頭でつかちが！」

言葉だけ見れば先程のように互いの主張を言い争っているように思えるが、問題はそれを発言しているのが部員ではなく喧嘩を仲裁しに来たはずの風紀委員だという点だ。琢磨はバイク部に、香澄はロボ研にそれぞれ肩入れしたらしく、風紀委員同士で代理戦争を始めた形となっている。

「定められたルールは厳格に守るべきだ！ コロコロと解釈を変えていたらルールを定める意味が無い！」

「画一的に処理するだけじゃ風紀委員の意味が無いでしょうが！ その場その場のケースに応じて頭を使って考えなよ！」

「貴様！ 俺が頭を使っていないとでも言いたいのか!？」

「あらあ、ボクは別にそんな意図は無かったけどお？ そっちがそう解釈したってことは、自分でもそう感じてたってことじゃないのかなあ？」

「ふざけたことを抜かすな！ 俺は貴様みたいに、自分の都合の良いようにルールをねじ曲げる卑怯な考えは持ち合わせていないだけだ！」

「ひ、卑怯だあ!？」

最初は自分に味方する風紀委員を応援していた部員達も、その喧嘩が個人的な内容にシフトするにつれて戸惑いの方が大きくなっていく。

しかし背後にいる部員達のそんな雰囲気も無視して、2人の言い争いはどんどんヒートアップしていった。

「七宝くんさあ、昨日も思ったけど、事あるごとにボクに突っ掛かってくるの止めてくんないかなあ？ それで取り締まりの仕事が中断し

て、みんなが迷惑に感じてるのが分かんない？」

「突っ掛かっているのは七草、おまえの方だろうが。俺の言うことに何でも反対しやがって、俺に喧嘩でも売ってるのか？」

「別に売ってるつもりは無いよ。——買うのはやぶさかじやないけどね」

「ほう……。七宝おれの喧嘩おまえを七草が買うってのか」

琢磨が左袖を軽く引つ張り上げると、プレスレット形態のCADが姿を表した。生徒会役員と風紀委員のみが携行を公式に許される、競技用に場所と用途を制限された物ではない、戦闘行為も可能な自分のそれである。

「そうだね、目一杯買い叩いてあげる。二度と七草わたしに喧嘩を売ろうなんて考えないくらいに」

一方香澄も、右手で左袖を押し上げる。手首の少し上に巻かれている、琢磨のそれよりも小振りでおシャレな、しかし性能的には劣るところの無い最新型のCADをちらつかせる。

「片割れがないようだが、1人で良いのか？」

「何？ 2対1にして負けたときの言い訳が欲しいの？」

琢磨も香澄も、もはや目の前の相手以外目に入っていない。自分達が仲裁しようとしていたロボ研もバイク部もすっかり言い争いを止め、剣呑な2人を前にむしろ冷静さを取り戻していることなど気づく様子も無い。

「の、野原先輩！ 何だか凄く危ない雰囲気になってませんか!？」

「ダイジョーブ。アレ食って痔重なる”ってヤツだゾ”

「悪化してるじゃないですか！ ”雨降って地固まる”ですよ!」

そして2人を監督する立場にあるしんのすけは、慌てふためくケントを横目に腕を組んでその場を動かこうとしなかった。

ロボ研とバイク部、そして騒ぎを聞きつけて集まってきた多数のギャラリーが見つめる中、互いがCADに手を伸ばして魔法による戦闘が始まるうとしていた、まさにそのとき、

「——ちよつと待ったあ！ 2人共、落ち着いて!」

2人の間に割って入ったのは、部活連執行部として校内を見回って

いた2年生の十三束鋼だった。一科生の中でも上位の成績を修める優等生ながらも、試験を受けて今年度から工学科に転籍となっている。

「先輩、邪魔しないでください」

「だから落ち着いて、七宝くん!」

「十三束先輩、七宝くんを庇うんですか?」

「そんなんじゃないって! 七草さんも落ち着いて!」

十三束を挟んだおかげか最悪の事態は免れたものの、険悪な雰囲気は晴れる気配が無い。もはやロボ研もバイク部も、自分達はどうすれば良いのか分からず互いの顔色を窺っている始末だ。

そしてそんな状況になっても尚、しんのすけはそれを眺めるばかりで動こうとしない。

「……しんのすけ、これはどういう状況だ?」

「おっ、達也くんに深雪ちゃん」

部活連本部から出動した達也と深雪が現場に辿り着いたのは、そんなタイミングだった。

*

*

*

部活連本部へと連行された琢磨と香澄は、多くの先輩に囲まれて針のむしろ気分を味わっていた。現在2人以外に同席しているのは、部活連からは会頭の服部と執行部の十三束、生徒会からは2人を連行した達也と深雪、そして風紀委員からは委員長の花音が呼ばれている。ちなみにしんのすけもこの場にいるのだが、彼の場合はどちらかというとなんと2人と同じ立場だ。しかし居心地悪そうに立っている2人に対し、しんのすけは平然とした表情で椅子に座っている。

「香澄も七宝も何やってんのよ……。風紀委員が当事者そつちのけで、しかも魔法を使って喧嘩を始めようとするなんて……」

「2人共、風紀委員が魔法の使用を許されているのは、あくまでも騒動の鎮圧に実力行使が必要だと認められた場合だけだよ。単なる喧嘩の場合、普通に校則違反となる」

花音が溜息混じりで嘆き、十三束が淡々と説明すると、2人は決まり悪げに視線を逸らした。

「まあ、今回はCADも起動していない完全な未遂、それに入学して間も無いということに嚴重注意で済ませるけど、風紀委員としての責任を充分に理解してしつかりと反省しなさいよ」

「……はい、申し訳ございませんでした」

「……申し訳ありませんでした」

花音の決定に、香澄と琢磨が揃って頭を下げた。同席している他の面々からも、特に反対の声は挙がらない。

「2人についてはそれで良いとして……。——野原、なんで2人を止めなかったの？」

普段は「しんちゃん」と呼称する花音が苗字を呼び捨てにしたのは、これが公的な場であることを示したからだ。そのときの声色も、2人に話し掛けたときよりもむしろ鋭さを増している。

もつとも、それで怖がるようなしんのすけではないのだが。

「喧嘩したいんだったら、好きにやらせてあげれば良いんだゾ。達也くんと森崎くんも、桐原くんと紗耶香ちゃんも、そうやって喧嘩をしたからこそ仲良くなったでしょ？」

「なんで魔法の使用を制限してるか分かってるの？ 周りに大きな被害が及ぶ危険があるし、何より本人達が危ないでしょうが」

「そうやって色々と失敗して人は学んでいくんだ、って父ちゃんも言ってたゾ」

「それで取り返しの付かないことになったらどうするの！」

「んもう、心配性だなあ。2人共、子供じゃないんだから」

「高校生は世間一般的には普通に子供なのよ！」

花音が声を荒らげても、しんのすけには暖簾に腕押しとばかりにまるで堪えた様子が無い。それは開き直っているというよりも、本気で自分のやっつてることを間違っているとは思っていない、まさしく本来の意味での「確信犯」だった。

頭痛を覚えたのか、花音が自分のこめかみに指を当てて大きく溜息を吐いた。

「……とりあえず3人共、今日のところは上がって。七宝と香澄は、明日から別の班で動いてもらうから。——そして野原は、新入部員勧誘期間中のシフトから外すことにするわ」

「つまりクビってこと？」

「勧誘期間中はね。それが終わったら、また風紀委員として活動してもらうから」

「ほいほーい。んじや、そゆことでー」

しんのすけはそう言って軽やかに立ち上がり、そのままドアへと歩いていく。

「ま、待ってください！ 野原先輩！」

「し、失礼しますー！」

慌てた様子で琢磨と香澄もその後につき、3人はそのまま部屋を出ていった。

一気に静かになった部屋に、花音の大きな溜息が響いた。

「……達也くん、今からでも風紀委員に復帰してくれない？」

「既に定員が揃ってるので無理ですね」

達也の返事に、花音はガツクリと項垂れた。

*

*

*

その日の夜。

「——っていう感じで、すっごく感じ悪かったんだよ」

「はあ、それは災難でしたね、香澄ちゃん」

七草家の本宅にて、父から「今日は来客があるから」と言われて子供達だけで夕食を済ませた（とはいえ長兄と次兄はまだ帰宅していない）後、香澄は泉美の部屋を訪れて昼間の出来事を愚痴っていた。プリップりと不満をアピールする香澄に、泉美は当たり障りの無い返事をする。

しかし一通り不満を吐き出した後、香澄は途端にシユンと気落ちした仕草を見せる。

「でもさあ、アイツと喧嘩になっちゃったせいで、野原先輩が風紀委員

の仕事を外されちゃったんだよねえ……。それが凄く申し訳なくてさあ……」

「ご本人からは、何か？」

「それ自体は先輩も特に気にしてる様子は無かったかな。でも風紀委員の仕事に関しては何だか思うところがあるみたいで……」

「思うところ？」

「生徒会の司波達也先輩、いるでしょ？ 3月までは風紀委員にいて、野原先輩とコンビを組んでたんだって。その人が抜けてから風紀委員の活動がつまらなくなつた、みたいなことはあの後に言つてたよ」

「別に風紀委員は面白いからやるものでもない気がしますが……」

「うーん、野原先輩が風紀委員辞めちゃつたらどうしよ……。あの人がいるから風紀委員に入ったのになあ……」

香澄がそのような台詞を呟いたことで、泉美はここ数日ずっと気になつてたことを本人にぶつけることにした。

「香澄ちゃん、そもそもなんで野原先輩と一緒に風紀委員の活動をしようと思つたのですか？ まさかとは思いますが、野原先輩に近づいて“力”を利用しようなんて思つてはいないですよね？」

「そんなの当たり前でしょ？ 今までの野原先輩の“逸話”をざっくり聞いているだけでも、下手に関わつちやいけないなんて誰でも分かるよ。——ほら、入学式のときにさ、野原先輩が魔法も使わないでボクを軽くあしらつたでしょ？」

「そうですね。お姉様にお尋ねしましたら、*ぶにぶに拳*”という^{カンフー}功夫の一種だと教えてくださいました」

「いくら魔法師とはいえ、魔法を使わない戦い方っていうのも勉強した方が良くのcaと思つてさ。そうすれば、今日みたいなときにも誰にも怒られずにアイツをボコボコにできるでしょ？」

琢磨に対する怒りがぶり返してきたのか、香澄は近くにあるクッションを引き寄せて軽く数発拳を叩き込んだ。そんな双子の姉の姿に、泉美は苦笑いしながら「魔法を使わなければ良いというわけではないと思いますよ……？」と呟く。

「今日のことを反省してるのなら、少しは七宝くんと仲良くしたらど

うですか？」

「それとこれとは話が別だよ！　そもそもアイツがやたらと喧嘩を売ってきてるんだから！」

「話で聞いている限りでは、単純に2人の馬が合わないだけのようにも思えますが……」

「いいや、違うね！　あれは『七宝』として『七草』に喧嘩を売ってる感じだよ！」

さすがに飛躍しすぎでは、と思ったが、今の香澄に何を言っても聞く耳持たないだろうと口には出さなかった。

香澄と泉美がそんな話をしていた頃、七草家の食堂では当主の弘一が客人を相手にしていた。

「冷めない内にどうぞ」

テーブルの上には前菜から主菜までの料理が並んでいる。1皿ずつ持って来る形式にしないのは内密の会談だという意識があるからであり、だからこそ普段ならば食事の世話をする家政婦すら下げている。

「ありがとうございます。頂戴致します」

そんな内密の会談の相手というのが、女優の小和村真紀だった。

政治家や実業家が相手ならば、特に不思議には感じないだろう。芸能人が魔法師の力を借りるというのも、有り触れているとまでは言えないが珍しいほどではない。しかし単なる芸能界のトラブルに使うには、十師族の力は大きすぎるものだ。

軽い世間話を交えながら、弘一と真紀はメインディッシュまで食べ終えた。彼女としてはもつと何気ない雰囲気ですべて切り出したかったのだが、食事中に彼女が切り込む隙を弘一が見せなかったのである。

「実は七草様のお耳に入れたいことがあります、本日はお時間を頂戴致しました」

結局は居住まいを正してそのように本題を切り出すしかなく、そこ

でようやく弘一も話を聞く姿勢を見せた。彼女が話している間も声を挟むことは無く、話が終わったタイミングでワイングラスを手を取った。

4分の1ほど残っていたルビー色の液体を飲み干し、軽い音をたててグラスをテーブルに置く。

「つまりお父上は、反魔法主義者との密約を反故にされるおつもりだと?」

「はい。反魔法主義は非現実的で有害なプロパガンダだと私は思います。そんなものに与^{くみ}しても自分の首を絞めるだけだということを、父にも分かつてもらいました」

「ありがとう。あなたは理性的な判断ができる方の方ですね」

弘一は軽く頭を下げて、視線で続きを促した。

「魔法の有用性は社会的にもっと評価されるべきだと思います。現在でも産業や映像娯楽などの分野に実戦レベルに達してない魔法師を登用する動きがありますが、残念ながら社会全体ではなく限定的であるのが実情です」

「酔乙女ホールディングスのことですね。確かに世界有数の大企業の手をもつてしても、社会全体の動きに波及させられないというのは色々と考えさせられます」

「私としても、活躍の機会を得られずにいる魔法師の方々に、貴重な才能を存分に奮っていただきたいのです。そのために、きつとご満足いただける報酬も用意しています」

真紀はここで言葉を切つて、弘一の顔色を窺った。

小さく息を吸い、勇気を振り絞っているように見える表情で訴えかける。

「私は魔法師の立場から見れば部外者です。親しくお付き合いさせていただくご縁もまだ持っておりません。ですが私は魔法師の皆様の良き隣人、親しい友人でありたいと思っています。そのことをぜひご理解いただきたいのです」

「だから反魔法主義者の謀略の邪魔をしていると?」

「微力かもしれませんが、少しでも誠意を見せることができればと」

「その代わり、魔法師をスカウトすることを認めてほしい、と?」

「認めるなどと厚かましいことを申し上げるつもりはありません。黙認していただくだけで充分ですわ」

相手に要求を先取りされても動揺を見せない真紀に、弘一は面白そうに笑みを漏らした。

「小和村さん、あなたは女優アクトレスとしてだけでなく、交渉人ネゴシエーターとしても有能な方のようなだ」

褒めているように聞こえる台詞だが、真紀は額面通りにそれを受け止めなかった。

そしてそれは、正解だった。

「ただ、本音を隠すのが上手すぎる。時と場合によっては、自分から本音をさらけ出した方がより多くの譲歩を引き出せるものだ」

「……………」

「あなたの言葉に嘘は無い。だが、それだけが目的ではない。もしそのれのみが目的ならば、先にその活動をしている酔乙女ホールディングスと協力する道を選ぶはずだ。しかし実際にそれをしないのは、もっと直接的な力としても魔法師を集めたいと思っっているから。——違いますか?」

「……………お見逸れしました」

真紀の顔に動揺が走るのも一瞬、彼女は持ち前の演技力で心の乱れをねじ伏せると謝罪の言葉を口にした。弘一の目から見ても、誠意が籠もっているように思えた。

「あなたが我が七草家に所縁ゆかりの魔法師に手を出さない限り、私はあなたの妨害はしません」

「——本当ですか?」

「約束しましょう」

弘一の言葉に、真紀は「ありがとうございます」と頭を下げた。

駆け引き自体は彼女の判定負けだが、結果を見れば彼女は賭けに勝ったのだった。

真紀を送り出した後、弘一は自室に戻って嚴重に鍵を掛けてから電話機を取った。

コールボタンを押して待つこと10秒、卓上のディスプレイに表示されたのは九島老人だった。

「先生、夜分遅くに失礼します」

弘一が九島烈を“先生”と呼ぶのは、かつて彼が四葉深夜・四葉真夜と共に烈の私的な教えを受けていた頃からの名残だ。

『構わんよ。重要な話があるのだろうか?』

「はい、極めて重要なご相談です」

弘一は心持ち身を乗り出してから、話を切り出した。

「実はつい先程までマスコミ関係者の客を迎えておりまして、その話を聞いた感じからするとマスコミに対する工作はかなり進展しているようです」

『君のことだ、今日初めて知ったわけではあるまい。——とりあえず訊いておくが、何を企んでいるのだね?』

昨日今日の仲ではないからか、烈の問い掛けは様々な過程をすつ飛ばしたものだった。

そして弘一も弘一で、まるで動揺を見せずにその問いに答える。

「四葉の力は強すぎる。遠からず十師族の、そして国家のバランスを崩してしまうほどに。先生はそうお思いになりませんか?」

『……反魔法主義者を利用して、四葉の力を削そぐうというのか?』

「一高に第一〇一旅団と縁の深い生徒がいます。十代の少年を預かる高校と軍の癒着、マスコミや“人道派”の政治家が好みそうな題材だと思いませんか?」

『一高には、君の娘達も通っているだろう』

「この場合、生徒は被害者で済みます」

『同じ一高に通う野原しんのすけに対しても、同じことが言えるのかね?』

それまで淀みなく烈の言葉に返事をしていた弘一が、ここで初めて空白の間を生んだ。

そしてその空白に、烈がスルリと言葉を滑り込ませる。

『野原しんのすけと四葉家との間には、何らかの繋がりがある。君がやろうとしていることがどのような結果を生むか、君には予測ができるのかね?』

「それならば尚のこと、野原しんのすけが四葉家に取り込まれないようにすべきでしょう。彼が何者にも縛られず自由でいられるために、四葉を弱体化させる必要があるのです」

弘一の主張に、今度は烈が空白の間を生む番となった。

そしてその際に、弘一が言葉を畳み掛ける。

「それで、如何でしょうか？ 限定的なネガティブキャンペーンを容認することで、反魔法主義の風潮のガス抜きにもなると思います。奴らの狙いはまだ高校生、上手く立ち回れば世論の矛先を反魔法主義に向けることも可能でしょう。十師族にとってメリツトのある計画だと思えますが」

『私は君の計画を認可する立場ではない。そのような権限を手にしたことは一度も無い』

「権限は無くとも影響力はお持ちです」

『……君の計画に反対はしない』

「それで充分です。ありがとうございます」

弘一は満足げに感謝の意を示し、電話を切った。

消える直前の画面に映っていた烈の顔は、年相応に覇気の無いものだった。

第104話 「博士に会いに行くゾ」

4月14日土曜日の夜。

朝から外出していた文弥と亜夜子が家に戻ってきたのは、深雪と水波が夕食を作り終えたまさにそのタイミングだった。2人の帰宅が遅ければ先に食べようと思っていた深雪達だったが、せっかくだからと達也も呼んで5人揃っての夕食となった。

そうして食事を終えて水波が食器洗浄機をセットしたところで、文弥が話を切り出した。

「達也兄さん達のお耳に入れておきたいことがあります」

文弥と亜夜子がリビングのソファーに並んで腰を下ろし、達也と深雪がその正面に座る。メイドとしての自負が強い水波は腰掛けず部屋の端に控えているが、彼女はそちらの方がむしろ気楽なのを知っているため口は出さなかった。

「現在、国外の反魔法師勢力によりマスコミ工作が仕掛けられています」

「どこからだ？」

深雪が驚きで目を見張る横で、達也が表情を変えず即座に尋ねる。

「USNAの“人間主義者”です」

「それならば随分前から国内に侵入しているが、それとは別口なのか？」

「いえ、大本は同じだと思います。新たな工作段階に入ったのではないのでしょうか」

「それがマスコミを使った反魔法師キャンペーンか」

「マスコミだけではありません。野党の国会議員にも手が回っています」

文弥が突き止めた奴らのシナリオは、次の通りだ。

まずは魔法師の人権を大義名分として、魔法の軍事利用を非難する。次に魔法大学出身者の4割が軍に所属していることを根拠に魔法教育機関が軍と癒着しているという架空の構図を作り上げ、第3段階として魔法大学に最も多くの卒業生を送り込んでいる第一高校を

標的に『軍事利用されようとしている子供達の解放』をアピールする、というものだ。

文弥の説明を聞く間、達也は彼に賞賛の眼差しを向けていた。黒羽家は四葉一族の中で諜報を担う分家であり、そのために魔法的なものに限らず様々な情報収集の手段を豊富に有している。とはいえ、使いこなせなければ個々の事象の奥に隠されたシナリオを暴き出すことはできない。文弥達が黒羽家の組織力を使いこなしている証拠だ。

「文弥、よくそこまで調べ上げたな。大したものだ」

「あつ、いえ、ありがとうございます」

「あらあら、紅くなっちゃって。本当に文弥は達也さんが好きなのねえ」

「ちよつと姉さん！ 誤解されるようなこと言わないでよ！」

「あら、誤解なの？ 達也さんのこと、好きじゃないんだ」

「そういう意味じゃなくなつて——」

仲睦まじげにじゃれ合う姉弟の姿を、達也は苦笑気味に、深雪は微笑まじげに、そして水波が若干白けた顔で眺める。

そうして一頻り文弥をからかって満足した亜夜子が、シリアスな空気を取り戻すために軽く咳払いをした。

「とまあ、ここまでならばまだ分かりやすかったです、実際はもう少し根深い問題でして」

亜夜子はそう言うと、携帯端末を操作して画面を達也たちに見せた。

簡素な文書ファイルであるそれに目を通すと、そこには『軍用魔法師の実態』だの『青少年を兵器として徴用する国防軍』だの『魔法師に支配される国防』だの『優遇される魔法士官』だのといった、如何にもセンセーショナルな文字が並んでいた。身を乗り出して覗き込んでいた深雪が、不快感を表すように眉を顰める。

「こちらは来週の頭辺りに発信される予定のネットニュースの原稿で、大手のメディア企業の物は大体揃えてあります。こちらを見て、何か気づくことはありませんか？」

「魔法師と国防軍を結びつけて非難する点では共通しているが、魔法

師を利用する国防軍を非難するものと魔法師が依怙鼻屑されていることを非難するものに分かれているな」

「それはつまり、論調が大きく2つに分かれているということですか？」

深雪の問い掛けに達也が頷き、そして亜夜子が説明する。

「論調が2つに分かれているのは、単純にそれぞれのソースが違うからです。つまり背後には、2つの勢力があるということですね」

「一方が国外の人間主義者だとして、もう一方はどこだ？」

達也の質問に、亜夜子は口を閉ざした。しかしそれは情報を突き止められず答えに窮しているのではなく、その情報を口に出すことに彼女が一瞬でも躊躇いがあったからである。

「2つの論調の内、国防軍を非難している方を背後で煽っているのは、七草家である可能性が非常に高いです」

「なっ——！」

深雪が息を呑むほどに驚くのも無理はない。つまりそれは、日本の魔法界の中心ともいえる十師族が、日本の魔法界に不利益をもたらす輩に与していることを意味するのだから。

「現時点では共謀者がいる可能性も捨て切れませんが、少なくとも七草家が、というよりも七草家当主の七草弘一氏が中心的な役割を果たしていることは間違いないでしょう。さらにこの件につきましても、九島烈閣下にも共謀が持ち掛けられ、そして了承を受けたことを確認しています」

「そんな……！ これらのニュースが、魔法師の権利を代弁しているようで実際は魔法師を社会から排斥することが狙いであるのは明白よ。このような人権擁護に、あのお2人が騙されるとはとても思えないのだけど」

「おそらくそれを分かったうえで、何か別の目的があつてやらせているんだろう」

達也はそう言って、文弥と亜夜子に含みのある視線を向けた。

それを受けて亜夜子は、残念そうに目を伏せて首を横に振った。

「残念ながら、目的まではまだ把握しておりません」

「本当にそうか？——口止めされているのではなく？」

その言葉に、文弥はピクリと肩を跳ねさせ、亜夜子はニコリと愛想笑いを浮かべるに留める。

「どういうことですか、お兄様？」

「2人の諜報能力に疑うところは無いし、黒羽家の組織力も四葉一族屈指のものだ。だが七草家当主はそう簡単に尻尾を掴ませる相手じゃない。例えば七草先輩辺りならば2人でも何とかなるだろうが、七草殿が相手となるとまだまだ2人には荷が重いはずだ。——つまり彼に関する情報は、黒羽とはまた『別の手段』で手に入れたものだと俺は思ったが、違うか？」

鋭い目を携えた達也の問い掛けに、亜夜子は小さく溜息を吐いて肩を竦めた。

「達也さん相手に隠し事など、あまりするものではないですね」

「それで、具体的な内容については教えてもらえないのか？」

「申し訳ないのですが」

「こうして同じ屋根の下で暮らすようになったところで、結局は叔母上の掌の上ということか」

「ご当主様にも、色々と考えがお有りなのでしょう。少なくとも今言えるのは、1ヶ月以内のごく近い将来に第一高校が反魔法勢力下にあるマスコミと政治家から直接的なアタックを受ける、ということくらいです」

亜夜子の言葉に、今度は達也が小さな溜息を吐いた。文弥と亜夜子を見遣る達也の目には同情にも似た感情が見て取れ、そしてそれは彼を見つめ返す2人も同じことだった。

「まあ良い。具体的な動きがあれば教えてくれるんだよね？」

「はい、もちろん」

「分かった。だったらそれで良いさ」

達也のその台詞には、今のところはな、という言葉が後ろに付いているような雰囲気があった。

ニコリと笑う亜夜子だったが、体が強張るのを誤魔化すことはできなかった。

*

*

*

4月18日水曜日。

場所は、国立魔法大学。

国立魔法大学は、国防軍旧練馬基地跡に造られている。朝霞基地を拡張して練馬基地を吸収合併したことで空いた土地を利用した格好だが、魔法大学建設計画の決定によって基地の統合が急がれた側面もあり、そういった面から見ても大学と軍の関係は密接なものと言える。

とはいえ、魔法大学卒業生の4割近くが軍及びその関係機関に進む理由がそこにあると結論づけるのは些か早計だ。魔法師の社会的需要を考えれば多少偏りすぎではあっても不自然な範囲ではないし、学内の雰囲気もそれこそ普通の大学とほとんど変わりなく、何なら魔法科高校よりも自由な空気があるほどだ。

そんな大学内にある、カフェテリアの或るテーブル席。現在そこには2人の人物が向かい合わせに座り、そしてそんな2人にカフェを利用する学生がチラチラと興味ありげに視線を遣っている。

1人は、Aライン・パステルカラーのベアトップワンピースに七分袖のカーディガンというスタイルの七草真由美。

そしてもう1人は、ノーネクタイのカジュアルスーツというスタイルの十文字克人。

魔法大学では知らぬ者はいない「十文字」と「七草」の直系、しかも真由美は世間的には克人の花嫁候補と噂されていることもあり、どんな会話を交わしているのか気になるところだろう。しかし現在のそのテーブルは、魔法大学によって使用を許可された魔法の1つである遮音フィールドに包まれており、2人の会話を外から聞くことはできなくなっている。

「……十文字くん、いくら何でも今のは聞き捨てならないわ」

しかし現在そのテーブルで交わされている会話は、けっして周りの学生が想像するような甘いものではなかった。むしろ克人を睨みつ

ける真由美によって冷え切っている。

テーブルの上に置かれた電子ペーパーの内容は、今週の頭から急激に増加し始めた反魔法師報道だ。克人は真由美をここに呼び出したうえで、今回の報道工作に七草弘一が荷担している可能性が高いことを彼女に伝えたのである。

「確かにウチの父は裏工作が好きで謀略家だし、何を考えてるのか娘の私にも分からないところがある。でも、どんな理由があろうと十師族の役目を忘れるような人じゃないわ。日本魔法界に不利益をもたらすような真似をするはずがない」

「では、七草殿はそれが日本魔法界の利益になると考えられたのだろう」

「……魔法師排斥の意図を分かっただうえで、何か別の目的のためにやらせていると言いたいのか?」

「それが何なのか、俺には分からん。我が十文字家は、情報収集があまり得意ではない」

真由美がいくら睨みつけようと、克人の瞳には一切揺らぎが無かった。

しばらくそれを続けていた真由美だったが、やがて観念したように小さく息を吐いた。

「……良いわ。十文字くん、今夜何か予定ある?」

「いや」

「だったらウチに来てくれないかしら? 直接父に訊いてみるから立ち会ってくれる?」

「何を訊くの、真由美ちゃん?」

「そんなの決まってるでしょ、しんちゃん? あの狸親父が何を企んでるのか直接——って、しんちゃん!?!」

突然横から聞こえてきた問い掛けに何気なく答えていた真由美だが、ふと我に返って自分のすぐ隣に座っていたしんのすけに驚きの声をあげた。

「いやあ、真由美ちゃんに克人くん、お久しぶりぶりですなあ」

「ぶりぶりって……! なんてしんちゃんがこんな所にいるのよ!?!」

「近くを通つたら2人を見掛けたから、挨拶でもしようかと」

「——というか、十文字くんもしんちゃんが近づいてるなら教えてよ！」

「すまない。七草の話の腰を折るのも悪いかと思つてな」

平然とした表情でそう言い放つ克人に、真由美は呆れやら怒りやらを緬い交ぜにして大きな溜息として吐き出した。

「それにしても克人くんを自分の家に呼ぶなんて、真由美ちゃんも大胆ですなあ」

「言つておくけど、しんちゃんが考えてるような理由じゃないから。——というか、そんなことよりしんちゃんよ。なんであなたが大学に來てるの?」

「いやあ、借りたい物があつたからお願ひしたら『仕事場にあるから取りに來い』つて言われたもので」

「借りたい物?。ここが仕事場つてことは、大学の職員つてこと?」

真由美の問い掛けに、しんのすけは「そうかも、よく知らないけど」と漠然とした回答を返す。その遣り取りを眺める克人も、表面上は平然としながらも内心は興味津々だ。

そんな2人に対して、しんのすけはその人物の名前を口にした。

「——大袋博士おおふくろつていうお爺ちゃんなんだけど、知ってる?」

世間一般において、“大袋”と名のつくその科学者はほぼ無名だ。

1925年4月1日北海道千歳市生まれ、東京大学・マサチューセツ工科大学・ニューヨーク工科大学と学歴こそ華々しいが、どこの教育機関や研究機関にも所属せず、誰もが知る何かを発明したわけでは無く、学術的にも重要な法則を発見したということも無い。

しかし、しんのすけの正体を知る世界中の有力者達に限定すると、

“大袋博士”の知名度は一気に跳ね上がる。

20世紀の終わり頃、秘密結社“ブタのヒツメ”が或るコンピューターウイルスを用いて世界征服を企んだ。当時最高峰の演算能力を有するスーパーコンピューターで世界中のパソコンや衛星をハツキ

ングして発信される予定だったそのウイルスは、自分の意思を持ち、更にはパソコンの画面から現実世界に顕現するというトングデモ技術の塊でできた存在だった。

最終的にその計画はしんのすけ達の活躍によって阻止されたが、もし実行されれば間違いなく世界はブタのヒツメに牛耳られていたことだろう。

それほどのコンピューターウイルスとスーパーコンピューターを作り出したその人物こそ、まさしくその大袋博士なのである。

魔法大学内の様々な研究室が並ぶ建物の廊下を、しんのすけが先頭に立ち、真由美と克人がその後ろをついて歩いていく。十師族の一員である2人を(世間一般的には)無名の少年が引き連れるその光景は、見る者が見れば目を丸くして驚くに違いない。

「おつ、ここかな？」

とある部屋の前でふいにそう言って立ち止まったしんのすけに、真由美と克人が揃ってドアの脇に提げられた表札に目を遣る。

その表札には、直筆で「滝口^{たきぐち}」と書かれていた。

2人が内心で首を傾げる中、しんのすけはドアをノックもせずいきなりドアを開けた。

「どもども、お邪魔します」

「邪魔するんやったら帰って」

すると中から返ってきたのは、しんのすけの言動を咎める声ではなく、一部の者達の間ではテンプレとなっているお決まりのものだった。現にその声色に機嫌を損ねた様子は無く、むしろ若干楽しそうに弾んでいるようにも聞こえた。

その部屋は、一言で表すならばとても散らかっていた。現代ではほとんどの書籍が電子化しているため紙媒体の本が無くても珍しくないのだが、壁際の本棚だけでなく部屋の中央にあるテーブルにも開きっぱなしの本や紙の書類が散乱しており、更にはその一部が床の上にまで浸食している。特に一番奥のテーブルはより深刻な状況で、いつ崩れるか分からない本のタワーが幾つも形成されていた。

そしてそんなタワーの向こう側から顔を出すのが、部屋の主である

老人だった。頭頂部は禿げているが真っ白い眉と髭は伸びきっており、目や口を覆い隠しているため表情が読みづらい。

更にその老人の隣には、俗にいう「バーコード」の髪型をした小太りの人物がいた。生物学上は男性なのだろうが、化粧やアクセサリーで自身を着飾っているところを見るにセクシャルマイノリティの気が感じられる。

「おっおっ、しんのすけくん。こうして顔を合わせるのは何年振りかろう」

「いやあ、お久しぶりぶりですなあ」

「それにしても、しんちゃんったら大きくなったわね〜！ でも私としては、あなたのお父様みたいにくたびれた感じの方が好みかしらあ！」

「アンジェラちゃんも相変わらずですなあ」

老人は椅子から下りてテーブルの前まで歩いてしんのすけを出迎え、アンジェラと呼ばれたオカマも彼の来訪を満面の笑みで歓迎する。

ちなみにその遣り取りを若干距離を空けて眺めていた真由美は、口をあんぐりと開けて大きく目を見開いていた。普段から感情をあまり表に出さない克人ですら、彼女の隣で普段より大きく目を開けて驚きを露わにしているほどだ。

「あれっ、真由美ちゃんも克人くんもどうしたの？ 鳩が鉄砲玉になっただみたいな顔して」

「〃鳩が豆鉄砲を食らった〃ね。——って、そうじゃなくて！ えっ!?! 滝口博士と大袋博士って同一人物だったの!?!」

「おおっ、そうだった！ ねえねえ博士、なんで〃滝口〃なんて偽物の名前使ってるの？ そのせいでオラ、ここまで来るのにあちこち歩き回ったんだゾ」

しんのすけの言葉に大袋が「そりやスマンのう」と返事をしてから、真由美の疑問に答えるべく彼女へと向き直った。

「その様子じゃと、気づいとはらんかったようじゃのう。儂もまだまだ捨てたモンじゃないわい」

「ほら、また『ブタのヒツメ』みたいな奴らに誘拐されなくても限らないでしょ？ だから博士、あれから何か研究成果を発表するときには偽名を使うようにしてるのよ。あるいは、手頃な身代わりを立てたりしてね」

「儂が今この大学に客員教授として呼ばれたのも、『滝口』って名前ですら発表した幾つかの研究成果が認められてのことらしい。——まあ、何の研究かは忘れたんじやが」

大袋の発言に真つ先に反応したのは、なぜかひどく驚いた様子のも由美だった。

「いや、滝口博士といえば、日本どころか世界の現代魔法の歴史で外すことのできない超重要人物ですよ！ 何てったって、私達が今使ってるCADを世界で初めて形にしたんですから！」

術式補助演算機、英名でCasting Assistant Device、通称でCAD。

魔法を発動するための起動式を魔法師に提供する補助装置であり、『感応石』という合成物質によつてサイオン信号と電気信号を相互変換することで魔法師と疎通する仕組みだ。CADが無ければ魔法を発動できないわけではないが、CADによつて魔法発動速度を飛躍的に向上させている現代魔法師にとつては実質必須ツールとなっている。

そして現代魔法師にとつて『滝口博士がCADを世界で最初に作り上げた人物だ』というのは、もはや魔法歴史学で最初に学ぶレベルで常識となっている。そもそも『感応石』という物質自体が滝口博士の発明であり、まさに滝口博士によつて現代魔法の歴史は始まったといつても過言ではない。しかし今まで滝口博士が人前に出ることはまず無く、一時期その存在すら怪しまれるほどだった。

そんな歴史的人物が今年になつて魔法大学に客員教授という形で所属することになったというニュースは、日本を飛び越えて世界中に衝撃を与えた。しかもそれを知らされたのが入学式の最中であり、壇上で挨拶をする博士の姿に新入生からのどよめきは収まらなかったらしい。

「ああ、そうじゃったな。いやあ、趣味で研究していたヤツがなかなか形にならなくてな、手つ取り早く金が欲しかったから当時流行だった現代魔法研究に手を出してみたんじゃ。おかげで結構稼がせてもらったわい」

「小遣い稼ぎ感覚で世界的な発明をするなんて、本当にしんちゃんの知り合いって規格外な人達ばかりね……」

「そういう嬢ちゃん達は、どうやら『大袋』としての儂を知ってる感じじゃの。七草に十文字……成程、例の研究所由来の末裔というわけか」

普通の人間が聞けば何てことない単語に、真由美と克人がピクリと反応した。

「……大袋博士は、魔法技能師開発研究所での研究に参加されたご経験が？」

「さすがに全部じゃないがの。せいぜい半分くらいじゃし、大体は訊かれたことに意見を言っただけじゃ。——じゃが、『四』には割と深く関わった記憶があるのう。アレはなかなか楽しかった」

「——↓」

あつけらかなとした感じで言い放つ大袋に、真由美と克人は背筋に寒気が走る心地がした。

魔法技能師開発研究所の中で現在でも稼働しているのは半数のみであり、戦時中は黙認されてきた非人道的な研究を続けてきた研究所から次々と閉鎖されてきた経緯を持つ。その中でも第四研究所は特に悪名高く、その研究所から輩出された四葉家に恐怖を覚えぬ魔法師はいないとさえ言われている。

そんな研究所に関わり、そして懐かしむような口振りで「楽しかった」と感想を述べる大袋に、真由美などはまるで人間ではない何かを見るかのような視線を向けていた。

「そんなことより、オラが頼んでたヤツってどこにあるの？」

「ん？ ああ、アレじゃな。ちよつと待つとれ」

だがしんのすけの呼び掛けによって、大袋の雰囲気は途端に普段の呑気なものへと戻った。まるで先程までのシリアスな雰囲気が幻

だったかのような変わり身で、部屋の奥に積まれた書物を次々と脇に避けていく。

そうしてしんのすけの前に差し出されたのは、見た目には何の変哲もないジュラルミンケースだった。

「使う場所は選ぶことじゃ。下手に使えば、自分も巻き込まれるぞ」

「ほっほーい！ どうもどうも。それじゃ、少しの間借りてくね」

「ちよ、ちよつと待って、しんちゃん！」

用事は済んだとばかりにそのまま部屋を出ていこうとするしんのすけを、真由美が慌てた様子で引き留めた。

「そのケースの中に入ってるの、もしかして博士の発明品？ 何に使うの？」

「えつとね——」

「しんのすけくん、その嬢ちゃんと坊ちゃんには内緒での」

「えっ？ なんぞ？」

しんのすけの疑問は、そのまま真由美と克人の疑問でもあった。

警戒心を露わにする真由美と、表情の変化に乏しく「滲ませる」程度の克人の視線を受けながら、大袋は声に喜色を含ませて答える。

「正直、儂の立場でその発明品の存在を知られると少々面倒臭いんでな」

「ちよつと待ってください、滝口……大袋博士。あの発明品は、結局何なのですか？」

「さあ、何じやろうの？ ホツホツホツ」

大袋の煙に巻く応答に苛立ちを覚える真由美だったが、すぐに気を取り直してしんのすけへと向き直る。

「しんちゃん、私にもそれを見せてくれない？」

「ええつと——」

「しんのすけくん。黙っててくれたら、この前話してた『伝説の写真集』をしばらく貸してやっても良いぞ」

「ほっほーい！ それじゃ真由美ちゃんと克人くん、またねー！」

「あつ、ちよつとー！」

真由美が呼び止める暇も無く、しんのすけはスーツケースを抱えて

勢いよく部屋を飛び出していった。2人が彼の去っていったドアを見つめる中、大袋は「ふー、やれやれ」と腰を叩きながら自分の椅子へと戻っていく。

真由美も克人も、元々はしんのすけについていくことでこの研究室にやって来た。つまり彼がいなくなつたことで2人がここにいる理由も無くなり、よつてそのままの流れで退出するのが自然だろう。

しかし真由美は、この質問をしない限りはそのまま退出する気になれなかった。

「博士、お尋ねしたいことがあります」

「言ってみい」

「なぜ博士は、魔法技能師開発研究所にご参加なさつたのですか？」

CADのように金銭に繋がる研究とも思えませんが、純粋な好奇心によるものだったのでしようか？」

「確かに、好奇心があつたのは確かじゃな。——純粋な、と呼べるかは知らんが」

その答えに真由美の疑問が晴れないのを感じ取つたのか、大袋はそのまま続きを話し始めた。

「現代魔法の原点である超能力が観測されてから、世界中でその実用化に向けた研究が行われておつた。最初の内は魔法技能の開発じゃつたが、実験の内容は次第に魔法師の開発——つまり“人間の改造”へと移っていった」

「……………」

「超能力が遺伝するものだというのは既に分かつておつてな、魔法の開発はすなわち“優れた血筋”の開発じゃつた。“交配実験”の名の下に先進国では人工授精による試験管ベビーの大量生産、後進国では国家公認の強姦が罷り通つておつた」

真由美が思わず手で口を押さえるが、大袋の話は尚も続く。

「複製卵子から生まれた子供は、なぜか全員が幼い内に死んでしまつた。オリジナルの卵子から生まれた子供はそうでなかったから、おそらく生殖細胞複製技術に問題があつたんじゃろう。儂が担当したのはその複製技術の改良、そして研究所ごとの卵子と精子の正しい組合

わけを解析するゲノムマップの作成じやった。——自分で言うのもアレじやが、儂のおかげで“無駄な実験”が大分減ったという自負はある」

「……生意気な口を利いてしまい、申し訳ございませんでした」
「構わん、当然の反応じやろうて。別に儂も、使命感などで動いとったわけでもないからの」

終結というよりは自然消滅といった感じに会話が途切れ、真由美と克人は今度こそ研究室を後にした。

「それじゃ博士、アタシはお茶を淹れてくるわね」
「おお、頼んだぞ」

そうしてアンジェラが部屋の隅にある給湯コーナーに行くと、大袋は背もたれに体重を掛けてゆつくりと息を吐いた。

思い起こすのは、先程話した研究のこと。

大袋が作成したゲノムマップを基にして生み出されたのが“魔法師の名門”であり、その代表が真由美達“十師族”であるが、日本が世界で最も整理された形で血筋を生み出したのは、国家がお見合いのお膳立てをして自主的に婚姻を結ぶよう仕向ける方法を取りやすかったという文化的背景によるものだ。

散々人間性を踏み躪ってきた魔法開発が最終的に文化的要因によつて左右される結果となったのは、人間性が最後に意地を見せたからなのか。その審判が下されるのは、おそらく今後の歴史に委ねられることだろう。

いや、そんなことよりも、

——ゲノムマップを作成した儂じやから分かる。しんのすけくんの強大な魔法力は、あのゲノムマップでは説明がつかん。もちろん儂のマップが完璧とは思わんが、少なくとも彼の魔法力が十師族を頂点とするコミュニティとは別物であることは確かじゃ。

別物とはいっても、汎用的な魔法は使えることから根つこの部分では繋がっているのだろう。例えるならば、幹は共有しているが枝葉の部分で異なるといったイメージだ。なので別物だからといって即座に異分子だと断定できるものではなく、特に気にする必要の無いこと

だと結論づけることもできる。

とはいえ、この事実はゲノムマップを直接閲覧できる者ならば辿り着けるものだ。

それこそ、研究所のデータを閲覧できる立場にある二十八家などは。

——はてさて、これからどうなっていくことやら。

窓から差し込む麗らかな春の陽気に包まれながら、大袋はそんな感想で思考を打ち切った。

第105話 「実験の準備をするゾ」

世間では魔法師に対する風当たりが日増しに強くなっているが、学校という一種の自治領域として世間からある程度隔離された場所では、今のところ平穏な空気に包まれている。しかし勘の良い者は、それが嵐の前の静けさであることを何となく感じ取っていたことだろう。

4月20日、金曜日。始業前の生徒会室にあずさと五十里を呼び出した達也の口から、まさにその嵐の到来を告げる報せがもたらされた。もつとも達也としては、前日の夜に亜夜子から聞かされた事実をそのまま伝えただけであり、けっして自分がもたらしたとは思っていないのだが。

「4月25日、来週の水曜日に民権党の神田議員が第一高校に視察に訪れることが分かりました」

「えっ、神田議員が!? それは一大事じゃないですか!」

一番大きな反応を見せたのは、椅子を蹴る勢いで立ち上がったあずさだった。字面だけ見れば学校に有名人が来ることに過剰反応してするように思われるが、彼女はけっしてミーハーな心持ちで“一大事”と称したわけではない。

神田議員は野党である民権党に所属する若手政治家であり、国防軍に対して極端に批判的な人権派として知られている。それは危険な任務に就かされる魔法師の人権を保護するためとしてメディアで度々取り上げられているが、実際は国防軍から魔法師を排除するのが目的であることは少し注意深い人間であれば誰にでも分かる、と達也は思っている。

ちなみに達也が初めて神田議員来訪の報せを聞いたとき、あまりに意外性が無さすぎて拍子抜けしたほどだった。魔法師に対する非難のニュースが急激に増えた今週になってマスコミの露出が増えている時点で、あまりにもあからさまに過ぎるというものだ。

「それで司波くん、目的は何か分かっているのかな?」

「残念ながら、詳しくは。分かっているのは、普段から行動を共にする

ジャーナリストを多数引き連れるということだけで」

「成程、いつものパフォーマンスの一環というわけか。そしてそれを、取り巻きのジャーナリストが何十倍にも膨らませて騒ぎ立てると」

普段の五十里らしくない棘のある言葉に、いつも通り彼にくっついて来た花音が首を傾げる。

「うーん、そんなに慌てることかな？」

「これは由々しき事態だよ、花音。彼の目的は、軍が魔法師を活用するのを妨げることだ。それが世間の多数派になれば、僕ら魔法科高校生が卒業後の進路に防衛大を選ぶことも、魔法大学の卒業生が国防軍に入隊することも禁止されるだろうし、それこそ僕らが国防に関心を持つことすら制限しようとするだろうね」

「思想統制しようってこと？」

五十里の言葉に花音も事の重大性が分かったようで、先程よりも真剣な面持ちとなった。

それを確認したうえで、五十里の視線が達也へと移る。

「それで、司波くんはどうするつもりなの？ 何かアイデアがあるから僕達を呼んだんでしょ？」

その問い掛けに達也は頷き、彼の背後に控えていた深雪があずさと五十里に電子黒板を手渡した。それに目を落として中身を確認し、そして徐々にその表情が驚きに染め上げられる。

「彼らは魔法科高校が軍事教育の場と化しており、学校が生徒に軍属となることを強制している、と非難したいわけです。ならば軍事目的以外にも魔法教育の成果が出ていると示せば良いと思われます。そこで神田議員の来校に合わせて、少し派手なデモンストレーションをしようかと」

「……少し？」

「……これが？」

色々と言いたげな2人に、達也はシレッとした顔で答える。

「準備は大掛かりですが、デモ自体は普段から行われている放電実験や爆縮実験と大した違いはありませんよ」

「見た目だけなら、確かにそうかもしれませんけど……」

「意味はまるで違うよ、司波くん……。いや、だからこそ効果は抜群だろうけど……」

五十里は独りごちるようにそう言って、再び電子黒板へと視線を落とす。

達也がこのデモンストレーションで取り上げるのは、加重系魔法三大難問の1つである。『常駐型重力制御魔法式熱核融合炉』だ。といても実物を作るのではなく、あくまで実現の可能性を派手に分かりやすく演出することを目的としている。

重力制御魔法式熱核融合炉といえば、去年の論文コンペで鈴音が研究テーマとして挙げたのが記憶に新しい。しかし鈴音の考案した『断続型』とは違ってこちらは『継続型』であり、アプローチとしてはまるで逆だと言って良い。

しかし、取り出せる時間単位のエネルギー量はこちらの方が桁違いに大きい。『恒星炉』とも呼ばれるそれが実現すれば、昼夜の区別無く、気象条件に影響を受けずにエネルギーを供給することが可能となる。魔法の平和利用を主張する、この上ないデモンストレーションとなるだろう。

「成程、よく分かりました。私は司波くんの計画に協力したいと思えます。五十里くんはどうでしょうか？」

「僕も協力するよ。恒星炉の公開実験なんて、神田議員対策とか関係無く、魔法技術者を目指す者としてぜひとも関わっておきたいからね」

「ありがとうございます」

あずさと五十里の力強い言葉に、達也と深雪が深々と頭を下げた。

ちなみに途中から蚊帳の外だった花音は、最後までちんぷんかんぷんな様子だった。

「会長達の協力が得られて良かったですね、お兄様」

「まだ安心はできないけどな。次は学校からの許可を貰わないと」

生徒会を後にして廊下を歩く深雪と達也が、そのような会話を交わ

していた。

課程外で実習を行う場合、クラブ活動であれば顧問教師、それ以外の自主的なものであれば担当教師に許可を取る必要がある。魔法工学科に所属する達也の場合、その相手はジェニファー・スミス女史となる。

とはいえ達也の印象としては、彼女は『実際に安全かどうか分からないので、実際に安全かどうか確かめる実験を中止します』などという本末転倒な考えとは無縁な人間だと思っている。実験の内容が内容なので即決されるとは思わないが、悪いようにはならないだろうと考えている。

そんな達也に対し、深雪が疑問を投げ掛ける。

しかしそれは、実験が無事に許可されるだろうか、という類のものではなかった。

「神田議員や取り巻きのジャーナリストと一緒に、かねありでんき『金有電機』の社長も来校することはお伝えしなくて宜しかったのですか？」

それは昨日の夜、亜夜子から神田議員来訪の情報と共に伝えられたものだった。

達也にとって、金有電機は単なる大企業ではなかった。去年の九校戦、裏社会の人間達を相手に「無頭竜」が主催していたトトカルチョに参加していた1人の男。彼が過去に勤めていたのが金有電機であり、故に一高選手を襲った一連の事件の関与が疑われている。

深雪の疑問に、達也は歩みを止めることなく答える。

「別に何か理由があつて隠したわけじゃない。彼が居ようが居まいが、俺達のやることに変わりはないさ」

達也のその言葉に、深雪はそれ以上何も言わなかった。

*

*

*

その日の放課後、学校から実験の許可が下りた。『教師の監督下で行うこと』という条件付きではあったが、達也としても生徒だけで行わせてもらえるとは最初から思っていなかったので問題は無い。ちな

みに監督役には、甘樂つづらが選ばれた。

そしてその日の内に、実験に参加するメンバーも決められた。要となる重力制御は深雪、クーロン力制御は五十里、中性子バリアは水波、フォースウェイブシフト第四態相転移を泉美と香澄の2人に、ガンマ線フィルターをほのか、全体的な流れの管理をあずさが担当する。また実験装置の製作には魔工学科のメンバーから何人か、また1年生からも魔工師志望の生徒を参加させることにした。

準備期間は、21日から24日までの4日間。論文コンペと比べると時間不足に過ぎるし、そもそも神田議員の来訪は本来知らないはずなので準備も大々的に行えず、よって全校生徒を総動員するわけにもいかない。

とはいえ、今回は構造物としてのエネルギー炉を用意するのではなくその仕組みを見せるための実験であり、故に装置もある程度は簡略化することができる。準備が着々と進んでゴールが見えてきたところで、最初は焦りと不安を募らせていたメンバーも徐々に落ち着きを取り戻していった。

どうしてこうなった、と言わんばかりの困惑顔ながら一時も手を休めず作業を進めた平河千秋、全体像が見えるにつれて手応えを感じていった十三束とみつか、終始達也に憧憬の眼差しを向け続けていた隅守賢人スミスケットの活躍もあり、装置は無事に完成した。

そして4月24日火曜日の放課後、放射線実験室で最終リハーサルが行われた。耐圧性の高い透明な高強度耐熱樹脂で作られた球形の水槽に、重水50%軽水50%の混合水を注入する。大量の重水を確保できたのは、甘樂が自身の持つコネをフル活用した結果といえる。

「じゃあ始めよう。深雪」

「はい」

達也の呼び掛けに深雪が反応し、重力制御魔法が発動。

「香澄、泉美」

「第四態相転移、行きます」

双子の姉妹が声を揃えて、第四態相転移魔法を実行。

「ほのか、水波」

「ガンマ線フィルター、有効です」

「中性子バリア、固定しました」

彼女達の申告に、達也も自身の「眼」で確認してから深雪に呼び掛ける。

「深雪」

「焦点を設定しました」

全ての準備が整ったところで、達也が五十里に視線を向ける。

「五十里先輩」

「電磁的斥力中和、スタート」

そうして最後の安全弁が解除され、計器前に陣取るメンバーからチエックの音が飛び交った。

「重力場安定度、問題無し」

「ガンマ線、計測誤差未満」

「中性子線、計測誤差未満」

「……………」

その声を聞きながら、達也は己が夢の第1歩を冷静に見つめていた。

一方その頃、生徒会室。

「達也くんたち、実験上手くいってるかな」

「……………どうでしょうね」

ソファーに寝転がって携帯端末でゲームをしているしんのすけの言葉に、会議用の椅子にきちんとした姿勢で座る琢磨が曖昧ながら答えた。

本来この部屋にいるはずの生徒会役員は実験に参加しているため、もし緊急の連絡が生徒会室に入ったときには誰も対処できなくなってしまう。そうならないよう生徒会室で待機する要員を風紀委員から出しているのだが、この日の当番がちょうどこの2人だったというわけだ。

しんのすけは特に会話をするつもりは無かったようで、そのまま

ゲームの世界へと意識を戻す。そんな彼を琢磨がチラチラと見遣り、やがて意を決したように口を開いた。

「——司波達也先輩、この学校ではちよつとした有名人だったんですね。いえ、この学校だけでなく、他の魔法科高校でも先輩の名が知れ渡ってるようで」

「去年の九校戦で大活躍だったからね、達也くん」

「ええ、そのようですね。自分は魔法工学技術には疎いもので、気づくのが遅れてしまいました。——もし気づいていたら、あの『七草』に誑し込まれるのを防げたというのに」

後半部分の台詞に、しんのすけは怪訝そうな表情と共にゲーム画面から琢磨へと視線を移した。

「野原先輩。七草はマスコミがやって来るこの機会に、司波先輩を利用して自分達の名前を売るつもりなんですよ。まったく、七草らしく小賢しいやり方ですよ」

「名前を売るって、何のために？」

「そりやもちろん、今度の『十師族選定会議』でも十師族に選ばれるためにですよ！ あいつら七草は、いつもそうやって他の魔法師を出し抜いて自分達が得するように立ち回ってるんだ！」

「ほーほー」

気の抜けた声でしんのすけがこういった反応を示すのは、大抵その話題に興味がないときだ。しかし琢磨は、それに気づく様子も無く捲し立てていく。

「そもそも七草は、^{アイツら}最初からそうなんだ！ あいつらがまだ『三枝』^{さえぐせ}だった頃、第三研の最終実験体でありながらそこを抜け出し、七宝が基礎理論段階から開発に携わってきた『群体制御』を盗み取ったせいで、今や七草は十師族の中でも頭一つ抜き出た存在になっている！」

「ほーほー」

「三矢も三日月も七夕も七瀬も、^{アイツら}に纏めて虚仮にされてるのに平然としていやがる！ 俺の親父もだ！ 次の師族会議まで1年を切ってるってのに、このままじゃまた七草に十師族の座を搔っ攫わ

れて、七宝はアイツらの下風に甘んじなければならなくなるってのに――」

「琢磨くん」

真剣さが声からでも伝わってくるしんのすけの呼び掛けに、琢磨がハッと我に返ったように発言を止めた。

「も、申し訳ありません、野原先輩。カツとしてつい余計なことを――」

「ジユツシゾクって何？」

「えっ!? そこからご存じないのですか!？」

魔法師の世界では十師族の仕組みはもちろん、十師族の現当主の氏名すら一般常識である。魔法科高校に通っておきながらそのような知識も持ち合わせていないしんのすけに、琢磨は素直に驚きを露わにした。

しかし彼が冗談ではなく本気で疑問に思っていると感じ取った琢磨は、多少戸惑いながらも説明することにした。

魔法技能師開発研究所出身で番号を剥奪されずに残った28の血統である「二十八家」から、4年に一度開催される「十師族選定会議」で選ばれた10の家系。それが「十師族」である。

九島烈によって確立された制度であり、組織の目的は魔法師の「人として生きる権利」を守ることに。魔法師の利害を代弁する組織としては「日本魔法協会」が存在するが、協会は公式の組織として政府の意向を無視することができないため、魔法師が国家権力に使い潰されないよう対抗するために作られた、という経緯を持つ。

十師族は私的な枠組みであるが、日本国内の魔法師は現代・古式問わず十師族をリーダーとする魔法師のコミュニティに所属し「十師族体制」と呼ばれる自治に従っている。故に魔法師の中には『十師族が日本魔法界の支配者である』と意識している者も少なからずいるようだ。

「とにかく七草は、その十師族に残るためなら何だってやる奴らなんです！ アイツらのせいで、俺達七宝はアイツらのサポート役である「師補十八家」に甘んじること……!」

「うーん。でもさ、そのジュツシゾクって28人から10人を選ぶ決まりなんでしょ？ いつも選ばれてる1人が頑張ったからって、それで琢磨くんの家が選ばれないこととは関係無くない？」

「いや、アイツらは最早そういう問題ではないんです！ アイツらの横暴を今の十師族が放置していることが、俺には我慢ならないんですよ！」

「ふーん」

小難しい表情で腕を組んで考え込むしんのすけに、琢磨が尚も話し掛ける。

「とにかく野原先輩！ 七草の奴らには注意してください！ アイツらだって、心の中では先輩の“力”を利用してるとしてると違くない——」

「琢磨くん」

まだ台詞の途中ではあったのだが、しんのすけがふいに呼び掛けたことで琢磨が咄嗟に発言を中断する。

「琢磨くんはさ、そのジュツシゾクってのになりたいの？」

「ええ、もちろんです！」

「なんで？」

「——へっ？」

投げ掛けられたその疑問が、琢磨の心に空白を生む。

その空白に、しんのすけの言葉がスルリと入り込む。

「ジュツシゾクっていう偉い人になって、それで琢磨くんは何がやりたいの？」

「いや、俺はただ……、それが目標で頑張って——」

「なんで頑張ってるの？」

「え、それは……。二十八家に生まれた以上、国のリーダーとして相應しい強さを手に入れることが義務なので……」

「その強さを手に入れて、琢磨くんは何がやりたいの？」

「何が、と言われても……」

七草家の悪口を言っていたときはあれほど口が回っていたというのに、今や影も形も無いくらいにモゴモゴと言い淀んでいる。

生徒会室のドアが開かれたのは、そんなタイミングだった。

「おおっ！ 達也くんたち、ただいま〜」

「それを言うなら『お帰り』だ、しんのすけ」

冷静な達也のツツコミと共に、実験のメンバーが続々と部屋に入ってきた。しかし全員というわけではなく、あずさと五十里が実験室の戸締りを引き受けたため、ここにいるのは達也の他に深雪・ほのか・水波・泉美・香澄といった顔触れである。

「いやあ達也くん、見事に女の子ばかりですなあ」

「別に他意は無い。——留守番してくれて助かったよ。七宝くんも、悪かったな」

「いえ、俺は別に……」

「ゴメンね、七宝くん。アタシ達のために！ わざわざ残ってくれてさ〜」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら歩み寄る香澄に、双子の泉美が「香澄ちゃん！」と小声で窘め、ほのかが心配そうに琢磨へと視線を向ける。

しかし琢磨の反応は、その場の誰もが想像していたそれではなかった。

「……司波先輩、自分はもう上がっても大丈夫でしょうか？」

「ああ、構わないよ。ありがとうな」

「いえ。——それでは」

達也に頭を下げ、他の先輩にも頭を下げ、琢磨はそのまま足早に部屋を出ていった。香澄は無視される形となったが腹は立てておらず、むしろ予想外の反応に困惑している様子だった。

「どうしたんだろう、七宝の奴？」

「そういえば香澄ちゃん、泉美ちゃん。2人が達也くんに協力してるのって、達也くんを利用して自分達の名前を売りたいからなの？」

「はいっ!? 何言ってるんですか、野原先輩！ そんなわけないでしょー」

「でも琢磨くんが——」

「アイツが何を言ったか知りませんが、アイツの言うことをいちい

「信じないでください！」

憤慨した様子で詰め寄る香澄に、さすがのしんのすけも押され気味のようだった。

そしてその喧騒の陰で、達也が思案顔になっている。

——七草家が今更顔を売りたいと考えているとは思えないが、確かに今回の議員来訪は七草家によるマスコミ工作が引き金になって起こったことだ。七宝家はそれを把握しているということか？

「……………」

そんな達也を、深雪と水波が心配そうな表情で見つめていた。

*

*

*

基本的に不機嫌な表情をしている、というのが小和村真紀さわむらまきの琢磨に対する印象だった。入試で主席を取って新入生総代に選ばれたことを話しているときも、機嫌が良いという顔をしなかったのを憶えている。

しかしその日の夜、彼女の部屋にやって来た彼の顔からはその不機嫌な印象が消え、代わりに何か悩んでいるように思えた。いや、迷っている、と表現した方が正しいか。本人としては繕っているつもりなのだろうが、表情作りのプロである女優、しかも生来の美貌に加えて喜怒哀楽好悪愛憎を自在に操る顔の演技で若手ナンバーワンの座を勝ち取る真紀の目は誤魔化せない。

「琢磨、晩ご飯に付き合ってくれない？ 私、まだなのよ」

真紀がそう言って持ってきたのは、薄切りにしたバゲットに生ハム・サーモン・トマト・アボガドなどを載せたオードブルだった。琢磨はそれに手を伸ばしてほとんどを食べ、塩味が強いそれに釣られて一緒に出された果実水をゴクゴクと飲み干していく。

その果実水には、少しだけアルコールが混入されていた。オードブルにもリキュールが使われているのだが、琢磨がそれに気づいた様子は無い。

「今日はどうしたの、琢磨？ 何かあったのか、私に話してみてくれな

い？」

「少しかだけ頬を上気させている琢磨に、真紀が包容力のある姉のような声色でそう話し掛けた。普段はあまり自分の弱いところを見せたがらない琢磨だが、今日は何故か多弁だった。」

「学校の先輩に、そんなことを訊かれたのね」

「ああ……。確かに俺は十師族になることばかり考えて、結局その後自分に何をしたいのか考えていなかった……。野原先輩に尋ねられて何も答えられなかった自分に愕然としたよ……」

「ぼんやりと意識に霧が掛かっている状態ではあるが、思考が覚束ないほどではない。たどたどしい口調で話す琢磨の言葉は、まさしく彼の偽らざる本音だった。」

「そしてそれは、真紀もよく感じ取っていた。」

「そのうえで、真紀は口を開いた。」

「——駄目よ、琢磨。騙されちゃ」

「えっ……？」

「床に視線を落としていた琢磨が、疑問の声と共に顔を上げる。」

「艶やかな笑みを浮かべる真紀が、3人掛けのソファでピツタリと彼に寄り添っていた。」

「その野原って先輩は、七草家と親しくしてる司波先輩達のお友達なんでしょう？ つまりそれは、七草家の息が掛かっているってことよ。」

「そんな人の言葉に惑わされちゃ駄目」

「惑わす……。？ 野原先輩が、俺のことを……。？」

「真紀が片手を琢磨の肩に載せ、もう片方を彼の手に重ねる。」

「柔らかな肌が彼の触覚を、蜜のような匂いが彼の嗅覚を刺激する。」

「あなたの使命は、その辺の魔法師には理解できない崇高なもの。たとえどれほど周りの人間に反対されたとしても、あなたにはそれを成し遂げなければならないほどの理由があるし、そして成し遂げられるだけの能力がある」

「俺に、能力が……」

「そう。周りの言葉に惑わされず、あなたは自分の進むべき道を歩いていくだけで良いの」

「俺……は……自分の道を……」

だんだんと意識が揺らめき、目が閉じていくにつれて視界が狭く
なっていく。

そんな琢磨には、すぐ隣に座る真紀が不敵な笑みを浮かべているこ
となど知る由も無かった。

完全に余談だが、この後2人は特に何もすることなく、居眠りした
琢磨が慌てて部屋を出ていくのを真紀が見送るだけに終わった。

第106話 「実験のお披露目をするゾ」

4月25日、午後最初の授業である4時限目が始まった頃に物々しい黒塗りの乗用車4台で押し掛けたその客人は、おおよそ全ての第一高校関係者にとって招かれざる客といえた。

野党議員である神田、彼の秘書、彼の取り巻きであるジャーナリスト及びボディガードの面々、そして彼らに同行する形となった『かねありでんき金有電機』の社長であるかねありますぞう金有増蔵とその秘書。

彼らは何の予約も無しに、いきなり校長へと面会を求めてきた。普通ならば丁重にお断りしてお引き取り願うところだが、議員バツジを付けた神田にはそんな常識は通用しない。

「神田先生、既に申し上げました通り、校長の百山せもやまは京都出張で留守にしております。校長の居りますときに改めてお越しいただけないでしょうか」

「ほう。この神田に、子供の遣いよろしく出直せと言われるのか」

「そんな、滅相もございません」

「ならば教頭先生でも結構です。御校の授業を見学させていただきたいのだが」

「私の一存では承諾しかねます。それはやはり、校長に直接仰つていただかなければ」

教頭の八百坂やおさかと神田の遣り取りは、かれこれ10分以上は続いている。どちらも同じ50代前半の同世代であるが、一方は居丈高に言い募り、もう一方は額に汗を滲ませながら反論できずに耐えている。

ちなみに神田が校長不在のときにやって来たのは、完全に狙つてのことだ。

第一高校校長、百山せもやま東。現在71歳の彼は、第一高校の校長に就任して今年で11年目になる。魔法師の高等教育カリキュラム確立に大きく貢献したことで知られ、魔法教育に留まらず高等教育の権威として各界に広い人脈を有することから、神田議員としても正面から相手にしたくない人物である。

こうなれば多少強引でも、と神田が考え始めたそのとき、カリヨン

の音色を模した呼び鈴が校長室に鳴り響いた。

「校長!? 会議はよろしいのですか!」

壁に掛けられたディスプレイが映し出すリアルタイム映像には、京都の魔法協会本部で会議に出ていたはずの百山校長の姿があった。真っ白な髪に顔の下半分を覆う真っ白な髭、目の周りも深い皺に埋もれて細かな表情は読み取れないが、窪んだ眼窩の奥から放たれる刺すような眼光に、神田やジャーナリスト達が思わず顔を引き攣らせる。

『会議の途中だったが、少し時間を作らせてもらった。——それで神田先生、本日はどのようなご用件ですか?』

「ああいや、予定も確認せずお邪魔して申し訳ありません。しかし私にも少々思うところがあります。ここ最近、魔法科高校のカリキュラムに関して『魔法科高校9校は生徒を軍人にすべく洗脳しているのでは』などという不穏な噂が流れておりまして」

『馬鹿馬鹿しい話ですな』

百山は不快感を隠そうともせず、そう吐き捨てた。

それに対する神田の反応は、肯定だった。

「ええ、そうでしょうとも。だからこそ、魔法科高校が国防軍の出先機関であるなどという無責任なイメージを払拭するために、授業を見学させていただきたいと思ひ参上した次第です」

『困りますな。魔法の実技授業は繊細なものだ、いきなり押し掛けられては生徒が動揺します』

「ご迷惑は掛けません」

神田の態度が、ここに来て高圧的になってきた。自分のペースを取り戻したというよりは、相手を言い負かせず意地になっている感じだ。

画面の向こうで考える素振りを見せる百山が、やがて口を開いた。

『そこまで仰るなら、見学を許可しましょう。ただし、見学は5時限目だけとさせていただきます』

「そつ——いえ、それで結構です」

反射的に反論しかけた神田だったが、先程自分で「迷惑は掛けない」と言い切った手前それを口にするにはできなかつた。

『教頭、5時限目に予定されている実習は?』

「実習を予定しているクラスはありませんが、2年E組の生徒から申請があった課外授業が校庭で行われる予定です』

『ということですか、神田先生。それで宜しいですか?』

「……分かりました。それを見学させていただきました』

『そうですか。——教頭、スミス先生を呼んで神田先生を案内させなさい』

最後に教頭に指示を出して、おざなりな挨拶と共にディスプレイがブラックアウトした。百山の姿が消えたことで、神田達が本人でも意識しなかった緊張から解き放たれ溜息を吐く。

そんな中、ジャーナリストやボデイガードの中に紛れて一言も発していないかった金有が、誰にも気づかれずニヤリと笑みを深めていた。

「先生、何か変じやありませんか?」

5時限目が始まり、ジェニファーに先導されて放射線実験室へ向かう途中、ジャーナリストの1人が神田に小声で問い掛けた。

「実習がまったく無いなんて、まるで我々が来るのを知っていたかのようですよ」

「……偶然だろう。党にさえ報告していないんだ、我々の動きを知っていたなど」

「ですが、そもそも最初から妙でした。魔法関係の取材なんて普段なら計画しただけであれこれ横槍が入るのに、今回に限ってどこからも何も言っていないなんて」

それは当然だ、と神田は言いかけて口を閉ざした。今回のパフォーマンスに魔法協会が介入してこなかったのは協会の上的の方に手が回っていたからだ、などと知っているのは不自然だからだ。

とはいえ、神田としても腑に落ちない点はある。

神田は反魔法主義者ではあるが、あくまで大衆のウケ狙いでその立場にいるだけだ。今回協会に手を回した人物もそれを知っているからこそ、本気で魔法師を嫌悪している政治家を台頭させないために自

分のスタンドプレーを黙認しているのだと考えていた。

しかしそれだけで、自分のパフォーマンスを見逃す理由になるだろうか。十師族全体がそのような考えとは限らないし、あの人物は十師族の絶対的な支配者ではない。

「あーっと、ジェニフアー先生、だったかな？」

と、自身の背後から聞こえてきたその声に、神田は反射的に後ろを振り返った。金有電機の社長である金有が腕を挙げており、周りの記者やボディガードがそんな彼に注目していた。

腑に落ちない、という意味では金有もそうだ。彼とは元々個人的な付き合いはあったのだが、魔法関係の取材に同行させてくれと頼んできたのは今回が初めてだ。魔法に興味はあるが伝手が無いので、などと言っていたが、彼が金儲け至上主義であることを知る神田にはどうにも納得し難いものがある。

「何でしょうか?」

「我々が今から見学させてもらう課外授業は生徒からの要望だと聞いたのだが、今日その生徒も授業に参加しているのかね?」

「……はい、その生徒もメンバーの1人なので」

「そうかそうか、それは楽しみだ」

それきり金有からの質問が無くなったため、記者もボディガードも再び視線を前へと戻す。

神田もそれに倣い、しかし頭の中では今の質問の意図を探り続けていた。

放射線実験室に1歩足を踏み入れた途端、神田達は非友好的な視線を感じて立ち竦んだ。まるで彼の来訪を知っていたかのように生徒達が一齐に冷たい目を向けられ、しかし一瞬後には彼らの存在に気づいていないかのように手元の作業に集中していた。

代わりに声を掛けてきたのは、生徒の作業を監督していた教師・廿楽だった。

「スミス先生、そちらの方々は?」

「当校の見学に来られた神田先生と記者の方々です」

「取材には事前の許可が必要なはずですが」

「先程電話にて、校長が許可されました」

「そうですか」

納得したのか、それともさほど興味が無いのか、それだけの言葉で済ました甘楽に神田達は拍子抜けを味わった。

無闇に敵視されるよりはやりやすい、と納得させて神田が甘楽に問い掛け――

「先生、準備が出来ました。実験装置を移動させても良いですか」

ようとしたところで、表向きこの実験のリーダーである五十里から声が掛かり、甘楽はそちらへの対応に移った。送信されたチェックリストをA4サイズの情報端末で確認して許可を出すと、サポーターのロボ研部員が壁のスイッチを操作した。放射線実験室の壁一面が音も無く開いて行き、混合水が半分まで満たされた直径2メートルの球形水槽を台座ごと押していく。

それを追い掛けながら校庭へと出たところで、記者の1人が甘楽に質問する。

「正規の授業ではない実験を授業時間中に行うというのは、よくあることなのででしょうか？」

「いいえ。元々この実験も放課後に行う予定ですが、詳細を知った職員の間から『自分の担当している生徒に見学させたい』という声が多く挙がったので、この時間の実習を全て中止して希望する生徒は自由に見学できるようにしたのです。校庭で実験するのもそのためです」

「生徒が言い出した実験なんですよね？」

「学問的にも実用的にも、意義の高い実験ですから」

甘楽の答えに、別の記者が嫌らしい笑みと共に質問する。

「実用的と仰いますと、例えば“灼熱のハロウイン”で使用された秘密兵器のような、敵艦隊を一網打尽にする兵器の開発に繋がるとかですか？」

「……加重系魔法の技術的三大難問の1つに挑む実験です」

冷たい眼差しで甘楽が答えた直後、ジェニファーから「始まります

よ」と声が掛かった。マスコミとしての職業意識からか、彼らの視線が校庭に固定された実験装置へと吸い寄せられる。

恒星炉の実験装置は球形の水槽を台座に乗せた簡単な構造をしており、ポンプも放射性実験室で既に取り外されている。水槽には赤道部分に幅15センチの金属環がはめられ、台座から伸びた4本の支柱がこの金属環を支えている。真上の注水口は直径30センチの円盤でふさがれ、反対の極にも同じ円盤が取り付けられていた。

先程あった甘楽の話の通り、校舎の窓から多くの生徒が実験装置に注目している。おそらく授業はまともに進んでいないようで、それを予想したからこそ実習を中止して端末での座学に切り替えたのだろう。

それどころか、窓から見ただけでは満足できない生徒が校庭に下りてきた。2年E組など実験に参加していない生徒も含めて全員がこの場に立ち会っているし、去年の1年E組のメンバー、去年の九校戦・新人戦女子メンバーは全員が顔を揃えている。また生徒だけではなく、教師の姿も少なくない。

「……あれっ？ しんちゃんは？」

エリカが疑問の声をあげ、レオ・幹比古・美月が釣られて周りに視線を遣る。こういうお祭り騒ぎのときには真っ先に駆けつけそうな少年の姿が無いことに、4人は首を傾げていた。

「実験を開始します」

しかしそんな状況を横目に、達也が拡声器でアナウンスをした。生徒達がお喋りを止め、シンと静まり返る。

生徒と教師が固唾を呑んで見守る中、達也から合図が放たれた。

深雪の重力制御魔法により、水槽の内面にレンジを限定せず方向のみ定義した重力場が発生し、半分まで入っていた混合水が中心部を空洞にして水面の内側全面に張りついた。

香澄と泉美の第四態相転移魔法により、空洞の水面上から重水素プラズマと水素プラズマ、更には酸素プラズマが発生する。

水波が2つの魔法領域の間に中性子バリアを挿入し、ほのかがそのバリアと相転移力場の間にガンマ線フィルターを挿入する。これに

よってガンマ線が散乱され、熱エネルギーを取り出して可視光線に変換されていく。

深雪が2回目の重力制御魔法を発動し、水槽の中央に直径10センチの高重力領域が出現した。水槽に嵌められた金属環は特化型CADに使われる照準補助装置を60個繋いだものであり、先程の高重力領域に存在する物質の質量と分布状況を魔法の照準に利用可能なデータに変換する役割を果たす。そのデータは水槽を保持する支柱内のケーブルを通して大型据置CADへと送信され、高度な演算能力によって統合された照準補助データが起動式と共に深雪へと送られる。これにより、深雪は時々刻々と変化する対象領域内の質量に対応した魔法式を組み立て、実行できるのである。

五十里のクーロン力制御魔法により、高重力領域の電氣的斥力が1万分の1に低下する。これだけで核融合は起こらないが、核融合反応を点火するのに必要な熱エネルギーはプラズマの運動エネルギーはその分だけ小さくなる。

「おおっ！ 光り出したぞー！」

球体水槽から淡い光が生まれ、見学している生徒の間からどよめきが駆け抜ける。光は明るさを増しながら輝き続け、やがて中の水が激しく沸騰し始めた。

水槽の隣にあるデジタル温度計は300度に達していることを示しており、これは球体内部の平均圧力が約100気圧に達している計算となる。重力制御魔法が維持されている限り容器が割れることは無いとはいえ、魔法による補強効果を除けば容器本体の耐圧性能はそろそろ限界に近づいていた。

「実験終了」

実験開始から3分後、達也の口から実験の終了が告げられた。クーロン力制御魔法と2番目の重力制御魔法が停止し、容器内の光が消える。核融合反応が完全に停止していることを確認して、中性子捕獲によるガンマ線発生に備えたガンマ線フィルターが解除される。

中性子バリアはそのままに、最初の重力制御魔法が解除される。容器内部を覆っていた水の壁が重力に従って容器の底に落ちた。ロボ

研の操る機械アームが容器の頂上にダクトを繋ぎ、バルブを開けたときの気圧差を利用してダクトの先にあるガス成分分析器へと流し込む。

「気体成分、水蒸気、水素、重水素、及びヘリウム。トリチウムほか放射性物質の混合は観測されません！」

分析器の前に陣取ったケントから、甲高い声で簡易測定の結果が告げられる。簡易とはいえ存在する物質を観測不能とすることは無く、見学者のあちこちから興奮を伴うざわめきが生じた。

達也の指示でダクトに注水ホースが繋がれ、容器内冷却の注水が始まる。内部に濃い靄が生じるが、それはすぐに消えて水槽は透明な水で満たされた。ホツと肩の力を抜く水波が、最後まで残された中性子バリアを解除した。

達也の劳いの目が、水波、ほのか、香澄、泉美、深雪の順に向けられる。最後に五十里を目を合わせて互いに頷き、実験中複数の測定機器へ忙しなく目を走らせていたあずさへとマイクを手渡した。勢いよく首を横に振ってマイクを押し返すあずさだったが、にこやかに笑う五十里と無言で見つめる達也の圧力に屈し、泣きそうな表情でマイクを受け取った。

「常駐型重力制御魔法を中核技術とする継続熱核融合炉実験は所期の目標を達成しました。『恒星炉』実験は成功です」

校庭で、校舎で、一斉に歓声があがった。

暴力的とも思える熱狂は、まるで『魔法』の可能性と未来を称えるようだった。

「あの、今のは何だったんですか？」

生徒達の歓声に圧倒されていた神田達が我に返ったのは、球体水槽が実験室に戻され生徒達が教室へと帰っていく頃になったのことだった。

「常駐型重力制御魔法式熱核融合炉の実験です」

「それはどのような物ですか？ 核融合炉の実用化は断念されたはず

ですが」

「断念されてないません」

記者の質問に答えたのは、直接尋ねられた甘楽ではなく横で聞いていたジェニフアーだった。

「太陽光エネルギーシステム群が先に完成したために優先度が後退しましたが、研究自体は魔法学以外の分野でも続けられています。電磁気制御魔法によるシステムは複雑すぎて放棄され、比較的シンプルな重力制御魔法によるものが魔法学の世界では研究されてきました」

「核融合の研究とは、魔法による核融合爆発の実現を目指すのですか？」

「例えば『灼熱のハロウィン』で使用されたような？」

あからさまに悪意に満ちた質問に、ジェニフアーの顔がしかめられる。

しかしその直後、甘楽が「ハッハッハッ」と笑い声をあげる。

「失礼ながら、先程まで何をご覧になられてたのかな？ 大規模核融合爆発はブラジル国軍のミゲル・ディアスによる戦略級魔法『シンクロライナー核融合』の成功例が報告されているだけで、ディアスの術式を再現することすら誰一人できていないのですよ。大規模な爆発を起こすだけで良いのなら、このような回りくどい術式は使いませんよ」

甘楽はそう言って、神田へと向き直った。

周りにいる『世論の代弁者』を自称するジャーナリスト達など、眼中に無いかのように。

「本日の実験は、社会基盤たるエネルギー源としての核融合実験です。まだまだ解決すべき問題は数多くありますが、恒星炉が実用化されれば人類は太陽光サイクルにより供給されるものより遥かに豊かなエネルギーを利用できるようになるでしょう。——如何ですか、神田先生？ 我が校の生徒達の平和的社会貢献の精神は」

「そ、そうですね……」

いったいどこでスイッチが入ったのか、臆面も無い甘楽の台詞に圧倒された神田がどうにか感想を絞り出そうとした、そのとき、

「——いやはや、実に素晴らしい！」

声を張り上げて響き渡るほどに大きな拍手を鳴らすのは、金有増蔵だった。

「確かに今回の実験は、実用化には色々と壁はあるだろう。——しかし！ 魔法によって社会の在り方を変えようとする生徒達のチャレンジャー精神は、技術的な完成度に関係無く価値のあるものだろう！ 社会に対する自分自身の意味を変えようとする『心意気』に、私はとても感動した！」

金有はそう言うと、実験の後片付けをしている五十里やあずさ達が集まる一画へと歩き始めた。神田の取り巻きである記者達も彼の動きに釣られて移動を始め、更にそれに釣られるように神田もその後を追う。

しかし彼は五十里やあずさのすぐ脇を通り過ぎ、十三束やケント達と一緒に実験器具の解体を進めていた達也へとまっすぐ狙いを定めている。達也がそれに気づいて振り返り、深雪と水波、そして観衆に紛れて様子を窺っていた文弥と亜夜子が彼を注視する。

「君がこの実験のリーダーだね？ 名前は？」

達也はその質問にはすぐに答えず、ジェニファーに視線を向ける。彼女は小さく首を横に振って、それを確認した達也は再び視線を金有へと戻す。

「……司波、達也といいます」

「成程、司波達也くんか！ 社会の繁栄に貢献しようとする君の姿勢は実に素晴らしい！ ぜひともその調子で日本の、いや、世界を背負って立つ男になってくれたまえ！」

「……ありがとうございます」

当たり障りの無い返しだけを口にして、その場をやり過ぎそうとする達也。

しかしその直後、金有の腕がグンと伸びて達也の肩を巻き込み、自分へと強引に引き寄せた。

「な、何を——」

「君達！ 彼とのツーショットを撮ってくれたまえ！ そうだな、夕

イトルは『若者の挑戦〜22世紀に向けて〜』なんてのはどうだ!?」
達也と肩を組みながら金有が呼び掛けると、記者達が条件反射とばかりに一斉にシャッターを切り始めた。元々は神田議員の取り巻きのはずだったのだが、神田は完全に蚊帳の外という雰囲気になってしまっている。そのような状況に、先程まで神田に狙いを定めて言質を取ろうとしていた甘楽も、その意図を読んでいたジェニファーも困惑している。

一方、写真撮影に巻き込まれた達也はハッキリ言って迷惑しているのだが、魔法科高校に対して好意的な雰囲気になっているこの状況で無理矢理金有を跳ね除けるなんて真似をできるはずも無く、大人しくされるが儘となっていた。

「いやいや、今日はとても良い物を見せてもらった! さてと、我々はそろそろお暇させてもらおうとしよう! ——君達、良い記事に仕上げてくれることを期待しているよ!」

金有はそう言い残して愉快そうに笑いながら、秘書を引き連れて校庭を後にして正門へと向かい始めた。記者達は去っていく金有と残された神田との間で忙しなく顔を行ったり来たりさせ、やがて神田が金有の後を追い始めたのをきっかけにゾロゾロと動き始める。

国会議員と大企業の社長を中心としたお騒がせな一団は、こうして一高を後にしていった。

*

*

*

多くの生徒が校庭に目を奪われている中、学校の敷地内でも外れに位置しているため常に閑散としている林の中にて、しんのすけもまた1つの「実験」を行っていた。

とはいえ、彼の実験の内容は達也が行うような複雑なものではない。先日大袋博士から借りてきたアイテムの起動実験であり、満足そうに顔を綻ばせる彼の様子からそれが成功裏に終わったことが容易に窺える。

「これでオッケー、つと。もしものことがあっても、これなら安心です

な」

先程まで起動状態となっていたそれをジユラルミンケースにしまい、簡単に持ち運べる状態にしながらしんのすけがふいに言葉を漏らした。

彼の周りには誰の姿もおらず、強いて挙げるなら近くの樹の根元に鞆が置いてあるのみ。普通に考えれば独り言の類だと結論づけるのが普通だろうが、生憎と彼（とその周り）はその普通の範疇に収まらない。

「大丈夫なの、しんちゃん？　学校の先生方とかに持ち込んで良いか訊かなくて」

鞆から顔を出した命ある操り人形——トツペマの問い掛けに、しんのすけはそれほど思案に時間を掛けずに答えを返す。

「ええ？　別に平気ですよ。そんなに危険な物じゃないんだから」
「……危険な物じゃない、ねえ」

トツペマが視線を向けた先にあつたのは、根本付近からボツキリと折れて地面に横たわっている樹の幹。切断面がボロボロに逆立っていることから、少なくともチェーンソーの類で切られたものでないことは分かる。

「……本当にそうかしら？」

「さてと、今日は自習らしいから、カフェで何か甘い物でも食べよう」と

「しんちゃん、自習はそういう時間じゃないからね？」

結局誰にも見つかることなく2人はその場を去ったため、2人がここで何をしているのか知る者はいなかった。

第107話 「実験したら色々あったゾ」

4月26日、木曜日。

通学途中の個型電車キャピネットの中にて、いつもの習慣で情報端末を手にニュースを確認していた達也が、呆れるような溜息を小さく漏らした。

もちろん、すぐ隣に腰を下ろす深雪がその変化に気づかないはずがない。

「お兄様、何か気になるニュースでも？」

深雪の問い掛けに、反対側に座る文弥・亜夜子・水波からも興味を含んだ視線を向けられる。達也は隣の深雪に顔を向けながら、正面の彼らにも聞こえる音量で答える。

「昨日手伝ってもらった実験が、さっそく記事になっているんだが――」

達也が情報端末を傾けて、深雪が画面を覗き込む。

その瞬間、深雪は小さな驚きで目を丸くした。

「これは……。ほとんどの記事で、お兄様と金有社長とのツーショットが使われていますね」

「それについては、私達も今朝早くに閲覧しました。そしてその写真が使われている記事の場合、大体が好意的な内容になっていることも確認済みです」

「……そうか」

亜夜子の報告を聞きながら、達也も複数の記事を流し読みする。確かに好意的な記事の方が圧倒的な割合を占めており、そうでない場合も、写真を使わず『神田議員 〱ら』が一高を訪問して実習を見学した』という事実のみを書くに留めている場合がほとんどだ。少なくとも『魔法科高校生、水爆実験に挑戦か』などと露骨に敵対視してくる記事は見掛けない。

「正直なところ、ここまで肯定的な方に偏るとは思っていなかった。俺の見込みでは一方的で断定的な記事を書いてくる所も多いと予想していたし、それならそれでカウンターの世論操作を仕掛けることも

視野に入れていた」

「まあ、お兄様もお人が悪い」

深雪の本気で糾弾しているわけではない言葉に、達也は苦笑いで返す。

「しかし実際は、そんな必要は無いほどに肯定的な記事が並んでいる。昨日まで反魔法主義的な論調の記事を掲載していたはずなのに、あの実験をきっかけに大きく方向転換がされている」

「つまりそれだけ、お兄様の恒星炉に感銘を受けたということですね！」

「深雪さん、さすがにそれは短絡的に過ぎますわよ」

当然とばかりに言つてのける深雪に、亜夜子がさすがにツツコミを入れた。

そして達也に視線を移し、若干同情的な顔つきとなる。

「達也さん、まんまと金有社長に利用されてしまいましたね」

「社長というだけあって強かだなとは感じたよ。今回の一件で金有社長には、未来ある若者を応援して社会の繁栄に貢献しようとする善良なイメージが付いたことだろう」

「お兄様の実験にかこつけて、自身のイメージ戦略に利用したということですか!?!」

「別に俺は気にしちやいないさ。問題があるとすれば、ここまで目立ってしまったって伯母上から何を言われるかだが——」

「それに関しては、ご心配なく。今朝ご当主様より連絡がありまして、好意的な内容である以上特に問題は無いとのことですよ」

それを聞いて、達也は「そうか」と短く答えた。

そして、心の中で思う。

——野党の若手議員と大手企業の社長では、マスコミもさすがに後者を優先するのか。

金有電機は家電やエレクトロニクスの分野では日本でもトップクラスの企業であり、一般人に対する知名度も高い。そんな企業の社長

が魔法科高校生を表敬訪問（既に世間ではそのような認識となつてゐる）して生徒の実習に感銘を受けたという記事は、間違いなく世間に対する魔法師の印象に対して大きな影響を与えたことだろう。

しかし魔法師の世界では、あるいは魔法に少しでも知識のある者達の間では、金有社長以上にこちらの人物の方に注目が集まっていた。

『高校生があればほど高度な魔法技術を操るとは予想外です。日本の技術水準の高さには驚かされました』

「見ろよ達也、またこのインタビューだぜ」

昼休みの食堂にて、壁面ディスプレイに表示されたプッシュ型の動画ニュースを楽しそうに指差すレオに対し、達也はそれを黙殺してまっすぐ正面を向いて食事を摂るといふ反応に出た。

その動画ニュースのインタビューに答えているのは、ローゼン・マギクラブの日本支社長であるエルンスト・ローゼンだった。ドイツ出身の彼だが、キャスターの質問に答えるときは流暢な日本語を操っている。

「ローゼン家の方が日本のニュースに出演するなんて珍しいね」

「おつ、そうなの美月ちゃん？」

「そうだよ。そもそも、ローゼンの姓を持つ人が日本に赴任してきたこと自体、今まで無かつたんじゃないかな？」

「へえ、そうなのか。何か方針変更でもあつたのかね」

美月・しんのすけ・レオの会話に、達也は敢えて何も反応せずに黙々と食事が続けていた。エリカと幹比古の反応が気になるが、視線を向けることはしない。

『第一高校の生徒が成功させた昨日の実験は、魔法が人類社会に更なる繁栄をもたらす技術となり得る可能性を見せてくれました』

「凄いね達也さん、人類社会の繁栄だつて」

先程から沈黙を貫いているエリカの代わりというわけではないが、雫が裏も表も無く素直に感心した様子で達也を賞賛した。

さすがにここまで水を向けられては、達也としても無視するわけにはいかない。

「……実験に参加したみんなが頑張ってくれたからな」

「うん、深雪もほのかも凄かった」

「わ、私は別にそんな——」

「ほーほー、そんなに凄い実験だったのかあ。オラも少しは見れば良かったかな」

「ていうか、しんのすけはなんであのとときいなかったんだよ。せつかくの達也の晴れ舞台なんだから、友人として見学しておくべきだろうが」

「いやあ、オラも色々と用事がありましたて」

「つたく、本当にマイペースだな」

しんのすけの答えにレオは呆れるような言葉を返すが、別にレオは本気で怒っているわけではない。それは彼の苦笑いからも容易に分かることだった。

「しんちゃん、用事って何？」

と、今まで黙っていたエリカが唐突に口を開いてそう尋ねてきた。ローゼン関連から少しでも話題を逸らしたかったのだろう、と達也は特に気にせず昼食を食べ進める。

「オラも達也くんと一緒に、ちよつとした実験をね」

しかしその返答に達也の中で興味が生まれ、その手を止めた。

「実験？ それはどういう内容だ？」

「博士から借りたヤツがちゃんと動くかどうか、人がいない場所で実際に動かしてみたんだゾ」

「博士？ しんのすけくん、そんな人と知り合いなのかい？」

「起動実験ってことは、魔法関連のデバイスか何かか？」

「しんちゃん、それってちゃんと学校の許可は取ったの？ 何かあつてからじゃ遅いよ」

「何々！ 想像以上に面白そうなことしてんじやない！ アタシ達にも見せてよー！」

「そのときになつたらね」

しんのすけの返事にエリカ辺りから「えー」と不満そうな声が漏れたが、彼もそれ以上は何も喋ろうとしなかった。どうやら「そのとき」になるまで、それを明かす気は一切無いようだ。

彼にしてはなかなか珍しい行動に、達也はなぜか胸騒ぎを覚えた。

* * *

恒星炉実験に対する報道は、仕掛けた達也の予想をも上回るほどに好意的なもので溢れており、それによって一高生の心も高揚していった。自分が当事者でなかったとしても、同じ学校の生徒が社会から認められたという事実は、たとえ表面的なものであっても若い彼らの証人欲求を集団同一視の下に満たしていた。

5時限目、本日最後の授業を終えた1年A組の教室でも、何度目になるか分からないくらいに雑談の話題に挙がっていた。A組で昨日の実験に関わった者はいないのだが、世界的に有名な企業の幹部から高い評価を受けたことについて、我が事のように興奮を覚える生徒がほとんどだった。

ただ1人——七宝琢磨以外は。

「……………」

苛立ちを隠そうともせず、琢磨が椅子を引く大きな音と共に立ちあがった。彼から伝わってくる剣呑な波動に、お喋りをしていた生徒達が一斉に静まり返る。しまった、と琢磨は思ったが、ここで申し訳なさそうな態度を取るのも負けたような気がして、彼はそのまま逃げ去るように教室を後にした。

今日は風紀委員の当番ではないため、部活の方に顔を出すことにした。しかしそこでもモヤモヤした気分は消えず、普段ならしないようなケアレスマスを何度もして余計にフラストレーションを募らせていく。

事務室に預けていた自分のCADを受け取って下校しようとしたそのとき、琢磨の苛立ちは最高潮に達していた。

そんなとき、風紀委員の腕章をつける香澄と前庭でばったり出くわした。

新入生勧誘期間を終えた風紀委員は普段の当番制に戻っており、見回りは基本的に1人で行うようになっていた。香澄も琢磨もしんの

すけが当番のときには自主的に彼と一緒に回るようにしているが、自分が当番のときには1人で回っており、故に香澄も1人だ。

時間的に考えて、本部へ戻ろうとしていたのだろう。香澄も琢磨の存在に気づいたが、チラリと一瞥しただけで特に挨拶を交わすこともなく、そのまま擦れ違つてその場を去ろうとする。

「上手くやったもんだな、七草」

「……何の事？」

しかし琢磨がそんな言葉を掛けてきたものだから、香澄としても立ち止まらざるを得なかった。

訝しげに首を傾げる彼女はけつして演技ではなかったのだが、琢磨の目にはそれが惚けているように見えた。

「昨日の公開実験のとき。ローゼンの支社長にまで注目されるなんて凄いいじゃないか」

「公開実験？ 何か勘違いしてない？」

「惚けるなよ。魔法師を目の敵にしている国会議員がやって来ることを知つて、昨日のことを仕組んだんだろう？ 司波先輩を利用して、上手く名前を売ったもんだぜ」

「利用ですって？ 変な言い掛かりをつけないで」

香澄の反論が、少し歯切れの悪いものになった。神田議員の来校をあらかじめ知っていたのは確かに事実だったからなのだが、琢磨はそれを自分の推理が全て正しい証左だと判断した。

「ほらな、俺の思った通りだ。さすが七草、抜け目が無い。姉に続いて色仕掛けで誑し込んだのか？ おまえ達姉妹、見てくれだけは一流だからな」

「——ふざけるな！」

いきなり怒りを爆発させた香澄に、さすがの琢磨も一瞬だけだが怯んだ。

しかし、香澄が怒りを露わにしたのはそのときだけで、すぐさま冷静な口調で話を続ける。

「……誑し込むとか、七宝の考えることは随分と下品なんだね。私達七草には考えもつかないよ。アンタそこそこ可愛い見た目してるん

だし、魔法師目指すの止めてツバメにでもなったら？ もっとも、今時ツバメなんて飼ってるのなんて色ボケ芸能人くらいだろうけど」

香澄の揶揄に深い意味は無く、「ツバメ」という言い回しも最近世間を騒がせた某ベテラン女優の少年売春事件から借用したものに過ぎない。

だが琢磨にとってその言葉は、小和村真紀との関係を当て擦られたものと思えなかった。

「……喧嘩を売ってるのか、七草」

「先に喧嘩を売ってきたのは、アンタの方じゃない。それに言わなかったっけ？ 二度と喧嘩を売ろうって気が起こらないくらい、安く買い叩いてあげるって」

睨み合う2人。どちらも右手が、左の袖口に伸びていく。2人が使うCADは共にブレスレットタイプであり、操作に入った時点で一触即発のラインを踏み越えることを意味している。

「いやいやお2人さん、盛り上がっているようですねあ」

「――！」
「――！」

そして2人のすぐ傍に生える木の根元に座り込んでいたしんのすけが話し掛けたのは、まさに後ゼロコンマ数秒でCADの操作に入ろうというタイミングだった。冷や水を掛けられた形となった2人が、咄嗟にCADから手を離して彼へと向き直る。

もしこれが普通の上級生ならば、ましてや風紀委員という学校の自治活動に従事する者ならば、未遂とはいえ2人の行為を咎めるべきだろう。

しかしその予想に反して、いや、或る意味予想通りとも言えるが、しんのすけはニヤニヤと楽しそうに笑みを浮かべていた。

「んで、なんで2人は喧嘩してるの？」

「七宝くんが七草家を侮辱したんです」

「七草から許し難い侮辱を受けました」

互いをけっして見ようとせず、堂々とした態度でそう言っただけの2人に、しんのすけは腕を組んで「成程成程」と納得する仕草を見せ

る。

「2人が納得するまで話し合った方が良く、って言っても2人は納得しないでしょ?」

しんのすけの問い掛けに、2人は同時に力強く首肯した。

その返答を予想していたように、しんのすけはウンウンと頷く。

「ならばこの喧嘩、オラが預かるとしましょう」

その言葉に、2人は怪訝そうに首を傾げる。

そんな2人に、しんのすけが更にこう続ける。

「花音ちゃんに怒られないように、思いつきり喧嘩すれば良いんだゾ」

「というわけで花音ちゃん、この許可証にハンコちよーだい」

「いや、何が『というわけで』なの、しんちゃん?」

しんのすけが琢磨と香澄を引き連れて風紀委員本部を訪ね、風紀委員長の机に演習室の許可証をバンと叩きつけてそんな台詞を述べたことに、花音は条件反射とばかりにツツコミを入れていた。

ちなみに風紀委員本部にやって来たのはその3人だけでなく、生徒会室で仕事をしていたあずさ・達也・深雪・五十里・ほのか・泉美、そしてたまたま生徒会室に来ていた雫もゾロゾロと後ろからついて来ていた。しんのすけが演習室の使用許可を求めて生徒会室を訪れ、あずさが許可証の様式を出した遣り取りを眺めて気になったからである。

「やつぱりさ、琢磨くんも香澄ちゃんも1回キチンと喧嘩しないと納得しないと思うんだゾ。だから周りに迷惑掛けないように、演習室を借りて2人の気が済むまで喧嘩してもらおうと思って。ほら、あそこだったら幾らでも喧嘩し放題でしょ?」

「しんちゃん、演習室は喧嘩をするための施設じゃないからね?」

「えっ、そうなの? でも去年、達也くんが風紀委員に入るとき、納得してないって反対してたはんぞーくんと喧嘩してたゾ」

「しんのすけ、アレは喧嘩じゃなくて実力を確かめるための試験みたいなものだ」

後ろから達也が訂正の言葉を添えるが、そんな彼の言葉にも「名目上は」という注釈が言外に含まれているような雰囲気ではあった。そしてそれを感じ取った深雪が、苦笑いを浮かべている。

達也は妹のそんな仕草に気づきながら、花音に対して意見を述べた。

「宜しいのではないですか、千代田委員長？　話し合いで解決できないことは実力で決めるのが手っ取り早いと、前委員長も仰っていたことですし。特に今回は互いの誇りが懸かっているようですし、実力で白黒付けておいた方が後々引きずることも無いかと」

「まあ、確かにそうかもしれないけど……」

達也の意見を受けての花音の反応は、明朗快活である彼女らしくない歯切れの悪いものだった。

「……ちなみにルールは、しんちゃんが決めるの？」

「そうだゾ」

「……審判も、しんちゃんがやるの？」

「モロチ——じゃなくて、もちろんだゾ」

自信満々に胸を張って答えるしんのすけに、花音は顔に浮かぶ不安の色を濃くした。

そして彼女の視線が、しんのすけの背後にいる達也へと向けられる。

「達也くん、この後って時間空いてる？」

「……ええ、閉門時間までなら」

「分かった。——演習場の使用許可は出すわ。試合のルールもしんちゃんに一任する。ただし、試合の審判は達也くん任せること。これが条件よ」

「ええっ？　花音ちゃん、オラが信用できないの？」

「しんちゃんよりも達也くんの方が、試合状況の見極めとかに長けると判断したまですよ」

「ダイジョーブだって。ちゃんと2人共、怪我1つ無く終わらせるから」

「とにかく！　達也くんを審判をやらせることがアタシの条件だから」

！」

頑なな花音の態度にしんのすけは口を尖らせて不満な様子だったが、小さく溜息を吐いて達也へと向き直った。

「達也くん、お願いして良い？」

「……まあ、構わないさ」

軽く肩を竦ませて了承する達也の態度には、この1年で培われた巻き込まれ体質に対する諦観が見て取れた。

「それで、どの演習場にする？」

「別に空いてる所ならどこでも良いゾ」

「それじゃ、第二演習場にするわね。中距離魔法を想定した演習場だし、2人ならその方が良いでしょ」

「んじゃあ、それで」

花音が許可証に文章を書き加えると、おもむろに机の引き出しを片っ端から開け始めた。どうやら許可証に押す承認印を探しているようで、見かねた雫が花音へと歩み寄っていく。

そんな遣り取りをしている間、それまで口を挟まず黙り込んでいた琢磨が意を決したようにしんのすけへと近づく。

「野原先輩。七草との試合に関して、お願いがあります」

「おっ？」

琢磨は本来、条件を付けられる立場に無い。本人もそれを自覚しているのか、若干遠慮気味だ。

花音・雫以外の注目を集める中、琢磨がそのお願いを口にした。

「相手は七草香澄ではなく、七草香澄・七草泉美の2人にしてほしいのです」

「七宝。アンタ、私のこと馬鹿にしてるの？」

香澄が思わず詰問するが、しんのすけが「なんで？」と純粹に理由を訊いてきたのでとりあえず黙って耳を傾けることにした。

「これは七宝家と七草家の誇りを懸けた試合です。それに『七草の双子は2人揃ってこそ真価を發揮する』というのはよく知られた話です」

「達也くん、そうなの？」

しんのすけが達也に視線を向けて問い掛け、達也が香澄と泉美へと視線を向ける。

「2人が小さく首を縦に振ったのを確認し、達也はしんのすけへと視線を戻した。

「ああ。2人は力を合わせることによって、単独では不可能な高威力・高難度の魔法を行使することができる。だからこそ彼は、2人を同時に相手して勝たなければ真の勝利にならない、と考えているんだらう」

2人で協力して、より強大な魔法を行使する。魔法に詳しくない人間ならば特に疑問に思わないことだが、これは魔法師にとって異常ともいえる現象だ。

複数の魔法師が1つの儀式を行うことで魔法を行使する技術自体は存在するが、この種の儀式は詠唱・舞踊など五感で共有できる媒体またはプロセスが必要となる。複数の魔法師がただ同じ魔法を発動するだけでは、最も魔法力が強い魔法師の術式が効力を顕すだけで、それ以外はむしろ事象改変の邪魔ですらある。

しかし香澄と泉美の場合、通常の魔法と同じようにCADのサポートを受けるだけで魔法力を増幅させる。これは2人が肉体的に同一の遺伝子を有するのみならず、精神内の魔法演算領域の特性までもが完全に一致しているからだ。「七草の双子」という何の変哲も無い名称が二つ名として機能しているのは、そういった理由によるものである。

もちろんしんのすけは、ここまで深い事情は分からない。しかし、双子が揃って初めて真の魔法的な実力を発揮できるということは理解した。

そのうえで、しんのすけは答えた。

「ダメだゾ、琢磨くん。2対1じゃ公平にならないでしょ」
「しかし！……いえ、分かりました」

反論しようとして身を乗り出した琢磨だったが、すぐに自分の立場を思い出したのか即座にそれを取り下げた。もつとも、彼がそれに不満を持っているのは誰から見ても明らかだ。

それを見かねてか知らないが、達也がしんのすけに意見する。

「だがしんのすけ、これは互いに禍根を残さないための試合だろ？
だったら本人の望む通りにさせてやるのが良いんじゃないのか？

もちろん、香澄と泉美の了承が大前提だが」

「私は構いません、野原先輩。その思いがりを後悔させてやります」
「私もそれで良いですよ。面倒臭いことは、これで終わりにしまし
う」

香澄と泉美が揃って了承の返事をしたことで、琢磨もしんのすけに
対して希望の籠もった視線を向ける。

それでもなお、しんのすけは乗り気ではなかった。

「ええっ？ でもそれって魔法の話でしょ？ だったら意味無くない
？」

「——ん？」

その言葉に、その場に居る全員が違和感を覚えた。

代表して、達也が問い掛ける。

「なぜ意味が無いんだ？ もちろん殺傷性の高い魔法は使用禁止にな
るだろうが、それ以外にも2人の特性が活かされる局面は数多くある
だろう？」

「だからそれって、魔法の話でしょ？ だったら意味無いゾ」

「……なぜ、そういう結論になる？」

「当たり前でしょ、達也くん。だって——

——今からやる喧嘩は、魔法を使わないんだから」

「——えっ!? 魔法使わないの!？」

「そうなんですか、野原先輩!？」

思わず大声を出して問い掛けたのは、ようやく承認印を見つけて許
可証に押印したばかりの花音と、まさにその試合の当事者である琢
磨。他の面々も魔法の使用を前提として成り行きを見守っていたた
め、前提をひっくり返すしんのすけの発言に目を丸くしていた。

「なんでそんなに驚いてるの？ 魔法を使った喧嘩は危ないからダメ

だって、花音ちゃんが言ったんでしょ」

「あのときは確かにそう言ったけど、それはあくまで第三者の監督と明確なルールが無い状況での喧嘩であって——」

「だがしんのすけ、魔法を使わずにどうやって優劣を決める？ まさか殴り合いをさせるわけじゃないだろうし、魔法を使わない純粋な体力勝負となると香澄の方がどうしても不利になるぞ」

達也のもつともな疑問に、話を聞いていた他の面々も無言で同意する。先程まではやる気満々だった琢磨と香澄も、思わぬルールに不安を隠せない様子だ。

それでもしんのすけは、やたらと自信満々に胸を張ってこう答えた。

「ダイジョーブ！ 魔法が使える人も使えない人も、運動できる人もできない人も、みーんなが公平に勝負できる方法を思いついたゾ！」